平成 28 年度　教育･研究業績書

奈良学園大学

平成 28 年度　教育・研究業績書　目次

【人間教育学部】

教授

■ 伊﨑　一夫・・・・・・　1～ 36
■ 梶田　叡一　※
■ 金山　憲正・・・・・・ 37～ 53
■ 鎌田　首治朗　※
■ 桑原　祐子・・・・・・ 54～ 66
■ 小竹　光夫・・・・・・ 67～ 76
■ 善野　八千子・・・・・ 77～121
■ 西辻　正副　※
■ 松田　智子・・・・・・122～158
■ 山本　美紀・・・・・・159～204

特任教授

■ 渡邉　規矩郎・・・・・205～216

准教授

■ 宮崎(竹田)　治美　・・・217～221
■ 土谷　長子・・・・・・222～231
■ 松井　典夫・・・・・・232～266
■ 森　一弘・・・・・・・267～277

特任准教授

■ 増井　眞樹・・・・・・278～289

講師

■ 阿尾　あすか・・・・・290～304
■ 岡野　聡子・・・・・・305～336
■ 岡村　季光・・・・・・337～353
■ 熊田　岐子・・・・・・354～374
■ 高木　悠哉・・・・・・375～382

特任講師

■ 瀧明　知惠子・・・・・383～408
■ 山田　明広・・・・・・409～433

助教

■ 太田　雄久・・・・・434～458
■ オチャンテ 村井 ロサ メルセデス
・・・・・459～469
■ 西江　なお子・・・・470～481

助手

■ 大淵 裕美・・・・・・482～496

【保健医療学部】

教授

■ 安藤　邑惠・・・・・・497～537
■ 上本野　唱子・・・・・538～550
■ 新谷　奈苗・・・・・・551～584
■ 中馬　成子・・・・・・585～593
■ 辻下　守弘・・・・・・594～610
■ 中川　晶　※
■ 服部　律子・・・・・・611～624
■ 東中須　惠子・・・・・625～632
■ 守本　とも子・・・・・633～664
■ 吉岡　隆之　※
■ 吉村　雅世・・・・・・665～687

特任教授

■ 若林　たけ子・・・・・688～707

特別客員教授

■ 梶間　敦子・・・・・・708～710
■ 宮田　英子　※

准教授

■ 嶋田　理博・・・・・・711～718
■ 田中　和奈・・・・・・719～739

講師

■ 大山　末美・・・・・・740～761
■ 梶村　郁子・・・・・・762～774
■ 川口　ちづる・・・・・775～782
■ 北島　洋子・・・・・・783～792
■ 立川　茂樹・・・・・・793～806
■ 西田　絵美　※
■ 松浦　純平・・・・・・807～843

助教

■ 井上　葉子　　・・・844～848
■ 大浜　惠美子　※
■ 岡　居久代　　・・・849～858
■ 丸上　輝剛　　・・・859～870

助手

■ 金城　夏樹・・・・・・871～875
■ 瀬山　由美子・・・・・876～877
■ 田中　里奈・・・・・・878～879
■ 田場　真理・・・・・・880～881
■ 前田　吉樹・・・・・・882～887

（※ 退職の為記載なし）

教　育　研　究　業　績　書

平成 29年　3月 31日

氏名　　伊﨑　一夫

研究分野	研究内容のキーワード
教育学、教科教育学	国語科教育、教育実践学、言語活動、絵本の読み聞かせ、言葉とコミュニケーション

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例		
(1)相互評価活動による支持的・受容的風土を有する国語教室づくり	昭和62年～現在に至る	学習評価において、相互評価活動を学習の中に効果的に組み込むことの必要性を提案している。平成20年版学習指導要領の書くこと領域に位置づけられた「いいところ見つけ」の価値については、平成元年版学習指導要領改訂時より主張しており、伝え合い活動、「いいところ見つけ」によって、学習者の表現吟味力の育成、コミュニケーションの活性化による支持的･受容的な人間関係の構築などを自らの学級において実践し、確認してきた。その具体的手立てとしては、付箋紙による評価コメントの交換や、相互評価の観点となる学び方や認識力の活用できる既習事項として蓄積する「くらしの言葉・学びの言葉」等がある。一連の研究成果を活用し、博論「これからのあるべき国語教室に関する実践的研究」をまとめるなど、研究を継続している。 （神戸大学附属住吉小学校・三田市立公立小学校・環太平洋大学）
(2)PISA型読解力を育む読解指導	平成10年～現在に至る	文学教材、説明文教材において「情報の取り出し－解釈－熟考・評価－論述」のPISA型読解力のプロセスを満たす読解指導の研究を継続的に行ってきた。文学教材においては、気持ちの読み取りに終わらない目的意識を明確にし、テキストの価値を吟味・評価する読み方の指導を中心にし、説明文では、発信を意識した立場から効果的な文章構成や表現技法を確かに学ばせる読解指導を展開している。研究成果については、著作・論文等において公開している。 （三田市立公立小学校・環太平洋大学）
(3)形成的な評価を活用した授業計画の開発	平成21年～現在に至る	シラバス作成時に授業の形成的評価を計画に位置付け、それを基に授業の改善を行う。また、それぞれの授業終了時に自由記述形式のアンケートを実施し、その記述内容を整理したものを次回の授業でフィードバックし、自己評価並びに相互評価に活用することを行った。授業改善の有効な方策であると共に、学生とのコミュニケーションツールとしての役割も果たした。環太平洋大学次世代教育学部乳幼児教育学科・学級経営学科の実践である。
(4)自分の思いや考えを適切なフォーマットで出力させ、言語表現力を育てる系統的指導	平成21年～現在に至る	自分の思いや考えを可視化するためには、一定の分量を伴った文章表現の場が必要となる。国語科に限らず、平成20年版学習指導要領の要となる「言語活動の充実」を体感･体得することは、教員養成教育における不可欠の学習である。「教育方法・技術論」「国語科教育法」等の授業では、A4・1枚(1600文字程度)の授業ふり返りレポートの作成を必須課題とした。その際、レポート全体の構成の工夫として、適切な小見出しによるまとめ方を強調し、記述内容の整合性・論理性を高める表現指導を行った。環太平洋大学次世代教育学部乳幼児教育学科・学級経営学科の実践である。

2　作成した教科書，教材		
(1)大学用教科書の編集執筆 移行期からはじめる新しい国語科の授業づくり （総頁数133P,責任編集　伊﨑一夫・阿部秀高） （再掲）	平成21年4月10日 日本標準	新学習指導要領実施に伴い，「言語活動の充実」の意味と意義を中心に、格上げされた言語活動例の具体化とその方法について詳細に解説した。自ら行った授業実践例等についても豊富に掲載し，確かな言語力を育成するための授業づくりのポイントと、求められる指導方法の工夫改善について具体的に解説した。 平成22年度「国語科教育法」の授業において教科書、平成22年度「教育方法・技術論Ａ(初等)」「教育方法・技術論Ｂ(中等)」の授業において参考書として使用。
(2)大学用教科書の編集執筆 子どもと言葉・絵本の世界 （総頁数65P,単著） （再掲）	平成21年9月1日 友野印刷	0歳から就学前、さらに小学校低学年までの子どもの言葉の発達過程の概要(「ことば獲得以前の子ども」「ことばを覚え始める子ども」「ことばの意味がわかり始める子ども」「ことばで対話を深める子ども」「ことばでものを考えはじめる子ども」「考えたことをことばにしていく子ども」)を示し、園生活を中心に小学校入学時までの子どもの言葉に関わるさまざまな事例を用いながら、子どもの生活や遊び、子ども同士の関わりが言葉の発達にどのように影響するのか解説した。また、幼稚園教育要領の領域「言葉」の「ねらい」に示された子どもの言葉を育てるために、言葉が育つ環境と要因、保育者の言葉かけや援助のあり方、絵本・紙芝居などの児童文化財の活用方法などについて具体的な方法を提示した。特に絵本の読み聞かせについて詳述している。 平成21～22年度「子どもと言葉」の授業において教科書として使用。
(3)大学用教科書の編集執筆 小学校国語科 学習指導案で授業が変わる！ －学習指導案を読む・書く・使いこなす－ （総頁数135P,単著） （再掲）	平成23年4月10日 日本標準	国語科の授業づくりの具体化を学習指導案の計画･立案によって行うことを基本方針に、「学習指導案を読み解く」「学習指導案を書ききる」「学習指導案を使いこなす」「教材解釈と授業づくり」「学習指導要領で求められる国語力とそのポイント」を観点として、「言語活動の充実」を担う国語科の役割とその具体化について詳細に解説した。 平成23～24年度「国語科教育法」の授業において教科書、平成23～24年度「教育方法・技術論Ａ(初等)」「言葉の理解」の授業において参考書として使用。
(4)大学用教科書の編集執筆 次世代の教職入門 （総頁数279P,共著） （再掲）	平成23年5月20日 大学教育出版	学級担任の教師は、児童・生徒相互の人間関係を育てる場としての学級の役割を重要なものとして認識し、個や集団に働きかけ、児童・生徒相互の好ましい人間関係を育てるために学級経営を充実させる。その要として学級経営案は作成される。小学校を中心に、幼稚園・保育所、中学校における具体的な学級経営案の事例をもとに、一人の教師として学級経営デザインができるよう解説した。（担当:「第6章学級経営」pp.133-155。中田正浩編著） 平成23年度「教職入門」の授業において教科書として使用。

(5)大学用教科書の編集執筆 国語実践に学ぶ「基礎・基本習得の技能」 （総頁数40P,単著） （再掲）	平成24年8月21日 株式会社ERP 教育PRO 特集号	平成20年度版学習指導要領の要である「言語活動の充実」をふまえ、「言葉の力」の獲得を保障する学習活動について実践的方向を示し、その具体化の手立てと有効性について論じた。学習活動の活性化のためには、単元構想や実際の指導における仕組みや仕掛けの工夫が求められると共に、学習指導要領の指導事項として示されている「言葉の力」の理解と吟味が不可欠であることを強調した。学習指導要領において示された記録、報告、解説、推薦等の言語活動例を取り上げ、それらの意味と意義について、実践事例を挙げながら詳述している。 平成24年度「言葉の理解」の授業において教科書として使用。
３　教育上の能力に関する大学等の評価		
環太平洋大学における学生による授業評価の結果	平成21年度	学生による授業評価を、担当する講義（「教育方法・技術論Ａ（初等）」「教育方法・技術論Ｂ（中等）」「子どもの表現と発達A（言葉と表現）」「子どもと言葉」「総合演習」等）の全てにおいて行い、所属学科教員の平均、もしくは平均を上回る評価を得、その結果を公開した。 特に「授業の適切な方法による展開」「有用な知識やスキルの獲得」等の項目において高い評価(平均3.8/4.0)を得ており、さらに「子どもと言葉」においては「授業で使用された教科書の有効性」に関する評価(平均3.9/4.0)が高かった。
	平成22年度	学生による授業評価を、担当する講義（「国語科教育法」「教育方法・技術論Ａ（初等）」「教育方法・技術論Ｂ（中等）」「子どもの表現と発達A（言葉と表現）」「子どもと言葉」「総合演習」等）の全てにおいて行い、所属学科教員の平均、もしくは平均を上回る評価を得、その結果を公開した。 特に「授業の適切な方法による展開」「授業の進度や説明の適切さ」「教員の授業に対する熱意」「有用な知識やスキルの獲得」等の項目において高い評価(平均3.8/4.0)を得ており、さらに「子どもと言葉」「国語科教育法」においては「授業で使用された教科書の有効性」に関する評価(平均3.9/4.0)が高かった。
	平成23年度	学生による授業評価を、担当する講義（「国語科教育法」「教育方法・技術論Ａ（初等）」「言葉の理解」等）の全てにおいて行い、所属学科教員の平均、もしくは平均を上回る評価を得、その結果を公開した。特に「授業の適切な方法による展開」「授業の進度や説明の適切さ」「教員の授業に対する熱意」「白板や教育機材の使用」「有用な知識やスキルの獲得」等の項目において高い評価(平均3.7/4.0)を得ている。「国語科教育法」においては「授業で使用された教科書の有効性」に関する評価(平均3.9/4.0)が高かった。
	平成24年度	学生による授業評価を、担当する講義（「国語科教育法」「教育方法・技術論Ａ（初等）」「言葉の理解」「日本語表現」等）の全てにおいて行い、所属学科教員の平均、もしくは平均を上回る評価を得、その結果を公開した。特に「授業の適切な方法による展開」「授業の進度や説明の適切さ」「教員の授業に対する熱意」「白板や教育機材の使用」「有用な知識やスキルの獲得」等の項目において高い評価(平均3.8/4.0)を得ており、さらに「国語科教育法」「言葉の理解」においては「授業で使用された教科書の有効性」に関する評価(平均3.9/4.0)が高かった

4　実務の経験を有する者についての特記事項		
（1）講演講師、研究会講師、指導助言等		
1）　第70回日本国語教育学会全国大会 ワークショップ 「PISA型読解力の授業づくり」 講師	平成19年 8月7日	6年生文学教材「ヒロシマのうた」「桃花片」を素材として，PISA型「読解力」の具体化への観点とその実例を示した。確かな国語力育成を目ざす授業の工夫改善の視点として，年間指導計画の重要性，学級内外他者同士におけるコミュニケーション活動の活性化，自己評価活動の質の向上を促す学級経営の成立と教師の支援のあり方について具体的に解説した。
2）　兵庫教育大学主催の研修講座講師 「実践者と研究者のコラボレーション による国語科授業づくりセミナー　ー授業 びらき・授業つなぎ・授業おさめー 」	平成19年 8月23，24日	実践事例として，1年生への年間を通した作文指導，絵本等の紹介活動を中核とする読書指導などを示しつつ，授業実践における「意味・価値」を解説し，個々の教師が，確かで豊かな国語授業を自らの実践において生み出すための示唆を与えた。
3）　第71回日本国語教育学会全国大会 ワークショップ 「PISA型読解力の授業づくり」 講師	平成20年 8月5日	5年生文学教材「大造じいさんとがん」を例に，PISA型「読解力」の具体化への観点とその実例を示した。併せて，確かな国語力育成を目ざす授業の工夫改善の視点として，年間指導計画の重要性，学級内外他者同士におけるコミュニケーション活動の活性化，自己評価活動の質の向上を促す学級経営の成立と教師の支援のあり方について具体的に解説した。
4）　新学習指導要領にもとづく授業づくり ―国語科の授業をどう変えるのか 兵庫県川西市教育委員会主催 平成20年度 国語科教育研修会 講演講師	平成20年 8月22日	平成20年度版学習指導要領改訂の基本的な考え方である「習得」「活用」「思考力・判断力・表現力」「主体的な学習態度」及び，新国語科の改訂のポイントである「言語活動例の格上げ」「言語活動の充実」「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」「PISA型読解力」等について説明を行った上で，「年間カリキュラム」「いいところ見つけ」「言葉の力のメタ認知」が，新国語科に対応した国語教室実現への改善のポイントとなることを指摘し，その具体策の要点について解説した。尚，実践事例として，小学校１年生を対象とした通年の作文指導と6年生における教科書教材を活用した作品紹介活動を取り上げた。
5）　新学習指導要領と国語科授業の創造 大阪府箕面市教育委員会主催 平成20年度授業カアップ連続講座② （小：国語） 講演講師	平成20年 8月25日	平成20年度版学習指導要領改訂の基本的な考え方である「習得」「活用」「思考力・判断力・表現力」「主体的な学習態度」及び，新国語科の改訂のポイントである「言語活動例の格上げ」「言語活動の充実」「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」「PISA型読解力」等を踏まえ，小学校1年生における年間を通した作文指導と5年生における教科書教材を活用したＰＯＰ作りと作品の推薦活動を実践事例として取り上げながら，新国語科に対応する国語教室実現に向け，「年間カリキュラム」「いいところ見つけ」「言葉の力のメタ認知」が工夫改善のポイントとなることを指摘し，具体化の要点について解説した。
6）　新学習指導要領と「言語活動の充実」 鳥取県中部地区小学校教育研究会主催 平成21年度教育研修会　講演講師	平成21年 6月10日	平成20年度版学習指導要領改訂の基本的な考え方である「習得」「活用」「思考力・判断力・表現力」「主体的な学習態度」を踏まえ、全教科・領域において取り組むべき「言語活動の充実」を具体化するために必要となる指導方法の工夫改善のポイントと、その際に求められる教育方法・指導技術について詳細に解説した。実践事例として，小学校６年生における読解指導と、卒業論文を書かせる総合学習とを取りあげた。

7） 第72回日本国語教育学会全国大会 ワークショップ 「PISA型読解力の授業づくり」 講師	平成21年 8月4日	2008年度全国学力調査問題Ｂ問題を例に、PISA型「読解力」の求める国語力と新学習指導要領・新国語科が果たすべき言語力との関連について解説を行った。新国語科にもとづく実践事例として、小学校高学年における「作品紹介活動」を示し、学習指導の工夫改善のポイントと、その際必要不可欠となる指導技術について詳細に解説した。
8） 新学習指導要領にもとづく授業づくり ―言語活動の充実が目ざすもの－ 兵庫県川西市教育委員会主催 平成21年度 国語科教育研修会 講演講師	平成21年 8月26日	平成20年度版学習指導要領改訂の基本的な考え方である「習得」「活用」「思考力・判断力・表現力」「主体的な学習態度」を踏まえ、全教科・領域において取り組むべき「言語活動の充実」を具体化するために必要となる指導方法の工夫改善のポイントと求められる教育方法・指導技術について詳細に解説した。実践事例として，小学校５年生における読解指導と、環境をテーマとする総合学習を取りあげた。
9） 新学習指導要領と国語科授業の創造 旭川市教育委員会主催 国語教育研究大会　講演講師	平成21年 11月20日	平成20年度版学習指導要領改訂の基本的な考え方である「習得」「活用」「思考力・判断力・表現力」「主体的な学習態度」及び，新国語科の改訂のポイントである「言語活動例の格上げ」「言語活動の充実」「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」「PISA型読解力」等を踏まえ，新国語科に対応する国語教室実現に向けての具体的方策を示しながら、具体化の要点と求められる授業技術・方法について詳細に解説した。
１０） 新学習指導要領と「言語活動の充実」 愛知県北名古屋市小学校教育研究会主催 平成21年度教育研修会　講演講師	平成22年 2月12日	平成20年度版学習指導要領改訂の基本的な考え方である「習得」「活用」「思考力・判断力・表現力」「主体的な学習態度」を踏まえ、全教科・領域において取り組むべき「言語活動の充実」を具体化するために必要となる指導方法の工夫改善のポイントと求められる教育方法・指導技術について詳細に解説した。実践事例として，小学校５年生における読解指導と、環境をテーマとする総合学習を取りあげた。
１１） 新学習指導要領にもとづく授業づくり －言語活動の充実－ 兵庫県川西市教育委員会主催 平成22年度 国語科教育研修会 講演講師	平成22年 8月5日	平成20年度版学習指導要領・新国語科における「言語活動の充実」をふまえ、新国語科に対応する国語教室を実現するために必要な工夫改善のポイントとして「①年間指導計画」「②いいところ見つけ(交流活動)」「③『言葉の力』のメタ認知」の３点を示し、その具体化について解説した。実践事例として、「話すこと・聞くこと」領域の年間を通した「スピーチ活動」を取り上げた。
１２） 第73回日本国語教育学会全国大会 ワークショップ 「PISA型読解力の授業づくり」 講師	平成22年 8月10日	2009年度全国学力調査問題Ｂ問題を例に、PISA型「読解力」の求める国語力と新学習指導要領・新国語科が果たすべき言語力との関連について解説を行った。新国語科にもとづく実践事例として、小学校低学年における「絵本紹介活動」を示し、「論理の接続詞」を活用した絵本紹介の仕方とその意義について詳細に解説した。
１３） 言語活動の充実と年間指導計画への期待 宮崎県小学校教育研究会国語部会主催 第38回宮崎県小学校教育研究会 夏期研修会 講演講師	平成22年 8月23日	平成20年度版学習指導要領・新国語科における「言語活動の充実」をふまえ、新国語科に対応する国語教室を実現するために必要な工夫改善のポイントとして「①年間指導計画」「②いいところ見つけ(交流活動)」「③『言葉の力』のメタ認知」の３点を示し、その具体化について解説した。実践事例として、説明文教材「たんぽぽ」「ビーバーの大工事」（２年）、「くらしの中の和と洋」（４年）、「森林のおくりもの」（５年）等を取り上げた。

１４）	「言語活動の充実」と国語科 年間指導計画への期待 平成22年度環太平洋大学 教員免許状更新講習 講師	平成22年 8月26日	平成20年度版学習指導要領・新国語科における「言語活動の充実」をふまえ、新国語科に対応する国語教室を実現するために必要な工夫改善のポイントとして「①年間指導計画」「②いいところ見つけ(交流活動)」「③『言葉の力』のメタ認知」の３点を示し、その具体化について解説した。実践事例として、「読むこと」領域の年間を通した「本の紹介活動」を取り上げた。
１５）	「言語活動の充実」と 学校・地域・家庭の教育力 篠山市教育委員会指定研究事業 「学力向上実践推進事業」 平成22年度篠山市立味間小学校 公開研究発表会　講演講師	平成22年 10月20日	平成20年度版学習指導要領改訂の基本的な考え方である「習得」「活用」「思考力・判断力・表現力」「主体的な学習態度」を踏まえ、全教科・領域において取り組むべき「言語活動の充実」を具体化するために必要となる指導方法の工夫改善のポイントと求められる教育方法・指導技術について詳細に解説した。実践事例として，各学年の公開授業を取り上げ、それらの授業の成立は、学校・地域・家庭の教育力に支えられていることを強調した。
１６）	確かな学力と人間関係をつくりだす力 三田市教育委員会指定研究事業 平成22年度三田市立富士小学校 公開研究発表会　講演講師	平成22年 11月26日	豊かな人間関係を培うためには確かな言語運用能力が不可欠であることを踏まえ、当該校の３年にわたる研究の有する価値とその成果について言及した。特に共生教育においては、自己をみとめ、他者とコミュニケーションすることが極めて重要であることを強調した。
１７）	読売新聞社主催・読売教育賞 第60回記念シンポジウム分科会 「国語教育」最優秀賞受賞者・ 実践成果報告	平成23年 6月4日	第57回読売教育賞国語教育部門最優秀賞実践「情報活用力としての『書く力』をたかめる－読み書きシートの徹底活用－」について、実践の概要と特質について報告し、参会者との意見交流を行った。
１８）	絵本が語ってくれること －国語教育とのつながり－ 「夢ナビライブ２０１１」 大阪会場・講義ライブ	平成23年 7月12日	学生たちが親しんできた絵本を素材に、「同じ絵本でも国によっていろいろな違いがあること」「接続詞などの使い方に着目することによる解釈の深まり」「論理的に思考することの大切さ」「国語教育の役割」等について解説を行った。
１９）	PISA型読解力を育む 新しい国語の授業づくり 大阪市教育センター主催 「学力向上授業研修会」 講演講師	平成23年 7月21日	「思考力・判断力・表現力」と「論理的に考えること」、PISA型読解力と「論理的に考えること」、「論理的に考えること」と「つなぐ思考」等の関連について、新学習指導要領の趣旨をふまえ、詳細に解説した。「論理的に考えること」が培われる国語教室の具体像については、小・中学校の実践事例を取り上げた。
２０）	第74回日本国語教育学会全国大会 ワークショップ 「思考力・判断力・表現力等の育成と 授業づくり」 講師	平成23年 8月9日	平成20年版学習指導要領国語科の重要実践課題である「思考力・判断力・表現力の育成」に向け、論理的な思考を促し、強化する必要性を示した。具体例として、絵本紹介(小学校1年)における理由を組み立てさせる接続詞の活用事例、「どうぶつの赤ちゃん」(光村1年)における読解のキーワードを用いた表現活動の成果を取り上げた。「言語活動の充実」には、活動だけではなく適切な評価が必要であることを強調した。
２１）	「言語活動の充実」と「国語科」 平成23年度環太平洋大学 教員免許状更新講習 講師	平成23年 8月25日	平成20年度版学習指導要領・新国語科における「言語活動の充実」をふまえ、新国語科に対応する国語教室を実現するために必要な工夫改善のポイントとして「①年間指導計画」「②いいところ見つけ(交流活動)」「③『言葉の力』のメタ認知」の３点を示し、その具体化について解説した。実践化への具体的提案として、平成23年本小学校国語科教科書から、各領域ごとに代表的な単元を取り上げた。また、デジタル教科書の活用方法等、ICTによる授業改善の可能性にも言及した。

２２）	思考力・判断力・表現力等の 育成と授業づくり 福山市教育委員会指定研究事業 平成23年度福山市立東中学校 公開教育研究会　講演講師	平成23年 11月4日	論理的思考力を育成するためには、「『WHY』『HOW』を自問すること」「『質問力』を鍛えること」「関係性を理解して解釈すること」「因果関係・脈絡・つながりに着目させること」等が重要であることを解説した。具体的な指導事例として、当日の公開授業（国語、数学、理科、社会、英語、技術家庭、音楽等）を多数取り上げた。
２３）	習得・活用・探求型の授業を創造する 三田市教育委員会指定研究事業 平成23年度三田市立本庄小学校 公開研究発表会　講演講師	平成23年 12月2日	平成20年度版学習指導要領・新国語科における「言語活動の充実」をふまえ、「習得・活用・探求」活動の意義とその具体化の視点について詳細に解説した。具体的な指導事例として、当日の公開授業（国語、算数、社会、音楽、総合学習等）を多数取り上げた。また、デジタル教科書の活用方法等、ICTによる授業改善の可能性にも言及した。
２４）	国語科指導力向上に向けて 奈良市教育センター主催 「国語科教育研修講座」 講演講師	平成24年 7月27日	平成20年度版学習指導要領の要である「言語活動の充実」は、学習意欲をもって基礎的・基本的な知識・技能を習得しつつ、習得した知識・技能を活用して思考力・判断力・表現力等を育成することに主眼があることを、具体的な実践事例を示しながら解説した。言葉の力を培う国語教室を実現するためには、(1)年間指導計画の構築、(2)相互評価活動の活性化、(3)「言葉の力」のメタ認知の場の設定が重要となることを強調した。
２５）	第75回日本国語教育学会全国大会 ワークショップ 「『自分の考え』」を表現できる授業づくり」 講師	平成24年 8月7日	「たんぽぽ」(東書2年)、「たんぽぽのちえ」(光村2年)を用いて、形式段落に区切る演習を行い、段落の区切りの理由を明らかにすることが段落相互の関係の理解を深めることを解説した。題名の重要性など、既習の学びを活かして、意図的に学習を組み立てていくことなど、自分の考えを表現するには、基礎的・基本的な学びのステップが必要であり、意図的・目的的な既習の学びの連続性が、明確な「自分の考え」を生み出すことを強調した。
２６）	「言語活動の充実」と各学校への期待 平成23年度環太平洋大学 教員免許状更新講習 講師	平成24年 8月23日	平成20年度版学習指導要領・新国語科における「言語活動の充実」をふまえ、新国語科に対応する国語教室を実現するために必要な工夫改善のポイントとして「①年間指導計画」「②いいところ見つけ(交流活動)」「③『言葉の力』のメタ認知」の３点を示し、その具体化について解説した。各学校が抱える指導時数の不足感をふまえ、実践化への具体的提案として、平成23年本小学校国語科教科書から、各領域ごとに代表的な単元を取り上げ、特に「①年間指導計画」の重要性を強調した。また、デジタル教科書の活用方法等、ICTによる授業改善の可能性にも言及した。
２７）	第1回「ことばの力」育成シンポジウム in千葉 言葉の力を活用する言語活動と国語科 授業づくり －小、中学校との連携を視野に－ 公益財団法人 中央教育研究所、 特定非営利活動法人 日本語検定委員会 主催 報告者並びに パネルディスカッション・パネリスト	平成24年 8月25日	報告では、「言葉の力」を活用する国語科授業づくりにおいては、「既習の学びを可視化し活用する言語活動が求められること」「既習の学びの積み重ねと積み上げには年間指導計画が重要であること」を、「たんぽぽ」(東書2年)「たんぽぽのちえ」(光村2年)の実践事例をもとに提言した。シンポジウムにおいては、「言葉の力」の習得と活用を小学校と中学校とが連携して行う必要があることを強調した。

２８）　国語授業の改革と学力向上 第4回ＥＲＰフォーラム・イン大阪 対談・聞き手	平成24年 12月22日	平成20年度版学習指導要領改訂に伴う、教科書を使いこなし言葉の力を向上させる国語授業の改革に関して行われた対談(梶田叡一・兵庫教育大学名誉教授、小森茂・青山学院大学教授)の聞き手として、(1)「確かな学力」の基幹としての「言葉の力」の育成の中核的な役割を果たす国語科のありよう、(2)＜確かな＞「言葉の力」と＜豊かな＞「言葉の力」を実現する授業革の視座、(3)「読むこと」「書くこと」の連動させる学習指導の工夫改善のポイントを明らかにした。
２９）学力向上や子どもたちの言語力の向上のために 「ならの子ども学力向上プロジェクト事業」 教育フォーラム　指導法改善研究部会(授業開発国語部会)の報告に関わる総括指導助言 奈良市教育委員会主催	平成25年 2月22日	奈良市独自の学力・学習状況調査の調査結果分析結果をふまえた公開授業の成果を報告する教育フォーラムにおいて総括指導助言を行った。「子どもの学習の課題を解決するための授業の進め方」「小学校と中学校の学びの連続・連携のあり方」について、公開授業の成果の価値を明らかにし、今後の課題を示した。学力向上や子どもたちの言語力の向上のためには、教科書に閉じこもりがちな学習を見直し、実の場を活用した学習が有効となること、日常生活に資する言語力を培うためには、いかに広く多様な情報源に向かわせるか、言語環境の整備、多様な言語情報への目配りが大切であることを強調した。
３０）第76回日本国語教育学会全国大会 ワークショップ 「既習の学び・記述力を生かす国語科授業づくり（小学校）」 講師	平成25年 8月6日	「自然のかくし絵」(東書3年)を用いて、段落相互の関係をふまえた筆者の「書き方の工夫」を探る演習を行い、説明文における記述方法の特徴をとらえる学習の必要性について解説した。「書き方の工夫」については、「具体例」「問いと答え」「写真や絵」「説明の順序」「つなぎ言葉」などの学習者に馴染みやすい用語で整理することによって、説明文の読解学習だけではなく、既習の学びを活かして「説明文を書く」活動にも転用できること、さらに「自分の考え」を表現する多様な学習へとつながっていくことを強調した。
３１）学力向上や子どもたちの言語力の向上のために 「ならの子ども学力向上プロジェクト事業」 教育フォーラム　指導法改善研究部会(授業開発国語部会)の報告に関わる総括指導助言 奈良市教育委員会主催	平成26年 2月15日	奈良市独自の学力・学習状況調査の調査結果分析結果をふまえた公開授業の成果を報告する教育フォーラムにおいて総括指導助言を行った。「子どもの学習の課題を解決するための授業の進め方」「小学校と中学校の学びの連続・連携のあり方」について、平成25年度に行った研究授業の成果の価値を明らかにし、今後の課題を示した。学力向上や子どもたちの言語力の向上のためには、「習得・活用」の道筋の明確化、目標と評価の一体化に十分配慮することが必要であることを強調した。
３２）未来をつむぐ学校茶道－伝統文化への入口－ 第45回学校茶道指導者研修会・第35回学校茶道担当者講習会 合同研修会 基調講演　講演講師	平成26年 7月18日	明治維新後、茶道がいち早く学校教育に取り入れられた歴史や学校茶道の普及・拡大について教育制度の変遷に沿った解説を行った。学校教育の学習内容の一例を取り上げながら、日本の総合文化の代表である茶道の果たす役割や意義について強調した。
３３）奈良市教育センター1年経験者研修講座 講師	平成26年 7月22日	奈良市教職2年目を迎えた幼小中高教員74名に対して、求められる教職の資質やより良い学級経営のあり方等に関する講義・解説を行った。特に、学級経営の視点として、児童・生徒からの評価、保護者からの評価を積極的に取り入れることの価値や、学級経営と普段の授業実践とが密接に関連していることの重要性を強調した。

３４）「言葉の力」を高める言語活動の活性化 兵庫県国語教育連盟 第57回夏季国語教育研修大会 講演講師	平成26年 8月6日	「言語活動の充実」において「付けたい言葉の力」を明確にすることの重要性について解説した。言語活動の質を高めるためには、前単元までの学びを生かすこと、言語活動における「５つの言語」(相手意識、目的意識、条件・状況意識、表現・理解の方法意識、評価意識)を明確にすること、「付けたい言葉の力」に照らし合わせた目標と評価を設定することなどの重要性を強調した。
３５）第77回日本国語教育学会全国大会 ワークショップ 「自分の考えをもって伝え合う授業づくりー『発問研究』と『教材研究』とを中心にー」 講師	平成26年 8月9日	「スイミー」(光村1年)、「名前を見てちょうだい」(東書2年)、「一つの花」(光村・東書4年)を用いて、作品の構造的理解を支えるワークシート例を示し、作品の特質と主題を捉える演習を行い、物語教材における指導方法の工夫改善の方略について解説した。思考力・判断力・表現力等を育成するためには、意欲的に考え判断し表現できる「発問研究」と「教材研究」、その実現のための「場面と時間」の確保が必要であることを強調した。
３６）「教材研究で授業が変わる」 鳥取県教育センター　平成26年度教職員研修 【小学校国語】「教材研究で授業が変わる」 講師	平成26年 8月21日	児童自らが考えを表現できる教材研究のあり方や授業づくりについて、「名前を見てちょうだい」(東書1年)、「ごんぎつね」(東書・光村4年)等を用いた実践的な演習を行い、「言語活動の充実」につながる基本的な考え方や教材解釈の仕方について具体的に解説した。教材研究や教材解釈においては作品を概念的にとらえないこと、授業づくりにおいては「目あてとふり返り」の重要性やノート指導の工夫が不可欠であることなどを強調した。
３７）「ことばの力」を育む授業―設計と評価― 三田市教育委員会指定研究事業 第19回　三田市立ゆりのき台小学校　研究発表会 公開研究発表会　講演講師	平成26年 11月17日	授業設計におけるポイントを「基本要素」と「発展要素」に整理し、研究発表会当日の公開授業をもとに解説した。「基本要素」として、「「付けたいことばの力」＝言語力の明確化」「学習活動の統一化」「評価規準の具体化」の3点を、「発展要素」として、「『具体・抽象』の昇降化」「『習得・活用』のサイクル化」「『個の学び・集団の学び』の往復化」の3点を示した。
３８）平成26年度奈良市教育フォーラム 分科会「小中の学びの系統性をふまえた授業モデル【国語】」 講師	平成27年 1月25日	奈良市の国語の学力・学習状況調査の分析結果による課題のうち、「相手意識、目的意識の明確にして書くこと」「資料から適切な情報を得て、伝えたい事実や事柄が明確に伝わるように書くこと」の課題解決に焦点を当て、学習指導の工夫改善を図るための方策とその意義について解説した。特に「事実に対する自分の意見を理由や根拠を明確にして考えて書く力」を高める授業の重要性を強調した。
３９）第78回日本国語教育学会全国大会 ワークショップ 「『確かな学力』を育成する国語授業づくり （小）ー『発問研究』と『教材研究』とを中心にー」 講師	平成27年 8月1日	「ごんぎつね」「海のいのち」を用いて、「本時の学習指導案」等の点検・見直しや、指導事項を習得・活用するための「発問研究」と「教材研究」に関する演習を行った。 学校教育法で規定された①学習意欲をもって②基礎的・基本的な知識・技能を習得しつつ、この知識・技能を活用して③思考力・判断力・表現力等から構成される「確かな学力」の育成を目ざす日々の国語授業づくりの重要性を強調した。

４０）国語科における「アクティブ・ラーニング」の可能性 第20回　三田市立ゆりのき台小学校　研究発表会 公開研究発表会　講演講師	平成27年 11月17日	新しい時代に必要となる資質・能力の育成のために「何を学ぶか」という知識の質・量の改善だけではなく、「どのように学ぶか」という、学びの質・深まりを重視することが求められており、そこでは「主体的・協働的な言語活動」と「思考の活性化」が不可欠であることを解説した。これからの時代に求められる言語力が「自分の考えを表出する力」であることから、授業内外の多様な言語活動や豊かな読書体験を通して、「自分の考え」を表現できる主体的な学習が重要であることを研究発表会当日の公開授業を例に強調した。
４１）学校茶道の可能性―「ことばの力」の活性化― 第47回学校茶道指導者研修会・第37回学校茶道担当者講習会 合同研修会 基調講演　講演講師	平成28年 7月27日	新しい時代に必要となる資質・能力の育成のために「何を学ぶか」という知識の質・量の改善だけではなく、「どのように学ぶか」という、学びの質・深まりを重視することが求められており、そこでは「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」の実現が不可欠であることをふまえ、茶道体験の持つ意義と価値について解説した。特に「ことば」を知らないということはその国の文化を知らないということであり、日本の総合文化の代表である茶道で用いられている『ことば』を子供たちに体験を通して伝達することの重要性を強調した。
４２）第79回日本国語教育学会全国大会 ワークショップ 「『確かな学力』を育成する国語授業づくり（小）－「『アクティブ・ラーニング』の発想を生かす」 講師	平成28年 7月31日	「アクティブ・ラーニング」（以下ＡＬ）を特定の型として歪曲化せずに、その本質や発想を踏まえた学習方法の工夫を行い授業実践に位置づけることを目的に、「海のいのち」や「ごんぎつね」をもとに、教材研究の重要性を具体的に示した。 ＡＬの発想を生かす授業の質は「言語活動の充実」と連動しており、思考力の深化･拡充を保障するためには、「より深くわかること」「よりうまくできること」「多様な情報を論理的に評価・分析すること」等が不可欠であることを演習によつて明らかにした。ＡＬの本質や発想を踏まえた学習方法の工夫は、「言語活動の充実」や「深い」教材研究なしには実現できないことを強調した。
４３）国語科における「確かな学力」の育成と「ことばの力」 －アクティブラーニングの発想を生かす－ 第21回　三田市立ゆりのき台小学校　研究発表会 公開研究発表会　講演講師	平成28年 11月17日	中央教育審議会「次期学習指導要領に向けたこれまでの審議のまとめ(素案)」をふまえ、学習指導要領改訂の方向性に合致する学校教育のあり方について、「主体的・対話的で深い学び」をキーワードに、「学びの質」と「くらしの質」を高める教育課程編成に関する提言を行った。研究発表会当日の公開授業をもとに、単元構想として「活用場面の意識」「表現効果の意識」「振り返りの強化」「横断的な学び」「個別支援の発想「家庭教育の充実」「読書生活の充実」等を充分に意識することによって「学びとくらし」が融合されることを強調した。
（２）茶道教室講師、学校茶道クラブ顧問等		
１）神戸新聞文化センター・茶道教室講師	平成16年4月～ 現在に至る	茶道裏千家より平成8年4月茶名（宗一）拝受、平成12年2月準教授、平成26年10月教授に昇進。平成16年4月からは、神戸新聞文化センター・茶道教室講師として、男性専科クラス（日曜日、月二回）、初級クラス・中級クラス・上級クラス・幼児クラス（日曜日、月四回）において、指導を行っており、現在に至る。

2）兵庫県三田市立けやき台小学校 茶道クラブ顧問	平成19年4月～ 平成21年3月	特別活動の一領域であるクラブ活動指導の一環となる茶道クラブを設立し、担当した。４年生から６年生の希望者30名による茶道クラブにおいて、顧問として指導に当たった。盆略点前を中心に、亭主ならびに客ぶりの基本的な所作を指導した。クラブ活動の概要については、学校便り等において積極的に紹介した。
5　その他		
1）　第57回讀賣教育賞「国語教育部門」 最優秀賞	平成20年 7月11日	情報活用力の育成を目的とする年間を通した実践である「情報活用力としての『書く力』を高める―『ブックレポート』を書く活動を中核に―」を評価され，受賞。 主な受賞理由は，「現代社会で求められる情報活用力を着実に身につける国語の年間カリキュラムのモデルとなる優れた実践であること」及び「生徒相互でいい所を見つけ合い，情報伝達のワザを共有する学習プロセスは普遍性を持つこと」等である。

職務上の実績に関する事項

事項	年月日	概要
1　資格，免許		
(1) 小学校教諭１級免許状 (2) 中学校教諭１級免許状　理科 (3) 高等学校教諭２級免許状　理科 (4) 小学校教諭専修免許状	昭和52年3月 昭和52年3月 昭和52年3月 平成20年5月	昭51小普第1030号　（兵庫県教育委員会） 昭51中１普第1498号　（兵庫県教育委員会） 昭51高2普第1604号　（兵庫県教育委員会） 平成20小専第49号　（兵庫県教育委員会）
2　特許等		
なし		
3　実務の経験を有する者についての特記事項		
Ⅰ　財団法人福武教育文化振興財団 平成22年度教育研究助成(個人の部) 絵本を活用した読解指導の工夫に関する研究	平成22年 ７月	小学校における読解リテラシーとなるPISA型読解力の向上に関する具体化の視座を絵本に求め、その有効性を検証する研究に対して、補助金の助成を得た。（100,000円）
Ⅱ　科学教育費補助金及び学術研究助成基金 (1)　平成22年度科学教育費補助金 基盤研究(C) 地域の教育・文化施設における 絵本の「体感型読書」プログラムの 開発的研究 研究代表者	平成22年 ４月	絵本の読み聞かせや読書教育に関する国語教育分野における先行研究等の検討をふまえ、「体感型読書」プログラム作成を前提とした協力施設の実態調査と、「体感型読書」プログラムの開発研究に対して、研究代表者として補助金の助成を得た。（研究代表者;伊﨑一夫.研究分担者;山本美紀）（直接経費 1,800,000円）
(2)　平成22年度科学教育費補助金 基盤研究(C) 不登校回復期の生徒への 共同学習モデルの開発 研究分担者	平成22年 ４月	学習意欲と社会的適応とを兼ね備えた不登校回復期の支援モデル開発について、学力の実態と特性に関する分析研究に対して、研究分担者として補助金の助成を得た。（研究代表者；杉田郁代.研究分担者；伊﨑一夫）（直接経費 500,000円）
(3)　平成23年度科学教育費補助金 基盤研究(B) 学校・文化施設による＜持続可能な 地域文化力＞を育む「連携型プログラム」の開発研究 研究分担者	平成23年 ４月	学校と多様な文化施設とがふさわしい形で連動し、両者の協力体制を「連携型プログラム」として結晶させ、〈持続可能な地域文化力〉育成のための施設の有効活用と人材育成の方法論を示す開発研究に対して、研究分担者として補助金の助成を得た。（研究代表者；山本美紀.研究分担者;伊﨑一夫）（直接経費 2,000,000円）

Ⅲ　委員 (1)　「ならの子ども学力向上プロジェクト事業」 指導法改善研究部会(授業開発国語部会) 指導助言者	平成24年度～ 平成26年度	「ならの子ども学力向上プロジェクト事業」の実施に当たり、生活改善や授業開発、学びの連続のあり方についての視点から、奈良市の子どもの学力向上のための課題解決に関する指導法改善研究部会(授業開発国語部会)における指導助言を継続して行った。平成20年度版学習指導要領における「言語活動の充実」をふまえ、小学校・中学校の授業改善の視座を明確にし、提案授業のプラン作成と提案授業実施後の検討会における総括講演では、公開授業の価値付けと今後の課題を明示した。
(2)平成26年度奈良市教職員研修運営協議会委員（座長）	平成26年度	平成26年度奈良市教職員研修講座の運営や受講者の意識分析データをもとに、奈良市教職員研修の内容や運営に関する検討協議を行った。研修講座体系の明確化、資質能力向上の仕組み強化、校内研修の活性化等に関する課題を整理し、平成27年度奈良市教職員研修の改善方向を明確にした。
4　その他		
（1）平成20年度兵庫県「ゆずりは賞」受賞 （兵庫県教育委員会）	平成20年 11月14日	「ゆずりは賞」は，学校教育や社会教育等の分野で多くの人々の模範となるような立派な行為や有益な研究・発明をした個人や団体を表彰しその功績をたたえるものであるが，第57回讀賣教育賞「国語教育部門」最優秀賞を受賞した功績に対し表彰された。

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
（著書）				
(1) 小学校国語科 PISA型読解力 向上の学習問題と解説	共著	平成19年 5月	明治図書	国語科の教育課程実施調査，PISA調査の課題をふまえ，PISA型読解力を向上させるための具体的なプランの提示と、その有効性について論じたものである。 B5版 総頁数86P 編者:小森茂 共著者:伊﨑一夫・雨宮久高・漆山仁志・岩井信康・小宮孝之・齋藤純一・篠山紀子・清水典子・山本平生・中島敬康・成田信子・渡辺真由美 担当:2章1節「テキストを理解･評価しながら読む力を高める学習問題」pp.14-25 単著 内容:言語の教育という国語科の立場から，学習者の「国語への関心・意欲・態度」と「テキストの中の情報の取り出し」とを大切にしながら，「テキストの解釈」「熟考・評価」に応じた具体的なプラン(「海のいのち」6年下、「ごんぎつね」4年下)を提案し，その効果的な活用の仕方について詳述した。特に，これまでの読解指導との違いを明確化した。
(2) 「読解力」で授業をかえる	共著	平成20年 1月	ぎょうせい	PISA型読解力として求められている指導・改善の方向をふまえ，単元レベルにおける工夫・改善について論じたものである。 B5版 総頁数230P 編者:田中孝一・小森茂 共著者:青木弘明・有賀直美・飯塚啓介・伊﨑一夫・門戸千幸・蒲生信博・黒田篤志・河野庸介・古賀勝利・小森茂・鈴木彰・田中耕一・田沼良宣・千葉昌之・永池啓子・中屋友厚・藤本鈴香・藤山英人・星原貴光・細谷俊太郎・堀江祐爾・松本万寿実・三田大樹・峯元済年・弓場順枝・米澤俊和・渡部光昭 担当:4章1節「〈小学校国語〉作品の内容や表現の特徴を理解・評価する力を高める単元づくり」pp.56-63 単著 内容:PISA型読解力をふまえた指導方法の工夫改善の一例として、「ヒロシマのうた」(東書6年)を取り上げ、その実践的価値について考察し，明確化した。特に，「情報の取り出し」「解釈」「熟考・評価」のそれぞれの段階において求められる思考方法を強化し，情報活用力を高めるためには，他者との情報のやりとり，相互コミュニケーション活動の活性化が，必要であることを強調した。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
(3)　移行期からはじめる新しい国語科の授業づくり（編集責任者）	共著	平成21年4月	日本標準	平成20年版学習指導要領実施に伴い、格上げされた言語活動例の具体化を中心に、確かな国語力を育成するための授業づくりのポイントについて解説したものである。 B5版 総頁数133P 編者:伊﨑一夫・阿部秀高 共著者:伊﨑一夫・阿部秀高、他2名 担当:第1章「新学習指導要領が求める国語力とそのポイント」1～5・7・10・11～15(トータル24P)、第2章2節「新学習指導要領にもとづく国語科授業の具体化に向けて」(トータル12P)、2章3節「授業づくり」4～6・8・9・11・13・17・18・21～24(トータル26P)。単著 内容:自ら行った授業実践例に基づき、確かな言語力を育成するための授業づくりのポイントと、求められる指導方法の工夫改善について具体的に解説した。また本書では、確かで豊かな言語力を育成するためには、学級内外他者との伝え合い・コミュニケーションや自己評価・他者評価の場の設定が不可欠であることを指摘し、獲得した言語力を十分に発揮する活用方法とその重要性について強調した。
(4)　子どもと言葉・絵本の世界	単著	平成21年9月	友野印刷	0歳から就学前、さらに小学校低学年までの子どもの言葉の発達過程の概要(「ことば獲得以前の子ども」「ことばを覚え始める子ども」「ことばの意味がわかり始める子ども」「ことばで対話を深める子ども」「ことばでものを考えはじめる子ども」「考えたことをことばにしていく子ども」)を示し、園生活を中心に小学校入学時までの子どもの言葉に関わるさまざまな事例を用いながら、子どもの生活や遊び、子ども同士の関わりが言葉の発達にどのように影響するのか解説した。また、幼稚園教育要領の領域「言葉」の「ねらい」に示された子どもの言葉を育てるために、言葉が育つ環境と要因、保育者の言葉かけや援助のあり方、絵本・紙芝居などの児童文化財の活用方法などについて具体的な方法を提示した。特に絵本の読み聞かせについて詳述している。B5版 総頁数65P
(5)　新小学校国語科重点指導事項の実践開発（編集協力委員）	共著	平成22年1月	明治図書	平成20年度版学習指導要領において示された学び手の学力と学習状況についての現状を丁寧にとらえ、様々な学習課題への対応と、確かな言語力育成の視座を提案している。 B5版横 総頁数120P 編者:小森茂 共著者:阿部秀高・岡本恵太・野村美由紀・横山啓子・伊﨑一夫他10名 担当:編集協力委員として、「書くこと」pp. 32-33, pp. 37-38「読むこと」pp. 72-73,「話すこと・聞くこと」pp. 88-89。単著 内容:編集協力委員として、平成20年度版学習指導要領を基に「重点指導事項例」に該当する「重点指導事項」を選定整理して、特に典型的な「重点指導事項」の果たすべき役割について、そのねらいと指導の工夫改善について、具体例を示しながら解説した。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
(6)　「ことば」で伸ばす子どもの学力	共著	平成22年8月	ぎょうせい	平成20年度版学習指導要領において求められる「言語活動」の特質とその具体化への視座を国語・社会・算数・理科・生活の実践事例を用いて解説している。 B5版 総頁数201P 編者:小森茂・角屋重樹 共著者:青木信生・新井宏和・伊崎一夫・石井雅幸・植松仁・大桑雅記・大野恵美・小川幸子・片山守道・角屋重樹・木下博義・小藤強・小森茂・新谷貴晴・菅原一郎・鈴木智裕・忠谷義人・寺本貴啓・中山貴司・成田雅樹・二瓶弘行・原浩一郎・福屋亜希子・森勇介・山田浩美・吉田宗樹・柳地一枝・渡邊弘樹 担当:「お話の目の付けどころを明らかにして、お話紹介カードを書こう」pp.97-101,「『だから』と考えてみよう・『なのに』と考えてみよう」pp.102-106。単著 内容:思考力・判断力・表現力等を育成するためには、国語科をはじめ各教科等の「言語活動の充実」が不可欠であり、国語科の場合には、言葉によって考えたり判断したり、想像したり読み取ったりすることは、具体的には各領域に位置付けられた「言語活動例」で「表現」されることによって可視化される。言語活動の指導と評価のポイントをふまえ、4年生における「読むこと」領域の指導として「ごんぎつね」「一つの花」(光村・東書)を取り上げ、指導方法の工夫改善について具体的に解説した。
(7) 教育フォーラム46〈言葉の力〉を育てる	共著	平成22年8月	金子書房	平成20年度版学習指導要領の中核理念を成す“言葉の力”の育成をふまえ、その確かで豊かな実現に向け、重要な諸理論を多角的に考察し、さまざまな教科における言語力育成に関する実践的提案を行っている。 A5版 総頁数159P 編者:梶田叡一 共著者:梶田叡一・加藤明・伊崎一夫・鎌田首治朗・増井眞樹・勝見健史・汐海治美・谷本寛文・中島繁雄・金澤緑・米田豊・浅田匡・松田智子 担当:「論理的記述力を高めるーお気に入りの本を選び「おすすめの文章」を書こうー」pp.25-35 単著 内容:PISA型読解力を強化するためには論理的記述力が不可欠であり、具体的な根拠に基づき自分の考えを主張する論理的記述力育成の可能性を「読むこと」領域との連携に求め、「読んだ本について、好きなところを紹介する」言語活動を例に、その工夫改善の有効性を論じた。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
(8) 豊かな言語活動が拓く国語単元学習の創造Ⅲ 小学校低学年編	共著	平成22年 8月	東洋館出版	国語単元学習と密接に関わる新学習指導要領のキーワード「言語活動」について、その理論と実践のポイントについて論じ、単元学習の精神に貫かれた国語教育の実践例を提示している。 A5版 総頁数239P 編者:日本国語教育学会監修 共著者:倉澤栄吉・大熊徹・坂本喜代子・西村充司・青山由紀・権堂順子・多田和幸・藤田慶三・庭田瑞穂・高島俊幸・稲田八穂・伊崎一夫・松山清美・大川孝子・中村和弘・蜂須賀美菜・草野剛・大越和孝・寺井正憲・小山恵美子・高野保夫・三浦和尚・桑原隆 担当:「研究－読むことに関して」pp.170-177 単著 内容:具体的な言語活動を通して三領域における言葉の力を効果的に高めてきた単元学習の新学習指導要領における言語力育成の可能性について、具体的な実践例をもとに論じた。考察対象とした実践事例は、小学校低学年における「読むこと」領域に関する言語活動例「読んだ本について，好きなところを紹介すること」を具体化されたものである。単元学習の強みが充分に発揮された実践例を通して、PISA型「読解力」の育成を具現化し、「読書力」の育成を可能にする要件を明らかにした。
(9) 小学校国語科 学習指導案で授業が変わる!―学習指導案を読む・書く・使いこなす	単著	平成23年 4月	日本標準	国語科の授業づくりの具体化を学習指導案の計画･立案によって行うことを基本方針に、「学習指導案を読み解く」「学習指導案を書ききる」「学習指導案を使いこなす」「教材解釈と授業づくり」「学習指導要領で求められる国語力とそのポイント」を観点として、「言語活動の充実」を担う国語科の役割とその具体化について詳細に解説した。 確かな言語力を育成するには、単元構想の工夫を支える教材解釈の充実、具体的な学習の場においては伝え合い・コミュニケーション活動の活性化、言語力育成に関する評価方法の確立が重要となることを強調した。書写指導における電子黒板等の情報機器活用に関する実践事例にも言及した。 B5版　総頁数135P

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
(10) 観点別学習状況の評価規準と判定基準［小学校国語］	共著	平成23年4月	図書文化	教科の目標から具体的な評価規準の設定や評価技法の選定に至るまでの「分析･具体化の手順」と期末の評価に至る「統合・要約化の手順」を明示し、明確な根拠に基づく評価について論じたものである。 B5版 総頁数223P 監修:北尾倫彦 全体編集:山森光陽、鈴木秀幸 国語編者:田中洋一 共著者:大場弥恵、大月ちとせ、池上優子、川上ひより、福山聡恵、米田直紀、細川大輔、香月正登、田村たまえ、宇賀村康子、大江実代子、新井雅晶、松野美幸、伊﨑一夫、他44名 担当:2年:7「読むこと（説明文）：順序に気をつけて読む」pp.94-95 単著、5年:10「伝統・国語（古典）：伝統的な言語文化」pp.168-169 単著 2年:7においては、「読んで考えたことを書こう『どうぶつ園のじゅうい』（光村図書）」について、「動物園の獣医の一日の仕事の流れを確かめながら仕事内容やそのわけを読み取り、心が引き付けられたところを自分の経験と結び付け、考えたことを書く」ことをねらいとし、「獣医の仕事とそのわけについて、一日の仕事の流れからまとめる学習場面」と、「一番引き付けられたところを基に感想を書く学習場面」とを取り上げ、具体的な評価規準と判定基準を明示した。いずれの指導場面においても、「自分なりの考えを理由を明確にして書くこと」「交流活動を通して学級内他者の良いところを見つけ伝え合うこと」の重要性を強調した。 5年:10においては、「声に出して楽しもう『論語』（光村図書）」について、「３つの論語と解説文を手掛かりに、昔の人のものの見方や感じ方を知り、現代人のものの見方や感じ方と比べる」ことをねらいとし、「３つの論語から最も好きなものを選び、その理由を書く学習場面」と、「交流を終えて、新たな気付きを発表する学習場面」とを取り上げ、具体的な評価規準と判定基準を明示した。いずれの指導場面においても、「自分なりの考えを理由を明確にして説明すること」「交流活動を通して深まった解釈や変化した考えを書き加えること」の重要性を強調した。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
(11) 次世代の教職入門	共著	平成23年 5月	大学教育出版	教員の資質向上と研修が求められる社会的な背景を教育基本法等の改正や学習指導要領の改訂と関連付けながら論じたものである。 A5版 総頁数297P 編者:中田正浩 共著者:鎌田首冶朗・中田正浩・松田智子・大野光二・山本正・大石隆夫・中田律子・伊崎一夫・住本克彦・杉田郁代・筒井愛知 担当:「第6章学級経営」pp.133-155 単著 内容:学級担任の教師は、児童・生徒相互の人間関係を育てる場としての学級の役割を重要なものとして認識し、個や集団に働きかけ、児童・生徒相互の好ましい人間関係を育てるために学級経営を充実させる。その要として学級経営案は作成される。小学校を中心に、幼稚園・保育所、中学校における具体的な学級経営案の事例をもとに、一人の教師として学級経営デザインができるよう解説した。
(12) 国語実践に学ぶ「基礎・基本習得の技能」	単著	平成24年 8月	株式会社ERP 教育PRO 特集号	平成20年度版学習指導要領の要である「言語活動の充実」をふまえ、「言葉の力」の獲得を保障する学習活動について実践的方向を示し、その具体化の手立てと有効性について論じた。学習活動の活性化のためには、単元構想や実際の指導における仕組みや仕掛けの工夫が求められると共に、学習指導要領の指導事項として示されている「言葉の力」の理解と吟味が不可欠であることを強調した。学習指導要領において示された記録、報告、解説、推薦等の言語活動例を取り上げ、それらの意味と意義について、学校図書館の活用を含む実践事例を挙げながら詳述している。 B5版　総頁数40P
(13) 国語授業へのアプローチ・知っておきたい国語教育の〈ことば〉	単著	平成24年 10月	株式会社ERP ERPブックレット	平成20年度版学習指導要領の要である「言語活動の充実」をふまえ、指導事項に取り上げられている基礎的･基本的な用語を取り上げ、文芸理論、分析批評等の観点をふまえ、その意味や意義を解説した。具体的には、「登場人物」「主題」「視点」「ファンタージ教材」「イメージ化」「音読・朗読・暗唱」「形式段落・意味段落」「事実・意見」「説明・解説」「俳句・短歌」「漢字」「書写(トメ・ハネ・ハライ)」などの用語について、学校図書館の活用を含む具体的な実践事例を示しながら詳述している。物語文教材に関するものを多く取り上げ、詳細な読解に偏りがちな授業の工夫改善への視座を明確にした。 A5版　総頁数86P

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
(14) 教育フォーラム51 言語活動―『読み』『書く』の力を中心に	共著	平成25年 2月	金子書房	平成20年度版学習指導要領が目指す確かな学力を身につけるためには、＜言葉の力＞が必要不可欠である事をふまえ、言語活動を通して確かな「読み」と「書く」の力を育む理論と実践のあり方を提案している。 A5版　総頁数135P 編者：梶田叡一 共著者：梶田叡一・金澤孝夫・渡部久美子・伊﨑一夫・阿部秀高・加藤明・湯峯裕・井上尚美・鎌田首治朗・高木章・蔵あすか・杉田郁代・オチャンテ-村井-ロサ-メルセデス 担当：「文学教材の論理的読解のために－「主題把握」とテキストの多様な情報を関連付けることを－」pp,48-58 単著 内容：PISA型読解力は、単なる言語活動ではなく、目的に応じてより積極的で自覚的な態度･姿勢に基づく言語活動を一貫して求めてきた。PISA型読解力は、情報のインプットからアウトプットまでの一連の論理的思考を要求するため、PISA型読解力においては「自分の考え」を論述することが不可欠となる。このことは文学教材の読解においても重要である。妥当性のある「自分の考え」を持つことに、テキストの文脈的理解と主題把握は大きく関与する。「『ごんぎつね』のしかけを見つける」実践事例の分析を通して、主題把握と、テキストに埋め込まれている多様な情報を関連付けることによって論理的思考力が強化され、「自分の考え」が創出されることを論証した。
(15)教育フォーラム53 文学が育てる言葉の力 文学教材を用いた指導をどうするか	共著	平成26年 2月	金子書房	今までよりさらに高次の「言葉の力」を育成するため、文学作品に惹きつけられる出会いと的確な指導のあり方を提案している。 A5版　総頁数148P 編者：梶田叡一 共著者：梶田叡一・中洌正堯・鎌田首治朗・伊﨑一夫・山下敦子・汐海治美・永田里美・湯峯裕・勝見健史・加藤明・瀧明知惠子・蔵あすか 担当：「テキスト全体の構造的理解を促す文学教材の指導」pp,37-47　単著 内容： 児童生徒に文学の持つ魅力に気づかせ、作品を通して子どもの言葉の世界を深め、より豊かな人間性を高めるためには、物語の構造的理解に関する学習が不可欠であることを、「三年とうげ」（光村3年下・平成23年本）を例に論証した。さらに文学作品が持つ魅力を深化・拡充するためには、学校図書館を含む読書活動を活性化させ、多様な読書情報に触れることの重要性にも言及した。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
(16)教育フォーラム58 主体的能動的な学習 アクティブ・ラーニングの精神を生かす	共著	平成27年 8月	金子書房	次期学習指導要領のキーワードとして注目を集めているアクティブ・ラーニング（ＡＬ）について、小中学校の教育において、ＡＬをどのようにとらえ、実践していけばよいか、そのあり方を提案している。 A5版　総頁数172P 編者：梶田叡一 共著者：溝上慎一・加藤　明・伊崎一夫・鎌田首治朗・前田洋一・岸　周吾・芝池宗克・米川雅士・武谷嘉之・松井典夫・瀧明知惠子・井上信子・梶田叡一 担当：「国語科授業におけるアクティブ・ラーニングの可能性－総合的な学習単元の構想(小学校国語科)－」pp.26-35 単著 内容：学習指導要領の全面改訂を求める中教審への諮問（「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について」平成26年11月20日）に示された「アクティブ・ラーニング」（課題の発見と解決に向けて主体的・協働的に学ぶ学習、以下ＡＬ）の充実をふまえ、課題の発見と解決に向けて主体的・協働的に学ぶＡＬは、初等・中等教育で従来から取り組まれていた「総合的な学習の時間」との類似点について論じた。「言葉の力」を活用する一連の総合的な学習は、ＡＬと類似していることに着目し、国語科におけるＡＬの可能性を指摘した。国語科における総合的な学習単元の一例として、総合的な学習単元「いのちの手帳」（小学校３年生）を提示し、その実践的価値を明らかにした。
(17)シリーズ国語授業づくり「発問」編 考える授業、言語活動の授業における効果的な発問 (編著者)	共著	平成27年 12月	東洋館出版	教材研究と授業構想において教師がもっとも綿密に計画を練る必要がある「発問」について、言語活動や読むためのねらいに応じた発問の工夫や、教材文のジャンルに応じた発問、また評価につながる発問などを詳細に解説している。国語授業づくりの基礎・基本シリーズの１冊。 A5判 総頁数120P 編集責任者:寺井正憲 編集者：伊崎一夫 共著者：伊崎一夫・細見博友・横田経一郎・羽渕みな子・神谷知子・遠藤陽子 担当：Ⅱ章「『発問』の基礎･基本」pp,20-69　共著 内容：文章のジャンルや言語活動に応じた発問、読む活動と表現活動を効果的につなぐための発問、情報や考えを共有する発問、考えや意見を深化させる発問等、「発問」全体を俯瞰し、具体化するための視座とその展開例について、Ｑ＆Ａ様式で詳述した。単元内の工夫にとどまらず、単元間の効果的な関連のさせ方や学校図書館を含む多様な読書活動の活性化に関する提案も多数行っている。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
(18)自学力をはぐくむ言葉の力 『ひとり勉強』に学ぶ	共著	平成28年 3月	株式会社ERP ERP TMシリーズ	確かな「言葉の力」と「学び方」の獲得を目ざす「ひとり勉強」の本質と具体的な進め方について解説している。次期学習指導要領の改訂に向け、「どのように学ぶか」を問い直す観点として示された「アクティブ・ラーニング」を支える有効な学習方法の工夫改善の一例となる「ひとり勉強」について、自学力獲得の価値とその具体化について提案している。 A5版　総頁数90P 共著者：伊﨑一夫・山口昭男 担当：第五章「新しい『教育改革』と『ひとり勉強』」pp,77-89　単著 内容：「ひとり勉強」を要とする国語授業の工夫改善の視座として、「アクティブ・ラーニング」の基盤と「言葉の力」、「言葉の力」と自学力の関連性、「学び方」と読書生活との連動性等について論述した。様々な工夫の見られる「ひとり勉強」の実践事例とその解説をふまえ、思考過程重視の学習観を具現化する「ひとり勉強」の価値とその可能性について言及している。
(19)教育フォーラム56 アクティブ・ラーニングとは何か	共著	平成28年 8月	金子書房	教師に指示されたままの受身の授業参加ではなく、「子ども達だけで創る授業」を夢想するのでもない、今ここでの教育目標、授業での〈ねがい〉と〈ねらい〉を、教師も子どもも共通の認識として持ちながら、子どもが、主体的能動的にその場での学びに取り組んでいくための様々な工夫や具体的実践的な提案を行っている。 A5版　総頁数148P 編者：梶田叡一 共著者：梶田叡一・鎌田首治朗・伊﨑一夫・吉田明史・角屋重樹・原田智仁・直山木綿子・菅井啓之・押谷由夫・オチャンテ　ロサ村井　メルセデス・瀧明知惠子・井上信子 担当：「主体的能動的な国語の学びのために－『アクティブ・ラーニング』と思考力の強化－」pp.23-33 単著 内容：『論点整理』（教育課程企画特別部会・論点整理、平成27年8月）において示された「三つの柱」と「学び全体を改善する視点」をふまえ、新しい教育改革における資質･能力の育成における「思考の活性化」「創造的思考力の成立」の重要性について論じた。「深い学びの過程」「対話的な学びの過程」「主体的な学びの過程」の実現をめざし、ＡＬの発想やその本質をふまえた学習方法の工夫改善として、言語活動で扱う思考要素と思考操作を明確にする具体的プランを構想し、その有効性を立証した。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（学術論文）				
(1)　小学校国語科『書くこと』領域における学習指導の工夫―「伝え合い」を重視した入門期の指導― 【査読あり】	単著	平成19年6月	「解釈」 第53巻第5･6号 解釈学会（日本学術会議協力学術研究団体） pp. 40-46	伝え合い学習活動を成立させるためのポイント（①伝え合うべきものを生み出す　②「いいところ見つけ」交流活動　③伝え合いによる成果の整理集約　④新たな価値の自覚化）を先行研究を踏まえた上で抽出し，小学校1年生入門期の「書くこと」領域における学習活動において，そのポイントを充足する学習指導の有効性を，「あのねちょう」と題する自由作文を中心とする実践によって，検証・確認した。「ことばの力」を駆使した伝え合い活動においては、支持的風土に支えられた双方向コミュニケーションの成立が不可欠であり、その内実は「いいところ見つけ」交流活動によって発揮され、醸成されることを強調した。
(2)　一碗のお茶と伝統的な食文化－食育教育へのまなざし－	単著	平成19年11月	三田市教育委員会指定第7回三田市立けやき台小学校・公開教育研究発表会研究紀要 pp. 119-126	「子どもたちが豊かな人間性を育み、生きる力を身につけていくためには何よりも『食』が重要である」という食育教育の重要性について、茶道におけるお茶の効用、文化としてのお茶の作法を切り口に論じた。茶道クラブの取り組みを例に、豊かな食、伝統的な食文化としての茶道の価値について強調した。一碗のお茶には数多くの準備が必要であること、茶道クラブが地域の方の協力を得て運営されていることなどから、日々の食事も見えないところで多数の人々が関わっていることに言及した。さらに、学校だけではなく、各家庭における食育が充実することへの期待についても付加している。
(3)　言葉の力を培う「授業力」を鍛えるポイント	単著	平成19年12月	教育科学「国語教育」 №687 明治図書 pp. 36-39	教師に求められる「授業力」の意味とその価値について，具体例を示しながら論じた。好ましい「授業力」のイメージを，「短期決戦型」の学力観と「長期実現型」の学力観とを対比的に示すことによって明らかにした。「長期実現型」の学力観においては、言語力を培う年間指導計画の策定と、効果的な言語力の活用の良さを相互に評価し合う場の設定が不可欠であることを強調した。
(4)　小学校国語科『書くこと』領域における学習指導の工夫に関する研究―伝え合いを重視した入門期の指導 【査読あり】	単著	平成20年3月	「教育実践学論集」 兵庫教育大学大学院博士課程研究科論文集 pp. 61-73	伝え合い学習活動を成立させるためのポイントト（①伝え合うべきものを生み出す　②「いいところ見つけ」交流活動　③伝え合いによる成果の整理集約　④新たな価値の自覚化）を，先行研究を踏まえた上で抽出し，小学校1年生入門期の「書くこと」領域における学習活動において，そのポイントを満足する学習指導の有効性を，「あのねちょう」と題する自由作文を中心とする実践によって検証・確認した。「ことばの力」を駆使した伝え合い活動においては、支持的風土に支えられた双方向コミュニケーションの成立が不可欠であり、その内実は「いいところ見つけ」交流活動によって発揮され、醸成されることを強調した。（尚，本稿においては，前出39が紙幅の都合もあり論じられなかった，年間指導計画の有効性及び，就学以前に獲得している言語力との関連，年間指導計画と「伝え合い」学習活動の関連について詳述している。）

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
(5)　PISA型「読解力」の具体化―工夫改善における三つのポイント― 【査読あり】	単著	平成20年 4月	月刊「国語教育研究」 №432 日本国語教育学会 pp. 60-67	新学習指導要領において強調されているPISA型「読解力」育成の具体例の一つとして，高学年文学教材（「ヒロシマのうた」東書６年）に関する実践事例を示し，その有効性について論じた。テキストを理解・評価しながら読む力を高めるための方策として，「お話読み解きシート」（①テキストの設定②主な出来事　③展開　④表現上の特色　⑤感想　の5項目からなるワークシート）、「ブックレポート」（テキストの構造と良さに関する主張を感想と共に自由形式で出力するもの）を取り上げた。「お話読み解きシート」「ブックレポート」のいずれについても、学級内他者による相互評価を繰り返し、その価値の自覚化を強化することが重要であることを強調した。
(6)　要約・説明力をどう育てるか－「要するに…，要するに…」を繰り返し，自分のフィルターを強化する－	単著	平成20年 4月	教育科学「国語教育」 №691 明治図書 pp. 48-51	実生活の様々な場面における言語活動の充実を強調する中教審答申(平成20年1月)において示された要約・説明力に焦点を当て，その手だてに関する具体的な提案を行い，実践的に論じた。6年生の説明的教材，文学的教材に対する学習者の要約事例を具体例として示し，その価値について分析した。妥当性を有し質の高い要約に到達するためには、学級内他者同士の伝え合い活動である双方向コミュニケーションの場が活性化する必要があることを強調した。
(7) 茶の湯における「もてなし」「気遣い」「思いやり」―茶道クラブで学べること―	単著	平成20年 11月	三田市教育委員会指定第8回三田市立けやき台小学校・公開教育研究発表会研究紀要 pp. 126-133	茶会の席で人をもてなす際の心構えを説くキーワードである「利休七則」「和敬清寂」「一期一会」の意味と意義について、茶道クラブの取り組みを例に論じた。茶道クラブの体験に対する子どもたちのふり返りや保護者からの感想等から、「もてなし」「気遣い」「思いやり」を抽出し、茶会のしつらえにおける茶花や道具立ての役割を例に、茶席には「もてなし」「気遣い」「思いやり」が具体化されていること、茶道クラブの体験は人と人とが生きていく社会の中での生き方や関係について考える良い機会になることなど、茶道が日常生活や伝統文化を見直す第一歩となることを強調した。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
(8)　情報活用力としての「書く力」をたかめる－読み解きシート徹底活用－ 【査読あり】	単著	平成20年 12月	第57回読売教育賞受賞者論文集 pp. 5-22	国語力の中核となる言語能力である「書く力」に焦点を当て、目的や意図に応じて情報を吟味し、必要な情報を適切に効果的に分かりやすく表出するための学習指導の工夫改善の一例として「読み解きシート」を提案し、その有効性を実践的に論じた。具体的には、6年生の文学教材（「風切るつばさ」「ヒロシマのうた」「桃花片」「雪渡り」「海のいのち」）と説明文教材（「イースター島にはなぜ森林がないのか」「マンモス絶滅のなぞ」「言葉の意味を追って」「百年前の未来予測」）を取り上げ、「書く力」を高めるための方策として，「お話読み解きシート」（①テキストの設定　②主な出来事　③展開　④表現上の特色　⑤感想　の5項目からなるワークシート）、「ブックレポート」（テキストの構造と良さに関する主張を感想と共に自由形式で出力するもの）を用いた年間を通した実践の具体と、子どもたちの「書く力」の高まりに関する分析を行っている。「お話読み解きシート」と「ブックレポート」の質的深化は「いいところ見つけ」という相互評価活動によって可能であること、「書く力」の高まりは３学期後半に書かれた卒業論文によって確認できたことを論証している。
(9)　「伝統的な言語文化」高学年の授業づくりへの配慮 ―年間指導計画に位置付き， と活躍する古典という素材―	単著	平成20年 12月	教育科学「国語教育」 №701 明治図書 pp. 60-63	平成20年度版学習指導要領において新設された事項「伝統的な言語文化」における配慮事項について，「竹取物語」を例に具体的な提案を行い，実践的に論じた。古文の学習によって，学習者はものの見方や感じ方を広げることや，昔の言葉遣いへの興味関心を高めることができることを明らかにした。指導方法の工夫改善の一例として、教科書の解説文だけではなく、児童図書による鑑賞文を効果的に活用する方法を提案し、その有効性を実証した。
(10)　読解リテラシーの向上をめざす学習指導の工夫に関する研究－絵本の読み聞かせを取り入れた読解指導－	単著	平成22年 3月	環太平洋大学研究紀要 第３号 環太平洋大学 pp. 43-50	幼稚園の「ことば」領域と小学校入門期の「読むこと」領域において、PISA型「読解力」の育成を可能とする学習指導の工夫改善のポイントを「絵本の読み聞かせ」に求め、その有効性について論じた。「(1)絵本の読み聞かせを継続し、多くの情報を与える」「(2)お話の「つながり」をキーワードにすえ、お話相互の共通性に注目させる」「(3)感じたおもしろさの理由を表出させる場を設定する（幼稚園段階では発話、小学校低学年ではワークシート）」ことの３点を充足する学習指導の工夫改善によって、 読解リテラシーの向上が保障されることを、実践によって検証・確認した。絵本の読み聞かせの事例として、幼稚園年少から小学校入門期までを取り上げることによって、幼児期から小学校低学年に至る子どもの言語獲得とその発達における質的変化を論証の対象とした。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
(11)　これからのあるべき国語教室に関する実践的研究 【査読あり・博士論文】	単著	平成23年 3月	兵庫教育大学大学院	平成20年度版学習指導要領に対応する国語教室のモデルを提示し、その実現を可能にする要件の有効性を具体的実践に基づき検証したものである。第一章においては、目的的に行われている国語教室に内包される実践的価値を吟味し、国語教室のモデルの枠組みとして、学びの成立を客観性、主体性、社会性の三項からなる「三項性」構造を検証し、「平成20年度版学習指導要領・国語科に対応する国語教室実現への工夫改善のポイント」を導出した。第二章においては、工夫改善のポイントに関する詳細な考察を、具体的な事例に基づいて行っている。第三章から第五章においては、「工夫改善のポイント」を満足する年間を通した指導事例について、その内容を詳述し、「工夫改善のポイント」の有効性について検証している。第三章では「書くこと」領域（小学校低学年）、第四章では「話すこと・聞くこと」領域（小学校中学年）、第五章では「読むこと」領域（小学校高学年）を取り上げている。終章となる第６章においては、本論文のの総括と結論を提示し、「これからのあるべき国語教室」の展望を示した。 A4版　総頁数230p
(12)　読解リテラシーの向上をめざす学習指導の工夫に関する研究(2)－「つなぐ思考」の活性化－	単著	平成23年 3月	環太平洋大学研究紀要 第４号 環太平洋大学 pp. 65-71	幼稚園の「ことば」領域と小学校入門期の「読むこと」領域における学習活動において、論理的思考力の育成を可能にする学習指導の工夫改善のポイントを「つなぐ思考」に求め、その有効性について論じた。「①絵本の読み聞かせと感想交流を継続する　②「つなぐ思考」を促す接続詞を活用する　③自分の感想を「お気に入り」としてまとめる」ことの３点を充足する学習指導の工夫改善によって、「つなぐ思考」〈論理的思考力〉の向上が保障されることを、実践によって検証・確認した。絵本の読み聞かせの事例として、幼稚園年少から小学校入門期までを取り上げることによって、幼児期から小学校低学年に至る子どもの言語獲得とその発達における質的変化を論証の対象とした。
(13)　論理的思考を強化し、「つなぐ思考」を活性化する単元開発－「どうぶつの赤ちゃん」を例に－ 【査読あり】	単著	平成23年 4月	月刊「国語教育研究」 №468 日本国語教育学会 pp. 10-15	論理的に思考し、論理的に記述するためには、事象と事象とを関連づけ、そこに必然的な結びつきを見い出す思考、情報を「つなぐ思考」が求められることを示し、その有効性について論じた。論理的思考力の強化による言語生活を高める単元開発の一例として、「どうぶつの赤ちゃん」（光村１年）における図鑑作りを取り上げ、「つなぐ思考」を強化することによって、論理的思考は活性化し、自分の考えを主張できる「表現力」へと結びつくことを明らかにした。図鑑作りという制作活動にとどまることなく、作成された図鑑について相互に評価し、吟味し合うことの重要性を強調した。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
(14)　言語活動例と指導事項との結びつきを見極める	単著	平成23年 9月	「実践国語研究」 308号 明治図書 PP.19-20	言語活動例を通して論理的思考力を育成するためには、言語活動例と指導事項との結びつきを見極め、教材文のキーワードから単元構想の手がかりを掴み出す必要があることを、具体的な実践事例をもとに論じた。考察対象とした実践事例は、「どうぶつの赤ちゃん」(小学校１年・説明文教材)である。説明文における学びを生かし、「説明する文章を書く」という言語活動を豊かに展開するためには、教材文のキーワードである「自分で」「自分では」に着目した論理的な思考と、論理的な記述が必要であることを明らかにした。論理的な記述の妥当性を高めるためには、学級内他者による相互評価活動の活性化が不可欠であることを強調している。
(15)　板書原論	単著	平成23年 11月	「小四教育技術」 平成23年11-12月号 小学館 PP.14-18	板書が「授業の展開に沿って、理解を深め、考え方を強化し、思考を整理するために必要な情報を提供する」ことを、多様な指導事例を示しながら、具体的に論じた。考察対象とした実践事例は、「ごんぎつね」(物語教材)、「動いて、考えて、また動く」（説明文教材）、「短歌と俳句」(伝統的な言語文化と国語の特質)、「施設見学新聞作り」(社会科・総合的な学習)である。教材文の構成を視覚的にとらえること、学習者の考えを価値づけること、学習活動やモデルを的確な提示すること等、言語力獲得における効果的な板書機能の特質を明らかにした。また、電子黒板の活用方法等、ICTによる授業改善の可能性にも言及している。
(16)　国語科の課題－「習得」と連動した「言語活動」の構想－	単著	平成23年 12月	「新しい教育」Vol.25 日本標準教育研究所 2011年12月 PP.2-5	平成20年度版学習指導要領が求める「言語活動の充実」は「各教科等を貫く重要な改善の視点」であり、そのために各教科の中核に位置付く国語科が重要な役割を担っていることをふまえ、「習得」と連動した「言語活動」のありようについて、具体的に論じた。考察対象として、「スピーチ」「宝物紹介」「感想文」「読解学習」等、小・中学校の指導事例を全般的に取り上げた。「言語活動の充実」においては、考察対象とした「スピーチ」「宝物紹介」「感想文」等の生成にとどまることなく、それらを用いた学級内外他者による相互評価活動が不可欠であることを強調している。
(17)　読解リテラシーの向上をめざす学習指導の工夫に関する研究(3)－「さぐる思考」の活性化－	単著	平成24年 3月	環太平洋大学研究紀要 第５号 環太平洋大学 pp.51-60	小学校「読むこと」領域における学習活動において、論理的思考力の育成を可能にする学習指導の工夫改善のポイントを「さぐる思考」に求め、その有効性について論じた。「１テーマ（読者に伝えたいこと）」「２テーマを伝えるためのメインアイデアとこのお話ならではの表現の工夫」の２つの項目によって構成されているワークシートを十分に活用することによって、「さぐる思考」が活性化され、合理的な「自分の考え」が創出されることを、実践によって検証・確認した。「自分の考え」の妥当性と、その質の深化・拡充においては、学級内外他者による相互評価活動が不可欠であることを強調している。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
(18)　読書体験の深化・拡充を促す絵本の読み聞かせ(1)－『体感型読書』プログラム 「ももたろう」の特徴と効果－	単著	平成24年10月	環太平洋大学研究紀要第６号 環太平洋大学 pp. 91-98	３年目を迎える「地域の教育・文化における絵本の『体感型読書』プログラムの開発的研究」（学術振興財団22年度科学研究補助金対象研究基盤研究Ｃ）の総括に向け、多岐にわたる実践データの整理・分析を行うための基礎的な視座を明らかにした。具体的には、平成23年2月22日に行った三田市立富士小学校における実践データ（3年生と5年生合計108名に実施）をもとに、読書体験という観点からの分析を試みた。プログラム実施後のアンケート調査等によって、「音楽･映像等の情報を加味し多様な表現活動を保障すること」と「聞き手同士の関わりを活性化すること」の有効性を確認している。
(19)　読解リテラシーの向上をめざす学習指導の工夫に関する研究(4)－「いいところ見つけ交流活動」の活性化－	単著	平成25年3月	環太平洋大学研究紀要第７号 環太平洋大学 pp. 89-96	小学校「読むこと」領域における学習活動において、論理的思考力の育成を可能にする学習指導の工夫改善のポイントを「自分の考え」の効果的な表出に求め、その表出を支える相互評価活動である「いいところ見つけ交流活動」の重要性と有効性について論じた。妥当性のある「自分の考え」を持つことに、テキストの文脈的理解と主題把握が大きく関与することと共に、テキストの文脈的理解と主題把握の質的深化のためには相互評価活動が不可欠であることを論証した。具体的には、「『ごんぎつね』のしかけを見つける」実践事例を取り上げている。
(20)　いま「学び方開き」のときー学びの基礎を手ほどきするー	単著	平成25年4月	「小四教育技術」 平成25年4月号 小学館 PP. 75-80	学級開きの4月が一年間の学び方の基礎を教えるときであることを指摘し、その具体的手法として「朝の会のミニスピーチ」「教科書の仕組みを知る学習」「音読カードの項目の作成」「連絡帳による学習のふり返り」等を提案した。全ての教科学習に共通する学び方として、「話し方」「聞き方」「本読みの仕方」「ノートの使い方」「ふり返りの仕方」などがあり、4月時期に意図的・計画的に指導する必要があることを強調した。
(21)　前学年までの学びを可視化するー「ことばの力」の一覧表を用いてー	単著	平成25年5月	「実践国語研究」 №318 明治図書 pp. 11-12	国語科の授業開きのポイントを「前学年までの既習のことばの学び」の確認に求め、既習の学びを意図的・計画的に活用していくことの重要性を指摘した。具体的には、4年生5月単元の説明文学習を行うまでに、3年生までに学習した説明文11教材を再読し、どのような学習が行われたのかをふり返り「ことばの力・一覧表」を作成する学習活動を提案している。「ことばの力・一覧表」の作成が、身に付けた「ことばの力」の能動的・積極的な活用につながることを強調している。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
(22)小学校国語科教育の課題と克服に向けて ―「言葉の力」を育む「ノート指導」と「学習で使う言葉」―	単著	平成26年 4月	「教育ＰＲＯ」第44巻第8号 日本教育綜合研究所 2014年4月 PP. 16-19	国語指導のさらなる工夫改善につながる糸口を、平成25年の「全国学力・学習状況調査」に求め、その具体的方策として、「論理的思考力にかかわる用語の指導」「学習で使う用語の適切な指導」「年間を通した言語活動の継続」「めあて・ふり返りの明確化」「ノート指導の充実」等の重要性を具体例とともに論述した。
(23)「人間教育」に資する「これからのあるべき国語教室」の成立と展開(1) ―「これからのあるべき国語教室」を支える三つの要件―	単著	平成26年 4月	「人間教育学会研究紀要創刊号」 2014年4月 pp. 47-65 査読有	これからのあるべき国語教室における成立の要件について、その有効性を具体的実践に基づき検証した。国語教室実現への工夫改善のポイントとして、「①教室カリキュラム(年間指導計画)」「②観点表」「③いいところ見つけ交流活動」の３点を導出し、その有効性を具体的な実践事例に基づき検証した。取り上げた実践事例は、「読むこと」領域の物語文の読解指導（小学校高学年）であり、作品の価値を適切にまとめる「ブックレポート」の継続指導を方策とする言語力獲得の経緯とその結果について考察している。
(24)伝統や文化に関する教育の可能性(2) －国語教育のアプローチ－	単著	平成26年 12月	「人間教育学会研究紀要第２号」 2015年12月 pp. 177-１84 査読有	「伝統や文化の教育」の現代的意味・意義について、関係法令の規定等をふまえ論述し、教育実践における教科書教材を活用した言語活動の有効性について指摘した。「伝統や文化の教育」は「人間力」と深く関わっていること、「人間力」は豊かな経験や教養を持つ人間としての魅力であること、「人間力」の基盤に日本の伝統や文化体験が位置付くこと、「人間力」は「伝統や文化の教育」が充実することによって高められること等を強調した。さらに、「伝統や文化の教育」は、５つの基本視点（「(1)学校全体で取り組む」「(2)伝統や文化にかかわる従来の教育実践を生かす」「(3)伝統や文化にかかわる学びをつなげ、深める」「(4)実生活とのかかわりを考える」「(5)体験的な学習と言語活動を関連させる」）によって推進されることを提起した。
(25)「言葉の力」を高める言語活動の活性化	単著	平成27年 3月	「国語兵庫」 №94 青雲舎 pp. 6-13	平成26年8月に行った「兵庫県国語教育連盟第57回夏季国語教育研修大会」での講演をもとに、言語力育成に資する単元構想の基本的な考え方について論じた。特に、言語活動の活性化には「前単元までの学び」を積極的に組み込む必要があることを、「三年とうげ」(光村3年)、「ごんぎつね」(光村・東書4年)等における授業実践を取り上げ、具体的・実践的に記述した。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
(26)人間教育に資する「これからのあるべき国語教室」の成立と展開(2)－「アクティブ・ラーニング」と思考力の強化－	単著	平成27年12月	「人間教育学会研究紀要第３号」2016年12月 pp.17-24 査読有	新しい教育改革における教育課程は、従来の教科の学習を基盤として、それを超えて獲得し得る「資質・能力」を目標とし、その目標をより具体的に体系化し、編成される。このとき「生きる力」の根幹に位置付く思考力獲得の道筋を明確にしておくことが必須であり、どのような思考力を獲得させるかだけではなく、どのようなプロセスによって獲得させるのかを同時に見極めていく必要があることを論じた。思考力を獲得するためには、言語活動で扱う思考要素と思考操作を明確にすることに加えて、その思考操作の方法を効果的に使う場を設定することが重要となることを指摘し、東京書籍『新編新しい国語』27年度版の教材と思考力の要素とを組み合わせた「三田プラン」を試案として示し、その有効性を立証した。
(27)「アクティブ・ラーニング」の発想を生かす－「深い学び」を支える「言葉の力」－	単著	平成28年10月	中研紀要「教科書フォーラム№.１７」2016年10月 pp.101-103	『論点整理』（教育課程企画特別部会・論点整理、平成27年8月）において示された「三つの柱」と「学び全体を改善する視点」をふまえ、新しい教育改革における資質･能力の育成における「思考の活性化」「創造的思考力の成立」の重要性について論じ、思考力獲得を保障する学習指導のあり方について提案した。「深い学びの過程」「対話的な学びの過程」「主体的な学びの過程」の実現をめざし、「自分の考え」の一層の重視、ＡＬを支える言語力育成の重要性、読書生活の充実等を強調した。
（その他）				
「研究報告書」				
(1)　絵本を活用した読解指導の工夫に関する研究	単著	平成23年7月	平成22年度教育研究助成成果報告書 財団法人福武教育文化振興財団 pp.63-64	幼稚園の「ことば」領域と小学校低学年「読むこと」領域において、読解リテラシーとなるPISA型読解力の向上に関する具体化の視座を絵本の読み聞かせに求め、その有効性を実証した。PISA型読解力を効果的に育成するために、幼稚園では自分の感じたおもしろさを言葉で伝え合うこと、小学校では自分の読んだ本について好きなところを紹介する、つまり「おすすめの文章」を書くことを中核に据えた取り組みを年間を通し継続的に行い、「文章を深く読んで分析的に理解してその上で論理的に表出する能力」が効果的に育成されることを論じた。読み聞かせの事例として、幼稚園年少から小学校入門期までを取り上げ、幼児期から小学校低学年に至る子どもの言語獲得とその読解リテラシーの発達における質的変化を対象とした。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
「学会発表」				
「講演」				
(1) 新学習指導要領にもとづく授業づくり ―国語科の授業をどう変えるのか	―	平成20年 8月	兵庫県川西市教育委員会主催 平成20年度 国語科教育研修会 平成20年8月22日	平成20年度版学習指導要領改訂の基本的な考え方である「習得」「活用」「思考力・判断力・表現力」「主体的な学習態度」及び，新国語科の改訂のポイントである「言語活動例の格上げ」「言語活動の充実」「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」「PISA型読解力」等について説明を行った上で，「年間カリキュラム」「いいところ見つけ」「言葉の力のメタ認知」が，新国語科に対応した国語教室実現への改善のポイントとなることを指摘し，その具体策の要点について解説した。尚，実践事例として，小学校１年生を対象とした通年の作文指導と6年生における教科書教材を活用した作品紹介活動を取り上げた。
(2) 新学習指導要領と国語科授業の創造	―	平成20年 8月	大阪府箕面市教育委員会主催 平成20年度授業カアップ連続講座② （小：国語） 平成20年8月25日	平成20年度版学習指導要領改訂の基本的な考え方である「習得」「活用」「思考力・判断力・表現力」「主体的な学習態度」及び，新国語科の改訂のポイントである「言語活動例の格上げ」「言語活動の充実」「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」「PISA型読解力」等を踏まえ，小学校1年生における年間を通した作文指導と5年生における教科書教材を活用したＰＯＰ作りと作品の推薦活動を実践事例として取り上げながら，新国語科に対応する国語教室実現に向け，「年間カリキュラム」「いいところ見つけ」「言葉の力のメタ認知」が工夫改善のポイントとなることを指摘し，具体化の要点について解説した。
(3) 新学習指導要領と「言語活動の充実」	―	平成21年 6月	鳥取県中部地区小学校教育研究会主催 平成21年度教育研修会 平成21年6月10日	平成20年度版学習指導要領改訂の基本的な考え方である「習得」「活用」「思考力・判断力・表現力」「主体的な学習態度」を踏まえ、全教科・領域において取り組むべき「言語活動の充実」を具体化するために必要となる指導方法の工夫改善のポイントと、その際に求められる教育方法・指導技術について詳細に解説した。実践事例として，小学校６年生における読解指導と、卒業論文を書かせる総合学習とを取りあげた。
(4) 新学習指導要領にもとづく授業づくり ―言語活動の充実が目ざすものー	―	平成21年 8月	兵庫県川西市教育委員会主催 平成21年度 国語科教育研修会 平成21年8月26日	平成20年度版学習指導要領改訂の基本的な考え方である「習得」「活用」「思考力・判断力・表現力」「主体的な学習態度」を踏まえ、全教科・領域において取り組むべき「言語活動の充実」を具体化するために必要となる指導方法の工夫改善のポイントと求められる教育方法・指導技術について詳細に解説した。実践事例として，小学校５年生における読解指導と、環境をテーマとする総合学習を取りあげた。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
(5) 新学習指導要領と国語科授業の創造	―	平成21年11月	旭川市教育委員会主催国語教育研究大会平成21年11月20日	平成20年度版学習指導要領改訂の基本的な考え方である「習得」「活用」「思考力・判断力・表現力」「主体的な学習態度」及び，新国語科の改訂のポイントである「言語活動例の格上げ」「言語活動の充実」「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」「PISA型読解力」等を踏まえ，新国語科に対応する国語教室実現に向けての具体的方策を示しながら、具体化の要点と求められる授業技術・方法について詳細に解説した。
(6) 新学習指導要領と「言語活動の充実」	―	平成22年2月	愛知県北名古屋市小学校教育研究会主催平成21年度教育研修会平成22年2月12日	平成20年度版学習指導要領改訂の基本的な考え方である「習得」「活用」「思考力・判断力・表現力」「主体的な学習態度」を踏まえ、全教科・領域において取り組むべき「言語活動の充実」を具体化するために必要となる指導方法の工夫改善のポイントと求められる教育方法・指導技術について詳細に解説した。実践事例として，小学校５年生における読解指導と、環境をテーマとする総合学習を取りあげた。
(7) 新学習指導要領にもとづく授業づくり－言語活動の充実－	―	平成22年8月	兵庫県川西市教育委員会主催平成22年度 国語科教育研修会平成22年8月5日	平成20年度版学習指導要領・新国語科における「言語活動の充実」をふまえ、新国語科に対応する国語教室を実現するために必要な工夫改善のポイントとして「①年間指導計画」「②いいところ見つけ(交流活動)」「③『言葉の力』のメタ認知」の３点を示し、その具体化について解説した。実践事例として、「話すこと・聞くこと」領域の年間を通した「スピーチ活動」を取り上げた。
(8) 言語活動の充実と年間指導計画への期待	―	平成22年8月	宮崎県小学校教育研究会国語部会主催第38回宮崎県小学校教育研究会夏期研修会平成22年8月23日	平成20年度版学習指導要領・新国語科における「言語活動の充実」をふまえ、新国語科に対応する国語教室を実現するために必要な工夫改善のポイントとして「①年間指導計画」「②いいところ見つけ(交流活動)」「③『言葉の力』のメタ認知」の３点を示し、その具体化について解説した。実践事例として、説明文教材「たんぽぽ」「ビーバーの大工事」（２年）、「くらしの中の和と洋」（４年）、「森林のおくりもの」（５年）等を取り上げた。
(9) 「言語活動の充実」と学校・地域・家庭の教育力	―	平成22年10月	篠山市教育委員会指定研究事業「学力向上実践推進事業」平成22年度篠山市立味間小学校公開研究発表会平成22年10月20日	平成20年度版学習指導要領改訂の基本的な考え方である「習得」「活用」「思考力・判断力・表現力」「主体的な学習態度」を踏まえ、全教科・領域において取り組むべき「言語活動の充実」を具体化するために必要となる指導方法の工夫改善のポイントと求められる教育方法・指導技術について詳細に解説した。実践事例として，各学年の公開授業を取り上げ、それらの授業の成立は、学校・地域・家庭の教育力に支えられていることを強調した。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
(10) 確かな学力と人間関係をつくりだす力	－	平成22年11月	三田市教育委員会指定研究事業 平成22年度三田市立富士小学校公開研究発表会 平成22年11月26日	豊かな人間関係を培うためには確かな言語運用能力が不可欠であることを踏まえ、当該校の３年にわたる研究の有する価値とその成果について言及した。特に共生教育においては、自己をみとめ、他者とコミュニケーションすることが極めて重要であることを強調した。
(11) PISA型読解力を育む新しい国語の授業づくり	－	平成23年7月	大阪市教育センター主催「学力向上授業研修会」 平成23年7月21日	「思考力・判断力・表現力」と「論理的に考えること」、PISA型読解力と「論理的に考えること」、「論理的に考えること」と「つなぐ思考」等の関連について、新学習指導要領の趣旨をふまえ、詳細に解説した。「論理的に考えること」が培われる国語教室の具体像については、小・中学校の実践事例を取り上げた。
(12) 思考力・判断力・表現力等の育成と授業づくり	－	平成23年11月	福山市教育委員会指定研究事業 平成23年度福山市立東中学校公開教育研究会 平成23年11月4日	論理的思考力を育成するためには、「『WHY』『HOW』を自問すること」「『質問力』を鍛えること」「関係性を理解して解釈すること」「因果関係・脈絡・つながりに着目させること」等が重要であることを解説した。具体的な指導事例として、当日の公開授業（国語、数学、理科、社会、英語、技術家庭、音楽等）を多数取り上げた。
(13) 習得・活用・探求型の授業を創造する	－	平成23年12月	三田市教育委員会指定研究事業 平成23年度三田市立本庄小学校公開研究発表会 平成23年12月2日	平成20年度版学習指導要領・新国語科における「言語活動の充実」をふまえ、「習得・活用・探求」活動の意義とその具体化の視点について詳細に解説した。具体的な指導事例として、当日の公開授業（国語、算数、社会、音楽、総合学習等）を多数取り上げた。また、デジタル教科書の活用方法等、ICTによる授業改善の可能性にも言及した。
(14) 国語科指導力向上に向けて	－	平成24年7月	奈良市教育センター主催「国語科教育研修講座」 平成24年7月27日	平成20年度版学習指導要領の要である「言語活動の充実」は、学習意欲をもって基礎的・基本的な知識・技能を習得しつつ、習得した知識・技能を活用して思考力・判断力・表現力等を育成することに主眼があることを、具体的な実践事例を示しながら解説した。言葉の力を培う国語教室を実現するためには、(1)年間指導計画の構築、(2)相互評価活動の活性化、(3)「言葉の力」のメタ認知の場の設定が重要となることを強調した。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
「ワークショップ講師」				
(1)「PISA型読解力の授業づくり」	－	平成19年8月	第70回日本国語教育学会全国大会 平成19年8月7日	6年生文学教材「ヒロシマのうた」「桃花片」を素材として，PISA型「読解力」の具体化への観点とその実例を示した。確かな国語力育成を目ざす授業の工夫改善の視点として，年間指導計画の重要性，学級内外他者同士におけるコミュニケーション活動の活性化，自己評価活動の質の向上を促す学級経営の成立と教師の支援のあり方について具体的に解説した。
(2)「PISA型読解力の授業づくり」	－	平成20年8月	第71回日本国語教育学会全国大会 平成20年8月5日	5年生文学教材「大造じいさんとがん」を例に，PISA型「読解力」の具体化への観点とその実例を示した。併せて，確かな国語力育成を目ざす授業の工夫改善の視点として，年間指導計画の重要性，学級内外他者同士におけるコミュニケーション活動の活性化，自己評価活動の質の向上を促す学級経営の成立と教師の支援のあり方について具体的に解説した。
(3)「PISA型読解力の授業づくり」	－	平成21年8月	第72回日本国語教育学会全国大会 平成21年8月4日	2008年度全国学力調査問題Ｂ問題を例に、PISA型「読解力」の求める国語力と新学習指導要領・新国語科が果たすべき言語力との関連について解説を行った。新国語科にもとづく実践事例として、小学校高学年における「作品紹介活動」を示し、学習指導の工夫改善のポイントと、その際必要不可欠となる指導技術について詳細に解説した。
(4)「PISA型読解力の授業づくり」	－	平成22年8月	第73回日本国語教育学会全国大会 平成22年8月10日	2009年度全国学力調査問題Ｂ問題を例に、PISA型「読解力」の求める国語力と新学習指導要領・新国語科が果たすべき言語力との関連について解説を行った。新国語科にもとづく実践事例として、小学校低学年における「絵本紹介活動」を示し、「論理の接続詞」を活用した絵本紹介の仕方とその意義について詳細に解説した。
(5)「思考力・判断力・表現力等の育成と授業づくり」	－	平成23年8月	第74回日本国語教育学会全国大会 平成23年8月9日	平成20年版学習指導要領国語科の重要実践課題である「思考力・判断力・表現力の育成」に向け、論理的な思考を促し、強化する必要性を示した。具体例として、絵本紹介(小学校1年)における理由を組み立てさせる接続詞の活用事例、「どうぶつの赤ちゃん」(光村1年)における読解のキーワードを用いた表現活動の成果を取り上げた。「言語活動の充実」には、活動だけではなく適切な評価が必要であることを強調した。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
(6)「『自分の考え』」を表現できる授業づくり」	―	平成24年8月	第75回日本国語教育学会全国大会 平成24年8月7日	「たんぽぽ」(東書2年)、「たんぽぽのちえ」(光村2年)を用いて、形式段落に区切る演習を行い、段落の区切りの理由を明らかにすることが段落相互の関係の理解を深めることを解説した。題名の重要性など、既習の学びを活かして、意図的に学習を組み立てていくことなど、自分の考えを表現するには、基礎的・基本的な学びのステップが必要であり、意図的・目的的な既習の学びの連続性が、明確な「自分の考え」を生み出すことを強調した。
(7)「既習の学び・記述力を生かす国語科授業づくり（小学校）」	―	平成25年8月	第76回日本国語教育学会全国大会 平成25年8月6日	「自然のかくし絵」(東書3年)を用いて、段落相互の関係をふまえた筆者の「書き方の工夫」を探る演習を行い、説明文における記述方法の特徴をとらえる学習の必要性について解説した。「書き方の工夫」については、「具体例」「問いと答え」「写真や絵」「説明の順序」「つなぎ言葉」などの学習者に馴染みやすい用語で整理することによって、説明文の読解学習だけではなく、既習の学びを活かして「説明文を書く」活動にも転用できること、さらに「自分の考え」を表現する多様な学習へとつながっていくことを強調した。
(8)「自分の考えをもって伝え合う授業づくり ―『発問研究』と『教材研究』とを中心に ―」	―	平成26年8月	第77回日本国語教育学会全国大会 平成26年8月9日	「スイミー」(光村1年)、「名前を見てちょうだい」(東書2年)、「一つの花」(光村・東書4年)を用いて、作品の構造的理解を支えるワークシート例を示し、作品の特質と主題を捉える演習を行い、物語教材における指導方法の工夫改善の方略について解説した。思考力・判断力・表現力等を育成するためには、意欲的に考え判断し表現できる「発問研究」と「教材研究」、その実現のための「場面と時間」の確保が必要であることを強調した。
(9)「『確かな学力』を育成する国語授業づくり（小） ―『発問研究』と『教材研究』とを中心に―」	―	平成27年8月	第78回日本国語教育学会全国大会 平成27年8月1日	「ごんぎつね」「海のいのち」を用いて、「本時の学習指導案」等の点検・見直しや、指導事項を習得・活用するための「発問研究」と「教材研究」に関する演習を行った。 学校教育法で規定された①学習意欲をもって②基礎的・基本的な知識・技能を習得しつつ、この知識・技能を活用して③思考力・判断力・表現力等から構成される「確かな学力」の育成を目ざす日々の国語授業づくりの重要性を強調した。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
(10)「『確かな学力』を育成する国語授業づくり（小）－「『アクティブ・ラーニング』の発想を生かすー」	－	平成28年7月	第79回日本国語教育学会全国大会 平成28年7月31日	「アクティブ・ラーニング」（以下ＡＬ）を特定の型として歪曲化せずに、その本質や発想を踏まえた学習方法の工夫を行い授業実践に位置づけることを目的に、「海のいのち」や「ごんぎつね」をもとに、教材研究の重要性を具体的に示した。 ＡＬの発想を生かす授業の質は「言語活動の充実」と連動しており、思考力の深化･拡充を保障するためには、「より深くわかること」「よりうまくできること」「多様な情報を論理的に評価・分析すること」等が不可欠であることを演習によつて明らかにした。ＡＬの本質や発想を踏まえた学習方法の工夫は、「言語活動の充実」や「深い」教材研究なしには実現できないことを強調した。
「研修会講師」				
(1)「実践者と研究者のコラボレーションによる国語科授業づくりセミナー －授業びらき・授業つなぎ・授業おさめー 」	－	平成19年8月	兵庫教育大学主催の研修講座講師 平成19年8月23，24日	実践事例として，1年生への年間を通した作文指導，絵本等の紹介活動を中核とする読書指導などを示しつつ，授業実践における「意味・価値」を解説し，個々の教師が，確かで豊かな国語授業を自らの実践において生み出すための示唆を与えた。
(2)「言語活動の充実」と国語科年間指導計画への期待	－	平成22年8月	平成22年度環太平洋大学教員免許状更新講習 平成22年8月26日	平成20年度版学習指導要領・新国語科における「言語活動の充実」をふまえ、新国語科に対応する国語教室を実現するために必要な工夫改善のポイントとして「①年間指導計画」「②いいところ見つけ(交流活動)」「③『言葉の力』のメタ認知」の３点を示し、その具体化について解説した。実践事例として、「読むこと」領域の年間を通した「本の紹介活動」を取り上げた。
(3)「言語活動の充実」と「国語科」	－	平成23年8月	平成23年度環太平洋大学教員免許状更新講習 平成23年8月25日	平成20年度版学習指導要領・新国語科における「言語活動の充実」をふまえ、新国語科に対応する国語教室を実現するために必要な工夫改善のポイントとして「①年間指導計画」「②いいところ見つけ(交流活動)」「③『言葉の力』のメタ認知」の３点を示し、その具体化について解説した。実践化への具体的提案として、平成23年本小学校国語科教科書から、各領域ごとに代表的な単元を取り上げた。また、デジタル教科書の活用方法等、ICTによる授業改善の可能性にも言及した。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
(4)「言語活動の充実」と各学校への期待	ー	平成24年8月	平成24年度環太平洋大学教員免許状更新講習 平成24年8月23日	平成20年度版学習指導要領・新国語科における「言語活動の充実」をふまえ、新国語科に対応する国語教室を実現するために必要な工夫改善のポイントとして「①年間指導計画」「②いいところ見つけ(交流活動)」「③『言葉の力』のメタ認知」の３点を示し、その具体化について解説した。各学校が抱える指導時数の不足感をふまえ、実践化への具体的提案として、平成23年本小学校国語科教科書から、各領域ごとに代表的な単元を取り上げ、特に「①年間指導計画」の重要性を強調した。また、デジタル教科書の活用方法等、ICTによる授業改善の可能性にも言及した。
(5)学力向上や子どもたちの言語力の向上のために	ー	平成25年2月	奈良市教育委員会主催「ならの子ども学力向上プロジェクト事業」教育フォーラム　指導法改善研究部会(授業開発国語部会)の報告に関わる総括指導助言 平成25年2月22日	奈良市独自の学力・学習状況調査の調査結果分析結果をふまえた公開授業の成果を報告する教育フォーラムにおいて総括指導助言を行った。「子どもの学習の課題を解決するための授業の進め方」「小学校と中学校の学びの連続・連携のあり方」について、公開授業の成果の価値を明らかにし、今後の課題を示した。学力向上や子どもたちの言語力の向上のためには、教科書に閉じこもりがちな学習を見直し、実の場を活用した学習が有効となること、日常生活に資する言語力を培うためには、いかに広く多様な情報源に向かわせるか、言語環境の整備、多様な言語情報への目配りが大切であることを強調した。
「シンポジウム」				
(1)シンポジウム分科会「国語教育」最優秀賞受賞者・実践成果報告	ー	平成23年6月	読売新聞社主催・読売教育賞第60回記念シンポジウム分科会 平成23年6月4日	第57回読売教育賞国語教育部門最優秀賞実践「情報活用力としての『書く力』をたかめるー読み書きシートの徹底活用ー」について、実践の概要と特質について報告し、参会者との意見交流を行った。
(2) 言葉の力を活用する言語活動と国語科授業づくり ー小、中学校との連携を視野にー	ー	平成24年8月	公益財団法人 中央教育研究所、特定非営利活動法人 日本語検定委員会 主催 第1回「ことばの力」育成シンポジウム in千葉 報告者並びにパネルディスカッション・パネリスト 平成24年8月25日	報告では、「言葉の力」を活用する国語科授業づくりにおいては、「既習の学びを可視化し活用する言語活動が求められること」「既習の学びの積み重ねと積み上げには年間指導計画が重要であること」を、「たんぽぽ」(東書2年)「たんぽぽのちえ」(光村2年)の実践事例をもとに提言した。シンポジウムにおいては、「言葉の力」の習得と活用を小学校と中学校とが連携して行う必要があることを強調した。

教　育　研　究　業　績　書

平成　29　年　3　月　31　日

氏名　　金山　憲正

研究分野	研究内容のキーワード
算数科教育法	算数科における指導内容に関する研究 問題解決学習の指導過程に関する研究 指導方法に関する研究

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例		
1．Flash および GIF で作成した自作のアニメーション等の ICT を使用した問題意識の醸成と解決に向けての指導助言のあり方とその実践方法	平成16年4月 ～ 平成20年3月	大阪教育大学教育学部小学校教員養成５年課程において「算数科指導法」の授業を担当。自作のアニメーション等の ICT を使って、主体的な解決活動の原動力となる問題意識を醸成することの重要性とそのための場とものをどう設定していくかについて理解させることをねらって講義した。また、GIF 形式でのアニメーションの作成方法と効果的な使用方法についても指導。問題意識を持たせることの重要性を理解し、GIF 形式のアニメーションは全員が作成できるようになった。 （大阪教育大学教育学部非常勤講師としての実践）
2．マルチメディアを使った問題解決場面における見通しを持たせるための適切な助言のあり方と問題解決型の授業の実践方法	平成19年4月 ～ 平成26年3月	近畿大学附属小学校と幼稚園の全教員に対して、VIDEO と PowerPoint での吹き出しの動画を主としたマルチメディアを活用して吹き出しの形で提示する方法で、毎月の研修会において「問題解決型の授業を取り入れるねらい」「基本的な学習段階」「課題の吟味と提示の仕方」「見通しの持たせ方」「よりよい解決に向けての集団での話し合いの場の持たせ方」などを教員の習熟度に合わせて解説を積み上げていった。また、同時に行われる公開授業を具体事例として、望ましい授業展開をするための教師の役割についての指導を行った。全教員がパワーポイントでのアニメーションを作成し、指導で効果的に活用できるようになった。 （近畿大学附属小学校での副校長としての実績）
3．ICT を活用して数や図形についてイメージを抱かせ、その基本概念の理解を深めて小学校算数指導のための教材分析が的確に行えるようにすることを狙った実践	平成26年4月 ～ 現在に至る	奈良学園大学人間教育学部人間教育学科 1 年次生の学生約 110 名に対し、算数・数学教育の教材研究の基盤を育成することをねらった「数の理解」の講義において、ICT を活用した指導を行った。特に、内包量の概念や図形概念、測量や統計などイメージすることが難しい内容や処理が煩雑になる内容についての指導の際には重点的に ICT を活用した講義を行った。グループ活動ではあるが数量や図形の概念形成の指導において効果的な ICT の活用方法を工夫し、模擬実践が行えるようにまでなった。 （奈良学園大学「数の理解」の実践）
4．アクティブラーニングの形態で学生相互が課題に対して協働学習のもと多様なアプローチで問題解決型の授業のあり方を追求していくことをねらった実践	平成27年4月 ～ 現在に至る	奈良学園大学人間教育学部人間教育学科２年次生の学生約 110 名に対し、子供が主体的に問題解決活動を推進していくための授業構成とその指導方法について、学生自身が問題意識を持って取り組み理解することをねらっての「算数科指導法」の授業を実践した。授業の環境整備として「算数科指導法」の特設ホームページを設けそこに事前課題や学生からの質問事項を記載する欄も設けリアルタイムで互いの情報が共有できるようにして授業の充実をめざした。重点教材についての授業を想定し、指導案を作成しての模擬授業の実施とそれに対する評価を行い改善案について学生間で話し合えるようになった。 （奈良学園大学「算数科指導法」の実践）

２　作成した教科書、教材		
１.「領域の内容・習熟の程度に応じた指導の工夫」【再掲】	平成18年4月 ～ 平成20年3月	大阪教育大学教育学部小学校教員養成５年課程の算数科教育法（４年生、５年生　４０名クラス）において非常勤講師として担当した授業で使用。現時点で達成度、到達度が低くても補充指導によって到達する可能性があるとの立場での指導のあり方を提起したものである。「習熟度別指導における学習の進め方の工夫」「コース設定とコースに応じた学習の展開」「効果的な情報機器の用い方」「保護者への説明」など習熟度別指導に取り組む方法とその際の留意事項についてのまとめを作成し使用した。習熟度別指導と能力別指導の違い、及び習熟度別指導のねらいについての理解を深めるために効果があった。
２.「思考力アップのための算数的活動」【再掲】	平成26年4月～ 現在に至る	奈良学園大学人間教育学部人間教育学科において1年次生110名を対象にした「数の理解」、2年次生110名を対象にした「算数科指導法」の授業で使用。算数的活動が重視される背景を学習指導要領とピアジェの心的活動説とを踏まえてどのように指導にあたるべきかを解説し、その具現に際してのポイントを具体的な事例をあげてまとめたものである。特に、「算数科指導法」授業においては具体的事例の中から数事例ずつについて取り上げアクティブラーニング方式で操作的活動についての理解を深めるねらいで効果的に使用し、そのねらいを達成できている。
３.「活用を重視した算数科の授業」【再掲】	平成26年4月～ 現在に至る	奈良学園大学人間教育学部人間教育学科において1年次生110名を対象にした「数の理解」の授業で使用。ここでは自己効力感、成功感を味わわせる反省的思考活動を工夫改善するためにポイントとなる単元間の関連性と発展性を理解させるとともに教材分析の重要性とそれを的確に行うことができる資質を養うことを意図してざして作成したものであり、授業のねらいと対応させ随所で使用した。知識・技能などは活用を通して定着し、定着した知識・技能などから活用できそうなものを見つける学習活動の重要性に気づかせるために効果が上がっている。
４.「学力調査結果を授業改善に生かす取り組み」【再掲】	平成27年4月 ～ 現在に至る	奈良学園大学人間教育学部人間教育学科において２年次生110名を対象にした「算数科指導法」の授業で使用。指導と評価は一体のものであり、児童の学力向上を確実とするためには的確に児童の実態を把握することが大前提になり、そのための学力調査をいかにおこなえば良いかについてまとめたものである。授業では主に「問題作成の心構え」「観点評価項目の設定」など問題作成に関する留意事項と結果処理の流れや活用法に関する留意事項を理解させる際に使用し、授業のねらい達成に向けて効果に活用できている。
５.「算数嫌いをつくらない授業」【再掲】	平成27年4月 ～ 現在に至る	奈良学園大学人間教育学部人間教育学科において２年次生110名を対象にした「算数科指導法」の授業で使用。算数の学習につての児童アンケート結果における「好き」と「嫌い」の理由を分析することから、授業法の問題点を探りより望ましい授業展開を考えさせる授業場面で使用した。また、「好き」「嫌い」を左右する心情面を重視した授業作りとともに、協働学習の土俵となる学級作りやコミュニティ作りの重要性についての理解を図る授業においても使用した。授業を通してコミュニケーション能力を高めていくための環境作りや展開の工夫などに着目して指導案を作成できるようになってきた。

６．思考力・判断力・表現力を育成する算数授業【再掲】	平成 27 年 4 月 ～ 現在に至る	奈良学園大学人間教育学部人間教育学科において２年次生 110 名を対象にした「算数科指導法」の授業で使用。思考力・判断力・表現力を育成する算数授業の創造に向けて、その推進力となる学習意欲に着目して主体的な活動が保障される授業展開のあり方をまとめたものである。授業では指導内容の系統性を踏まえるとともに発達心理学面も考慮に入れた「～らしさ」の活動の様相を想定した授業展開を心がけることが主体的な解決活動を展開していくことになることに気づかせ、それを意識した模擬授業の指導案作成の際に使用して参考にさせた。本教材を使用することにより、指導内容面と発達心理学的な面との両面から授業を創造していこうとする姿勢が見られるようになっている。
７．思考力・判断力・表現力を育成する算数授業の参考指導案集 （算数科ホームページ） 奈良学園大学人間教育学部発行	平成 27 年 4 月	奈良学園大学人間教育学部人間教育学科において２年次生 110 名を対象にした「算数科指導法」の授業で使用。思考力・判断力・表現力を育成する授業の創造に向けて、様々な授業展開のあり方をまとめたものである。主体的な解決活動の展開を意識した授業指導案作成の際の参考にさせた。 このように指導を受けて作成された指導案は「算数科」専用ホームページに掲載され、いつでもどこからでも参考資料として使用することができ、特に教育実習中の学生に好評だった。
３　教育上の能力に関する大学等の評価		
１．近畿大学学長による評価	平成 23 年 3 月 14 日	近畿大学附属小学校副校長として独自の附属小学校の授業観及び授業スタイルの見直し、基礎・基本の学力を育成するための指導をめざした教育改革を行った。また、習熟度別学習指導、チームティーチングによる指導、個に応じた指導のあり方などについての現職教育を行った。その結果、全国学力実態調査においても子どもの学力が著しく伸びたことから他の教育関係者や保護者からも高い評価を得るとともに、人事評価においても「A」評価を受けた。
２．奈良学園大学採用時の学長評価	平成 25 年 8 月	12 年間の公立学校校長、6 年間の近畿大学附属小学校副校長としての学校経営の経験と実績、さらには大阪市教育委員会主任指導主事、大阪市小学校教育研究会算数部部長、11 年間にわたる大阪教育大学教育学部で非常勤講師として算数教育の指導に貢献した経験と実績に対して高い評価を受けた。また、教育に対する熱意と向上心に関しても高い評価と信頼を得た。
３．奈良学園大学人間教育学部平成２６年度後期学生による授業評価	平成 27 年 2 月	1 年次生 110 名の学生が対象の「数の理解」の講義に対する授業評価アンケートでは、ICT を活用した講義の進め方に対して、「説明が分かりやすかった」91%、「先生の授業に対する熱意や意欲が感じられた」93%、「総合的に見て満足のいくものであった」92%などいずれも 90%以上の回答結果で、学生が高い満足度を感じる授業が行われていたと判断できる集計結果を得ている。
４．奈良学園大学人間教育学部平成２６年度後期学生による授業評価	平成 27 年 7 月	２年次生に対する前期の「算数科指導法」の講義について実施した学生の授業評価アンケートの結果、ホームページを活用して事前に課題を提示し、それについてアクティブラーニング形式で進めた講義に対して、「この授業に対する受講意欲は高かった」94%、「説明が分かりやすかった」92%、「先生の授業に対する熱意や意欲が感じられた」92%、「総合的に見て満足のいくものであった」92%など 90%以上の回答結果となっており、充実感があった授業と判断できる評価を得ている。

４　実務の経験を有する者についての特記事項		
１．近畿大学附属小学校副校長としての実績 ・西日本私学小学校連盟主催の研究大会の会場校として発表 （平成 23 年 5 月　参加者 1100 名）	平成 19 年 4 月 ～ 平成 25 年 3 月	近畿大学附属小学校副校長として、また、学力向上と教員の資質向上の責任者として、毎週行われる教員研修会において、教師主導の学習指導から児童主体の学習指導への転換を目指した授業創造のため解説を行った。授業作りの土台となる学級作りについて作成したテキストを使用して講話をし、グループディスカッションを取り入れ教員の資質の向上を図った。また、同キャンパスの附属幼稚園に対し、小学校を見据えた幼児期における数的な概念についても指導した。
２．２００９近畿大学公開講座　における講師 「算数で育てたい力と学校教育」 （対象：保護者及び地域住民　参加者 120 名）	平成 21 年 8 月 28 日	「問題解決型の学習の果たす役割」や「子ども自身が算数を創り出していく学習」について具体例を通して紹介した。今、日本の算数教育が目指す方向と学習指導要領改訂の背景について、そのねらいについて講演した。その中で、基礎的・基本的な知識・技能の習得と思考力・判断力の育成の関連にも触れそれぞれの重要性について解説した
３．新算数教育研究会主催・第 34 回セミナー講師 「新学習指導要領における実践上の課題」 （対象：全国の算数担当教員 400 名）	平成 21 年 12 月 25 日	教育基本法、学校教育法の改正に伴う学習指導要領の改訂の趣旨を算数科に焦点を当てて講演を行った。その中で、思考力・判断力・表現力の育成を目指した新学習指導要領の趣旨を踏まえた授業を具現する際に重要となる、「見通しを持たせるための指導順序と単元構成の工夫」「表現力を育てるためのノート指導のあり方」について具体的な事例を挙げて解説を加えた。
４．近畿大学附属幼稚園教員対象指導講座の講師 学期に 1 回、年 3 回実施 （対象：幼稚園教員及び保護者）	平成 22 年 4 月 ～ 平成 25 年 3 月	同じキャンパスにある近畿大学附属幼稚園の教員に対して小学校を見据えた幼児期の子どもに数概念や図形概念を育てる算数の基礎的指導のあり方について指導助言を継続的に行った。ゲームや遊びを通して楽しみながら数概念の素地を養ったり図形の構成要素を意識させたりする指導について具体的な例を通した演習形式で研修を行った。また、幼小接続を意識した幼稚園教育の取り組みへの理解と協力を得ることをねらって保護者へも参加を呼びかけた。
５．　２０１０近畿大学公開講座　講師 「算数科で育てなければならない力」 （対象：保護者及び地域住民　参加者 120 名）	平成 22 年 9 月 10 日	主な対象者が地域の一般市民のため、算数科で育てる力と、そのため学校ではどのように具体的な授業が行われているかを、教科書の内容を系統的に取り上げて講演した。また、幼小接続の観点から、幼稚園で学んでおくと小学校入学時の算数の学習に効果がある数概念や図形概念形成のための事例についても紹介した。
６．西日本私学連盟主催平成 23 年度研修会 講師 「ゆるみ教育からの決別－算数科の指導を例に－」 （於：近畿大学附属小学校、参加者約 1100 名）	平成 23 年 5 月 23 日	全体会において講演した。主に、新学習指導要領で目指す学力の育成するためには、教え込みの解説型の授業から脱却し問題解決型の授業へ転換する必要があることを強調した。同時に、問題解決型の授業成立には教師の深い教材研究が必要であるため、使命感を持ち教育活動に取り組む必要性も併せて強調した。
７．奈良学園大学人間教育学部人間教育学科での講義	平成 26 年 4 月 ～ 現在に至る	「数の理解」の授業では、数量や図形などの基本的な概念や基礎的な知識に対する理解を深めるとともに、算数のよさを知り、数学的思考力や判断力、表現力を養う授業づくりのための教材研究の手がかりが得られるように、ICT の活用や具体的な事例を交えて授業を進めている。特に、数学的思考力を涵養する力量と算数科の教材を開発する力量を育成することに重点を置いた講義内容である。 「基礎ゼミナールⅠ」の授業では、学生の自己表現力の育成に加えリメディアル教育を分担し、学生個々の習熟度に応じたテキスト作りと、その解説を作成している。

		「算数科指導法」では、アクティブラーニングの形態で、学生相互が課題に対して協働学習のもと多様なアプローチで問題解決型の授業のあり方を追求していく授業となっている。学習指導案作成の基本や模擬授業を通して問題提示や発問・助言のあり方についての理解を深めることをねらいとしている。
5　その他		
1．第 74 回～第 84 回 算数・数学教育研究発表会での指導での指導	平成 10 年 6 月 ～ 平成 20 年 6 月	大阪数学教育会主催の算数・数学教育研究発表会において、小学校「低・中・高学年分科会」の各分科会のうち１の分科会の指導助言を毎年務める。
2．奈良学園大学人間教育学部人間教育学科の学生に対する課外における算数・数学指導	平成 26 年 4 月 ～ 現在に至る	奈良学園大学人間教育学部人間教育学科の学生に対して、リメディアル的な取り組みが必要な学生に対しては基礎的な数学の理解をねらい課外での指導を行っている。また、希望者には採用試験対策の数学の指導も行っている。
3．大阪市立放出小学校の算数教育充実に向けての実践研究に年間を通しての指導	平成 26 年 4 月 ～ 現在に至る	校内研究会での算数指導のねらいと望ましい指導のあり方の解説と各学年の実践授業についての指導を行っている。
4．八尾市立永畑小学校の算数教育充実に向けての実践研究に年間を通しての指導	平成 27 年 4 月 ～ 現在に至る	校内研究会での算数指導のねらいと望ましい指導のあり方の解説と各学年の実践授業についての指導を行っている。
5．奈良学園小学校の算数教育充実に向けての指導と助言	平成 27 年 9 月 ～ 現在に至る	奈良学園小学校が現在「メタ認知」に着目した実践研究に対して、望ましい授業の構成の仕方や展開の工夫及び評価の生かし方などについて指導と助言を行い充実した教育活動の創造をめざしている。

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　　要
1　資格、免許		
1）小学校教諭一級普通免許 2）中学校教諭一級普通免許（数学） 3）高等学校教諭二級普通免許（数学） 4）司書教諭	昭和 46 年 4 月 昭和 46 年 4 月 昭和 46 年 4 月 昭和 46 年 1 月	昭和 46 小一普第１６０号（大阪府教育委員会） 昭和 46 中一普第１２２８号（大阪府教育委員会） 昭和 46 高二普第３２８号（大阪府教育委員会） 昭和 46 年 12 月 1 日　第４９９５６号（文部省）
2　特許等		
な　　し		
3　実務の経験を有する者についての特記事項		
2．近畿大学附属小学校 副校長	平成 19 年 4 月 ～ 平成 25 年 3 月	近畿大学附属小学校には、「児童の算数の学力向上を達成させること」と「教員の資質を向上させること」が主たる使命での赴任であった。まず、教員研修の充実と共に研究・教員組織の改革を提起し、大改革を実施した。 具体的な改革の内容は、「高学年への教科担任制の導入」「第 3 学年から第 6 学年までの算数科はチームティーチングでの指導体制の導入」「教員全員が自分の専門教科を定めその教科の研修を深める研究体制の導入」などである。 特に、教え込み教育から脱却し、問題解決型の授業へと質の転換を図ってきた。結果、全国学力状況調査では、国語・算数のＡ・Ｂ問題とも全国平均を 10 ポイント以上上まわった。 教職経験８年未満の教員に対しては、別に「若手研修」と名付けて、「学級経営のあり方」「保護者との対応のあり方」「事故の対処の方法」「学級内で起きたトラブルへの対応法」など、具体的な事例を想定して考えさせるなどの研修を行った。

４　その他		
１）奈良学園大学　ＦＤ委員会　委員長	平成26年4月 ～ 平成28年3月	ＦＤ委員長としてこれまで実施されてきた事業を見直し本学のＦＤに対する取り組みの改善を図った。特に、これまで前期・後期と年２回実施の「学生の授業評価アンケート」事業において、「調査用紙の作成・集計・分析」の外部業者への委託を止め、内部処理をする方針に変更した。その道筋をつくるため、「マークシート用紙の作成」「マークシートの読み取り」「読み取り結果を集計・分析するためのプログラム作成」「集計・分析結果をまとめて図表に表すためのプログラム作成」「各授業担当者への集計結果の通知と自己評価の記入依頼」「全ての集計結果をPDF形式にまとめてホームページにアップ」の一連の作業を委員長として全て一人で作成・処理している。評価対象は約130講義でアンケート用紙枚数は約3000枚になるが、実施から集計・まとめまでに要す る時間は業者委託に比べ半分の期間で処理できているため、本学のホームページへのアップもタイムリーに行っている。 また、教員が互いの授業参観を通して指導力を高めるための「公開授業」事業では、他学部の授業参観も可として学部間における閉鎖性の払拭をめざしている。あと「授業改善シート」「FD講演会」事業についても改善・充実の方向で実施している。
２）奈良学園大学　教職センター委員	平成26年4月 ～ 平成29年3月	２年次生が対象となる「介護等体験」に関する取り組みの企画・立案を行っている。また、来年度から始まる「教育実習」関連では、2年次生を対象に実習受け入れの依頼の手続きについて全体への指導とあわせて個別への指導も行っている。 教員採用に向けて基礎的学力の定着を保障するために設けられている「教師塾」について、その効果的な運用方法について企画・立案と運営に関わっている。
３）奈良学園大学　入試委員会　委員長	平成28年4月 ～ 現在に至る	本学園のAO入試・公募制推薦入試・一般入試・大学入試センター試験利用入試の各入試に関する入試業務が厳正に執り行われる為の体制の整備と準備に 計画的に取り組んでいる。開学からの入試データを分析し今後の望ましい入試業務についての改善案を作成している。また、大学入試センター試験会場としての準備、実施等の運営管理にも取り組んでいる。

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（著書）				
１.活用力を育てる！算数授業プラン&ワークシート	共著	平成21年4月	明治図書	低・中・高学年編の３冊で構成され、４つの活用力を育てるワークシートと授業を実践する際に参考となる展開例を提案。 Ｂ５版　全１３６頁（３冊） 編者：金本良道 共著者：一ノ瀬喜子、吉田博、岩崎浩、笠置道宏、赤沢マキ、金山憲正、松岡克典、岸田初美、森洋子、中井美貴子、森本明、野津吉宏、植村徳治、谷口孝臣他３０名 本人担当部分：低学年編では第１学年「大きい数」（P42～P45）のうち「この授業で育てたい活用力」の項を単著。 中学年編では第３学年「重さ」第４学年「分数」（P84～P87）の事例について、また、高学年編では第６学年「立体の体積」（P108～P111）の事例について「この授業で育てたい活用力」の項を単著。 「大きい数」では、具体物を数えた個数を「何十といくつ」と表したことから類推させて、数の仕組みと表現のよさに気づかせる指導を提案。「重さ」では、長さ、体積、重さの単位のそれぞれに共通する関係や類似性を見いだし、見いだした関係や類似性から新たな単位を予想する活動を取り入れた指導について提案。「分数」では、和が１より大きくなる同分母分数の加法の計算の仕方を図や数直線を用いたり、単位の考えを基にしたりして考える活動を取り入れた「見通しを持ち筋道立てて考える力」を育てる指導について提案。「立体の体積」では図形の面積の求め方で学習した等積変形や倍積変形の考え方を活用して、角柱や円柱の体積を求めたり、ICTを用いて説明したりする活動を取り入れた指導について提案している。
２.「小学算数」（教師用指導書研究編）	共著	平成23年4月	日本文教出版	全学年を通した体系に重点を置いて、各領域別の系統的な解説とその数学的背景を明らかにするとともに、新しい指導方法、数学的考え方とその指導、ICTの活用など現在の算数教育における主要な問題点について示す。 Ａ４判　全２８６頁 編者：日本文教出版社編集部 共著者：小山正孝、中原忠男、金山憲正、重松敬一、﨑谷真也、狭間節子 本人担当部分：「総論」（P2～P12）を単著 「確かな学力の向上を目指した算数科の学習指導」の章では、算数の学習指導の基本的な考え方として、ブルームの教授理論に基づいて「基礎的・基本的　な知識・技能の習得と活用」「思考力・表現力の育成」について解説している。また、「確かな学力が身につく算数の学習指導」の章も前章同様に「問題解決型学習の意義」「算数の学び方の指導」「表現力の育成」「学習意欲の向上」など新学習指導要領のめざしている学力と育成のための留意点を述べている。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				また、幼児期に経験した概念形成の過程を踏まえて指導に当たることが不可欠な小学校低学年の指導について、幼小の連携を図ることの必要性を強調し、ピアジェの認知発達理論を参考にした幼児期の児童の発達段階に即した指導形態についても解説している。
3.教育フォーラム 50「やる気」を引き出す・「やる気」を育てる	共著	平成 24 年 8 月	金子書房	教師が子どもの「やる気」を引き出し、育てるための方策を、国語・算数・体育・総合的な学習の時間などとの教科の関わり、教材・校内研究の取り組みなどを考察、提案する。大前提となる教師自身の「やる気」についても論じる。 Ａ５判　全１７９頁 編者：梶田叡一 共著者：梶田叡一、加藤明、松田智子、善野八千子、金山憲正、勝見健史、久田孝、錦織彰、住本克彦、野田健司、中田正浩、前田洋一、中村哲、瀧明知惠子、浅田匡 本人担当部分：「子どもの〈やる気〉が出る算数授業のために」（P47～P57）を単著 知識及び技能の定着を確かなものにしたり思考力・判断力などの能力を育成したりする際の大前提となる主体的な学習活動は子どもの「やる気」が推進力となって推進されるものである。ブルーム理論で強調される認知領域の目標に情意領域の目標と指導方法の工夫を加え、「やる気」を引き出しそれが推進力となって展開する指導についての理論と方策を具体的な実践事例を通して紹介している。また、幼稚園児の数概念を育てる上での着眼点や留意点について解説を加えている。さらに、「やる気」を育てる上で重要な役割を果たす個が認められる集団づくりのポイントについても紹介している。
4.思考力アップのための算数的活動	単著	平成 25 年 1 月	株式会社ＥＲＰ	算数的活動を重視した学習展開が強調されている背景を学校教育法及び学習指導要領の改訂のねらいとピアジェの心的活動説を踏まえて解説するとともに、算数的活動をどう理解して指導にあたるべきかを明らかにした。主にmanipulationに近いものを指す具体的操作活動をはじめ、マッハが提唱している思考実験にも相当する「内的な活動」の効果的な取り入れ方、さらにはModel-makingの過程の踏ませ方について具体的な教材を取り上げて紹介している。 Ａ５版　全６８頁
5.教育フォーラム 54 各教科の学習を支える言語活動－言葉の力をどう用いるか	共著	平成 26 年 8 月	金子書房	新しい学習指導要領で強調されている「知的な力」、「確かな学力」を育てていく土台となる「言葉の力」をどう捉え、どう活用することが各教科の学習の充実につながるのかを考察し、その指導のあり方を提案している。 Ａ５判　全１７９頁 編者：梶田叡一 共著者：梶田叡一、加藤明、松田智子、善野八千子、金山憲正、金澤孝夫、阿部秀高、桜本明美、大畑健実、川俣徹、蔵あすか、 本人担当部分：「算数の授業に言語活動を生かす」（P47～P57）を単著

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				思考は、言語を媒介とする自己内の対話によって成立し、他者に向けて表現したり他者の表現内容を受け入れたりする活動を通して整理され、洗練されたり深められたりする。したがって考える力は表現する力を抜きにしては考えられない。数学的な表現様式については、ブルーナの EIS 理論が基盤となって「現実的表現」「操作的表現」「図的表現」「言語的表現」「記号的表現」の五つに分類されることがある。算数科の指導においては「言葉の力」を「言語的表現」のみに限定せず、「現実的表現」から「記号的表現」にいたる全てを「算数のことば」ととらえて指導にあたることの必要性を強調した内容である。
6.人間教育を視点にした教職入門 第6章 教員の仕事 第9章 教育実習の意義と心得	共著	平成 26 年 12 月	大学教育出版	激動する社会、急変する教育界の中で、次世代の社会を担い、自律して問題解決能力を持つ子どもを育てることのできる資質・能力を身につけ、地球的視野から持続可能な社会の発展と構築に貢献する教師の心構え、あり方などについて、人間教育を視点にして述べている。 Ａ５判　全２８０頁 編者：中田正浩 共著者：中田正浩、鎌田首次郎、松田智子、中田律子、金山憲正、瀧明知恵子、長井勘治、太田雄久、 本人担当部分：「小学校教員の仕事」（P110～P120）を単著 「生きる力」を育てることを目指して各学校が掲げている教育目標達成に向けて教師が努力していかなければならないことを、「教科等の指導に関わる仕事」「生活指導の関わる仕事」「校務分掌として位置づけられた仕事」のそれぞれについて解説している。 本人担当部分：「教育実習の意義と心得」（P235～P253）を単著 教育実習は、教師として教壇に立っときの心構えや必要となる指導技術などについて事例を挙げて解説している。また、教育実習での経験は、将来の教師として自己のあり方を厳しく問い、教職に向けての真剣な学びを始める契機となるため、教育実習への参加には、日常の講義に出席する際の心構えとは全く異なる性質の決意が求められることの理解を図ることをねらって説いている。
7．教育フォーラム 57 PISA 型学力を育てる	共著	平成 27 年 2 月	金子書房	近年のような社会環境の変化の激しい時代にあっては、子どもたちは全く新しい事態や問題に次々に直面する。それらを解決する力をどう育てられるか、原理的な面、大学入試に関わる面、各教科の授業改革の面から論じ具体的実践的な提案をしている。 Ａ５判　全１５８頁 編者：梶田叡一 共著者：梶田叡一、立田首治郎慶裕、西辻正副、鎌田首治朗、清水静海、角屋重樹、岩田一彦、渡部久美子、鵜飼洋子、金山憲正、佐藤雄一、松田智子、高木悠哉、井上信子 本人担当部分：「算数Ｂ問題が解ける力を育てる」（P95～P105）を単著

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				活用力が問われるＢ問題を解く力を育てるためには、旧態依然とした指導者中心の教え込み指導から脱却し、子どもが主体的に学習活動に取り組む授業を通して、活用で使う道具となる知識・技能を身につけさせることの重要性について論じている。つまり、どれだけ身についていること以上にどのようにして身についたのかに力点を置いた授業づくりをめざす必要がある。そのための授業法として、ポリアの提唱した問題解決の 4 段階の重要なステップを基本とし、各段階における指導の充実を図ることが思考力、判断力、表現力の育成につながることを算数科の指導を例に挙げて述べている。
８．教育フォーラム 59 対話的な学び	共著	平成 29 年 2 月	金子書房	「主体的な学習」と密接な関係にある「対話」を教育活動に取り入れることは、教師にとって今後の大きな課題のひとつである。積極的に「対話」を用いることで「深い学び」を得るためにはどうしたらよいか。どのようなことに注意し、どのように授業を展開していけばよいのか。多面的な視点から、具体的かつ実践的な提案をしている。 Ａ５判　全１６９頁 編者：梶田叡一 共著者：梶田叡一、弓峯裕、鎌田首治朗、伊崎一夫、金山憲正、菅井啓之、後藤沙貴、北俊夫、赤堀博行、善野八千子、牧田秀昭、五百住満、中村豊、石森広美、オチャンテ村井、、井上信子 本人担当部分：「対話的学びを組み込んだ算数学習のために」（P47～P57）を単著 本人担当部分：「対話的学びを組み込んだ算数学習のために」（P47～P57）を単著 「対話的な学び」の「対話」が、指示されたから始めるという受け身的な「対話」ではなく、興味や知的な好奇心などの心情面に支えられた問題意識の醸成につながる「対話」やじこの考えを確かめたり深めたりする必要を感じて始める「対話」でなければ、目的としている主体的能動的な学習を重質させることは難しい。そこで求められる指導者の自動理解と教材研究の重要性とその方法を具体的な例を通して説いている。
㈜学術論文）				
1．今なぜ問題解決が重視されるのか	単著	平成 20 年 2 月	近畿大学附属小学校 平成 19 年度研究紀要 P4 ～ P10	学習指導要領が新しくなり、思考力、判断力、表現力の育成が求められている今、旧態依然とした指導者中心の教え込み指導から脱却し、子どもが主体的に学習活動に取り組む授業をめざす必要性のあることを論じている。そのためには、ポリアの提唱した問題解決の 4 段階の重要なステップを基本とし、各段階における指導の充実を図ることが思考力、判断力、表現力の育成につながることを算数科の指導を例に挙げて述べている。その基本方針に従って、全校どの学年、クラスにおいても同じ学習形態で授業を進めることの重要性についても強調している。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
２.確かな学力を育てる言語活動	単著	平成 21 年 2 月	近畿大学附属小学校 平成 19 年度研究紀要 P6 ～ P13	ブルームらによる「教育目標のタキソノミー」に見られる認知的諸能力の基本カテゴリーを参考に平素の授業を振り返り、「自己内対話」とその基盤として不可欠な「言葉の力（言語能力）」育成の重要性を強調している。各教科における言語活動をどうとらえ、授業にどのように生かしていくことが確かな学力を育成することになるのか算数科を例にあげて論じている。また、授業の中での書く力とコミュニケーション能力の育成の必要性についても論じている。
３.新学習指導要領における実践上の課題 －活用する力を育む場づくり－	単著	平成 22 年 3 月	新算数教育研究会 新しい算数教育 No.470	学校教育法30条の２に基礎的･基本的な知識･技能を習得し，それを活用して思考力、判断力、判断力を育成する旨のことが明示されている。つまり、思考力、判断力、表現力を育成する重要なポイントとなる「活用」に焦点を当てた授業づくりを心がけることが「生きる力」を育てていく上で不可欠であることを述べ、その指導のあり方を提案している。充実の着眼点として「既習の学習内容を活かす単元構成の工夫」,「算数のおもしろさ， よさに触れさせる指導」,「学習ノートの充実」の 3 点を挙げ、具体的な実践例を通して活用する力を育む場づくりについて論じている。
４.活用を重視した算数科の授業	単著	平成 23 年 5 月	日本教育総合研究所 教育ＰＲＯ　No.18 P12～P15	DeSeCoによれば､PISA学力調査の｢読解力リテラシー｣｢数学的リテラシー｣は､社会･文化的､技術的ツールを相互作用的に活用する能力｣カテゴリーのうち､｢言葉､シンボル､テクストを相互作用的に活用する力｣に関わると言っている｡算数科の学習で習得する知識･技能は､これに関わるキー能力である｡この能力を育成するため､自己効力感､成功感を味わわせる反省的思考活動を工夫改善し､「習得教育」「活用教育」「探求教育」を統合的にとらえ、習得と探求を活用でつなぐ算数教育のあり方を提案した論文である。
５．ゆるみ教育からの決別	単著	平成 24 年 2 月	日本私立小学校連合会 平成 23 年度 研究集録	改訂された学習指導要領をもとに、学校教育現場が目指さなければならない指導のあり方を算数科に焦点をあてて提言している。学習指導要領の総則及び内容を分析し、総則で各教科の指導に当たり問題解決的な学習の重視が述べられ、特に算数科では算数的活動が内容に明示されていることから、これまでの指導の取り組みが十分でなかった点を指摘すると共に､改善策について論じている｡指導内容に算数的活動という指導方法に関することが記述されたのは教師としてその力量が問われているとの危機感を持つ必要があることを訴えている。学習指導要領のねらいを達成するための授業づくりの観点を例示し教材研究への取り組む重要性を述べた論文である。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
6.思考力アップのための算数的活動	単著	平成25年4月	日本教育総合研究所 教育ＰＲＯ　No.9 P22～P25	本論文は、まず算数的活動の概念規定を行い、学習指導要領に置いて重視されることとなった背景とねらいをこれまでの算数教育の取り組みの歴史から分析している。さらに、子供をある思考状態に自由に引き入れ、狙った陶冶部分を鍛錬する状況を作り上げる際に重要な働きをする「気づく」「気づかせる」に着目したゲシュタルト心理学の考え方も念頭に算数的活動を分析し、各単元における効果的な算数的活動の位置づけを明らかにした。
7.思考力アップのための算数的活動(2)	単著	平成25年5月	日本教育総合研究所 教育ＰＲＯ　No.10 P12～P15	学習指導要領において算数的活動は作業的・体験的な活動など身体や具体物を用いる活動に限らないとされている。本論文では、算数的活動のなかでも内的な活動について焦点を当て、マッハ氏や篠原助市氏の「教授原論」で提唱されている思考実験の論を参考に、現在の算数教育において思考実験が重視される背景と意義を分析し、思考実験を伴う学習指導の改善に向けて指導のねらいと留意事項について具体的実践を通して明らかにした。
8.算数嫌いをつくらない授業	単著	平成 25 年11月	日本教育総合研究所 教育ＰＲＯ　No.26 P9～P13	学習についての児童アンケートで算数の授業が「きらい」と答えた児童の理由の分析結果で、授業の進め方に起因していると考えられるものがかなりの割合を占めていた。つまり授業において充実感や達成感を十分に味わえないため「きらい」となる実態が明らかになった。「すき」と「きらい」のそれぞれの割合が多い調査校における授業の実態を対比し、解説型から問題解決型の授業スタイルへの転換を図り、満足度の高い授業を創造する必要性を明らかにした論文である。
9.思考力・判断力・表現力を育成する算数授業	単著	平成26年9月	奈良学園大学研究紀要 第1集 p37～p46	思考力・判断力・表現力を育成する算数授業の創造に向けて、その推進力となる情意面に着目し、主体的な活動が保障される授業展開を追究した。ポリア提唱の問題解決型の授業展開を基本にしながら発達心理学面から低・中・高学年らしい活動の様相を想定し、その発達の段階にふさわしい活動を呼び起こす学習意欲が連続・発展するような単元構成及び1時間の学習活動の構成について具体的な実践事例を通して検証したものである。
10.思考力を養う操作活動	単著	平成 26 年10月	日本教育総合研究所 教育ＰＲＯ　特集号 P34～P37	操作を生かした学習活動は、ペスタロッチ、デューイ、ブルーナなどによって古くから重視されている。また、操作をピアジェは一貫した構造的体系をもった心的活動として述べている。本論文では、これらの学説の対比及び算数科の指導内容を分析し、算数指導における操作活動をどう捉えるのかを明らかにした。さらに、具体的な指導場面でどのような操作活動を取り入れることが思考力を育成することになるのかまた、その指導に際しての留意点について具体的な実践を通して検証したものである。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
11. 生きる力を育てる算数指導 （査読付き）	単著	平成 27 年 4 月	人間教育研究協議会 紀要「人間教育学研究」 第 2 号 p 71～ p 80	生きる力を育成するために算数教育が担う役割は何かを明確にするとともに、算数教育のねらいで重視されている「思考力・判断力・表現力」を分析し、どのような授業を創造していくことがそれらの力を育てることになるのかの検討を加えた。本論文では、「思考」と「表現」は互恵的な関係であるととらえ、それらが相乗的に作用し合ってよりよいものを作り上げていく授業づくりをめざして、ポリアの提唱している問題解決型の指導過程を取り入れた効果的な指導のあり方について実践事例を通して考察したものである。
12. エクセル関数でのプログラミングとICT	単著	平成 27 年 9 月	奈良学園大学研究紀要 第３集 p 59～ p 72	2013 年度実施の国際教員指導環境調査（TALIS）結果において、ICT を用いた指導実践を頻繁に行う教員の割合が全参加国の中で最下位である現状に注目し、本論文では ICT を活用した教育を推進することの必要性と教育効果のあるソフト開発、及びその使用の有用性について述べている。特に、基礎・基本の定着を図る際、習熟度や個別学習で活用することにより大きな効果を発揮するソフトのプログラム作成の手順とその効果的な使用方法を明らかにしている。
13. 生きる力の育成と主体的な問題解決活動 （査読付き）	単著	平成 27 年 12 月	日本人間教育学会 紀要「人間教育学研究」 第３号 p 25～35	数学教育現代化の失敗以降、算数数学教育の潮流は大きく問題解決に切り替えられたが、それが形式や表面的な学習指導に留まっていたのは、底流するプラトン的あるいは絶対主義的な数学観の論理的帰結として、コミュニケーション活動の本質が看過されていたからに他ならない。本論文では、コミュニケーションを含め表現力の充実が叫ばれるようになっている背景を分析し、数学的コミュニケーションの育成という視点から授業構成のあり方を提言した。
14. 算数科の基礎学力が育つ道筋と授業づくり	単著	平成 28 年 9 月	奈良学園大学研究紀要 第５集 p 53～ p 66	算数科で育てるべき学力の中核となるものは数学的な考え方に他ならない。ここでは数学的な考え方を基礎学力と位置づけ、それを育てる授業のあり方を人間性の育成という視点も加えて追求している。基礎学力は子どもの活動の姿として学習の中に現れてはじめて育ったと言えるので基礎学力が育ち、それを活用できるような単元構成や指導者の役割についての提案をしている。さらに、低・中・高学年の発達の段階における子どもの特性を生かした活動の場づくり、および授業づくりのポイントについても提案している。
(その他)				
１．新任教員のためのハンドブック	単著	平成 24 年度	近畿大学	教員の研修課題テキストとして使用するため、学級経営に関する事項、いろいろなケースでの子どもに接する際の留意事項、家庭訪問の留意事項、事故が起こった場合の対処の仕方などをＱ＆Ａ形式でＡ４版７４頁にまとめて全教員に配付し、それを学校の基本方針として共通理解を図り日々の教育実践の充実に向けて取り組む体制作りをした。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
「依頼原稿」				
1.授業中における事態に対応するには（算数）【シリーズ】	単著	平成21年4月～平成22年3月	日本文教出版	教育情報誌「ROOT」第1巻～第4巻　P19 教育現場で算数の授業中に遭遇する事態にどのように対処すればよいのか、その対処法を具体例で提示。「見通しが持てない子どもにはどのようすればよいか」「早く解決できて時間があまっている子どもにはどうすればよいか」などの内容。特に、経験の浅い教師がこの原稿を参考にして適切に対応することにより一人ひとりの児童が充実した学習活動に取り組んでいけることを願っての提案。 また、話し合い活動を通して各自が考えた解決方法をよりよいものに練り上げていくための学習集団をどのように育てていけば良いのかについても提案。 さらに、幼児期における学習および生活経験が十分でないことが原因と考えられる第1学年の数概念や図形概念の理解に関する学習内容におけるつまずきに対する予防と補充指導についても例示。
「教材作成」				
1.等積変形の説明教具	単独	平成21年12月	新算数教育研究会	第5学年の単元「図形の面積」の指導において、三角形は底辺と高さが同じであればどのような形の三角形であっても面積も同じであることを理解させるための教具である。子どもにとって高さにあたる頂点が底辺の外に出ている三角形の面積についての理解に抵抗が見られる傾向にある。そのため、少しずつ長さが短くなっていく細い線を何本も積み重ねて三角形を作り、アニメーションでその1本ずつを移動させ底辺も高さも同じ三角形に変形していくことにより、底辺と高さが同じであれば面積も同じであることを理解させるとう情報機器を活用した教具となっている。
2.円の面積の求め方の説明教具	単独	平成23年5月	西日本地区私学連盟研究大会	第6学年「円の面積」の単元で使用する教具である。円の中心を通る直線で等分し、それを等積変形して平行四辺形や三角形にすることを実際に紙にかいたものを用いて操作させたり示したりすることは困難なことである。そこで、グラフィックソフトを用いて円を32等分したり64等分したりして作成したおうぎ形をアニメーションで平行四辺形や三角形に等積変形して示すことにより、円の求積公式である半径×半径×円周率の理解を確かなものにすることをねらって作成した
3.計算の習熟を図るプリント作成ソフト	単独	平成23年5月	西日本地区私学連盟研究大会	第1学年から第6学年までの計算領域で扱われる全ての計算について任意に入力した数値を用いて計算問題の式が作成できるソフトである。数範囲は整数・小数・分数の全て、また、演算も単純な四則はもちろんあまりのあるわり算や商を四捨五入で処理する問題や解答も数値の入力で自動作成されるようにしてある。作成にあたってはエクセルの関数を用いているので一般的に何処ででも活用することが可能な自作ソフトである。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
４．「活用力」育成のためのデジタル教材	共同	平成 25 年６月	株式会社 ｅ教育研究社	第１学年～第６学年の算数の全単元について、学習指導要領に示された「活用力」育成のための指導用メディアミックス型デジタル教材を作成。授業プリントとデジタル教材コンテンツを合わせて利用することによりPISA型学力を育てることをねらいとした教材である。 教授資料はＢ５判全２６７頁 編者：梶田叡一 共著者：加藤明、金山憲正、中島繁雄、松浦武人 本人担当部分：第５学年・第６学年の「活用問題」「実践問題」「発展問題」（P118～p267）の 95 教材を単著。各単元に対応したデジタルコンテンツを作成。 活用問題では「読解力」を重視した内容を扱い、ヒントや解き方はオンマウスでポップアップするようにしてあるため、ICT 教育でも活用が図れるよう工夫してある。
「学会発表」				
１．新学習指導要領（算数）における実践上の課題	―	平成 21 年 12 月	新算数教育研究会 第 34 回セミナー （於：箱根・ ホテル小涌園）	教育基本法、学校教育法の改正に伴う学習指導要領の改訂の趣旨を踏まえた算数科学習指導の要点を提案。活用を重視する指導では指導内容の関連を明らかにし、既習のどの内容が発展するのかを捉えて単元構成をすることの重要性を各学年の主要教材を取り上げた事例で発表。また、表現力を育成するための「ノート指導」のあり方について実践例を映像機器で示しながら紹介。これらを通し思考力・判断力・表現力の育成を目指した新学習指導要領の趣旨を踏まえた望ましい指導のあり方を発表。
２．算数科における問題解決学習の充実	―	平成 23 年 5 月	第 53 回西日本地区 私学連盟研究大会 （近畿大学附属小学校）	新学習指導要領で育てたいと目指している学力は、教え込みの解説型の授業から脱却しポリアの提唱した問題解決型の授業を基本として展開することによって効果的に育成されることを主張すると共に、問題解決型の授業をするためには児童の実態を的確に把握することと、教師の綿密な教材研究とが大前提になることを強調。 また、幼小連携の観点から小学校における算数学習の充実のために幼児期にどのように数概念や図形概念の理解に関する指導を行えば良いかについても解説。
３．時代のニーズに応えた学校運営	―	平成 24 年 4 月	平成 24 年度近畿大学 附属関係校研究大会 （近畿大学）	組織面については、小学校高学年における教科担任制、一年担任制、習熟度別学習態勢の導入、及び、各教員への研究教科の割り振りなど、基礎・基本の確実な定着を目指ための学校の取り組むべき方向と方策を提案。 また、小学校教育と幼稚園教育の関連を図り、より充実した小学校教育の創造を目指す幼・小連携の需要性と必要性を強調。 教育内容面では、日々の教育実践において、「問題解決学習の進め方」「学級経営のあり方」「机間指導・ノート指導のあり方」「子どもが主体的に学習へ取り組む授業の創造」など、思考力・判断力・表現力を育てるための教育をどう実践していくべきかを提案。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
４．算数的活動を取り入れた指導	－	平成 25 年 10 月	「人間教育研究協議会」平成 25 年度定例会	思考力を高めるための授業作りに欠かすことのできない算数的活動について、重視される理由・取り入れるために必要となる教材研究・展開の方法などを具体的な実践例と結びつけての発表内容である。 作業的活動・体験的活動・思考的活動の各活動について具体的な教材を例に、活動をさせる目的、効果的に取り入れる方法についての解説に加え、言語活動にあたる「説明する活動」「表現し伝え合う活動」についても同様の解説を加えて発表した。
５．教材研究をする際に知っておかなければならない「算数のことば・用語」	－	平成 25 年 12 月	教師力向上研究会（第４回総会）	算数指導に当たって指導者が「算数のことば・用語」をしっかりと理解しておかなければ十分な教材研究をすることができないということを伝えることをねらいに発表。 センテンス型とフレーズ型の式の区別を意識させておく必要性や等分除と包含除のいずれの問題場面で導入することが適切であるのかなど、教材研究と算数の用語の理解は切り離して考えることができないことを強調。
６．算数的活動を取り入れた指導のポイント	－	平成 26 年 2 月	「人間教育研究協議会」フォーラム in 大阪	学習指導要領で算数的活動が重視されている背景とねらいを分析し、算数的活動を取り入れた授業の充実を図る際のポイントについて発表。特に、算数的活動というものが単に作業的活動や体験的活動を意味しているのではなく、思考活動が伴わなければ価値がないことをピアジェの心的活動の論とを関連づけて強調した。また、算数的活動を取り入れると学習効果が発揮される指導場面とその留意事項についても具体的な例を通して発表した。
７．算数の授業で言語活動を充実させる	－	平成 26 年 6 月	教師力向上研究会例会	言語活動を充実させるための目的を明確に捉えた上で実践に取り組まなければ十分な成果が期待できないため、まず教科の目標を実現する手立てとして言語活動を充実させるのであることが大前提になることを強調した。 特に、算数の言葉と言われている式に焦点を当て、「式に表す活動」「式をよむ活動」の具体例を取り上げ、言語活動を充実させるポイントとなる抽象化の過程や一般化の過程の構成について重点を置いた提言と、それを具現するための指導のあり方について発表した。
８．思考力・判断力・表現力を育てる算数指導	－	平成 26 年 8 月	教師力向上研究会サマーセミナー	思考力・判断力・表現力を育てるには問題解決型での指導が望ましい。問題解決型の指導では既習の学習内容と関連づけることが求められる。一方、関連づける既習の学習内容が本時の解決に結びつく内容でない場合は、逆に子どもを混乱させることになる。既習内容どう想起させるのか、また、そのために必要となる手立てを内容の系統性・関連性を明確にする視点から解説した。特に、教材分析の重要性と指導内容の関連を明確にすることの重要性を強調。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
９．意識を軸にして展開する算数指導	－	平成 27 年 10 月	日本人間教育学会 第１回総会	ブルーナの操作を生かした学習活動に関する論とピアジェの心的活動の論を基に、即物的対象のイメージ、経験的記憶再生のイメージ、想像のイメージがより抽象的・概念的なイメージへと高まる過程と問題解決の過程との関係を明らかにし、学習者の意志によって主体的な学習活動が展開される授業作りの要点を提言。イメージが連続発展するような単元構成及び授業構成を試みるに際しては、能力心理学で分析されている認識能力と欲望能力の観点から発達段階を考慮した活動の様相を想定しておくことが必要となることも強調。

教　育　研　究　業　績　書

平成　29　年　3　月　31　日

氏名　　桑原　祐子

研究分野	研究内容のキーワード
言語学	日本語学　日本文学　正倉院文書

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例		
1）日本語の文法研究の成果を生かした実践的授業	平成7年度 ～平成22年度	摂南大学国際言語文化学部国際言語文化学科非常勤講師として担当した留学生の「日本語」及び「日本語上級作文Ⅰ」の授業。中国語圏の留学生にとって習得の難しい助詞の機能について、文法研究における構文論の研究成果を取り入れ、日本語文の構造には様々な層があることを解説し、身近な文を分析しながら実践的教育を行った。また、日本語の歴史的変化を具体的に示しながら、現代の日本語の実態を分析することも試みた。その結果、日本語の作文能力の向上が見られた。
2）実地見学を取り入れた授業	平成22年11月	奈良産業大学情報学部情報学科准教授として担当した「詩歌の発生と展開」の授業に於いて、万葉集・正倉院を中心に授業を行った。そこで、東大寺の奈良時代の遺構の実地見学及び正倉院外構の見学を行った。写真では実感できない構造物の大きさや、機構の規模などが実感でき、概ね良好な反応が得られた。
3）所見カードによる問題意識の啓発	平成22年度～24年度	奈良産業大学情報学部情報学科准教授として担当した「奈良の文学と風土」（平成22年～24年）、「日本の文学」（平成24年）では、毎回の授業で２～３の問を提示し、これに答える形で講義をすすめている。授業の最後の10分間で、所見カードに、この問に対する答えを記入させ、疑問や質問も主体的に記入させている。これによって、受講生の理解の度合いが認識でき、また受講生理解向上が図れ、問題意識の啓発に資することができた、と認識される。記入された質問・疑問については、翌週の講義で取り上げて解説を加えている。
2　作成した教科書，教材		
1）講義用教材「奈良の文学と風土」	平成22年度～24年度	奈良産業大学情報学部情報学科准教授として担当した一般教養科目「奈良の文学と風土」において、授業時間内に使用する文学作品・文字資料などを毎回授業で配布している。できる限り、当時の文字の姿や文章の書き方が視覚的に捉えられるように、原本・写本の写真を掲載するように努めている。また、パワーポイントを使用して、古代の文物をできるだけ閲覧できるようにしている。
2）講義用補助教材「日本語コミュニケーション」	平成23年度～24年度	奈良産業大学情報学部情報学科准教授として担当した全学共通の導入基礎科目「日本語コミュニケーション」において、毎授業の開始直後に、日本語の知識全般にわたる小テストを行い、日本語の基礎知識の定着を計っている。これによって、毎時間予習をするようになり、一定の教育効果が確認されている。
3　教育上の能力に関する大学等の評価		
1）奈良産業大学学生による授業評価アンケートにおける評価	平成24年度	奈良産業大学では、毎年学生による授業アンケートを実施している。平成24年度のアンケート結果によると、受講生の満足度に関して、「かなり満足」「やや満足」と答えた学生は、「日本語コミュニケーション」は68％・「日本の文学」は89％、「日本語（上級作文）は93％であり、比較的高い評価を得たものと認識している。

４　実務の経験を有する者についての特記事項		
1）放送大学面接授業　奈良学習センター　講師 「古代日本の文字資料を読む」	平成19年11月	日本古代の文字資料として、正倉院文書と木簡資料を訓読し、そこからどのような日本語の世界が浮かび上がってくるのかということを講義した。また、原本の写真を観察することによって、確かな古代の漢字の字形が復原できることも講義した。
2）ひょうご震災記念研究機構学術交流センター　ひょうご講座2009「古代史最前線」　講師　「正倉院文書からみる下級官人の言語生活」	平成21年7月	ひょうご講座2009「古代史最前線」での講座を担当した。奈良時代の紙の利用の仕方から意外な文書の事実が分かること、古代の下級官人の人間関係がどのように言葉遣いに反映するかということを講義した。
3）2009年若手支援プログラム「正倉院文書を考える」の特別講師「正倉院文書の国語学的アプローチ」	平成21年8月	奈良女子大学古代学学術研究センターと万葉文化館主催による、2009年若手研究者支援プログラム「正倉院文書を考える」での特別講義。正倉院文書を国語資料として使うときの工具類及び工具の使い方を紹介すると共に、正倉院文書を奈良時代の姿に復原する手続きを講義した。
4）京都府立国語科研究会（山城支部）研修会　講師 「正倉院文書にみる下級官人の国語―石山寺造営関係資料―」	平成22年3月	現代の日本語の中には和製漢語が数多くある。その中に「早速」という言葉がある。この言葉は正倉院文書の中にしばしば見られる。特に、下級官人達がある特定の場面で専ら使用している。そのことから、新しい言葉が誕生する背景や使用者の言語に対する意識について講義を行った。
5）朝日カルチャーセンター芦屋教室公開講座「東アジアと萬葉集」講師 「正倉院と正倉院文書」	平成22年9月	朝日カルチャーセンター芦屋教室公開講座「東アジアと万葉集」の第4回目の講座の講師として講義を行った。奈良正倉院と正倉院文書の紹介を行い、正倉院文書の分析を通して古代の下級官人の勤務の実態について講義を行った。
6）奈良産業大学公開講座・王寺町りーべるカレッジ講師　「正倉院文書の世界―古代官人の世界―」	平成23年11月	正倉院に残された古代官人たちの書いた文書の分析を通して、役所で彼らがどのような仕事をしていたのか、給料はどのくらいだったのか、出勤状況はどのようにして把握されていたのか、ということを解説した。また、借金の証文から役人たちの住居の場所が明らかになることや、下級官人たちの書いた文書がなぜ正倉院に残ったのかということについて解説を行った。
7）帝塚山大学公開講座「奈良学への招待」講師 「正倉院文書と古代日本語」	平成23年11月	奈良の正倉院には華麗な宝物とともに一万数千点の文書が残されている。これらは、8世紀の日本語を知るための極めて重要な言語資料である。『万葉集』や『古事記』とは異なった、古代の生の言語生活を知ることができる。古代の官人たちが書いた休暇届や欠勤届を分析しながら、病気の治療・回復をどのように表現していたのかということを講義した。また、彼らが母語である和語と外国語である漢語をどのように意識して使い分けていたのかということも、具体的に紹介した。
8）奈良県大学連合主催「なら講座」講師 「正倉院と正倉院文書」	平成24年12月	古都奈良の秋に開催される正倉院展には、1250年の時を越えて伝えられた聖武天皇遺愛の宝物や東大寺ゆかりの品々が展示される。これらの特色を解説すると共に、それなの中にあって、思いがけない情報を我々に語ってくれる一大文書群、正倉院文書を紹介し、当時の役人が、どのような場合にどのような言葉を生み出していったかということを、解説した。
9）三郷町文化振興財団主催『カルチャーサロンさんごう』文学・歴史・経済セミナー講師　「正倉院文書と木簡の世界」	平成25年11月	正倉院正倉（奈良市、国宝）が南倉、中倉、北倉と三室に分かれていること、「東大寺献物帳」（目録）が添えられていたため北倉の品々は、史料的価値が高いことなど、正倉院に関する基礎知識を説明し、東大寺写経所が残した正倉院文書（給料の請求書、欠勤届他）や平城宮跡出土木簡などに書かれた漢文を現代語訳しながら、当時の役人や写経生の仕事内容や仕事ぶりを解説。また、漢字の「怠（おこたる）」を取り上げて当時の人々の生きた言語生活を紹介した。

10）奈良産業大学公開講座・王寺町りーべるカレッジ講師　「正倉院文書・木簡からわかる古代日本語」	平成26年10月	正倉院の宝物と正倉院文書について１千年以上も保管された要因とその文化財的価値について説明した。また、正倉院文書は造東大寺司の下に置かれた写経所の残した文書群であることを説明し、そこで仕事をしていた写経生たちの提出した休暇願・欠勤届や同時代の木簡を読み解きながら、古代の人々の言語生活の一端を明らかにし、平仮名がまだなかった時代に、漢字や漢語の用法を借りながら、古代の人々がどのようにして言葉の世界を拓いていったのかということを解説した。
11）第5回奈良学園公開文化講座講師・志賀直哉旧居「正倉院文書と古代の役人」	平成28年10月18日	第68回正倉院展に合わせ、出展が予想される正倉院古文書・正集五 第1紙～8紙を取り上げ、その内容を読み解いた。 天平宝字5年（761）頃の近江・石山寺の増築をめぐって、造石山寺所や管轄する造東大寺所とのやりとりを解説し、役人が現場の窮状を訴え、米や銭の支給を取り付ける過程を分析した。 また写経所の経師が、3日に1度の飲酒や月に5日の休暇などを求める内容を記した待遇改善の草稿も紹介し、その背景の解説を行った。
５　その他		
1）学位（博士）論文指導実績	平成24年10月～12月	愛知県立大学大学院国際文化研究科日本文化専攻に所属する大学院生の博士論文について3人の審査員のうちの副査として審査を担当。指導テーマは「古代東アジアにおける漢字文化の研究」である。その内容は、中国・韓国日本の第一次資料を用いて、古代東アジア諸国の異体字研究を通して、漢字がどのように受容・定着したかということを明らかにする研究である。
2）摂南大学における教育実績	昭和61年4月～平成22年3月	摂南大学国際言語文化学部国際言語文化学科の非常勤講師（昭和61年4月から平成22年3月まで）として以下の科目を担当した。 「国語学」の担当については、昭和62年8月に摂南大学法学部法律学科　兼任講師として、大学設置審議会教員資格審査判定に合格。同じく平成4年8月に摂南大学経営情報学部経営環境情報学科兼任講師として、大学設置審議会教員資格審査判定に合格。 「文学」（平成8年～平成10年度） 通年の一般教養科目（通年4単位）である。日本の古典文学の根幹を成す和歌について講義した。前期は古代から近現代に亘る恋の歌を取り上げ、恋愛観がどのように変わっていくのかということを解説。後期は『万葉集』『古事記』平安朝文学に表れる日本人の自然観・死生観を解説し、言語に託された人間の思想・心情を考えさせた。本講義によって、文学への理解を深めることができた。 「日本語表現Ⅰ」（平成14年～平成21年度） 「日本語表現Ⅱ」（平成14年～平成21年度） いずれも半期の一般教養科目（半期2単位）である。音声言語と文字言語による日本語表現を分析的に学び、実践を通して日本語の運用能力を伸ばすことを目指す授業を行った。「日本語表現Ⅰ」では、音声言語による表現、特に敬語表現を中心に実践演習をさせた。この実践演習を通して、正しい敬語表現の運用と敬語表現の背後にある日本の文化的背景の理解が可能となった。 「日本語」（平成1年～13年度） 留学生対象の科目（通年4単位）である。主に2回生以上の学生を対象とした科目である。前期は日本語の基礎的な語彙・文法の能力の向上を目指して自薦演習を行った。後期は、様々な分野の専門的な文章の読解を行い、課題の設定・文章の構成・レポート作成を行った。以上の実践演習によって、大学における専門科目の講義を聴く能力・レポートの作成能力を習得させることができた。

		「日本語」の担当につては、平成4年8月に摂南大学経営情報学部経営環境情報学科兼任講師として、大学設置審議会教員資格審査判定に合格。 「日本語上級作文Ⅰ」（平成14年～平成21年度） 「日本語上級作文Ⅱ」（平成14年～平成21年度） いずれも留学生対象の科目（半期2単位）である。主に2回生以上の学生を対象とした科目である。「日本語上級作文Ⅰ」では、語彙・文法の知識を深めるため、単文の作成を中心に実践練習を行った。「日本語上級作文Ⅱ」では、専門的な文章の読解を中心に据え、文章構成の型・レポート作成の基本的技術を学び、与えられたテーマにそった文章作成を行った。この実践練習によって、大学における専門科目の講義を聴く能力・レポートの作成能力を習得させることができた。 「日本語上級会話Ⅰ」（平成14年～平成21年度） 「日本語上級会話Ⅱ」（平成14年～平成21年度） いずれも留学生対象の科目（半期2単位）である。主に2回生以上の学生を対象とした科目である。「日本語上級会話Ⅰ」では、日常生活の様々な場面を設定し、複数の学生に実践練習をさせ、口頭言語の背後になる日本特有の文化や具体的な表現の諸相を習得させた。「日本語上級会話Ⅱ」では、先ず日本語特有の敬語表現を大系的に学び、次に実際に様々な場面を想定し、具体的な敬語表現の実践練習を行った。合わせて、敬語表現を生み出した日本語話者の感性・思想・人間関係のとらえ方なども学ばせた。本授業によって、基本的な日本語の運用能力の向上をはかることができた。 「コミュニケーション論」（平成18年～21年度） 薬学部の学生を対象にした一般教養科目。特に薬学専門家として患者や地域社会の人たちと円滑にコミュニケーションを図るための具体的な知識や技術を身につけさせることができた。
3）京都光華女子大学における教育実績	平成4年4月～平成24年3月	京都光華女子大学生活学科の非常勤講師（平成4年4月から平成24年3月まで）として以下の科目を担当した。 「国語表現」（平成4年～平成17年度） 「言葉の理解」（平成18年～平成22年度） 「言葉と表現」（平成18年～平成23年度） いずれも1回生対象の一般教養科目（半期2単位）である。「国語表現」は、平成18度から名称変更によって、「言葉の理解」（前期2単位）・「言葉と表現」（後期2単位）となった。 「言葉の理解」（平成18年～平成22年度） 日本語の特徴を学び、日本語話者の文化的背景を学ぶと共に、実践的な日本語の運用能力を養うことを目指し、基本的な語彙の習得をさせた。更に、正しい敬語表現を身につけるための実践練習を行った。これらの実践練習によって、社会人として適切な日本語の運用能力を習得させることができた。 「言葉と表現」（平成18年～平成23年度） 日本語の表現のうち、書き言葉の表現技術の向上を目指して実践練習を行った。様々な文章を書く練習を行い、大学におけるレポート作成・小論文作成の能力を身につけることができた。 「文学と人生」（平成13年～平成14年度） 『万葉集』の中から、特に古代史を彩った様々な人物の歌を取り上げ、歌の背後にある古代史の出来事を解説し、古代の人々の人生を考える授業を行った。言語芸術である文学作品から何が読み取れるのかということを考えさせた。本講義によって、文学を鑑賞する力をつけることができた。

4）奈良女子大学における教育実績	平成17年4月～平成20年3月	奈良女子大学文学部日本アジア言語文化学科の非常勤講師（平成17年4月から平成20年3月まで）として以下の授業を担当した。 「中等教科教育法　国語Ⅰ」（平成17年4月～19年度） 「中等教科教育法　国語Ⅱ」（平成17年4月～19年度）教員免許取得のための教職科目（半期2単位）である。「中等教科教育法　国語Ⅰ」では、国文学研究・国語学研究の成果に基づく教材分析を行い、国語という教科では、何をどのように分析して教授するのかということを実際の教材を使って講義した。「中等教科教育法　国語Ⅱ」では、受講生による模擬授業を通して、授業の組み立て方、発問の仕方、情報機器の使い方、教材開発の仕方等を学ばせた。以上の実践を通して国語科の教師としての知識と技術を養うことができた。
5）奈良産業大学（現奈良学園大学）における教育実績	平成22年4月～現在に至る	奈良産業大学情報学部情報学科及び奈良学園大学人間教育学部人間教育学科の専任教員（平成22年から現在に至るまで）として以下の科目を担当した。 「日本語コミュニケーションⅠ」（平成22年～24年度） 「日本語コミュニケーションⅡ」（平成22年～24年度） １年次配当の共通教育基礎科目（半期2単位）である。 「日本語コミュニケーション」Ⅰでは、話し言葉を中心に実践的な日本語の運用能力を習得させることができた。時に敬語の背景にある日本語話者の文化的背景についても理解を深めることができた。「日本語コミュニケーション」Ⅱでは、書き言葉を中心に学習し、レポート作成・小論文作成のための実践的能力を養うことができた。 「奈良の文学と風土」（平成22年から現在） 共通教育科目（半期2単位）である。万葉集の歌と正倉院文書から明らかになる古代の人々の生きた姿を講義形式で紹介した。できるかぎり現存する文書の写真や木簡の写真を使って、古代言語生活を具体的に学んだ。加えて正倉院に伝世した宝物を通して東西文化の交流を学んだ。本講義を通して、奈良という地域の特性を正しく具体的に理解することができた。 「詩歌の発生と展開」（平成22年～23年度） 共通教育科目（半期2単位）である。日本文学の中で重要な位置を占める詩歌について、万葉集・記紀歌謡・古今和歌集の歌を講義形式で解説した。特に、万葉集では漢字だけで以下に日本語を表現する工夫をしたのかということも学んだ。本講義を通して、平仮名の発生や詩歌に対する知識を養うことができた。 「日本の文学」（平成24年～25年度） 共通教育科目（半期2単位）である。古事記・万葉集の韻文を中心に講義形式で行った。古事記を題材として、神話に語られた自然現象、韻文の始まりを語った物語などを紹介し、また、万葉集の歌を通して、人間の心のあり方を、喜びや悲しみをいかにして表現したのかということを学んだ。本講義を通して文学先品を鑑賞する能力を養うことができた。 「日本語　上級作文Ⅰ」（平成22年～平成26年度） 「日本語　上級作文Ⅱ」（平成22年～平成26年度） 平成22年度は「日本語　文章表現」の名称での講義であったが、23年度から「日本語　上級作文」に名称変更された。留学生の2年次生を対象にした共通教育科目（半期2単位）である。「日本語上級作文Ⅰ」では、基礎段階として、単文の作成を中心に実践的授業を行い、基本的な日本語文の作成能力を習得することができた。「日本語　上級作文Ⅱ」では、応用のレベルとして専門的な内容を含む長文の読解を行い、加えてテーマを設定してレポート作成を行った。この実践的授業を通して、レポート作成の知識と技術を身につけることができた。

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項		
事項	年月日	概　　要
1　資格，免許		
1）中学校教諭一種免許状	昭和54年3月	中学校教諭一種免許　国語 昭和53中一種第880号（奈良県教育委員会）
2）高等学校教諭専修免許状	昭和56年3月	高等学校教諭専修免許　国語 昭和55高専修56号（奈良県教育委員会）
3）文学修士	昭和56年3月	奈良女子大学204号 論文題目「正倉院文書に於ける上代特殊仮名遣」
4）博士（文学）	平成16年12月	奈良女子大学第124号 論文題目「正倉院文書の国語学的研究」
2　特許等		
特記事項なし		
3　実務の経験を有する者についての特記事項		
1）奈良女子大学古代学学術研究センター協力研究員	平成19年度～21年度	奈良女子大学古代学学術研究センターは、古代日本の中心であった奈良に立地する奈良女子大学の特色を生かし、東アジアという広い視野の中で日本古代の歴史・文学・言語を学際的に研究する拠点として平成17年に設置された。このセンターにおいて、平成19年～21年までの間、科学研究費補助金（基盤研究Ｃ）「正倉院文書訓読による古代言語生活の解明」（研究課題番号19020396）の研究代表として、研究活動を行った。合わせて、前年度までのＣＯＥ研究員として企画を行った報告集の作成も行った。ＣＯＥ関連授業における博士課程の受講生に対する事前指導を引き続き行った。
・『正倉院文書にみる古代日本語』（ＣＯＥ報告集vol,11）に論文「請暇解の表現をめぐって―桑内真公と丸部大人―」を執筆。	平成19年6月23日	企画と編集を担当し、同報告書に論文「請暇解の表現をめぐって―桑内真公と丸部大人―」を執筆した。論文の概要は以下の通り。正倉院文書には、奈良時代の下級官人等の休暇願や欠勤届が238通余り残っている。この請暇不参解（休暇願・欠勤届）の中のどのような表現に着目すれば、仮名を持たなかった奈良時代の日本語を明らかにするための資料として、正倉院文書が位置づけられるのかということを、具体的に指摘し分析を試みた研究である。文字の形・人称代名詞の有無・親族名の諸相・前置詞の用法を手掛かりにして分析を行い、上代の文学資料では得られない生きた日常言語の実態を明らかにすることができた。
・ＣＯＥ発行の論文集『古代文化とその諸相』に論文「請暇不参解の表現―桑内真公の請暇解と不参解―」を執筆	平成19年8月31日	正倉院文書には238通の古代下級官人たちの休暇願と欠勤届が残されており、同一人物が書いた休暇願と欠勤届も多数存在する。休暇願と欠勤届は文書としての機能は共通している。しかし、同一人物が書いた両者の文書には、書き手の状況・心理に明らかな相違が見られる。その状況の相違・心理の相違が、それぞれの文書の表現の特色として現れていること、また、そこに日本語特有の敬意表現や曖昧表現が顕現することを明らかにした。
・第60回萬葉学会全国大会で研究発表。タイトルは「正倉院文書にみる古代言語生活―「回復」と「治療」を表す表現―」。	平成19年10月21日	ＣＯＥの報告集として刊行した『正倉院文書の訓読と注釈―請暇不参解編（一）―』『同（二）』の成果に基づいて、万葉学会で研究発表を行った。概要は以下の通り。　正倉院文書及び奈良時代の文献資料（文学資料・歴史資料）中の病気の回復・治療を示す言葉をすべて調査し、その具体的な音形式を提示した。さらにそこに見られる表現の位相差を指摘した。この調査によって、新たに奈良時代まで遡らせることのできる語を提示し、合わせて正倉院文書の国語資料としての可能性を実証した。

・ＣＯＥと協同で平成19年度より企画を進めていた『正倉院文書の訓読と注釈―啓・書状編（一）―』の編集委員。	平成20年3月6日	古代における啓・書状は、古代の都市が、人間の集積地として機能していくうえで、情報伝達のツールとして重要な役割を果たした。この啓・書状を分析することで古代の人々がどのようにして、自らの思いを紙の上に載せて運ぶことを可能にしたかを探るための基礎作業として行った訓読と注釈である。
・釜山大学主催の日本学講演会の招聘を受け講演。 タイトルは「正倉院文書と墨―韓国と日本の交流―」。	平成21年3月26日	正倉院文書から明らかにされる日本古代官人の言語生活に関する講演を行った。正倉院宝物中の新羅関連宝物の紹介と、それにまつわる文字資料の紹介を行い、特に新羅墨の形状にも関わる墨の助数詞「船」と「挺」の実態の調査についての報告を行った。墨の形状を反映していると考えられていた助数詞「船」は、ある特定の人物が使用していた助数詞であったことを報告した。合わせて、物を通じて日韓の交流についても言及した。
・奈良女子大学古代学学術研究センター発行の学術雑誌『古代学』第1号に論文「古代官人の言語生活―病気回復を表す表現―」を執筆。	平成21年3月30日	正倉院文書に多く現れる病気回復表現に着目し、正倉院文書を中心にして、日本律令・日本書紀・続日本紀などの上代文献の病気回復表現を調査した。その調査によって、奈良時代の病気回復表現を分類すると共に、その用法の分析をおこない、日本語を漢字で書き表す場合の創意工夫の実態と病気回復表現の位相を明らかにした。また、平安朝以降にしか見られないといわれていた「おこたる」について、奈良時代の確例を指摘した。
・奈良女子大学研究推進プロジェクト「正倉院文書からみた日本語表記の成立過程に関する研究」の研究分担者。	平成21年4月	上代の文献（万葉集・古事記など）・木簡・正倉院文書を用いて、日本語表記成立過程を明らかにする事を目指した研究プロジェクトである。研究代表は奈良女子大学の奥村悦三教授である。このプロジェクトの主に木簡と正倉院文書を研究分担した。
・奈良女子大学古代学学術研究センター主催の若手支援プログラム「正倉院文書を考える」の特別講師。	平成21年8月5日	特別講義「正倉院文書の国語学的アプローチ」を行った。正倉院文書中の写経生の書状を取り上げ、文書の断簡をどのようにして復原するのかという方法と研究工具の使い方を講義した。合わせて、年紀の記されない書状の年代を明らかにし、書状の書かれた背景を、様々な帳簿類を検討することで明らかにしていく手法を示した。
・学術振興会　科学研究費補助金（基盤研究（ｃ））を申請。課題は「正倉院文書訓読における日本語表記成立過程の研究」。	平成21年11月	平成22年4月に採択された（研究課題番号22520467）。研究代表者。本研究の目的は、正倉院文書に代表される実用の言語生活の中に、後世の日本語表記システム(漢字仮名交じり文)が成立していく契機があることを、具体的な事例に基づいて実証的に解明することである。そのため、正倉院文書の中に散見する下級官人や在野の技術者・非官人に光を当て、彼らの言語生活を明らかにすることである。
・科研基盤研究（ｃ）「正倉院文書訓読による古代言語生活の解明」（研究課題番号1920396）の報告書3冊を刊行。	平成22年3月30日	3冊は以下の通り。報告書Ⅰ『正倉院文書の訓読と注釈―造石山所寺解移牒符案（一）―』（研究代表者桑原祐子執筆）・報告書Ⅱ『正倉院文書の訓読と注釈―啓・書状―』（研究分担者黒田洋子執筆）・報告書Ⅲ『正倉院文書からたどる言葉の世界（一）』（連携研究者中川ゆかり執筆）。以上の報告書の企画・編集を行い、報告書Ⅰの執筆を行った。
４　その他		
1）大阪市立大学日本史学会『市大日本史』第14号「栄原ゼミと私」執筆「再掲」	平成23年5月	日本古代史学界の中で正倉院文書研究を牽引してきた栄原永遠男先生の退任を記念して特集が組まれた。その中の一編として、最新の正倉院文書研究の場である「栄原ゼミ」の存在意義について国語学の立場から述べたものである。栄原ゼミで10年間研究をしてきた経験に基づき、ゼミが有意義な存在であることを述べた。

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
（著書）				
1)『上代写経識語注釈』	共著	平成27年2月	勉誠出版	日本には、飛鳥・奈良時代（７世紀～８世紀）に書き写された経典が現存している。これらの経典には経典を写した人物・年月日・写経に込めた願いを書き込んだ写経識語がある。この制作動機などを記している識語を手がかりにして、当時の人々の思考や社会背景、仏教語の受容の実態、仏教思想や仏教語の文学に与えた影響などを目指す研究である。上代文献を読む会において、平成18年10月から約6年を費やして輪読を行い、編集委員会を設け、さらなる検討を重ね、現存する写経識語の訓読・現代語訳・注釈を施した。さらに写経識語に関する論考４本と索引を加えた。本書は、平成２７年度日本学術振興会科学研究費補助金「研究成果公開促進費」の交付を受けた。全684頁
2)『正倉院文書の歴史学・国語学的研究―解移牒符案を読み解く―』	共著	平成28年6月	和泉書院	古代の一次資料である正倉院文書を歴史学と・国語国文学のそれぞれの立場から精緻に読み込み、分析検討を行う輪読会を９間に亘って続けてきた。この輪読会に参加した１０名の研究者による研究論集である。その研究内容は、帳簿論、写経論、上代の日本語の語法・語彙の研究、文字表記の研究など、多岐に亘る。特に国語国文学の分野における正倉院文書研究の指針となる論集である。 全370頁、pp.111~156
（学術論文）				
1）請暇解の表現をめぐって―桑内真公と丸部大人―	単著	平成19年6月	奈良女子大学21世紀ＣＯＥプログラム報告集 Vol.11「正倉院文書にみる古代日本語」 P.2～P.39	正倉院文書には、奈良時代の下級官人等の休暇願や欠勤届が238通余り残っている。この請暇不参解（休暇願・欠勤届）の中のどのような表現に着目すれば、仮名を持たなかった奈良時代の日本語を明らかにするための資料として、正倉院文書が位置づけられるのかということを、具体的に指摘し分析を試みた研究である。文字の形・人称代名詞の有無・親族名の諸相・前置詞の用法を手掛かりにして分析を行い、上代の文学資料では得られない生きた日常言語の実態を明らかにすることができた。
2）請暇不参解の表現―桑内真公の請暇解と不参解―（査読付）	単著	平成19年8月	奈良女子大学21世紀ＣＯＥプログラム報告集 Vol.15「古代文化とその諸相」 P.1～P.26	正倉院文書には238通の古代下級官人たちの休暇願と欠勤届が残されており、同一人物が書いた休暇願と欠勤届も多数存在する。休暇願と欠勤届は文書としての機能は共通している。しかし、同一人物が書いた両者の文書には、書き手の状況・心理に明らかな相違が見られる。その状況の相違・心理の相違が、それぞれの文書の表現の特色として現れていること、また、そこに日本語特有の敬意表現や曖昧表現が顕現することを明らかにした。
3）古代官人の言語生活―病気回復を表す言葉―（査読付）	単著	平成21年3月	奈良女子大学古代学学術研究センター・奈良女子大学21世紀ＣＯＥプログラム 「古代学」第１号 P.1～P.12	正倉院文書に多く現れる病気回復表現に着目し、正倉院文書を中心にして、日本律令・日本書紀・続日本紀などの上代文献の病気回復表現を調査した。その調査によって、奈良時代の病気回復表現を分類すると共に、その用法の分析をおこない、日本語を漢字で書き表す場合の創意工夫の実態と病気回復表現の位相を明らかにした。また、平安朝以降にしか見られないといわれていた「おこたる」について、奈良時代の確例を指摘した。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
4）上代写経識語注釈（その一）大般若経（長屋王願経・和銅経） （査読付）	単著	平成22年4月	続日本紀研究会誌 「続日本紀研究」 第385号 P.26～P.44	日本には、飛鳥・奈良時代（７世紀～８世紀）に書き写された経典が現存している。これらの経典には経典を写した人物・年月日・写経に込めた願いを書き込んだ写経識語がある。この制作動機などを記している識語を手がかりにして、当時の人々の思考や社会背景、仏教語の受容の実態、仏教思想や仏教語の文学に与えた影響などを目指す研究である。特に本稿で取り上げた識語は現存する識語の中で、奈良時代のごく初期の写経経典でありながら、各地に点在する、極めて貴重なものである。
5）写経生の書状―正倉院文書にみる古代官人の実態―	単著	平成22年11月	奈良産業大学情報学部 「情報学フォーラム紀要」 P.1～P.8	いつ何のために何を書いたか不明であった写経生の書状について、その紙背文書の分析から書かれた年代を特定し、その時の写経所の状況、写経生等の勤務状況を明らかにし、仕事を依頼するための書状であったことを指摘した。そこには、漢字漢文では表現できない日本語特有の敬意を含んだ言葉が表出することをも合わせて指摘した。
6）正倉院文書の「笑」と「篦」	単著	平成23年6月	釜山大学校日本研究所 「日本研究」12輯 P.7～P.31	正倉院文書の造営資料や木簡等の一次資料、律令公文・延喜式などの歴史史料、万葉集などの文学資料、及び古辞書に見える「笑」と「篦」の使用実態を調査し、「笑」を、ヤダケを意味する和語「の」とよませる漢字用法は、漢字本来の意義から逸脱する日本的用法（国訓）であることを明らかにし、日本的漢字用法が、どのような人々によってどのような理由で生じるのか、その要因をさぐった。
7）上代写経識語注釈（その九）十輪経（五月一日経） （査読付）	単著	平成23年8月	続日本紀研究会誌 「続日本紀研究」 第394号 P.33～P.44	日本には、飛鳥・奈良時代（７世紀～８世紀）に書き写された経典が現存している。これらの経典には経典を写した人物・年月日・写経に込めた願いを書き込んだ写経識語がある。この制作動機などを記している識語を手がかりにして、当時の人々の思考や社会背景、仏教語の受容の実態、仏教思想や仏教語の文学に与えた影響などを目指す研究シリーズの第9である。特に本稿で取り上げた五月一日経（一切経）は、その写経の過程を知る文書・帳簿が正倉院文書に多量に残存し、経典そのものも大量に残存する世界的にも希有な資料群である。
8）上代写経識語注釈（その十）千手千眼陀羅尼経（玄昉願経） （査読付）	単著	平成23年8月	続日本紀研究会誌 「続日本紀研究」 第393号 P.36～P.49	日本には、飛鳥・奈良時代（７世紀～８世紀）に書き写された経典が現存している。これらの経典には経典を写した人物・年月日・写経に込めた願いを書き込んだ写経識語がある。この制作動機などを記している識語を手がかりにして、当時の人々の思考や社会背景、仏教語の受容の実態、仏教思想や仏教語の文学に与えた影響などを目指す研究シリーズの第10である。本稿で取り上げた玄昉願経は、正倉院文書によってその写経の過程を知ることのできる写経経典の一つであり、この識語の分析によって、東大寺創建・国分寺建立にも深く関わる内容であることを指摘した。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
9）正倉院文書の「堪」と「勘」―古代下級官人 爪工家麻呂の学習―（査読付）	単著	平成24年9月	萬葉語文研究会『萬葉語文研究』第８集 和泉書院　p. 121～p. 147	8世紀の原本が残る正倉院文書の分析を通じて、当時の下級官人の言語生活を記述した研究である。同一人物の作成した文書・帳簿を写経事業毎に選別し、特定の人物の置かれた状況・仕事内容を明らかにして上で、役人としての基本的な語彙をどのようにして習得したのかということを明らかにした。つまり、外国語である漢字・漢文を、日本語を母語とする人々がいかにして習得したかということを明らかにすることは、異文化を享受しながら独自の文字システムを構築してきた日本語のあり方を知ることに繋がる。
10)正倉院文書の「早速」―和製漢語のうまれる場面―（査読付）	単著	平成25年3月	奈良女子大学文学部国文学会誌「叙説」第40号 p. 33～p. 57	漢籍に例を見ない「早速」が和製漢語であることを正倉院文書・木簡の悉皆調査によって明らかにした。類義の副詞「早・速・急・火急」と比較対照させることによって、奈良時代の人々が、どのような場面で、誰に対して、どのような事情がある時に「早速」を使用するのかということを分析した。合わせて文学資料における使用実態も調査し、和製漢語がどのような場面で生まれるのかという、言葉の発生のプロセスを明らかにした。『史学雑誌』（東京大学　史学会）の回顧と展望において取り上げられた。
11）道豊足の人事―あいまいな表現の背景―（査読付）	単著	平成25年10月	正倉院文書研究会会誌『正倉院文書研究』13	石山寺造営関係資料の中には、人員の派遣に関する様々な文書や、勤務実態を明らかにする文書・帳簿が多く残存している。本稿では、道豊足の派遣を要請する文書の日付や要請理由、派遣を許諾した文書のあいまいな表現に注目し、文書間の整合性を保つために周到な準備をしていたことを確認した。さらに、道豊足の勤務実態と要請理由との間に生じた矛盾が、許諾文書のあいまいな表現の要因になったということを明らかにした。『史学雑誌』（東京大学　史学会）の回顧と展望において取り上げられた。
12)「正倉院文書注釈―造石山寺所解移牒符案（三の１）―」（査読付）	単著	平成28年3月	奈良女子大学古代学学術研究センター『古代学』第８号p. 42～p. 59頁	二冊の科研報告書『正倉院文書の訓読と注釈―造石山寺所解移牒符案（一）―　』『同（二）』の発展的続編である。日本最古の寺院造営資料のうち、造石山寺所と他機関との文書のやり取りを記録した解移牒符案の写真・釈文を提示し、訓読文・現代語訳と注釈を施した。一部補注も加え、注目すべき語法について考察を行った。正倉院文書を国語国文研究の研究資料として用いるときの基礎的研究となるものである。
13）「写経生・実務担当者の選択――「啓」という書式を選ぶ時―」	単著	平成29年3月	奈良女子大学古代学学術研究センター『漢字文化の受容―東アジア文化圏からみる手紙の表現と形式―』報告集、pp66～83	造石山寺解移牒符案の中にある一通の「啓」について、「解」でなく書状の「啓」で発信された要因を、文書の内容と返信文書の分析から特定した。加えて、「解」で発信されることが定められていた休暇・欠勤の申請を「啓」や書状形式で発信している8通について、発信された時の状況と発信後の文書の処理過程を解明し、「啓」や書状形式で発信した要因をも明らかにした。これらの検討によって、古代の律令文書行政の世界での「啓・書状」の位置づけの一端を示した。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
〔報告書〕 1）正倉院文書訓読による古代言語生活の解明	共著	平成22年3月	平成19年度科学研究費補助金基盤研究（C）（課題番号1920396）研究成果報告書　（平成19年～21年）	平成19年度科学研究費補助金　基盤研究（C）（課題番号1920396）の3カ年の研究報告書である。以下の3冊からなる。 Ⅰ　正倉院文書の訓読と注釈―造石山寺所解移牒符案（一）― 日本最古の寺院造営資料のうち、造石山寺所と他機関との文書のやり取りを記録した解移牒符案の写真・釈文を提示し、訓読文と注釈を施した。一部補説も加えた。正倉院文書を国語国文研究の研究資料として用いるときの基礎的研究となるものである。 （執筆　桑原祐子）A4版161頁 Ⅱ　正倉院文書の訓読と注釈―啓・書状― 正倉院文書中の啓・書状をすべて収録し、写真・釈文を提示し、訓読文と注釈を施した。 啓・書状を内容によって分類し、関連資料の解説も合わせて行った。日本の書状の歴史研究、書道史の研究のための基礎研究となるものである。 （執筆　黒田洋子）A4版360頁 Ⅲ　正倉院文書からたどる言葉の世界 正倉院文書の中から、国語国文学研究の観点から重要である語彙を取り上げ、その語を含む文書の訓読と注釈を行い、注目すべき語の考察を行った。文書の写真・釈文を提示している。更に、正倉院文書と日本古代の文献との比較研究に関わる論考2編を収録した。 （執筆　中川ゆかり）A4版95頁 以上の研究は、『日本語の研究』（日本語学会）第8巻3号の日本語学界の展望において注目された。
2）「正倉院文書訓読による日本語表記成立過程の解明」	共著	平成26年3月	平成22年度～25年度科学研究費補助金基盤研究（C）（課題番号22520467）研究成果報告書　研究代表：桑原祐子	平成22年～25年度科学研究費補助金　基盤研究（C）（課題番号22520467）の4カ年の研究報告書である。以下の２冊からなる。 Ⅰ　正倉院文書の訓読と注釈―造石山寺所解移牒符案（二）― 注釈篇は、日本最古の寺院造営資料のうち、造石山寺所と他機関との文書のやり取りを記録した解移牒符案の写真・釈文を提示し、訓読文・現代語訳と注釈を施した。一部補注も加え、注目すべき語法について考察を行った。正倉院文書を国語国文研究の研究資料として用いるときの基礎的研究となるものである。論考篇には、これらの資料に関わる４編の論考を収録した。 （執筆　桑原祐子）A4版179頁 Ⅱ　正倉院文書からたどる言葉の世界（二） 正倉院文書の中から、5通の文書を取りあげ、写真・釈文・訓読文・現代語訳を施し、その文書の背景を解説し、国語国文学研究の観点から注目すべき語の考察を行った。更に、正倉院文書と日本古代の文献や漢籍との比較研究に関わる論考2編を収録した。 （執筆　中川ゆかり）A4版142頁
3）「正倉院文書の読解を通した上代文学の表現の生成に関する研究」		平成29年3月	平成26年度～28年度科学研究費補助金基盤研究（C）（課題番号：26370220、代表者：中川ゆかり）研究報告書	『正倉院文書注釈―造石山寺所解移牒符案（三）――』 日本最古の寺院造営資料のうち、造石山寺所と他機関との文書のやり取りを記録した解移牒符案の写真・釈文を提示し、訓読文と注釈を施した。一部補説も加えた。正倉院文書を国語国文研究の研究資料として用いるときの基礎的研究となるものである。 （執筆　桑原祐子）A4版82頁

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
〔その他〕 栄原ゼミと私	単著	平成23年5月	大阪市立大学日本史学会 『市大日本史』第14号	日本古代史学界の中で正倉院文書研究を牽引してきた栄原永遠男先生の退任を記念して特集が組まれた。その中の一編として、最新の正倉院文書研究の場である「栄原ゼミ」の存在意義について国語学の立場から述べたものである。栄原ゼミで10年間研究をしてきた経験に基づき、ゼミが有意義な存在であることを述べた。
〔学会発表〕 1）正倉院文書にみる古代言語生活－「回復」と「治療」を表す表現－	－	平成19年10月	第60回萬葉学会全国大会 （於大阪市立大学）	正倉院文書及び奈良時代の文献資料（文学資料・歴史資料）中の病気の回復・治療を示す言葉をすべて調査し、その具体的な音形式を提示した。さらにそこに見られる表現の位相差を指摘した。この調査によって、新たに奈良時代まで遡らせることのできる語を提示し、合わせて正倉院文書の国語資料としての可能性を実証した。
2）道豊足の人事―「正倉院文書の訓読と注釈」の作業から	－	平成22年10月	正倉院文書研究会 第29会大会 （大阪市立大学）	近江石山寺造営資料における文書・帳簿の分析を通して、古代の下級官人の人事システムと人事の実態のずれを明らかにし、その背景には、律令文書主義の中で文書の整合性を保つための様々な調整が行われたことをも、文書の訂正状況や表現の差異から分析検討を行った。
3）正倉院文書の「早速」―和製漢語の生まれる場面―	－	平成23年12月	国語語彙史研究会 第99回大会 （大阪大学）	漢籍に例を見ない「早速」が和製漢語であることを正倉院文書・木簡の悉皆調査によって明らかにした。類義の副詞「早・速・急・火急」と比較対象させることによって、奈良時代の人々が、どのような場面で、誰に対して、どのような事情がある時に「早速」を使用するのかということを分析した。合わせて文学資料における使用実態も調査し、和製漢語がどのような場面で生まれるのかという、言葉の発生のプロセスを明らかにした。
4）正倉院文書の「運」と「漕」	－	平成26年11月	奈良女子大学古代学学術研究センター研究会 「正倉院文書研究の新たな試み」	文字を書くことが仕事であった古代の下級官人ちは、本来の漢語用法から逸脱しながらも、実務の現場にふさわしい漢字の使い方をしている。しかし、それは、彼らが漢語本来の用法を認識していなかった結果ではない。漢字の持つ機能を充分に理解したうえでの様々な工夫がそこにはあったと考えられる。そのような実態の一端を「運」と「漕」という言葉を通して明らかにし、日本的な漢字用法が生み出される背景を考えた。現代では「漕」は「コグ」とよまれるが、古代では水運による移動「ハコブ」を表していた。そこで、正倉院文書中の「運」と「漕」に着目し、その運用実態を調査し、加えて、漢字熟語「運漕」について、正倉院文書や延喜式には独自の用法があることを明らかにした。
5）「写経生・実務担当者の選択――「啓」という書式を選ぶ時―」		平成28年8月22日	第12回若手研究者支援プログラム「漢字文化の受容―東アジア文化圏からみる手紙の表現と形式―」	造石山寺解移牒符案の中にある一通の「啓」について、「解」でなく書状の「啓」で発信された要因を、文書の内容と返信文書の分析から特定した。加えて、「解」で発信されることが定められていた休暇・欠勤の申請を「啓」や書状形式で発信している8通について、発信された時の状況と発信後の文書の処理過程を解明し、「啓」や書状形式で発信した要因をも明らかにした。これらの検討によって、古代の律令文書行政の世界での「啓・書状」の位置づけの一端を示した。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
〔シンポジウム〕 １）正倉院文書と墨―韓国と日本の交流―	単独	平成21年3月	正倉院文書の文字と文化 （於釜山大学）	正倉院宝物中の新羅関蓮宝物の紹介と、それにまつわる文字資料の紹介を行い、特に新羅墨の形状にも関わる墨の助数詞「船」と「挺」の実態の調査についての報告を行った。墨の形状を反映していると考えられていた助数詞「船」は、ある特定の人物が使用していた助数詞であったことを報告した。合わせて、物を通じて日韓の交流についても言及した。
〔招待講演〕 1）古代言語資料としての正倉院文書	単独	平成23年3月	釜山大学日本研究所主催 （於釜山大学）	漢籍に例を見ない漢字熟語が正倉院文書の中には、しばしば見られる。このような漢字熟語について、誰がどのような場面で、誰に向かって使用したかということを分析していくと、使用者の心情や心理が明らかになり、和製漢語が生じる背景を考察することが可能になるということについて報告を行った。
「科研費申請」 韓国研究財団　土台基礎研究「日本正倉院文書と韓国文字資料の物品名の研究―物品の用度、単位、書体のＤＢ構築」	共同	平成23年8月	韓国研究財団 土台基礎研究	釜山大学日本研究所の研究チームが中心になって申請した研究プログラムである。日本の正倉院文書と韓国古代文字資料に見える物品名の用例を分析し、物品の用度・単位・書体をＤＢに構築し、古代日韓両国の文字文化と言語生活及び生活様式を再解釈できる基礎をつくり、後続研究の土台の提供を目的とする。日本側の一般協同研究員として参加した。

教　育　研　究　業　績　書

平成２９年3月３１日

氏名　　小　竹　光　夫

研　究　分　野	研　究　内　容　の　キ　ー　ワ　ー　ド
教科教育学	国語科教育　書写書道教育　教育方法　学習理論と評価 教師教育

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項		
事　項	年　月	概　要
1　教育方法の実践例 ・速書力育成に向けた聴写の方法についての改善	平成１７年度～平成１９年度	兵庫教育大学学校教育学部の学生を被験者として、情報化時代に適合する速書力（音声言語を聞き取りながら書写する字数の向上）についての実験、測定を行った。書き写すだけでなく、キーワードを抽出しながらメモとして記録する。そして、その資料を中心に情報を再生産していくというサイクルの重要性について試論をまとめた。また、その具現化として、兵庫県相生市立相生小学校の児童を対象とした実験授業を公開し、新しい時代の書写力の育成として評価された。
・書写・書道教育での学習内容を、一般の日常生活の中に敷衍して活用できるよう工夫した授業方法の改善	平成２０年度～現在に至る	・兵庫教育大学学校教育学部の学生、兵庫教育大学学校教育研究科の院生を対象とする講義、演習において作成した資料の中で、書写・書道教育での学習内容を、一般の日常生活の中に敷衍して活用できるよう工夫した。具体的には、ともすれば「書き方の伝授」に陥りがちな書写・書道の学習において、常に対人という意識を盛り込み、「文字を書くことはコミュニケーションの一環として重要な行為である」との視点を中核とした授業方法を提示した。 ・奈良学園大学人間教育学部に着任後も、講義及び演習において作成した資料の中で、書写・書道教育での学習内容を、一般の日常生活の中に敷衍して活用できるよう工夫している。特にテキストとなる学習資料には具体的な事例を数多く導入し、「文字を書くことはコミュニケーションの一環として重要な行為である」との視点を重要視している。
・学生の授業に対するコメントへの対応	平成２年度～現在に至る	・大部分の授業科目において、毎時の提出物を課しているが、それに添えられるコメントに総て回答を返すことを試みている。最小学生数 5 名、最大学生数２３０名、対応によって学生の学習意欲が促進されている。回答字数、平均 60 字。 ・奈良学園大学人間教育学部に着任後も、授業コメントに対する回答は継続しており、授業評価においても学生たちの支持を受けている。
2　教材・学習資料の作成	平成２年度～現在に至る	・着任以来、兵庫教育大学学校教育学部、兵庫教育大学学校教育研究科の総ての授業科目に関して授業資料（教材等々を含んだサブノート形式）を、毎年度、学習者に適合させながら作成してきた。毎年実施される本学の授業評価においても、毎回、総ての授業科目を対象として実施される授業評価においても、この授業資料に対する評価は高い。兵庫教育大学学校教育研究科の「書写教育論」（現「文字の手書き行為実践研究」）、「書写教育論演習」（現「文字の手書き行為実践研究演習））での授業資料は、半期で平均１００ページの冊子となる。 ・奈良学園大学人間教育学部に着任後も、授業資料の改善・工夫は続けており、平成２６年度開設科目「書写・書道入門」においては、総ページ数１０１の大冊となった。

３　教育上の能力に関する大学等の評価（兵庫教育大学学校教育学部学生、兵庫教育大学学校教育研究科院生、並びに奈良学園大学人間教育学部学生による授業評価）	平成１４年度～現在に至る	・本学のＦＤ推進活動の一環である学生による授業評価においても、各授業科目ともに平均４以上（全体平均３．７程度）の評価を維持している。特に学生側から、改善に関する指摘等はない。 ・奈良学園大学人間教育学部に着任後も、各授業科目ともに平均４以上（全体平均３．７程度）の評価を維持している。特に学生側から、改善に関する指摘等はない。
４　実務の経験を有する者についての特記事項 公開講座講師 王寺町リーベルカレッジ	平成２６年７月	奈良学園大学と王寺町が連携して行う公開講座の第６回を担当し、「カメラを持ってでかけよう～路傍の語り部との対話」というテーマで、石碑等書的文化財について講話を行った。
免許状更新講習講師 「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」に関する国語科授業づくり【兵庫教育大学開催】	平成２１年８月	現代日本語の特質などについて理解を深めるために、古い日本の文化や言語とその歴史的な変遷等との関連について考えながら、国語教育の基礎事項を見つめ直した。具体的には、新しい指導要領の内容で示される「昔の人のものの見方や感じ方」を知り、「語感、言葉の使い方に対する感覚」を磨き、「時間の経過による言葉の変化や世代による言葉の違い」や語句・文字の「由来や特質」に関心を持ち、理解を深めるために、どのような指導が可能か、その方策などについて論述し、演習を行った。
文字を手書きすることの意義と価値（書写）【兵庫教育大学開催】	平成２１年８月	文字離れと言うことが社会問題のように取り上げられて久しいが、「文字を書く」という立場での解決策は、数多くは提示されていない。本講習においては、国語科書写が果たすべき役割と授業実践の在り方を理解すると共に、学習者のみならず指導者自身が文字言語への興味関心を高め、文字を手書きすることの重要性を再認識していくことができるような学習展開を明らかにした。さらに、硬・毛筆の関連学習についても、一層の理解が深められるような講義・演習を行った。
芸術科書道の理論と実践 【兵庫教育大学開催】	平成２１年８月	芸術科において、書道選択生の減少や学習指導を維持することの難しさ（体制・環境を含めて）が話題となることが多い。生徒数の少子化による自然減はあるとしても、それ以外の要因が考えられる場合は早期の点検と対策が必要であろう。本講習においては、いわゆる学習指導のあり方という基礎的・基本的な部分から始めて、中学校国語科書写との接続や硬・毛筆の関連学習についての一層の理解が深められるような講義・演習を行った。
文字を手書きすることの意義と価値（書写） 【兵庫教育大学開催】	平成２１年１２月	文字離れと言うことが社会問題のように取り上げられて久しいが、「文字を書く」という立場での解決策は、数多くは提示されていない。本講習においては、国語科書写が果たすべき役割と授業実践の在り方を理解すると共に、学習者のみならず指導者自身が文字言語への興味関心を高め、文字を手書きすることの重要性を再認識していくことができるような学習展開を明らかにした。さらに、硬・毛筆の関連学習についても、一層の理解が深められるような講義・演習を行った。
文字を手書きすることの意義と価値（書写） 【兵庫教育大学開催】	平成２２年８月	文字離れと言うことが社会問題のように取り上げられて久しいが、「文字を書く」という立場での解決策は、数多くは提示されていない。本講習においては、国語科書写が果たすべき役割と授業実践の在り方を理解すると共に、学習者のみならず指導者自身が文字言語への興味関心を高め、文字を手書きすることの重要性を再認識していくことができるような学習展開を明らかにした。さらに、硬・毛筆の関連学習についても、一層の理解が深められるような講義・演習を行った。

芸術科書道の理論と実践 【兵庫教育大学開催】	平成２２年８月	芸術科において、書道選択生の減少や学習指導を維持することの難しさ（体制・環境を含めて）が話題となることが多い。生徒数の少子化による自然減はあるとしても、それ以外の要因が考えられる場合は早期の点検と対策が必要であろう。本講習においては、いわゆる学習指導のあり方という基礎的・基本的な部分から始めて、中学校国語科書写との接続や硬・毛筆の関連学習についての一層の理解が深められるような講義・演習を行った。
文字を手書きすることの意義と価値（書写）【兵庫教育大学開催】	平成２３年８月	文字離れと言うことが社会問題のように取り上げられて久しいが、「文字を書く」という立場での解決策は、数多くは提示されていない。本講習においては、国語科書写が果たすべき役割と授業実践の在り方を理解すると共に、学習者のみならず指導者自身が文字言語への興味関心を高め、文字を手書きすることの重要性を再認識していくことができるような学習展開を明らかにした。さらに、硬・毛筆の関連学習についても、一層の理解が深められるような講義・演習を行った。
芸術科書道の理論と実践 【兵庫教育大学開催】	平成２３年８月	芸術科において、書道選択生の減少や学習指導を維持することの難しさ（体制・環境を含めて）が話題となることが多い。生徒数の少子化による自然減はあるとしても、それ以外の要因が考えられる場合は早期の点検と対策が必要であろう。本講習においては、いわゆる学習指導のあり方という基礎的・基本的な部分から始めて、中学校国語科書写との接続や硬・毛筆の関連学習についての一層の理解が深められるような講義・演習を行った。
文字を手書きすることの意義と価値（書写）【兵庫教育大学開催】	平成２４年８月	文字離れと言うことが社会問題のように取り上げられて久しいが、「文字を書く」という立場での解決策は、数多くは提示されていない。本講習においては、国語科書写が果たすべき役割と授業実践の在り方を理解すると共に、学習者のみならず指導者自身が文字言語への興味関心を高め、文字を手書きすることの重要性を再認識していくことができるような学習展開を明らかにした。さらに、硬・毛筆の関連学習についても、一層の理解が深められるような講義・演習を行った。
文字を手書きすることの意義と価値（書写）【兵庫教育大学開催】	平成２５年８月	文字離れと言うことが社会問題のように取り上げられて久しいが、「文字を書く」という立場での解決策は、数多くは提示されていない。本講習においては、国語科書写が果たすべき役割と授業実践の在り方を理解すると共に、学習者のみならず指導者自身が文字言語への興味関心を高め、文字を手書きすることの重要性を再認識していくことができるような学習展開を明らかにした。さらに、硬・毛筆の関連学習についても、一層の理解が深められるような講義・演習を行った。
文字を手書きすることの意義と価値（書写）【奈良学園大学開催】	平成２７年８月	文字離れと言うことが社会問題のように取り上げられて久しいが、「文字を書く」という立場での解決策は、数多くは提示されていない。本講習においては、国語科書写が果たすべき役割と授業実践の在り方を理解すると共に、学習者のみならず指導者自身が文字言語への興味関心を高め、文字を手書きすることの重要性を再認識していくことができるような学習展開を明らかにした。さらに、硬・毛筆の関連学習についても、一層の理解が深められるような講義・演習を行った。
文字を手書きすることの意義と価値（書写）【奈良学園大学開催】	平成２８年８月	文字離れと言うことが社会問題のように取り上げられて久しいが、「文字を書く」という立場での解決策は、数多くは提示されていない。本講習においては、国語科書写が果たすべき役割と授業実践の在り方を理解すると共に、学習者のみならず指導者自身が文字言語への興味関心を高め、文字を手書きすることの重要性を再認識していくことができるような学習展開を明らかにした。さらに、硬・毛筆の関連学習についても、一層の理解が深められるような講義・演習を行った。

兵庫県教育委員会認定講習講師 国語	平成１９年８月	我々は当たり前のように「国語」という言葉を使っており、そして使い慣れてしまっているため、漠然と学習指導を行っているのではないかとの投げかけから始めた。極論すれば、「国語の力」をどう育て、高めていくかについての方策についても、具体的に提示できないのではないかとさえ感じられるとの問題提起をもとに、一体、「国語」とは何か、「ことば」とは何か、「文字」とは何かを考える場を設定した。原点に立ち返って考えることの必要性、検証し確認していく場として位置づけられるよう設定した。
国語	平成２４年８月	我々は当たり前のように「国語」という言葉を使っており、そして使い慣れてしまっているため、漠然と学習指導を行っているのではないかとの投げかけから始めた。極論すれば、「国語の力」をどう育て、高めていくかについての方策についても、具体的に提示できないのではないかとさえ感じられるとの問題提起をもとに、一体、「国語」とは何か、「ことば」とは何か、「文字」とは何かを考える場を設定した。原点に立ち返って考えることの必要性、検証し確認していく場として位置づけられるよう設定した。
研修会・講習会講師 兵庫県中学校書写教育研究大会	平成１６年１０月～平成２０年１０月	研究大会の助言者として継続的な研修・指導に取り組んだ。また研究大会当日は講師として講演を行った。 大会講師として講演を行った。新しい時代の国語科書写の方向性について明らかにし、具体的な事例とともに周知徹底を図った。
中・西播地区小学校書写研究大会	平成１９年１０月	大会講師として講演を行った。新しい時代の国語科書写の方向性について明らかにし、具体的な事例とともに周知徹底を図った。
京都市立明親小学校授業研究会	平成２０年８月	「書くことに喜びを感じる授業」というテーマのもと、理論的な部分の口述と演習を行った。
兵庫県中学校書写教育研究大会	平成２０年８月	大会講師として講演を行った。新しい時代の国語科書写の方向性について明らかにし、具体的な事例とともに周知徹底を図った。
第１７回墨華香まちフェスティバルみなぎの書道展	平成２０年９月	審査委員（審査委員長）を務めた。出品点数１万点余りの最終審査と、講評を行った。
兵庫県立高砂南高等学校高大連携事業研修会講師	平成２１年１月	教師教育に関する現職教育の研修会講師。教師としての基本姿勢、授業等に取り組む視点や態度の構築について論述し、理解を深めた。
鳥取県高等学校書道教育研究会総会	平成２１年５月	総会講師として、２１世紀の書道教育の方向性について論述し、現職教員の意見交流に際して助言を行った。
兵庫県上郡町立山野里小学校授業研究会	平成２１年６月	国語科の授業研究会講師・助言者。「スイミー」の公開授業を観察し、以降の授業研究において助言を行った。
京都市立明親小学校授業研究会	平成２１年８月	「書くことに喜びを感じる授業」というテーマのもと、理論的な部分の口述と演習を行った。
たつの市立西来栖小学校授業研究会	平成２１年９月	書写の授業研究会講師・助言者。低学年の公開授業を観察し、以降の授業研究において助言を行った。
第９回兵庫県芸術三科合同研究大会シンポジウム「生きる力を拓く芸術教育」	平成２２年５月	シンポジスト。高等学校のおける芸術教育の在り方と展望について提案し、討論を行った。

たつの市立西来栖小学校授業研究会	平成２２年５月	書写の授業研究会講師・助言者。高学年の公開授業を観察し、以降の授業研究において助言を行った。
兵庫県立出石高等学校地域オープン講座	平成２２年５月	高等学校２年生に、地域の一般参加者を加えたオープン講座で授業講師を務めた。国語科書写を基盤とした書道学習の展開について実践授業を行った。
たつの市立西来栖小学校授業研究会	平成２２年５月	書写の授業研究会講師・助言者。中学年の公開授業を観察し、以降の授業研究において助言を行った。
たつの市立西来栖小学校授業研究会	平成２２年８月	書写の授業研究会講師・助言者。示範授業を行い、以降の授業研究において助言を行った。
京都市立明親小学校授業研究会	平成２２年８月	「書くことに喜びを感じる授業」というテーマのもと、理論的な部分の口述と演習を行った。
多可郡書写指導研修	平成２２年８月	多可郡の小・中学校書写担当者を対象として、書写教育の在り方を論述し、毛筆書写に関する基礎的な演習を行った。
明石市立小・養護学校書写教育担当者会研修会	平成２２年１０月	明石市の小学校書写担当者、及び養護学校書写教育担当者を対象として、書写教育の在り方を論述し、示範授業と毛筆書写に関する基礎的な演習を行った。
兵庫県立出石高等学校地域オープン講座	平成２２年１０月	高等学校２年生に、地域の一般参加者を加えたオープン講座で授業講師を務めた。地域性を生かした書道学習の展開について実践授業を行った。
播磨西地区小学校書写教育研究大会	平成２２年１０月	大会講師として講演を行った。新しい時代の国語科書写の方向性について明らかにし、具体的な事例とともに周知徹底を図った。
兵庫県立出石高等学校地域オープン講座	平成２３年２月	高等学校２年生に、地域の一般参加者を加えたオープン講座で授業講師を務めた。工芸的な分野（墨流し）とのコラボレーションを図った作品の創作について実践授業を行った。
京都市立明親小学校授業研究会	平成２３年８月	「書くことに喜びを感じる授業」というテーマのもと、理論的な部分の口述と演習を行った。の事例を提示し、実践・演習を行った。
明石市立小・養護学校書写教育担当者会研修会	平成２３年１０月	明石市の小学校書写担当者、及び養護学校書写教育担当者を対象として、書写教育の在り方を論述し、示範授業と毛筆書写に関する基礎的な演習を行った。
兵庫教育大学附属中学校　キャリア総合科目「書道」	平成２４年４～１０月	キャリア選択科目の特別講師として務めた。中学校２・３年生の選択履修者に対し、基本的な毛筆の運用、篆刻、染色等々を指導し、発表会へと導いた。 特別講師催短期研修。小・中学校における国語科書写の学習について論述し、具体的な演習とともに理解を深めた。
京都市立明親小学校授業研究会	平成２４年８月	「書くことに喜びを感じる授業」というテーマのもと、小学校３年生を対象とした示範授業を行った。授業後、授業研究会の助言者を務めた。
京都市立南浜小学校授業研究会	平成２５年８月	「書くことに喜びを感じる書写の授業」というテーマのもと、理論的な部分の口述と演習を行った。の事例を提示し、実践・演習を行った。
東京都教職員センター　平成２５年度教科等・教育課題研修	平成２５年８月	連携研修「書写・書道Ⅰ・Ⅱ　―言語活動を重視した授業の特色と改善―」の講師として、授業改善の方法等について指導し、具体的な実践について演習を行った。

奈良学園大学オープンキャンパス体験授業	平成２６年７月	奈良学園大学オープンキャンパスにおいて、体験授業「漂ってみよう～不思議な手書き文字の世界を！」の授業者として示範を行い、具体的実践の方法を提示・公開した。
ビーンズツリー２１・ビーンズ２１合同研修会	平成２６年８月	大阪府下の校長、並びに管理職の合同研修会において、「今、求められている授業改革」というテーマで講演を行い、実践に対する質疑応答に応じた。
東京都教職員センター　平成２６年度教科等・教育課題研修	平成２６年８月	連携研修「書写・書道Ⅰ・Ⅱ　―書写・書道の指導法研究―」の講師として、授業改善の方法等について指導し、具体的な実践について演習を行った。
第３回三田市小学校国語担当者会並びに三田市教育研究グループ国語部会研修会	平成２６年１０月	三田市立三田小学校神野佳代子教諭の提案授業「サラダを作ってりっちゃんに伝えよう（１年生）」を観察し、事後研究会において言語活動を中心とした授業研究のあり方について助言し、講話を行った。
東京都教職員センター　平成２７年度教科等・教育課題研修	平成２７年８月	連携研修「書写・書道Ⅰ・Ⅱ　―書写・書道の指導法研究―」の講師として、授業改善の方法等について指導し、具体的な実践について演習を行った。主たるテーマは、以下の通り。 ・「文字を書くことの意義」の理解 ・自己の指導法の検証・改善について ・書写・書道教育におけるＩＣＴ活用の有用性の理解及び演習
２０１５年度 箕面自由学園小学校公開授業研究会「互いの思考を分かち合う子どもの育成」	平成２８年２月	箕面自由学園小学校 公開授業研究会「互いの思考を分かち合う子どもの育成」の講演会講師。 「思考力・表現力を育む教育の原点」 ～対談「私を導いてくださった恩師の言葉」～ 対談者 梶田叡一（前中央教育審議会副会長・前兵庫教育大学学長・奈良学園大学学長） 小竹光夫（兵庫教育大学名誉教授・奈良学園大学教授） ※コーディネーター 阿部秀高（箕面自由学園小学校長）
２０１６年度豊中市野畑小学校研修会	平成２８年９月	校内研修会の講師として、「主体的な学びとは」とのテーマで講演し、以降、質疑と協議を行った。「主体的な学びとは」の裏面に隠れているのは、昨今話題となっているアクティブラーニングであるが、それを表面化させるのではなく、教師集団の学びの形や高まりに焦点をあてた研修会とした。
５　その他 兵庫教育大学における 学位（修士）指導実績	平成２年度～平成２４年度	学位論文テーマと指導内容 小学校書写教育１名（副査） 小学校における文字習得に関しての研究であったので、低学年の文字教育について助言・指導を行った。 中学校書写教育１名（副査） 毛筆執筆法に関しての研究であったので、歴史的変遷や意義・価値について助言。指導を行った。 高等学校書道教育１名（主査） 漢字仮名交じりの書に関しての研究であったので、教材の価値や指導法、ならびに論拠とする古典の設定の方法について助言・指導を行った。 作家論（須田剋太・河東碧梧桐）２名（副査） 作品鑑賞の方法や、書道史的価値、さらには他の書家との比較研究の方法について助言・指導を行った。 情報化時代の言語機能３名（副査１、主査２） コンピュータの活用について、情報リテラシーについて助言・指導を行った。さらに、文字の手書き行為と印字・活字文化の捉え方について助言・指導を行った。

		言語事項と「読むこと」「書くこと」「聞くこと」１名（主査） 国語科と近接する部分であるので、言語事項に関する基本的な理解と、各領域との関連について助言・指導を行った。特に各個が独立して存在するのではなく、密接な繋がりの中で機能していくことについて、参考資料等をもとに助言を与えた。

職務上の実績に関する事項

事項	年月	概要
1　資格、免許	昭和４６年３月	中学校教諭２級普通免許状（国語）
	昭和４６年３月	高等学校教諭２級普通免許状（書道） 15 年 0 単位の申請で高等学校教諭１級普通免許状（書道）
	平成元年 4 月	法改正による 中学校教諭２種免許状（国語） 高等学校教諭専修免許状（書道）
2　特許		なし
3　実務の経験を有する者についての特記事項		なし
4　その他		なし

研究業績等に関する事項

	著書、学術論文等の名称	単著共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会発表等の名称	概要
（著書）					
01	明解　書写教育	共著	平成 21.4	全国大学書写書道教育学会編	教員養成における小・中学校書写指導の在り方、実践についてまとめ、編成されたものである。総ページ数１４１ページ。執筆分担を行っている。該当ページは以下の通りである。 Ｂ５版　全１４１頁 共著者　加藤祐司　浦野俊則　鈴木慶子　宮澤正明　久米公　押木秀樹　青山浩之　広瀬裕之　小竹光夫　長野秀章　松本仁志　松本貴子　津村幸恵　杉崎哲子 本人担当部分　pp. 12-14 単著 内容　「Ⅱ　書写授業の理論と実践　1-（2）～（3）」主に小学校の実践をまとめて解説した。
02	実技教育・実習ガイドブック	共著	平成 25.3	兵庫教育大学　実技教育研究指導センター	小・中学校における実技に関わる教科目について、指導者の実技力・授業力向上の観点から、学習指導の在り方を論じている。特に実技教育に関する教育実習の手引きが皆無に近いことから、本学学校教育センター（教育実習担当）との連携をとりながらまとめ上げている。 Ａ４版　全９２頁 共著者　河邊　昭子　初田隆　永木耕介　松下健二　前芝武史　新山真弓　小竹光夫 本人担当部分　pp. 77-91 単著 内容　書写指導のあり方についての手引きとなる内容を執筆した。

	著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会発表等の名称	概　　要
03	見つける　わかる　できる ３Step で変わる 実技教科指導ガイドブック	共著	平成 26.4	明治図書出版株式会社	小・中学校における実技に関わる教科目について、指導者の実技力・授業力向上の観点から、学習指導の具体的方法を提示・提案している。特に実技教育に関する教育実習の手引きが皆無に近く、教員になるという段階から、教員として高まるという分野までを包括した総合的な見地から論述している。 編著　小竹光夫 著者　兵庫教育大学実技教育研究指導センター Ａ５版　全１５１頁 共著者　上原禎弘　河邊昭子　初田隆　筒井茂喜　永木耕介　前芝武史　新山真弓　小竹光夫 本人担当部分　pp. 01-05 単著 pp. 09-10 単著 pp. 13-29 単著 pp. 119-140 単著 pp. 147-149 単著 内容　書写指導のあり方、ならびに教育話法・板書指導について執筆した。
（学術論文）					
01	書写における授業観察の視点 （査読付）	単著	平成 25.3	言語表現研究（兵庫教育大学言語表現学会） 第 29 号 pp. 29-41	いわゆる実技系の書写学習においては、「優れた実技力を持つ指導者が、良き授業者である」との意識が多くの部分で流通している。そのため、実技力向上に偏りがちで、授業研究もなされない状態が続いている。そのような中、効率的な書写を行うための書写力の習得の場である授業を対象として分析と考察を行い、授業観察の視点に関する必須の要件について論じ、提案を行っている。
02	文字を手書きすることの意義と価値 （査読付）	単著	平成 26.4	人間教育学研究（奈良学園大学人間教育学会） 創刊号 pp. 79-88	「書は人なり」という言葉が安易に口にされ、それがまるで手書き文字の価値であるかのように言い伝えられている風潮がある。確かに人間の手によって創出される文字は、さまざまな様相・要素を帯びているが、その磨かれないままの性を個性と位置付けることは、多くの誤解を生じさせる危険性を含んでいる。本論では、その「書は人なり」という文言を起点としながら、文字を手書きするという行為に客観的な妥当性を与えようとしている。
03	伝統的書写指導の誤解と問題点の指摘　Ⅱ	単著	平成 28.3	奈良学園大学紀要（奈良学園大学） 第４集 pp. 11-21	本論Ⅰにおいても問題提起したことであるが、書写指導は用具・用材の類似によって、書道での学習法がそのままにスライドされることが多い。しかし、それらの多くには理論的な裏付けも希薄な、いわゆる慣習として定着したものがある。本論Ⅱにおいては、それらの中の左手書字の学習者への対応を、「均一平等な環境下での学び」という観点で取り上げ、問題点の提起と解決法について論及している。

	著書、学術論文等の名称	単著共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会発表等の名称	概　　要
04	一碑百想Ⅱ　―書的文化財の発掘と教材化への試み―	単著	平成 28.3	奈良学園大学紀要（奈良学園大学）第６集 pp. 1-11	本論「一碑百想」は地域に散在する石碑等の書的文化財の焦点を当て、その発掘と文化財としての価値を明らかにするとともに、高等学校芸術科書道の生徒用教材集として編纂する目的で立ち上げられている。Ⅰにおいては、教材集としての概要と主として広島県所在の石碑群の年表作成を行ったが、本論Ⅱでは研究としての意義づけと、文化財としての価値の判断基準に論及し、研究としての体系を整えることとした。
05	伝統的書写指導の誤解と問題点の指摘　Ⅲ　―数的優位の方法を反転させ、数的劣位の側の対応とする矛盾について―（査読付）	共著	平成 28.12	人間教育学研究（日本人間教育学会）第４号 pp. 79-88	本論Ⅱでも触れた左手書字における課題について、教育現場で展開される種々の方法・指導言に焦点を当て、その問題点と解決の方法について論述し、その具体を提示した。特に右手書字の指導法を反転するだけで、左手書字への対応とする従来の方法は問題点も多く、根本的な手指の運動特性との関連で考えていかなければならないことを例示し、提案とした。 共著者　小竹光夫，竹中優志 全体に関わっているため担当抽出不可能
（その他）					
「研究報告書」					
01	小学校における「ことばの力」の育成	共著	平成 21.3	平成 20 年度　大学院カリキュラム改革プロジェクト研究報告書（兵庫教育大学）	PISA 型読解力が問題点として指摘され中、児童・生徒の論理的思考力や想像力の必要性が喫緊の課題となっている。学習指導要領で言う「ことばの力の育成」は、その源ともなるものであるが、それは児童・生徒に対してだけ向けられるものではあるまい。本プロジェクト研究では、実際の教育現場での授業実践実践を対象として、指導者である教師側の言語力育成を主眼として問題提起を行っている。主要には、 ①導入時の指導者側話法 ②題材提示時における指導者側の話法 ③児童への発問の際の話法 ④児童の発言に対する話法 の４項目から考察し、大学院授業科目新設への提案、提言を行っている。 （研究代表者　小竹光夫） （共同研究者）野本立人、伊崎一夫、神野佳代子、名村嘉将、阿部秀高、高田正大
02	教員養成プログラムにおける「創発のメソッド」の構築	共著	平成 23.3	科学研究費　挑戦的萌芽研究報告書プロジェクトコード KA21653101 総ページ数 118	急速な情報化の中、国際化・グローバル化という課題も、極めて容易な形で実現可能な時代を迎えている。そのため、いわゆる日本人としての自覚や意識は、鍛えられないままに大海に放り出されようとしているかに見える。卑近な例であるが、「全国学力・学習状況調査」の集計・分析データも「数字」として一人歩きする場合が多く、「活用」や「習得」の部分で問題とされた「自らの思考や行動を論理的に客観視できないという脆弱さ」は指摘されるものの、数字を開示するという論議や短絡的な競争理論への危惧の中に埋没しがちであり、日々の学習指導の在り方という具体性には至っていないのが現状であろう。換言すれば、自らの思考や行動を論理的に客観視できないという脆弱さとは、人間という個体としての行動と知の不整合、遊離でもあると考えられる。以上のような

	著書、学術論文等の名称	単著共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会発表等の名称	概　　要
					欠落によって、「国際的な競争の中で勝ち抜いていく力」の必要性が叫ばれる今日において、競争以前の自らの存在や価値を明らかにすることさえ不可能としている。「PISA 型読解力」でさえも国語科における「読解力」と重ねられ、教育現場では混用が生じている場合もある。本研究においては読解リテラシーに偏りがちな「PISA 型読解力」を本来の立場から見直し、数学的・科学的なリテラシーを含めながら再検証していく立場をとる。その上に立って、「児童生徒が社会の中で生き抜いていく過程において、必要とするであろう活用力」の総体を明らかにし、その中から教員養成課程において教師側の資質として扱うべき問題を抽出し、教員養成プログラムの具体的な授業実践の中で変容を測定し、効果を検証して報告書としてまとめた。 （研究代表者　22 年度　梶田叡一 23 年度　小竹光夫） （共同研究者）米田豊、堀江祐爾、濱中裕明
「学校・研究室紀要、教育実践論文」					
01	話してみませんか，書写のこと	単著	平成 16.1～平成 19.7	書道美術新聞（萱原書房）	いわゆる書き方教育のみに止まって学習の活性化が図れない現状に対し，新たな視点での書写・書道教育の在り方や方法を提示した。書写・書道教育に関わる実践者を対象として，文字を手書きすることに関しての提言，及び具体的な学習指導の在り方と授業研究の視点，さらには実践の中から導き出せる理論と理論構築の方法について，月１回の連載で論述した。平均原稿量 400 字詰め原稿用紙×10 枚、連載総数計は 43 回である。
02	文字を手書きすることについての…備忘言志録	単著	平成 22.1～平成 24.3	書道美術新聞（萱原書房）	情報化時代の到来によって，文字を手書きする分野（書写・書道教育）には，混迷と混乱が起こり始めている。以前のように「実用」というキーワードでは押し切れなくなった文字を手書きすることの必要性を，意義と価値という視点で再構築し，理論と実践を融合させていこうとする目的の下で論述されている。特に対象を書写・書道教育に関わる実践者（教員・社会教育分野での指導者）としているため，平易かつ一般的な用語を用いた論述を進めている。新聞発刊に合わせた月２回の連載で，平均原稿量 400 字詰め原稿用紙×10 枚、連載総計は 48 回である。
「初等・中等教育関係の教科書の編集・執筆」					
01	小学校教科書 『新版　書写』	単著	平成 14 年版～現在に至る	教育出版株式会社	編集委員として全体のプロット作成に関わった。また個々の教材の設定、並びに解説について執筆した。
	『書写』				編集委員として全体のプロット作成に関わった。また個々の教材の設定、並びに解説について執筆した。
	『書写』				編集委員として全体のプロット作成に関わった。また個々の教材の設定、並びに解説について執筆した。
	『小学　書写』	編著	平成 14 年版～25 年版	教育出版株式会社	編集委員として全体のプロット作成に関わった。また個々の教材の設定、並びに解説について執筆した。平成 14 年版については、毛筆手本教材の揮毫を行った。

教　育　研　究　業　績　書

平成 29 年 3 月 31 日

氏名　善野　八千子

研　究　分　野	研　究　内　容　の　キ　ー　ワ　ー　ド
教育学	学校・学級経営、生活科、教員の力量形成

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項

事　項	年月日	概　　要
1　教育方法の実践例 ・リフレクションカードを活用した授業のサポート 及びグループディスカッションの実施	平成 20 年 4 月～現在に至る	奈良教育大学兼任講師として担当の「初等教科教育法（生活）」(3 回生)（教職科目、３年次配当、半期、必修 2 単位)、奈良学園大学　教授として担当の「人間教育開発力実践演習ⅠⅡ」(１～2 回生)（専門科目、１～2 年次配当、通年、選択 1 単位)、において、実践した。 毎時限の最後に、学習の定着のためにリフレクションカードによるフィードバックを実施した。毎回、学生が記述して提出したリフレクションカードに、コメント評価を記載。次回に返却し、導入時に前回の復習として活用した。1 枚のカードで当該科目のシラバス全体の振り返りとなり、学生自身が毎回の自己の学修成果と課題を明確にできた。 グループディスカッションについては、初回は、ペアワークとし、徐々に 5～6 人グループで行った。テーマに応じた協同的な学びの姿が見られ、話し合い後に発表することから、プレゼンテーション力が高まった。授業アンケート結果からも「自分と違う意見や考えによって理解が深まった」等の学生の満足度がきわめて高かった。
	平成 22 年 4 月～平成 26 年 3 月まで	奈良文化女子短期大学　幼児教育学科の教授として担当の「教育学概論」(1 回生)（専門科目、1 年次配当、半期、必修 2 単位)、「教育制度論」(専門科目、1 年次配当、半期、必修 2 単位)、「教職実践演習」(専門科目、2 年次配当、半期、必修 1 単位）において、実践した。 毎時限の最後に、学習の定着のためにリフレクションカードによるフィードバックを実施した。毎回、学生が記述して提出したリフレクションカードに、コメント及び A 評価を記載。次回に返却し、導入時に前回の復習として活用した。承認や賞賛の体験が乏しい学生にとって意欲の高まりが顕著に見られた。1 枚のカードで当該科目のシラバス全体の振り返りとなることから、学生自身が自己の学習成果と課題を明確にすることができた。グループディスカッションについては、少人数から徐々に 5～6 人グループで行った。話し合い後に発表することから、プレゼンテーション力が高まった。授業アンケート結果から「授業満足度は、全クラス 97%以上であった。
・毎回の復習テストを活用した学習の定着の工夫	平成 22 年 4 月 ～平成 26 年 3 月まで	奈良文化女子短期大学　幼児教育学科の教授として担当の専門科目、「教育制度論」(専門科目、1 年次配当、半期、必修 2 単位）において、学習の定着を図るために、毎回の講義導入において復習ミニテストを実施したところ、履修者の相当数において、当該科目の履修の前後を比較すると、復習の習慣化と学習の定着度が向上した。

・予習レポートの活用と授業設計	平成 23 年 4 月 ～平成 26 年 3 月まで	奈良文化女子短期大学　幼児教育学科の教授として担当の専門科目、「教育学概論」（1 回生）（専門科目、1 年次配当、半期、必修 2 単位）において、予習習慣の定着のために毎回の予習レポート「子ども情報カード」を実施した。学生は、シラバスに関連した子どもに関するニュース及び自己の考えを記述してくる。毎回の講義の冒頭で発表させることで、学生同士の関心意欲が喚起できる。また、教員は学生の実態を把握し、配慮した授業設計を行うことができる。履修者の相当数において、予習の習慣化と学習課題に対する関心意欲の向上が見られた。
2　作成した教科書、教材		
・「学校評価を活かした学校改善の秘策」（再掲）	平成 17 年 4 月～平成 26 年 3 月まで	奈良文化女子短期大学　幼児教育学科　教授として担当の「教育原理（平成 20 年 3 月まで）、教育学概論（平成 20 年 4 月から科目名変更）」（専門科目、1 年次配当、半期、必修２単位）、において使用している。教員の資質向上のための学校改善の方策について、評価の運用及び実践事例の内容を示した。学生は、毎回の講義で 10 分間読解し、本時の目標に関わる章について、気づき及び疑問を発表し、教育の現状及びこれからの教育課題について意欲的な対話が可能になった。
・学校力・教師力を高める学校評価（再掲）	平成 22 年 4 月～平成 26 年 3 月まで	奈良文化女子短期大学　幼児教育学科　教授として担当の「教育制度論」（専門科目、2 年次配当、半期、必修２単位）において、使用した。教育制度における全容から、とりわけ学校評価の目的及び信頼構築の有様と実践事例の内容を教育制度の視点から示した。学生は、理解の困難な制度についても、公教育における制度のや現代的課題に関心を深めた。また、具体的な学校現場の事例を通して理解した。
・小学校教科用図書「あたらしいせいかつ」	平成 23 年 4 月～現在に至る	平成 23 年度用、平成 27 年度用小学校生活科教科用図書　採択された市町村立小学校及び私立小学校の第 1 学年・第 2 学年に於いて、使用されている。
・キャリア教育読本「コドモタチへの想い」（再掲）	平成 23 年 4 月～平成 26 年 3 月まで	奈良文化女子短期大学　幼児教育学科　教授として担当の「キャリアデザイン演習」（専門科目、1 年次配当、半期、選択１単位）において、使用した。就業力向上のために、仕事内容ややりがい等の具体的事例について示した。学生は、保育・教育の今を知り、教育現場の実際や課題を検討することが可能となった。
・幼児期と児童期の接続カリキュラムの開発（再掲）	平成 23 年 4 月～平成 26 年 3 月まで	奈良文化女子短期大学　幼児教育学科　教授として担当の「教職実践演習」（専門科目、２年次配当、半期、必修１単位）において、使用した。幼児期から児童期に関わる教員の資質向上のために特に就学前後の課題や生活科の具体的事例について示した。学生は、これからの保育・教育の課題を検討し実践力向上につなげた。
・子どもの育ちと学びをつなぐ―幼小連携のあり方と接続カリキュラムの作成―（再掲）	平成 24 年 9 月～平成 26 年 3 月まで	奈良文化女子短期大学　幼児教育学科　教授として担当の「キャリアデザイン演習Ⅱ」（専門科目、１年次配当、半期、選択１単位）において、使用した。保育者・教員の資質向上のための幼小接続カリキュラム開発及び実践例について示した。学生は、幼児期のカリキュラムと生活科に位置付いたカリキュラム作成のプロセスの理解が深まった。また、教育保育現場の実際を知り、就業力向上へもつなげた。

・子どもの育ちと学びをつなぐ―幼小連携のあり方と接続カリキュラムの作成―（再掲）	平成 27 年 9 月～現在まで	奈良学園大学　人間教育学部人間教育学科　教授として担当の「生活科指導法」（教職科目、２年次配当、後期、必修２単位）において、使用した。保育者・教員の資質向上のための幼小接続カリキュラム開発及び実践例について示した。学生は、幼児期のカリキュラムと生活科に位置付いたカリキュラム作成のプロセスの理解が深まった。また、予習学修の定着と共に、指導法の課題が明確になった。
・	平成 28 年 9 月～現在まで	奈良学園大学　人間教育学部人間教育学科　教授として担当の「生活の理解」（教職科目、１年次配当、後期、必修２単位）において、使用した。保育者・教員の資質向上のための小学校生活の理論をもとに、歴史や評価の実践例についても示した。学生は、生活科の科目の特性に位置付いたカリキュラム作成と指導理論のプロセスの理解が深まった。また、予習学修の定着と共に、子ども理解の課題が明確になった。
３　教育上の能力に関する大学等の評価		
・奈良文化女子短期大学学長による評価	平成 26 年 3 月	当該教員は、短期大学幼児教育学科長として、9 年間の教育歴を有している。企画力、実行力に優れており、永年にわたる教育現場及び教育行政での経験を活かし、体験的・参加型の授業を展開しており、学生の授業評価も非常に高い。 さらに、課外においても幼小接続 WG 合同研究会の代表として月例で 6 年間（平成 26 年 3 月末で 55 回実施）開催し、学生の質の向上と卒後教育及び現職教職員の合同研究の場として継続している。 日々の教育活動に加え、研究業績も積み重ね、「幼小連携のあり方」、「幼小接続カリキュラム」や「学校評価」について多数の講演や執筆の依頼があり、地域貢献及び社会貢献に寄与している。また、社会活動については、文部科学省委嘱事業として奈良市学校評価事業専門委員や大和郡山市幼稚園教育の改善・充実調査研究運営委員長、奈良市 30 人学級指導法改善検討委員などを務め、現在も大阪府私立学校審議会委員、大阪府子ども会議会長代理、大和高田市子ども・子育て会議委員長など公的な委員として活躍している。 豊富な実務経験からそれを基礎として人間教育学部の構想段階から参画し、積極的に関与し重要な役割を担っている。 このような実務経験や専門知識は、奈良学園大学において、予定している授業科目を担当するために充分な教育上の能力を有しているものと評価する。
・奈良文化女子短期大学学生による授業評価アンケート結果による評価	平成 26 年 3 月	奈良文化女子短期大学において毎年実施されている学生による授業評価アンケートによると、担当科目授業の方法は、グループディスカッション、ロールプレイ、パフォーマンス評価を加えながら、体験的・参加型授業に努めている。教育学概論、キャリアデザイン演習、教育制度論、教職実践演習の担当教科において、学生の授業評価は全て 97%以上である。毎回の復習ミニテスト及びリフレクションカードによるフィードバックを実施している。そのことによって、学生の学びの意欲向上や思考の連続に効果をもたらす工夫改善に努めている。また、学生理解に基づき、就職指導にかかる個別指導を随時、丁寧に行っている。

・奈良学園大学学生による授業評価アンケート結果による評価	平成 28 年 3 月	奈良学園大学において実施されている学生による授業評価アンケートによると、担当科目「生活科指導法」における授業方法は、グループディスカッション、ロールプレイ、パフォーマンス評価を加えながら、体験的・参加型授業に努めている。学生の授業評価における総合満足度は 93%～94%（3.71～　3.75ﾎﾟｲﾝﾄ）である。毎回の事前模擬授業の指導、事後のリフレクションカードによるフィードバックを実施している。そのことによって、教員養成段階における学びの意欲向上や思考の連続に効果をもたらす工夫改善に努めている。 また、学生理解に基づき、基礎ゼミ担当学生の個別指導を随時、丁寧に行っている。
・奈良学園大学学生による授業評価アンケート結果による評価	平成 29 年 3 月	奈良学園大学において実施されている学生による授業評価アンケートによると、担当科目「生活科指導法」における授業方法は、グループディスカッション、ロールプレイ、パフォーマンス評価を加えながら、体験的・参加型授業に努めている。学生の授業評価における総合満足度は 93%～95%（3.74～3.82ﾎﾟｲﾝﾄ）である。毎回の事前模擬授業の指導、事後のリフレクションカードによるフィードバックを実施している。そのことによって、教員養成段階における学びの意欲向上や思考の連続に効果をもたらす工夫改善に努めている。 また、学生理解に基づき、基礎ゼミ担当学生及び人間教育学ゼミの個別指導を随時、丁寧に行っている。
４　実務の経験を有する者についての特記事項		
全国教育研究所連盟共同研究福島県教育センター	平成 19 年 4 月 24 日	教育研究所及び学校教育関係者を対象として、全国教育研究所連盟共同研究に資するための指導助言をした。
兵庫県北播磨地区小学校校長研修会講演の講師（於：会議室）	平成 19 年 5 月 11 日	北播磨地区小学校校長及び教育関係者を対象として、「元気が出る学校評価」と題して、評価を活かした学校経営について、講演した。
摂津市教育委員会教員研修スクール広場「未来」講演の講師（於：摂津市教育委員会会議室）	平成 19 年 5 月 15 日	摂津市における 2 年次教員を対象として、授業力アップ講座を年間 5 回担当した。
堺市立五個荘小学校学校協議会（於：堺市立五個荘小学校）	平成 19 年 5 月 17 日	これからの学校評価～学校力・授業力を高めるために～について講演した。
貝塚市教育フォーラムプロジェクト	平成 19 年 5 月 22 日	学校評価に関する教員意識調査分析とフォーラムの構想について検討・助言した。
奈良市教頭研修会	平成 19 年 5 月 26 日	元気が出る学校評価～文部科学省ガイドラインをどう活かすか～について講演した。
伊丹市学校評価検討委員会（委員長）	平成 19 年 5 月 29 日	これからの学校評価～学校力・授業力を高めるために～について講演した。
授業実践研究会岐阜フォーラム	平成 19 年 6 月 3 日	学校評価を活かして教師力・学校力を高めるについて講演した。
広島県福山市立内海小学校校内研修会	平成 19 年 6 月 5 日	生活科・総合的な学習における有効な指導や支援について講演した。
伊丹市第 1 回教育課題研修会	平成 19 年 6 月 12 日	学校力・教師力を高める学校評価について講演した。
明石市第 1 回ステップアップⅡ特別公開講座	平成 19 年 6 月 19 日	教師力を高める～学校評価を活かして～

日本生活科・総合的学習学会「ちば・旭大会」	平成 19 年 6 月 23 日	千葉県立旭農業高校「総合的な学習の時間の実践」指導助言
大阪教育大学附属池田小学校教科別協議会	平成 19 年 6 月 27 日	生活科分科会において、指導助言
岡山県園長等運営管理協議会	平成 19 年 6 月 28 日	幼稚園における学校評価の活用について講演した。
羽曳野市丹比小学校校内研修会	平成 19 年 7 月 3 日	羽曳野市挙育委員会学校評価研究指定校において、元気が出る学校評価について講演した。
奈良県学校評価研究会	平成 19 年 7 月 10 日	これからの学校評価～学校力・授業力を高めるために～について講演した。
奈良県市町村指導主事協議会研修	平成 19 年 7 月 20 日	奈良県市町村指導主事を対象に「元気が出る学校評価」と題して、講演した。
人間教育実践協議会「2007 京都フォーラム」	平成 19 年 7 月 29 日	元気が出る学校評価～文部科学省ガイドラインをどう　活かすか～について講演した。
福井県坂井市教育講演会	平成 19 年 5 月 29 日	これからの学校評価～学校力・授業力を高めるために～
岡山県園長等運営管理協議会	平成 19 年 6 月 28 日	幼稚園における学校評価の活用について講演した。
羽曳野市丹比小学校校内研修会	平成 19 年 7 月 3 日	元気が出る学校評価について講演した。
奈良県学校評価研究会	平成 19 年 7 月 10 日	これからの学校評価～学校力・授業力を高めるために～について講演した。
奈良県市町村指導主事協議会研修	平成 19 年 7 月 20 日	元気が出る学校評価について講演した。
青森県東通村教育委員会教育専門家会議	平成 19 年 7 月 27 日	「幼小中一貫基本計画策定会議」
人間教育実践協議会「2007 京都フォーラム」	平成 19 年 7 月 29 日	元気が出る学校評価～文部科学省ガイドラインをどう活かすか～
福井県坂井市教育講演会	平成 19 年 7 月 30 日	これからの学校評価～学校力・授業力を高めるために～について講演した。
滋賀県幼小連携講座	平成 19 年 7 月 31 日	これからの幼小連携ー学びと育ちの連続ーについて講演した。
近江八幡市幼稚園教育研究会	平成 19 年 8 月 2 日	今大切にする幼稚園教育と教師の資質向上について講演した。
兵庫県加古川市　学校の活性化をめざす教育経営講座	平成 19 年 8 月 3 日	元気の出る学校づくり～学校力・授業力を高める学校評価を活かして～について講演した。
兵庫県多可町教職員研修会	平成 19 年 8 月 6 日	元気の出る学校づくり～学校力・授業力を高める学校評価を活かして～について講演した。
大阪府貝塚市教育フォーラム	平成 19 年 8 月 8 日	元気が出る授業・学校評価
福井県私立高等学校「学校評価」事業第 3 回実行委員会	平成 19 年 8 月 9 日	学校評価のあり方について講演した。
兵庫県国公立幼稚園長自主研修会	平成 19 年 8 月 10 日	園長としての管理能力育成演習について講演した。
明石市立大久保中学校校内研修	平成 19 年 8 月 17 日	地域との連携を図るー学校評価を活かしてーについて講演した。

兵庫県川西市主幹教諭研修会	平成 19 年 8 月 20 日	元気が出る学校づくり～学校力・授業力を高める学校評価を活かして～について講演した。
奈良県幼稚園長研修	平成 19 年 8 月 24 日	学校評価のあり方について講演した。
奈良県大和高田市立高田中学校校内研修	平成 19 年 8 月 28 日	地域との連携を図る―学校評価を活かして―について講演した。
第 6 回奈良市教育改革推進フォーラム	平成 19 年 8 月 30 日	幼小連携・地域連携のあり方について講演した。
第 2 回伊丹市学校評価検討委員会(委員長)	平成 19 年 9 月 11 日	これからの学校評価～学校力・授業力を高めるために～について講演した。
広島県福山市学校組織マネジメント研修	平成 19 年 9 月 14 日	これからの学校評価～学校力・授業力を高めるために～について講演した。
堺市立五箇荘小学校	平成 19 年 9 月 25 日	堺市学校協議会指定校の校内研修会において、外部評価について講演した。
青森県東通村教育委員会教育専門家会議	平成 19 年 9 月 20 日	「幼小中一貫基本計画策定会議」第 1 回認定子ども園検討委員会
和歌山県事務職員研修	平成 19 年 9 月 27 日	学校評価を活かした元気な学校づくり―事務職員の役割―について講演した。
山口県美祢市学校評価推進委員会	平成 19 年 10 月 11 日	これからの学校評価～学校力・授業力を高めるために～について講演した。
山口県中学校長会秋季研修会	平成 19 年 10 月 12 日	学校力を高める学校評価について講演した。
明日香村立聖徳中学校校内研修	平成 19 年 10 月 16 日	これからの学校評価～学校力・授業力を高めるために～について講演した。
兵庫県多可町立八千代南小学校	平成 19 年 10 月 24 日	物語文指導及び事後研修会のありかた指導について講演した。
文部科学省推進事業広島県福山市立内海小学校教育研究会	平成 19 年 10 月 26 日	未来を拓く総合的な学習の時間の創造について講演した。
兵庫県加古川市教頭研修会	平成 19 年 10 月 30 日	学校力を高める学校評価について講演した。
静岡県御殿場市校長研修	平成 19 年 11 月 2 日	学校力・教師力を高める学校評価について講演した。
滋賀県長浜市幼稚園教育研究会	平成 19 年 11 月 6 日	これからの幼小連携―育ちと学びの連続―について講演した。
和歌山県教育経営研修講座（管理職）	平成 19 年 11 月 16 日	これからの学校評価～学校力・授業力を高めるために～について講演した。
兵庫県揖龍幼稚園教育研究会	平成 19 年 11 月 20 日	幼稚園力・教師力を高める学校評価について講演した。
大阪教育大学附属池田小学校教科別協議会	平成 19 年 11 月 30 日	研究発表会教科別協議会「生活科」分科会において、指導助言をした。
岐阜市教頭研修	平成 19 年 12 月 7 日	これからの学校評価～学校力・授業力を高めるために～について講演した。
青森県東通村教育委員会教育専門家会議	平成 19 年 12 月 11 日	「幼小中一貫基本計画策定会議」第 2 回認定子ども園検討委員会において、講演した。

奈良県高市郡校園長会研修	平成 19 年 12 月 14 日	これからの学校評価～学校力・授業力を高めるために～について、講演した。
青森県東通村教育委員会教育専門家会議	平成 20 年 1 月 18 日	「幼小中一貫基本計画策定会議」第 3 回認定子ども園検討委員会において、講演した。
愛知県尾張小中学校評議員会	平成 20 年 1 月 22 日	学校力・授業力を高める学校評価～元気が出る学校づくりをめざして～について講演した。
広島県尾道市立原田小学校校内研修	平成 20 年 1 月 25 日	学校力・授業力を高める学校評価～元気が出る学校づくりをめざして～について講演した。
兵庫県西脇市立日野小学校校内研修	平成 20 年 1 月 18 日	学校力・授業力を高める学校評価～元気が出る学校づくりをめざして～について講演した。
神戸大学附属明石小学校校内研修	平成 20 年 2 月 8 日	評価を通して実践的社会人を育む単元を構築するシステム開発について講演した。
日本生活科総合的学習学会大阪シンポジウム	平成 20 年 2 月 10 日	これからの幼小連携～生活科を基軸とした育ちと学びの連続～について講演した。
山口県教育フォーラム	平成 20 年 2 月 11 日	学力向上をめざして～これからの学校教育～について講演した。
京都フォーラム 2008　IN　WINTER	平成 20 年 2 月 16 日	学校づくり・学校評価について講演した。
伊丹市学校評価検討委員会	平成 20 年 2 月 13 日	伊丹市学校評価検討委員会(委員長) として、学校づくり・学校評価について講演した。
奈良市幼稚園長主任研修会	平成 20 年 2 月 28 日	これからの幼小連携について幼稚園長主任を対象に講演した。
摂津市教職員授業力アップ研修	平成 20 年 2 月 29 日	初任者及び 2 年目教員を対象に、「今だからできる自分磨きーRV・PDCA マネジメントサイクルを活かしてー」について、講演した。
青森県東通村教育委員会教育専門家会議	平成 20 年 3 月 10 日	「幼小中一貫基本計画策定会議」現地視察指導
青森県東通村教育委員会「幼小中一貫基本計画策定会議」全体会	平成 20 年 3 月 11 日	「幼小中一貫基本計画策定会議」指導助言
岡山県真庭市幼保合同研修	平成 20 年 3 月 22 日	これからの就学前教育～幼稚園と保育園のあり方とその連携～について講演した。
高槻市幼稚園長研修会	平成 20 年 4 月 25 日	信頼される幼稚園づくりのためにについて講演した。
愛知県蟹江町教職員研修会	平成 20 年 5 月 1 日	学校力・教師力を高める学校評価～元気な学校づくりのために～について講演した。
奈良県葛城市新庄小学校区教職員研修会	平成 20 年 5 月 2 日	学校力・教師力を高める学校評価～元気な学校づくりのために～について講演した。
静岡県管理職研修会（高等学校・特別支援校）	平成 20 年 5 月 9 日	学校力・教師力を高める学校評価～元気な学校づくりのために～について講演した。
兵庫県新三田市幼小中教頭研修	平成 20 年 5 月 15 日	「校内研究活性化に向けて教頭・研究主任等の果たす役割」～元気な学校づくりのために～について講演した。
兵庫県高砂市立米田小学校内研修	平成 20 年 5 月 16 日	学校力・教師力を高める学校評価～元気な学校づくりのために～について講演した。

静岡県管理職研修会（小・中学校）	平成 20 年 5 月 20 日	学校力・教師力を高める学校評価～元気な学校づくりのために～について講演した。
岐阜授業実践フォーラム	平成 20 年 6 月 1 日	「学力向上と学校評価」～新教育課程をふまえて 2008 年はこう発信する～について講演した。
芦屋市立山手小学校内研修会	平成 20 年 6 月 3 日	これからの生活科について講演した。
神戸大学附属明石小学校研究発表会指導助言	平成 20 年 6 月 6 日	評価を通して「実践的社会人」を育む単元を構築するシステムの開発「いっしょにどろだんごをつくろう」を通してについて講演した。
奈良学園幼稚園ＰＴＡ講演会	平成 20 年 6 月 7 日	幼稚園から小学校へ育ちと学びの連続について講演した。
大和郡山市幼稚園長研修会	平成 20 年 6 月 10 日	学校評価を生かした元気な幼稚園づくりについて講演した。
福山市立駅家小学校内研修会	平成 20 年 6 月 13 日	学校力・教師力を高める学校評価～元気な学校づくりのために～について講演した。
御殿場市管理職研修会（小・中学校）	平成 20 年 6 月 20 日	これからの学校評価「活力ある学校づくり」のためにについて講演した。
福山市立内海小学校内研修会	平成 20 年 6 月 24 日	よく見・よく聴いて、考え、課題追求する子の育成～未来を拓く　総合的な学習の時間の創造～について講演した。
奈良市 30 人学級指導改善検討委員会	平成 20 年 6 月 26 日	30 人学級指導改善について、講演した。
兵庫県管理職研修会（高等学校）	平成 20 年 7 月 8 日	教育活動の充実・改善をめざした学校評価について講演した。
大阪大学看護局教育委員会合同研修会	平成 20 年 7 月 11 日	指導の充実・改善をめざして「教育原理・教育方法」について講演した。
大和郡山市学校評価運営委員会	平成 20 年 7 月 15 日	元気な学校づくり―学校評価を生かして―について講演した。
大阪大学看護局教育委員会合同研修会	平成 20 年 7 月 18 日	教育評価　成長促進指導の効果的な評価をめざしてについて講演した。
教育フォーラム in 東広島	平成 20 年 7 月 21 日	学力向上と学校評価～新学習指導要領をふまえてについて講演した。
御所市学校評価運営委員会	平成 20 年 7 月 25 日	学校評価の必要性と目的～元気な学校づくりをめざして～について講演した。
福井県幼小連携研修会	平成 20 年 7 月 28 日	幼児期から児童期への育ちをつなぐ、豊かな教育の創造について講演した。
大和郡山市幼小連携研修会	平成 20 年 7 月 29 日	幼稚園教育と小学校教育をつなぐ～育ちと学びの連続～について講演した。
教職員対象幼児教育講座	平成 20 年 8 月 1 日	これからの幼児教育と小学校教育　～脳の発達を促す遊びと学びの連続～について講演した。
奈良市幼小連携講座	平成 20 年 8 月 4 日	生活科の中での幼小連携について講演した。
西春日井地区学校運営研修会	平成 20 年 8 月 5 日	学力向上と学校評価～新学習指導要領をふまえて～について講演した。

新潟市生活科研究会	平成 20 年 8 月 6 日	「生活科の授業力」～育ちと学びの連続をふまえて～について講演した。
大淀町教職員研修会	平成 20 年 8 月 8 日	学校評価を活かして学校力・教師力を高める～やってよかった学校評価～について講演した。
御殿場市中堅教員研修会	平成 20 年 8 月 9 日	元気な学校づくり～学校経営の参加から参画へ～について講演した。
御殿場市幼保小中連携研修会	平成 20 年 8 月 9 日	幼児教育と小学校教育をつなぐ～育ちと学びの連続～について講演した。
大和郡山市管理職学校評価研修会	平成 20 年 8 月 11 日	学校力・教師力を高める学校評価～新学習指導要領をふまえて～について講演した。
京都フォーラム	平成 20 年 8 月 17 日	学力向上と学校評価」～新教育課程をふまえて 2008 年はこう発信する～　について講演した。
京丹後市管理職研修会	平成 20 年 8 月 21 日	学校力・教師力を高める学校評価～新学習指導要領をふまえて～について講演した。
大和郡山市幼稚園教職員研修会	平成 20 年 8 月 22 日	学校評価を活かした元気な幼稚園づくりについて講演した。
伊丹市教職員研修会	平成 20 年 8 月 25 日	学力向上と学校評価～新学習指導要領をふまえて～について講演した。
明石市教頭研修会	平成 20 年 8 月 26 日	育ちと学びをつなぐ学校評価について講演した。
御所市教職員学校評価研修会	平成 20 年 8 月 28 日	評価で変わる学校改善への道筋 について講演した。
奈良市教育改革推進フォーラム	平成 20 年 8 月 29 日	幼児教育の改善と充実～30 人学級の取組みを通して～について講演した。
奈良市教育改革推進フォーラム	平成 20 年 8 月 29 日	『幼児教育から小学校教育へ学びと育ちの連続』について講演した。
津市香海中学校区学校関係者評価研修会	平成 20 年 9 月 2 日	学校力・教師力を高める学校評価 について講演した。
兵庫県第三者評価訪問	平成 20 年 9 月 5 日	第三者評価者として訪問指導をした。
大和郡山市学校評価運営委員会	平成 20 年 9 月 9 日	学校力・教師力を高める学校評価～元気な学校づくりのために～について講演した。
生駒市教頭研修会	平成 20 年 9 月 16 日	学力向上と学校評価～新学習指導要領をふまえて～について講演した。
東通村僻地教育研究会	平成 20 年 9 月 25 日	学校評価のあり方について講演した。
東通村幼小中一貫教育研究会	平成 20 年 9 月 26 日	幼児教育から義務教育へ　学びと育ちの連続について講演した。
津市東橋内中学校区研修会	平成 20 年 9 月 30 日	学校力・教師力を高める学校評価について講演した。
福井市小中学校校長課題別研修会	平成 20 年 10 月 7 日	新学習指導要領対応に向けた学校経営マネジメントと校長の役割について講演した。
福井県私立高等学校第三者評価訪問	平成 20 年 10 月 9 日	第三者評価者として訪問指導をした。
福井県私立高等学校第三者評価訪問	平成 20 年 10 月 10 日	第三者評価者として訪問指導をした。

摂津市味生小学校校内研究授業	平成 20 年 10 月 14 日	伝えあおう　思いを！高めあおう　学びを！～新学習指導要領をふまえて～について講演した。
文部科学省推進事業広島県福山市立内海小学校教育研究会	平成 20 年 10 月 17 日	探求の力を育む総合的な学習の時間～新学習指導要領をふまえて～ について講演した。
摂津市スクール広場「未来」研修会	平成 20 年 10 月 21 日	子どもにつけたい力と教職員の力量形成～新学習指導要領の改訂をふまえて～について講演した。
御所市学校評価運営委員会	平成 20 年 10 月 24 日	学校評価における自己評価の進め方～元気の出る学校づくりのために～について講演した。
奈良市 30 人学級指導改善検討委員会	平成 20 年 10 月 28 日	30 人学級指導改善についてについて講演した。
大和郡山市学校評価運営委員会	平成 20 年 10 月 30 日	学校力・教師力を高める学校評価～元気な学校づくりのために～について講演した。
東通村幼小中一貫教育小委員会	平成 20 年 11 月 4 日	学校力・教師力を高める学校評価～元気な学校づくりのために～について講演した。
楽しい子育て講座	平成 20 年 11 月 8 日	「小学校に行くまでにしたい 10 の親子あそびと会話」について講演した。
御所市学校評価研修会	平成 20 年 11 月 11 日	新学習指導要領対応に向けた学校経営マネジメントと学校評価について講演した。
片桐幼稚園第三者評価訪問	平成 20 年 11 月 27 日	第三者評価者として訪問指導をした。
摂津市味生小学校研究発表会	平成 20 年 11 月 28 日	あたたかい心とことばのあふれる元気な学校づくり ～新学習指導要領をふまえて～について講演した。
富士市子育てシンポジウム	平成 20 年 11 月 29 日	「みんなで始めよう！ふじの子育て」 について講演した。
和泉市生活科研究会	平成 20 年 12 月 3 日	「生活科の授業力」～育ちと学びの連続をふまえて～について講演した。
兵庫県第三者評価訪問	平成 20 年 12 月 12 日	訪問により第三者評価を実施した。
奈良県保幼小連携講座	平成 20 年 12 月 25 日	幼児教育と小学校教育をつなぐためにについて講演した。
岡山県総社市教職員研修会	平成 21 年 1 月 13 日	元気の出る学校評価～新学習指導要領をふまえて～について講演した。
教員免許更新講習会	平成 21 年 1 月 18 日	教職についての省察・教育政策の動向について講演した。
摂津市保幼小連携講座	平成 21 年 1 月 20 日	幼児教育と小学校教育をつなぐためにについて講演した。
JS コーポレーション社内研修	平成 21 年 1 月 22 日	これからの学校教育について講演した。
神戸大学附属明石小学校研究発表会	平成 21 年 1 月 23 日	生活科分科会「かがみをつかってかたちあそびをしよう」授業リフレクションにおいて、指導助言した。
神戸大学附属明石小学校研究発表会「分科会」におけるこーで	平成 21 年 1 月 23 日	今、必要とされる学校のあり方子どもと教師がともに成長していく単元を構築するシステム「学校・保護者・地域・大学や関係機関などによる知の結集」について講演した。

御所市学校評価運営委員会	平成 21 年 1 月 27 日	次につながる学校評価のためにについて講演した。
西宮市教頭研修会	平成 21 年 1 月 30 日	学校力・教師力を高める学校評価～新学習指導要領をふまえて～について講演した。
羽曳野市立丹比小学校シンポジウム	平成 21 年 2 月 1 日	次につながる学校評価のために～学校、保護者、地域の連携・協働を通して～について講演した。
大和郡山市学校評価運営委員会	平成 21 年 2 月 3 日	幼稚園における学校評価のあり方について講演した。
東京都日野市教職員研修会	平成 21 年 2 月 9 日	学校力・教師力を高める学校評価～新学習指導要領をふまえて～について講演した。
兵庫県第三者評価検討委員会	平成 21 年 2 月 13 日	訪問指導し、第三者評価を務めた。
静岡県磐田市立福田小学校内研修会	平成 21 年 2 月 16 日	学校力・教師力を高める学校評価～元気な学校づくりのために～について講演した。
伊丹学校評価運営委員会	平成 21 年 2 月 17 日	学校力・教師力を高める学校評価～新学習指導要領をふまえて～について講演した。
子育て支援講座（ｼﾙﾊﾞｰ人材ｾﾝﾀｰ）	平成 21 年 2 月 18 日	子どもの育ちと学びの連続をめざして「小学校に行くまでにしたい子育てあそびと会話」について講演した。
東通村幼小中一貫教育小委員会	平成 21 年 2 月 23 日	認定子ども園：幼児教育と小学校教育をつなぐためにについて講演した。
長浜市幼稚園長研修会	平成 21 年 2 月 24 日	学校評価を生かした元気な幼稚園づくり～新幼稚園教育要領を踏まえて～について講演した。
広島県庄原市教職員研修会	平成 21 年 2 月 26 日	学校評価を活かした学校改善～新学習指導要領をふまえて～について講演した。
2008 教育ソリューションフェア	平成 21 年 2 月 28 日	次につながる学校評価とは～学校力・教師力を高めるために～について講演した。
大和郡山市学校評価運営委員会	平成 21 年 3 月 3 日	学校評価を活かした学校改善～具体的な改善策の発信をめざして～について講演した。
文部科学省幼稚園教育の評価改善充実検討委員会	平成 21 年 3 月 9 日	大和郡山市幼稚園における取組報告について講演した。
静岡県総合教育センター主催新任校長研修（小・中）講演（於：静岡県総合教育センター	平成 21 年 5 月 1 日	元気な学校づくり～学校評価を活かした学校改善について講演した。
芦屋市立幼稚園教育研究会主催　幼稚園園教育研究会総会講演	平成 21 年 5 月 12 日	元気な幼稚園づくり～学校評価を活かした学校改善について講演した。
大和郡山市教育委員会主催　幼稚園における学校評価を活かしたカリキュラム改善研修会 講演（於：片桐西幼稚園）	平成 21 年 5 月 14 日	学校評価を活かした学校改善～具体的な改善策の発信をめざして～について講演した。
静岡県総合教育センター主催新任教頭研修（小・中）講演（於：静岡県総合教育センター	平成 21 年 5 月 19 日	元気な学校づくり～学校評価を活かした学校改善について講演した。
広島県公立中学校長会主催　研修大会講演（於：クレイトンベイホテル）	平成 21 年 5 月 22 日	学校評価を活かした学校改善～具体的な改善策の発信をめざして～について講演した。
大和郡山市立幼稚園における学校評価を活かしたカリキュラム改善研修会（於：片桐幼稚園）	平成 21 年 5 月 26 日	学校評価を活かした学校改善～具体的な改善策の発信をめざして～について講演した。

大和郡山市教育委員会主催　幼稚園における学校評価を活かしたカリキュラム改善研修会 講演（於：昭和幼稚園）	平成 21 年 5 月 29 日	学校評価を活かした学校改善～具体的な改善策の発信をめざして～について講演した。
大和郡山市立「幼稚園における学校評価を活かしたカリキュラム改善研修会（於：平和幼稚園）	平成 21 年 6 月 2 日	学校評価を活かした学校改善～具体的な改善策の発信をめざして～について講演した。
大和郡山市立幼稚園における学校評価を活かしたカリキュラム改善研修会（於：矢田幼稚園）	平成 21 年 6 月 12 日	学校評価を活かした学校改善～具体的な改善策の発信をめざして～について講演した。
山梨県教育委員会主催　学校評価シンポジウム講演（於：山梨県総合教育センター）	平成 21 年 6 月 16 日	学校評価を活かした学校改善～具体的な改善策の発信をめざして～について講演した。
大和郡山市幼稚園における学校評価を活かしたカリキュラム改善研修会（於：郡山西幼稚園）	平成 21 年 6 月 18 日	学校評価を活かした学校改善～具体的な改善策の発信をめざして～について講演した。
大和郡山市幼稚園における学校評価を活かしたカリキュラム改善研修会（於：治道幼稚園）	平成 21 年 6 月 19 日	学校評価を活かした学校改善～具体的な改善策の発信をめざして～について講演した。
大和郡山市幼稚園における学校評価を活かしたカリキュラム改善研修会講演（於：郡山北幼稚園）	平成 21 年 6 月 22 日	学校評価を活かした学校改善～具体的な改善策の発信をめざして～について講演した。
大和郡山市幼稚園における学校評価を活かしたカリュラム改善研修会講演（於：筒井幼稚園）	平成 21 年 6 月 25 日	学校評価を活かした学校改善～具体的な改善策の発信をめざして～について講演した。
奈良県教育研究所主催　幼稚園経営研修講座講演（於：奈良県教育研究所）	平成 21 年 7 月 1 日	幼稚園における学校評価について講演した。
広島県福山市教育委員会主催　福山市教育支援事業指定校研究事業指導助言（福山市立内海小学校）	平成 21 年 7 月 2 日	学校評価を活かした学校改善について講演した。
やまぐち総合教育支援センター主催　山口県幼稚園長研修講座講演（於：やまぐち総合教育支援センター）	平成 21 年 7 月 3 日	幼稚園における学校評価について講演した。
大和郡山市教育委員会主催　幼稚園における学校評価を活かしたカリキュラム改善研修会講演（於：矢田南幼稚園）	平成 21 年 7 月 7 日	学校評価を活かした学校改善～具体的な改善策の発信をめざして～について講演した。
島根県浜田市立金城中学校主催　教育講演会講演（於：浜田市立金城中学校）	平成 21 年 7 月 12 日	授業力を高める～学校評価を活かして～について講演した。
大和郡山市教育委員会主催　幼稚園における学校評価を活かしたカリキュラム改善研修会講演（於：郡山南幼稚園）	平成 21 年 7 月 13 日	学校評価を活かした学校改善～具体的な改善策の発信をめざして～について講演した。
奈良県教育委員会主催　奈良県私立学校「学校評価」に関する研修会講演（於：奈良県立教育研修所）	平成 21 年 7 月 14 日	私立学校における学校評価を活かした学校改善について講演した。
広島県総合教育センター主催　広島県教職員マネジメント研修・10 年経験者研修講演　（於：広島県総合教育センター）	平成 21 年 7 月 24 日	学校マネジメントと組織づくり～学校評価を活かして～について講演した。
川西市教育委員会主催　教育講演会講演（於：川西市文化会館）	平成 21 年 7 月 28 日	学校評価を活かした学校改善について講演した。
大阪市教育委員会主催　校内生活科研修会講演（於：大阪市立磯路小学校）	平成 21 年 8 月 3 日	保幼小連携～遊びから学びへについて講演した。
愛知県日進市教育研究会主催　教育諸問題研修会講演（於：日進市民会館）	平成 21 年 8 月 5 日	元気な学校づくり～学校評価を活かした学校改善について講演した。

福井市教育委員会主催　教職員課題研修会講演（於：福井県立大学）	平成 21 年 8 月 6 日	学校評価を活かした学校改善について講演した。
平成 21 年度教員免許更新講習　選択「生活」（於：奈良教育大学）	平成 21 年 8 月 8 日	保幼小連携～遊びから学びへについて講演した。
奈良県教育研究所主催　10 年経験者研修講座講演（於：奈良県教育研究所）	平成 21 年 8 月 1 日	学校評価を活かした学校改善について講演した。
文部科学省委嘱事業奈良市立六条小学校区保幼小連携委員会主催　保幼小連携研修会講演	平成 21 年 8 月 18 日	学校評価を活かした学校改善について講演した。
堺市教育委員会主催　堺市教育講演会講演（於：堺市消費生活センター）	平成 21 年 8 月 19 日	保幼小連携～遊びから学びへについて講演した。
奈良市教育委員会主催　第８回教育フォーラム講演（於：奈良市立飛鳥幼稚園）	平成 21 年 8 月 21 日	学校評価を活かした学校改善について講演した。
御殿場市教育委員会主催　幼保小教職員合同研修会講演（於：御殿場市役所玉穂支所）	平成 21 年 8 月 22 日	保幼小連携～遊びから学びへについて講演した。
相生市教育委員会主催　学校園経営研修講座（於：相生市立総合福祉会館）	平成 21 年 8 月 24 日	学校評価を活かした学校改善について講演した。
愛知県丹葉地方小中学校長会主催　学校評価研修会講演（於：犬山市福祉会館）	平成 21 年 8 月 25 日	元気な学校づくり～学校評価を活かした学校改善について講演した。
明石市教育研究所主催　明石市スーパーバイザー事業講演（於：明石市立高丘東幼稚園）	平成 21 年 9 月 4 日	学校評価を活かした学校改善について講演した。
広島県海田町立教育委員会主催　授業力向上研修会講演（於：海田町立海田西中学校）	平成 21 年 10 月 6 日	学校評価を活かした学校改善について講演した。
平成 21 年度教員免許更新講習　必修「教職についての省察」（於：奈良教育大学）	平成 21 年 10 月 1 日	学校評価を活かした学校改善について講演した。
伊丹市教育委員会主催　学校評価担者研修会講師（於：伊丹市総合教育センター）	平成 21 年 10 月 27 日	学校評価を活かした学校改善について講演した。
三田市教育委員会主催　教育資質向上事業　学校評価に係る研修会講師	平成 21 年 10 月 3 日	元気な学校づくり～学校評価を活かした学校改善について講演した。
大和郡山市教育委員会主催　大和郡山市幼小連携合同研修会講演（於：同山市昭和幼稚園）	平成 21 年 11 月 17 日	学校評価を活かした学校改善について講演した。
摂津市教育委員会主催　摂津市教育課程研究開発委嘱事業研究発表会全体会講演（於：摂津市立味生小学校）	平成 21 年 11 月 2 日	学校評価を活かした学校改善について講演した。
奈良市教育委員会主催　奈良市 30 人学級指導法改善委員会研究保育指導助言（於：奈良市立富雄北幼稚園）	平成 21 年 11 月 19 日	30 人学級を活かした指導の改善について講演した。
岡山県教育委員会主催　園長等運営管理協議会講演（於：岡山県総合教育センター）	平成 21 年 11 月 27 日	学校評価を活かした学校改善について講演した。
奈良市保健福祉部主催　奈良市公私立保育所職員研修会講演	平成 21 年 12 月 1 日	保幼小連携～遊びから学びへについて講演した。
高知市教育委員会主催　高知市立学校教頭研修会講演（於：アスパルこうち）	平成 21 年 12 月 4 日	学校評価を活かした学校改善について講演した。
大和郡山市教育委員会主催　大和郡山市幼稚園長・教頭研修会講演（於：市民交流館）	平成 21 年 12 月 17 日	学校評価を活かした学校改善情報発信の在り方～について講演した。

福井県女性校長・教頭会主催　冬季研修会講演（於：ニューサンピア敦賀）	平成 21 年 12 月 25 日	評価を活かした学校改善～教員評価・学校評価～について講演した。
神奈川県厚木市教育委員会主催　厚木市立飯山小・小鮎小学校合同研修会講演	平成 22 年 1 月 8 日	元気な学校づくり～学校評価を活かした学校改善について講演した。
西宮市子育て支援センター主催　子育て支援研修会講演（於：西宮市子育て支援センター	平成 22 年 1 月 15 日	保幼小連携～遊びから学びへについて講演した。
奈良県指導主事会主催　幼稚園における学校評価研修会講演（於：奈良県立教育研究所）	平成 22 年 1 月 19 日	幼稚園における学校評価について講演した。
大和高田市教育委員会主催　教頭研修会講演	平成 22 年 1 月 22 日	学校評価を活かした学校改善～教頭に求められるもの～について講演した。
広島県三次市教育委員会主催　教務主任研修会講演	平成 22 年 1 月 26 日	学校評価を活かした学校改善～ミドルリーダーの役割について講演した。～
兵庫県立芦屋高等学校授業力向上委員会研修会講演（於：県立芦屋高等学校）	平成 22 年 1 月 29 日	授業力を高める～学校評価を活かして～について講演した。
岡山県女性校長会主催　学校づくり研修会講演（於：ピュアリティまきび）	平成 22 年 2 月 8 日	元気な学校づくり～学校評価を活かした学校改善について講演した。
兵庫県市町村指導主事学校評価担当者研修会講演（於：兵庫県立研修所）	平成 22 年 2 月 17 日	学校評価を活かした学校改善について講演した。
奈良市教育委員会主催　奈良市 30 人学級指導法改善委員会研究保育指導助言（於：古市人権文化センター）	平成 22 年 2 月 23 日	30 人学級を活かした指導の改善について講演した。
名古屋市共生の会主催　ミドルリーダー育成研修会講演（於：メルパルク名古屋）	平成 22 年 2 月 26 日	学校評価を活かした学校改善について講演した。
伊丹市公立私立幼稚園・小学校合同研究会（於：スワンホール）	平成 22 年 3 月 2 日	幼小連携～幼稚園と小学校のなめらかな接続について講演した。
ERP　大阪フォーラム　（於：大阪国際交流センター）	平成 22 年 5 月 2 日	「ゆとり教育からの脱却」についてコーディネーターをした。
西播磨地区小学校校長会研修会（於：相生市総合福祉会館）	平成 22 年 5 月 7 日	幼小連携～幼稚園と小学校のなめらかな接続について講演した。
富士市立富士中学校区三校合同 PTA 講演会（於：富士市交流プラザ）	平成 22 年 5 月 8 日	元気の出る学校園づくり～学校評価を活かして～について講演した。
三重県公立小中学校女性校長教頭会研修会(於三重県総合文化センター：)	平成 22 年 5 月 25 日	元気の出る学校園づくり～学校評価を活かして～について講演した。
高知県所長・園長研修会(於：高知県教育センター)	平成 22 年 6 月 11 日	学校評価を活かした学校改善について講演した。
奈良市 30 人学級指導法検討委員会(於：奈良市庁舎)	平成 22 年 6 月 14 日	30 人学級を活かした指導の改善
和歌山県幼稚園保育所合同研修「初任者園長研修会　(於：和歌山ビッグ愛)	平成 22 年 6 月 15 日	元気の出る学校園づくり～学校評価を活かして～について講演した。
大和郡山市幼稚園・小学校連携研修会(於：矢田コミニティ会館)	平成 22 年 8 月 4 日	幼小連携～幼稚園と小学校のなめらかな接続について講演した。
幼稚園・保育所と小学校連携促進事業夏季研修会(於：田原本青垣生涯学習センター)	平成 22 年 8 月 5 日	幼小連携～幼稚園と小学校のなめらかな接続について講演した。
天理市幼稚園教員研修会(於：天理市役所)	平成 22 年 8 月 10 日	元気の出る学校園づくり～学校評価を活かして～について講演した。

桜井市幼小中学校教職員研修会(於：桜井市中央公民館)	平成 22 年 8 月 17 日	元気の出る学校園づくり～学校評価を活かして～について講演した。
倉敷市公立幼稚園教職員研修会(於：くらしき健康福祉プラザ)	平成 22 年 8 月 20 日	元気の出る学校園づくり～学校評価を活かして～について講演した。
奈良市 30 人学級指導者研修会(於：奈良市庁舎)	平成 22 年 8 月 23 日	30 人学級を活かした指導の改善について講演した。
滋賀県守山市幼小中学校教職員研修会(於：守山市民ホール)	平成 22 年 8 月 27 日	元気の出る学校園づくり～学校評価を活かして～について講演した。
豊野地区幼稚園長・指導主事研修会(於：池田市合同庁舎)	平成 22 年 8 月 30 日	元気の出る学校園づくり～学校評価を活かして～について講演した。
平成 22 年度 PDCA 研修Ⅱ(於：秋田県庁舎)	平成 22 年 9 月 4 日	元気の出る学校園づくり～学校評価を活かして～について講演した。
岡山県園長等運営管理協議会(於：　ピュアリティまきび)	平成 22 年 9 月 27 日	元気の出る学校園づくり～学校評価を活かして～について講演した。
教育セミナー山陰 2010　課題講演(於：鳥取県社会福祉人材研修センター)	平成 22 年 10 月 2 日	元気の出る学校園づくり～学校評価を活かして～について講演した。
葛城市立新庄北小学校附属幼稚園　幼小連携研修会(於新庄北小学校附属幼稚園：)	平成 22 年 10 月 25 日	元気の出る学校園づくり～学校評価を活かして～について講演した。
三田市　第 2 回　幼・小・中学校教頭研修会(於：三田市総合文化センター)	平成 22 年 10 月 26 日	元気の出る学校園づくり～学校評価を活かして～について講演した。
学校経営品質向上研究会(於：関西生産性本部)	平成 22 年 11 月 8 日	元気の出る学校園づくり～学校評価を活かして～について講演した。
奈良市 30 人学級指導法検討委員会(於：奈良市庁舎)	平成 22 年 11 月 9 日	30 人学級を活かした指導の改善について講演した。
平成 22 年度　岡山県国公立幼稚園長研修会(於：ピュアリティまきび)	平成 22 年 11 月 26 日	元気の出る学校園づくり～学校評価を活かして～について講演した。
平成 22 年度　岡山県ブロック公立小中学校副校長・教頭研修会(於：ロマン高原かよう総合会館)	平成 22 年 11 月 30 日	元気の出る学校園づくり～学校評価を活かして～について講演した。
三次市主幹・教頭研修会(於：三次市)	平成 22 年 12 月 14 日	元気の出る学校園づくり～学校評価を活かして～について講演した。
明日香村人権教育研究会「子どもの学力保障」(於：明日香村立明日香幼稚園)	平成 23 年 1 月 24 日	新学習指導要領実施に向けて～学力向上～について講演した。
平成 22 年度　学力の把握に関する研究指定校事業研究協議会(於：文部科学省)	平成 23 年 1 月 26 日	新学習指導要領実施に向けて～学力向上～について講演した。
磯城郡小学校教育研究会(於：田原本青垣生涯学習センター)	平成 23 年 2 月 16 日	元気の出る学校園づくり～学校評価を活かして～について講演した。
第３回　奈良市 30 人学級指導法検討委員会(於：奈良市庁舎)	平成 23 年 2 月 17 日	30 人学級を活かした指導の改善について講演した。
海田町新教育課程研修会(於：広島県安芸郡海田町ひまわりプラザ)	平成 23 年 2 月 18 日	新学習指導要領実施に向けて～学力向上～について講演した。
姫路市異校種連携研修会(於：姫路市立勤労市民会館)	平成 23 年 5 月 13 日	よりよい保幼小連携の進め方 ～子どもの育ちと学びをつなぐ～について講演した。
平成 23 年度第１回　奈良市 30 人学級指導法検討委員会(於：奈良市庁舎)	平成 23 年 6 月 2 日	「30 人学級」を活かした指導の改善について講演した。

兵庫県私立小学校学級経営研究会(於：甲南小学校)	平成 23 年 6 月 3 日	子どもと保護者と教師が育ち合う学級経営について講演した。
第 19 回岐阜授業実践フォーラム(於：岐阜羽島文化会館	平成 23 年 6 月 4 日	学校づくり部会指導助言
奈良市解放保育研究会(於：奈良市庁舎)	平成 23 年 7 月 12 日	元気な保育園づくりのために ～これからの保育者に求められる資質～について講演した。
平成 23 年度第２回　奈良市 30 人学級指導法検討委員会(於：奈良市庁舎)	平成 23 年 7 月 26 日	「30 人学級」を活かした指導の改善について講演した。
岡山県国公立幼稚園教育研究会　備前支部研修会(於：岡山県加賀郡吉備中央町農業振興センター)	平成 23 年 7 月 29 日	元気の出る学校評価 ～マネジメントツールを生かして～について講演した。
福井県鯖江市小中学校学級経営研修講座(於：鯖江市文化の館)	平成 23 年 8 月 2 日	子どもと保護者と教師が育ち合う学級づくりについて講演した。
八尾市幼保小合同研修会(於：中河内府民センター)	平成 23 年 8 月 5 日	子どもの育ちと学びをつなぐ ～幼保小連携による教育・保育を通して～について講演した。
兵庫県公立学校女性管理職研修会(於：ウェスティンホテル淡路)	平成 23 年 8 月 8 日	兵庫県公立学校女性管理職を対象に、「学校力・教師力を高める学校づくり」について講演した。
芦屋フォーラム学校づくり部会(於：兵庫県芦屋市立宮川小学校)	平成 23 年 8 月 12 日	育ちと学びをつなぐ学校づくり ～　知・徳・体を育てる　～について講演した。
第３回　滋賀県 10 年経験者研修会(於：滋賀県総合教育センター)	平成 23 年 8 月 23 日	「園における望ましい連携の在り方」 ～子どもの育ちと学びをつなぐために～について講演した。
愛知県豊川市　授業力向上研修会(於：愛知県豊川市　音羽文化ホール)	平成 23 年 8 月 25 日	これからの教師に求められる資質 ～授業力向上をめざして～について講演した。
兵庫県篠山市　主幹教諭研修会(於：兵庫県篠山市市役所庁舎)	平成 23 年 8 月 29 日	元気な学校づくり～学校評価を活かして～について講演した。
岡山県園長等運営管理協議会(於：ピュアリティまきび)	平成 23 年 9 月 30 日	幼稚園における学校評価～マネジメントツール、コミュニケーションツールとしての活用～について講演した。
西宮市幼年教育研修(於：西宮市子育て総合センター)	平成 23 年 10 月 25 日	幼・保・小連携 ～育ちと学びをつなぐカリキュラムの創造～について講演した。
敦賀フォーラム(於：プラザ萬象　大ホール)	平成 23 年 11 月 3 日	「学校・家庭・地域でつなぐ教育・共育・協育 ～敦賀の誇りと教育力を高める」～として、敦賀市教育委員会主催討論会登壇した。
奈良学園幼稚園園内研修会(於：奈良学園幼稚園)	平成 23 年 11 月 8 日	幼児期と小学校以降の教育 ～育ちと学びをつなぐカリキュラムの創造～について講演した。
平成 23 年度第４回　奈良市 30 人学級指導法検討委員会(於：奈良市庁舎)	平成 23 年 11 月 14 日	「30 人学級」を活かした指導の改善
幼稚園経営研修講座(於：奈良県立教育研究所)	平成 23 年 11 月 29 日	教育課程編成の工夫と教職員の共通理解 ～育ちと学びをつなぐ園づくりのために～について講演した。
広島県三次市小中学校　校長研修会(於：みよしまちづくりセンター)	平成 23 年 12 月 6 日	育ちと学びをつなぐ学校づくり～マネジメントツールとしての学校評価を活かして～について講演した。

伊賀市教頭会研修(於：伊賀市教育研究センター)	平成 23 年 12 月 9 日	元気の出る学校づくり ～学校評価を活かして～について講演した。
大阪府私立幼稚園連盟　免許更新講習(於：大阪府私学教育文化会館)	平成 23 年 12 月 21 日	幼稚園をめぐる最新事情「幼稚園の信頼構築と改善に生かす学校評価と幼小連携」について講演した 。
西宮市幼小連携研修・実践報告会(於：西宮市子育て総合センター)	平成 24 年 1 月 13 日	保幼小連携～実践への提言・助言～について講演した。
奈良文化女子短期大学付属幼稚園教員研修会(於：奈良文化女子短期大学付属幼稚園)	平成 24 年 1 月 17 日	幼稚園の信頼構築と改善に生かす 学校評価について講演した。
八尾市研究指定事業研修会(於：八尾市立東山本幼稚園)	平成 24 年 1 月 31 日	八尾市研究指定校園の教諭・指導主事等を対象に「つたえあい・ひびきあい・まなびあう　～幼小がつながって～」について講演した。
泉北３市１町幼稚園管理職研修(於：忠岡町シビックセンター（忠岡町役場)	平成 24 年 2 月 7 日	泉北３市１町（和泉市・泉大津市・高石市・忠岡町）幼稚園管理職を対象に「元気の出る幼稚園づくり」～幼稚園管理職のマネジメント力と年度末の検証～について講演した。
平成 23 年度第５回　奈良市 30 人学級指導法検討委員会(於：奈良市庁舎)	平成 24 年 2 月 13 日	奈良市内幼稚園・小学校教諭等を対象に「30 人学級」を活かした指導の改善について講演した。
猪名川町教頭・副主幹合同研修会(於：兵庫県猪名川町教育委員会室)	平成 24 年 2 月 16 日	猪名川町教頭・副主幹を対象に「元気の出る学校づくり～学校評価を活かして～」について講演
久米田看護専門学校における特別講義(於：久米田看護専門学校)	平成 24 年 3 月 1 日	看護学生（１・２・３年生）を対象に、「評価を活かして自分を変える～活き活きスキルアップ、シェイプアップ、メイクアップ～」について講演
門真市私立幼稚園・保育園合同研修会(於：門真市仙亭会議室)	平成 24 年 3 月 1 日	門真市私立幼稚園・保育園の理事長・園長等を対象に、幼小連携～育ちと学びをつなぐ学校園づくり～について講演
北葛城郡広陵町幼稚園教員の資質向上にかかる講演の講師(於：北葛城郡広陵町総合福祉会館「さわやかホール」)	平成 24 年 5 月 2 日	北葛城郡幼稚園教育研究会会員を対象に「幼児期と小学校以降の教育～育ちと学びをつなぐカリキュラムの創造」について講演
敦賀っ子教育審議会にかかる「学び育み委員会」「子どもサポート委員会」合同開催　委員として講話(於：敦賀市立図書館　研修室)	平成 24 年 5 月 15 日	敦賀っ子教育審議会にかかる「子どもサポート委員会」委員を対象に「学びの基礎力」をもとに今後の方向性を提案
桜井市「第 2 回　子育てセミナー」講師(於：桜井市立中央公民館)	平成 24 年 5 月 25 日	桜井市就学前の幼児とその保護者対象に「第 2 回　子育てセミナー」　において「遊びから学びへ～幼児教育と小学校教育の接続」について講演
平成 24 年度　西日本私立小学校教員研修会　講師(於：追手門学院小学校)	平成 24 年 5 月 25 日	西日本私立小学校教員を対象として「学級経営分科会」において、「子どもと保護者と教師が育つ学級経営」について講演
兵庫県私立小学校連合会研修会講師 モラル教育の公開授業　指導講演(於：甲南小学校)	平成 24 年 6 月 1 日	兵庫県私立小学校学級経営部会教員を対象として「モラル・マナー・ルールを通して、公開授業指導講演
第 20 回授業実践フォーラム　教育課題講座の講師(於：岐阜県羽島市文化センター)	平成 24 年 6 月 2 日	初任者から経験者まで全国から参加の学級担任及び管理職等を対象に「学級づくりの諸課題～子どもと保護者と教師が育つ学級経営～」について講演
三田市教育委員会主催 三田市立保幼小・中・連携推進にかかる研修会講師(於：有馬富士自然学習センター)	平成 24 年 6 月 19 日	三田市内の小・中校長または教頭、保育所長・私立幼稚園長または教諭　50 名を対象に「子どもの育ちと学びをつなぐ保幼小・中・連携」について講演

第１回宝塚市立小・中・特別支援学校　校長研修会　講師(於：宝塚市立教育総合センター)	平成 24 年 6 月 22 日	宝塚市立小・中・特別支援学校　校長等 30 人を対象に、「人材育成へのマネジメント～　学校改善へのリーダーシップ　～」について講演
天理市教育委員会主催　天理市内保・幼・小・中の連携推進にかかる研修会　講師(於：天理市教育総合センター)	平成 24 年 6 月 29 日	天理市内保・幼・小・中の校園所長２５名を対象に「子どもの育ちと学びをつなぐ保・幼・小連携」について講演
特例社団法人日本精神看護技術協会主催　教育方法研修会　講師（於：京都研修センター）	平成 24 年 7 月 3 日	看護実習指導者を目指している者(80 名)を対象に、効果的な実習指導ができるよう、また、学生の特性を理解し、教育的配慮ができるように必要な知識・技術を修得させることを目的として「授業の形態」について講義
特例社団法人日本精神看護技術協会主催　教育方法研修会　講師（於：京都研修センター）	平成 24 年 7 月 4 日	看護実習指導者を目指している者(80 名)を対象に、効果的な実習指導ができるよう、また、学生の特性を理解し、教育的配慮ができるように必要な知識・技術を修得させることを目的として「授業の方法」について講義
全国幼児教育研究協会 主催　中国地区岡山支部研修会　講師（於：岡山衛生会館　三木記念ホール）	平成 24 年 7 月 7 日	中国地区岡山県の幼稚園長・教諭・保育所長・保育士・大学関係者など 300 名を対象に「元気の出る幼稚園づくり～学校評価を活かして～」の講演
鳴門教育大学大学院　特別講義(於：鳴門教育大学)	平成 24 年 7 月 13 日	鳴門教育大学大学院授業科目「学習指導と学習評価」及び学部授業科目「教育評価論」における特別講義
平成 24 年度奈良市「30 人学級」指導者研修会　講師　（於：奈良市庁舎　中央棟６階　正庁）	平成 24 年 7 月 24 日	奈良市立幼稚園・小学校教員を対象に『奈良市小・中学校学力・学習調査の結果から見えてくる「30 人学級」での効果的指導法』について講演
福井県丹生郡学校教育研究会主催　丹生郡教育講演会　講師（於：越前陶芸村文化交流会館）	平成 24 年 7 月 26 日	福井県丹生郡内小中学校教職員 150 名を対象に「育ちと学びをつなぐ学校づくり　授業づくり」について講演した。
第 3 回門真市一貫教育課程研修会　講師（於：門真市教育センター）	平成 24 年 7 月 27 日	門真市立幼小中学校教員を対象に、「就学前と義務教育の連携を深めるために」について講演した。
敦賀市教育委員会主催　敦賀市ミドルリーダー研修会講師（於：敦賀市立図書館）	平成 24 年 8 月 7 日	敦賀市ミドルリーダー40 名を対象に、「教員の質の向上～信頼構築のためのスキルアップ、ブラッシュアップ、メイクアップ～」と題して講演
伊賀市教育センター主催　平成 24 年度伊賀市教育センター研修講座（於：伊賀市教育センター）	平成 24 年 8 月 10 日	伊賀市小中学校及び幼稚園教員４０名を対象として、「元気の出る学校づくり～学校評価を活かして～」と題して講演
和歌山県福祉保健部主催　平成 24 年度幼稚園・保育所関係職員合同研修会　講師　（於：和歌山北コミュニティセンター）	平成 24 年 8 月 20 日	公・私立幼稚園の園長及び教員、公・私立保育所の所長及び保育士、認定子ども園の園長及び職員、公・私立小学校の校長及び教員、各市町村教育委員会指導主事、各市町村保育行政担当者 240 人対象に「幼児期と小学校以降の教育～育ちと学びをつなぐために～」講演
社団法人　大阪府私立幼稚園連盟主催　免許更新更新講習講師　（於：大阪私学教育文化会館）	平成 24 年 8 月 22 日	大阪府私立幼稚園教員 120 名を対象に、免許更新更新【必修】講習を担当。「チーム保育に学校評価を取り入れ、小学校につないでいくために」について講義
名古屋市教育委員会指定校事業において、名古屋市立大高南小学校研修会　講師	平成 24 年 8 月 27 日	名古屋市立大高南小学校教員を対象に、「ポジティブプロパガンダを創り出す学校評価」について講演・演習

岡山県教育委員会主催の園長等運営管理協議会講師（於：ピュアリティまきび）	平成 24 年 9 月 24 日	国公立私立幼稚園長を対象に、「幼稚園における学校評価」について講演
奈良市教育委員会主催の 30 人学級指導法検討委員会において、指導助言（於：奈良市庁舎）	平成 24 年 10 月 2 日	奈良市幼小教員を対象に、「第 2 回 30 人学級指導法検討委員会」に委員長として指導助言
三田市教育委員会主催の校園長会及び教育委員等研修会　講師（於：三田市消防本部会議室）	平成 24 年 10 月 3 日	三田市立幼小中校園長、教育委員、指導主事希望する市内私立幼稚園長または公私立保育所長等 50 名を対象に、「子どもの育ちと学びをつなぐ保幼・小・中連携」について、講演
大阪私立幼稚園連盟青年振興部主催の研修会　講師（於：大阪私学教育文化会館）	平成 24 年 10 月 9 日	大阪私立幼稚園青年振興部教職員を対象に「学校評価と幼小連携」について講演
長岡京市教育委員会主催の保幼・小・中連携会議研修会　講師（於：長岡京市立図書館大会議室）	平成 24 年 10 月 26 日	長岡京市内保育園・保育所・幼稚園・小学校の教職員等 70 名を対象に、「発達と学びの連続性を踏まえた幼児期と児童期の接続カリキュラムづくりについて」、講演
岡山県保育協議会主催　保育研究会　講師（於：JA 岡山 7 階ホール）	平成 24 年 10 月 30 日	県内保育所関係者・職員等 240 名を対象に、「元気の出る保育園づくり～保育の質を高める自己評価を活かして～」について講演
八尾市教育委員会主催の研究指定園　園内研修会講師（於：八尾市立東山本幼稚園(研究指定園）	平成 24 年 11 月 5 日	八尾市幼稚園園長・教諭及び小学校校長・教員並びに指導主事を対象に、「園内保育」について指導助言
福井市教育委員会主催の平成 24 年度福井市公立幼稚園保育研究会　講師（於：福井東郷公民館）	平成 24 年 11 月 10 日	福井市内公立幼稚園 40 名小学校教職員及び保育士を対象に、「幼児教育と小学校教育の連携・接続に向けて」について講演
第 7 回全国高等学校保育教育研究大会　講師（於：千里阪急ホテル）	平成 24 年 11 月 16 日	全国高等学校保育コース担当者等 150 名を対象に、「生きる力を培う保育者の育成～育ちと学びをつなぐために～」と題して基調講演
生駒市立教育委員会研究発表会　講師（於：生駒市立壱分幼稚園）	平成 24 年 11 月 20 日	幼稚園教諭参加者 82 名、保育園 3 名、小学校教諭５名（壱分小 1 年担任）中学校教諭, 高等学校教諭を対象に「子どもの育ちと学びをつなぐ～小学校、中学校、高等学校との交流から～」について記念講演。
日本保育協会主催の大阪支部女性部研修会講師（於：薬業年金会館）	平成 24 年 11 月 26 日	日本保育協会大阪支部の保育士 90 名を対象に、「幼児期と小学校以降の教育～育ちと学びをつなぐ～」について講演
大阪保育部会北大阪ブロック会主催の年末研修会講師。　（於：ホテル・アゴーラ大阪守口　）	平成 24 年 12 月 3 日	会員園の管理職 80 名を対象に「育ちと学びをつなぐ保小連携」について講演
有田市教育委員会主催の「実効性の高い学校評価・情報提供の充実・改善に向けた取組」にかかる研修会　講師。　（於：有田市橘家）	平成 24 年 12 月 4 日	有田市立小中学校教員等 80 名を対象に「学校改善につながる学校評価にするために」について講演
紀の川市教育委員会主催の「豊かな学びと育ちをつなぐ保幼小合同研修会」講師。（於：紀の川市立安楽川保育所）	平成 25 年 1 月 22 日	紀の川市立保育所、私立幼稚園、紀の川市立小学校　園長・校長・教頭・教職員等　約 70 名を対象に、「遊びから学び へ　育ちをつなぐ生活科」について講演
宝塚市教育委員会主催の「宝塚市立学校教頭研修会」講師（於：宝塚市立教育総合センター）	平成 25 年 1 月 29 日	宝塚市立学校教頭 24 名をを対象に、「学校力改善の秘策～元気の出る学校づくりのために」について講話と演習
奈良市教育委員会主催の平成 24 年度奈良市 30 人学級指導法検討委員会に委員長として出席。（於：奈良市庁舎）	平成 25 年 2 月 8 日	奈良市 30 人学級指導法検討委員を対象に最終報告及び「30 人学級」での期待できる効果についての集計結果検討などについて指導助言をした。

奈良文化女子短期大学幼小接続フォーラムの企画及び総括講演（於：奈良文化女子短期大学）	平成 25 年 2 月 24 日	幼小接続フォーラムの参加者（保育士・幼稚園教諭、小学校教諭及び管理職、教育委員会、教育関連企業等 139 名を対象に「幼児教育と小学校以降の育ちと学びをつなぐ」について講演
敦賀市研究指定学校　敦賀南小学校校内研修会の講師。（於：敦賀南小学校）	平成 25 年 2 月 26 日	敦賀市研究指定学校　敦賀南小学校教職員 25 名を対象に、「元気の出る学校づくり～家庭・学校・地域をつないで～」について講演
阪南市教頭会主催の小中学校教頭会の講師（於：阪南市商工会館）	平成 25 年 2 月 28 日	阪南市立小中学校の教頭等 16 名を対象に、「元気の出る学校づくり～学校評価を活かして～」について講演
社会福祉法人成光苑主催の７ヶ園合同研修会の講師（於：ホテル阪急エキスポパーク）	平成 25 年 3 月 26 日	社会福祉法人成光苑の理事、園長、保育者等 120 名を対象に「幼保小の連携」について講演
大阪府私立幼稚園連盟主催の免許更新講習会【必修】の講師（於：エル・おおさか（大阪府立労働センター)）	平成 25 年 8 月 6 日	大阪府私立幼稚園免許状更新講習者を対象に免許更新講習【必修】を担当。
京都府教育委員会主催の平成 25 年度「保育技術専門講座Ｉ」及び「新規採用者研修『幼稚園教諭２』講座」の講師（於：京都府教育センター）	平成 25 年 8 月 8 日	教諭（幼稚園及び特別支援学校の幼稚部　国立・私立を含む）90 名を対象に「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続」について、講演及び演習。
奈良市教育委員会主催の平成 25 年度第 1 回「30 人学級」指導者実践交流会の講師（於：奈良市教育センター）	平成 25 年 8 月 12 日	奈良市内幼稚園教諭及び小学校教員等を対象に指導助言及び講演。
安堵町教育委員会主催の夏季職員研修の講師（於：安堵町立中学校会議室）	平成 25 年 8 月 13 日	安堵町中学校小学校教職員を対象に「子どもの育ちと学びをつなぐ～よりよい連携・接続のあり方～」について講演。
丹波市教育委員会主催の丹波市小学校長会研修会の講師（於：丹波市山南住民センター）	平成 25 年 8 月 27 日	丹波市小学校校長 25 名を対象に「元気の出る学校づくり」について講演。
第 2 回高校と大学の連携フォーラム in 大阪のパネルディスカッション、コーディネータ　（於：内田洋行セミナールール）	平成 25 年 8 月 31 日	大阪府及び奈良県内高等学校関係者、教育関係者 120 名を対象に「日本の教師を育てる～教育三都物語～」について、パネルディスカッションにおいて、コーディネータ
愛知県教職員組合主催の第 63 次教育研究愛知研修会記念講演の講師。（於：愛知県産業労働センター（ウインクあいち)）	平成 25 年 10 月 19 日	市町村教育長・愛知県小中学校長役員・PTA 代表・教員代表等 450 名を対象に「子どもたちの健やかな成長をめざして～力と夢を育てる地域ぐるみの学校づくり～」をテーマに記念講演。
鳥取県中部委員会主催の平成 25 年度鳥取県中部地区幼稚園教員・保育士等の合同研修会の講師（於：倉吉未来中心センター）	平成 25 年 10 月 30 日	鳥取県中部地区幼稚園教員・保育士名を対象に、「元気の出る園づくり～園評価を活かして」をテーマに記念講演。
愛知県知多郡武豊町教育委員会主催の教育講演会の講師（於：武豊町立武豊中学校体育館）	平成 25 年 11 月 22 日	武豊町６小中学校教職員を対象に「力と夢を育てる学校づくり」をテーマに講演
大阪市私立幼稚園連合会主催の研修会の講師（於：もと大阪市幼児教育センター）	平成 25 年 11 月 29 日	大阪市私立幼稚園連合会、幼稚園教諭を対象に「幼小連携」をテーマに講演
久米田看護専門学校主催の講師会の講師（於：社会医療法人　生長会　府中病院　セミナーホール）	平成 25 年 11 月 30 日	実習指導者、専任教員、非常勤講師他 60 名を対象として、「学生・教員・学校が輝く教育評価」をテーマに講演
尾張地区女性役職会主催の研修会の講師（於：名古屋国際会議場）	平成 25 年 12 月 15 日	尾張地区女性役職会研修会参加者 450 名を対象として、「力と夢を育てる学校づくり」をテーマに講演

日本初等理科教育研究会堺大会発表校　堺市立浜寺石津小学校研修会の講師（於：堺市立浜寺石津小学校）	平成 26 年 2 月 7 日	日本初等理科教育研究会堺大会発表校　堺市立浜寺石津小学校教職員を対象に、第三者評価をふまえた総括会として、「未来を切り拓く子どもを育てる―日本初等理科教育研究会堺大会での成果と課題―」と題して講演
東海市立教員研修センターTEC21 主催の東海市立教員研修の講師（於：東海市立文化センター）	平成 26 年 2 月 7 日	東海市立小中学校教員 60 名を対象として、「元気の出る学校づくり」をテーマに講演。
奈良文化女子短期大学第 2 回幼小接続フォーラムの総括講演（於：奈良文化女子短期大学）	平成 26 年 3 月 2 日	保幼小教職員・教育関係者等 120 名を対象として、「子どもの育ちと学びをつなぐ」をテーマに総括講演。
鳥取県東部地区幼稚園等の教員及び保育士の合同研修会 講師（於：鳥取県立福祉人材研修センター）	平成 26 年 5 月 14 日	保幼小教職員・教育関係者等 200 名を対象として、「子どもの育ちと学びをつなぐ」をテーマに講演。
大阪府立高等学校第７ブロックＰＴＡ連絡協議会の講師	平成 26 年 6 月 14 日	大阪府立高等学校第７ブロックＰＴＡ連絡協議会主催のＰＴＡ総会講演会において、保護者・校長・教頭・教員 150 名を対象に「高校生活をどう過ごさせるか」をテーマに講演
人間教育学会「学校間接続分科会」の講師	平成 26 年 8 月 4 日	人間教育学会「学校間接続分科会」において、講演
三河教育研究会主催の総合的な学習部会夏季研修会の講師（於：愛知県岡崎市民会館　甲山会館）	平成 26 年 8 月 5 日	三河教育研究会主催の総合的な学習部会夏季研修会において、小中教員 250 名を対象に「力と夢を育てる学校づくり・授業づくり～総合的な学習を通して」をテーマに講演。
阿久比町小中学校主催の教職員夏季研修会の講師（於：阿久比町勤労福祉センター・エスペランス丸山)）	平成 26 年 8 月 6 日	阿久比町小中学校主催の教職員夏季研修会「教育講演会」において、小中教職員 200 名を対象に「子どもの育ちと学びをつなぐ」をテーマに講演。
日本私立小学校連合会主催の全国教員夏季研修会の講師（於：ホテルモントレ　ラ・スール）	平成 26 年 8 月 21 日	日本私立小学校連合会主催の全国教員夏季研修会において、小学校教員 80 名を対象に「元気の出る学級づくり～子どもと保護者と教師の育ち合いを通して」をテーマに講演。
豊中市教育委員会主催の幼保小連絡協議会夏期研修会の講師（於：アクア文化ホール）	平成 26 年 8 月 28 日	豊中市教育委員会主催の幼保小連絡協議会夏期研修会において、公私立小学校、幼稚園、公立・民間保育園、児童発達支援センター、認定こども園、所属長及び教職員 180 名を対象に「子どもの育ちと学びをつなぐ～よりよい幼保小連携・接続のあり方～」をテーマに講演。
和泉市立北池田小学校主催の夏季研修会の講師（於：和泉市立北池田小学校）	平成 26 年 8 月 29 日	和泉市立北池田小学校主催の夏季研修会において、教職員 30 名を対象に「元気な学校づくり～子どもと保護者と教師の育ち合いを通して～」をテーマに講演
寝屋川市教育委員会主催の研修会の講師（於：寝屋川市立北幼稚園）	平成 26 年 9 月 17 日	寝屋川市教育委員会主催の研修会において、小学校教員、公私立幼稚園教諭・保育士 100 名を対象に「子どもの育ちと学びをつなぐ～就学前後の接続を中心に～」をテーマに講演。
日本精神看護協会主催の看護実習指導者の資格取得の講師（於：日精看　京都研修センター）	平成 26 年 10 月 21・22 日	看護実習指導者の資格取得を目指すもの 80 名を対象に、教育方法研修会における講師
神戸市立幼稚園長会・私立幼稚園連盟主催の教育連絡会研修会の講師（於：神戸市総合教育センター）	平成 26 年 11 月 10 日	神戸市立幼稚園長会・私立幼稚園連盟主催の教育連絡会研修会において、公私立幼稚園教諭 150 名を対象に「元気の出る園づくり～子どもの育ちと学びをつなぐ～」をテーマに講演。

沖縄県庁主催の平成26年度宮古地区幼稚園教育課程研究協議会の講師（於：神戸市総合教育センター）	平成26年11月17日	沖縄県庁主催の平成26年度宮古地区幼稚園教育課程研究協議会において、公立、公私立幼稚園長、教諭・市村教育委員会指導主事、宮古島市教育研究所指導主事を対象に「元気の出る幼稚園づくり～学校評価を活かした保育改善を通して～」をテーマに講演。
大阪市私立幼稚園連盟主催の研修会の講師（於：もと大阪市幼児教育センター）	平成26年12月3日	大阪市私立幼稚園連盟主催の研修会において、私立幼稚園教諭80名を対象に「元気の出る園づくり～どもの育ちと学びをつな～」をテーマに講演。
大東市主催の保幼小研修会の講師（於：大東市民会館）	平成27年1月27日	大東市主催の保幼小研修会において保育士、幼稚園教諭、小学校教諭、園長、行政等300名対象として、「育ちと学びをつなぐ保幼小連携」をテーマに講演。
第58回大阪府私立幼稚園教育研究大会(免許更新講習）の講師（於：大阪国際会議場（グランキューブ大阪）	平成27年3月26日	大阪府私立幼稚園連盟主催の免許更新講習において、大阪府私立幼稚園・園長・教職員,近畿地区私立幼稚園教諭 100名を対象に「幼稚園の信頼構築と改善～学校評価と幼小接続・連携をもとに～」について、講義を担当。
大阪市私立幼稚園連合会研修会の講師（於：もと大阪市幼児教育センター）	平成27年5月13日	大阪市私立幼稚園連合会主催の研修会において、幼稚園教諭40名を対象に「幼小接続」をテーマに講演。
羽衣学園中学・高等学校の父母教育懇談会の講師（於：羽衣学園中学・高等学校）	平成27年5月16日	羽衣学園中学・高等学校の父母教育懇談会において、保護者及び教職員200名を対象に「親として、中・高時代をどう過ごさせるか」をテーマに講演。
近畿ブロック都市福祉事務所長連絡協議会主催の第9回通常総会における講師（於：大和高田市さざんかホール）	平成27年5月22日	近畿ブロック都市福祉事務所長連絡協議会主催の第9回通常総会において、福祉事務所長80名を対象に「子どもの育ちと学びをつなぐ町づくり・人づくり～子ども・子育て新制度をふまえて」をテーマに講演。
神戸市総合教育センター主催の職務研修講座における講師（於：神戸市総合教育センター）	平成27年6月12日	神戸市総合教育センター主催の職務研修講座において、公立幼稚園主任30名を対象に「幼小接続」をテーマに講演。
日本私学教育研究所主催の平成27年度私立学校初任者研修小学校（西日本地区）の講師（於：大阪ガーデンパレス）	平成27年7月30日	日本私学教育研究所主催の平成27年度私立学校初任者研修小学校（西日本地区）において、小学校教員40名を対象に「子どもに力をつける教員の力量形成～教師力を学校力につなげる～」をテーマに講演。
古座川町保小中一貫教育研修会の講師（於：古座川町中央公民館）	平成27年8月2日	古座川町保小中一貫教育研修会において、保小中教職員・保護者60名を対象に「保幼接続・小中一貫」をテーマに講演。
姫路市教育委員会主催の園長研修の講師（於：姫路市立総合教育センター）	平成27年8月4日	姫路市教育委員会主催の園長研修において、幼稚園長30名を対象に「幼小接続」をテーマに講演。
宝塚市保幼小中特別支援学校合同研修会の講師（於：宝塚市立安倉小学校ランチルーム）	平成27年8月6日	宝塚市保幼小中特別支援学校合同研修会において、市立保育所長・園長・小中学校教職員・学校長60名を対象に、「子どもたちの育ちや学びをつなぐ保幼小連携の在り方]をテーマに講演。
教育セミナー関西2015の講師（於：京都ノートルダム女子大学）	平成27年8月8日	教育セミナー関西2015において、参加者20名を対象に「ワークショップ－子どもたちの育ちや学びをつなぐ]をテーマに講演。

堺市教育委員会委託のさかい保育教諭・保育士研修の講師（於：堺市産業振興センター）	平成 27 年 8 月 12 日	堺市教育委員会委託のさかい保育教諭・保育士研修において、認定こども園・保育士・民間保育園（所）50 名を対象に、中級講座「幼児期から学童期へ接続カリキュラム①」をテーマに講演
中丹地域保育所(園)・幼稚園・小学校連携推進研修会の講師（於：綾部市保健福祉センター）	平成 27 年 8 月 17 日	中丹地域保育所(園)・幼稚園・小学校連携推進研修会の講師
教員免許更新講習の講師（於：奈良学園大学幼小接続室）	平成 27 年 8 月 19 日	教員免許更新講習として、幼稚園教諭・小学校教諭 30 名を対象に「これからの生活科～子どもの育ちと学びの連続をふまえて～」をテーマに講師として全 6 時間の講習を担当。
岡山市教職員研修の講師（於：岡山ふれあいセンター）	平成 27 年 8 月 24 日	岡山市教職員研修こども園・保育園・幼稚園（年長担任もしくは連携担当者）、小学校（１年生担任もしくは生活科担当者）250 名を対象に「子どもの「育ち」と「学び」をつなぐ保育，授業づくり～保幼小接続におけるこれからの言語活動～」をテーマに講演。
あま市小中学校教職員会研修会における講師（於：あま市美和文化会館）	平成 27 年 8 月 25 日	あま市小中学校教職員会研修会において、あま市小中学校教職員３５０名を対象に「力と夢を育てる学校づくり～学校間接続と学校評価を活かして」をテーマに講演。
第 10 回教師力向上研究会における講師（於：箕面自由学園小学校）	平成 27 年 8 月 29 日	第 10 回教師力向上研究会において、参加者 30 名を対象に「子どもの「育ち」と「学び」をつなぐ授業づくり」をテーマに講演。
堺市教育委員会委託のさかい保育教諭・保育士研修の講師（於：堺市産業振興センター）	平成 27 年 9 月 8 日	堺市教育委員会委託のさかい保育教諭・保育士研修において、認定こども園・保育士・民間保育園（所）50 名を対象に、中級講座「幼児期から学童期へ接続カリキュラム②」をテーマに講演
鳥取県教育委員会事務局鳥取県教育センター主催の【研修名】【幼児教育④】の講師（於：鳥取県教育センター）	平成 27 年 9 月 15 日	鳥取県教育委員会事務局　鳥取県教育センター主催の【研修名】【幼児教育④】信頼される魅力ある園づくり～園評価を活かして～」において、 鳥取県内の幼稚園長・保育所（園）長・認定こども園長の 21 名を対象として、「信頼される魅力ある園づくりをめざしテーマに講義・演習を担当。受講者園長 20 名及び聴講(教育委員会幼児教育担当 6 名)
堺市教育委員会委託のさかい保育教諭・保育士研修の講師（於：堺市産業振興センター）	平成 27 年 10 月 21 日	堺市教育委員会委託のさかい保育教諭・保育士研修において、認定こども園・保育士・民間保育園（所）50 名を対象に、中級講座「幼児期から学童期へ接続カリキュラム③」をテーマに講演
平成 27 年度和歌山県那賀地方 PTA 指導者研修会講演会の講師（於：岩出市民俗資料館	平成 27 年 11 月 14 日	平成 27 年度和歌山県那賀地方 PTA 指導者研修会において、保護者及び教員 65 名を対象として、「親として、中学時代をどう過ごさせるか～これからのコミュニケーションと学びの力～」をテーマに講演。
堺市教育委員会委託のさかい保育教諭・保育士研修の講師（於：堺市産業振興センター）	平成 27 年 11 月 25 日	堺市教育委員会委託のさかい保育教諭・保育士研修において、認定こども園・保育士・民間保育園（所）50 名を対象に、中級講座「幼児期から学童期へ接続カリキュラム④」をテーマに講演
堺市教育委員会委託のさかい保育教諭・保育士研修の講師（於：堺市産業振興センター）	平成 27 年 12 月 9 日	堺市教育委員会委託のさかい保育教諭・保育士研修において、認定こども園・保育士・民間保育園（所）50 名を対象に、中級講座「幼児期から学童期へ接続カリキュラム⑤」をテーマに講演

看護実習指導者を目指すものを対象とした「教育方法研修会」①の講師（於：京都研修センター）	平成 27 年 12 月 16 日	日本精神看護協会　京都研修センター主催の「教育方法研修会」において、看護実習指導者の資格取得を目指す者 38 名を対象に「授業の形態」をテーマとして、講義・演習
看護実習指導者を目指すものを対象とした「教育方法研修会」②の講師（於：京都研修センター）	平成 27 年 12 月 18 日	日本精神看護協会　京都研修センター主催の「教育方法研修会」において、看護実習指導者の資格取得を目指す者 38 名を対象に「授業の方法」をテーマとして、講義・演習
宝塚市子ども未来部主催の所内研修会の講師（於：宝塚市立安倉中保育所ホール）	平成 28 年 1 月 13 日	宝塚市子ども未来部主催の所内研修会において、所長・職員・保育教諭 20 名を対象に「子どもの育ちと学びをつなぐ保幼小接続・連携」をテーマとして、講演。
大阪市私立幼稚園連合会研修会の講師（於：もと大阪市幼児教育センター）	平成 28 年 5 月 24 日	大阪市私立幼稚園連合会主催の研修会において、幼稚園教諭 40 名を対象に「子どもの育ちや学びをつなぐ ～幼児教育と小学校以降の教育の連携・接続～ 」をテーマとして、講演。
三宅町幼児園園外研修会（於：奈良学園大学幼小接続室）	平成 28 年 6 月 1 日	三宅町主催の研修会において、27 名（町長・健康子ども部部長・職員５名、保護者 18 名、評議員１名、その他１名）を対象に「子どもの育ちや学びをつなぐ ～幼児教育と小学校以降の教育の連携・接続～ 」をテーマとして、講演。
愛知県一宮市西成東小学校 PTA 講演会（於：一宮市西成東小学校講堂）	平成 28 年 6 月 12 日	愛知県一宮市西成東小学校主催の PTA 講演会において、管理職及び保護者 50 名を対象として、「親として、小学時代をどう過ごさせるか～これからのコミュニケーションと学びの力～」をテーマに講演。
ゆめナビ講義ライブ（於：インテックス大阪）	平成 28 年 6 月 18 日	ゆめナビライブにおいて、高校生 80 名を対象として、「保育士も教師も！～育ちと学びをつなぐ教育のスペシャリストになる～」をテーマに講義。全国の大学 250 講義の中で 1 万人参加の高校生アンケートにより「もう一度聴きたい講義」の第一位に選ばれた。
鳥取県中部教育局園経営研修（於：伯耆しあわせの郷）	平成 28 年 6 月 28 日	鳥取県中部教育局主催の【幼児教育④】園経営研修において、鳥取県内の幼稚園長・保育所（園）長・認定こども園長、園経営にかかわる副園（所）長、部長等の５０名を対象として、「園を活性化するための組織マネジメントのあり方 ～信頼される特色ある園づくりをめざして～ 」をテーマに講義・演習。
毎ナビ講義ライブ（於：インテックス大阪）	平成 28 年 7 月 12 日	毎ナビライブにおいて、高校生 80 名を対象として、「保育士も教師も！～育ちと学びをつなぐ教育のスペシャリストになる～」をテーマに講義。全国の大学 250 講座の中、参加 1 万人を超える高校生の投票により、「もう一度聞きたい講義」の第一位に選出された。
精神科認定看護資格取得研修会（於：京都研修センター）	平成 28 年 7 月 22 日	日本精神看護協会主催の精神科認定看護資格取得を目指すもの 86 名対象とした「組織内における活動、教育論Ⅰ」において、「教育に必要な理論・教育プログラムの展開に必要な教育技法」をテーマに講義。

西宮市幼保小第２回「つながり」研修（於：西宮市立子育て総合センター）	平成 28 年 7 月 26 日	西宮市立子育て総合センター主催の第２回「つながり」研修（幼保小）において、保育所保育士、幼稚園・小学校・特別支援学校教員等 110 名を対象に「生活科を窓口としたッスタートカリキュラムとアプローチカリキュラム」と題して講演。
岸和田市「平成 28 年度　管理職（校長）研修（於：波切りホール）	平成 28 年 8 月 1 日	岸和田市教育委員会主催の「平成 28 年度　管理職（校長）研修」において、市内幼小中学校校長 40 名を対象に「力と夢を育てる元気な学校づくり～学校評価を活かして～」をテーマに講演。
きのくに共育コミュニティ研修会（於：和歌山ビッグ愛）	平成 28 年 8 月 3 日	和歌山県教育庁主催のきのくに共育コミュニティ研修会において、参加者１１００名（学校関係者８０名、社会教育関係者（行政・公民館関係者・コーディネ ーター等３０名）を対象に、「子どもの育ちと学びをつなぐ～学校・家庭・地域がつながる共育～」をテーマに講演。
福井県平 28 年度組織づくり研修講座（於：嶺南教育事務所）	平成 28 年 9 月 7 日	福井県教育庁主催の平成 28 年度組織づくり研修講座において、福井県嶺南地区小中学校・高等学校教職員 20 名を対象に、「力と夢を育てる学校づくり」をテーマに講演。
三郷町立幼稚園　新規採用教員研修及び園内研修会（於：三郷町立南畑幼稚園）	平成 28 年 10 月 14 日	三郷町教育委員会主催の「幼稚園新規採用教員研修」及び園内研修において、町教委職員及び園長並びに職員を対象に講演。
大阪府立高等学校第３ブロックＰＴＡ協議会研修会（於：大阪府立市岡高等学校）	平成 28 年 11 月 8 日	大阪府立高等学校第３ブロックＰＴＡ協議会研修会において、保護者、校長、教員等 55 名を対象に「親子のコミュニケーション」をテーマに、講演。
柏原市「市教研研修会」（於：柏原市立玉手幼稚園）	平成 28 年 11 月 11 日	柏原市教育委員会主催の「柏原市教育研究会幼稚園部会」において、公立私立幼稚園及び小学校教職員 50 名を対象に、「子どもの育ちと学びをつなぐ～幼小接続カリキュラムのあり方～」について、講演。
日本精神看護協会「教育方法研修会」（於：京都研修センター）	平成 28 年 12 月 21 日	日本精神看護協会　京都研修センター主催の「教育方法研修会」において、看護実習指導者の資格取得を目指す者 36 名を対象に「授業の形態・方法」をテーマとして、講義・演習。
和歌山県社会教育関係職員等研修会（第２回）・訪問型家庭教育支援事業シンポジウム（於：紀南文化会館小ホール）	平成 29 年 1 月 16 日	和歌山県生涯教育局主催の「平成 28 年度和歌山県社会教育関係職員等研修会（第２回）・訪問型家庭教育支援事業シンポジウム」において、社会教育関係職員・家庭教育関係職員・福祉関係職員・学校関係教職員、子育て中の保護者、子育て支援活動をしている方、家庭教育支援チーム員等 100 名を対象としたパネルディスカッション「つながろう！家庭・学校・地域・行政・福祉切れ目のない支援のために」をテーマにコーディネータとして担当。
西宮市幼保小第３回「つながり」研修（於：西宮市立子育て総合センター）	平成 29 年 1 月 20 日	西宮市立子育て総合センター主催の第３回「つながり」研修（幼保小）において、保育所保育士、幼稚園・小学校・特別支援学校教員等 88 名を対象に『幼保小接続を考える「とまどいマトリクス」を通して』と題して講演及びワークショップを実施した。

鳥取県「幼保小連携推進研修会」	平成 29 年 2 月 27 日	鳥取県教育委員会主催の「幼保小連携推進研修会」において、幼保・認定子ども園棟等の管理職及び教諭、保育士、保育教諭、小学校、特別支援学校の管理職及び連携担当者、1 年生の担任、市町村教育委員会担当者などの 200 名を対象に幼保小の円滑な接続をめざして ～幼児教育と小学校をつなぐ～をテーマに講演・演習、指導講評を担当
5　その他		
・奈良市 30 人学級指導法改善検討委員会	平成 20 年 6 月～平成 25 年 3 月	奈良市における幼稚園・小学校の委員に対する 30 人学級指導法改善に関する指導助言及び研究のまとめの監修、並びに夏期研修会の講師を務めた。
・国立教育政策研究所教育課程研究センター関係指定校事業企画委員	平成 21 年 5 月～平成 22 年 7 月	総合的学習と生活科の関連を中心に、指定校に対して、指導助言をした。
・大阪府私立学校審議会委員	平成 22 年 7 月～現在に至る	大阪府内私立学校にかかる審議事項を検討した。
・大阪府子ども施策審議会委員	平成 25 年 6 月～平成 28 年 3 月	大阪府子ども施策にかかる審議事項を会長代理として検討した。
・大阪府行政評価審議委員	平成 26 年 6 月～現在に至る	大阪府教育施策にかかる審議事項を委員として検討した。
・大和高田市ひとまちしごと創生意見交換会委員長	平成 27 年 6 月～現在に至る	大和高田市地方創世にかかる意見交換会において委員長として検討した。
・三郷町産官学連携常任委員	平成 28 年 6 月～現在に至る	三郷町産官学連携会議において常任委員として検討した。
・三宅町評議員	平成 28 年 6 月～現在に至る	三宅町評議員として検討した。
・和歌山県訪問型家庭教育支援事業委員長	平成 28 年 6 月～現在に至る	文部科学省指定事業「和歌山県家庭教育支援事業」委員として検討した。
・奈良県就学前教育プログラム策定委員	平成 28 年 6 月～現在に至る	奈良県就学前教育プログラム策定委員として、検討した。

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項		
事　項	年月日	概　　要
１　資格、免許 (1)　小学校教諭２級普通免許状 (2)　小学校教諭１級普通免許状 (3)　修士（学術）	 昭和50年３月 平成３年11月 平成16年３月	 大阪府教育委員会　昭４９小２普第１６０１号 大阪府教育委員会　平３小１普第５０７号 大阪教育大学大学院　第３５０６号 論文題目「学校教育自己診断」を活かした学校改善の研究
２　特許等 なし		
３　実務の経験を有する者について特記事項 (1)　堺市立南八下小学校　教頭 (2) 堺市立美木多小学校　教頭 (3)大阪府教育センター　学校経営研究室主任指導主事、企画室主任指導主事	 平成９年４月～平成12年３月 平成12年４月～平成13年３月 平成13年４月～平成17年１月	 教頭として、校内研究推進及び学校の活性化並びに地域との連携に取り組んだ。教頭会研修委員として「学校のリスクマネジメント」にかかる研究を堺市教頭研修会において発表した。 教頭として、生活科・「総合的な学習の時間」にかかる堺市教育委員会指定事業を推進させた。 堺市立美木多中学校区の「公立・私立、保育園・幼稚園・小学校連絡協議会」において、保幼小の研究推進に取り組んだ。上記２点の取組を「地域と学校の特色を生かした実践とその評価」(2001文溪堂) P. 18～P. 30 で論じた。また、教員の実践例 P. 39～P. 46、P. 63～P. 70、P. 79～P. 86 について、監修指導した。（再掲） 主任指導主事として、４年間、全国教育研究所連盟、近畿地区教育研究所連盟、大阪府教育研究所連盟、近畿所長会の事務局として、研究会の企画及び研究推進に努めた。また、大阪府内の新任校長研修会・新任教頭研修会、指導主事研修会等の企画運営及び講師の任にあたった。「大阪府教育センターフォーラム」の企画及び分科会の講師・コーディネーターを担当した。大阪教育大学との連携において、スクールリーダーフォーラムの講師、シンポジスト等を担当した。 研究主担として、３年間、「大阪府学校教育自己診断」の調査研究を推進し、「学校改善への道筋」をまとめた。
４　その他 なし		

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書,学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（著書） １．学校力・教師力を高める学校評価	単著	平成 19 年 8 月	明治図書	今日の社会的要請と学校の責任を説明し、学校改善に生かす学校評価の基本としてRV・PDCAサイクルをふまえた評価結果の生かし方を具体的事例をふまえて論考した。また、改善策チェックカード自己評価書・外部評価書作成のポイントと留意点について提示した。具体的な実践校のフィールドリサーチに基づき、「サンキューカード」「あいさつ運動」の実際について、地域との連携のあり方について、学校が教育目標を明確にして評価に活かすプロセスについても考察した。 A5 版　全 128 頁
２．教育フォーラム 40 教師という道“教師バッシング”を乗り越えて	共著	平成 19 年 8 月	金子書房	制度改革と世代交代のうねりの中、高まり続ける世間の要求にもまれながらも日々の実践に邁進する現役教師のために、今こそ必要な心得と資質向上に役立つ示唆を提供した。教師として不可欠な「使命感」と「職務遂行力」、現在の教師は大丈夫か、「師道」の再確認及びまず「師道」の再興を説いた。 A5 版　全 140 頁 編者：人間教育研究協議会 共著者：梶田叡一、加藤明、浅田匡、角田元良、寺崎千秋、陣川桂三、中山京子、善野八千子 本人担当部分：特別寄稿「学校評価を活かした幼小連携」113～125 頁を単著。 学校評価を活かした幼小連携について、カリキュラム、教師・学校の質の向上をめざして論じた。子どもの発達と学びの連続性の確保を願い、幼児教育と小学校教育との段差を解消するためにも学校評価が子どもの育ちと学びの連続を保障するツールとして活用していく方法を「カリキュラムの質の向上と幼小連」「教師力向上と幼小連携」「学校力向上と幼小連携」の点から示した。さらに、教師力を高める実践研究のあり方及び実践研究の手順・教育課程全体を視野に入れての課題の設定や教科の指導力を高める学校評価の方法について論じた。
３．グローバル教育の理論と実践	共著	平成 19 年 9 月	教育開発研究所	「グローバル教育」の理論と実践を，学会創立 10 周年を機に，総力を挙げて体系的に整理・集大成した。2008 年改訂新学習指導要領でも強く求められる“グローバル教育の新しい方向性”を示唆した。解説は，入門・概論テキストとして活用できるように論じた。 A5 版　全 232 頁 共著者：魚住忠久、宮崎正勝、佐藤有、山崎宏、今谷順重、石坂和夫、木村一子、金子邦秀、宮本光雄、西村公孝、浅沼茂、吉村功太郎、加藤幸次、栗原久、猪瀬武則、佐藤幸也、宮原悟、岩崎裕保、宮原悟、久野弘幸、森茂岳雄、六角英彰、臼井良雄、多田孝志、山光春、鹿野敬文、藤原孝章、疋田晴敬、戸田清子、岡昌春、松永博司、谷口育史、桑原敏典、善野八千子、鴛原進、土屋武志、大橋直樹、寺林民子、伊藤裕康、川与志夫、中山博夫、本多千明、

著書,学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
４．教育フォーラム 41 新しい学習指導要領－カリキュラム改革の理念と課題－	共著	平成 20 年 2 月	金子書房	鈴木武嗣、生野桂子、三輪昭子、山北淳、中島常彦、辻本千鶴子、阿部信太郎、米田伸次、中島久枝、鈴木正幸 本人担当部分：第 9 章グローバル教育における評価活動　第 3 節「自己評価・相互評価・指導的評価」 92～104 頁を単著。 　自己評価・相互評価・指導的評価について、学校評価項目の一部が「教育課程の評価」を例に目標と指導と評価の一体化をすすめるマネジメントサイクルを示した。グローバル教育の評価としては、人権尊重、市民としての資質、見方考え方感じ方コミュニケーション能力、価値観、世界観、判断力、行動力等の力がどれだけついたかという到達目標に準拠して、総括的・形成的評価をすすめるために、自己評価と相互評価を生かした事例について述べた。 　子どもたちの学力低下などの状況から学校教育の指針となる学習指導要領が生まれ変わることをふまえ、今までの学習指導要領における教育の問題を洗い出し、新たなカリキュラム改革が目指す理念と課題を明確にした。その上で、各教科の教育はどのように進められるべきか、小学校古典の学習、授業研究のあり方、言葉の力、特色ある教育課程などについても考察した。子どもたち一人ひとりに「確かな学力」に基づく「生きる力」を育てるため、いま、何をすべきか。学校現場で奮闘する教師の方々のよりどころとなる考えを提示した。 A5 版　全 168 頁 編者：人間教育研究協議会 共著者：梶田叡一 加藤明、浅田匡、二瓶弘行、 硲茂樹、田中博史、矢野英明、直山木綿子、松田智子、上月敏子、勝見健史、鎌田首治朗 善野八千子 本人担当部分：第 13 章「特色ある教育課程の編成のために―学校評価の意義―」132～144 頁を単著。 　特色ある教育課程の編成のための学校評価の意義について論じた。学習指導要領で改訂された内容の実施、授業の 1 単位時間の運用や時間割の弾力的な編成等を各学校で責任をもって創意工夫していくこと、開かれた学校，特色ある学校づくりの観点から，家庭や地域社会との連携を積極的に図りながら，教育程編成のための理論と実践を結びつけ学校評価システムを確立の重要性を説いた。特色ある教育課程編成のための学校評価システム及び学習指導要領改訂と学校評価の項目の見直しについて、新たな知見を示した。

著書,学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
５．教員免許更新ガイドブックー基準の講義内容と履修ー	共著	平成 21 年 1 月	明治図書	教員免許更新ガイドブックとして、基準の講義内容及び履修の手引きとなるよう、教員免許更新 30 時間の講義内容を提示した。教員免許更新=講義内容(教職についての省察、子どもの変化についての理解)、教員免許更新=カリキュラム作成基準(踏まえておくべきこと、カリキュラム作成上の留意点、教員免許更新=試験問題予想(教職についての省察、教育政策の動向及び学校の内外における連携協力についての理解に関する事項等を提示。 A5 版　全 272 頁 編著：山極隆、千々布敏弥 共著者： 及川芙美子、善野八千子、大竹晋吾、佐藤敬子、嶋崎政男、平山諭、小島宏、陣川桂三、高木展郎、佐藤晴雄、齋藤勉、押谷由夫、本村一宏、牟田尚敏、倉本哲男、山極隆、大野裕己、久米昭宏、元兼正浩、狩野浩二 本人担当部分：第 1 章講義内容　１節教職についての省察（２）専門職たる教員の役割について、22～32 頁を単著。 専門職として求められることについて理解を深化させ、受講後には個々の教員の実践的指導力の育成が図られる研修効果をめざして論じた。さらに実践的指導力を高めるため、実践の構造化や臨床的な実証研究の構築の必要性を説いた。すべての教員が受講する必修内容としての「教育の最新事情に関する事項」を中心に内容を構成し、主として受講する教員に自ら学ぶ手掛かりをまとめた。
６．キャリア教育読本「コドモタチへの想い」	共著	平成 22 年 11 月	奈良学園キャリア開発センター	就業力向上のために、仕事内容ややりがい等の具体的事例について示した。学生は、保育・教育の今を知り、教育現場の実際や課題を検討することが可能となった。幼児教育学を活かせる保育士・幼稚園教諭以外の分野（主にビジネス）について一定の認知・理解を示した。 A5 版　全 119 頁 編者：奈良文化女子短期大学キャリア教育センター 共著者：石田秀朗、善野八千子、益田美保、島野恭子、田平友子、河井佐紀、杉井涼香、遠山健、李初子、加藤優里、松村友紀、廣岡由香里、福田寿美代、羽野麻里子、福本千春 本人担当部分：第 1 章保育者を目指すあなたへ～「子どもの笑顔をつくるスペシャリストになる」とは？　6～9 頁を単著。 保育者を目指すための要件について 2 点について整理した。子どもを理解するための日常的な生活から子どもへの関心を持つ方策、子どもに関連する番組、ニュース、書籍や絵本をとした方法及び実際に、子どもに関わる施設でボランティア活動を通して、観察・体験について述べた。また、笑顔でいるための自己コントロールについて、時間の管理、健康管理、経済管理から説いた。少子化の進行、育児サービスの多様化に伴って生じている幼稚園と保育所の抱える問題、幼稚園と保育所の一元化の動き、「保幼小連携」への取り組みにも言及した。

著書,学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
７．子どもの育ちと学びをつなぐ～保幼小連携ＷＧの取組を通して～	共著	平成 23 年 3 月	奈良学園キャリア開発センター	奈良文化女子短期大学が組織する幼小連携 WG の合同研究会の取組について、代表としてまとめた。組織開発の経緯、参加者の振り返りを通して、汎用性のある接続カリキュラム着手の意義及び活用のあり方を示した。 A5 版　全 185 頁 共著者： 善野八千子、前田洋一、荒井恵子、　梅田真寿美、南尚美、阪本さゆり、中田章子、熊井祥子、前田嘉余子、大山夏生 本人担当部分：第 1 章 pp. 5-18, 第 3 章 pp. 33-37, 第 6 章 pp. 80-85, 第 7 章 pp. 86-90, 第 8 章 pp. 92-101, 第 9 章 pp. 102-116, 第 11 章 pp. 156-162, 第 13 章 pp. 167-175 を単著。 幼小連携の必要性及び進まない理由について言及し、現状について整理した。また、その解決策としての本学のシンクタンクとしての役割として本研究会を設置した経緯について発信した。育ちと学びをつなぐためには、幼児教育と小学校以降の教育に関わる専門家として互恵性と継続性、発展性の重要性について論じた。幼小接続カリキュラムを作成するための手順とその実際について示した。入学前の 3 週間試案については、３つのカテゴリーと 5 領域を整理して、小学校教員にも理解が進むように示した。さらに、生活科の適応指導及びスタートカリキュラムを視点とした入学後の 4 週間の日案を検討した。
８．幼児期と児童期の接続カリキュラムの開発～子どもの育ちと学びをつなぐ～	共著	平成 23 年 4 月	MJ-Book	幼児期と児童期の接続カリキュラムについて、その課題を明らかにした。、特に、就学後の生活科を中心とした汎用性のあるカリキュラムを開発。 子どもの育ちと学びの「連続性・一貫性」のためには、どのような組織開発が必要とされ、実現可能か、またいつまでにだれが何をどのようにしていくことが重要化について解説。 A5 版　全 136 頁 共著者： 善野八千子、前田洋一 本人担当部分：第 1 章必要なことは、「連続性・一貫性」5～17 頁、第 3 章接続カリキュラム作成のための組織開発 31～34 頁、第 5 章～10 章入学後接続カリキュラムの実践 61～128 頁を単著。 現職の教員と保育者をつなぎ、資質向上にも寄与する研究成果をまとめた。具体的なカリキュラム作成の手順として、生活科を中心とした小学校入学後の目標設定や活動内容について汎用性の実際のカリキュラム作成のプロセスについてもフォーマットを提案した。 適応指導を中心に入学前の３週間 18 日分の日案を提示し、入学後はじめての７つの課題を検討した。学習自立・生活自立・精神自立の 3 つの自立に分類し、生活科のの自立の基礎をはぐくむ方法と内容に整理した。さらに学校園として接続カリキュラムに取り組むための組織開発についても示した。

著書,学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
９．教育フォーラム 48 国際教育の課題と展望	共著	平成 23 年 8 月	金子書房	日本の学校教育の喫緊の課題である国際教育・グローバル教育は。子どもたちの生活自体は国際色豊かなものとなり、学校や地域でも積極的な取り組みが行われている。しかし、具体的に教育においてどのように国際性をとらえ、育てていけばよいのかは理解が深まっていないのが実情に言及した。 A5 版　全 176 頁 編者：人間教育研究協議会 共著者：梶田叡一、見上一幸、松田智子、松田公平、鎌田首治朗、前田洋一、川﨑由花、古川治、善野八千子、筒井愛知、山本美紀、加藤明、河上隆一、湯峯裕、汐海治美、渡部久美子 本人担当部分：第９章「幼小接続期における国際教育」81～90 頁をを単著。 幼小接続期における国際教育について、自らの国の伝統・文化に根ざした自己の確立のためには何が必要であるかを論じた。学習指導要領改訂では「幼稚園教育要領、小・中学校学習指導要領等の改訂のポイント」の教育内容の主な改善事項の一つとして「伝統や文化に関する教育の充実」が掲げられたことから、新しい学習指導要領のめざすものの具体例を示した。また、幼小接続期における国際教育の必要性とその体験を経験化する方法を示した。 教育的な願いとねらいをはっきりと持ち、それを実現する活動を準備し、子ども一人ひとりの国際体験・異文化体験を教育的な意味で経験化するために様々な視点から考察、問題提起した。
１０．学校管理職の経営課題５　学校をエンパワーメントする評価	共著	平成 23 年 10 月	ぎょうせい	学校評価を経営改善に生かす視点を探った。学校経営のビジョン、カリキュラム経営、組織マネジメントから学校評価に至るまで、学校経営に必要な重要トピックスを詳解。 A5 版　全頁数 194 頁 編者：天笠茂、大脇康弘 共著者大脇康弘、加藤崇英、相澤良明、善野八千子、小島宏、八尾坂修、根津朋美、白井達夫、猪股亮文、京都市教育委員会 本人担当部分：第４章「マネジメントのツールとしての学校評価」56～76 頁を単著。 学校評価のこれまでの経緯を解説し、課題と改善のためのシステムを示した。第三者評価とは何か、また第三者評価を活かして学校のポジティブプロパガンダをいかに創るかをフロチャートで提示した。学校をエンパワーする評価のあり方、マネジメントツールとしての学校評価のうち、自己評価の手法、学校関係者評価、第三者評価を中心に整理した。加えて、学力を育てる学習評価と授業評価及び教師力を育てる教員評価、カリキュラム・アセスメントについて論考した。

著書,学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
１１．子どもの育ちと学びをつなぐⅡ～幼小連携ＷＧの取組を通して～	共著	平成 24 年 3 月	奈良学園キャリア開発センター	奈良文化女子短期大学幼小連携ＷＧ合同研究会の平成 23 年度の取組をまとめた。幼小接続カリキュラム（就学前）を開発を試みるとともに、入学前の 3 週間を再検討した。 全頁数 185 頁 共著者：善野八千子、前田洋一、筒井通子、阪本さゆり、南尚美、前田嘉余子、大山夏生、定豊子、田村豊、荒井恵子、角田道代、 本人担当部分：第 1 章「幼小連携 WG 合同研究会の取り組みと意義」6-11 頁、第 4 章「とまどい」を解決する幼小接続カリキュラム 52-82 頁、を単著。 幼小連携 WG 合同研究会の取り組みと意義について、これまで生活科移行期において、カリキュラム作成の経験からの方法論と組織開発につながる発展性を価値づけた。また、指導者が困っている入学直後の状況からでなく、学習者の側からみた就学後の子どものとまどい要因 6 点を提示した。 学びの基礎力とのマトリクス作成により、ワークショップで活用し、幼児教育と小学校教育者による合同の教育課程の理解及び検討の方策についての具体的な道筋を示した。
１２．教育フォーラム 50＜やる気＞を引き出す・＜やる気＞を育てる	共著	平成 24 年 8 月	金子書房	教師が子どもの＜やる気＞を引き出し、育てるための方策を、教科のかかわり、教材・校内研究、学習塾の取り組みなども参考に考察、提案した。 A5 版　全頁数 179 頁 編者：人間教育研究協議会 共著者：梶田叡一、加藤　明、松田智子、金山憲正、善野八千子、勝見健史、久田孝、錦織　彰、住本克彦、野田健司、中田正浩、 前田洋一、中村　哲、瀧明知惠子、浅田匡 本人担当部分：第 9 章「子どもの＜やる気＞をつなぐ幼小接続」34～46 頁を単著。 子どもの＜やる気＞をつなぐこと、育ちと学びをつなぐことの共通の問題から論述した。意欲・モチベーション、＜やる気＞に関するデータ及び諸説を考察・整理した。 幼小接続 に必要な 3 要素及び脳が＜やる気＞を出してくれる４つの条件などの知見を示した。 幼少期の子どもの意欲については、その正体と環境について、幼小接続期における＜やる気＞を引き出す実践事例について、考察した。

著書,学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
１３．子どもの育ちと学びをつなぐ－幼小連携のあり方と接続カリキュラムの作成－	共著	平成 24 年 9 月	MJ-Book	幼児期と児童期の接続カリキュラムについて、生活科移行期から取り組んできた経緯を考察した。就学前後を接続する汎用性のあるカリキュラムを改善する視点を明確にした。 A5 版　全 131 頁 共著者：善野八千子、前田洋一、定豊子、阪本さゆり、南尚美、大山夏生、前田嘉余子、田村豊 本人担当部分：第 1 章幼小接続のためになすべきこと、できること 8-17 頁、第 4 章「とまどい」を解決する幼小接続カリキュラム 58-87 頁、第 5 章育った力を学ぶ力へ 88-99 頁を単著。 教員の資質向上にも寄与する実践研究について、考察した。「とまどいマトリクス」を開発し、研修で活用できるように試みた。ワークショップ研修の方法や活用についても示した。また、「一日体験入学の」活動事例について、紹介し今後の発展課題を明示した。
１４．夢と力を育てる新しい学校づくり	共著	平成 25 年 4 月	教育出版	未来に向かう力をつけることのできる学校経営の在り方の提案として、新たな知見と実例をふまえ、未来志向型の学校づくりの提案。 A5 版　全 136 頁 共著者：善野八千子、前田洋一 本人担当部分：第 1 章忙しい木こりの物語(1-4 頁)、第 2 章こんな学校が日本の教育を変える(5－14 頁)、第 7 章「一石五鳥プラン」と「仕事のＡＢＣ」（84－106 頁)、第 8 章幼稚園における学校評価(107－116 頁)、第 9 章さらなる外部評価アンケートの改善（117－136 頁)を単著。 教員の資質向上が子どもの学校文化を創る力になることを論考した。学校訪問記や評価を改善に生かした事例等のフィールドリサーチや分析から考察。学校づくりの発信転換の必要性を説き、学校教育関係者、学生等と共に熟考し、行動変容を可能にする知見を示した。
１５．教育フォーラム 54『各教科等の学習を支える言語活動』	共著	平成 26 年 8 月	金子書房	言葉の力を育てるため単元目標構造図や年間指導計画の活用などを考えながら、各教科特有の言語活動について、教師がどのような点に留意した指導を行えばよいのか、具体的な実践を踏まえて考察した。 A5 版　全頁数 140 頁 編者：人間教育研究協議会 共著者：梶田叡一、加藤　明、金澤孝夫、櫻本明美、金山憲正、中田正浩、川俣徹、松田智子、善野八千子、蔵あすか、オチャンテ村井ロサメルセデス 本人担当部分：第 10 章「幼小接続におけるこれからの言語活動」98～109 頁を単著。 幼小接続期の対話と姿勢について、育ちと学びをつなぐ課題から論述した。

著書,学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
１６．教科力　生活	共著	平成 28 年 2 月	玉川大学出版	学習指導要領平成 20 年に対応。教員の力量形成において重要な生活科の内容構成の理解を目的として、生活科のための実践力の自学自習テキスト。 A5 版　前頁数 182 頁 編者：寺本潔 共著者：寺本潔、綿貫健治、森山賢一、神永典郎、善野八千子、 本人担当部分：第 11 章「スタートカリキュラムの重要性と指導内容」114～124 頁、第 12 章「交流を通した人間関係作りの指導内容」125～135 頁、第 14 章「自己成長に気付かせる内容」146～156 頁、おわりに「生活科創設の内容や最新の教育界の動向」176～182 頁を単著。
１７．教育フォーラム 59『対話的な学び-アクティブラーニングの 1 つのキーポイント-』	共著	平成 29 年 2 月	金子書房	主体的・対話的な深い学び、すなわちアクティブ・ラーニングを実現するには実際の指導場面で役立つ工夫、具体的な提案をした。 A5 版　全頁数 176 頁 編者：日本人間教育学会 共著者：梶田叡一、湯峯裕、鎌田首治朗、伊崎一夫、金山憲正、菅井啓之、北俊夫、赤堀博之、善野八千子、牧田秀昭、五百住満、中村豊、石森広美、オチャンテ村井ロサメルセデス、井上信子 本人担当部分：「幼小接続期の対話的学びの力」91～101 頁を単著。 幼児期から小学校接続の対話的学びの力として、一次的ことばと二次的ことばの接点に立つ教師の役割から考察した。
（学術論文） １．受講生に変容をもたらす総合演習の探求	単著	平成 19 年 12 月	奈良文化女子短期大学研究紀要第 38 号 p. 67～p. 78	担当科目「総合演習」において、「学園祭展示に位置づけた中間発表」と「他者評価及び相互評価」について検証した。2005 年度授業分析と 2006 年度授業の実際から考察した。さらに、受講生に変容をもたらしたと思われる授業を特定し、課題設定力の変容と情報収集・活用力の変容について明らかにした。幼児教育の専門性を有する教員養成において求められる「子どもの育ちの連続」めざした「保幼小連携」についての理解と実践力であるという文脈において、学生に実践力をつける「総合演習」はいかにあるべきかを 2 点の仮説をもとに論考した。
２．保幼小連携の課題解決に向けた考察	単著	平成 20 年 12 月	奈良文化女子短期大学研究紀要 第 39 号 p. 57～p. 68	保育所保育指針及び幼稚園教育要領並びに学習指導要領が告示され、改訂にあたっての幼児教育と小学校教育の接続に関する特色を整理した。また、これからの保幼小連携に求められるものを考察し、課題解決にせまる方策として、幼児教育関係者と小学校教育に関わる両者の教育課程上の連携が重要であることを提言した。その方策として、入学前に位置づける保幼小連携合同授業や学校評価を通した学校園の特色に位置づける組織開発等を提案した。

著書,学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
３．幼稚園における学校評価項目作成の試み	単著	平成 21 年 12 月	奈良文化女子短期大学研究紀要 第 40 号 p. 83- p. 99	幼稚園における学校評価項目作成を目的とし、現職小学校・幼稚園教諭及び教員・保育士養成校学生に対して「私が親ならこんな幼稚園に通わせたい」ことを記述するアンケート調査を実施し分析した。大項目を分類・整理し、さらに、受益者としての保護者の願いや期待を取り入れて精査した結果、幼稚園における学校評価項目として望ましい 88 の評価項目を提示した。提示した評価目の実施による検証が課題として残され、継続研究の方向性と展望を示した。
４．幼小接続期におけるカリキュラムの開発	単著	平成 22 年 12 月	奈良文化女子短期大学研究紀要 第 41 号 p. 49- p. 67	幼稚園と小学校両者による教育課程の理解を中心に推進することの意義及び子どもの育ちと学びの連続保証を目的として、両者の教職員の連携活動を推進する組織開発のあり方を探った。そして、「汎用性のある幼小接続期のカリキュラムの作成」を通して、構成要素と作成の手だてについて明らかにしつつ、教育課程の理解を入り口として、教職員の理解と子ども理解を同時にすすめながら、幼小連携を推進するために必要な組織のあり方や方向性等の知見を示した。
５．幼小接続期におけるカリキュラムの開発Ⅱ	共著	平成 23 年 11 月	奈良文化女子短期大学研究紀要 第 42 号 p. 49～p. 67	幼児教育と小学校以降の教育に関わる双方による教育課程の理解を中心にした「育ちと学びの連続性」及び子どもの成長保障と学力保障の両全を目的として、幼小両者の教職員の連携活動を推進するカリキュラム開発及び組織開発のあり方を探った継続研究をまとめた。今回は、「汎用性のある幼小接続期のカリキュラム作成」の中で、とりわけ就学後の就学直後の課題を探り、就学前のカリキュラム改善のためのフォーマットを作成し、活用方法を提示した。 本人担当部分：就学直後の課題を探り、就学前のカリキュラム改善のためのフォーマットを作成した。このことにより、幼小連携を一層推進し、生活科の授業改善につなげる方策を示した。 共著者：善野八千子、前田洋一
６．幼稚園の学校評価における外部アンケート項目作成の試み （査読付）	共著	平成 24 年 7 月	日本学校教育学会「学校教育研究」 NO. 27p. 93～p. 105	幼稚園における保護者の満足度に関する研究を 3 カ年にわたり継続し、幼稚園の経営実態から適切に把握できる評価項目を策定した。質問項目の作成を目的とする調査 A、質問項目の精選を目的とする調査 B から、信頼の決定要因を究明した。また、幼稚園の経営実態から適切に把握できる評価項目を策定した。10 園を現地訪問調査し、改善事例から分析し、その活用の有効性について検討した。作成された簡便な質問紙は経営状況を弁別しうることを検証した。 本人担当部分：質問項目の作成を目的とする調査 A、質問項目の精選を目的とする調査 B を実施し、信頼の決定要因を検討した。また、対象幼稚園全園を訪問指導し、経営実態から適切に把握できる評価項目を策定した。10 園を現地訪問調査し、改善事例から分析し、その活用の有効性について検討した。 共著者：前田洋一、善野八千子

著書,学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
７．幼小接続期におけるカリキュラムの開発Ⅲ～入学後の子どもの戸惑いに着目して～	単著	平成 24 年 11 月	奈良文化女子短期大学研究紀要 第 43 号 p.49～p.67	「育ちと学びの連続性」及び子どもの成長保障と学力保障の両全を目的として、幼小両者の教職員の連携活動を推進するカリキュラム開発及び組織開発のあり方を探った継続研究である。指導者が困っている状況からではなく、学習者である子どもが「入学後に戸惑っている状況」に着目し、とりわけ就学直後の課題を「とまどい」の視点から調査した。それらを解決する「生活科」カリキュラム開発または改善の手がかりとなるツールを提示した。とまどい要因を幼児教育と小学校教育の双方で解決することによって、「子どもの育ちと学びをつなぐカリキュラム」を作成及び改善の手立てとして、研修会でも活用できることを示唆した。
８．「人間教育」の典型― 幼小連携・接続教育の価値 ― （査読付）	単著	平成 26 年 3 月	日本人間教育学会 学会誌 Vol.1 p.67～p.78	教育の連携性と教育の一貫性をふまえ、幼小連携・接続,の価値について述べた。また、これまでの研究の知見から幼小接続期におけるカリキュラム開発の方法について提示した。さらに、幼児期の教育と小学校における,生活科との連続性について論述した生活科成長単元において,学習者の自己成長への気づきを促す過程を分析し,活動の活性化及び指導者の関わり方の必然性について,考察を行った。
９．人間教育に資する「これからの幼小接続教育」の展開(1) －自己成長への気づきを促す生活科の実現に向けて－（査読付）	単著	平成 27 年 3 月	日本人間教育学会 学会誌 Vol.2 p.93～p.105	「これからの幼小接続の基軸となる生活科教育」の工夫改善となる３つの要件を導出した。さらに,これら３つの要件。生活科成長単元において,学習者の自己成長への気づきを促す過程を分析し,活動の活性化及び指導者の関わり方の必然性について,考察を行った。これら３つの要件を充足する実践事例「生活科成長単元第 2 学年自分たんけん」の分析による検証を行い,その有効性について解明した。
１０．人間教育に資する「幼小接続期カリキュラム」のあり方－「とまどいマトリクス」を活用した接続カリキュラムの改善－ （査読付）	単著	平成 28 年 3 月	日本人間教育学会 学会誌 Vol.3 p.39～p.50	就学前後の子どものとまどい要因を幼児教育と小学校教育の双方で解決することによって、「子どもの育ちと学びをつなぐカリキュラム」を作成できることを示唆した。また、それらを活かした「一日体験学習」の実践幼稚園の訪問調査結果から 4 段階の変容を分析した。 とまどい要因を幼児教育と小学校教育の双方で解決することによって、「子どもの育ちと学びをつなぐカリキュラム」改善の手立てとして、活用できることを幼児教育の実践事例を分析し検証した。
１１．人間教育に資する「幼小接続期カリキュラム」のあり方（２）－カリキュラム・マネジメントから考察する「とまどいマトリクス」の活用－ （査読付）	単著	平成 29 年 3 月	日本人間教育学会 学会誌 Vol.4 p.43～p.56	就学前後の「子どもの育ちと学びをつなぐ」ためにスタートカリキュラムを作成するために必要なこと、またそのカリキュラム・マネジメントのあり方についてを示唆した。３つの実践小学校に関わった管理職の聴き取り調査結果から 4 段階の変容を分析した。 とまどいマトリクス活用によって、「子どもの育ちと学びをつなぐカリキュラム」改善の手立てとして、活用できることを小学校入門期の教育実践事例を分析し検証した。

著書,学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（その他） 「研究報告書」 １．幼稚園における学校評価手引き書 （文部科学省委嘱研究）	共著	平成 21 年 3 月	大和郡山市教育委員会	文部科学省委嘱事業（幼児教育の改善・充実調査研究事業平成 20 年度）大和郡山市運営委員長として幼稚園における学校評価手引き書を作成した。実践協力委員に対して全編にわたって指導し、監修にあたった。 A４版　全 56 頁　監修：善野八千子
「収録集」 １．関西セミナー関西 2007 人間教育実践交流会　京都フォーラム収録集「授業力・学校力・人間力の向上 ～学習指導要領の改訂とこれからの学校教育～」	共著	平成 19 年 10 月	日本教育新聞社	テーマ「授業力・学校力・人間力の向上～学習指導要領の改訂とこれからの学校教育～」を設定し、各方面の識者が講演した収録集。「これからの教科指導と授業づくり」、「学校評価部会」「教師力向上部会」等の構成。 共著者：浅田匡、布村幸彦、初田幸隆、角谷重樹、成山治彦、松田智子、梶田叡一、鎌田首治朗、菅井啓之、善野八千子、小楠徹、浅野良一 A４版　全 207 頁 本人担当部分：「学校評価を活かして学校力・教師力を高める～」144～165 頁を担当。 学校評価とのかかわり、「やってよかった学校評価」信頼構築・授業改善に活用するツール、学校自慢、子ども自慢を通して、信頼性、客観性、妥当性のある評価がいつでもだれでも伝えられるか、その根拠としての学校評価のシステムについて論じた。また、外部評価委員が検証する４つのポイントをまとめた。
２．関西セミナー関西 2008 人間教育実践交流会　京都フォーラム収録集「新学習指導要領とこれからの学校 ～習得・活用・探究型学力と言語力の育成～」	共著	平成 20 年 11 月	日本教育新聞社	新学習指導要領とこれからの学校～習得・活用・探究型学力と言語力の育成～を大テーマに掲げた各講演収録。「新学習指導要領とこれからの教育」「学校、家庭、地域をつなぐ学校評価」課題別講演等をまとめた。 A４版　全 300 頁 共著者：加藤明、金森越哉、浅田匡、甲斐睦朗、天笠茂、梶田叡一、勝見健史、鎌田首治朗、天野拓夫、陸奥田維彦、土田圭子、六車陽一、秋吉博之、三木史子、松田智子、寺田博幸、前田美智代、阿部扶早、飯塚晃三、金岡成晃、古川治、善野八千子、溝口聡、田村壽秀、山口晋、初田幸隆、友野遙子、中村哲、北村昌江、小楠徹、久保弘子、浅野良一、渡邊規五郎、池島徳大、丹波洋子 本人担当部分：「学力向上と学校評価～新学習指導要領をふまえて～」144～165 頁を担当。 「学校評価」の講演をもとに、学力向上と学校評価について、新学習指導要領をふまえて述べた。特に、学校評価研究指定校の取組を紹介し、データに基づいた学校改善の検証をフィールドリサーチ事例を示し知見を詳述。
３．平成 25 年度研究・研修収録第 44 号	単著	平成 26 年 3 月	大阪市私立幼稚園連合会	平成 25 年度研究・研修収録「専門教養研修」として、執筆。 本人担当部分：幼小連携「子供の育ちと学びをつなぐ」69～72 頁を単著。

著書,学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
４．平成 26 年度研究・研修収録第 45 号	単著	平成 27 年 3 月	大阪市私立幼稚園連合会	平成 26 年度研究・研修収録「専門教養研修」として、執筆。 本人担当部分：幼小連携(2)「子供の育ちと学びをつなぐこれからの言語活動」85～89 頁を単著。
５．平成 27 年度研究・研修収録第 46 号	単著	平成 28 年 3 月	大阪市私立幼稚園連合会	平成 27 年度研究・研修収録「専門教養研修」として、執筆。 本人担当部分：幼小連携「幼小接続カリキュラムの作成と改善＜とまどいマトリクス＞を活用して」78～80 頁を単著。
６．平成 28 年度研究・研修収録第 47 号	単著	平成 29 年 3 月	大阪市私立幼稚園連合会	平成 28 年度研究・研修収録「テーマ研修」として、執筆。 本人担当部分：子どもの育ちと学びをつなぐ幼小接続期の対話的学びの力 35～38 頁を単著。
「書評」 １．深川八郎著『授業改善の評価と方法－授業評価の事例的分析研究－』	単著	平成 21 年 3 月	教育行政研究第 36 号　学会創立記念号（その 3）関西教育行政学会誌	『授業改善の評価と方法』についての書評。授業評価の事例的分析研究について、要約し紹介した。特に、評価後のフィードバックが授業者にも評価者にも明確な形で示される優れた取組や各学校の研究テーマについてリフレクションを深める中で、評価活動における次の課題を共通理解して新たな取り組みの筋道を作ることが重要である点を評価した。 A4 版　全 105 頁 本人担当部分：83～85 頁を単著。
「事典」 １．改訂　実践教育評価事典	共著	平成 22 年 8 月	文溪堂	新学習指導要領と新指導要録を基本据えた教育評価の基礎知識的な用語を解説。 A4 版　全 264 頁 共著者：梶田叡一、加藤明、長谷浩也、吉村希至、土田圭子、石井雅幸、上之園公子、尾崎友美、松田智子、鎌田首治朗、勝見建史、金沢緑、有本昌弘、木下博義、古川治、猿田祐嗣、小倉康、立田慶裕、土田圭子、二瓶弘行、田中博史、松浦拓也、寺本貴啓、善野八千子、角谷重樹、米田豊、北川達夫、小楠徹、内田和寿、林義樹、菅千索、森敏昭、川崎弘 本人担当部分：「学校評価」188－189 頁を単著。 学校評価について、学校評価のガイドラインの改訂から進め方まで解説。
「依頼原稿」 １．「させられる評価」から「ポジティブな評価」へ	単著	平成 19 年 4 月	明治図書『現代教育科学』NO.607	「学校の自己評価」を生かして教育再生を図ることを目的とし、「させられる評価」から「ポジティブな評価」への提言をした。「学校が元気になるため」に実施する学校評価のために、回収率を高め評価結果に客観性・信頼性が生みだす重要性を説いた。そのために学校評価計画や評価項目の設定理由や内容の説明及び回収時期の予定等を事前に周知する努力をしていくことも示した。 本人担当部分：「学校の自己評価」で教育再生を図る 14～19 頁を単著。

著書,学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
２．改正　教育基本法「家庭教育と幼児教育、保護者地域と」	単著	平成 19 年 5 月	明治図書学校マネジメント５月号	改正教育基本法において、新たに規定された大学、私立学校、家庭教育、幼児期の教育、学校・家庭・地域の連携協力などについて述べた。特に、幼保一元化・幼小連携等の滑らかな連接が求められる中、校区で学校評価結果から就学前の保護者のニーズや幼児教育の課題について共有する契機となることを示唆した。本人担当部分：32～33 頁を単著。
３．外部評価の充実と期待される成果	単著	平成 19 年 11 月	全日本中学校長会中学校 NO.650　平成 19 年 11 月号	外部評価の充実と期待される成果について、地域住民・保護者と共に学校のポジティブプロパガンダを広げるための方策を述べた。学校評価が、アカウンタビリティを果たし学校改善のために活用するツールであることから自己評価だけでは自らの取り組みを評価しにくい側面があることを強調した。評価結果を検証し、評価を行うこととその情報提供によって外部評価者から学校を改善するためのアドバイスや知恵を得ることの重要性を説いた。 本人担当部分：14～17 頁を単著。
４.「活用力」アップの具体化望む	単著	平成 20 年 2 月	教育新聞 2/25 付	活用力を高める取り組みと結果の情報発信の方策について提言した。国際学力調査（PISA）で、日本の子どもの学力「活用力」が年々低下していることから、全国学力調査（文科省実施）における順位が公表され課題が明確になった。各学校は、PISA 型学力及び新学習指導要領で強調される活用力をつけること、そのための具体的な取り組み及びプロセスとその成果を示す重要性を示唆した。 本人担当部分：1 面　オピニオンを単著。
５．元気の出る「学校評価」と校内研修のポイント	単著	平成 20 年 7 月	明治図書学校マネジメント８月号	元気の出る「学校評価」を生かした校内研修のポイントについて、述べた。「学校評価」と新教育課程との関連においては、「特色ある学校づくり」と学校評価について及び学校評価システムの構築と結果公表の方策のプロセス案を提示した。また、「特色ある学校づくり」は、学校評価結果に表れる自校の誇りを強化するプロセスであることについても示した。 本人担当部分：54～55 頁を単著。
６．学校評価に生かす学テ結果の分析・診断のポイント	単著	平成 20 年 8 月	明治図書学校マネジメント９月号	学力テスト結果を活かした教師力の診断・評価について論じた。指標と学力テスト実施され、授業改革が一層求められていることから、「教師力の評価・診断」とは、教師は結果から分析して効果的なアクションプラン作成の評価であるとした。また、子どもの学習意欲を引き出す教師の意欲が「教師力の診断・評価」と考え、結果を生かした改善策や各都道府県で実施されてきた事例も参考に提言。 本人担当部分：44～45 頁を単著。

著書,学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
７．心を育てる学級経営	単著	平成 20 年 11 月	明治図書「学級経営」12 月号	保護者との連携の進め方について、「アットホームなネットワークでフットワークよく」として、提言した。プロセス評価とクイックレスポンスで築く信頼構築について、「保護者が求める教師像」という小学校の保護者対象の調査（2007）結果をもとに論じた。クレーマーをサポーターに変えていくいくための発想と具体的提案を行った。 本人担当部分：8 頁を単著。
８．みんなで始めよう！ふじの子育て講演記録	単著	平成 21 年 1 月	富士市教育委員会	子ども、学校、保護者、地域の教育の当事者が連携している事例及び効果を挙げている事例について紹介した。また、調査結果をもとにふじの子育てに対するアドバイスとして提言した。平成 20 年度教育シンポジウムみんなで始めよう！ふじの子育て開催記録 本人担当部分：21～43 頁を単著。
９．教育ソリューションフェア２００８【分科会１】学校リーダー向けセミナー	単著	平成 21 年 2 月	日本教育新聞社	学校力・教師力を高めることを目的として、次につながる学校評価とは何かについて、論じた。これまでのフィールドリサーチや聞き取り調査から学校評価の結果をフィードバックさせ、信頼構築のツールとして改善に活かそうとしているか、学校評価の実施そのものが目的となっているかの違いを明確にした。 本人担当部分：13～16 頁を単著。
１０．東通村における学校評価・保幼小連携	単著	平成 21 年 3 月	教育出版	東通学園における保幼小連携の課題解決に向けて、スタートカリキュラムの編成及び総合的に学ぶ幼児教育の成果を小学校教育に生かす事例、入学当初の生活科を中核とした合科的な指導について論じた。また、「東通村保幼園(仮称)」と「東通村小学校」を接続するための提言をまとめた。 本人担当部分：15～19 頁を単著。
１１．仕事のＡＢＣ～苗代ってなんですか～	単著	平成 21 年 5 月	明治図書学校マネジメント 6 月号	「教職員意識のギャップ＝ビックリ例」として、新任教師に対する自然体験不足以前の知識不足、教材研究不足についての実態について具体事例をあげた。規範意識以前の社会のマナー・ルール・モラルを「親育て」をも担っていく教師に身につけさせていく必要とともに経験豊富な教員へのエールを送った。 本人担当部分： 12～13 頁を単著。
１２．マル得情報をキャッチするアンテナの立て方	単著	平成 21 年 9 月	明治図書学校マネジメント 10 月号	情報の収集・活用・編集・発信の一連の流れについて整理し教師にとって重要な「生きる力」として、「学校評価」に関する関係法令　学校評価に関する学校教育法・学校教育法施行規則の規定　学校評価の推進関する調査研究協力者会議学校評価及び情報提供の実施状況（調査結果）及び学力向上の具体策発信と実行について、7 点に整理して提示した。 本人担当部分：15～16 頁 を単著。

著書,学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
１３．学校評議員制度の変革点と現場への影響予測	単著	平成 22 年 1 月	明治図書学校マネジメント２月号	変革点として評議員制度に関連する教育の無償化と「学校理事会」の設置２点を予測して論じた。学校教育の無償化がもたらすもの学校格差を生み出さない学校評価の「学校理事会」の設置についての課題と教育情報の可視化とアーカイブ化の必要性を示した。 本人担当部分：14～16 頁を単著。
１４．子どもの育ちと学びをつなぐ保幼小連携Ｉ接続カリキュラム作成のポイント	単著	平成 22 年 11 月	日本教育綜合研究所 週刊教育 PRO 第 40 巻第 43 号	幼稚園教育と小学校「生活科」教育についてを、「遊びから学び」へという視点から検討を加えた。１点目に、発達に即した「育てたい姿」と「内容」を設定すること。２点目に、子どもにとっての環境の変化や違いを知ること。３点目には、子どもにとっての新しい環境の変化や違いを「時間・空間・仲間」で整理することを読み解いた。特に、就学前５歳児２月末から、入学後１年生４月・５月第１週までの「接続期７週間モデル案」のうちの、小学校入学後第１週の生活科スタートカリキュラムの一例から、その重要性を示した。 本人担当部分：36～ 38 頁を単著。
１５．子どもの育ちと学びをつなぐ～明日からできる幼小接続カリキュラム①	単著	平成 24 年 5 月	日本教育綜合研究所週刊教育 PRO 第 42 巻第 11 号	異校種の保育・教育現場をつなぎながら、子どもの育ちをつなぐ研究と実践の往還を実現していく装置としての組織開発について、示唆した。これまで、2009 年から着手した継続研究を整理し、課題と展望を示した。 また、幼児教育と小学校教育をつなぐ「幼小接続カリキュラム（就学前）（就学後）」のカリキュラムを作成するプロセスを示唆。 本人担当部分：32～37 頁を単著。
１６．子どもの育ちと学びをつなぐ～明日からできる幼小接続カリキュラム④	単著	平成 24 年 7 月	日本教育綜合研究所週刊教育 PRO 第 42 巻第 15 号	新幼稚園教育要領の基本理念である、「生きる力」の基礎をはぐくむことから、幼児教育終了段階で身に付けたい「知・徳・体」、学びの基礎力の基本事項を解説。幼小接続カリキュラム（就学前）の作成にあたり、目標を示した。さらに、生活科につながるカリキュラム作成のための視点を「時間、空間、人間、もの、技能、心情」の 6 項目であると示し、縦軸に、「知・徳・体」、横軸に、「時間、空間、人間、もの、技能、心情」のマトリクスを考案。また、「学校ごっこ」と就学後の子どもの体験と遊びの重要性についてまとめた。 本人担当部分：33～37 頁を単著。
１７．子どもの育ちと学びをつなぐ～明日からできる幼小接続カリキュラム⑤	単著	平成 24 年 7 月	日本教育綜合研究所 週刊教育 PRO 第 42 巻第 16 号	入学前の「一日体験入学から、学校ごっこへ」について、幼児教育と生活科の接続について、考察した。入学前後のとまどい要因は、6 点あることを示した。時間・空間・人間・もののちがいについて、小学校入学時点との相違点について、解説。「より意義のある一日体験入学」の活動について、幼児教育のねらいと小学校生活科のねらいを併記して、目標に対応した活動としての評価を検討した。活動名「もうすぐいちねんせい」、単元名「あたらしい 1 年生をしょうたいしよう」に関連して提示した。 本人担当部分：34～37 頁を単著。

著書,学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
１８．子どもの育ちと学びをつなぐ～明日からできる幼小接続カリキュラム⑥	単著	平成 24 年 8 月	日本教育綜合研究所 週刊教育 PRO 第 42 巻第 17 号	筆者の提案を元に実施した八尾市立東山本幼稚園からの聞き取りと記録を通して実践例を示し考察した。また、学校園の組織として連携を継続するために幼小接続は、管理職の問題意識や役割が非常に大きいことから、保育所から小学校に連携を申し出る手続きは、子どもの入学先や可能な相手校を選択して、主体的に働き掛けていくことの必要性を提言した。公私立の園と小学校の交流限定などの制約実態や子どもの交流の前に、まず教職員の交流から始める方策を示した。 本人担当部分：34～37 頁を単著。
「学会発表」 １．実践力をつける「総合的学習」の探求―保幼小連携を視座した「総合演習」の授業づくりを通して―	個人	平成 19 年 6 月	日本生活科・総合的学習教育学会第 16 回大会（於：千葉大学）	幼児教育の専門性を有する教員養成において求められる「子どもの育ちの連続」めざした「保幼小連携」についての理解と実践力であるという文脈において、学生に実践力をつける「総合演習」はいかにあるべきかを 2 カ年の実践を通して探求。 (1)課題設定能力を育成するために-先行研究から学ぶ機会を導入することによって意欲を喚起し、具体的な活動の見通しやイメージをもつことができる。(2)表現力、評価能力を高めるために①学園祭展示を中間発表として位置づけことによって他者から学び、子ども理解に基づく問題解決ができる、2 点の仮説をもとに考察した。
２．「保幼小連携を視座した生活科の授業づくり」	個人	平成 20 年 6 月	日本生活科・総合的学習教育学会第 17 回大会（於：山形大学）	幼児教育と小学校教育に関わる専門性を有する教員の資質は「子どもの育ちの連続」め ざした保幼小連携についての理解と実践力であることから、これまでの実践力をつける「総合演習」の探求で得た知見をもとに、「保幼小連携を視座した生活科の授業づくり」ついて示唆した。実践力をつける「総合演習」から保幼小連携を視座した生活科の授業づくりを試行した。また、受講生に変容をもたらしたと思われる授業の特定をし、2 年間の実践を比較分析し、考察した。
３．幼稚園における学校評価項目作成の試み	共同	平成 22 年 6 月	日本教育経営学会第 50 回大会 （於：静岡大学）	幼稚園における学校評価項目作成を目的とし、現職小学校・幼稚園教諭及び教員・保育士養成校学生に対して調査した。項目を分類し、さらに、望ましい 88 の評価項目を提示した。幼稚園満足度と評価項目カテゴリーとの関係を因子分析し、検証した。評価項目作成のアンケート調査研究及び考察した。 本人担当部分：幼稚園における学校評価項目作成を目的とした現職小学校・幼稚園教諭及び教員・保育士養成校学生に対して実施した調査方法について、受益者側から項目を作成する知見を述べ、評価項目作成のアンケート調査結果を考察から得た結果について、詳述した。 共同発表者：善野八千子、前田洋一

著書,学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
４．子どもの育ちと学びをつなぐ幼小接続期におけるカリキュラムの開発	個人	平成 22 年 6 月	日本生活科・総合的学習教育学会第 19 回大会 (於:立命館小学校)	幼小による教育課程の理解を中心に推進することの意義及び子どもの育ちと学びの連続保証を目的として、「汎用性のある幼小接続期のカリキュラムの作成」を試みた。ポスターセッション型実践交流を推進した取り組みの問題点を整理した結果、校区の特性によって異なる取り組みを解決するためのカリキュラム作成の必要性を説いた。その構成要素と作成の手だてについて明らかにし、教職員の理解と子ども理解を同時にすすめながら、幼小連携を推進するための組織開発を提案した。
５．グローバル社会時代の学校づくり～学校評価を基軸とした教育情報の可視化とアーカイブ化～	個人	平成 22 年 9 月	日本グローバル教育学会第 18 回大会 (於:鳴門教育大学)	シンポジウムにおいて、グローバル社会時代の学校づくり～学校評価を基軸とした教育情報の可視化とアーカイブ化～と題して、１．グローバル社会時代の子どもに育成する資質能力　２．経験知をふまえた理論や具体的提案　３．学校づくりの基軸となる学校評価～教育情報の可視化とアーカイブ化～　４．グローバル社会に時代に対応した学校づくりと教師の力量形成について、提案し示唆した。とりわけ、教師の力量形成における知見として、学校評価の参画者として学校への愛着と誇りを持った教員の育成について提案した。
６．子どもの育ちと学びをつなぐ幼小接続期におけるカリキュラムの開発～「幼小接続７週間モデル案（第２次)」作成を通して～	個人	平成 23 年 6 月	日本生活科・総合的学習教育学会第 20 回大会（於:岐阜聖徳大学)	幼小連携にかかる子ども観・評価観の違いを整理した。また、教育課程の理解を中心に推進することの意義及び子どもの育ちと学びの連続保証を目的とするとして、「汎用性のある幼小接続期のカリキュラム幼小接続７週間モデル案（第２次)」作成した。作成の手順及びこれまでのカリキュラム改善の視点について知見を述べた。具体的には、就学後の 18 日案、第 1 週～5 週までの生活科を基軸とした実践事例を提示した。適応指導のみの考えでない幼児教育の育ちをつなぐための新たなスタートカリキュラムの考えを提案した。
７．子どもの育ちと学びをつなぐ幼小接続期におけるカリキュラムの開発Ⅲ～「入学後の子どものとまどい」に着目して～	個人	平成 24 年 6 月	日本生活科・総合的学習教育学会第 21 回大会（於:徳島大学)	子どもの育ちと学びの連続保証を目的として、「幼小接続カリキュラム（就学前)」を作成。指導者が困っている状況からではなく、学習者である子どもが「入学後に戸惑っている状況」に着目し、「とまどい」マトリクスを提示した。とまどい要因を幼児教育と小学校教育の双方で解決することによって、「子どもの育ちと学びをつなぐカリキュラム」を作成及び改善手立てとして、幼児教育と小学校教育に関わる教員の混合グループワークショップにおいて、研修会でも活用できることを示唆した。

著書, 学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
８．子どもの育ちと学びをつなぐ幼小接続カリキュラムの開発（Ⅳ）～「入学後の子どもの戸惑い」を見通した一日体験入学～	個人	平成 25 年 6 月	日本生活科・総合的学習教育学会第 22 回大会（於：神戸大学附属小学校・附属明石小学校）	継続研究の４年目において、「とまどいマトリクス」を活用した「幼小接続カリキュラム」の作成プロセス及びその一例として「一日体験入学」の活動案を提示した。とりわけ、「とまどいマトリクス」活用の有効性を実践検証した。
９．「子どもの育ちと学びをつなぐ―幼小中の接続－」	個人	平成 26 年 8 月	人間教育学会「学校間接続分科会」（於：奈良学園大学）	幼・小・中学校にかかる子ども観・評価観の違いを整理した。また、教育課程の理解を中心に接続を推進することの意義及び子どもの育ちと学びの連続保証を目的に考察し、「汎用性」のある接続期のカリキュラムモデル作成の手順及びこれまでのカリキュラム改善の視点について、新たな知見を述べた。
１０．子どもの育ちと学びをつなぐ幼小接続カリキュラムの開発（Ⅴ）～「とまどいマトリクス」を活用した「一日体験入学」の改善	共同	平成 28 年 6 月	日本生活科・総合的学習教育学会第 24 回大会（於：宮城学院女子大学）	継続研究の 5 年目において、「とまどいマトリクス」を活用した「幼小接続カリキュラム」を活用した混合研修事例を提示し「一日体験入学」の改善案を考察した。とりわけ、岐阜県山県市立小学校における「とまどいマトリクス」活用の有効性を実践検証した。

教　育　研　究　業　績　書

平成２９年３月３１日
氏名　松田　智子

研　究　分　野	研　究　内　容　の　キ　ー　ワ　ー　ド
教育学	教育思想と教育史・特別活動の指導・生活科の指導・幼児教育

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項

事　項	年 月 日	概　要
1　教育方法の実践例 (1)地域の子育て事業への参加体験を通しての地域社会との連携の具体的促進	平成 20 年 9 月～平成 21 年 3 月	学生を地域の児童館学童保育へボランティアとして参加させ、地域の子育て支援事業との連携を授業に組み込んだ。これにより放課後の子どもの姿を観察できた。また、地域の祭りや催しへの参加を通し、保護者や地域住民の願いに触れ、「地域に貢献できる大学」について考える契機となった。地域住民からの感謝のが、学生の達成感と満足感を高め、教育職への就労意欲を喚起した。 京都光華女子大学短期大学部こども保育学科の実践である。
(2)学生の相互評価を導入した成績評価の開発	平成 20 年 9 月～平成 24 年 3 月	指導者として求められる感性及び表現力を育成するにあたり、学生の相互評価を導入した成績評価を実施した。事前の学生との討議で具体的な評価基準を作成し、他者のスピーチを相互に評価した。その成果及び課題を発表者に返す作業を行うことにより切磋琢磨の気風が醸成され、個々の観察力がさらに細かく具体的となった。表現の工夫では、具体物使用や身体表現が広がる等の効果が出た。 京都光華女子大学短期大学部・環太平洋大学の実践である。
(3)形成的な評価を活用した授業計画の開発	平成 21 年 4 月～現在に至る	シラバス作成時に授業の形成的評価を計画に位置付け、それを基に授業の改善を行う。また、それぞれの授業終了時に３段階の満足度評価（学習者と指導者二者を対象とする）及び自由記述形式のアンケートを実施し、その集計結果を次回の授業でフィードバックして、自己評価に活用する。これにより授業改善のみならず学生とのコミュニケーションツールとしての役割も果たした。 環太平洋大学次世代教育学部学級経営学科及び奈良学園大学人間教育学科の実践である。

(4)生活科の体験を通した気づきを表現する過程で言語力を育てる系統的指導	平成 21 年 9 月 ～26 年 3 月	児童は直接体験を伝え合う中で自分の気付きと友達のそれとを比較し、共通点や相違点を発見する。これは相手意識と目的意識を備えた活動でなければ効果は望めない。そこで生活化の体験と国語科の低学年の「話す・聞く」の能力を系統的に指導する中で子どもの言語力を育てることを紹介した。朝のスピーチを連続的・系統的に取組み気づきの質を高める言語力指導を具体的に提示した。 環太平洋大学次世代教育学部学級経営学科及び奈良学園大学人間教育学部の実践である。
(5)特別活動の学級活動の話し合いを有効に進めるための学級経営の環境的な工夫を発見するため、DVD を通して学校現場を分析する指導	平成 26 年 4 月～ 現在に至る	担任が学級活動の話し合いを通して良好な人間関係を形成するために、日常的に行っている学級経営を聞き取った。さらに学級の掲示物や、児童生徒の発表の仕方など学級のルールや文化等が特別活動の学級活動の話し合いに与える影響を分籍した。教師の指導力が学級活動のも目標達成に大きな影響を与えることを実証した。奈良学園大学の特別活動の指導法の実践である。
２　作成した教科書，教材 (1)教育フォーラム〔41〕　共著（金子書房） 新しい学習指導要領 -カリキュラム改革の理念と課題－【再掲】	平成 20 年 2 月	新学習指導要領の説明を、設置の背景及び各教科の観点から述べ、理解しやすいと評価を得た。 環太平洋大学次世代教育学部学級経営学科「教育実習の事前事後指導」の補助資料として使用した。
(2)言語力を育てる授業作り ―新学習指導要領対応―【再掲】 共著（図書文化）	平成 21 年 9 月	今までの学習指導要領の教育の問題点を洗い出し、新たなカリキュラム改革が目指す理念と課題を明確にした。生活科のカリキュラムについての理解が深まったと感想が出た。 環太平洋大学次世代教育学部学級経営学科生活科指導法で参考書として使用した。
(3)教育フォーラム[46]　共著（金子書房） ―言葉の力を育てる―　【再掲】	平成 22 年 8 月	各教科で新学習指導要領の要請される言語力を育てる方策について述べたものである。具体的であると好評だった。芦屋市幼稚園教育研究会の教育課程の学習会で資料として配布し論議を深めた。
(4)実践教育評価事典【再掲】 共著（文溪堂）	平成 22 年 8 月	環太平洋大学次世代教育学部教育経営学科のゼミナールで、学習指導要領の歴史を把握する際の教科書として使用した。歴史についての意識が低かったが、興味を持った学生が出てきた。

(5)不登校生支援ハンドブック【再掲】 （学研エディケーショナル）	平成 22 年 12 月	子どもの不登校の事例を挙げて、それについての取り組みおよびその取り組みへの評価を述べたものである。学校復帰の具体的過程が分かったと好評だった。環太平洋大学次世代教育学部教育経営学科「生活の理解」の事例資料として使用した。
(6)教育フォーラム[46]　　共著（金子書房） ー〈こころ〉を育てる―【再掲】	平成 23 年 3 月	個々との教育とは何かを論じ、各教科での心の教育への取り組みの在り方を述べたものである。 環太平洋大学次世代教育学部学級経営学科「学級経営ゼミナール」資料として活用した。
(7)次世代教職入門【再掲】 共著（大学教育出版）	平成 23 年 5 月	教師としての在り方についてその理念、研修や服務および仕事の内容について述べた。環太平洋大学次世代教育学部教育経営学科「教育実習事前事後指導」で確認のための資料として使用した。
(8)教育フォーラム[50]　　【再掲】 共著（金子書房） ー〈やる気〉を引き出す〈やる気〉を育てるー	平成 24 年 8 月	子どものやる気とは何か、各教科におけるやる気の引き出し方について論じた。やる気のポイントが理解できたと好評だった。環太平洋大学次世代教育学部教育経営学科「教育実習事前事後指導」の参考書として使用した。
(9)次世代の教育原理　【再掲】 大学教育出版	平成 24 年 10 月	基本原理と教育思想の歴史等、教育の一般原理について述べた。分かりやすい言葉で書かれていてわかりやすいと好評だった。奈良学園大学人間教育学部の「教育原理」の教科書に使用した。
(10)子どもと生活ー知的好奇心を育む環境づくりー　　【再掲】　ふくろう出版	平成 25 年 3 月	子どもたちの知的好奇心を育む教育について、幼稚園教育要領の環境及び小学校学習指導要領の生活科を軸として、述べたものである。写真等が多くて好評だった。奈良学園大学人間教育学部「生活の理解」で教科書として使用した。
(11)人間教育を視点にした「教職入門」 共著（大学教育出版）【再掲】	平成 26 年 12 月	教員の本質は人間の人格の形成であり、教職に就く者の基本理念を述べた。内容が具体的であり、学生にわかりやすかった。奈良学園大学と環太平洋大学において「教職入門」の教科書として使用した。
(12)哲学する教育原理（保育出版社）【再掲】	平成 29 年 3 月	どうして教育原理を学ぶのか、現在の教育にどのように結びついているのかに視点を当てて作成した。奈良学園大学の「教育原理」の教科書として使用した。

3　教育上の能力に関する大学等の評価 (1)京都光華女子大学短期大学部学生による自己評価委員会アンケート 平成 19 年度後期授業評価アンケート	平成 20 年 2 月	「生活と文化」「学齢児保育」の全体を通して 5 段階で平均 4.0 以上の評価を受けた。特に授業の進め方の工夫では高い評価を受けた。
(2)京都光華女子大学短期大学部学生のアンケートによる平成 19 年度卒業生 の満足度評価	平成 20 年 3 月	学生の満足度は、授業 74．2%、先生 86．4%、自己の成長度 78．3%、友人関係 96．2%であった。総合満足度は 80．0%と大学の学科の中で一番高い満足度を示した。
(3)京都光華女子大学平成 19 年度大学内自己点検教員評価結果	平成 20 年 6 月	学長及び学部長から、研究・教育・社会貢献・学内運営のすべての領域において「相当である」との評価を受けた。
(4)京都光華女子大学短期大学部学生による自己評価委員会アンケート 平成 20 年度前期アンケート	平成 20 年 8 月	「保育課程総論」の全体を通して 5 段階で平均 4.2 以上の評価を受けた。特に授業の説明の分かりやすさや教材教具の準備では高い評価を受けた。
(5) 環太平洋大学次世代教育学部教授として採用においての評価	平成 21 年 4 月	学校法人創志学園、大橋博理事長から、授業指導の能力のみならず、校長経験や教育委員会で身に着けたマネージメント能力を高く評価され、環太平洋大学の学級経営学科学科長で新規に採用をされた。
(6)環太平洋大学平成 21 年度後期学生による授業評価アンケート	平成 22 年 3 月	学生による授業評価 12 項目の平均評価は 3.52（満点は 4）である。特に専門基礎である「学校と社会」が 3.77 と高い評価であった。
(7)環太平洋大学平成 22 年度前期学生による授業評価アンケート	平成 22 年 9 月	学生による授業評価「生活の理解」満足度 4.00 中の 3.85、「学校学級文化の受容力」満足度 4.00 中の 3.97 であり、高い評価である。
(8)環太平洋大学教職センター長としての評価	平成 23 年 3 月	学長大橋博より、公立学校の教員採用試験の合格者を倍増するように指示を受け、目標を達成した。大学内に教師を目指す組織である「大志会」を設立し、学生の自学自習の支援システムと教職センターの組織を確立したことが高く評価された。
(9)環太平洋大学平成 22 年度後期学生による授業評価アンケート	平成 23 年 3 月	「生活科教育法」3 コマのそれぞれの学生満足度は 4.00 中の 3.76、3.90、3.84 であり高い評価を得ている。「学校と社会」満足度 4.00 中の 3.35 である。
(10)環太平洋大学平成 23 年度前期学生による授業評価アンケート	平成 23 年 9 月	「生活の理解」2 コマの学生の授業満足度は 4.00 中の 3.91 と 3.70 である。特に 3.91 という評価では授業方法が適切で興味が持てる授業展開の項目が 4.00 と高い評価であった。

(11)環太平洋大学平成23年度後期学生による授業評価アンケート	平成24年3月	「生活科教育法」3コマのそれぞれの学生満足度は4.00中の3.90であり高い評価を得ている。特に学生は学習指導案の作成に高い評価を付けた。
(12)環太平洋大学キャリアリアセンター長としての評価	平成24年3月	学長梶田叡一から地方の私立大学である環太平洋大学が、岡山県及び全国を上回る就職率 96，06%を達成したことを高く評価された。特に、キャリアセンターを学生の進路別に 4 つの室に編成し、キャリア支援のシステムを構築したことを評価された。
(13)環太平洋大学の学長補佐としての評価	平成24年3月	学長梶田叡一から理事長と学長と理事との意思疎通を図るパイプ役を務めるように指示され、その役割を果たした。大学の経営方針作成や新設学科設立の企画に参加し、マネージメント力を学長から評価され、新学長の下でも学長宇補佐を続けるように推薦された。
(14) 環太平洋大学平成 24 年度前期、学生による授業アンケート	平成24年9月	「生活の理解」2 コマの学生の授業満足度は 4.00 中 3.8 以上であり、具体的な楽興驚異の実践的な事例と結びつけた授業なので、実際的な授業に役立つとの意見が多かった。
(15)環太平洋大学平成24年度後期、学生による授業評価アンケート	平成25年3月	「生活科教育法」3コマの学生の最も高い満足度は4.00中3.77である。具体的な模擬授業や、児童への発問、評価の褒め言葉などが参考になっていた。
(16)奈良学園大学平成26年度前期　学生による授業アンケート	平成26年8月	特別活動の指導法（中等）において、学生自身が学習指導要領を読み取る力が付いたと述べている。満足度は 4.00 中 3.83 と高いものだった。特に板書の工夫については3.92と高得点である。
(17)奈良学園大学平成28年度後期学生による授業アンケート	平成29年3月	教育原理(中等)において、学生一人一人が教育哲学者を調べて、発表し相互交流する授業を行った。学生の原稿を何度も校正し、そのたび情報収集し自らの学びが深まったと、９０%の学生が教育方法や指導方法について高い評価をした。
４　実務の経験を有する者についての特記事項 (1)兵庫県芦屋市立山手小学校研究会の総合的な学習の時間の助言者 「日本一の学校給食」 （対象：山手小学校教員30名）	平成20年6月	「日本一の学校給食」の課題を児童が決定する過程の公開授業を参観し、授業後の研究協議会において指導を行った。あわせて総合的な学習における言語活動の位置付けについて方向を例示した。

(2)兵庫県芦屋市立朝日ヶ丘幼稚園園内研修会 指導助言 「学校評価と日常の保育との関係」 (対象：朝日ヶ丘小学校教員 25 名)	平成 20 年 6 月	朝日ヶ丘幼稚園の教職員を対象に指導した。全クラスの保育参観を行った後の研究会では、それぞれの幼児の発達年齢に応じた内容であるかどうかを踏まえて助言した。また学校評価を園の教育目標と関連付けて実施する必要性を提言した。
(3)兵庫教育文化研究所教育課程編成講座講師 「各学校独自のカリキュラム編成の留意点」 (兵庫県下の教職員約 50 名を対象)	平成 20 年 7 月	カリキュラム編成の講座である。兵庫県の小学校５年生で実施される１週間の自然学校を総合的な学習として位置づける上での留意点として、自然学校における各校のねらいに沿った活動内容や指導方法が必要であることを指導助言した。「体験主義」に陥り「学び」がない体験は経験化されないと強調した。
(4)大阪府生駒市青少年健全育成協議会講師 「地域・保護者との連携への視点」 (大阪府生駒市内の公立小中学校の教職員約 100 名を対象)	平成 20 年 8 月	学校に苦情や要望を述べる保護者が増加した社会的な背景を述べるとともに、学校内部の組織的な弱点を分析と指摘を行った。あわせて、保護者との「共感」とは具体的にどのように振る舞うかにつきロールプレイを活用して提案した。
(5)兵庫県芦屋市立朝日ヶ丘幼稚園園内研修会 助言者 「環境構成と教師の役割」 (朝日ヶ丘幼稚園教員 10 名を対象)	平成 20 年 10 月	年少と年長クラスの保育の参観と事後協議会において幼稚園教育要領の５領域と現実の保育内容を関連付けて指導助言を行った。幼児教育の「環境を通して行う」意味の再確認と、今日求められている「規範意識の芽生え」について提言を行った。
(6)兵庫県芦屋市立幼稚園教育研修会講師 「新幼稚園教育要領の改訂のポイント」 (芦屋市公立幼稚園の園長と主任･行政担当者の約 20 名を対象)	平成 20 年 10 月	新幼稚園教育要領の改訂のポイントと小学校学習指導要領の関連性について講演した。その中で、教育課程編成上の留意点及び、具体的な編成手順について指導した。
(7)京都市私立幼稚園新規採用教員研修会講師 「幼稚園の教師入門」 (京都府私立幼稚園新規採用教員約 120 名を対象)	平成 20 年 10 月	「教員の使命感と職務遂行能力とは」をテーマに講演をした。教員の成長を日本の伝統文化継承の過程「守・破・離」に例え、現在学ぶべきことを具体的に話した。また、幼稚園教育は生涯学習の入口であり、重要な仕事であることを強調した。
(8)兵庫県芦屋市立山手小学校国語科校内研究会 助言者 「国語教育における新しい言語活動」 (山手小学校教員約 26 名を対象)	平成 20 年 11 月	小学校４年生国語科文学教材「一つの花」の授業参観と事後の研究協議会で指導を行った。新学習指導要領の重点である言語活動を、国語科の中での具体的な指導について助言した。また、文学作品における視点と読者の関係について教材研究する必要性、さらに、単なる話し合い活動は、児童の論理的な思考を妨げることを指摘した。

(9) 兵庫県芦屋市立山手小学校研究会の国語科の指導助言 「国語教育における新しい言語活動」 （山手小学校教員約 26 名を対象）	平成 20 年 11 月	小学校３年生の国語科「ズームとアップ」の授業参観と事後研究の指導を行った。論理的に考えを示すのに適切な説明文教材であり、児童の表現を相互評価することにより良い表現を作り上げる授業だが、児童への相互評価の規準や視点を指導なしに妥当な評価は出来ないことを指導した。
(10) 兵庫県芦屋市立朝日ヶ丘小学校全国研究会の総合的な学習の時間の指導助言 「総合的な学習で福祉を取り扱う留意点」 （朝日ヶ丘小学校教員約 30 名を対象）	平成 21 年 2 月	福祉教育で高齢者とのかかわりの授業参観と事後研究を行った。高齢をマイナスにとらえる児童が多いが、ふれあいや探究活動を通して、歳を重ねることの素晴らしさを体感させる取り組みであり、体験を文字化し児童が、自分自身の変化をメタに認知する場面が必要であると指導した。
(11) 兵庫県芦屋市立山手小学校全国発表会総合的な学習の時間の指導助言 「総合的な学習と環境教育」 （全国大会参加者約100名を対象）	平成 21 年 2 月	芦屋川の環境をテーマに、地域住民や専門家と連携した「環境サミット」の公開授業で、能動的に環境に働きかける姿が参加者より高い評価を受けた。保護者や地域住民、行政関係者等が一体となり児童の当事者意識を高めることができた。総合的な学習と国語科の書く力を連携させ、日常的に言語力を育成する重要性を指導した。
(12) 兵庫県河辺郡猪名川町立公立幼稚園長及び校長研修会の講師 「保護者・地域との連携」 （猪名川町管理職及教育委員会職員 60 名を対象）	平成 21 年 2 月	危機管理の視点から保護者の意見や苦情が学校や園の教育活動へ与えている影響を論じた。またそのような社会的な背景も考察した。教育活動には「不測の事態」は避けられないが、傾聴する姿勢が不可欠である。クレームに対応する基本姿勢「スピード・面談・誠意」の重要性を述べた。また、組織的に対応し、教訓を継承することの重要性を説明した。
(13) 兵庫県芦屋市立公立幼稚園園長及び主任研修会の講師 「言語活動と幼小連携」 （芦屋市園長及主任約 20 名を対象）	平成 21 年 3 月	新学習指導要領の実施に伴い、今後もとめられる言語活動の重視及び体験的な活動と知識理解との関係について論じた。芦屋市の教育課程基底の枠組みについて指導した。また小学校教育との連携のスタートカリキュラムについて説明した。遊びを学びとしてとらえる指導と評価を提案した。
(14) 兵庫県芦屋市公立幼稚園研修会全体講師 「幼稚園教育要領の改定と芦屋の特色」 （芦屋市幼稚園教諭約 100 名を対象）	平成 21 年 3 月	幼稚園教育要領の改訂のポイントと、その内容が小学校・中学校の教育内容にどのように継続しているのかを解説した。芦屋市の地域性を全校学力状況調査の結果と結び付けて説明した。比較的学力の高い地域に求められる「心をたがやす保育」の方向を提示した

(15)兵庫県芦屋市立朝日ヶ丘幼稚園園内研修講師 「幼児期における言語活動」 (朝日ヶ丘幼稚園教員約 10 名を対象)	平成 21 年 6 月	5 領域の「言語」に焦点をあて公開保育と事後研究会を行った。豊かな体験を基本とした絵本の読み聞かせを通して、子どもの感性を磨く公開保育であった。体験の言語化を援助する教師の指導について、幼児期から小学校低学年までの幼児児童の発達の特徴と関連付けながら論じた。
(16)兵庫県芦屋市立西山幼稚園園内研修講師 「幼稚園の教育評価と保育内容」 (西山幼稚園教員約10名対象)	平成 21 年 6 月	幼稚園の教育課程の意義と、例年通りの踏襲になりがちである教育課程には、評価が不可欠であることを述べた。さらに教育評価では地域住民や保護者からの声を反映し、次年度へ反映するPDCAサイクルについて論じた。外部評価の有効な活用方法を例示し説明した。道徳的な実践力を身につけるため言語活動を重視した保育の必要を論じた。
(17)第 17 回授業実践フォーラム生活科部会講師 「新学習指導要領の言語活動と生活科」 (生活科部会参加者約 40 名対象)	平成 21 年 6 月	新学習指導要領において生活科の中で言語活動が取り入れられた。それに伴い一部の実践で「見つける・比べる・たとえる」の「たとえる」ことが強調されすぎ、体験感動・内面の納得を伴わない言葉遊びになる危険性があることを指摘し、「知的な気づき」の重要性を再確認し指導した。
(18)奈良市立幼稚園教員研修会 「保護者・地域との連携を支える共感」 (生活科部会参加者約 40 名対象)	平成 21 年 8 月	「保護者の要望にこたえるために」をテーマに講演をした。園に苦情や要望を述べる保護者が増加した社会的な背景を述べるとともに、園独特の組織的な弱点と強み分析し、それを活かした保護者対応を指導した。あわせて、幼稚園独特のトラブルを例にして「共感」をロールプレイで提案した。
(19)兵庫県阪神地区小学校教科等研修会生活科部会講師「生活科における言語活動」 (兵庫県阪神地区の小学校生活科担当教諭150名を対象)	平成 21 年 8 月	新学習指導要領に基づいて講演を行った。提案された生活科のレポートへの指導助言も行った。生活科の活動や体験が、身近な地域を対象に工夫されているが、目標が明確でないことを助言した
(20)兵庫県猪名川町教職員研修会講師 「保護者・地域との連携」 (兵庫県猪名川町の教職員約50名対象)	平成 21 年 8 月	社会的な背景とともに、保護者の意見や苦情が学校や園の教育活動へ与えている影響を論じた。現在は公的な仕事の従事者に対し厳しい目が向けられることへの自覚を促した。教育活動には「不測の事態」は避けられないが、傾聴する姿勢が不可欠であり、クレームに対応する基本姿勢「スピード・面談・誠意」の重要性を述べた。

(21) 平成 21 年度免許更新講習会講師 「求められる資質と職務遂行能力」 （岡山県教員40名対象）	平成 21 年 8 月	新教育課程で教師として求められる「資質」と「職務遂行能力」について講義をした。年代別に，教員経験年数に伴う，学校の校務分掌の中で果たすべき役割について論じた。特に新任教師が増加している今日，教職10年経験教師はミドルリーダーとして，学校運営に参画が求められている述べた。
(22) 兵庫県芦屋市立西山幼稚園園内研修会講師 「道徳性の芽生えと幼稚園教育要領」 （芦屋市立幼稚園教諭約 10 名を対象）	平成 21 年 9 月	保育参観と指導助言を行った。新学習指導要領の道徳教育重視の流れを受けて、幼稚園での道徳性の芽生えを図ることの重要性を述べた。集団的な体験活動での葛藤や、その後の話し合い活動など、幼稚園としての活動を提案した。
(23) 兵庫県芦屋市立朝日ヶ丘幼稚園園内研修会講師　「幼稚園における言語活動と環境構成」 （芦屋市立朝日ヶ丘幼稚園教諭 10 名を対象）	平成 21 年 10 月	保育参観と指導助言を行った。新学習指導要領の小学校の言語力育成を受けて、幼稚園としてふさわしい学力は何かを提案した。幼稚園でも「話す・聞く」活動を系統的実施する必要性を助言した。
(24) 兵庫県芦屋市立西山幼稚園園内研修会講師 「保育における話し合い活動の指導」 （芦屋市立西山幼稚園等教諭約 10 名を対象）	平成 21 年 11 月	保育参観と指導助言を行った。話し合い活動を通して思考力を育てる事を目標とした公開保育が実施された。子どもの葛藤場面を保育の中で取り上げ、教師が適切な価値の方向性を示すことの重要性を指摘した。
(25) 兵庫県教育研修集会教育課程部会指導助言 「新学習指導要領と授業時間数の増加」 （兵庫県内の教職員約50名を対象）	平成 21 年 11 月	教育課程の編成の基本理念の指導助言をした。新学習指導要領が先行実施されて、授業時数の増加指導内容の増加など、教員にとって研修の必要性が高くなっていることを助言した。教科書と教育課程とを同一視していることはいけないこと、教員が各単元の目標分析をすることを提言した。
(26) 兵庫県芦屋市立朝日ヶ丘小学校全国研究発表会全体会講師 「言語力を育成する授業の在り方」 （全国の教員約450名を対象）	平成 22 年 2 月	授業参観と全体講演をした。携帯電話が子どものコミュニケーションを阻害している実態について話した。携帯電話の弊害を乗り越える正しい言語力を育成するための、授業に求められる話し合い活動について、また対話が成立する学級・学校文化の重要性について提案した。
(27) 兵庫県芦屋市立朝日ヶ丘幼稚園園内研修講師 「絵本の幼稚園教育における役割」 （芦屋市立朝日ヶ丘幼稚園等教諭約10名を対象）	平成 22 年 2 月	保育参観と指導助言を行った。絵本読み聞かせや親子絵本の会の実施に取り組んでいることの意味づけを行った。絵本に親しむことで、豊かなイメージを持ち、言葉の感覚を養うことを話した。幼児期に培われた言葉が小学校教育にどのように継続されるかも具体例を挙げて論じた。

(28) 兵庫県神戸市小学校教科等研修会総会における生活科講師 「新学習指導要領と生活科の変更点」 （神戸市の生活科担当者約60名対象）	平成 22 年 3 月	実践発表の分析と講話をした。新学習指導要領の変更点について説明する。算数や理科の指導内容が多くなり、国語が注目を浴び、生活科の影が薄くなっているが、体験に支えられた納得・実感・本音の理解の仕方が重要であることを再度確認した。また、幼稚園と小学校の段差である小１プロブレムを解消するためには、小学校入学時のスタートカリキュラムの重要性について提案した。
(29) 兵庫県芦屋市立朝日ヶ丘幼稚園園内研修講師 「幼児期にふさわしい言葉の指導」 （芦屋市立朝日ヶ丘幼稚園等教諭約 10 名を対象）	平成 22 年 5 月	保育参観と指導助言を行った。4・5 歳児の「遊びの中で言葉の力を育む」を狙いとした保育参観も行った。5 領域は，幼児期に育てたいことを幼児自身の発達の側面から取り上げたものであるのであること。各領域の内容は総合的に指導するものであり，幼児を取り巻く環境を構成する視点でもある。幼児の活動は「言葉」という領域に偏った指導は好ましくないことを例示し指導した。
(30) 兵庫県芦屋市立西山幼稚園園内研修講師 「子どもの人間関係を豊かにする指導」 （芦屋市立西山幼稚園等教諭10名対象）	平成 22 年 5 月	芦屋市立西山幼稚園で４・５歳児の保育を参観し指導助言を行った。友達や教師と安定した人間関係が築かれることにより情緒が安定すること。幼児が「友達」を理解する過程やその中で育つ他者を思いやる気持ちについて話した。また，そのための保育者の役割について具体的な保育の場面を例に挙げながら指導した。
(31) 兵庫県芦屋市幼稚園教育課程研修会講師 「幼稚園と小学校のカリキュラムの連続性」 （芦屋市立朝日ヶ丘幼稚園等教諭約10名を対象）	平成 22 年 7 月	小学校のような文字指導がなくても，日常生活の中で文字を読み書きできる現状を認識した保育が重要であることを話した。幼児期の小学校形式の一斉指導は課題があると指摘した。幼児期の言葉は知的能力の指標としてとらえがちであるが，日々の豊かな経験に基づく総合的な発達の中で言葉が育つことの重要性を指導した。
(32) 兵庫県加古川市教頭研修会講師 「地域・保護者との連携と教頭の役割」 ―信頼される学校園をめざして― （兵庫県加古川市立学校教頭等50名を対象）	平成 22 年 8 月	信頼される学校園づくりには，まず子どものことを第一において，何をどのように解決するべきかを保護者とともに考えることが大切であることを強調した。いわゆる「モンスターピアレント」という呼称が持つ否定的な意味を取りあげて信頼関係を構築するための具体的な方策を助言をした。学校園で明日からでも取り組める電話記録メモの改善、苦情処理シートの迅速な処理のための校内組織体制づくりについて述べた。

(33)奈良市小学校教員夏季研修会講師 「地域・保護者と連携する教師の在り方」 ―保護者と信頼関係を築くために― （奈良市立小学校教諭等30名を対象）	平成 22 年 8 月	奈良市内小学校で起きている具体的事例を取り上げながら，ロールプレーで演習を行い，問題解決への過程を示した。保護者の苦情をや訴えを聞き取り，その裏にある思いや願いを読み取ることの重要性を指導した。学校ができることを明確にして対応することが不可欠であると話した。
(34)兵庫県芦屋市山手小学校校内人権教育研修会講師 「男女平等教育の歴史と学校のジェンダー」 （芦屋市立山手小学校教員２０名を対象）	平成 22 年 8 月	人権教育の男女平等教育に係る授業実践の基本的な理念について指導助言を行った。ジェンダー問題の歴史及び男女平等教育の現状さらに学校教育における課題について話した。特に教育課程を編成にあたり，意図的計画的に位置付け学校の教育活動全体を通してを男女平等教育を推進することや教師自身の研修が重要であることを提案した。
(35)兵庫県阪神地区小学校教科等研修会生活科部会講師 「心豊かにたくましく生きる力を育む生活科の実践」 （兵庫県阪神地区生活科教育担当者 200 名を対象）	平成 22 年 8 月	伊丹市と芦屋市の幼稚園と小学校の連携をねらいとした実践の発表があった。両者の連携はともするとイベントになりがちなので，双方の教育課程に位置付け継続的に関わりを持つことを助言した。講演では，小学校低学年における教科横断的・総合的な指導の必要性を強調した。
(36)兵庫県教育研修集会教育課程部会指導助言 「教育課程と総合的な学習の時間」 （兵庫県の小学校教員 50 名対象）	平成 22 年 11 月	生活科及び総合的な学習の時間の単元構成について指導助言した。総合的な学習の時間が新学習指導要領で時間数減となるが，それは意義やねらいの後退ではないことを論じた。従来の総合的な学習の時間の問題点である単なる体験活動を乗り越え，課題解決的な学習に高める必要性を説明した。
(37)全国女性校長会近畿地区大会分科会指導助言「学校運営と女性校長の指導性」 分科会テーマ ―新しい時代を拓く学校経営と校長の指導性― 「家庭・地域・学校の連携と，学校運営への協働・参画」 （近畿小中学校の女性校長 50 人を対象）	平成 22 年 11 月	女性校長の数が全国的に減少する中，女性の特性を生かした学校運営の在り方を話した。公的な学校で常識と考えられている様々な習慣が，世の中の動きに合わなくなっていることを自覚する必要を指導した。細やかな配慮などは、女性校長の特質であるかのようなステレオタイプを乗り越え学校経営することを示した。
(38)兵庫県芦屋市立西山幼稚園園内研修指導助言 「豊かな人間関係を育てる保育」 （芦屋市立西山幼稚園教諭 10 名対象）	平成 23 年 1 月	４・５歳児クラス保育を参観し指導助言をした。道徳性の芽生えを培うには，幼児が他の人と関わる中でその存在に気づき相手を尊重することが大切であること。また，身近な動植物へ親しむことにより豊かな感情が育つことを話した。信頼感や思いやりは一直線に育つのではなく，葛藤やつまずきを体験を乗り越えて育つことを助言した。

(39)兵庫県芦屋市教育研修所教員研修会講師 「保護者・地域との連携をはかるために」 （兵庫県芦屋市立小学校・幼稚園教諭等 20 名対象）	平成 23 年 2 月	学校園と地域社会・保護者との関係に変化が起きた社会的な背景を，具体例を挙げながら解説した。社会や国民全体の権利意識の高揚や保護者の経験した学校生活などが，大きな要因になっているので，学校の教員の意識改革も不可欠であることを説明した。
(40)兵庫県芦屋市教育委員会指定研究会講師 「自分らしさを発揮し友だちと響きあう幼児」 （芦屋市幼稚園教員約 150 人を対象）	平成 23 年 6 月	４歳児と５歳児の自我の発達と，他児とのコミュニケーション力の発達に着目して，遊びの中での子どもの心の葛藤とひきだす保育の意義について話をした。また，児童が葛藤し心を成長させるために保育者の役割と環境構成のあり方が重要性であり、幼児期の道徳性の芽生えを図ると指摘した。
(41)兵庫県芦屋市立朝日ヶ丘幼稚園園内研修指導助言「異年齢交流と協同学習①」 （芦屋市立幼稚園教諭 10 名対象）	平成 23 年 6 月	本園は4歳5歳とも単学級の園であるが、その利点を生かして，日常的に異年齢交流を実施している。特に体を動かして異年齢で教え合う昔の遊びを活用して，5歳児に責任ある行動やおもいやりの心を育むことの意義を論じた。
(42)岡山県総合教育センター研修講師 「新しい生活科の具体的な授業づくり」 ―児童の気付きを深めたり広げたりするための，支援の在り方ー （岡山県内３０人の生活科担当教員対象）	平成 23 年 8 月	児童の気付きとは何かを学習指導要領の解説書を基に説明した。次に具体的な子どものシートを用いて，「気付きを深める声掛け」「気付きを広げる声掛け」を演習として実施した。広げ深める声掛けも。あくまで単元全体や本時の狙いに沿ったものでないと一般的抽象的なものになりることを指摘した。
(43)「あしや教育フェスティバル」生活科部会指導助言 「若い先生でもできる生活科」 （芦屋市生活科担当の教員 20 名を対象）	平成 23 年 8 月	2年生「私の町の素敵をおしえよう」の実践報告の指導助言を行った。若い教師が増え，生活科の狙いや学習スタイルが理解できず、教科書をそのままなぞる授業が増加している。生活科が設置された社会的な背景や理念について話した。教員の若返りが進行する学校現場で，生活科や総合的な学習の時間の指導が困難になる危機を指摘した。
(44)京都中央看護専門学校研修会講師 「主体的に学ぶ学生集団作りについて」 （看護師養成専門学校の教員 50 人を対象）	平成 23 年 9 月	看護学校の授業は基本は40人以下で実施されており，個別の対応に配慮はされている点は評価できる。しかし，授業が講義や実習にしても一方的なものが多くみられる。双方向の授業であっても，教師と学生が1対1で双方向に取り組んでいるにすぎない。学生を集団として学ばせる学習集団の育成が遅れていることを指摘した。

(45)兵庫県教育研修集会教育課程部会指導助言 「新教育課程と総合学習」 （兵庫県小学校教員 40 名対象）	平成 23 年 11 月	兵庫県の各地から総合的な学習の時間のレポートが３０本報告をされた。3年生では兵庫県が自然体験補助金を出しているため，安易な体験あって学びなしになりがちであると指摘した。自然体験だけでなく，振り返る学習とセットで取り組むことが重要であることを指摘した。
(46)兵庫県芦屋市立朝日ヶ丘幼稚園園内研修指導助言「異年齢交流と協同学習②」 （芦屋市幼稚園教諭 10 名対象）	平成 23 年 11 月	単学級の利点を生かして，日常的に異年齢交流を実施して，子どもを育てている。特に体を動かして異年齢で教え合う昔の遊びを活用し，5歳児に責任やおもいやりの心を育むことを狙いとするとともに、子どもの協同学習に焦点を当て子どもの保育にあたるという姿勢を評価した。園の方針の共通理解が重要であることを指導助言した。
(47)兵庫県芦屋市立西山幼稚園園内研修講師 「自分らしさを発揮し友だちと響きあう幼児」 （芦屋市幼稚園教諭 6 名対象）	平成 24 年 1 月	2月の生活発表会の表現活動を行っている保育を参観した。最後は保護者に見せる作品に完成するため，物語の主題とずれた箇所で，子どもの表現を無理に引き出そうとしている教師の意図の誤りを指摘した。幼児の意識の流れに合わず，生活発表会の流れが重視されると困ることを指導した。
(48)兵庫県芦屋市立潮見中学校 総合的な学習の時間の講師 「進路選択ためのキャリア教育」 （芦屋市立潮見中学生 120 名対象）	平成 24 年 2 月	「今の中学校2年生に伝えたいこと」という「生き方」をテーマに講演会を行った。2年生は中学校の中で中だるみに時期であり，進路についてまだしっかりとした意識付けができていない時期である。この時期の生徒に，大学で学ぶには基礎的な学力と，夢を持ち続ける大切さを話した。
(49)兵庫県芦屋市立朝日ヶ丘幼稚園 園内研修講師 「教育目標を日常の保育に反映させる」 （芦屋市立朝日ヶ丘幼稚園教諭６人を対象）	平成 24 年 5 月	進級や入園間もないクラスで、学級づくりの途中のクラスの保育を参観した。４歳児は園の決まりを身につけ。５歳児は年長としての自覚を育成している時期である。この時期に、園としての教育目標を各保育にどのように反映するかを、具体的な保育を事例に指導した。
(50) 平成 24 年度免許更新講習会講師 「今求められる資質と職務遂行能力」 （小学校教員 40 名対象）	平成 24 年 8 月	新教育課程を実践するうえで教師として求められる「資質」と「職務遂行能力」について講義をした。教員経験年数に伴う，学校の校務分掌の中で果たすべき役割について論じた。特に新任教師が増加している今日，ミドルリーダーとして，学校運営に参画することが求められていることを述べた。また、学校としてのチームワークの重要性が今後ますます求められることを指摘した。

(51) 「あしや教育フェスティバル」生活科部会 指導助言 「国語科の書くことと生活科の関連」 （芦屋市教員 15 名対象）	平成 24 年 8 月	生活科と国語科と合科的に扱った指導実践例の報告があった。国語科指導で事実を見る目や書く力は育っているが、自分との関係性において植物の成長をとらえる弱さを指摘した。
(52) 兵庫県芦屋市立岩園小学校人権教育研修会 講師「男女共生教育と教育実践」 （岩園小学校の教員 30 名を対象）	平成 24 年 10 月	男女共生教育について研修会の講師を務めた。男女共生教育の歴史とともに、道徳のみでなく、各教科と連携して、学校教育全体で扱うべきと助言した。国語科の言葉を取り上げ、特に隠れた潜在的なカリキュラムにへの留意を指導した。
(53) 兵庫県芦屋市立朝日ヶ丘幼稚園 園内研修講師 「異年齢交流と協同学習③」 （朝日ヶ丘幼稚園の教員 6 人を対象）	平成 24 年 11 月	異年齢交流での協同遊びと、その後の話し合い活動の参観をした。話し合い活動では、友だちの良い点を取り上げて発言させ、人間関係を気付いていた。さらに、聞くという姿勢を徹底的に指導されていることを評価した。
(54) 兵庫県教育研修集会教育課程部会 指導助言「新教育課程と総合学習」 （兵庫県教員 40 名対象）	平成 24 年 11 月	実践発表を取り上げ指導助言を行った。総合的な学習の体験の部分がクローズアップされ、探究の部分が消えていることに対し警鐘をならした。総合も設立から年月を重ね、活動がパターン化している傾向があると指導した。
(55) 兵庫県芦屋市立岩園小学校人権教育 校内研究会講師 「国語教育で男女共生教育」 （小学校教員 20 名対象）	平成 25 年 1 月	男女共生教育の4年生の授業の事後研修会を行った。国語の男子や女子を形容する形容詞や形容動詞に焦点を当てて、児童がもっているステレオタイプの考え方を、学校教育でどのように指導するかを話した。男女共生教育を巡る隠れたカリキュラムについて、学校の具体例を挙げて説明した。
(56) 兵庫県教育研修集会教育課程部会 指導助言「新教育課程と総合学習」 （兵庫県教員 40 名対象）	平成 25 年 11 月	実践発表を取り上げ指導助言を行った。東日本大震災から防災教育が教育課程の中に新たに取り込まれる事例が増えた。総合的な学習や特別活動ので実践が増加したが、各教科とも連携し意識的に教育課程に組み込む必要性を助言した。
(57) 神戸市立小学校生活科部会研究会 講師 「生活科でいのちを大切にする教育」 （神戸市幼稚園・小学校の教員 60 人を対象）	平成 26 年 1 月	1 年生の成長単元の授業参観と講話を行った。生活科の成長単元は児童の自尊感情を育み周囲に感謝の気持ちをもたせることがねらいであること。これは命を大切にすることに繋がることをアンケート調査を基に説明をした。子どもの死生観の境目を意識して教育に当たる必要を述べた。

(58)兵庫県芦屋市立小槌幼稚園研究会講師① 「心豊かに感じ、共に育ちあう幼児を目指して」 （小槌幼稚園教員 10 名を対象）	平成 26 年 5 月	年長と年少の全クラスの保育参観と指導助言を行った。入園して 1 か月の年少児に年長児が積極的に関わるための環境設定について述べた。
(59) 兵庫県芦屋市立小槌幼稚園研究会講師② 「自分らしさを発揮し人と関わる力が育つ援助を考える」教員の在り方 （小槌幼稚園等教員 10 名が対象）	平成 26 年 6 月	1 か月経過後、再度保育参観を行い、幼児の人と関わる力の伸長と、教員の指導の在り方の相関性について述べた。4 歳児 5 歳児全クラス保育参観を行い、具体的な教師の振る舞いや声掛けが、保育に及ぼす影響について分析した。
(60)「あしや教育フェスティバル」生活科部会 指導助言 入学直後の「学校探検」の意味について （芦屋市教員 20 名対象）	平成 26 年 8 月	生活科を通して1年間の幼・小の交流を教育課程に位置付ける際の留意点について話した。近年、幼小の交流と比べ、保育所との連携が進まない現状の解決方策を提案した。生活科のスタートカリキュラムは、幼保ともに対象であることを確認した。
(61)兵庫県教育研修集会教育課程部会 指導助言「新教育課程と総合学習」 （兵庫県教員 50 名対象）	平成 26 年 11 月	兵庫県下各地の実践発表20件に指導助言を行った。生活科や総合学習は地域に根差したテーマを採り上げて、児童生徒が課題解決をするという学びのスタイルは定着したが、生活科は教員の指導による取組の格差、総合学習は学校行事への準備の時間として安易に活用される課題を論じた。
(62)兵庫県芦屋市保・幼・小合同研修 会講師（1 回目） 芦屋市立精道保育所保育公開助言 （保育所・幼稚園の教員 20 名を対象）	平成 27 年 5 月	保育参観を行った後に、保育内容が小学校にどのようにつながるかについて、保育の具体的な内容を事例にして説明した。保育所と幼稚園の教員合同の研究会は意義があった。
(63)兵庫県芦屋市立打出幼稚園園内研修講師 （幼稚園教諭 10 名対象）	平成 27 年 5 月	保育参観後にそれぞれの保育について助言した。クラス替え間もない時期に学級づくりの方向や、保育案の目標と保育の内容が明確でないと、教員の言葉かけが有効でなくなる等を助言した。
(64)兵庫県芦屋市幼・保・小連携研修会 講師　２回目 （保育所・幼稚園・小学校の教員 60 名を対象）	平成 27 年 7 月	スタートカリキュラムの必要性を、生活科の教科書の内容を具体的に示し、保育所保育指針と幼稚園教育要領と生活科の学習指導要領を比較した。3 つの目標や活動内容がが、似通っていることを具体的に理解できた。
(65)兵庫県芦屋市保・幼・小合同研修会 芦屋市立精道幼稚園公開保育助言 （芦屋市保育所・幼稚園・小学校教員 20 名対象）	平成 27 年 9 月	精道幼稚園全クラスが「からだづくり遊び」をテーマに公開保育を行った。保育所や幼稚園の保育の見方について話し合った。小学校の教師には、保育を学び認識することが困難なので、参観の目標と視点について意見交流を行った

(66)兵庫県芦屋市立打出幼稚園園内研修 指導諸言 （幼稚園教員 10 名対象）	平成 27 年 10 月	豊かな心と人間関係作りを育むことを目標として公開保育を行い、指導助言を行った。特に道徳性の自立の時期を意識して保育することの重要性を論じた。
(67)兵庫県芦屋市立精道幼稚園園内研修 指導助言 （幼稚園教員 10 名対象）	平成 27 年 10 月	「さかさま運動会」を公開保育で参観した。健かな身体づくりが生活的な自立の基礎となることを、５領域と関連付けながら問題提起をした
(68)兵庫県芦屋市立朝日ヶ丘小学校生活科研修会指導助言 （小学校教員 10 名対象）	平成 27 年 10 月	体育の4年生ポートボールで共同的に活動し、学習における仲間づくりをする公開授業を参観し指導助言を行った。
(69)兵庫県芦屋市立打出幼稚園園内研修 指導諸言 （芦屋市幼稚園教員 30 名対象）	平成 27 年 10 月	豊かな心研究グループの指定研究会であった。特に人間関係に焦点を当てて、保育を実施した。教員の声掛けを提案型にして、園児の自主性を促す保育を助言した。
(70)兵庫県教育研修集会教育課程部会 指導助言「新教育課程と総合学習」 （兵庫県教員 50 名対象）	平成 27 年 11 月	総合学習のレポートを基に指導助言を行った。特に総合的な学習が地域再発見の契機になっているが、それ以後の地域づくりに還元されていないことを指摘した。
(71)兵庫県芦屋市指定研究会講師 「保・幼・小の連携」 （保育所、幼稚園、小学校教員 100 人を対象）	平成 27 年 11 月	スタートカリキュラムの具現化について、公開保育と講演を行った。就学前後のカリキュラムを幼・保側と小学校側でできることを具体的に示し、滑らかな接続を図ることを提案した。
(72)兵庫県芦屋市立山手小学校 生活科校内研究会指導助言 「自分でできるよ」－家族にっこにこ大作戦― （小学校教員 30 名対象）	平成 27 年 11 月	2年生の家族単元の授業参観後に指導助言をした。成長に係る単元は、家庭事情により児童の活動が影響を受けるため、家庭との連携が不可欠であること、お手伝い等の家庭の活動は継続させ内面化させる手立てが重要であることを助言した。
(73)兵庫県芦屋市立精道保育所① ―保育所と小学校連携のカリキュラム 指導助言 （保育所職員 30 名対象）	平成 27 年 12 月	5歳児の保育の参観後、文科省が示した連携視点「自己調整力」「表現力・思考力」「伝え合う力」の3点について、子供の育ちの現状を分析し、今後求められる指導を提言した。
(74) 兵庫県芦屋市立精道保育所② ―保育所と小学校連携のカリキュラム 指導助言 （保育所職員 30 名対象）	平成 28 年 1 月	前回の助言に基づき、保育を改善した結果を検証した。同じ5歳児クラスの参観を行い、「自己調整力」は育成されているが「伝え合う力」が十分でないことを指摘した。指導者側の目標意識の低さや保育環境の見直しを提言した。

(75)「幼児期と児童期の円滑な接続について考える」芦屋市内合同研究会講師 （芦屋市の公立幼稚園・保育所及び私立幼稚園・保育所の教員と保育士 80 人を対象）	平成 28 年 3 月	5歳児保育後期に求められる保育課程について説明した。形ばかりの保育課程でなく、指導者が目標を意識した保育を実施することが重要であると提言した。
(76)「心も体もしなやかでたくましい児童の育成」－接続期カリキュラムを視点に－指導助言 （芦屋市立小槌幼稚園の教諭等 20 人対象）	平成 28 年 5 月	4歳児・5歳児の伝え合うをテーマにした保育参観後、ねらいと発問について助言した。また、心の成長の中で特に自己調整力が、小学校1年生の学校生活への適応に影響を与えることを指導した。
(77)「学校生活につなぐ学びの芽生えを育む」のテーマの指導助言 （芦屋市立精道幼稚園教諭等 20 人対象）	平成 28 年 6 月	4歳児･5歳児の運動遊びの保育参観後、小学校入学後の学習の姿勢や鉛筆等の正しい持ち方が、幼稚園の運動遊びを基礎に育つことを助言した。また、兵庫県阪神地区幼稚園研究会の研究紀要の様式について指導をした。
(78)芦屋市公立・私立保育所合同研修会講師 「小学校期へのなだらかな成長支援」 （対象者：芦屋市公立・私立保育所教職員約 220 名）	平成 28 年 6 月	乳児期から幼児期までの人間関係の育ちが小学校1年生の精神的な自立にどのようにかかわるかをベネッセの2016年縦断調査の報告を例示しながら説明した。特に入学後直後の学習意欲が年長児の生活習慣や言語力に影響されること、年長児の言語力が年中児の調整力に影響されることを根拠と実践を結び付けながら論じた。
(79)芦屋市立精道保育所市内保育公開研修会指導助言 「接続期の保育所の保育について」 （精道保育所の教職員等 30 名対象）	平成 28 年 6 月	4歳児と5歳児の異年齢交流の保育参観後に指導助言をした。生活の場である保育所は、言語的な面で学習用語を獲得するのが困難な可能性が高いことと、解決の方策を示した。
(80)兵庫教育文化研究所、総合的な学習の時間研修会指導助言 兵庫県教職員約 35 名	平成 28 年 8 月	神戸市中央区を4つのコースに分けてフィールドワークをして情報を収集し、神戸市観光大使として意見交換後、指導助言を行った。
(81)兵庫県芦屋市教育フェスティバル総合学習・生活科指導助言 （兵庫県芦屋市教職員約 20 名対象）	平成 28 年 8 月	2本の生活科と総合的な学習の実践発表後に指導助言をした。地域のだんじりと、国語の言語活動との関係を総合的に扱った発表であった。教員が若返り、総合や生活の意味が受け継がれていないと感じたので、歴史的な経過を指導した。
(82)プール学院大学教職員研修会講師 （プール学院大学教員 30 名対象）	平成 28 年 9 月	文部科学省の課程審査会の新たな書式について解説を行うとともに、課程審査の意義について説明を行った。さらに教育学部の教員に求められる資質や能力についても論じた。

(83)芦屋市精道幼稚園市内研修講師 （芦屋市幼稚園教員等 90 名対象）	平成 28 年 11 月	精道幼稚園で4･5歳児の公開保育の後、指導助言を行った。運動遊びの中で子どもが身につける規範意識の芽生えや、思考力や話し合う力の育ちが小学校低学年のどのような能力の基礎になるかを具体的スタートカリキュラムとして論じた。
(84)幼稚園・小学校接続期のカリキュラム作成 （芦屋市立幼稚園教員等 100 名対象）	平成 28 年 11 月	スタートカリキュラムの必要性と新教育要領の方向性を文科省の新たな答申を基に解説をした。小学校で求められる能力を幼稚園の遊びの中で環境を通して具体化する視点についても論じた。小学校教育の模倣と幼稚園教育の違いを確認した。
(85)奈良県三郷町立南畑幼稚園指導助言 （幼稚園教員 6 名対象）	平成 29 年 1 月	3歳児保育を参観し、事後研修会を行った。3歳児の言語の発達と思考力育成に与える影響について、人的及び物的な環境構成について指導助言を行った。園の教育課程についても解説した。
(86)芦屋市精道幼稚園園内研修講師 （幼稚園教員 6 名対象）	平成 29 年 2 月	言語力を育成するための、新たな4･5歳児の遊びの開発の実践例の検証を行った。言語力育成の基盤として幼稚園では集中して聞くことや多様性を認める学級文化が求められることを論じた。
5　その他		特になし

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項

事　　項	年 月 日	概　　要
1　資格，免許 (1)小学校教諭２種免許 (2)小学校教諭１種免許 (3)小学校教諭専修免許 (4)修士（教育学）	 昭和 52 年 4 月 平成　5 年 4 月 平成 10 年 3 月 平成 10 年 3 月	 昭 52 め第 2263 号（京都府教育委員会） 平 5 小 1 第 22 号（兵庫県教育委員会） 平 9 小専第 2035 号（大阪府教育委員会） 大阪教育大学　実践教育学専攻　証第 20 号 論文題目：「生活科新生の試みー新たな防災教育を中心にー」
2　特許等		特になし
3　実務の経験を有する者について特記事項 (1)国立大学法人兵庫教育大学と株式会社ベネッセコーポレーションとの協同研究総括チーム委員	平成 20 年 10 月～ 平成 22 年 3 月	「活用型学習」の指導方法及び評価方法等の研究を行った。本研究では習得・活用・探求の意味づけを行い、各教科ごとに活用型学習の開発を行った。研究は各教科に分かれて実施されたが、各教科に属することなく、全体を総括する評価や指導についての研究を行った。

(2)兵庫県芦屋市学力向上推進委員会委員	平成 20 年 11 月 ～平成 22 年 3 月	平成 19・20 年度の全国学力状況調査の結果を受け、市内の学力向上のためのシステムを提案することを目的とする学識経験者、小中の校長、教諭、行政関係者等 10 名により構成された。学力向上には、研究会の充実と小中連携が不可欠であることを提案した。
(3)　兵庫県猪名川町教育委員会「猪名川の教育・点検・評価報告書（平成 19～26 年度対象)」作成協力者	平成 21 年 9 月 ～平成 27 年 3 月	猪名川町教育委員会学校教育の各項目について目標達成度・今後の課題について、外部委員学識経験者として点検評価を行った。特色ある学校づくりを目指し今後の 5 年間にわたる教育基本構想の基盤となるもので、評価報告書は公開されている。
(4)兵庫県猪名川町教育基本計画策定委員	平成 22 年 5 月 ～平成 23 年 3 月	改定教育基本法を受けて兵庫県教育委員会策定の「兵庫教育策定プラン」に基づいて猪名川町独自の今後 10 年間の教育のプランを策定するものである。猪名川町における教育の振興方針と施策の体系を示し，町全体の教育振興を図るための基本計画を策定するものである。委員として学識経験者，保護者，学校関係者 10 名で構成され副委員長を務めた。
(5)　兵庫教育大学ベネッセ教員育成研究奨学生選考委員	平成 22 年 4 月～ 平成 24 年 3 月	ベネッセコーポレーションが兵庫教育大学の教職大学院で学ぶ学生に対して研究助成を行い，その奨学生の選考を行う。毎年当初に計画書を審査し，年度末にその成果を提出発表をする。
(6) 兵庫県立芦屋高等学校の学校評議員及び学校関係者評価委員	平成 21 年 4 月～ 現在 28 年 3 月	兵庫県立芦屋高校の学校評議員及び学校関係者評価委員を 4 年間勤めた。兵庫県立芦屋高等学校の学校行事及び学力向上研究会等に参加し、年度末に学校評価点検を実施し、保護者地域等に公開している。委員は保護者、地域住民、学識経験者、学校関係者など 8 名で構成されている。
(7)三田市教育振興基本計画検討委員会委員	平成 23 年 6 月～ 平成 24 年 9 月	三田市民や保護者・学校関係者・学識経験者を含む 10 名で委員会は構成されている。副委員長として、委員長を補佐し会の運営にあたった。教育基本計画は，三田市の今後 10 年間の教育の方向性を検討する基盤案であり，その作成に尽力した。
(8)兵庫県猪名川町いじめ問題対策審議会 委員長	平成 27 年 9 月～ 現在に至る	猪名川町保護者、学校関係者、学識関係者等 7 人で委員会は構成され、委員長を務める。猪名川町で発生した重大事例について基本的考えや対応等について研修と対応等を審議した。

(9)奈良県三宅町総合教育会議オブザーバー	平成 27 年 10 月～現在に至る	三宅町教育振興計画の代わりとして教育大綱を設定する会議に、学識経験者として継続的に参加して有益な意見を述べた。
(10)奈良県広陵町総合計画後期基本計画策定懇話会委員	平成 28 年 5 月～平成 29 年 2 月	広陵町の町・人・仕事等についての戦略を町民・行政関係者、学識関係者等 20 人人で委員会は構成され、人口増を図るための町づくりにを論議した。
4　その他 (1)環太平洋大学における役職 ・次世代教育学部学級経営（教育経営）学科長 平成 21 年 4 月～平成 25 年 3 月 ・教職センター長 平成 22 年 4 月～平成 24 年 3 月 ・キャリアセンター長 平成 23 年 4 月度～平成 25 年 3 月 ・学長補佐 平成 23 年 4 月～平成 25 年 3 月	平成 21 年 4 月～25 年 3 月	次世代教育学部学級経営（教育経営）学科の学科長を 4 年間勤めた。学科長 2 年目に教職センター長を兼務し，1 期生を卒業させ，約 70%の学生が教育関係への進路を確保した。さらに平成 23 年から 2 年間は，教育経営学科長とキャリアセンター長，学長補佐を兼務した。卒業生の進路は、毎年全国平均を上回り、就職に強い大学としての社会的評価を築いた。学長補佐として事務職員と教員の関係の強化に努め、大学運営の要としての存在だった。
(2)奈良学園大学における役職 ・人間教育学部長 平成 26 年 4 月～現在に至る ・キャリアセンター長 平成 26 年 4 月～現在に至る ・スポーツ振興委員長 平成 28 年 4 月～現在に至る	平成 26 年 4 月～現在に至る	人間教育学部学部長兼キャリアセンター長として、学部の要を担っている。人間教育学部長として文科省に申請したカリキュラムの適切な実施に尽力し、特に若手教員の教育力の向上に尽力している。キャリアセンター長として、キャリア授業の内容の充実を図り、教員と職員の連携を強め、就職率向上に尽力している。

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
(1)「言語力」を育てる授業づくりー新学習指導要領対応ー	共著	平成 21 年 9 月	図書文化	学習指導要領の改訂示された言語力の重視の意義と各教科における取組について論じたもの。 Ａ５　版　全 157 頁 編者：梶田叡一・甲斐睦朗 共著者：梶田叡一・甲斐睦朗・加藤明・吉川芳則・棚橋尚子・岩田一彦・清水静海・角屋重樹・松田智子・琉田直・高橋美由紀・新富康央 （担当：P, 162～167 生活科の部分を単著） 生活科の言語力育成の部分を担当執筆。生活科においては体験の言語化が重要になる。具体的には保育所幼稚園の年長から小学校の入門期において国語科の「話す・聞く」という領域と連携しながら系統的に、生活科のスピーチを取り組む過程を紹介した。ものごとをたとえたり比較したりして見ることにより，さらにそれらを言語化して表出することにより，気づきの質が高まることを提示した。これらは保育所や幼稚園の 5 歳児後半でも取り組む必要があることを強調した。そして、文字化したものを、仲間と交流することにより、異なった感じ方に触れ、再度自分の気付きを深めることができるという過程も提案した。
(2)　教育フォーラム[46] ―言葉の力を育てる―	共著	平成 22 年 8 月	金子書房	新学習指導要領に基づき、言語力をどのように育成するかについて各教科からの提案である。 Ａ５版　全 146 頁 編者：梶田叡一 共著者：梶田叡一・加藤明・伊崎一夫・鎌田首治朗・増井眞樹・勝見健史・汐海治美・谷本寛文・中島繁雄・米田豊・浅田匡・松田智子・他 13 名） （担当：P, 136～146 幼児期の言葉部分を単著） 「幼児期にふさわしい学力を考える―言語力の育成を通して―」をテーマに言葉を中心にした幼稚園の教育課程について論じた。言語の役割として伝達としての機能と思考力の機能の二つがあること、年長児における合意形成を目指した言語活動の経験が自己をコントロールする力や思考力を身につけることを事例を挙げながら論じた。また幼児期につけたい言葉の力として，その特徴と獲得させたい基本的な語彙を幼児の認識力と関連付けながら述べた。また、幼稚園 4 歳児と 5 歳児の言葉の指導カリキュラムも紹介した。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
(3)不登校生支援ハンドブック	共著	平成22年12月	学研エディケーショナル	不登校生を支援するために書かれた，学校の教師とスクールカウンセラーのための著作である。具体的な事例を挙げ，その対策を述べている。 Ｂ５版　全207頁 監修：近藤靖弘 共著者：杉村省吾・富永良喜・本多修・小谷一良・大橋節子・勝田麻津子・倉光修・斎藤文夫・内田伸子・新井肇・亀田憲治・松田智子他９名） （担当:P,12～19第１章１節　校内連携部分単著） 不登校生に対応する際に，担任教師が個人的に対応するのでなく学校がチームとして対応する必要性を論じた。中学校では教科外の特別活動や総合的な学習を学年単位で行うので、不登校を乗り越えるために，校内の意識を変革する必要を論じた。担任個人の対応から校内チームで不登校生に対応することにより、その数を激変させた具体例を挙げながら分析した。また、生徒と年齢の近い学生ボランティアを教科外の特別活動や総合的な学習の時間に活用する必要性を論じた。
(4)教育フォーラム[47] ―こころを育てる―	共著	平成23年３月	金子書房	心を育てることの意味と、どのような指導が必要であるかについて論じたものである。 A5版　全150頁　監修：梶田叡一 共著者：梶田叡一・加藤明・渡辺満・松田智子・鎌田首治朗・山本美紀・中村哲・大野光二・高橋真理・江渕弘明・蔵あすか・中家淳悟・増尾慶裕 （担当：P,38～47総合的な学習で心を育てる部分を単著） 総合的な学習の時間などの教科外活動で心を育てるための単元構成の基本について述べた。探求課題を設定する際には，教師の指導性とともに児童生徒の中の必然性が必要であることを論じた。教科外活動が心を育む根拠として、その活動形態が協同的な集団学習であることや、体験を通してなすことにより学ぶ学習スタイルを具体例とともに例示した。さらに地域住民のニーズを取り上げて課題とすることが多いため，地域全体の振興に役立ち，地域として子どもの心を育てる契機となると提案した。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
(5)次世代の教職入門	共著	平成 23 年 5 月	大学教育出版	教員の資質向上と研修が求められる社会的な背景を教育基本法等の改正や学習指導要領の改訂と関連付けながら論じたものである。 A5 版　全 297 頁 編者：中田正浩 共著者：鎌田首冶朗・中田正浩・松田智子　・大野光二・山本正・大石隆夫・中田律子・伊崎一夫・住本克彦・杉田郁代・筒井愛知） （担当：P, 61～102　第 3 章「教員の資質向上と研修」、4 章「教員の身分と服務」部分を単著） 教員の研究と教師の身分と服務の部分を担当執筆した。教員研修については、初任者研修・大学院修学研修・10 年目研修・指導改善研修等について意義と現状について述べた。教員の身分と服務については、地方公務員法や教育公務員特例法を基にしながら、具体的な事例を挙げて論述した。将来教員になる者にとって不可欠である、職務上の義務や身分上の義務については、過去の判例を提示しながら教員としての服務の特徴を示した。
(6)教育フォーラム[48] ―国際教育の展望と課題	共著	平成 23 年 8 月	金子書房	子どもに真の国際性を育てるための教育の指針について述べたものである。 A5 版　全 158 頁監修：梶田叡一 共著者：梶田叡一・見上一幸・松田智子・松田公平・鎌田首冶朗・前田洋一・川崎由花・古川治・善野八千子・筒井愛知・山本美紀・加藤明） （担当：p 27～p37　日本における多文化の歴史部分を単著） 国際教育の今後の課題として「多文化共生社会と日本語教育」の焦点を当てて論じた。日本の国際的な政治・経済状況を背景として進行している多文化の実情を述べた。次に日本における日本語教育と多文化共生の歴史を，戦後の韓国・朝鮮人への日本語教育から現在のニューカマーと言われる人々への日本語教育の連続性について考察した。多文化共生という快い言葉に隠された両面性について課題を提示した。さらに，日本語教師が現在の日本で果たすべき役割を，その資質と関連付けながら論じた。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
(7)教育フォーラム 50 号 （やる気）を引き出す （やる気）を育てる	共著	平成 24 年 8 月	金子書房	日本の子どもの学習意欲の低さに焦点を当て各教科での取り組みについて述べたものである。 A5 版　全 169 頁 監修：梶田叡一 共著者：梶田叡一・加藤明・松田智子・善野八千子・金山憲正・勝見健史・久田孝・錦織彰・住友克彦・野田健司・中田正浩・前田洋一・中村哲・瀧明千恵子、浅田匡 （担当：ｐ24～33　総合的学習の部分を単著） やる気に関する２つの全国調査をもとに、子どもがやる気を出すときについて分析した。そのための要素として「体験」と「学習課題の質」と「学び方」について述べた。体験については活動で終わることなく探究活動と結びついたものとなること、学習課題については、子どもの必要感と興味関心と結びついていること、学び方では、探究が広がり深まるような言葉かけと指導が必要であること、最後には、体験の振り返りが重要であることを提案した。
(8)次世代の教育原理	共著	平成 24 年 10 月	大学教育出版	教育の基本原理と教育思想の歴史(西洋と日本)、教育行政と教育課程等一般原理について述べた。 A5 版　全 153 頁 編著：中田正浩、松田智子 共著者：中田正浩・松田智子・中田浩司・鎌田首治朗・住本克彦・岡野聡子・久田孝 （担当：ｐ29～44、ｐ119～134　第 3 章日本の教育思想、第 4 章教師の仕事の部分を単著） ３章では、日本の教育思想について古代の「学令」から武士社会になる中世の「足利学校」等・幕藩体制の封建的社会の近世の「藩校」等の多様な教育・さらに近代に至るまでを述べた。特に古代から近世に至るまでの種々の学校制度を社会的背景と関連付けて論じた。さらに江戸時代における庶民への教育の広がりを寺小屋や郷校とともに論じた。近代では学制に伴う復古思想の隆興と大正期の自由主義教育の思想を論じた。敗戦後の教育では、政治的情勢と教育思想が結びつき、教育政策がすすめられたことを述べた。最後に、戦後 70 年経過した今日、子どもの発達の早期化に合わせた、新たな日本の教育制度の必要性を提案した。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				４章では日本の現行の教育制度とそれに付随する教員の仕事の目的や内容について教育基本法等の法令に基づいて論じた。そもそも教育の目的は何であるか、そのための専門的職業人として教師はあり方について述べた。さらに現行の大学等における教員養成の現状や課題を教育職員免許法に基づき論じた。採用後の研修制度について、地方公務員法や教育基本法や教育公務員特例法に基づき述べた。また、最近導入された免許更新制度の狙いについても論じ、現実的な効果と課題を説明した。最後に、これからの義務教育を担う教員にとっての必要とされる資質について、年代別に提案した。
(9) 子どもと生活―知的好奇心を育む環境づくり―	共著	平成 25 年 3 月	ふくろう出版	子どもたちの知的好奇心を育む教育について、幼稚園教育要領の環境及び小学校学習指導要領の生活科を軸として、述べたものである。 A5 版　全 170 頁 編著：岡野総子 共著者：岡野総子、松田智子、吉村啓子、大野純子、筒井愛知、他 6 名 （担当：p 12～21）第 1 章 2 節「幼稚園・保育所と小学校の連携を踏まえた教育」の部分単著 幼稚園教育は環境を通して行われると言われているが、その真の意味について問い返した。その過程で、幼稚園・保育所の教育と小学校生活科における教育の連続性について問題を提起した。幼児から児童にと環境が大きく変化することにより、子どもに及ぼす影響をかんがみ、小学校入学期の子どものスタートカリキュラムの在り方について論じた。具体例として、生活科の単元「学校探検」を例に挙げ、保・幼・小で共通の授業を作り上げていく事例を紹介した。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
(10)「学校安全」 －長尾先生と考える 36 のナラティブ－	共著	平成 26 年 6 月	教育出版	命を守り安全な生活の為に学校は何をできるかを、語り」形で作成したものである。 B5 版　全 157 頁 編著：長尾彰夫 共著者：長尾彰夫、松田智子、小林忠三、浜條信彦・松井典夫、若狭孝太郎、神田英幸、砂田信夫、中井尚人、佃繁、伊原正俊、藤田大輔、諏訪清二、他 5 名 担当：（p 100～101）「帰ってきたキャロリン」（p 104～107）「武庫川大橋の向こうは世界が違う」（p 112～117）「この町で生き続ける子どもとともに」の部分単著阪神淡路大震災の当時 1 年生を担任していた筆者の目から、被災地の子どもや教師の生活現状を当事者の立場で述べるとともに、その危機を乗り切るための生活科の授業の特質を生かして取り組んだ「町探検」の実践を述べたものである。東日本大震災から 3 年が経過し、被災地への愛着が、震災復興の要になると論じたものである。
(11) 人間教育を視点にした「教職入門」	共著	平成 26 年 12 月	大学教育出版	教員の本質は人間を望ましい姿に育てるため心身両面にわたって、意図的計画的に働きかけるという視点に立って教職の基本理念を述べた。 A5 版　全 279 頁 編者：中田正浩 共著者：鎌田首治朗・中田正浩・松田智子　・中田律子・金山憲正・瀧明知恵子・長井勘治・太田雄久・久田隆 （担当：P, 62～101　第 3 章「教員の資質向上と研修」、4 章「教員の身分と服務」部分を単著） 教員の研修義務と教師の身分と服務の部分を担当執筆した。初任者研修・大学院修学研修・10 年目研修・指導改善研修等の目的と現状の課題について述べた。指導改善研修は、各都道府県の実態も参考にした。教員の身分と服務については、学校教育法や地方公務員法や教育公務員特例法を基にしながら、日常に起きる具体的な事例を挙げて論述した。教員として不可欠である、職務上の義務や身分上の義務は、過去の判例を提示しながら社会人としての常識を述べた。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
(12)「看護のための『教育学』」	共著	平成27年12月	あいり出版	看護師養成は教員養成と目的は違うが、共通の理念が必要である立場で看護師要請の教育論を論じた本である。 Ｂ5版　全158頁 編者　守本とも子 共著者：守本とも子、松田智子、虎杖真智子、鎌田首治朗、梶村郁子、松浦純平、中尾友美、武富由美子、山口曜子、新谷奈苗、他２名 （担当：ｐ１～ｐ12　第１章　「教育原理について」の部分単著） 教育の意義と目的について、西洋と東洋のにおける教育という文言発祥とともに歴史的な視点で論じた。教育の変遷では西洋に焦点を当てて、モンテスキュー・カント・ルソー・ペスタロッチ・デューイ・デユルケム等の教育思想を中心に解説した。また、発達と教育に関してはボウルビィ・ワトソン・シュテルン等の思想を歴史的社会背景とともにに紹介し、教育評価ではブルーナー・ヴィゴツキーの考え方を解説した。最後に看護職を目指す者が教育学を学ぶ意義について述べた。
(13)教育フォーラム57「PISA型学力を育てる」	共著	平成28年2月	金子書房	PISA型学力を中心とした現在の教育改革において重視されている諸課題を教科及び各分野から提示した著作である。 Ａ5版　全153頁 監修：梶田叡一 共著者：立田慶裕・西辻正副・鎌田首治朗・清水静海・角谷重樹・岩田一彦・渡部久美子・鵜飼洋子・金山憲正・佐藤雄一・松田智子・高木悠哉・井上信子 (担当：「絵本から見るDeath　Education（死への準備教育）」ｐ115～ｐ124) 命の教育は学校教育で行われているが現在の道徳教育だけでは不十分であることを述べ、死をテーマとしたDeath　Educationの必要性を述べた。医療が進み死と向き合う時間が長くなり避けては通れない問題である。死についての時間がない子どものためのDeath　Educationには、絵本という芸術作品は適切な教材であり、デーケンの提唱したDeath　Educationの基本的な５つの目標に合致する絵本を分析して提案した。Death　Educationを扱う絵本は、個々の内面と向き合う絵本が多いことも検証した。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
(14)哲学する教育原理	共著	平成 29 年 3 月	保育出版社	どうして教育原理を学ぶのか、教育原理が現在の教育にどのような影響を与えるかを考察した著書 A5 版　全 188 頁 編集：伊藤潔志 共著者：川本太郎、相馬伸一、松永幸子, 松田智子、友野清文、杉山直子、渡辺明、歌川光一、竹中烈有馬知江美、田中直美、濱元伸彦、上村崇、中川雅道、伊藤潔、奥田秀巳、北村陽、西脇雅彦、小泉博明、杉浦英樹、木原一彰、松岡敬興 担当：第２章「なぜ、日本の教育思想を学ぶのか」１項「前近代の教育思想」 p 35～ p 39 日本における飛鳥時代の教育思想の始まりから、古代の大宝律令の教育思想へ進み、日本独自のかな文化の発生に触れた。中世の教育では武家の家訓と寺院における世俗教育に触れ、民衆と支配者側の教育の差について論じた。近世の江戸時代では多様な教育の出現とその社会的な背景を権力側からと民衆の側からの要求として論じた。
（学術論文） (1)公立義務教育学校における保護者対応の現在ー保護者の要望・抗議・クレームの分析を中心にー	単著	平成 20 年 12 月	京都光華女子大学短期大学部研究紀要第 46 集 p 167～194	公立の義務教育学校で増加している保護者の要望・抗議・クレームについての社会的な背景を分析した。また、保護者と教員双方のそれらの問題についての認識のずれを、現代社会の様相と関連付けて明らかにした。各学校で起きているその様態をもとに「要望・抗議・クレーム」を整理して分類した。さらにその論点を踏まえて、学校組織としての鍋蓋構造の弱点を指摘し、予防策や対応について例示した。また、教師一人一人が保護者と連携するだけでなく、学校組織として日常的に交流できるシステムづくりが必要であることなど、学校の将来的なあり方も具体的に提案した。特に管理職の役割や、行政の役割が今後重要になることを論じた。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
(2)幼稚園教育課程編成の現状と課題（１） －Ａ市立Ｂ幼稚園の教育課程の現状を通して－	共著	平成 24 年 12 月	環太平洋大学研究紀要第 6 号 (p135～p140)	幼稚園における教育課程の意義、その具体的な活用についてＡ市の教育課程の基底及びＢ幼稚園の教育課程指導計画を分析し報告したものである。Ａ市の教育課程基底が各幼稚園に及ぼす影響を平成 22 年から 23 年にかけてのＢ幼稚園の研究紀要をもとに明らかにした。公立幼稚園では教育課程が文言化されているが、それが日常の保育にどのように効果的に作用しているか、また、教育課程のＰＤＣＡサイクルの実情についても言及した。 （松田智子・土谷長子） 担当部分：Ａ市Ｂ幼稚園に 3 年間継続的に保育観察に入り、教育目標が保育内容にどのように具現化しているか分析した。Ａ市の教育課程の基底の改定に対して指導助言者として参画した。
(3)特別活動で培う主体的防災行動への一考察	単著	平成 25 年 3 月	環太平洋大学研究紀要第 7 号 (p149～p160)	防災教育の目的と、特別活動の位置づけと役割を明確にし、防災教育への国民の意識の低さを克服するために、初等・中等学校が特別活動の学習を通して獲得する能力について述べた。また、初等・中等の義務教育の特別活動の内容項目や目的と関連付け、防災避難行動のあり方を東日本大震災の中学生の避難行動の具体例を挙げながら論じた。現状の避難訓練の効果と特別活動の改善点とに焦点を当て、防災教育を充実させるため発達段階に応じ、特別活動と各教科を関連させ行う必要があることを論じた。特別活動等を通して地域と日常的に地域住民を巻き込んだ特別活動が地域防災に不可欠であると述べた。
(4)日本語教師論入門 ―中国での実践を通して― ―	共著	平成 25 年 3 月	環太平洋大学研究紀要第 7 号 (p137～p148)	日本語教師の枠組を日本語教師の資質と能力と関連付けながら論じた。日本語教育における教師の役割について論じた。これらについて中国で日本語教師をした経験から、中国における日本語教育事情についてれを挙げながら論じた。中国の担当する学生にアンケート調査を行い、日本語学習者の現状と意識を分析した。さらに現代の中国で日本語教育にかかわる意義について論じた。 （松田公平、松田智子） 担当頁は抽出不可である。事前の学生アンケートの作成とアンケートの結果の分析整理を担当した。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
(5)特別活動で築く人関関係力 - 防災教育の実践を通して -	単著	平成 25 年 4 月	教育 PRO 第 43 巻第 9 号 (P6～P10)	特別活動の特質・特性である「集団活動であること」「なすことによって学ぶ」この２つが、地震大国に住む国民にとって、命を守る中心だと述べた。特別活動の狙いである望ましい人間関係の構築が、学校内にとどまらず地域住民まで広がり、防災行動を下支えすることも述べた。さらに望ましい人間関係を形成する能力を育てる方法とその過程について言及した。最後に、特別活動は体験活動が重視されるためイベント的に終わってしまう危険性があり、活動の後に振り返り、子どもが内省化する必要があることを具体的に例示した。
(6)内面世界の形成を促す人間教育原理への一考察 - ソクラテスの問答法に焦点を当てて - 【査読有】	単著	平成 26 年 4 月	人間教育学研究　創刊号 奈良学園大学人間教育学部 (ｐ7～ｐ14)	教育の言葉の意味を探るため、世界東西の紀元前の思想家が教育を論じている文献を調査した。人類文化の思想的な夜明けと教育の起源は関係し、教育は「子どもを善くしようとする働きかけ」を意味し、ソフィストという職業集団教師が存在した。特に内面の教育を実践した、ソクラテスの人物像やその「問答法」に視点をあてて論じた。彼の「無知の知」を相手に自覚させる対話は、内面世界に配慮した教育への示唆を含んでいる。彼は青年を教育対象としたが、梶田が提唱する「内面性の人間教育」との関連性も述べた。梶田の人間教育における「自己凝視、自己対話、自己表現」を支える教育の基盤も述べた。
(7)Death　Education による人間教育 ー絵本の分析を通して― 【査読有】	単著	平成 26 年 12 月	人間教育学研究　第２号 奈良学園大学人間教育学部 (ｐ59～ｐ70)	今日の死生観が返還した過程を振り返った。命の教育は学校教育で行われている道徳育では不十分であり、死と向かい合う教育が必要なことを述べた。医療が進み死と向き合う時間が長くなり避けては通れない問題である。子どものための Death Education には、絵本という芸術作品は適切な教材であるため、デーケンの提唱した Death Education の基本的な５つの目標に合致する絵本を分析して提案した。それぞれに対応した国内外の絵本を選択し、内容を分析し Death Education にどのように活用できるかを示唆した。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
(8)近世における女子教育史への一考察 ―江戸時代末期の女子教育について―	単著	平成 27 年 9 月	奈良学園大学研究紀要 第 3 号 P125～P134	江戸時代末期に士族のみならず庶民・農民に至るまで教育のすそ野が広がっていった外的及び内的な要因を 3 つ挙げた。士族の女子教育を支える日本独自の女徳（生活技術より徳を上位）が日本の女子学の特徴である。庶民の女子教育を支えるは実学であり、その根本思想は主婦学であった。女子教育が母親教育の枠組みの中ではあるが社会的に認知された意義は大きいと論じた。また農村地域の最下層の女子にまで、文字の読み書きが広がっていたことを資料で明らかにした。幕末期に藩校で女学校成立の動きがあったが、富国強兵のための母親学の色彩が濃かった。寺子屋での女師匠誕生や男女が同室学習を例に挙げ、明治の学制実施の前の男女共通教育の萌芽について論じた。
(9)貝原益件の教育思想への一考察 －江戸の子育て法と教育書を通して－ 【査読有】	単著	平成 27 年 12 月	「人間教育学研究」第 3 号 人間教育学会 ｐ47～ｐ54	本論は鄭和と秩序の時代であった江戸時代の教育ネットワークおよび益軒の著作である『大和俗訓』及び『和俗童子訓』等に焦点をあて論じた。教育に果たす父母の役割は大きく、益軒は父母こそが教育の心得を学ぶべきとして庶民に分かりやすい仮名書きの教育書を多く発行した。彼の学問の根本は習俗としての儒学であり目的は「善」を行うことであり、仁や礼を大切にした孝の教育である。彼は子どもが邪悪を覚える前に早期に教育すべきと説き、その年齢に応じた教育課程を示し大きな支持を得た。また、親の過保護を厳しく戒めた。このような益軒の思想が江戸時代に受け入れられた社会的な背景も、思想内容とともに分析した。
(10)生活科から小学校社会科への連続性の一考察 -防災教育と減災教育に視点を当てて-	共著	平成 28 年 9 月	奈良学園大学研究紀要 第 5 号 P141～150	日本の国土の環境から災害大国であるリスクがある反面、国民の危機意識は低いことを前提に、防災教育と減災教育の必要性を小学校 6 年間の生活科と社会科の連続性の中で論じた。学習指導要領に防災教育がどのような内容と目標で示されているかに焦点を当てて分析した。さらに指導内容を「自助」「共助」「公助」という防災の枠組みと関連付けて論じた。生活科の目標は自立の基礎を育てることであり、「自助」「公助」との関係が深い。一方社会科の目標は「共助+公助」の公民的資質を育成、災害についての知識獲得意欲を中心に置いている。特に命を守る一次非難に重要な空間的認知の獲得にも社会科の果たす役割は大きい。 共著者：山田均、松田智子 担当部分：総論と生活科の部分単著ｐ141～145

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
(11)教育行政と教育課程－学校経営に視点をおいて－【査読付】	共著	平成28年12月	日本人間学会学会誌第４号P115～124	教育行政と教育課程をテーマとして，学習指導要領をめぐる論議，教育課程行政の統制手法の変化，教育課程マネジメントの課題，戦略的で柔軟な学校運営と教育課程，教育課程に関する地方教育行政の役割等を学校経営の観点から，論述した。 共著者：松田智子，伊田義信 本人担当部分：(p115～118を単著）第２項、教育課程行政の課題（教育課程の統制）として専門統制、国民統制、行政統制、市場統制について解説し、第３項では、教育課程行政の統制手法の変化（履修主義から習得主義への転換）インプットからアウトブットへの転換を論じた。第４項では教育課程マネジメントの課題として教育課程と「出口」の学力格差の現状を論じた。
（その他） 「事典」 (1)実践教育評価事典	共著	平成22年8月	文渓堂	教育評価の意味と各教科での評価のあり方と、評価用語の詳しい解説を述べたものである。 Ｂ５版　全261頁 監修：梶田叡一・加藤明 共著者：梶田叡一・加藤明・長谷浩也・吉村希至・土田圭子・石井雅幸・上之園公子・尾崎友美・鎌田首治朗・金澤緑・米田豊・角谷重樹・北川達夫・菅千索・勝見健史・松田智子・他15名 （担当：P,126～129・P,138～139・P,190～191教育評価の基礎知識「教育評価史（日本)」「教育評価史（西洋)」「学習指導要領と指導要録」「カリキュラム評価･カリキュラム改善」の用語概略と説明を単著） 日本の教育界に残る心情や印象で教育を語る実践を乗り越えるために本書は執筆された。「結果」を重視した地に足を着けた教育をするために各用語についての基本的な解説を行った日本と西洋の教育史では、それぞれの学習の評価の方法や観点に焦点を当てて、教育評価の歴史を論じた。 学習指導要領と指導要録の項では，社会的な背景と明治以降の日本の教育界動向を関連付け，なぜ学習指導要領が変遷してきたかを述べた。学習評価と指導の改善に視点を当てて論じた。カリキュラムの項はPDCAサイクルの必要性を述べた。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
「報告書」 (1)命の教育のカリキュラムをどのように進めるか ―幼児が友達との交流を深めることを通しての育ち―	共著	平成22年12月	第2回命の教育実践研究会報告集	幼児が身近な自然とのかかわりを通しての感動や葛藤を伝え合い，共感することを通して，自ら生き物に関わろうとする意欲を育てる取り組みと具体的な指導過程について提案した。動物の飼育活動は，当番活動として幼児に役割分担されがちであるが，あえて自主的な活動と位置付けて，そこで生じる幼児の葛藤を取り上げ，生命を大切にする心を育成する指導の方法について述べた。葛藤場面での教師や友達の声掛けを分析し，日常の保育の中で児童の内面を理解する重要性も論じた。 （担当：p14～p15，p36～37，梶田叡一，渡邉満，古川治，川上一馬，新川靖，津田一司，山口光一，市橋真奈美，松田智子）全75頁
(2)命の教育のカリキュラム化をどのように進めるか －幼稚園・小学校低学年の命の教育―	共著	平成24年1月	第3回命の教育実践研究会報告集	幼児は身近な環境と自ら関わり，発見を楽しんだり考えたりして，それを自分の生活に取りいれる。実践事例「ツバメの町を探検しよう」では保育案の新しい書式を提案し、ねらい内容と幼児の姿と育てたい力を明確にするように指導した。育てたい力は①人とかかわる力②環境とかかわる力③自己とかかわる力の3視点を設けた。そのうえで援助のポイントを考えることを入れた保育案を提案した。小学校低学年生活科では，学習指導要領改訂の趣旨である安全教育の充実に着目し通学路をテーマに「寄り道のすすめ」単元を作成しを生活科の中に取り入れた指導案をを提案した。 （担当：p18～p19，p27～32　　梶田叡一，渡邉満，古川治，，津田一司，山口光一，市橋真奈美，松田智子）全115頁
(3)学びを描き出し伝える －メンタリングの実際と課題－	共著	平成25年2月	日本教師学学会誌「教師学研究」増刊号	日本教師学学会第12回大会シンポジウム報告集。メンタリングに着目し，教師教育・看護教育・学校経営･eラーニングの立場からシンポジウム形式で発表をしたものの報告である。 担当部分は公立学校の初任者研修における指導教員と初任者との関係をメンタリングの視点から分析することである。現在の主任者研修は、メンターと対象者との関係に利害関係がありそれが課題であること、また期間は初任者研究は1年で終了だが、メンタリングの観点からは、3年ほどの継続が望ましいことを提言した。（田村由美・松田岳士・河村美穂・石原逸子・松田智子） p25～P44

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
(4)いのちの教育カリキュラムモデルの開発と実践 平成24年度～26年度科学研究費補助金研究報告集（基盤研究(B)） 科研番号24330254	共著	平成27年1月	奈良学園大学研究代表者梶田叡一 いのちの教育実践研究会 全207頁	生活科と特別活動における防災教育のカリキュラムを提示した。防災教育を定義し、その必要性を日本の地理的な環境面から提起し、その中で義務教育機関が果たす役割を論じた。特に生活科の単元構成と特別活動の人間関係構築力に焦点を当てて、実践事例を示すとともにカリキュラム編成の基本観点を論じた。 (担当：第4章第3節生活科と特別活動における防災教育ｐ96～107　共著者：梶田叡一、近藤靖弘、渡邉満、古川治、五百住満、松田智子、大谷武彦、住本克彦、杉田育代、三木澄代、松井典夫他9名)
(5)「豊かに感じ生き生きと生活する幼児をめざして」 ―学校生活につなぐ学びの芽生えをはぐくむ―	共著	平成28年2月	芦屋市立精道幼稚園	保育所・幼稚園と小学校の円滑な接続を図る芦屋市教育委員会研究指定園としての報告である。文科省の示した接続の3観点「自己調整力」「考える力」「伝え合う力」で年間3回の保育参観実施し、特に5歳児後期の変容を確認した。幼稚園で意識的に伝え合う力の育成に努めるとともに小学校での学びを支える体幹を鍛えることを意識した保育の報告である。 (担当：ｐ32～33単著及び全体の校正及び助言)、共著者：西窪千昌、上埜吉実、内藤純子、中村友光子、松井奈央子　全53頁
「講義・指導助言等資料」 (1)教員免許更新講習会講義資料冊子 「今求められる資質と職務遂行能力」Ⅰ	単著	平成21年8月	環太平洋大学教職センター A4版　10頁	教師として求められる「資質」と「職務遂行能力」についてレジメを基に講義を行った。20代から50代までの年代別に，教員経験年数に伴う，学校の校務分掌の中で果たすべき役割についてレジメを準備してライフスタイルとともに説明した。特に新任教師が増加している今日，教職10年を経過する教師はミドルリーダーとして，学校運営に参画する必要性を教員人口利率のグラフを示して具体的に説明した。
(2) 生活科における言語力 育成―幼稚園・保育所とのつながりに視点を置いて-	単著	平成22年8月	阪神地区小学校生活科教育研究会（伊丹市立産業情報センター） A4　10頁	レジメを基に、話し言葉が中心の幼稚園から書き言葉が中心の小学校へ進級した祭に起きる小1プロプレムについて言語活動に焦点を当て論じた。幼稚園では語を単位とした指導になりがちで、語の質を高めるには活動や体験を通して、その意味や背景を考えさせることが重要であることを述べた。静かに読み聞かせを聞くことを是とする指導の再考を提案した。絵本の読み聞かせ通しイメージと論理的な思考を育む必要性も論じた。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
(3)教員免許更新講習会 講義資料冊子 「今求められる資質と職務遂行能力」Ⅱ	単著	平成 24 年 8 月	環太平洋大学教職センター A4 版　10 頁	レジメで教員の年齢構成を提示しつつ、新教育課程を実践するうえで教師として求められる「資質」と「職務遂行能力」について、教員経験年数に伴う，学校の校務分掌の中で果たすべき役割について論じた。また、年代別にどのような力が求められるかを、経営者100人からのアンケート結果として一覧で提示し役割を自覚し、チーム力んの必要を指摘した。
(4)神戸市立小学校生活科部会研究会資料 「生活科でいのちを大切にする教育」	単著	平成 26 年 1 月	神戸市立小学校生活科部会研究会 A4 版　8 頁	レジメに基づき、幼稚園・小学校の教員 60 人を対象に講話を行った。生活科の成長単元は児童の自尊感情を育み周囲に感謝の気持ちをもたせ命を大切にする狙いを説明した。子どもの死生観調査の結果を提示し、死生観の変化の境目を意識して教育に当たる必要を述べた。
「学会発表」 (1)保育士養成教育と卒業時の満足感との関係	―	平成 20 年 9 月	全国保育士養成協議会第 47 回大会（北海道・函館国際ホテル）	免許・資格取得のための独自教科のみならず「基礎演習」で掃除の仕方や箸育や礼儀作法等を実施している。また伝統文化（歌舞伎・西陣織・正しい日本語）等の授業を行っている。この特徴あるカリキュラムに対する実証的な検証を行った。 担当部分は、学生満足度評価の実施分析である。 （吉村啓子・松井裕子・松田智子・土谷長子・智原江美・高橋浩輔・下口美穂・岡野総子）。
(2)「今なぜ命の教育が必要か」パネラーとして提案発表 「飼育活動でいのちを大切にする幼児・児童教育」	―	平成 22 年 12 月	第 2 回いのちの教育実践交流会（大阪・御堂会館）	幼稚園や小学校特別活動のウサギの飼育を通しての実践例を報告した。多くの学校園では小動物の飼育活動をし、当番活動は特別活動の係活動として、教師が順番に決めていることが多い。本実践は，自主的なウサギ当番と学級活動の話し合い活動を通し「ウサギの世話は命を預かることである」という気付きの経過を述べた。話し合いには教師の指導性が不可欠であることも強調した。 （古川治，松田智子，久保弘子，津田一司，山口光一，渡邉満，市川真奈美）

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
(3)メンタリングの実際と課題 パネラーとして提案発表 「学校におけるメンタリング機能の実際」	―	平成23年2月	日本教師学学会第12回大会（兵庫・甲南大学）	メンタリングに着目し，教師教育・看護教育・学校経営･eラーニングの立場からシンポジウムで発表をした。公立学校の初任者研修における指導教員と初任者との関係をメンタリングの視点から分析した。メンタリングの観点からは、3年の研修継続が望ましいことを提言した。（田村由美・松田岳士・河村美穂・石原逸子・松田智子）
(4)幼稚園と小学校低学年対象の命を大切にする教育とは パネラーとして提案発表	―	平成24年1月	第3回いのちの教育実践交流会(兵庫・六甲荘)	命の教育のカリキュラム化について提案した。幼稚園児の命の教育は「小動物の飼育」や「植物の栽培」を通して行われることが多い。これらは，愛着を持つだけでなく，子どもの心を癒すからである。その心の働きが命を大切にする契機となる。一方、生活科では，改訂の趣旨に登場する「安全教育を充実」に着目し、通学路をテーマに取り上げた単元を構成し提言した。担当部分は、幼稚園・小学校低学年の指導部分である。（古川治，松田智子，津田一司，山口光一，三木澄子）
(5)生活科における命の教育の単元開発	―	平成24年6月	日本生活科・総合的学習教育学会第21回大会(徳島・徳島大学)	東日本大震災の教訓として地域全体での防災教育の大切さが確認された。小学校1年生で安全の一部として通学路を教材とするが、扱いは安全な登校を目指すものであり取り扱う時間が少ない。通学路のみの安全と限定するのでなく、地域の避難通路や避難場所も組み入れた単元を構成する必要性を提案した。生活科の教科書で提示されている通学路の危険が、大雨や不審者等に偏っている傾向があり、津波の記述も求めた。抄録p209
(6)領域「環境」における授業研究 ～体験活動と授業後の発展学習を重視した授業の展開～	―	平成24年9月	全国保育士養成協議会第51回大会(京都・京都文教大学)	授業に自然や環境に触れ合う体験活動を組み入れ、さらに発展学習として関係する課題を与えた。課題に対するフィードバックを通して学生同士が交流するための時間を毎回確保した。この学習サイクルの繰り返しが、学生の意欲をどのように刺激し授業への参加態度等が変化するかを検証したものである。筆者は学生の授業への参加態度や課題等への取組態度の分析を担当した。 （岡野聡子・松田智子）　抄録p268～269

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
(7)防災からいのちの教育を考える分科会のコーディネーター	―	平成25年2月	第4回いのちの教育実践交流会(兵庫・六甲荘)	東日本大震災がの際に、児童を100%救助した教訓について、麻生川氏から提案発表があった。諏訪氏から震災発生時の学校と地域との望ましい関係は、従来の特別活動の退屈な避難訓練では構築できないと助言があった。コーディネーターとして、特別活動の学校行事を核とし、自主的集団避難行動をうながす防災教育のまとめを提言した。 （麻生川敦・諏訪清二・松田智子）（p32～p41）
(8)生活科と特別活動における防災教育	―	平成27年1月	いのちの教育実践交流会第6回シンポジウムin兵庫(兵庫・六甲荘)	兵庫県教育委員会が、防災教育がどの教科や領域と結びつき実践されたかを調査した結果、特別活動・生活科・道徳などと関連が深いと分かった。本発表では特別活動と生活科に焦点を当て、目的と内容と学習方法の視点で防災教育との関連を論じた。生活科では単元目標を防災教育と関連させ、実践を紹介した。特別活動では災害時の一時避難活動の重要性と避難集団内の人間関係がその結果を左右することから、集団の良好な人間関係の構築の重要性を確認した。集団活動さえすれば良好な人間関係が育つのでなく、その目的や自主性が重要であることを論じた。報告集p96～107
(9)絵本の分析を通してのDeath Education(死への準備教育)	―	平成27年2月	日本教師学学会第16回大会(日本女子大学)	死生観の転換期である5歳から7歳の児童を対象に、Death Educationに有効な絵本を紹介した。日本では医療が進み、子どもが死と向き合う期間が長くなるとともに、災害等で親しい人と死別を体験する機会が増加していることを述べた。さらに病院死が増加し、子どもたちが命を実感を持って受け入れる環境に乏しい。このことが、子どもの健全な死生観の発達に揺らぎを引き起こしている。子どもの発達段階に応じた絵本を分析的に紹介した。抄録p50～51

教　育　研　究　業　績　書

平成 29 年 3 月 31 日

氏名　　山本　美紀

研　究　分　野	研　究　内　容　の　キ　ー　ワ　ー　ド
芸術学（芸術学・音楽学・芸術史･芸術一般） 教育学（教育学・教科教育学）	芸術・文化政策、各教科の教育（音楽）、教材開発、教科外教育 音楽学、

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　　要
1　教育方法の実践例 ・講義・演習授業の効果的連携	平成 18 年 4 月～平成 20 年 9 月	大阪キリスト教短期大学神学部の非常勤講師として担当の「教会音楽講義」（専門科目、1 年次配当、半期、選択 2 単位）において、明治期の日本に赴任した宣教師による初期の音楽教育史および唱歌について講義。さらに同短期大学専攻科神学部の非常勤講師として担当の「教会音楽演習」（専門科目、2 年次配当、通年、選択 2 単位）と連動させ、教会における音楽活動が今日の音楽教育の原型を提供していることを踏まえ、歌唱指導の模擬授業や指揮法・編曲法をはじめとした音楽教育法の実践演習を行った。その結果、日本における音楽教育の歴史的事項を押えながら、地域の音楽活動拠点となる教会での音楽活動について学生たちにとって応用性の高い講義となった。
・視聴覚教育技術の利用	平成 20 年 10 月～平成 21 年 9 月	関西学院大学神学部の非常勤講師として担当の「キリスト教と音楽」（専門科目、2 年次配当、半期、選択 2 単位）において、グレゴリオ聖歌の原曲と楽譜、またその現代における応用例を、視聴覚教材を用いて講義した。特に、グレゴリオ聖歌は音楽教育として用いられたものでもあるため、各国図書館に保存されている画像を提示の上、旋律線をアップル社のアプリケーションなど最新機器を用いて再現した。その結果、学生たちにはより具体的な理解が促進されたと同時に、教職を希望する学生の受講者も多かったため、音楽教育法の歴史的体験も可能となり、満足度の高い授業となった。
・大学教育と連動した地域への実践教育	平成 23 年 4 月～平成 25 年 3 月	環太平洋大学次世代教育学部の専任准教授として担当の「子育て支援実践演習Ⅰ」（コア科目、2 年次配当、通年、選択 4 単位）、「子育て支援実践演習Ⅱ」（コア科目、3 年次配当、通年、選択 4 単位）において、地域貢献のための実践教育を実施。学生たちの、地域の子育て支援ができる技能や発想力、また企画運営のための即戦力を育成する実践教育を行った。その結果、学生たちのコミュニケーション能力の向上がみられ、地域の評価を高めた。

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項		
事項	年月日	概　　要
・講義・演習授業の効果的連携 ・視聴覚教育技術の利用	平成23年4月 ～現在に至る	環太平洋大学次世代教育学部専任准教授、また奈良学園大学人間教育学部専任准教授として「音楽の理解」（講義）において、音楽の専門用語及び音楽の思考法について徹底した理解の定着を行う。その知識を、「音楽科指導法（教育法）」（演習）での学習指導要領の内容理解につなげ、模擬授業の指導案作成及び実施に際して、具現化できるよう指導を行った。特に、合奏指導に関する模擬授業については、楽譜の編曲指導、楽器の演奏法など、より実践に則したものとなるよう、小学校での大学生によるボランティア指導の様子などの記録ビデオを使用し、学生によりイメージを持ちやすく指導を工夫した。
・演習・実習の効果的な活用 ・楽器奏法の教授	平成23年4月 ～現在に至る	環太平洋大学次世代教育学部専任准教授、また奈良学園大学人間教育学部専任准教授として担当の「器楽演習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」（専門科目、1・2年次配当、半期、選択2単位）において、特にⅠ・Ⅱを実習必修科目と設定。科目の到達目標を実習で使用できる音楽能力の確保（ピアノ基礎と弾き歌い）と設定し、各自のレベルに応じて完全個別レッスンを実施。　さらに、音楽系科目「音楽の理解」（専門科目、2年次配当、半期、選択2単位）「音楽科教育法」（専門科目、2年次配当、半期、必修2単位）、「表現B（音楽表現）」（専門科目、2年次配当、半期、必修2単位）と教科内容を連動。学生がスパイラルに多様な音楽的能力をつけられるよう工夫した。その結果、学生の理解と音楽的実力が伸び、実習先からも実習生に高い評価を得た。
・演習・実習の効果的な活用 ・楽器奏法の教授	平成23年4月 ～現在に至る	環太平洋大学次世代教育学部の専任准教授、また奈良学園大学人間教育学部専任准教授として担当の「音楽科教育法」（専門科目、2年次配当、半期、必修2単位）、「表現B（音楽表現）」（専門科目、2年次配当、半期、必修2単位）において、小学校学習指導要領、幼稚園教育要領を詳説したうえで、いかに具体的教育実践へ落とし込んでいくか、実例を挙げて解説。指導案作成指導とともに、模擬授業を実施し、教育法の実践的活用を具体的に指導した。その際、初等教育で使用する楽器（カスタネット・タンブリン・鈴・ピアニカなど）や小学校で使用するリコーダー等の基本的な奏法も、授業で活用できるよう指導した。その結果、音楽科教育や幼児への音楽表現の指導に対する理解が深まり、実習先からも高い評価を得ると同時に、2次試験対応能力が向上し、学生の教員採用試験、公務員試験（専門職）合格に貢献した。
・レポートの活用 ・オフィスアワーの活用	平成23年4月 ～現在に至る	リメディアル教育やキャリア教育の一環として環太平洋大学で取り組まれてきた「学習支援講座（国語）」「小論文講座（基礎）（応用）」「基礎ゼミ」、また奈良学園大学人間教育学部での「教職表現力演習Ⅰ、Ⅱ」では、レポートの提出による学生の文章力の向上に貢献してきた。 特に「教職表現力演習Ⅰ」では、教職に必要な基礎的日本語運用能力の向上を、同Ⅱでは教職に必要な文章スキルを基盤とした、社会的文章構成力を培い、各テーマに即した文章作法を指導した。さらにオフィスアワーでは、ディスカッションも取り入れ、個々の問題意識を文章に活かす指導を行った。その結果、学生の段階的な日本語運用能力が向上し、論理的思考力の育成に貢献した。

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項		
事項	年月日	概　　要
・授業用コミュニケーションシート（大福帳）の活用	平成26年4月 ～現在に至る	奈良学園大学人間教育学部の専任准教授として担当の「音楽の理解」（専門科目、1年次配当、半期、選択2単位）及び「音楽科指導法」（教職科目、2年次配当、半期必修1単位）において、学生とのコミュニケーションの確保・出席の確認・学習内容の習熟状況の確認のために、「授業用大福帳」を導入。各授業終了時に授業内容についての質問の他、学習方法についての質問を記入させ、次回授業に返すようにしている。中には、大学生活全般についての質問なども含まれる場合もあり、学生の出席状況の把握に努めるだけでなく、生活状況の把握にも役立てることができている。
2　作成した教科書、教材 ・講義用補助教材（視聴覚教材） ・学生配布用ワークシート	平成19年4月 ～平成19年9月 平成20年4月 ～平成20年9月 （隔年開講）	大阪キリスト教短期大学神学部の非常勤講師として担当の「教会音楽講義」（専門科目、1年次配当、半期、選択2単位）において、歴史的に希少価値の高い資料を扱う必要性から、パワーポイントによる視聴覚教材および、学生配布用のワークシートを作成した。ワークシートは日付順にファイルすることで最終的に講義ノート（参考書）として完成するようになっており、学習ポイントが明らかになるよう工夫を行った。その結果、学生は復習が可能となり、試験対策時にもポイントを押えた学習が可能となった。
	平成20年10月～平成21年3月 平成21年4月 ～9月	関西学院大学神学部の非常勤講師として担当の「キリスト教と音楽」（専門科目、2年次配当、半期、選択2単位）において、歴史的に希少価値の高い資料や、フィールドワークで独自に採取した資料を扱う必要性から、パワーポイントによる視聴覚教材および、学生配布用のワークシートを作成した。ワークシートは日付順にファイルすることで最終的に講義ノート（参考書）として完成するようになっており、学習ポイントが明らかになるよう工夫を行った。その結果、学生は復習が可能となり、試験対策時にもポイントを押えた学習が可能となった。
・編曲演習用楽譜教材	平成19年4月 ～平成20年3月 （隔年開講）	大阪キリスト教短期大学専攻科神学部の非常勤講師として担当の「教会音楽演習」（専門科目、2年次配当、通年、選択2単位）において、歌唱指導の模擬授業や編曲法などに用いるための、楽譜教材を作成。基本的な和音運用による穴埋め式のものから、自由に編曲できるまでの教材を作成した。その結果、学生は段階的に編曲の力をつけることができるようになり、各自の音楽実技の能力に応じた編曲が可能となった。
・『小学校で培う音楽の力 ―共感する心を育てる』（再掲）　山本美紀 著　ヨベル社（平成22年12月出版） 【全96ページ＋別冊課題48ページ】	平成23年4月 ～平成24年3月	環太平洋大学次世代教育学部の専任准教授として担当の「音楽科教育法」（専門科目、2年次配当、半期、必修2単位）のためのテキストである。前半で音楽科教育史および、学習指導要領実現のための授業実践について解説を行っている。また、授業実践に必要な知識としての楽典および、技術としての指揮法、合唱指導法、編曲法などについて、課題を別冊付録として添付し、学生が授業の復習をできるように工夫した。

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項		
事項	年月日	概　　要
・『幼児教育・初等教育のための音楽基礎知識と表現－音楽でつむぐ学びの歳時記』（再掲）山本美紀／岡田美紀編著　ヨベル社（平成 22 年 10 月出版）【全 157 ページ＋別冊課題 23 ページ】	平成 23 年 4 月～平成 24 年 9 月	環太平洋大学次世代教育学部の専任准教授として担当の「表現 B（音楽表現）」（コア科目、2 年次配当、半期、必修 2 単位）、「音楽の理解」（専門基礎科目、1 年次配当、半期、必修 2 単位）および「器楽演習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」（専門基礎科目、1・2 年次配当、半期、選択 2 単位）のためのテキストである。基本的なソルフェージュ知識や、弾き歌い、小学校低学年用音楽科共通教材、幼稚園教材とともに、幼稚園保育園に関する音楽が関わる学校行事運営において、必須項目について解説した。音楽に関する項目について執筆。 巻末には幼児教育の現場で使用されやすい楽曲の伴奏用楽譜と、小学校の低学年用共通教材の伴奏用楽譜を収録している。基礎的楽典内容などについて、課題を別冊付録として添付し、学生が授業の復習をできるように工夫した。（山本美紀／岡田美紀：行事に関する内容担当、山口聖代：編曲担当）
・『新装改訂版　小学校で培う音楽の力 ―共感する心を育てる』（再掲）山本美紀 著　ヨベル社（平成 24 年 4 月出版）【全 123 頁＋別冊課題 48 頁】	平成 24 年 4 月～平成 26 年 3 月	環太平洋大学次世代教育学部の専任准教授として担当の「音楽科教育法」（コア科目、2 年次配当、半期、必修 2 単位）、および「器楽演習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」（専門基礎科目、1・2 年次配当、半期、選択 2 単位）のためのテキストである。前刊で音楽科教育法講義の際に使用したことをふまえ、内容に小学校共通教材の編曲された伴奏用楽譜、および図表解説を追加。さらに授業実践に必要な知識としての楽典および、技術としての指揮法、合唱指導法、編曲法などについて解説を強化した。また、授業実践に必要な知識としての楽典および、技術としての指揮法、合唱指導法、編曲法などについて、課題を別冊付録として添付し、学生が授業の復習をできるように工夫した。
・『新装改訂版　幼児教育・初等教育のための音楽基礎知識と表現－音楽表現で紡ぐ歳時記と役立つ楽器』（再掲）山本美紀／岡田美紀編　ヨベル社（平成 25 年 3 月出版）【全 B5 判　全 175 頁＋別冊課題 32 頁】	平成 25 年 4 月～現在に至る	環太平洋大学次世代教育学部の専任准教授として担当の「表現 B（音楽表現）」（コア科目、2 年次配当、半期、必修 2 単位）、「音楽の理解」（専門基礎科目、1 年次配当、半期、必修 2 単位）および「器楽演習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」（専門基礎科目、1・2 年次配当、半期、選択 2 単位）のためのテキストである。前刊で「表現 B（音楽表現）」に使用したことをふまえ、小学校低学年用音楽科共通教材、幼稚園教材とともに、現場で用いられやすい基礎的な楽器群について解説を行う。音楽に関する項目について執筆。また別冊には従来の内容に加え、指導案作成用の用紙を添付。授業の復習とともに、実践的な理解ができるように工夫した。（山本美紀／岡田美紀：行事に関する内容、筒井はる香：楽器に関する内容、山口聖代：編曲担当）
・『教職表現力ノート』（再掲）西辻正副／山本美紀編著　奈良学園大学（平成 27 年 4 月）【全 123 頁＋別冊課題 48 頁】	平成 27 年 4 月～現在に至る	奈良学園大学人間教育学部の専任准教授として担当の「教職表現力演習Ⅰ」（専門基礎科目、1 年次配当、半期、必修 1 単位）のためのテキストである。新聞のコラムをはじめとした模範的文章の書きとり、語彙力をきたえるための項目、より深く記事を読み込むための要約演習ページを含む。本教材により、大学生にふさわしい基礎的な日本語運用能力を鍛えると共に、それらを教員の言葉としてつなげる工夫が行われている。編者として関わると共に、音楽に関するミニレクチャーの項目について執筆。人の話を聴いて、必要な情報を獲得していけるよう、実践的学びができるように工夫した。【A4 判　全 142 頁】（山本美紀：2-63，108-109）

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項		
事項	年月日	概　　要
・『音楽教育から地域の文化力へ－イメージをつむぐ』（再掲）山本美紀編著　株式会社 ERP	平成27年7月～現在に至る	奈良学園大学人間教育学部の専任准教授として担当の「コミュニティと音楽文化」（専門基礎科目、1年次配当、半期、必修1単位）のためのテキスト、及び音楽科指導法・表現（音楽）の参考資料として作成。幼稚園や小学校での音楽を通した学びが地域の文化とつながり、やがて地域文化力の基盤となっていくための発達に応じた指導法について言及。 学校と地域との交流としてのゆるやかな連携だけでなく、幼児期の遊びや音楽科の授業をより豊かにするための外部連携を取り入れた指導法ついて、保・幼・小各校種別の実践からアプローチしたもの。特に、地域の教育力を学校内で生かしていくことは、子どもたちにとって学びの機会をより豊かにすることにもなる。編者として関わると共に、各校種別の発達段階に応じた連携事例に基づく指導法について執筆。実践的応用力が得られるように工夫した。編著者：山本美紀、著者：伊崎一夫、大久保充代、寺尾正、中村滋延、根岸一美、御園綾菜【A5判　全105ページ】（山本美紀：5-8,20-33,51-61, 63-82;表作成,85-88,101-103頁）
・『人間教育としての音楽科教育 ―知覚・感受から共感へ』（再掲）山本美紀 著　ヨベル社	平成27年9月～現在に至る	奈良学園大学人間教育学部の専任准教授として担当の「音楽科指導法」（コア科目、2年次配当、半期、必修2単位）に合わせ、さらにこの数年でより具体化した学習指導要領と授業内容をふまえた音楽科指導について、人間教育の視点に立った指導法の解説を行う。 特に、現行の音楽科学習指導要領において問題となっている「知覚」「感受」の解釈と実践に焦点を当て、音楽用語としての独特な位置づけから、互いのコミュニケーションへとつなぐために「共感」をキーワードとし、音楽だからこそできる「人間教育」としての音楽科指導を示す。 【A4版全123頁＋別冊課題48頁】
3　教育上の能力に関する大学等の評価		
・大阪キリスト教短期大学神学部「教会音楽講義」 学科責任者による授業評価 ・大阪キリスト教短期大学専攻科神学専攻「教会音楽演習」 学科責任者による授業評価	平成19年4月～平成20年3月（隔年開講） 平成20年4月9月 （隔年開講）	山本美紀講師は、平成18年10月より、神学科において「教会音楽」（半期）を担当し、平成19年4月からは、専攻科神学専攻において、「教会音楽演習」（通年）をも担当している。聖書の時代から現代に至るまでの教会音楽の歴史に通暁しており、研究に裏打ちされた優れた講義を行っている。またオルガンの奏法や、讃美歌・聖歌の編曲と合唱など、実技指導にも優れた能力を発揮している。授業に対する学生の評価も高いものがある。大学の教育として、高い教育効果があると思われる。
・関西学院大学神学部「キリスト教と音楽」 平成 20 年度秋学期　学生による「授業に関する調査」結果より（５ポイント満点）	平成 20 年 10 月～平成 21 年3月	１．出席状況：4.1 ２．授業の学習目標が明確：4.9 ３．シラバスに合致：4.7 ４．話し方が聞き取りやすい：5.0 ５．授業での作業量が適当：4.7 ６．内容理解のための授業方法の工夫があった：4.7 ７．担当者の熱意を感じた：5.0 ８．全体として満足：4.9

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項		
事項	年月日	概　　要
・環太平洋大学次世代教育学部「音楽科教育法」 「授業評価アンケート」より（4ポイント満点）	平成23年9月	受講生：154名クラス数：2クラス（2コマ） １．資料及び白板や教育機材の使用は適切：3.39 ２．毎週の学習目標は明確：3.30 ３．話し方は明瞭で、声量も適切で聞き取りやすい：3.46 ４．質問したり、意見を述べたりする配慮：3.23 ５．授業の進度や説明は適切：3.34 ６．授業への参加意欲が促されるような工夫がされていた：3.34 ７．教員の授業に対する熱意が感じられた：3.36 ８．この授業は適切な方法で展開され、興味を持つことができた：3.29 ９．この授業で有用な知識やスキルを習得できた：3.38 10．この授業では私語・居眠り・携帯電話などの迷惑行為はほとんどなかった：3.35 11．この授業は開始・終了時のあいさつを含めきっちりと行われていた：3.46 12．この授業はわかりやすかった：3.29 13．総合的に見てこの授業は満足でき、受講を後輩に勧めたいと思う：3.30
・環太平洋大学次世代教育学部「表現B（音楽表現）」 「授業評価アンケート」より（4ポイント満点）	平成24年3月	受講生：99名クラス数：2クラス（2コマ） １．資料及び白板や教育機材の使用は適切：3.21 ２．毎週の学習目標は明確：3.33 ３．話し方は明瞭で、声量も適切で聞き取りやすい：3.30 ４．質問したり、意見を述べたりする配慮：3.27 ５．授業の進度や説明は適切：3.24 ６．授業への参加意欲が促されるような工夫がされていた：3.18 ７．教員の授業に対する熱意が感じられた：3.39 ８．この授業は適切な方法で展開され、興味を持つことができた：3.28 ９．この授業で有用な知識やスキルを習得できた：3.36 10．この授業では私語・居眠り・携帯電話などの迷惑行為はほとんどなかった：3.43 11．この授業は開始・終了時のあいさつを含めきっちりと行われていた：3.40 12．この授業はわかりやすかった：3.18 13．総合的に見てこの授業は満足でき、受講を後輩に勧めたいと思う：3.18
・奈良学園大学人間教育学部「音楽の理解」 「授業評価アンケート」より（4ポイント満点）	平成27年3月	講義内容・方法：3.29 総合的満足度：3.44
・奈良学園大学人間教育学部「音楽の世界」 「授業評価アンケート」より（4ポイント満点）	平成27年3月	講義内容・方法：3.53 総合的満足度：3.83

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項		
事項	年月日	概　　要
4　実務の経験を有する者についての特記事項		
・地域の公的機関等との連携による教育活動 京都フィルハーモニー室内合奏団 プロジェクト会議メンバー	平成22年1月より現在まで	京都フィルハーモニー室内合奏団の「子どものためのコンサートシリーズ」拡充にあたってのプロジェクト会議。ここでの内容が、コンサートに反映されていくものである。企画会議メンバーとして、子どもの発達に応じた、地域の教育機関としてのオーケストラの在り方について、提言する。 第1回：平成22年1月7日 第2回：平成23年3月17日 第3回：平成23年8月5日
・免許更新講習（幼稚園教諭免許）	平成23年7月25日 平成24年8月23日	幼稚園教諭免許更新に関する講習会を実施。わらべ歌を用いた音楽表現活動や、様々な楽器を用いた表現活動、ボディーパーカッションによる音楽表現などについて、即実践可能な講習を行う。音楽的技能だけでなく、身の回りの様々な素材に着目した講習内容であり、満足度の高い授業として受講者の多い科目である。
・平成 23 年　芦屋フォーラム「確かな学力とこころの教育－新教育課程とその実践－」 （於）芦屋市立宮川小学校 主催：非営利特定団体　人間教育研究協議会 教科部会「音楽」コーディネーター	平成23年8月12日	「音楽」部会コーディネーターとして、発表者の選定ほか運営を行う。コーディネーター発表主題：音楽科教育における地域連携の可能性をさぐる　―広がる教室とこころの育ち ―
・備前市立西鶴山小学校（岡山県教育研究会　音楽部会 研究指定校）スーパーバイザー 研究授業テーマ「音楽科教育と他教科連携」	平成24年4月1日～25年3月31日	岡山県教育研究会音楽部会研究指定校である備前市立西鶴山小学校スーパーバイザーに就任。校内研修・研究授業などにおいて指導助言を行う。「音楽科教育と他教科連携」をテーマに、地域の教育資源としてのアウトリーチの活用と育成、また学校によるコンサートホールや美術館博物館など公共施設の活用について指導助言を行うとともに、施設の学校対応について具体的な提案を行い、両者のコーディネートに携わる。 校内研修会講師：平成24年4月24日、6月 8日、6月29日、平成25年2月27日 研究指導助言：平成24年10月25日、平成25年1月8日（於：環太平洋大学）、 公開研究中間発表会 講師：平成25年2月27日 公開研究大会：平成25年11月6日

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項		
事項	年月日	概　　要
・備前市立西鶴山小学校　PTA 主催 教育講演会 「希望となる音楽 ―人種差別を超えて」	平成25年1月17日	備前市立西鶴山小学校　PTA 主催による講演会であると同時に、6年生・5年生の「道徳」と「音楽」の授業時間に相当するものとして計画された。 児童が日ごろあまり触れる機会のない、他国の人権問題としてアメリカの人種問題をとりあげ、「ゴスペル」と言われるジャンルのうち、人種問題に付随した形で発展してきた「黒人霊歌（ブラック・スピリチュアル）」について講演する。公演では途中に代表的な「ゴスペル」の鑑賞・体験としてのワークショップを取り入れた。地元放送局・新聞社にとりあげられる。
・研究実践授業 「音楽から生まれるダンス―ダンスはどんなふうに生まれるの？」	平成25年2月15日	科学研究費補助金 基盤研究 B による、研究実践授業。備前市立西鶴山小学校 3 年生の児童を対象に、来年度の校内コンサートに向けて、作品理解を深めるための事前指導として行う。 ＜内容構成＞ ・レクチャー　物語から音楽へ 『ももたろう』のルーツとも言われているインドの民話『ラーマヤナ』の物語と、それをもとに生まれた弦楽四重奏曲『ソヴァン・マチャ』を紹介し、子どもたちの身近な物語と、弦楽四重奏曲をつなぐ。 ・ワークショップ　音楽から生まれるダンス 実際に弦楽四重奏曲『ソヴァン・マチャ』から生まれたダンスを映像で観た後、第 3 学年音楽科教科書にあるビゼー作曲「アルルの女」より≪鐘≫を鑑賞した後、音楽のイメージからダンスを創作する。
・地域の公的機関等との連携による教育活動 日本フリーメソジスト教団教職研修会 「メソジストの伝統と讃美」	平成 25 年 6 月 17 日:京都ロイヤルホテル	日本フリーメソジスト教団教職に対しての講義。英国国教会を起源とするメソジスト派の音楽の伝統を、キリスト教における讃美の歴史から説き起こす。現在問題となっているエキュメニカルと讃美歌の課題と、信仰的伝統とのバランスなどについて、伝道の最前線にあるアクチュアルな議論として展開した。 対象：日本フリーメソジスト教団教師
・地域の公的機関等との連携による教育活動 アウトリーチ型ワークショップコンサート「せかいりょこう」（再掲）	平成 25 年 6 月 20 日:社会福祉法人 日本コイノニア福祉会　円町まぶね隣保園 平成25年6月25 日:社会福祉法人　京都地の塩会　光の子保育園	実践研究の一環として、地域の保育園と演奏団体と連携し、ワークショップ型のコンサートを企画した。コンサートでは、日常の園での表現活動を重視し、日頃からなじみある歌をきっかけに、世界と園児とをつなぐ音楽表現の充実を、プロの演奏家の演奏によって実現した。コンサート中には楽器の体験も行い、すべての園児たちがヴァイオリンに触れる機会となった。コンサート後には、演奏会の印象を園児たちに絵で描く時間が設けられ、それぞれが音楽を聴いた思いを絵に描いた。 対象園児：5 才児　30 名、演奏曲目：国際急行列車、スペインの踊り、金婚式、タイスの瞑想曲他 出演者：森本真裕美（京都フィルハーモニー室内合奏団、ヴァイオリニスト）

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項		
事項	年月日	概　　要
・地域の公的機関等との連携による教育活動 ストリングスストーリー　―がっきで、からだで、おはなししよう！（再掲）	平成 25 年 8 月 12 日：岡山県立美術館ホール	公立小学校（備前市立西鶴山小学校）と地域の文化施設（岡山県立美術館）との連携実践研究として企画した弦楽四重奏コンサート。西鶴山小学校の全生徒と、その保護者や家族を対象としたもの。「喜怒哀楽」をキーワードとしたコンサートでは、小学校音楽科鑑賞教材で既習の作品の他、事前授業で学んだ現代音楽で中村滋延作曲≪ソヴァン･マチャ≫を、映像・ダンスと共に鑑賞した。後のアンケートで、あらかじめ事前授業でコンサート内容を理解した子供たちが、音楽で表現された内容を深く読み取り、積極的な音楽聴取につなげていた。保護者からは、生の弦楽四重奏をコンサートホールで家族で聴く機会が持てたと、好評を得た。 対象児童：西鶴山小学校生と引率教員、保護者 演奏曲目：ワルツィングキャット、天国と地獄、ソヴァン・マチャ 出演者：京都フィルハーモニー室内合奏団、 奥祥子（ダンス）中村滋（映像）
・地域の公的機関等との連携による教育活動 日本フリーメソジスト教団女性の集い 「メソジストの伝統と讃美」 ①　西部地区 ②　中部地区	①平成 25 年 7 月 5 日：明石上の丸教会 ②平成 25 年 11 月 14 日：桜井聖愛教会	日本フリーメソジスト教団女性のつどいにおいての講演。メソジストの讃美の伝統を、キリスト教における讃美の歴史から解説。ジェンダーやフェミニズム、マイノリティーへの眼差しなど、現代的課題が歌い込まれている讃美歌を中心に紹介。讃美歌の今日的意義について講演を行う。 対象：日本フリーメソジスト教団女性部
・地域の公的機関等との連携による教育活動 三郷町公開セミナー（三郷町村役場） 「地域と大学をつなぐボランティア・ワークの可能性」	平成 26 年 10 月 10 日	本セミナーでは、学校と地域との連携による教育の在り方について、「ボランティア」をキーワードに講演を行った。具体的な事例として、〈持続可能な地域文化力〉を高めることに寄与する地域連携による芸術教育プログラムをとりあげ、ボランティアとは何か、受け入れる際の注意点や、確認すべきこと柄など、実際のケースに応じた内容から、地域との連携による教育的可能性の広がりについて解説した。
・地域の公的機関等との連携による教育活動 展覧会シンポジウム・パネリスト 『會舘の時代　－中之島に華開いたモダニズムとその後』（東京大学 比較文学比較文化研究室、表象文化論研究室主催） 山本美紀「朝日会館から大阪フェスティバルホールへ　アウセイ・ストローク　－文化装置のデザイナーとしての音楽マネージャー」	平成 27 年 3 月 14 日	1926 年から 1962 年までかけて存在した「大阪朝日会館」とその機関誌『會舘藝術』の、関西のモダニズム運動をけん引した働きについてのシンポジウムと展覧会。その中で、文化施設・機関雑誌として、社会的に果たした教育的役割と啓蒙的役割、またその後の大衆文化との関連性について解説を行う。特に音楽マネージャーと日本人スタッフによって達成された地方公演は、遠征地での児童たちとの関わりを可能とし、洋楽受容をより身近なものとして受け止めることを可能にした点に注目した。
・トーク・イベント 「中之島 3 丁目 時代と建築の響き合い『よみがえる朝日会舘』」主催；朝日ファミリー・ニュース、後援；朝日新聞社、協賛；竹中工務店、関電工、高砂熱学工業、協力；朝日ビルディング	平成 27 年 8 月 28 日	登壇者として参加。関西モダニズム運動の牙城となり、建築としても特徴的な朝日会館そのものに焦点をあてたトーク・イベント。研究会の成果を広く社会に知らせる目的も同時に持っていた。基調講演では特に、朝日会館で行われた子供の教育に関するプログラムについて言及し、地域の教育・文化施設として朝日會舘が果たしていた役割、さらに運営方法について、芸術的内容と共に解説を行った。＜登壇者＞前島志保（東京大学准教授）、山本美紀（奈良学園大学准教授）、山上揚平（東京芸術大学講師）ほか

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
・地域の公的機関等との連携による教育活動 日本フリーメソジスト教団 信徒伝道者養成講座 ②礼拝と讃美－奏楽者の心得Ⅰ「『讃美の共有』のために」	平成28年7月23日：桜井聖愛教会	日本フリーメソジスト教団信徒伝道者養成のための連続集中講義第1回（全2回）。 キリスト教における讃美の意味、および信仰共同体としてのメソジストとその讃美の伝統について、音楽史的視点と公共性との観点から解説する。また、今日的課題に応えようとする新しい讃美の動向について紹介した。
・地域の公的機関等との連携による教育活動 日本フリーメソジスト教団 信徒伝道者養成講座 ②礼拝と讃美－奏楽者の心得Ⅱ「『讃美の共有』のために」	平成28年11月26日	日本フリーメソジスト教団信徒伝道者養成のための連続集中講義第2回。 9月10日に開催された賛美歌学会第16回でのパネルディスカッションで話し合われた内容をふまえ、現代の讃美歌に託された期待と、現代的課題について解説。キリスト教信仰における讃美の伝統と、近代以降の「共に歌うこと」の意味を比較し、現代における讃美と共同体について講義する。

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1　資格、免許 ・中学校教諭 第一種免許	平成3年3月31日	音楽　平二中一第 1740号 兵庫県教育委員会
・高等学校教諭 第一種免許	平成3年3月31日	音楽　平二高一第 1882号 兵庫県教育委員会
・中学校教諭 専修免許	平成10年3月31日	音楽　平9中専第2176号 大阪府教育委員会
・高等学校教諭 専修免許	平成10年3月31日	音楽　平9高専第2223号 大阪府教育委員会
・修士（芸術）	平成10年3月24日	大阪教育大学　第2258号 論文題目：音楽企画－舞台裏の詩学－
・博士（文学）	平成14年9月17日	大阪大学　第17270号 論文題目：聖化する音楽祭－グロカリゼーションとしての祝祭研究－
2　特許等 なし		
3　実務の経験を有する者について特記事項 ・国際日本文化研究センター 共同研究員	平成15年6月～現在に至る	鈴木敏美氏の研究班「近代中国東北部（旧満州）文化に関する総合研究」及び「出版と学芸ジャンルの編成と再編成 －近世から近代へ」等に参加。共同研究員として関連研究会に出席。
・歌詞対訳 ベートーヴェン：交響曲第9番　ニ短調　Op125 第4楽章「歓喜によせて」＊京都市交響楽団 第557回　定期演奏会　パンフレット	平成23年12月	京都市交響楽団委嘱：自主第九公演用初の新対訳を作成。ハインリヒ・フォン・シラー作　「歓喜によせて」 平成24年～27年コンサートでも再掲。
・歌詞対訳 京都市交響楽団ニューイヤーコンサート＊京都市交響楽団 第550回　定期演奏会　パンフレット	平成24年12月	京都市交響楽団委嘱：ヨハン・シュトラウス（息子）作　「こうもり」より≪公爵様、あなたのようなお方は≫（アデーレのアリア）新対訳作成
・奈良学園大学　国際交流委員として、2015年東アジア文化交流研修　実施。 場所：大韓民国　東亜大学校　富民洞キャンパス（釜山）	平成27年11月1日-3日	学生引率、及び研修会にて学生の発表指導を行う。 また、東亜大学校において東アジア文化交流会の実施に立ち会う。

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項		
事項	年月日	概　　要
４　その他		
・論文の引用実績（被参照／引用実績） 森山貴仁・川本彩花・野島那津子「メディアによる文化的公共圏の再編成 ―戦後における音楽祭の日米比較を中心に―」京都大学グローバル COE『親密件と公共圏の再編成をめざすアジア拠点』次世代研究 26 GCOE ワーキングペーパー	平成 22 年 9 月	＜被参照／引用文献＞ 山本美紀 論文「戦後の国際日本における国際音楽祭の受容に関する一考察」（「研究業績等に関する事項」【学術論文】8） 山本美紀 博士学位論文『聖化する音楽祭―グロカリゼーションとしての祝祭研究―』　（「研究業績等に関する事項」【学術論文】6）
・論文の引用実績（被参照／引用実績） 前川 公美夫『明治北海道映画史』	平成 24 年 3 月	＜被参照／引用文献＞ 山本美紀 論文「興行としての宣教」国際日本文化研究センター（「研究業績等に関する事項」【学術論文】9）

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（著書） 1. 小学校で培う音楽の力 ―共感する心を育てる	単著	平成 22 年 12 月	ヨベル社	音楽科教育法講義の際に使用されることを想定し、作成。音楽科教育史および、学習指導要領実現のための授業実践について解説を行う。また、授業実践に必要な知識としての楽典および、技術としての指揮法、合唱指導法、編曲法などについても扱った。さらに、各学年の学習指導要領内容のポイントを、実際の授業における単元（題材）とつなげて解説を行い、指導案作成について解説している。小学校で培う音楽の力と共に、共感する心を育てることに通じる、音楽教育における言語活動の充実についても言及する。【B5 判　全 96 ページ＋別冊課題 48 ページ】。
2. 教育フォーラム 47 ＜こころ＞を育てる	共著	平成 23 年 2 月	金子書房	心を育てることの意味と、どのような指導が必要であるかについて論じた論文集。 本人担当部分：**「共感する心を育てる音楽科教育ー音楽の力とこころの育ち」**【pp. 60-69：単著】では、これまで音楽が「物語」と「体験」とどのように結び付けられ、何が達成されてきたのか、歴史的に論じる。次に、執筆時点で筆者が研究課題として取り組んでいた「体感型読書」（平成 22 年度科学研究助成対象研究課題）における、音楽を「物語」と「体験」に結びつけるための、初等から小学校音楽科教育までの実践を紹介し、幼稚園から小学校にかけて音楽が連続的に「心を育てる」ことにつながるための指導法について論じたもの。 共著者：梶田叡一、加藤明、渡邉満、松田智子、鎌田首治朗、山本美紀、中村哲、大野光二、高橋真里、江渕弘明、蔵あすか、中家淳悟、増尾慶裕【A5 判　全 157 ページ】
3. 教育フォーラム 48 国際教育の課題と展望	共著	平成 23 年 8 月	金子書房	国際教育の意義と、その指導について論じたものである。本人担当部分：**「音楽教育を通じて異文化理解教育をーウィグモア・ホールの教育プログラムに学ぶ」**【pp. 103-116：単著】では、ロンドンにあって地域密着型のホールとして、幼児から生涯教育まで、スパイラルに展開するウィグモア・ホールの芸術教育実践を紹介。地域の文化施設の教育実践の実態とともに、そこと連携していくためのカリキュラム上の工夫を初めとした方法論について論じた。特に、移民の多いロンドンにあって、音楽が様々な文化をつなぐものとして、学校でのグローバル教育・インクルースヴ教育などの一翼を担っていることに注目し、音楽を通しての異文化理解教育について、幼児期における表現教育の持つ可能性について考察した。共著者：梶田叡一、加藤明、見上一幸、松田智子、松田公平、鎌田首治朗、前田洋一、川﨑由花、古川治、善野八千子、筒井愛知、山本美紀、河上隆一、湯峯裕、汐海治美、渡部久美子【A5 判　全 174 ページ】

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
4. 幼児教育・初等教育のための音楽基礎知識と表現－音楽でつむぐ学びの歳時記	共著	平成 23 年 10 月	ヨベル社	幼稚園教育及び、小学校音楽科教育に共通して必要かつ基本的なソルフェージュ知識や、弾き歌い、表現指導について解説したもの。掲載楽曲は幼児教育や保育の現場でよく歌われたり演奏されたりする音楽作品を中心に取り上げた。また幼少連携を意識して「小学校音楽科共通教材」の音楽も掲載し、この１冊で、幼稚園教諭にとっては小学校での学びを意識した表現指導に、また小学校教諭には保育園・幼稚園での五領域「表現」の既習内容をふまえた教育ができるように配慮されている。また音楽に関する学校行事運営において、必須項目についても解説を行い、１年間の学校生活や行事に沿った構成となっている。各該当月に使用されることを想定し作成した。さらに、幼稚園要領の「表現」について、具体的な曲を、発達との関連性を意識して内容を解説。指導案作成へとつなげられるようにしている。全体レイアウト、及び音楽に関する項目【pp. 7-9, 12-15, 18-21, 24-27, 30-33, 36-39, 42-45, 48-51, 54-57, 60-63, 66-69, 72-75, 78-81, 84-87, 90-93, 96、別冊課題：全 21 ページ分：単著】について執筆。 共著者：山本美紀　岡田美紀【B5 判　全 157 ページ＋別冊課題 23 ページ】
5. 教育フォーラム 49 特集　確かな学力を育てる確かな授業	共著	平成 24 年 2 月	金子書房	確かな学力を育むということの意味と、どのような指導が必要であるかについて論じたものである。本人担当部分：**「ウィーンにおける音楽科教育にみる光と影　―「夢の街」が夢から醒めるとき―」**【pp. 128-139：単著】ウィーンにおける、地域密着型音楽ホールでの教育プログラムの調査に基づき、劇場や演奏団体が行っている教育プログラムの実例を提示すると共に、分析を行う。本論稿の特徴は、教育プログラムを受け入れ、授業に活用している学校を中心に調査を行ったことである。学校の教師が、どのようにホールや文化施設での教育プログラムを生かし授業に利用しているのか、実態を示すとともに、指導法について解説を行った。また、日本で実際に運用する場合、現時点で障害となっている事柄を整理し、外部の演奏団体や文化施設などといった文化資源を音楽科カリキュラム上で運用するための方法論について論じた。共著者：梶田叡一、加藤明、田中博史、鎌田首治朗、長谷浩也、阿部秀高、金澤孝夫、横須賀薫、高岡信也、古川治、山本美紀、渡邉規矩郎【A5 判　全 150 ページ】
6. 【改訂新版】小学校で培う音楽の力―共感する心を育てる	単著	平成 24 年 4 月	ヨベル社	前刊で実際に音楽科教育法講義の際に使用したことをふまえ、内容に編曲された楽譜、および図表解説を追加。さらに授業に必要な知識としての楽典および、技術としての指揮法、合唱指導法、編曲法などについての解説を強化した。また、各学年の学習指導要領内容のポイントを、実際の音楽教育現場の単元とつなげて解説を行い、指導案作成についてより具体的な解説を行う。指導案作成用の課題プリントを添付。実際に指導案作成→模擬授業実施→ふりかえりが行える内容となっている。【B5 判　全 123 頁＋別冊課題 48】

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
7. ヨベル新書4 メソディストと音楽 － 現代讃美歌の源流と私たちの讃美 －	単著	平成24年6月	ヨベル社	メソディストとは、イギリス産業革命時代、社会の激変によって崩壊するコミュニティに、新しい讃美歌をもって新しいコミュニティ形成に成功した英国国教会の一派である。リーダーとなったジョン・ウェスレーの「讃美の手引き」、及び使用した讃美歌集に注目し、専門的音楽教育を受けていない大衆に対して、どのような音楽指導がとられたのか分析した。その結果、楽譜は旋律想起のきっかけとして機能する一方で、規定された歌唱方法によって連帯感が生まれ、共に歌うことによって歌詞の意味が集団内でより強化されて定着する過程を明らかにした。 ＊明治期に日本において今日に残る多くのミッション系学校の創設に関わったオルチンによる、音楽活動及び音楽教育活動をまとめた「興行としての宣教― G.オルチンによる幻燈伝道をめぐって」を収録。【新書版全124頁】
8. 【改訂新版】幼児教育・初等教育のための音楽基礎知識と表現－音楽でつむぐ学びの歳時記＜伴奏譜・楽器解説付き＞	共著	平成25年3月	ヨベル社	幼稚園における自発的音楽表現や遊びと、小学校音楽科教育指導とに共通して必要とされる基本的なソルフェージュ知識や、弾き歌い、発達に応じた指導法について解説したもの。特に、新版では保育園・幼稚園や小学校での行事に用いられることの多い楽器類について、正しい取扱い説明と指導の際の留意点などを明記した項目を追加。 掲載楽曲は、保育・幼児教育の現場でよく活用される音楽作品を中心に取り上げた。また幼少連携を意識して「小学校音楽科共通教材」の音楽も掲載し、この1冊で、幼稚園教諭にとっては小学校での学びを意識した表現指導に、また小学校教諭には保育園・幼稚園での五領域「表現」の既習内容をふまえて指導ができるように配慮されている。また音楽に関する学校行事運営において、必須項目についても解説を行い、発達段階に応じて連続して1年間の学校生活や行事を発展的に捉え、力を伸ばし学びが達成できるような構成となっている。さらに、幼稚園要領の「表現」について、手遊びや遊びなど具体的に曲を挙げ、発達との関連性を意識して内容を解説。指導案作成へとつなげられるようにしている。全体レイアウト、及び音楽に関する項目を執筆。 【　pp.7-9,12-15,18-21,24-27,30-33,36-39,42-45,48-51,54-57,60-63,66-69,72-75,78-81,84-87,90-93,96、別冊課題：全32ページ分）：単著】。 共著者：山本美紀　岡田美紀、筒井はる香 【B5判　全175ページ＋別冊課題32ページ】

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
9. 絵本がひらく＜体感型読書＞の世界	共著	平成25年3月	ERP 文庫	本書は、学校教育の中や図書館などでこれまで行われてきた従来の「読み聞かせ」による読解力や表現力の育成を一歩進め、幼児や、児童生徒の互いの共感力をスパイラルに育成していくために、「体感型読書」の導入を進める手引書である。本人担当部分：幼稚園での表現遊びに使える音楽と絵本の組み合わせ等、音楽に関する記述。【pp. 20-25、27-48：担当執筆】近代日本の国語科教育（読本）と連携してきた音楽科教育（唱歌）との関連性から、音楽を用いつつ五感を使って読み聞かせをあじわう方法とともに、その実践報告を含んでいる。小学校の国語科教材と音楽科教材「音楽劇」の連携を含め、現場で導入しようとする教師にとっても、参考になるよう構成されているものである。 編著者：伊崎一夫、山本美紀、ライナーノーツ：山口聖代【A5 判　全 62 ページ】
10. 『教職表現力ノート』（再掲）西辻正副／山本美紀編著 奈良学園大学（平成 27 年 4 月）【全 123 頁＋別冊課題 48 頁】	共著	平成27年4月	奈良学園大学	奈良学園大学人間教育学部の専任准教授として担当の「教職表現力演習Ⅰ」（専門基礎科目、1 年次配当、半期、必修 1 単位）のためのテキストである。新聞のコラムをはじめとした模範的文章の書きとり、語彙力をきたえるための項目、より深く記事を読み込むための要約演習ページを含み、さらに担当講師人による講義用のレジュメのページからなる。本教材により、大学生にふさわしい基礎的な日本語運用能力を鍛えると共に、それらを教員の言葉としてつなげる工夫が行われている。 編者として関わると共に、音楽に関するミニレクチャーの項目について執筆。人の話を聴いて、必要な情報を獲得していけるよう、実践的学びができるように工夫した。 編著者：西辻正副、山本美紀、共著者：岡村季光、高木悠哉、岡野聡子、松井典夫【A4 判　全 142 頁】（山本美紀：2-63, 108-109）
11. 『音楽教育から地域の文化力へ－イメージをつむぐ』（再掲）山本美紀編著　株式会社 ERP	共著	平成27年7月	株式会社 ERP	奈良学園大学人間教育学部の専任准教授として担当の「コミュニティと音楽文化」（専門基礎科目、1 年次配当、半期、必修 1 単位）のためのテキスト、及び「音楽科指導法」「表現（音楽）」の参考資料として作成。幼稚園や小学校での音楽を通した学びが地域の文化とつながり、やげて地域文化力の基盤となっていくための発達に応じた指導法について言及。 学校と地域コミュニティとの交流としてのゆるやかな連携だけでなく、幼児期の遊びや音楽科の授業をより豊かにするための外部連携を取り入れた指導法ついて、保・幼・小各校種別の実践からアプローチしたもの。特に、地域の教育力を学校内で生かしていくことは、子どもたちにとって学びの機会をより豊かにすることにもなる。編者として関わると共に、各校種別の発達段階に応じた連携事例に基づく指導法について執筆。実践的応用力が得られるように工夫した。編著者：山本美紀、著者：伊崎一夫、大久保充代、寺尾正、中村滋延、根岸一美、御園綾菜【A5 判　全 105 ページ】（山本美紀：5-8, 20-33, 51-61, 63-82；表作成, 85-88, 101-103 頁）

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
12.『音楽祭の戦後史』	単著	平成27年8月	白水社	本書は、戦後 70 年を「音楽祭」をキーワードに振り返り、音楽祭における教育的意義とともに、地域における音楽祭を中心とした共同体意識の創生のメカニズムを読み解くものである。さらにそこから、現代社会に出現したバーチャル世界の共同体意識の創生の比較検討を通し、共同体意識と文化創生、教育との関係を現代的課題と共にとらえた。昔からある伝統行事である「祭り」は、自動的に各人にとっての「祭り」になるわけでも、自分たちの「故郷」になるわけでもない。 本書は、グローバル化をはじめ、変化の激しい現代において、場（地域）と不可分なはずの「祭り」の現代的条件を探り、地域とは、共同体とは何か、改めて問うものとなっている。 書評として『日本教育新聞』2015 年 10 月 12 日付、『日経新聞』「短評」2015 年 10 月 18 日付、『北海道新聞』「本の森」2015 年 11 月 8 日付等に取り上げられた。 【A5 版全 250 頁】
13.『人間教育としての音楽科教育 ―知覚・感受から共感へ』（再掲）山本美紀 著 ヨベル社（平成 24 年 4 月出版）【全 123 頁＋別冊課題 48 頁】	単著	平成27年9月	ヨベル社	奈良学園大学人間教育学部の専任准教授として担当の「音楽科指導法」（コア科目、2 年次配当、半期、必修 2 単位）に合わせ、さらにこの数年でより具体化した学習指導要領と授業内容をふまえた音楽科指導について、人間教育の視点に立った指導法の解説を行う。 特に、現行の音楽科学習指導要領において問題となっている「知覚」「感受」の解釈と実践に焦点を当て、音楽用語としての独特な位置づけから、互いのコミュニケーションへとつなぐために「共感」をキーワードとし、音楽だからこそできる「人間教育」としての音楽科指導を示す。 【A4 版全 123 頁＋別冊課題 48 頁】
14.『＜戦後＞の音楽文化』	単著	平成28年1月	青弓社 （全 80 頁）	「戦後 70 年」となる年に、戦後の社会がどのような変遷を遂げてきたのか、またその社会の中で音楽文化がどのように息づいているのかを明らかにするために、様々なキーワードで網羅した事典において、項目「音楽祭・フェスティバル」、コラム「音楽ホール」をそれぞれ担当。社会教育的観点から執筆。 編著者：戸ノ下達也 （山本美紀、pp. 228-230, pp. 259-260）

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
(学術論文) 1. 「現代に生きるメソジストと音楽―グローバル・ソングGlobal Song（グローバル・ヒムノディGlobal Hymnody)の視点から ―」（査読有り）	単著	平成20年2月	『ウェスレー・メソジスト研究』第8号（ウェスレー・メソジスト学会）pp.67-80	「歌うメソジスト」と言われたメソジストの指導者であったジョン・ウェスレーにとって、讃美歌の歌詞とその歌唱方法は、音楽的素養の無い民衆に対してなされたものである。本稿は、このようなメソディストの讃美歌の伝統を踏まえ、『Global Song』『Global Hymnody』を手がかりに、メソジストのエキュメニカルな展開を考察した。『Global Song』『Global Hymnody』では、土着の、あるいは伝統的旋律を用いたものや、それを現代的な旋律に翻案したものなど、様々な試みが展開し、地域文化を尊重した讃美歌創作へとつながっている。信徒教育の意味を持ったメソディストの讃美歌には、社会の構成員として求められる道徳心や規範意識が盛り込まれており、日本における唱歌教育の目標と重なる点は多い。本稿では、ウェスレーの歌唱指導の理念と彼が編纂した歌集を、唱歌の活用と比較し分析を加えた。
2. 「群れを導く歌―初期メソディストにおける讃美歌の意味―」(査読有り)	単著	平成22年3月	大阪大学大学院文学研究科 文化表現論 音楽学 『阪大音楽学報』第8号 pp.165-180	英国国教会司祭ジョン・ウェスレー（John Wesley 1703-1791）は、彼を指導者とした信仰復興運動メソディズムMethodismにおいて「歌うメソディスト」と揶揄されるほど、あらゆる機会に歌うことを勧めた。彼は、讃美歌の歌詞とその歌唱方法の指導によって信徒を教育し、一方信徒は、歌うことで信仰を表明するだけでなく、共同体の一致を、実感・実現していたのである。本研究では、讃美歌に反映された道徳心や規範意識を分析し、新たな共同体を形成していく過程において「歌うこと」が果たした役割を明らかにした。
3. 「会衆歌と公共性―ウェスレーの宗教体験と初期メソディストの讃美歌を巡って―」	単著	平成22年3月	環太平洋大学『紀要』第3号 pp.79-90	メソディストは、産業革命によって社会構造が激変する中、地方からの労働者を中心に新たな絆で結ばれ、社会現象ともなった信仰復興運動であるメソディズムMethodismを推進したグループである。指導者ウェスレーにとって、讃美歌の歌詞とその歌唱方法は、信徒教育の意味を持ち、その讃美には、社会の構成員として求められる道徳心や規範意識が反映され、新しい時代の「公共圏」の創造に大きな役割を果たした。本論ではウェスレーの歌唱指導の理念を、教育的配慮と「公共性」の視点から考察した。初期メソディストの讃美歌の歌詞に注目し、「共に歌うこと」による歌詞内容の理解の強化を明らかにした。

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
4. 音楽科教育における他分野教育との連携への考察:音楽と物語― 展覧企画『木を植える人』から体感型読書『スイミー』へ―	単著	平成23年3月	環太平洋大学『紀要』第4号 pp.57-64	本論稿は、「体感型読書」プログラムの構築 に関わる、実践報告及び「体感型読書」構想に至る、これまでの筆者の研究実践「展覧企画」プロジェクトとの関連性を明確にしようとするものである。「体感型読書」とは、「音声言語を主とする従来の語り手に対して、音楽・映像等の情報を付加し多様な表現活動を保障すること」と、「受動的になりがちな聞き手に対して、物語の再創造の保障と聞き手同士の関わりを活性化すること」の両面が成立する双方向の読書活動である。本論考では、実際に小学校で行った音楽科教育内での教育実践をふまえ、物語と音楽、さらにそこから広がる子どもの発達段階に応じた言語活動について論じた。能動的な物語の受け止めを可能にする「体感型読書」プログラムの構築により、音楽科教育と他分野教育との連携から生まれる言語活動の充実の教育効果について述べ、指導方法における課題と今後の展望について示した。
5. The Study for The digital Teaching Materials which used “Warabe-uta” into Music Education of Japan. ― The Outlook and The Issues ― (Full Paper)(査読あり)「わらべ歌」を音楽教育に用いたデジタル教材に関する研究－展望と課題－	共著	平成23年3月	SITE 2012--Society for Information Tecnology & Teacher Education International Coference 2012In Austin Texas Association for the Advancement of Computing in Education p.153	本稿は『「わらべ歌」を用いたデジタル教材の活用』についての論文である。「わらべうた」とは伝統的な子供の遊び歌であり、非常に少ない音による単純な構造を持つ。「わらべ歌」を音楽教育に導入することにより、教師はピアノをはじめとした特別な音楽の技術や技能を必ずしも要することなく、音楽の授業を進めていくことができるという利点がある。一方、日本のデジタル教材の開発は、十分に研究が進んでいるとは言い難い。本人担当部分：「わらべ歌」導入についての実態調査と分析、論文執筆。大阪教育大学寺尾研究室で作成された当該教材について、現場での使用の実態を調査し、日本における全体的なデジタル教材の普及率と比較検討を担当した。同時に、今後の課題を示すと共に、幼児から初等教育への連続して子供の力を伸ばすデジタル教材の活用についても提案事例を示し論述した。共著者：山本美紀、寺尾正、竹下裕来【教員教育・情報技術教育国際学会　プロシーディング】

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
6. ウィーンにおける劇場と音楽団体による音楽教育の試み ―課題と展望―	単著	平成24年3月	環太平洋大学『紀要』第5号 pp.57-64	オーストリアは、EUの中の１つの国となり、通貨も「シリング」を手放して「ユーロ」となったことで、「ウィーンはウィーン」でなくなる危機が訪れている。本論文では、たとえ伝統的に芸術文化が豊かな地であっても、絶えず教育活動や啓もう活動を行っていかなくては、文化水準が維持できないことを、平成 23 年度に行ったフィールドワークの分析から明らかにしたものである。現在、オーストリアでは国立劇場をはじめ、劇場を学校教育に活用した音楽指導の方法が模索されている。特に昔から音楽で有名なオーストリアでは「伝統文化」としての教育課題と、一般的な音楽教育としての課題とが存在している。論文では、両国の劇場との連携による音楽教育の比較を、「伝統音楽」の扱いに注目して分析を行った。伝統の継承と、新しい文化創造の基盤づくりとしての音楽科教育と指導法について論じた。教育が決定的に作用する将来の文化水準から、その持つ意味の重さと共に、持続可能な地域文化育成のための具体的な施策について提案。
7. 学校と社会文化施設との連携を考える―地域連携が『生きる力』へとつながるために ―	単著	平成24年4月3日・10日合併号	雑誌『教育プロ』第42巻第 8 号 通巻 1693 号 pp.6-10（5000字）	紙面「オピニヨン」に掲載。ここ 10 年ほど学校教育現場では、様々な連携が行われてきた。それぞれの立場で実際に「連携」に携わってきた人々には、「そろそろ振り返り時がきた」との実感がある。本稿では特に、「ゲストティーチャ―」や「出前授業」「アウトリーチ」に着目し、「学校と地域との連携」について最近の３つの事例を通して、芸術科教育の指導法を、今後の「学校と地域連携」の観点から論じた。変化の激しい時代を生き抜いていかなくてはならない子どもたちだからこそ、「生きる」ということに不可欠な「潤い」や「慰め」となる本物の「芸術文化」に触れる機会を、芸術科教育は担保できるのか、また生涯に渡って「能動的な鑑賞体験」ができるように、学校内での教育と地域での教育とをいかにつなげていくか、具体的な事例と共に示めした。
8. 草創期メソディスト讃美歌集にみるウェスレーの芸術観― 『ファウンダリー･コレクション Foundery ollection』より ―	単著	平成 24 年 12 月	環太平洋大学『紀要』第6号、pp.39-45	メソディストの最初期の讃美歌集“The Foundery Tune Book” 実際に使われている音楽の分析を通し、ウェスレーの芸術観と音楽教育について考察したもの。再版されることがなかったことから、編集者ジョン・ウェスレーにとっての「失敗作」「試験作」という意見方がされてきたが、楽譜を確認すると、記譜法などの通常との違いは、音楽教育を受けていない当時の一般の人々にとって、わかりやすく表記しようとした意図が見える。 “The Foundery Tune Book”の分析によって、会衆歌の芸術性と共に、対象を明確化することによる楽譜の役割と公共教育の効果について明らかにした。18 世紀のウェスレーらによる楽譜の検討を通し、楽譜の持つ意味と芸術教育との関わりについて考察した。

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
9. 初期メソディストの讃美歌集にみる、会衆歌としての意義とジョン・ウェスレーの音楽教育 ―『ファンダリー・コレクション Foundery Collection』を中心に―（査読有り）	単著	平成25年3月	日本ウェスレー・メソジスト学会『ウェスレー・メソジスト研究』第 13 号、pp. 27-45	メソディストは、青山学院大学、関西学院大学の創設理念の基礎をなすキリスト教の一派である。その活動は「ボランティア活動」の始まりともいわれ、信仰に基づく社会福祉的活動を特徴とする。その中には、当時の社会問題となっていた貧困層の子供たちへの公教育もあり、メソディストの創立者ジョン・ウェスレーは彼らを教育するために炭鉱町に学校を作り、現在もその学校はイギリスの名門校として存在する。本稿では特に初期の 3 冊のメソディストの讃美歌集の分析を通し、一般庶民が楽譜を読める力（音楽リテラシー）と、集団での歌唱教育を、学校教育の中でどのように生かしてきたのか、当時の学校教育の資料から分析を行った。
10. 地域の音楽資源の活用によるこどもの表現活動充実への一考察 ―初等教育における音楽体験の場の創造をめぐって―	単著	平成25年3月	環太平洋大学『紀要』第 7 号、pp. 43-51	こどもの感性と表現に関する領域として設定されている「表現」において、音楽はそれだけで存在するのではない。「表現」は、音楽や図画工作、体で表現すること、演じることなど、対象とする事柄が多様であり、様々な要素の介在によって子供たちの豊かに感じる心を育てる目的がある。本稿では、「表現すること」「感じて受け止めること」の楽しさを幼児期から十分に理解するための方法を、イギリスでの幼児対象から小学校低学年を対象としたワークショップでの実践例の分析を踏まえ、日本の現状との比較考察から論じたものである。特に園での表現領域を充実させるために、外部の専門家によるワークショップやアウトリーチ活動を取り入れ、活用していくか、また、それが後の学校教育にどのように連結されていくのか、具体的に論じた。
11. ≪やすかれ、わがこころよ」に≪フィンランディア≫が使用される理由－賛美歌における楽曲の意味をめぐって－ [5382 文字]	単著	平成26年2月	日本基督教団出版局『礼拝と音楽』160 号通巻 162 号、pp. 26-29	シベリウス作曲≪交響詩フィンランディア Op26≫からの旋律を伴う≪やすかれ≫は、多くの日本人信徒の愛唱讃美歌の一つである。作曲者のシベリウスは音楽史上では「国民楽派」に分類される作曲家であり、讃美歌に転用された部分には、別の歌詞がついて≪フィンランド頌歌≫と言われ「第 2 の国家」としてフィンランド国民の愛国の歌になっている。特に、シベリウス作品の「交響詩」には「音詩」という意味があり、旋律に文学的・詩的内容が直接的に表現されていることを示すものである。つまり讃美歌に使用された≪フィンランディア≫は、音楽の含有する意味がかなり限定された旋律なのである。これほどに特別な意味を持つ個性的な旋律が付けられた≪やすかれ≫の原詩の全容は、「主が共にいます平安」というよりもむしろ、苦難に立ち向かう「戦いの歌」である。日本語歌詞を追うだけでは、なかなか思いをはせることが少ないと思われる≪やすかれ≫の「戦いの歌」という側面に、本稿では、翻訳過程で変化していく歌詞内容と、音楽が内包する意味との関係性から論じたもの。

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
12. 「人間教育」と音楽の力― 讃美歌に託された神学と教理―（査読有り）	単著	平成26年3月	人間教育学学会『人間教育学研究』、創刊号、pp. 39-45	明治初期の音楽教育の導入において、讃美歌を源泉とする「唱歌」はそれぞれが近代国家にふさわしい「新しい日本人」をどのように明治政府が考えていたか、明確に示している。しかし実際の導入に当たっては、「音楽」は「体育」と同様、それまでの日本の教育には含まれない教科でもあり、困難を極めた。明治以降現代にいたるまで、教育現場に携わる人間にとってギリシャ・ローマ時代からの西洋社会における音楽やそれを教育することの持つ意味が十分理解される機会はほとんどなかったと言っていいだろう。しかし、西欧社会においては、時代が変わり、施政者が変わっても、音楽は共同体を疑似体験させ創出させる1つの重要な媒介であり、それにより共同体となった集団を望む方向に向かわせることができることから、重要な教育科目であり続けた。その延長線上に、ジョン・ウェスレーのメソディスト運動の中の讃美歌教育を捉え、教育における普遍的目的を論述したものである。
13. 1890 年代の岡山孤児院における音楽事象と人間教育 －先駆的器楽教育実践の近代音楽史における位置づけを目指して－（査読有り）	単著	平成27年3月	人間教育学学会『人間教育学研究』第 2 号、pp. 163-172	石井十次は、近代日本において「児童福祉の父」とされる人物である。中でも、岡山孤児院音楽幻燈隊の活動は、巡回公演を通じて日本人に西洋音楽や「音楽隊」を紹介した、画期的な活動であった。本稿では、岡山孤児院において音楽幻燈隊活動の前提となる音楽事象がどのようなものであったのか具体的な内容を検討し、さらに今日の近代音楽史研究の成果、及び岡山孤児院音楽隊をめぐっての先行研究の再検討を行った。その結果、先行研究の定説に反し、音楽隊活動が救世軍の影響を受けたものではないことを明らかにし、当時の日本に於ける一般的な音楽状況を反映した可能性が強いことを指摘した。
14. 教員養成系大学における人材育成の視点から考える音楽科教育と地域連携　－学生の「教員に求められる資質」形成につなげるために－	単著	平成27年3月	奈良学園大学『紀要』第2集、pp. 167-179	平成23年度から25年度にかけて、筆者は「学校・文化施設による＜持続可能な地域文化力＞を育む『連携型プログラム』の開発研究」を行ってきた。その研究成果を踏まえた上で、現在本学学生によって行われている活動に至る、筆者のこれまでの研究と共に、実際の文化施設におけるボランティアがどのようなものであり、さらにそこでどのような力が必要とされているのか、教員養成系大学の教育課題として提示する。さらには、このような主体的な地域連携を通して、学生の資質能力の向上に資する教育の方向性を示したもの。

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
15. 岡山孤児院音楽隊を巡る音楽環境と、近代日本におけるキリスト教 Band 文化の萌芽をめぐって （査読有り）	単著	平成27年3月	京都大学大学院文学研究科キリスト教学専修現代キリスト教思想研究会（アジアと宗教的多元性研究会）『アジア・キリスト教・多元性』第13号、pp.101-125	岡山孤児院やその音楽隊についての研究は、これまで音楽的事象に着目してこなかったことで、取りこぼした点や誤解してきた点だけでなく、さらなる広がりを持った研究領域との接続が困難であった。本稿では、楽隊が始まる以前の岡山孤児院の日常的音楽状況や、音楽教育の指導と使用した音楽教材について明らかにした。さらに、石井十次や聴衆となった大衆が触れたキリスト教を背景とした音楽状況の特性を探った。その結果、①キリスト教音楽における1ジャンルである器楽音楽が、「バンド文化」として関西で、しかもまずは、子どもの情操教育と健康的配慮を目的に始まったこと、②当時の豊かな世俗曲（謡も含め）を背景としたキリスト教音楽が存在したことを明らかにした。
16. 岡山孤児院音楽幻燈隊にみる音楽教育的意義－日本にもたらされた音楽教育の多面性―	単著	平成27年9月	財団法人 両備樫園記念財団2015年度『文化、芸術、教育活動に関する研究論叢』pp.21-33	本研究は、岡山孤児院で行われた「音楽幻燈隊」に関わる一連の事業及び活動を、教育史的観点から研究したものである。音楽幻燈隊の活動は孤児院の運営資金集めに利用されてきたことから、これまで音楽的内容や、音楽教育に関わる内容に踏み込んだ研究はなかった。研究の結果、孤児院音楽幻燈隊結成の黎明期、石井はルソー『エミール』の教育思想に傾倒し、その実践に努める一方で、音楽隊については軍楽隊をモデルとしていたことが確認された。ただ、音楽隊責任者出会った孤児院職員からは、音楽が子供たちの情操面や規範意識育成を促すことへの期待の言葉もあることから、音楽教育が孤児教育において重要な役割を担っていたことを明らかにした。
17. 山室軍平『平民の福音』および、救世軍所蔵幻燈用ガラススライドにみる近代日本における人間教育と宗教－大衆とキリスト教との出会いを巡る一考察－ （査読有り）	単著	平成 27 年 12 月	日本人間教育学会『人間教育学研究』第1号 pp.65-72	山室軍平（1872;M5-1940;S15）は、近代日本においてキリスト教を同じ平民の立場から当時の一般大衆に伝えようと『平民之福音』を著した、日本救世軍草創期のメンバーである。本稿は大衆伝道に用いられたと考えられる当時の幻燈ガラススライドを、『平民之福音』を踏まえて考察したものである。その結果、山室が、当時の日常生活の不協和の要因を「罪とが」として設定し、その解消にキリスト教を背景とした道徳教育の実践をスタートさせたことが明らかになった。ここに、一般大衆が持っていた道徳観とキリスト教倫理観との接点と共に、大衆にむけての人間教育の視点が確認された。また、幻燈や流行歌が大衆教育の手段として用いられた過程を明らかにし、現代社会における大衆化する教育が持つ課題との共通点を示した。

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
18. 初期救世軍軍歌と日本製 Tune の登場－キリスト教の大衆化と近代日本キリスト教音楽文化をめぐって－（査読あり）	単著	平成28年3月	日本ウェスレー・メソジスト学会『ウェスレー・メソジスト研究』第 16 号、pp. 81-108	救世軍の初期軍歌における日本の Tune について、『平民之福音』での山室の方法を踏まえて考察。最初期の 2 つの軍歌集『救世軍軍歌 M29』と『救世軍軍歌 M42』の掲載讃美歌を分析。表を作成し、それぞれの歌の転載元を整理。日本オリジナル Tune を特定した。その結果、救世軍で使用された軍歌集は、岡山孤児院音楽幻燈隊と深い関係性があり、日本名の付いた Tune と、岡山孤児院音楽幻燈隊のレパートリーとが、軍歌を中心に重なっていることを明らかにした。ここから、初期救世軍軍歌集において日本製 Tune として採用された Tune について、１）一般大衆に身近な、娯楽性の強い通俗曲であるということ。２）すでに、音楽隊（楽隊）のレパートリーとして、大衆に受け入れられていた作品であること、を示し、救世軍軍歌が、当時の大衆音楽を取り入れた娯楽性の強い「余興の音楽」を中心としたレパートリーであったことを明らかにした。
19. 初等教育における鍵盤ハーモニカの役割	共著	平成28年9月	『奈良学園大学紀要』第 5 集、pp. 1-10	鍵盤ハーモニカの学修が初等教育の「器楽の活動」および「表現教材」においてどのような役割を果たしているのか、現行の各社音楽科教科書の分析から明らかにしたもの。 音楽科における鍵盤楽器の位置づけを明らかにした上で、鍵盤楽器の導入としての鍵盤ハーモニカの課題を提示した。 共著者：山本美紀、筒井はる香
20. 大衆娯楽と近代社会における人間教育への一考察－救世軍幻燈上映の日英比較をめぐって－	単著	平成29年3月	『人間教育学研究』pp. 125-134 日本人間教育学会	本稿は、救世軍が社会教育的に用いた「幻燈」について、世界救世軍歴史資料館 International Heritage Center/ Salvation Army が所蔵する幻燈スライドとその上映を中心に、2015 年に行ったロンドンでの現地調査に基づき、大衆娯楽を用いた社会教育の視点から検討を行った。 これまでの研究で、岡山孤児院幻燈対と救世軍音楽幻燈隊、また『救世軍軍歌』の深い関係性を明らかにしてきたが それにより、当時の社会的ニーズによる規範意識の育成を教育的視点から考察。大衆娯楽を用いた社会包摂の手法について、日英の比較を歴史的変遷の視点から論じたものである。
21. 研究ノート 日英救世軍の初期幻燈上映における「場の記憶」の影響力　－娯楽と社会教化の狭間で―	単著	平成29年3月	『アジア・キリスト教・多元性』第 15 号 pp. 181－193	山室軍平記念救世軍資料館での資料には、日本宣教の開始以来の英国救世軍（万国救世軍本部）との緊密な関係性がうかがえるものが多い。救世軍国際記念館（歴史資料館 International Heritage Center／The Salvation Army）との連携が完全ではなく、日本救世軍に関する資料については不明な点が多い。そこで、救世軍創設 150 周年の記念の年であった 2015 年の夏、救世軍国際記念館の日本関係資料について、幻燈資料を中心に調査を行った。 本論では、収集した資料の整理と共に、救世軍による初期上映の場所が、元々どういう場所で会ったのかに注目し、上映場所の持つ傾向と活動との影響関係について報告した。

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（その他） 【研究報告書】 1. 「地域の教育･文化施設における絵本の『体感型読書』プログラムの開発的研究」	共著	平成25年3月	平成 22-23 年度 科学研究費補助金 基盤研究C（課題番号 22531043 5002）	H22年度から24年度に、地域の文化施設や小学校などで実施した「体感型読書」プログラムの実践報告と、プログラム開発に関わる研究報告である。本人担当部分：音楽部分についての解説および、音楽を物語に結び付ける際の教育的効果について考察を執筆。【pp. 18-26、27-50:担当執筆】 体感型読書とは、絵本の読み聞かせに音楽やダンスなどを組み合わせ、子どもたちに絵本や芸術を深く体験させる新しい芸術鑑賞方法である。当システムの研究と、芸術鑑賞教育プログラムの構築により、子どもの表現力と感じる力を伸ばし、他者理解力を高め、共感力の育成を目指した。授業や、地域の子どもを対象とした教育実践例を紹介。子どもの音楽表現に「物語性」が与える影響を明らかにした。 共著：伊崎一夫、山本美紀、山口聖代【A5判　全60ページ】
【講演等報告】 1. 2016日本賛美歌学会第16回全国大会パネルディスカッション「賛美歌の共有について思うこと」報告	単著	平成28年9月10日	立教大学　池袋キャンパス 主催：日本賛美歌学会	平成28年9月10日立教大学池袋キャンパスで持たれた賛美歌学会全国大会パネルディスカッションについての報告。 パネラーの所属教派と各派の伝統についての概説、ディスカッションの問題設定と「賛美歌の共有」今日的意味と課題を解説し、パネルで話し合われた内容を報告した。「賛美歌」は、キリスト教各派の信仰における『共同体』意識、体験と切り離せないものであり、その共有は、各派の伝統を尊重する姿勢から意味あるものとなることを、歴史的観点を含め論述した。
【書評】 1. 『教会音楽ガイド』【4000字】	単著	平成24年9月	日本賛美歌学会紀要第5号 pp. 46-50	本書は、2010年7月に日本基督教団出版局から刊行された（編者は越川弘英、塚本潤一、水野隆一）。1975年『教会音楽ガイド』以来の教会音楽についての『讃美歌21』に対応する参考書である。35年間の礼拝や讃美の変遷をふまえ、教会における音楽活動を様々な立場で担う信徒や教師にむけ書かれている。書評では、内容をふまえつつ今日の教会がもつ課題を讃美の側面から明らかにすると同時に、讃美を共有することの現代における意義を論じる。また、教会が地域の音楽教育の場として長い歴史の中で担ってきた働きを説き、さらに学校教育における音楽教育の停滞が、教会での音楽活動の低下に直接反映する関係性を示し、教会が地域の音楽教育の場として再び機能する必要性を説く。

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
2. 更新伝道会出版委員会編 『チャールズ・ウェスレー讃美歌 30 選』 【7000 字】	単著	平成 26 年 3 月	日本ウェスレー・メソジスト学会『ウェスレー・メソジスト研究』第 14 号、pp139-148	本書は、2013 年に更新伝道会出版委員会から刊行されたチャールズ・ウェスレーによる讃美歌集である。UMH（合同メソジスト教会讃美歌集）で採用されているチャールズ作詞の 50 曲のうち、「最初はメロディーの美しい、これまで歌われていなかったもの、心に響く詩のものを基準に、そこから少しずつ「教団や他の教派の讃美歌に入れられていないもの（一部を除く）を拾い上げ」加えられていったという 30 曲を選んで編まれたという。本書評では、現代におけるチャールズ・ウェスレーの讃美歌の意義を明らかにするとともに、特に新しい旋律が付けられた作品について、作曲者の紹介や旋律的特徴、また伝統的に重点を置いてきたメソディストの音楽教育の解説を行った。
3. 梶田叡一著『不干斎ハビアンの思想－キリシタンの教えと日本的心性の相克』創元社	単著	平成 26 年 6 月 16 日	日本教育新聞 平成 26 年 6 月 16 日付け 15 面	副題にある「心性」とは、文字通り「心の性（さが・特質）」であると同時に、学問的には、特定の時代の集団的なものの考え方や感じ方を意味し、現代の歴史学や社会学、さらに第二バチカン公会議や著者が意識する「宗教多元主義」において重要な用語である。本書はハビアンの代表的著書の幾つかを、おのおのが書かれた目的に沿って読み解いたものである。 書評では著者による精神的・信仰的位相の分類『習俗』『信』『行』『覚』について注目し、精神性の教育の重要性と今日的意義について述べた。さらに、精神教育における師弟関係の影響について言及し、不干斎ハビアンの教育的環境と共に、彼自身が指導した弟子との関わりに着目して評論した。
【評論・解説】 1. 評論 「メソジストの音楽－伝統と私たちの讃美 ①メソジストと音楽」	単著	平成 20 年 1 月	日本フリーメソジスト教団『全き愛』紙 1 月号 p. 2 連載	1 年にわたる連載の第 1 回。18 世紀イギリスの社会状況と、特に子供の置かれた状況から教育課題について解説。さらに、メソジストにとって音楽が担った教育的役割について、概説する。
2. 評論 「メソジストの音楽－伝統と私たちの讃美 ②メソジストの音楽の源流（1）」	単著	平成 20 年 3 月	日本フリーメソジスト教団『全き愛』紙 2･3 月合併号 p. 2 連載	メソジストの音楽の源流である、モラヴィア教団とその音楽について解説。特に、モラヴィア教徒にとっての音楽の教育的役割について、他者理解・異文化理解の観点から解説を行うと同時に、音楽教育の目的と方法について後のメソディストとの比較を行う。
3. 評論 「メソジストの音楽－伝統と私たちの讃美 ③メソジスト音楽の源流(2)」	単著	平成 20 年 4 月	日本フリーメソジスト教団『全き愛』紙 4 月号 P. 2 連載	メソジストの音楽のもう一つの源流、英国国教会の聖歌について解説。国教会の地域に根付いた信徒教育の方法論を分析、聖歌を歌うことの伝統的意義と教育との関係性を明らかにした。
4. 評論 「メソジストの音楽－伝統と私たちの讃美 ④メソジストと讃美の意味」	単著	平成 20 年 5 月	日本フリーメソジスト教団『全き愛』紙 5 月号 P. 2 連載	メソジストの伝統における、讃美歌の意味を解説した。特に、メソジストが先導した、社会の構成員としての規範意識や道徳観を讃美歌の歌詞から明らかにし、讃美歌の持つ教育的力と共に、社会が変化していくプロセスについて検証した。

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
5. 評論 「メソジストの音楽－伝統と私たちの讃美 ⑤会衆と讃美」	単著	平成20年6月	日本フリーメソジスト教団『全き愛』紙 6月号 P.2 連載	キリスト教の伝統とメソジストの会衆讃美について比較分析を行う。さらに、ジョン･ウェスレーが信徒たちに行った厳格な歌唱指導について、その課題と目的、指導方法について論じた。
6. 評論 「メソジストの音楽－伝統と私たちの讃美 ⑥讃美とリバイバル」	単著	平成20年8月	日本フリーメソジスト教団『全き愛』紙 7･8月合併号 P.2 連載	キリスト教の歴史における、讃美とリバイバル運動との関連性について解説。本稿では、リバイバルを教育目標の再設定と捉え、現代における教育課題の再考と課題達成のための方法論を考察した。
7. 評論 「メソジストの音楽－伝統と私たちの讃美 ⑦現代の讃美とメソジストⅠ」	単著	平成20年9月	日本フリーメソジスト教団『全き愛』紙9月号 P.2 連載	キリスト教の現代の讃美歌研究の動きと、第2バティカン公会議の影響について解説する。信徒教育としての「讃美」の捉え方の変換点と共に、その影響を受けた、宗教界・社会の大きな流れをとりあげる。
8. 評論 「メソジストの音楽－伝統と私たちの讃美 ⑧現代の讃美とメソジストⅡ」	単著	平成 20 年 10 月	日本フリーメソジスト教団『全き愛』紙10月号 P.2 連載	アメリカの合同メソジスト派の新しい讃美歌への取り組みの一つとして「グローバル・ソング Global Song」とその概念と実践について紹介。『Global Song』『Global Hymnody』とは、現在世界各地で展開されている、讃美歌を「自分たちのものとして」とらえようとする、新しい創作や、それに付随した活動の総称であること、また一般的な音楽教育と関連する課題について解説。
9. 評論 「メソジストの音楽－伝統と私たちの讃美 ⑨讃美による希望」	単著	平成 20 年 11 月	日本フリーメソジスト教団『全き愛』紙11月号 P.2 連載	「グローバル・ソング Global Song」の考え方の基礎となった、ジョン･ウェスレーの讃美理論を解説。信徒教育の意味を持ったメソディストの讃美歌に確認できる、音楽を通して共有される「集団的記憶」と「希望」について、教育的視点から分析する。
10. 評論 「メソジストの音楽－伝統と私たちの讃美 ⑩グローバル･ソングの可能性」	単著	平成 20 年 12 月	日本フリーメソジスト教団『全き愛』紙12月号 P.2 連載	「グローバル・ソング Global Song」の実践とその課題の提示。前稿での議論をふまえ、ウェスレーの歌唱指導の理念と現代の日本の音楽科教育目標との共通点の分析するとともに、『Global Song』の視点を援用しつつ、「自分たちの歌」として歌唱教材が今日の音楽科授業において成立するための基本的条件を明らかにし、具体的な方法論を示した。
11. 評論 「メソジストの音楽－伝統と私たちの讃美 ⑪現代の讃美とメソジストⅢ」	単著	平成21年1月	日本フリーメソジスト教団『全き愛』紙 1月号 P.2 連載	カリフォルニアから来日したゴスペル・グループ「ライト＆ライフ アウトリーチ・バンド Light and Life Outreach Band」の来日ツアーのリポートおよび、彼らにとっての「アウトリーチ」の意味を解説。アメリカにおける音楽科教育が、教会を中心に広がっている点に注目し、小中学校音楽科教育が生涯教育へとつながり、「生きる力」の基盤を構成する要素となるための条件を分析した。

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
12. 評論 「メソジストの音楽－伝統と私たちの讃美 ⑫最終回：讃美の共有」	単著	平成21年3月	日本フリーメソジスト教団『全き愛』紙 2･3月合併号 P.2 連載	レクイエムに象徴される、「共同体」の意味について。独りで歌う時にも、他者とのつながりを意識できるためには、その歌を他者と共有した体験が必要である。本稿では、大切な人を失った悲しみを共有するための「レクイエム」の意味について、「会衆歌」の視点から解説。共同体において「歌を共有する」ことの大切さを示し、これからの音楽科教育に求められる、「共同体の共有体験の場」としての音楽科授業の重要性を示唆した。
13. プログラム解説 京都市交響楽団第529回 定期演奏会 [4500字]	単著	平成21年10月	京都市交響楽団 第529回 定期演奏会 pp.5-8	モーツァルト≪交響曲第36番ハ長調「リンツ」≫、ブルックナー≪交響曲第9番ニ短調≫（ノヴァーク版）についての解説を担当。 プログラムを構成することが、美術館における「企画展」と共通点があることをふまえ、2人の作曲家が取り上げられた理由を示す。モーツァルトはザルツブルク、ブルックナーはリンツとそれぞれオーストリアの都市を代表する作曲家であり、名前を冠する音楽祭も開催されている。当日演奏された作品を分析しつつその背景ににもふれ、それぞれの都市で、当時2人がどのようにコミュニティに受け入れられていたか、また現代のの位置づけについて解説した。
14. プログラム解説 京都市交響楽団第536回 定期演奏会 [4500字]	単著	平成22年6月	京都市交響楽団 第536回 定期演奏会 パンフレット pp.5-8	ウェーベルン≪大管弦楽のための6つの小品 op.6≫、ウェーベルン≪管弦楽のための5つの小品 op.10≫、マーラー≪交響曲第7番ホ短調「夜の歌」≫ マーラーは世紀末ウィーンを代表する大作曲家であり、多様な楽器を用いた大型の作品を多く書いた。作曲家であったが、生活のために指揮者としても成功していた。対するウェーベルンはマーラーにあこがれ、同じように指揮者として働きながら、シンプルなそぎ落とされた作品を制作した作曲家である。 年齢は差があるものの、世紀末ウィーンと現代をつなぐ音楽の様式の端境期に位置した2人の作曲家の生涯を、作品の特徴に焦点をあてて解説を執筆。

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
15. プログラム解説 京都フィルハーモニー室内合奏団173回定期公演 [4500字]	単著	平成22年12月	京都フィルハーモニー室内合奏団173回定期公演 パンフレット pp.2-3	「京フィルの第九　―日韓交流！アジアからの発信―」 ベートーヴェン：≪献堂式≫序曲　ハ長調 op.124 ：交響曲第9番　ニ短調 ≪合唱付き≫op.125 ≪献堂式≫は、「交響曲第9番」初演時に同じプログラムにあがっていた作品である。寒い時期に初演され（10月）、かなり長い演奏会であったが、聴衆は最後までがまんし聴いて、最後に万雷の拍手でベートーヴェンを称えたという。しかしすでにベートーヴェンの耳は聞こえなくなっており、助手に聴衆の方を向かされようやく拍手が「見えた」という。 本解説では、日本で「第九」が初演された坂東にある小学校・中学校が、現在も入学式・卒業式で「歓喜に寄せて」を歌うことを紹介し、すでに日本の地域文化を担い、同郷のアイデンティティーの元になっていることにふれ、「第九」の現代日本における教育的意義に着目した解説を行った。
16. プログラム解説 京都フィルハーモニー室内合奏団174回定期公演 [3550字]	単著	平成23年1月	京都フィルハーモニー室内合奏団174回定期公演 パンフレット pp.3-5	「ニューイヤーコンサート『アメリカ＆ラテンアメリカ』」 H.ヴィラロボス：ブラジル風バッハ第2番 G.ガーシュイン： ラプソディー・イン・ブルー A.コープランド：アパラチアの春 L.アンダーソン：セレナータ ：ゴールデン・イヤーズ ：ブルー・タンゴ ：舞踏会の美女 世界に名高い、いわゆる「ウィーン・フィルによるニューイヤーコンサート」は、ワルツやポルカを中心に、きらびやかな新年の祝祭を演出する。しかし、今回は「アメリカもの」を中心とした、明るく楽しい新年の祝いである。特にアンダーソンは日本で教育を受けた者であれば、小学校や中学校での音楽科鑑賞教材で取り上げられ聴いたことがあるだろう。このような体験は、義務教育期間内の音楽科教育の充実度が問われる機会でもある。イメージをしやすい彼の作品の魅力を中心としつつ、「新世界」アメリカがどのような音楽文化をはぐくんでいったのかを中心に、新しい年への期待を込めて解説。
17. 京都フィルハーモニー室内合奏団175回定期公演 [3550字]	単著	平成23年3月	京都フィルハーモニー室内合奏団175回定期公演パンフレット pp.3-5	「古典派への道程 Vol.12」モーツァルト：　ディヴェルティメント　ニ長調　K.136　ファゴット協奏曲　変ロ長調 K.191 ハイドン：交響曲第101番　ニ長調　Hob.Ⅰ：101　≪時計≫ 2人の作曲家は、同時代人であり、生前にも面識があった。彼らの時代は、作曲の依頼主の社会的立場の交代期にあたり、それはオーダーそのものが変わる意味を持っていた。 時代の変わり目に、貴族・市民と依頼主が変わることによる作品に与えた影響と、それでも変わらない彼らの作品の特徴について解説。

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
18. 京都フィルハーモニー室内合奏団176回定期公演 [3550字]	単著	平成23年4月	京都フィルハーモニー室内合奏団176回定期公演 パンフレット pp.3-5	「ロシア！」 P.チャイコフスキー：弦楽セレナーデ S.プロコフィエフ：古典交響曲 L.ストラヴィンスキー：組曲「プルチネッラ」 この日のコンサートに取り上げられた作曲過3人を結びつけるのは、「ディアギレフ」である。彼はバレエ・リュスを率いて、多くの新しい才能を見出し、後世に残る芸術作品を生み出した。本解説では、ディアギレフが彼らとどのような関わりを持ち、何を見出し生み出していったかと言う視点から、作品それぞれのもつ魅力を解説していった。
19. 京都フィルハーモニー室内合奏団177回定期公演 [4500字]	単著	平成23年6月	京都フィルハーモニー室内合奏団177回定期公演 パンフレット pp.3-5	「フランス！」 ルーセル：シンフォニエッタ オネゲル：ピアノ小協奏曲 ラヴェル：クープランの墓 ビゼー：アルルの女 フランス音楽を生んだ「フランス」を、科学立国との共通点として「センス」をキーワードに読み解く。さらに、多少年が前後するものの、同時代人の作曲家として、4人がどのような社会情勢の中で作曲家として自分の仕事を見つめ、進めてきたのか解説を行った。
20. 京都市交響楽団第550回定期演奏会 [4300字]	単著	平成23年9月	京都市交響楽団 第550回 定期演奏会 pp.7-10	モーツァルト：舞踊音楽「レ・プティ・リアン」K.Anh.10 (299b) シベリウス：ヴァイオリン協奏曲 ニ短調 op.47 ラフマニノフ：交響的舞曲 op.45 作曲家にとって「故郷」とは、音楽ににじみ出る、特別なタームである。モーツァルトは故郷ザルツブルクが息苦しく、シベリウスは故国の独立のため音楽をもって戦った。ラフマニノフは政治の混乱によって亡命せざるを得なかった。 本公演は指揮者である外山雄三の80歳の祝いも兼ねていたが、彼の選んだ作品のうちラフマニノフのそれは、作曲家が死ぬ間際に、多くのロシア人亡命演奏家がいたフィラデルフィア管弦楽団のために書いた特別の作品である。作曲家自身のオーケストラ団員への感謝の言葉が、そのまま外山の京都市交響楽団メンバーへの感謝の言葉であったと言える。

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
21. 京都フィルハーモニー室内合奏団178回定期公演 [3700字]	単著	平成23年10月	京都フィルハーモニー室内合奏団178回定期公演 パンフレット pp. 3-5	「室内オーケストラ名曲選」 モーツァルト： 弦楽のためのディベルティメント ヘ長調　KV.338 ：ピアノ協奏曲第26番 ニ長調 KV.530 「戴冠式」 ストラヴィンスキー： 管楽のための八重奏曲 ニーノ・ロータ：九重奏曲 「室内オーケストラ」とは、小編成のオーケストラのことであり、大型編成のオーケストラが出てくる前のヨーロッパではごく普通の合奏形態であった。近代になっても、小回りが利くからこそ、多くの作曲家が特殊な編成で響きを確認してみるなど、実験的な場として用いてきた経緯がある。演奏会では、「室内オーケストラ」という編成を縦糸に、イタリア音楽を横糸にして企画されたものであり、共通項とともに各作品のもつ実験性や特徴を中心に解説を行った。
22. 京都フィルハーモニー室内合奏団179回定期公演 [3000字]	単著	平成23年11月	京都フィルハーモニー室内合奏団179回定期公演 パンフレット pp. 3-5	「ベートーヴェン！」 ベートーヴェン： ヴァイオリン協奏曲ニ長調 op. 61 交響曲第5番ハ短調 op. 67「運命」 ベートーヴェンの人生は、幼いころから苦悩に満ちたものだった。子どものころは、子どもに英才教育をほどこしてモーツァルトのようにしたいと思うアルコール依存症の父親からの暴力、青年期には進行型の難聴を患い、中年以降は甥の養育権をめぐる親族の争いと甥の自殺未遂、とどれも現代に通じる、逃れることのできない、家族にまつわる苦悩ばかりである。そのような中で、ベートーヴェンはそれらを正面から受け止め、戦っていくことと並行して作品を生み出していった。ベートーヴェンの生涯とともに、彼にとっては実験的な「協奏曲」ジャンルの解説、それをふまえた「交響曲」の位置づけに焦点をあて解説を行う。
23. 京都フィルハーモニー室内合奏団180回定期公演 [3500字]	単著	平成23年12月	京都フィルハーモニー室内合奏団180回定期公演 パンフレット pp. 2-3	「京フィルの第九」 ベートーヴェン： ≪コリオラン≫序曲ハ短調 op. 62 交響曲第9番 ニ短調 ≪合唱付き≫op. 125 ベートーヴェンは自身の難聴がすでに完治しないことを確信したとき、音楽家としての将来に絶望し、有名な『ハイリゲンシュタットの遺書』を書く。まさに、音楽家としてこれからという32歳の時である。しかしその内容は、「死」からの決別であり、「自分の為すべきことを成し遂げるまでは、決して死なない」という、遺書の形をとった決意表明であった。≪コリオラン≫は遺書を書いた後の作品であり、「傑作の森」と呼ばれる彼の創作の黄金期に書かれたものである。また、交響曲第9番は「為すべきことを為す」のを続けてきたベートーヴェンの晩年の作品であり、ブラームス、マーラーなど、彼に続く多くの作曲家に影響を与え続けてきた。人の人生を支え得る音楽の持つ力を証明する作品として、解説を執筆。

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
24. 京都市交響楽団第557 回定期演奏会 [3600 字]	単著	平成 23 年 12 月	京都市交響楽団 第 550 回 定期演奏会 パンフレット パンフレット 12-16 頁	モーツァルト：フルートとハープのための協奏曲 ハ長調 K.299 ダマーズ：フルート、ハープ、弦楽のためのデュオ・コンチェルタントベートーヴェン：交響曲第 9 番 ニ短調 ≪合唱付き≫ op.125 EU（欧州連合）のいわゆる連帯の歌は、ベートーヴェン「交響曲第 9 番」4 楽章の合唱「歓喜に寄せて」である。耳が不自由だったベートーヴェンの中では、常に「音楽」と「言葉」が同じ意味を持ってあり、言葉を交わしていたと考えられる。「歓喜の歌」の楽曲構成から、第九でベートーヴェンの内的言語の可能性に基づき、楽曲解説を行った。
25. 京都フィルハーモニー室内合奏団182 回定期公演 [3700 字]	単著	平成24年3月	京都フィルハーモニー室内合奏団182回定期公演 パンフレット pp.3-5	「古典派への道程」 ヴィヴァルディ： 弦楽のための協奏曲 ト短調 RV.157 4 つのヴァイオリンとチェロのための協奏曲 ロ短調 RV.580 ～≪調和の霊感≫Op.3 より第 10 番～ ピッコロ協奏曲 ハ長調 RV.443 モーツァルト: セレナータ・ノットゥルナ ニ長調 K.239 ハイドン： 交響曲第 45 番 嬰ヘ短調 ≪告別≫Hob.Ⅰ-45 3 人の作曲家は、日本人が義務教育機関に音楽科の教科書で必ず目にする作曲家たちである。そのため、名前を見ただけでは古い印象がぬぐえない。しかし彼らの作品は、作曲された当時には時代の先端をいく作品であり、現代のコンサートで聴いたとき、むしろ「新しさ」を感じる場合が多い。本解説では、彼らの作品の持つ「新しさ」の要素を、独自性と共に解説し、長く人々に愛される「古典」というジャンルの普遍性について考える機会とした。
26. 京都フィルハーモニー室内合奏団183 回定期公演 [3700 字]	単著	平成24年4月	京都フィルハーモニー室内合奏団183回定期公演 パンフレット pp.4-6	「ロマンティシズムあふれた ヨーロッパ音楽探訪」 E.グリーグ：組曲「ホルベアの時代から」 Op.40 R.G.シュトラウス：クラリネットとファゴットのための二重小協奏曲 ヘ長調 B.B.V.バルトーク：弦楽合奏のためのディベルティメント プログラムの 3 曲は、いずれも作曲家の危機的状況の直前・直後に生まれた作品である。不思議と、音楽史の過去の時代の様式に則ったスタイルで書かれていることが共通する。 人間は、危機的に状況に陥ると、過去の幸せだった時代を巨大回顧して危機を乗り越えようとするという。作曲家が作品創作当時、どのような危機的状況にあったのか、またどうしてその作品スタイルをとったのかに注目し、解説を行う。

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
27. 京都フィルハーモニー室内合奏団184回定期公演［3000字］	単著	平成24年6月24日	京都フィルハーモニー室内合奏団184回定期公演 パンフレット pp. 4-6	「ドイツ・オーストリアの栄光と苦悩」 ハイドン：交響曲第7番 ハ長調「昼」Hob. I：7 ワーグナー：ジークフリート牧歌 シュレーカー：室内交響曲 京都フィルハーモニー室内合奏団の創立40周年記念コンサートである。取り上げられた3人の作曲家は、時代と作風の変化の時代に生きた作曲家であった。中でもシュレーカーは、リヒャルト・シュトラウスと拮抗する人気を誇った作曲家であったが、ナチスドイツの台頭により心痛のあまり亡くなってしまった。彼の作品は、あまり演奏されることがなく、作風の理解や解釈が進んでいない。本作品は、彼がウィーン・アカデミーの教授陣の演奏会のために作曲したものである。それぞれの作曲が創作した時代背景、またその必然性について触れながら、「作曲の理解と時間」をテーマに作品解説を執筆した。
28. 辻井伸行（ピアノ） 垣内悠希 指揮 京都市交響楽団 ［3500字］	単著	平成24年9月20日	京都市／京都コンサートホール（公益財団法人京都市音楽芸術文化振興財団）6-9頁	ラフマニノフ：ピアノ協奏曲第2番 ハ短調op. 18 チャイコフスキー:交響曲第4番 ヘ短調op. 74 本プログラムと全く同じプログラムで行われたコンサートに、アシュケナージ指揮によるものがある。そのコンサートはアシュケナージが亡命先のイギリスから、初めて祖国に戻った際のコンサートであり、非常に政治的なものであると同時に、アシュケナージの祖国への思いを象徴するコンサートであった。2つの作品は、そのために選ばれたものである。両作品の持つ、ロシア土着の音楽の魅力と、それを生かしつつ洗練された手法をもって作曲された作品の魅力について解説を行う。
29. 京都フィルハーモニー室内合奏団185回定期公演［3500字］	単著	平成24年10月21日	京都フィルハーモニー室内合奏団185回定期公演パンフレット pp. 3-5	「ドビュッシー生誕150年とフランス音楽」C. グノー：小交響曲 D. ミヨー：打楽器と小管弦楽のための協奏曲 C. ドビュッシー：牧神の午後への前奏曲（シェーンベルク編曲） 管弦楽のための3つの交響的素描「海」 （J. ユー編曲）【世界初演】 ドビュッシー生誕150周年を記念してのコンサートでは、ドビュッシーの作品を編曲した2曲と、ドビュッシーの才能をいち早く認めたグノー、生前のドビュッシーと親交のあったミオーとをとりあげる規格である。特に≪海≫は、楽譜の初版の表紙が葛飾北斎「神奈川沖波裏」の大きな波の絵が用いられた。また、2012年に歌舞伎の猿之助襲名披露の中で演じられた『黒塚（安達原）』と、バレエ・リュスとの関係を解説。バレエ・リュスはドビュッシーの≪牧神の午後の前奏曲≫作曲のきっかけとなったバレエ団である。日本とフランスが、文化的に深い影響関係にあったことをふまえ、曲目解説を行った。

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
30. 京都市交響楽団特別演奏会「第九コンサート」[4200字]	単著	平成24年12月27日･28日	京都市交響楽団パンフレット11-16頁	ワーグナー 舞台神聖祭典劇「パルジファル」第1幕への前奏曲 楽劇「ニュルンベルクのマイスタージンガー」第1幕への前奏曲 ベートーヴェン 交響曲第9番ニ短調「合唱付」op.125 ＊歌詞対訳　一部改訂、再録される ワーグナーはベートーヴェンの後継者として自分を位置づけ、ベートーヴェンの生誕100周年の祝いに有名な「ベートーヴェン論」を発表した。そして、ワーグナーが自分の音楽作品のために作った「バイロイト祝祭劇場」のこけら落としには、自身の作品とともにこの「第九」を演奏し、「ドイツ音楽芸術の至高」を目に見える形で表そうとしたのである。 「第九」作曲当時のベートーヴェンの状況と、対照的な後世の社会的・政治的な「第九」理解とを比較しつつ、周りの状況がいかにあろうとも変わらぬ、「第九」が表現しようとする「連帯」と「歓喜」について解説。
31. 京都フィルハーモニー室内合奏団187回定期公演[3500字]	単著	平成25年2月22日	京都フィルハーモニー室内合奏団パンフレット3-5頁	ヨハン・セバスティアン・バッハ ブランデンブルク協奏曲全曲 BMV1046-1051 バッハの若い時代において、自身のポートフォリオとして作成した協奏曲集の全曲演奏会に向け、バッハ一族の音楽的特徴とともに、17世紀に活躍した古楽器ついても解説を行う。 現代の音楽教育におけるバッハの意義についても言及した。
32. 京都フィルハーモニー室内合奏団188回定期公演[3500字]	単著	平成25年4月21日	京都フィルハーモニー室内合奏団パンフレット3-5頁	武満徹≪ファンタズマ／カントスⅡ≫ ベートーヴェン≪ピアノ協奏曲第3番 Op.37≫ プーランク≪シンフォニエッタ≫ 現代音楽の巨匠2人が、映画音楽の作曲経験があったことから、映像と音楽との関係にふれつつ解説を行った。 また、明治時代以降、音楽と映像はしばしば教育の現場で用いられ、子供たちのイメージを膨らませ、教育内容理解の大きな助けとなってきた歴史にも言及した。
33. 京都市交響楽団第568回定期演奏会[4300字]	単著	平成25年5月24日	京都市交響楽団	ベートーヴェン≪序曲「コリオラン」op.62≫ ブルックナー≪交響曲第8番ハ短調≫［ノヴァーク版 第2稿（1890）］ 鍵盤楽器奏者として出発し、ウィーンで成功した2人の作曲家について、作曲家としてのアイデンティティー、また音楽がアイデンティティーを支える「思い出」に大きく影響を与えることを踏まえた解説を行った。
34. 京都フィルハーモニー室内合奏団189回定期公演[3200字]	単著	平成25年6月17日	京都フィルハーモニー室内合奏団パンフレット3-5頁	P.チャイコフスキー　≪フィレンツェの思い出≫　Op.70　ニ短調 A.E.ヒナステラ≪協奏的変奏曲　Op.23≫ 出身国の音楽的伝統が色濃く反映された作曲家とその作品について、民族共通の音楽性と共に、作曲家の独自性を観点に解説を行う。

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
35. 京都市交響楽団第572回定期演奏会 ［4600字］	単著	平成25年9月6日	京都市交響楽団 パンフレット7-10頁	F.メンデルスゾーン序曲≪フィンガルの洞窟≫ ロ短調　Op.26 L.ベートーヴェンピアノ協奏曲第1番ハ長調 Op.15 L.ベートーヴェン交響曲第3番　変ホ長調　≪英雄≫　Op.55 新しい時代の影響が作品に色濃く反映された作品を並べたプログラムである。音楽作品が音楽教育や聴衆、技術革新や社会そのものの影響を強く受けつつ、作曲家を通して世に生み出されていることについて、作品に基づき解説する。
36. 京都フィルハーモニー室内合奏団 190回定期公演 ［3200字］	単著	平成25年10月27日	京都フィルハーモニー室内合奏団 パンフレット3-5頁	J.L.F.メンデルスゾーン,B.≪弦楽のための交響曲第9番　ハ長調≫ G.マーラー≪交響曲第1番　ニ長調　「巨人」 Op.23　≫ オリンピックが東京で2020年に開かれることが決定されたことを受け、スポーツと音楽との関係について、「祭典」をキーワードに解説。どちらの作曲家もユダヤ系であったことから、宗教的な背景もふまえ、解説を行う。
37. 京都フィルハーモニー室内合奏団 192回定期公演 ［3200字］	単著	平成26年3月16日	京都フィルハーモニー室内合奏団 パンフレット3-5頁	H.I.F.von ビーバー≪バッターリア≫ W.A.モーツァルト≪フルート協奏曲 第1番ト長調　K.313 (285c)≫ F.J.ハイドン≪交響曲第103番 変ホ長調 Hob. Ⅰ:103「太鼓連打」≫ 3つの作品に共通の、「作品と依頼人との関係性が強い」側面に光をあて、解説を行う。また、ウィーンが自己の伝統として、音楽文化を教育していこうと積極姿勢を示していることにふれ、音楽的伝統と教育、また聴衆と作品との関係性について、解説を行う。
38. 京都フィルハーモニー室内合奏団 194回定期公演 ［3500字］	単著	平成26年6月29日	京都フィルハーモニー室内合奏団 パンフレット3-5頁	ブリッジ　≪アイルランドの旋律 －ロンドンデリーの歌－≫ ラター≪弦楽のための組曲≫ ブリテン≪フランク・ブリッジの主題による変奏曲≫作品10 コープランド≪劇場のための音楽≫ コープランド以外は、イギリスを活動拠点とした比較的新しい作曲家によって構成された演奏会の解説。「イギリス的」なるものと「アメリカ的なるもの」との差と共に、伝統的な旋律が現代の作曲家によって新たな作品として提示される過程とその意義について言及する。
39. 京都市交響楽団特別演奏会 「第九コンサート」 ［2400字］	単著	平成26年12月27日･28日	京都市交響楽団 パンフレット9-12頁	バーバー≪弦楽のためのアダージョ≫ M.ラヴェル≪亡き王女のためのパヴァーヌ≫ ベートーヴェン 交響曲第9番ニ短調「合唱付」op.125 ＊歌詞対訳　一部改訂、再録される バーバー／ラヴェルの両作品は、現代にも映画に使用されるなど比較的有名な作品である。 今年は「ベルリンの壁」が崩壊して25周年にあたり、その式典で歌われたのがやはり≪歓喜によせて≫であった。「第九」が表現しようとする「連帯」と「歓喜」について、現代の世界状況と合わせて解説。

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
40. 京都フィルハーモニー室内合奏団 197 回定期公演［3200 字］	単著	平成27年3月14日	京都フィルハーモニー室内合奏団	モーツァルト「フィガロの結婚」より≪序曲≫ ベートーヴェン ピアノ協奏曲第4番 Op.58 交響曲第8番 Op.93 3曲は共に、時代を反映した作品である。解説では、フランス革命前夜の雰囲気が色濃い「フィガロの結婚」、ナポレオンのヨーロッパ席捲を背景としたベートーヴェンの作品群を、それぞれに関連性アルタ作品との比較によって解説した。
41. 弦楽六重奏曲の粋	単著	平成27年4月24日	京都コンサートホール コンサートホールアンサンブルホールムラタ パンフレット2-3頁	ブラームス:弦楽六重奏曲第1番変ロ長調 Op.18 チャイコフスキー：弦楽六重奏曲ニ短調 Op.70 ≪フィレンツェの思い出≫ ヴァイオリン：ゲオルギ・バブアゼ、梅原ひまり　ヴィオラ：山本由美子、江口純子　チェロ：林裕、上森祥平 19世紀の産物である、弦楽六重奏曲というジャンルの特性を社会的背景から解き明かし、さらにブラームスやチャイコフスキーの創作活動における、各作品の位置づけと現代における意義を解説。
42. 京都フィルハーモニー室内合奏団 199回定期公演「ラヴェル讃」［3200字］	単著	平成27年6月28日	京都コンサートホール コンサートホールアンサンブルホールムラタ パンフレット3-5頁	ラヴェル≪クープランの墓≫（管弦楽版）、≪ピアノ協奏曲≫、≪亡き王女のためのパヴァーヌ≫（管弦楽版）、≪マ・メール・ロワ≫（バレエ全曲版 2つの大戦をはさんで作曲家であったラヴェルは、志願して兵隊として働いたこともある人物である。文化が政治に利用されることを徹底的に拒む一方で、友人の死を悼んで作曲し、戦争で右手を失った友人のためには、左手のコンチェルトを作曲した。平和と芸術の関係性について注目した曲目解説。
43. 京都市交響楽団特別演奏会「第九コンサート」［3500字］	単著	平成27年12月26／27日	京都市交響楽団（京都コンサートホール）	シベリウス ≪交響詩「エン・サガ（伝説）」op.9 ≫12月26日 ≪交響詩「タピオラ」op.112 ≫12月27日 ベートーヴェン 交響曲第9番ニ短調「合唱付」op.125 ＊歌詞対訳　一部改訂、再録される 指揮:高関 健　合唱:京響コーラス 独唱:平野雅世(S)　西原綾子(Ms)　小餅谷哲男(T)　桝 貴志(Br) 国民楽派と言われるシベリウスとベートーヴェンの「第九」の共通点は、「祖国」である。時間軸として、シベリウスは過去（ルーツ）を、ベートーヴェンは、未だ実現しない未来（憧れ）を音楽で描いた。宗教的背景をもった民族的・国家的確執が、各地で紛争となって現れている現在と作曲者の時代性に注目した曲目解説。

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
44. 京都フィルハーモニー室内合奏団 201回定期公演「ニューイヤー」[3200字]	単著	平成28年1月9日	京都コンサートホール コンサート（大ホール） パンフレット5-7頁	メンデルス・ゾーン≪序曲 フィンガルの洞窟 op.26≫、モーツァルト≪ヴァイオリンとヴィオラのための協奏交響曲 変ホ長調 K.364≫、ベートーヴェン≪交響曲第3番変ホ長調「英雄」作品5≫ 指揮：斉藤一郎 ：独奏：松野弘明（vn.） 川本嘉子(va.) ニューイヤーコンサートらしい、ポピュラーな作品が並んだプログラムである。作曲家それぞれの時代が望んだ「英雄像」とはどのようなものであったのか、時代背景を描くと共に、またそれが作品の中でどのような表現と通じるものなのか解説。
45. 京都市交響楽団第598回定期演奏会 [4200字]	単著	平成28年2月14日	京都市交響楽団 京都コンサートホール コンサート（大ホール）	エルガー ≪弦楽セレナードホ短調 op.20≫ ≪チェロ協奏曲ホ短調 op.85≫（ヴィオラ版） ドヴォルザーク≪交響曲第8番ト長調 op.88≫ 指揮:大友直人 :独奏:今井信子(va.) 両作品に共通する「イギリス」と「ヴィオラ」の2つがキーワード（テーマ）となっているプログラム。エルガーでは、作曲家と演奏家の関係性を、またドヴォルザークでは作曲家と出版社との関係性に着目した解説を執筆。
46. 京都フィルハーモニー室内合奏団 202回定期公演「ラヴェル讃」[3600字]	単著	平成28年3月6日	京都コンサートホール コンサートホールアンサンブルホールムラタ	ヴィヴァルディ≪調和の霊感 作品 3-第 11 番ニ短調≫、バッハ≪管弦楽組曲第 2 番ロ短調 BWV.1067、モーツァルト≪交響曲第40番 ト短調 K.550≫ 指揮／独奏:有田正広(fl.) バロックから古典派の時代にかけて現れる、調性・教会旋法などはじめとした、豊かで多様な音の力学に注目して曲目解説を行う。
47. 京都市交響楽団特別演奏会 「第九コンサート」[2800字]	単著	平成 28 年 12 月 27／28 日	京都市交響楽団（京都コンサートホール）	W.A.モーツァルト 歌劇「ドンジョバンニ」≪序曲≫K.527, 12月27日 歌劇「魔笛」≪序曲≫K.620, 12月28日 ベートーヴェン 交響曲第9番ニ短調「合唱付」op.125 ＊歌詞対訳 一部改訂、再録 指揮：ステファン・ブルニエ 合唱：京響コーラス 独唱：横山恵子（S） 手嶋眞佐子(Ms) 高梁淳（T） 伊藤貴之（Br） モーツァルト2つの序曲の背景をふまえ、特色を解説した。彼は、時代の転換期とともに、音楽家の在り方や社会的地位が大きく変わる時代にあった。作品は、民衆が主導権を握り始めた時代を反映する歌劇の序曲である。ベートーヴェンもまた、革命・産業化社会と大きく世界的に変化する時代に合った。作品と社会との関係性において、2人の作曲家を対比し、第九の現代的意味を中心に解説を執筆。

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
48. 京都市交響楽団特別演奏会 「第九コンサート」 [5000字]	単著	平成29年1月27日	京都市交響楽団（京都コンサートホール）	モーツァルト≪ピアノ協奏曲第 25 番ハ長調 K.503≫ ブルックナー≪交響曲第 0 番ニ短調 WAB.100≫（ノヴァーク版） 指揮：下野 竜也 独奏：パスカル・ロジェ（ピアノ） 時代を異にした地方出身者の作曲家が、それぞれの環境の中で、どのように仕事をし作品を残していったのか。時代の要請と、作品創作との関係性に重点を置き、解説したもの。作品が作曲された時代と無関係ではないこと、過去の作品を現代に再現していくことの意義について明示。また、その理解のために、教育の重要性について言及した。
【歌詞新対訳作成】 1. ベートーヴェン:交響曲第 9 番 ニ短調 Op125 第 4 楽章「歓喜によせて」	単著	平成 23 年 12 月	京都市交響楽団 第 557 回 定期演奏会 パンフレット	京都市交響楽団委嘱 ハインリヒ・フォン・シラー作 「歓喜によせて」新対訳作成
2. ヨハン・シュトラウス(息子)喜歌劇「こうもり」より ≪公爵様、あなたのようなお方は≫(アデーレのアリア)	単著	平成24年1月	京都市交響楽団 第 551 回 ニューイヤーコンサート パンフレット	京都市交響楽団委嘱 ヨハン・シュトラウス（息子）作 「こうもり」より ≪公爵様、あなたのようなお方は≫（アデーレのアリア）新対訳作成
【演奏会企画】 1. トーク＆バリア・フリー デュオコンサート「チェルノブイリから ー愛と平和を考えるー」	単独	平成 19 年 12 月	日本フリーメソジスト桜井聖愛教会（大阪）	チェルノブイリで自ら被爆体験を持つ医師の講演会とともに、ハンディキャップを持つアーティストによる合同コンサートを企画。困難な状況下でも、希望を得て新たに歩みだす勇気を生み出す「生きる力」育成を目指す。 講演：ザムラ・ヴァレンティナ、 ライブ：バリアフリーデュオ★ぢゃすたら
2. アウトリーチ型ワークショップコンサート「せかいりょこう in まぶね隣保園」	単独	平成25年6月20日	社会福祉法人 日本コイノニア福祉会 円町まぶね隣保園	地域の保育園と演奏団体と連携し、プロの演奏家によるワークショップ型のコンサートを企画。コンサートでは、まぶね隣保園での日常の表現活動や音楽遊びを重視し、まぶね隣保園バージョンでプログラムを組み、楽器体験や音楽を聴いてのお絵かき時間などをとった。 対象園児：2~3 才児 30 名 演奏曲目：国際急行列車、スペインの踊り 出演者：森本真裕美（京都フィルハーモニー室内合奏団、ヴァイオリニスト）
3. アウトリーチ型ワークショップコンサート「せかいりょこう in 光の子保育園」	単独	平成25年6月25日	社会福祉法人 京都地の塩会 光の子保育園	地域の保育園と演奏団体と連携し、プロの演奏家によるワークショップ型のコンサートを企画。光の子保育園での日常の表現活動や音楽遊びを重視し、光の子保育園バージョンでプログラムを組み、楽器体験や音楽を聴いてのお絵かき時間などをとった。 対象園児：5 才児 30 名 演奏曲目：金婚式、タイスの瞑想曲他 出演者：森本真裕美（京都フィルハーモニー室内合奏団、ヴァイオリニスト）

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
4. ストリングスストーリー　―がっきで、からだで、おはなししよう！	単独	平成25年8月12日	岡山県立美術館ホール	公立小学校（備前市立西鶴山小学校）と地域の文化施設（岡山県立美術館）との連携実践研究として企画した弦楽四重奏コンサート。西鶴山小学校の全生徒と、その保護者や家族を対象としたもの。コンサートでは、「喜怒哀楽」をキーワードに、音楽でそれがどのように表現されているのか、小学校音楽科鑑賞教材で既習の作品の他、事前授業で学んだ現代音楽で中村滋延作曲≪ソヴァン・マチャ≫を、映像・ダンスと共に鑑賞した。後のアンケートで、あらかじめ事前授業でコンサート内容を理解した子供たちが、音楽で表現された内容を深く読み取り、積極的な音楽聴取につなげていたことが明らかであった。さらに、保護者からは、生の弦楽四重奏をコンサートホールで、家族で聴く機会が持てたとの好評を得た。 対象児童：西鶴山小学校生と引率教員、保護者 演奏曲目：ワルツィングキャット、天国と地獄、ソヴァン・マチャ 出演者：京都フィルハーモニー室内合奏団、 奥祥子（ダンス） 映像：中村滋延（九州大学教授）
【演奏活動】 1. 中小企業庁「平成21年度　地域商店街活性化事業」KOBE ミュージック・ウォーク2010 コンサート出演	共同	平成22年3月	元町商店街 特設ステージ	ＫＯＢＥミュージックウォーク 2010 実行委員会からの招聘を受け、ヴィオラとピアノによる、ライブコンサート（グループ名：Maris Stella）に出演。小学校音楽科歌唱共通教材、および旧鑑賞共通教材から作品を選び構成。好評を得る。 主催：ＫＯＢＥミュージックウォーク 2010 実行委員会 後援：兵庫県／神戸市／(財)神戸国際観光コンベンション協会／(財)神戸市民文化振興財団／(社)神戸港振興協会／神戸商工会議所／神戸新聞社／サンテレビジョン／ラジオ関西 ヴィオラ演奏を担当
【学会発表/シンポジウム／講演】 1. 「明治期における伝道集会とエンターテイメント― ジョージ・オルチン（George Allchin 1852-1935）による幻燈伝道集会をめぐって」	―	平成19年4月	福音主義神学会　神戸神学館	オルチンは明治時代初期に来日した宣教師であり、同志社や神戸女学院など、各種のキリスト教系学校の創設に関わった人物である。彼の活発な宣教活動は、教育活動でもあり学校がその理想的モデルとなっていた。このような彼の活動の実態は、昨今のキリスト教とセットになった文化のグローバル化の議論とは、全く逆のものであった。本論では、日本文化の中で奮闘した宣教師ジョージによる、オリジナル幻燈伝道制作に注目したものである。彼の伝道活動において想定されたのは、学校に通う児童生徒、保護者たちであり、あくまでも日本の豊かな風俗や文化的背景を尊重したものだった。彼の幻燈伝道で用いられた音楽と、そこに込められた道徳観や規範意識を明らかにしつつ、日本との比較分析を行った。それにより、今日の「文化のグローバル化」の問題を、教育実践ととらえ、論述した。

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
2.「現代に生きるメソジストと音楽－グローバル･ソング Global Song（グローバル･ヒムノディ Global Hymnody）の視点から」	－	平成19年9月	日本ウェスレー・メソジスト学会第9回大会 チャールズ・ウェスレー生誕300周年記念　於：関西学院大学	初期メソディストの指導者であったジョン・ウェスレーにとって、讃美歌の歌詞とその歌唱方法は、信徒教育の意味を持ち、他の派とは違った理解があった。本稿では、そのようなメソディストの伝統における讃美活動を、『Global Song』あるいは『Global Hymnody』を手がかりに考える。『Global Song』『Global Hymnody』では、土着の、あるいは伝統的旋律を用いたものや、それを現代的な旋律に翻案したものなど、様々な試みが展開し、地域文化を尊重した讃美歌創作へとつながっている。信徒教育の意味を持ったメソディストの讃美歌には、社会の構成員として求められる道徳心や規範意識が盛り込まれており日本における唱歌教育の目標と重なる点は多い。 本発表では、ウェスレーの歌唱指導の理念と彼が編纂した歌集を、現代の音楽科指導と共通教材と比較し分析を加えた。また『Global Song』の視点をヒントに、歌唱教材が「自分たちの歌」として成立するための基本的条件について述べた。
3.「チャールズ･ウェスレー生誕 300 年を記念して」	－	平成 19 年 11 月	日本フリーメソジスト教団 西部教区 信徒大会　於：日本フリーメソジスト加古川キリスト教会	チャールズ･ウェスレー作の讃美歌を中心とした、メソジストの伝統的讃美歌のレクチャー。チャールズ・ウェスレーはジョン・ウェスレーの弟であり、6000とも言われる詩歌を残している。チャールズの詩をジョンはそのまま使用したわけではなく、大胆な編集の手を加え、それを当時の流行歌など、比較的覚えやすいメロディーに乗せて信徒に提供していった。歌詞に込められた信徒教育の目標とともに、ジョンの歌唱指導方法について詳説。さらに、現代の音楽教育で採用されている楽曲をとり上げ、歌詞の内容的な共通点を分析するとともに、行われている歌唱指導との共通点を明らかにし、各人に応じた発声法とともに、合唱の際に必要な技法について解説し、指導を行った。
4.「静かにささやく声」	－	平成21年7月	関西学院大学　神学部チャペル　講演	明治初期に来日した宣教師オルチンの、幻燈伝道活動の裏にあった彼の音楽を媒体とした教育理念を、宣教レポートの記述から明らかにする。彼の幻燈伝道は学校教育においても度々実践され、教材として用いられたものは道徳的な内容のものが多い。キリスト教精神に基づく道徳観を日本の風俗に変換するために用いた彼の手法において、音楽は教育効果をさらに高めるために必要なものであった。音楽教育が単に「音楽」に限られた教育目標を持つものではなく「生きる力」として人間を支えていく力となっていくと想定されていたことを、オルチンの記述から示唆した。

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
5.「18 世紀メソディストにおける讃美歌と公共性−個人的体験から共同体の一致体験へ−」	ー	平成 21 年 10 月	第 60 回日本音楽学会全国大会　大阪大学	メソディスト運動とは、英国国教会司祭ジョン・ウェスレーJohn Wesley によって 18 世紀末半ばから英国で展開された信仰復興運動である。その特性は、ウェスレーの個人的な信仰的覚醒がその発端となっている点であり、「会衆歌」（共同体の歌）として設定された讃美歌にその影響があることだ。指導者ウェスレーにとって、讃美歌の歌詞とその歌唱方法は、信徒教育の意味を持ち、その讃美には、社会の構成員として求められる道徳心や規範意識が反映され、新しい時代の「公共圏」の創造に大きな役割を果たした。本発表ではウェスレーの歌唱指導の理念と、現代の日本の音楽科教育目標との共通点に注目し分析を行った。特に、教育的配慮と「公共性」の視点から、初期メソディストの讃美歌の歌詞に注目し、「共に歌うこと」による歌詞内容の理解の強化を明らかにした。
6. 音楽科教育における地域連携の可能性をさぐる　― 広がる教室とこころの育ち ―(「再掲」)	ー	平成22年8月	主催：非営利特定団体人間教育研究協議会（於）芦屋市立宮川小学校	第 26 回人間教育実践交流会　2011 年　芦屋フォーラム「確かな学力とこころの教育ー新教育課程とその実践ー」「音楽」部会コーディネーターとして、発表者の選定ほか運営を行う。日本各地で個々に始まりつつある音楽科教育における「出前授業」をはじめとした専門家のアウトリーチ活動の受容状態や、文化団体の教育プログラムについて概観し、分析を行った。本発表は実践成果を共有することにより、子供たちのこころの育ちを、芸術文化をキーワードに支援し実現していくための連携について、問題提起するものである。
7. コンサートホールにおける「教育プログラム」の構造と作品アプローチーウィグモア・ホール Wigmore Hall（英国：ロンドン）の教育プログラムを中心にー	ー	平成 23 年 11 月	2011 年　日本音楽学会第 62 回　全国大会（於）東京大学	本研究発表は、英国における地域密着型コンサートホールの運営する「教育プログラム」の分析を通して、1 つの音楽現場における作品へのアプローチの実態を検証し、作品受容における方向性の広がりと可能性を示そうとするものである。とりあげたウィグモア・ホールの教育プログラムは、人生の全ステージにおいて、多様な関心とレヴェルにあった音楽享受のレディネスを保証する、戦略的な構造となっている。中でも特徴的なのは、地域の幼稚園や小学校で活用できる「デジタル教材」を用意しており、幼児や児童生徒を対象としたコンサートと連携するしくみを構築していることである。そのような努力の結果、同ホールのスクールコンサートは通常のコンサートでは演目にのりにくいレパートリーや難解とされる作品を扱う内容となっている。本発表では、ホール運営における戦略的な構想と扱われる作品の新たな意義づけを通し、幼児期の表現活動、また小学校音楽科教育内での受容の実態にたつ音楽作品へのアプローチの可能性を示すものである。

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
8. The Study for The digital Teaching Materials which used “Warabe-uta” into Music Education of Japan. — The Outlook and The Issues— (Full Paper) 「わらべ歌」を音楽教育に用いたデジタル教材に関する研究－展望と課題－	－	平成24年3月	SITE 2012--Society for Information Tecnology & Teacher Education International Coference 2012 In Austin Texas Association for the Advancement of Computing in Education （査読あり）	本発表は『「わらべ歌」を用いたデジタル教材の活用』についての発表である。「わらべうた」とは伝統的な子どもの遊び歌であり、非常に少ない音による単著純な構造を持つ。「わらべ歌」を音楽教育に持つことにより、幼稚園や小学校の教師はピアノをはじめとした特別な音楽の技術や技能を必ずしも要することなく、表現活動や音楽の授業を進めていくことができるという利点がある。一方、日本のデジタル教材の開発は、十分に研究が進んでいるとは言い難い。本人担当部分：「わらべ歌」導入についての実態調査と分析、論文執筆。大阪教育大学寺尾研究室で作成された当該教材について、現場での使用の実態を調査し、日本における全体的なデジタル教材の普及率と比較検討を担当した。同時に、今後の課題を示すと共に、幼児から初等教育へ連続して子供の力を伸ばすデジタル教材の活用についても提案事例を示し 【教員教育・情報技術教育国際学会　プレゼンテーション】山本美紀／寺尾正／竹下裕来 教員教育・情報技術教育国際学会 ＊発表については、単独発表
9. 「草創期メソディスト讃美歌集にみるウェスレーの芸術観— 『ファウンダリー･コレクション Foundery Collection』より—」	－	平成24年9月	日本ウェスレー・メソジスト学会　於：日本基督教団銀座教会	ソディストの最初期の讃美歌集“The Foundery Tune Book” 実際に使われている音楽の分析を通し、ウェスレーの芸術観と音楽教育について考察したもの。再版されることがなかったことから、編集者ジョン・ウェスレーにとっての「失敗作」「試験作」という意見方がされてきたが、楽譜を確認すると、記譜法などの通常との違いは、音楽教育を受けていない当時の一般の人々にとって、わかりやすく表記しようとした意図が見える。 “The Foundery Tune Book”の分析によって、会衆歌の芸術性と共に、対象を明確化することによる楽譜の役割と公共教育の効果について明らかにした。18 世紀のウェスレーらによる楽譜の検討を通し、楽譜の持つ意味と芸術教育との関わりについて考察した。

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
10. シンポジウム「地域発、生活発、共同体発、1950 年代以降のキリスト教各派の新しい讃美歌 ― 伝統と信仰の普遍性を越えて ―」コーディネーター	―	平成 24 年 11 月 24 日	日本音楽学会第 63 回全国大会（於）西本願寺聞法会館	18 世紀イギリス産業革命時に起こった「メソディスト運動」は、社会システムの変換が新しい共同体生成の契機となり、そこには必ず新しい共同体の歌が生まれることを示している。そのような共同体の誕生や社会的要請と創作との関係は、普遍である。特に第 2 次世界大戦を受けた第 2 バチカン公会議前後から現代に至る、社会変革に伴う讃美歌をはじめとした教会音楽に認められる変化は、カトリック／プロテスタントにかかわらず、歴史的に激しく大きなものである。讃美歌集の変化の中で特に顕著なものに、「こども讃美歌」の扱いがある。このような教会内外の状況変化から、本パネルでは、教会内外で音楽活動に携わるキリスト教各教派のパネラーによって、1950 年代以降の変遷のそれぞれの音楽的特徴をふまえつつ、地域の音楽教育の場としての教会と讃美歌の果たす役割についてシンポジウムを行った。 コーディネーターおよび、17 世紀～18 世紀イギリスにおける音楽と文化について発表を担当。 コーディネーター：山本美紀 パネリスト：小栗献（関西学院大学礼拝音楽非常勤講師）、長畑俊道（立教小学校音楽科教師）、林祐美子（エリザベト音楽大学教授）、山本有紀（松山東雲女子大学子ども学科教授）
11. 共同発表「教育プログラム」としての作品創作の試み －中村滋延 「悲しみの島」プロジェクトと教科領域への挑戦－	―	平成 24 年 11 月 25 日	日本音楽学会第 63 回全国大会 （於）西本願寺 聞法会館	研究代表を務める「学校・文化施設による＜持続可能な地域文化力＞を育む『連携型プログラム』の開発研究」（科学研究費補助金（基盤研究 B）における連携型教育プログラムに使用するコンテンツ作成に関する研究発表である。本研究プロジェクトでは、現在、中村滋延作曲弦楽四重奏曲集「悲しみの島」より≪ソヴァン・マチャ≫、同氏作メディアアート、創作舞踊（楳茂都梅弥月氏）をコラボ―レションさせた、保・幼・小および、中・高教育に用いる教材創作に取り組んでいる。本発表では、発達段階に沿ったプログラム開発の創作過程及び、その実践より得た成果から、各校種の連携を視野に入れ、教科の領域を超えて能動的に芸術を受け止めていく力を育む、教育方法の方向性について、考察を担当、発表した。 発表者：山本美紀、中村滋延、根岸一美
12. 初期メソディストの讃美に託されたもの ― 個人的体験から共同体の信仰告白へ ―	―	平成25年9月14 日	日本賛美歌学会第 13 回全国大会 （於）青山学院女子短期大学	ウェスレーは会衆のために、最初の讃美歌集『ファンダリーに集う会衆のための旋律付き讃美歌集』“A Collection of Tunes set to Music as they are commonly sung at the Foundery”を出版し、その後約 20 年たって 2 冊目の讃美歌集『讃美歌選集』（1761 年、Select Hyms with Tunes Annext）を出版した。本発表では、まずウェスレー「讃美の心得」‘The Directions for Singing‘を概観後、『ファンダリー・コレクション』と『讃美歌選集』に収められた讃美歌の比較を通し、ウェスレーが会衆讃美に託した教育的機能を考察し、彼の音楽指導法について発表を行った。

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
13. 園・学校とホール・芸術文化団体とによる連携型教育プログラム研究 ― 持続可能な地域文化力をはぐくむために ―	―	平成 25 年 10 月 12 日	日本音楽教育学会第 44 回　全国大会 （於）弘前大学	学校教育課程における音楽科教育は、様々な音楽や音楽活動に触れる重要な入り口となる役割は果たしているが、それぞれの音楽の良さを味わうなために必要な教育方法への言及は少なく、現場に任されている。本発表では、具体的な教育的内容に踏み込むための課題に取り組むべく、①芸術作品聴取への取り組み、②教科領域の越境と可能性、の 2 つの観点から、連携型教育プログラム研究でのこれまでの保・幼・小各校種での成果を分析し、発達段階に即してスパイラルに発展する鑑賞教育の方法を提示した。さらに、教育期間を超えても、自分で芸術作品聴取の可能性を広げ続けるための、主体的鑑賞経験の基盤づくりについて提言を行った。
14. ホール･芸術文化団体と学校とによる「連携型教育プログラム」開発をめぐってードラマが導く音楽芸術体験の深化ー	―	平成 25 年 11 月 2 日	日本音楽学会第 64 回全国大会（於）慶応大学	本発表は、ホールやオーケストラ団体などといった地域既存の文化資源と教育機関との連携による「連携型教育プログラム」の開発をめぐって、「ドラマ」（物語性）が受け手の芸術体験の深化にどのような役割を果たすのか考察するものである。「連携型教育プログラム」が目指すのは、単に子どもたちが「盛り上がる」ことではなく、他の芸術プログラムに対しても、主体的受容姿勢につながる強い動機となる芸術体験の積み重ねを実現することである。「連携型教育プログラム」とは、学校と多様な文化施設とがふさわしい形で連動し、〈持続可能な地域文化力〉を高めることに寄与する芸術教育プログラムをさす。今回の発表では子どものための「連携型教育プログラム」開発をめぐり、音楽芸術の様々な入り口について「ドラマ」をキーワードに発表した。
15. 音楽マーケットとしての「日本」の始まり―アウセイ･ストロークのジャパン･プロモートをめぐって―	―	平成 25 年 11 月 24 日	『会館芸術』研究会発表 東京大学駒場キャンパス	アウセイ・ストローク（1887-1956）は、雑誌『会館芸術』のスポンサーである朝日新聞社社主村山家をうごかし、フェスティバルホールのこけら落としに「大阪国際フェスティバル」の開催を勧めた「きっかけ」となった人物である。彼が招聘した海外からの演奏家の多くは地方公演も行い、各地の小学校などで交流活動を行い、それがきっかけとなって音楽家を目指し演奏家となった日本時も多い。本発表では、そのような日本の音楽界の将来をにらんで教育的活動も続けたストロークについて、「大阪国際フェスティバル研究」に関わる史料に基づき、音楽教育界に与えた影響を明らかにすると共に、戦後日本の音楽界の土台をつくった音楽マネージャーの仕事について、概観した。
16. 朝日会館から大阪国際フェスティバルへ　ーストロークの残像と影響 ―	―	平成26年7月13 日	『会館芸術』研究会発表 東京大学駒場キャンパス	大阪国際フェスティバルは、かつて日本における音楽祭の代名詞であり、実質的には日本初の国際音楽祭である。本発表では、提唱者であるアウセイ・ストロークが、どのような音楽祭を志向し、スポンサーの朝日新聞社社主村山一族に提示していたのか明らかにし、ストロークの死後、その影響がどの程度まで大阪国際フェスティバルに残っていたか、講演内容から考察した。日本の洋楽受容の基本的イメージを構成した彼の仕事は、日本近代音楽史に重要な足跡を残している。

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
17. シンポジウム「地域と音楽 ーコミュニケーション力を有する相互作用型コンテンツ形成と音楽芸術をめぐってー」	ー	平成 26 年 11 月 9 日	日本音楽学会第 65 回全国大会（於）九州大学大橋キャンパス	コーディネーターを務める。パネリストは尾本章（非会員：九州大学）大久保充代（非会員：八尾市文化ホールプリズムホール館長）中村滋延（西日本支部：九州大学教授）このパネル企画のテーマにある、「相互作用」の「相互」とは今回の場合は、「音楽作品」と「環境」を念頭に置いていた。音楽作品とは、作品そのものであるのに対し、環境には演奏会場や地域、演奏者、聴衆、企画者などが含まれる。環境の直接的影響をうけて作品がつくられ、さらに新しいジャンルが成立しつつあるという現代の事情として、それらを全体的なコンテンツとして包括的に分析する視点や方法論が今後必要とされているというのが本パネルの持つ課題意識である。本パネルでは特に、地域の教育と文化の拠点として小学校・中学校に向けての「コンテンツ研究」について意見を交わした。コーディネーター及び2人のパネルからは作品の学校という環境、児童生徒を対象とすることから作品そのものの「有り様」が変化した事例を提示、作曲家の中村氏からは、子供たちの「他者と関わる態度の深化」につながることを目指して「コミュニケーション力のあるコンテンツ」の作った経験から、また、尾本氏には作品を巡る環境である建築と、環境に関わる人材育成について、大学教育の立場から話題提供をいただいた。
18. 岡山孤児院における音楽的事象と教育　―石井十次の「音楽」の用い方―	ー	平成 26 年 12 月 12 日	同志社大学人文科学研究所第1研究会近代日本とキリスト教（於）同志社大学 啓明館　第1合同研究室	岡山孤児院において音楽幻燈隊活動の前提となる音楽教育を、多様な先行研究の検討及び、今日の近代音楽史研究の成果を踏まえながら明らかにした。特に本発表では、岡山孤児院音楽隊を舞台に展開した、近代日本音楽教育史と近代音楽史、及び近代日本宗教史研究のトライアングルな状況が持つ研究課題を明らかにした。 その結果、これまでの「音楽隊活動は救世軍の影響であった」という定説を覆し、当時のごく一般的な西洋音楽消費とそれほど変わらなかったこと、また、孤児院内の器楽教育が、当初はシグナルとして使用されることが目指され、後にそれが情緒の育成から音楽的内容を含むものへと変化していったことを明らかにした。
19. 岡山孤児院音楽隊を巡る音楽環境と、近代日本におけるキリスト教 Band 文化の萌芽をめぐって	ー	平成27年3月	京都大学アジアと宗教的多元性研究会-（於）京都大学 キリスト教学研究室	岡山孤児院と音楽隊についての研究は、これまで音楽的事象に着目してこなかったことで、取りこぼした点や誤解してきた点だけでなく、さらなる広がりを持った研究領域との接続が困難であった。本稿では、楽隊が始まる以前の岡山孤児院の日常的音楽状況から結成直前の音楽教育、特に器楽教育に関わる内容を明らかにした。さらに、石井十次や聴衆となった大衆が触れたキリスト教を背景とした音楽状況の特性を明らかにした。その結果①キリスト教音楽における1ジャンルである器楽音楽が、「バンド文化」として関西で、しかも子どもの手によって始まったこと、②当時の豊かな世俗曲（謡も含め）を背景としたキリスト教音楽が存在したことを明らかにした。さらに今後の研究として、近代日本の音楽文化の大衆化と音楽教育との関わりについて可能性を示した。

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
20. シンポジウム 「會舘」という文化装置－『會舘藝術』と大阪朝日会館	－	平成27年3月14日	『会館芸術』研究会主催シンポジウム 東京大学駒場キャンパス	パネリストとして参加。 パネル発表「朝日会館と大阪フェスティバルホール－箱を文化装置化するということ」 1926年から1962年までかけて存在した「大阪朝日会館」とその機関誌『會舘藝術』の、関西のモダニズム運動をけん引した働きについてのシンポジウムと展覧会。その中で、文化施設・機関雑誌として、社会的に果たした教育的役割と啓蒙的役割、またその後の生涯教育との関連性について解説を行う。特に音楽マネージャーと日本人スタッフによって達成された地方公演は、遠征地での児童たちとの関わりを可能とし、洋楽受容をより身近なものとして受け止めることを可能にした点に注目した。 ＜パネリスト＞岡野博（東京大学博士課程）、前島志保（東京大学准教授）、ヘルマン・ゴチェフスキ（東京大学准教授）、高山花子（東京大学博士課程）、山本美紀（奈良学園大学准教授）、 ＜コメンテーター＞渡辺裕（東京大学教授）
21. トーク・イベント 中之島3丁目 時代と建築の響き合い「よみがえる朝日会舘」	－	平成27年8月28日	アサヒコムホール 主催；朝日ファミリー・ニュース、後援；朝日新聞社、協賛；竹中工務店、関電工、高砂熱学工業、協力；朝日ビルディング	登壇者として参加。 関西モダニズム運動の牙城となり、建築としても特徴的な朝日会館そのものに焦点をあてたトーク・イベント。研究会の成果を広く社会に知らせる目的も同時に持っていた。基調講演では特に、朝日会館で行われた子供の教育に関するプログラムについて言及し、地域の教育・文化施設として朝日會舘が果たしていた役割、また教育内容とその方法論について、その芸術的内容と共に、解説を行った。 ＜登壇者＞前島志保（東京大学准教授）、山本美紀（奈良学園大学准教授）、山上揚平（東京芸術大学講師）ほか
22. 「音楽と社会」研究会シンポジウム：音楽が生起するとき－出会う《職業人・愛好者・大衆》－ 「音楽を媒体とする場の考察から －宗教・教育・音楽祭－」	－	平成28年1月23日	「音楽と社会」研究会 立命館大学衣笠キャンパス創思館	基調講演者として登壇 芸術作品の成立に欠かせない、芸術科や鑑賞者、価値を歴史的に担保・維持する関係性について、特に音楽の実践における人々の関係性に着目して開催されたシンポジウム。 講演では、音楽祭や専門家による教育プログラム等の音楽活動における、音楽家と人々との関係性の歴史的変遷について論じる。 長年、芸術によって社会を有機的に結びつけることを盲目的に信じる考えが合ったが、近年では「芸術の社会を分断する力」を認識し、克服しようとする目的が、欧米諸国における芸術に携わる諸団体の各種「教育プログラム」やアーツカウンシルの取り組みの根底にあり、それが作品そのものにも影響を与えていると考えられる。本講演では、これまでの日本における「アートマネージメント」や「文化政策」の課題を提示した上で、欧米諸国の現状を紹介し、後の議論につなげた。

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
23. 2016 日本賛美歌学会第 16 回全国大会パネルディスカッション「賛美歌の共有について思うこと」	―	平成 28 年 9 月 10 日	立教大学　池袋キャンパス 主催：日本賛美歌学会	「讃美歌の共有を考える－『共通讃美歌』をきっかけに」司会者／ファシリテーターとして登壇 明治以降現代に至るまで、教派により様々な賛美歌が日本で出版されてきた。そのため、同じ賛美歌であっても訳の違いや、誤訳、あるいは神学上の問題点など、情報の混乱が見られる現代である。さらに、社会的な課題に向き合う海外の賛美歌創作の状況を考えるならば、今日日本において賛美歌そのものだけでなく、賛美歌に関わる様々な情報の共有が至急の課題であることは明らかである。本パネルディスカッションでは、ようやく始まろうとしている賛美歌の共有に関わる現代の課題を提示すると共に、共有することの意義、また意識の共有について扱った。 司会／ファシリテーター：山本美紀　パネリスト：水野隆一（関西学院大学）、宮崎光（立教大学）、宮越俊充（上智大学）ほか

教　育　研　究　業　績　書

平成 29年3月31日

氏名　渡邉　規矩郎

研究分野	研究内容のキーワード
教育学、史学、社会学	教員の資質向上、歴史・伝統文化、日本の芸道、民俗・信仰

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例 （1）ライフワークとしての伝統文化・先哲の学問を生かした授業	平成19年4月～23年3月	終生の学問として、大学卒業後も、日本の歴史・伝統・文化に関する学問（水戸学、崎門学、神道などの日本学）を平泉澄博士、田中卓博士らに師事して学び、また、日本学協会、藝林会の同友と切磋琢磨しながら研鑽してきた。この学問の蓄積を生かし、兵庫教育大学大学院学校教育学研究科の教授として担当の「教員の社会的役割と自己啓発」（共通科目、１年次配当、半期、必修２単位）の授業、特に「自己啓発」の分野について、先哲の生き方、学問に対する姿勢を中心に講義を行い、院生の人間としての修養、自己啓発につなげた。院生でも始めて学ぶ事柄が多く、高い関心を示した。
	平成23年4月～24年3月	兵庫教育大学大学院学校教育学研究科の非常勤講師として、教授時代と同じ「教員の社会的役割と自己啓発」（共通科目、１年次配当、半期、必修２単位）の授業を担当、特に「自己啓発」の分野について、先哲の生き方、学問に対する姿勢を中心に講義を行い、現職教員が多数を占める院生の自己啓発に努めた。
	平成23年4月～現在に至る	環太平洋大学次世代教育学部の教授として担当の「日本の伝統文化」（教養科目、１年次配当、半期、選択２単位）の授業では、長年蓄積した学問を平易に講義することに努めた。さらに、平成26年4月より奈良学園大学人間教育学部で「教育と日本の伝統文化」や「日本事情」の授業を担当している。両大学の学生は、前提となる日本の歴史や人物について全くと言っていいくらい知らない。そこで、歴史のエポックと人物をクローズアップするシラバスを作って授業。学生は、初めて知ることばかりなので、興味と関心を示し、アンケートの感想からも学生の満足度は高い。
（2）実務経験を生かした授業 ・マスコミ人としての経験を生かした指導	平成19年4月～24年3月	兵庫教育大学大学院学校教育学研究科の教授として担当の「教員の社会的役割と自己啓発」（共通科目、１年次配当、半期、必修２単位）、「教職員職能開発と研修プログラムの開発」（専門科目、２年次配当、必修２単位）、「学校経営専門職インターンシップ」（専門科目、２年次配当、選択必修10単位）、「教育行政専門職インターンシップ」（専門科目、２年次配当、選択必修10単位）の授業で、昭和41年以降にマスコミ人、特に教育ジャーナリストとして直接に経験したことを、「生き証人」として臨場感を持って行った講義は、学部からのストレート入学組の院生にも現職教員の院生にも共に好評であった。
	平成23年4月～平成26年3月	環太平洋大学次世代教育学部の教授として担当の「時事問題」（専門基礎科目、３年次配当、半期、選択２単位）、「マスメディア論」（教養科目、４年次配当、半期、選択２単位）の授業では、ジャーナリストとしての物の見方・考え方、取材経験を存分に生かして平易に講義することに努め、アンケートの感想からも学生の満足度は高かった。
・神道人としての経験を生かした指導	平成23年4月～現在に至る	環太平洋大学次世代教育学部、奈良学園大学人間教育学部の教授として担当の「日本の伝統文化」の授業では、神社宮司として身につけている古典、宗教学、宗教史、神道神学、有職故実、倫理学などの学問、神職としての経験や知見を生かした講義を適宜行っている。授業の感想からも学生の満足度は高い。
・武道や技芸の経験を生かした指導	平成23年4月～現在に至る	環太平洋大学次世代教育学部、奈良学園大学人間教育学部の教授として担当の「日本の伝統文化」の授業で、武道（弓道３段、居合道２段、銃剣道初段）、技芸（詩吟、書道＝段位等なし）や礼法などの素養は、関連した内容を教える際に大いに役立っている。平成２４年度から中学校で武道が必修化になったことに伴い、教員志望の学生は特に関心を持って受講している。
（3）蓄積した実物資料を活用した取り組み	平成19年4月～現在に至る	大学の担当授業においても、半世紀近い取材活動の中で保有しているナマの現物資料、画像、録音資料、新聞・雑誌記事などを講義に取り入れて提示することで、院生、学生が観念的な理解で終わることなく、より具体的に理解していくことに役立っている。
（4）その他、教育効果を高める取り組み ・ディベートやディスカッションの導入 ・学生の発表を基にした授業 ・院生・学生の授業評価の活用 ・視聴覚教材の活用 ・プリント資料の提供	平成19年4月～現在に至る	兵庫教育大学大学院においても、環太平洋大学においても、授業改善が共通の課題として取り組まれる中、一方的な講義でなく、双方向・学生参加型のアクティブラーニングの授業を適宜適切に導入することに努めた。また、パワーポイントなどを活用することで、視聴覚に訴えて学生の理解の促進を図ってきている。

事　　項	年月日	概　　要
2　作成した教科書，教材		
・冊子「教育の灯火」	平成19年4月～24年3月	昭和63年から平成元年にかけて、関西にゆかりのある教育の先達（森信三、弥吉管一、今井鑑三、東井義雄、田村一二、戸田唯巳、梅原猛、重松鷹泰、西岡常一、福井謙一）に「教育を聞く」インタビュー取材を行い、『日本教育新聞』に連載した。これを冊子（Ａ４判３３頁）に編集し直し、自作教材として兵庫教育大学大学院の「教員の社会的役割と自己啓発」の授業で使用し、学習効果が高まった。
・ハンドブック「教育課題シリーズ」	平成19年4月～24年3月	現場教師に役立てるため、平成１６年度にハンドブックを企画、専門研究者に執筆を依頼して、日本教育新聞社から「教育課題シリーズ」として発行した。①授業改革と通知表（梶田叡一）②学校の危機管理（若井彌一）③個に応じた指導（北俊夫）④信頼される学校づくりへの学校評価（天笠茂）⑤子どもが育つみちすじ（服部祥子）⑥教師として成長すること（浅田匡）⑦これからの総合的な学習（角屋重樹）⑧学校教育を変える（若月秀夫）⑨学校改善と組織改革（佐古秀一）の９冊。この冊子を兵庫教育大学大学院学校教育学研究科の「教員の社会的役割と自己啓発」、「教職員職能開発と研修プログラムの開発」、「学校経営専門職インターンシップ」、「教育行政専門職インターンシップ」の授業で教材として用い、当該授業はもちろんのこと、学校教育研究科全般に活用できるものと高い評価を得た。
・教育セミナー収録集　全13集	平成19年4月～24年3月	平成８年から私が責任者となり、日本教育新聞社関西支社と人間教育研究協議会が共催して始めた教育セミナーの収録集を平成２０年まで毎回、日本教育新聞社から発刊した。この全１３集は、国の教育改革の動向、その時々の教育課題と研究実践を凝縮したようなものとして意義がある。これを適宜、兵庫教育大学大学院の授業で活用するとともに、院生研究室にワンセット寄贈して利用に供した。
・自作資料「自己啓発ということ～先哲遺文から～」	平成19年4月～現在に至る	吉田松陰「松下村塾の規則」「松下村塾の聯」「松下村塾記」、橋本景岳（左内）「啓発録」を収録した冊子を自作して兵庫教育大学大学院の「教員の社会的役割と自己啓発」の授業、環太平洋大学の「日本の伝統文化」の授業で用い、院生や学生は、先哲の志とそれを培った学問の深さに驚嘆、非常な刺激となった。
・先哲の遺文の講義の打聞等	平成19年4月～現在に至る	学卒後、恩師や先輩より受けた先哲の遺文の講義の打聞や録音テープ起こし記録などを兵庫教育大学大学院の「教員の社会的役割と自己啓発」の授業、環太平洋大学の「日本の伝統文化」の授業で用い、院生や学生は、先哲の学問とその底流に流れる日本の歴史・伝統・文化を理解するのに役立っている。
・日本の学校教育の歩み（年表）	平成21年9月～現在に至る	兵庫教育大学が設置した「教材文化資料館」の展示委員として、明治以降の「日本の学校教育の歩み」 を年表として作成し、パネルとして同館にかかげ展示した。教育内容行政の変遷を中核にしたもので、パネル以外でも学内で広く活用されている。
・自著の新聞・雑誌記事、論文、評論、紀行、エッセイ	平成19年4月～現在に至る	長年にわたり新聞・雑誌に執筆してきた記事や論文、地域の自治会誌に連載中の紀行文などを授業に活用したり、レポートの参考に供したりしている。
・講義用補助教材	平成19年4月～24年3月	学校不信、学級崩壊、指導力不足教員、モンスターペアレンツなどの問題、各業種の職業倫理や時事的課題、マスメディアの現状など、マスコミの世界に籍を置いている立場から得られる情報や資料を院生、学生に提示して高い評価を得ている。
3　教育上の能力に関する大学等の評価		
・採用決定の際等における評価内容	平成19年4月	教職大学院の新しい教育のスタートにあたり、教育ジャーナリストとしての長年の経験とそれを生かした教育に対し、大きな期待が寄せられた。
	平成23年4月	教育をはじめ幅広いジャーナリスト活動が認められ、「マスメディア論」、「時事問題」の授業を担当。また、水戸学や崎門学など日本の歴史・伝統・文化に対する継続した学問研究が評価され、「日本の伝統文化」の新設科目を担当することになった。
・大学設置・学校法人審議会の教員審査	平成19年7月	大学設置・学校法人審議会の兵庫教育大学大学院学校教育研究科教育実践高度化専攻（教職大学院）の教員審査で、「教員の社会的役割と自己啓発Ａ」、「教員の社会的役割と自己啓発Ｂ」、「教職員職能開発と研修プログラムの開発」、「学校経営専門職インターシップ」、「教育行政専門職インターンシップ」の５科目担当の教授として可の判定を受ける。
・自己点検・評価での評価結果	平成19年4月～23年3月	大学での授業経験がなかったが、「案ずるより産むが易し」で、おおむね満足のいく授業ができた。院生は現職教員が多く、共に学ぶことができ、新たな研究実践のスタートにもなった。
	平成23年4月～28年3月	大学院の授業は４年間経験したが、学部の授業は初めてで、最初は戸惑いが多かった。学生の基礎学力が予想以上に低いことに対し、教える内容が高く、量も盛り沢山だった。今は学生の実態に合わせた授業が思い通りできるようになっている。

事　　項	年月日	概　　要
・学生による授業評価	平成19年4月～24年3月	授業の節目と期末に評価と感想を求めた。院生の満足度は総じて高かった。例えば、平成20年6月24日の「教育政策とマスコミ」の授業に対して院生は「本授業の振り返りや考察等」の中で、「新たな学びが多々あり有難かった」、「講義は自分が全く知らなかった話が多く、それらを十分理解できるだけの基礎知識がなかったことで、理解・納得ができない部分もあったが、非常に興味深かった」、「講義は渡邉先生だからこそできる、興味深い話であった」など、興味・関心をそそる授業と評価している。
	平成23年4月～26年3月	毎学期の中間で学生アンケートをとり、後半の授業に生かすとともに、年度末にはリフレクションペーパーを作成している。平成２３年度の学生アンケートでは、「日本の伝統文化」の授業に対して学生は「先生の授業はとても楽しい」、「いろんな歴史について学べる」、「非常に細かく丁寧に教えてくれる」、「日本の歴史の深さがよくわかった」など、かなり満足した感想が書かれている。 また、「時事問題」と「マスメディア論」の授業に対しては、「日本や世界が抱えている問題について学ぶことができた。社会に出るときに必ず役に立つ知識だと思う」などと受け止めている一方、授業方法面で、学生参加型の場面が少ないことに対する不満もあった。
	平成24年4月～現在に至る	環太平洋大学では、今年度から国際教育学科が誕生した。同学科は、英語力はもちろん日本の伝統文化に対する理解を柱の一つにしている。１年生は入学直後から1年間、ニュージーランドに留学して英語力を磨いてくるが、渡航直前に「日本および日本人の特質」について講義した。ニュージーランドに行って、「日本の特色は？日本文化の本質は？」などと、日本について聞かれることを想定した授業であった。関西空港を出発するとき、女学生のひとりが「先生の日本の伝統文化の授業を受けるのを楽しみに、ニュージーランドで１年間、英語を頑張ってきます」と言って旅立った。学生は、たいへん重要な意味をもつ科目であることを認識している。これに応えるために授業改善に努めなければならない。奈良学園大学では、教員になるものは、日本の伝統文化についての素養を身につけておかなければならない。学生はそのことを自覚して、前向きに受講してくれている。
・学長による評価	平成22年3月	兵庫教育大学の特任教授の任期は３年であったが、高い評価を得て、学長裁量の特例で１年延長して授業に当たることになり、任期満了後も、非常勤講師を請われたため、現任大学と調整して１年間、昼間と夜間の授業を行った。
	平成23年4月	兵庫教育大学での実績およびジャーナリストとしての経験が評価されている。また、日本の伝統文化を「総合的に捉えた学問をしてきた数少ない人」との高い評価を得ている。
4　実務の経験を有する者についての特記事項 （マスコミ関係） （１）教育研究への参画 ・人間教育研究協議会（梶田叡一代表）のメンバーとして現場教師と月１回の研究会、年２度の教育実践交流会の実施	平成19年4月～現在	昭和59年度から人間教育研究協議会に入会、ＮＰＯ法人になった平成１８年からは監事。平成１０年から日本教育新聞社の教育セミナーと連携した活動を展開し、教職員の研修に役立っている。同会は平成27年秋、日本人間教育学会に改組した。
・京都市が生き方探究教育の具体策として進める「スチューデントシティー・ファイナンスパーク」事業に参画	平成19年3月～現在に至る	運営推進委員会委員。施設開所までに先行の品川の学校視察。目下、実施経過を見守りながら、評価と改善に向けて検討会議を重ねている。
・「京都こどもモノづくり事業」に参画	平成19年4月～現在に至る	推進委員会委員。こどものモノづくりへの興味・関心を高め，創造性を育むことを目指している。
5　その他		
・兵庫教育大学大学院における指導実績	平成19年4月～23年3月	教員として「教員の社会的役割と自己啓発」（共通科目、１年次配当、半期、必修２単位）、「教職員職能開発と研修プログラムの開発」（専門科目、２年次配当、必修２単位）、「学校経営専門職インターンシップ」（専門科目、２年次配当、選択必修10単位）、「教育行政専門職インターンシップ」（専門科目、２年次配当、選択必修10単位）を担当。 単独授業の「教員の社会的役割と自己啓発ⅠⅡ」では、次の内容で講義・演習を行った。

事　　項	年月日	概　　要
		①学校教育の現代的課題解決へ向けて 〈学校教育と地域社会の協同〉 ・地域住民の学校運営への参画、児童生徒の問題行動等への対応、豊な体験活動の推進などの課題を通して、地域に開かれた信頼される学校づくりを考える。 ②教員の社会的・職業倫理に関する事例研究 〈学校教育と教員に関する問題事例の検証〉 ・学校不信や教員不信の背景を多角的に考察、社会的問題化した問題事例を討論によって検証・分析し、未然防止策や対応策を考える。 ・学級崩壊や指導力不足の問題事例などを検証・分析し、その対応策を考えるとともに、職業的倫理、職能的成長のあり方について討論を通して考察を深めていく。 〈教員の社会的役割に関する事例研究〉 ・教員が果たしてきた社会的役割について、歴史的に事例をもとに考察するとともに、諸外国の事例も取り上げ、不易な部分を明らかにする。 ・教員が果たすべき今日的な役割について、実践事例を紹介、これからの社会的役割を考える。 〈教員の職業倫理に関する事例研究〉 ・教員の職業倫理について、日本の歴史・伝統に基づく職業倫理観や諸外国の比較事例をもとに考察、これからの教員の職業倫理を考える。 ③教員の自己啓発についての事例研究 ・先哲の自己啓発の事例をもとに、教員の自己啓発、修養について自らの問題として考える。複数担当授業では、主に教育政策、教員の資質向上、マスコミ対応などに関する課題を指導した。
・兵庫教育大学における授業外の教育実績	平成19年から毎年8月	教員採用試験を受ける学生を対象にした「教育時事セミナー」の講師として、最新の教育時事問題を解説している。

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　　要
1　資格，免許 （1）教員免許 中学校教諭１級普通免許状（社会科） 三重県教育委員会（昭40中普第107号） 高等学校教諭２級普通免許状（社会科） 三重県教育委員会（昭40高２普通第114号） （2）資格 ・神職資格　階位「明階」（第16855号） ・社叢インストラクター ・弓　道　３段　（小笠原流） ・銃剣道　初段 ・居合道　２段　（夢想神伝流）	 昭和41年３月 昭和41年３月 平成18年10月 平成21年５月 昭和41年３月 昭和43年４月 昭和46年３月	 神社本庁から試験検定により授与 社叢学会から認定 日本弓道連盟 日本銃剣道連盟 日本剣道連盟
2　特許等 なし		
3　実務の経験を有する者についての特記事項 （1）教育セミナーの全国展開の責任企画・運営	平成19年～現在に至る	平成８年から、日本教育新聞社関西支社主催の「教育セミナー」をスタートさせ、１７年目となる。この教育セミナーを全国各地に広げ、現在は全国十数カ所で開催しており、同セミナーの創設者として、企画全般と実施・運営を担っている。熱心な教育関係者の参加を得、教育改革への寄与、教員の資質向上という時代の要請に応えていると高く評価され、文部科学省からも同省の講師派遣で全面的な支援を受けている。

事　　項	年月日	概　　要
（２）マスコミ関係 ・『日本教育新聞』の関西支社記者として	平成19年4月～平成24年12月	昭和59年4月に日本教育新聞社関西支社に転勤以来、全国版の記事執筆や連載「ＴＴ最前線」、「幼児教育最前線」の担当。本紙座談会なども企画、鼎談「茶道を通しての人づくり―世界に開かれた日本人の育成」（中曽根弘文、千宗之、梶田叡一）、対談「伝統文化を継承するために」（河合隼雄、千宗室）の司会を務めた。 「関西版」を創設、編集長として、新しい視点からの人権・同和教育の企画連載、教育の先達に教育を聞く「教育の灯」のリレーインタビューなど、関西からの教育発信を試みた。 また、教育実践懸賞論文募集を手がけ、それが後に「教育セミナー」の開催に発展していった。 国立民族学博物館、国際日本文化研究センターのプレス懇談会に出席、梅棹忠夫、梅原猛をはじめ研究者と交流するとともに、国際シンポジウムなどの傍聴が許された。 日本教育新聞社の出版を一手に引き受け、「生活科の評価はどうするのか」（人間教育研究協議会）、「学校５日制Ｑ＆Ａ―家庭・地域で子どもを育てる風土を」（大阪学校５日制研究グループ）、「学びと育ちの評価―通知表全国調査リポート」（教育評価実態調査委員会）、「師魂教才－教育道に生きる」（上寺久雄）、「教育はこれからがおもしろい」（野口克海）、「私流文章教室」（佐藤良和）、「いじめ解決への教育的支援」（池島徳大）、私の出会った少年たち―非行への新しい視点」（藤川洋子）、「日本の教育文化を考える」（浅田匡）、「生きる力が育つ２１世紀の創作劇活動の　勧め」（佐藤良和）のほか、「教育セミナー収録集」（全１３集）（平成８年～平成２０年）を編集・刊行した。
（３）講演等の活動 ・京都フォーラム2008 ・京都フォーラム2009 in winter ・日本教師学学会第10回大会 ・日本教師学学会第11回大会インタビュー ・芦屋フォーラム 2020 ・和文化教育第６回全国大会シンポジウムの司会 ・教育勅語渙発120周年記念　基調講演・鼎談（湊川神社、日本学協会主催） ・日本教師学学会第12回大会総合の司会 ・日本教師学学会第13回大会の運営 ・日本教師学学会第14回大会の運営 ・日本教師学学会第14回大会自由研究発表 ・日本教師学学会第15回大会の運営 ・日本教師学学会第16回大会の運営 ・和文化教育第12回全国大会分科会の総括 ・日本教師学学会第17回大会の運営 ・和文化教育第13回全国大会の運営 ・日本教師学学会第18回大会の運営	 平成20年8月 平成21年2月 平成21年2月 平成22年2月 平成22年8月 平成22年10月 平成22年10月 平成23年2月 平成24年3月 平成25年3月 平成25年3月 平成26年3月 平成27年3月 平成27年9月 平成28年3月 平成28年11月 平成29年3月	 教員問題をめぐる背景と構図 和文化教育に望むもの 教師学の１０年 梶田叡一氏の記念講演を受けてのインタビュー 伝統文化教育で子どもたちに何を伝えるべきか 現代を潤す江戸文化の彩り：大江戸博物館で開催 日本の教育を考える 甲南大学にて開催 早稲田大学にて開催 秋田大学にて開催 伝統文化に関する教育の重要性と課題 環太平洋大学にて開催 日本女子大学にて開催 秋田県由利本荘市にて開催 奈良学園大学にて開催 奈良学園大学にて開催（大会実行委員長） 早稲田大学所沢キャンパスにて開催
4　その他 （１）社会活動 ・地域における自治会・公民館活動 ・社叢インストラクターとしての活動 （２）教員免許状更新研修講師 ・必修科目「教育政策の動向A」担当 ・必修科目「教育政策の動向A」担当 ・必修科目「教育政策の動向A」担当 ・必修科目「教育政策の動向A」担当 ・必修科目「教育政策の動向A」担当 ・必修科目「教育政策の動向A」「同B」担当 （３）公開授業の実施	 平成19年～現在に至る 平成21年～現在に至る 平成21年8月 平成23年8月 平成24年8月 平成25年8月 平成26年8月 平成27年8月 平成22年6月	 自治会だよりの執筆、生涯学習フェスティバルでの出演（詩吟）、出展（写真、陶芸）、コンサートの開催などで協力。 社叢のみならず森林調査研究と保全活動を行っている。また、社叢学会の研究として、沖縄の御嶽（うたき）や伝統祭祀のフィールドワークを手掛け、沖縄と本土の古代祭祀のつながりを探っている。 京都ノートルダム女子大学 京都ノートルダム女子大学 京都ノートルダム女子大学 京都ノートルダム女子大学 京都ノートルダム女子大学 京都ノートルダム女子大学 兵庫教育大学教職大学院（教育実践高度化専攻）が神戸市総合教育センターで実施。学校経営コース専門科目「教職員職能開発と研修プログラムの開発」（現職教職員対象）の公開授業を行った（授業担当者：浅野良一、廣岡徹、渡邉規矩郎）。

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
（著書）				
1．教育フォーラム49 確かな学力を育てる確かな授業	単　著	平成24年2月	金子書房	本書は「確かな授業は目下の急務」との課題意識のもとに、確かな学力を育てるための実践的な提案を試みたもの。 Ａ５判150頁 編者：人間教育研究協議会 共著者：梶田叡一、加藤明、古川治、田中博史、長谷浩也、阿部秀高、金澤隆夫、横須賀薫、高岡信也、鎌田首治朗、渡邉規矩郎、山本美紀 本人担当部分：「伝統文化の教育～子どもたちに何を伝えるべきか」（P118～P127） 戦後60余年を経てようやく教育基本法が改正され、伝統文化を尊重する教育が復活した。自国の歴史を民族の生命の流れとして受けとめ、それを縦糸にしながら、歴史に裏打ちされた伝統文化を捉えていくことができれば、教育基本法が目的とする「伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛するとともに、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うこと」ができ、さらに我が国の歴史・伝統文化の継承者としての自覚を持つようになる。こうした視点のもとに、①前提となるものの見方・考え方②自らの立脚点としての歴史・伝統文化③日本人の内面的変化の特徴「美・聖・善・真」④国民性とゴッホが見た日本人⑤武道のこころと文武両道を考える―を柱に論考。
2．教育フォーラム〔52〕 新しい道徳教育のために～徳性をどう育てるか～	共　著	平成25年8月	金子書房	「道徳教育をどうするか」という課題は、敗戦以来、重いものとして日本社会にのしかかっている。「修身」に替わる道徳教育の原理が確立されない現状の中で、新しい道徳教育のあり方の基本課題について、様々な視点から論考を寄せている。 Ａ５判　149頁 編者：人間教育研究協議会 共著者：梶田叡一、渡邉規矩郎、押谷由夫、加藤明、新川靖、小楠徹、増井眞樹、阿部秀高、鎌田首治朗、渡邉満、蔵あすか、オチャンテ・村井・ロサ・メルセデス 本人担当部分：「日本的徳性とは何か」（ P16～P26）を単著 日本的徳性について、①模倣でなく「純日本」を志向した聖徳太子②三種の神器と三徳（正直・慈悲・智恵）の思想③浄・明・正・直とつつしみ・つつしむ（敬）④教育勅語に基づき修身教科書で扱われた徳目ーの５項目を掲げて考察。日本の精神文化は、日本古来の神道思想を土台に日本に同化した仏教・儒教によって生まれた結晶であり、日本的なるものとして、その中から神道のみを取り出して論ずることは、日本の歴史・伝統を無視するもので、道徳の基準も歴史そのものに即して考えるべきものと結論づけている。
3．紫の風	単　著	平成25年12月	紫風庵	著者が７０歳の節目を迎えて、地域の「自治会だより」に連載した紀行文や随筆をまとめたもの。 Ｂ５判　103頁
（学術論文）				
1．指導要録・通知表にみる戦後学力観・評価観の変遷	共　著	平成22年3月	平成19年度～平成21年度科学研究補助金（基礎研究（Ｃ））課題番号19530733「指導要録・通知表にみる学力観の変遷に関する研究」研究成果報告書 Ａ４判　全267頁 P. 27～P. 82 P. 121～P. 136 P. 191～P. 200	「通知表にみる学力観の変遷に関する研究」のテーマで、平成19年度から21年度の３ヵ年間に科研費を受けた研究成果をとりまとめた。当初の研究を深め、戦後の学力観の変遷を探る過程で、昭和55年度版指導要録の作成過程が焦点になり、第１部「指導要録の改訂にみる学力観のターニングポイント～キーパーソンへのインタビューを通じて～」（宮本三郎，中島章夫，武田紀男，田中吉兵衛，陣川桂三，小島宏，村松啓至，梶田叡一の８氏をインタビュー）と第２部「通知表の評価観点にみる学力観の変遷」に特化した。 Ａ４判　全267頁 研究代表者：古川治 研究分担者：浅田匡、梶田叡一、後藤真一、西森章子、細川和仁、渡邉規矩郎 本人担当部分：「宮本三郎インタビュー」「陣川桂三インタビュー」「新聞論調にみる教育評価の動向」を単著
2．教師学の10年～教育問題をめぐる背景と構図～	単　著	平成23年3月	日本教師学学会誌「教師学研究」第10号　P. 51～P. 55	勤評闘争直後より、教育ジャーナリストとして、教育改革の推移，学校教育の政策や動向，教育実践の流れを見てきました。その経験をもとに、教師研究の課題や，設立10周年を迎える本学会の今後に期待すること等について、教育界の現状をふまえての講演録。内容の柱は①教員養成の現状と課題②学校不信，教員不信をめぐる状況③教育報道の姿勢の問題④国の教育政策の立案の課題⑤教師教育を取り巻く地方教育施策の課題⑥教育現場の指示待ち姿勢などを論述。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
３．教育における伝統文化の役割に関する一考察	単　著	平成25年3月	環太平洋大学「研究紀要」第７号 P. 243～P. 248	温故知新、彰往考来は今を生きる者にとって最も大切なことである。過去から現在に至る筋道を知らずして現在は分からない。現在が分からないとこれから未来へと進むことができない。過去というものを確実に理解し、自分の歩んで来た道を振り返ることにより将来を決定しうる。過去を本当に知り得て、初めて未来への道が開けていく。先人、子孫の声を聴くことが不可欠な所以である。本研究論文では、日本の伝統文化の源流としての森と水を軸にしながら、奈良のお水とりなどを例に教育における伝統文化の役割を考察。
４．ＮＩＥを取り入れた教育実践研究～大学２年生を対象とした時事教養Ｉの授業実践を通して～	共　著	平成26年3月	環太平洋大学「研究紀要」第8号 P. 147～P. 154	環太平洋大学の２年次の学生に必修科目として開講されている「時事教養Ｉ」の主担として行った授業の実践を振り返って考察・分析したもの。 共著者：渡邉規矩郎、仲田輝康、木戸和彦、三木澄代、岡野聡子、正木友則 本人担当部分：「はじめに」の部分を執筆。この授業科目が取り入れられた背景やねらいなどについて執筆した。
５．「人間教育」を培うもの～伝統文化教育への期待～	単　著	平成26年4月	人間教育学会「人間教育学研究」創刊号 P. 15～P. 23	国民教育の中心となるものは伝統文化の教育であり、さらにその骨髄となるものは歴史でなければならない。歴史こそは国民教育の中核である。歴史は自由の人格が永久にわたる創造的開眼の世界である。教育もしかり。したがって、「人間教育」は自由なる人格を創造するものでなければならない。―こうした考えを前提にして、本論文は、人として日本に生まれた厳粛な事実を踏まえ、歴史や先賢に対する不遜な態度を戒め、古典や言葉の継承の重要性を説く。そして、本人が受けた先哲遺文講義とその打聞を紹介した上で、師承の学問について言及、伝統文化を護り伝える人間教育の重要性を強調している。
６.学校現場からの教育改革：想起データ分析⑴　～ブルーム理論と梶田叡一～	単　著	平成27年3月	「奈良学園大学紀要」第２集 p. 181～p. 197	1970年代から80年代にかけて、さまざまな学習理論が出現し、それに呼応する実践が試みられた。具体的には、梶田が取り上げた学び方学習、極地方式、範例学習、発見学習、仮説実験授業、主体的学習、バズ学習、集団学習、完全習得学習、教育工学をはじめ、個性化・個別化教育、モジュール学習、水道方式、放送教育、カリキュラム論などである。それぞれの学習理論の提唱者と学校現場及び研究会における実践者の双方の代表的人物に直接インタビューによる聞き取り調査を進めている。その聞き取りをまず「学習ノート」の形で発表する。その初回で、ブルーム理論を日本に紹介し、各地の実践者と共に取り組んだ経緯を肩っており、授業研究が低調になっている今日の教育界に示唆するところは大きい。
７．授業研究と横須賀薫～学校現場からの教育改革：想起データ分析（2）～	単　著	平成27年12月	人間教育学会「人間教育学研究」第3号 P. 199～P. 206	横須賀薫は、東京大学で大田堯に生活綴り方などを学んだ。先輩には稲垣忠彦がいる。宮城教育大学の教員になり、林竹二、斎藤喜博らと授業研究に打ち込む。聞き取りの中では、生活綴り方を離れ授業学研究に入った経緯、林竹二の斎藤喜博批判の真意、教授学研究の会の再建などについて貴重な話を聞いた。横須賀はこのあと、戦後の教員養成批判を繰り広げ、中教審などの委員として改革に乗り出す。「授業改革を核にした学校づくり」に意欲を燃やし続け、改革を阻むものとして、途方教育委員会の保守性・派閥性を挙げる。
８．道を司る三女神を宗像に拝す	単　著	平成27年12月	大阪国学院「浪速文叢」第26号 P. 36～ｐ. 50	宗像・沖ノ島と関連遺産群は、四世紀から九世紀までの五百年間、航海の安全などを願い、多くの装飾品などを用いた祭祀が行われていたことや、それが日本固有の信仰として今の残っていること、祭祀権を掌握した古代有力氏族に関連する遺跡群が遺され、現在でもその信仰や禁忌が継続されている貴重な資産。二〇〇九年には、自然崇拝から今日の社殿祭祀に至る過程が純粋な状態で保たれている国内唯一の遺産であること、豊かな自然と遺産群が共存し、現在もなお人々の中に信仰が脈々と生き続けていることが評価され、ユネスコ世界遺産の暫定リストに記載された。 平成27年6月に沖ノ島を訪れる機会に恵まれた筆者が、宗像信仰の拠点をフィールドワークしたものを記述したもの。
９.個性化・個別化教育と加藤幸次～学校現場からの教育改革：想起データ分析（3）～	単　著	平成28年3月	「奈良学園大学紀要」第２集 p. 181～p. 197	個性化・個別化教育の理論的指導者の草分けである加藤幸次の想起データ。加藤は1970年、フルブライト奨学生としてアメリカ・ウィスコンシン大学大学院で学ぶ傍ら、現地の小学校で教壇に立つ。帰国後、国立教育研究所に入り研究を行いながら、「個性化教育」をめざして、主にオープン・スペースを持った学校を中心に学校改革に取り組み、「全国個性化教育連盟」を設立するとともに、チャータースクールやバイリンガル教育にも関心を広げた。加藤からは、①アメリカ留学とオープン教育との出会い・取り組み②学力低下論が醸し出した学校不信や教師不信③夢や希望のある教育研究・授業研究の再構築ーについて聞いた。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
10.　「世羅教育」の継承と淘汰	共　著	平成28年12月	「教育実践方法学研究」第2巻第1号p. 36～p. 42	広島県中東部の世羅台地、この地の「世羅教育」には一世を風靡した時代があった。斎藤喜博、吉本均も世羅郡を研究フィールドにした。「世羅教育」の原点は授業研究。その流れの中に、小学校教育には、教材解釈と表現の教育としての斎藤喜博の教えが入り、中学校教育には、学びの主体を育てる学習集団づくりに代表される吉本均の教えが入り、「世羅教育」はステップアップした。その後、世羅町では、望ましい学習集団をつくり、切磋琢磨のできる学級をつくることをねらいに、地域も保護者も、脈々と続く「世羅教育」を継承しつつ、現在はアクションリサーチ型の授業研究を進めている。その「世羅教育の継承と淘汰」の取り組みを、時永益徳教育長らに聞いた。 共著者：渡邉規矩郎、時永益徳、岡本和信
11. 個性化・個別化教育と成田幸夫～学校現場からの教育改革：想起データ分析（4）～	単　著	平成29年3月	「奈良学園大学紀要」第6集p. 99～p. 113	「個性化・個別化教育」で先にその理論的指導者・研究者である加藤幸次を取り上げたが、今回は理論の加藤と対をなす実践の成田幸夫。成田は、愛知県東浦町立緒川小学校研究主任、東海市立上野中学校教務主任、大府市立大府中学校教頭、大府北小学校長、東浦町立片葩小学校長などを経て、岐阜聖徳学園大学教育学部教授。現在、文部科学省「学校施設整備指針策定に関する調査研究協力者会議」委員、国立教育政策研究所「今後の小中学校の学習空間の在り方に関する調査研究」委員などを務める。その成田が取り組んだ個別化・個性化教育は今や停滞気味だ。この点について成田は「異常なまでのエネルギーをもって取り組まないと、個別化・個性化教育ないしオープン教育は成功しない。そんな努力はしたくないというのが今の教育界の姿だ」と指摘した。
（その他） 「学会研究発表」				
1．教員問題をめぐる背景と構図	単　独	平成20年8月	人間教育研究協議会：京都フォーラム2008 於：京都ノートルダム女子大学	中央教育審議会の昭和４６年答申以後の教員の資質向上をめぐる審議会の度重なる答申や建議、そしてそれに基づく国を中心とした施策を取り上げながら、教員問題は「百年河清を待つ」がごとき状態で推移してきたことを研究者として、また身近に見てきた記者の目からとらえたところを解説。
2．和文化教育に望むもの	単　独	平成21年2月	人間教育研究協議会：京都フォーラム2009in winter 於：ノートルダム学院小学校	日本人の感性、国民性というものはどこから生じたか。また、歴史のおける文化の起伏を解説。また、名だたる武将が詩歌管弦を好んでいたことを紹介し、「みやび」ということと「従容として死につく」武士のたしなみと武士道などについて言及。さらに弓道と禅を学んだ外国人学者を例にして、日本文化は日本人固有のものではないことを強調した。
3．教師学の１０年	単　独	平成21年2月	日本教師学学会第10会大会 於：園田学園女子大学	教師学会が発足した平成10年当時は、師範学校の校長が去り、師範学校的な現場における後継者育成が過渡期を迎えた教師教育における岐路であったとの見解に立ち、一方で文部科学省、自民党、日教組の政治的関係を織り込みながら１０年を振り返る。
4．伝統文化教育で子どもたちに何を伝えるか	単　独	平成22年8月	人間教育研究協議会：芦屋フォーラム2010 於：芦屋市立宮川小学校	教育基本法が改正され、学習指導要領で伝統文化に関する教育の重視が打ち出されたのを受けて、この内容の扱いが、今までの社会科や郷土教育の延長はならないことを、日本文化の源流にある精神性を特に問題にした。
5．現代を潤す江戸文化の彩り	共　同	平成22年10月	和文化教育学会第６会全国大会：シンポジウム 於：江戸東京博物館	江戸文化の見方と伝統文化に関する教育の眼目と共通性を踏まえ、江戸に開花した文化が現代の人々や社会を潤す様相を指摘し、これからの文化創造の方途を冒頭で提案。司会者として、今後の地域づくりと学校づくりに意義ある討議になるよう留意した。 共同発表者：山折哲雄、中村哲。渡邉規矩郎、滝口正哉、市川寛明、田中隆文
6．伝統文化に関する教育の重要性と課題～大学における授業を通して考える～	単　独	平成25年3月	日本教師学学会 第14回大会 於：秋田大学	大学において２年間「日本の伝統文化」の授業を担当する一方、以前には教職大学院において伝統文化を加味した授業を行った。それら基づいて、学生等が伝統文化を学ぶ意欲はあるものの、その土台となる日本の歴史や人物に対する知識が貧弱なことなどを提起し、高校以下の伝統文化の教育への課題と充実に向けての方途を探る。
「主な講演等」 1．日本の教育を考える	単　独	平成22年10月	日本学協会 教育勅語渙発120周年記念講演会 於：湊川神社	基調講演で「道は高く美し、約にして近なり～学びと育ちの原点を問う～」との演題で、日本の伝統的な学問について話した。また、鼎談では、教員の資質向上や家庭教育、大人の責務について日ごろの考えを開陳した。
「報告書」 1．学校現場からの教育改革への新しいアプローチの開発	単　著	平成21年3月	兵庫教育大学学内科研報告書	教育改革は学校を基盤に行われるのが本来の姿。そこで、授業研究が盛んだった1970年代から80年代にかけて、学校現場に大きな影響を及ぼした学習理論を提唱した研究者と実践者10人から聞き取り調査を行い、その想起的データをもとに教育改革への理論や教育実践を分析・考察した。Ａ４判・全７頁

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
「研究誌」				
１．今月の課題「改正教育基本法と新学習指導要領」	単　著	平成20年3月	財団法人日本学協会『日本』第58巻3月号 P. 10～P. 13	改正教育基本法は、今日、教員一人ひとりの資質の向上が求められていることなどを踏まえ、第9条に独立の規定を設けた。旧法の規定に加え、教員が自己の崇高な使命を深く自覚し、絶えず研究と修養に励むべきことや、養成と研修の充実が図られなければならないことを新たに規定した。また、教育を総合的に推進する国の振興計画をつくる規定を盛り込んだ。改正教育基本法を受けて改訂された新学習指導要領は、前２回の改訂の間に緩み、見失われてしまった学校、教師の存在意義、教育の本質を見直すことが、今回の大きなテーマとなっている。その意味で、いわゆる「ゆとり教育」からの180度の転換ということができる。新学習指導要領を実効あらしめるのは、やはり教師力の向上と教育サポート体制の如何にかかっていることを強調する。
２．教育再建への諸課題	単　著	平成20年12月	日本教師会『日本の教育』12月号 P. 46～ P. 50	6月29日に住吉大社で行われた大阪楠公祭後の講話を整理・加筆したもの。教育改革の最大課題は、教員の資質向上に尽きる。学校現場自らもこれをトップにあげる。しかし、この問題は百年河清を待つがごとき堂々めぐり。医師養成にはインター制度がある。教員養成にも、早急に中教審四六答申で打ち出された試補制度の導入が望まれる。少子化の今日こそ教育制度の抜本改革を行う絶好のチャンスであると強調する。
３．今に生きる勉学の心得～仁科芳雄博士の弟にあてた手紙から～	単　著	平成21年7月	日本教師会『日本の教育』7月号 P. 1～P. 2	原子核物理学の父として知られる仁科芳雄博士が明治43年4月7日、岡山県立岡山中学校を卒業後、第六高等学校の入学試験の準備中に、岡山の下宿から津山中学校の寄宿舎にいた最愛の弟に手紙を書いた。この弟にあてた手紙は、徳育、知育、体育の３つの修養と「主義のある人になれ」という勉学の心得を懇切丁寧に説いたもの。学力低下が叫ばれる今日の教育へのメッセージとしてこれを紹介する。この手紙に見る勉学の心得は、今までは当り前のこととして行われてきた。それだけに、当り前のことが当たり前に行われる教育の再生を願わずにはおれない。
４．道は高く美し、約にして近なり～学びと育ちの原点を問う～	単　著	平成22年12月	日本教師会『日本の教育』12月号 P. 1～P. 2	平成22年は教育勅語渙発120周年に当たり、10月30日前後には、各地で記念行事が行われた。筆者は、湊川神社での記念行事「日本の教育を考える」で基調講演、その後の鼎談に参加した。本稿は、そこで話した内容の概要を改めて記述したもの。日本の教育にバックボーンがなくなったことから説き起こし、学校教育の現状と影、教育の崩壊と大人の責任などに言及、親・大人が鏡・手本になる社会を取り戻すこと、教師が高い志を持つ教育界に再建しなければならないと訴えた。
５．風来坊の旅枕① 良寛さんを敬慕した村上三島との出会い	単　著	平成24年12月	『教育ＰＲＯ』12月４日号 P. 14～P. 15	禅僧良寛は、西行を慕ってその跡をたどった。その西行は弘法大師・空海を慕ってその跡を踏んでいる。文化勲章受章者で書壇の巨匠・村上三島は、良寛の生き方に惚れて良寛の生まれ故郷の出雲崎に良寛の歌碑を建てる。村上三島の書と人となりに出会った筆者は、大三島に村上三島記念館を訪れ、そして良寛の生き方にあらためて感動し、出雲崎に思いを馳せる。 本著は、日本の伝統文化を体現した先人およびそれを育んだ自然にふれた心の旅を綴ろうとする紀行的エッセイ。本稿をスタートに月１回の長期連載。
６．風来坊の旅枕② 越後・出雲崎で良寛さんの俤を偲ぶ	単　著	平成25年１月	『教育ＰＲＯ』１月15日号 P. 34～P. 35	良寛の生地と晩年を送った越後・出雲崎を訪れ、良寛記念館や良寛が修行した国上山の五合庵や乙子神社の草庵、良寛が眠るお墓をたずねながら、良寛の人と思想に迫る。あわせて芭蕉が奥の細道の旅で立ち寄った出雲崎の風物を描く。
７．風来坊の旅枕③佐渡で真野御陵を拝し越後長岡へ	単　著	平成25年2月	『教育ＰＲＯ』２月19日号 P. 24～P. 25	佐渡は良寛の母が生まれた島。芭蕉が「荒海や佐渡によこたふ天の川」と順徳天皇をはるかに偲んで名句を詠んだ島である。その佐渡島に渡り、順徳天皇の真野御陵を拝して承久の変を回顧。さらに、越後・長岡に伸ばし、山本有三の「米百俵」のモデル・小林虎三郎、河井継之助、山本五十六などの偉人の事跡をたどりながら、長岡に息づく伝統的な気骨にふれる。
８．書評「新・日本学誕生～国際日本文化研究センターの25年～」	単　著	平成25年２月	『日本教育新聞』３月11日付読書面	国際日本文化研究センターが設立されたのは昭和62年５月のこと。筆者はこの日文研に注目し、設立準備時代から今日まで、取材を通して見守ってきた。その立場から、四半世紀の歩みを綴った本書を紹介。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
９．風来坊の旅枕④ 春を告げる奈良のお水取り	単　著	平成25年3月	『教育ＰＲＯ』３月19日号 P. 26～P. 27	奈良の「お水取り」が終わると春が来る。関西の人々は、毎年この春の兆しを待ちわびる。その「お水取り」を東大寺二月堂の前の閼伽井屋の石畳に約３時間座って、目の前で拝観した。実に荘厳で神秘的な光景だった。この「お水取り」は修二会という儀式の中のひとつだが、その修二会の練行の模様も「お水取り」に先だって拝観する機会に恵まれました。その感動とともに、この儀式に流れる日本の伝統文化にふれる
10．風来坊の旅枕⑤ さまざまなことを思ひ出す桜かな	単　著	平成25年4月	『教育ＰＲＯ』４月23日号 P. 28～P. 29	西行や芭蕉が愛してやまなかった桜を追って、京都、東京、尾道を旅しながら感じたこと、桜や自然を観る眼にも言及。
11．風来坊の旅枕⑥ 遠野から釜石・大槌・山田へ	単　著	平成25年6月	『教育ＰＲＯ』６月４日号 P. 32～P. 33	東日本大震災の地を訪れた本人が目にした岩手県の釜石、大槌、山田の悲惨な生々しい状況と復興にかける様子をリポート。
12．風来坊の旅枕⑦ 花巻で宮沢賢治にふれる	単　著	平成25年7月	『教育ＰＲＯ』７月16日号 P. 30～P. 31	宮沢賢治のふるさと花巻を初めて訪れた感慨を下敷きに、賢治ゆかりの地と親交のあった高村光太郎の詩碑などを訪ねる。
13．風来坊の旅枕⑧ 能登が呼んでる思い出の能登が	単　著	平成25年8月	『教育ＰＲＯ』８月27日号 P. 30～P. 31	能登は亡き妻としばしば訪れた思い出の地である。それを回顧しながら、西田幾多郎記念館、折口信夫父子の墓、勇壮な輪島の御陣乗太鼓の響きなどを伝える。
14．風来坊の旅枕⑨ 西郷隆盛遠流の沖永良部島	単　著	平成25年9月	『教育ＰＲＯ』９月17日号 P. 26～P. 27	敬愛する西郷隆盛が島流しされ、「敬天愛人」の思想を形成した沖永良部島を航路でおとずれ、西郷の足跡をたどる。
15．風来坊の旅枕⑩ 日本一のガジュマルのある小学校	単　著	平成25年10月	『教育ＰＲＯ』10月15日号 P. 30～P. 31	沖永良部島の小学校校庭に日本一のガジュマルの木がある。その小学校では木の下で緑陰学習を繰り広げ、祖先の労苦を偲ぶ体験活動を行っていた様子を綴る。
16．東井先生の一燈を頼む	単　著	平成25年11月	東井義雄生誕100年記念追悼文集『いのちのふれあい』 ｐ.23	「村を育てる学力」で一世を風靡した東井義雄を顕彰する記念文集の１ページに東井と出会った思い出をもとに、東井の教育者魂の継承を訴える。
17．風来坊の旅枕⑪ 仁科芳雄博士の勉学の心得	単　著	平成25年11月	『教育ＰＲＯ』11月19日号 P. 32～P. 33	原子物理学の父と呼ばれる仁科芳雄博士が受験勉強を控えた弟に与えた勉学の要諦を紹介するとともに、博士の先祖が因縁浅からぬ関係であったことに思いを馳せる。
18．風来坊の旅枕⑫ 函館の坂のある風景と乞食の万平	単　著	平成25年12月	『教育ＰＲＯ』12月17日号 P. 32～P. 33	函館の坂のある風景は美しい。函館山からは百万ドルの夜景が見える。その函館に石川啄木と親交のあった乞食の万平の供養塚があり、そのエピソードを紹介。
19．風来坊の旅枕⑬ 先覚者が眠る箱館を往く	単　著	平成26年2月	『教育ＰＲＯ』２月４日号 P. 32～P. 33	函館には、高田屋嘉兵衛をはじめとする先覚者が眠る。石川啄木もこの地に墓がある。それらを訪れ、函館の地の持つ意味を考えてみた。
20．風来坊の旅枕⑭ 土方歳三と新島譲の開明の志	単　著	平成26年3月	『教育ＰＲＯ』３月４日号 P. 32～P. 33	函館といえば五稜郭の戦いで戦死した土方歳三、そして海外渡航した新島襄が忘れられない。両人の志は吉田松陰の志に通じている。その開明の志を旅の中で偲ぶ。
21．風来坊の旅枕⑮ 中江藤樹の大洲と木蝋の内子	単　著	平成25年4月	『教育ＰＲＯ』４月１日号 P. 32～P. 33	愛媛県大洲町は中江藤樹が青年時代を送り志を立てたところ。県立大洲高校は今も藤樹精神を建学の精神にし継承している。隣町の内子町は木蝋で栄えた町で、古い町並みは、伝統文化そのもの。両町を散策して感じることは多すぎた。
22．風来坊の旅枕⑯ 四国札所巡拝と白峰御陵	単　著	平成26年5月	『教育ＰＲＯ』５月20日号 P. 28～P. 29	四国八十八か寺と別格二十か寺を車で巡拝した。その中で、崇徳上皇が眠る白峰寺と四国遍路開祖の河野衛門三郎を特筆しながら、西行の追慕姿などに及ぶ。
23．風来坊の旅枕⑰ 越前一乗谷に映える合歓木	単　著	平成26年6月	『教育ＰＲＯ』６月３日号 P. 32～P. 33	越前朝倉氏が栄華を極めたのちに、親族の裏切りにあって滅んでいった一乗谷遺跡で朝倉氏の「夢の跡」を偲ぶ。
24．風来坊の旅枕⑱ 橘曙覧と橋本景岳を仰ぐ	単　著	平成26年7月	『教育ＰＲＯ』７月１日号 P. 28～P. 29	幕末の越前が生んだ先哲といえば、歌人の橘曙覧と安政の大獄で亡くなった橋本佐内。この二人のゆかりの地を訪れて、改めて志の高に啓発される。
25．風来坊の旅枕⑲ 京都御所の恵方・隠岐の島	単　著	平成26年8月	『教育ＰＲＯ』８月５日号 P. 22～P. 23	隠岐の島は、古くから政治犯が流された地。京都御所の恵方に当たるという。流刑の地とは想像できない、明るく豊かで文化のあふれた島の様子を探訪する。
26．風来坊の旅枕⑳ 遠流の島・隠岐の旅	単　著	平成26年9月	『教育ＰＲＯ』９月16日号 P. 26～P. 27	隠岐の島は、後鳥羽上皇、後醍醐天皇の配流の地である。後鳥羽上皇はこの地でお隠れになる。今回の旅は、佐渡島に次いでの慰霊の旅でもあった。
27．風来坊の旅枕㉑ 歴史は哀し鎌倉の旅	単　著	平成26年10月	『教育ＰＲＯ』10月21日号 P. 26～P. 27	頼朝が京都を避けて幕府を開いた鎌倉。そこには、静御前が義経を慕って舞った舞台があり、義経が兄の怒りを解こうと精魂を傾け「腰越状」を書いた寺もある。大塔宮護良親王を祀る鎌倉宮には親王を幽閉して殺した土牢がある。鎌倉は素敵なところだが、歴史をたどるとあまりにも哀しい。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
28. 神宮と伝統文化の教育	単　著	平成26年10月	神宮司庁『瑞垣』第229号 p. 82～p. 91	「何事のおはしますかは知らねどもかたじけなさに涙こぼるる」とは西行が伊勢の神宮に詣でた時の有名なうたである。２０年に一度の式年遷宮を終えた機会に、体験をまじえながら、神宮のもつ意味を伝統文化の視点で考察した。
29. 風来坊の旅枕㉒ 建国物語発祥の地を訪ねる	単　著	平成26年11月	『教育ＰＲＯ』11月18日号 P. 22～P. 23	神話に出てくる天孫ニニギミコトが降臨された地とされている高千穂町とその隣の五ヶ瀬町を訪れ、高千穂神社や神秘的な天安河原、国見山の情景を描く。
30. 風来坊の旅枕㉓ 沖縄との出会いと南部戦線	単　著	平成26年1月	『教育ＰＲＯ』1月20日号 P. 28～P. 29	沖縄を第二の故郷とする筆者のが、沖縄と出会うようになったきっかけを紹介。沖縄線から70年を迎えるにあたり、南部戦跡の悲劇に思いをはせる。
31. 風来坊の旅枕㉔ 嗚呼「原城」殉教の址	単　著	平成27年2月	『教育ＰＲＯ』2月3日号 P. 26～P. 27	南島原市の原城は島原の乱の終焉の地。領民3万7千人が88日間立て籠もった。その城跡にたたずみ、地霊に鎮魂の祈りをささげげ、30年ぶりの島原の城下町を散策する。
32. 風来坊の旅枕㉕ 小雪舞う五島列島・福江島	単　著	平成27年3月	『教育ＰＲＯ』3月17日号 P. 26～P. 27	長崎の五島列島の福江島を初めて訪れ、五島最古の常崎教会や遣唐使最後の寄港地である三井楽の空海記念碑を見る。同島は日本一の椿の自生地、日本原産の椿が中国やヨーロッパにもたらされた経緯も解説。
33. 風来坊の旅枕㉖ 因幡の白うさぎと万葉歌碑	単　著	平成27年4月	『教育ＰＲＯ』4月21日号 P. 26～P. 27	鳥取で、神話「因幡の白兎」の舞台である白兎海岸を訪れたあと、天平のロマンが集う因幡万葉歴史館で、大伴家持、古代豪族の娘で文武天皇の女官だった伊福吉部床徳足比売の事跡を辿ったあと、万葉集最後の歌で有名な大伴家持の歌碑の前に佇んだ。
34. 風来坊の旅枕㉗ 幾山河こえさりゆかば	単　著	平成27年5月	『教育ＰＲＯ』5月19日号 P. 20～P. 21	宮崎県日向市の美々津は神武天皇が東征に船出されたところと伝えられ、日本海軍発祥の地となっている。ここに立ち寄ったあと、若山牧水の生誕地の東郷町を訪れ、自然と旅と酒を愛した牧水を偲んだ。
35. 風来坊の旅枕㉘ 倉田百三のふるさと庄原	単　著	平成27年6月	『教育ＰＲＯ』6月16日号 P. 22～P. 23	広島県の北東部に庄原市という日本一の面積を誇る市がある。ここが『出家とその弟子』の作者・倉田百三の故郷だ。生誕の地、墓地、文学館、「百三ひろば」を訪れた。広場には、「青春は短い宝石の如くにしてそれを惜しめ」の碑と胸像があった。
36. 風来坊の旅枕㉙ 西南の役の激戦地・田原坂	単　著	平成27年7月	『教育ＰＲＯ』7月21日号 P. 22～P. 23	熊本城から菊池市に向かう途中、田原坂を通った。「雨は降る降る人馬は濡れる　越すに越されぬ田原坂」と歌に詠われた西南の役の激戦地。西郷隆盛の心情を忍び、「思はじな思ひし事は違ふぞと思ひ捨てても思ふはかなさ」の歌を想起した。
37. 風来坊の旅枕㉚ 菊池の里で忠節を仰ぐ	単　著	平成27年8月	『教育ＰＲＯ』8月18日号 P. 22～P. 23	九州の菊池といえば、大楠公が建武の中興で第一に武勲があったと讃えた一族。菊池神社に参拝、歴史館で「菊池家憲」を拝見、菩提寺を尋ね、最後に菊池の精神的支柱となった大智禅師が開山した聖護寺を山中奥深く訪れ、禅師の日本精神に触れた。
38. 風来坊の旅枕㉛ 諏訪大社の御柱街道を遡る	単　著	平成27年9月	『教育ＰＲＯ』9月15日号 P. 24～P. 25	諏訪大社の式年造営御柱大祭を７年ごと、寅と申の年に行っている。御柱の用材のモミの木は、３年前から木の選定準備が始まり、上社では25ｋｍ隔てた八ケ岳の中腹から、下社は八島高原近くから曳き出す。この御柱街道を遡りながら祭事の跡を観た。
39. 風来坊の旅枕㉜ 上高地の自然美に平伏す	単　著	平成27年10月	『教育ＰＲＯ』10月20日号 P. 24～P. 25	早朝、河童橋に立ち雲海の上にそびえる穂高を仰ぎ見る。この光景は神秘的・幻想的だ。上高地を散策して、松本に移動し、国宝の松本城や日本最古の小学校・旧開智学校を見学し、信州教育発祥の母体にふれながら、その歴史の重みを感じた。
40. 風来坊の旅枕㉝ 道を司る三女神を宗像に拝す	単　著	平成27年11月	『教育ＰＲＯ』11月17日号 P. 24～P. 25	玄界灘に面した宗像市にある宗像大社は、辺津宮、中津宮、沖津宮の３宮の総称。天照大神の御子である３姉妹の姫神（宗像３女神）を祀る全国約6200社の総本宮。遥か悠久の昔から「道」を司る最高神として崇敬されてきた。現地をつぶさに視察した。
41. 風来坊の旅枕㉞ 高知・五台山の牧野植物園	単　著	平成27年12月	『教育ＰＲＯ』12月15日号 P. 24～P. 25	高知の五台山の麓に、県立牧野植物園がある。「日本の植物分類学の父」牧野富太郎博士の業績を顕彰して明治33年に開園した。南門を入ると「花あればこそ吾もあり」を刻んだ石碑があり、昭和天皇がご来園、詠まれた歌碑も立つ。
42. 風来坊の旅枕㉟ ９年ぶりの函館で「幸せの更新」	単　著	平成28年2月	『教育ＰＲＯ』2月16日号 P. 24～P. 25	クリスマスイブに９年ぶりに函館を訪れ「幸せを呼ぶもみの木」に再会。９年前に積雪に阻まれて行けなかった、旧幕府軍戦死者を祀る「碧血碑」を拝した。侠客・熊吉が命懸けで建てた碑で、義に殉じて流した武人の血は３年たつと碧色になるという。
43. 風来坊の旅枕㊱ 若水と首里城お水取り	単　著	平成28年3月	『教育ＰＲＯ』3月1日号 P. 24～P. 25	若水信仰は日本の伝統的なもの。奈良の二月堂のお水取りは有名だが、沖縄でも古くより「首里城お水取り」が行われてきた。この復活した行事を見学し、いのちを司る「水」を大切にしてきた沖縄の祖先に感謝し、泰平を祈るこころに焦点をあてた。
44. 風来坊の旅枕㊲ 篤胤の墓参、山寺に詣で米沢へ	単　著	平成28年4月	『教育ＰＲＯ』4月5日号 P. 24～P. 25	７年前の桜花の季節。桜を追って、みちのくの角館の枝垂れ桜を満喫し、秋田から山形の立石寺に詣で、米沢に入った。秋田では平田篤胤のお墓に参り篤胤の学問を回顧。米沢では、名君・上杉鷹山の史跡をたどり、今に生きる訓えを振り返った。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
45. 風来坊の旅枕㊳ 象潟で芭蕉を偲ぶ	単　著	平成28年5月	『教育ＰＲＯ』5月3日号 P. 24～P. 25	昨秋、秋田県由利本荘市で開かれた第12回和文化教育全国大会に参加。「奥の細道巡見」の一行に加わり、象潟郷土資料館、駒留島、蚶満寺などを訪れ、芭蕉の俤を偲ぶとともに、芭蕉を慕って象潟に来た正岡子規の落胆ぶりに及んだ。
46. 風来坊の旅枕㊴ 松島・瑞巌寺と西行戻しの松	単　著	平成28年6月	『教育ＰＲＯ』6月7日号 P. 24～P. 25	先月、沖縄県恩納村文化協会の宮城県復興支援プロジェクトの一員として仙台、石巻、松島の被災地を訪れ、ワークショップなどを行った。松島には２年前にも訪れており、その時の視察を織り交ぜながら、修復を終えた瑞巌寺の様子等をレポートした。
47. 風来坊の旅枕㊵ 上の畑焼を復興した瓢堂氏との再会	単　著	平成28年7月	『教育ＰＲＯ』7月5日号 P. 24～P. 25	山形県尾花沢市を訪れ、旧友で陶芸家の伊藤瓢堂氏に再会した。同市出身の伊藤氏は、江戸の天保年間にこの地で栄えたという幻の上の畑焼の再興に情熱を傾け、長年研究し、昭和55年、地元で算出する銀山陶石を使って再現した。その苦労話を綴る。
48. 風来坊の旅枕㊶ 銀山温泉に浸かり芭蕉の足跡を辿る	単　著	平成28年8月	『教育ＰＲＯ』8月2日号 P. 24～P. 25	斎藤茂吉も泊まったという銀山温泉の能登屋に宿泊し、周辺を散策。翌日は、上の畑焼陶芸センターで伊藤氏の指導で陶芸の絵付け体験。その後、同氏の案内で芭蕉が立ち寄った「封人の家」を見学したあと、山刀伐峠を越えて芭蕉・清風の面影を偲ぶ。
49. 風来坊の旅枕㊷ 北大東島にクレーンで上陸	単　著	平成28年9月	『教育ＰＲＯ』9月6日号 P. 24～P. 25	沖縄県最東端に位置する大東島諸島は、島を囲む高さ15m前後の険しい岸壁が上陸を拒み、長い間、絶海の無人島だった。いまでも船でこの島に上陸するには、ゴンドラに乗りクレーンで吊り上げられるのだ。この島の発見とその後の歴史をたどった。
50. 風来坊の旅枕㊸ 南大東島の紺碧の海	単　著	平成28年10月	『教育ＰＲＯ』10月4日号 P. 24～P. 25	北大東島から南大東島へ。この島は、八丈島の開拓者が入植した関係で村の神社は本土と同じ形式。東洋一と言われる鍾乳洞「星野洞」に目を見張り、島内を走っていた軽便鉄道を見学するなど「教育立村」を標榜する島の歴史と今と自然にふれた。
51. 風来坊の旅枕㊹ 夏から秋へ　木曽・信濃路を道草	単　著	平成28年11月	『教育ＰＲＯ』11月1日号 P. 24～P. 25	甲府に行く途中、塩尻に下車して木曽平沢を訪ね、信濃に入り諏訪湖の花火に酔った。木曽平沢は漆工町。国の重要伝統的建造物群保存地区に選定されている。ちゃぶ台ブームの頃は賑わった町も今はひっそり。漆工房を訪ねて漆器を造る工程を学んだ。
52. 風来坊の旅枕㊺ 諫早・大村で見た自然・先人を崇める美風	単　著	平成28年12月	『教育ＰＲＯ』12月6日号 P. 24～P. 25	諫早公園にある眼鏡橋は天保10年、領主と領民が永久不滅の願いを込めて完成させた石造りの橋。大村には貴重な武家屋敷の遺構があった。玖島城址には戊辰戦争で鼓手を務めた浜口謹吾少年の銅像が涙を誘った。同じ銅像が姉妹都市の角館にあるという。
53. 風来坊の旅枕㊻ プルメリア香る神々の島・バリ	単　著	平成29年2月	『教育ＰＲＯ』2月7日号 P. 24～P. 25	バリ島はヒンドゥー教の神々の島。夜のウブドの宮廷前庭で古典舞踊を楽しんだ。ジェンガラ焼きの買い物もした。店の玄関には地の神への御供があった。バリ・ヒンドゥー教の御供の仕方、祭礼などを興味深く聞いた。アミニズムの考えは日本で通じる。
54. 風来坊の旅枕㊼ バリ・ヒンドゥー善悪の調和	単　著	平成29年3月	『教育ＰＲＯ』3月7日号 P. 24～P. 25	バリ絵画の作品をお土産に探しながら、ウブド芸術村の創作活動を興味深く見て歩いた。厳粛な祭礼「ニュピ」は心の灯を１日消す日だという。ニュピを前に集落ごとに作られる鬼の蔵は青森のネブタを連想させる。寺院や先住民の村を精力的に回った。
「社叢インストラクター」 １．社叢学会認定「社叢インストラクター」としての活動	単　独	平成21年5月～現在に至る(平成26年5月更新)	社叢学会 沖縄民俗学会	社叢のみならず森林調査研究と保全活動を行っている。また、社叢学会の研究として、沖縄の御嶽（うたき）や伝統祭祀のフィールドワークを手掛け、沖縄と本土の古代祭祀のつながりを探っている。

教　育　研　究　業　績　書

平成29年3月31日

氏名　宮崎（竹田）治美

研究分野	研究内容のキーワード
近代語彙史　日中比較言語学　異文化教育	中国語語彙史・文法史　宋代語録

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
１　教育方法の実践例		
1）日中通訳・翻訳の科目における効果的な活用と教材の開発	平成17年4月～平成21年3月	駿台観光・外国語学校の非常勤としての授業。具体的な実用性を考え、場面を想定して基本から旅行・商談・学習・生活などのニーズを応じる。また、間違いやすい文法と言葉をはじめ、基礎編と応用編に分けて、徹底的に役に立つ指導することを工夫した。単に言葉を直訳するではなく、言語の背後にある生活習慣、地域性、国民性と言語の関連性とつなぎ、価値観の違いを理解するうえで、授業内容や教材などを考えた。 留学生の日本語科目（語彙・文法）において、かつて自らの学習経験を生かし、生活言語と学習言語を平行線形式で考え、独自に教材を開発した。その結果、日本語能力試験の合格率が向上し、大きな成果がみられたといえる。
2）中国語科目における実用性を高めるための取り組み	平成18年9月～21年3月	天理大学中国語学科非常勤講師として担当した「中国語表現」「中国文学概論」「異文化コミュニケーションと情報」「中国語（文法・読解）において、イラスト、歌謡、漫画、文学作品、映画、料理などの補助教材を用いて目や肌で感じさせた。また、留学生との「ジャーナル指導法」（学生との交換日記）、Ｘチェンジ学習方法などを行った。その他、日本と中国の大学の間で知名度の高い歌コンテストに学生を指導・派遣し、優秀な成績を獲得した。また、学生の中国語の演劇の指導などにも携わり、台湾で上演し、斯界から好評を受けた。
3）留学生日本語科目の取り組み （語彙・読解）（作文）（日本語表現）	平成21年4月～平成25年	奈良産業大学両学部の共通教育科目としての留学生の日本語科目において、自ら学生時代日本語能力試験400満点に近い点数を突破したことや平成１１年のJ・testには９５０点（1000点満点）をとり、当時の最高点数であったなどの経験を生かして、漢字圏の学生にとって最も間違いやすい語彙を解説し、効率的な学習方法を指導した。その結果、良好な成績が見られた。また、より効果的な学習ができるよう四段階レベルに分けて、目標を決めて確実に進めた。留学生専用教材と中学生の教科書を用いて、日本の言語・社会・生活と文化について幅広く学べるように工夫した。また、異文化の角度から日本語を分析、理解しやすく指導した。
4）遠隔技術の利用	平成21年4月～平成22年3月	授業以外、学外の語学学習にも重視し、インターネットのチャット利用を試み、週三回3時間ほどの体勢で質問を受け、日本語の指導、作文や小論文の添削など行い、また、生活、進路などにも相談にも応じた。現在、日本語学習指導以外に関する相談は継続している。
5）ITリテラシーにおける活用の取り組み	平成21年4月～平成24年3月	奈良産業大学情報学部の基礎科目ITリテラシー（留学生）において、最も理解しにくい外来語などを動画やイラストと用いて分かりやすく解説し、留学生にとって不利なところを有利になるよう実用性を考え、内容を工夫した。その結果、カリキュラムより大幅に進み、全学の行事ポスター、『国際交流センター記録文集』の表紙などすべて留学生が作成し、学習の活用につながっている。
6）情報学ゼミ演習	平成21年4月～平成25年	奈良産業大学情報学部の専任講師及び准教授として、４年間連続1年次のアドバイザーを担当した。１年次生が大学生活がスムーズに進めるよう学外オリエンテーションや学習指導、研究発表、生活、履修指導、家庭訪問などを行った。
7）中国語科目における効果的な学習方法及び海外語学研修	平成23年4月～24年3月	奈良産業大学専任講師及び准教授として共通教育科目「中国語会話Ⅰ・Ⅱ」を担当した。受講生が数名しかいない中国語科目を復活させた。興趣性などを重視し、常に就職進路や国際的意識を強めさせ、物事を多方面から考える柔軟性を重視した。その結果、短期語学研修などを希望する学生も増えつつ、夏季短期語学研修が認定科目として認定された。
２　作成した教科書，教材		
1）「日本語表現―文法編」 （駿台観光・外語専門学校応用語学専科　専用）	平成18年4月～平成21年3月	学習者のニーズに応じて、日本語能力試験N2、Ｎ１を目指す学習者が効率よく自習できるよう工夫した。機能語を意味によって分類して構成を考え、できるだけ簡単明瞭に文法的性格を解説しようと試みた。
2）『会話と文法を学ぶ初級中国語』 （再掲）	平成20年3月	古都奈良などを題材に、日本の生活に密着し、日本の地名や観光地などを中国語で話せるように工夫した。学習効果を考慮して語彙・表現・文法など最も使用頻度の高いものを用いるようにした。また、中国語の全体像を掴むために、文法の知識を増やすと同時に、実際の使用頻度が高い表現を集中的に、対話文形式で覚えこむことを第一義としている。

事項	年月日	概　　要
3）『漢字ドリル３０００』 （奈良産業大学日本語科目専用）	平成21年4月 ～現在に至る。	生活言語、学習言語の習得及び日本語能力試験N1を目指す留学生のために「読む力」「書く力」を確実に身につけられるよう工夫した。漢字を音読みと訓読みや字形、部首、意味などグループ別に構成し、効率的に習得できることを目指した。また過去数年間の能力試験１級に出題された漢字、語彙問題を徹底的に分析し、画数順に単元を配列して、日常学習の段階から最適な試験勉強ができるよう工夫した。その他、漢字圏の留学生にとって落とし穴である同形語をの用例を加えた。
4）「日本語表現――作文・小論文編」 （奈良産業大学日本語科目専用）	平成22年4月 ～平成23年3月	新しい作文の練習法で文章の構築力をつける練習帳である。留学生不得意な受け身、副助詞、接続詞で表現力をアップする練習帳である。
5）「コンピューター用語辞典（留学生用）」 情報学部向井教授と共同作成	平成22年4月 ～25年3月	留学生が最も理解しにくい情報学に関する専門用語を中国語に翻訳し、専門科目の授業内容の理解度を向上させることができた。（簡体字と繁体字二種類を作成）
３　教育上の能力に関する大学等の評価		
1）奈良産業大学情報学部　学生による評価	平成21年～25年	高い出席率を維持していて、大半の学生の受講意欲が高く、「理解しやす、大変熱意を感じる」と学生から評価を受けた。課外活動やクラブ活動、ボランティア活動、地域活動など学生と共に参加した。学習のみならず生活指導なども行い、学生から高い評価を受けた。特に留学生に対して、携帯電話の番号、メールアドレス、チャットIDを公開し、学習のみならず、生活、進路、自宅訪問などの相談を２４時間体制で受ける。大学を断念した留学生を大学に戻るように説得し、現在全員優秀な成績を修得している。留学生から多大な信頼を得ている。
４ 実務の経験を有する者についての特記事項		
1）地域市民講座 （財）奈良県経済クラブ　中国語講座	平成15年4月 ～現在に至る	地域の経済連合会主催の語学講座の講師を務めた。また、本学と社会人向けの「奈良駅前大学」という地域連携事業にの協力のかけ橋を務めた。コンサートや料理教室などを主催し、本学の学生、留学生との交流を活発にさせた。本講座は、2013年に10周年を迎える。毎年、語学研修、コンサート、特色のあるイベントなど開催し、地域から「民間大使」と言われ、多大な評価を受け、中国大阪総領事館からも賞状を授与された。
「長安の日本人－阿倍仲麻呂と漢詩－」　講演	平成22年5月	日本の歴史上、アジアとの関係構築に一生を捧げたわが国最古の留学生として、奈良から中国・長安に旅立ったことで遣唐使阿倍仲麻呂の異郷での生涯を紹介した。
「中国の子どもたちと家庭教育―異文化の視点から」	平成25年6月	中国の幼・小・中・高・大の教育の全体像を紹介した上、現在中国の家庭教育や地域教育の差を紹介した。また、中国人と日本人の価値観や文化の差異の視点から現在の日本の学校教育における外国人児童・生徒に対する対応を考察する。
多言語・多文化社会へのまなざし	平成26年6月	日本の学校における外国籍の児童生徒を事例にして、彼からの日常生活及び学校生活においての問題点を取り上げて、学校現場からどのように対応したらいいかと検討する。また、日本人学生が他者と異文化との出会いによって、相互理解をすることを新しい共生の視点から検討する。
阿倍仲麻呂―唐での足跡2016年度第4回奈良SGGクラブセミナー	平成29年2月	遣唐使および阿倍仲麻呂の入唐から、唐の社会・文化、 阿倍仲麻呂の官歴、長安での生活など、多様な歴史の資料から阿倍仲麻呂の足跡を追ってみた。奈良新聞に報道された。
５　その他		
1）学内業務 国際交流委員として	平成21年～26年に至る	国際交流委員として本学の海外協定校国立台湾屏東科技大学、蘇州科技大学、青島理工大学、東方学院、南京郵電大学の協定の実現に努め、夏季短期留学生、特別聴講生の受け入れを提案し、実行を推した。協定校にて説明会などを行い、日本への留学の意欲を増進させた。
2）留学生のイベント指導	平成21年～現在に至る	４年間連続留学生の日本語スピーチコンテストの担当として、作文・演説の指導を行った。また、『国際交流センター記録文集』を企画・提案し、４年編集を務めた。
3）日本人学生の語学研修	平成23年～現在に至る	平成23年度から中国語の夏季短期語学研修に引率した。その結果、学生たち自ら積極的に国際交流活動を行い、異なった文化に興味を持つようになった。

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1 資格，免許		
1）高等学校教諭一級普通免許（音楽）（中国で取得）	平成4年9月	内920068号 （内モンゴル自治区教育庁）
2）NAFL日本語教師養成プログラムLD	平成20年12月	株式会社アルクの主催する通信講座にて、420時間相当する日本語教師養成講座を受け、最終試験を受けて終了。
3）修士（教育学）	平成15年3月	奈良教育大学大学院 （奈良教育大学第957号） 論文題目 中国帰国児童･生徒の内部葛藤とアイデンティティの模索―ライフ･ヒストリ―からの考察―
4）博士（文学）	平成20年9月	奈良女子大学大学院 （奈良女子大学博課第393号） 博士論文題目 宋代語録における副詞研究
2 特許等		
なし		
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
4 その他		
奈良産業大学 学内委員会 1）国際交流センター運営委員	平成21年度～26年度に至る	留学生の生活、学習の支援・指導、留学生の引率、留学生行事、特別聴講生、短期留学生の指導、日本人学生の語学研修、海外協定校に関する業務全般を担当した。また、国際交流事業の企画、提案など、「国際交流センター記録」の編集などを担当留学生科目の担当の提案など。
2）全学共通・教養教育推進会委員	平成22年度～平成23年度	留学生及び特別聴講生の日本語科目、中国語科目などを適切に履修することができるよう提案する。またクラス編成、協定校との調整などの全般業務に携わる。
3）学生支援センター運営委員 4）学生委員会委員	平成23年度～平成24年度	学生の生活、学習の支援、指導、大学行事の協力及び企画、実施を行う。
5）紀要編集委員など	平成22年度～平成23年度	奈良産業大学紀要第27号の編集など。
6）入学試験委員会・編入学実施小委員	平成25年度～26年度	大学の入学試験に関する業務全般。
7）地域連携推進委員	平成25年度～26年度	大学が持っている物的・人的資源を社会に提供する企画・実施などを行う業務全般。
8）国際交流センター運営委員・自己点検・評価委員	平成27年度～29年度	国際交流センターの運営業務・大学自己点検評価の関する業務など

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
（著書）				
（1）『会話と文法を学ぶ初級中国語』	共著	平成20年3月	白帝社	古都奈良などを題材に、日本の生活に密着し、日本の地名や観光地などを中国語で話せるように工夫し、学習効果を考慮して語彙・表現・文法など最も使用頻度の高いものを用いるようにした。 B5判（全72頁） 共著：羅東耀・張敏・劉慶・何穎・郭斐映・竹田治美 （原稿の一部を執筆のほか全体の編集などを行ったため分割不可能）
（2）『宋代語録における副詞研究』	単著	平成24年12月	白帝社	本書は、著者のこれまでの中古・近古副詞や文法についての研究と、博士論文「宋代語録における副詞研究」をまとめたものである。 近年、中古・近古の文法や語彙、音韻の研究において個別の語彙について分析及び考察する研究があるものの、史的研究はきわめて少ない。著者は、古代言語及び歴史的考察を中心とした研究に取り組んできた。本書は、史的な角度から宋代の言語状況を概観し、宋代語録の定義、起源、形成について論じ、総計436副詞の個々の使用状況、特徴、性質について考察を加え、宋代語録における副詞の特徴を明らかにした。 宋学語録における副詞の研究は、これまでの宋学語録研究が閑却してきた部分に着目し、近古語彙史の基礎研究を補完するものとして、学術的な意義は大きい。 A6判（全298頁）

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（学術論文）				
（1）『朱子語類輯略』における「得」について	単著	平成20年3月	天理大学中国文化研究第24号 pp. 35-56	「得」の形態構造を取り上げ、機能と特徴を考察し、述語と補語の関係を結ぶ機能を持ち、動作性の強いものから感受性の強い動詞へ変遷した。「得」の働きによって、補語になる他の品詞が使用範囲も拡大した。さらに複句・複文の発展にも影響を与えた。
（2）『朱子語類輯略』における程度副詞について （査読あり）	単著	平成20年3月	奈良女子大学人間文化研究年報 第23号pp. 25-37	南宋は多くの優れた口語的な通俗文学作品が誕生し、言語も著しく変化した。特に副詞を含めて虚詞の機能の変化が顕著に見られる。その比較を示す程度副詞を取り上げ、その機能を考察し、さらに歴史的に構築を論じた。
（3）宋代語録における副詞の研究（博士学位論文）	単著	平成20年8月	奈良女子大学大学院	宋代における五つの宋学語録175巻を対象として、副詞を６つに分類し、435種類副詞の特徴や諸性格について考察を行った。更に、音節構造からみた宋代副詞を検証し、その変遷と諸性格を明らかにした。 （400字詰原稿用紙　1020頁）
（4）宋学語録についての一考察	単著	平成21年3月	天理大学中国文化研究第25号　pp. 47-76	宋学の代表的な語録を中心に、宋学語録の定義、起源、形成及び盛行の原因、さらに現存版本などについて考察するものである。
（5）音節構造からみた宋代副詞（査読あり）	単著	平成21年3月	白帝社 中国語研究第51号 pp. 76-91	大部の書である宋学の五つの語録をテキストとして、副詞を中心にその特徴や諸性格に着目し音節について考察した。 テキストとして宋学の語録合計175巻、総文字数は約2,720,000字であり、副詞は述べ435種類にのぼる。 2010年　NO.62日本中国学会報「歴史的文法分野」に取り上げられ、高く評価を受けた。
（6）　日本語学習における諸問題	単著	平成22年9月	奈良産業大学紀要 25集 pp.　73－77	留学生の日本語学習の習得課程における諸問題を分析し、その結果にも基づき、中級レベル学習者に日本語を習得させるための方法を探ることである。中級レベルの学習者においては、共通の問題として、文法・助詞・動詞などの混同、誤用などの問題点を考察し、教室における日本語指導を通して、講義中や作文、レポートなどの誤用例を収集し、これらの問題に焦点を絞って、分析・考察を行う。
（7）宋代語録における語気副詞について	単著	平成23年9月	奈良産業大学紀要26集 pp. 35-43	宋学語録を焦点に合わせ、語気副詞を考察した。語気副詞は数が多く、複音節化が顕著され、宋代の語気副詞は既に副詞の機能のみを担うものが多いということが分かる。一部の語気副詞は宋代以後も強い生命力を持って、現代漢語に定着し、口語表現として頻用されている。
（8）日本語コースカリキュラムと指導について	共著	平成24年9月	奈良産業大学紀要28集 pp.　161-166	近年、短期留学生が急速に増加している中、日本語短期研修を実施する際、教材の選択・使用、クラス編成、プログラム計画、教員配置などのあり方について、本学の夏季短期を事例として考察し、オムニバスで一つの講座を担当する際も、担当者間で目標についての共通理解、指導項目の意見交流や指導方法、指導内容のあり方を考える。また、研修生の教育効果を高めるために、学生の日本語レベルを含めた事前調査や全体像の構成から部分内容の調整までの確認など、望ましいコースカリキュラムの作成と指導のあり方について模索する。 （原稿の構成や問題意識の提起、講義の担当など全体にかかわったため分割不可能） 共著者：竹田治美・廣田直俊・加納巧
（9）外国人児童･生徒の内部葛藤とアイデンティティの模索 ―学校の多文化教育に向けて―	単著	平成24年9月	奈良産業大学紀要28集 pp.　129-139	本論は、2003年から10年間にわたり、外国人児童・生徒の日本語学習や母語環境、学校生活などについて調査した。国別では中国、ブラジル、フィリピン、ベトナム、韓国、台湾になる。子どもたちの学校生活と家庭環境に焦点をあて、その背景､実態から見えてくるものを考察する。学校における日本語学習と日本語カリキュラムの位置付けを指摘する。また、来日時間の浅い児童と日本で生まれた子どもの違いを分析する。さらに、子どもたちをめぐる諸問題を明確にするためには、その問題の所在について日本の学校や社会を中心に徹底的な個別調査を行うことが必要である。そして、問題解決のために日本の学校、地域、社会が改善すべき点を具体的に提言する。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（10）第二言語としての日本語習得について―人称代名詞の認識と運用をめぐって―	単著	平成25年2月	奈良産業大学情報フォーラム第８集 pp.89-98	第二言語習得（second language acquisition/SLA）研究に基づきながら、留学生の日本語習得における人称代名詞の認識と運用について検討したものである。第二言語としての日本語の人称代名詞を通して第二言語習得研究の中、特に教室における指導がどのように学習者に影響を与えるかについて考察し、より効果的な指導方法を探っていく。 日本語学習者が「人称代名詞」を習得する過程において抱える課題について分析し、日本語習得においての課題を明らにすることを目指す。
（11）日本語短期研修のカリキュラムとその周辺について	単著	平成25年3月	奈良産業大学紀要28集（続編）pp. 77-82	日本語短期研修における留学制度の現状とその課題について考察する。また、学習者の多様性と多面性にこたえる日本語教育の有り方について検証する。さらに、短期研修プログラムの実施やカリキュラムの編成には、より多様な内容で対応する必要があることと、多様なニーズに対応できる受け入れシステムの構築と今後の発展性について述べる。
（12）『祖堂集』における程度副詞について	単著	平成26年9月	奈良学園大学紀要集1集 pp.57－63	現存の最古の禅宗史総集『祖堂集』の程度副詞の機能、用法、特徴などを考察し、中古から近古にわたって程度副詞の体系そのものがそのように変遷したのか、また歴史的にどのように構築されていったかに考察する。
（13）『祖堂集』における接尾辞に関する一考察	単著	平成27年9月	奈良学園大学紀要３集 pp.83－88	『祖堂集』における副詞の接尾辞に焦点を合わせて分析し、その使用状況、機能、変遷に考察を加える。
（14）『多文化時代における外国人家庭教育観の変容について』	単著	平成28年9月	奈良学園大学紀要集5集 pp.91－99	外国人児童・生徒の家族を含めた生活実態を考察することによって彼らの価値観の認識と変化してきた家庭の側面を分析し、子供たちと保護者の意識と家庭教育がそのように変容してきたのかを明らかにした。また、彼らの成長と人格形成にどのような影響をもたらしたのか、複雑に絡み合った問題の起因を整理し、多様な対応が認められる学校現場に一助したい。
（その他）				
「研究報告書」 （１）日本の大学における職業教育と大学生の職業意識 （査読あり）	単著	平成23年8月	中国教育科学「十一五」計画　教育部重点研究課題 職業教育と企業文化との結合研究と実験（研究課題番号：GJA104009） 中期研究成果論文集 中華職業教育出版社 pp. 367 - 372	中国教育部職業技術教育センター研究所からの要請で日本の大学におけるキャリア教育及び大学生の就職意識について考察、具体的なデータを挙げ分析した。また、その背景にある歴史的な原因、社会要素などについて明らかにした。海外から投稿論文の中、唯一入選されたものである。
「翻訳」 （１）『台風雑記』	共著	平成22年3月	東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所出版	百年前、台湾植民統治時代に当時の官僚である佐倉孫三氏が漢文で記録した『台風雑記』を翻訳した。また、『台風雑記』と著者について紹介し、被植民者の思いと本書の意義についての論文の翻訳を担当した。担当部分「植民者による植民地の風俗記録」 A6判（全220頁）（12頁-30頁を担当）、その他、原稿全体の編集など。 三尾裕子監修　台湾の自然と文化研究会　編訳 木村自、李春子、山田仁史、王厳隈、福浦厚子、林美杏　竹田治美
「口頭発表」 （１）日本の大学における職業教育と大学生の職業意識	単	平成23年8月	中国キャリア教育国際シンポジウム（青島）	日本の大学におけるキャリヤ教育及び大学生の就職意識について考察、具体的なデータを挙げ分析した。また、その背景にある歴史的な原因、社会要素などについて分析した。さらにインターンシップ制度と実施及び現状と課題を考察した。
（２）近世漢語における副詞の音節変遷について	単	平成24年9月	北京大学　古代漢語研究会	副詞は、最も複雑の品詞であり、数が多く、多様性を持っているのが特徴である。本発表は音節の角度から、中古・近世漢語の音節変遷について考察し、その機能と性質及び個々の使用状態を分析した。副詞の分節化の多重性からその意味と統語的な機能と構造と関連させ、系統性を試みる。
（３）『祖堂集』における程度副詞について	単	平成25年10月	日本中国学会第65回大会	現存の最古の禅宗史総集『祖堂集』の程度副詞の機能、用法、特徴などを考察し、中古から近古にわたって程度副詞の体系そのものがそのように変遷したのか、また歴史的にどのように構築されていったかに考察する。

教　育　研　究　業　績　書

平成29年 3月 31日

氏名　土谷　長子

研究分野	研究内容のキーワード
教育学・社会学・生活科学	教育学・特別支援教育・社会福祉学・生活科学一般

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例		
・ビデオ教材の活用	平成18年4月～平成26年3月まで	京都光華女子大学短期大学部こども保育学科の准教授として担当した「乳児保育Ⅰ」（専門科目、1年次配当、半期、必修2単位）において、市販の「乳児保育の実際」のビデオを用い、保育所における乳児保育の実際を視聴しながら保育の内容を理解することができるよう、各トピックについて解説をしながら学生自身が書きこめるレジメを用意し、授業を行っている。学生自身がさまざまな乳児の様子や保育の実際を映像で見るとともに、それぞれの項目についての知識を幅広く獲得するのに効果をあげている。
・児童文化研究におけるビデオの活用	平成18年4月～平成25年3月まで	京都光華女子大学短期大学部こども保育学科准教授として担当した「乳児保育Ⅱ」（専門科目、2年次配当、半期、選択1単位）において、学生たちが制作した手づくりの乳児用おもちゃを保育所乳児に提供し、その遊んでいる様子をビデオで撮影、授業の資料としている。学生自身が作ったおもちゃがどのように乳児の遊びにかかわっているかを見ることによって、さらに自分たちでおもちゃや遊び方の工夫をする参考となり、実習や現場での実践に直接役立つ効果が上がっている。
・教材研究を活用した指導計画の指導	平成18年4月～平成23年3月	京都光華女子大学短期大学部こども保育学科准教授として担当した「保育実習事前事後指導」（専門科目、1年次、半期、選択2単位）において、保育内容を提示して、それに基づき教材研究を行ったうえで、保育計画を立てていく演習を行った。全員が同じ保育内容に取り組むことで、それぞれの工夫が共有でき、教材研究を行う際に注意すべきことや、そのうえで保育計画を立てることの重要性を具体的に身に着けることが出来たという点で効果が上がった。
・ビデオ教材の活用	平成26年4月～現在に至る	関西国際大学で担当している「乳児保育Ⅰ」（専門科目、2年次配当、半期、選択2単位）において、市販の「乳児保育の実際」のビデオを用い、保育所における乳児保育の実際を視聴しながら保育の内容を理解することができるよう、各トピックについて解説をしながら学生自身が書きこめるレジメを用意し、授業を行っている。学生自身がさまざまな乳児の様子や保育の実際を映像で見るとともに、それぞれの項目についての知識を幅広く獲得するのに効果をあげている。
・児童文化研究におけるビデオの活用	平成26年4月～現在に至る	関西国際大学で担当している「乳児保育Ⅰ」（専門科目、2年次配当、半期、選択2単位）において、学生たちが制作した手づくりの乳児用おもちゃを保育所乳児に提供し、その遊んでいる様子をビデオで撮影、授業の資料としている。学生自身が作ったおもちゃがどのように乳児の遊びにかかわっているかを見ることによって、さらに自分たちでおもちゃや遊び方の工夫をする参考となり、実習や現場での実践に直接役立つ効果が上がっている。

・教材研究を活用した指導計画の指導	平成27年4月～現在に至る	奈良学園大学人間教育学部准教授として担当している「保育課程総論」（専門科目、2年次、半期、選択2単位）において、保育内容を提示して、それに基づき教材研究を行ったうえで、保育計画を立てていく演習を行った。全員が同じ保育内容に取り組むことで、それぞれの工夫が共有でき、教材研究を行う際に注意すべきことや、そのうえで保育計画を立てることの重要性を具体的に身に着けることが出来たという点で効果が上がった。
・ビデオ教材の活用	平成28年4月～現在に至る	奈良学園大学で担当している「乳児保育」（専門科目、1年次配当、半期、選択2単位）において、市販の「乳児保育の実際」のビデオを用い、保育所における乳児保育の実際を視聴しながら保育の内容を理解することができるよう、各トピックについて解説をしながら学生自身が書きこめるレジメを用意し、授業を行っている。学生自身がさまざまな乳児の様子や保育の実際を映像で見るとともに、それぞれの項目についての知識を幅広く獲得するのに効果をあげている。
・児童文化研究におけるビデオの活用	平成28年4月～現在に至る	奈良学園大学で担当している「乳児保育」（専門科目、2年次配当、半期、選択2単位）において、学生たちが制作した手づくりの乳児用おもちゃを保育所乳児に提供し、その遊んでいる様子をビデオで撮影、授業の資料としている。学生自身が作ったおもちゃがどのように乳児の遊びにかかわっているかを見ることによって、さらに自分たちでおもちゃや遊び方の工夫をする参考となり、実習や現場での実践に直接役立つ効果が上がっている。
２　作成した教科書，教材		
①　「わかりやすい仏教保育総論」（チャイルド社）（社）日本仏教保育協会編（再掲）	平成18年４月～平成25年3月まで	京都光華女子大学短期大学部こども保育学科の准教授として担当する「特別保育」（専門科目、2年次配当、半期、選択2単位）において、宗教保育についての講義を行う際、仏教行事の意味や意義について知ることができるため、仏教保育のイメージを獲得するのに効果的である。
②「子どもと保護者への効果的な「声かけ・応答」」（金芳堂）横井一之・吉弘淳一編集　（再掲）	平成20年9月～平成22年3月	京都光華女子大学短期大学部こども保育学科准教授として担当する「総合演習」（専門科目、2年次配当、半期、選択2単位）において使用した。実践活動として子育て広場参加のボランティア活動を取り入れていたが、その事前のガイダンスの中で、乳児に対する言葉かけの大切さや具体的な語りかけの在り方について、このテキストを用いて指導を行ったところ、実践の場で効果的に生かすことができた。
③「新　乳児保育への招待」（北大路書房）髙内正子編集（再掲）	平成21年4月～平成25年3月まで	京都光華女子大学短期大学部こども保育学科准教授として担当する「乳児保育Ⅰ」（専門科目、1年次配当、半期、必修2単位）において使用している。とくに妊娠期から出産に至る経過、乳児に関わる行事や乳児保育の歴史的背景、保育所保育指針における乳児保育について、このテキストを中心に紹介し学ばせることで、乳児についての興味関心を高め、乳児保育の実践について身近に学ぶ意欲を高める効果が上がっている。
④「新　乳児保育への招待」（北大路書房）髙内正子編集（再掲）	平成26年4月～現在に至る	関西国際大学で担当する「乳児保育Ⅰ」（専門科目、2年次配当、半期、必修2単位）において使用している。とくに妊娠期から出産に至る経過、乳児に関わる行事や乳児保育の歴史的背景、保育所保育指針における乳児保育について、このテキストを中心に紹介し学ばせることで、乳児についての興味関心を高め、乳児保育の実践について身近に学ぶ意欲を高める効果が上がっている。

⑤「子どもと保護者への効果的な「声かけ・応答」」（金芳堂）横井一之・吉弘淳一編集　（再掲）	平成27年4月～現在に至る	奈良学園大学人間教育学部准教授として担当する「幼児理解」（専門科目、2年次配当、半期、選択2単位）において使用している。実践活動として子育て広場参加のボランティア活動を取り入れるが、その事前のガイダンスの中で、乳児に対する言葉かけの大切さや具体的な語りかけの在り方について、このテキストを用いて指導を行ったところ、実践の場で効果的に生かすことができた。
⑥「新　乳児保育への招待」（北大路書房）髙内正子編集（再掲）	平成28年4月～現在に至る	奈良学園大学で担当する「乳児保育」（専門科目、1年次配当、半期、選択2単位）において使用している。とくに妊娠期から出産に至る経過、乳児に関わる行事や乳児保育の歴史的背景、保育所保育指針における乳児保育について、このテキストを中心に紹介し学ばせることで、乳児についての興味関心を高め、乳児保育の実践について身近に学ぶ意欲を高める効果が上がっている。
３　教育上の能力に関する大学等の評価 ・学内自己点検評価における認定	平成23年度	京都光華女子大学短期大学部学内自己点検評価において優良（優秀・優良・相応・要努力・要改善の5段階）の評価として認定をされる。授業担当コマ数が20コマを超えながら、担当授業において、学生の習熟度をみながら進度を調整したり、教材を工夫するなど理解が深まるようにしたこと、また演習科目については、各科目での学習内容を確認しながら保育現場で直接役立つような学習ができるようにしたこと、実習科目については、学外実習等において学生との連絡調整を密にしていったことが評価された。
・授業アンケートによる評価	平成18年度～平成25年3月まで	京都光華女子大学短期大学部の学生授業アンケートにおいては、平均4.3以上の評価を得ている。24年度前期評価においては平均が4.56（短期大学部全体平均4.26）であった。学生のレベルに合った授業内容を心掛けており、学生の自由記述からは「わかりやすい」「役に立った」「興味を惹かれる内容だった」などの評価を得ている。
・大学設置・学校法人審議会における教員組織審査	平成25年7月	大学設置･学校法人審議会の教員組織審査において奈良学園大学　人間教育学部　准教授として 「幼児理解」「保育課程総論」「子どもと健康」「子どもと人間関係」「教育実習事前事後指導（幼）」 「教育実習Ⅰ（幼）」「教育実習Ⅱ（幼）」「教職実践演習（幼・小）」「基礎ゼミナールⅠ」「基礎ゼミナールⅡ」「人間教育学ゼミナールⅠ（基礎）」「人間教育学ゼミナールⅡ（応用）」「卒業研究」担当可と判定
・大学設置・学校法人審議会における教員組織審査	平成26年2月	中央教育審議会の課程認定委員会における教員審査において奈良学園大学人間教育学部准教授として 「幼児理解」「保育課程総論」「子どもと健康」「子どもと人間関係」「教育実習事前事後指導（幼）」 「教育実習Ⅰ（幼）」「教育実習Ⅱ（幼）」「教職実践演習（幼・小）」担当可と判定
・大学設置・学校法人審議会における教員組織審査	平成28年2月	中央教育審議会の教員組織委員会における教員審査において奈良学園大学人間教育学部准教授として 「乳児保育」「保育内容総論」担当可と判定

４　実務の経験を有する者についての特記事項 保育所内研修講師	平成18年4月～ 平成22年3月	高槻市内の法人保育所内の研修において、法人内研修の在り方を模索し、研修の企画運営に対して助言を行ってきた。
京都市中京区「子どもの虐待未然防止」研修会講師	平成23年3月	京都市中京区社会福祉協議会・中京区民生児童委員会・中京区子育て支援ネットワーク主催の「子どもの虐待未然防止」研修会において講師を担当。地域でできる児童虐待の予防・早期発見・早期対応等の啓発を目的とする講演を行った。
京都市右京区子ども支援センター子育て支援ステーション会議講師	平成23年9月	京都市右京区子ども支援センター主催の子育て支援ステーション担当者会議において、地域の子育て支援に対するの各ステーションの取り組みについての研修コーディネーターとして参加し、助言を行った。
和歌山県御坊市要保護児童対策地域協議会講演会講師	平成24年11月	御坊市要保護児童対策地域協議会対象者における、地域の虐待未然防止に関する講演会で講師を務め、地域の虐待防止についての提言を行った。
生駒郡保育士会職員研修	平成27年5月	生駒郡内の公立保育所保育士を対象に、「指導案を立てるために～子どもを見る目が保育をつくる」と題して、子どもの姿を中心とした指導案についての研修を行った。
三郷町立西部保育園信任保育士研修講師	平成28年6月～ 2月	三郷町立保育園として唯一の西部保育園に新任保育士が3名配置されたことをきっかけに、新任保育士研修並びに同保育園で働く保育士の実務能力向上のために行う研修（年4回）の講師として研修を行う。
奈良県教員免許状更新講習講師	平成28年8月	奈良県教員免許状更新講習（幼稚園）において「子どもの育ちを踏まえた保育内容の充実と考える」をテーマとし、講師を務めると共に、講習の企画・コーディネートを行う。
５　その他 なし		

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
１　資格，免許		
保母資格	昭和57年3月	第九七九
幼稚園教諭一級普通免許状	昭和57年3月	昭和五六幼一普第三八一号
社会福祉士資格	平成5年5月	資格登録（第02175号）
幼稚園教諭専修免許状	平成9年3月	平八幼専第一三号
修士（教育学）	平成9年3月	聖和大学　第142号 論文題目：インスリン依存型糖尿病児の自己像－描画法を用いて－

２　特許等 なし		
３　実務の経験を有する者についての特記事項 なし		
４　その他 教務委員会委員	平成18年4月～ 平成22年3月	京都光華女子大学短期大学部教務委員として、学科立ち上げ時の教務担当として役割を担った。
FD・自己点検委員会委員	平成18年4月～ 平成22年3月	京都光華女子大学短期大学部FD・自己点検委員として、学内教員評価やFD活動の在り方検討に協力するとともに、平成20年度に行われた短期大学基準協会による認証評価に際し、手続等の業務の一端を担った。
短期大学基準協会第三者評価ALO（連絡調整責任者）	平成20年4月～ 平成22年3月	京都光華女子大学短期大学部が短期大学基準協会による第三者評価を受けるにあたって、その連絡調整責任者として、大学と短期大学基準協会並びに審査者との連絡調整の役割を担った。
生活委員会委員長	平成22年4月～ 平成25年3月	京都光華女子大学短期大学部生活委員委員長として、学生生活における諸問題の整理や学校行事等についての検討を取りまとめた。また寮務委員も兼務した。
教務委員会委員	平成26年4月～ 平成29年3月	奈良学園大学人間教育学部教務委員として、学部立ち上げ時の教務担当として役割を担っている。また保育士資格取得希望者へ向けて、奈良文化女子短期大学の科目等履修に関して準備を行った。

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（著書） 1　実習に役立つ表現遊び２	共著	平成19年4月	北大路書房	実習で行うあそびとその指導を紹介した平成16年度に発行した、「実習に役立つ表現あそび」の第二弾。前作同様、実習において参考となる遊びとともに指導案の例を紹介し、実習の際に役立つものを目指している。実習生が手にとってすぐ使えるものを目指して編集したものとなっている。 （B5版　全129ページ） 岡本拡子編著 藍原佳子・伊藤美佳・居原田洋子・岡本拡子・岡本依子　小寺玲音・柴田智世・清水桂子・卜田真一郎・新開よしみ・瀧川光治・滝澤真毅・多胡淳子・土谷長子・野崎之暢・野崎美香子・馬場耕一郎・広瀬健一郎・本田美佐枝・　松嵜洋子・宮内洋・矢萩恭子・八幡眞由美・吉永早苗・吉原美代子 本人担当箇所：「第1部第1章－4」「第3章」（pp.10-11、p.78）を単著 新聞紙を用いたかくれんぼあそびを紹介した。指導案を例示では、紙コプターの指導案を紹介している。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
2　子どもと保護者への効果的な「声かけ・応答」	共著	平成20年3月	金芳堂	保育者の専門性を生かした支援として求められているソーシャルワーカーとしての役割を担うために欠かせない、子どもや保護者に対することばかけや声かけについて、具体例を示しながら解説した。実習生から経験の浅い保育者のために役立つもととした。 （A5版　全215ページ） 横井一之・吉弘淳一編集 荒船真由美・上續宏道・久米憲子・倉橋弘・小杉裕子・佐藤博美・土永典明・土谷長子・新川朋子・新川泰弘・西内香織・橋本景子・東野泰之・堀健治・松田幸恵・本山ひふみ・安田誠人・山野孝治・横井一之・吉弘淳一 本人担当箇所：「第5章　乳児におけるかかわりと留意点」(pp.58-71)を単著 乳児に対する声かけの例を示し、言葉を話さない乳児にどのようにかかわったらよいか、具体的に紹介している。
3　改訂　社会福祉士の倫理　実践ガイドブック	共著	平成21年1月	中央法規出版	2005年6月に採択された、社会福祉士の倫理綱領を解説するガイドブックである。2007年に出版された「社会福祉士の倫理　倫理綱領実践ガイドブック」を踏襲し、2008年に改正された「社会福祉士及び介護福祉士法」に従って、実践現場で利用しやすいものに改訂を行った。（編集者のため、本人担当部分抽出不可） （A5版　全191ページ） 日本社会福祉士会編集（編集委員　委員長土谷長子　岡田誠・竹沢昌子・滕憲之・山本進） 岡田誠・三橋俊一・南川久美子・宮嶋淳・山本進
4　新　乳児保育への招待	共著	平成21年3月	北大路書房	2008年の保育所保育指針の改定に伴い、「乳児保育への招待」の改訂を行った。 （A5版　全209ページ） 高内正子編集 高内正子・大元千種・水谷孝子・岡田るみ子・新治玲子・土谷長子・菱谷信子・橋本真紀 本人担当箇所：「第7章　乳児の年齢別発達と保育の実際」（pp.123-138）を単著 保育所保育指針の改定の流れを解説するとともに、保育内容については、実践の場においては、旧保育指針の内容が参考になることを踏まえ、新たな今日的問題を取り入れながら解説を加えた。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
5　保育内容総論	共著	平成22年5月	近大姫路大学教育学部通信課程	保育者養成のための通信教育課程における保育内容総論のテキストである。読んで理解しやすい内容となるよう配慮し、幼稚園・保育所における保育の中心となる保育内容についてその考え方やあり方の基本をまとめた。 (B5判　全242ページ) 土江茂博編集 土江茂博・前田佳代子・土谷長子・小崎恭弘・谷口ナオミ 本人担当箇所：「第３章子どもの発達と保育の内容」「第５章保育課程と指導計画」「第６章　　保育の評価と記録」（pp.36-51 pp.98-134）を単著 それぞれ「子どもの発達と保育の内容」「保育課程と指導計画」「保育の評価と記録」について、実際の乳幼児の姿をできるだけイメージしながら学べるよう、また保育現場にも応用できるように保育内容の実際について示した。
6　実践的保育原理	共著	平成24年4月	三晃書房	保育原理という保育の基礎・知識を学ぶにあたって、実践的な保育場面との連携をすることによって、より効果的な学びを目指したテキストとなっている。 （B5版　全191ページ） 上野恭裕編著 上野恭裕・田爪宏二・三宅茂夫・大井佳子・永井理恵子・平井タカネ・渡辺桜・土谷長子・阿部真美子・角野幸代・福原史子・田岡由美子・荘司紀子・鈴木俊之・大沼良子・渡辺一弘・金村美千子・浅見均 本人担当箇所：「第3章Ⅱ生活・遊びを通しての総合的な保育とは」（pp.86-94）を単著 遊びの理論を示しながら、保育の中での遊びと生活について具体的に考えていくことができるように示した。
7　乳児保育演習ガイド	共著	平成24年4月	建帛社	保育所保育に求められるニーズのうち、乳児保育への期待は近年高まりつつある。保育所に通う子どもたちの低年齢化や、地域における子育て支援をはじめとする在宅乳児への支援はすでに顕在化したニーズとなっている。これらを担おうとする保育者を養成するにあたって、それらの課題に対して処することができる知識や技術の習得が求められている。こうした要請にこたえるために、より分かりやすいテキストを目指して編まれている。 （B5版　全153ページ） 髙内正子・梶美保編著 池田りな・新治玲子・土谷長子・中村千晶・中村宏子・細井香・宮﨑つた子・森知子 本人担当部分：「第12章乳児保育と環境」「第14章乳児保育と保育所保育指針」（pp.113-123 pp.137-143）を単著 第12章においては乳児室における物的・人的環境の在り方を具体的に示した。また第14章では、保育所保育指針における乳児保育の考え方とその方針を示し、近年話題になっている幼保一体化の制度における乳児保育について考えることができるような内容とした。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（学術論文） 1幼稚園教育課程編成の現状と課題（1）―A市公立B幼稚園の教育課程の現状を通して―	共著	平成24年10月	環太平洋大学異研究紀要第6号 pp.135-140	それぞれの幼稚園で編成される教育課程について、その意義を確認し、編成における配慮事項を整理した。また公立幼稚園の教育課程の事例を通して、その現状を検討し、効果的に保育と教育課程が結び付くための方策を提案した。 （本人担当部分抽出不可） 共著者：松田智子・土谷長子
2　教育(保育)課程と指導計画	単著	平成24年3月	教育PRO	幼稚園や保育所における教育課程や保育課程について、そのあり方について言及するとともに、その課程に基づいた指導計画についてどのようにあるべきかを論じた。また養成課程における実習生が指導計画に取り組むとき、効果的な指導計画作成のために求められることやその意味について論じた。
3　保育所におけるアレルギー対応給食と食育	単著(研究ノート)	平成26年12月	人間教育学研究第2号	食物アレルギーの実態を踏まえ、それに対応する保育所給食の実践について紹介を行った。特に年少児を対象とした給食においては、誤食等を防ぐための配慮が求められている。そのため、アレルギーのある子もない子も同じものを食べることができることを目指した取り組みが始められている。こうした現状をレポートし、報告を行った。
4　保育所における生活技能についての調査から	単著(資料)	平成28年3月	奈良学園大学紀要第6集	全国国公立幼稚園・こども園長会から公開された生活技能調査をもとに、A町立保育園において、同様の技能調査を行った。その結果を分析した結果、幼稚園と保育所それぞれに特徴が見られた。また、近年の生活環境についても今後の課題となる可能性を見ることができた。
（その他） 「学会発表」 1　保育者のためのOJTプログラムの開発と実践（1）	共同	平成19年5月	日本保育学会第60回大会発表論文集pp.586-587	（全体概要） 保育所におけるOJT研修の試みである。法人内3か所の保育所保育士を対象に、保育士としての専門性を高めるとともに保育士自身が自らの自尊感情を高め、それを日々の保育業務に生かしていけるようにするためのプログラムを工夫実践した。その結果、自尊感情が高くなるとともに、保育を考える視点や意欲が高めることができた。管理職とともに、中堅職員が自ら研修を計画実践できる力を培うことができるよう、継続して実践、検討を行う予定である。 （土谷長子・橋詰啓子・前田佳代子）（本人担当部分抽出不可）

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
2　（ポスター発表）保育士養成における人間力育成	共同	平成19年9月	全国保育士養成協議会第45回研究大会発表論文集（pp. 190-191）	（全体概要） 保育者を目指す学生にとって必要な「基礎学力」「生活上の基礎技能」を学習する機会を設ける必要から、本学が「基礎演習」の中で実践している取り組みとその成果を紹介した。授業はそれぞれの意義や実践課題について手作りの教材を用いて、学科教員全員がティーム・ティーチングで取り組んだ。その結果として学生にとってもそれぞれの課題の意義が高く評価されるとともに、教員全員が学生の状況を把握し、また教員自身の振り返りの場ともなったことが効果としてあげることができた。 （吉村啓子・松井祐子・土谷長子・智原江美・高橋耕輔・下口美帆・岡野聡子・高澤空男）（本人担当部分抽出不可）
3　（ポスター発表）保育士養成における人間力育成	共同	平成19年9月	全国保育士養成協議会第46回大会発表論文集 pp. 114-115	（全体概要）京都光華教育についての実践報告である。京都光華教育はⅠ、Ⅱ、Ⅲという三部構成となっている。Ⅰは短期大学における基礎的教育に関すものである。Ⅱは「生きる力」に関するものである。Ⅲは京都文化・伝統文化を学ぶというものである。それらの内容・教育方法などを具体的に提示した。その結果、本学科の取り組みが、他大学の保育者養成教育のヒントや刺激になるものであったと確信された。（吉村啓子・松井祐子・松田智子・土谷長子・智原江美、高橋孝輔・下口美帆・岡野聡子）（本人担当部分抽出不可）
4　保育者のためのOJTプログラム（2）－研究保育と自己評価の分析-	共同	平成20年5月	日本保育学会第61回大会発表論文集	（全体概要）60回大会の発表の続報として、OJTの研修を重ねることで実践が深まり、その中で考える力や意欲を高めることができ、またチームワークの向上にもつながっていった成果を報告した。自己評価についても自尊感情がさらに高まり、また特に中堅保育士が後輩を指導する力が高まっていることが確認された。今後、職員自身が研修をプログラムできる力を養うことができるよう、継続実践をしていく予定である。（橋詰啓子・土谷長子・前田佳代子）（本人担当部分抽出不可）
5　保育士養成教育と卒業時の満足感との関係	共同	平成20年9月	全国保育士養成協議会第47回大会発表論文集（pp. 260-261）	（全体概要） 京都光華女子大学短期大学部こども保育学科においては、保育士資格、幼稚園教員免許状取得のために必要な科目のみならず、保育者としての資質向上を目指して多彩な科目を開講している。また教員はその中で、きめ細かな対応をすることで、学生がよりよく育っていける環境を整えているが、さらなる教育の効果を目指すために、その評価分析を行った。学内での比較となるが、他学科に比べて全体的に学生の満足度は高く、またその満足度に影響する因子は、授業、先生、成長度であり、本学科が目指している教育効果が一応の評価を得ていることがわかった。（吉村啓子・中瀬惇・松井祐子・松田智子・土谷長子・智原江美・高橋孝輔・下口美帆・岡野聡子）（本人担当部分抽出不可）

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
6　より良き教育を目指すカリキュラム・マップの作成～FD活動の一環として～	共同	平成21年9月	全国保育士養成協議会第48回大会発表論文集（pp. 222-223）	（全体概要） 京都光華女子大学短期大学部こども保育学科において授業科目の精選や補充を行うための基礎資料としてカリキュラム・マップを作成した。カリキュラム・マップは科目ごとに設定された到達目標とディプロマ・ポリシー各項目の対応表であり、この作成過程を通して、本学の教育活動において保育士養成校に共通する最低到達目標を設けることが求められているのではないかと思われた。また本学の問題としては、教養教育についての取組みを今後の課題とすべきであろうことが明らかとなった。（吉村啓子・中瀬惇・松井祐子・梅岡さと江・土谷長子・智原江美・高橋孝輔・下口美帆・岡野聡子）（本人担当部分抽出不可）
7　現場が求める人材像-聞き取り調査をふまえて-	共同	平成22年9月	全国保育士養成協議会第49回大会発表論文集（pp. 174-175）	（全体概要） 本学における実習・就職支援室においては、学生の実習と就職を直接支援することに加え、学生の終息早紀である保育所や幼稚園が求める人材像についての情報を収集し、進路支援に役立てている。そこから見えてきた養成校として求められる教育内容としては、人柄が最も重視されており、ピアノについては「弾き歌い」の技術を求めていることが分かった。一方、学生が短大生活で自らの能力を評価した結果においては、協調性について高い評価をしているが、今後は考える力や踏み出す力の育成にも目を向ける必要があることが明らかとなった。 （吉村啓子・梅岡さと江・辻野孝・松井祐子・高橋孝輔・智原江美・土谷長子・下口美帆・岡野聡子）（本人担当部分抽出不可）
8　地域子育て支援事業と連携させた授業における学生の学び	共同	平成23年9月	全国保育士養成協議会第50回大会発表論文集（pp. 468 - 469）	（全体概要） 京都府子育て支援事業として京都三条会商店街と共催している、子育て支援広場における授業の一環としての学生参加の意義について考察した。それぞれの専門分野から学生に学びのポイントを示し、それに対する取り組みの成果について述べた。担当する乳児保育においては、子育て広場に来場する母親と乳児を観察することで、基本的信頼関係について考え、実感できるなど、保育所保育の中では出会うことができにくい場面に出会うことができた。またその他造形分野や幼児体育の分野についても、それぞれに学生にとって有意義な機会をもつことができたことが明らかとなった。 （土谷長子・智原江美・下口美帆）（本人担当部分抽出不可）

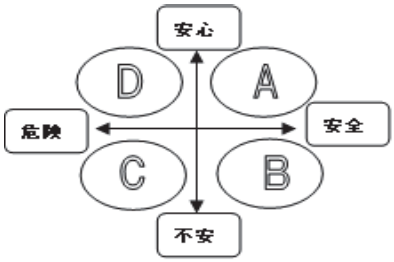
教　育　研　究　業　績　書

平成 29 年 3 月 31 日

氏名　松井　典夫

研究分野	研究内容のキーワード
教育学	教師教育・教科教育（図画工作科）・学校安全（安全・防災教育）

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例 ・ワークシートを活用した図画工作科の授業	平成１６年４月～平成２０年３月	図画工作科は、知識の観点がなく、したがって学力をはかるテスト類はない。評価の方法について、いつも課題になるが、作品のみを取り上げて評価を行う、いわゆる作品主義になると、図画工作科という教科が持つ魅力を半減させてしまう。そこで、児童自らが学習の履歴をつづるワークシート集「夢への扉」を使用し、学習の過程をポートフォリオ形式で振り返ることができる方法を取り入れ、評価に生かした。それにより、指導者は４観点（造形への関心・意欲・態度、発想や構想の能力、創造的な技能、鑑賞の能力）の中で、その題材における観点の重点を絞り、評価と一体となる授業実践を行い、学習計画を立てることが可能となった。
・「安全安心様相図」（日本セーフティプロモーション学会誌　第 3 巻 1 号 p62-66　松井）を用いた安全教育	平成２１年度～現在に至る	 安全教育で目指すべきところは、「安全で安心」であるＡのカテゴリーである。しかし、このカテゴリーに児童の状態がいれば、安全教育の役割が達成されたかと言えばそうではない。知識や技能が備わっていない状態であるなら、真の安全・安心とは言えないだろう。たとえば、防犯ブザーの例で言うと、防犯ブザーの学習をする前なら、Ａの位置（「防犯ブザーは持っていれば安全で安心だ」）にいた児童も多数いるだろう。「防犯ブザーはいざという時に、不審者を撃退することができる。それを持っていれば安心だ」と感じている状態である。しかし、学習を進めるうちに、実は持っているだけでは安全とは言えないことに気付き始める。児童は「安全を守るものだけど、それだけではだめだ。自分にはいざという時に使うことができない」というＢの状態や、あるいは、「まったく安全とは言えない。頼るのはこわい」というＣの状態へと移行し始める。このように、これまで何の疑問を持たずに「安全」だと過信し、「安心」しきっていた状態のＡの位置では、児童の生涯にわたる「安全」「安心」とは言えない。まずは「真実」を知ることが、安全教育の大きな役割のひとつと言えるだろう。しかし、この学習をした時点で、児童はＢやＣの位置にとどまらず、ベクトルは再び、真の意味でのＡに向かい始めているのである。児童の中では、「この学習をしたから自分の考え方が変わった」あるいは、「防犯ブザーの使い方をしっかり学んだから、いざというときに自分がどのよ

		うな心理状態になるかわかった」というように、「安全・安心」を真に見つめることができるようになるのである。その状態や児童の変容を客観的に測るマトリクスとして、「安全安心様相図」を考案した。
・「児童の安全意識尺度（Safety Awareness Scale of Children　“ＳＡＳＣ”）」の開発	平成２７年８月～ 現在に至る	前掲の「安全安心様相図」を用いて安全教育に関する授業を行うことによる、一定の効果を実証することができたのは確かである。しかしながら、安全安心様相図のポイントを数値化することができず、客観性に足りない。そこで、容易に数値化することができ、なおかつ児童自身にポイントさせることができ、授業の事前、事後調査が可能な「尺度」に着目し、作成したものが「児童の安全意識尺度（Safety Awareness Scale of Children　“ＳＡＳＣ”）」である。ＳＡＳＣを、協力校に事前に送付し、安全授業を実施する１週間前に、事前調査を実施してもらう。調査にあたっては、授業を実施する低・中・高学年のそれぞれのクラスで実施した。また、性別とイニシャルを記入してもらい、事前、事後調査で個別にその変容を見て取ることができるようにした。
・「図工科指導法」の講義における模擬授業過程の可視化	平成２６年４月 ～ 現在に至る	大学における「図工科指導法」の授業において、指導案を作成し、模擬授業を行う際、学生同士が児童役となって行う場合が多い。その際に、児童役の学生個々が児童役に没頭し、授業全体の流れや発問内容を把握、吟味することが困難である。また、授業者が自分自身の表情、発問のタイミングなどを即時評価することができるという意味でも、iPad で授業を撮影し、模擬授業後の協議会で動画を用いながら振り返り、自己、他者評価に活用している。
・図画工作科における小学校時代の実態調査	平成２６年４月 ～ 現在に至る	担当する「美術の理解」（１回生必修）及び「図工科指導法」（２回生必修）においては、第１回目の授業時に、１．図画工作科の授偉業は好きだったか。２．図画工作科の授業は楽しかったか。３．小学校時の図画工作科の授業でもっとも印象に残っている授業は。という項目でアンケート調査を行い、授業改善に役立てている。
・地震災害被災地の小学校における教育実践演習	平成２８年 １０月	平成２８年４月に発生した熊本地震では、多くの学校も被災し、また避難所となった。避難所となった学校に訪問し、登校時の安全指導ボランティアや、授業補助の演習を行うことを目的として、奈良学園大学の教職志望の学生１０名を引率し、熊本県益城町立広安西小学校を訪れ、実践的演習を行った。
２　作成した教科書、教材 ・図画工作科ワークシート集「夢への扉」（再掲）	平成１６年４月～平成２０年３月	大阪教育大学附属池田小学校図画工作科主任として担当した図画工作科の授業において、ワークシート集を作成した。毎時の児童の作品制作過程を画像にしてワークシートに貼り付け、本時の振り返りを毎時記入させるとともに、次回の計画を立てさせた。そのことにより、児童は自らの学習履歴を振り返りながら、目標を持って授業に臨むことができるようになった。また、本教材は教育実習にも活用し、教育実習生は、児童個々の能力や個性を的確に把握し、指導案作成や授業実践に生かすことができた。

・安全教育実践指導略案集(再掲) ・安全教育実践考察集(再掲)	平成２２年２月	本指導略案集と実践考察集は、現職の教員、及び教育実習生の参考資料として作成したものである。大阪教育大学附属池田小学校は、平成２１年度より、文部科学省教育課程特例校として、「安全科」を設置した。当該校「安全科」主任として、平成２１年度に実践した安全教育の授業（防犯・生活安全・地震災害・交通安全・火災・水難災害）の指導略案を作成し、それぞれの授業後に考察した内容を記録した考察集を作成し、平成２１年度の大阪教育大学附属池田小学校教育研究協議会において、参会者に配布し、教育実習生に配布した。安全教育に対する必要性の実感は、メディアを賑わす事件や事故、災害の後は教育現場において高まる観があるが、どのような実践をすればよいかわからないというのが、教育現場で聞かれる多くの声である。その一助にと作成したものである。
・ＡＥＤ使用場面を用いた「命の教育」のビデオ作製	平成２０年２月	２００８年２月における大阪教育大学附属池田小学校研究協議会の公開授業で、ＡＥＤを教材にした命の大切さを実感する授業、「命のバイスタンダー」を考案し、実践した。命の現場の緊迫感を体験する教材として、実際に使用されたＡＥＤのボイスレコーダーと心電図、実際に人命救助にあたる人々の声を組み合わせたムービーを作成し、教材として使用した。このビデオは、大学で担当する「学校と安全」や「教職実践演習」の授業でも使用している。
・「美術の理解」授業プレゼンテーション及びワークシート	平成２６年４月 ～ 現在に至る	担当する「美術の理解」においては、芸術分野の内容理解、美術教育の概観の内容理解を行うために、テキストを使用するのではなく、その理論に伴った実際の児童の姿や授業の内容について、具体的に想起しながら学ぶことができるように、プレゼンテーションを作成して授業を行っている。また、その内容を復習しながら習熟していくことができるように、ワークシートに記入させ、１５回の講義後にワークシートを綴じ、テキストとして使用することができるようにしている。
・教職表現力演習ノート	平成２７年４月	奈良学園大学人間教育学部の必修科目である教職表現力演習の教材として、授業担当者で通年使用可能な教材を作成した。ワークシートとしても即時に記入しながら利用することができる構成になっている。
３　教育上の能力に関する大学等の評価 ・大阪教育大学附属池田小学校　学校教育診断	平成１７年度～２５年度	大阪教育大学附属池田小学校においては、毎年４回にわたって、児童対象と保護者対象に分けて、学校教育診断を実施している。およそ３０項目の質問事項に対して、マークシート式で回答し、その他の要望等を記述式で回答する。結果はホームページにおいて公開され、授業参観時に全保護者が閲覧できるように冊子化もされる。その結果において、児童、保護者ともに、毎年度高い評価を得ている。
・大阪教育大学附属池田小学校　個人評価	平成１７年度～２５年度	大阪教育大学附属池田小学校においては、毎年度４月に個人目標を設定し、３月に管理職面談を経て個人評価を受ける。この結果は給与に反映される。 この個人評価において、毎年度高得点を得て、高い評価を得ている。

・奈良学園大学における学生の授業評価	平成２７年度	人間教育実践力開発演習では、教師として求められる、教育現場の現代的課題への対応力として、学校安全マップの意義や授業構成に関する授業を行ったことで、教員としての将来への展望と、教員の資質能力に関して具体的に学ぶことができたと高評価を得て、以後毎年、学校安全マップの授業に取り組んでいる。
・奈良学園大学における学生の授業評価	平成２８年度	教育実習事前事後指導では、学校運営、学級経営、教室掲示とうについての講義を担当した。そこでは求められる教師の姿や学校の組織としての姿、組織力に関して具体的に学ぶことができたと、高評価を得た。
４　実務の経験を有する者についての特記事項 ・大阪教育大学教育実習生指導	平成１７年度～平成２５年度	大阪教育大学附属池田小学校においては、毎年度９月に基本実習生およそ５０名、１１月に併修実習生およそ５０名を受け入れ、指導に当たっている。 平成１７年度から２０年度においては図画工作科主任として、特に美術科の学生を受け入れ、授業実践、指導案作成、生活指導等の指導に当たった。また、平成２２年度、２３年度においては学校安全主任として、全教育実習生を対象とした安全講話を行うとともに、将来、教師になったときのための経験として、不審者対応訓練の見学、参加を指導した。また、平成２５年度においては、教生指導部長として、全教育実習生の指導、相談に当たってきた。
・豊中市教育委員会：「ニューステージ研修」講師	平成１９年８月	教職経験５年未満の豊中市の教員を対象に、図画工作科の研修講師を務めた。それぞれ参加教員が持ち寄った学習指導案を指導し、授業づくりを参加教員とともに進めていった。その参加教員の授業実践を参観し、指導助言を行うなど、計５回の研修を行った。
・高槻市立磐手小学校：安全教育授業　指導助言	平成２０年２月	大阪教育大学附属池田小学校の教育研究協議会で行った、BLS 教育(一次救命処置)の公開授業「命のバイスタンダー」を見た参会者が、BLS 教育に関心を持ち、その指導案に基づいて、高槻市立磐手小学校の４年生を対象に授業実践を試みた。その授業実践を参観し、指導助言を行った。当該授業者は、前職が救命士であり、一次救命処置の指導内容は充実したものだったが、児童の理解とスキルの向上、それに伴う「命の重さ、大切さの実感」の重要性について話した。
・帝塚山学院小学校：安全教育授業　指導助言	平成２０年２月	同様に、大阪教育大学附属池田小学校で行ったＢＬＳ教育(一次救命処置)の公開授業「命のバイスタンダー」を見た参会者が、その授業に関心を持ち、当校に訪れたため、授業内容や授業方法について指導助言を行った。その後、当該教員が帝塚山小学校４年生を対象に授業実践を試みた。その授業実践を参観し、指導助言を行った。その教員は、授業記録を書籍化した。
・名古屋市立井上小学校：安全研修講師	平成２１年８月	名古屋市教育委員会主催による、安全担当者の夏期研修の講師を、名古屋市警察とともに務めた。当校教員が不審者対応訓練を行い、その訓練を参観した後、名古屋市警察とともに不審者対応訓練の指導助言を行った。訓練は、よくない部分での同僚性が強く出てしまったものであり、その点についての助言も行った。

・守口市教育委員会：守口市安全指導者研修会講師	平成２１年８月	「学校安全に必要なもの　～安全管理と安全教育～」というタイトルで、守口市の安全指導者を対象に、講演を行った。ここでは主に、不審者対応訓練による教職員の安全意識の向上と、「お金のかからない」安全対策、例えば机上整理による可視性の向上や、スリッパではなく靴を履くことによる、安全意識の向上について提案した。
・豊中市立南桜塚小学校：夏期研修会講師	平成２１年８月	豊中市立南桜塚小学校の教員夏期研修会。当校の教職員は、それまで教職員対象の不審者対応訓練を行ったことがなかった。そこで訓練の方法や手順をコーディネートし、その後、「学校安全に必要なもの～安全管理と安全教育～」というタイトルで、不審者対応訓練の指導助言、及び講演を行った。ここでは、大阪教育大学附属池田小学校における不審者対応訓練の様子をビデオ視聴することによって、参考になるようにした。
・京都府教育委員会：安全指導者研修会南部大会講師	平成２２年８月	京都府教育委員会主催の、安全指導者研修会で、「学校安全と安全教育」というタイトルで、学校安全管理と、安全教育に関する講演を行った。ここでは主に、教職員の安全意識を向上させることが、学校安全につながるという内容で話した。京都府下南部の教員約１００名が参加した。
・京都府教育委員会：安全指導者研修会北部大会講師	平成２２年８月	上記、南部大会の３日後に、北部大会において、同様の講演を行った。京都府下北部の教職員役１００名が参加した。
・守口市教育委員会：守口市安全指導者研修会講師	平成２２年８月	「学校安全に必要なもの　～安全管理と安全教育～」というタイトルで、守口市の安全指導者研修を対象に、講演を行った。守口市教育委員会の依頼で、前年度に引き続き開催された研修会である。前年度の内容に加え、大阪教育大学附属池田小学校児童殺傷事件の概要を伝え、そこから教訓として学んでほしい内容、特に ID カードの役割について強調する内容とした。
・豊中市立南桜塚小学校区：夏期研修会講師	平成２２年８月	豊中市立南桜塚小学校区の教員夏期研修会において、「学校安全に必要なもの　～安全管理と安全教育～」というタイトルで、講演を行った。前年度は当校のみの教員研修会だったが、前年の講演内容から、中学校区の小学校と中学校も参加することとなり、三小学校・一中学校の教員を対象に行った。小中学校の教員が混在することもあり、特に東日本大震災における「釜石の奇跡」を資料として取り上げ、小中学校の連携の大切さを紹介した。
・羽曳野市立古市南小学校：夏期研修講師	平成２２年８月	「学校安全に必要なもの　～安全管理と安全教育～」というタイトルで、羽曳野市立古市南小学校夏期研修会において、講演を行った。安全管理においては、教職員の安全意識の向上と、ID カードの大切さや意味について話し、安全教育については、大阪教育大学附属池田小学校で実践している授業について紹介した。
・日本損保協会：防災ダック座談会パネリスト	平成２２年１０月	日本損保協会主催の防災ダック座談会において、神戸市消防局安全担当者、京都大学教授とともにパネリストを務め、安全管理と安全教育に関する座談会を行った。発表では安全教育の授業内容、特に安全マップの授業について紹介した。聴衆は、現職教師、警察、消防関係、一般市民であった。

・大阪教育大学附属池田中学校：安全研修講師	平成２２年１２月	同じキャンパス内にありながら、附属池田中学校では、教職員対象の不審者対応訓練が行われていなかった。そのことを憂慮した当時の教務主任に相談を受け、講師として赴いた。不審者対応訓練の意義と方法を提案し、実際に訓練を行い、事後講評を行った。
・宮崎県教育庁：宮崎県学校安全研修会講師	平成２３年５月	「学校安全と安全教育」というタイトルで、９０分の講演を行った。ここでは、大阪教育大学附属池田小学校で行っている、教職員対象不審者対応訓練の映像を資料として使用し、訓練による二次的な効果としての、教職員の安全意識の向上について話した。本研修には、宮崎県下の安全担当教職員役２００名が参加した。また、本講演には関西テレビが同行取材を行い、後日、一部が放映された。
・豊中市立第５中学校：安全研修講師	平成２３年８月	豊中市立第５中学校において、不審者対応訓練のコーディネート、及び講演「学校安全に必要なもの～学校安全と安全教育～」を行った。当校は、教職員による不審者対応訓練は初めてであったため、最初は同僚性が弊害となり、戸惑う様子が見られたが、講演後、「今まで安全のことを考えてこなかった自分が恥ずかしい」という言葉が聞かれた。
・守口市立梶中学校区：安全研修講師	平成２３年８月	夏期休業中に行われた教職員の研修会で、守口市立梶中学校区の梶中学校、梶小学校、藤田小学校、３校の教職員全員が参加した研修会で、講師を務め、９０分の講演を行った。「学校安全に必要なもの～学校安全と安全教育～」というタイトルで行い、附属池田小学校事件や阪神・淡路大震災を題材に、教訓から学ぶことの必要性を説いた。
・竜王町教育委員会：教職員夏期研修会講師	平成２３年８月	滋賀県の竜王町教育委員会が主催する、教職員夏期研修会において、安全研修の講師を務めた。竜王町の教職員、約５０名が集まった。「学校安全と安全教育」というタイトルで講演を行い、火災・地震災害・交通安全・水難災害・防犯の各カテゴリーにおける安全教育の実践例を紹介し、安全教育が及ぼす児童への影響について話した。
・守口市教育委員会：安全指導者講習会講師	平成２３年８月	守口市教育委員会主催の安全指導者研修会の講師は、平成２１年度から続く、３年目になる。年度ごとに各校の安全担当者が変わっており、毎年研修会を開くことの必要性を実感した研修会でもあった。本研修会では、例年、大阪教育大学附属池田小学校の教職員対象不審者対応訓練のビデオを題材として使用し、訓練の必要性と２次的な効果（教職員の安全意識の向上）について述べるようにしている。
・竜王町教育委員会：竜王町校長教頭会講師	平成２３年８月	本研修会は、竜王町の校長、教頭会であるため、学校安全にかかわる際の管理職の役割について内容を構成した。「学校安全のリーダー性について～管理職の役割～」というタイトルで講演を行った。従って、これまで講演した内容を管理職向けに再構成し、不審者対応時の管理職の役割や、ID カードを徹底することの必要性、教職員の安全意識を向上させていくことの必要性と方法について提案した。

・豊中市立桜塚小学校区：３校合同研修会講師	平成２３年８月	例年、豊中市立南桜塚小学校で開催している夏期研修会を拡大し、同校区の豊中市立第３中学校、桜塚小学校、南桜塚小学校の３校合同で開かれた研修会で、およそ１００名が参加した。「子供たちの命を守るために必要なこと～学校安全設備と安全教育～」と題し、お金がかからないで、見落としている学校安全についてと、安全教育に関しては、東日本大震災を題材に話し、マンネリ化しない避難訓練について話した。
・大阪教育大学附属池田中学校：校内研修会講師	平成２３年１２月	平成２２年度に引き続き、２年目の研修会である。初年度は初めての不審者対応訓練であり、戸惑いがちな様子がみられたが、２度目とあって、教職員の安全意識が飛躍的に向上し、積極的に研修会に参加している様子が伺えた。訓練後、訓練の振り返りを指導助言した。当校はまた、今回の訓練の様子をビデオ撮影し、後に校内研修で振り返りを行った。
・大阪教育大学メンタルサポートセンター：講演	平成２４年２月	大阪教育大学附属池田小学校事件後に、児童のメンタルケアを目的として設置された、大阪教育大学メンタルサポートセンターが開催した学校安全フォーラムにおいて、大阪教育大学附属池田小学校の「安全科」に関する紹介と、安全教育の実践内容の紹介、学校安全に関する講演を行った。全国から約２００名の参加者があった。
・豊中市教育委員会：管理職研修会講師	平成２４年２月	豊中市教育委員会が主催する管理職研修会で、平成２４年度においては学校安全に関する研修会を計画され、実施されたものである。管理職が対象ということで、これまでの講演内容を管理職対象のものに再構成した。また、主催者側の要望もあり、ワークショップも取り入れた。ワークショップでは、不審者対応時にどのように教職員を動かすか、どのようなリーダーシップを発揮いするかという内容で行った。
・岬町立岬中学校：夏期研修会講師	平成２４年５月	岬中学校における本研修会は、強く記憶に残るものであった。まず教職員の安全意識が非常に高く、それは安全担当者の熱心な姿勢からくるものであると推察された。当日実際に行われた不審者対応訓練では、防火扉を有効に使い、教職員同士で声を掛け合いながら不審者の居場所を限定していくという、大変工夫されたものであった。一人の教員の熱意やリーダーシップがうまく作用している様子が伺えた。
・宮崎県教育庁：宮崎県学校安全研修会講師	平成２４年５月	平成２３年度に引き続き、２年目の宮崎県での講演となった。前年度は、内容については講演者に一任されたが、当年度の講演は、地震災害についてのもという要請があった。東日本大震災をうけてのものと思われる。「釜石の奇跡に学ぶ～避難訓練についての再考～」と題し、休み時間に避難訓練をすることなどの重要性について話した。
・大阪教育大学：「学校安全の日」事業講師	平成２４年６月	大阪教育大学柏原キャンパスにおいて、学部生、及び大学院生、２００名を対象に、「安全な学校を作る教師になるために」というタイトルで講演を行った。将来、教師になったときの、子供たちを守る方法と意味について話した。この講演は、朝日、読売、毎日新聞の取材を受け、後日各紙に掲載された。

・守口市教育委員会：幼稚園長研修会講師	平成２４年７月	守口市の幼稚園長を対象に、「子どもたちの命を守るために」というタイトルで９０分の講演を行った。ここでは、交通安全を題材として取り上げ、幼稚園から小学校に上がった時の交通事故の増加に関する資料を示し、幼稚園児に対する安全教育の必要性と方法について話した。
・守口市立金田小学校：安全教育研修会講師	平成２４年７月	守口市立金田小学校において、安全教育の模範授業を行った。参会者は、守口市立小学校の各安全担当
・守口市立八雲中学校：安全教育授業・講演会	平成２４年１２月	守口市立八雲中学校において、５校時に中学校１年生から３年生を対象に、体育館で命の大切さを実感する授業として、東日本大震災を教材とする授業を行った。またその後、教職員を対象に、「子どもたちの命を守るということ」と題し、９０分の講演を行った。ここでは、授業の振り返りも含めて、「釜石の奇跡」について紹介し、教訓から学ぶべき内容について話した。
・岡山県備前市立三石小学校：ＰＴＡ人権教育小中合同研修会講師	平成２５年６月	備前市立三石小学校において、午前の人権教育参観で第４学年において、「溺れかけた兄妹」という、作家の自伝的作品を題材にした安全教育（水難災害）の授業を行い、午後からＰＴＡ人権教育小中合同研修会で、「命を大切にする教育」と題し、安全教育と学校安全に関して、教員・保護者を対象に９０分の講演を行った。
・豊中市立南桜塚小学校：安全研修会講師	平成２５年８月	当校での安全研修講師は、５年続けてのものである。豊中市立南桜塚小学校の安全研修会において、当校の不審者対応訓練のコーディネート、及び指導助言を行うとともに、「子どもたちの命を守るために」と題し、教職員に対して９０分の講演を行った。当校では、３年間の安全研修で教職員の安全意識も向上し、全員が ID カードを着けるようになったという、校長先生からのお話があった。
・茨木市立穂積小学校：安全研修会講師	平成２５年８月	茨木市立穂積小学校の安全研修会において、「子どもたちの命を守るために」と題し、教職員に対して９０分の講演を行った。ここでは、大阪教育大学附属池田小学校における不審者対応訓練の紹介と、「安全科」の授業実践を紹介し、具体的な安全対策について述べた。
・守口市立八雲中学校：安全教育授業・講演会	平成２５年１２月	守口市立八雲中学校において、前年度に引き続き、５校時に中学校１年生から３年生を対象に、体育館で命の大切さを実感する授業を行った。当日は、全校生徒による地震災害の避難訓練も行われ、見学をした。授業内容は、「Ｓｍｉｌｅ　Ｓｃｈｏｏｌ～いじめと命について考えよう～」であり、いじめを題材とした授業を行った。授業後、教職員を対象に、いじめに関する講演を９０分行った。
・守口市教育研究会　生活・総合部会：指導助言	平成２５年１２月	守口市教育研究会生活・総合部会において、当研究会の担当者による地震災害の安全教育の授業を参観し、その指導助言を行うとともに、「これからの学校安全と安全教育」と題し、６０分の講演を行った。ここでは、担当者の授業実践の内容を絡め、教科教育と安全教育の類似点と相違点について話し，児童にとって有効な安全教育の必要性について話した。

・寝屋川市立堀溝小学校：安全研修講師	平成２６年６月	寝屋川市立堀溝小学校において、５，６年生を対象に、「Ｓｍｉｌｅ　Ｓｃｈｏｏｌ～いじめと命について考えよう～」と題して安全教育に関する授業を行い、児童下校後に、教職員対象に、『「有効な」安全教育とは　～大阪教育大学附属池田小学校「安全科」を例に～』と題し、９０分の講演を行った。ここでは、本当に児童にとって「安全で安心な学校」とは何かについて話し、いじめについての取り組みの必要性と方法について話した。
・岬町立淡輪小学校：安全研修講師	平成２６年８月	本研修会は、平成２４年５月に行われた、岬町立岬中学校の研修会に参加していた、淡輪小学校の安全担当者の依頼によるものであった。「これからの学校安全と安全教育」というタイトルで、１２０分の講演を行った。特に大阪教育大学附属池田小学校事件の詳細を話し、そこから教訓として学ぶべき事柄を話した。
・豊中市立南桜塚小学校：安全研修講師	平成２６年８月	平成２１年度から続く、南桜塚小学校の６年目の研修会講師である。「これからの学校安全と安全教育」というタイトルで９０分の講演を行った。特に、学級崩壊やいじめといった、教育の現代的課題について話した。当校では、学校安全については過去５年間話していたため、安全に対する意識は向上し、取り組みを強化している様子であった。そこで一度立ち止まって考えたとき、子供たちにとっての「安全で安心な学校」とは、まずいじめなどがない学校であることを考えていくことを進めた。
・寝屋川市立第７中学校区「いのちの教育」研修会：講師	平成２６年８月	寝屋川市の第７中学校校区である、第７中学校、南小学校、堀溝小学校の３校合同で開催された、「いのちの教育」研修会で、１２０分の講演を行った。「いのちの教育としての安全教育～“Smile School“の提案～」と題し、大阪教育大学附属池田小学校において実践した研究授業「Smile School～『いじめと命』未来に向けて考えよう～」の実践内容と、授業実践時の児童の反応を中心として、いじめについて子供たちが向き合う方法について話した。
・三郷町ひまわりセミナー：講師	平成２６年１１月	現在勤務する奈良学園大学人間教育学部がある、奈良県生駒郡三郷町における、一般向けのセミナーで９０分の講演を行った。当日は、三郷町の町長、教育長、地域の小学校校長、市民ボランティア団体、一般の町民等、様々な人が参加した。「子供たちの命を守る「安全・安心」～町と大人の役割～」と題し、事件や事故、災害の実例を挙げながら、どのようにして子供たちの命を守るのかという、地域の大人の役割について話した。
・豊中市立豊南小学校：初任者研修指導助言	平成２６年１１月	豊中市立豊南小学校の初任者教員の、校内研究授業（国語・算数）の研究授業を参観し、授業後に指導助言を行った。当該教員は２年生を担任しており、特に、発達的課題を持った児童がいる学級における、一斉授業のあり方、方法について指導助言を行った。
・豊中市立豊南小学校校内安全研修：講師	平成２６年１２月	当校ではこれまで、校内の安全研修を行ったことがなく、研修のあり方、不審者対応訓練について、教職員の安全意識の向上についての講演依頼によって行った。当校教員約３０名に９０分の講演を行った。大阪教育大学附属池田小学校事件の教訓を例に挙げ、児童の安全を守るために学校、教職員が取り組んでいくべき内容について話した。

・豊中市立豊南小学校　安全教育授業	平成２７年５月	当校において、安全教育の模範授業を実施し、研究調査を合わせて行った。授業内容は、「知らない人とであったら」というタイトルで、防犯に関する授業を低、中、高学年で行った。「いかのおすし」という安全標語について、考える授業を行った。
・王寺町リーベルカレッジ：講演	平成２７年８月	奈良学園大学社会連携センターと王寺町の共同による取り組み、王寺町リーベルカレッジにおいて、地域住民や子を持つ保護者を対象に、「子どもの安全を考える　～大人と地域の役割～」と題した講演を行った。神戸市小１女児の連れ去り事件などを例に挙げ、地域の大人の目の大切さについて話した。
・全国地域安全運動　泉大津・忠岡安全大会：講演	平成２７年１０月	忠岡町シビックセンターにおいて、泉大津・忠岡町の合同安全研修会で講演を行った。地域住民が２００名ほど集まり、「子どもの安全を考える　～大人と地域の役割～」として、2004 年の奈良小１女児殺害事件や、この年の夏に発生した奈良県香芝市の小６女児監禁事件を例に挙げ、「３つの死角」（場・地域住民・学校教育）について提案した。
・２０１５　なら講座：講演	平成２７年１２月	例年開催されているなら講座での講演。奈良県立医科大学で行われ、地域住民を対象に、「地域防犯の視点から」と題して講演を行った。地域の登下校見守り隊などのボランティア活動は高齢者頼みになっている実態を提示し、行政と地域が協同し、見守りなどの活動を活性化する必要性を提案した。
・大阪市立堀江小学校　卒業記念講演	平成２８年２月	大阪市立堀江小学校の６年生１００名を対象に、「命の学び　～中学校へ！新たな希望～」と題し、９０分の授業講演を行った。３つの題目を設定し、「連れ去りについて」「いじめと命について」「避難訓練について」話した。
・豊中市立豊南小学校教員安全研修会：講師	平成２８年５月	毎年行っている、豊中市立豊南小学校の安全研修の講師に赴いた。今回は教員が実際に不審者対応訓練を行い、それを見学して指導講評を行うというものだった。その中でも、教師という職業的性格から、責任感を強く持って有事に対応しようとするが、教師の命も大切な命であるということを強調した。
・授業力＆学級づくり研究会：発表	平成２８年６月	平成２８年４月に、主に大阪府の小学校教員を中心とした「授業力＆学級づくり研究会」を立ち上げた。会の運営に携わっているが、ここでは「ネームプレートを用いた非言語コミュニケーションの価値」と題して、授業の中で使うネームプレートの活用方法とその効果について発表した。５０名の参加者で行った。
・奈良学園小学校：安全教育授業	平成２８年６月	奈良学園小学校の全児童を対象に、安全教育の授業を２日間に分けて行った。小学校１．２年生を対象に行った「あんしんしてとうげこう」では、集団で登校することによる防犯上の利点について理解できる授業を行った。３，４年生を対象に行った「ここは安全？危険？」では、安全マップの前段階ともいえる、防犯の視点形成の授業を行った。５，６年生を対象に行った「命の学び」では、国立教育政策研究所の「いじめ実態調査」の資料をもとに、いじめに関する授業を行った。

・奈良学園登美ヶ丘（幼・小・中・高）：教職員安全研修　講演	平成２８年６月	奈良学園登美ヶ丘キャンパスの幼稚園から高等学校までの全教員対象の研修会で、９０分間の講演を行った。タイトルは「学校安全の意識」とし、前職であった大阪教育大学附属池田小学校における事件の教訓をもとに、教職員の不審者対応訓練の方法や意義、また、安全教育などについて話した。
・教職員自主研修事業　大学・専修学校等オープン講座　講演	平成２８年７月	「事件・事故・災害の教訓から考えるこれからの学校安全と安全教育」と題し、９０分間の講演を行った。とくに連れ去り事件に焦点を置き、安全教育を実践する際の視点の置き方について話した。また、年代別防犯の方法について、幼・小学校低学年、小学校中学年、そして小学校高学年・中学生と、年代別にわけて提案した。
・免許更新講習　講師	平成２８年８月	保・幼稚園教諭を対象とする免許更新講習で、90 分の講義を担当した。「子どもの育ちを踏まえた保育内容の充実を考える」というテーマで行い、「表現領域（美術）」を担当した。図画工作科教室において、保育内容を充実させる授業内容をグループで考案し、ポスターセッションを行って実践例を共有する活動を行った。
・三郷町立小学校２校合同研修会　講師	平成２８年８月	三郷町立三郷小学校と三郷北小学校が合同で行う、合同不審者侵入対策訓練において、訓練実施後の講評と講演を行った。講演では、事件の教訓に基づいた学校安全対策について、校門のセキュリティーやID カードの意味について、具体的に必要な学校安全対策について話した。
・日野町立西大路小学校　安全研修会講師	平成２８年８月	日野町立西大路小学校における不審者対応訓練の指導講評をおこない、その後講演を行った。訓練は地元警察官が不審者役となり、臨場感あふれる訓練だった。講演では「事件の教訓に学ぶ学校安全と安全教育」と題し、教員が意識すべき３つの「死角」（場の死角、地元住民の死角、学校教育の死角）について話した。
・大阪府立枚方高等学校　模擬授業	平成２８年１０月	高校２年生の、教職に関心をもつ学生およそ３０名に、「子どものいのちと教師の役割」と題して５０分間の模擬授業を行った。事件を教訓にして学校安全を考えていくことの大切さや、学校の安全を守ろうと奮闘してきた教師の姿について話し、安全教育の実践事例について、高校生も自らが考え、意見を交流することができる方法で模擬授業を行った。
・甲賀市立大原小学校安全研修講師	平成２９年１月	甲賀市立大原小学校の教員安全研修会において、「防災教育をどうすすめるか」のタイトルで講演をおこなった。これまでの安全教育の想定やセオリーを見直し、児童生徒や地域の実態に応じた防災教育の必要性について話した。とくに避難訓練のありかたと有効性について話題にした。
・奈良県立大宇陀高等学校　模擬授業	平成２９年２月	高校２年生の、教職に関心をもつ学生を対象に、「子どものいのちと教師の役割」と題して５０分間の模擬授業を行った。事件を教訓にして学校安全を考えていくことの大切さや、学校の安全を守ろうと奮闘してきた教師の姿について話し、安全教育の実践事例について、高校生も自らが考え、意見を交流することができる方法で模擬授業を行った。
５　その他 なし		

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項		
事項	年月日	概　　要
１　資格、免許 小学校教諭一種免許状 平８小一第２３７８号	 平成９年 ３月	 大阪府教育委員会
２　特許等 なし		
３　実務の経験を有する者について特記事項 大阪教育大学附属池田小学校教諭 ・図画工作科主任 ・第５学年主任 ・第６学年主任 ・第４学年主任 ・第２学年主任 ・学校安全主任 ・学校安全主任 ・図画工作科主任	 平成１７年～ 平成２１年度 平成２０年度 平成２１年度 平成２２年度 平成２３年度 平成２２年度 平成２３年度 平成２５年度	 大阪教育大学附属池田小学校における、主たる校務分掌を記した。着任後すぐに、５年間図画工作科主任になり、教科論を記した。また、その後４年間学年主任の業務においては、新任指導も含め、円滑な学年経営に努め、成果を残してきた。学校安全主任は、当該校の要とも言える。その任に就き、学校安全の推進、保持、発信、また、安全教育の推進と、責務を果たしてきた。
４　その他 「研究助成」 １．下中科学研究助成(研究代表者) 「ＡＥＤを使用した小学生における『命の教育』の有効性に関する実証的研究」	 平成２０年 ４月１日～ 平成２１年３月３１日	 本研究は、ＡＥＤ（自動体外式除細動器）を用いた授業実践が、児童に命の大切さを実感させるために有効であることを検証しようとするものである。日本においては慶應義塾一貫校においてＢＬＳ教育が実施されているのみである。ただし、慶應義塾においてもＡＥＤを使用した実践はまだされておらず、日本においては先行事例が見当たらない。そこで本研究においては、ＢＬＳのスキルを学ぶ中で児童にＡＥＤを体験させ、バイスタンダーとしての意識を育みながら、そこに、実体のない『命』というものの大切さを実感させることを目的とする。
２．下中科学研究助成（研究代表者） 『安全教育の実効性とその客観的効果の測定に関する研究』	平成２２年 ４月１日～ 平成２３年３月３１日	安全意識調査を行ったとき、安全学習を実施したクラスの児童と実施していないクラスの児童では、回答結果に差異が生じる様相が見られた。この差異は、感覚的には感じてはいても、実証的に研究された事例はない。本研究においては、１年生から６年生までの児童の安全学習履歴と安全意識、けがや事故の状況を調査することにより、その差異を明らかにすることによって、安全教育の必要性と価値に実証性を持たせることを目的とした研究。
３．科学研究費補助金　奨励研究（研究代表者） 独立行政法人日本学術振興会 『児童の発達段階に応じた安全教育プログラムの開発に関する実証的研究』 （研究課題番号２２９０８００５）	平成２５年 ４月１日～ 平成２６年３月３１日	安全教育における、発達段階についての研究はまだ未開発である。しかし、発達段階を考慮しなければ、真に効果的な安全教育はなされない。本研究では、公立小学校の協力校等で授業実践を行い、そのデータをもとに、発達段階を考慮した安全教育カリキュラムを作成することを目的とする。
４．日本教育弘済会教育論文　奨励賞受賞 『安全教育のレリバンスに関する研究』	平成２５年 ３月	大阪教育弘済会の教育論文に応募したところ、個人部門で上部団体の主催する日本教育弘済会の教育賞に推薦され、奨励賞を受賞した。 １つの授業を低、中、高学年で実施し、安全教育と児童の発達段階の妥当性を検証した論文である。

５．科学研究費補助金　奨励研究（研究代表者） 独立行政法人日本学術振興会 『安全教育のレリバンスに関する実証的研究』 （研究課題番号２６９０８０４０）	平成２６年 ４月１日～ 平成２７年３ 月３１日	これまでの安全教育の現状と課題として、小学校６か年というスパンにおける、児童の学齢の差異を考慮した安全教育プログラムの開発がされてこず、避難訓練や「いかのおすし」に代表される標語的用語などによる安全指導内容が見直されてこなかった。また、日常の山積する課題対応に追われる多くの公立学校において、年間で実施可能で、かつ有効な安全教育プログラムの開発がされてこなかった。ことが考えられる。これらのことから、安全教育内容の有効性の検証と開発・児童の学齢による安全教育内容の有効性の検証・年間で実施する安全教育プログラムの開発が、緊急の課題と言える。これらを、『安全教育のレリバンス(妥当性)』と総称し、授業実践から実証的研究を進め、有効な安全教育の発展と頒布に寄与しようとするものである。
６．ＪＲ西日本あんしん財団研究助成（研究代表者） 「児童の発達段階を考慮した『有効な』安全教育プログラムの構築に関する実証的研究」	平成２７年 ４月１日～ 平成２８年３ 月３１日	これまでの研究として、「安全教育の有効性とレリバンスに関する実証的研究～大阪教育大学附属池田小学校『安全科』の実践から～」として、防犯概念・防犯スキル・自然災害・交通安全の各カテゴリにおける、児童の学齢と安全教育内容のレリバンス(妥当性)について研究を進めてきた。その中で、申請者が考案した「安全安心様相図」(日本セーフティプロモーション学会誌（第３巻第１号）P62-66 2010　松井)を用いて実践、検証した結果、学年に応じた有効な安全教育内容が明らかになってきた。しかし、その研究の中で新たな課題が見えてきた。そこで本研究においては、安全教育内容の有効性の検証と開発・複数小学校を対象にした児童の学齢による安全教育内容の有効性の検証・児童、教職員、学校に応じた安全教育プログラムの開発を行う。これらを授業実践から実証的研究を進め、有効な安全教育カリキュラムの開発と頒布に寄与しようとするものである
7．科学研究費補助金　基盤研究Ｃ（研究代表者） 独立行政法人日本学術振興会 『小学生の学年に応じた安全教育プログラムの開発』 （研究課題番号１６ｋ０４７９１の研究代表者として、研究分担者１名体制で研究を率いている）	平成２８年度 ～ 現在に至る	本研究は、小学校６ヵ年というスパンにおける小学生の学年を考慮し、低・中・高学年それぞれにおいて、その学年に妥当で有効な安全教育プログラムを開発することを目的とするものである。これまでの安全教育は、全学年同時に行う避難訓練や、「いかのおすし」に代表される標語的用語が中心であり、果たしてその安全教育内容が、小学生の、その学年に妥当であり有効なものなのかという検証はされてこなかった。そこで本研究では、これまでの事件や災害で失われた幼い命が残した教訓を生かした教材開発を行い、その妥当性と有効性を調査、検証し、全国の学校において実施可能な、有効で汎用性の高い安全教育プログラムを開発する。本研究は、安全で安心な社会の構築の一助となることはもとより、児童の命を守るための研究である。

「海外視察」 ・中国：華東師範大学附属小学校	平成１９年 １０月	華東師範大学附属小学校において、当該校４年生児童を対象に安全教育の授業を実施した。四川大地震を経験した中国において、地震災害時の避難の方法について、日本と中国を比較しながら、よりよい方法を探る授業を行った。
・台湾：花蓮実験学校視察	平成２１年 ３月	大阪教育大学附属池田小学校との姉妹校提携の締結に訪れ、朝礼の様子、図画工作科と音楽科の授業視察を行った。
・台湾：台中教育大学教育国際シンポジウム	平成２４年 １１月	台中教育大学において開催された教育国際シンポジウムに参加し、台中教育大学、及び屏東教育大学を視察した。
・カンボジア：メコン大学	平成２６年 ２月	奈良学園大学人間教育学部生および看護医療学部生を引率し、メコン大学との交流を行った。
・カンボジア：メコン大学	平成２７年 ３月	平成２６年に引き続き、奈良学園大学人間教育学部生を引率し、メコン大学との交流を行った。
・カンボジア：メコン大学	平成２８年 ３月	平成２７年に引き続き、奈良学園大学人間教育学部生を引率し、メコン大学との交流を行った。
「教員採用試験対策」 ｎａｒａｇａｋｕ　ＧＴの結成と代表	平成２８年 ２月 ～ 現在に至る	奈良学園大学人間教育学部の取り組みとして、２０１８年度の教員採用試験対策グループを構成し、日々、試験対策、面接対策に取り組んでいる。また、採用試験対策のみならず、息の長い教員を育てるという目的を持って取り組んでいる。

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（著書） １.『資質・能力を育む新図画工作科授業づくりのアイデア集』 （３年生編）	共著	平成１９年 ８月	明治図書	本シリーズは、図画工作における資質や能力の育成を目指して、教材のアイデアや授業づくりのポイントを中心に構成している。本書３年生編では、子どもたちの発達段階を考慮した、４５の実践例を紹介している。 Ｂ５判　全１１６頁 編者：岩崎　由紀夫・竹井　史 共著者：大津雅子・松井典夫・福岡知子・松山辰也・岩永宏紀・竹田五月・青田伸一・遠藤光広・中野貴之・中田稔・日岡健二・西尾正寛・小野寺信子・高橋香苗・河野敬重・杉原世紀・荒治和幸・福田裕美・辻政博・内藤宏子・西村真二・久田雅子・小笠原範泰・玉置一仁・田中弘子・武田信吾・山田和美・住田正彦・岡田隆史・今西雅美・今村和代・丸野譲・濱口由美・福森真一 本人担当部分:「いろいろ絵具でマイストーリー」 （１４頁－１５頁）を単著 本実践は、絵画のモダンテクニックの基礎を学んだ上で、さらにそれらの技能を自分なりに変容させ、表現したい「色合い」「感じ」を作り出すために、児童が工夫する授業実践である。学習指導要領における、「Ａ表現（２）」に該当する内容である。中学年においては、材料や用具の経験を生かし、表したい方法や用途を見つけて表す内容が大切である。 様々な用具、材料の準備が、授業者においては肝要であることも記述した。 「紙テープの変身」（２２頁－２３頁）を単著 学習指導要領における、「Ａ表現（２）」に該当する内容である。本実践は、硬さ、色などが違う様々な種類の紙テープを題材とし、それらの特徴を生かし、自らの表現したいイメージに合うものを選択し、造形表現活動を行う授業実践である。硬さを生かして立体的に表現したり、貼付の工夫をするなど、個々に工夫を繰り返しながら、「発想や構想の能力」と「創造的な技能」が融合する題材である。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
２『いのちの教育』	共著	平成２１年 １０月	東洋館出版	平成１３年６月８日に発生した児童殺傷事件。それ以来、安全教育と道徳を中心として、児童の安全と安心のために取り組んできた８年間の教育・授業実践を２６例載せた。教育関係者がすぐにでも実践できるように、指導計画や板書例を掲載し、授業による児童の変容についても、具体的に記述した。 Ｂ５判　全１２４頁 編者：大阪教育大学附属池田小学校 共著者：藤田大輔・佐々木靖・浅田正志・井上伸一・岩井伸夫・岩井陽介・江原悦子・小原愛子・垣内幸太・鎌田菜絵・岸本卓也・坂下剛・佐藤学・田中毅・竹本和也・辻匡美・冨田有香・長野純子・中村晶子・西江なお子・西村恭美・能川正人・土師尚美・林美恵子・孕石泰孝・平田葵・升村誠志・松井典夫・松浦恵・松原梨沙・薬師寺美江・矢藤学・柳井友裕・山崎聡・龍神美和 本人担当部分：「いのちをつなぐ機器ＡＥＤ」(１１５頁－１１８頁)を単著 本教材は，ここ数年で普及率が大幅に上昇しているＡＥＤ（Automated External Defibrillator)［自動体外式除細動器］についての知識理解を深め，また，生命と常に向き合う職業を持つ人の話を聞き、交流することによって，豊かな人間的感性と生命に対するリアルな認識を身につけていくきっかけとするものである。児童にＡＥＤの使用認可に至るまでの人々の努力について考えさせ，また，実際にＡＥＤを体験することによって、ハードがあるから安心なのではなく，使用する（命を助けようとする）ことの勇気について考えることによって，実体のない「いのち」の尊さに実感を持たせることがねらいである。 「命のバイスタンダー」 (１１９頁－１２２頁)を単著 命を大切にしなければならないということは，誰しも分かっていることである。しかし，命というものには実態がないだけに，実感を持つことは難しい。子どもたちにとっては尚更である。そこで本教材では、一次救命処置のスキルを学び、もしも傷病者が自分の目の前にいたとき、「何かできるだろう」と思う自分から、「何もできないけど、自分にできることをさがして行動したい」と思える自分に変容させることをねらいとした。怖いと思う自分。何もできない無力な自分。でも、できる限りのことはしたいと考える自分。そのような自分を自己認識することが、実感を伴った命の大切さの実感へと結びつくと考えた。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
３．学校安全　３６のナラティブ	共著	平成２６年3月	教育出版	子供たちの命を守り、安全で安心できる生活のために、学校は何ができ、また、何をすべきかという命題のもとに、学校安全に関わる著者陣が原稿を寄せてできた本。この安全・安心に関する問いかけに対しては、すでに多くの解説書や教材集、マニュアル本等が刊行されている。しかしそれらは、ともすれば上からの押し付けのような論が多い。そこで本書では、各著者が「私はこう考えている」「私はこんな体験をした」という、お話風の「語り（ナラティブ）」として編集された。 Ｂ５版　全１５７頁 編者：長尾彰夫 共著者：小林忠三・浜條信彦・松井典夫・若狭孝太郎・神田英幸・前馬晋策・丸山涼子・植木美佳・砂田信夫・中井尚人・佃繁・松田智子・伊原正俊・藤田大輔・諏訪清二・村川雅弘・立田慶裕 本人担当部分 「スリッパとＩＤカード」（pp14-15）を単著 概要 　校内に配備された多数の防犯ブザー，赤外線システム，玄関の二重扉，可視性を重視した透明度の高い校舎。それらはお金がかかるものである。しかし,「お金がかからない学校安全」は，見落としていることがたくさんある。そこで本項では、スリッパやIDカードの重要性、他にも，職員室の机上（可視性・校内安全に対する雰囲気），教室の机の物かけ（いざという時の弊害),教室の窓側のロッカーの上(可視性･安全性),放送の使用方法(緊急時の連絡が可能か),安全マニュアルの見直し（実現可能性・教職員の安全意識），教職員の訓練の実施（子どもたちの安全・教職員の安全意識）などを紹介し、見落としがちな学校安全の重要性について書いた。 「安全な公園は危険な公園？」（pp18-19）を単著 概要 　危険予知力と危険回避力は，矛盾することもあるということについて、入り口が一つの公園と、入り口が二つある公園の安全性比較から書いた。「危ないな」と感じると同時に，子どもは自分の身を守る方法も考える。例えば，路上駐車の車があり，まわりに人がいないとき,「車の陰から人が出てきたら」や「車に連れ込まれたら」と考えるのが危険予知であり，その車から離れて歩いたり，とっさに道を変えるのが危険回避である。ここに矛盾はないが、公園の例の場合,「逃げる」という意識(危険回避)が優先してしまうのである。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				「わるい人とはどんな人？」（pp25－27）を単著 概要 　こんな人が悪い人だという答えは，どこにもなく。こんな人を見たら，すぐに逃げましょうと教えることも，するべきではない。既成の概念を崩し，正解がないことを知り，それでも行動しなければならないことを知り，今，教室で頭を振り絞って考えておくことが大切なのである。その思考と体験の蓄積が，「最も適切な行動」を生み出す礎になると考える。「知らない人にはついていかないようにしましょう」と，指導することは，果たして子どもたちの安全を保障する教えなのだろうか。「この行動が安全だ」と教えるだけでは，逆に不安全な結果を招く可能性もある。ただ対処する方法を教えるだけでは，安全を生み出す力に結びつかないばかりか，その方法は，果たして正解だと，断言できるものではない。既成の概念や教えを正しいと思い込むことの怖さを書いた。 「いかのおすしとおはしも」（pp48－49）を単著 概要 　「いかのいすし」や「おはしも」に代表される、安全標語は、どれも大切なことだが，その一方で、どれも子どもたちは，当たり前に「知っていること」である。そして、「いかのおすしを指導したから安全だ」「いかのおすしを思い出せば安全だ」「いざというときには，いかのおすしが役に立つ」という考えを持つ。しかし大切なのは，「ついていかない」という指導ではなく，「知らない人ってどんな人」かを学習し，思考し，判断材料を蓄積することである。「大声を出す」と指導するのではなく，大声を出すことの難しさを体験，実感させることである。「何かあったらすぐ知らせる」と言葉を覚えさせるのではなく，どのタイミングで，どこに，どんな方法で知らせるのか，考え，体験することである。安易に「言葉」だけで指導するのは，逆に「不安全」を生み出す可能性があるということについて書いた。 「休み時間に地震が起きたらどうしよう」（pp54－57）を単著 概要 　多くの学校園での避難訓練は，「2 時間目の授業中」という想定で行われる。実施時期にしても同様で，1 月に避難訓練をしていると，「今年は 7 月にやってみよう」とはなかなかならない学校現場の現状がある。そこでここでは，休み時間に地震が起こることを想定した学習と，実際の休み時間の避難訓練の取り組みについて紹介した。児童に予め、休み時間に遊ぶ場所と、もしもそこで地震が発生したら、どのように避難するかを想定させ、避難訓練で検証する授業を紹介した。児童はその時、予め想定した行動とは違う行動をした児童がいた。それが正解かどうかは結果しか物語らないが、とっさに判断をする体験の積み重ねの重要性を書いた。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				「いろいろな不審者対応訓練」(pp62－65) を単著 概要 　これまで，いろいろな学校で不審者対応訓練の講師を務めてきたが、その中で,「この学校は素晴らしい！」と思えたのは，数少ない。それだけに，校内で行う不審者対応訓練は難しく，また，その難しさに気づいていない学校が多いように感じられる。本項では、小中４校での訓練の様子と実態を紹介し、そこから、不審者対応訓練の困難性と必要性について述べた。 「火災現場に戻らない､は正解か」(pp74－77) を単著 概要 　火災現場に「戻らない」というのは，命を守る上で大切なことである。しかし，絶対に戻ってはいけないのだろうか。本人の判断で戻り，大切な命を救った人もいる。ここでは，災害現場での葛藤と判断を体験する授業について書いた。安全指導は，セオリーを教え込みがちである。そのセオリーが現場で，いざという時に大いに知識として役立つことだろう。しかし安全学習は，その時，その場に応じて知識や体験を活用し,「最も適切な判断をすることができる力」を育むことである。その力は，単なる知識ではなく，様々な場面で臨機応変に対応することができ，子どもたちの，生涯にわたる安全・安心を保障していくものであるということを、火災現場での葛藤を考えさせる授業を例にして書いた。 「命のバイスタンダーの授業から」(pp82－87) を単著 概要 「命は大切」なことは，誰もが言い，誰もがわかっていることである。しかし，実体のない命に対して、それは本当に実感できるものではなく、子供たちにとってはなおさらである。そこで子どもたちに，命に触れることの怖さ，命に対する畏れを感じさせることによって,「命の大切さ」の実感を育むことを目的とした,『命のバイスタンダー』の授業を考案し，実践した。 辞書でバイスタンダーという言葉を検索すると,「傍観者」となる。言い換えると,「やじうま」である。道端で突然目の前の人が倒れたところを想像したとき，ただの「傍観者」となるのか，その人の命のために「何か」をしようとするのか。 　この実践では，ある教材を使用したことによって生じた，子どもたちの大きな変化が,「命の大切さの実感」へと結びついた。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				「溺れかけた兄妹を教材にして」（pp108－111）を単著 概要 有島武郎の自伝的短編『溺れかけた兄妹』を題材にした、水難災害の授業を紹介することから、助けたいという「道徳的心情」と，二次災害の恐れとの狭間に生じた葛藤、そこから学ぶものについて述べた。児童の授業の中での言葉に、「その時になってみないとわからない。」という言葉があった。この言葉は，授業の中で判断し，自分の立場を明らかにすることができず，その場しのぎの言葉のように聞こえる。しかし，波の高さ，周りの状況，大切な人を助けたいという，その場の切迫した状況。それらが相互作用し，判断するのだという臨場感を子どもたちが感じていたからこその言葉であったように感じられ、子どもたちは，安全な行動と，命を守りたいという心情の間の葛藤を「実体験」したのであり、そこに安全教育で大切な、実体験からくる学びの大切さについて書いた。
４．どうすれば子どもたちのいのちは守れるのか －事件・災害の教訓に学ぶ学校安全と安全教育	単著	平成２９年２月	ミネルヴァ書房	本書は，著者が、大阪教育大学附属池田小学校において、同僚とともに実践してきた不審者対応訓練や ID カード等による学校安全対策，様々な「いのちの教育」の授業の事例などを通じて，これまで当たり前とされてきた「安全」についての考え方や方法を根本的に見直し，これからの学校安全と安全教育のあり方をさぐることを目的とした書である。その中で、学校の安全を担う教師の役割、職責、使命感、資質能力について記述した。
（学術論文） １.『命のバイスタンダー　～そばにいる人として～』	単著	平成１９年１１月	大阪教育大学附属池田小学校研究協議会紀要 ｐｐ５４－５７	平成１９年度　大阪教育大学附属池田小学校研究協議会における、公開授業の学習指導案。 この年、授業モデルとして「かまえる・のぞむ・ひらく・ふかめる・ふりかえる」の５段階モデルを考案し、指導案に反映させて提案した。実践においては、前年度の公開授業「いのちをつなぐ機器ＡＥＤ」の反省から、ＡＥＤをトピック的に扱うのではなく、ＢＬＳ教育全般を通して、命の大切さの実感へと結びつけた。
２.『心模様　～版で表す心の「感じ」～』	単著	平成１９年１１月	大阪教育大学附属池田小学校研究協議会紀要 ｐｐ７４－７７	平成１９年度　大阪教育大学附属池田小学校研究協議会における、公開授業の図画工作科学習指導案。多色刷り版画を題材とし、思考と試行を繰り返す公開授業を行った。表したことに合わせて材料や用具の特徴を捉え、思考し、試し、進めようとする活動は、児童が表現しようとしている個々の「感じ」を表す上で大切な活動である。
３.『わたしの部屋のルミナリエ』	単著	平成２０年２月	大阪教育大学附属池田小学校研究協議会紀要 ｐｐ３５－３８	平成１９年度　大阪教育大学附属池田小学校研究協議会における、公開授業の図画工作科学習指導案。主たる題材として、ブラックライトを使用した。紙粘土と蛍光塗料で作成した作品を、別室に作った暗室で、ブラックライトに照らしてイメージと照合し、「試し」「作り変える」場の設定の重要性を提案した。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
４.『ＢＬＳ教育の可能性Ⅱ～第６学年「命のバイスタンダー」の実践から～』	単著	平成２０年３月	大阪教育大学附属池田小学校研究紀要「とごころ」ｐｐ５３－５６	ＢＬＳ(Basic Life Support)教育の２年目の研究経過報告。 本稿では、ＢＬＳ教育の初年度、ＡＥＤのみを用いて学習活動を行った結果を述べ、そこから見出された課題として、ＡＥＤのみをトピック的に扱うのではなく、ＢＬＳ(一次救命処置)全般において学習することが、より学習効果を高めるという仮定からの研究報告。行った実践から、Hidden curriculum としての命の大切さの実感が、より高まったことを、実証的研究として報告した。
５.『変幻自在のミラーワールド　～１枚のアルミ板から～』	単著	平成２１年２月	大阪教育大学附属池田小学校研究協議会紀要ｐｐ66－69	平成２０年度　大阪教育大学附属池田小学校研究協議会における、公開授業の図画工作科学習指導案。アルミ板は、切ったり曲げたりする材質による特性や、鏡のように何かを映す特徴など、多彩な可能性を秘めた材料である。主となる材料を限定し、その特徴を生かして発想・構想する試みは、創造表現の能力やデザインの能力を高めるのに有効である。
６.『命のバイスタンダー　～私が本当にできること～』	単著	平成２１年２月	大阪教育大学附属池田小学校研究協議会紀要ｐｐ３５－３８	平成２０年度　大阪教育大学附属池田小学校研究協議会における、公開授業の学習指導案。前年度の公開授業では、命の重さの実感を高める教材として、消防署の協力により入手できた、実際のＡＥＤのボイスレコーダーを使用した。非常に効果的な教材だったが、公立小学校等で授業をすることを考えたとき、汎用性が低い。そこで本実践では、同様の場面で画像を用いた授業を行い、その効果を検証した。
７.『ＢＬＳ教育と命の実感の融合の可能性Ⅲ～「命のバイスタンダー」の授業方法の変遷と命の実感を育む効果の検証～』	単著	平成２１年３月	大阪教育大学附属池田小学校研究紀要「とごころ」ｐｐ９３－９８	ＢＬＳ(Basic Life Support)教育に携わって３年目であり、その軌跡を記述したもの。紐解くと、汎用的な BLS 教育カリキュラムを模索し続けた結果、BLS 教育の内容が年々シンプルになった。このことは、BLS のスキル学習を行うだけでも、命の大切さの実感へと近づける有効な手立てであることを示している。本稿では、過去の指導内容を比較検討し、そこから児童の変容を読み取り、より汎用性のある教育方法を記述した。
８.『Self Defense　～震災の教訓から～』	単著	平成２２年２月	大阪教育大学附属池田小学校研究協議会紀要ｐｐ４６－４９	研究協議会における公開授業の学習指導案。安全教育においては、命の大切さの実感の醸成と、実感を伴う体験活動が肝要である。本実践では、阪神淡路大震災の教訓を教材に、起振体験をもとに、6434 という死者数を、１枚の画像から考えさせ、その悲しみの実感をもとに、安全な行動に対する実践力へと結びつけた。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
９.『安全科の授業における児童の「安全・安心」の様相の変容に関する研究』 (査読付)	共著	平成２２年３月	日本セーフティプロモーション学会誌第３巻１号 ｐｐ６２－６６	本論文では、児童の安全・安心に対する意識の変容を客観的に調査する『安全安心様相図』を発表した。「命のバイスタンダー」の実践において、児童の変容を『安全安心様相図』を用いて継続的に調査し、安全教育が及ぼす児童への影響、効果を明らかにした。 著者／松井典夫・淺田正志・佐々木靖・藤田大輔 本人(松井)は、本研究の企画、構成、授業実践、論文執筆を担当した
１０.「安全科とInternational Safe School」	単著	平成２２年１２月	大阪教育大学附属池田小学校研究紀要・雑誌「とごころ」 ｐｐ１２－１７	大阪教育大学附属池田小学校研究誌「とごころ」の発刊にあたって、巻頭言を書いたものである。文部科学省教育課程特例校としての「安全科」の発足経緯と、教科としての安全科の意味、また、日本で初めてだったWHO International Safe School の認証の経緯とその意味を記述した。
１１.『命の避難訓練』	単著	平成２３年２月	大阪教育大学附属池田小学校研究協議会紀要 ｐｐ３５－３６	本学習指導案では、「命の重さ、尊さに対する実感を伴った避難訓練こそ、児童にとって必要な避難訓練である。命の避難訓練は、訓練事前の、災害に対する学習の深まりがあってこそ成立する」諏旨を書いた。実態調査では、児童の中で「火災」と「避難訓練」が結びついていないという結果を示し、そこから、スモークマシンによる煙体験による指導方法を提案した。
１２. 命の大切さの実感を育む「安全科」の授業『命の避難訓練』	単著	平成２３年６月	大阪教育大学附属池田小学校研究紀要・雑誌「とごころ」 ｐｐ24－27	本実践報告は、マンネリ化しがちな避難訓練について、本当に「命を守る避難訓練」になっているかを再考・提案する授業実践についての報告である。授業後の協議会で、児童が火災の中でも大切な命を助けに戻りたいと発言したことについて、「安全指導としては、戻ってはいけないと教えるべきだ」という意見が出されたことを例に、「安全指導」と「安全学習」の相違について述べた。
１３.『安全教育と防犯①　学校安全の現状と課題「災害はひとごと」という意識を超えて』	単著	平成２３年１０月	週刊「教育資料」 №.１１８０　平成２３年１０月１０日号 ｐｐ１８－１９ 日本教育新聞社	「学校は安全な場所ですか」 この問いに対して、学校関係者はどのような答えを出すだろう。さらに「あなたの学校は安全ですか」という問いに対してならどうだろう。その問いに対して、私が代りに答えを出させてもらうなら、こう答える。 「あなたの学校は、たまたま昨日今日が無事に終わっただけで、明日もしも学校に入って事を起こそうとする人間がいたら、容易に入り、多くの犠牲者を生むでしょう。あなたの学校は、子どもたちの命を守ることができないのです。それが今の現実です」と。８人の子どもの命を失った、私たち大阪教育大学附属池田小学校の、悔恨と痛恨から生み出されてきた学校安全の取り組みに、１人でも多くの人が耳を傾け、安全で安心な学校生活と、人を傷つけない、傷つけられない子どもたちが育つことを願い、稿を起こした。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
１４.『安全教育と防犯②　学校安全管理と教職員の安全意識』	単著	平成２３年１０月	週刊「教育資料」№.１１８１　平成２３年１０月１７日号 ｐｐ２４－２５ 日本教育新聞社	お金がかからない安全管理は多くある。それらの安全管理は、学校に「見えない防壁」を作る。しかし、一般的に、多くの学校園には見えない壁はなく、侵入は容易であり、事を起こし、逃げることも容易である。私は講師等で訪れる学校では、必ず「壁」を見る。「壁」とは、校門のガードであり、校舎の周囲であり、教職員集団の意識であり、管理職のリーダーシップである。ＩＤカードも見るし、履物も見る。スリッパで教職にあたること自体が、プロ意識に欠けることであり、端から子どもたちの命を守るのだという意識が欠けていると言わざるを得ない。教職員全員が、明日からスリッパをやめて、いざという時に動くことができる履物に変えることは、お金のかからない大切な安全管理である。
１５.『安全教育と防犯③　不審者対応訓練について　～「訓練」の失敗から次の課題を見出す～』	単著	平成２３年１０月	週刊「教育資料」№.１１８２　平成２３年１０月２４日号 ｐｐ１８－１９ 日本教育新聞社	大阪教育大学附属池田小学校では、年間５回の教職員対象不審者対応訓練を行っている。この５回という回数に、多くの人は驚く。しかし、私たちにとっては決して多くはないと感じている。それは、何度やっても失敗し、課題を見出すからである。 平成２２年度の当校の安全研修会で、「公開不審者対応訓練」を実施した。私たちは、安全の取り組みを発信する責務を強く自覚しながらも、訓練を公開することに躊躇を覚えたまま数年を過ごした。躊躇を覚えた理由は、参会者の安全を確保する自信が持てなかったからである。それほどまでに、私たちの訓練は激しい。そしてついに昨年度の２月。公開不審者対応訓練を実施することができた。私は、コーディネートする立場だったので、客観的に参会者の表情や様子を見ていた。その表情や雰囲気で、私は公開訓練の成功を確信した。誰もがその圧倒的な緊迫感と迫力に、自身の学校園で取り組んできた訓練との違いを実感している様子だった。そして、それぞれが各地の学校に帰り、公開訓練のことを伝え、取り組んでもらえることを、私たちは願い、期待できる公開訓練となった。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
１６.『有効な安全教育とは何か？　～体験と実感で子ども自身の判断を育む～』	単著	平成２３年１１月	週刊「教育資料」№.１１８３　平成２３年１１月７日号 ｐｐ２４－ｐ２５ 日本教育新聞社	安全教育とは、命の教育である。誰もが、「命は大切なものだ」と潜在的にはわかっている。しかし、命にはその実体がないだけに、実感することは容易ではない。その大切さに対する実感は，大人はもちろん、ましてや児童が容易に持ち得るものではない。したがって、実体のない命に対する実感は、家庭はもちろんのこと、教育活動の中で育んでいくべきものである。しかし、有効にプログラムされた安全教育を実践している学校は、どれほどあるだろう。１年生で警察を呼んで行う交通安全教室と、年間数回の避難訓練で良しとしてはいないだろうか。それで、児童が自らの命を守り、自他の生命を尊重する心情、実践力を育むことができるだろうか。それでも安全教育に取り組むことができないのは、「時間がない」「何をしていいのかわからない」「国語や算数と違い、やらなくてもだれにも文句は言われない」からである。 大阪教育大学附属池田小学校では、「安全科」を設置し、全学年で年間３５時間の安全教育を実施している。その一例を紹介した。
１７.『安全教育と防犯⑤　これからの学校安全に向けて　～安全に「絶対」はなく不断の努力が必要～』	単著	平成２３年１１月	週刊「教育資料」№.１１８４　平成２３年１１月１４日号 ｐｐ１８－１９ 日本教育新聞社	今現在、すべての学校園が「安全管理マニュアル」を作成し、校内に携えているはずである。それは、義務化されたために書いたもので、実践的ではないものも多い。しかし大切なことは、「改訂を続けること」である。一度作って安心してしまってはいないだろうか。少なくとも年に一度、できれば不定期に改訂し、より実践的、現実的なマニュアルにしていくことが必要である。そして大切なことは、私たち教育者は、学校安全の既存する考えや概念を問い続け、研究し続け、前に進み続けなければならないということである。安全指導上、「良し」とされてきたことが、実際の場面で本当に児童の生命を守る術となっているのか。立ち止まり、目を逸らしていては、大切な児童の命を、失ってしまう可能性を、多くの事件、事故、災害が教えてくれているはずである
１８.「自己変容の認識と非言語コミュニケーションツールとしてのネームプレートの活用」	単著	平成２３年１２月	大阪教育大学附属池田小学校研究紀要・雑誌「とごころ」 ｐｐ４８－４９	安全科の授業において、その客観的効果を測定するために、「安全安心様相図」(H22 松井)を考案した。授業の中で、安全安心様相図にネームプレートを置かせ、その変容を読み取り、安全教育の効果について測定することが目的だったが、ネームプレートを置く行為そのものが、児童の自己変容を認識させる有効な手立てだということがわかってきた。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
１９.『釜石の奇跡に学ぶ』	単著	平成２４年２月	大阪教育大学附属池田地区合同研究協議会研究紀要 ｐｐ３５－３６	平成２３年度研究協議会で行った、公開授業指導案。小中高合同研究会で、安全科の授業を中学生に行うことにより、小中高連携をはかる目的で行った。実際に釜石市を訪れて教材研究を行い、「釜石の奇跡」を題材とした。日頃の避難訓練が自分たちの命を救ったというインタビューをもとに、「有効な避難訓練とは何か」を考えさせる授業を行った。
２０.「安全指導と『安全を学ぶ』ということ」	単著	平成２５年９月	日本文教出版「教育情報」２０１３．№.３．巻末	本リーフレットは、日本文教出版が教育資料として発刊しているものであり、全８ページからなるものである。最終ページの「クローズアップ！　教育の現場」のコーナーの原稿を担当し、「安全指導」と「安全学習」の違いについて述べた。大阪教育大学附属池田小学校「安全科」で実践した「命の避難訓練」の授業から、「おはしも」（押さない・走らない・しゃべらない・もどらない）という、これまで疑いも持たれず避難訓練時のセオリーとして通ってきた言葉を題材にし、想定にとらわれ、慣習にとらわれることの危険性について述べたものである。
２１.『美術における「鑑賞教育」のあり方～小学校図画工作に焦点を当てて～』	単著	平成２５年２月	週刊「教育ＰＲＯ」№.１７１６　平成２５年２月５日号 ｐｐ６－１０	「美術鑑賞」という言葉から、どのような様子を想像するだろう。「鑑賞教育」とは何か。多くの学校の美術教室には、世界の有名絵画がポストカードになった、鑑賞カードがある。カードを鑑賞し、著名な芸術家の名前と作品を一致させることが鑑賞教育ではない。本稿では、小学校図画工作科における鑑賞教育のあり方について再考し、提案した。児童が新たな課題や素材に出会った時、そこから何を生み出そうとしているかという、「個の認識」の萌芽が見られる。それはまだ、イメージが具象化していない段階であり、自由闊達なものである。そして造形表現活動を始めた時、そのイメージは次第に具象化し、題材の具現化が始まる。この時、「個の認識」はいったん完結したように感じられるが、それは自己中心的なものであり、高次の自己認識とは言い難い。そこで鑑賞活動を取り入れる。例えば、個々の作品をグループで鑑賞し、意見を交流し合う。その時、思いの他、自らのイメージが伝わらない、あるいは具象化されていないことに気付く。鑑賞活動による他者評価は、妥協したり、曖昧だった認識を強化したり、高めたりするのである。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
２２．人間教育と美術の力－美術体験と学校教育－ Human education and The dynamic of Art －Art experience and education at schools－　（査読付）	単著	平成２６年４月	人間教育学会誌 「人間教育学研究」 創刊号ｐｐ８９－９５	図画工作・美術教育において、学習指導要領などに随所に現れる「自由」「創造的」「個性的」「喜び」という用語から教科としての特性と課題が見える。それらの用語は，図画工作・美術の他教科にはない特性を表すと同時に，捉えようによると教科としての「ゆるみ」に繋がりかねない。そこで本稿では、図画工作・美術教育の課題を歴史的背景から紐解くと同時に、図画工作・美術科が持つ教科としての特性を、鑑賞教育を中心とした特徴的な実践から論じた。
２３．小学校美術教育の方法と技術に関する実践研究Ⅰ ～ＩＣＴを活用した絵画教育の可能性～ Practical Research of Methods and Techniques of Elementary School Art Education -Possibility of Painting Education Using ICT-	単著	平成２６年９月	奈良学園大学研究紀要 第１集 ｐｐ１０９－１１５	戦後の美術教育史の中で、絵画教育が敬遠され、衰退してきた感は否めない。その理由として、絵画教育は、「上手」「下手」と２局的に、即時的に、そして結果的に評価されるため、授業者にとっても児童にとっても、それぞれの理由で積極的に取り組む関心･意欲･態度を逸してきたのだと考えられる。 そこで本稿では、新たな絵画教育の方法として、ＩＣＴ機器を活用した動画による鑑賞活動を取り入れた授業実践を紹介し、その授業の方法から、新たな絵画教育の方法や、美術教育の価値について論じた。
２４．小学校美術教育の方法と技術に関する実践研究Ⅱ ―　小中連携教育の意義と課題　― Practical Research of Methods and Techniques of Elementary School Art Education ―　Significance and Problems of elementary and junior high education cooperation ― （査読付き）	単著	平成２６年１２月	人間教育学会誌 「人間教育学研究」 第２号 ｐｐ１２１－１２９	小学校と中学校の義務教育期における教育の役割は、人間教育の観点での土台を築くものである。その重要性から、学校教育活動は小学校と中学校の連携を念頭に置き、共に理解し、共に手を携えた教育を実践する試みが多くなされている。 本稿においては、大阪教育大学附属池田地区合同研究会における具体的な取り組みから､小中連携の課題と意義について考察した。 小中連携の意義とは、その実践を行った小学生の、中学校以降の学力、生活の様子、いじめの実態などの経年観察が必要であり、また、小中連携を行った学年とそうでない学年の比較研究、そして小中連携教育の方法面での効果の実証研究が必要であり、多岐にわたる。今後においては、協力校との連携を進め、小中連携教育の研究をさらに進めなければならない。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
２５．学校安全・安全教育	単著	平成２７年１月	平成２４年度～平成２６年度科学研究費補助金（基盤研究（Ｂ）課題番号 24330254「いのちの教育カリキュラムモデルの開発的研究」研究成果報告書「いのちの教育カリキュラムモデルの開発と実践」ＰＰ７７－９５	本稿は、平成２４年度～平成２６年度科学研究費補助金「いのちの教育カリキュラムモデルの開発的研究」の研究成果報告書「いのちの教育－カリキュラムモデルの開発と実践－」の中の、第４章　学校安全・防災部会の報告、第１節学校安全（PP77-81）と第２節安全教育（PP82-95）の部分を単著したものである。主に大阪教育大学附属池田小学校における学校安全の取り組みや、「安全科」において取り組んだ安全教育の方法と実践内容について述べた。
２６．「これからの学校安全について考える」～第１回　事件の教訓から学校安全の実態を見る～	単著	平成２７年８月	『教育プロ』第 45 巻 第 17 号 通巻 1786 号、ERP、pp. 26-27	警察庁のまとめによると、子供の連れ去り（略取・誘拐）事件のうち、発生時間帯として最も多かったのが、午後４時から午後 6 時の時間帯とされている。この時間帯は、言わば下校時間帯にあたる。奈良小１女児殺害事件以降、この時間帯は「魔の時間帯」とされ、子供たちの安全を守ろうと、地域住民による見守り隊など、児童の下校を見守る大人の姿が多く見られるようになった。しかし、13 歳未満が被害に遭った略取・誘拐事件に関して、2004 年の奈良の事件以降の 10 年間を見ると、2004 年の 141 件以降減少し、2008 年には 63 件まで減少した。しかし、2014 年は 100 件を超す発生件数を数えている。地域住民が努力しても、なぜ犯罪は減らないのか。事件の教訓を視点に学校安全の実態について述べた。
２７．「これからの学校安全について考える」～第２回　子どもの命を守る『有効な』安全教育とは～	単著	平成２７年８月	『教育プロ』第 45 巻 第 18 号　通巻 1787 号、ERP、pp. 26-27	例えば、児童が何者かに連れ去られそうになったとき、大声を出した（いかの「お」すし）結果、その大声を最悪の方法で犯人が止めようとする場面を想像する。だが、「大声を出す」と教えたのは、現在の学校での安全教育の王道なのである。その教えを頑なに守ろうとした結果、不安全を招く可能性があることを認識しなければならない。ここでは、岡山県での安全教育実践を例に挙げ、安全標語に頼らない、「有効な」安全教育について述べた。
２８．「これからの学校安全について考える」～第３回　学校安全と教訓～	単著	平成２７年９月	『教育プロ』第 45 巻 第 20 号 通巻 1789 号、ERP、pp. 26-27	本連載のタイトルにある「これからの」という言葉の裏側には、「これまでの」という言葉がある。2001 年 6 月に発生し、まさに世間を震撼させた大阪教育大学附属池田小学校児童殺傷事件では、「学校安全神話の崩壊」と言われた。しかし、学校がなぜ安全だと思い込まれていたのだろう。その思い込みが、８名の児童の大切な命を失う結果となったのである。今もなお、学校安全に対する思い込みはないだろうか。その思い込みが、今目の前にいる大切な子供の命を失うことにはならないだろうか。本連載では、「これまでの」学校安全に対する思い込みを検証し、考え直し、認識を改めていく必要性を述べてきた。最終回となる本稿では、学校安全を支える教訓について述べた。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
２９．児童にとって『有効な』安全教育プログラムに関する一考察	単著	平成２７年９月	教育フォーラム、56、金子書房、pp.105-114	安全教育の課題として、何よりも児童の発達段階を考慮した、体系的な安全教育がされてこなかった。発達段階を考慮し、最も「有効」な安全教育カリキュラムを構築することが、これからの安全教育にとって必要不可欠である。そこで本稿においては、児童の安全に対するレリバンス Relevance（知識・技能・行動・情緒面における妥当性）を検証し、発達段階を考慮した安全教育カリキュラムの構築する研究成果について記述した。
３０．児童の発達段階を考慮した安全教育プログラムの開発に関する研究　－「児童の安全意識尺度（SASC)」の開発に関する基礎的研究－ A study on the development of safety education program in consideration of the developmental stage of the children -Basic research on the development of “Safety Awareness Scale of Children (SASC)”- （査読付き）	単著 単著	平成２７年１２月	人間教育学会 「人間教育学研究」第３号 ｐｐ９７－１０６	本研究においては、より汎用性の高い安全教育プログラムの開発を念頭に、児童の発達段階を考慮した安全教育プログラムの開発に関する研究における、「児童の安全意識尺度（SASC)」の開発に関する基礎的研究を行うことを目的とした。そこで、「児童の安全意識尺度(SASC)」の開発に関する基礎的研究として、公立小学校の協力校に赴き、SACS を用いた事前調査、安全教育の授業、事後調査という流れで調査を進めた。安全教育の授業においては、低・中・高学年、それぞれで同一授業を行った。調査結果を質問内容に着目した考察と、授業時の児童の様子に着目した考察を行った。その結果、本研究で取り上げた実践例である「知らない人にはついていってはいけません」という教えを題材とした安全教育内容は、低学年が最もその妥当性が高いと見なすことが可能となった。
３１．「教育実習の課題と展望」第１回　教育実習の意義～その必要性と質～	単著	平成２７年１２月	『教育プロ』第 45 巻第 28 号　通巻 1797 号、ERP、pp.14-15	教師たちは今、「いじめ」「学級崩壊」「不登校」「家庭との連携」「学力保障」「子どもの安全」など、それらの問題と常に向き合い、対処、対応し、解決していかなければならない。学習面・メンタル面・人間関係面などで特別のケアや支援を必要とする子どもの増加や、増大する保護者の要望・クレームへの対応など、学校・教職員が対応すべき問題や課題は多様化し増大している。したがって、教員の資質・能力はより高いものが要求されていると言えるのである。大切なことは、「では、この流れゆく社会の中で求められる教師像に対応する資質・能力を、教員養成系大学や学校現場で、どのように育むのか」という現実的に必要な視点である。本稿ではその中でも特に、教員になる上で必修である教育実習について、そのあり方や価値、抱える課題について論考し、教育実習のこれからの展望を捉えていくことを目的として記述した。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
３２.「教育実習の課題と展望」第２回　教育実習の実態～実施する大学と受け入れる学校～	単著	平成２８年１月	『教育プロ』第 46 巻第 1 号　通巻 1798 号、ERP、pp. 26-27	教員養成系大学の附属学校園と、一般の公立学校とでは、教育実習生を受け入れる際の意識に差があるのは当然と言える。さらに言えば、国立大学の附属学校が、熱心に教育実習生の指導に当たることは当然であり、附属学校園の存在意義であり、重要な責務である。その一方で、公立諸学校の教育実習生の受け入れについては、様々な点で課題がある。まず公立学校は、そもそも教育実習を受け入れる前提での体制が整えられていない。また、いわゆる母校実習については、“大学側の対応や評価の客観性の確保等の点で課題も指摘されることから、できるだけ避ける方向で、見直しを行うことが適当である”（前掲答申）とあるように、公立学校にとっては、いつ何時、どのような、どこの学生を受け入れるのかという点において、不確定なのである。本稿では、受け入れる学校側の実態について記述した。
３３.「教育実習の課題と展望」第３回　教育実習の役割～教職の道標～	単著	平成２８年１月	『教育プロ』第 46 巻第 2 号　通巻 1799 号、ERP、pp. 24-25	教育実習の前、大学における 3 回生になるまでのカリキュラムの中で、介護等体験や、大学のカリキュラムによっては学校支援ボランティアなど、教育という社会の一部に経験はあっても、そこにある「子どもたちに対する責任」の荷重はさほど大きくはない。しかし、教育実習ではおよそ１ヵ月の期間、教師たちとほぼ同じ時間、子どもたちと接している。けんかをしている子どもたちの対応に迫られる場面もあれば、学級全体を指導する場面にも出会う。その中で、おのずと「子どもたちに対する責任」の荷重は大きくなる。教育実習生は「学生」でありながら「先生」であるという、重層的立場（Student Teacher）を持つことになる。本連載の第 3 回目にあたる本稿では、教育実習生そのものに焦点をあて、教育実習現場での実際の学びと、その学びの有用性や効果について論考した。
３４.「教育実習の課題と展望」第４回　これからの教育実習～質と夢の保証～	単著	平成２８年２月	『教育プロ』第 46 巻第 4 号　通巻 1801 号、ERP、pp. 16-17	平成２７年１月に文部科学省から発信された「高大接続改革実行プラン」は、センター試験の廃止や記述式試験の導入などがセンセーショナルにクローズアップされた。したがって一般的に私たちは、大学入試改革に意識が向きがちだが、高大接続改革とは、高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の三者一体的改革であるという捉え方をするべきである。それは、高校での「学力の 3 要素」の育成と、それを受けた大学教育の質的変換、そして、高大の接続を担う大学入試制度が三位一体となった改革である。そこには、「新しい時代にふさわしい」学力や人材を育成するというビジョンが土台となっている。この構造を、教員養成に関わる一連の過程の中に求めるという視点で記述した。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
３５.【特別寄稿】学校安全の課題と展望に関する一論考　～教訓と教材と教師について～	単著	平成２８年２月	大阪教育大学附属池田小学校研究紀要・雑誌「とごころ」 ｐｐ５６－６０	平成２７年７月に、奈良県香芝市で小学校６年の女児が誘拐された事件は世間を震撼させた。幸いにも女児の命は無事だったが、同じように突然の魔物に連れ去られ、無事ではなかった命を私たちは思い出す。2004 年の奈良小１女児殺害事件や 2014 年に発生した神戸女児遺体遺棄事件、2015 年の和歌山小５殺害事件など、これらの連れ去り事件では、未来のある小学生の児童が命を失うという、最悪の結末を迎えている。この、幼い大切な命を救うことはできなかったのか。防犯に関して、具体的な事件を想起しながら、教訓と教材と教師、という３つの視点で記述した。
３６.「これからの教員養成における質的転換」 第１回　教師の資質能力の変化と転換	単著	平成２８年８月	『教育プロ』第 46 巻 第 18 号　通巻 1815 号、ERP ｐｐ１２－１３	社会の進歩や変化にともない教育の世界にその時流は確かに訪れてはいる。しかし、その一方で、教育そのものを担う教師の存在（意義）や資質能力、また、それらの礎となる教員養成の変化と進歩に大きな胎動は見られない。そこで本稿では、社会の変化や進歩に対応する教員養成の質的転換について、教師の資質能力、教育実習、教員としての進路選択をキーワードにして論考した。
３７.「これからの教員養成における質的転換」 第２回　教員の「多忙感」と教職の実像	単著	平成２８年９月	『教育プロ』第 46 巻 第 20 号　通巻 1817 号、ERP ｐｐ１４－１５	次期学習指導要領案の特色と学校教育の役割について論じた。小学校の英語教育の強化、授業時数の増加、またプログラミング教育の導入など、その改定は急速に進む。一方で、今後の教員採用者数は、少子化と退職者数の頭打ちから、減少する傾向は否めない。このことから推測されるのは教員の「多忙感」の増大である。教員の「多忙感」に注目し、今後求められる教員の資質や「学校行事精選と授業時数確保」についても論考した。
３８.「これからの教員養成における質的転換」 第３回　揺るぎない「教職の体幹」とは	単著	平成２８年９月	『教育プロ』第 46 巻 第 21 号　通巻 1818 号、ERP ｐｐ１６－１７	文部科学省の答申における「教員の資質能力」は時代や社会の要請に応じて、その資質能力や教師像が変容しつつ、揺れ動いている。本稿では日本の歴史的な学校制度の変換や教員養成の歴史的変換に視点を当て、教員の資質能力や今後の教職キャリアについて整理した。さらに時代のニーズは変化しても、教師に求められる「教職の体幹」＝「児童や生徒に好かれる資質」についても論じた。
３９.「これからの教員養成における質的転換」 第４回　「教職の体幹」を育成するカリキュラムデザイン	単著	平成２８年１０月	『教育プロ』第 46 巻 第 22 号　通巻 1819 号、ERP ｐｐ１６－１７	教員の資質能力について言及し、揺るぎない「教職の体幹」＝「児童や生徒に好かれる資質」について論じた。教育への使命感や子どもへの情熱など、その教師は何を身に着け、それをどのように学んだかという点が大切である。それは先天的なものや外見ではなく、後天的に養成されたものである。「児童や生徒に好かれる資質」を後天的に養成するカリキュラムデザインについて論考した。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
４０．いのちの教育 －教師の視点をいかにもつか－ 第１回「研究会の成立過程とこれまでの歩み」	単著	平成２８年１０月	『教育プロ』第 46 巻 第 23 号　通巻 1820 号、ERP ｐｐ１６－１７	1995 年に発生した阪神・淡路大震災、神戸連続児童殺傷事件（1997 年）、2004 年には、長崎県で小 6 女子児童による同級生殺害事件が発生するなど、子どもたちのいのちへの感覚、あるいは死生観というものに対する、当たり前で疑いようもなかったものへのある種の懐疑と、それに伴う教育の再構成の必要性が高まるなか、このような背景から、2009 年、「いのちの教育実践研究会」が発足した。本稿では、研究会の成立過程と「いのちの教育」の必要性について述べた。
４１．想像力と創造性を結合する美術教育の可能性 Possibility of education to combine the creativity and imagination （査読付き）	単著	平成２８年１２月	日本人間教育学会 「人間教育学研究」第４号 ｐｐ５７－６３	国際競争を展開する教育政策は、科学技術と国民道徳の教育に傾斜していく中で、さらに学校教育費は恒常的な削減を繰り返し、芸術教科の授業時数は大幅に削減されていく。次の学習指導要領の改訂に関する答申では、特別の教科としての道徳の設置、英語教育の充実のための授業時数の増加、プログラミング学習の推進などが盛り込まれ、ますます芸術領域の存在場所が狭まっていく感は否めない。本稿では、その現実の中、アートの教育的意義を再発見、再確認することの急務を感じつつ、近現代のアート教育の実践を検証しながら美術教育が喚起する教育の可能性に接近することを目的とした。
（その他） 「教材の作成」 １．図画工作科ワークシート集「夢への扉」	単著	平成１７年４月～平成２０年３月	大阪教育大学附属池田小学校	大阪教育大学附属池田小学校図画工作科主任として担当した図画工作科の授業において、ワークシート集を作成した。毎時の児童の作品制作過程を画像にして、ワークシートに貼り付け、次回の計画を立てさせた。そのことにより、児童は自らの学習履歴を振り返ることができるようになった。また、本教材は教育実習にも活用し、教育実習生は、児童個々の能力や個性を的確に把握し、指導案作成や授業実践に生かすことができた。
２．教職表現力演習ノート	共著	平成２７年４月	奈良学園大学	西辻正副・山本美紀編 岡村季光・岡野聡子・高木悠哉・松井典夫著 奈良学園大学人間教育学部の必修科目である教職表現力演習の教材として、授業担当者で通年使用可能な教材を作成した。
「教育指導案・考察集の作成」 １．安全教育実践指導略案集 ２．安全教育実践考察集	単著	平成２２年２月	大阪教育大学附属池田小学校	本指導略案集と実践考察集は、現職の教員、及び教育実習生を対象として作成したものである。大阪教育大学附属池田小学校は、平成２１年度より、文部科学省教育課程特例校として、「安全科」を設置した。当該校「安全科」主任として、平成２１年度に実践した安全教育の授業の指導略案を作成し、授業後の考察集を作成し、平成２１年度の当該校教育研究協議会において、参会者に配布し、教育実習生に配布した。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
「学会発表(抄録)」 １.『小学校におけるＡＥＤを用いた『命の教育』の有効性に関する実証的研究』	単独	平成２０年９月	日本安全教育学会第１０回記念大会 (於　玉川大学)	本実践では、児童にＡＥＤの使用認可に至るまでの人々の努力について考えさせ，また，実際にＡＥＤを体験することによって、ハードがあるから安心なのではなく，使用する（命を助けようとする）ことの勇気について考えることによって，実体のない「いのち」の尊さに実感を持たせることを目的とした。実践を通して、初等教育段階でＢＬＳ教育を行うことの可能性を見出すことができた。それは、児童が持つ純粋な感性である。児童は例えマネキンに対してであっても、救命処置を自らが行うこと意味の大きさを実感したのである。その中でこそ、自分ならどんなことができるのかという、実感を伴った思考が生まれるのである。
２.『児童の直感に基づいた危険予知・回避能力を育む安全学習の在り方　～児童の実態と犯罪機会論の比較から～』	単独	平成２１年９月	日本安全教育学会第１１回大会 (於　東京学芸大学)	安全マップの学習は、マップを作ることが目的ではない。真の目的は、児童の危険回避能力・危険予知能力を育み、自ら犯罪機会を避けることができる力を育成することにある。学習のとしては、立正大学の小宮理論をもとに、「入りやすく、見えにくい」という視点を確立することによって、危険予知・回避力を育むことを目標としてきた。しかし、学習を進め、児童の実態を観察するうちに、「入りやすく、見えにくい」という言葉では測りきれない、児童の危険に対する感覚が明らかになってきた。そこで、児童の実態に則した安全マップの学習を構築すべく、研究を進め、発表した。
３.『安全科の授業における児童の変容に関する研究』	単独	平成２１年１１月	日本セーフティプロモーション学会第３回学術大会　(P69)	本研究は、ＡＥＤ（Automated External Defibrillator）［自動体外式除細動器］を含めたＢＬＳ（Basic Life Support）に関するスキル学習を通して知識理解を深めることによって，豊かな人間的感性と命に対する実感を育むことを目的としている。　事前アンケートでは、児童は、もし目の前に傷病者がいたらという質問に対し、990%の児童が、何らかの方法で傷病者を助けると答えた。しかし、BLS のスキルを習得した結果、「助ける」と答える児童は激減した。このことは、児童が「助けたい」という思いを持ちながらも、命に関わることの恐れを実感したことに他ならない。初めて、児童は自分が本当にできることを実感を持って考える。
４.『安全教育カリキュラムの構築に関する研究　～大阪教育大学附属池田小学校「安全科」の実践から～』	単独	平成２２年９月	日本安全教育学会第 11 回宮城大会 (於　宮城教育大学)	平成 13 年児童殺傷事件を契機として始めた安全教育は、防犯のカテゴリーに特化した安全教育だった。しかし、子どもたちの目の前にある危険を考えたとき、安全教育を交通安全や災害安全教育を抜きにして語ることはできない。そこで防犯、生活安全、交通安全、災害安全、命の大切さを実感する授業、の 5 カテゴリーを安全科において実践している。しかし、カリキュラムの構築を考えたとき、児童の安全に対する適時性（知識・技能・行動・情緒面において）を抜きにしては語れない。そこで、本研究においては、本校「安全科」の実践例をもとに児童の安全に対する適時性を検証し、発達段階を考慮した安全教育カリキュラムの構築について発表した。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
５．安全科の授業における児童の安全意識の変容に関する研究	単独	平成２２年１０月	日本教育大学協会研究集会（於　島根県サンラポーむらくも）	本発表は、日本教育大学協会が主催したものであり、第３分科会「附属学校の改革と実践の動向」で「安全科の授業における児童の安全意識の変容に関する研究」として発表したものである。特に、安全教育の有効性について、「安全安心様相図」を用いた授業実践と、児童の変容について発表し、安全教育の有効性の実証について発表した。交通安全学習については、学習前は「安全安心様相図」では、多くの児童が図の中心付近に多くポイントしていたが、授業後は「不安・危険」のカテゴリーに多くポイントした。このことにより、授業による児童の変容が明らかになったという内容を発表した。他に、水難災害、命を実感する授業の実践についても、授業前と後の、児童の変容を視覚的に見ることができる内容で発表した。
６．児童の発達段階における安全教育の有効性に関する実証的研究	単独	平成２３年１１月	日本セーフティープロモーション学会　第５回学術大会（於　大阪教育大学）	本研究においては、一つの実践を低・中・高学年で行い、その相違を明らかにし、発達段階ごとの安全教育カリキュラムの作成につなげることを目的としたものである。防犯ブザーの使用方法に関する授業を題材とした。防犯ブザーは、すべての児童が通学リュックに装着している。しかし、防犯ブザーに対する意識、使用に対する構えなど、低・中・高学年では大きな相違が見られると予想される。そこで、「安全安心様相図」を用いて実態を調査するとともに、同授業を３学年で行い、児童の授業時における記述などをもとに調査を行った。考察として、学年が上がるにつれて、リスクマネジメントに対する自我が発育する。しかし、それは実態を伴わない場合が多い。低学年では自尊感情を育み、中学年では実践的な、そして高学年では自己意識の再構築をねらいとする授業構成が肝要であると述べた。
７．安全教育のレリバンスに関する研究～大阪教育大学附属池田小学校「安全科」の実践から～	単独	平成２４年７月	日本カリキュラム学会第２３回大会（於　中部大学）	本研究では、「安全安心様相図」（日本セーフティプロモーション学会 2011 松井）を用いて、大阪教育大学附属池田小学校「安全科」の授業実践による児童の変容を客観的に実証することにより、安全教育内容と児童の発達段階の妥当性を検証しようとしたものである。これまで安全教育においては、児童の発達段階を考慮した学習内容が検討され、研究されてこなかった。したがって、避難訓練をはじめ、交通安全学習など、どの学年に適しており、どの学年で行うのが妥当であるという検討がされてこなかったため、「有効な」安全教育であったかという疑問が生じる。本研究で、安全教育と児童の発達段階の妥当性を実証することにより、有効な安全教育プログラムを作成していくことを目標とした。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
８．安全教育のレリバンスに関する研究	単独	平成２４年１０月	日本安全教育学会第１３回大阪大会（於　大阪教育大学）	中央教育審議会学校安全部会において、「防災科」あるいは「安全科」として、安全教育を教科化する方針が打ち出された。これまではひとつの「視点」であった安全教育を、体系的に学ぶことができるようにという発想であり、東日本大震災による災害から、教育が一歩前に進もうとする顕れといえる。しかし、安全教育で最も大切なのは、「重要性の認識」もさることながら、「効果的な学習をすること」にあると考える。これまでの安全教育は、安全だと信じ、考えてきたことを疑ってこなかった。例えば児童に当たり前のごとく「安全指導」として教えてきた、「揺れたら机の下に身を隠す」ことや、「いかのおすし」「おはしも」をはじめとする言葉などにおいても、一層吟味し、指導方法、内容を考え直さなければならない。そこで本研究においては、「効果的な安全教育」であるために、安全教育のレリバンスに着目した。今後、教科化するにおいても、また、安全教育を推進していく上でも、そのカリキュラムの構築において、児童の安全に対するレリバンス Relevance（知識・技能・行動・情緒面において）を考慮することが肝要である。そこで、本研究においては、実践例をもとに児童の安全に対するレリバンスを検証した。
９．安全教育カリキュラムのレリバンスに関する研究～大阪教育大学附属池田小学校「安全科」の実践から～	単独	平成２４年１１月	第６回アジア地域セーフコミュニティ会議	大阪教育大学附属池田小学校では、平成 21 年度より、文部科学省の教育課程特例校に認定され、「安全科」を設置した。安全教育のカリキュラムの構築を考えたとき、児童の安全に対するレリバンス Relevance（知識・技能・行動・情緒面において）を考慮することが肝要である。そこで、本研究においては、大阪教育大学附属池田小学校「安全科」の実践例をもとに児童の安全に対するレリバンスを検証し、発達段階を考慮した安全教育カリキュラムの構築の礎とすることを目的とした。「安全安心様相図」を用いた調査から、低高学年に比して、中学年が著しく違う様相を示した。このことは、発達段階的には防犯ブザーに依存（信頼）する段階でありながら、ブザーが実際には鳴らなかったり、鳴らすタイミングに迷う自分と改めて向き合ったことによる一時的なショックがあると考えられる。また、低高学年においては類似した様相を示したが、記述内容を見ると、高学年における防犯ブザーに対する依存心（信頼度）の低さが伺えた。これらのことから、同授業を年代別で実施した結果、年代による相違が明らかとなった。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
１０．学校安全と防災教育といのちの教育	共同	平成２７年１月	いのちの教育実践交流会　第６回シンポジウムｉｎ兵庫	本研究発表は、平成２４年度～平成２６年度科学研究費補助金「いのちの教育カリキュラムモデルの開発的研究」の研究成果報告書「いのちの教育－カリキュラムモデルの開発と実践－」の中の、第４章　学校安全・防災部会の報告、第１節学校安全（PP77-81）と第２節安全教育（PP82-95）の部分を単著したものに基づいて発表したものである。主に大阪教育大学附属池田小学校における学校安全の取り組みや、「安全科」において取り組んだ安全教育の方法と実践内容について、実践結果を交えながら発表した。
１１．災害時における教員の職業的役割 ～「使命感」と「多忙感」に着目して～	共同	平成２９年３月	日本教師学学会第１８回大会（於、早稲田大学所沢キャンパス）	本研究では、特殊な状況下、とくに災害時においては、その「使命感」は「多忙感」を凌駕するのではないかという仮説を立てた。そこで、熊本地震において教員が果たした役割をモデルとし、非災害地域の教員との比較調査を通して検証し、教員固有の職業的役割を明確にすることを目的とした。調査の結果、他群の教員は多忙感や内的統制感が高まることで自らの存在価値や意欲の高まりがみられるのに対し、熊本群の教員にそれらがみられないことから、一連の熊本地震に対する対応の疲労感が高まっていることが背景因子として懸念され、早急の対応が求められることがわかった。
「年鑑」 １.『安全教育の実効性とその客観的効果の測定に関する研究-第６学年「命のバイスタンダー」の実践から-』	単著	平成２２年７月	財団法人下中記念財団 2010 年報　pp14-17	平成１９年度、２１年度における下中科学研究助成金の取得により、その研究成果を下中科学記念財団年報に寄稿したもの。 安全教育の効果や実効性は、これまでは授業者の実感による主観的なものでしかなかった。それを『安全安心様相図』を用いて客観的に児童の変容を測定し、分析した結果を発表した。
「リーフレット」 １.「安全指導と『安全を学ぶ』ということ」	単著	平成２５年９月	日本文教出版「教育情報」巻末	本リーフレットは、日本文教出版が教育資料として発刊しているものであり、全８ページからなるものである。最終ページの「クローズアップ！　教育の現場」のコーナーの原稿を担当し、「安全指導」と「安全学習」の違いについて述べた。大阪教育大学附属池田小学校「安全科」で実践した「命の避難訓練」の授業から、「おはしも」（押さない・走らない・しゃべらない・もどらない）という、これまで疑いも持たれず避難訓練時のセオリーとして通ってきた言葉を題材にし、想定にとらわれ、慣習にとらわれることの危険性について述べたものである。

教　育　研　究　業　績　書

平成 29 年 3 月 31 日

氏名　　森　一弘

研　究　分　野	研　究　内　容　の　キ　ー　ワ　ー　ド
体育科教育の実践に関する実務 総合的な学習の指導法に関する実務	体育科指導法・自主的な学び・総合的な学習

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　　要
1　教育方法の実践例 ○アクションリサーチを活用した授業の改善 ・単元における課題の持たせ方 ・子どもの聞き合う場づくり ・子どもと子どもの関係性 ・子どもと教師の関係性 ・子どもの理解度と授業の有効性	平成 16 年 4 月～ 平成 24 年 7 月	○授業をビデオで撮影し，子どもの実態をもとに授業改善の方策を探る。教師の授業における出場として，発問・切り返し・課題の再設定などに対して，子どもたちが実際にどのような姿をしめしたのか分析するとともに個と個の関係，個と教材との関係，個と集団との関係，個と教師の関係，集団と教師の関係など協働的な学びをもとに，授業の改善を明らかにしてきた。 （神戸大学附属住吉小学校）
○社会性を育む体育の授業づくり ・チームプレイが重要だという認識の持たせ方 ・チームが勝つための自分の役割に気付かす	平成 16 年 4 月～平成 24 年 7 月	○フラッグフットボールを教材にして，子どもたちの社会性を育む授業デザインを行う。「わかる・できる」を一体的に扱い，ゲームに勝つための，自分の役割を意識し，作戦を進めていくことを通して，相手への思いやり，ゲーム進行でのルールの順守，マナーの向上が見られた。（神戸大学附属住吉小学校）
2　作成した教科書、教材 ハードル走のポイント	平成 20 年 10 月	○ハードル走のワークシート～リズムよく走るためのポイントを探る～4 パージ（教材） ハードル走の動きのモデルを示し，そのモデルのように動作する点のポイントを示した。児童はポイントを見ながら主体的に取り組めるように作成した （神戸大学附属住吉小学校の体育授業で指導資料として児童に配布して使用）
総合学習「普天間問題を考える」	平成 22 年 5 月	○普天間基地を考えるための沖縄の歴史をまとめた冊子 15 ページ（教材） 沖縄が本土によって，とられた政策を知ることで，沖縄の人々の思いを感じ，戦後になってもアメリカ軍の多くの施設が沖縄に駐留する現実を知らせる資料を作成した。 （神戸大学附属住吉小学校の総合的な学習の時間に参考資料として使用）
フラッグフットボール指導テキスト（再掲）	平成 22 年 7 月	○日本フラッグフットボール協会から出版した指導者のためのテキスト 36 ページ(教科書) 高橋建夫先生が監修した，学校体育で活用できるフラッグフットボール練習方法などを示した。 オフェンス時の作戦づくりをしていくために

		2 対 1，4 対 3，5 対 3，（オフェンスチームの人数を多くする）でパスコース・ランコースを考えていくモデルとなる動きを示した。また，オフェンス時にも相手チームをブロックする動きを示し，フラッグフットボールのオフェンス時の作戦をスモールステップで学べるように工夫した。（神戸大学附属住吉小学校の体育の指導参考資料として使用）
3　教育上の能力に関する大学等の評価 勤務評定 ・神戸大学附属住吉小学校の校長からの評価 ・芦屋市立山手小学校の校長からの評価	平成 16 年度から平成 25 年度 平成 26 年度から現在に至る	副教頭として校務全般を取り仕切り，学校のかなめとして，各教員らの信頼も厚く，また，PTA との関係を密にして保護者からの信頼も厚いものがある。なくてはならない人材として高い評価を得ている。 研究主任・６年学年主任として学校全体の教育課程の編成、授業実践、若手教員の指導などの業務に精通し学校運営の一翼を担っていたという評価を得ている。
4　実務の経験を有する者についての特記事項 ○教育実習生に対する指導 ○ＮＫＨ　教育テレビ 「スポーツ教室」 フラッグフットボール　基礎編・発展編の構成及び指導出演	平成 4 年 4 月から現在まで 平成 21 年度 平成 22 年度	○これまで毎年教育実習生を受け入れて、担任や管理職の立場で行った講話内容 ・学校運営，児童理解，生徒指導と学習指導 ・単元の作り方と 1 時間の授業の作り方 ・学習評価の考え方の実際の評価の仕方 ・体育の授業の作り方 ・担任と養護教諭・カンセラーの連携 ・特別活動　等 ○ＮＨＫ教育テレビ「スポーツ教室」の番組で，フラッグボールを取り上げ，その番組の構成・演出及び指導者として出演した。ここでは，フラッグフットボールの楽しみ方に力点を置き，実際の小学校体育授業で活かしていける内容構成にした。どの子どもも楽しめるための動きや作戦を中心に番組を構成した。
5　その他		なし

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項		
事項	年月日	概　　要
1　資格、免許 教員免許	昭和 57 年 3 月 31 日 昭和 57 年 3 月 31 日	小学校教諭1級普通免許状 昭56小普第5892号　（埼玉県教育委員会） 中学校教諭 2 級普通免許状（社会） 昭 56 中普第 5629 号　（埼玉県教育委員会）
2　特許等 特になし		

３　実務の経験を有する者について特記事項 ○授業づくりセミナー講師	平成 21 年 8 月	○神戸大学附属住吉小学校が主催した「授業づくりセミナー」において授業を公開し，その後のセミナーにて講演を行った。具体的には，小学校 2 年生を対象にした鬼遊びの授業を公開した。この中では，指導要領の改定時期と重なっていたため，改定の趣旨について解説し，改定後の内容に沿った授業づくりのポイントを示した。 ・既習内容や体験を基に，課題を明らかにさせる。 ・新しい内容を知り，これまでにしたことがない動きや作戦の考え方などを見つける。 ・子どもが運営するゲーム大会を開催する。
○全国附属学校養護教諭部会でのメンタルヘルスについての発表	平成 21 年 8 月	○絆を大切にする子どもの育成を目指して子どものケア体制の充実～という題目で，日々の学校で起こる子どもたちの抱える諸問題を解決するために，「心のケア委員会」を立ち上げた。この委員会が機能するために，教育相談担当者・カウンセラー・メンタルフレンド・養護教諭・管理職の連絡体制，相談体制，指示体制などを具体的な事例をもとに発表した。
４　その他 「社会貢献」 兵庫県教育員会委託事業	平成 20 年度	運動プログラム DVD 作成 体力アップにための動きづくりを創作し，児童に動きを指導し，その動きを収録して兵庫県全小学校に DVD にして配布した。
芦屋市教育委員会 「社会科副読本作成アドバイザー」	平成 21 年度	芦屋市社会科部会作成の社会科副読本のアドバザーとして企画・編集・校正に取り組む。指導内容として，3･4 年生の社会科の指導内容を押さえ内容にするとともに，芦屋市の特色を取り入れるようにアドバイスを行った。
全国大学体育連合主催 大学体育指導者全国研修会講師	平成 24 年 8 月	大学体育連合会の研修会にて大学教員へ「フラッグフットボール」の実技講習を行った。大学での体育授業に取り入れるための研修会として初心者への指導の具体を示した。この研修では、基本的な動きからゲーム（戦術）まで網羅的に体験することができました。研修を通して、フラッグフットボールの魅力を体感し、その特性を生かした授業について、実践的な知見を学ぶことができるプログラムを紹介した。
「指導助言関係」 ・芦屋市立朝日ヶ丘小学校講師	平成 16 年度～22 年度	校内授業研究会での指導助言 及び研究発表会時の指導助言
・川西市立清和台小学校講師	平成 18.19 年度	校内授業研究会での指導助言
・三田市立武庫小学校講師	平成 21.22 年度	校内授業研究会での指導助言 及び研究発表会講師
・三田市教育委員会主催研修会講師	平成 21.22 年度	研究主任対象の「学校研究の進め方」講師 校内授業研究会での指導助言

・川西市市立久代小学校指導助言	平成 23．24 年度	校内授業研究会での指導助言
・芦屋市教育文化センター講師	平成 27 年 5 月	若手教員が今やるべきこと「授業実践を通して」講演
・芦屋市山手小学校研究会講師	平成 27 年 8 月	授業研究の進め方「学び合いのある活動について」講演
・西日本私学連盟体育部会実技研修講師	平成 28 年 5 月	「フラッグフットボール授業の進め方」実技研修において、小学校高学年におけるゴール型ボールゲームの考え方及びフラッグフットボールの授業展開の仕方　講師
・奈良県三宅町立三宅小学校運動能力向上のための指導講師	平成 28 年 5 月	小学生 1 年生から 6 年生を対象に、投動作の指導を実施しボール投げの技能向上を目指した指導を行った
・奈良県三宅町立三宅小学校ボール運動授業実技講習指導	平成 28 年 8 月	フラッグフットボールを中心にボールゲームの授業構想について 2 日間に渡り実践指導を行った。
・尼崎市立大島小学校講師	平成 28 年 8 月	学級づくりのポイントを示し、子供が主人公の学校づくりの必要性を指導した。
・芦屋市教育文化センター講師	平成 28 年 8 月	２年次から 5 年次までの若手教員を対象に、学級づくり・授業づくりを指導した。
・奈良県三宅町教育委員会授業評価委員	平成 29 年 2 月	三宅町教育委員会の企画事業を第三者の立場で評価した。
・奈良県三宅町健康づくり推進協議会座長	平成 29 年 3 月	三宅町における健康増進計画・食育推進計画を審議し、提言を行った。

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
（著書）				
㈜学術論文㈜ 1 神戸大学附属住吉小学校 研究紀要 2007 小中一貫教育で実現する国際社会に生きる資質・能力の育成 ～連続した学びを創る～	単著	平成 19 年 6 月	神戸大学附属住吉小学校発行 掲載　p162～p165	動きづくりと仲間づくりをめざした単元の開発『フラッグ　おにごっこを　みんなで楽しもう（基本の運動）』 授業では，自ら積み上げた成果をもとにしてさらにそれを発展していくようにしたい。この点では，追う相手は誰か，どうすれば得点となり勝てるのかなど，子どもたちがめざすところを明確にすることで学習意欲が高まることを明らかにした。さらにルール作り，ゲームの進め方などに学習の積み上げがみられるようになることも明らかにした。
2 国際社会に生きてはたらく資質・能力の育成 ～授業づくりにおける活用型の具現化～	共著	平成 21 年 2 月	神戸大学附属住吉小学校研究紀要 2008 P6～P20	授業構想のなかで活用型の授業とはどのような単元作りであり，1 時間の授業であるのかを提案した紀要である。 この紀要の基礎編に対して，研究内容の論の進め方，その具体，成果と課題が整合しているかを読み取り，研究部へ伝達した。伝達内容として活用型の授業デザインの中で，子どもが活動することで，教科の指導内容が明確であることが必須条件であり，評価規準・評価基準を明らかにすることが必要であることを指摘した。 ～授業づくりにおける活用型の具現化～ 子どもたちの思考の深まりを支援したり，新しい教科の知を得るために支援したりする具体策は何かを研究対象にした 1 年目の取り組みである。活用とは，子どもたちに，これまでの知識を用いて，課題解決に向かわせ，その中で，より有効は考え方やより利便性の高い考え方などを見つけさせることであると設定し，授業実践を通し，教科の内容のつながりを精査し，課題を設定し，子どもが活動する具体策を明らかにした。 本人担当場所：研究の基礎編部分を担当 共著者：高橋正，福原雅生，藤本雅司，森一弘（他 24 名）

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
3 グローバル社会を生きる「社会の更新」を実現していく子どもの育成 ～「活用」を視点にした授業づくり～	共著	平成 22 年 2 月	神戸大学附属住吉小学校研究紀要 2009 P6～P22	授業を通して子どもが新しい知識を生み出したり取り入れたりすることを知の更新とし，更新していくための有効な手立てについて提案した紀要である。この基礎編に対して，研究内容の論の進め方，その具体，成果と課題が整合しているかを読み取り，研究部へ伝達した。伝達内容は，活用型授業には，内容面で知の更新が必要であり，内容の深化として「新たな知」が授業展開に位置づけられることが必要であるといものである。 ～「活用」を視点にした授業づくり～ 単元目標に向けた一時間として本時までの知を，各教科等の視点からとらえ直して，活用できる形にする。活用できる形にするとは，前時までの学びをもとにして，本時の課題解決をしていく際に，どのような視点を持てばよいのかを明確にするということである。また，「新たな知」を生み出させるために個々の考えをつなぎ合わせることも必要であるということを明らかにした。 本人担当場所：研究の基礎編部分を担当 共著者：高橋正，福原雅生，小林秀平，森一弘 （他 19 名）
4 グローバル社会に生きるひびき合う学びを創造する子ども ～確かな理解を生む相互作用の場をデザインする～	共著	平成 23 年 2 月	神戸大学附属住吉小学校研究紀要 2010 P6～P16	授業の中で，友だちとの関係性を核にして互いに納得し，新しい知識や技能を身につけていくことを提案した紀要である。 この紀要の基礎編に対して，研究内容の論の進め方，その具体，成果と課題が整合しているかを読み取り，研究部へ伝達した。伝達内容は，授業において他者との交流による活動を内容面の違い，同意，視点の違いなどから授業を構想する必要性を明らかにすることである。 ～確かな理解を生む相互作用の場をデザインする～ 相互作用の質の向上のためには，教科等の知をどのような活動を通して子どもに出合わせるのか，その場面や支援の具体について教材研究をしておく必要がある。一つは，多様な見方や考え方を表出する場において，何が他者と違うのか明確に言語化させることが必要である。二つ目は，新たな知を創出する場において，自己の変容を言語化して自覚化を図る必要性があることを明らかにした。 本人担当場所：研究の基礎編部分を担当 共著者：柳田泰義，福原雅生，神山真一，森一弘

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
5「共創」を実現していく子ども ～相互作用の質に着目して～	共著	平成 24 年 2 月	神戸大学附属住吉小学校研究紀要 2011	授業の中で，友だちとの関係性を核にしその関係性をつないでいくための方策を提案した紀要である。 この紀要の研究基礎編に対して，研究内容の論の進め方，その具体，成果と課題が整合しているかを読み取り，研究部へ伝達した。伝達内容は，授業化の視点を具体として授業の中に位置づける時，課題の認識では，比較や資料からの読み取りなど諸能力の必要性を指摘し，修正していかせた。 ～相互作用の質に着目して～ 互いの思いや考え尊重しながら影響を与えあう相互作用を生むために,「援助の授受」に着目し，相互作用の質を規定する要素として位置づけた。授業において「援助の授受」を伴う相互作用を通して新たな価値を生むために，問題解決の過程に二つの「授業化の視点」を設定し，その有効性を明らかにした。 授業化の視点 1：葛藤を顕在化し，共通の課題を認識させる。 授業化の視点 2：各自の理解深度のプロセスや理解の結果をもとに思考を深化させる。 本人担当場所：研究の基礎編部分を担当 共著者：柳田泰義，福原雅生，佐古賢一，森一弘，（その他 16 名）
6「協働社会」を実現していく子ども ～つながりが生まれる場をデザインする～	共著	平成 25 年 2 月	神戸大学附属住吉小学校研究紀要 2012 掲載　p6～p18	「協働社会」を実現していくために，協働的な学びの中で，互いの観方や考え方を調整しながら，よりよい問題解決の道筋を探り解決を図る子どもとおいた。具体的に授業を構想する手立を示した。その内容は「聴きたくなる状況を生む」「相互了解を生む」「自分の考えの見つめ直しを生む」という 3 つの瀬点を設け授業構想を考え，実践をし結果から検証していくようにというものである。 ～つながりが生まれる場をデザインする～ 3 つの視点を持って実践した結果，次のようなことが明らかになった。 対象に対する自分の考えを明確にし，他者と考えとの共通点や相違点に気付かせ，解決を図る手立てが必要である。 互いが納得できる見方や考え方について表現させる手立てが必要である。 自分見方や考え方の変容の過程をふりかえり，学習内容に対する理解を深めたり，意味づけを豊かにしたりする手立てが必要である。 このような 3 つのことが明らかになった。 本人担当場所：研究の基礎編部分を担当 共著者：柳田泰義，福原雅生，小河内直樹，森一弘，（その他 13 名）
7 新しい体育授業の創造をめざして ～ライフスキルの育成を視野に入れた体育学習～	単著	平成 25 年 3 月	教育 PRO　3 月号 株式会社 ERP 掲載　p6～p9	「成就性」「承認性」「親和性」の三つの要素をおき、体育授業を実践していくことは、子どもが運動好きになることでもある。「精一杯動いた楽しさ」「できるようになった喜び」「仲間と協力できたよさの実感」「新しい発見」がある授業である。この結果として、身体的エフィカシ―が高まり，セルフエスティームの獲得がみられるという主張を行った。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
8　人間教育を支えるもの～自尊感情に焦点を当てる体育科の授業構想～	単著	平成 26 年 12 月	人間教育学研究 第 2 号「人間教育学」の可能性-理論の展開と実践- p89～p100	体育科の授業構想において次の３点がポイントとなることを明らかにした。①この多様性を授業に関わる全員が受け入れる。②仲間との関わりで生成される思考や技能を表現する。③仲間との関わりの中で差異を明らかにし認め合う。 このポイントを授業に位置付けることで、体育科の特性としての資質も高めることができる可能性がある。〇自由に操れる体・身体的エフィカシー、〇精神的・肉体的な粘り強さ、ストレス対処スキル、〇批判的思考、社会性、コミュニケーション、自律心などの資質を高めることができ、この資質が生涯スポーツへつながっていく大事な要素であることを示した。
9 共に学びを創り会う子どもをめざして ～言葉を生かし知識や技能を更新する～	単著	平成 27 年 2 月	芦屋市立山手小学校研究紀要 2014 掲載　p33～p39 掲載 p120～p126	授業研究基礎編 授業研究において最も大事にしたことは，各研究同人の主体的な取り組みである。研究同人である教師一人ひとりは，授業の質を高めることを目指し，授業研究に取り組んできた。授業の質について秋田は，『一人ひとりの子どもが授業中どれだけ「安心・安定（well-being）しているか」という居場所感と，学びの対象に対してどれだけ深くまたより長く「没頭・夢中(involvement)関わり考えることができるか」』という集中の２点を挙げている。この２点を踏まえ，子どもたちが教師との信頼関係，仲間に受け入れられているという受容感，よくわからない，迷ったり，困ったりしていることを自己開示できる安心感，自分の考えや言葉に共感しそれを豊かにすることから生まれる一体感を授業の中でみていくという主張を行った。 授業実践編 生き物の３つの特徴である、 ◇「外の世界とつながり」事例１ ◇「一つの個体としてつながり」事例２ ◇「長い時間の中で過去の生き物たちとつながり」事例３ をなぜ筆者は、この順で示し、特徴として挙げたのかということを考える時間である。 （批判的思考の活用）この特徴をこの順で示した理由は、目に見える身近なつながりから目には見えないつながりを挙げ、つながりがだんだんと長くな っていき、事例３のつながりは永遠につながっていくという時間的空間の深まりを意味している。このような筆者の工夫を共同的な学びで発見させ、読みの楽しさを実感させることを明らかにした。 共著者：中村整七、西尾節子、森一弘 （その他 32 名）

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
10 フラッグフットボールにおける戦術アプローチによる簡易化されたゲームの有効性と課題	単著	平成 27 年９月	奈良学園大学紀要 掲載 p135～p141	フラッグフットボールは、アメリカンフットボールを簡易化したゲームである。簡易化された要素は、タックルの危険性を回避するために腰につけたフラッグをとることで、身体接触を禁止した。また、人数は５人対５人とした。用具であるボールは、小さく柔らかいものとしている。指導要領に示されている簡易化する要素を取り入れながら、授業を展開している。この中で、戦術アプローチの考えを持ち込み、アントナンバーのゲームであったり、パスに限定した動きをさせたりするが、これらの学習では、子どもたちの作戦をつくりだすという思考・判断させる活動が弱化させていることを指摘し、イーブンナンバーでのゲーム、ボールをゴールに運び込む手立てを提案した。
11　新聞を活用した総合的な学習の時間−アクティブ・ラーニングを意識した授業−	単著	平成 27 年 12 月	人間教育学研究 第 3 号「人間教育学」の視座−新しい「教育改革」への提言− p107～p114	新聞を活用し、子供たちが自らの興味関心にもとづき、課題を設定し、課題を解決するために情報を集め、課題解決のための方策を考え、まとめていく授業実践を提言した。この中で、新聞活用のポイントとして、「琴線に触れる言葉を探させる」「これからの自分の生き方について示唆している記事を探させる」という２点が重要であることを明らかにした。
12 経験による「教師の成長」について考察する	単著	平成 28 年 3 月	大阪教育大学実践学校教育講座　実践教育学論集 2015 −現代の教育問題を考える 20− p58～p61	「教える」という営みは、子どもたちの活動と結果として起こる事柄の詳細な関連を見いだし、反省していく熟慮的な「経験」だととらえることができないだろうか。ここでいう「経験」は、常に他者や自分自身の未来に開かれ、また新しいものを絶えず受け入れていこうとする。このような「経験」の繰り返しが、教師の成長を確かなものにし「教える」プロとして変容をもたらせてくれる。日々の授業の中で一人ひとりの子どもや個々の教材と向き合い熟慮する。また、日々、教師は自分の行動をふりかえり、反省的に教材内容の本質や子どもの思いに気づいていくことを、教員志望の学生に指導する必要性を提言した。
13 修士論文 小学校体育におけるフラッグフットボールゲームの授業実践研究−イーブンナンバーゲームの有効性−	単著	平成 29 年 1 月	大阪教育大学大学院教育研究科	本研究の目的は、フラッグフットボールゲームを公式ルールである 5 人対 5 人（クラスの人数によっては、4 人対 4 人）のイーブンナンバーゲームで実施しても戦術学習が成り立つことを明らかにすることであった。結果として、ゲームパフォーマンスが向上する。以上のことから、フラッグフットボールの授業においてイーブンナンバーゲームを用いて授業展開しても、戦術的な学習課題へ焦点化でき、プレーにおいて子どもたちの役割の明確化とともに積極的なプレーへの参加を促す可能性があることを明らかにした。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（その他） 1 芦屋市立朝日ヶ丘小学校指導助言時の冊子	単著	平成 16 年度～22 年度	神戸大学附属住吉小学校 森 4ページ	＊全員の先生方の授業を参加しての感想および助言を文章にまとめ配布した。 ・教室の空間：たおやかな空間を 静かな空間を 整理整頓された空間を 教師が最大の言語環境である ・活動ありきで内容なしの授業にはしない工夫 ・子どもとの関係づくり：つなぐ，もどす，きく 子どもを体に入れる 子どもと面を作る ・同僚性の発揮 ・私のいい授業の創造 ・指示命令のない学校づくり ・縦割り集団の意義
2 兵庫県教育委員会 委託事業 「運動プログラム」 DVD 作成	共著	平成 20 年度	兵庫県教育委員会	体力アップにための動きづくりを創作し，児童に動きを指導し，その動きを収録して兵庫県全小学校に DVD にして配布した。具体的な子どもの姿がわかり好評だった。 編者：兵庫県教育委員会 共著者：平川和文，國土将平，森一弘（他 10 名）
3 三田市教育委員会主催研修会講演時の冊子	単著	平成 21.22 年度	神戸大学附属住吉小学校 森 2ページ 2ページ	研究の進め方 ＊研究の進め方～研究テーマの設定の仕方～ ・児童の実態，教育界の課題，教師の思いを織り交ぜてテーマを設定 ・学級を開くという意味 ・授業化の視点を創り出す ・同僚性の発揮が必要 ＊学習評価の在り方 ・絶対評価と相対評価の違い ・評価規準と評価基準 ・単元目標と本時目標の関係と自己評価の指導
4 芦屋市教育委員会 「社会科副読本作成アドバイザー」	共著	平成 21 年度	芦屋市教育委員会	芦屋市社会科部会作成の社会科副読本のアドバザーとして企画・編集・校正に取り組む。指導内容として，3・4 年生の社会科の指導内容を押さえ内容にするとともに，芦屋市の特色を教材化し，問題解決型の副読本づくりをサポートした。 編者：芦屋市教育委員会、 共著者：伊田義信，金川秀人，俵原正仁，森一弘（他 9 名）

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
5 フラッグフットボール指導テキスト	共著	平成 22 年 7 月	日本フラッグフットボール協会	指導者テキストづくりへの助言 日本フラッグフットボール協会から出版した指導者のためのテキスト 36 ページ（教科書）高橋建夫先生が監修した，学校体育で活用できる練習方法などを示した。オフェンス時の作戦づくりをしていくために，2 対 1，4 対 3，5 対 3，（オフェンスチームの人数を多くする）でパスコース・ランコースを考えていくモデルとなる動きを示した。また，オフェンス時にも相手チームをブロックする動きを示し，フラッグフットボールのオフェンス時の作戦をスモールステップで学べるように工夫した。 共著者名：高橋建夫，森一弘，（その他 5 名）
6 川西市市立久代小学校指導助言時の冊子	単著	平成 23．24 年度	神戸大学附属住吉小学校森 2 ページ	体育授業の進め方　サッカーゲームの単元構想 ・ドリルゲーム，タスクゲームの位置づけ方 ・スペースの利用 ・課題の持たせ方=>振り返りの活用 ・思考力の育成をめざして
7 全国大学体育連合主催 大学体育指導者全国研修会「大学体育 100 号」	単著	平成 24 年 12 月	全国大学体育連合 掲載　p55～p57	大学での体育授業に取り入れるための研修会として初心者への指導の具体を示した。 フラッグフットボールの研修では、基本的な動きからゲーム（戦術）まで網羅的に体験することができました。研修を通して、フラッグフットボールの魅力を体感し、その特性を生かした授業について、実践的な知見を学ぶことができるプログラムを紹介した。

教　育　研　究　業　績　書

平成 29 年　3 月　31 日

氏名　　増井　眞樹

研　究　分　野	研　究　内　容　の　キ　ー　ワ　ー　ド
道徳教育 心の教育	道徳教育の指導法，コミュニケーション活動， 教育相談，学級経営

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　　要
1　教育方法の実践例 ○生徒指導にむけた心の教育研究	平成 19 年 4 月 ～平成 25 年 2 月	兵庫教育大学大学院学校教育研究科教育実践高度化専攻在学中，生徒指導に係る心の教育の研究では，心の仕組みやクリティカルシンキングについて取り組み，人間は先入観や決めつけに影響されて行動することを再認識し，それ以降の生徒指導の根幹をなすものとなった。そのことが，生徒理解を一層深めることとなり，それに基づいた青少年健全育成協議会運営において評価を得ることができた。また，市内中学校の生徒指導担当者への指導・助言を行ってきた。環太平洋大学次世代教育学部「学級経営実践問題」（コア科目，2 年次配当，半期，選択 2 単位）では，実際に具体物を示し，思い込みや潜入観でものを見ることが多いことを体験させた。この研究の講義を通して，学生は，これまで無意識に過ごしてきたことを意識的にみることができ，意欲的に授業に臨むようになり，ものの見方考え方が深まった。
○児童生徒にかかる教育相談の実践研究	平成 19 年 4 月 ～平成 25 年 2 月	兵庫教育大学大学院学校教育研究科教育実践高度化専攻在学中，教育相談の実践研究を行い，予防・開発的プログラムとして，SST やアサーション，ストレスマネジメントの実践を芦屋市内の小・中学校で行った結果，児童生徒の人間関係が和やかになったり自尊感情が高まっていったりする結果を得ることができた。その成果を踏まえて，環太平洋大学次世代教育学部「教育相談の理解」（専門科目，3 年次配当，半期，選択 2 単位）において，学生に実際に，SST やアサーション，ストレスマネジメントスキルを体験させ，意義・方法を理解させるとともに，学生自身の生き方を考えさせたり，より良い生き方に気づかせたりした。また，兵庫教育大学大学院サテライトや適応教室，市立教育文化センターにおいて，児童・生徒及び大学生，中・高等学校教員，中学生の保護者の教育相談を担当した。
○中学校の不登校生徒の教育相談研究	平成 19 年 4 月 ～平成 25 年 2 月	兵庫教育大学大学院学校教育研究科教育実践高度化専攻在学中，教育相談の実践研究を行い，精神分析的理論および自己理論の理解を深め，その他のカウンセリング理論を含めた折衷理論の立場で実践を行ってきた。来談者（不登校生）中心の方針で，生徒の心を開いていった。兵庫県立神出学園において，不登校生の指導にあたり，その後は，芦屋市内の適応教室及び民間のフリースクールにおいて，教育相談に携わってきた。
○参加型の道徳の授業方法	平成 21 年 4 月 ～平成 24 年 9 月	兵庫教育大学大学院学校教育研究科教育実践高度化専攻在学中，公立小・中学校の初任者の学級において，役割演技やエンカウンターの手法を取り入れた授業を展開し，児童・生徒が主体的に他者の気持ちを考え，自分の生き方に活かそうとする成果が得られた。これを踏まえ，平成 24 年からの甲南女子大

		学の「道徳教育の指導法」（専門科目，３年次配当，半期，必修２単位）において，模擬授業として実施したところ,学生が参加型の授業の効果を実感し,学生アンケートの結果からも好評を得ている。
○中学校におけるいじめ，不登校の問題解決研究	平成21年4月～平成25年3月	兵庫教育大学大学院学校教育研究科教育実践高度化専攻在学中,討議活動を中心とする道徳を研究。「意見交換をしながら相互理解を深め，自己の変容を図る」活動,「話し合いによって，道徳的な判断力を高める」活動についての実践研究を行った。実習中学校において,「ディベート」,「モラルジレンマ」授業,「討議活動（ディスクルス）」へ展開した道徳の授業を実践。資料「だれが拾うの」「わたしのせいじゃない」の実践では，無関心や他人のせいにする行動から「いじめ」がおきる，これから考えていきたいという意見が出された。自分の考えを明らかにすることで，考えを深めることができた生徒が見られた。
○話し合い活動を通した学級づくり	平成21年4月～平成25年3月	兵庫教育大学大学院学校教育研究科教育実践高度化専攻在学中,ハーバーマスの「コミュニケーション理論」を研究，児童生徒に対応する「話し合い活動の約束」を検討。公立小・中学校の機能しづらくなった学級において実践したところ,効果が現れ,学級を回復させることができた。とりわけ，中学校におけるいじめや不登校の問題解決のための学級づくりに資することができた。環太平洋大学次世代教育学部「学級経営実践問題」（コア科目，2年次配当，半期，選択2単位）「教育相談の理解」（専門科目，3年次配当，半期，選択2単位）では，内容の指導は勿論のこと,指導においても,「話し合い活動」を取り入れ，話型や「話し合い活動のマニュアル」を示し，学生の意見交流の機会を多く設定した。その結果，現在の児童・生徒を取り巻く教育課題について自分の考えを述べる学生が増加している。個性的な考えや考え抜かれた考えを次の授業で紹介した。
○研究発表会の導入	平成23年9月～平成 24 年11月	環太平洋大学次世代教育学部「学級経営実践問題」（コア科目，2年次配当，半期，選択2単位）では，コミュニケーション力を高めるために，毎時間「話し合い活動」を導入し，意見を述べる機会を設定し，自分の考えを確立するように進めてきた。更に自分の考えを全体（約100人の学生）に対してアッピールするために，発表会を導入した。授業中に各人の課題を明らかにし，解決方法を探るため，提示した資料などに意欲的に質問する学生が見られた。また，授業後に，グループで発表会の準備を進め，途中経過の資料を持って相談に来る学生も見られた。発表の方法は，パワーポイントによる説明の他，クイズ形式や紙芝居等，小・中・高等学校の現場を意識した方法も見られた。
○班活動・授業コメントの導入	平成23年9月～平成 24 年11月	環太平洋大学次世代教育学部「教育相談の理解」（専門科目，3年次配当，半期，選択2単位）では，班編成し，小・中学校の現場の即戦力を視野に入れ，カウンセリングの手法やエンカウンターの実践の演習を行うために，毎時間実施した。班編成していることで，迅速に活動を展開することができる上，100人を超える受講生であるが，班の課題も明らかになり個別指導も可能になった。最初は，活動に消極的であった班も他の班の影響を受け，活動できるようになりつつある。更に，毎時間終了前に授業コメントを書かせることで，活動の意義の確認が可能になった。

○主体的に取り組み道徳の時間の実践指導	平成26年4月～	芦屋市内山手小学校，浜風小学校及び門真市立古川橋小学校における「道徳の時間の指導方法」の校内研修において，児童が主体的に取り組める授業方法について指導助言。 この授業で何をするのか「めあて」を明らかにする。テーマ発問を試みる。 話し合いのルールを児童の合意によって決めさせる。理由を必ず付して発言させる。 他の人の意見を聞きながら，テーマについての自分の考えを明らかにさせる。 問題解決学習の再考として，道徳の時間の指導方法を見直す。
２　作成した教科書、教材		
○話し合い活動の約束	平成20年4月～7月	ハーバーマスのコミュニケーション理論に基づき，意見には必ず理由を付す，理由が正当であれば，その意見に賛成するという考え方を中心にした「話し合い活動の約束」を作成。初任者研修会において，小・中学校の道徳の時間の指導案作成および話し合い活動についての指導を行った。小・中学校現場でも，初任者の学級で活用し，平成24年からの甲南女子大学の「道徳教育の指導法」（専門科目，３年次配当，半期，必修２単位）において，その実践例を示した。
○道徳読み物資料「ストライプ」	平成21年6月	絵本「ストライプ」を道徳授業用資料に編集。児童・生徒の心に響く場面の絵を拡大し，全校朝会の講話に活用。平成24年からの甲南女子大学の「道徳教育の指導法」（専門科目，３年次配当，半期，必修２単位）においては，価値の設定，場面の選択など，自作資料作成の資料として示した。
○兵庫県道徳副読本「こころはばたく」「心きらめく」「心ときめく」「心かがやく」	平成21年8月～平成23年3月	道徳担当代表校長として，兵庫版道徳教育副読本作成検討委員の任に就き,「兵庫についてどのように伝え，心豊かな子どもを育むか」という課題に沿って，小・中学生用資料作成検討の仕事に携わってきた。平成24年からの甲南女子大学の「道徳教育の指導法」（専門科目，３年次配当，半期，必修２単位）においては，道徳教育の資料として活用することの大切さを説諭し，本資料活用を奨励する授業を行ってきた。
３　教育上の能力に関する大学等の評価		
○環太平洋大学学生による授業評価アンケート結果による評価	平成23年9月～平成24年2月	環太平洋大学において毎年実施されている学生による授業評価アンケートによると,本人が担当の「学級経営実践問題」「教育相談の理解」の評価では，4段階評価で4，3を合わせると，9割を占めている。
４　実務の経験を有する者についての特記事項		
○道徳指導案の指導	平成 16 年～平成23年	朝日ヶ丘小学校・山手小学校では，夏休みに道徳の時間の授業研究，指導案の検討を行い，9月の参観日は道徳の時間を公開していた。朝日ヶ丘小学校教頭時代から山手小学校校長を終えるまで，毎年，各学級の道徳の時間の指導案の指導を行った。
○若手教職員の会で講話，指導助言	平成17年4月～平成23年3月	校長１年目より，兵庫県教育委員会からの事業に応募し，助成金を受けて，毎月１回，若手教職員の研修会を開催し，学級開きから，教室経営，学級経営，授業研究，児童理解，保護者対応等について，講話し，若手教職員の資質向上に尽力した。連絡帳への返事の書き方，保護者から苦情が入った時の家庭訪

		問の仕方など具体的に細かく指導を行った。また，話し合い活動を中心とした道徳の時間の指導方法の研修も進めた。学級崩壊などの問題の発生が抑えられた。
○不登校児童生徒及び保護者の教育相談	平成17年5月～20年3月	朝日ヶ丘小学校及び山手中学校の不登校児童生徒，保護者に対する教育相談，担任への助言を続け，家庭訪問，保健室登校，放課後登校などの方策を児童生徒の協力を得て，学校への復帰や高校への入学へと繋いできた。
○地域青少年の非行等問題行動に対する指助言	平成19年5月～現在に至る	中学校校区の校長並びに保護司として，少年院への訪問・面談を行うとともに，毎月2回，保護観察中の少年の指導にあたっている。作文指導や話し合いを続け，再犯防止に努めるとともに自分の生き方を考えさせ，新たな進路に向けて歩ませることができている。また，保護者とも面談し，対象者本人の今後の生活について指導助言している。
○兵庫県夏季道徳研究会分科会指導助言	平成19年8月	第2分科会「豊かな心を育む道徳の時間の指導方法」において，指導助言。
○芦屋市教科等研究会　道徳部会の開催	平成20年5月～平成23年3月	芦屋市教科等研究会　道徳部会長として，新学習指導要領における道徳教育の全体計画及び年間指導計画作成について，各学校の担当者へ指導を行い，本市の道徳教育振興に尽力した。
○市内幼稚園保護者対象に講話	平成21年11月	小学校入学を控えた園児の保護者対象に小学校に向けて，「保護者の心構え，家庭で育てる心」について講話を行った。①様々な友達がいる。違いを認め合えることが大切。②困っている子どもには，そっと手を貸す子どもに育てたい。③子どもは親の姿を手本としている。親がまず，おおらかに他の子どもと接することを実践したい。④自分の子どもに困り感が見られる時は，堂々としていたい。親の不安に対して子どもは敏感である。等の内容であった。
○市内中学校の道徳の時間の指導助言	平成23年4月～平成25年3月	芦屋市学校支援相談員として，市内中学校の道徳の授業の指導案作成指導及び授業後の指導助言を行う。
○甲南女子大学人間科学部総合子ども学科学生対象に講義	平成23年11月	「これからの道徳教育」と題して，甲南女子大学人間科学部総合子ども学科3･4年生の学生を対象に①現在の道徳の時間の指導の課題，②現在の子どもを取り巻く諸問題に対応した道徳教育の在り方について講義を行った。特に，資料分析の重要性とメールを通したいじめの問題に触れた。
○キワニスクラブにおいて，地域における道徳教育の講話及びイベントの審査員	平成23年11月	ライオンズクラブと同じく，世界的に活動している奉仕団体の芦屋支部の会員を対象に，地域における道徳教育（地域社会の中で一般の人が子どもたちを育てる意義）のテーマで講話を行った。人と人をつなぎ，地域の子どもを心豊かに育てるという視点の内容であった。その後，当クラブは，人と人をつなぎ，弱者を支援する企画を募集し助成するイベントを開催。当イベントの審査員として，参加。高校生大学生の3組が受賞された。
○芦屋市立朝日ヶ丘小学校「人権教室」授業者	平成24年1月	第4学年対象 人権啓発資料DVD「プレゼント」 「いじめ」はダメと言える勇気
○芦屋市立精道小学校「人権教室」授業者	平成25年1月	第4学年対象 人権啓発資料DVD「プレゼント」 傍観者もいじめと同じ

○芦屋市立山手小学校道徳授業研修会の講師	平成 25 年 6 月	第 3 学年「やくそくげんまん」 人権教育の視点から
○芦屋市立山手小学校道徳授業研修会の講師	平成 25 年 10 月	第 1 学年「じろうのひとこと」 道徳の時間の展開の工夫
○芦屋市立潮見小学校「人権教室」授業者	平成26年1月	第 4 学年対象 人権啓発資料 DVD「プレゼント」 傍観者もいじめと同じ
○芦屋市立山手小学校道徳授業研修会の講師	平成 26 年 6 月	第 4 学年「なくしたかぎ」 道徳の時間の展開の工夫
○芦屋市立浜風小学校道徳教育研修会	平成 26 年 8 月	第 1～6 学年の 9 月の参観授業に向けた指導 第 1 学年「およげない　りす」 第 2 学年「ぶらんこ」 第 3 学年「言葉のまほう」 第 4 学年「わたしたちのリレー」 第 5 学年「手品師」 第 6 学年「もうこんな思いはいやだ」 テーマ発問を考えた指導（全体指導と学年別指導）
○芦屋市立浜風小学校道徳授業研修会の講師	平成 26 年 10 月	第 1 学年「はしの上のおおかみ」 第 3 学年「窓ガラスの魚」 第 5 学年「最後の贈り物」の授業参観・事後研究会 テーマ発問を考えた指導
○芦屋市立山手小学校道徳授業研修会の講師	平成 26 年 10 月	第 1 学年「どうしたの？」友達を大切にするって・・ テーマ発問を考えた指導
○門真市立古川橋小学校道徳研修会の講師	平成 26 年 11 月	道徳の授業方法について ・人権教育について ・問題解決的学習 ・テーマ発問について
○門真市立古川橋小学校道徳授業研究会の講師	平成27年1月	第 1 学年「ともだちほしいな　おおかみくん」 の授業参観・事後研究会，授業方法講話
○芦屋市立潮見小学校「人権教室」授業者	平成27年1月	第 4 学年対象 人権啓発資料 DVD「プレゼント」 みんな仲良くするにはどうするのか
○芦屋市立浜風小学校道徳教育全体計画作成検討講師	平成27年4月	研究発表会に向けた全体計画作成方針
○芦屋市立浜風小学校全校授業研究会事前研究会の講師	平成27年6月	第 3 学年　研究授業「オオムラサキのたん生」の展開，発問について
○芦屋市立浜風小学校全校授業研究会の講師	平成27年6月	「教科化に向けた道徳の授業づくり」
○芦屋市立朝日ヶ丘小学校授業研究会の講師	平成27年6月	第 6 学年　外国語活動「I can swim～できることを紹介しよう～」 児童理解及び支援の在り方
○芦屋市立浜風小学校授業研究会	平成27年7月	授業参観のための授業展開について
○芦屋市教育委員会経験者研修会講師	平成27年8月	教科化に向けた道徳の授業づくり 「考える・議論する道徳教育」
○芦屋市立浜風小学校夏季道徳授業研修会講師	平成27年8月	平成 27 年度兵庫県教育委員会指定「道徳教育実践研究事業」研究発表会に向けて指導案検討及び道徳授業についての指導助言
○芦屋市立潮見小学校夏季研修会講師	平成27年8月	指導案作成における留意点 評価・教科書・問題解決的学習

○芦屋市立浜風小学校道徳授業指導講師	平成27年9月	参観及び展開について指導助言
○芦屋市立潮見小学校道徳授業全校研究会講師	平成27年9月	事後研究会指導助言
○芦屋市立浜風小学校研究発表会事前研修会講師	平成27年 10月	研究発表会に向けた指導助言
○芦屋市立山手小学校人権教育研究会講師	平成27年 10月	授業参観及び事後研究会における指導助言 第6学年
○平成27年度兵庫県教育委員会指定「道徳教育実践研究事業」研究発表会講師	平成27年 10月	授業参観及び浜風小学校の取組講評 これからの道徳の授業づくり
○法務局人権教室授業者	平成28年1月	芦屋市立潮見小学校第4学年「プレゼント」
○平成27年度芦屋市教育委員会「学力向上研究支援プラン」指定教育研究発表会助言者	平成28年2月	社会科の授業参観及び指導助言
○平成28年度　芦屋市夏季研修講座講師	平成28年8月	道徳教育「教科化にむけて」講話
○一般社団法人兵庫家養育会第3回夏季宿泊研修会講師	平成28年8月	分散会「道徳教育：子どもたちの道徳性-規範意識をどう育てるか」指導助言
○芦屋市立浜風小学校道徳教育研修会	平成28年8月	「これからの道徳教育のあり方」講話 指導案指導助言
○兵庫県教育委員会　道徳の授業スキルアップ支援プログラム　講師	平成28年8月	「『道徳の教科化』について，その意義と変更点」講話
○芦屋市立潮見小学校道徳教育研修会講師	平成28年8月	「指導案作成における留意点」講話
○法務局人権教室授業者	平成29年1月	芦屋市立精道小学校第3学年「プレゼント」
5　その他		

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概　　要
1　資格、免許 小学校教諭一級普通免許状	昭和48年3月	昭四七小一普第944号（兵庫県教育委員会）
中学校教諭二級普通免許状　国語	昭和48年3月	昭四七中二普第1001号（兵庫県教育委員会）
修士（教育実践学）	平成22年3月	兵庫教育大学大学院教育実践高度化専攻 修第7044号 「小学校における道徳性育成のための心の教育総合プラン―『話し合い活動』を通した道徳の授業づくりを核にして」
小学校教諭専修免許状　平二二小専修第１８号	平成22年7月 15日	兵庫教育大学大学院教育実践高度化専攻
2　特許等 なし		
3　実務の経験を有する者について特記事項 ○伝統・文化体験事業の実施	平成18年～ 現在に至る	朝日ヶ丘小学校校長として，文部科学省・兵庫県による「伝統・文化体験事業」を受け，助成金で茶道具を揃え，茶道クラブを設立した。また，第6学年の総合的な学習の一環として，茶道・作法を位置付け，校区内の茶道家元の茶室で所作を体験させ，道徳の時間の深化・統合を進め，「相手を敬う心」の

		育成に努めた。茶道クラブは，現在も継続され，月1回の指導に出向いている。
○学校ボランティアの会設立	平成18年5月～平成20年3月	道徳教育の充実推進のため，朝日ケ丘小学校長として，図書やクラブ，英語、家庭科など種々のボランティアを募集した。更に，教職員との連絡を密にするため，学校ボランティアの会を設立した。道徳の時間の充実とともに，地域における道徳教育の推進の一助にもなった。
○地域における道徳教育の推進	平成19年～現在に至る	山手中学校区における道徳教育の推進充実のために，地域の行事（夏祭り，もちつき大会等）に児童を多数参加させるとともに，問題行動に係る中学校生徒の演奏活動を祭りのステージ部門に参加させたり，会場準備や片づけの手伝いをさせたりして，青少年健全育成に努めた。行事に参加の市長や市会議員から高い評価を得た。その後も各行事に参加協力し，地域の青少年の育成に尽力している。
○総合単元型道徳教育の実践のコーディネート	平成19年5月～ 平成20年3月	第6学年の総合的学習の時間の一環として，本物に出会うことを体験させるため，コーディネートとして教職員を支援した。ジャグリング大道芸人を招き,「何事もあきらめずに練習すれば，できるようになる」という講話と実演をしていただいた。思春期の入り口にいる児童の心をとらえ，保護者に披露する会を児童が主体的に計画することになった。また，茶道家元の茶室で所作を体験し,「人を敬う心」についての話を聞かせていただいた。さらに，日本料理の板前から本格的なだしの取り方を実際に教えていただく中で,「最高のものを作ろうという意志が大切」という話を聞かせていただいた。本物との出会いから，豊かな心の育成に資することができた。
○学校評価にかかるコミュニティースクールの位置付け	平成19年7月～ 平成20年3月	地域コミュニティースクールの代表者とともに近畿内のコミュニティースクール先進校を見学し，自校の学校評価委員会への参加のあり方を検討した。 外部評価を学校運営に反映させるべくシステムの構築を図った。
○授業研究発表会開催	平成21年2月	山手小学校校長として,「自ら考え，学び合い，創り出す子の育成―対話力を育てる授業の創造―」を研究テーマに授業研究発表会を開催。兵庫県下から300人の参加者があった。
○阪神地区道徳教育研究協議会研究大会開催	平成21年10月	山手小学校校長として，自校にて，阪神地区研究大会の会長として大会を開催。阪神間の小・中学校より400人を超える参加者があった。近隣の大学生の参加・事後研究も行った。また，県下の道徳教育研究校からの視察や講師派遣の依頼もあった。
○授業研究発表会開催	平成22年12月	山手小学校校長として,芦屋市基礎学力向上研究指定を受け，授業研究発表会を開催。兵庫県下から300人を超える参加者があった。
4　その他 な　し		

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
1　ワンポイントアドバイスー子どもへの支援の手立てー	共著	平成 19 年 5 月	芦屋市立朝日ヶ丘小学校	発達障害の児童生徒への指導・対応についての具体的な方法についてまとめたものである。現場の子どもの様子と教職員の日頃の対応を一つ一つ詳しく想像し，兵庫県教育委員会の資料を参考に，自校の児童に適応するものを作成。毎年，年度初めに新しい教員に配布し，研修の機会を持ち，児童生徒理解を深めた。 A4 判　　全 41 頁 共著者名　守本明範，増井眞樹 本人担当部分　「学習面」P2～20 を共著 学習面において，読むことが苦手・書くことが苦手・文章の理解が困難・計算が苦手な児童にどのように対応するか。学級経営において，教師が無意識のうちに行いがちな事例を挙げて，説明している。また，児童の困り感がどこにあるか，その原因の分析，好ましい対応例やツール等の項目についても述べている。「発達障害を抱える児童に適応する対応は他の児童にも通用する」という教師としての基本的な児童理解の考え方や具体的な方法についてまとめたものである。年度初めに学級経営の方策についての研修時間を持って活用を図ってきた。
2　心の教育プラン集	共著	平成 22 年 3 月	兵庫教育大学　教職大学院　学校教育研究科教育実践高度化専攻心の教育実践コース	生徒指導上の諸課題に対応できるように教育プログラムの開発を目的に作られたプラン集である。 A4 判　　全 151 頁 編者　　渡邉満 共著者名　長谷部義郎，藤井謙介，増井眞樹，渡辺かおる，泉健一郎，枝川拓矢，垣内志織，佐々木千佳，重近世都子，谷川理恵，西川恵輔，畑本有貴子，益本光章，松永美恵， 本人担当部分　道徳性育成のための心の教育総合プランー「話し合い活動」を通した道徳の授業づくりを核にしてー　(P23～33) を単著 ① 話し合い活動で深まる道徳の時間コールバーグの道徳的規準を活用し，ジレンマ資料を活用 ② 特別活動における児童生徒が育つ話し合い活動 学級会活動の方法をマニュアルを示して指導 ③ 根拠を示す計画案で児童生徒が育つ児童会活動 児童が主体的に考え抜いた計画案作成 ④ 総合的な学習の時間 児童生徒の興味関心を高めるキャリア教育

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
3　＜言葉の力＞を育てる	共著	平成 22 年 8 月	株式会社金子書房	学習指導要領の中で強調されている「言葉の力」を育てることについての論文集。判型 A5 判　全 159 頁 編者　梶田叡一，人間教育研究協議会 共著者名　梶田叡一，加藤明，伊崎一夫，鎌田首治朗，増井眞樹，勝見健史，汐海治美，谷本寛文，中島繁雄，金沢緑，米田豊，浅田匡，松田智子 本人担当部分　「『理由』を考えさせ，よりよい人間関係を構築する話し合い活動」(P47～57) を単著 「『理由』を考えさせた話し合い活動を実現し，よりよい人間関係を構築する学級づくりの実践」とハーバーマスのコミュニケーション理論①無矛盾性・首尾一貫性②誠実性・正当性③強制・抑圧・不平等から守られる。つまり，討議に参加するということは，誠実であること，自らの発話を正当化すること，矛盾したことは言わないこと，他の参加者を排除しないことという考え方に加えて，以下の話型を活用することで，より良い人間関係を構築することができる。 ②　私は～です。理由は～だからです。」 ②「私は賛成です。理由は～だからです。」③「私は反対です。理由は～だからです。」④「私は賛成ですが，理由は違います。～だからです。」⑤「私は反対ですが，理由は違います。～だからです。」 ⑥「私も賛成で，つけたしです。～だからです。」⑦「私も反対で，つけたしです。～だからです。」
4　新しい道徳教育のために	共著	平成 25 年 8 月	株式会社金子書房	道徳の教科化が課題とされる中で，「人格の完成」を目指す教育の中核にあるべき徳育を考える論文集。判型　A5 判　全 149 頁 編者　梶田叡一，人間教育研究協議会 共著者名　梶田叡一，渡邉規矩郎，押谷由夫加藤明，鎌田首治朗，増井眞樹，新川靖，小楠徹，阿部秀高，渡邉満，蔵あすか，オチャンテ村井ロサ　メルセデス 本人担当部分　「今，もとめられる道徳教育」(P69～79) を単著 主体的に取り組む道徳の時間をめざし，初任者に多く見受けられる学級が機能しない状況，1 日の生活に道徳の内容項目を整合させた学級経営計画及び授業の展開方法 ①　めあて「みんなが納得できる考えをつくる」を確認する。 ②　葛藤場面を設定して，話し合いの論点を明確にする。 ③　コの字型の机の配列にするなど，みんなの考えや意見を聞きやすくする。 ④　意見表明カードを置き，自分の考えと比べながら，意見を聞かせる。 ⑤　理由を付して意見を述べさせる。 ⑥　考えの変容も含めて記録させる。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（学術論文） １　小学校における道徳性育成のための心の教育総合プラン－「話し合い活動」を通した道徳の授業づくりを」核にして（修士論文） 『査読付』	単著	平成 22 年 3 月	兵庫教育大学大学院学校教育研究科教育実践高度化専攻	本論文の「学級経営」においては，特別支援の必要な児童生徒への対応を含めた学級づくりの実践研究。支援の必要な児童生徒への対応とともに，学級全体にルールが確立している。「心のしくみがわかるプログラム」では，クリティカルシンキングから身の回りの思い込みに気づき，合理的に物を見ようとする態度や違いを良さと考える姿勢の育成に関する実践研究。「よりよい人間関係の構築」においては，エンカウンターの手法やアサーティブな対応の活動を通してよりよい学級づくりの実践研究。（A４判　86 頁）
２　子どもの心に向き合う道徳の授業づくり	単著	平成 24 年 12 月	環太平洋大学研究紀要第 6 号（P147～152）	道徳の時間の授業は，実施されるようになったが，児童生徒の心にせまる授業は難しい。なんとしてもこの価値を伝えたい，考えさせたいという指導者の思いが弱いようだ。そこで，筆者は，資料選択，価値内容の提示方法，道徳的価値判断基準の検討，話し合い活動の方法について，検討したものである。
３　ユニバーサルデザインを取り入れた学級経営	単著	平成 25 年 3 月	環太平洋大学研究紀要第 7 号（P185～190）	発達障害の児童に対する指導は，他の児童にも通用するのではないかという仮説を立て，ユニバーサルデザインという視点で，学級経営の実践問題を解決していった報告。 ＡＤＨＤと診断された児童の様子とその対応の実際，指導者の考え方の変革，ユニバーサルデザインでどの児童も活動しやすくなった。
４　主体的に取り組む道徳の時間―「人権教室」の実践から―	単著	平成 26 年 9 月	奈良学園大学研究紀要第１集（P199～205）	人権擁護委員として，公立小学校で実施している「人権教室」はややもすれば児童は受け身のまま過ごしてしまう。児童が主体的に取り組める方法を探る。 ① 授業のめあてを明確にする。 ② わかりやすい発問にする。繰り返さない。 ③ 児童にとって「聞く」以外の活動の場を設定する。 ④ 考えるための資料や言葉を用意しておく。 ⑤ 「ふりかえり」を行い，気付いたこと，理解したこと，考えたことを意識させる。 その上で，児童がわかっていることを発問しないということの必要性を述べた。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
5　学校における道徳教育と人権教育	単著	平成 27 年 3 月	「人間教育学研究」第 2 号	道徳の教科化を控え，学校では新しい道徳教育の模索を始めている。これまでの学校における道徳教育を見直す時，人権教育の経緯を整理する必要がある。 ① 学習指導要領が示す道徳教育と「人権教育啓発に関する基本計画」と「人権教育の指導方法等の在り方について〔第 3 次とりまとめ〕」が示す人権教育 ② 道徳教育・人権教育の歴史的経緯から見えること ③ 道徳の時間における道徳教育と人権教育の指導方法の比較 今後の道徳教育の指導については，人権教育の経緯を踏まえ，課題解決学習的方法やテーマ発問などを考慮したものが必要である。
（その他） 1　生徒指導の手引「問題行動の芽を小学校で見つけよう」	単著	平成 21 年 8 月	芦屋市立山手小学校	校内研修会用資料として作成。中学校で問題を起こした生徒の小学校の時の様子とその時の教師の対応を振り返り，中学校での問題行動を防ぐために，小学校でできることはなかったのか検証したもの。 小学校教師の児童への対応の甘さが問題行動の芽を育てたのではないかという意見や中学校における生徒理解が不十分ではないかという意見が出された。 A4 判　4 頁
「研究発表」 1　教育研究発表会開催	—	平成 17 年～平成 19 年	芦屋市立朝日ケ丘小学校	朝日ヶ丘小学校の校長として，毎年 2 月に教育研究発表会を開催。「共に学び，高め合う子」を研究テーマに全学級授業公開し，全国から 500 人を超える参観者を得た。研究発表会当日以外にも全国から校長会や市町教育委員会指導主事，大学生等の見学者を受け入れた。道徳では，市内中学校教師のための参観授業を行い，小・中学校の教師の交流を図り，その指導助言を行った。
2　伝統・文化体験事業の実施	—	平成 18 年～現在に至る	芦屋市立朝日ヶ丘小学校	朝日ヶ丘小学校校長として，文部科学省・兵庫県による「伝統・文化体験事業」を受け，助成金で茶道具を揃え，茶道クラブを設立した。また，第 6 学年の総合的な学習の一環として，茶道・作法を位置付け，校区内の茶道家元の茶室で所作を体験させ，道徳の時間の深化・統合を進め，「相手を敬う心」の育成に努めた。茶道クラブは，現在も継続され，月 1 回の指導に出向いている。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
3　授業研究発表会	―	平成 21 年 2 月	芦屋市教育委員会 芦屋市立山手小学校	山手小学校長として，「自ら考え，学び合い，創り出す子の育成―対話力を育てる授業の創造―」を研究テーマに授業研究発表会を開催。合わせて，芦屋市教育委員会の「基礎学力向上」の指定を受け，国語・算数を中心に全学級の授業公開を行った。兵庫県下から 300 人を超える参加者があった。
4　阪神地区道徳教育研究協議会研究大会開催	―	平成 21 年 10 月	兵庫県教育委員会 芦屋市教育委員会	山手小学校校長時，阪神地区道徳教育研究協議会会長として，本校にて，研究大会を開催。全学級の授業公開を行い，阪神間の小・中学校より 400 人を超える参加者があった。近隣の大学生の参加・事後研究も行った。また，県下の道徳教育研究校からの視察や講師派遣の依頼もあった。
5　奈良学園大学　公開シンポジウム「食と教育」	―	平成 26 年 11 月	奈良学園大学	食育推進基本計画の策定により食育は推進されているが，目標値の達成までは程遠い現状である。教育・健康・文化の視点から次世代を担う子どもの食育に焦点を当てたシンポジウム。教育の面から，学校給食をはじめとする食育について述べる。

教　育　研　究　業　績　書

平成 29年 3月 31日

氏名　阿尾　あすか

研究分野	研究内容のキーワード
国文学	日本中世文学、韻文学

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例		
1）・実際の作品や実践問題、補助教材（作成プリント）を用いた授業 ・パワーポイントや古典文学に関わる映画・芸術を取り入れた講義	平成13年4月1日～平成14年3月31日・平成14年9月1日～平成16年3月31日 平成25年4月1日～平成25年9月30日・平成26年4月1日～平成26年9月21日/平成27年4月1日～平成27年9月23日/平成28年4月1日～平成27年9月22日	東大寺学園中等高等学校において中学二年生の非常勤講師として担当の現代国語・古典文法（週二回）において、生徒の理解程度に合わせ、所定の教科書以外にも、実際の小説や古典作品を教材に用いて文法への関心を深めさせるよう努めた。また、奈良学園中等高等学校国語科の非常勤講師として、高校一年の古文演習、中学一年の読書作文指導（週四回程度）を担当した。古文演習では教科書以外に実践問題や学習内容を補足するプリントを作成し、学習の習熟に努めた。読書作文の授業では教科書は使用せず、実際の小説作品を使用したり生徒の学習状況に合わせたプリントを作成したりして臨機応変に対応した。作文指導においては優れた作文や文章はプリントにて発表し、生徒の学習意欲を高め、全生徒を一定の水準にまで押し上げることができた。 摂南大学の非常勤講師として「古典文学に学ぶ」を、奈良学園大学の講師として「文学（日本の文学／文学の成立と展開）」を担当し、両講義において、作成プリントやパワーポイントを用いて、学生が古典文学の世界をイメージできるようにつとめた。また、古典文学に関わる映画やドラマ、演劇などのDVDを説明紹介し、その一部を鑑賞するなどして、学生が古典文学の世界を具体的にイメージできるようにつとめた。学生からの授業アンケートからも「DVDを見たりして分かりやすかった」との感想を得られた。
2）・中間・期末テストの問題作成 ・学期末テストの作成	平成13年4月1日～平成14年3月31日・平成14年9月1日～平成16年3月31日 平成25年4月1日～平成25年9月30日・平成26年4月1日～平成26年9月21日	東大寺学園中等高等学校国語科の非常勤講師として、中学二年の現代国語・古典文法を、奈良学園中等高等学校国語科の非常勤講師として、高校一年の古文演習、高校二年の現代国語を担当し、中間・期末試験においてはいずれも問題を作成し採点を行った。 摂南大学の非常勤講師として「古典文学に学ぶ」、奈良学園大学の講師として「文学（日本の文学／文学の成立と展開）」を担当し、期末テストを作成実施および採点した。
3）・講義終わりでの小テストや振り返りカードの記入による学生の理解度の把握	平成25年4月1日～平成25年9月30日 平成26年4月1日～平成26年9月21日/平成27年4月1日～平成27年9月23日／平成28年4月1日～平成28年9月22日	摂南大学の非常勤講師として「古典文学に学ぶ」を、奈良学園大学の講師として「文学（日本の文学／文学の成立と展開）」「国文学入門」を担当した。摂南大学では講義終わりに、その単元について小テストを行い、学生の理解度を確認した。理解度が各学生によってばらつきがある場合は、次週講義で再度、その項目について補足説明を行い、学生全員の理解度が一定の程度に到達するように努めた。また、奈良学園大学での両講義では、講義の終わりに振り返りカードに、その回で学んだ知識の確認事項と自由記述の欄を設け、学生の理解度の把握と講義内容に対する要望を確認することとした。その内容は翌週の講義には必ず反映させ、補足説明を行ったり、そこから発展した問題を取り上げて新たな講義展開を行うなどした。また、自由記述に対しては教員のコメントを書き込んで返却したり、講義中に口頭で返答するなどした。

事項	年月日	概　　要
4）・講義中の調べ物、ワークや学生の発言の紹介など学生の参加を取り入れた講義	平成26年4月1日～平成26年9月21日,平成27年4月1日～平成9月23日／平成28年4月1日～平成28年9月22日	奈良学園大学の助教として「文学（日本の文学／文学の成立と展開）」「国文学入門」の講義を担当した。講義中に学生にスマートフォンなどを用いて調べてプリントに書き込ませたり、ワークに取り組ませたりして学生の講義への積極的な参加を促した。また、講義中にワークについて発表させたりするなどして、ほかの学生とも意見が共有できるようにした。
5）・学生のチームワーク、コミュニケーション力、発言力を高める講義	平成26年4月1日～平成27年3月31日・平成27年4月1日～平成28年3月31日・平成28年4月1日～平成29年3月31日	奈良学園大学の助教として「人間教育実践力開発演習」の講義を複数の教員とともに担当し、学生のコミュニケーション力や発言力などを高めるグループワークや輪読などの活動を行った。これらによって学生の人間的成長を促すことができた。
2　作成した教科書，教材		
1）伏見院	平成25年10月1日～平成26年3月31日	京都大学文学部での講義「東洋文化系ゼミナールⅡ」において、副次テキストとして使用した。
3　教育上の能力に関する大学等の評価		
1）奈良学園大学採用にあたっての学長の評価	平成26年4月	過去の業績より、高度な研究知識を持ちながら、柔軟に学生の現状に合わせた講義ができることが窺えた。今後の活躍が期待される。
2）奈良学園大学での授業評価	平成26年4月1日～平成28年9月22日	大学での学生への授業評価アンケートの結果で、講義内容はわかりやすく学習速度も適切であったことが評価された。また、感想としては、「パワーポイントやDVDを使用してわかりやすかった」との声が聞かれた。また、「自分の知りたい深い知識を知ることができた」との声もあった。
4　実務の経験を有する者についての特記事項		
1）大学公開講座講師 ・平成26年度り～べるカレッジ公開講座講師	平成26年9月20日	大学・王寺町共催の公開講座で、「大和の観光名所―古典文学との関わりから」と題して講演した。
2）市民大学講義講師 ・桜井市第三期市民大学講義講師 ・桜井市第四期市民大学講義講師	平成27年7月28日・8月18日・9月8日 平成28年9月19日・10月17日	桜井市教育委員会主催の第三期市民大学の講義講師として、「桜井の観光名所」をテーマに講義した。
3）成人大学学習推進講座講師 三宅町成人大学学習推進講座第２講座講師	平成28年7月16日	「大和の観光名所」として奈良県と古典文学の関わりについて講義予定である。
5　その他		
1）摂南大学での古典文学史の講義	平成25年4月1日～平成25年9月30日	摂南大学経営学部の非常勤講師として、「古典文学から学ぶ」の講義を担当した。学部二回生を対象とし、物語文学を中心とする、古代から平安時代までの古典文学史について講義した。イラストやパワーポイントを多用して、学生の古典文学への興味関心を引き出すこと、古典文学への知識を身につけさせることを目標とし、実際に受講した学生からは「古典文学についての興味がわいた、これからも読んでみたい」などの声が寄せられ、目標を達成することができた。
2）京都大学での和歌史の講義	平成25年10月1日～平成26年3月31日	京都大学文学部の非常勤講師として、リレー講義「東洋文化系ゼミナール」を担当した。学部全体を対象とし、古典文学史、特に勅撰和歌集史について講義した。勅撰和歌集の成立と性格、それに関わる研究を把握し、卒業論文の作成に向けて問題設定ができるように講義を行った。受講学生からのレポートも、勅撰和歌集の個々の性格を理解した上で問題設定を行うことができており効果があった。

事項	年月日	概　　要
3）奈良学園大学での古典文学の講義	平成26年4月1日～平成26年9月21日・平成27年4月1日～平成27年9月23日・平成28年4月1日～平成29年３月31日	奈良学園大学の助教として、「文学（日本の文学・文学の成立と展開）」「国文学入門」の講義を担当した。前者は人間教育学部、ビジネス学部、情報学部を対象とし、物語文学を中心とした古代から中世までの古典文学史について講義した。パワーポイントやプリント、古典にまつわる現代の映画や芸術作品を紹介するなどして、学生が古典への苦手意識を無くし、基礎的な古典文学の知識を取得できるように講義を行った。二年目は講義で取り扱う古典作品に関わる大きなテーマを一つ提示して、その問題について学生に自ら思考させ、作品理解を深める試みを行った。授業アンケートでは「自分の知りたい深い知識を得られた」との意見があった。また、「国文学入門」は人間教育学部の二回生を対象とし、古典文学の中でも和歌についての講義を行なった。中学・高等学校国語教員免許取得のための教職科目であることから、和歌の鑑賞を通して和歌の表現や技巧、歴史に関する基礎的な知識を得られるように工夫した。講義中には、学生に和歌やことば遊びにまつわるワークをさせることで和歌の表現や技巧について実体験できるようにした。学生が受身ではなく主体的に学習に取り組み、知識を身に付ける効果があった。
4）奈良学園大学での人間教育実践力開発演習Ⅰ・Ⅱの講義	平成26年4月1日～平成27年3月31日・平成27年4月1日～平成28年3月31日・平成28年4月1日～平成29年3月31日	奈良学園大学の助教として「人間教育実践力開発演習Ⅰ」および「人間教育実践力開発演習Ⅱ」の講義を複数の教員と共に担当した。学生のコミュニケーション力や発言力を高めるグループワークや輪読などの活動を行った。また、後者の講義では、学生を学校現場へ学校活動支援ボランティアとして派遣し、ボランティア体験学生の事前事後指導にあたった。これらによって学生の人間的成長を促すことができた。

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項

事　　項	年月日	概　　要
1　資格，免許		
1）高等学校教員免許（国語Ⅰ種）	平成12年3月	平11高一種第511号
2）修士（文学）	平成14年3月	京都大学第3427号、論文題目「嵐と鐘―「風雅和歌集」を中心として―」
3）博士（文学）	平成20年3月	京都大学第445号、論文題目「風雅和歌集の歌風と展開」
2　特許等		
なし		
3　実務の経験を有する者についての特記事項		
1）研究プロジェクトでの事務および報告書の編集作成	平成20年7月～平成22年6月	国文学研究資料館において、文学形成研究系の機関研究員として「平安文学における場面生成研究」プロジェクトの研究会の事務及び報告書の編集作成に携わった。なかでも、平成20年度研究成果報告書付録の『源氏物語歌寄せ』については、刊行によって一部に知られるのみであった『源氏物語作例秘訣』との関係についても大きく知られることとなった。
2）科学研究費補助金若手研究（B）「南北朝期和歌における王朝文化の継承と禅文化の流入」	平成21年4月～平成22年9月・平成23年11月～平成24年3月	国文学研究資料館において、機関研究員在籍時の平成21年4月から平成22年6月までの期間および特定研究員在籍時の平成22年7月から平成24年3月までの期間、科学研究費補助金若手研究（B)に採用され、中世和歌とくに京極派和歌の表現に関する研究を行った。途中中断しているのは出産育児によって一年間研究を中止したためである。この間の研究業績は著書が三冊（うち二冊は共著）、報告書が二冊（いずれも共著）、注釈が二本（いずれも共著）、図録が二冊（いずれも共著）である。

事項	年月日	概　　要
3）資料展示の企画参加および展示作業	平成21年11月～平成23年12月	国文学研究資料館において、文学形成研究系の機関研究員として「平安文学における場面生成研究」プロジェクトの特別展示「物語の生成と受容」（平成21年11月9日～11月23日）の企画に参加、展示にもかかわった。また、特別展示「近衛家陽明文庫　王朝和歌文化一千年の伝承」（平成23年10月8日～12月4日）においては企画に参加、立ち上げの事務手続きに加わり、陽明文庫展研究会のメンバーとしても展示資料の調査、選定に関わった。同館企画連携部の機関研究員としては、初学者向けの展示「和書のさまざま」（平成22年4月15日～6月18日）の展示作業を担当した。
4）日本学術振興会特別研究員（RPD）「持明院統派皇族間での宮廷文化の相承と変容―京極派歌人伏見院を中心に」	平成24年4月～平成26年3月	平成24年4月から平成25年3月の期間は信州大学教育学部に、平成25年4月から平成26年3月までの期間は京都大学大学院文学研究科に所属して、日本学術振興会特別研究員（RPD）としての研究活動を行った。この間の業績は、査読付論文が一本、注釈が四本、辞典の項目執筆が一冊（共著）である。
5）韓国学中央研究院「2012年度グローバル時代韓国的価値と文明研究」採択プロジェクト、「高麗時代の公共性」における共同研究	平成24年8月～平成25年11月	韓国学中央研究院の採択研究プロジェクトにおいて、日本側の共同研究者として参画している。韓国で行われる学術会議に参加、発表を行い、報告書に論文を提出する。この間の業績は、研究発表および討議が二回である。平成27年（2015）10月に刊行される予定の報告書にも、論文を二本掲載予定である。
6）科学研究費補助金基盤研究（B）「中世近世国文学における中国文学受容の研究―和漢聯句と抄物を中心として―」	平成24年4月～平成29年3月 （平成27年4月より参加）	京都大学大学院文学研究科の大谷雅夫教授を中心とする研究課題において、研究分担者として参加している。中世近世日本の禅宗寺院を中心として作られた和漢聯句および抄物については、解明されていない部分も多い。本研究課題では和漢聯句の紹介と翻刻および内容の検討に参加し、平成29年度の刊行を目指す和漢聯句の書籍の翻刻作業を分担する予定である。
7）科学研究費補助金若手研究（B）「鎌倉時代後期の宮廷における王朝文化継承と新文化創出の再検討―伏見院の宮廷を中心に」	平成27年4月～現在に至る	研究代表者として科学研究費補助金を獲得。平成24年度～平成26年度に行った、日本学術振興会特別研究員（RPD）の研究課題の研究内容を深化かつ継続するものである。伏見院の自筆の古筆資料の整理および和歌表現の検討を行ない、歌人としての伏見院像および伏見院宮廷の文化を明らかにしようとするものである。
8）科学研究費補助金挑戦的萌芽研究「宗教系団体等が所蔵する幻燈史料の記録化と分析による道徳観成立へのアプローチ」	平成27年4月～現在に至る	奈良学園大学人間教育学部山本美紀教授を研究代表者とする課題において、研究分担者として参加している。当該の研究課題は、教会・寺社等の宗教系団体や史料館に残る幻燈史料のうち道徳的・倫理的内容を中心にデータベース化し、他分野の研究にも活用できるようにすること、また、近代から現代日本に至るまでの道徳観の変遷と成立について明らかにすることを目的としている。研究分担者として、当時の史料のデータベース化および目録化を担当する。
9）科学研究費基盤研究（C）「中世における漢故事のパラフレーズ」	平成28年4月1日～現在に至る	南山大学森田貴之准教授を研究代表者とする課題において、研究分担者として参加している。当該の研究課題では中世和歌における漢故事摂取について検討する予定である。
4　その他		
1）科学研究費補助金若手研究（B）	平成21年4月～平成22年9月・平成23年11月～平成24年3月	「南北朝期和歌における王朝文化の継承と禅文化の流入」（21720084）代表阿尾あすか

事項	年月日	概　　要
２）日本学術振興会特別研究員奨励費（RPD）	平成24年4月～平成26年3月30日	「持明院統派皇族間での宮廷文化の相承と変容―京極派歌人伏見院を中心に」（人文学・40200）
３）韓国学中央研究院「2012年度グローバル時代韓国的価値と文明研究」採択プロジェクト	平成24年8月～平成25年11月	「高麗時代の公共性の研究」１年目：鎌倉時代後期の宮廷文化と公共性、2年目：天皇の記録を通してみた中世的公共性
４）科学研究補助金若手研究（B）	平成27年4月～現在に至る	「鎌倉時代後期の宮廷における王朝文化継承と新文化創出の再検討―伏見院の宮廷を中心に」（15k16691）代表阿尾あすか
５）科学研究費補助金挑戦的萌芽研究：分担	平成27年4月～現在に至る	「宗教系団体等が所蔵する幻燈史料の記録化と分析による道徳観成立へのアプローチ」（15k13194）代表山本美紀
６）学術雑誌の学会時評における評価	平成16年5月・平成17年11月・平成26年5月	学術雑誌の学会時評において下記のように三度、論文が評価された。 『国文学　解釈と鑑賞』平成16年5月号掲載の「学会時評」、中世の項目において、論文「「壁に消えゆく」考―京極派和歌表現の一展開―」（『国語国文』72巻10号）が取り上げられ、「その機能にまでも考察を掘り下げて、出色の歌語論となっている。」との評価を得た。 『国文学　解釈と鑑賞』平成17年11月号の「学会時評」中世の項目において、「炊煙の歌―『風雅和歌集』雑中を中心として」（『文学』6巻4号）が取り上げられ、その内容について「理想郷にある隠者の存在証明を鋭く見て取っている。」との評価を得た。また、『リポート笠間』56号（平成26年5月・笠間書院）の学会時評「和歌」の項目において、論文「東京国立博物館蔵「伏見院詠草」の性格―合点・丸印の意味するもの―」（『京都大学国文学論叢』30号）が「古筆資料の博捜と考証から新たな見解が提示されている」研究として紹介・評価されている。
７）過去に申請者が所属した国文学研究資料館でのプロジェクトの代表責任者の評価	平成23年5月20日	申請者は同館の「平安文学における場面生成研究プロジェクト」及び「陽明文庫展示研究プロジェクト」に機関研究員として従事し、主に研究や、研究成果報告書の編集作業及び研究会の運営の補助などを行っていた。前者のプロジェクトでは平安物語文学という申請者の専門外の分野を中心とする活動であったものの、中近世和歌に関する広範な知識を生かし、後世における平安物語文学享受について様々に研究提起してプロジェクトに貢献するところが大きかった。企画展示室にも勤務し、展示作業にも関わっていた。アルバイト学生などの協力者との関係も良好であり、業務と両立して自分の研究も行っていた。 今は古典研究者が減少する傾向にあるので、次代に向けて古典文化を担っていく者が積極的に求められる。申請者は今後さらに優秀な研究者として成長していく人物であるので、是非申請をお願いしたい。
８）日本学術振興会特別研究員（DC2)の受入研究者の評価	平成23年5月21日	申請者の持つ専門的知識・技量については、京極派和歌はもちろん中世韻文学に関してもその知識は広範に及ぶ。また、前の勤務先において、平安王朝物語に関わったプロジェクトに参加していたこともあり、物語文学に関する知識も豊富である。表現研究だけではなく、資料研究も手堅く押さえられているところが、申請者の研究者としての強みである。

事項	年月日	概　　要
９）日本学術振興会特別研究員（RPD)の平成24年度受入研究者の評価	平成24年11月26日	当該教員は、伏見院の和歌における『万葉集』の歌句表現摂取について考察を進めている。京極派和歌と『万葉集』の関わりについては指摘はされてきたものの、本格的に表現摂取について考察したものは従来の研究ではまだなかった。応募者にはほかの研究テーマもあり、論文になるのは来年になりそうだが、必ず新たな指摘があるものと期待している。応募者のもう一つの研究テーマとして、京極派の歌学、歌論についての考察があるが、これも近年では歴史的時代的背景からも問題を掘り下げようとしており、視野を広げている。応募者は日本史の若手研究者たちと共に『花園天皇宸記』の解釈研究や、韓国の韓国／東洋政治思想史学会との共同研究も行っており、国文学の枠内を超えた研究ができるものと今後期待する次第である。
10）日本学術振興会特別研究員（RPD)の平成25年度受入研究者の評価	平成26年4月18日	研究員は近年、京極派歌壇の指導的存在であり、皇統である持明院統の領袖でもあった伏見院の歌人像を再構築するという大きなテーマに精力的に取り組んでいるが、当該年度において発表した論文、「東京国立博物館蔵「伏見院詠草」の性格―合点・丸印の意味するもの―」は、伏見院の歌人としての実像を知るための大きな手がかりとなるものである。同詠草については、近年その存在が発見され、いまだその性格が明らかとなってはいなかった。研究員は合点や丸印といった符号の付いた和歌について詳細な分析を行うことで、同詠草の実体を明らかにすることに成功した。同詠草の性格が判明することで、伏見院の歌風形成の過程がより明確なものになることが予想される。また、韓国の研究者との共同研究において、文学の立場から中世日本社会の「家」が公共的存在であることを提起しているが、これも中世の天皇家および歌の家と密接に関わる問題であり、持明院統皇統の性格を考える上で大変重要な研究と思われる。

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（著書）				
１．『中世近世和歌文芸論集』龍谷叢書15	共著	平成20年9月	思文閣出版	関西の研究者を中心とした、中世近世和歌に関する論文集。 A5判、401頁 編者：日下幸男 共著者：安井重雄・阿尾あすか・長谷川千尋・長谷川薫・大谷俊太・岡本聡・藤本孝一・海野圭介・小高道子・日下幸男・西田正宏・神作研一・盛田帝子・久保田啓一・中川豊・加藤弓枝・万波寿子 本人担当部分「風雅和歌集における烏―京極派的歌材をめぐる一考察」(p24-49) 「風雅和歌集における烏―京極派的歌材をめぐる一考察」を単著 『風雅和歌集』では烏を題材とした歌が他の勅撰集と比べ突出して多く入集している。烏は和歌や王朝文学の世界では雅的な物とみなされなかったが、漢詩文の世界では詩的世界を形成しうる題材として深く浸透している。『風雅和歌集』の烏の歌も漢詩文から表現を摂取することで抒情性を持って詠むことが可能となった。一方で、漢詩摂取と共に、『万葉集』や王朝文学の要素を和歌に取り入れており、漢詩的題材の烏を和歌的素材へと変質させる工夫を行っている。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
２．伏見院	単著	平成23年6月	笠間書院	中世の京極派和歌の庇護者であり、代表歌人でもある伏見院の和歌三十七首の解釈を通じて、院の和歌表現の特徴と和歌思想について論じた。伏見院の和歌は、王朝古典文学や漢詩文を積極的に摂取した表現、独自の思想に基づいた繊細な自然描写が特徴である。京極派和歌は、法相宗の唯識思想を基としているが、院の場合はそこに神道的な思想が加わる。伏見院には強烈な正統意識と隠遁願望があり、院の思想や歌風もこうした内面に由来すると思われる。 A６判・全113頁
３．『鳥獣虫魚の文学史　虫の巻』日本古典の自然観３	共著	平成24年1月	三弥井書店	鳥獣虫魚のうち、虫を取り上げ、虫が日本古典文学においてどのように描かれてきたかを様々な視点から論じ、そこから日本人の自然観をあぶりだすことを目的とした論文集。 A5判、373頁 編者：鈴木健一 共著者：鈴木健一、田中仁、室田知香、大井田晴彦、西山秀人、坪井陽子、横田隆志、植木朝子、高柳祐子、山本啓介、横山太郎、天野総一、阿尾あすか、有賀夏紀、金子俊之、牧藍子、牧野悟資、井上泰至、小財陽平、吉丸雄哉、佐藤至子 本人担当部分：「蚊遣火を詠む和歌―「雅」と「俗」のはざまで」（p214-229） 「蚊遣火を詠む和歌―「雅」と「俗」のはざまで」を単著 蚊遣火は現代俳句では季語となっているが、庶民生活に密着した素材であるため、和歌では配慮して詠む必要があった。即ち、喩えや景観の一点景として詠むなど、卑俗な生活実態の部分は切り捨てて朧化して詠まねばならない。蚊遣火は元来「俗」の性質を内包しているため、美を象徴化してゆく和歌では、常に「雅」「俗」のバランスに注意を払わなければならない。だが、「俗」の立場から「雅」をめざす俳諧には適しており、俳句的題材であったと言える。
４．『中世詩歌の本質と連関』中世文学と隣接諸学６	共著	平成24年1月	竹林舎	中世和歌における諸問題を扱った論文集。 A5判、全597頁 編者：錦仁 共著者：阿尾あすか、赤木俊介、植木朝子、錺武彦、加藤孝男、久保木秀夫、小林一彦、小山順子、志立正知、鈴木元、寺島恒世、内藤まりこ、中村文、中村成里、錦仁、久野俊彦、平田英夫、平林香織、堀川貴司、松本麻子、松本郁代、丸山陽子、安井重雄、山田尚子、吉野朋美 本人担当部分：「歌の家の継承と実践―京極為兼・二条為世を中心に―」（p511-535） 「歌の家の継承と実践―京極為兼・二条為世を中心に―」を単著 鎌倉時代後期、歌の家である御子左家は京極、二条の二家に分裂し、双方が正統性を主張した。京極為兼と二条為世の歌論を検討すると、為兼は詠歌態度についての庭訓を、為世は歌を詠む実践面での庭訓をそれぞれ継承している。両者は歌合の判定においても、継承した家伝に忠実であった。歌学歌論の宗教的傾向を深化させたのが京極派、「道」の伝授を庶幾してゆくのが二条派であり、両者は中世文化を形成する表裏一体と捉えうる。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
５．高麗時代の公共性　１	共著	平成28年6月	韓国学中央研究院出版部	韓国学中央研究院のプロジェクト「高麗時代の公共性」についての研究をまとめた報告書。 全207頁 編者：李禧柱 共著者：李禧柱，申福龍，李南姫，丁善溶，尹大植，魯炳浩，永原慶子，阿尾あすか 「日本宮廷文学の公共性ー「勅撰和歌集」という公共事業」（韓国語による翻訳）pp. 191-pp. 207 勅撰和歌集21代集の撰集作業を公共事業として捉えた時、それは日本の政治とどのような影響関係にあったのかを概説的に論じた。通史的に見た場合、勅撰和歌集には二つの大きなタームポイントがあった。それは撰集作業が国家事業として意識された『新古今和歌集』、武家の政権が京都に移った時に編纂された『新千載和歌集』である。中世からの勅撰和歌集事業は、武家と天皇家との共同政権のバランスの上に成り立っており、そのバランスが大きく武家に傾いた時に破綻を迎えることを指摘した。
６．高麗時代の公共性２	共著	平成28年6月	韓国学中央研究院出版部	韓国学中央研究院のプロジェクト「高麗時代の公共性」についての研究をまとめた報告書。 全226頁 編者：李禧柱 共著者：李禧柱，申福龍，李南姫，丁善溶，尹大植，魯炳浩，永原慶子，阿尾あすか 「「家」という日本の中世的公共性についてー「歌の家」を中心にー」（韓国語による翻訳）pp. 203-pp. 226 「公共性」という言葉の定義に立ち戻った時、日本の中世の社会は「家」の結合体で成り立っており、「家」そのものが公共性を帯びたものであったといえる。本論ではその見解に立って、中世の歌の「家」の継承のシステムについて概説した。
７.日記で読む日本史１　日本人にとって日記とは何か	共著	平成28年7月31日	臨川書店	歴史や文学における日本の日記文化について論じた論文集。 編者：倉本一宏 倉本一宏、松薗斉、石田俊、佐野真由子、奈良岡聰智、久富木原玲、カレル・フィアラ、井上章一、富田隆、阿尾あすか 「日記と和歌―『中務内侍日記』を例に」（pp201－230） 中世の女流日記『中務内侍日記』について取り上げ、同日記に果たす和歌の役割について論じた。同日記における和歌は、作者のつかえた伏見院の侍臣、女房達が、天皇に仕える者の集団としての精神的紐帯を確かめるツールとして機能している。結果的には私的、文芸的な記事とされる箇所においても、和歌は常に天皇を称揚するためにあるのであり、これまで分裂的と評価されてきた同日記ではあるが、和歌から読み解くと常に伏見天皇称揚ということで一貫しているのである。
（学術論文）				
１．花園院と紀貫之―『風雅和歌集』所収の貫之歌を中心に―（査読付）	単著	平成19年11月	『国語国文』（京都大学）76巻11号p1－16	紀貫之は中世の二条派和歌では評価が低く、勅撰十三代集でも京極派の歌集のみが貫之を厚遇している。特に『風雅和歌集』では貫之が藤原俊成に並ぶ歌人として重視されている。それは貫之の独自性の強い語句や発想、表現や観念的な歌風が、後期京極派指導者の花園院の嗜好と一致していたことに起因すると思われる。花園院の和歌観は、初期の京極派に近く、観念志向が強い。観念志向の行き過ぎが、後年の京極派の行きづまりへと結びついたと考えられる。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
２．風雅和歌集の歌風と展開（博士論文）	単著	平成20年3月	京都大学	『風雅和歌集』の文学史における歌風の評価は「繊細閑寂化」と「内観性の沈潜」にあるが、この二つの傾向については、後期京極派和歌の指導者で『風雅集』監修者であった花園院の意向が大きい。同院には禅宗への傾倒と共に深まった隠遁志向と、為政者としての儒教的価値観、政道思想による理知的傾向がある。そのような院の嗜好によって隠遁詠は漢詩文の間適を摂取した特異な性質を帯び、内観的な詠歌は「道理」を重んじる理論的なものとなっている。院には強い隠遁願望と為政者としての自覚が常にあった。 A4判、全140頁
３．東京国立博物館蔵「伏見院詠草」の性格―合点・丸印の意味するもの―（査読付）	単著	平成25年9月	『京都大学国文学論叢』（京都大学）30号p37－54	東京国立博物館蔵「伏見院詠草」は近年伏見院自筆の歌稿と紹介された資料であるが、永仁の勅撰の際の撰集資料とされる「松木切」の一部と推定されたものの、その和歌表現や資料の性格については不明であった。合点・丸印の付いた和歌の表現を中心に検討を行ったところ、それら記号の付いた継紙には京極派歌風成立以前の表現が見られ、記号のない継紙は純然たる京極派歌風の歌がほとんどであった。詞書も勘案すると、和歌に合点・丸印の付いた和歌は永仁期から京極派歌風確立以前の嘉元期以前までの詠草をまとめたものであり、合点・丸印のない継紙に関しては嘉元期以後のものであることが判明した。同詠草は「松木切」以後も、様々な段階でまとめられた伏見院の歌集の草稿の一部が切り継ぎされたものと考えられる。
４．日本文化における教養教育としての「古典文学」利用―『大和名所図会』での名所規定を例として―（査読付）	単著	平成26年12月	『人間教育学研究』（人間教育学会）2号, pp（一）～（一三）	近世の名所記『大和名所図会』は、先行する名所記、植村禹言の『広大和名勝志』の記述を加筆修正する形で著されているが、古典文学に関わる名所の引用等においては独自の選択が見られる。筆写の秋里籬島は物語よりも和歌を優先的に引用しており、挿絵に和歌や俳諧を多く添えることからも、読者が現地に赴いて詠行ないし吟行することを想定して同書を編集していることが窺われる。同書からは当時の文人層の基礎教養が和歌にあったことが窺われる。
５．日本文学における母性観―今後の教育に資する一考察―	単著	平成27年12月	『人間教育学研究』（人間教育学会）3号pp.（一）～pp.（一五）	平安時代から近現代までの文学において、母性がどのように描かれているかを概観し、各時代での母性観を考察した。現代日本にも根強く見られる抱擁的・自己犠牲的な母親の愛情が、望ましい母性として描かれるのは、明治・大正時代に完成した良妻賢母思想以降である。近代以前は母性は神聖視されたものではなく、親として子どもに衣食住に不自由させず安定した愛情を与えていれば問題ないものとされていた。家族形態も多様化した昨今、母性の在り方を考える上で近代以前の日本の母性観には示唆すべき点が多いと考えられる。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（その他）				
「報告書」				
１．『平成20年度研究成果報告書　物語の生成と受容④』	共著	平成21年3月	国文学研究資料館	国文学研究資料館の「平安文学における場面生成研究」プロジェクトの平成20年度の研究成果をまとめた報告書。 A5判、全294頁 編集：「平安文学における場面生成研究」プロジェクト 共著者：高橋由記、江戸英雄、萩野敦子、阿尾あすか、森田直美、中村康夫 本人担当部分「正徹の『源氏物語』摂取について」（p238-263） 「正徹の『源氏物語』摂取について」を単著 室町時代の歌僧、正徹は、心酔していた藤原定家が『源氏物語』を摂取して歌境を開拓したことに影響を受け、自身も源氏摂取歌を多く残している。しかしながら、物語世界の延長上にある王朝文化の中に生きた定家と、室町の地下歌人である正徹とでは摂取の仕方が異なる。定家は他の王朝物語や和歌も受容して複合重層的な物語的世界を和歌に作りだすが、正徹の場合は摂取した物語場面の世界そのものを和歌で表そうとし、連歌に近い詠歌方法となっている。
２．『平成20年度研究成果報告書　源氏物語歌寄せ』	共著	平成21年3月	国文学研究資料館	国文学研究資料館の「平安文学における場面生成研究」プロジェクトの平成20年度研究成果報告書の付録。江戸時代の歌学書『源氏物語歌寄せ』の翻刻と解題。 A5判、全219頁 編集：「平安文学における場面生成研究」プロジェクト 共著者：平安文学における場面生成研究プロジェクト、阿尾あすか 本人担当部分：「『源氏物語歌寄せ』解題」（p298-218） 「『源氏物語歌寄せ』解題」を単著 『源氏物語歌寄せ』は存在自体は既に紹介されていたが、その資料の性格については明らかにされてこなかった。本書と関係の深いものに、江戸時代中期の堂上派歌人、有賀長伯・長因親子が編纂した『源氏作例秘訣』がある。調査したところ、当該書は作例秘訣の祖本、それも編集の途上にあったものを借り出して写し、編者の使い勝手のよいように独自の改訂を加えたものであったことが明らかとなった。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
３．『平成21年度研究成果報告書　物語の生成と受容⑤』	共著	平成22年2月	国文学研究資料館	国文学研究資料館の「平安文学における場面生成研究」プロジェクトの平成21年度の研究成果をまとめた報告書。付録として平成21年11月に国文学研究資料館特別展示資料の調査報告と資料解説を付ける。 A5判、全235頁 編集：「平安文学における場面生成研究」プロジェクト 共著者：中村康夫、伊藤鉄也、江戸英雄、阿尾あすか、吉田小百合、岩城賢太郎、小川陽子、加藤昌嘉、金光桂子、高橋由記、中川照将、萩野敦子、松岡智之、横井孝、横溝博、安藤徹、武井協三、森田直美 本人担当部分：「一滴集」（p181-183）、「源氏物語わかくさ」（p184-185）、「詠源氏物語和歌」（p186-189）、「源氏物語歌寄せ」（p190-193） 平成21年11月に国文学研究資料館特別展示で展示した、同館所蔵本についての調査報告及び資料解説。各資料の解説は以下の通り。『一滴集』は正徹の著した『源氏物語』注釈書で、国会図書館蔵本の謄写本である。注釈のスタイルや本問引用から、正徹が旅先での『源氏物語』の講釈の急な要請に備えて書かれたものと推定される。『源氏物語わかくさ』は『源氏物語』の和歌だけを書き抜いた抜書で、孤本である。一部の古活字版や無跋無刊記本に見える特殊な巻名表記があるのが特徴である。『詠源氏物語和歌』は『源氏物語』の巻名を題とする定数歌で、堀田正睦主催、松平定信ら大名幕臣、古学派の歌人が参加する。屋代弘賢所持本を書写した本をさらに書写したもの。『源氏物語歌寄せ』は『源氏物語』に因んだ和歌の用例とその典拠となった『源氏物語』の本文を書き抜いた江戸中期頃の歌書であり、有賀長伯・長因親子編纂の『源氏作例秘訣』の祖本を編集途中で書写、改訂をくわえたものと推測される。
４．陽明文庫王朝和歌集影	共著	平成24年1月	勉誠出版	平成23年の国文学研究資料館の特別展示「近衛家陽明文庫　王朝和歌文化一千年の伝承」の図録をもとに索引を付すなどして編集し、単行本化したもの。国文学研究資料館特定研究「陽明文庫における歌合資料の総合的研究」（平成21年～平成23年度　代表者・中村康夫）の研究成果報告書でもある。 A4判、全252頁 編者：国文学研究資料館 共著者：阿尾あすか、赤澤真理、海野圭介、久保木秀夫、寺島恒世、中村健太郎、中村康夫、名和修、後藤祥子、杉本まゆ子、日比野浩信、舟見一哉、山本登朗 本人担当部分：「詩懐紙（賦花迎文翰賓）」、「和歌懐紙（見花・折花）」、「和歌懐紙（梅近聞鶯）」、「広沢切（伏見院御集断簡）」、「和歌巻」、「和歌懐紙（侍行幸聚楽第）」、「詠草（立待月・渡月・月前松・寄月旅）」、「光厳院三十六番歌合」 室町後期から近世初期にかけての近衛家歴代当主の懐紙、持明院統派天皇の和歌巻を中心に資料解説を行った。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
「注釈」				
１．『花園天皇日記（花園院宸記）』正和二年二月記（二）―訓読と注釈	共著	平成23年3月	『花園大学国際禅文化研究所論叢』（花園大学）6号p175-222	『花園天皇日記（花園院宸記）』正和二年二月十一日～三十日条の本文について、宮内庁書陵部のコロタイプ複製を底本として、翻刻、訓読、注釈を加えたものである。 共著者：阿尾あすか、坂口太郎、中村健史、長村祥知、花田卓司、横澤大典、芳澤元、米澤隼人 本人担当部分：二月十七日条 十七日条の翻刻、訓読、注釈を担当した。同日条では宮中行事についての注釈を主に加えたが、鎌倉後期の政治情勢を踏まえて記述した。
２．『花園天皇日記（花園院宸記）』正和二年三月記―訓読と注釈	共著	平成24年3月	『花園大学国際禅文化研究所論叢』（花園大学）7号p241-304	『花園天皇日記（花園院宸記）』正和二年三月記の本文について、宮内庁書陵部版の自筆本コロタイプ複製を翻刻し、訓読・注釈を加えたもの。 共著者：阿尾あすか、坂口太郎、中村健史、長村祥知、花田卓司、横澤大典、芳澤元、米澤隼人 本人担当部分：三月二十二日条 観音院の仏事、観音院灌頂についての記事を中心に訓読・注釈を行った。
３．『花園天皇日記（花園院宸記）』正和二年四月記―訓読と注釈	共著	平成25年3月	『花園大学国際禅文化研究所論叢』（花園大学）8号	『花園天皇日記（花園院宸記）』正和二年四月記の本文について、宮内庁書陵部版の自筆本コロタイプ複製を翻刻し、訓読・注釈を加えたもの。 共著者：阿尾あすか、坂口太郎、中村健史、長村祥知、花田卓司、横澤大典、芳澤元、米澤隼人、窪田頌 本人担当部分：四月十二日条、二十一日条、二十二日「衆議判」の項、二十八日条 二条為基や京極為子の略伝、和歌に関する記事を中心に訓読・注釈を行った。
４．『花園天皇日記（花園院宸記）』正和二年五月記（一）―訓読と注釈	共著	平成26年3月	『花園大学国際禅文化研究所論叢』（花園大学）9号	『花園天皇日記（花園院宸記）』正和二年四月記の本文について、宮内庁書陵部版の自筆本コロタイプ複製を翻刻し、訓読・注釈を加えたもの。 共著者：阿尾あすか、坂口太郎、中村健史、長村祥知、花田卓司、横澤大典、芳澤元、米澤隼人、窪田頌 本人担当部分：五月十五日条 月蝕および月蝕に対応する宮廷行事に関する記事を中心に訓読・注釈を行った。
５．『花園天皇日記（花園院宸記）』正和二年五月記（二）―訓読と注釈	共著	平成27年3月	『花園大学国際禅文化研究所論叢』（花園大学）10号	共著者：阿尾あすか、小橋慧子、坂口太郎、中村健史、長村祥知、花田卓司、横澤大典、芳澤元、米澤隼人、窪田頌 本人担当分：五月二十九日条 花園院の日常生活に関する記事を中心に訓読・注釈を行った。
６．『花園天皇日記（花園院宸記）』正和二年六月記―訓読と注釈	共著	平成28年3月	『京都大学国文学論叢』（京都大学）35号	編集：花園天皇日記研究会　共著者：坂口太郎、中村健史、阿尾あすか、長村祥知、花田卓司、横澤大典、芳澤元、米澤隼人、窪田頌、三角健、水嶋彩乃、田村亨 pp.113-pp.145　本人担当箇所：六月四日・五日条 京極為兼に関する記事を中心に訓読・注釈を行った。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
「翻刻」				
1．「源氏物語歌寄せ翻刻」	共著	平成21年3月	『平成20年度研究成果報告書　源氏物語歌寄せ』（国文学研究資料館）p1-197	国文学研究資料館蔵『源氏物語歌寄せ』の翻刻。 共著者：阿尾あすか、岩城賢太郎、江戸英雄、小川陽子、金光桂子、高橋由記、中川照将、中村康夫、萩野敦子、森田直美、横井孝、横溝博 本人担当部分：p1-26
2．「『蒙求和歌』第三類本本文〈二〉―恋部から述懐部まで―」	共著	平成25年3月	『京都大学国文学論叢』（京都大学国文学研究室）28号	『蒙求和歌』本文、三類本に分類される山口県立山口図書館蔵本を底本とし、実践女子大学図書館山岸徳平文庫蔵本と対校させながら翻刻を行ったもの。 共著者：阿尾あすか、小山順子、竹島一希、蔦清行、中島真理、濱中祐子、森田貴之、山中延之 本人担当部分：81～90 『蒙求和歌』恋部前半、「班女辞輦」から「宋女愈謹」までの翻刻を行った。
3．「『蒙求和歌』第三類本本文〈三〉―哀傷部から雑部まで―」	共著	平成26年3月	『京都大学国文学論叢』（京都大学国文学研究室）29号	『蒙求和歌』本文、三類本に分類される山口県立山口図書館蔵本を底本とし、実践女子大学図書館山岸徳平文庫蔵本と対校させながら翻刻を行ったもの。 共著者：阿尾あすか、小山順子、竹島一希、蔦清行、中島真理、濱中祐子、森田貴之、山中延之 本人担当部分：151～160 『蒙求和歌』、「墨子悲糸」から「史魚黜殯」までの翻刻を行った。
4．『蒙求和歌』片仮名本(第二類本)第二種本 本文	共著	平成28年9月	京都大学國文學論叢（京都大学国文学研究室）34号	共著者：阿尾あすか、小山順子、竹島一希、蔦清行、南谷静香、濱中祐子、森田貴之、山中延之 本人担当部分：p107-113
「図録」				
1．『特別展示「物語の生成と受容」』	共著	平成21年11月	国文学研究資料館	平成21年11月9日～23日の期間、国文学研究資料館で開催した特別展示の解説図録。 A4判、全49頁 編者：国文学研究資料館「平安文学における場面生成研究」プロジェクト 共著者：中村康夫、伊藤鉄也、江戸英雄、阿尾あすか、吉田小百合、岩城賢太郎、小川陽子、加藤昌嘉、金光桂子、高橋由記、中川照将、萩野敦子、松岡智之、横井孝、横溝博、安藤徹、武井協三、森田直美 本人担当部分：p33-36 22「一滴集」、23「源氏物語わかくさ」、24「詠源氏物語和歌」、25「源氏物語歌寄せ」の解説。
2．『図録展示　近衛家陽明文庫　王朝和歌文化一千年の伝承』	共著	平成23年11月	国文学研究資料館	平成23年10月8日～12月4日に国文学研究資料館で行われた特別展示の図録。同館の特定研究「陽明文庫における歌合資料の総合的研究」（平成21年～平成23年度　代表者・中村康夫）の研究成果報告書でもある。陽明文庫に伝わる歌合及び和歌に関する資料を中心に展示を行った。 A4判、全257頁 編者：国文学研究資料館 共著者：阿尾あすか、赤澤真理、海野圭介、久保木秀夫、寺島恒世、中村健太郎、中村康夫、名和修、後藤祥子、杉本まゆ子、日比野浩信、舟見一哉、山本登朗 本人担当部分：「詩懐紙（賦花迎文翰賓）」、「和歌懐紙（見花・折花）」、「和歌懐紙（梅近聞鶯）」、「広沢切（伏見院御集断簡）」、「和歌巻」、「和歌懐紙（侍行幸聚楽第）」、「詠草（立待月・渡月・月前松・寄月旅）」、「光厳院三十六番歌合」 室町後期から近世初期にかけての近衛家歴代当主の懐紙、持明院統派天皇の和歌巻を中心に資料解説を行った。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
３．『和歌文学大辞典』	共著	ウエブ版：平成25年4月 書籍版：平成26年12月	株式会社古典ライブラリー	共著者：青木賜鶴子・青木太朗ほか 本人担当部分：或所紅葉歌合・摂津守有綱歌合・賭弓歌合・未詳歌合（年次不詳）・後伏見天皇・家親・清雅・経親・家雅・三十番歌合・金玉歌合・歌合（乾元二年五月四日）・正応三年九月十三夜歌会歌・正応二年三月和歌御会・北山御幸和歌・正中三年禁庭御会和歌・為兼卿和歌抄・京極家・伏見院三十首・公蔭・法守法親王・盛親・定宗・一万首作者・山王七社法楽和歌・貞和百首・木綿襷・永仁勅撰議・伏見院宸記・理・風雅・京極派 B5版、全1352頁
４．三室戸寺蔵文学関係資料目録	共著	平成27年３月	和泉書院	三室戸寺での歌書・物語等の文芸資料の調査結果をもとにした解題目録。 共著者：大谷俊太、小山順子、長谷川千尋、豊田恵子、舟見一哉、阿尾あすか、森本晋、龍池玲奈 本人担当部分：p6-7,13-14,17,22-23,27,35,50,55,90,93,100,106-109,117-121 A4版、全222頁
「討議」				
１．「王朝物語と歌ことばの変奏　正徹の『源氏物語』摂取について」	共著	平成21年3月	国文学研究資料館『平成20年度研究成果報告書 物語の生成と受容④』p264-281	平成20年10月25日に行われた国文学研究資料館「平安文学における場面生成研究」プロジェクトの第九回研究会での研究報告に関する共同討議の記録。 参加者：阿尾あすか、岩城賢太郎、小川陽子、金光桂子、高橋由記、中川照将、中村康夫、萩野敦子、松岡智之、森田直美、横井孝、横溝博、江戸英雄（司会）
「学会発表」				
１．東京国立博物館蔵『伏見院詠草』の和歌表現について―合点・丸印の意味するもの―	単独	平成20年12月	和歌文学会例会（於東京大学）	東京国立博物館蔵『伏見院詠草』の歌頭に付く添削記号を検討すると添削基準が各継紙によって一定ではなく、これらの歌は京極派風表現模索期の歌と推定できる。典型的な京極派風表現の歌を書き連ねているにも関わらず添削の行われていない継紙もあるが、伏見院にとって不遇期の嘉元期のものと推定される。大覚寺統派に政権が移って自派の勅撰集撰進の可能性が薄れたため、途中から添削も行われなくなったものと考えられる。
２．日本宮廷文学の公共性―「勅撰和歌集」という公共事業	単独	平成24年11月	韓日国際学術会議―高麗時代の公共性―（於韓国ソウル・アサン政策研究院）	政治的な視点で見ると、勅撰和歌集は天皇の公共事業として捉えられる。勅撰和歌集の編纂事業は、天皇の治世と安定と繁栄を予祝、または記念する国家事業であり、特に中世においては和歌によって王権の正統性と権威を補完し、誇示するものであった。そこには武家の有り方が深く関わっており、足利幕府が京都に幕府を置いたことにより変容することとなった。勅撰和歌集の編纂事業は天皇家が権能の一部を幕府に与えながらも、政治と文化双方において権威権力を持つことによって成立したのである。
３．「家」という日本の中世的公共性について―「歌の家」を中心に―	単独	平成25年8月	韓日国際学術会議―高麗時代の公共性―（於高麗大学）	「公共性」という言葉は様々な定義で用いることができ、時代によっては示す内容が異なってくる。当該発表では日本の中世独自の「公共性」の一つに、「家」があることを論じた。和歌の「家」である御子左家の継承の正統性をめぐって争った二条家と京極家の様相に注目すると、細部の文学表現までもが「家」の継承の正統性の証左となったことが窺える。現代では「私」の領域にある表現や芸術活動が、中世日本では「公共」のものであったことがわかる。現代日本における伝統芸術が今日、継承の問題で苦しんでいるのも、中世的公共性をいまだ引きずっている部分が多いからではないか。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
４．大和の観光名所―古典文学との関わりから（講演）	単独	平成26年9月	平成26年度り～べるカレッジ公開講座（於王寺町地域交流センター）	江戸時代の名所記『大和名所図会』を取り上げ、王寺と三郷、龍田川周辺が江戸期の人々にはどのような場所として捉えられていたかを明らかにした。なかでも和歌の歌枕でもある「龍田川」が、江戸期にはすでに所在不明の場所となってしまっており、歌枕と現実の場所との乖離が進んでいることを指摘した。
５．ことばから広がる和歌の学習　―ことば遊びと結び付けた和歌教育の提案―	単独	平成28年8月	奈良県国語教育研究協議会第312例会（於いかるがホール）	中学校国語教育における和歌についての授業での、和歌の技巧の教授法について考察した。
６．「音読」再考（講演）	単独	平成28年9月	語り合う文学教育の会（於奈良教育大学附属小学校）	国語科教育において音読は重視されてはいるものの、一方で目的が教師によって多様化しており、音読によって何を身につけるのか、学習の目標があいまいである。本講演では日本語の音の韻律やリズムに重点を置く、音読に特化した授業の提案を行った。

教　育　研　究　業　績　書

平成 29 年 3 月 31 日

氏名　　岡野　聡子

研究分野	研究内容のキーワード
幼児教育、キャリア教育、地域福祉	子どもと環境、キャリア教育、子育て支援、地域福祉

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例 (1)メールアドレスの使用による学生相談	平成 18 年 4 月～ 平成 23 年 3 月	京都光華女子大学短期大学部こども保育学科にて、保育学生のキャリア支援を担当した。学生のキャリア発達を促すためには、自分の話を親身に聞いてくれる人が必要となる。そのため研究室のメールアドレスを学生に周知し、いつでも質問に応じられる体制を整備した。学生の疑問に対して即時対応が可能であり、そのことによって学生は指導者を身近に感じるだけでなく､研究室に来訪する回数も増え、進路決定に対する意欲が高まった。
(2)学内掲示板を利用した学生の質問への回答	平成 18 年 6 月～ 平成 23 年 3 月	京都光華女子大学短期大学部こども保育学科にて、キャリア支援の一環として、1 年生の 4 月から 2 年生の 3 月まで合計 5 回の進路希望調査を実施した。その中に自由記述欄を設け、進路相談を含め、日常生活の中での悩みや疑問を匿名式で書かせた。回を重ねるごとに自由記述への書き込みが増え、それらの質問に対する回答を 3 日以内に学内の掲示板に貼り出した。掲示板での回答方式により、学生同士の情報共有化を推進しただけでなく、自分の抱えている悩みが他の人も抱えている悩みであったということを知るきっかけとなり、学生内の安堵感を作り出すことができた。
(3)視聴覚教材の活用	平成 24 年 4 月～ 平成 24 年 7 月	環太平洋大学次世代教育学部こども発達学科の講師として､「子どもと環境」を担当した。保育を専攻する学生は、子どもと接する経験が豊富であるとはいえず、また教科書の記述や講義だけでは、学生は子どもに対するイメージがわきにくいため、ビデオ教材を適宜使用した。映像を通して子どもの実像を実感し、理解を深めるように工夫している。また、ビデオ教材は学生が受身的に観て終わりということになりやすいので、ビデオ視聴前に課題を与え、問題意識を持ってビデオ教材を視聴させるようにしている。なお、その課題に対する解答へは、採点をして返却をしている。それらの過程により、学生の子どもに対するイメージが豊富になり、教育効果が上がっているといえる。
(4)体験学習を取り入れた授業	平成 24 年 4 月～ 平成 24 年 7 月	環太平洋大学次世代教育学部こども発達学科の講師として､「子どもと環境」を担当した。授業内において幼稚園や保育所にて実際に活用できる教材研究を体験的に行わせる工夫をした。その結果、学生アンケートにおいても就職後にすぐに使用できるものであると好評を得た。
(4)LINE アプリを活用したキャリア支援の実施	平成 28 年 6 月～ 現在に至る	奈良学園大学人間教育学部人間教育学科の講師として、キャリア形成科目（キャリアデザインⅠ・Ⅱ、キャリアディベロップメントⅠ・Ⅱ、キャリアスキルアップⅠ・Ⅱ、インターンシップ）を担当した。奈良学園大学のキャリア教育は、1～3 年まで実施し、就職活動が本格化する 4 年次は、学生と教員の実質的支援がなくなる。そのため、これまでのキャリア教育で培った力が発揮されるよう､LINE アプリを用いてキャリア支援を実施した。任意登録とした

		が、2017 年 5 月現在で全学生 100 名中、52 名が参加をし、一般企業志望者である 38 名は全て加入している。なお、LINE アプリを通して、教員と情報交換をすることで、5 月 22 日時点における一般企業就職内定者は、64.1%という成果を上げることができた。
2　作成した教科書、教材 (1)「弾き歌い・絵本・製作・折り紙」(保育実務教材)	平成 20 年 2 月	幼児の適切な環境構成のための指導者に求められる具体的な教育方法・技術に視点をあてて教材を作成した。幼稚園や保育園に就職を考えている学生のために、実践ですぐに役立つ保育技術集を作成し，音楽及び図工の授業で活用した。 （監修）高橋孝輔・下口美帆 （作成者）岡野聡子 （発刊元）京都光華短期大学部こども保育学科 （総頁数）54 ページ （所属）京都光華女子大学短期大学部こども保育学科 （使用した科目名）幼稚園教育実習事前事後指導
(2)平成 23 年度キャリアデザイン「一般企業就職希望者へのキャリア支援教材」(教材)	平成 24 年 5 月	平成 23 年 9 月 26 日～平成 24 年 1 月 31 日までに講義をした内容を「一般企業就職を目指す学生のための支援教材」としてまとめ、作成した。一般企業就職希望者（3 年生 106 名）を対象として、企業研究の方法やエントリーシート・ＳＰＩ試験対策などの教育課程外にあたるキャリア支援の提供も手厚く行った。キャリア教育の本来的目的である就労意欲の向上を実現するために外部講師の充実も図った。 （作成者）岡野聡子 （発行元）環太平洋大学キャリアセンター （総頁数）186 ページ （所属）環太平洋大学キャリアセンター、 （使用した科目名）キャリアデザイン
(3)仏教保育行事「まことの保育」 ～学校法人安居院 あぐい幼稚園の実践事例から～ (教材)	平成 24 年 6 月	私立園は、園独自の保育方針や保育カリキュラムを持っている。その中で、保育に仏教思想を取り入れている園は数多くみられる。特に仏教保育を展開している私立園に就職を希望している学生のために、仏教保育とは何か、生活の中での仏教保育の取り入れ方、仏教三大行事（降誕会・成道会・涅槃会)、行事で使用する楽譜集等も含め、一つの冊子としてまとめた。仏教系私立保育園を目指す学生に貸出をし、好評を得ている。 （作成者）岡野聡子 （発行元）環太平洋大学こども発達学科 （総頁数）37 ページ （所属）環太平洋大学次世代教育学部こども発達学科 （使用した科目名）子どもと環境
(4)「キャリアデザイン　サブノート」(教材)	平成 24 年 9 月	本学の後期に開講される「キャリアデザイン」は、４つの分室（教職支援室、幼保施設分室、公務員支援室、企業等就職支援室）に分かれて指導を行っている。前年度まで、各分室で行ってきた授業内容は会議で共有されるものの、教育の効果や評価に対する議論が不足していた。 そのため、学生の学びを可視化し、適切な評価をそれぞれの教員ができるようにサブノートの作成を行った。 （作成者）小野憲一、岡野聡子、大野光二、三木澄代、久田孝 （発行元）環太平洋大学 （出版社）ふくろう出版 （総頁数）64 ページ （所属）環太平洋大学次世代教育学部こども発達学科 （使用した科目名）キャリアデザイン

(5)『子どもと環境～身近な環境とのかかわりを深めるために～』 （教科書）（再掲）	平成 25 年 2 月	乳幼児期は、学校の一斉授業のように知識や技能を一方的に教えられて身に付けていく時期ではなく、自分の興味や欲求に基づいた直接的・具体的な体験を通して、人格形成の基礎となる土台を作る時期である。この時期は、子ども自身が生活の中から、好奇心や探究心をもって環境にかかわることで遊びを展開し、充実感や満足感を味わうことが大切である。子どもが自発的に環境とかかわり、さまざまな体験から生きる喜びや充実感が味わうためには、子どもの遊びの質を高められるような保育者の意図的なかかわりが必要となる。本書では、子どもと自然環境、物的環境、社会環境のかかわりについて実践事例を用いて解説した。 （単著・共著）単著 （判型）Ａ5 判 （総頁数）71 ページ （出版社）ＥＲＰブックレット （所属）環太平洋大学次世代教育学部こども発達学科 （使用した科目名）子どもと環境
(6)『子どもの生活理解と環境づくり ～幼児教育領域「環境」と小学校教育「生活科」から考える～』 （教科書）（再掲）	平成 25 年 3 月	2005 年の中央教育審議会答申では、幼児期教育の意義と役割を「学校教育の始まりとして幼児教育をとらえれば、幼児教育は、知識や技能に加え、思考力・判断力・表現力の基礎を育成する役割を担っている」とした。そのことによって、幼児教育のあり方が、学校教育をより意識したものに変化してきていることがわかる。本書では、幼稚園や保育所で行われる幼児教育と小学校教育の連携をいかに図っていくかについて、幼稚園教育要領や保育所保育指針の領域「環境」と小学校教育課程の「生活科」をを軸として、自然環境・物的環境・社会環境の３つの視点を用いて事例を取り上げながら解説を行った。 （単著・共著）共著 （判型）A5判 （総頁数）166ページ （出版社）ふくろう出版 （担当頁）pp. 1-12、pp. 134-137、pp. 140-142、pp. 137-140（翻訳担当） （担当部分）第1章第1節、第5章第3節1、2-2・3 第5章第3節2-1の翻訳 （編著者）岡野聡子・筒井愛知 （分担執筆者）松田智子・吉村啓子・辻野孝・大野鈴子・金光文代・平松茂・馬場浩一郎・中道美鶴・岡田美紀・土谷長子・アンソニー・ウォルシュ （所属）環太平洋大学次世代教育学部こども発達学科 （使用した科目名）子どもと環境
(7)「キャリアデザイン　サブノート ～改訂版～」 （教材）	平成 25 年 4 月	前年度に作成したキャリアデザインサブノートに、自己理解や業界研究、社会の理解の開設、就職活動の資料を新たに加えて作成した。前年度まで、各分室で行ってきた授業内容は会議で共有されるものの、教育の効果や評価に対する議論が不足していた。そのため、学生の学びを可視化し、適切な評価をそれぞれの教員ができるようにサブノートの作成を行った。 （編集・著者）岡野聡子 （共著者）小野憲一、石渡嶺司、三木澄代、大野光二 （発行元）環太平洋大学 （出版社）ふくろう出版 （総頁数）90 ページ （担当頁）pp. 2-9、pp. 34-45、pp. 51-86 （所属）環太平洋大学次世代教育学部教育経営学科 （使用した科目名）キャリアデザイン

(8)「教職表現力演習ノート」（教材）	平成 27 年 4 月	前年度に実施した教職表現力演習の授業内容を精査し、教材を作成した。授業目的は、新聞記事や評論文を用いて、他者に物事をわかりやすく説明する力の育成を図り、アカデミックスキルの基礎を涵養することにある。作成した教材の構成は、①読んでまとめる、②言葉を学ぶ、③聴いてまとめるから成り立ち、それぞれの項目を段階的に学べるようにしている。 （編集・著者）西辻正副、山本美紀 （共著者）岡村季光、岡野聡子、高木悠哉、松井典夫 （発行元）奈良学園大学 （出版社）株式会社廣済堂 （総頁数）152 ページ （担当頁）pp. 114-115 （所属）奈良学園大学人間教育学部人間教育学科 （使用した科目名）教職表現力演習Ⅰ
(9)「キャリアデザインⅡ～職業研究ワークブック～」（教材）	平成 27 年 9 月	キャリアデザインⅡでは、職業研究「働くこととは」をテーマとして、さまざまな業界から各分野において活躍している・してきた外部講師を招聘し、仕事に対する考え方や進め方を研究することを授業目的としている。本ワークブックでは、聞いたことをメモにまとめる要約力と、まとめた情報を簡潔に示す構造力を身に付けられるように構成した。 （作成者）岡野聡子 （発行元）奈良学園大学 （総頁数）30 ページ （所属）奈良学園大学人間教育学部人間教育学科 （使用した科目名）キャリアデザインⅡ
(10)「キャリアディベロップメントⅡ～職業研究 2 ワークブック～」（教材）	平成 27 年 9 月	キャリアディベロップメントⅡでは、①自己理解の深化、②職業への理解を深める、③インターンシップの 3 部構成としており、1 年次で学んだことを活かす内容となる。本ワークブックのねらいは、課業分析等を通して、仕事内容への理解を深めると同時に、多様な職種の情報を収集し、学生自身が具体的な職業像を獲得できることである。 （作成者）岡野聡子 （発行元）奈良学園大学 （総頁数）30 ページ （所属）奈良学園大学人間教育学部人間教育学科 （使用した科目名）キャリアディベロップメントⅡ
(11)「2016 年度版 教職表現力演習ノート」（教材）	平成 28 年 4 月	前年度に活用した「教職表現力演習ノート」を精査し、改訂版として教材を作成した。授業目的は、新聞記事や評論文を用いて、他者に物事をわかりやすく説明する力の育成を図り、アカデミックスキルの基礎を涵養することにある。作成した教材の構成は、①読んでまとめる、②言葉を学ぶ、③聴いてまとめるから成り立ち、それぞれの項目を段階的に学べるようにしている。 （編集）西辻正副、岡村季光 （共著者）岡村季光、岡野聡子、桑原祐子、高木悠哉、山本美紀 （発行元）奈良学園大学 （出版社）株式会社廣済堂 （総頁数）109 ページ （担当頁）pp. 52-53 （所属）奈良学園大学人間教育学部人間教育学科 （使用した科目名）教職表現力演習Ⅰ

3　教育上の能力に関する大学等の評価 (1)京都光華女子大学短期大学部こども保育学科 学科長による評価	平成 19 年 3 月～ 平成 23 年 3 月	こども保育学科共同研究室実習･就職支援室にて、実習・就職支援室の主担当として、保育職を志す学生の実習支援と就職支援を行った。こうした学生支援だけにとどまらず、研究助手として幼稚園や保育所への実施調査に携わったことや幼稚園現場の実情を講義内で講演したこと、全国保育士養成協議会等にて研究発表を行っていたことで、幼児教育における教育的・研究的な能力を有していると毎年評価をされた。
(2)環太平洋大学学長補佐/キャリアセンター長/ 教育経営学科長による教員評価	平成 24 年 7 月	5 年間の幼稚園教諭の経験を活かして、理論と実践を結びつけ「子どもと環境」の科目を担当していることを評価された。内容としては、授業にて理論と体験的な活動を取り入れて保育指導方法を示す工夫をしていることや、毎回のレポートや課題を学生に課し、それに対する学生へのフィードバック等、実務経験や授業改善への姿勢が、科目を担当するための教育的な能力を有していると評価された。
(3)授業評価アンケートの実施 科目名：子どもと環境 大学名：環太平洋大学	平成 24 年 7 月	「子どもと環境」の授業評価に関するアンケート調査を実施した。5 点尺度（不必要である（1 点）から必要である（5 点）まで）にて回答を求めた。回答結果は、①教科書の用語の確認:4.028（SD=0.839)、②授業内の本読み:3.676(SD=0.868)、③授業内の配布資料:4.408(SD=0.761)、④映像学習:4.535(SD=0.646)⑤体験活動:4.676(SD=0.708)、⑥室外授業 4.338(SD=0.918)、⑦グループワーク:4.436(SD=0.8)、⑧授業後の発展学習:3.859(SD=0.997)、⑨提出課題のフィードバック:3.944(SD=0.918)であった。体験活動に対する評価が最も高く、また、96%の学生が本講義を受けて自分のためになったと答えた。
(4)授業評価アンケートの実施 科目名：生活の理解 大学名：環太平洋大学	平成 25 年 7 月	FD 活動の一環として、「生活の理解」学生による授業評価アンケートを実施した。履修者数は 209 名、回答者数は 172 名（有効回答率：82.2%）であった。質問紙は 15 項目から成り立ち、①学生自身の取り組みについて、②担当教員や指導方法等について 4 点尺度で実施した。評価結果の平均評定は 3.419 であり、総合的満足度は 3.445 であった。また、教材研究の授業内容を多く取り入れたこともあり､「授業への参加意欲が促されるような工夫がされていましたか」について 3.47 の評価をもらうことができた。
(5)授業評価アンケートの実施 科目名：キャリアデザインⅠ 大学名：奈良学園大学	平成 26 年 7 月	「キャリアデザインⅠ」の授業評価に関するアンケート調査を実施した。履修者数は 109 名、回答者数は 106 名（有効回答率：97.2%）であった。質問紙は、14 項目から成り立ち、①自身の受講姿勢、②講義内容・方法、③総合的満足度について、4 点尺度で実施した。評価結果の平均値では、①自身の受講姿勢は 3.26（全体平均 3.13)、②講義内容・方法は 3.17(全体平均 3.15)､③総合的満足度は 3.37(全体平均 3.23）であった。受講生が 1 年生ということもあり、授業のテーマ・学習目標・授業の流れについて授業ごとに解説を加えるなど工夫をした。

(6)授業評価アンケートの実施 科目名：キャリアデザインⅡ 大学名：奈良学園大学	平成 27 年 1 月	「キャリアデザインⅡ」の授業評価に関するアンケート調査を実施した。履修者数は 109 名、回答者数は 101 名（有効回答率：92.6%）であった。質問紙は、14 項目から成り立ち、①自身の受講姿勢、②講義内容・方法、③総合的満足度について、4 点尺度で実施した。評価結果の平均値では、①自身の受講姿勢は 3.32（全体平均 3.26）、②講義内容・方法は 3.23（全体平均 3.28）、③総合的満足度は 3.43（全体平均 3.36）であった。職業研究をテーマとして、企業で働く人を外部講師としてお呼びし、業務内容や働く上で求められる資質・能力についてお話しいただいた。学生は、多業種の人から働くことについて聞くことができることが良いと評価していた。
(7)授業評価アンケートの実施 科目名：生活の理解 大学名：奈良学園大学	平成 27 年 1 月	「生活の理解」の授業評価に関するアンケート調査を実施した。履修者数は 54 名、回答者数は 51 名（有効回答率：94.4%）であった。質問紙は、14 項目から成り立ち、①自身の受講姿勢、②講義内容・方法、③総合的満足度について、4 点尺度で実施した。評価結果の平均値では、①自身の受講姿勢は 3.29（全体平均 3.26）、②講義内容・方法は 3.37（全体平均 3.28）、③総合的満足度は 3.65（全体平均 3.36）であった。振り返りシートにて学生からの授業内容に関する質問を書かせ、次回の授業内にて全ての質問に対する回答を行った結果、学生の受講意欲の高まりがみられた。アンケートの自由記述においても、教員の質問への回答が丁寧であるという評価が多くみられた。
(8)平成 27 年度授業評価アンケートの実施 科目名：子どもと環境（前期） 科目名：生活の理解（後期） 科目名：キャリアデザインⅠ（前期） 科目名：キャリアデザインⅡ（後期） 科目名：キャリアディベロップメントⅠ（前期） 科目名：キャリアディベロップメントⅡ（後期） 大学名：奈良学園大学	平成 27 年 4 月 ～ 平成 28 年 3 月	平成 27 年度の学生による授業評価アンケートの総合的満足度の結果は、以下の通りである。総合的満足度は、4 点尺度で実施した。 ・子どもと環境：3.68 ・生活の理解：3.06 ・キャリアデザインⅠ：3.51 ・キャリアデザインⅡ：3.44 ・キャリアディベロップメントⅠ：3.4 ・キャリアディベロップメントⅡ：3.37 いずれの授業においても、学生の質問に回答する時間を必ず取り入れ、授業終了後には振り返りシートを書かせて授業の理解度を確認した。そのことが、学生による授業の高評価へとつながった。
(9)平成 28 年度授業評価アンケートの実施 科目名：子どもと環境（前期） 科目名：キャリアデザインⅠ（前期） 科目名：キャリアデザインⅡ（後期） 科目名：キャリアディベロップメントⅠ（前期） 科目名：キャリアディベロップメントⅡ（後期） 科目名：キャリアスキルアップⅠ（前期） 科目名：キャリアスキルアップⅡ（後期） 大学名：奈良学園大学	平成 28 年 4 月 ～ 平成 29 年 3 月	平成 28 年度の学生による授業評価アンケートの総合的満足度の結果は、以下の通りである。総合的満足度は、4 点尺度で実施した。 ・子どもと環境：3.45 ・キャリアデザインⅠ：3.55 ・キャリアデザインⅡ：3.59 ・キャリアディベロップメントⅠ：3.46 ・キャリアディベロップメントⅡ：3.09 ・キャリアスキルアップⅠ：3.55 ・キャリアスキルアップⅡ：2.95 いずれの授業においても、学生の質問に回答する時間を必ず取り入れ、授業終了後には振り返りシートを書かせて授業の理解度を確認した。そのことが、学生による授業の高評価へとつながった。

(10)平成 28 年度授業評価アンケートの実施 科目名：キャリアデザイン 大学名：奈良教育大学	平成 28 年 10 月 ～ 平成 29 年 3 月	平成 28 年度の学生による授業評価アンケートの結果は、以下の通りである。アンケートは、4 点尺度であり、回収率は 90.9%（履修者数：55 人、解答者数：50 人）である。 ・学習効果を上げるための工夫・準備：3.36（全体平均：3.28） ・担当教員の話し方が明瞭かどうか：3.66（全体平均：3.31） ・学生の理解や反応を見ながら授業していたか：3.38（全体平均：3.29） ・授業の満足度：3.30（全体平均：3.32） ・新しい知識・考え方・教育実践力が得られたか：3.44（全体平均：3.36） ・到達目標がどの程度、身に付いたか：3.20（全体平均：3.27）
4　実務の経験を有する者についての特記事項 (1)兵庫県芦屋市立西山幼稚園・園内研究会講師	平成 24 年 1 月	兵庫県芦屋市立西山幼稚園にて園内研究会の指導助言として携わる。研究テーマは、「幼児同士の育ち合い学び合いを育む」である。年長 2 クラス・年少 2 クラスの公開保育（劇遊び）を参観した。日常生活の中で取り上げた絵本への興味関心を深めるために、絵本を題材とした劇遊びを保育に取り入れた。幼児の発達に合わせたふさわしい活動を展開するためには、教員がどのような環境構成をする必要があるかについて,教員 8 人を対象に指導助言を行った。
(2)兵庫県芦屋市立朝日ケ丘幼稚園・園内研究会講師	平成 24 年 5 月	兵庫県芦屋市立朝日ケ丘幼稚園にて園内研究会の指導助言として携わる。研究テーマは、「新学期の保育の指導計画や教師の援助の在り方について学び、教師の資質向上を図る」である。年長 1 クラス・年中 2 クラスの保育を参観した。異年齢児の活動において、遊びを工夫して創りだすことや他の幼児の考えにふれ、新しい考えを生み出す喜びや楽しさを味わえるような援助について、教員 6 人を対象に指導助言を行った。
(3)亀岡市議会「緑風会」会派視察における講師	平成 24 年 10 月	特定非営利団体岡山市子どもセンターは、岡山市内にある岡山国際児童年記念公園こどもの森の敷地を 2008 年から借りて、「冒険遊び場：おかやまプレーパーク」という子どものための遊びの広場の運営をしている。「おかやまプレーパーク」の運営および取り組みについて、①子どもの遊び場を確保する必要性、②ＮＰＯの取り組みと現状（ボランティアマネジメント）という２つの視点を用いて講演をした。おかやまプレーパークの運営は、市民ボランティアが中心となって活動を行っており、ボランティアマネジメントの重要性を言及した。
(4)兵庫県芦屋市立朝日ケ丘幼稚園・園内研究会講師	平成 24 年 11 月	兵庫県芦屋市立朝日ケ丘幼稚園にて園内研究会の助言指導として携わる。研究テーマは、「2 学期の幼児の発達に合った援助のあり方について学び、教師の資質向上を図る」である。年長 1 クラス・年中 2 クラスの保育を参観した。運動会を終え、クラスとしての集団のまとまりがより一層感じられた。日常の保育における集団遊びについて、体験をより確かなものにするために振り返りの時間を設けること、集団遊びをイベントのように取り扱うのではなく、継続的・組織的に行い、積み上げていくことの重要性について、教員 6 人を対象に指導助言を行った。

(5)岡山市子どもセンター・研究協力者	平成24年4月～平成26年3月	岡山市子どもセンターは、平成24年4月～平成26年3月まで、岡山市庭園都市推進課主催のＥＳＤプロジェクトから助成金（年間200万円）を獲得し、都市公園での遊び空間の創造をテーマとして、子どもの遊びの広場を展開した。筆者は、研究協力者として、公園を活用してできる遊びを提案したり、保護者アンケートを通して満足度を測定し、報告書にまとめる役割をになった。平成24年度は、5ヶ所でプロジェクトを実施し、平成25年度は、6ヶ所で行った。
(6)岡山市中央中学校・出張講義講師	平成25年3月	岡山市立岡山中央中学校の１年生に対して総合的な学習の時間を用いて、出長講義の講師として携わる。講演テーマは、「将来を考える３つのポイント」である。中学１年生は、普通学級88名、特別支援学級 10 名を対象として行った。何のために働くのかについて考察した後、20問表や価値観シートを用いて自己理解を深めた。また、生徒による職業調べから、それらの職業に就くには、具体的にどのような学習をする必要があるかを解説した。最後に、学校卒業後の職業生活におけるライフイベント（結婚、出産、年収、転職等）の平均値をもとに解説した。
(7)一般社団法人 gid.jp 日本性同一性障害と共に生きる人々の会・出張講義講師	平成26年8月	gid.jp 関西交流会において、「就職に関する「ストレス」を考える～ストレスチェックを通して、自分のストレス耐性を知ろう～」をテーマとし、90分間の講義を行った。講義では、ストレス耐性チェックを通して、自分が持つストレスを客観視し、ストレス解消法ではなくストレスと上手に付き合う方法の提案をした。また、性同一性障害の方が持つ就職活動・職場の人間関係での悩みについて事例を取り上げ､自己開示を含めたグループワークも実施した。実施場所は、大淀コミュニティセンター（大阪）で行い、受講生は18名であった。
(8)特定非営利法人男女共同参画ネット尼崎（尼崎市女性・勤労婦人センター）・出張講義講師	平成27年3月	2015 あまがさき女性フェスティバル記念講演会において､｢カナダのコミュニティハウスに学ぶ　支えあいのまちづくり」をテーマとし、90分間の講演を行った。多文化共生の国カナダには、子どもから高齢者まで、さまざまな人々が利用するコミュニティハウスがある。そのコミュニティハウスの成り立ちとそこで実施されているサービスとプログラムについて紹介した。また、カナダのコミュニティハウスから学べることとして、コミュニティオーガニゼーションの概念を「人、もの、こと、ところ」、そして「時間の共有」という具体的内容に置き換えて述べた。社会保障の制度化が進む中で、福祉行政の専門分化が起こる過程についても解説した。実施場所は、尼崎市女性センター・トレピエで行い、受講者は40名であった。受講者満足度は100%であった。2014年度尼崎市立女性･勤労婦人センター事業報告書：p.26
(9)一般社団法人 gid.jp 日本性同一性障害と共に生きる人々の会・出張講義講師	平成27年6月	gid.jp 関西交流会において、「自分自身について知る～自己概念の揺らぎを体験しよう～」をテーマとし、90 分間の講義を行った。講義では Twenty statements test=T.S.T/Who am I 法の心理検査も用いて、自己概念とは何かを解説した。また､「私の価値観を知ろう」をテーマとし、価値観の書かれた15枚のカードを、自分が大切にしたいと思う順番に並べてもらい、ペアワークを実施した。価値観カードのワークから、自己概念（自己が持つ自分のイメージ)がいかに揺らぎやすいか体験をしてもらった。実施場所はパシフィックマークス西梅田 14Ｆガクトホール（大阪）で行い、受講生は20名であった。

(10) 2015 年度奈良学園大学公開講座「王寺町り～べるカレッジ」・出張講義講師	平成 27 年 7 月	奈良学園大学公開講座において、「子どもに求められる職業教育とは―キャリア教育の視点から―」をテーマとし、90 分間の講演を行った。講演では、キャリア教育が生まれた背景を解説し、キャリア教育が開発すべき社会生活を営む上で必要となる能力や態度について述べた。また、小学校から高等学校までのキャリア教育の取り組み事例を紹介し、能力開発を行う上で、最も重視すべき事項として、自己肯定感を育む必要性についても述べた。質疑応答の時間も 20 分程度取り、対話形式で講演を行い、大変好評であった。受講生は 18 名であった。
(11) 平成 27 年度三郷町子ども人権学習支援事業・指導者	平成 28 年 1 月	三郷町子ども人権学習支援事業において、三郷北小学校「つながり学級」の小学生（32 名）と保護者（33 名）65 名を対象として、科学遊び・学びの広場プロジェクト「ピンホールカメラ作り～小さな穴から見える不思議な世界～」を実施した。ピンホールカメラ作りを通して、光の仕組みについて解説をした。低学年児童には解説は難しかったが、ピンホールカメラを覗くと、映し出される映像が逆転しているということに対し、不思議さと驚きを感じ、その仕組みがどのようになっているのか関心が高まった。実施後の保護者向けアンケートでは、満足度は 100％であり、次回も参加をしたいとの高評価を受けた。
(12) 登美ヶ丘北中学校区地域教育協議会第 3 回スクールコーディネーター研修・出張講義講師	平成 28 年 9 月	「海外の地域コミュニティにおける活動～カナダ・バンクーバー市ネイバーフッドハウスの事例～～」をテーマとして、2015～2016 年度の科学技術研究費（若手研究Ｂ）の成果報告を兼ねて実施した。参加者は 7 名であり、現在、地域活性化事業を行っている者を対象として行った。カナダにおける移民支援組織の成り立ちやセツルメント運動における生活を包括的に支援する仕組み、ボランティアコーディネートの手法、コミュニティディベロップメントの概念についての解説を行った。多数の質問を受け、日本とカナダの文化的背景の差異はあるものの、地域における福祉活動の統合化には聴講者が共感し、高評価をいただいた。
(13) 平成 28 年度三郷町立西部保育園第 3 回新任教員研修会・出張講義講師	平成 28 年 12 月	三郷町立西部保育園にて新任教員研修の講師として携わる。「環境を通した教育・保育のあり方を学ぶ～保育の「質」を考える～」をテーマとし、①保育の質、質の高い保育とは、②保育環境評価スケールの使用方法の解説および実践を実施した。昨今、教育経済学の視点から、幼児教育の経済学や学力の経済学という書籍が発刊され、就学前教育の充実が強力な公共投資となりうることに注目が集まっている。幼児教育がもたらす効果（自己統制力、向社会的行動、等）について、海外の調査研究の結果を事例として取り上げ、解説した。また、保育環境評価スケールを実践し、保育環境の見直しや保育活動の振り返りを行った。受講生は 3 名であった。
(14) 平成 28 年度三郷町子ども人権学習支援事業・指導者	平成 29 年 1 月	三郷町子ども人権学習支援事業において、三郷北小学校「つながり学級」の小学生（28 名）と保護者（30 名）58 名を対象として、科学遊び・学びの広場プロジェクト「色が変わる、まほうの水で描く世界」を実施した。レモン水（酸性）、せっけん水（弱アルカリ性）、石灰水（アルカリ性）を用意し、紫キャベツで染めた紙（リトマス紙）に模様を描き、化学反応によって紙の色が変わる様子を、酸性・アルカリ性の解説をした。学生主導で実施を行い、実施後の保護者向けアンケートでは、満足度は 100％であり、次回も参加をしたいとの高評価を受けた。また、こうしたプロジェクトの実施により、学生の事業運営能力・スキルも格段に上がったと言える。

(15)平成 28 年度三郷町立西部保育園第 4 回新任教員研修会・出張講義講師	平成 29 年 3 月	三郷町立西部保育園にて教員研修の講師として携わる。「保育環境評価スケールの活用を振り返って」をテーマとし、3、4、5 歳児のクラス担任に保育環境評価スケールの結果を提示しながら、担任（保育経験 10 年以上）と副担任（保育経験 1 年）の結果を共有した。結果の共有では、保育経験 10 年以上の保育者は、自身の保育活動について個別具体的に思い出しながら、保育内容の質に関する発言が多くみられた。一方で、保育経験 1 年の新任保育者は、クラス全体を考えると概ね環境が整っていると回答し、全体的に高い評価をつけることがわかった。これらの結果を話し合うことで、10 年以上の保育経験を有する保育者は、新任保育者の視点を学ぶことができ、今後の指導に役立てることができると述べていた。新任保育者は、10 年以上の保育経験を有する保育者の発言を通して、保育の質について、より深く考えることができたと発言をした。園長からは、評価スケールを用いながら、具体的に保育者同士がコミュニケーションを図ることで、保育の質の向上につながると述べていた。受講生は 6 名であった。
(16)第 14 回「産学連携のための経営者セミナー」・出張講義講師	平成 29 年 3 月	奈良県大学連合が主催する産学連携のための経営者セミナーにおいて、「学生の主体性を育むキャリア教育の在り方とは」をテーマとして講演を行った。大学生活で身に付けておきたい能力（学士力、社会人基礎力、ジェネリックスキル、21 世紀型スキル）の解説をした後、本学のキャリア教育・キャリア支援を紹介した。また、2 名の学生から、インターンシップ成果報告会の発表もしてもらい、場内からは、学生が堂々と発表する姿勢を大変評価していただいた。受講生は 23 名であった。
(17)広陵町幼稚園保育園職員研修会・出張講義講師	平成 29 年 3 月	広陵町幼稚園・保育園職員研修会の講師として、「保育の質を考える～保育環境評価スケールの活用を通して～」をテーマとして講演を行った。保育の質の定義を考えると共に、保育環境評価スケールを用いて、客観的に自身の保育活動を振り返る必要性について述べた。聴講者の中で、保育環境評価スケールの活用をしたことがある者は 1 名（大学時代に実施した）であり、初めて活用した者ばかりであった。新任保育者よりも保育経験が 10 年を超える者は、他園見学や研修の機会を積んできていることもあり、他園と自園を比較して評価を付けることから、自己評価が厳しくなる傾向があると伝えると、納得できると聴講生からの感想があった。また、適宜、客観的な評価指標を用いて保育活動を点検する機会を設けることには意義があるとの感想をいただいた。受講生は、45 名であった。
5　その他 (1)NPO 法人ウエルス会報誌 2012 年 夏号 「園庭の芝生化事業の推進と幼少期における身体機能の形成について」	平成 24 年 6 月	教育現場における園庭･校庭の芝生化事業は、1970 年頃から始まり、現在では、研究機関や自治体、ＮＰＯ法人等による芝生化の実践や調査がされている。本会報誌では、調査研究の概要や園庭や校庭の芝生化が子ども達にもたらす 4 つの教育効果（外遊びの増加、情操の安定、芝生の弾力性がスポーツ活動に安全性と多様性をもたらすこと、環境教育の生きた教材として活用できること）を言及した。 （科目担当実績）子どもと環境

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概　　要
1　資格、免許 (1)幼稚園教諭二種免許状取得	平成 11 年 3 月	免許状番号　平 10 幼二め　第 804 号（京都府教育委員会）
(2)プロジェクトワイルドエデュケーター資格取得	平成 18 年 7 月	財団法人公園緑地管理財団：資格番号なし
(3)保育：子育てアドバイザー（初級）	平成 21 年 4 月	特定非営利法人保育：子育てアドバイザー協会： 認定番号　第 10001024 号
(4)修士（都市政策）	平成 23 年 3 月	大阪市立大学大学院創造都市研究科都市政策専攻（都市政策修士 第 730 号）「修士論文題名：現代的セツルメント「ネイバーフッドハウス」の社会的意義～ゴードンネイバーフッドハウスの取り組みを　めぐって～」
(5)小学校教諭二種免許状取得	平成 23 年 7 月	免許状番号　平二三小二第六号(京都府教育委員会)
(6)生涯学習コーディネーター資格取得	平成 23 年 10 月	財団法人社会通信教育協会：第 31110009 号
(7)生涯学習 1 級インストラクター資格取得	平成 23 年 10 月	財団法人社会通信教育協会：第 11110009 号
(8)メンタルケアカウンセラー資格取得	平成 25 年 7 月	財団法人生涯学習開発財団/メンタルケア学術学会: 資格第 134014563 号
(9)キャリアカウンセラー資格取得	平成 25 年 9 月	日本キャリア教育学会：認定登録第 214 号
(10)メンタルケア心理士資格取得	平成 25 年 10 月	財団法人生涯学習開発財団/メンタルケア学術学会: 資格第 134014563 号
(11)准ケアストレスカウンセラー資格取得	平成 25 年 11 月	財団法人職業技能振興会：ＪＣ-080018
(12)ガイダンスカウンセラー資格取得	平成 26 年 12 月	スクールカウンセリング推進協議会 認定番号：第 14030010 号
(13)修士（学校教育学）	平成 28 年 3 月	兵庫教育大学大学院学校教育研究科人間発達教育専攻（学校教育学修士 第 8401 号）「修士論文題目：多世代交流としての子育て支援に関する研究―カナダ・ネイバーフッドハウスの事例から―」
2　特許等 特記事項なし		
3　実務の経験を有する者について特記事項 (1)京都光華女子大学短期大学部こども保育学科 こども保育学科共同研究室内実習・就職支援室担当	平成 18 年 3 月～ 平成 23 年 3 月 （5 年間）	実習・就職支援室の主担当として、保育職を志す学生の実習支援と就職支援に携わる。実習支援では、教育実習事前事後指導の教員補助として園内における環境構成の指導や指導案の指導の他、実習園との連携協力を構築して実習後の学生へのフィードバック体制を確立した。就職支援では、京都市内の園を中心として毎年 2 月に 30～40 園を訪問し、保育現場が求める人物像の聞き取り調査を実施した。その調査結果を活かして、就職支援プログラムの構築に役立てた。
(2)特定非営利法人岡山市子どもセンター おかやまプレーパーク運営委員	平成 24 年 3 月～ 現在に至る	特定非営利法人岡山市子どもセンター（岡山市北区久米 348）の事業の一つである「おかやまプレーパーク」の運営委員に着任し、月に 2 度、岡山国際児童年記念公園こどもの森へ出向いて活動を行なっている。『自分の責任で自由に遊ぶ』ということをモットーとし、子どもがのびのびと思いっきり遊べるように敷地内の禁止事項（例えば、木登り禁止等）をなくし、やりたい遊びを実現できる遊び場の確保に力を注いでいる。年間事業計画の見直しや助成金の申請、行政と交渉をする際の助言役を務めている。
(3)特定非営利活動法人ウエルス　理事	平成 24 年 5 月～ 現在に至る	特定非営利法人ウエルス（京都府亀岡市）の顧問に着任し、幼稚園や保育所における自然環境としての園庭の芝生緑地化推進活動の助言を行っている。園庭の芝生化により、子ども達の遊び方の変化や外遊びの増加、それに伴う健全な肉体形成等、芝生化によってどのような教育的効果があるか、共同研究を行っている。（住所：法人事務所:〒621-0805　京都府亀岡市安町大池 11　日進ビル 101）

(4)陶芸ギャラリー吾子　代表	平成 25 年 10 月～現在に至る	京都市東山区泉涌寺地区は、陶芸職人の町として知られているが、職人の高齢化が深刻な問題となっており、その地に根付いた文化が途絶えようとしている。そのため、地域振興の一環として、平成 25 年 10 月よりギャラリーの開催している。展示作品は、陶器に関わらず絵画なども展示している。地域のお祭りがある際には、無料で開放し、音楽会なども行っている。(京都市東山区泉涌寺東林町 17-29)
(5)広陵町まち・ひと・しごと創生総合戦略審議会・ひと部門　部会長	平成 27 年 7 月～平成 28 年 3 月	本審議会は、まち・ひと・しごと創生法に基づく国の長期ビジョン及び総合戦略を勘案し、内閣府地方創生推進室が示す「地方人口ビジョン策定のための手引き」及び「地方版総合戦略策定の手引き」に基づき実施した。また、国の総合戦略が定める 4 つの政策分野（①地方における安定した雇用を創出する、②地方への新しい人の流れをつくる、③若い世代の結婚、出産、子育ての希望をかなえる、④時代に合った地域を創り、安心なくらしを守るとともに、地域と地域を連携する）に則り、まち部門、ひと部門、しごと部門の作業チームに分け、筆者はひと部門の部会長の任命を受け、総合戦略策定に向けた審議を実施した。
(6)広陵町幼保一体化推進会議　副会長	平成 27 年 8 月～平成 28 年 7 月	本会議では、「町立幼稚園・保育園における幼児教育・保育のあり方等について」を主題とし、5 回にわたって審議を行った。審議事項は、①幼稚園・保育園におけるより良い教育・保育の提供、②現在策定中の幼保一体化総合計画に基づいた町立幼稚園・保育園の施設整備の促進、③就学前の子どもたちへの子育て支援の充実であり、それらを答申としてまとめ、報告した。
(7)広陵北幼保連携型認定こども園設計業務公募型プロポーザル選定委員会　委員	平成 28 年 3 月～平成 28 年 6 月	本プロポーザルは、広陵町における幼保の一体化を進めるため、広陵北幼稚園と広陵北保育園を統合し、広陵町で初めての幼保連携型認定こども園の設計業務の委託先を選定するものである。9 社から応募があり、一次審査において 5 社を選定、2 次審査において業務委託先を決定した。平成 30 年 4 月 1 日に開園予定であり、災害時の乳幼児を対象とした福祉避難所としての機能も有する施設となる。
(8)広陵町総合戦略等検証委員会　委員	平成 28 年 7 月～現在に至る	平成 27 年 7 月～平成 28 年 3 月までに実施した広陵町まち・ひと・しごと創生総合戦略審議会において策定した事業のうち、先行で実施している 8 事業に対して、その実施状況および事業の有効性に関する審議を行った。
(9)出会いウィーク2017実行委員会　委員	平成 28 年 10 月～平成 29 年 3 月	本事業は、奈良ＮＰＯセンターが主体となり、奈良県下にて活動を実施するＮＰＯおよびボランティア団体の広報活動の一環として実施したものである。奈良学園大学ボランティアサークルも参加をし、「科学遊び・学びの広場プロジェクト事業」のＰＲを行った。実施日は、平成29年2月18日（土）～19日（日）であり、当日の参加団体は36団体であった。2日間の参加者総数は、800名程度であった。
4　その他 (1)環太平洋大学キャリアセンター運営委員会　委員	平成 24 年 4 月～平成 26 年 3 月	環太平洋大学キャリアセンターは４つの分室（教職支援室・幼保施設分室・公務員就職支援室・企業等就職支援室）に分かれて進路支援をしている。月に 1 度キャリアセンター運営委員会を開催し、各分室との連携を図っている。また、環太平洋大学の場合、体育会に力を入れている学生も多く、4 年生の前期が終わるまで進路決定を引き延ばす学生の姿が見られ、そうした学生に対して、ゼミ担当教員も含めて支援を実施した。

(2)環太平洋大学教職課程委員会　委員	平成 24 年 4 月～平成 25 年 3 月	学生の介護等体験実習が円滑に運営できるように、実習の事前事後指導およびオリエンテーション、個別指導に携わる。集団指導では、介護等体験実習を終えた学生を招いてパネルディスカッションを行うと共に、実習簿やお礼状の書き方の指導を担当した。個別指導では、特別支援施設での実習生 8 名、社会福祉法人での実習生 10 名を担当した。
(3)環太平洋大学幼児教育言語力育成研究会　代表	平成 24 年 4 月～現在に至る	2008 年に改訂された学習指導要領では、「言語活動の充実」が育成すべき重要項目の第一として取り上げられた。そのことを受け、現場における言語活動の充実を特に幼児を対象として調査することを目的として岡山市立大野幼稚園や岡山市立江西幼稚園の園長先生とともに研究会を立ち上げた。幼稚園の教育現場と大学組織が協同して、幼児期における言語活動の充実に関する調査を実施している。
(4)環太平洋大学ハラスメント委員会　委員	平成 25 年 4 月～平成 26 年 3 月	本学では、アカデミック・ハラスメントやジェンダー・ハラスメント、パワーハラスメント等を総合的に取り扱う部としてハラスメント委員を設置している。今年度は、ハラスメントのない教育研究環境づくりの一環として、オープンスペースを利用して学生相談を行うことや、学生が研究室内にいる場合は、ドアを開けておくなど、誤解やトラブルを未然に防ぐ対策をとった。
(5)奈良学園大学キャリアセンター運営委員会　委員	平成 26 年 4 月～現在に至る	奈良産業大学から名称変更された奈良学園大学は、2 学部 2 学科（人間教育学部・保健医療学部）が新設された。それに伴い、大学組織も改変され、平成 26 年 4 月に就職支援課からキャリアセンターへと名称変更および業務内容の変更や統合がなされた。新体制のもと、学生のキャリア形成支援体制の確立にむけた会議を重ねているところである。また、人間教育学部では、教員採用試験支援室として教職センターを設置し、運営を行っている。
(6)奈良学園大学ボランティアサークル　顧問	平成 26 年 4 月～現在に至る	奈良学園大学において、ボランティアサークルの顧問となり、学生指導をしている。平成 27 年度、平成 28 年度に吉野青年会議所とボランティアサークルに所属する大学生と協働で吉野広域において「小学生を対象としたキャンプ事業」を実施した。また、平成 27 年度には、奈良県庁主催の財団法人奈良県青少年会館からの寄付金を活用した「青少年の健全育成事業」に奈良学園大学ボランティアサークルで応募し、20 万円の採択を受けた。採択のテーマは、「科学遊び・学びの広場プロジェクト」であり、三郷町内の小学生を対象とし、参加者総数は 150 名であった。三郷町教育委員会からも高い評価を受けた。平成 29 年度の部員数は、22 名（4 年生：4 名、3 年生：6 名、2 年生：9 名、1 年生：3 名）である。
(7)奈良学園大学サッカー部　顧問	平成 29 年 4 月～現在に至る	奈良学園大学において、サッカー部の顧問となり、学生支援をしている。平成 29 年度のリーグ戦成績は以下であった。6/1 現在の勝敗は、3 勝 4 敗である。 4/15（土）：vs 京都外国語大学 0-1 負け 4/23（日）：vs 大阪経済法科大学 3-1 勝ち 4/30（日）：vs 滋賀大学教育学部 4-1 勝ち 5/3（日）：vs 四天王寺大学：7-0 勝ち 5/7（日）：vs 京都教育大学：0-2 負け 5/14（日）：vs 大阪府立大学：0-1 負け 5/21（日）：vs 神戸外国語大学：4-5 負け 平成 29 年度の部員数は、20 名（4 年生：5 名、3 年生：5 名（マネージャー：2 名）、1 年生：10 名（マネージャー：1 名））である。

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（著書） 1『次世代の教育原理』	共著	平成24年10月	大学教育出版	2011年から小学校・中学校・高等学校と順次完全実施される新学習指導要領の意図を汲み取りながら、教職を目指す学生に教育の基礎・基本的な知識と教養を身に付けさせるための入門書である。 A5判　全159ページ 編著者：中田正浩・松田智子 共著者：中田浩司・鎌田首治朗・住本克彦・岡野聡子・久田孝 本人担当部分：第7章「キャリア教育とは」(pp.102-117)を単著 本人担当部分： キャリアの語源やキャリア教育が導入された背景などを概観しながら、キャリア教育で育成すべき能力を取り上げ、小学校・中学校・高等学校で取り組むべきキャリア教育の目標と内容について解説した。キャリア教育とは特別な教育活動ではなく、日常の教育活動を通して、子ども達の学ぶ態度や意欲を育てながら、児童・生徒が社会とのつながりを見出していくための教育であることを学生にわかりやすく解説している。
2『子どもと環境～身近な環境とのかかわりを深めるために～』	単著	平成25年2月	ERPブックレット	乳幼児期は、学校の一斉授業のように知識や技能を一方的に教えられて身に付けていく時期ではなく、自分の興味や欲求に基づいた直接的・具体的な体験を通して、人格形成の基礎となる土台を作る時期である。この時期は、子ども自身が生活の中から、好奇心や探究心をもって環境にかかわることで遊びを展開し、充実感や満足感を味わうことが大切である。子どもが自発的に環境とかかわり、さまざまな体験から生きる喜びや充実感が味わうためには、子どもの遊びの質を高められるような保育者の意図的なかかわりが必要となる。本書では、子どもと自然環境、物的環境、社会環境のかかわりについて実践事例を用いて解説した。 A5判　全71ページ
3『子どもの生活理解と環境づくり～幼児教育領域「環境」と小学校教育「生活科」から考える～』	共著	平成25年3月	ふくろう出版	幼稚園や保育所で行われる幼児教育と小学校教育の連携をいかに図っていくかについて、幼稚園教育要領や保育所保育指針の領域「環境」と小学校教育課程の「生活科」を軸として、自然環境・物的環境・社会環境の３つの視点を用いて事例を取り上げながら解説した。 A5判　全166ページ 編著者：岡野聡子・筒井愛知 共著者：松田智子・吉村啓子・辻野孝・大野鈴子・金光文代・平松茂・馬場浩一郎・中道美鶴・岡田美紀・土谷長子・アンソニー・ウォルシュ 本人担当部分： 第1章「幼児教育から小学校教育へ」第1節「幼児教育と領域「環境」」(pp.1-12)、第5章「社会環境とのかかわり」第3節「異文化を理解することとは」「1.異文化理解と異文化交流」(pp.135-137)、「2-2）文化の獲得」(p.140-141)、「2-3持続発展教育の考え方」(pp. 141-143）を単著。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
「学術論文」 1　現代的セツルメント「ネイバーフッドハウス」の社会的意義～ゴードンネイバーフッドハウスの取り組みをめぐって～（修士論文）	単著	平成23年3月	大阪市立大学大学院	ブリティッシュ・コロンビア州にあるネイバーフッドハウス協会は、「人々の交流」を目的とし、そこで取り組まれるサービスやプログラムは、個人と個人を結びつける「ハブ」のような役割を担っている。イギリスを発祥とするセツルメント文化を受け継ぐ現在のネイバーフッドハウスの取り組みや、１つの施設において人間のライフサイクルを見越した複合的なサービス展開をしている場作りに着目し、日本の行政サービスとの違いを論じた。 A4判　全48ページ
2　保育士養成校における就職活動の特徴と課題～就職支援の実践から見えるもの～	共著	平成23年12月	京都光華女子大学短期大学部研究紀要 第49集(pp. 1-6)	保育者を目指して本学に来た者は、目的意識をはっきりと持って入学してくる者が多く、保育職内定率も100%である。しかし、授業や実習指導を受ける中で、保育職への不安が学生の間で広まるため、1年生の4月からキャリア支援プログラムを実践した。その実践から、卒業後の支援（特に早期離職者への対応）にも言及した。 代表者：吉村啓子 共著者：岡野聡子 本人担当部分：1年生の4月から実施したキャリア支援プログラムの企画および実施、評価を担当した。
3　非営利団体における社会サービスの提供に関する一考察～カナダのバンクーバー市におけるゴードンネイバーフッドハウスの取り組み～	単著	平成24年3月	環太平洋大学研究紀要 第5号(pp. 31-39)	社会事業の専門分化が進むにつれ、需要と供給をスムーズに行うために子ども・高齢者・障害者といった分野ごとの支援体制が確立されてきた。 本稿で取り上げたカナダのバンクーバーにおけるゴードンネイバーフッドハウスは、専門的な福祉ニーズの提供を事業の主軸にするのではなく、地域に住む人々を結びつける基盤（コミュニティ・ベースド）としての「交流の場」から醸成される相互扶助関係の構築に注目をした事業を展開している。その在り様をミッションステイメント・サービスとプログラム内容・運営資金・ボランティアスタッフの４つの観点から考察した。
4　環太平洋大学におけるキャリア支援体制の確立にむけて（Ⅰ）	共著	平成24年3月	環太平洋大学研究紀要 第5号（pp. 61-68）	大学のキャリア教育をめぐる昨今の動向をみると、就職に至るまでの支援過程の議論が活発であり、「キャリア形成支援」という言葉で表現されている。今後の課題は、キャリアセンターでの支援において、学生一人ひとりのキャリア形成を図ることを意識して支援を行う必要があることが明らかとなった。 代表者：岡野聡子 共著者：杉田郁代 本人担当部分：本学キャリアセンターのキャリア支援プログラムの企画および実施を行い、評価をした。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
5　幼児期における「言語活動の充実」に関する研究～岡山市公立幼稚園教諭を対象としたアンケート調査から～	共著	平成24年12月	環太平洋大学研究紀要第6号（pp.1-8）	言語活動の充実に関する研究は、小学校教育における事例研究が多く、幼児期における研究は管見するあたり少ない。本研究では、幼児期における言語活動とは何かを概観し、幼稚園の教育現場において言語活動の充実がどの程度意識され保育実践として取り組まれているか、岡山市公立幼稚園教諭を対象としてアンケート調査から考察を試みた。第1章では、学校教育において「言語活動の充実」が取り上げられた背景を述べ、言語活動の充実について総評を行った。第3章では、調査結果をまとめ、その分析を行った。調査結果（有効回収率：38.7%）では、伝達力や思考力を意識した保育を行っていると回答した者の割合は6割を超えた。伝達力、思考力を意識した保育実践では、伝達力よりも思考力を意識した保育実践のあり方に戸惑いが見られた。言葉にかかわるカリキュラムを園内で作成しているケースは 32.5%、小学校「国語科」との連携を図っている園が43.2%であった。「言語活動の充実」は、保育実践として取り組まれてはいるが、園独自でされており、今後は事例研究などを通して、保育の質の均一化も含めた検討も必要となってくることが明らかとなった。第 4 章では、言語活動の充実をめぐる保育現場の戸惑い等の課題も含めて評価を行った。 代表者：岡野聡子 共著者：大野鈴子 本人担当部分：質問紙の作成およびアンケート結果の分析と考察を行った。
6　幼児期における科学的思考を育む環境づくりに関する一考察	共著	平成25年3月	環太平洋大学研究紀要第7号（pp.97-105）	本稿では、5歳児を対象として、池田・戸北（2004）の科学の基礎的発言の分析手続を用いて、日常生活では出会わないゾウリムシを観察させることによって、幼児期における科学的萌芽および知的好奇心を育む教育環境の整備について検討した。 第1章では、科学的思考の萌芽に関する先行研究を取り上げ、この研究が小学校教育課程の生活科や理科教育の分野で実施されてきたことを述べ、幼児を対象とした科学的思考の萌芽に関する研究の少なさについて言及した。第2章では、池田・戸北（2004）や加藤（2007.2008.2009）の科学的思考の萌芽の分析手法を概観し、本稿で扱う分析手法を解説した。第4章では、実践の分析結果を考察し、科学の基礎的な発言へと移行する可能性がある一時的な表現の発言や対象物を身体で表現しようとする姿が目立ったことや、対象者の1名のみが科学の基礎的な発言をしたことに対し、対象物が身近でなかったこと、そうした物事に触れる体験が少なかったことに起因するのではないかと考えられた。今後の課題として、幼児の「知的な気付き」の発言を促す環境づくりについて、教師の態度に着目をして検討を要することが明らかとなった。 代表者：筒井愛知 共著者：岡野聡子、平松茂 本人担当部分：分析手法の検討を行った。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
7　体験活動と授業後の発展学習を重視した保育内容「環境」の授業展開―大学 2 年生前期授業における実践事例から―	単著	平成25年3月	環太平洋大学研究紀要第 7 号（pp. 29-36）	領域「環境」における授業展開では、「身近な環境とかかわる力の育成」を学生に具体的に理解させるため、講義形式の授業だけではなく、体験活動を取り入れている事例も多く見られる。本稿では、体験活動の他に授業後の発展学習課題を学生に与えることによって、領域「環境」への理解や幼児教育に関する学習意欲の向上が見られるかについて、授業評価アンケートや授業後の感想文から分析を行った。 アンケート結果からは、本授業が「役立った」と回答した者は、95.8%であった。体験活動では、実際に自然や素材と触れ合うことで、具体的に授業の趣旨を理解することができたという感想が多くみられた。発展学習では、提出された課題をまとめて授業中に配布をするなど、他者の考えに触れることができるフィードバックについて高く評価していた。授業後の感想からは、「子どもの様子やどのような遊びを取り入れるべきか自分で考えることができた」とあり、子どもの理解に対して一定の学習効果が見られた。学生自身の体験を通して、子どもが主体的に環境にかかわりたくなるような環境構成の工夫や仕組み作りのあり方を学べた点が大きかったといえる。その一方で、授業後の発展学習の交流（フィードバック）の方法が今後の課題であると思われた。
8　幼児期における「言語活動の充実」の測定と評価に向けて―「聞く力」を量的に捉える試み―	共著	平成26年3月	環太平洋大学研究紀要第 8 号（pp. 115-122）	子どもの育ちを可視化し、教育実践が効果的に行われたかを教員が振り返るためには、教育効果の測定と評価が必要である。しかし、幼児教育は、小学校以降の教科の学習と異なり、遊びを通して総合的に学習されるため、「見えない教育」と言われ、その教育効果を量的に測定したものは管見するあたり数が少ない。本調査では、京大ＮＸ5-8 を用いて、内容の理解度といった観点から、幼児の「聞く力」の測定を試みた。 調査対象者は、言葉の教育に特に力を入れているＡ園と言葉の教育以外に力を入れているＢ園の園児を対象とした。結果は、課題ごとに素点を出し、換算表に従って偏差値に変換した。言語性という項目を設け、2 要因分散分析を行った結果、Ａ園とＢ園には違いがなく、課題の主効果（$F(3, 42)=4.481, p<.01$）のみ有意であった。本調査の取組から、園の取組の違いを結果に反映しにくいなど、測定の難しさが浮き彫りになった。また今後は、聞く力だけでなく、話す力、伝え合う力の測定について考える必要がある。 代表者：岡野聡子 共著者：吉村啓子、大野鈴子 本人担当部分：第 1、2、3、5 章部分 第 1 章では、言語活動における教育効果の測定の評価の必要性と測定方法における先行研究を提示した。第 2 章では、調査対象園の概要をまとめ、第 3 章では、調査概要および研究手法、研究分析手法について提示した。第 5 章では、検査結果の提示および今後の課題として、聞く力だけでなく、話す力、伝え合う力の量的測定に対して言及した。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
９　NIE を取り入れた教育実践研究―大学 2 年生を対象とした時事教養Ｉの授業実践を通して―	共著	平成26年3月	環太平洋大学研究紀要第 8 号(pp.　147-154)	学生の基礎学力の向上は、本学にとっても大きな課題であり、この課題解決の一つとして、新聞の利用による教育の導入を平成 25 年 4 月からはじめた。授業は学部単位で行い、420 名が履修をした。授業内容は、山陽新聞社による講義と現在注目されている新聞記事を題材（出生前診断やユニクロ世界同一賃金、アベノミクス等）を使用した講義を実施した。また、講義内に 3 回の試験を行い、講義後には学生アンケートを実施した。試験は、難易度が同程度の試験問題を使用しが。試験結果を分析すると、分散値にそれぞれ有意差は出ていないが、1 回目と 2 回目、2 回目と 3 回目、3 回目と 1 回目の平均点の間に有意差が見られ、点数が上昇していることから、基礎学力（ここでは言語力）と教養が身に付いたということが言えると思われる。また、学生アンケートからは、これまで新聞を読まなかった学生も新聞に関心を持てるようになったことが明らかとなった。 代表者：渡邉規矩郎 共著者：仲田輝康、木戸和彦、三木澄代、 岡野聡子、正木友則 本人担当部分：第 2 章部分 第 2 章では、日本における NIE の導入の変遷にふれ、どのように大学教育において実践がされてきたか、先行研究を提示した。
１０　都市公園における子どもの遊び場環境づくりの可能性―ＮＰＯと行政の協働による「緑の遊び場（ESD）プロジェクト」を通して―	単著	平成26年10月	奈良学園大学研究紀要第 1 号(pp. 11-23)	本稿は、子どもの遊び場環境の変化にふれながら、おかやまプレーパークの積み上げてきた実践と今回のプロジェクトの事業評価・考察を行うことを目的としている。筆者は、2013 年 3 月から NPO 法人岡山市子どもセンターのプレーパーク運営委員となり、都市公園における子どもの遊び場環境作りに携わってきた。2012 年 4 月から NPO 法人岡山市子どもセンターは、岡山市庭園都市推進課と協働して「緑の遊び場（ESD）プロジェクト」を実施する運びとなり、筆者は、プロジェクトに参加をし、2 年間に渡って記録を取りまとめてきた。実践記録を用いて、「遊び場の設定と専門性の有無のマトリクス」を作成し、遊び場の設定と遊びの種類がどのような人員配置によって運営がされていたかを分析した。今回の分析結果として、緑の遊び場（ESD）プロジェクトの目的である「子どもが岡山市における中心市街地の公園の魅力を、遊びを通して発見し、原風景として子どもの記憶にとどめてもらいたいという願い」には来場者アンケートの回答も含め、十分応えられているものの、「公園内との緑とのかかわりを深めるための遊び場づくりを目的とした」では、合計 53 種類の遊びのうち 8 種類の設定であり、15%の実施率であったことが浮き彫りとなった。今後の改善点として取り上げるべき項目が明らかとなった。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
１１　キャリア教育とキャリア支援の相互展開による実践と課題について―キャリア教育・キャリア支援における教職員連携の取り組みから― （査読有）	単著	平成26年12月	人間教育学研究第２号（pp. 131-138）	大学におけるキャリア教育やキャリア支援は、1997 年以降から本格的に推進されたインターンシップを皮切りとして、職業意識の形成を企図したキャリア関連科目の設置や学生のキャリア発達を促すプログラムの開発など、個々の大学の特色を活かして進められてきた。 キャリア教育は、社会的及び職業的自立を図るために必要な能力の育成を目指して、教員主導のもとにカリキュラムの構成・授業の実施がされてきた。一方のキャリア支援は、従来の就職課で実施してきた就職活動に直結する学生支援を職員が担っている。昨今では、こうしたキャリア教育とキャリア支援を全学的・体系的に見直す動きがある。すなわち、教職員が職務分掌の枠を超えて連携するということである。本稿では、Ｋ大学を事例とし、キャリア教育とキャリア支援の連携について、その実態と課題を明らかにすることを目的としている。 まず、Ｋ大学が育成する人物像について述べた後、キャリア教育とキャリア支援の全体図を提示し、その実態を俯瞰した。次に、キャリア形成科目において、キャリア支援にあたっている職員のヒアリングで得た情報等をもとに、キャリア形成科目のカリキュラムの見直しおよび改善結果を提示した。そのことで、キャリア教育内で把握できなかった個々の学生のニーズを把握することができ、キャリア支援につなぐ体制を整備することが可能となった。今後の課題は、就職活動準備は 3 年生の後期から本格的にはじまるのだが、学習意欲の低下が見られる 1,2 年生に対し、早期のポジティブ・アクションが３年生以降の進路を決める上で重要となると思われる。
１２　子育て支援の多様化に関する一考察―子育て支援施策の揺らぎを越え、「チルドレン・ファースト」の舞台へ―	共著	平成27年3月	幼年児童教育研究第 27 号兵庫教育大学幼年教育コース（pp. 115-126）	本稿では、子育て支援の変遷について国の施策を概観しつつ、その中で、子育て支援の対象者や実施運営主体が多様化していく様子を整理し、子育て支援の今後の課題について検討することを目的としている。「子育て支援」という言葉が行政の諸文書に登場してから 25 年目を迎えるが、その間、子育て支援の実施主体の多様化から、子育て支援が誰によって、どのように実施されているのかが見えにくい状況が生じているという課題があり、本稿において子育て支援の類型化を試みた。類型化では、横軸に支援の実施主体として公的主体、民間主体を取り上げ、縦軸に支援のニーズとして個別的ニーズ、社会的ニーズを取り上げて分類した。その分類に従って、子育て支援の具体的事例を取り上げ、今ある子育て支援の現場が持つ課題について論じた。子育て支援の変遷や事例の考察から、子育て支援は多様な実施主体の活動によって量的拡大をしてきたが、今後は子育て支援の質的保障の検討や点の支援を面の支援へとつなげ、子育て支援のネットワーク体制を確立することが求められると同時に、子どもの最善の利益を考えた「子どもの育ち」における議論の深まりの必要性が明らかとなった。 代表者：岡野聡子 共著者：佐伯岳春、吉富裕子、馬場陽子 本人担当部分：第 1、2、3-（1）、4 章

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				第１章では、多様化した子育て支援を類型化し、その事例を提示することによって、今後の子育て支援の課題について考察する必要性について提示し、第２章では、日本における子育て支援の変遷を公文書や先行研究を用いて論じた。第３章（1）において、子育て支援の類型化を試みた。第４章では、子育て支援の量的拡大から質的保障への転換へといかにつなげるべきかを論じた。
１３　カナダ・ネイバーフッドハウスにおける世代間交流の研究：フロッグホロウネイバーフッドハウスにおける世代間交流プロジェクトの事例から	単著	平成27年9月	奈良学園大学研究紀要第３号(pp.9-27)	本稿では、カナダのフロッグホロウネイバーフッドハウスで 2011 年 4 月から 2014 年 3 月までに取り組まれた世代間交流プロジェクトの実態を明らかにすることを目的としている。 ネイバーフッドハウスには、日常生活に必要なサービスやプログラムが多岐に渡って展開され、多世代が集う場が形成されている。本プロジェクトは、若者と高齢者の交流の質に目を向け、異世代間の相互理解を深めるプログラムを 3 年間に渡って実施したことに意義がある。研究方法は、まず、フロッグホロウネイバーフッドハウスが発行している世代間交流プロジェクトの報告書 *“Generation Citizenship Seniors + Youth Toolkit”* とフロッグホロウネイバーフッドハウスのホームページに掲載されている情報を手掛かりとして、世代間交流プロジェクトの概要を把握した後、ユースサービスコーディネーターA 氏と運営責任者である B 氏、参加者である高齢者の C 氏、若者の D 氏に対してインタビュー調査を実施した。 プロジェクトの主要メンバーは、18 名の若者（30 歳以下）と 6 名の高齢者（50 歳以上）の計 24 名であった。2011 年～2012 年度は、主要メンバーを対象として、①コミュニケーションスキルの獲得、②エイジズムへの理解を深める、 ③アセットマップの作成、④メンターリーダーシップ研修を実施し、2013 年度に 9 つの世代間交流プロジェクトが実施された。主要メンバーをフォーカスグループとして 2 年間という時間をかけて育成していることは、他の世代間交流プログラムには見られないことである。また、補助金終了後も 9 つのプロジェクトのうち 6 つが現在も継続して実施されている。インタビュー結果からは、若者が高齢者との関わりの中で、他者理解を深め、高齢者の持つ生活体験の知に尊敬の念を抱く様子があり、高齢者は、若者と関わりにおいて目の前にいる若者だけとの関係性を構築しようとするのではなく、常に全体に対して配慮や気配りをする姿勢が見られた。
１４　カナダ・ネイバーフッドハウス研究Ⅰ―利用者とボランティアスタッフの双方向的関係性に着目して―　（査読有）	単著	平成27年12月	日本人間教育学研究第３号（pp.181-197）	本稿では、セツルメント運動を源流とするカナダ・ネイバーフッドハウスを研究対象とし、地域コミュニティにおける住民参画型の施設運営の在り方を考察することを目的としている。ネイバーフッドハウスは、日常生活を包括的に支援する体制があり、サービス・プログラムの提供は、ボランティア主導でなされている。そこでは、利用者からボランティアスタッフへ、または、ボランティアスタッフから利用者への役割転換が見られ、どのような内的・外的要因を伴って起こるのか、参与観察および聞き取り調査から検討した。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				研究方法は、参与観察および聞き取り調査である。調査対象施設は、ゴードンネイバーフッドハウスであり、調査日時は、2010年3月1日～3月15日、2010年8月13日～9月11日、調査日時協力者は23名である。調査結果から、23名中、サービス・プログラムを利用し、ボランティア経験を有する者は11名（47.80%）であり、そのうちカナダ出身以外の者は10名（90.9%）であった。 ゴードンネイバーフッドハウスのサービス・プログラムの内容、サービスやプログラムにおけるボランティアスタッフの配置、実施の時間帯を踏まえて、利用者からボランティアスタッフへ、ボランティアスタッフから利用者へとなる様子を、事例を通して検討した結果、利用者からボランティアスタッフとして活動を行う過程には、彼らにとって明確な活動動機があったわけではなく、そこでの活動が日常生活の一部として行われていることであり、「手助け」として捉えられていた。そして、ボランティアスタッフから利用者になる過程には、自己のニーズ充足だけでなく、利用者とのかかわりを通して、ボランティアスタッフとしての役割意識から解放される様子があることが示された。ネイバーフッドハウスには、数字として出てこない「手助け」が数多く存在し、また、それが期待されているのであり、活動を支える大きな柱となっているといえる。
１５　多世代交流としての子育て支援に関する研究―カナダ・ネイバーフッドハウスの事例から―（修士論文）	単著	平成28年3月	兵庫教育大学大学院	本研究は、カナダ・ネイバーフッドハウスを事例として、地域コミュニティを基盤とした日常生活を包括的に支援する体制や、多様な世代が集い合う場に着目し、子育て世代にとって、ネイバーフッドハウスがどのような意義と役割を果たしているかインタビュー調査から検討することを目的としている。調査結果からは、親世代における異世代との関わりは基本的にないと示されたが、親の視点から見た子ども世代における異世代との関わりにおける利点が取り上げられた。また、親世代の利用者が参画者として子育て支援の活動に携わる様子があり、支援を受けているという感覚ではなく、主体的に子育てに関わるという姿勢が見られる。日本の子育て支援の現場においても、利用者自身が子育て支援の活動に参画できるような場や枠組みを作り、利用者―ボランティア―子育て支援員の皆が水平目線でつながり合えるパートナーとしての立ち位置を手に入れることが重要なのではないかと考えられた。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（その他） 「学会発表」 1　保育士養成における人間力育成	－	平成19年9月	全国保育士養成協議会第 46 回研究大会,研究発表論文集（pp.114-115）（城山観光ホテル）	京都光華女子大学短期大学部こども保育学科では、保育者の資質として養成したい人間力の項目に①基礎学力の向上、②生活上の基礎技能の育成を掲げている。教育内容は、辞書の引き方・お箸の持ち方なども含めた実学教育、季節に応じた植物（あさがおやひまわりなど）を学生に育てさせ、季節感を知ることや植物への関心を持たせる環境教育実施について言及した。 代表者：吉村啓子 共同者：松井祐子、松田智子、土谷長子、智原江美、高橋孝輔、下口美帆、岡野聡子 本人担当部分：季節に応じた植物を学生に育てさせ、植物への関心を持たせる環境教育の実施について言及した。
2　保育士養成教育と卒業時の学生満足感との関係	－	平成20年9月	全国保育士養成協議会第 47 回研究大会,研究発表論文集（pp.260－261）（函館国際ホテルロワジールホテル函館）	カリキュラムを工夫し、学生に対する丁寧な教育を実践しているが、その効果については実証的な検証が必要である。教員側の思いだけでなく、学生の客観的な評価を参考にするため、学生満足度調査を実施した。重回帰分析の結果、本学における全ての学科の中で、こども保育学科のカリキュラム内容や教職員の保育職におけるキャリア支援は、学生から高い評価を受けていることが確認された。 代表者：吉村啓子 共同者：松井祐子、松田智子、土谷長子、智原江美、高橋孝輔、下口美帆、岡野聡子 本人担当部分：カリキュラムの検討および、質問紙表の作成を行った。
3　より良い教育を目指すカリキュラム・マップの作成～ＦＤ活動の一環として～	－	平成21年9月	全国保育士養成協議会第 48 回研究大会,研究発表論文集（pp.222-223）（東北福祉大学）	本学において、養成するべき保育者像に適合した教育が実施できているか検討するため、科目ごとの到達目標とディプロマ・ポリシーの各項目の対応表（カリキュラム・マップ）を作成した。結果からは、保育士資格取得の科目には、幅広い教養を身につけるというディプロマ・ポリシーに沿う必修科目が少ないことが明らかとなった。そのため、教養として位置づけている日本の伝統文化教育なども教育実習事前事後指導で取り入れ、保育を学ぶ者の教養の質を高められるように実践も行った。 代表者：吉村啓子 共同者：中瀬惇、松井祐子、梅岡さと江、土谷長子、智原江美、高橋孝輔、下口美帆、岡野聡子 本人担当部分：カリキュラム・マップの作成を担当した。
4　カナダにおけるネイバーフッドハウスの調査から学ぶもの　～日本における「子育て支援」の特徴を通して～	－	平成22年7月	大阪市立大学大学院創造都市研究科教員・院生共同研究シンポジウム（大阪市立大学大学院梅田サテライトキャンパス）	ブリティッシュ・コロンビア州バンクーバー市で行われている地域の子育て支援のフィールド調査結果も含め、日本における子育て支援の現状と課題を述べた。ネイバーフッドハウスにおける子育て支援が親の支援をより強化した内容になっており、専門の労働相談員の常駐や雇用プログラムの開催、誰もが共用で利用できるコミュニティキッチンなどの物的サービスの環境がホリスティック（包摂的）に整えられている特徴について言及した。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
5　現場が求める人材像～聞き取り調査をふまえて～	－	平成22年9月	全国保育士養成協議会第 49 回研究大会,研究発表論文集（pp.174-175）（甲府冨士屋ホテル）	社会に通用する人材を育成するには、学生の就職先が求めている人材像を正確に把握し、それを踏まえた教育内容を構築することが必要である。そのため、保育現場への聞き取り調査および学生アンケート調査を実施した。保育現場が求める人物像の結果では、主体性やコミュニケーション能力を重視するといった語彙が上位に並び、ピアノや絵画制作等の保育技術に関する項目よりも多かった。学生アンケートの結果からは、ピアノや絵画制作といった保育技術の習得に重きを置いていることが確認された。今後もキャリア支援の一貫として、社会人基礎力に示されている「人間性の育成を重視した教育」をより一層行う必要が明らかとなった。 代表者：吉村啓子 共同者：梅岡さと江、辻野孝、松井祐子、土谷長子、智原江美、高橋孝輔、下口美帆、岡野聡子 本人担当部分：聞き取り調査の実施および分析を担当した。
6　学生の進路決定を支援する～実習・就職支援室の活動報告～	－	平成22年9月	全国保育士養成協議会第 49 回研究大会,研究発表論文集（pp.176-177）（甲府冨士屋ホテル）	幼稚園・保育士養成施設として、早期のキャリア支援の重要性について言及した。具体的には、保育現場が求める人物像の調査や保育技術の指導、年 3 回の進路調査を踏まえた個人指導などである。2 年間という短い学生生活の中で、就職活動に費やす時間を有効活用するためにも、早期のキャリア支援プログラムの構築は必要であることが確認された。 代表者：岡野聡子、共同者：吉村啓子 本人担当部分：キャリア支援プログラムの構築を担当した。
7　幼児期における言語力育成と保育者の役割	－	平成24年3月	日本教師学学会第 13 回研究大会,発表要旨集(pp.24-25)（早稲田大学早稲田キャンパス 8 号館）	幼児教育において人的環境としての保育者の役割について提案した。環境に働きかける体験を，保育者がどのように捉え，幼児に言葉がけとして返していくかは保育の中では重要である。特に絵本や遊びを繰り返す中で幼児は多くに力を獲得していく。細切れの知識ではなくそれぞれの繋がりの中で，体験の繋がりや意味に気付いていく。この経験の積み重なりが，幼児自身の自信となり，自分を取り巻く環境政界に対しての信頼となる。そのためには，幼稚園としてどのようなカリキュラムが必要かについて，4 歳児と 5 歳児の具体てきな教育課程を示しながら提案した。 備考：日本教育新聞社の平成 24 年 4 月 16 日付第 12 面にて取り挙げられた。
8　領域「環境」における授業研究～体験活動と授業後の発展学習を重視した授業の展開～	－	平成24年9月	全国保育士養成協議会第 51 回研究大会,研究発表論文集（pp.268-269）(京都文教大学・京都文教短期大学)	領域「環境」の授業では、身近な環境とかかわる力の育成を学生自身に具体的に理解させるため、講義形式の授業と体験活動を取り入れている事例が多くみられる。本講義では、体験活動を取り入れつつ、授業内で取り扱った内容への理解を深めるための発展課題を授業後に学生に与えた。授業アンケートから、学生自身が体験を通して子どもが主体的に環境にかかわりたくなるような環境構成の工夫や仕組み作りを学べた点は大きかったと言える一方で、授業後の発展学習の交流の在り方の工夫が今後の課題として残った。 代表者：岡野聡子 共同者：松田智子 本人担当部分：授業実践を評価し、特に発展課題のあり方を考察した。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
９　大学生のキャリア意識とキャリア支援体制の確立に関する研究-環太平洋大学 3 年生を対象としたアンケート調査を踏まえて-	－	平成24年10月	日本キャリア教育学会第 34 回研究大会,研究発表論文集（pp.86-87）（滋賀大学大津キャンパス）	大学時代は、学生から職業社会への移行期にあたり、自分の将来や人生を考え計画できる力を身につけることがキャリア教育の目的となる。本学では、教育課程内外に捕らわれず、教職員が一丸となってキャリア支援体制を確立しようとしている。そこで、学生のキャリア意識に関する実態を把握するとともにキャリア教育の効果測定も含め、「大学生の職業観に関するアンケート調査」を 3 年生のキャリアデザイン履修者 346 名（回収数 264 名、回収率 78.6%）に実施した。調査結果では、職業・仕事に関する情報源において、学校での授業が 84.1%と最も多く、次に先生との会話が 81.5%を占めるなど、就職先の情報源としての役割を教職員が十分に果たしていることがわかった。しかしながら、大学卒業後の進路では就職希望者が 84.5%であるにもかかわらず、将来就きたい職業の具体名の記述を求めると、未回答が 43.2%との結果であった。このことから、大学は就職を考えるための情報は与えているが、各職業の具体的なイメージ形成という点では学生に対して十分な手助けができていないのではないかと考察できる。今後は、各職業の具体像を提示することが重要であることが明らかとなった。 代表者：岡野聡子 共同者：小野憲一 本人担当部分：調査結果の分析および考察を担当した。
１０　幼児期における言語活動の充実とは～岡山市公立幼稚園教諭を対象としたアンケート調査から～	－	平成25年3月	日本教師学学会第14回大会発表要旨集（pp.60-61）（秋田大学手形キャンパス）	幼稚園の教育現場において言語活動の充実がどの程度意識され、また保育実践としてどのように取り組まれているのか、伝達力や思考力の育成に関する具体的な実践事例にも着目をしながら岡山市内の公立幼稚園教諭を対象としたアンケート調査を通して考察することを目的としている。岡山市内にある公立幼稚園合計 68 ヶ園の 459 名の教諭（常勤・非常勤問わず）を対象、調査時期は、2012 年 9 月 11 日～9 月 22 日の 12 日間である。質問紙の有効回答数は 178 票、有効回収率は 38.7%であった。 「言葉」にかかわるカリキュムを年間指導計画・月案・週案に含めて作成をしている園や、言葉のカリキュラムを園独自で作成している園もあるなど、幼児期における言語活動の充実は着実に進んでいるともいえる。今後は、幼児教育が学校教育のはじまりとして意識される中で、小学校の教育内容との連携・接続を考えた保育実践のあり方をより一層模索する必要があるだろう。
１１　生活科への興味関心を深めるための授業研究（Ⅰ）～大学 2 年生時の開講科目「生活の理解」のアンケート調査から～	－	平成25年6月	日本生活科・総合的学習教育学会第22回全国大会兵庫大会～生活・総合の新たなる枠組みの提案　ふるさと子午線の地から世界標準を～（p.262）（兵庫県立明石高等学校）	本学では、生活科を学ぶにあたって、教材への理解や生活科の内容を学ぶために「生活の理解」を 2 年生の前期に開講し、生活科の指導法については、3 年生の後期に開講をしている「生活科教育法」を受講することになる。生活科を学び始めたばかりの学生にとって、生活科に対するイメージがどのようなものであり、また、授業を受講する中で、生活科への理解がどの程度深まるかについて、量的・質的調査の両面から明らかにすることを目的としている。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				第一回目のアンケート調査では、「生活科」という科目を聞いたことがあるかという問いにて、58%が「ある」と答え、42%が「ない」と答えた。また、小学校時代に「生活科」を学んだことがありますかという問いでは、61%が「ある」と答え、12%が「ない」、27%が「忘れた」と回答した。「生活の理解」に対するイメージを自由記述にて回答を求めたところ、「生活の中における必要なこと（知識・技能）を学ぶ」と43%の学生が回答しており、生活科のキーワードともいえる「気付き」や「体験活動」といった言葉は現段階において見られなかった。また、学生の中には「生活」という言葉を聞いて、衣食住をイメージする者も多く、「家庭科との違いは？」と質問をする学生もいた。今後も調査を続け、全15回の授業終了後に学生の生活科に対するイメージがどのように変容したか明らかにしたい。
１２　キャリア形成科目における授業改善と評価―「キャリアデザイン」における新たな取り組みの授業実践報告―	－	平成25年10月	日本キャリア教育学会第35回研究大会，研究発表論文集（pp. 64-65 ）（名古屋大学東山キャンパス）	本学の 3 年次に開講している「キャリアデザイン」（2単位・卒業必修科目）では、進路選択に必要な知識を身に付けるためだけでなく、自己理解を深める中で自己表現力を高めることを目的としている。本発表では、平成24年度の授業内容本学学生を対象としたキャリア意識調査からキャリア教育における授業の在り方を再検討し、平成25年度の授業実践に活かしたことの事例発表を行った。
１３　幼児期における「言語活動の充実」の測定と評価を考える（Ⅰ）―幼児期の「聞く力」を量的に捉える試み―	－	平成26年3月	日本教師学学会第15回大会発表要旨集（pp. 80-81）（環太平洋大学）	幼児期における「言語活動の充実」の測定と評価について、京大ＮＸ5-8を用いて内容の理解度といった観点から、幼児の「聞く力」の内的要素を量的に捉える試みを発表した。今回の調査結果からは、各課題において、言葉の教育に特に力を入れているＡ園と言葉以外の教育に特に力を入れているＢ園に有意な差を見ることができなかった。今後は、言語活動の充実において、「聞く力」の測定だけでなく、「話す力」、「伝え合う力」の測定方法および評価方法についても検討する必要があると考えている。 代表者：岡野聡子 共同者：吉村啓子 本人担当部分：調査実施、結果の考察を担当した。
１４　幼児期における「言語活動の充実」に関する研究Ⅱ～岡山型一貫教育の中における岡山市立大野幼稚園の取り組み～	－	平成26年5月	日本保育学会第 67 回（近畿ブロック）発表要旨集（p. 542）（大阪総合保育大学）	岡山市における言語活動の充実を軸とした幼小中連携教育の実践を取り上げ、その中における岡山市公立幼稚園の言語活動の充実あるいは言葉の教育の保育実践の取り組みにおける考察を発表した。岡山市は、平成14年から岡山市地域協働学校施策を始め、その中で家庭・学校園・地域社会の三者協働による教育システムの構築や幼小連携および小中一貫教育を推進してきた。また、岡山型一貫教育と名付けた教育活動は、幼児期からの学びの連続性に着目し、幼小中連携教育の実践を行ってきたことが特徴であると言える。岡山市立大野幼稚園は、平成 23～25年度まで、『園生活を楽しむための力の育成』を主題とし、副題に大野幼稚園の指導の重点である「言葉のキャッチボール（話す・聞く・伝え合う）を楽しむ幼児をめざして」を掲げ、実践研究に取り組んできた。指導上の工夫では、指導案に

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				「話す・聞く・伝え合う」の項目を設け、教師が日々の教育・保育活動で意識できるよう配慮した。設定保育の工夫として、降園前の一日の振り返りにおいて、話し方の指導および聞き方の指導、特に話し手の内容を理解して聞いているかを確認しながら聞く力の育成を行っている。また、全教員が研究協議会に参加し、情報共有化に努めている。教師は、日々の教育・保育実践を行う中で、日々の活動が子どもの育ちにどのようにつながっていくかといった「見通しのもてる教育活動」は、教師の教育活動へのやる気や意欲を向上させる意義を含んでいる。「見通しのもてる教育活動」を実践するには、幼小中の教師が集うことのできる研究協議会等を整備することが重要である。
１５　プレーパークと行政の協働による「緑の遊び場（ESD）プロジェクト」の実践報告～岡山市街地の公園を利用した子どもの遊び場づくり～	単独	平成26年9月	こども環境学会合同セミナー研究発表・活動報告梗概集第３号（pp. 46-47）（名古屋工業大学）	本発表は、ＮＰＯ法人岡山市子どもセンターと岡山市庭園都市推進課が協働で実施した「緑の遊び場（ESD）プロジェクト 2012、2013」の活動内容および事業評価について振り返り、都市公園を利用した子どもの遊び場環境づくりの実践報告を行った。2012 年度は 5 箇所の公園にて子どもの遊び場を設定し、2013 年度は 7 箇所に増設した。「子どもが遊ぶ」という視点から見た各公園が持つ課題を提示し、その課題をどのように解決したか本プロジェクトの実施写真を用いて解説した。本プロジェクトの参加者は、年間 2000 名に上っており、保護者アンケートからは、「今後も是非参加したい・参加したい」と 95.2%が回答している。
１６　多世代間交流を可能とする場作り～カナダにおけるゴードンネイバーフッドハウスの事例を通して～	－	平成26年10月	日本世代間交流学会第５回全国大会要旨集（p. 72）（姫路商工会議所）	本発表は、自主企画シンポジウム 1-Aにおける「子育て支援をめぐる世代間交流―高齢者の参加を中心に―」の話題提供者として登壇した。カナダ・バンクーバー市ウエストエンド地区に位置するゴードンネイバーフッドハウスの取り組みを紹介し、多世代間交流を可能とする場作りについて考察した。ゴードンネイバーフッドハウスでは、子育て支援や高齢者支援、雇用支援等、約 30 種類のサービスやプログラムの大半を一時滞在者の留学生から現地の大学生、そしてウエストエンド地区に住むゴードンネイバーフッドハウスの利用者がボランティアスタッフとなって提供している。一つの施設内に多様なサービス提供の場を配し、ここを訪れる全ての人が「与え与えられる」といった互恵性を醸成する場の可能性について述べた。
１７　奈良学園大学におけるキャリア教育の取り組み（Ｉ）―大学１年生を対象とした「キャリアデザインＩ」を通して―	－	平成26年11月	日本キャリア教育学会第 36 回研究大会・研究発表論文集（pp. 73-74）（琉球大学）	奈良学園大学は、奈良産業大学から名称変更をし、従来の学部学科を一新する形で人間教育学部と保健医療学部を設置した新設大学である。筆者は、人間教育学部に属し、キャリア形成科目を中心に担当をしている。本発表では、人間教育学部における 1 年次のキャリア教育の授業実践を報告することを目的とした。人間教育学部は「教育の三つのポリシー」を掲げると同時に、人間教育学部が目指す教育者像である「社会の中で一人の人間として生き抜く力となる豊かな「人間力」を基盤とする、柔軟な「教育力」と高度な「実践力」を備えた教育者」である。これらのポリシーに適う人材育成をするために、１年次では、①自己を知る、②社会を知る、

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				③人生設計の 3 つのユニットに分けて実施した。履修者は 110 人いるため、学部教員に協力をしてもらい、10 グループに分けて活動を行った。グループ学習での学びの成果は、スピーチコンテストという形で確認をした。 1 年次の学びでは、各ユニットを通して、まず自己を振り返る活動と他者を知る活動であったと言える。また、5 月に進路希望調査を実施したところ、教師のみを志望している者が 53 名（51.5%）であり、なんとなく教職を志望した学生像が浮き彫りになる結果が見えた。
１８　大学のキャリア教育における NIE 活用の展望～大学２年生を対象とした「時事教養Ⅰ・Ⅱ」の授業実践～	－	平成26年12月	日本NIE学会第11回仙台大会・発表要集録（p.40）（東北福祉大学）	大学におけるキャリア教育は、1997 年以降から本格的に推進されたインターンシップを皮切りとして、職業意識の形成を企図したキャリア関連科目の設置や学生のキャリア発達を促すためのプログラムの開発など、個々の大学の特色を活かして進められてきた。環太平洋大学では、1 年次から「社会人基礎力の育成」をテーマとしてキャリア教育に取り組んでいる。「時事教養Ⅰ・Ⅱ」は、キャリア教育の充実を目的とし、授業において試験的にＮＩＥを導入することとした。本発表では、その実践内容と成果について報告することを目的としている。ＮＩＥにて取り扱うテーマ設定および内容を構築するに際し、職業観や勤労観にふれられる内容を盛り込んだ。実践の成果では、①新聞活用を通して社会情勢に関心を持て、読書量が増えたこと（学生アンケートから）、②基礎学力の向上（内容確認テストの有意差から）、③意見の質の向上（振り返りシートから）が見られた。 代表者：岡野聡子 共同者：仲田輝康 本人担当部分：授業実践および実践結果の考察を担当した。 備考：本発表内容は、平成 26 年 12 月 24 日の山陽新聞に掲載された。
１９　カナダ・フロッグホロウネイバーフッドハウスにおける世代間交流プロジェクトの取り組み～Ｇｅｎｅｒａｔｉｎｇ Ｃｉｔｉｚｅｎｓｈｉｐ Seniors ＋ Youth の実践から～	－	平成27年10月	日本世代間交流学会第６回全国大会（p.51）（追手門大学大阪城スクエア）	現在では、国内外問わず、世代間交流プログラムの開発が多様な形で展開されている。本研究では、カナダのイーストバンクーバー地区に位置するフロッグホロウネイバーフッドハウスで実施された世代間交流プロジェクト（2011.4～2014.3）を対象として、その概要や取り組みを明らかにすることを目的としている。本世代間交流プロジェクトの目的は、①世代間のつながりを創ること、②世代間のつながりを創るためのスキルを向上させること、③コミュニティが抱えるニーズを確認するスキルを養うこと、④コミュニティに変化を与えるプログラムを開発することの 4 点である。ネイバーフッドハウスには、日常生活に必要なサービスやプログラムが多岐に渡って提供され、日々、さまざまな人、さまざまな世代が施設を訪問する。その中で、多様な世代がそこで出会い、雑談を交わし合う光景を見かけることができるのだが、今回、施設側が世代間交流プロジェクトを実施するにあたって、「交流の質」に着目した点は大変意義深いものであったと思われる。プロジェクト参加者からは、「私たちは何年間かお互いのことを知っていたけれども、互いの人生について知ることはなかった」との意見もあり、他者理解を深めることができた結果も得られた。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
２０　大学のキャリア教育における NIE 活用の展望（2）～大学２年生を対象とした「キャリアディベロップメントⅠ」の授業実践～	－	平成27年12月	日本NIE学会第12回奈良大会（p.37）（奈良教育大学）	本発表は、平成25年度から実施しているキャリア教育における NIE 活用の授業実践を報告することを目的としている。受講生は奈良学園大学人間教育学部２年生（100名）を対象としている。本授業は、NIE 実践を通して、社会人としての幅広い教養を身に付け、伝達力、思考力を磨くことを目的として実施した。授業内容は、①メディアリテラシーへの理解、②課題発見（NIE 実践）、③私から発信する現代的課題の３つのユニットから成り立っている。受講前後のアンケート結果では、新聞を読むことによって、どのような能力が高まると思うかでは、受講後は、「課題発見力」が身に付くとの回答が上位に出現した。新聞を読むことを通して、論点を整理することの必要性を学生が感じたという結果を得ることができた。
２１　保育内容「環境」の教授内容におけるシラバス分析の試み～SPSS Text Analytics for Surveys を活用して～	－	平成29年3月	日本教師学学会第18回大会（pp.54-55）（早稲田大学所沢キャンパス101号館）	保育士および幼稚園教諭を養成する大学教育機関を対象として、保育内容「環境」の教授内容の現状を、各大学のシラバスから分析・考察することを目的としている。授業概要やシラバスの内容の問題点や課題を探ることで、現代社会の諸課題に対応した保育者となる者が学ぶべき事項を研究することには意義があると考えられる。まず、7大学のシラバスを web 上から取得し、その傾向を分析した後、近畿圏内の47大学のシラバス分析を SPSS Text Analytics for Surveys を活用して試みた。授業計画の分析結果からは、自然環境に関する項目の頻度が 45％と最も多く、社会環境に関する項目の頻度が8％と最も少なく出現した。SPSS Text Analytics for Survey を活用したシラバス分析は、これまでの研究において見られず、初めての試みであった。本研究において、活用の有用性についても示すことができたと思われる。
「研究報告書」 １　幼児期における「言語活動の充実」とは～岡山市公立幼稚園教諭を対象としたアンケート調査から～	共著	平成25年2月	発行：環太平洋大学	幼稚園教育要領改訂（2008）にて取り上げられた「言語活動の充実」が、実際の保育現場においてどのように実施されているのか岡山市内の公立幼稚園に勤務をしている教諭を対象としてアンケート調査を実施した。本報告書では、特に伝達力・思考力を育成するための保育実践について、自由記述からの考察を行った。自由記述では、伝達力を意識した保育実践を意識して行っていると回答した者は 68.4％、思考力を意識した保育実践を意識して行っていると回答した者が 60％であった。また、自由記述による伝達力を意識した保育実践に関する具体的な取り組みへの回答が146、思考力では137であった。その内容からは、思考力への取り組みに対する保育者の戸惑いがみられるものが多くあるという結果であった。 A4判　全37ページ 代表者：岡野聡子 共同者：大野鈴子 本人担当部分：アンケート質問紙票の作成および分析、考察を担当した。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
2　緑の遊び場（ESD）プロジェクト 2012～岡山市における中心市街地の公園の利活用について～	共著	平成25年3月	岡山市庭園都市推進課「緑の遊び場（ESD）プロジェクト 2012」	私たちを取り巻く社会環境は、都市化や情報化の進行によって急激な変化を遂げてきた。そうした社会環境の変化は、子どもの育ちにも影響を与えていると言われている。緑の遊び場プロジェクトでは、子どもを中心とした公園の利活用を目的とし、子どものための移動式の遊び場の提供を行った。5つの公園を会場として、約2000 人が利用した。プロジェクトでは、自然物（木の実や葉っぱ）を用いたコラージュ製作や木工作、公園内に生えている樹木の名前などを当てるクイズや探検マップの製作など、遊びながら公園に親しみをもてる仕組みを提案・実践をした。本プロジェクトは、岡山市庭園都市推進課からＮＰＯ法人岡山子どもセンターが 200 万円の助成金を受け取り、実施した。 A4 判　全 55 ページ 発行者：特定非営利法人岡山市子どもセンター 発行責任者：美咲美佐子 編著・執筆者：岡野聡子・道仙八代己 実行委員：美咲美佐子、藤本富多美、 絹川利恵子、窪田昌子、道仙八代己、 松田秀太郎、筒井愛知、岡野聡子 運営実施者：松田秀太郎（プレーリーダー）、特定非営利法人岡山市子どもセンター
3　言葉の保育カリキュラム～幼児期における「言語活動の充実」の工夫～	単著	平成25年7月	公益財団法人福武教育文化振興財団（学校・地域における学力向上等の研究や実践活動への助成）平成 24 年度教育研究助成成果報告書	幼稚園と大学が連携をして、幼児期における言語活動の充実を図るため、岡山市にある大野幼稚園と江西幼稚園と環太平洋大学が連携をして、言語活動の充実に関するアンケート調査を実施した。そのアンケート結果をもとに、伝達力・思考力の育成に着目をして、言語活動における指導方法や環境構成等のあり方について報告書としてまとめた。 A4 判　全 2 ページ 本人担当部分：pp. 10-11
4　緑の遊び場（ESD）プロジェクト 2013～子どもの自由な遊び場を目指して～	共著	平成26年3月	岡山市庭園都市推進課「緑の遊び場（ESD）プロジェクト 2013」	2013 年度は、5 つの公園から 7 つの公園に規模を拡大して「緑の遊び場（ESD）プロジェクト」を実施した。また、前年度の活動に加え、大人が集える場作りの工夫も施した。たとえば、七輪カフェを設けたり、机やベンチを設けて、保護者の方や地域の高齢者の方など、多世代が集える場作りである。子どもを中心としたプロジェクトを通して、多様な立場の人々が出会える空間としての都市公園の利活用方法についても報告書の中で紹介をしている。 なお、本報告書を用いて、こども環境学会第３回合同セミナー（2014. 9）にて活動の発表を行い、奈良学園大学研究紀要（2014. 10）では、事業の総合評価も行った。 A4 判　全 51 ページ 発行者：特定非営利法人岡山市子どもセンター 発行責任者：美咲美佐子 編著・執筆者：岡野聡子・道仙八代己 実行委員：美咲美佐子、藤本富多美、絹川利恵子、 窪田昌子、道仙八代己、松田秀太郎、 筒井愛知、岡野聡子 運営実施者：松田秀太郎（プレーリーダー）、特定非営利法人岡山市子どもセンター

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
5　伝達力・思考力を育む言葉の保育カリキュラムの開発～幼児期における「言語活動の充実」の測定と評価にむけて～	単著	平成26年7月	公益財団法人福武教育文化振興財団（学校・地域における学力向上等の研究や実践活動への助成）平成25年度教育研究助成成果報告書	本研究は、平成24年度の本助成金を利用して得たアンケート調査結果をもとに、幼稚園と大学が連携を取って幼児期の教育現場における言葉の保育カリキュラムの作成の検討および開発をすることをねらいとしている。当初の計画では、言葉の保育カリキュラムの作成まで行う予定であったが、現場での多様な実践の一つ一つが幼児の教育効果を高めているのかについて量的に捉える必要があるため、今回の研究では、伝達力・思考力を育む上でも重要となる「聞く力」についての教育効果測定を試みた。結果として、園の取り組みの違いを結果に反映しにくいことなどから、測定の難しさが浮き彫りになったことを報告書としてまとめた。 A4判　全2ページ 本人担当部分：pp.8-9
6　2015年度吉野青年会議所事業報告書「大学生と遊ぼう！学ぼう！吉野体験ツアー」	共著	平成28年1月	発行：奈良学園大学	吉野広域（3町5村）の高齢化率は35%に達している中で、次世代を担う子ども達が吉野に愛着を感じ、また大人になってからも吉野で働き、生活したいと思えるような環境作りをすることが喫緊の課題となっている。今回、吉野青年会議所と本学ボランティアサークルの学生10名が連携し、吉野広域の小学3年生～6年生を対象としたキャンプイベント実施した。実施日は、平成27年10月31日～11月1日である。小学生の参加者総数は、16名であった。大学生企画では、①アイスブレイク、②吉野スタンプラリービンゴゲーム、③ものづくり、④自由創作の4つを立案・運営した。主に学生による企画立案から運営実施までの過程を報告書としてまとめている。 A4判　全84ページ 報告書監修・編集：岡野聡子 事業実施者：一般社団法人吉野青年会議所、奈良学園大学ボランティアサークル 大学生企画指導：岡野聡子
7　2015年度　ふしぎ☆いっぱい！小学生を対象とした科学遊び・学びの広場プロジェクト報告書	共著	平成28年3月	発行：奈良学園大学	奈良学園大学ボランティアサークルは、財団法人奈良県青少年会館からの寄付金を活用した「青少年の健全育成事業」の助成金（20万円）を取得し、三郷町の小学生を対象とした科学遊び・学びの広場プロジェクトを実施した。全3回の事業を行い、それらを報告書としてまとめた。 第1回：しゃぼん玉づくり名人になろう 実施日：平成27年11月21日（土） 参加者数：58名（子ども38名） 第2回：くるくるアニメーションづくり 実施日：平成27年12月19日（土） 参加者数：27名（子ども12名） 第3回：ピンホールカメラを作ろう 実施日：平成28年1月23日（土） 参加者数：65名（子ども33名） A4判　全35ページ 監修・編集：岡野聡子 事業実施者：奈良学園大学ボランティアサークル 運営指導：岡野聡子

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
8　2016 年度吉野青年会議所事業報告書「大学生と天川村でキャンプ！はじめましてから広がる吉野の“わ”」	共著	平成28年9月	発行：奈良学園大学	昨年度に引き続き、吉野青年会議所と共に奈良学園大学ボランティアサークルと協働で小学生を対象としたキャンプ事業を実施した。今年度は、奈良教育大学、畿央大学の学生と共に、大学生企画として①アイスブレイク、②フィールドビンゴゲーム、③天体観測、④ものづくりの企画立案・運営を行った。奈良学園大学ボランティアサークルの学生は 19 名が参加し、小学生の参加者総数は 23 名であった。実施日は、平成 28 年 8 月 20 日～21 日である。学生による企画立案から運営実施までの過程を報告書としてまとめている。今年度は、「大学生と社会人とのより良い協働関係を結ぶために」をテーマとして、事業実施後にアンケート調査を実施し、その内容も報告書に含めた。 A4 判　全 90 ページ 報告書監修・編集：岡野聡子 事業実施者：一般社団法人吉野青年会議所、奈良学園大学ボランティアサークル 大学生企画指導：岡野聡子
9　2016 年度　見えないものを見る力　小学生を対象とした「科学遊び・学びの広場プロジェクト」報告書	共著	平成29年3月	発行：奈良学園大学	奈良学園大学ボランティアサークルは、前年度の「科学遊び・学びの広場プロジェクト事業」の活動実績から、本プロジェクトが学長指定プロジェクトに採択（26 万円）され、三郷町の小学生を対象とした科学遊び・学びの広場プロジェクトを実施した。全 3 回の事業を行い、それらを報告書としてまとめた。 第 1 回：小さな宇宙 ～万華鏡の世界を探検しよう～ 実施日：平成 28 年 11 月 26 日（土） 参加者数：42 名（子ども 25 名） 第 2 回：空気砲を作ろう ～目で見る空気の力～ 実施日：平成 28 年 12 月 17 日（土） 参加者数：62 名（子ども 38 名） 第 3 回：色が変わる、まほうの水で描く世界 実施日：平成 29 年 1 月 21 日（土） 参加者数：58 名（子ども 28 名） A4 判　全 35 ページ 監修・編集：岡野聡子 事業実施者：奈良学園大学ボランティアサークル 運営指導：岡野聡子
「その他」 1　生活科への興味関心を深めるための授業研究（Ⅱ）～大学 2 年生前期開講科目「生活の理解」受講後アンケート調査から～	単著	平成26年6月	日本生活科・総合的学習教育学会第 23 回全国大会埼玉大会～生活・総合の新たなる枠組みの提案　ふるさと子午線の地から世界標準を～（p. 216）	平成 25 年度の 4 月 10 日の第 1 回「生活の理解」を開講した際、本科目で何を学ぶのかイメージを問うたところ、43%の学生が「生活の中における必要なこと（知識・技能）を学ぶ」と答え、家庭科のイメージが強いと回答する学生もいた。全 15 回の受講を通して、生活の理解に対する学生のイメージがどのように変容し、また前期で得た学びが、どの程度定着しているのかを明らかにするため、質問紙法を用いて追跡調査を実施した。受講半年後の平成 26 年 1 月 21 日の調査結果（有効回答率：65.9%）から、授業で一番印象に残っている内容として、身近なものへの興味関心を高める活動が 47%、自然体験活動に関するものが 39%、その他が 4%、無回答は 14%であった。最も多かった活動内容に関する記述は、グミづくりであり、その印象に残って

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				いる理由とて、「美味しくなかった」や「（普段食べているグミに）砂糖がどれだけ入っているのか知った」とあり、自身にとっての予想外や発見が、半年経過した後も記憶に残っていることが示された。また、他科目との関連性では、科目名を取り上げた者が 57%おり、無回答は 37%であった。最も多かった記述は、「子どもと環境」であった。（※学会発表予定であったが、体調不良のため辞退し、発表内容は要旨集に掲載されている）
２　大学のキャリア教育におけるＮＩＥ活用～事例紹介～	単独	平成26年12月	第１回大学ＮＩＥ研究会（キャンパスプラザ京都 6F 第 2 講習室・京都文教大学サテライト教室）	今回の発表では、基礎学力向上の課題を解決すること、キャリア教育を充実させることを目的として設置された時事教養Ⅰ・Ⅱの科目をめぐって、ＮＩＥ活用の在り方や教材の作成方法について述べた。授業実践では、実際に授業で使用した「第８回若者の離職を考える」を取り上げ、教材作成方法や受講生の感想、実施後の教員側の感想について述べた。授業実践を振り返る中で、学生に教材を与え、無理やり読ませ、考えさせ、書かせ、対話することにこだわるよりも、ある程度一方的に知識として教える場面を増やし、考える力の土台作りをするというのも一つの選択肢であると提案した。

教　育　研　究　業　績　書

平成29年3月31日

氏名　　岡 村　季 光

研究分野	研究内容のキーワード
心理学	青年心理学，教育心理学，居場所，対人関係，自己

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例		
1.　キャリア教育の実践	平成16年４月～平成26年３月	奈良保育学院にて進路指導を継続的に行うため，常勤教員全員がオムニバスに担当する「課題研究」を開講した。授業では，学生の基礎能力向上のため履歴書作成（含．自己ＰＲ，志望動機），業者添削による小論文指導，漢字の学習を主に担当した。１回生後期～２回生前期に至る開講を行い，学生の進路への意識づけを喚起することができた。
2.　ｅ－ラーニングを用いたプレゼンテーション発表実践	平成21年10月～平成22年３月	帝塚山大学経営情報学部の「教育相談」履修学生を対象に，インターネット教育支援サービス・TIESを用いて当該機関補佐員の協力の下，授業内で学生がプレゼンテーション発表を行っている様子を動画撮影し，履修学生内の範囲で公開した。その結果，自己のプレゼンテーション方法について省察を促すことができ，互いの学習内容を授業外でも参照・共有することができるようになった。
3.　障がいへの理解及びＩＴ技能向上への実践	平成23年４月～平成26年３月	奈良保育学院の学生を対象に障がいへの理解及びＩＴ技能向上を目的として「情報処理法」担当教員と連携し，「精神保健」並びに「保育・教職実践演習」授業内で継続的にＰＣ並びにWord，Webメール，PowerPointを使用させた。具体的には課題として発達障がいに関する書籍を自らで探して少なくとも３冊以上読み，その内容及びコメントを所定様式のWordで入力し，ファイルをWebメールにて添付し送付するように求めた。さらに同種の書籍を読んだ者同士ペアを組ませ，PowerPointを作成・発表を求めた。知的障がい児・者施設実習の前後に当該実践を行った結果，学生の障がいに対する理解が進み，さらにＰＣを用いたレポート及びメールの作成スキル，プレゼンテーションスキルが向上した。
4.　ピアヘルパー対策講座の担当	平成23年10月～平成26年３月	奈良保育学院にて平成23年度後期より３年間ピアヘルパー資格取得志望者の募集並びに対策講座の担当を行い，カウンセリング概論・カウンセリングスキル・青年期の課題とピアヘルパーの留意点について授業を行った。その結果，３年間で志願者83名中66名の合格者，合格率約80％の実績を出した。
5.　初歩の心理統計学を用いたデータ分析処理の実践	平成28年4月～現在に至る	奈良学園大学にて平成28年度より開講した「人間教育学ゼミナールⅠ（基礎）」において，高校の数学Ⅰの知識を利用した初歩の心理統計学を用い，調査や実験を通して取得したデータを分析することで，心理学研究法を学んだ。その結果，心理学研究論文に記載されているデータの意味を理解し，卒業研究に必要な文献購読の初歩的スキルが向上した。

事項	年月日	概要
２　作成した教科書，教材		
1.　教育心理学テキスト共同執筆 『改訂版 教育心理学入門－心理学による教育方法の充実－』（再掲）	平成21年10月～平成28年９月	『改訂版 教育心理学入門－心理学による教育方法の充実－』を共同執筆した。帝塚山大学で担当する「教育心理学」（教職科目，２年次配当，半期，必修２単位）にて当該教科書を使用していた。
2.　発達心理学テキスト共同執筆 『やさしく学ぶ発達心理学－出逢いと別れの心理学－』（再掲）	平成23年10月～平成26年３月	『やさしく学ぶ発達心理学－出逢いと別れの心理学－』を共同執筆した。奈良保育学院で担当する「保育の心理学Ⅰ」（専門科目，１年次配当，半期，必修２単位）にて当該教科書を使用していた。
３　教育上の能力に関する大学等の評価		
1.　奈良学園大学における授業満足度アンケート結果	平成27年度	全体平均3.18に比し当該教員の平均は3.20であり，特に満足度は全体平均3.29に比し当該教員の平均は3.50であった。
2.　帝塚山大学における授業満足度アンケート結果	平成28年度	教員の授業運営についての項目（７項目，４件法）は，前期において教員全体の平均3.26に比し当該教員の平均は3.76であり，７項目全てが教員全体の平均より0.52～0.38ポイント上回っていた。 後期において教員全体の平均3.37に比し当該教員の平均は3.74であり，７項目全てが教員全体の平均より0.51～0.24ポイント上回っていた。
４　実務の経験を有する者についての特記事項		
1.　奈良保育学院における教育相談業務	平成13年４月～平成26年３月	奈良保育学院にて学業成績不振者本人及び保護者を呼び出し，学校心理学の見地に基づく学業指導を行った。また，学校不適応を訴える学生の相談業務を随時行い，同時に予防的教育相談業務として遅刻・欠席が目立つ学生等，いわゆる“気になる”学生の把握及び対応を常勤教職員同士で連携を図りながら行っている。
2.　奈良女子高等学校への教育相談補助	平成13年４月～平成18年３月まで	学校法人白藤学園の系列である奈良女子高等学校にて教育相談の担当教職員・保健室の養護教諭と連携し，学校心理士の立場から週１回３時間教育相談室に在籍する生徒のサポートを行っていた。
3.　奈良女子高等学校への出講	平成21年４月～平成26年３月	学校法人白藤学園の系列である奈良女子高等学校保育コースにて「保育演習」の授業を各学年に週に１時間担当することを拝命した。１・２年生には発達心理学及び教育心理学の基礎的内容を教授し，３年生には教育実習及び福祉を専門とする教員と連携し，各自の専門性に応じた授業の展開を企画・実践している。

事項	年月日	概要
5　その他 1.　奈良保育学院 教育保育専門課程 保育科における教育実績	平成12年４月～平成26年３月	奈良保育学院 教育保育専門課程 保育科にて（平成12年４月～非常勤講師，平成13年４月～平成26年３月教育職員として），以下の科目を担当した。 「発達心理学（現．保育の心理学Ⅰ）」（平成12年４月～平成26年３月。平成23年10月～科目名変更） 奈良保育学院 教育保育専門課程 保育科の「発達心理学（現．保育の心理学Ⅰ）」（専門科目，１年次配当，半期，必修２単位）において人間の様々な諸側面の生涯発達に関する内容の授業を行い，それによって，学生に人間のライフサイクルや発達段階及び発達課題について理解させる教育効果があった。 「教育心理学」（平成12年10月～平成26年３月） 奈良保育学院 教育保育専門課程 保育科の「教育心理学」（専門科目，１年次配当，半期，必修２単位）において教育・保育現場で起こる出来事を心理学の視点から解説・捉え直しをする基礎的な内容の授業を行い，それによって，学生に教育・保育における心理学の位置づけについて理解させる教育効果があった。 「保育臨床心理学Ⅰ（現．保育の心理学Ⅱ）」（平成13年４月～平成26年３月。平成23年４月～科目名変更） 奈良保育学院 教育保育専門課程 保育科の「保育臨床心理学Ⅰ（現．保育の心理学Ⅱ）」（専門科目，１年次配当，半期，必修１単位）において幼児の心的理解の方法に関する内容の授業を行い，それによって，学生に子どもの発達や知的能力，性格に関するアセスメント及び保育への貢献について理解させる教育効果があった。 「精神保健」（平成13年４月～平成23年９月） 奈良保育学院 教育保育専門課程 保育科の「精神保健」（専門科目，２年次配当，半期，必修２単位）において子どものメンタルヘルスに関する授業を行い，それによって，学生に発達障がいについて理解させる教育効果があった。 「保育臨床心理学Ⅱ（現．カウンセリング概論）」（平成13年10月～平成26年３月。平成24年10月～科目名変更予定） 奈良保育学院 教育保育専門課程 保育科の「保育臨床心理学Ⅱ（現．カウンセリング概論）（専門科目，２年次配当，半期，必修１単位）においてカウンセリングの理論及び実践に関する内容の授業を行い，それによって，学生にカウンセリング・マインドを育成する教育効果があった。

事項	年月日	概要
2.　大阪薫英女子短期大学 児童教育学科における教育実績	平成17年４月～平成19年９月まで	大阪薫英女子短期大学 児童教育学科の非常勤講師として，以下の科目を担当した。 「乳幼児心理学」（平成17年４月～平成19年９月まで） 大阪薫英女子短期大学 児童教育学科の非常勤講師として担当の「乳幼児心理学」（専門科目，２年次配当，半期，選択１単位）において，乳幼児の発達に関する内容の授業を行い，それによって，学生に乳幼児への捉え方を変え，どのように乳幼児にかかわっていけばよいのかを考えさせる教育効果があった。
3.　帝塚山大学経営情報学部経営情報学科における教育実績	平成17年10月～平成24年３月まで	帝塚山大学 経営情報学部経営情報学科の非常勤講師として，以下の科目を担当した。 「教育心理学」（平成17年10月～平成24年３月まで） 帝塚山大学 経営情報学部の「教育心理学」（教職科目，２年次配当，半期，必修２単位）において教育現場で起こる出来事を心理学の視点から解説・捉え直しをする基礎的な内容の授業を行い，それによって，学生に教育における心理学の位置づけについて理解させる教育効果があった。 「生徒・進路指導論」（旧．教育心理学Ⅱ）（平成18年４月～平成23年９月まで） 帝塚山大学 経営情報学部の「生徒・進路指導論」（旧．教育心理学Ⅱ）（教職科目，３年次配当，半期，必修２単位）において教育現場における生徒・進路指導の理論と実際の現場の様子を紹介する授業を行い，それによって，学生に教育における生徒・進路指導のあり方について理解させる教育効果があった。 「教育相談」（平成18年10月～平成24年３月まで） 帝塚山大学 経営情報学部経営情報学科の「教育相談」（教職科目，３年次配当，半期，必修２単位）において教育相談に関する理論及び実践に関する内容の授業を行い，それによって，学生に教育相談の意義とカウンセリングマインドの必要性について理解させる教育効果があった。
4.　帝塚山大学現代生活学部居住空間デザイン学科における教育実績	平成22年４月～現在に至る	「教育心理学」（平成22年４月～現在に至る） 帝塚山大学 現代生活学部居住空間デザイン学科の「教育心理学」（教職科目，２年次配当，半期，必修２単位）において教育現場で起こる出来事を心理学の視点から解説・捉え直しをする基礎的な内容の授業を行い，それによって，学生に教育における心理学の位置づけについて理解させる教育効果があった。 「教育相談」（平成22年10月～現在に至る） 帝塚山大学 現代生活学部居住空間デザイン学科の「教育相談」（教職科目，３年次配当，半期，必修２単位）において教育相談に関する理論及び実践に関する内容の授業を行い，それによって，学生に教育相談の意義とカウンセリングマインドの必要性について理解させる教育効果があった。

事項	年月日	概要
5.　奈良学園大学人間教育学部人間教育学科における教育実績	平成26年４月～現在に至る	「教職表現力演習Ⅰ」（平成26年４月～平成29年３月まで） 奈良学園大学 人間教育学部人間教育学科の「教職表現力演習Ⅰ」（専門科目，１年次配当，通年，必修２単位）において，新聞記事や評論文等を参照する，あるいは講話を聴き文章を作成する授業を展開した。それによって，学生に言語活動の聴く・読む・話す・書く能力のうち特に「書く力」である「文章表現力」の基礎を身につける教育効果があった。 「教職表現力演習Ⅱ」（平成27年４月～平成29年３月まで） 奈良学園大学 人間教育学部人間教育学科の「教職表現力演習Ⅱ」（専門科目，２年次配当，通年，必修２単位）において，アカデミックな文章を読み，書くためのトレーニングを行った。具体的には，文章の論理性の理解，データの読み方，書籍輪読，内容発表およびディスカッションである。それらの取り組みによって，学生に言語活動の聴く・読む・話す・書く能力が養われ，特に「書く力」である「文章表現力」を身につける教育効果があった。 「教育心理学Ａ（初等）」（平成27年４月～現在に至る） 奈良学園大学 人間教育学部人間教育学科の「教育心理学Ａ（初等）」（専門科目，２年次配当，半期，必修２単位）において，就学前・初等教育現場で起こる出来事を心理学の視点から解説・捉え直しをする基礎的な内容の授業を行い，それによって，学生に就学前・初等教育における心理学の位置づけについて理解させる教育効果があった。 「教育心理学Ｂ（中等）」（平成27年４月～現在に至る） 奈良学園大学 人間教育学部人間教育学科の「教育心理学Ｂ（中等）」（専門科目，２年次配当，半期，選択２単位）において，中等教育現場で起こる出来事を心理学の視点から解説・捉え直しをする基礎的な内容の授業を行い，それによって，学生に中等教育における心理学の位置づけについて理解させる教育効果があった。 「人間教育学ゼミナールⅠ（基礎）」（平成28年４月～現在に至る） 奈良学園大学 人間教育学部人間教育学科の「人間教育学ゼミナールⅠ（基礎）」（専門科目，３年次配当，通年，選択４単位）において，ライフステージにおいて特に重要視されている青年期を中心とした発達の理論を学習するとともに，青年期の諸側面について心理学の視点から理解を深めるた。また，卒業論文を視野に入れ，パソコン操作技能及び統計の基礎的知識習得にも取り組んだ。その結果，心理学研究論文に記載されているデータの意味を理解し，卒業研究に必要な文献購読の初歩的スキルが向上した。 「教育相談の理論と方法Ａ（初等）」（平成28年10月～現在に至る） 奈良学園大学 人間教育学部人間教育学科の「教育相談の理論と方法Ａ（初等）」（専門科目，３年次配当，半期，必修２単位）において，初等教育現場における教育相談の活動並びにカウンセリングに関する基礎的な知識を学んだ。それによって，学生に初等教育における教育相談の理論と方法について理解させる教育効果があった。

事項	年月日	概要
奈良学園大学人間教育学部人間教育学科における教育実績（続き）		「教育相談の理論と方法Ｂ（中等）」（平成28年10月～現在に至る） 奈良学園大学 人間教育学部人間教育学科の「教育相談の理論と方法Ｂ（中等）」（専門科目，３年次配当，半期，選択２単位）において，中等教育現場における教育相談の活動並びにカウンセリング及び心理教育に関する基礎的な知識を学んだ。それによって，学生に中等教育における教育相談の理論と方法について理解させる教育効果があった。 「保育相談支援」（平成28年10月～現在に至る） 奈良学園大学 人間教育学部人間教育学科の「保育相談支援」（専門科目，３年次配当，半期，選択２単位）において，幼児教育現場における保育相談の活動並びにカウンセリングに関する基礎的な知識を学んだ。それによって，学生に初等教育における保育相談の理論と方法について理解させる教育効果があった。
6. 平成26年度奈良学園大学公開講座の登壇	平成26年７月12日	平成26年度奈良学園大学公開講座に登壇し，講演を行った。 本講演の内容は，1)様々な学際領域から「居場所」をどのように捉えられているのか，2)実証的研究から見えてくる「居場所」とは何なのか，3)「居場所」づくりにはどのような視点が重要なのか，の３点であった。
7. 奈良女子大学文学部人間科学科における教育実績	平成27年10月～平成28年３月	「青年心理学特殊研究」（平成27年10月～平成28年３月） 奈良女子大学文学部の「青年心理学特殊研究」（専門科目，２年次配当，半期，選択２単位）において，生涯発達に関する理論を理解し，青年期のライフスタイルならびにアイデンティティの発達に重きをおいた諸側面について授業を行い，それによって，学生に自らのライフを振り返り展望しながら論理的に思考する教育効果があった。
8. 大和高田市立看護専門学校看護学科における教育実績	平成28年４月～現在に至る	「人間の心・精神」（平成28年４月～現在に至る） 大和高田市立看護専門学校看護学科の「人間の心・精神」（１年次配当，半期，１単位）において，多岐にわたる心理学の領域，研究及び歴史についての基礎的知識を学んだ。本講義によって，心の働きやシステムについて理解を深め，心理学の歴史や研究における知識を得られる教育効果があった。
9. 三郷町立西部保育園の新任研修講師	平成28年10月３日	三郷町立西部保育園の新任研修講師として，「子ども理解を深める」という演題で講義を行った。具体的には，「神戸少年の街版 コモンセンス・ペアレンティング」を紹介し，大人が子どもにどのようにかかわるのが適切な方法か，ロールプレーも交えた実践的な演習課題に取り組んだ。本講義によって，子どもへの適切なかかわり方の方法論を獲得する教育効果がみられた。
10. 一般社団法人日本精神科看護協会品川研修センターにて教育理論研修会（講義内容：「教育心理－青年心理－」）の講師	平成28年11月16日	一般社団法人日本精神科看護協会品川研修センターにて教育理論研修会「教育心理－青年心理－」の講師を務めた。内容は，青年期のライフスタイルならびにアイデンティティの発達に重きをおいた諸側面について理解を深めた。本講義によって，青年期の諸側面について深い知識を得られる教育効果があった。

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1　資格，免許		
1. 修士（教育学）	平成13年３月	奈良教育大学　第817号 「修士論文題名：自己及び他者との関係における『居場所』の個人差」
2. 教員免許	平成13年３月	中学校教諭専修免許状（社会）取得（学校心理学付記）（平12中専修第20号，奈良県教育委員会）
3. 学校心理士	平成16年11月	第82689号 （平成26年12月更新，平成31年12月まで有効）
2　特許等		（な　し）
3　実務の経験を有する者についての特記事項		
1. 教務全般の企画・運営	平成13年４月 ～平成26年３月	奈良保育学院にて教務係としてカリキュラム・時間割・年間行事の編成，成績管理，入試業務，奨学金業務，紀要編集委員その他関連する事務処理を主任の立場で活動した。
2. 学年担当（担任）	平成13年４月 ～平成26年３月	奈良保育学院の学年担当（担任）を受け持ち，学生の日常における生活指導，学校心理学の見地に基づく成績不振者への学業指導及び学校不適応を訴える学生及びその保護者の相談等を受け持った。
3. 学生自治会顧問	平成14年４月 ～平成26年３月	奈良保育学院学生自治会の顧問として学生主催の新入生歓迎会，学院祭（体育祭・文化祭），送別会等の企画運営を監督した。
4. 進路指導	平成16年４月 ～平成26年３月	奈良保育学院の進路担当教員と連携して進路指導の科目（「課題研究」）を立ち上げ，１回生から２回生にかけて継続的に進路活動を行う体制を築いた。
5. 広報・募集活動	平成20年４月 ～平成26年３月	奈良保育学院の募集活動の一環として業者と連携してパンフレット・ポスター・ホームページ作成にかかわり，他教員と分担して近隣の高等学校へ訪問し広報活動を行った。
6. 広報委員会における活動	平成26年４月 ～平成27年３月	奈良学園大学にて広報委員会に所属し，委員として大学案内の内容，オープンキャンパスの内容企画，今後の広報活動及び戦略について検討を行った。
7. 教務委員会における活動	平成26年４月 ～現在に至る	奈良学園大学にて教務委員会に所属し，委員としてＧＰＡ基準，試験要領の検討，追・再試験に関する取り扱い，入学前他大学等既修得単位の認定，保育士資格取得に関する整備，卒業論文にかかる諸規定の整備について活動している。
4　その他		
1. 平成17年度全国保育士養成セミナー及び全国保育士養成協議会第44回研究大会活動	平成16年６月 ～平成17年９月まで	平成17年度全国保育士養成セミナー及び全国保育士養成協議会第44回研究大会委員に任命され，シンポジウム分科会の運営補助及びポスター発表会場の座長を務めた。
2. 平成24年度全国保育士養成セミナー及び全国保育士養成協議会第51回研究大会活動	平成23年６月 ～平成24年９月まで	平成24年度全国保育士養成セミナー及び全国保育士養成協議会第51回研究大会委員に任命され，シンポジウム分科会の運営補助に携わった。
3. 関西心理学会事務局及び常任委員会活動	平成25年４月 ～現在に至る	関西心理学会事務局及び常任委員に任命され，平成29年３月まで学会事務局及び常任委員会の運営に携わった。また，平成27年４月より幹事に就任し，平成29年３月まで事務局の取りまとめを行った。なお，平成29年４月より監事に就任し，会計監査に携わる予定である。

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
（著書） 1. 改訂版 教育心理学入門－心理学による教育方法の充実－	共著	平成21年３月	小林出版	教育心理学の基礎的事項を簡潔に解説し，教職を目指す学生の参考書として有益であるように構成されている。改訂版では最近の教育心理学のトピックや教員採用試験などで出題される重要項目を追加した。 Ｂ５判　全259頁 編　者：豊田弘司 共著者：稲森涼子・森田健宏・向居　暁・岡村季光・沖林洋平・豊田裕美・豊田弘司（ＡＢＣ順） 本人担当部分：「第２章　児童・生徒の理解（Ⅱ）－知的能力の理解－」のうち「１．知能（intelligence）とは」及び「２．知能検査（intelligence test）とは」（pp.32-42.）の部分を単著。 知能とは様々な能力の総合体であるという定義のもと，一般知能（ｇ）に関する解釈を中心に古典的知能観，すなわち一般知能（ｇ）を想定したスピアマンの２因子説と想定していないサーストンの多因子説を紹介した。その後，新しい知能観で提唱されている概念の比較検討を行った。また，教育相談等で現在よく用いられているビネー式知能検査（田中・ビネー知能検査Ｖ）及びウェクスラー式知能検査（ＷＩＳＣ－Ⅲ）の概略を説明し，検査結果の適切な利用方法を述べた。
2. やさしく学ぶ発達心理学－出逢いと別れの心理学－	共著	平成23年３月	ナカニシヤ出版	胎児期から老年期まで生涯発達の段階ごとに，各章で発達のとらえかた，発達心理学の基礎的な内容を解説し，人生の節目に出逢いと別れを繰り返しながら対人関係が成長していく過程が紹介されている。 Ａ５判　全237頁 編　者：浜崎隆司・田村隆宏 共著者：荒木美代子・岡村季光・岡本かおり・加藤孝士・澤田友希・田村隆宏・朴　信永・浜崎隆司・丸山（山本）愛子・森田泰介・森野美央・八島美菜子・湯澤美紀（50音順） 本人担当部分：「第３章第２節　拡がる子どもの世界」（pp.67-79.）の部分を単著。 第１にことばの発達において，ことばを話し始める前に乳児が他者に意思疎通を図ろうとする具体例，初語が出てからの発語量とことばの理解度の関係，２語文の習得を始めとした文法の習得，文字の読み書きを習得しことばを楽しむ幼児の様子を紹介した。第２に遊びの発達において，乳幼児における遊びの重要性，乳児自身の体を用いた遊び，表象機能の発達に伴う見立て・ふり遊びとその具体例，ひとり遊びから集団遊びへの移行と特徴を紹介した。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
3. 教育フォーラム第55号「実践的思考力・課題解決力を鍛える：PISA型学力をどう育てるか」	共著	平成27年２月	金子書房	実践的な諸課題に向けての解決をどう図っていくのか，そのために必要となる思考力や問題解決力をどのような形で鍛えていくか，実りある着実な学習活動の展開を具体的に提案している。 Ａ５判　全160頁 編　者：梶田叡一 共著者：伊崎一夫・井上信子・大内善一・岡村季光・梶田叡一・加藤　明・金澤孝夫・鎌田首治朗・蔵あすか・萩原憲二・藤井幸一・藤田英治・宮岸　洋（50音順） 本人担当部分：「一人ひとりの「居場所」をどうつくるか」（pp. 111-121）の部分を単著。 これまでの先行研究から居場所を「個人性－社会性」「主観性－客観性」の軸で捉えることが可能であることを示した。また，実証的研究の知見から「居場所がない」と感じる者に精神的な安定・安心を感じるような経験を提供すること，居場所感を毎日感じられる経験を積み重ねること，大人や仲間の支えにより成長・自立を図ることが重要であることを示唆した。
（学術論文） 1. 居場所（「安心できる人」）と情動知能が孤独感に及ぼす効果	共著	平成19年11月	奈良教育大学紀要第56巻１号 pp. 41-45.	本論文では『居場所』とは「自分が安心していられる場所」と定義づけ，『居場所』の一側面である「安心できる人」と情動知能が孤独感に与える影響を重回帰分析により検討した。その結果，情動知能が高い場合には『居場所』による孤独感の違いはないが，情動知能が低い場合には居場所による孤独感の違いが生じた。本研究から一律に『居場所』をもつことが重要なのではなく，個人の特性に応じた対応が必要であることが示唆された。 共著者：豊田弘司・大賀香織・岡村季光 本人担当部分：データの結果に基づく考察部分を担当
2. 大学生における他者意識と情動知能の関係	共著	平成20年３月	奈良教育大学教育実践総合センター紀要第17号 pp. 29-34.	大学生における他者意識と情動知能における他者情動の認識と理解の関係を検討した。その結果，内的他者意識，空想的他者意識と関連があり，外的他者意識はほとんど関連性はなかった。また，他者意識と恋愛感情の関係を情動知能の水準ごとに検討した結果，女子において外的他者３つの他者意識がいずれも狂気的感情の関連性があり，空想的他者意識は情動知能の水準が低い者ほど狂気的感情及び熱愛的感情と関連のあることが示された。 共著者：豊田弘司・森田泰介・岡村季光・稲森涼子 本人担当部分：データの結果に基づく考察部分を担当
3. 奈良保育学院における領域「表現」の取り組みについて　―表現作品発表会の教育的意義―	共著	平成20年12月	奈良保育学院研究紀要第13号 pp. 23-32.	奈良保育学院作品発表会当日，舞台上や会場で作品発表する学生と客席で鑑賞する保育園・幼稚園児をそれぞれビデオカメラで撮影し，作品の同じ場面におけるそれぞれの映像を比較することで，両者の反応を観察・検討した。その結果，学生の表現に子どもが動きを合わせるなど，同じ場と空間を共有し，表現されたものに共感している反応が顕著にみられた。 共著者：増原喜代・岡村季光・岩城正幸・谷本一榮 本人担当部分：データ収集・分析・結果・考察部分を担当

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
4. 保育者養成における領域「表現」と人間関係づくりグループワークの関係	共著	平成20年12月	奈良保育学院研究紀要第13号 pp. 33-38.	身体表現作品創作と同時期に，カウンセリング・マインド育成の一環として，マイクロカウンセリング演習の一部を用い，人間関係づくりの習得を目的としたコミュニケーションのグループワークを実施し，身体表現作品における表現力との関連を検討した。その結果，身体表現作品創作及び身体表現力とグループワークの理解度評価に正の相関がみられた。本研究は他教科目との有機的関連を検証した点において教育的意義のあるものと言えよう 共著者：岡村季光・増原喜代 本人担当部分：データ収集・分析・結果・考察部分を担当
5. 保育士養成校における身体表現作品に関する一研究　―発表の場で学生と鑑賞者は何を共有しているのか―	共著	平成20年12月	奈良保育学院研究紀要第13号 pp. 39-43.	本研究では学生と鑑賞する子どもの両側面から，舞台発表の場で両者が共通のイメージを想起しているか否かを検討した。具体的には学生による舞台発表の数日後，保育現場で発表会のことを子どもに想起させ，絵画を描かせた。その結果，学生側が想定していた身体表現が子ども側に印象づけられたことが明らかとなり，舞台発表の場において作品を媒介とした学生－子ども間の意識の共有が示唆された。 共著者：岡村季光・増原喜代・岩城正幸・谷本一榮・坂本　渉 本人担当部分：データ収集・分析・結果・考察部分を担当
6. 青年期における『居場所』の射程	単著	平成22年12月	奈良保育学院研究紀要第14号 pp. 29-38.	本論文では居場所における字義的定義から一般的に居場所がどう捉えられているのかを概観し，「居場所がない」という表現と関連が深いとされる不登校の問題を考察した。さらに居場所研究における実証的研究から，今後居場所を理解するための枠組みと可能性について展望した。具体的には近年注目されている「ひとりで過ごす居場所」や愛着（アタッチメント）との関連が考えられる。
7. 保育士養成校における身体表現作品に関する一研究　―鑑賞者の反応に関する検討―	共著	平成22年12月	奈良保育学院研究紀要第14号 pp. 7-14.	身体表現作品を発表した後に学生にふりかえりを行う中で，鑑賞者の反応に関する検討を３か年度にわたり行った。その結果，1)おおよそ７割の学生が子どもの反応を見ていた，2)反応は想定内の反応と想定外の反応があったが，いずれも積極的な意味で捉えていた，3)幼稚園・保育園児は素直な反応を出しているのに対し，中学生は自意識を感じ素直な反応が乏しいなど，年齢により反応の出し方に差異があることを感じていたが，学生側は発達段階による反応の差異を受け入れていることが伺えた。 共著者：岡村季光・増原喜代 本人担当部分：データ収集・分析・結果・考察部分を担当
8. 平成19年度熊本市内の保・幼・小・中学校保護者を対象とした児童虐待防止における意識に関する調査研究　―就労有無との関係―	共著	平成22年12月	奈良保育学院研究紀要第14号 pp. 15-22.	第１筆者が平成19年度に熊本市内の保・幼・小・中学校保護者を対象とした児童虐待に関する保護者の意識調査を実施。第２筆者が保護者の意識傾向について分析した。その結果，1)育児疲れ・孤独感・相談相手の有無と子どもへの虐待懸念の間に関連がみられた。2)就労有無と子どもへの虐待懸念の間に関連がみられた。上述の結果から，社会とのつながりが希薄になっている保護者へのサポートの必要性が示唆された。 共著者：谷口　卓・岡村季光 本人担当部分：データ分析・結果・考察部分を担当

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
9. 中学校の職場体験が現在の進路決定に及ぼす影響　―保育学生と一般学生の比較から―	単著	平成24年12月	奈良保育学院研究紀要第15号 pp. 65-69.	中学校時のキャリア形成を探索的に研究するため，近年さかんに行われている中学校時における職場体験の有無・内容が現在の進路決定に及ぼした影響を保育を専攻する学生（保育学生）と他を専攻する学生（一般学生）で比較検討した。その結果，現在の専攻を考えた時期は一般学生より保育学生の方が早い傾向にあり，保育学生の方が一般学生と比して，現在考えている進路内容に中学校時の職場体験の影響があると自覚する者が多いことを見いだした。
10. 保育士養成校における身体表現作品に関する一研究　―学年間における相互評価に関する検討―	共著	平成24年12月	奈良保育学院研究紀要第15号 pp. 51-55.	２回生が授業で創作した身体表現作品（以下，作品）を発表した後に下級学年・当該学年の各学生が作品をどのように捉えているのか比較検討した。その結果，両回生共通して「動き」が印象に残る項目の上位に位置づけられていた。また，２回生の方が経験を積み重ねている分，作品に対する客観的な視点が養われていることがうかがえた。 共著者：岡村季光・増原喜代 本人担当部分：データ収集・分析・結果・考察部分を担当
11. 「居場所」（安心できる人）とひとりで過ごす感情・評価の関係	単著	平成26年９月	奈良学園大学研究紀要第１号 pp. 191-197.	安心できる人の評定とひとりで過ごすことに関する感情・評価の関係を検討した。その結果，“自分ひとり”の安心感を高く評定するものは，ひとりで過ごすことに肯定的な捉え方をしていることが示唆され，ひとりで過ごす感情・評価との関係が明らかになった。これはひとりで過ごすことに必ずしもネガティブな感情を抱いていないことを示唆するものであった。
12. 保育学生におけるコラージュ作品の形式分析及び作品印象に関する基礎的研究	共著	平成26年12月	奈良保育学院研究紀要第16号 pp. 103-110.	本研究の目的は，コラージュ作品の表現特徴を多方面にわたり分析し，さらに作品印象に関してテキストマイニングを用いて定量的に検討することであった。保育専門学校に所属していた１回生367名を対象に検討した結果，先行研究とほぼ合致する結果が得られ，コラージュ療法における表現特徴が，心理臨床のアセスメントに有益な指標をもたらすであろうことが示唆された。 共著者：岡村季光・吉野さやか 本人担当部分：データ収集・分析・結果・考察部分を担当
13. コラージュ作品と性格特性の関係：表現特徴とエゴグラムパターンの検討 （査読付）	共著	平成26年12月	人間教育学研究第２号 pp. 157-162.	本研究の目的は，性格特性とコラージュ作品の関連を検討することであり，387名の専門学校生にエゴグラム（TEGII）及びコラージュ作品制作を実施した。その結果，エゴグラムパターンにより切片数，余白，作品の満足度に違いがみられることが明らかになった。すなわち，1)切片数が多い者は心的エネルギーが高い性格特徴である可能性が，2)余白が多い者は心的エネルギーが低く，依存的で気分・感情の不安定さを伴う性格特徴である可能性が，3)満足度が低い者は自己否定の構えを持っている可能性が，それぞれ示唆された。 共著者：岡村季光・吉野さやか 本人担当部分：データ収集・分析・結果・考察部分を担当

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
14. 青年期後期における新旧の同性友人への安心感と学校適応感の関連	単著	平成27年９月	奈良学園大学研究紀要第３号 pp. 229-233.	本研究の目的は友人関係機能の「安定化機能」に着目し，一緒にいて「安心できる」という本人の主観的感情を手がかりにして友人を想起させ，新旧の同性友人の選択有無と現在の学校適応感との関連を検討することであった。新旧の同性友人の選択有無により群分けを行い，学校適応感との関連を検討した結果，新友人を選択した者が，旧友人のみを選択した者あるいはいずれも選択しなかった者に比して，現在の学校適応感は高かった。本研究結果は新旧友人関係が学校適応感に影響を及ぼす可能性を示唆するもので，今後の学校適応を考える上で意義のあるものと考えられた。
15. 「居場所」（安心できる人）を規定する要因―成人愛着スタイルによる検討― （査読付）	共著	平成27年12月	人間教育学研究第３号 pp. 175-180.	本研究は対人関係の表象として挙げられる愛着スタイルに着目し，安心できる人の程度の評定に与える影響を検討した結果，男子において安定型とアンビバレント型が，女子においてアンビバレント型と回避型が予測変数として有意であることが明らかとなった。本研究の結果は，居場所によって愛着スタイルが安心できる程度に及ぼす効果が異なることを示している。それ故，安心できる程度を適応の指標とした場合には，愛着スタイルが適応に及ぼす効果に対して，居場所が調整変数として機能したことが示唆された。 共著者：岡村季光・豊田弘司 本人担当部分：データ収集・分析・結果・考察部分を担当
16. 「居場所」（安心できる人）を規定する要因―ひとりで過ごす感情・評価及び成人愛着スタイルによる検討―	共著	平成28年11月	奈良教育大学紀要第65巻１号（人文・社会） pp. 27-34.	本研究は，対人関係の表象として挙げられるアタッチメントのパターンである愛着スタイルに着目し，「居場所」における安心できる程度の評定値，ひとりで過ごすことに関する感情・評価及び成人愛着スタイルの関連を検討した。その結果，安心できる人を規定する要因として，男女ともに“自分ひとり”は“孤独・不安”，“母親”は“見捨てられ不安”がそれぞれ予測変数として有意であった。また，“現学校以降の友人”は男子が“親密性の回避”，女子は“見捨てられ不安”がそれぞれ予測変数として有意であった。 共著者：岡村季光・豊田弘司 本人担当部分：データ収集・分析・結果・考察部分を担当
17. 保育者の子育てに関する一考察　―わが子の子育ての悩みに注目して―	共著	平成29年３月	奈良学園大学研究紀要第６号 pp. 115-124.	本研究では，第１に，現代の保育者がどのような子育ての悩みがあるのかを明らかにすること，第２に，保育者の子育てに関する悩みと，保育者としてのアイデンティティ形成，パーソナリティ，職務についての認識，職業観との要因との関連について検討した。その結果，各変数は年齢及び保育者歴による影響が考えられたため，両者の要因を統制した偏相関係数を子の有無別で算出し検討した。子のいない者は，子育ての経験のなさが自信のなさにつながっている可能性がある一方，保育者として誇りを持っている者は，他者から認められることが支えになっていることが考えられた。また，子のいる者は，子育て経験が自らの子育て経験が保育者としての誇り等とつながっていることが考えられる一方，保育者であることに迷いや戸惑いを感じている者は，アイデンティティの揺らぎを感じていることがうかがえた。 共著者：岡村季光・間井谷容代・谷本一榮 本人担当部分：データ分析・結果・考察部分を担当

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
18. 対人関係が「居場所」（安心できる人）に及ぼす影響　―友人関係及び家族関係による検討―	共著	平成29年３月	奈良教育大学次世代教員養成センター紀要第３号 pp. 83-87.	家族並びに友人への親和欲求が，居場所（安心できる人）評定に及ぼす影響を検討した。その結果，1)男女ともに，“父親”，“母親”及び“きょうだい”と家族との親密性は中程度の正の相関であった。2)男子において，“現学校以前の友人”“現学校以降の友人”と家族との親密性，“父親”“きょうだい”及び“現学校以前の友人”と友人との親密性はいずれも中程度の正の相関であった。一方，友人との親密性において，男子は“現学校以前の友人”と中程度の正の相関であったのに対し，女子は“現学校以降の友人”と中程度の正の相関であった。3)“父親”，“母親”及び“きょうだい”は男女ともに，家族との親密性が予測変数として有意であった。友人においては，“現学校以前の友人”において，男女ともに友人との親密性が予測変数として有意であった。一方，“現学校以降の友人”においては，女子のみ有意であった。 共著者：岡村季光・豊田弘司・多根井重晴 本人担当部分：データ収集・分析・結果・考察部分を担当
（その他） 「学会抄録」 1. 「居場所」（安心できる人）を規定する要因―内的作業モデルによる検討―	共著	平成19年９月	日本教育心理学会第49回総会発表論文集 p. 126. （文教大学越谷キャンパス）	対人関係の表象として挙げられる愛着理論の内的作業モデルに着目し，安心できる人の程度の評定に与える影響を検討した結果，安心できる場面の想定として「自分１人でいる」「家族といる」「友人といる」いずれの場面も「回避」尺度が予測変数として有意であることが明らかとなった。 共同発表者：岡村季光・豊田弘司 本人担当部分：データ収集・分析・結果・考察部分を担当
2. 人間関係が「居場所」（安心できる人）に及ぼす影響（１）－友人関係による検討－	共著	平成20年３月	日本発達心理学会第19回大会発表論文集 p. 358. （大阪国際会議場）	「自分ひとり」「家族といる」「友人といる」それぞれの場面において安心感を評定し，友人関係尺度との関連を検討した。その結果，「自分ひとり」の場面においては「ふれあい回避」低・「気遣い」低群の方が安心できる評定が高く，「友人といる」場面においては「ふれあい回避」低・「気遣い」高群の方が安心できる評定が高かった。 共同発表者：岡村季光・豊田弘司 本人担当部分：データ収集・分析・結果・考察部分を担当
3. 人間関係が「居場所」（安心できる人）に及ぼす影響（２）－家族関係による検討－	共著	平成20年３月	日本発達心理学会第19回大会発表論文集 p. 359. （大阪国際会議場）	「自分ひとり」「家族といる」「友人といる」それぞれの場面において安心感を評定し，家族との親密性との関係を検討した。その結果，家族との親密性が強いほど，「家族といる」場面での評定が高かった。 共同発表者：豊田弘司・岡村季光 本人担当部分：データ収集・分析・結果・考察部分を担当
4. 保育士養成校における作品発表とその鑑賞者との関わり	共著	平成20年５月	日本保育学会第61回大会発表論文集 p. 371. （名古屋市立大学）	身体表現作品発表会当日，舞台上や会場で作品発表する「表現する学生」（表現者）と客席で「鑑賞する子ども」（鑑賞者）をそれぞれビデオカメラで撮影し，作品の同じ場面におけるそれぞれの映像を比較することで，両者の反応を観察・検討した。その結果，表現者と鑑賞者が，同じ場と空間を共有し，表現されたものに共感している反応が顕著にみられた。 共同発表者：増原喜代・岡村季光 本人担当部分：データ収集・分析・結果・考察部分を担当

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
5. 保育者養成校における身体表現作品をめぐって―発表の場で学生と鑑賞者は何を共有しているのか―	共著	平成20年５月	日本保育学会第61回大会発表論文集 p. 372. （名古屋市立大学）	学生と鑑賞者の両側面から，舞台発表の場で両者が共通のイメージを想起しているか否かを検討した。その結果，学生側が想定していた身体表現が鑑賞者側に印象づけられたことが明らかとなり，舞台発表の場において作品を媒介とした学生－鑑賞者間の意識の共有が示唆された。 共同発表者：岡村季光・増原喜代 本人担当部分：データ収集・分析・結果・考察部分を担当
6. Classification of Ibasho “Person who eases your mind” in female undergraduates（女子大学生における「安心できる人」の類型化）	単著	平成20年７月	Poster presented at 29th International Congress of Psychology, Berlin, Germany （International Congress Centrum Berlin）	女子大学生らに「安心できる人」の多重選択を数量化３類により検討した結果，“自分ひとり”“家族”“友人・恋人”の３群に分類できることを見いだした。
7. 「居場所」（安心できる人）とひとりで過ごす感情・評価の関係	単著	平成21年３月	日本発達心理学会第20回大会発表論文集 p. 366. （日本女子大学）	安心できる人の評定とひとりで過ごすことに関する感情・評価の関係を検討した。その結果，“自分ひとり”の場合の評定と「孤独・不安」尺度は中程度の負の相関であった。これはひとりで過ごすことに必ずしもネガティブな感情を抱いていないことを示唆するものであった。
8. 保育士養成校における身体表現作品に関する一研究　―鑑賞者の反応に関する検討―	単著	平成21年５月	日本保育学会第62回大会発表論文集 p. 287. （千葉大学）	身体表現作品を発表した後に学生にふりかえりを行う中で，鑑賞者の反応に関する検討を行った。その結果，1)おおよそ７割の学生が子どもの反応を見ていた，2)反応は想定内の反応と想定外の反応があったが，いずれも積極的な意味で捉えていた，3)年齢により反応の出し方に差異があることを感じていたが，発達段階によりその差異を受け入れていることが伺えた。
9. 青年期女子における「居場所」（安心できる人）の選択　―家族・友人との親密性及び関係的自己の可変性との関係から―	単著	平成22年３月	日本発達心理学会第21回大会発表論文集 p. 348. （神戸国際会議場）	青年期女子における安心できる人の評定と家族・友人との親密性及び関係的自己の可変性の関係を検討した。その結果，自己の否定的変化意識と安心できる人の評定に関連がみられた。
10. 「居場所」（安心できる人）の評定と対人態度の検討　―ひとりで過ごすことに関する感情・評価及び成人愛着スタイルとの関連から―	単著	平成24年３月	日本発達心理学会第23回大会発表論文集 p. 655. （名古屋国際会議場）	「居場所」における安心できる程度の評定，ひとりで過ごすことに関する感情・評価及び成人愛着スタイルの関連を検討した。その結果“自分ひとり”の評定と各尺度間に関連が見いだされた。
11. 本学院における表現活動発表会への取り組み（２）－オペレッタ（身体表現作品創作）に注目して－	共著	平成24年９月	全国保育士養成協議会第51回研究大会研究発表論文集 pp. 494-495. （京都文教大学，京都文教短期大学）	２回生が授業で創作した身体表現作品（以下，作品）を発表した後に下級学年・当該学年の各学生が作品をどのように捉えているのか比較検討した。その結果，両回生共通して「動き」が印象に残る項目の上位に位置づけられていた。また，２回生の方が経験を積み重ねている分，作品に対する客観的な視点が養われていることがうかがえた。 共同発表者：岡村季光・増原喜代 本人担当部分：データ収集・分析・結果・考察部分を担当

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
12. 青年期後期における危機的場面の対人志向 ―成人愛着スタイルとの関連―	単著	平成24年11月	日本教育心理学会第54回総会発表論文集 p.610. （琉球大学千原キャンパス）	危機的場面における対人志向評定及び成人愛着スタイルの関連を検討した。その結果，危機的場面において男女とも“自分ひとり”の評定が低くなったことを見いだし，状況により「安心できる人」が変わる可能性が示唆された。また，“自分ひとり”の評定と「親密性の回避」は弱い正の相関，他者への対人志向評定と「親密性の回避」はいずれも弱い負の相関であった。
13. 青年期女子における「居場所」（安心できる人）の評定－抑うつに耐える力との関連－	単著	平成26年11月	日本教育心理学会第56回総会発表論文集 p.486. （神戸国際会議場）	「居場所」（安心できる人）における危機的場面の安心できる程度の評定と抑うつに耐える力の関連を検討した。その結果，“自分ひとり”の評定を高くつけた者は“孤独に耐える力”が高く，“現学校以前の友人”“現学校以降の友人”の評定を高くつけた者は“不安に向き合う力”が高かった。ひとりの時間を志向しつつ，友人に安心感を持つことで自身の問題を直視し不安に向き合うことが示唆された。
14. 中年期・老年期における「居場所」（安心できる人）の基礎的研究 ―ひとりで過ごす感情・評価の関係から―	単著	平成27年３月	日本発達心理学会第26回大会発表論文集 P5-045. （東京大学）	中年期・老年期における「居場所」（安心できる人）の評定とひとりで過ごすことに関する感情・評価の関係を検討した。その結果，平常時において“自分ひとり”，“子ども”，“孫”といる場面において評定を高くつけた者は，“孤独・不安”において，得点が高かった。また，危機的状況においては“自分ひとり”でいる場面で評定を高くつけた者のみ“孤独・不安”得点が高かった。特に中年期以降においては，“自分ひとり”のみならず，“子ども”“孫”の存在が「居場所」に影響を及ぼす可能性が示唆された。
15. 「自分ひとりの居場所」の志向に関する検討 ―「安心できる人」評定，ひとりで過ごす感情・評価及び協同作業認識尺度の関係から―	単著	平成27年８月	日本教育心理学会第57回総会発表論文集 p.683. （朱鷺メッセ（新潟コンベンションセンター））	居場所（安心できる人）の評定，ひとりで過ごすことに関する感情・評価及び協同作業認識との関連を検討した。その結果，ひとり感情・評価尺度の“孤絶願望”と協同作業認識尺度の“協同効用因子”に弱い負の相関関係がみられた。また，安心できる人の評定が全体的に低い者は他者との協同作業への肯定的な認識が低く，他者と一緒にいることに苦痛を感じ回避する者は協同作業の必要性を低く感じている傾向にあることを見いだした。
16. Relationship between Ibasho “Person who eases your mind” and sense of contribution in late adolescence （青年期後期における居場所（「安心できる人」）と貢献感の関係）	単著	平成28年７月	Poster presented at 31st International Congress of Psychology, Yokohama, Japan （パシフィコ横浜）	大学生に「安心できる人」の評定をクラスター分析により検討した結果，安心できる評定の高低により４群に分類できることを見いだした。さらに，安心できる人の評定が低い群は所属している集団への貢献感が他の群と比べて有意に低かった。
17. The effects of power and grit on satisfaction and apathy in academic settings （影響力，grit及びアパシーが大学生活に与える影響）	共著	平成28年７月	Poster presented at 31st International Congress of Psychology, Yokohama, Japan （パシフィコ横浜）	本研究は，影響力，grit及びアパシーが大学生活にどのような影響を与えているのかを検討した。将来展望を明確に持っているか否かで群分けを行い，重回帰分析を行った結果，将来展望を明確に持っている者において影響力，grit及びアパシーが大学生活に影響を与えていることが明らかとなった。 共同発表者：高木悠哉・赤間健一・岡村季光 本人担当部分：データ分析結果・考察部分を担当

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
18. 「居場所」（安心できる人）を規定する媒介要因の検討　―“自分ひとり”の居場所に注目して―	単著	平成28年10月	日本教育心理学会第58回総会発表論文集 p. 451. （サンポートホール高松・かがわ国際会議場）	本研究は，安心できる人を規定する要因に媒介要因が介在している可能性を検討することを目的とした。自分ひとりの居場所を志向する要因は，ひとりで過ごすことによる充実感や満足感によって規定されており，さらに両者の関係にはひとりで過ごすことへの孤独感や不安感のなさが媒介していることを明らかにした。
19. 災害時における教員の職業的役割　―「使命感」と「多忙感」」に着目して―	共著	平成29年３月	日本教師学学会第18回大会発表要旨集 pp. 30-31. （早稲田大学所沢キャンパス）	現代の学校教育に関連する諸課題に対する教育現場への期待や責任の増大に伴い，教員の「多忙化」が指摘されている。その一方で，地震災害時に教師は，「多忙感」の一要因である残業の多寡に関わらず，避難所運営に携わるなどの例がある。そこで本研究では，教員の「使命感」と「多忙感」の相関性について，熊本地震において教員が果たした役割をモデルとして，教員への意識調査をもとに検討した。その結果，他群の教員は多忙感や内的統制感が高まることで自らの存在価値や意欲の高まりがみられるのに対し，熊本自身で被災した教員群にそれらがみられないことから，一連の熊本地震に対する対応の疲労感が高まっていることが背景因子として懸念された。 共著者：松井典夫・岡村季光 本人担当部分：データ収集・分析・結果・考察部分を担当
「学会発表」 1. 保育者養成校における授業「身体表現」と学生の学習プロセス―作品創作とその発表―	―	平成19年５月	日本保育学会第60回大会発表論文集 pp. 618-619. （十文字学園女子大学）	第１共同発表者が実践してきた領域「表現・身体表現」の教育的意義について考察した。具体的には創作作品を発表する場は学生に真に仕事を成し遂げる意味を理解する機会を与えている点を見いだした。 共同発表者：増原喜代・岡村季光 本人担当部分：第１共同発表者が実践した創作作品の考察部分を担当
2. 保育者養成における領域「表現」と人間関係づくりに関するグループワークの関係	―	平成19年５月	日本保育学会第60回大会発表論文集 pp. 620-621. （十文字学園女子大学）	身体表現作品創作と同時期に，カウンセリング・マインド育成の一環として，人間関係づくりの習得を目的としたコミュニケーションのグループワークを身体表現作品発表までに実施した。その結果，身体表現作品創作及び身体表現力とグループワークの理解度評価に正の相関がみられた。 共同発表者：岡村季光・増原喜代 本人担当部分：データ収集・分析・結果・考察部分を担当
3. 居場所と適応に関する研究と教育への貢献：居場所と愛着の関係（会員企画 ラウンドテーブルRT5-1　話題提供）	―	平成24年３月	日本発達心理学会第23回大会発表論文集 p. 63. （名古屋国際会議場）	本ラウンドテーブルでは，居場所の研究者が個々の課題を出し合い，定義や方法論について練り合うとともに，教育への貢献できる研究への方向性を探る意図で企画された。第３話題提供者は“安心できる人”の選択または評定と心理的距離及び成人アタッチメントスタイルとの関連に関する研究報告を行った。その後，居場所感の要因検討並びに居場所感を感じられる教育のあり方について討議が行われた。 企画：豊田弘司 話題提供者：豊田弘司・石本雄真・岡村季光・則定百合子

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
4. 青年期女子における「居場所」（安心できる人）の評定―ひとりで過ごす感情・評価及び関係的自己の可変性との関係から―	―	平成25年11月	関西心理学会第125回大会発表論文集 p. 82. （和歌山大学）	「居場所」における安心できる程度の評定，ひとりで過ごすことに関する感情・評価及び関係的自己の可変性との関係を検討した。その結果，友人への安心感評定が低いと自己が変化することに対して怖い，嫌だ，うまくできないという思いがやや高まる傾向を見いだした。また，自分への安心感評定が高いと自己が変化することに必要性を感じる等，変化に対して肯定的に捉えていた。
5. 「自分ひとりの居場所」を志向する要因の検討―「安心できる人」の評定とひとりで過ごす感情・評価及び満たされない自己との関係から―	―	平成26年11月	関西心理学会第126回大会発表論文集 p. 36. （大阪市立大学）	「居場所」における安心できる程度の評定をクラスター分析によって３群に分け，ひとりで過ごすことに関する感情・評価及び満たされない自己との関係を検討した。その結果，“自分ひとり”に安心できる評定を高くつけた者の中にも，他者への評定を比較的低くつけている者は対人関係に苦痛を感じ，対人交渉の逃避をしていることが示唆された。また，自分だけ，または一部の者のみに安心感の評定を高くつけた者は自他共に安心感の評定が高い者と比して日常生活においての目標に喪失感や停滞感を感じていた。 共同発表者：岡村季光・高木悠哉 本人担当部分：データ収集・分析・結果・考察部分を担当
6. 心理学を学び，研究し，実践する－ライフステージとキャリアパス－ （シンポジウム話題提供）	―	平成27年11月	関西心理学会第127回大会発表論文集 p. 9. （関西学院大学）	本シンポジウムでは，心理学関連の大学教員として勤めている話題提供者が，これまでにどのようなキャリアパスを経てきたのか，また，自らのライフステージにおいて，どのような歩みがあったのかをそれぞれ発表した。その後，心理学のキャリアパスとライフステージとの兼ね合いについて率直な意見が交わされた。 話題提供者：大竹恵子・岡村季光・杉若弘子・土肥伊都子 指定討論：小椋たみ子・荘厳舜哉
7. 「居場所（安心できる人）の評定と他者認識―友人との関係の取り方と共同作業認識の関連から―	―	平成27年11月	関西心理学会第127回大会発表論文集 p. 42. （関西学院大学）	居場所（安心できる人）の評定，友人との関係の取り方及び協同作業認識との関連を検討した。 「居場所」における安心できる程度の評定をクラスター分析によって自分群，全体高群，全体低群の３群に分け，安心できる人の評定による群ごとに，友人関係尺度と協同作業認識尺度の各尺度得点の相関係数を算出した。相関係数の同等性の検定を行った結果，友人関係尺度における“傷つけることの回避”と協同作業認識尺度の“協同効用因子”及び“互恵懸念因子”に有意差がみられた。Ryan法による多重比較の結果，“協同効用因子”において全体高群よりも全体低群の方が“傷つけることの回避”との正の相関が強く，“互恵懸念因子”において全体高群よりも全体低群及び自分群の方が負の相関が強かった。
8. 「居場所（安心できる人）の評定と他者認識―友人との関係の取り方と共同作業認識の関連から―	―	平成28年11月	関西心理学会第128回大会発表論文集 p. 35. （京都大学）	本研究では，居場所（安心できる人）の評定，ひとりで過ごすことに関する感情・評価及び他者とのつながりが感じられているか否かを測定するために孤独感を測定し，三者の関連を検討した。 「居場所」における安心できる程度の評定をクラスター分析によって全体高群，親群，恋人群，他者低群の４群に分け，さらに，ひとり感情・評価尺度の“孤独・不安”得点をもとに，得点の中央値を上回った群を高群，中央値以下を低群に分類した。孤独感尺度得点について，４（居場所）×２（ひとり感情・評価尺度“孤独・不安”得点高群・低群）の分散分析を行った結果，ひとり感情・評価尺度の“孤独・不安”得点低群において，“他者低群”が他の群に比して孤独感得点が高かった。

教　育　研　究　業　績　書

平成 29 年 3 月 31 日

氏名　熊田　岐子

研究分野	研究内容のキーワード
外国語教育、英米文学	英語教育、異文化理解、映画英語、早期英語教育、児童文学

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例 「映画英語リスニング・システム」とシャドーイングをブレンドした授業	平成 20 年 4 月～ 平成 21 年 7 月	創価大学ワールドランゲージセンター非常勤講師として担当の「英語 B」(共通科目、1 年次配当、半期、必修 2 単位)、都留文科大学外国語教育研究センターの非常勤講師として担当の「英語 Listening Ⅰ・Ⅱ」(2 年次配当、前後期半期、選択 2 単位)、環太平洋大学教職センター講師として担当の「英語Ⅰ（基礎)」(教養科目、1 年次配当、半期、必修 2 単位)にて実施した教育方法である。英語コミュニケーション力の素地となるリスニング力をアップさせるために個々の弱点を集中的に補強する e-learning システム「映画英語リスニング・システム」とシャドーイングを併用した授業を CALL 教室において行った。 （本授業の紹介を映画英語教育学会発行『映画英語教育研究』第 14 号に掲載。またその一年間の運用結果は、外国語教育メディア学会第 49 回全国大会において「シャドーイング・マネージャーを利用した効果的な音読練習」として発表した。さらに、外国語教育メディア学会第 49 回全国大会で発表したものに加筆・修正をして、都留文科大学外国語教育研究センター発行『外国語教育研究』第 4 集（平成 22 年 3 月発行）に掲載。）
工学部 ESP(English for Specific Purposes)の英会話授業	平成 21 年 4 月～ 平成 21 年 7 月	創価大学ワールドランゲージセンター非常勤講師として担当の「English Communication for Engineering」(共通科目、1 年次配当、半期、必修 2 単位）で、工学部で必要な知識を英語で理解することを目指した工学部初年次生用英会話授業を行った。ペア・ワークやグループ討論を行い、英語コミュニケーション能力と共に、プレゼンテーション力を育成。本科目の定期試験として、グループ単位でパワーポイント等を用いた英語プレゼンテーションを課した。授業使用テキストは Garnet Education より発行されている『Starting Skills in English』。また工学部に適した内容の Reading 資料も使用。

幼稚園や小学校での英語指導を視野に入れた、他者を意識する英語コミュニケーション能力開発のための英会話授業	平成 22 年 4 月～平成 22 年 7 月	環太平洋大学次世代教育学部学級経営学科講師として担当の学部共通の教養科目「英会話」(教養科目、1 年次配当、前期、必修 2 単位)において実施（英語レベルの異なる 4 つのクラスを担当)。英語圏からやってきた留学生等を想定し、自己紹介からそれらの友人たちとの会話などの日常的な表現をテーマとして扱った。初級英会話に必要な文法・語彙等を使用しながら、表現したいことを伝える英会話力の育成を図った。対象学生が、幼稚園教諭や小学校教諭の教職課程に在籍する学生がほとんどであるため、将来に必要な能力であることを前提に指導。自分の意見を伝えるだけでなく、相手の文化的背景も学習することで、相手との意思疎通を図る英語コミュニケーション能力の開発を目指した授業となった。授業アンケート結果は 3.65/4.00 であった。
国際理解教育における異文化を身体的に理解する「異文化コミュニケーション論」の授業	平成 22 年 4 月～平成 25 年 7 月	環太平洋大学次世代教育学部学級経営学科で講師として担当する「異文化コミュニケーション論」（専門基礎科目、1 年次、前期、英語教諭免許必修 2 単位）で実施。異なる文化背景を持つ人々が、お互いを尊重するという異文化理解を英語指導者がどのように指導すべきかをテーマとした授業である。非言語的な要素を身体的に理解し、相手がどのような気持ちになるのかを学習する形態である。それにより、言語と非言語を組み合わせる方法を考察。受講生は、中高英語教諭免許志望者に加えて、小学校教諭免許取得希望者・幼稚園教諭免許取得希望者である。
映画シャドーイングを活用したリメディアル英語授業	平成 22 年 9 月～平成 23 年 2 月	環太平洋大学次世代教育学部学級経営学科講師として担当の学部共通の教養科目「英語Ⅰ（基礎)」(教養科目、1 年次配当、後期、必修 2 単位)において、実施した。リスニング力、リーディング力、語彙力の強化を目的とした、映画と音読を活用する英語授業を行った。学生の英語に対する興味・関心・意欲を養いながら、英語教育学のインプット仮説・アウトプット仮説の理論を用い、英語が特に苦手な学生対象のリメディアル授業を展開した。その結果、英語に自信がついたとの声が多く寄せられている。英語初級者学生が集まるクラスにおける授業アンケート結果は 3.82/4.00 となっている。
「小学校外国語活動の指導法」の授業	平成 22 年 9 月～平成 25 年 2 月	環太平洋大学次世代教育学部学級経営学科で講師として担当する「小学校外国語活動の指導法」（専門基礎科目、3 年次、後期、選択 2 単位）において実施。外国語活動が全国の小学校で一斉導入されることを受けて開設された科目。第二言語習得論などの理論から模擬授業までの実践を扱っている。本授業の特色としては、小学校の現状を踏まえて、学級担任の主導を目指しながら行う英語指導補助教員とのティームティーチング形態の模擬授業を実施。また、幼稚園でも、英語を集中的に学習する形態が見られることから、幼稚園・小学校・中学校・高等学校での連携から外国語活動の役割について指導している。このような教員間の連携を重視しつつ、児童が英語を好きになる授業案作成を促している。

映画比較に基づいた「英米文学」の授業	平成 23 年 4 月～平成 24 年 7 月	環太平洋大学次世代教育学部学級経営学科で講師として担当している「英米文学」（専門基礎科目、1 年次、前期、中・高英語免許必修 2 単位）において実施。原典のみを利用する授業では英文が理解できず、学生のレベルからあまりにもかけ離れてしまった場合には、「文学は嫌い」ひいては「英語も嫌い」と考える学生を生み出してしまう可能性さえある。そこで筆者は一年次教職課程科目「英米文学」を担当するにあたり、「原典と映画」、「映画と映画」を比較し、英語力をつけながら文学を味わうことを目的とした授業を行うことにした。さらに、英語教員希望者用授業であるため、その工夫についても言及している。（本授業の紹介を映画英語教育学会第 17 回全国研究大会で口頭発表済み）
認知言語学に基づいた場所・空間を表す前置詞・副詞指導を中心とした「英米文学」の授業	平成 25 年 4 月～現在に至る	環太平洋大学次世代教育学部学級経営学科で講師として担当した「英米文学」（専門基礎科目、1 年次、前期、中・高英語免許必修 2 単位）、奈良学園大学人間教育学部人間教育学科で講師として担当する「英米文学」（専門科目、2 年次、前期、選択科目 2 単位）において、英語学習として前置詞理解を目的とした授業を行っている。認知言語学では、日常言語の基盤となる空間性の理解には、前置詞が重視されている。英語学習者の前置詞理解を促すために、前置詞の身体的な理解を目指す指導を実施している（本授業は、第 39 回全国英語教育学会北海道研究大会・日本教科教育学会第 39 回全国大会等で学会発表し、「文学の描写を明示・暗示する映画の教育的応用」や博士論文『空間表現の身体性を重視した英語文学読解指導』において経過報告）。
「学級経営学ゼミナールⅠ・Ⅱ」における英語教育学研究の指導	平成 22 年 4 月～平成 26 年 2 月	環太平洋大学次世代教育学部学級経営学科で講師として担当した「学級経営学ゼミナールⅠ・Ⅱ」（ゼミナール科目、3・4 年次、通年、各 4 単位）において、早期英語教育・英語科教育に関するゼミを担当した。英語教育理論から実践を取り扱い、課題研究として、ICT を取り入れた英語科授業やオーセンティック教材を取り入れた英語科授業等を指導した。担当学生の「卒業論文」には、『言語材料のデータベース化による英語教育支援の有用性に関する一考察』や『小学校外国語活動への絵本教材の導入』がある。

2　作成した教科書、教材 『ダイ・ハード 4.0　スクリーンプレイシリーズ』(共著) フォーイン　スクリーンプレイ事業部 （再掲）	平成 20 年 9 月 17 日	映画『ダイ・シリーズ』の最新作。ニューヨーク市警のマクレーン警部補は、ハッカーを FBI に連行するよう命じられ、サイバー・テロに巻き込まれていく。 本人担当部分：全 176 ページ中 18－175 ページの語句解説、62-85 ページの翻訳、コラム「この映画の英語について（共著)」を担当。 中学生以上の英語学習者用であることを踏まえて、意訳ではなく、直訳に近づくように工夫。コラムでは、登場人物たちが発する彼ら特有の短い言葉にも多くの意味が含まれていること、また、アメリカ以外の人間が使う World Englishes としての様々な英語表現にも触れたことで異文化コミュニケーションスタイルを観察するのに適した英語学習教材となった。 （平成 21 年 1 月創価大学ワールドランゲージセンターにおいて担当の共通科目「英語Ａ」、平成 23､24 年環太平洋大学次世代教育学部学級経営学科において担当の「映画とテレビの英語」、「異文化コミュニケーション論」において異文化理解教材として紹介。また、「教育実習事前・事後指導」において異文化理解教材として発展する方法を指導。）
『リトル・ミス・サンシャイン　スクリーンプレイシリーズ』(共著) フォーイン　スクリーンプレイ事業部 （再掲）	平成 21 年 6 月 24 日	コンテストに出場するために、カリフォルニアに向け、個性豊かな一家全員でミニバスに乗り込む。容貌に悩む少女の成長を描き、家族の絆を問いかける作品である。 本人担当部分：全 184 ページ中、pp. 104-137 の翻訳・解説、コラム「この映画の英語について（共著)」を担当。 語句・文法事項の解説部は、中学生以上の英語学習者が文法事項や文化背景を理解できるように配慮して作成し、コラムは異文化理解を念頭において作成。アメリカの日常英会話が楽しめ、さらに登場人物の言葉の選び方（オフィシャルな場所における丁寧な英語とプライベートで使う俗語など）から、言葉によって、アメリカ人の本音と建前が垣間見られる映画であることを述べた。 （平成 23 年環太平洋大学次世代教育学部学級経営学科において担当の「映画とテレビの英語」、「異文化コミュニケーション論」において異文化理解教材として紹介。また、「教育実習事前・事後指導」において異文化理解教材として発展する方法を指導。
『ダークナイト　スクリーンプレイシリーズ』(共著) フォーイン　スクリーンプレイ事業部 （再掲）	平成 22 年 7 月 14 日	映画『バットマン』シリーズの人気作。ゴッサムシティにジョーカーが現れて、人々を恐怖に陥れていく。 本人担当部分：全 252 ページ中、pp. 61-151 の翻訳・解説。 中学生以上の英語学習者用であることを踏まえて、意訳ではなく、直訳に近づくように工夫。アメリカが作り出したヒーローの姿を知ることから、学習者がアメリカ文化を学べる内容となった。 （平成 22 年、23 年、24 年度環太平洋大学次世代教育学部学級経営学科において担当の「映画とテレビの英語」において紹介。英語の文化圏の人々が小さなころに読んだコミックにおいて表現されている善悪に関する価値観などに触れた。）

文部科学省検定済み教科書　高等学校外国語科用（共同） 『Screenplay English Expression Ⅰ』 フォーイン　スクリーンプレイ事業部 （再掲）	平成 24 年 3 月 1 日　文部科学省検定済み	学習指導要領の移行に伴って発行される平成 25 年度以降の高等学校外国語科用教科書。映画を使用して、異文化理解と英語表現習得を目的とした教科書であり、学習の動機付けになる多面的な教科書に仕上がっている。本教科書の「著作関係者」として奥付に記載。
『例文で自然に身につく！頻出準英単語 2000+ web アプリ付』(共著) 国際語学社 （再掲）	平成 26 年 10 月 25 日	例文で自然から自然に身につくように作られた Web アプリ付き英語学習書。 本人担当部分：英語コーパスを利用して、英検 2 級を目安に頻出単語 2000 語を選出。本書に登場する他の単語を利用しながら例文 300 程度を作成。(岡崎弘信編著者、共著者：岡崎弘信、武田亜希子、福田衣里、川端泰湖、熊田岐子、他 2 名)
３　教育上の能力に関する大学等の評価 創価大学「英語Ａ」授業アンケート結果	平成 21 年 3 月	創価大学において授業アンケート結果が公開されているが、学生の満足度は平成 20 年度後期 4. 35/5.00 であった。
都留文科大学「英語 Listening I」授業アンケート結果	平成 21 年 9 月	シャドーイング教材と映画 e-learning を併用した授業の平成 21 年度前期授業アンケートの最終項目「総合的に考えて、この授業を履修して有意義であったか」は 4.88/5.00 であった。
環太平洋大学における 2010 年度前期担当科目の授業アンケート結果	平成 22 年 9 月	授業アンケート最終項目「後輩にこの授業を勧めたいと思うか」の結果は以下の通りである。 1 年次必修科目「英会話」3.65/4.00 2 年次必修科目「英語Ⅱ」3.48/4.00 1 年次「異文化コミュニケーション論」3.56/4.00
環太平洋大学における 2010 年度後期担当科目の授業アンケート結果	平成 23 年 2 月	授業アンケート最終項目「後輩にこの授業を勧めたいと思うか」の結果は以下の通りである。 「英語Ⅰ」3.82/4.00 「映画とテレビの英語」3.75/4.00 「小学校外国語活動の指導法」3.50/4.00 「国際交流実習Ⅰ（基礎)」3.40/4.00
環太平洋大学における 2011 年度担当科目の授業アンケート結果	平成 23 年 7 月 平成 24 年 2 月	授業アンケート最終項目「後輩にこの授業を勧めたいと思うか」の結果は以下の通りである。 「英米文学」3.47/4.00 「異文化コミュニケーション論」3.57/4.00 「英米文学史」3.75/4.00
環太平洋大学における 2012 年度担当科目の授業アンケート結果	平成 24 年 7 月 平成 25 年 2 月	授業アンケート最終項目「後輩にこの授業を勧めたいと思うか」の結果は以下の通りである。 「英米文学」2.86/4.00 「異文化コミュニケーション論」3.24/4.00 「英米文学史」3.50/4.00 「小学校外国語活動の指導法」3.33/4.00 「映画とテレビの英語」3.90/4.00
環太平洋大学における 2013 年度担当科目の授業アンケート結果	平成 25 年 7 月 平成 26 年 2 月	授業アンケート最終項目「後輩にこの授業を勧めたいと思うか」の結果は以下の通りである。 「英米文学」3.67, 3.71/4.00 「異文化コミュニケーション論」3.32/4.00 「英米文学史」3.44/4.00 「小学校外国語活動の指導法」3.63/4.00 「映画とテレビの英語」3.64/4.00

奈良学園大学における2014年度担当科目の授業アンケート結果	平成26年8月	授業アンケート最終項目満足度の結果は以下の通りである。 「英会話ＩＡ」3.35/4.00 「英会話ＩＢ」3.32/4.00
奈良学園大学における2014年度担当科目の授業アンケート結果	平成27年2月	授業アンケート最終項目満足度の結果は以下の通りである。 「英会話ⅡA」3.34/4.00 「英会話ⅡB」3.15/4.00 「英会話ⅡC」3.28/4.00
奈良学園大学における2015年度担当科目の授業アンケート結果	平成27年8月 平成28年2月	授業アンケート最終項目満足度の結果は以下の通りである。 「英会話ＩA」3.53/4.00 「英会話ＩB」3.39/4.00 「英会話ＩC」3.00/4.00 「英米文学」3.85/4.00 「英会話ⅡA」3.34/4.00 「英会話ⅡB」3.40/4.00 「英会話ⅡC」3.21/4.00
４　実務の経験を有する者についての特記事項 教育講演会講師　「映画やテレビを活用した英語学習法」	平成23年 10月27日	吉備中央町立吉川小学校において行われたおかやま教育週間の取り組みとしての教育講演会に講師として招待された。対象は、地域の中学生、保護者、地域住民、小・中学校の教員。映画やテレビを利用して、ある場面を異文化理解教材とし、英語学習教材とする方法を紹介。
小学校職員研修会講師「外国語活動の指導法」	平成23年 10月28日	岡山市立操明小学校における職員研修に講師として依頼された。外国語活動の指導法に関しての職員研修講師を行ったﾜｰｸｼｮｯﾌﾟを取り入れつつ、目的のある授業づくりをする方法を紹介した。
５　その他 環太平洋大学次世代教育学部学級経営学科（平成24年4月に学科名称変更：教育経営学科）における教育実績	平成21年9月～ 平成26年3月	環太平洋大学次世代教育学部学級経営学科（平成24年4月に学科名称変更：教育経営学科）における講師（平成21年9月～平成22年3月まで教職センター講師、平成22年4月～平成26年3月まで学級経営学科（教育経営学科）講師）として、以下の科目を担当した。 「小学校外国語活動の指導法」（コア科目、3年次配当、後期、選択2単位）を平成22年4月～平成26年2月まで担当した。外国語活動が導入された小学校の現状を踏まえた上で、これからの小学校教員として必要とされる英語力、英語教材研究力・教材開発力、コミュニケーション力、授業力などの実践力を養うことを目的とし、教育現場で活躍する人材育成を図った。 「異文化コミュニケーション論」（専門基礎科目、1年次配当、前期、選択2単位）を平成22年4月～平成25年7月まで担当した。この授業では、日本および英語圏諸国に焦点を当て、コミュニケーションのとり方の相違を言語面・非言語面・価値観などの点から考察した。また、誤解や摩擦を回避し、円滑にコミュニケーションを行うための方法を探った。

		「英語Ⅰ（基礎）」（教養科目、1年次配当、後期、必修2単位）を平成21年9月～平成23年2月まで担当した。本授業では評価の高いシャドーイング教材を用い、リスニングとスピーキングの基本的なスキルに焦点を当て、学生の英語運用能力を高められた。 「英語Ⅱ（応用）」（教養科目、2年次配当、前期、必修2単位）を平成22年4月～平成22年8月まで担当した。本授業では、このような映画の教材としての可能性をフルに活用し、主に長文読解力、語彙力、リスニング力、会話力を形成した。 「英会話」（教養科目、1年次配当、前期、必修2単位）を平成22年4月～平成22年8月まで担当した。日常の生活をはじめとして、学校、職場、旅行などさまざまな場面で英語を利用できるよう、多様な場面を想定し、自分の意思を相手に伝えるようになった。 「映画とテレビの英語」（コア科目、2年次配当、後期、選択2単位）を平成21年9月～平成26年2月まで担当した。映画やテレビという映像を使い、最終的には、ニュース等の台本を作り、英語プレゼンテーションする力を養った。 「英米文学」（専門基礎科目、1年次配当、前期、選択2単位）を平成23年4月～平成25年7月まで担当した。文学と映画の比較や劇活動を行い、文学の英語に慣れ親しみ、英語力向上も成し遂げた。 「英米文学史」（専門基礎科目、1年次配当、後期、選択2単位）を平成23年9月～平成26年2月まで担当した。植民地時代から独立革命、南北戦争、第一次世界大戦を経た20世紀初頭の文学作品までを取り上げた。また、日本の初等・中等教育で紹介される作品も扱うことで、原典ではどのように表現されているかを考察した。 「国際交流実習Ⅰ（基礎）」（インターンシップ科目、1～4年次配当、後期、選択1単位）を平成21年9月～平成23年2月まで担当した。ニュージーランドへの短期留学の準備科目であり、英語課題のこなし方や、英会話授業を中心に進め、短期留学の準備が行えた。 「国際交流実習Ⅱ（応用）」（インターンシップ科目、1～4年次配当、集中、選択1単位）を平成21年9月～平成23年2月まで担当した。海外研修期間中にニュージーランドの文化・歴史・教育等の分野の授業を聴講し、１）講義の内容について自分で整理ができる。２）講義の内容について自分の意見を表現できる。３）様々な国籍の人と討論を行いながら良好な関係を構築することができる。以上３点の到達目標を成し遂げた。 「学級経営学ゼミナールⅠ（基礎）」（ゼミナール科目、3年次配当、通年、選択4単位）を平成22年4月～平成26年2月まで担当した。中学校・高等学校の英語科教育、小学校外国語活動の研究の基礎を主に行い、受講生各自の研究を指導した。各自の研究がスムーズに進められた。

		「学級経営学ゼミナールⅡ(応用)」(ゼミナール科目、4 年次配当、通年、選択 4 単位) を平成 22 年 4 月～平成 26 年 2 月まで担当した。中学校・高等学校の英語科教育、小学校外国語活動の研究を発展させ、受講生各自の研究を指導した。卒業研究まで発展させられる者も出てきた。 「卒業研究」(ゼミナール科目、4 年次配当、通年、選択 4 単位) を平成 22 年 4 月～平成 26 年 2 月まで担当した。卒業研究には、『言語材料のデータベース化による英語教育支援の有用性に関する一考察』や『小学校外国語活動への絵本教材の導入』がある。 「教育実習事前・事後指導 (英語) (複数教員担当)」(教育実習科目、3 年次配当、通年、選択 1 単位) を平成 23 年 4 月～平成 26 年 2 月まで担当した。事前指導では実習生に求められることを確認し、各自が教育実習に向けて十分な準備ができるようにし、事後指導では、教育実習での体験を交換し、検討した。有意義な実習となったようである。 「教育実習Ⅰ (中学校・高等学校) (複数教員担当)」「教育実習Ⅱ (中学校) (複数教員担当)」(教育実習科目、選択 2 単位) を平成 23 年 4 月～平成 26 年 2 月まで担当した。教育実習指導等を行い、教育実習日誌の回収・確認等を主に行った。 「教職実践演習 (中学校・高校) (複数教員担当)」(インターンシップ科目、4 年次配当、後期、選択 2 単位) 平成 25 年 9 月から平成 26 年 2 月まで担当した。教育実習での各自の課題を整理し、課題克服のための指導を各自・グループ単位で行った。各自の課題を克服できるという教育効果をあげた。 「基礎ゼミナールⅠ」(ゼミナール科目、1 年次配当、通年、必修 2 単位) を平成 24 年 4 月～平成 25 年 2 月まで担当した。初年次教育として、新聞を読んでまとめること、レポートの書き方等を身につけてもらうことが出来た。 「基礎ゼミナールⅡ」(ゼミナール科目、2 年次配当、通年、必修 2 単位) を平成 23 年 4 月～平成 24 年 2 月まで、平成 25 年 4 月～平成 26 年 2 月まで担当した。「基礎ゼミナールⅠ」の発展である。新聞記事の見つけ方やインターネットの検索方法、レポート書き等が着実に身についていた。
奈良学園大学人間教育学部人間教育学科における教育業績	平成 26 年 4 月～現在に至る	奈良学園大学人間教育学部人間教育学科講師として、以下の科目を担当している。 「英会話Ⅰ」(共通教育科目、1～4 年次配当、前期、必修 1 単位) を平成 26 年 4 月より担当している。日常の生活をはじめとして、学校生活や友人との会話などで英語を利用できるよう、会話に必要な文法・語彙にも焦点を当てられるように工夫しながらの授業である。自分の意思を正しく相手に伝える力を習得できている。

		「英会話Ⅱ」（共通教育科目、1～4 年次配当、後期、必修 1 単位）を平成 26 年 9 月より担当している。「英会話Ⅰ」で学習した文法・語彙を発展させながら、日常的な場面における会話から身近なトピックに関する発表までを取り扱っている。英語発表力も向上している。 「英米文学」（専門科目、2 年次配当、前期、選択 2 単位）を平成 27 年 4 月より担当している。英米に住む人々が幼いころから触れてきた英米文学を学ぶことで、その文化の言語、歴史、文化的な特性についての基礎的な知識を身につけ、自国文化への気づきが与えられる授業となっている。 「小学校外国語活動の指導法」（専門科目、2 年次配当、後期、選択 2 単位）を平成 27 年 4 月より担当している。学習指導要領の学習を基礎とし、英語の音声や基本的な表現等，指導に必要な知識や技能を身につける。また、英語を通じて日本や外国の言語や文化に関心を持ち，積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を養う活動を編成し指導する技術を習得できている。 「教育実習事前事後指導（小）」（専門科目、3 年次配当、通年、必修 1 単位）を平成 28 年 4 月より複数教員で担当している。事前指導では、実習に臨むにあたり必要な知識とスキルを身に付けることを、事後指導では、実習で身に付けた知識やスキルをさらに教育実践に通用するものへと変容させることを目標としている。 「教育実習Ⅰ（小）」「教育実習Ⅱ（小）」（専門科目、3 年次配当、前期、必修各 2 単位）を平成 28 年 4 月より複数教員で担当している。実習校において、一人の教師として、具体的且つ実践的な経験をし、小学校での教育活動についての基本的な事柄についての理解を深めることを目標としている。 「人間教育学ゼミナールⅠ（基礎）」（専門科目、3 年次配当、通年、選択 4 単位）を平成 28 年 4 月から担当している。英語教育・英語内容学を主に取り扱い、オーセンティック教材等の使用法や小学校外国語活動について研究をゼミ全体・受講生各自で進めている。

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1　資格、免許 修士（英文学）	平成 15 年 3 月 19 日	創価大学　修第 24 号 論文題目「*The Scarlet Letter* :The Pursuit of “Some Sweet Moral Blossom”」
中学校教諭専修免許状　外国語（英語） （平 15 中専第 10306 号）	平成 15 年 3 月 31 日	東京都教育委員会
高等学校教諭専修免許状　外国語（英語） （平 15 高専第 10337 号）	平成 15 年 3 月 31 日	東京都教育委員会

J-SHINE 小学校英語準認定指導者資格	平成 22 年 6 月	NPO 法人 J-SHINE において認定される小学校英語指導者資格。平成 22 年 6 月に指導者資格を取得。本資格は、外国語活動の一斉導入に備えて作られたものあり、地域人材の育成・確保を目的としている。現在、文部科学省認定の英語指導者資格がなく、本資格に類似した資格はない。
博士（教育学）	平成 28 年 3 月 3 日	広島大学　甲第 6864 号 論文題目「空間表現の身体性を重視した英語文学読解指導」
２　特許等 国内特許取得 特許権者	平成 25 年 9 月	「多読・速読学習システム、多読・速読学習装置、多読・速読学習プログラム」、特願 2008-074778、特許公開 2009-229780、特許第 5369463 号（新田晴彦・木戸和彦・熊田岐子、他 2 名）
３　実務の経験を有する者についての特記事項 ［競争的資金］ 複数の音声を比較検討することでリスニングの問題点を探る研究用ソフトウエアの開発	平成 25 年 4 月～ 平成 27 年 3 月	［研究分担者］ 外国語教育メディア学会関東支部の公募研究資金。日本人英語学習者のリスニングの弱点は、ボトムアップ処理の decoding にある。ただし日本人側の decoding 能力が不足しているというより、むしろ英語母語話者側の発音にこそ問題があるのではないかというスタンスである。同じ語彙、句、節などでどれほど音が異なり、どれほどのバリエーションが存在するのか。それを調べるツールとしてのソフトウエアの開発を行った。 （研究代表者：新田晴彦、研究分担者：熊田岐子）
４　その他 環太平洋大学の姉妹校、ニュージーランドにある「International Pacific College」への短期研修の引率	平成 22 年 2 月 14 日から 3 週間帯同	International Pacific College への留学関係とその準備授業「国際交流実習Ⅰ」を担当。さらに短期留学する学生を 3 週間 IPC へ引率・帯同した。ニュージーランドでは、学生の授業参観やアクティビティの参加、また環太平洋大学との連携についての打ち合わせを現地で行った。
外国語（英語）活動に係るフィールドワーク 岡山市立江西小学校	平成 22 年 9 月 14 日～12 月	フィールドワークとして、5,6 年生の授業研究、および担任とのティームティーチングで 3 年生の英語活動の支援を行った。また、ゼミ生を引率したり、「小学校外国語活動の指導論」のための資料作りを行った。実状として、就学前から英語を習っている児童もおり、その中で外国語活動で英語に初めて触れた児童への指導法が、今後の検討事項として挙げられる。
文部科学省認定 平成 24 年度教員免許更新講習の授業担当	平成 24 年 8 月 22 日	環太平洋大学における教員免許更新講習（中高英語教諭対象）において、「今、求められる英語教育（２）　オーセンティックな素材の活用法」を 2 コマ担当。中学・高等学校の教科書で基本的な英語知識を習得しながら、使える英語へとつないでいく方法として、オーセンティックな素材を用いた授業づくりの提案と指導のポイントについて紹介。

文部科学省認定 平成25年度教員免許更新講習の授業担当	平成25年8月21日	環太平洋大学における教員免許更新講習（中高英語教諭対象）において、「今、求められる英語教育（２）　認知言語学による文法のイメージ形成指導」を2コマ担当。中学・高等学校の教科書で認知言語学における前置詞イメージや文法イメージを利用しながら、使える英語へとつないでいく授業づくりの提案と指導のポイントについて紹介。

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
（著書） 1 『ダイ・ハード 4.0 スクリーンプレイシリーズ』	共著	平成20年9月	フォーイン　スクリーンプレイ事業部	原題：DIE HARD 4.0 監督：Len Wiseman 判型・総頁数：A5版、176ページ 映画『ダイ・シリーズ』の最新作。ニューヨーク市警のマクレーン警部補は、ハッカーをFBIに連行するよう命じられ、サイバー・テロに巻き込まれていく。 本人担当部分：全176ページ中18－175ページの語句解説、62-85ページの翻訳、コラム「この映画の英語について（共著）」を担当。 中学生以上の英語学習者用であることを踏まえて、意訳ではなく、直訳に近づくように工夫。コラムでは、登場人物たちが発する彼ら特有の短い言葉にも多くの意味が含まれていること、また、アメリカ以外の人間が使うWorld Englishesとしての様々な英語表現にも触れたことで異文化コミュニケーションスタイルを観察するのに適した英語学習教材となった。 （岡崎弘信監修、翻訳・解説：岡崎弘信・橋本信一・馬場亜希江・熊田岐子）

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
2 『リトル・ミス・サンシャイン　スクリーンプレイシリーズ』	共著	平成21年6月	フォーイン　スクリーンプレイ事業部	原題：LITTLE MISS SUNSHINE 監督：Jonathan Dayton Valerie Faris 判型・総頁数： A5版、184ページ コンテストに出場するために、カリフォルニアに向け、個性豊かな一家全員でミニバスに乗り込む。容貌に悩む少女の成長を描き、家族の絆を問いかける作品である。 本人担当部分：全 184 ページ中、pp.104-137 の翻訳・解説、コラム「この映画の英語について（共著)」を担当。 語句・文法事項の解説部は、中学生以上の英語学習者が文法事項や文化背景を理解できるように配慮して作成し、コラムは異文化理解を念頭において作成。アメリカの日常英会話が楽しめ、さらに登場人物の言葉の選び方（オフィシャルな場所における丁寧な英語とプライベートで使う俗語など）から、言葉によって、アメリカ人の本音と建前が垣間見られる映画であることを述べた。 （岡崎弘信監修、翻訳・解説：大月敦子・岡崎弘信・川端泰湖・熊田岐子・長島敏子・橋本信一）
3 『ダークナイト　スリーンプレイシリーズ』	共著	平成22年7月	フォーイン　スクリーンプレイ事業部	原題： THE DARK KNIGHT 監督： Christopher Nolan 判型・総頁数：四六変形、 252 ページ 共訳者映画『バットマン』シリーズの人気作。ゴッサムシティにジョーカーが現れて、人々を恐怖に陥れていく。 本人担当部分：全 252 ページ中、pp.61-151 の翻訳・解説。 中学生以上の英語学習者用であることを踏まえて、意訳ではなく、直訳に近づくように工夫。アメリカが作り出したヒーローの姿を知ることから、学習者がアメリカ文化を学べる内容となった。 （角山照彦監修、翻訳・解説：角山照彦・藤本幸伸・熊田岐子）
4 『例文で自然に身につく！頻出準英単語2000+　webアプリ付』	共著	平成26年10月	国際語学社	例文で自然から自然に身につくように作られたWebアプリ付き英語学習書。 本人担当部分：英語コーパスを利用して、英検2級を目安に頻出単語2000語を選出。本書に登場する他の単語を利用しながら例文 300 程度を作成。（岡崎弘信編著者、共著者：岡崎弘信、武田亜希子、福田衣里、川端泰湖、熊田岐子、他2名）

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
5 『言葉で広がる知性と感性の世界—英語・英語教育の新地平を探る—』	共著	平成 28 年 5 月	渓水社	判型・総頁数：B5、328 ページ 本書の掲載論文については、編者等によって査読されている。 英語教育の方法を考える際には、学習者にとって英語教育内容がどのようなものかという観点が必須であるがゆえに、英語教育方法は、英語教育内容学抜きには考えられない。本書は、英語教育内容学の論文を集めた著書である。 本人担当部分：「空間表現に基づく身体を通した文学的な読み（pp.57-67)」。前置詞・副詞という空間表現の学習に焦点を当て、文学教材を使用し、その読みの向上と関連付けて、学習の変容を考察した。(柳瀬陽介・西原貴之編者、共著者：中尾佳行、石原知英、小野章、菊池繁夫、熊田岐子、地村彰之、西原貴之、能登原祥之、柳瀬陽介、山西博之、他 17 名)
（学術論文） 1 初年次教育で英米文学を読むための工夫	単著	平成 21 年 3 月	『外国語教育研究』第 3 集都留文科大学外国語教育センター，pp.21-31	英米文学を大学の初年次生の授業で扱うのは困難である。しかし教養から考えると文学を読んでほしいというのが教員側の願いであろう。そこで内容検討に加えて英文レベル（語彙レベルとリーダビリティ）を測定することにより、例として初年次生でも読める英米文学を探せることを具体的方法と作品を提示しつつ述べた。
2 ホーソーン児童向け作品『ワンダー・ブック』の対象年齢—「黄金に変える手」を中心に—	単著	平成 21 年 3 月	『英語英文学研究』第 64 集創価大学英文学会， pp.97-109	作品の序文で「子どもの理解を得るために、調子を下げなければならないと常に考えているわけではなかった」と述べながら、ホーソーンは一般読者向けよりも簡易な文章を用いたことを英文レベルの検証から論じた。同時に小さな子どもには少々難しい文体であることもわかってきている。枠物語で聴き手とされる子どもたちには就学前と見受けられる子どもおり、小学校への準備も設定に含めて、物語の聴き手である子どもたちの描写と会話を分析した。本稿では、小さな子どもでも想像力を発揮し、物語を楽しんでくれるというホーソーンの期待が感じられると結んだ。
3 『ワンダー・ブック』において子どもの年齢が設定された物語—年少向け「不思議な水差し」と年長向け「キマイラ」—	単著	平成 21 年 9 月	『英語英文学研究』第 65 集創価大学英文学会,pp.175-187	ホーソーン児童向け作品『ワンダー・ブック』の年少の子どもたちに語られた「不思議な水差し」（“The Miraculous Pitcher”）と年長の子どもたちに語られた「キマイラ」（“The Chimæra”）を比較し、その子どもの年齢に従って、物語の内容と英文レベルに差があるのかを分析した。本稿で扱った年少の子どもたちには、会話や描写から就学前児童も含まれると言える。彼らの好奇心と無邪気さは、物語理解を助けている。対して、年長の子どもたちは、大人びており、これから女性としてどのような物語を繰り広げるのか期待させる面がある。今回検証した子どもの発達段階と実態に加えて、19 世紀当時の子どもが受けた教育（幼稚園と小学校を対象）についても検討が必要である。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
4 シャドーイング・マネージャーを利用した効果的な音読練習	単著	平成 22 年 3 月	『外国語教育研究』第 4 集 都留文科大学外国語教育研究センター，pp.13-21	平成 21 年 8 月外国語教育メディア学会全国大会での Poster Presentation に加筆・修正を施した論文。昨今の教育界では、日本人学習者の英語コミュニケーション力の向上が大きな課題となっているが、コミュニケーションをとるためには相手の言葉を理解しなくてはいけない。そこで平成 20 年度にシャドーイング・マネージャーが付属された『スクリーンプレイで学ぶ映画英語シャドーイング』を使用した音読練習、および e-learning「映画英語リスニング・システム」を使用する授業を行い、かなりの成果をあげることに成功した。本稿ではこの英語授業の手順と一年間の運用結果、その改善点を考察している。
5 英米文学作品を大学の英語授業に取り入れるために	単著	平成 22 年 3 月	『英語英文学研究』第 66 集 創価大学英文学会， pp.97-106	平成 21 年 5 月第一回北東アジア言語教育学会で行った Poster Presentation を発展させた論文。内容や英文に対する感覚だけで教材を選択するのではなく、英文レベルを実際に測定し、その数値から昨今の大学生のレベルに合ったものを選んでいく方法を提案した（英文レベルはリーダビリティ面、および v8an を利用した語彙面から計測）。一般読者向け作品から児童文学作品まで英文レベルを測定し、難解な英文を書くと言われている作家の作品でも、現在の大学生や初級英語学習者の英語力に見合ったものを英語教育現場に導入できる可能性を示唆。また、よく知られている児童文学の英文レベルと内容分析から、幼児や児童が受けてきた教育が表面化したと言える。
6 ホーソーンの児童文学に見る理想的なコミュニティ	単著	平成 23 年 9 月	『英語英文学研究』第 69 集 創価大学英文学会， pp.67-77	『少年少女のためのワンダー・ブック』は、古典神話に基づいたゴシック的な要素を含む児童文学であり、現在も児童文学研究者が彼の作品に注目し続けている。また、作品の発行部数からも、19 世紀後半におけるボストン教育委員会からの推薦教科書リストに名を連ねているところからしても、この作品を再考する意味はあると考えられる。児童文学として注目され続けているこの作品を、本稿では、第一に作品の歴史的背景、第二に共同体形成という社会的観点から大人にとっての『ワンダー・ブック』の意義を考究した。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
7 大学教育への導入に読書を用いることの有効性に関する試験的検討	共著	平成24年3月	環太平洋大学研究紀要第5号，pp.69-77	近年大学生の学術能力が低下していることは大きな問題となっている。特にリテラシーは学術能力の基礎であるため、その低下が懸念されている。そこで、大学教育において、試験的に「協働型読書プログラム」を作成し、2年次の大学生対象に実施した。結果として、読書量に関しては効果があった。したがって、初年次教育において、本プログラムを運用することはさらに効果的であると予測できるのである。 調査の実施、データの提供、英語での要約作成を担当。 (高木悠哉、松岡律、熊田岐子、住本克彦、筒井愛知)
8 外国語活動における「異文化間コミュニケーション能力」の養成 ―童話を教材として―	単著	平成24年12月	環太平洋大学研究紀要第6号，pp.99-106	国際理解教育の流れに応じて、幼稚園や小学校で異文化交流などが行われるようになった。現在では、外国語活動も教育課程の取り組みの一つとして周知されたと言える。国際理解教育の中心である異文化理解は、第二言語習得におけるコミュニケーション能力の伸長に必要な資質として、もしくは異文化理解分野の基礎理論として議論されてきた。本稿ではByram (1997)の「異文化間コミュニケーション能力（ICC)」を中心に据え、異文化を理解する「能力」とは何なのか、小学校の教育課程においてどのように育成できるのかを日本の国際理解教育の視点から再考。本稿では、教材として童話の使用を挙げているが、幼稚園において英語絵本の使用などが見られることからも、英語教育の連携において適した提案だと考える。
9 文学の描写を明示・暗示する映画の教育的応用（査読付き）	単著	平成26年3月	映画英語教育研究第19号，pp.137-152	映画は異文化理解教材でもあるが、文学を題材とした映画は、指導法によっては読解指導を効果的にするものである。本稿では、テクストを前置詞・副詞という空間表現に着眼して児童文学を読み進め，劇活動を行った後，文学の描写を明示し，暗示しさえする映画の特徴を生かした読解指導の効果を計測した。授業毎時に提出されたポートフォリオには，文学的な読みが深まっていく一方で，映画に関する記述が減少していく様子が現れていた。これは，文学と映画の違いや，映画を通じて文学への振りかえりを行っているためであることがグラウンディッドセオリーを行った結果として示された。本稿は，児童文学と映画を結びつけ，認知言語学を仲介として，文学を教育へ取り入れる提案と実証の一歩になったと考えている。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
１０ 英語文学読解指導の遅延テストにみる空間表現身体化の定着（査読付き）	単著	平成 27 年 12 月	『広島大学大学院教育学研究科紀要　第二部(文化教育開発関連領域)』 第 64 号, pp. 131-138	これまで、本研究では、認知言語学を援用した英語読解指導として、１）教師によるスキーマ提示を含んだ空間表現を中心とする文法指導・日本語訳の口頭説明、２）グループ単位での劇発表、３）映画視聴、４）学習ポートフォリオの記載を基本とした指導を検証してきた。本指導から一定期間を置いて、前置詞・副詞の抽象的なスキーマは維持されているかを統制群と比較しながら、検証している。結果として、本指導を受けた実験群は統制群と比べると、指導のターゲットワードのスキーマ図を多く描き、ターゲットワードについて深い理解度を示した。さらに言えば、各空間表現の意味拡張として、心理的な意味合いを空間表現から読み取る協力者も出ていた。したがって、本指導は、指導効果の持続を示した。
１１ 空間表現の身体性を重視した英語文学読解指導（博士論文）	単著	平成 28 年 3 月	広島大学大学院教育学研究科	英語教育における文学教材の減少を立証・指摘し、認知言語学を援用した文学教材を使用した読解指導を、文学構造理論・認知言語学・身体論から理論組みして提案した 本研究の独自性は以下 3 点にまとめられる。（1）劇活動、映画視聴により、文学テクストの活字を学習者が身体を通して実感する方法を示した。（2）文学を使用した読解指導で、認知言語学を使用した指導法は未だ開発途上であるが、前置詞に基づく空間表現について、一つの実践例を示した。（3）認知言語学分野において、空間表現についての研究は進められているが、その指導に有効な言語資源として、文学教材が活用できることを示した。 本論文で扱った身体的理解は、小学校外国語活動にも活用できる指導だと考える。（A4 版、全 122 ページ）

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（その他） [学会発表等] 1 「映画英語リスニング・システム」と映画シャドーイングをブレンドした授業	－	平成 20 年 6 月	映画英語教育学会　第 14 回全国研究大会（創価大学） （発表要旨：『映画英語教育研究』第 14 号　映画英語教育学会，pp.79-80，平成 21 年 3 月）	英語の授業をしていると、英語文法は理解できていて英文を読むことはできるのに、「英語を思うように聞き取れない」という学生たちの声をよく耳にする。この問題を解決していくために開発された「映画英語リスニング・システム」を授業に取り入れた。さらにシャドーイングを併用することによって、学習効果をあげるという内容の授業を紹介。発表内容、発表、本発表要旨の主担当である。（熊田岐子・岡崎弘信）
2 初年次教育で英米文学を読むための工夫	－	平成 21 年 2 月	都留文科大学外国語教育研究センター合同研修会 （都留文科大学）	平成 21 年 3 月『都留文科大学外国語教育研究』に掲載した同タイトルの論文内容を報告。英米文学を大学の初年次生の授業で扱うのは困難である。しかし教養から考えると文学を読んでほしいというのが教員側の願いであろう。そこで内容検討に加えて英文レベルを測定することにより、初年次生でも読める英米文学も探せることを述べた。
3 英米文学作品を大学の英語授業に取り入れるために	－	平成 21 年 5 月	第一回北東アジア言語教育学会（新潟県立大学） （発表要旨：Poster Session p.5　Web 公開）	ポスターセッション枠で発表。内容や英文に対する感覚だけで教材を選択するのではなく、英文レベルを実際に測定し、その数値から学習者のレベルに合ったものを選んでいく方法を提案した。一般読者向け作品から児童文学作品まで英文レベルを測定し、難解な英文を書くと言われている作家の作品でも、現在の大学生の英語力に見合ったものを英語教育現場に授業教材として選べる可能性があることを述べた。
4 シャドーイング・マネージャーを利用した効果的な音読練習	－	平成 21 年 8 月	外国語教育メディア学会第 49 回全国研究大会発表（流通科学大学） （発表要旨：『外国語教育メディア学会　第 49 回全国研究大会発表要項集』，pp.306-307、平成 21 年 8 月）	外国語教育メディア学会第 49 回全国研究大会発表（流通科学大学）において単独で行ったポスター発表である。昨今の教育界では、日本人学習者の英語コミュニケーション力の向上が大きな課題となっているが、コミュニケーションをとるためには相手の言葉を理解しなくてはいけない。そこでシャドーイング・マネージャーが付属された『スクリーンプレイで学ぶ映画英語シャドーイング』を使用した音読練習、および e-learning「映画英語リスニング・システム」を使用する授業を行い、かなりの成果をあげることに成功した。本発表ではこの英語授業の手順と一年間の運用結果を報告。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
5 映画比較に基づいた「英米文学」の授業	－	平成 23 年 8 月	映画英語教育学会第 17 回全国研究大会（名古屋学院大学） （発表要旨：『映画英語教育学会 2011 年第 17 回大会要項』，p. 20）	原典のみを利用する授業では英文が理解できず、学生のレベルからあまりにもかけ離れてしまった場合には、「文学は嫌い」ひいては「英語も嫌い」と考える学生を生み出してしまう可能性さえある。そこで筆者は一年次教職課程の必修科目「英米文学」を担当するにあたり、「原典と映画」、「映画と映画」を比較し、英語力をつけながら文学を味わうことを目的とした授業の実践報告と成果報告。さらに、英語教員希望者用授業であるため、その工夫についても言及している。
6 文学テクストのイメージ形成を目的とした映画の活用	－	平成 25 年 8 月	映画英語教育学会第 19 回全国研究大会（相模女子大学） （発表要旨：『映画英語教育学会 2014 年第 19 回大会要項』，p. 25）	本発表では、文学テクストを原作とした映画を活用する指導を提示する。文学テクストは、読者が文章のみでイメージできるよう、繊細な言語表現に溢れており、英語授業で扱うべき要素を多分に含んでいる。しかし、英語学習者が文学テクストを読む際に、どのような舞台が背景として描かれ、登場人物は何を見て、どのように動くのかという登場人物の物理的空間認知や身体動作を具体的にイメージするのは決して容易ではない。一方、映画は、文学テクストのすべての場面ではないにしろ、描写を明示することに長けており、物理的空間や登場人物の身体動作の具現化が得意である。また、映画は、登場人物の心情を非言語的な要素（表情やジェスチャー、距離など）によって伝えようと工夫されており、この点も活用すれば、映画の長所を生かした指導となる。この指導を３カ月（週１度）続け、英語学習者（大学生）が得た気づきの変容から、映画がもたらす効果を検証する。この結果から、文学テクストを教材とする英語授業において、映画をどのように活用できるかを考察した。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
7 空間表現の身体的理解による英語文学読解指導	―	平成 25 年 8 月	第 39 回全国英語教育学会北海道研究大会(北星学園大学) （発表要旨：『第 39 回全国英語教育学会北海道研究大会発表予稿集』，全国英語教育学会，pp. 468-469.）	文学は、言語的・内容的特徴から、英語授業で用いる価値があるものの、実際に使用するには難しい。しかし、前置詞・副詞という空間表現（at, on など）に着目すれば、文学のイメージを獲得する読解指導となる。文学の談話空間は、現実世界と同様に立体的であり、談話が入る「容器（container)」のようなものである。そのため、文学では、物語舞台や登場人物の身体動作などの描写に必要な空間表現が、文学ならではの言語表現で包まれている。本発表では、音読しながら、空間表現に着目して登場人物の身体動作を演じることにより、文学を体感する読解指導を提示する。本指導を英語学習者（大学生）に実施した結果、空間表現を通して、文学がよく読めるようになったという成果が得られている。また、文学を通して、空間表現の背景にある日常言語の概念体系を身体的に理解できる。本発表では、本指導の効果を検証した。
8 空間表現の身体化による文学的な読みの深まり	―	平成 25 年 11 月	日本教科教育学会第 39 回全国大会（岡山大学） （発表要旨：『日本教科教育学会全国大会論文集』，pp. 130-131）	本研究の目的は、空間表現に備わる身体性に着目し、文学教材を使って英語学習者が空間表現を知識だけでなく、身体を動かして習熟する読解指導の効果を検証することである。特に、読解指導の効果として、登場人物の心理や社会的関係という文学的な読みの気づきの伸びを調査する。調査協力者 44 名（大学生）に対して、空間表現の身体化による読解指導を約3カ月間に渡って実施した。空間表現の身体化のために、読解指導には、登場人物の動作などを身体を動かして演じ、文学を音読する劇活動を取り入れた。読解指導の結果、調査協力者の文学的な読みが深まっていく様子が示された。
9 英語文学劇活動における協同学習の効果	―	平成 27 年 3 月	日本教師学学会第 16 回大会（日本女子大学） （発表要旨：『日本教師学学会第 16 回大会』，pp. 94-95）	英語文学は，英語授業では取り扱いにくいという認識が一般的である。しかし，指導法さえ工夫すれば英語文学の特徴を生かして，英語授業に取り入れることができる。本発表では，英語文学読解指導に含んだ劇活動がどのような効果をもたらしたのかを協同学習の観点から検討する。結果として，協同学習が学習ループをもたらし，クラス全体がまた一つの協同学習グループとなったことにより，読解指導効果が強められた点を報告した。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
１０ 複数の音声を比較検討することでリスニングの問題点を探る研究用ソフトウエアの開発	－	平成 27 年 11 月	外国語教育メディア学会関東支部研究大会 （早稲田大学） （発表要旨：『外国語教育メディア学会（LET）関東支部第 135 回（2015 年秋季）研究大会発表要項』, pp. 18-19）	平成 25 年 4 月～平成 27 年 3 月に支給された公募研究の成果発表である。単語や句に色々な発音があり、そのバリエーションが広いとすると、母語話者のように圧倒的な会話の経験量でもなければバリエーションのすべてに反応できない。同じ語彙、句、節などでどれほど音が異なり、どれほどのバリエーションが存在するのか。それを調べるツールとしてのソフトウエアの開発を行った。音声の検索ソフト部分が本発表の対象である。（新田晴彦・熊田岐子）
１１ 空間表現の身体性を重視した読みの再検討	－	平成 28 年 8 月	全国英語教育学会第 42 回埼玉研究大会（獨協大学） （発表要旨：『全国英語教育学会第４２回埼玉研究大会発表予稿集』, pp. 562-563）	英語教育に見られる文学減少を踏まえて，本研究では，認知言語学における空間表現（at や on などの場所・空間を示す前置詞・副詞）の働きを重視する。空間表現は，英語母語話者の概念体系の本質となる空間関係が表出したものである。さらに，空間表現に備わる身体性を重視することにより，英語学習者にとって有用な知識を体得できると考える。本発表では，空間表現の身体性を重視した読解指導を実施し，登場人物の動作・位置から登場人物の心情・社会的関係を考察する文学的な読みに関する詳細な検討を行った。
１２ 小学校英語（新設「外国語活動」「外国語科」）における指導法に関する一考察－言葉の身体性に着目して－	－	平成 29 年 2 月	日本人間教育学会第 2 回大会（奈良学園大学）（発表要旨：『日本人間教育学会第 2 回大会研究発表要旨集』pp. 30-31	小学校英語（3・4 年「外国語活動（35 時間)」、5・6 年「外国語科（70 時間)」）は、平成 28 年 12 月 21 日の答申において、その充実化が求められた。このような状況を踏まえて、本発表では、これからの小学校英語指導法について考察した。言葉の持つ身体性に着目し、「聞くこと」「読むこと」「話すこと(やり取り)」「話すこと(発表)」「書くこと」という 5 領域を重点化する小学校英語において、表面的な英語スキルの向上を伸長させるだけではなく、同時に、児童の情感を活性化させて英語学習できるよう配慮すべきだ主張。児童の情感を伴う指導を行うことが、英語スキルの向上に繋がるからである。
［教科書］ １ 文部科学省検定済み教科書　高等学校外国語科用『Screenplay English Expression Ⅰ』	共同	平成 24 年 3 月 1 日文部科学省検定済み	フォーイン　スクリーンプレイ事業部	学習指導要領の移行に伴って発行される平成 25 年度以降の高等学校外国語科用教科書。映画を使用して、異文化理解と英語表現習得を目的とした教科書であり、学習の動機付けになる多面的な教科書に仕上がっている。本教科書の「著作関係者」として奥付に記載。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
［講演等］ １ 教育講演会講師　「映画やテレビを活用した英語学習法」	－	平成 23 年 10 月	岡山県吉備中央町立吉川小学校	吉備中央町立吉川小学校において行われたおかやま教育週間の取り組みとしての教育講演会に講師として招待された。対象は、地域の中学生、保護者、地域住民、小・中学校の教員。映画やテレビを利用して、ある場面を異文化理解教材とし、英語学習教材とする方法を紹介。
２ 小学校職員研修会講師「外国語活動の指導法」	－	平成 23 年 10 月	岡山県岡山市立操明小学校	岡山市立操明小学校における職員研修に講師として依頼された。外国語活動の指導法に関しての職員研修講師を行った。ﾜｰｸｼｮｯﾌﾟを取り入れつつ、目的のある授業づくりをする方法を紹介した。
３ 日本教科教育学会第 39 回全国大会第３２分科会座長	－	平成 25 年 11 月	日本教科教育学会第 39 回全国大会（岡山大学）	第３２分科会その他の部門において，座長を務めた。分科会の口頭発表は,「理科授業研究の実態に関する考察（１）」,「高校生の英文和訳プロセスに関する事例研究」,「小学校国語科教員養成に関するコア・カリキュラムの開発研究」,「積雪寒冷地域における体力向上を目的とした授業プログラムの有効性の検討」であった。
４ 日本教師学学会第 17 回大会自由研究発表分科会Ｅ司会進行役	－	平成 28 年 3 月	日本教師学学会第 17 回大会（奈良学園大学）	分科会Ｅ「教師の専門性とインクルーシブ教育（外国人・特別支援）」において、共同で司会進行役を務めた。口頭発表には、「小中一貫校における教師のニューカマーの子ども対応に関するアクションリサーチ」、「外国人留学生と日本人学生の混在型授業における教師への期待感に関する質的分析」、「公立学校における不登校・中退における生徒指導の課題－外国人児童生徒の挫折体験からの考察－」等であった。

教　育　研　究　業　績　書

平成 29年 3月 31日

氏名　高木　悠哉

研究分野	研究内容のキーワード
学習心理学，発達心理学	摂食行動，消費者行動，発達，社会的勢力，住居音環境

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例		
（1）学生の意見を速やかに反映した講義改善	平成26年4月～現在に至る	奈良学園大学人間教育学部人間教育学科の科目「発達心理学A（初等），B（中等）」において，学生が主体的に授業に取り組めるよう，授業アンケートを毎週実施している。毎回の講義で改善した方が良い点などを自由に記述させ，そのすべての意見を毎週授業前にパワーポイントで紹介している。取り入れるべき意見，取り入れるべきでない意見について，講義者がその理由を述べることで，学生の意見を毎回の講義に組み込むことができ，学生が納得の上でスムーズな講義の進行が可能となる。
(2) 講義に対する質問，疑問へのフィードバック	平成26年4月～現在に至る	奈良学園大学人間教育学部人間教育学科「発達心理学A（初等），B（中等）」において，講義中に適宜，質問や疑問などを書き留めさせ，次回の講義の最初にそれらへの回答を順次発表している。これにより，各学生の講義の理解を促進させるとともに，前回の授業の復習を促すことにつながると感じている。また，学生自身も，疑問点を残さず講義に臨める，といった満足感を得られる，という感想を持っている。
(3) 実習方式による最新の知見の取り入れ	平成26年4月～現在に至る	奈良学園大学人間教育学部人間教育学科の科目「発達心理学A（初等），B（中等）」において，単に教科書の知識を紹介するのみならず，その分野の新しい論文の実験を実際に実習形式で学生に経験させている。これにより，知識が如何にして得られているのかを体験することが可能になり，学生の学ぶ意欲が促進されると考えている。また，自身で将来的に卒業論文を作成する際，着想を実験計画に還元していくイメージを持たせることも意図している。
(4) 多種の評価形式の取り入れ	平成26年4月～現在に至る	奈良学園大学人間教育学部人間教育学科の科目「発達心理学A（初等），B（中等）」において，小テスト，中間テスト，実習での参加態度などの定常点を取り入れることで，学生の評価の多様化を目指している。これにより，単に講義を覚えてテストに臨むのではなく，毎回の講義を集中して取り組む学生が増加したと感じている。
2　作成した教科書，教材		
（1）心理学実験演習教材およびレポート作成マニュアル	平成19年～平成21年	大阪樟蔭女子大学人間科学部心理学科，「心理学研究法基礎演習Ａ」において，特定のテーマに基づき食行動の実験を行う手続き，留意点などをまとめた教材を作成した。食の発達的観点を取り上げた，食行動実験は女子大学生の興味が高いテーマであり，伝統的な心理学の実験演習よりも，学生が積極的に参加したと考えられる。また，心理学のレポート作成の際の基本的な知識，注意点をまとめたマニュアルを作成し，基本的な事項で学生の評価を低下させることなく，レポートの内容の優劣をより正確に判断することが可能となった。
（2）教職表現力演習ノート	平成27年度～平成28年度	奈良学園大学人間教育学部人間教育学科の科目「教職表現力演習」の，講義概要に沿う形で教科書を作成した。特に，教師を目指す学生の読む，聞く，書く，話すという国語的な能力の向上を目指す内容である。一般的な初年次教育のノートをとることや，講義でのメモの取り方，語彙，言葉の意味といった国語の内容，そして，将来，教員として必要な教育話法を踏まえた内容である。
3　教育上の能力に関する大学等の評価		
（1）学生による授業評価アンケート結果における評価	平成24年度	環太平洋大学授業評価アンケートの結果において，担当する全講義科目（「心理学」「発達心理学（初等）」「コミュニケーションの心理学」）4段階中3以上の評価を得た。特に，講義の分かりやすさにおいては，150人以上の講義科目でも3.5以上の評価を得ており，人数の多い講義でも安定した教育力を発揮できていると考えている。
	平成26年度～平成28年度	奈良学園大学の授業評価アンケートにおいて，担当する講義科目「発達心理学A（初等）」「発達心理学B（中等）」において，3年間，全体平均4段階中3以上の評価を得た。これら講義は，50名以内の少人数講義であるが，きめ細かい講義が実施できたと考えられる。
4　実務の経験を有する者についての特記事項		
（1）大阪樟蔭女子大学における教育実績	平成19年～平成21年	大阪樟蔭女子大学の非常勤講師として「心理学研究法基礎演習A」（実習科目，半期2単位）を担当した。 心理学における基本的な実験手法を修得し，伝統的な心理実験を実習形式で行った。また，のみならず，自身の専門分野の最新の実験研究を実習に組み込むことで，学生の興味，演習への参加意欲を高める効果が得られた。実験を経験した後に，レポートを作成するのみならず，最終講義でミニ学会と称して，各グループで実験結果と考察をポスター形式で発表させ，ディスカッションさせた。このような実習の工夫により，総じて学生のレポートの完成度は高く，また，心理実験自体への興味が促進された。

（研究交流シンポジウム） （２）食事セッション内減少の規定因とその応用可能性について 「同志社大学文学研究科心理学専攻，北海道医療大学心理学研究科，研究交流会」	平成20年3月	幼児期から老年期までの健康的な食行動の実現は，健康的な身体状態に寄与するのみでなく，健康的な心理発達をももたらす。本シンポジウムでは，人間の発達過程の根底となる食行動の基礎的なメカニズムを発表するとともに，発達過程においてそれが一定に保たれること，さらに，食行動の個人差が就学前の子どもから青年期へ至る発達過程において異なる影響をもたらす，といった研究について概説，議論した。 発表者：高木悠哉，山崎真理子，漆原宏次
（ワークショップ） （３）ダイエットへの心理学的アプローチ　その2 「日本心理学会第72回大会ワークショップ」	平成20年9月	小学生から老年期まで幅広い年齢層で，ダイエットを行うことが一般的となっている。これを心理的側面から注目すると，単に肥満や痩せといった発達心理学上の問題解決への手がかりを提供できるだけでなく，現代人の美意識や心理的発達の有り様などの意味を見出すことができる。本ワークショップでは，心理発達に寄与する食行動，食への意識の研究知見についての研究知見の動向を発表，議論した。現代の学校での児童・生徒のやせ願望傾向についての警鐘も提示した。 発表者：可知悠子，葦原摩耶子，鈴木公啓，高木悠哉 指定討論者：田中久美子
（４）奈良県立医科大学　耳鼻咽喉・頭頸部外科における教育実績	平成22年4月～平成23年3月	奈良県立医科大学，　耳鼻咽喉・頭頸部外科において，各医局理解のためのゼミ形式の研修を共同で担当した。耳鼻咽喉・頭頸部外科における聴覚実験を主として担当し，学生に実際の実験からデータ分析，レポート作成までを指導した。医学部生ということもあり，臨床経験を重視する姿勢が強かったが，基礎的なデータ　修得の重要性についての理解を促進することが出来た。
（公開講座） （５）医療の現場と心理学 「大阪樟蔭女子大学公開講座」	平成22年11月	医療現場で活躍する心理学のスペシャリストと言えば，「臨床心理士」であり，その活躍する現場は「精神科」を思い浮かべる人が多い。しかし，心理学の研究フィールドは非常に多彩であり，数多くの研究者が医療現場で研究に従事している。この公開講座では，心理学を専攻する学生及び一般の方向けに，耳鼻咽喉科で聴覚心理学者として医師と共同研究を行っている自身の事例を紹介しながら，医療と心理学のコラボレーションから発生する社会貢献について詳説した。
（６）環太平洋大学における教育実績	平成23年4月～平成26年3月	常勤講師として以下の科目を担当した。 心理学　(2時間／週，半期) 発達心理学（初等）　(2時間／週，半期) コミュニケーションの心理学　(2時間／週，半期) 家族関係の教育力　(集中講義) 基本的に教科書は使用せず，毎回オリジナルの資料で講義を行った。学生の意見や疑問を出来得る限り講義前に全受講学生に紹介し，それらに回答した。また，学術論文の内容を授業で体験させる実習も加えた。学生の授業の理解度は高く，心理学への興味も促進することが出来たと考えられる。
（７）奈良学園大学における教育実績	平成26年度4月～現在まで	常勤講師として以下の科目を担当した。 発達心理学A（初等）　(2時間／週，半期) 発達心理学B（中等）　(2時間／週，半期) 行動の科学　(2時間／週，半期，平成27年4月～現在) 食の心理　(2時間／週，半期，平成27年4月～現在) これら講義科目では，グループワークによる発表を重視し，毎回講義内容から１つ出題し，グループで議論させることを求めている。定期的に議論の内容を発表させ，それに対して評価点をつけている。また，発表のみならず，中間テストを実施し，知識を十分に身に着けているかも自己チェックさせている。毎回の出席や，グループワークでの得点は，次回講義時にフィードバックし，現学生個々の状況を確認できる体制をとっている。 基礎ゼミナールⅠ（2時間／週，半期，平成27年4月～平成28年3月） 基礎ゼミナールⅡ（2時間／週，半期，平成28年4月～現在） 基礎ゼミナールⅠでは，学生の人間力形成，大学の講義スタイルへの適応，基礎学力の保障といった3つの観点から，学生へ指導を行っている。学生が自ら考え学ぶため，議論やワークを重視している。基礎ゼミナールⅡでは，3年次のゼミに繋げるため，各自の興味に応じて研究テーマを決定させ，実際にデータを収集，分析し，最終レポートを作成させた。 教職表現力演習Ⅰ（2時間／週，半期） 教職表現力演習Ⅱ（2時間／週，半期平成27年4月～現在） 教職表現力演習Ⅰでは，各回で新聞記事や評論文を提示し，その背景となる時事教養について講義している。学生の課題は，課題文より要約を作成し，自らの考えを600～800字程度でまとめることである。また，各担当教員が自身の研究テーマについて発表し，それを要約させている。 教職表現力演習Ⅱでは，各回，テーマを設定し，解説と演習を中心に授業を進めている。毎回，レポート課題を示し提出を求める。後期は「論文に挑戦」と題し，前期の基礎的な学びから，各自のテーマを設定する。後期の前半を，文献やデータの収集期間とし，後半で論文にまとめ提出する。
５　その他		

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1　資格，免許 （1）博士(心理学)	平成21年3月	同志社大学　甲第372号 博士論文題目：人間の摂食行動の数量モデルとその応用可能性についての実験的検討
2　特許等 なし		
3　実務の経験を有する者についての特記事項 （1）日本学術振興会　特別研究員（DC2） 受入研究機関：同志社大学	平成20年4月～ 平成21年3月	日本学術振興会特別研究員(DC)として，同志社大学において食行動のペースの変化を心理学習理論に基づき定式化する基礎研究に従事した。主として研究員としてデータ収集，分析，等を担当した。成果は，3回の国内学会発表，1回の海外学会発表，平成21年度　特別研究員奨励費　報告書にまとめられた。
（2）日本学術振興会　特別研究員（PD） 受入研究機関：同志社大学	平成21年4月～ 平成22年3月	日本学術振興会特別研究員として，同志社大学において食行動のペースの変化を心理学習理論に基づき定式化し，心理発達において健康な食行動を実現するための応用研究に従事した。主として研究員としてデータ収集，分析，等を担当した。成果は，１編の論文(行動科学 48. p91-101)，平成21年度　特別研究員奨励費　報告書にまとめられた。
4　その他 なし		

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
（著書）				
1. 発達心理学入門～人間発達の科学的理解～	単	平成25年4月	株式会社ERP TMシリーズ （63頁）	幼稚園・小・中学校教育現場で，教員，家族は体験的に子ども発達を理解し，発達段階に即したサポートを日常的に行っている。そのような実践的な発達の理解が重要である一方で，科学的な視点から子どもの発達をとらえることもまた重要である。本著では，生まれてから死ぬまでの人間の発達過程において，ピアジェ，ボウルビィ等の研究者に代表される，発達心理学分野がもたらした種々の実験的な知見を紹介し，人間の発達過程の科学的な法則性を示すことによって，各学校現場における幼児・児童・生徒の発達に関する総合的な理解を深めることと共に，エリクソンの示す発達段階に即した適切かつ有効な指導の工夫ができるよう，具体的な事例を多数挿入する等の執筆の工夫を行っている。
2. セルフコントロールと大学生の間接評価としての学習成果との関係に関する一考察	共	平成28年2月	金子書房，教育フォーラム，57号 （10頁）	本書は，梶田叡一責任編集の教育フォーラム「PISA型学力を育てる」の1節である。近年，大学生の学修成果の発達を検討する際，粘り強さやセルフコントロールといったパーソナリティ要因に注目が集まっている。本節では，大学生の学修成果研究を概観するとともに，それに関連の深いパーソナリティ要因について考察を行っている。これらのパーソナリティ要因は，大学生になって急に発達するものではなく，幼年期からの発達過程が深く影響を及ぼす者であり，大学でそれらを成長させる手法の考察とともに，発達段階初期からの継続的な介入の必要性について議論された。 著者：梶田叡一，西辻正副，鎌田首治朗，高木悠哉，他10名　本人担当部分：特別寄稿 （pp. 125～134）
（学術論文等）				
1. テレビを見ながら摂食させた場合の食事セッション内での摂食行動の減少過程に関する検討 (査読付)	共	平成20年11月	行動科学　第47巻1号 （12頁）	健康的な食行動の獲得は，人間の発達において身体的にも，心理的にも重要である。近年，特に子どもの肥満や，ストレスからの過食の引き金として，テレビ視聴中の食事が挙げられている。本研究では，食の発達において，青年期でもテレビ視聴中の食事が摂食行動に影響を及ぼすかを検討した。大学生を参加者とした。結果として，テレビ視聴は食事セッションに影響を及ぼさなかった。就学前から児童期の発達のどの段階で，特にテレビ視聴がネガティブな食行動を形成するのかについて議論した。 本人担当部分：全体執筆，データ取得，分析 著者：高木悠哉・青山謙二郎 （pp. 19～30）

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
2. 人間の摂食行動の数量モデルとその応用可能性についての実験的検討（博士論文）	単	平成21年3月	同志社大学 （136頁）	本論文は人間の摂食行動の食べるペースの推移に注目し，それを数量モデルにより記述することと，健康な食生活を実現するために，就学前児童から青年期に至る人間の心身の発達に対するその応用可能性を探ることを課題とした。基礎的研究では，食べるペースを累積摂食量の1次関数として記述することの頑健性，有用性について論じた。応用的研究では，ゆっくり咀嚼することやTV視聴といった要因が食べるペースの推移に及ぼす影響を詳細に記述することで，肥満の抑制における常識的な理論に関して否定的な結果が明らかとなった。児童生徒の生涯発達に食生活は重要であり，健康な食行動の獲得が，それぞれに応じた発達段階において他者からの，自己内のストレスを低減させる可能性がある。それを実現するための食行動について論じた。
3.実験前に摂食させることが、その後の摂食行動の食事セッション内減少に及ぼす影響 (査読付)	共	平成22年3月	行動科学　第48巻2号 （11頁）	青年期において，ダイエットにより食事量を減少させることは，肥満の防止といった健康な身体的発達の観点からも，高い他者・自己評価を獲得し，ストレスを低減させることからも有用である。本研究では，そのような健康的な食事量を実現する手法として広く認められている，食事前に一定量の食事を摂取させる実験前摂食法の休憩時間の有効性を検討した。 本人担当部分：全体執筆，データ取得，分析 著者：高木悠哉・青山謙二郎 （pp. 91～101）
4. レポート課題への取り組みと遅延価値割引の程度の関係 (査読付)	共	平成22年9月	行動科学　第49巻1号 （9頁）	報酬の支払いに遅延が伴うことで，人はその報酬の価値を割り引くことが知られており，こうした現象は遅延価値割引（セルフコントロールの指標）と呼ばれている。本研究では，大学生を対象とし，学業場面でのレポートを提出する際の毎日の勉強時間と，価値割引の程度との関係性が，大学1・2年生でどのように発達するかを検討した。結果，１年生では，遅延価値割引の程度とレポートに取り組む時間との間に相関なかった。しかし2年生では，遅延価値割引の激しい学生ほどレポートに取り組む時間が短いという予測と一致した傾向が認められた。青年期ではセルフコントロールをより行うことで，発達とともに学習意欲への動機づけが上昇することが示された。児童期でも同様の動機づけが報告されるが，その時期を適切に把握することにより，有効な学習指導に反映できると考える。 本人担当部分：データ取得，分析 著者：青山謙二郎・高木悠哉 （pp. 4～7）
5. 大学教育への導入に読書を用いることの有効性に関する試験的検討	共	平成24年3月	環太平洋大学研究紀要 第5号 （9頁）	本研究の目的は，試験的に1ヶ月間の協働型読書プログラムを作成，実施することで，大学教育への導入に読書を用いることがメタ認知の発達に有効であるかを検討することであった。実施前の読書量を基準として，高読書量群，低読書量群に調査参加者を群分けし，プログラム実施前後の読書に対する態度，メタ認知の変化を学年ごとに検討した。本研究結果より，協働型読書プログラムの初年次教育への導入がメタ認知の発達に有効であり，大学生の自己概念の発達過程において，学習の動機づけを促進する可能性が示された 本人担当部分：全体執筆，データ取得，分析 著者：高木悠哉・松岡律・熊田岐子・住本克彦・筒井愛知 （pp. 69～77）
6. 社会的勢力が自己意識，被服行動に及ぼす影響の検討	共	平成25年3月	環太平洋大学研究紀要 第6号 （8頁）	他者への影響力を自身が保持しているという主観的感覚は，社会心理学において，社会的勢力と呼ばれ，従来から学童期，青年期の公的・私的自己意識に影響することが欧米で示されている。本研究の目的は，主観的な他者への影響力の程度が，公的・私的自己意識，被服行動に及ぼす影響を検討することであった。結果，青年期において適度な勢力感を保持するものは，それをファッションという行動に表現し，自己意識を発達させていくことが考察された。昨今は，発達加速が起きており，小学校高学年からこのような影響が見られることも議論された。 本人担当部分：データ取得，全体執筆 著者：高木悠哉・赤間健一 （pp. 169～176）

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
7. 社会的勢力が自己欺瞞，原因帰属に及ぼす影響についての検討	共	平成25年3月	環太平洋大学研究紀要 第７号 （7頁）	エリクソンの示す発達段階の青年期において，自己に対して適切な認識を獲得することが，将来的な社 会適応につながることは繰り返し示されている。本研究では，大学生(18歳～22歳)を対象として，他者に影響力を持つと主観的に感じている程度（勢力感）の違いが，過剰にポジティブな自己概念，および動機づけにおける原因帰属過程に影響を及ぼすかどうか を検討した。結果として，大学生では，高勢力者ほど，過剰にポジティブな自己概念を形成　し，物事の結果について自身の能力に帰属することが明らかとなった。青年期において，過剰 な勢力感の発達は，壮年期における社会適応にネガティブな影響を及ぼす可能性が議論され た。 本人担当部分：データ取得，全体執筆 著者：高木悠哉・赤間健一 （pp.229～235）
8.　発達と行動 ～子どもが作る「自分を見つめる心の目」に関する研究動向～	単	平成25年4月	「教育PRO」　第43巻9号 （38頁）	人間の生涯発達において，自己概念の形成は永遠の発達的課題である。本稿では，児童期、特に小学校高学年の自己概念の発達過程を検討した論文をレビューし，近年明らかとなっている，児童期の自己の過大・過小評価の発達的変化と学校適応に関する研究を概観した。次いで，青年期で研究が盛んな他者への影響力認知が，児童期の自己概念，自己評価の発達過程に及ぼす影響についての研究の方向性を議論した。 本人担当部分：特別寄稿 （pp.12-15）
9. Evaluation of speech intelligibility in short-reverberant sound fields. （査読付）	共	平成26年8月	Auris Nasus Larynx Vol 41(4) (7頁)	発達段階において，一般的に可聴域は加齢とともに低下することが知られている。特に加齢とともに高周波は可聴が難しくなる。また，環境も音の理解度の低下に影響する。本研究では，高周波域をカットすることで劣化させた，単音節語音の理解度が，異なった８つの環境での聞き取りにどのように影響するかを検討した。結果として，高周波域のカットは単音節語音の理解を低下させ，また，その程度は環境の要因によって異なった。従来，語音聴力検査や，それに基づく補聴器のフィッティングは，聴力検査室で行われているが，部屋の大きさや内装は異なっている。そのため，医学的には聴力検査室の標準化に本研究が寄与する可能性がある。また，高齢化社会に向けて，老年期の人々が快適に講演を聞くことが可能なホールや教室の標準化に寄与する可能性が示された。 本人担当部分：研究計画，データ収集 共著者：Ryota Shimokura, Toshie Matsui, Yuya Takaki, Tadashi Nishimura,Toshiaki Yamanaka, Hiroshi Hosoi (pp.343-349)
10.　昼食内容の記録がその後の間食の摂取量に及ぼす影響 （査読付）	共	平成26年10月	心理学研究 Vol. 85 (5) (9頁)	食べ過ぎの防止は，各発達段階で重視されてており，心身の健康な発達を目指す食育論でも検討されているが，その実証研究は極めて少ない。本研究の目的は，直前に取った食物の記憶を思い出すことで，食べる量を減少させることができると考えたHiggs(2002)を参考に，携帯電話で直前の食事内容を記録することが，次の食事時の摂食量のより多くの減少につながるかを大学生を対象に検討した。結果として，昼食内容を記録することは，次の食事での食事量を減少させた。今後は，各年齢層に応じた携帯電話使用での食事のコントロール法について議論が望まれる。 本人担当部分：研究計画，データ収集 共著者：山崎真理子・高木悠哉・齋藤 瞳・佐藤 豪・ 青山 謙二郎 （pp. 455-463）
11.　学校段階を基準とした動機づけ始発方略の獲得時期に関する探索的研究 （査読付）	共	平成26年12月	人間教育学研究，第２号 （9頁）	やるべき時にやるべきことをするということは必ずしもできるわけではない。自己決定理論や動機づけ調整方略研究において、自律性を高めることが自身の動機づけに有効と考えられる。そのためには、行動の価値を見いだす力が必要と考えられる。本研究では、やるべき時にやるべきことが出来る人とできない人の違いを、彼らが持つメタ動機づけ的知識から検討することを目的とした。その結果、やるべき時にできるかどうかという自身の認知の理由と、できる人とできない人の違いの認識は必ずしも一致しないということ、できない人であっても、行動をした場合としなかった場合の影響を考えることが自身を動機づけるために有効であるというメタ動機づけ的知識を持っているが、具体的な方法についての知識は持っていない可能性があること、などが示された。行動の価値を見いだすためには行動が自身にもたらす影響について想像する力が必要である可能性が示唆された。 本人担当部分：データ収集，執筆補佐 著者：高木悠哉・赤間健一 （pp.151～159）

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
12.行動の価値を見いだす力の探索的検討―メタ動機づけ知識の観点から― （査読なし）	共	平成29年3月	福岡女学院大学大学院紀要　発達教育学3 （5頁）	動機づけ調整方略とは，特定の活動や，目標を達成するという意思を始発，維持，あるいは補うために行う行為と定義されている。具体的には，課題に対しやる気の出ない時にどうやってやる気を出しているかを問う。本研究では，回想法を用い，小，中，高，大学のどの学校段階で，現在使用している動機づけ調整方略を獲得したのかを，大学生に調査した。結果として，報酬や罰といった，相対的に低次の調整方略が小学校から獲得され，中，高において，価値を見出すといった高次の調整方略は中，高校で獲得されることが示唆された。大学から，新たに獲得し，使用していると報告したものは少なく，学校段階初期でのやる気の出し方の工夫が必要であることが示唆される。 本人担当部分：データ分析，全体執筆 著者：赤間健一・高木悠哉 （pp.35～39）
（資料）				
1. 質問紙を用いた住宅内透過騒音の音評価に関する研究	単	平成22年12月	日本音響学会騒音・振動研究会資料 （8頁）	本研究の目的は，住居の壁を通して漏れ聞こえてくる騒音（透過騒音）を分類し，日常生活で人が感じる騒音のどのような要因が不快感に繋がるのかを心理学的な聴覚の知覚理論から示された質問紙法を用いて検討することであった。結果として，場面により，幼児から大人までの様々な世代別により，透過騒音の因子が不快感に及ぼす影響が異なることが統計的に明らかとなった。子どもから成年への発達段階においてストレスとなる不快な透過騒音は，世代により評価が異なるため，子供を抱えた世帯，中年夫婦の世帯，など，世帯の構成員を踏まえた住居の壁材を工夫することで，快適な住居環境を実現できる可能性が示された。 （資料番号：N-2010-60）
「国際学会」				
1. Effects of Pace of Eating on Within-Session Decreases in Human Eating Behavior.	共	平成19年5月	33rd Annual Association for Behavior Analysis Convention (Manchester Grand Hyatt, San Diego , USA)	発表者の研究から，様々な実験操作を用いてゆっくり摂食させた場合の食べるペースの推移は，最初の食べるペースが速いときはその低下が激しく早く食べ終わり，より遅いペースのときは低下の程度が緩やかで長く食べ続け，結果的に総摂食量が同等になることが見いだされた。このパターンが，児童期からの食物摂取の心理発達に重要である可能性が議論された。 本人担当部分：計画，調査，発表 共同発表者：高木悠哉，青山謙二郎
2. Effects of Pace of Eating on Within-Session Decreases in Human Eating Behavior by Instructing Participants to Chew Each Mouthful Over 30 Times.	共	平成20年8月	2008 Society for the Study of Ingestive Behavior Meeting (AgroParis Tech, France)	30回以上噛んでゆっくり摂食させた場合に，具体的に噛む回数をしても，多くかむ条件が長く食べ続け，必ずしも摂食量は減少しない。また，そのような場合でも，実験時間を短くした場合には，摂食量が減少することも明らかとなっている。これら自身の研究をまとめ，よく噛ませることが摂食量および摂食ペースの推移に及ぼす影響を検討した。日本の学校給食では、発達途上の児童生徒が、最近よく噛み食事をすることは脳の発達を促すとして固いメニューが多くなる傾向があるが、どれぐらいそれを噛むかについては、基礎研究が求められることである。 本人担当部分：計画，調査，発表 共同発表者：高木悠哉，青山謙二郎
3. The effect of reverberation time on loudness of monosyllable speech sound.	共	平成22年9月	13 thKorea-Japan Joint meeting Otorhinolaryngology-Head and Neck Surgery (Seoul, Korea)	音響工学の領域では，語音明瞭度が部屋の響きである残響時間の影響を受けることが良く知られている。一般的に，残響時間が長くなれば語音明瞭度は悪くなる。しかし，ラウドネス(主観的な音のおおきさ)と残響時間との関係性を検討した実験は少ない。本研究では，様々な残響を語音に畳み込み，語音のラウドネスを比較した。結果として，長い残響時間ほどラウドネスは大きくなった。加齢に伴う聴覚認知への影響について議論された。 本人担当部分：計画，発表 共同発表者：高木悠哉,下倉良太,柳井修一,西村忠己,細井裕司
4. The effects of power and grit on satisfaction and apathy in academic settings.	共	平成28年7月	The 31st International Congress of Psychogogy （Yokohama）	青年期の発達段階において，学業への適応は重要な課題である。本研究では，大学生の心理的な粘り強さと，他者にどれくらい影響をあたることができるか，という感覚が，大害学講義への満足度と意欲にどのような影響を与えるかを検討した。結果として，粘り強さや他者への影響力が高いと感じる学生ほど，講義への満足度が高く，意欲も高いことが示された。このようなパーソナリティ的な要因は，青年期に即座に高められるのではなく，幼年期から長期的に高められるものであるため，早期からの心理的介入の有効性が議論された。 本人担当部分：計画，データ収集，発表 共同発表者：高木悠哉，赤間健一，岡村季光

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
「国内学会」				
1. 30回以上噛ませて摂食させることが摂食行動の食事セッション内減少と総摂食量に与える影響	共	平成19年9月	日本健康心理学会第20回大会「於早稲田大学国際会議場」	具体的に噛む回数を決めてゆっくり摂食させた場合，摂食量が減少することが他の研究者によって示されている。本研究では，30回以上噛んでゆっくり摂食させた場合にも，同様の結果が得られるかを検討した。結果は，具体的に噛む回数を多くしても，多くかむ条件が長く食べ続け，必ずしも摂食量は減少しないことが明らかとなった。幼児期や児童期に「よく噛むこと」を指導すると、給食の残量が増えると言われるが、噛む回数よりは、発達段階に応じた食事時間が摂取量に影響を与えていると議論された。 本人担当部分：計画，調査，発表 共同発表者：高木悠哉，青山謙二郎
2. 住宅内透過騒音尺度作成の試み（1）	共	平成22年9月	第314回日本耳鼻咽喉科学会大阪地方連合会例会(大阪)	住宅内において隣室から漏れ聞こえてくる音は非常に小さいにもかかわらず，その不快感は大きい。本研究では，柳井(2010)が開発した住宅内透過騒音尺度の因子構造をとらえ直し，音の評価を透過・遮断の2因子，評価による不快感を１因子とする尺度の因子構造の妥当性を柳井(2010)と同様の5つの場面を想定させ検討した。 本人担当部分：計画，調査，発表 共同発表者：高木悠哉，下倉良太，柳井修一，己・細井裕司
3. 隣室を音源とする透過騒音の因子構造同定の試み	共	平成22年9月	日本音響学会2010年秋季研究発表会(吹田)	本研究では，柳井(2010)が開発した住宅内透過騒音尺度の因子構造をとらえ直し，音の評価を透過・遮断の2因子，評価による不快感を１因子とする尺度の因子構造の妥当性を柳井(2010)と異なる5つの場面を想定させ検討した。結果として，透過・遮断因子および不快因子の妥当性が確認された。 本人担当部分：計画，調査，発表 共同発表者：高木悠哉，下倉良太，柳井修一，己・細井裕司
4. 隣室から聞こえる透過騒音の研究～音の評価と不快感について～	共	平成22年11月	第55回日本聴覚医学会総会(奈良)	柳井(2010)が開発した透過騒音質問紙は，先行研究で音の評価2因子(透過・遮断)と不快感１因子に統計的に分類可能であり，妥当性が高いことが示されている。本研究では，特定の透過騒音5種類を想定させた場合の，因子間の因果関係の違いを分析した。結果として，漏れ聞こえてくる音によって，透過・遮断因子が不快感におよぼる影響が異なることが明らかとなった。小学校や中学校における仮設校舎における、集中力の欠如等との関係も議論された。 本人担当部分：計画，調査，発表 共同発表者：高木悠哉，下倉良太，柳井修一，細井裕司
5. 大学生の定期考査に向けた学習時間およびその成績と遅延・確率価値割引の程度との関係	共	平成23年11月	関西心理学会第123回大会「於京都学園大学」	報酬の支払いに遅延が伴うことで，人はその報酬の価値を割り引くことが知られており，こうした現象は遅延価値割引と呼ばれている。従来から，喫煙者においてこの価値割引の程度が激しい，などの知見から価値割引はセルフコントロールを測定する指標の一つと考えられている。本研究では，学業場面でのレポートを提出する際の毎日の勉強時間と，価値割引の程度との関係性を検討した。 本人担当部分：データ分析，発表 共同発表者：高木悠哉，青山謙二郎
6. 「自分ひとりの居場所」を志向する要因の検討―「安心できる人」の評定とひとりで過ごす感情・評価及び満たされない自己との関係から―	共	平成26年11月	関西心理学会第126回大会「於大阪市立大学」	発達段階において，自己が安心できる居場所が存在することは，青年期の心理的，学業的な適応において重要とされている。本研究では，大学生を対象とした質問紙調査を行い，安心できる人の評定とひとりで過ごす感情・評価との関係を検討した結果，“自分ひとり”の場合の評定と「孤独・不安」尺度は中程度の負の相関があり，“自分ひとり”の安心感が高い者ほど孤独感や不安感は低かった。また，“自分ひとり”の評定とひとりで過ごすことの充実感・満足感も弱い正の相関があり，ひとりで過ごすことに必ずしもネガティブな感情を抱いていないことが示唆された。 本人担当部分：データ分析 共同発表者：岡村季光・高木悠哉

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
「ポスター発表」				
1. TV視聴が摂食行動の食事セッション内減少に及ぼす影響	共	平成19年8月	日本行動分析学会第25回大会「於立教大学」	TVを視聴しながら摂食させることが摂食ペースの推移および総摂食量に及ぼす影響について検討した。一般にTV視聴をしながら摂食することは食事量の増加をもたらすと欧米では考えら得ているが，本実験研究ではそのような結果が得られなかった。したがって，TV視聴が食事量に及ぼす効果は何らかの要因（例えばCM）に限定されている可能性が議論された。しかし、就学前児童においては、保育園等からTV市町の影響が報告されており、乳児期から青年期に至る発達段階ににより食事に及ぼす影響が異なることは分析が求められる 本人担当部分：計画，調査，発表 共同発表者：高木悠哉，青山謙二郎
2. 栄養を摂取することが，その後の食行動のセッション内減少と摂食量に及ぼす影響2～実験前に同じ食物を摂食させることが，その後の食事セッションでの摂食行動にもたらす効果の検討～.	共	平成19年9月	日本心理学会第71回大会「於東洋大学」	実験直前に一定の食物を摂食させることが，その後の食べるペースの推移と摂食量に及ぼす影響について，特に実験前とその後の摂食セッションでの食物を同じにした条件で検討した。結果として，直前に異なる食物を実験前接触させることは，その後の食事量に全く影響を与えなかった。したがって，食事直前に何かを摂食刷ることは，後の食事量に影響を及ぼさず，一定の時間間隔をあけてから摂食すべきであることが示唆された。この一定程度の時間間隔は、心身発達段階に応じて異なることが考えられる。 本人担当部分：計画，調査，発表 共同発表者：高木悠哉，青山謙二郎
3. 30回以上噛ませて摂食させることが食事セッション内減少と総摂食量に与える影響.	共	平成20年8月	日本行動分析学会第26回大会「於横浜国立大学」	本研究では，30回以上噛んでゆっくり摂食させた場合の食べるペースの推移について，口頭発表その４，とは異なる実験時間を用いて検討した。結果として，具体的に噛む回数をしても，多くかむ条件が長く食べ続け，必ずしも摂食量は減少しないことが明らかとなった。学校給食などで児童に噛む回数を多くする指導を行うと摂取量が減少するのは、噛む回数以外の要因（食事時間制限・他の子どもとの関係）などが関係すると議論された 本人担当部分：計画，調査，発表 共同発表者：高木悠哉，青山謙二郎
4. 主観的に不快を感じない程度に噛ませて摂食させることが、摂食行動の食事セッション内減少と総摂食量に及ぼす影響	共	平成20年9月	日本心理学会第72回大会「於北海道大学」	自身の従来のよく噛んで摂食させる研究では実験者が噛む回数を設定していた。それに対して本研究では，参加者に予備実験を行うことで不快を感じない程度の回数を決定して実験を行った。結果として，具体的に噛む回数をしても，多くかむ条件が長く食べ続け，必ずしも摂食量は減少しないことが明らかとなった。 本人担当部分：計画，調査，発表 共同発表者：高木悠哉，青山謙二郎
5. 直前の食事の記憶の鮮明さが後の味覚評定での摂食量に及ぼす影響	共	平成22年8月	日本心理学会第74回大会「大阪大学」	直前の食物の記憶の想起の鮮明さが，その後の味覚評定での摂食量に影響を及ぼすかを検討した。結果として，用紙に書くことで想起させても，さらに写真を見ながら想起させても，群間の総摂食量の平均値は同様だった。 本人担当部分：計画，発表 共同発表者：高木悠哉，山崎真理子，青山謙二郎
6. 飲料の摂取が認知課題の遂行に及ぼす影響の検討	共	平成22年8月	日本心理学会第74回大会「大阪大学」	特定の栄養素を含む飲料が，人間の認知活動に影響することはよく知られているが，水の摂取が認知課題に影響することは，まだ検討があまりない。本研究では，大学生を対象に，水を摂取する場合としない場合とで認知課題の成績を比較した。課題は３種類を１セットとし，計４セット実施した。本実験では先行研究とは異なり，水を摂取することの効果は見られなかった。 本人担当部分：計画，発表 共同発表者：山崎真理子，高木悠哉，青山謙二郎
「ワークショップ」 1. ダイエットへの心理学的アプローチ　その2	共同	平成20年9月	日本心理学会第72回大会「於北海道大学」	小学生から老年期まで幅広い年齢層で，ダイエットを行うことが一般的となっている。これを心理的側面から注目すると，単に肥満や痩せといった発達心理学上の問題解決への手がかりを提供できるだけでなく，現代人の美意識や心理的発達の有り様などの意味を見出すことができる。本ワークショップでは，心理発達に寄与する食行動，食への意識の研究知見についての研究知見の動向を発表，議論した。現代の学校での児童・生徒のやせ願望傾向についての警鐘も提示した。 発表者：可知悠子，葦原摩耶子，鈴木公啓，高木悠哉 指定討論者：田中久美子
「シンポジウム」 1. 食事セッション内減少の規定因とその応用可能性について	共同	平成21年3月	同志社大学文学研究科心理学専攻，北海道医療大学心理学研究科，研究交流会「於北海道医療大学」	幼児期から老年期までの健康的な食行動の実現は，健康的な身体状態に寄与するのみでなく，健康的な心理発達をももたらす。本シンポジウムでは，人間の発達過程の根底となる食行動の基礎的なメカニズムを発表するとともに，発達過程においてそれが一定に保たれること，さらに，食行動の個人差が就学前の子どもから青年期へ至る発達過程において異なる影響をもたらす，といった研究について概説，議論した。 発表者：高木悠哉，山崎真理子，漆原宏次

教　育　研　究　業　績　書

平成 29 年 3 月 31 日

氏名　瀧明　知惠子

研　究　分　野	研　究　内　容　の　キーワード
教育学	音楽科教育、声楽、学校教育、教員養成

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　要
1　教育方法の実践例 1)教科音楽において主体性・創造力を育むグループ発表	平成 25 年 4 月～7 月	幼・保採用試験の課題曲であった数曲を練習し、現場で即、生かせるよう「振付をつけた歌の発表」を課題とした。5 人グループで振付を創作し主体的に練習を進め「発表の審査」も課題の一つにした。工夫点や改善点など、活発ない意見交流を促すしことで互いに高めあい、教師の指導助言にもしっかり耳を傾けた。今後の創作活動に活かせる活動となった。武庫川女子大学の実践
2)教科音楽において授業内容の定着を図る取り組み	平成 25 年 4 月～7 月	楽典の知識理解が全体的に低い状況が見られたため、毎時間始めの 10 分、反復練習を取り入れるとともに、基本事項を精選し、繰り返し教えることで、まとめのテストでは 60%未満の点数は 0.5%の学生にとどまった。集中して学ぶ姿勢が実力をつけることにつながった。 武庫川女子大学文学部教育学科「教科音楽」
3) 教科音楽において自己評価を生かした授業づくり	平成 25 年 4 月～7 月	授業の最後毎回自己評価を記載させている。「授業内容・力が発揮できたところ・できなかったところを文章表記・最後にＡ～Ｅの評価」自分自身の取り組みを確認させ、授業への意欲付となっている。どの学生も熱心に書き、次回のより良い授業づくりに生かしている。武庫川女子大学文学部教育学科「音楽科指導法」での実践。
4) 音楽科指導法において、アウトリーチを活用した授業づくり	平成 25 年 9 月～26 年 3 月	武庫川女子大学文学部教育学科「音楽科指導法」において、限られた授業時間の中で、音楽授業をより充実させていくために学校教育だけでは実現しない音楽の授業を検討し、教育内容が広がっていくようなカリキュラム作りを学生に考えさせる。地域のホール・専門家・学校がつながりあうことで、音楽科教育はより豊かになる。そこで、実際、地域の邦楽活動家に、授業参加を依頼し、アウトリーチを活用した授業の実践を行う。学生にアウトリーチを活用した授業づくりについて学ばせる。
5) グループワークによるピアノ技能の向上	平成 26 年 4 月～7 月	武庫川女子大学文学部教育学科「器楽演習Ｉ」において 30 年余り、教育現場で音楽教育を行い、会得してきた指導方法を生かした授業を推進する。ピアノ個人レッスンにグループレッスンの時間も取り入れる。特に初見演奏の際に、グループで行うことにより、比較的早く曲の全体が体得できる。また、階名読みは宿題にするが、読み辛い生徒はグループの教えあいにより、比較的速くできるようになる。仲間意識が高まるとともに、ピアノの技能も初心者の学生にスムーズに身につけさせることができた。

6）パターン化した歌唱法の修得と発達段階に応じた指導法の開発	平成 26 年 4 月～7 月	武庫川女子大学文学部教育学科「器楽演習Ⅲ」において 30 年余り、教育現場で音楽教育を行い、会得してきた教育内容と指導方法を生かした授業を推進する。ピアノ個人レッスン・連弾・合唱のオムニバス形式での授業において、合唱を受け持つ。呼吸法、発声法をパターン化し、毎回繰り返すことにより、少しずつ音域・音量等の力をつけさせる。パターンの応用を各校種学年に応じて考えさせ、指導者となったときの備えとさせた。合唱では 2 重唱、3 重唱、独唱にも挑戦させ、個性特性を発揮させるとともに技能を伸長する。
7）アクティブラーニングを活用した指導案づくり・授業力の向上	平成 26 年 9 月～平成 27 年 3 月	武庫川女子大学文学部教育学科「音楽科指導法」において 4～5 名のグループ分けを行い、模擬授業の指導案作成・討議・実践準備を行わせ各グループに、模擬授業を実施させる。特に導入部に視点を当て、いかに興味関心を持たせる授業づくりをするかを考えさせる。協力しあうことで、指導案・授業力の向上を図ることができた。
8）発表会形式小テストの積み上げによるピアノの技能向上	平成 27 年 4 月～平成 27 年 7 月	奈良学園大学人間教育学部人間教育学科「器楽演習Ⅰ」において、集団で高め合う時間とグループレッスン・個人の実技を高める時間を設定し、意欲を喚起する。初めてピアノに取り組む学生が約 80%だったが、どの学生にもバイエル 90～100 番の技能をつけるために、3 回の発表会形式による実技テストを行い、全員 103 番を弾けるようになった。
9）グループワークと集団での学びにおける発表と評価、及び福祉施設での音楽活動体験	平成 27 年 9 月～平成 28 年 2 月	奈良学園大学人間教育学部人間教育学科「器楽演習Ⅱ」において、集団で高め合う時間と個人の実技を高める時間を設定し、修得したことを仲間に教えたり、発表したり、批評し合うことによって技能（ピアノ演奏や弾き歌い）の修得の深化が見られた。成果発表を、地域の福祉施設にて、音楽ボラティアとして実施する。大変喜んでいただき自信をつけ、意欲を喚起することにつながった。
10）アクティブラーニングを活用した器楽アンサンブルの創作・発表・評価で実践力の育み	平成 28 年 4 月～7 月	武庫川女子大学文学部教育学科「音楽科指導法」においてアクティブラーニングを活用し、器楽アンサンブルの創作・楽譜作成と発表を行わせる。使用する楽器演奏の仕方から調べさせ、幼児・園児が楽しめるアンサンブルの楽譜を作成し、発表までを協力し行う。互いの発表を評価し意見交流の中で、言語活動を活発に行わせ、お互いが切磋琢磨しながら、より良い教材研究づくり、指導法の力をつけることができた。
２　作成した教科書、教材 1）若い教師に伝えたいこと[再掲] ～範を示せる教師であれ～週刊教育ＰＲＯ	平成 24 年 3 月	西宮市立浜甲子園中学校の校長として教育実習生や新任教員へ教育活動の核となる教科経営、学級経営について要点をまとめた資料。後の武庫川女子大学文学部教育学科「音楽科指導法」において活用する。
2）新任教師に伝えたいこと[再掲] ～生徒指導の心得～週刊教育ＰＲＯ	平成 24 年 6 月	西宮市立浜甲子園中学校の校長として、教師の心構え、生徒指導の在り方についてまとめた資料。校長として教育実習生や新任教員の指導に活用した。
3）新学習指導要領における音楽科教育 ～音楽教育に献身してきて思うこと～　教育フォーラム 50 号[再掲]	平成 24 年 8 月	西宮市立浜甲子園中学校の校長として、新学習指導要領における音楽科教育のあり方、可能性（歌唱・器楽指導等）をまとめた資料。市内音楽研究会、研究授業などで活用。後の武庫川女子大学文学部教育学科「教科音楽」の中で活用する。

4) 新学習指導要領における、音楽科授業への提案[再掲] ―音楽を通した感動体験から豊かな心を育む　　週刊教育ＰＲＯ	平成 24 年 9 月	西宮市立浜甲子園中学校の校長として新学習指導要領における音楽科教育の可能性（歌唱・ピアノ伴奏法・弾き歌い等）をまとめた資料。市内音楽研究会、研究授業などで活用。後の奈良学園大学人間教育学部人間教育学科「器楽演習Ⅰ」、武庫川女子大学文学部教育学科「音楽科指導法」の中で活用する。
5)音楽科を核とした合唱活動の広がり週刊教育ＰＲＯ[再掲]	平成 24 年 10 月	西宮市立浜甲子園中学校の校長として、学校における合唱活動をいかに広げ、充実させるか（歌唱・ピアノ伴奏等）についてまとめた資料。市内音楽研究会、研究授業などで活用。後の武庫川女子大学文学部教育学科「音楽科指導法」の中で活用する。
6)「新学習指導要領実施・活気あふれる学校運営　～小規模校の特色を生かして～」週刊教育ＰＲＯ[再掲]	平成 25 年 1 月	武庫川女子大学文学部教育学科において、学校教育のあり方について、音楽教育の年間計画・指導案のたて方、生活・学習規律の指導の仕方、音楽行事への準備の仕方・注意点などについてまとめた資料。武庫川女子大学文学部教育学科「音楽科指導法」、後の奈良学園大学人間教育学部人間教育学科「器楽演習Ⅰ」の中で活用する。また、教育実習生指導においても活用する。
7) 「音楽を通した感動体験から豊かな心を育む～合唱劇の取り組みから～」を単著[再掲]	平成 25 年 3 月	武庫川女子大学文学部教育学科において、音楽を通した感動体験から豊かな心を育む～合唱劇の取り組みから～」を単著執筆する。 生徒たちに豊かな音楽活動を体験させることは、人間形成にかかせないものである。限られた授業時数の中で、これまでの授業を見直し、学年全体で活動できる「合唱劇の取り組み」についても積極的に授業に取り入れていく。歌唱法、合唱づくり、ピアノ伴奏法、様々な器楽演奏指導等、新教育課程における指導法を創意工夫する。武庫川女子大学文学部教育学科「音楽科指導法」の中で活用する。
8)「初等科音楽基本の内容と指導法～ここがポイント～」単著　［再掲］	平成 27 年 5 月	奈良学園大学人間教育学部人間教育学科において、「初等科音楽基本の内容と指導法～ここがポイント～」を単著執筆する。保育士、幼稚園・小学校教諭が音楽指導する際に必要な基礎基本内容と指導法をまとめる。「小学校学習指導要領音楽編」、「幼稚園教育要領・保育所保育指針　表現」について解説する。また、各学年、年齢に応じた指導内容や、発達段階に応じた歌唱、器楽、音楽づくり、鑑賞の指導法などを実践例を示しながらまとめる。資料には楽典の基本事項をわかりやすく示す。奈良学園大学人間教育学部人間教育学科「器楽演習Ⅱ」、武庫川女子大学文学部教育学科「音楽科指導法」、の中で活用する。
9) 「イタリアの学校音楽科教育に学ぶ　～歌唱活動に注目して～」単著　[再掲] 教育フォーラム 56 号[再掲]	平成 27 年 8 月	奈良学園大学人間教育学部人間教育学科において、「イタリアの学校音楽科教育に学ぶ～歌唱活動に注目して～」を執筆する。「イタリアの歌唱活動をはじめとする音楽科教育に学び、発達段階に応じ、正しく表現する方法である呼吸法や発声法など基礎技能の教育方法を示す。また、音楽科教育の活動を広げ、総合的な表現力の向上のために、音楽科教育を核とした合唱劇のプロジェクト（総合表現活動）を紹介する。武庫川女子大学文学部教育学科「音楽科指導法」、奈良学園大学人間教育学部人間教育学科「器楽演習Ⅱ（鍵盤楽器）」の中で活用する。

10)「初等科・中等科音楽教育基礎と指導法～歌唱・合唱の系統性に視点をおいて～」単著　[再掲]	平成 28 年 4 月	これまでの教育活動を見直し、「キー・コンピテンシー」や「21 世紀型スキル」などを視野にいれ、初等科・中等科音楽科教育の目標・内容について基本をおさえ、指導・支援にあたれるよう示している。指導計画の作成の仕方・評価を生かした授業づくりについて実例を示して述べている。指導法については、発達特性の基本的な考え方、発達段階に対応した指導・支援方法のポイントについて述べ、特に歌唱（民謡や日本の伝統的な歌唱法を含む）を中心として、理論的な意味付けを明確にし、共通教材について留意し具体的な実践の展開に結びつけていくよう述べている。 B5 判
11)「人間教育」の根源である「いのちの教育」に関する一考察　～中学校における実践から～[再掲]	平成 28 年 5 月	奈良学園大学人間教育学部人間教育学科において、「人間教育」の根源である「いのちの教育」に関する一考察　～中学校における実践から～」を執筆する。「2013 年『いのち』に関わる意識調査『こころに関するアンケート』の結果分析から導き出した５つの視点を紹介する。それらを中学校における「いのち」に関わる授業実践において活用した様子を報告する。実践研究からを活かし作成した、中学校における「いのちの教育」のカリキュラムを示す。学生に「いのちの教育」の大切さを学びとらせる。奈良学園大学人間教育学部人間教育学科「教職入門 B（中等）」の中で活用する。
12)「イタリアの学校音楽科教育に学ぶ～創造性・主体性の育みを視点として～」(共著)[再掲]	平成 28 年 8 月	奈良学園大学人間教育学部人間教育学科において、「イタリアの学校音楽科教育に学ぶ～創造性・主体性の育みを視点として～」次世代に生きる子供たちには「創造性をめぐって」や「コミュニケーションと ICT」を重点課題とした教育が望まれている。創造性や個性・特性を重視しているイタリアにおける、ICT を活用し、様々な教科（英語・国語・体育・道徳など）と音楽を融合させた授業や、総合的な表現力の向上を目指す音楽科を核とした合唱劇のプロジェクト（総合表現活動）、地域の音楽文化やアウトリーチを取り入れた授業などに示唆を導き出す。より良い授業の創造に活かしていく。武庫川女子大学文学部教育学科「音楽科指導法」の中で活用する。奈良学園大学人間教育学部人間教育学科「器楽演習Ⅱ（鍵盤楽器）」の中で活用する。
３　教育上の能力に関する大学等の評価		
1)武庫川女子大学の非常勤講師（音楽科教育）として採用される際の、文学学部長及び学科長の評価。	平成 25 年 4 月～現在に至る。	武庫川女子大学文学部教育学科の非常勤講師として、「教育音楽」「初等音楽科指導法」において教鞭をとる。採用に対し声楽家としての活動や、合唱におけるピアノ伴奏指導や発声指導の工夫が高く評価され採用された。
2)奈良学園大学の講師（音楽科教育）として、器楽演習Ⅰ・Ⅱ、器楽・歌唱法担当者として採用される際の、学部長の評価。	平成 26 年 4 月	奈良学園大学人間教育学部の講師として、「器楽演習Ⅰ・Ⅱ」「器楽・合唱法」において教鞭をとる。採用に対し、長らくの中学校現場の経験、声楽家としての活動や、合唱におけるピアノ伴奏指導や発声指導の工夫が高く評価され採用された。
3) 武庫川女子大学の非常勤講師（音楽科教育）として、初等音楽科指導法・器楽演習Ⅰ・Ⅱの担当者としての学生の評価	平成 27 年 2 月	学生アンケートより、初等音楽科指導法では「声の大きさ、話し方、板書は適切か・・・強くそう思う 96%」意見として、「経験談を話してくださり、私もがんばろうと思った」、器楽演習Ⅰ・Ⅱでは「私語を少なくするよう適切な指導・・・90%」、意見として、「毎回できなかったことを何度も指導していただき、家でも頑張れた」などの評価を得た。

４　実務の経験を有する者についての特記事項 1)西宮市立音楽連盟副会長として研究授業について指導助言と実技指導を行う。	平成19年度～平成24年度	西宮市立西宮浜中学校教頭・西宮市立浜甲子園中学校教頭、西宮市立浜甲子園中学校校長として、年２回研究授業を参観し、研究協議において指導助言を行うとともに、新教育課程における音楽科のあり方について、発声法・パートリーダーの育成等について指導助言を行う。 西宮市立浜脇中学校　合唱指導「涙を超えて」 西宮市立上ヶ原中学校　合唱指導「マイバラード」観点別評価の研究会も行う。 西宮市立平木中学校　鑑賞指導「運命」（新任教員研究授業） 西宮市立瓦木中学校　器楽指導（アルトリコーダー） 西宮市立真砂中学校　鑑賞指導「ジャズ演奏」 西宮市立鳴尾中学校　合唱指導「夢の世界を」他
2）兵庫県教育委員会より新学習指導要領（音楽科）伝達講師に任命され、文部科学省の伝達講習会を受け、県下各地の講師を務めた。	平成20年8月	西宮市立浜甲子園中学校教頭として文部科学省の伝達講習会においては、新指導要領の特色となる所など、注意して聴き取る。音楽科改訂の要点として．内容の構成の改善、「共通事項」の新設、歌唱教材の提示、我が国の伝統的な歌唱の充実、和楽器の指導、創作の指導内容の焦点化・明確化、鑑賞領域の改善が挙げられるが、質問時間を有効に活用し、疑問点、もう少し聞きたいところなど積極的に質問した。阪神音楽科研究会では阪神間の中学校音楽教諭50名近くが熱心な態度で聞き入った。できる限り、例など示しながら、また、 その趣旨を明確にしながら伝達し、質疑応答の時間を設け、その後、Q&Aの資料も作成した。西宮市でも実施し、より理解が深められたのではないかと思う。その後も、若い教員のために勉強会を続け、音楽科における新指導要領にそった授業実施に貢献することができた。
3）西宮市立中学校校長会において、市内の教育実習の担当として教職の基礎についてまとめ、各校の実習が円滑に行われるよう貢献する。	平成22年度～平成24年度	西宮市立浜甲子園中学校校長として市内の教育実習が円滑に行われるよう貢献すると共に、教育実習生が充実した実習生活が送れるよう、現任校において教育方針・活動についてや教職の心がまえについて指導する。最終日は成果と課題について報告を受け、今後の指導助言を行う。
4)西宮市人権教育研究会において講師を務める。	平成22年11月	西宮市立浜甲子園中学校校長として西宮市立高須中学校・１～３年研究授業、西宮市人権教育研究協議会にて指導助言を行う。
5)西宮市人権教育研究会において講師を務める。	平成23年10月	西宮市立浜甲子園中学校校長として、西宮市立鳴尾南中学校・１～３年研究授業、西宮市人権教育研究協議会にて指導助言を行う。
6）大阪府教職員自主研修支援事業 大学オープン講座（夏季講座）の講師を務める	平成26年7月	奈良学園大学人間教育学部人間教育学科　講師として、講演テーマ＜心を育む歌唱・合唱指導　～歌声ひびく学級づくり～＞講演内容は①音楽行事と学級指導　②呼吸法や発声法、響きある歌声づくりへのワンポイントアドバイス　③心と歌声を合わせ美しい音楽表現を目指す学級づくり、を行う。
7）王寺町主催＜り～べるカレッジ＞における講師を務める	平成26年10月	奈良学園大学人間教育学部人間教育学科　講師として、講演テーマ＜日本の心の歌　～童謡・唱歌・わらべうたを歌い継ぐ～＞　内容は①日本の心の歌　「童謡・唱歌」の歴史、作詞者・作曲者についてや、曲の内容などの講話　②呼吸法や発声法、響きある歌声づくりへのワンポイントアドバイスを行う。

8) 平成 24 年度～平成 26 年度科学研究費補助金（基盤研究 B）課題番号 24330254 における「いのちの教育カリキュラムモデルの開発的研究」授業実践・研究協議での講師を務める。	平成26年10月	奈良学園大学人間教育学部人間教育学科　講師として、「いのちの教育」において、「心についてのアンケート」を実施するとともに、兵庫県道徳副読本「心かがやく」より『語りかける目』の実践研究など、授業研究の指導案作成・研究授業における指導助言を行う。
9)三宅町教育委員会社会教育部より以来を受け涯学習推進講座において講師を務める	平成27年5月	奈良学園大学人間教育学部人間教育学科　講師として、歌い継ぐ日本の心の歌～童謡・唱歌・わらべうた～」をテーマに、講演と独唱「朧月夜」他。出席者への歌唱指導、指揮を行う。約 60 名の参加者があった。
10)音楽研究授業、研究協議において講師を務める。	平成27年6月	奈良学園大学人間教育学部人間教育学科　講師として、奈良学園小学校４年生の音楽研究授業参観、研究主題のメタ認知を視点とした研究協議、また、アウトリーチを活用した「和の音楽」に関わる研究協議を行う。
11) 大阪府教職員自主研修支援事業 大学オープン講座（夏季講座）の講師を務める	平成27年7月	奈良学園大学人間教育学部人間教育学科　講師として、「心を育む歌唱・合唱指導そのⅡ　～歌声ひびく学級づくり～」をテーマに①呼吸法や発声法、発達段階に応じた歌声づくり、②心と歌声を合わせ美しい音楽表現、③合唱指揮法の基本についてなど。
12) イタリア（ローマ）での音楽科教育研究会における音楽活動	平成27年9月	音楽科教育研究交流を行っている Scuola Primaria “Ermenegildo Pistelli” ピステッリ小学校（幼小・中学校の一体型学）の小学２年生・4 年生の研究授業において、日本の心の歌である童謡・唱歌・わらべうたを紹介する。パワーポイントでのプレゼンテーションを行い、歌を披露するとともに、遊び方を教え、ローマ字での日本の歌を、共に歌うことができた。日本の心の歌の良さを伝え、日伊の親善に貢献する。
13)合唱コンクールに向けたプレ発表会及び小中交流会における指導・講評を行う。)、	平成27年10月	西宮市立大社中学校において、全校合唱コンクールに向けたプレ発表会が苦楽園小学校 6 年生を招き行われる。中学生 3 年 300 名の学年合唱、7 クラスの学級合唱が行われ、小学生は熱心に聴きいった。学年・学級合唱における発声・発音・曲の仕上げ方などの指導を行う。音楽科教諭・校長への中学校における音楽科教育について聴き取り調査を行う。
14)和の音楽鑑賞会及び体験学習における講師を務める。	平成28年1月	奈良学園大学人間教育学部人間教育学科　講師として、奈良学園小学校５年生 3 クラスを対象に、和の音楽伝承グループによるアウトリーチを活用した音楽鑑賞会及び体験学習におけるコーディネータを務める。子どもたちは大変興味深く鑑賞し、お箏、尺八の体験に意欲的に取り組んでいた。
15)三郷町教育委員会生涯学習課より依頼を受け、文化協会・老人連合会共催の講座において講師を務める	平成28年2月	奈良学園大学人間教育学部人間教育学科　講師として、歌い継ぐ日本の心の歌～童謡・唱歌・わらべうた～」をテーマに、講演と独唱。童謡・唱歌・わらべうたの歴史や特徴などパワーポイントでのプレゼンテーションを行うとともに「荒城の月」など独唱、出席者への呼吸法・発声法の指導、指揮を行う。多くの参加者が熱心に受講し、地域と世代をつなぐ取り組みとなった。事後アンケートで「日本の心の歌を沢山の人々と共に後々に伝えていくことの大切さを教えられた」など 100 名以上の方に好意的な意見をいただく。（参加者 165 名）
16) 三宅町市民講座において、童謡・唱歌指導および講演	平成28年7月	奈良学園大学人間教育学部人間教育学科　講師として、ヴォイストレーニングの概要説明とともに指導を行う。また、童謡唱歌に纏わる話を行いながら、独唱の披露、歌唱指導を行う。参加者 20 名

17) 王寺町主催＜り～べるカレッジ＞における講師を務める	平成28年7月	奈良学園大学人間教育学部人間教育学科　講師として、講演テーマ＜日本の心の歌　～童謡・唱歌・わらべうたを歌い継ぐ～＞　内容は①日本の心の歌　「童謡・唱歌」の歴史、作詞者・作曲者についてや、曲の内容などの講話　②呼吸法や発声法、響きある歌声づくりへのワンポイントアドバイスを行う。奈良学園大学人間教育学部学生 5 名も参加し、学生と歌おうのコーナーでは地域の方々と交互に歌い合うなど共に歌い合いを楽しんだ。地域交流、世代交流の場ともなった。 地域参加者約 70 名
18) イタリア（ローマ）での音楽科教育研究交流会における講師	平成28年9月	音楽科教育研究交流を行っているScuola Primaria“Ermenegildo Pistelli”ピステッリ小学校（幼小・中学校の一体型学）の小学２年生・４年生の研究授業において、日本の心の歌である童謡・唱歌・わらべうたについて、プレゼンテーションを行う。また、「オペラプロジェクト」を活用した授業の参観、研究協議において助言を行う。
5　その他 特になし		

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　　要
1　資格、免許 1) 中学校教諭一級免普通許状音楽	昭和50年3月	昭四九中一普第九六三号 （兵庫県教育委員会）
2) 高等学校教諭一級普通免許音楽	昭和50年3月	昭四九高二普九九五号 （兵庫県教育委員会）
3) 修士（学校教育学）	平成7年 3月	兵庫教育大学大学院　修第 3264 号　題名「中学校音楽科選択履修拡大に関する一考察」
4) 中学校教諭専修免許状音楽	平成8年 3月	平七中専第一五六号 （兵庫県教育委員会）
5) 高等学校教諭専修免許状音楽	平成8年 3月	平七中専第二五三号 （兵庫県教育委員会）
6) 養護学校教諭二級免許状	平成8年 3月	平七中専第二五三号 （兵庫県教育委員会）
2　特許等 ・特になし		
3　実務の経験を有する者について特記事項		
1) 西宮市中学校音楽連盟副会長として会長を補佐し、西宮の音楽教育の充実・発展に尽力する。	平成 14 年度～ 平成 24 年度	西宮市内の音楽教育活動のより充実発展を目指す。
2) 西宮市中学校音楽連盟副会長として会長を補佐し「くすの木コンサート」の運営に貢献する。	平成 14 年度～ 平成 24 年度	西宮市立中学校卒業生の音楽活動発表の場である「くすの木コンサート」の充実に力を入れ、西宮市出身の若い音楽家の活動の場を広げる。
3)　西宮市中学校音楽連盟副会長として会長を補佐し「西宮市内音楽祭」の運営に貢献する。	平成 14 年度～ 平成 24 年度	1 年に 1 回行われる「西宮市内音楽祭」（各学校吹奏楽・合唱発表）の充実に力を入れ、より発展を目指し、活性化に努める。
4)　西宮市中学校音楽連盟副会長として会長を補佐し「西宮市内合唱祭」の運営に貢献する。	平成 14 年度～ 平成 24 年度	1 年に 1 回行われる「西宮市内合唱祭」の充実に力を入れ、より発展を目指し、活性化に努める。

5)兵庫県教員採用試験（音楽）試験官として任命され、7年間にわたって、実技試験内容や評価の在り方について研究を深める。	平成15年度～平成21年度	７年間、小学校教員採用試験の実技試験（歌唱と器楽とピアノ演奏）の試験官を務めた。その間、実技試験内容の歌唱曲の選曲を拍子感や音域、詩の内容、曲想の面から検討し見直した。また、発声指導の時間をとり、短時間で声の調子を整えさせるよう、発声内容や注意点の内容について工夫した。「新曲」の作成においては、基本的な単純拍子・複合拍子でメロディーは1段目で難易度を低くし、2 段目は臨時記号を入れるなど難易度を上げるよう配慮した。また基本的なリズムパターンを何カ所かに入れることとし、しかも曲としてまとまりのある曲となるよう、3･4名で20曲程度作成した。評価項目、評価基準については、毎年検討会をもち、意見交流しながら共通理解を深めた。後半の3年間は音楽実技試験官のまとめ役をし、実技試験がスムーズに実施されるよう尽力した。
6) 西宮市中学生主張大会審査委員として会の充実に貢献する。	平成20年8月～21年8月	教頭会副会長として、審査員を務める。
7)西宮市立中学校中学生中国友好訪問団団長として市内中学校代表 20 名を引率し、中国を友好訪問し、音楽科授業の参観交流授業を行う。	平成22年12月	第 23 回団長を務める。尖閣諸島問題で日中関係が微妙な年であったが、礼を持って交流し、友好親善の目的を果たす。音楽授業を参観し、音楽科における日中合同音楽授業を行い交流を深める。
8)西宮市栄養教員・栄養職員研究会会長として研究紀要の発行に尽力する。	平成23年3月	西宮市の栄養教員・栄養職員研究会において、研究のまとめの発行に尽力する。
9)兵庫県西宮市音楽教科書採択委員として尽力する。	平成23年7･8月	西宮市教育委員会より音楽教科書採択委員会の委員長を命ぜられ、採択委員会を開き、採択結果を西宮市教育委員会に報告する。
10)西宮市校園長会の会長として幼稚園・学校・中学校・高校の連携を深めるため尽力する。	平成24年4月～平成25年3月	会長として、幼稚園・学校・中学校・高校の連携を深めるため、校園長との連絡調整・とりまとめを行う。特に音楽科教育の連携に力を入れる。
11)西宮市中学校家庭科教育研究会会長として総会の充実に尽力する。	平成24年5月	西宮市の家庭科教育・食育において、充実発展を目指し、会の活性化を図る。
12)西宮市栄養教員・栄養職員研究会会長として総会の充実に尽力する。	平成24年5月	西宮市の栄養教員・栄養職員研究会において、充実発展を目指し、会の活性化を図る。
13)文部科学省共催、独立行政人教員研修センターにおける学校評価指導者養成研修会において発表、学校評価指導者養成研修修了証書を授与される。	平成24年7月	現任校における学校評価の取り組み、及び成果と課題について発表すると共に、他府県の取り組みや、文科省の講演より多くのことを学び、学校経営に生かす。
４　その他		
1)科学研究費補助金（基盤研究B）課題番号24330254 「いのちの教育カリキュラムモデルの開発的研究」を行う。	平成24年度～平成26年度	研究協力者として、「いのちの教育カリキュラムモデルの開発事例」を実践研究し、＜いのちの教育部会研究報告書＞に「西宮市立山口中学校における実践」「中学校の年間カリキュラム」「音楽科教育における成就感・自尊感情の育み」を執筆する。

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（著書） 1) 特集＜やる気＞を引き出し、育てる （教育フォーラム50号）	共著	平成 24年8月	金子書房 人間教育研究協議会	教師が子どもの＜やる気＞を引き出し、育てるための方策を考察し、教師自身の＜やる気＞についても論じる。Ｂ５判　全　179頁 編集代表　梶田叡一 梶田叡一、加藤　明、松田智子、浅田　匠、中村　哲、善野八千子、金山憲正、勝見健史、久田　孝、瀧明知惠子、ほか5名 担当部分 「新学習指導要領における音楽科教育 ～音楽教育に献身してきて思うこと～」を単著 中学校教育における音楽科の果たす役割を強く実感している。生徒たちに豊かな音楽活動を体験させることは、人間形成にかかせないものである。新学習指導要領において音楽科ではこれまで通りの授業数にとどまった。限られた授業時数の中で、これまでの授業を見直し、新しい課題についても積極的に授業に取り入れていく必要がある。歌唱法、合唱づくり、ピアノ伴奏、和楽器を含む器楽演奏指導・鑑賞等、新教育課程における指導法を創意工夫すると共に、地域の音楽文化を生かし、小・中学校の9年間の連続した取り組みも意識し、新教育課程における年間計画を創意工夫していかねばと考える。 p. 146～155
2) 「新学習指導要領実施・活気あふれる学校運営～確かな学力・情操豊かな人間性を育む～」	単著	平成 26年1月	株式会社ＥＲＰ	新学習指導要領全面実施の中、梶田叡一氏による「『やる気』をいかに喚起するか、より良い学習環境をいかにつくっていくか」を課題とした学校運営について述べる。まず、学校教育目標を見直し、第1章では確かな学力の定着のために、生活・学習規律の醸成を踏まえた心の居場所となる学級づくりと学びがいのある授業づくりについて、第2章では情操豊かな人間性を育むため、音楽活動を核とした、仲間とともに築き上げる行事への取り組み、音楽教育の在り方、また参画と共同の取り組みについて、さらに第3章では学校評価を生かした活気あふれる学校づくりについて述べ、課題解決の方策に迫る。　　全72頁　A5判
3) 特集＜文字が育てる言葉の力＞文学教材を用いた指導をどうするか （教育フォーラム53号）	共著	平成 26年2月	金子書房 人間教育研究協議会	＜文字が育てる言葉の力＞において、言葉の力を育てるための方策を考察し、各教科領域における文学教材を用いた指導をどうするかについて論じる。Ｂ５判　全　147頁 編集代表　梶田叡一 梶田叡一、加藤　明、鎌田首治朗、伊崎一夫、勝見健史、山下敦子、汐見治美、永田里美、湯峰　裕、瀧明知惠子、ほか2名 担当部分 「音楽を通した感動体験から豊かな心を育む　～合唱劇の取り組みから～」を単著 これまで筆者が実践してきた「合唱組曲・合唱劇」の取り組み過程を述べている。合唱を中心とするが、独唱、重唱の場面を取りいれるなど、生徒の個性・特性を発揮させ、より豊かな表現を目指す取り組みである。伴奏はピアノで作曲されているものが多いが、生徒に演奏しやすく編曲したり、朗読のバックのピアノ演奏

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				を加えたり、ピアノだけでなく、生徒が取り組みたい楽器の楽譜をつくるなど創意工夫を重ねてきた実践を具体的に示している。音楽には共に演奏することで連帯感を持たせる力がある。孤独感を抱きやすい思春期の中学生には、前向きに生きるエネルギーになるこの連帯感が必要である。生徒が心揺さぶられるような一体感を感じる授業を成立させるためには他教科や学校行事と連携しながら計画的に行っていくことが大事であることを力説している。 p. 146～155
4)「人間教育を視点にした教職入門」	共著	平成 26 年 12 月	大学教育出版	「人間教育を視点にした教職入門」においては「次世代の教職入門」を変化する教育情勢に対応し、新しく人編集し直す。人間教育を視点とし、理論編、実践編から教職の道を説く。 Ｂ５判　全　279 頁 編集代表　中田　正浩 中田　正浩、鎌田首治朗、松田智子、金山憲正、長井勘治、　中田律子、太田雄久、久田　孝、瀧明知惠子、 担当部分 第 5 章第 3 節＜中学校教員の仕事＞ 思春期の真只中にある生徒たちが自ら課題を克服できるよう、見守り、自信を持たせ、希望を持って学校生活が送れるよう、中学校教員として為すべき仕事内容について述べる。学習指導要領の主な内容、学校教育目標の成り立ちについて、学習規律の醸成を大切にした学びがいのある授業づくりについて、中学校教員の 1 日についてなど、長い現場経験で学級担任・学年主任・教頭・校長として勤めた経験を生かし、重要なポイントを述べる。p. 120～129 第 6 章第 3 節＜中学校の学級経営＞ 社会的問題ともなっている「いじめ」「不登校」など多くの課題を抱える中学校現場で、生徒たちが安心して心豊かに学校生活を送ることができるよう、生活の基盤である学級集団づくりについて述べる。 学級の意義について、心が通い合い、お互いに高め合い、支え合う学級づくりについて、学校目標と学年・学級目標の関わりについて、望ましい集団活動を通して生き方の自覚をふかめさせる特別活動について、3 年間を見通し、成長に応じた学級活動年間計画をたてる必要性、協力しあって創りあげる体育行事、音楽行事の大切さなど述べる。p. 160～170 第 7 章第 2 節＜中学校の生徒指導＞ 物質的豊かさの中で育つ生徒たちは、忍耐力、自主性、自立性が弱くなるなどの状況が見られる。生徒一人一人の可能性を開き、主体的に判断・行動し、積極的に自己をいかしていけるよう生徒指導を充実させていくことが大事である。生徒指導の目標について、生徒のおかれている現況について、生徒理解の大切さについて、生徒たちが心豊かに学校生活が送れるよう開発的な生徒指導の具体的活動について、生徒の主体性を生かす生徒会活動について、スクールカウンセラーと連携した教育相談についてなどから、長い現場経験で学級担任・学年主任・教頭・校長として勤めた経験を生かし、重要なポイントを述べる。p. 190～199

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
5)「保育士,幼稚園・小学校教諭のための初等科音楽基礎基本と指導法～ここがポイント！～　」発達段階に応じた指導を目指して	単著	平成 27 年 5 月	株式会社ＥＲＰ	初等科音楽基本内容と指導法について、重要なポイントを押さえながら述べる。特に発達段階に応じた歌唱・器楽・音楽づくり・鑑賞指導法について、具体的な例をあげながら示す。音楽指導のためのピアノ・歌唱・弾き歌いの実技上達法についても述べ、資料として楽典の基本事項も示している。音楽教諭として 20 数年、管理職として 10 年あまり経験し、その間に多くの保育士・幼稚園・小学校・中学校教諭の授業実践の指導助言を行ったり、音楽を苦手と感じている方々の相談に応じたり、より良い音楽活動づくりを考え合ったりしてきた。その実践を生かした理論書である。 Ｂ５判　全　86 頁
6)特集＜アクティブラーニングとは何か＞（教育フォーラム 56 号）	共著	平成 27 年 8 月	金子書房 人間教育研究協議会	＜アクティブラーニングとは何か＞において、実践的な課題解決力を育成するために、思考力や問題解決力をどのように鍛えていくか、各教科領域におけるアクティブラーニングをどう組み入れていくかなど考察し実りある学習活動の展開を 提案する。 Ｂ５判　全　147 頁 編集代表　梶田叡一 梶田叡一、加藤　明、鎌田首治朗、伊崎一夫、前田洋一、溝上慎一、岸　周吾、芝池宗勝、米川雅士、武谷嘉之、瀧明知惠子、ほか 3 名 担当部分・特別寄稿 「イタリアの学校音楽科教育に学ぶ　～歌唱活動に注目して～」を単著 歴史的に西欧の音楽文化の中心であったイタリアと日本の学校音楽科教育の歌唱活動を中心とした比較を通して、日本の音楽教育への示唆を導き出すことを課題とした。イタリアの歌唱活動をはじめとする音楽科教育に学び、発達段階に応じ、正しく表現する方法である呼吸法や発声法など基礎技能の教育方法の開発を進める。また、音楽科教育の活動を広げ、総合的な表現力の向上のために、音楽科教育を核とした合唱劇のプロジェクト（総合表現活動）開発を行いたいと考える。 p. 120～130
7)「中等科音楽教育基礎と指導法～歌唱・合唱の系統性に視点をおいて～」	単著	平成 28 年 4 月	株式会社ＥＲＰ	これまでの教育活動を見直し、「キー・コンピテンシー」や「21 世紀型スキル」などを視野にいれ、音楽科教育の目標・内容について基本をおさえ、育成すべき資質や能力を具体化し指導・支援にあたれるよう示している。初等科・中等科音楽基礎基本内容（「表現」（歌唱・器楽・音楽づくり）、 「鑑賞」）をコンパクトにまとめ、指導計画の在り方、作成の仕方などについて、実例を示すとともに、評価を生かした授業づくりについて述べている。指導法については、発達特性の基本的な考え方、発達段階に対応した指導の・支援方法のポイントについて述べています。特に歌唱を中心として、理論的な意味付けを明確にし、共通教材について留意し具体的な実践の展開に結びつけていくよう述べている。 Ｂ５判　全　86 頁

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
8) 特集＜主体的能動的な学習 ―アクティブラーニングの精神を生かす＞ 教育フォーラム （58 号）	単著	平成 28 年 8 月	金子書房 人間教育研究協議会	＜主体的能動的な学習　―アクティブラーニングの精神を生かす―＞において、実践的な課題解決力を育成するために、思考力や問題解決力をどのように鍛えていくか、各教科領域におけるアクティブラーニングの精神をどのように生かして いくのかなど考察し実りある学習活動の展開を提案する。 Ｂ５判　全　155 頁 編集代表　梶田叡一 梶田叡一、鎌田首治朗、伊崎一夫、吉田明史、角屋重樹、原田智仁、菅井啓之、押谷由夫、井上信子、瀧明知惠子、ほか１名 担当部分・特別寄稿　単著　p.137～p.148 「イタリアの学校音楽科教育に学ぶⅡ～創造性・主体性の育みを視点として～」 次世代に生きる子供たちには「創造性をめぐって」や「コミュニケーションと ICT」を重点課題とした教育が望まれている。具体的には、「21 世紀型能力」や、「キー・コンピテンシー」の視点から、育成すべき資質や能力を音楽科教育でどのように育んでいくのか、明確にしていく時期である。「創造性・主体性」の育成を視点として音楽のカリキュラムと授業実践について日本とイタリアの国際比較を行い、示唆を得たいと考えた。イタリアの目指す教育の方向性の移り変わりを概観し、カリキュラム指針でのねらい、内容を考察する。創造性や主体性を育んできたイタリアの音楽科教育の特色を探るため、イタリアの児童・生徒・保護者等に向けた音楽科教育に関する意識調査（アンケート）及び聴き取り調査を試み分析結果を示す。また、ピステッリ国立学校における音楽科授業の現況を紹介する。イタリアのカリキュラムとの比較研究を進め明らかになったことは、①領域についての相違点、②共通教材についての扱い方、③総括目標での位置付けなどについてである。
（学術論文等） 1) 浜甲子園中学校学校経営方針及び学校評価のまとめ	単著	平成 23 年 12 月	西宮市立浜甲子園中学校 研究紀要 p.1～3 p.98～104	「学校経営方針」「学校評価のまとめ」 平成 22 年度、浜甲子園中学校研究のまとめ。 学校評価（教職員・生徒・保護者・地域）を実施し、学校評価委員を含む地域連携協議会にてその結果について様々な意見をいただく。また、第三者評価として古川治甲南大学教授に学校関係者評価委員会に入っていただき、ご意見もいただ いた。その成果と課題をまとめ論ずる。次年度の学校運営に生かしていくべく本校の強みを明らかにし、改善点を具体的にあげ次年度の方向性を論ずる。 全 105 頁
2)「若い教師に伝えたいこと～範を示せる教師であれ～	単著	平成 24 年 3 月	週刊教育ＰＲＯ 3.20・27 株式会社日本教育総合研究所 p.16～17	音楽教育や演奏活動を通して、体験し学び取ったことなど、教育活動の一端を若い教師に伝えた。まず、教育活動の核となる教科経営、学級経営について述べる。生徒の学力を向上させ、豊かな人間性を身につけさせるために、教師は身近な大人として常に範を示せる存在でありたい。地域社会の中で愛され信頼される教師であるために、常に自己研鑽に励み、自己を磨く努力をすることを提案した。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
3)　～家庭･地域と連携して進める兵庫の道徳教育～ 「兵庫県版道徳教育副読本『心かがやく』を活用して」	単著	平成 24 年 5 月	刊「兵庫教育」5 月号 道徳教育の推進 兵庫県教育委員会発行 p. 18～21	兵庫県版道徳教育副読本『心かがやく』を活用して」 兵庫県教育委員会は、道徳教育副読本を作成している。本校は副読本の効果的な活用を図る授業づくり、学校・家庭・地域が一体となって進める道徳教育の実践研究指定校となった。全教師の共通理解のもと推進し、教材研究を深める。道徳教育を学校が中心的な役割を果たし計画的に推進し、三者で深めていくこと、副読本を活用し３学年の成長を見通した道徳教育年間計画の整備を行っていくことなど述べている。
4)新任教師に伝えたいこと[再掲] ～生徒指導の心得～	単著	平成 24 年 6 月	週刊教育ＰＲＯ 株式会社日本教育総合研究所　週刊教育ＰＲＯ6.19 監修者　梶田叡一 p. 24～25	いじめ、暴力行為等の児童生徒の問題行動等については、依然として教育上の大きな課題となっている。何かが起こってからでなく、開発的な生徒指導を目指しておちついた学習環境のもと心豊かに学校生活が送れるよう①～⑨について心がけて欲しい。
5)「新学習指導要領における、音楽科授業への提案―音楽を通した感動体験から豊かな心を育む」	単著	平成 24 年 9 月	週刊教育ＰＲＯ 9.18 株式会社日本教育総合研究所 p. 12～13	「新学習指導要領における、音楽科授業への提案―音楽を通した感動体験から豊かな心を育む」 新学習指導要領において音楽科ではこれまで通りの授業数は確保している。しかしながら、中学校では個人選択授業が無くなり、総合的な学習の時間は小・中学校とも減少し、実質的には音楽教育の場は減少していると言える。限られた授業時数の中で授業を見直し、伝統音楽など授業に取り入れていく必要がある。地域の小・中学校の９年間の連続した取り組みも意識し、歌唱法、合唱づくり、ピアノ伴奏を含む器楽演奏指導・鑑賞等、新教育課程における年間計画について提案した。
6)「音楽科を核とした合唱活動の広がり」	単著	平成 24 年 10 月	週刊教育ＰＲＯ10.16 株式会社日本教育総合研究所 p. 22～23	音楽科の活動を広げ、深め、歌声の響く学校を目指すために限られた時間の中で、基本は授業で指導し、音楽的行事を成功させ、生徒たちに成就感や達成感を味わわせることの重要性を論じた。多くの感動体験を通して生徒たちの音楽に対する感性がより育まれ、心をより強くより豊かに育てる。そのため大きな声で生き生きと歌うための発声法、歌唱法、合唱づくり、音楽をより豊かにするピアノ伴奏法、編曲についてなどその手順や配慮せねばならないことについて、具体的に論じた。
7)「活気あふれる学校運営～小規模校の特色を生かして～」	単著	平成 25 年 1 月	週刊教育ＰＲＯ12.13 株式会社日本教育総合研究所 p.20～23	「活気あふれる学校運営 ～小規模校の特色を生かして～」 浜甲子園中学校において活気あふれる学校を目指し取り組んできた成果のまとめを紹介する。生徒の主体性を生かす生徒会活動、トライやる・ウイークの取り組み、総合的な学習の時間における、特色ある活動としてマリン体験、開かれた学 校への取り組みとして緑化サポート（環境づくり）・音楽科における授業サポート（和楽器等支援）における取り組みを紹介する中で、確かな学力をつけ、豊かな情操を育む教育活動の在り方を論ずる。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
8)特集＜やる気＞を引き出し、育てる（教育フォーラム 54 号）	単著	平成 26 年 8 月	金子書房 人間教育研究協議会 p. 128～130	＜各教科等の学習を支える言語活動＞において、各教科領域全体で言葉の力を育てるための方策を考察し、子どもに新の「賢さ」を育てるために教師にできること・すべきことを提案する。 全　138 頁 編集代表　梶田叡一 担当部分 特定非営利活動法人人間教育研究協議会活動だより第 29 回　2014 年度人間教育実践交流会　in 奈良「言葉の力と学力向上～各教科等の学習を支える言語活動～」の内容説明とともに、今年度の活動について紹介する。
9)音楽科教育におけるｱｳﾄﾘｰﾁに関する一考察～地域の音楽文化とつながる～	単著	平成 26 年 8 月	学校音楽教育研究 発表要旨集録 P. 90　資料４ｐ	現行の学習指導要領において、実質的には音楽科教育の場は減少していると言える。限られた授業時間の中で、アウトリーチ（洋楽器演奏者、和楽器奏者、声楽家、アンサンブル等）を活用し、学校教育だけでは実現しない音楽の授業を検討し、教育内容が広がっていくようなカリキュラム作りを研究する。
10)「School music education in Japan and Italy」日本から見たイタリアの学校音楽教育～イタリアでの実地音楽育調査から～	単著	平成 26 年 9 月	Scuola Primaria “Ermenegildo Pistelli” ピステッリ小学校（幼小・中学校の一体型学） 全７ｐ	在イタリア日本大使館一等書記官西池万葉氏の紹介を受け、イタリアの初等科音楽教育研究会に出席する。実地音楽教育調査から、第 1 に義務教育における音楽教育のカリキュラムの比較、第 2 に義務教育における音楽授業の実践研究、第 3 に音楽科を核としたプロジェクトの立案についてなどまとめ、在イタリア日本大使館とピステッリ小学校へ報告する。日本においてもイタリアにおいても、より豊かな音楽教育活動が実施できるよう、研究を深めていく。
11)音楽科教育の有益性における一考察～歌唱・合唱活動を通して～	共著	平成 27 年 1 月	奈良学園大学人間教育学部 p. 47～55	学校だからこそ得られる音楽を通した感動体験は、生涯にわたって「生きる力」の育成を図ることにつながっていくものと考える。学校教育における音楽科教育の歴史から、音楽科教育に託されたものや、その有益性について示すとともに、どのように活性化させていくのか考察する。発達段階に応じた発声法・歌唱法、パート練習の仕方、パートリーダーの育成、合唱指揮法、ピアノ伴奏法など、理論とともに具体的に述べ、活動手順を示す。
12)特集＜実践的思考力・課題解決力を鍛える＞（教育フォーラム 55 号）	単著	平成 27 年 3 月	金子書房 人間教育研究協議会 p. 147～149	＜実践的思考力・課題解決力を鍛える＞　においてPISA 型学力をどう育てるかにおいて、実践的な課題解決をどう図っていくか、思考力や問題解決力をどのように鍛えていくか、アクティブラーニングをどう組み入れていくかなど考察し実りある学習活動の展開を提案する。 Ｂ５判　全　157 頁 編集代表　梶田叡一 担当部分 特定非営利活動法 人間教育研究協議会活動報告とまとめ 第 29 回 2014 年度人間教育実践交流会　in 奈良　「言葉の力と学力向上～各教科等の学習を支える言語活動～」の発表内容をはじめ、1 年間の活動のまとめを記載する。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
13)「人間教育を支える音楽科教育～」	単著	平成 27 年 3 月	奈良学園大学人間教育学会誌 全　10 頁	本論文では、人間教育を支えるものとしての学校教育における音楽科教育の意義・果たすものについて論じる。その際、豊かな表現を工夫し、総合的な表現活動へと発展させた「合唱劇」の実践を通して考察する。歌唱・合唱の指導、ピアノを始め器楽伴奏の指導についてもふれる。今後の課題を探るとともに人間形成に大きく関わる音楽科教育が、学校教育の中で、より活性化していくための方策を考察する。
14)「音楽科教育におけるアウトリーチに関する一考察～地域の音楽文化とつながる～」	単著	平成 27 年 3 月	武庫川女子大学紀要 p. 25～30	現行の学習指導要領において、音楽科の授業時数は確保しているが、実質的には音楽科教育の場は減少していると言える。限られた授業時間の中で、アウトリーチを活用し、学校教育だけでは実現しない音楽の授業を検討し、教育内容が広がっていくようなカリキュラム作りを研究する。音楽科教育をより豊かにし、心の育みが行っていけるよう地域の音楽文化（大学音楽学部・和楽器グループなど）とのつながりを考察する。
15)「音楽科教育におけるアウトリーチに関する一考察	単著	平成 27 年 3 月	学校音楽教育研究 日本音楽教育実践学会紀要 p. 18～21	音楽活動を通して感動体験を味わわせることは、一人ひとりの豊かな心を育み、生きる力を培っていくものと考える。音楽科教育の活性化のために、教育内容が広がっていくようなカリキュラム作りを研究する。そのことにより生徒たちの歌唱や器楽の表現力をより高めることとなる。音楽科教育をより豊かにするため、音楽の専門家や和楽器の演奏団体、地域の大学などとのつながりを考察する。
16)「中学校教育における音楽科教育活動に関する一考察」～地域の音楽文化との連携から～	単著	平成 27 年 9 月	奈良学園大学人間教育学会誌 全　10 頁	中学校における音楽活動をより充実・発展させていくために学校教育だけでは実現しない音楽の授業を検討する。担当教諭が児童生徒を指導支援するという授業に、ゲストティーチャーが第 3 者として入り、授業を展開する。アウトリーチを導入することにより、学校では新たな学びのスタイルが生まれる。地域のホールや専門家など音楽文化と学校の連携の在り方を考察するとともに、アウトリーチを組み入れた授業案を創作し、提案する。
17) 「アートが根付くイタリアの音楽科教育研究調査を通して」	単著	平成 27 年 11 月	指導と評価　2015.12 図書文化 p.4～5	＜だんわしつ＞執筆。　機会を得て、２度目になるイタリア（ローマ）の学校音楽教育を実地調査することができた。多くの文化遺産に包まれているイタリアの学校音楽科教育について研究を深め、日本の音楽科教育への示唆を導き出したい。具体的には歌唱活動に注目した学校音楽科カリキュラムに注目し、日本で根付いてきたカリキュラムを、文化遺産の抱負なイタリアの教育から検討することで、より良い授業を創造する機会としていきたいと考える。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
18)「イタリアの道徳教育と学習者の評　価　」～　イタリアの学校教育実地調査から　～	単著	平成 27 年 12 月	指導と評価　2015.12 図書文化 p.22～24	＜特集＞　道徳教育と評価 いよいよ学習指導要領改訂の準備が始まっている。道徳の教科化、評価方法のあり方については、議論の集中するところである。カトリックの総本山バチカン市国があるイタリアでは、宗教が学校の授業の中に組み込まれ、長く培われた伝統と習慣で気付きあげられた生活が現在も営まれている。しかし、以前から宗教とは別に道徳「憲法とシチズンシップ」（道徳）が教科として導入されている。学習者の評価は、10 段階であり、「行動面」は文章で評価される。イタリアの学校教育について研究を深め、教育改革の準備に向けて示唆を導き出すことは意義あることと考える。
19)「学校教育における音楽科教育活性化に関する一考察」 ～音楽科を核とした合唱劇の取り組みから～	単著	平成 27 年 12 月	武庫川女子大学紀要 全　8 頁	音楽科教育の活性化について、これまでの長年にわたる学校現場の実践の一つである総合的な表現活動へ発展させた合唱劇の実践から考察する。人間の根源的な活動である音楽活動は学校生活を豊かで潤いのあるものとするとともに、情操豊かな生徒を育む土壌ともなっていることが、その後の生徒・教師・地域や保護者の感想や意見から読み取ることができた。関わった教師たちは、生徒が変化していく様子を目の当たりにしている。音楽科の時間を核として、学活行事や総合的な学習の時間において、音楽活動を発展させていけるよう考察する。
20)「人間教育」の根源である「いのちの教育」に関する一考察　～中学校における実践から～（査読有り）	単著	平成 28 年 5 月	人間教育学会研究紀要 p.133～p.144	本研究では、「2013 年『いのち』に関わる意識調査『こころに関するアンケート』の結果分析から導き出した５つの視点が、どのような教育実践で確かめられるのかを検証しようと試みた。中学校において「いのち」に関わる授業実践の前後にアンケート調査を行い、比較調査では、「『本当に 人のいのちは大切なんだ！』と心の底から感じたことがありますか」とのクロス集計において考察した。その結果、アンケートのクロス集計や、指導にあたった教師、生徒の感想や意見から、多くの生徒の心の動きを確認し、ポジティブな効果を捉えることができた。また、これらの取り組みを活かし作成した、中学校における「いのちの教育」の年間カリキュラムを紹介する。
21)イタリアの音楽科教育における一考察～小・中学校における歌唱指導の視点から～	単著	平成 28 年 9 月	奈良学園大学人間教育学会誌	多くの文化遺産に包まれているイタリアの学校音楽科教育について研究を深め、日本の音楽科教育への示唆を導き出す。歌唱面では小・中学校ともに、注意深く「聴く」ことに力を入れ、良い声づくりとともに音感をつけようとしている。また、外部の専門家が入ったり、地域に出て（音楽ホールなど）学習するシステムが定着している。そうした中で子どもたちの主体性や創造性が育まれているのである。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
22)人間教育の普遍的要素を成す音楽科教育における一考察　～　中学校音楽科を核とした総合的な表現活動の視点から　～	単著	平成 28 年 12 月	人間教育学会研究紀要	学校生活の中で心の豊かさや情緒の豊かさを育む教育活動を進めていく必要性を論じる。音楽活動を通して感動体験を味わわせることは、生徒たちの豊かな心を育み、生きる力を培っていくものである。音楽科教育の活性化について、まず、現在の生徒を取り巻く状況を把握し、学習指導要領における音楽科教育の歴史を確認する。そのことにより、音楽科教育に託されたことや、意義について理解し、総合的な表現活動である合唱劇の実践から音楽教育の活性化を考察する。
23)中学校における「いのちの教育」と音楽科教育による一考察 ―　成就感・自尊感情を育む歌唱・合唱活動を通して――	単著	平成 29 年 3 月	武庫川女子大学院教育学研究論集	人と人のつながりの中で得られる音楽の喜びや感動こそが、豊かな心を育成するとともに、「いのち」を大切にし、前向きに生きるという教育になりうることを検証した。合唱は、仲間との歌声と心を合わせた心の響き合いである。音楽には共に演奏することで連帯感を持たせる力がある。他者との関係性を重視する指導は、音楽の感性的な面と結びつき、人間性育成や社会性育成を目的とする道徳教育とともに、「いのちの教育」において、音楽科授業の果たす役割は大きいのである。
（その他報告書） 1)「いのちの教育カリキュラムモデルの開発事例」	単著	平成 27 年 1 月	平成 24 年度～平成 26 年度科学研究費補助金（基盤研究 B）課題番号 24330254 「いのちの教育カリキュラムモデルの開発的研究」研究成果報告書 p.60～69	「いのちの教育部会」では、幼・小・中・高等学校の成長に応じたカリキュラムを作成し（中学校を担当する）、各時期のねらいを設定した。「いのち」に関わる教育活動の大切さを検証するとともに、どのようなプロセスをたどって生徒が「いのち」の大切さを実感するのか、公立中学校において「いのちの教育」を実践研究する。その際、取り組みの前後にアンケートを実施し、分析・考察する。（研究協力者）
2)「西宮市立山口中学校における実践」	単著	平成 27 年 1 月	平成 24 年度～平成 26 年度科学研究費補助金（基盤研究 B）課題番号 24330254 「いのちの教育カリキュラムモデルの開発的研究」<いのちの教育部会研究報告書> p.17～26	共著者・眞鍋美穂 公立中学校における「いのちの教育」の実践研究について報告する。2013 年実施の「心のアンケート」（児童・生徒のいのちに対する意識の実態Ⅱ）におけるクロス集計結果内容を反映させた実践「ホメホメシャワー」について、道徳における兵庫県道徳副読本「心かがやく」より『語りかける目』の実践について、「『ありがとう』と言われる一日をすごそう」についてなど。（研究協力者）
3)「中学校における『いのちの大切さ』を実感させる実践研究の考察と課題」	単著	平成 27 年 2 月	平成 24 年度～平成 26 年度科学研究費補助金（基盤研究 B）課題番号 24330254 「いのちの教育カリキュラムモデルの開発的研究」<いのちの教育部会研究報告書> p.41～43	「いのちの教育」の実践研究について、取り組み前後に「心のアンケート」実施し比較調査を行う。 そのクロス集計において、いくつかの項目で、生徒の心の動きがみられた。今後、学校全体で共通理解し進めていくことが大切である。 限られた時間の中で、学習を深めていくために道徳や総合的な学習の時間、各教科など連携させて、年間を見通した計画的組織的な取り組みが必要である。（研究協力者）

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
4)「いのちの教育カリキュラムモデルの開発～音楽科教育における成就感・自尊感情の育み～」	単著	平成 27 年 3 月	平成24年度～平成26年度科学研究費補助金（基盤研究 B）課題番号 24330254 「いのちの教育カリキュラムモデルの開発的研究」研究成果報告書 p. 119～132	「いのち」に関わる教育をより深めていくために、音楽科における「いのちの教育」の可能性について考察する。音楽科で取り組んできた「合唱活動」において表現活動の基盤となる合唱は、音楽を苦手とする生徒にとっても、仲間とともにその美しさを共有できる場である。伴奏には様々な楽器演奏を加え、さらに豊かな表現を創りあげることができる。仲間と協力して活動する大切さを学びとり、連帯感が育まれ、より意欲的な生活態度につながっている。今後、教育現場への提案・実践研究を進め、より具体性のある教材を発信していきたいと考える。
（その他） 「学会等発表等」 1)課題「新しい時代を創造する豊かな心と確かな学力を育む学校運営」	—	平成 21 年 8 月	阪神地区女性学校運営研修会 伊丹シティーホテル	幼・小・中学校、教育委員会において、各学校園が運営上の諸問題について、どのように改善するか交流する。 テーマ 「学校・家庭・地域社会の力強い連携のもと生徒の自立を支援する」をテーマに、新しい教育課程づくりについて述べる。①確かな学力を基盤とした生きる力を育成する新教育課程の創意工夫　②家庭・地域社会と連携を深め、豊かな教育環境づくりについて、など特色ある教育課程づくりについて述べる。 阪神地区女性学校運営研修会
2) 人間教育実践交流会　西宮フォーラム発表 新教育課程における音楽科授業への提案　―音楽を通した感動体験から豊かな心を育む―	—	平成 23 年 8 月	人間教育研究協議会 兵庫県私立百合学園小学校	新教育課程における音楽科授業への提案として、小学校からは「生き生きした歌声を」、中学校からは「合唱活動を通して豊かな心を育む」、大学では「デジタルコンテンツの授業への活用」など、ことばの力を生かした音楽表現力の育成について考察する Ａ４判　　P. 68～69
3) 音楽を通した感動体験から豊かな心を育む ～音楽科を核とした合唱劇の取り組みから～	—	平成 25 年 8 月	第 18 回日本音楽教育実践学会　発表要旨集録 お茶の水女子大学	音楽科を核とした合唱劇の取り組みについて、発声・合唱・独唱・ピアノ伴奏を含め、感動的な取り組みの流れと共に、豊かな心の育成の関わりについて論じる。学校教育において音楽科教育活動は、いじめ、不登校、暴力行為等、問題を抱える生徒たちの心をなごませている。心の豊かさや、情緒の豊かさを育む教育活動を進めていく大切さを論じる。 Ａ４判　　P. 84　資料４頁
4) 人間教育実践交流会　大阪ミニフォーラム発表 「学級指導と音楽行事」	—	平成 26 年 2 月	人間教育研究協議会 内田洋行大阪オフィス	ミニフォーラムのテーマ「言葉の力と学力向上」を受け音楽部会では「学級指導と音楽行事」をサブテーマとする。音楽科教育を支えるものとして言葉の力があり、歌詞の読み取りなど言葉の力を育みながら、学級での合唱づくりや行事への取り組みについて発表するとともに、意見交流を行う。 資料４頁

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
5）音楽を通した感動体験から豊かな心を 育む ～音楽科を核とした合唱劇の取り組みから～	―	平成 26 年 3 月	日本学校音楽教育研究	個性や創造性を発揮することが求められつつある中で、生徒一人ひとりの多様な能力の伸長を目指すという観点からの対応を図り、心の豊かさや情緒の豊かさと言った視点での教育活動を進めていかねばと考える。音楽科を核とした合唱劇の取り組みから音楽科教育の充実発展を考察する。 A４判　　P. 117～118
6)奈良フォーラム発表　テーマ ＜言葉の力と学力向上＞～音楽科の学習を支える言語活動　～	―	平成 26 年 8 月	人間教育研究協議会 奈良学園大学	限られた授業時間の中で、音楽活動をより充実・発展させていくために学校教育だけでは実現しない音楽の授業を検討し、教育内容が広がっていくようなカリキュラム作りを行っていきたいと考える。学校と地域の音楽文化とのつながりを考察する。 A4判　P. 45　資料　4頁
7）音楽科教育におけるｱｳﾄﾘｰﾁに関する一考察 ～地域の音楽文化とつながる～	―	平成 26 年 8 月	第 19 回日本音楽教育実践学会 熊本大学	現行の学習指導要領において、実質的には音楽科教育の場は減少していると言える。限られた授業時間の中で、アウトリーチを活用し、学校教育だけでは実現しない音楽の授業を検討し、教育内容が広がっていくようなカリキュラム作りを研究する。
8)「日本における初等科音楽教育」	―	平成 26 年 8 月	Scuola Primaria "Ermenegildo Pistelli" ピステッリ小学校（幼・小・中学校の一体型学）	イタリアの初等科音楽教諭音楽授業研究会にて発表。日本での初等科音楽教育について、基本内容と指導法について、発達段階に応じた歌唱・器楽・音楽づくり・鑑賞指導法について、具体的な例をあげながら示す。指導のためのピアノ、歌唱、弾き歌いの上達法、楽典の基本事項も資料として示している。イタリアの初等科音楽教育についての発表を受け交流を深める。 A4　4 頁
9)「小・中・高等学校意識調査結果を踏まえた『いのちの教育』のカリキュラムモデル開発への取り組み」	―	平成 26 年 11 月	岡山心理学会第 62 回大会にて発表 岡山心理学会大会論文集	平成 24 年度～平成 26 年度科学研究費補助金（基盤研究 B）「いのちの教育カリキュラムモデルの開発的研究」 「2013 年『いのち』に関わる意識調査『こころに関するアンケート』」を実施し、クロス集計の結果分析する中から、５つの「いのちの大切さ」を実感させる視点を導き出した。これらの視点を生かして、小・中・高等学校における発達段階に応じた「『いのちの大切さ」を実感させる教育カリキュラム」を作成した。一連の取り組みについて発表する
10）主体性・創造性を育む音楽科教育活性化における研究	―	平成 28 年 3 月	教師学会にて発表 奈良学園大学	次期学習指導要領の改訂に向けて準備が進められている。人が人となるための基礎としての音楽をはじめとした芸術教育が、独立した必修教科であり続けた意義を再確認し、音楽科改善の視点から、さらなる充実をめざさねばと考える。これまで取り組んできた合唱活動や総合的な表現活動である合唱劇の実践から音楽教育の活性化を考察するとともに、アクティブラーニングを活用した取り組みとして発展させ、主体性・創造性を育む教育活動を考察する。 資料　A4　4 頁

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
11)学校教育における音楽文化伝承に関する一考察 ～地域の伝承家とのつながりから～	―	平成 28 年 10 月	日本音楽教育学会 （横浜国立大学）	学習指導要領に「伝統・文化の尊重」が明記されたことにより、和楽器の必修が言われ、教育環境の整備や指導者の研修など、行政において、組織的に取り組まれてきたが、現状としては、「どう指導したら良いのか」という現場の声が未だにある。「楽しみ、親しめる和楽器」「邦楽への関心」を高めることに、授業のねらいを置き、教育内容が広がっていくようなカリキュラムづくりについて、授業実践から考察し、発表する。 資料　A4　4 頁
12)まほろばからの伝統文化教育の発信 コーディネーター・提言	―	平成 28 年 11 月	和文化教育学会全国大会 奈良学園大学	「まほろばからの伝統文化教育」をテーマに、各地から興味深い提案を受け、研究協議を行う。 コーディネーターとともに提案「歌い継ぐ日本の心の歌」の活動紹介 コーディネーター・提案
13)日本人間教育学会「新学習指導要領と人間教育の理念―人格の完成を目指す―」音楽部会のコーディネーター・提言	―	平成 29 年 2 月	奈良学園大学	新学習指導要領における音楽科教育～言葉のちからを活かした音楽表現力の育成～をテーマに 「音楽教育におけるアクティブラーニング」、 「地域創生―音楽を通した街づくり」等、発表を受け研究協議を行う。 「音楽を通した街づくりー「和＆輪コンサート」の実施とまとめの執筆　A4　10 頁
「合唱指導及び審査員」 1)西宮市立浜甲子園中学校合唱コンクール審査員	単独	平成 19 年 10 月	鳴尾文化ホール	審査にあたり、結果だけでなく発声や伴奏の指導方法に触れて、講評する。
2)西宮市立中学校音楽科教育研究会副会長として市内中学校の合唱指導法研修会実技指導	単独	平成 19 年 11 月	西宮市立苦楽園中学校	西宮市立苦楽園中学校の全校・学校合唱「大地讃頌」等の取り組みを参観し、合唱指導法研修会においてピアノ伴奏実技指導・講評を行う。
3)西宮市立浜甲子園中学校合唱コンクールの審査にあたる。	単独	平成 20 年 10 月	鳴尾文化ホール	審査にあたり、子どもの発達段階に応じた声変わりの時期における適切な指導と無理のない発声についてについて講評する。
4)「小さなコンサート　～ピアノ・バイオリン他～」	共同	平成 21 年 9 月	京都こども文化会館小ホール	共同開催。ヴァイオリン・ピアノをはじめとする、幼児から大人まで、幅広い年代層の出演者によるコンサート。「ビリーブ」等、合唱指導指揮・ピアノ伴奏の指導を行う。
5)西宮市立浜甲子園中学校合唱コンクール、審査にあたる	単独	平成 21 年 10 月	鳴尾文化ホール	審査にあたり、発声・ハーモニー、曲想などを考慮して優秀賞・最優秀賞を授与するとともに講評を行う。ピアノ伴奏・及び指揮優秀者の表彰も行う。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
6)「小さなコンサート　～ピアノ・バイオリン他～」	共同	平成 22 年 7 月	京都こども文化会館小ホール	共同開催。ヴァイオリン・ピアノ・歌唱による演奏会。幼児から大人まで、幅広い年代層の出演者によるコンサートを企画し、合唱指導指揮、歌唱・ピアノ伴奏の指導を行う。「心の瞳」など。
7)西宮市立浜甲子園中学校合唱コンクールにおいて審査にあたる。	単独	平成 22 年 10 月	鳴尾文化ホール	審査にあたり、発声・ハーモニー、曲想などを考慮して優秀賞・最優秀賞を授与するとともに講評を行う。ピアノ伴奏・及び指揮優秀者の表彰も行う。
8)西宮市立中学校合唱祭において実行委員長を務め、賞の授与とともに全体の講評を行う。	単独	平成 22 年 11 月	鳴尾文化ホール	西宮市立中学校合唱祭において実行委員長を務め音楽監督にあたり、各校への賞の授与とともに講評を行う。審査にあたり、ピアノ伴奏や、発声、ハーモニーのバランス等を考慮し審査、講評する。
9)西宮市立中学校中学生中国友好訪問団団長として市内中学校代表20名を引率し、表敬訪問の際、合唱を指揮	単独	平成 22 年 12 月	中国紹興市元培中学校	中国友好訪問において表敬訪問の際、合唱曲「時の旅人」「茉莉花」（中国語）の指揮を行い、合唱を披露し絶賛される。また音楽授業を参観するとともに、音楽科における日中合同授業を行い交流を深める。
10)「初秋のコンサート」	共同	平成 23 年 9 月	京都　レスパス・エラン	共同開催。ヴァイオリン・ピアノ・歌唱による演奏会。幼児から大人まで、幅広い年代層の出演者によるコンサートを企画する。「コスモス」等、合唱指導指揮、歌唱・ピアノ伴奏の指導を行う。
11)西宮市立浜甲子園中学校合唱コンクールにおいて校長として指導するとともに審査にあたる。	単独	平成 23 年 10 月	鳴尾文化ホール	審査にあたり、発声・ハーモニー、曲想などを考慮して優秀賞・最優秀賞を授与するとともに講評を行う。ピアノ伴奏・及び指揮優秀者の表彰も行う。
12)西宮市立中学校合唱祭において実行委員長を務め音楽監督にあたり、各校への賞の授与とともに全体の講評を行う。	単独	平成 23 年 11 月	鳴尾文化ホール	西宮市立中学校合唱祭において、各校への賞の授与とともに全体の講評を行う。
13)「初秋のコンサート」	共同	平成 24 年 9 月	京都　レスパス・エラン	ヴァイオリン・ピアノ・歌唱において、幼児から大人まで、幅広い年代層の出演者によるコンサートを企画し、合唱指導指揮、歌唱・ピアノ伴奏の指導を行う。「マイ　バラード」等。
14)西宮市立浜甲子園中学校合唱コンクールにおいて審査を行う。	単独	平成 24 年 10 月	鳴尾文化ホール	西宮市立浜甲子園中学校合唱コンクールにおいて審査にあたり、優秀賞・最優秀賞を授与するとともに講評を行う。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
15)西宮市立中学校合唱祭において実行委員長を務め、各校への賞の授与とともに全体の講評を行う。	単独	平成 24 年 11 月	鳴尾文化ホール	実行委員長を務め会の充実のため音楽監督にあたり、各校への賞の授与とともに全体の講評を行う。市内音楽教諭が実技指導を通して学び合う場でもあり、終了後、各校への指導助言を行う。
16)「小さなコンサート　～ピアノ・バイオリン他～」	共同	平成 25 年 9 月	京都市立国際交流会館	ヴァイオリン・ピアノ・歌唱・合唱を披露するコンサートを企画運営する。幼児から大人までの年代層の出演者によるコンサートである。「この道」等、独唱するとともに、歌唱・ピアノ伴奏の指導を行う。
17)西宮市立浜甲子園中学校合唱コンクールにおいて審査委員長として審査及び講評を行う。	単独	平成 25 年 10 月	鳴尾文化ホール	西宮市立浜甲子園中学校合唱コンクールにおいて審査にあたり、優秀賞・最優秀賞を授与するとともに講評を行う。
18)西宮市立浜甲子園中学校合唱コンクールにおいて審査委員長として審査及び全体に講評を行う。	単独	平成 26 年 10 月	鳴尾文化ホール	西宮市立浜甲子園中学校合唱コンクールにおいて審査にあたり、優秀賞・最優秀賞を授与するとともに講評を行う。
19)「小さなコンサート　～ピアノ・バイオリン他～」	共同	平成 26 年 10 月	京都市立国際交流会館	ソロ・アンサンブル・ヴァイオリン・ピアノによる、幼児から大人まで、幅広い年代層の出演者によるコンサート。出演者による合唱指導指揮、歌唱・ピアノ伴奏の指導を行う。「ビリーブ」等。
20)アウトリーチを生かした授業展開・コンサートづくりについて指導助言を行う。	単独	平成 27 年 2 月	宝塚市立末広小学校	宝塚市立末広小学校におけるアウトリーチを活用した音楽研究授業及び、まとめのコンサート・研究協議が行われる。アウトリーチを生かした授業・コンサートづくりについて指導助言を行う。
22)筑紫鶯美会主催、三郷町教育委員会・文化協会後援の箏曲演奏会「初夏の香り」に出演する。	共同	平成 27 年 5 月	三郷町文化センター文化ホール（定員 540 名）	筑紫鶯美会代表の篠原歌鶯先生主催の演奏会に出演し、お琴、ヴァイオリン、ピアノの演奏をバックに「ふるさと」等、独唱するとともに会場の歌唱指導指揮を行う。満席になり、盛況に行われた。（観客 530 名）
23)「初秋のコンサート」	共同	平成 27 年 9 月	京都市立国際交流会館	1 部ではヴァイオリン・ピアノの発表会、2 部は指導者の演奏会を実施する。ピアノ伴奏の指導、出演者による合唱指導指揮、独唱「エーデルワイス」等、披露する。（観客 100 名）
24）合唱コンクールに向けた「プレ発表会」	共同	平成 27 年 10 月	西宮市立大社中学校	合唱コンクールに向けた「プレ発表会」において、3 学年学年合唱、クラス合唱（7 クラス）への指導助言を行う。地域の小学校が参観し、小中合同の合唱の実施、小学校から感想意見の発表、中学生から小学生へのアドバイスなど、小中合同での合唱指導の場となった。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
25)「プチコンサート」	共同	平成 28 年 3 月	京都　レスパス・エラン（定員 60 名）	ヴァイオリン・ピアノの発表会及び、指導者の演奏会を実施する。ピアノ伴奏の指導、出演者にる合唱指導指揮、独唱「この道」、重唱「逢えてよかったね」等、披露する。（観客 60 名）
26)「和＆輪コンサート～歌い継ぐ、心の歌～」の企画・実施	共同	平成 28 年 5 月	王寺地域交流センターリーベルホール（定員 330 名）	大学と地域をつなぐ特別企画コンサートにおいて、童謡や唱歌、叙情歌に託された「日本の伝統文化、美しい景観や思いやりの心」を味わい、美しい箏曲の音色を楽しみ、和の音楽文化のすそ野を広げていくとともに、地域の世代を越えた人たちが交流し触れ合う場とすることを目的とした特別企画コンサート。全体の司会進行を行うとよもに、独唱「この道」、重唱「さくらさくら」「荒城の月」など、箏アンサンブル、ヴァイオリンの演奏とともに披露する。（観客 330 名）
27) 西宮市立瓦木中学校合唱コンクールにおいて審査委員長・講評	共同	平成 28 年 10 月	公江記念会館（定員 1500 名）	西宮市立瓦木中学校（全 26 クラス）合唱コンクールにおいて審査にあたり、講評を行う。（観客 1200 名）
28) 西宮市立浜甲子園中学校合唱コンクールにおいて審査委員長・講評	共同	平成 28 年 10 月	鳴尾文化ホール（定員 600 名）	西宮市立浜甲子園中学校（全 9 クラス）合唱コンクールにおいて審査にあたり、講評を行う。（観客 550 名）
29)西宮市立甲武中学校合唱コンクールにおいて審査委員長・講評	共同	平成 28 年 11 月	西宮市アミティーホール（定員 1000 名）	西宮市立甲武中学校（全 19 クラス）合唱コンクールにおいて審査にあたり講評を行う。（観客 900 名）
（その他･音楽活動･社会貢献活動） 1)樂朋会（武庫川女子大学音楽学部卒業生の会）演奏役員として、「樂朋会演奏会」を行う。	共同	平成 10 年度～平成 20 年度	フェニックスホール（平成 10 年～20 年）	武庫川女子大学音楽学部後援 2 年に 1 回、出場者を募り、コンサートを開催する。企画・運営を行う。独唱、アンサンブル、ピアノ独奏・連弾、バイオリンアンサンブル他、演奏役員として音楽監督を務めた。毎回 200 人程度の観客がおとずれる。
2)歌い継ぐ　～日本の心の歌　～の演奏活動	共同	平成 19 年 11 月	介護老人福祉施設夢御殿山	瀧明知恵子（歌・ピアノ）、フルート・琴奏者とともに、介護老人福祉施設にて音楽演奏会を行うとともに童謡唱歌「もみじ」等の指揮をし、会場と共に歌う。
3)西宮市女性学校運営研修会にて歌唱指揮を行う	共同	平成 19 年 12 月	芦屋モノリス	教育長・教育委員会を交えた西宮市女性学校運営研修会にて、研修を深めるとともに、歌唱指揮を行う。
4)歌い継ぐ～日本の心の歌　～「花の会」として音楽活動する。	共同	平成 19 年 12 月	介護老人福祉施設ケアハウス花屋敷	「花の会」　瀧明知恵子（歌とピアノ担当）、フルート・琴奏者とともに結成し、介護老人福祉施設にて音楽演奏会を行うとともに童謡唱歌を会場と共に歌う。
5)鳴教会研修会（武庫川女子大学卒業生教諭の会）及び総会において歌唱指導指揮を行う。	共同	平成 20 年 12 月	武庫川女子大付属高校音楽ホール・芸術館	鳴教会総会及び研修会において、武庫川中・高等部の「合唱部づくり」の講和と演奏、会員交流を行うとともに、親睦を図るため、歌唱指導指揮を行い、友に歌い合う。教員 50 名が集う。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
6)歌い継ぐ　～日本の心の歌　～音楽活動を行う	共同	平成 21 年 3 月	介護老人福祉施設 夢御殿山	「花の会」において歌・ピアノ・歌唱指導を担当し、介護老人福祉施設にて音楽演奏会を行うとともに童謡唱歌を会場と共に歌う。
7)西宮市女性学校運営研修会にて歌唱指揮を行う	共同	平成 21 年 7 月	芦屋モノリス	教育長・教育委員会を交えた西宮市女性学校運営研修会にて、研修を深めるとともに、歌唱指揮を行う。
8) 音楽活動 歌い継ぐ　～日本の心の歌　～	共同	平成 21 年 7 月	介護老人福祉施設 シルバーコースト	「花の会」において、介護老人福祉施設にて音楽演奏会を行うとともに「浜辺の歌」等、童謡唱歌を会場と共に歌う。お琴・フルートの伴奏で独唱し、会場の人たちへの指揮を行う。
9) 音楽活動 歌い継ぐ　～日本の心の歌　～	共同	平成 21 年 12 月	介護老人福祉施設 ケアハウス花屋敷	「花の会」瀧明知恵子（お話・歌・ピアノと担当）、フルート・琴奏者とともに介護老人福祉施設にて音楽演奏を行うとともに童謡唱歌「ペチカ」等を会場と共に歌う。独唱するとともに、歌の指導指揮を行う。
10)鳴教会研修会及び総会において歌唱指導指揮を行う。	共同	平成 21 年 12 月	武庫川女子大付属高校視聴覚室	鳴教会総会及び研修会において、「子どもたちの環境」の講話を受け、会員交流を行うとともに、歌唱指導指揮を行い、共に歌い合う。教員 40 名が集う。
11) 音楽活動 歌い継ぐ　～日本の心の歌　～	共同	平成 22 年 7 月	介護老人福祉施設 夢御殿山	「花の会」において、介護老人福祉施設にて音楽演奏会を行うとともに「朧月夜」等、童謡唱歌を会場と共に歌う。お琴・フルートの伴奏で独唱し、会場の人たちへの指揮を行う。
12)樂朋会（武庫川女子大学音楽学部卒業生の会）演奏役員として、「樂朋会演奏会」を行う。	共同	平成 22 年 12 月	兵庫県芸術文化劇場小ホール（平成 22 年～26 年）	武庫川女子大学音楽学部後援 2 年に 1 回、出場者を募り、コンサートを開催する。独唱、アンサンブル、ピアノ独奏・連弾を行う。バイオリンアンサンブル他、演奏役員として貢献する。300 人の観客がおとずれる。
13) 音楽活動 歌い継ぐ　～日本の心の歌　～	共同	平成 23 年 1 月	介護老人福祉施設 花やしき	花の会　瀧明知恵子（歌・ピアノを担当）、フルート・琴奏者とともに、介護老人福祉施設にて音楽演奏を行う。「冬景色」等、唱歌を会場と共に歌う。会場の歌のピアノ伴奏や琴･フルートとのアンサンブルなど行う。
14) 音楽活動 歌い継ぐ　～日本の心の歌　～	共同	平成 23 年 1 月	介護老人福祉施設 ケアハウス花屋敷	「花の会」において、介護老人福祉施設にて音楽演奏会を行うとともに童謡唱歌を会場と共に歌う。「雪の降る街を」等、独唱披露し、歌の指導指揮も行う。
15)鳴教会研修会に及び総会において歌唱指導指揮を行う。	共同	平成 23 年 3 月	武庫川女子大付属高校視聴覚室	鳴教会総会及び研修会において、「体験の言葉化」の講和を受け、会員交流を行うとともに、歌唱指導指揮を行い、共に歌い合う。教員 40 名が集う。
16) 音楽活動 歌い継ぐ　～日本の心の歌　～	共同	平成 23 年 7 月	介護老人福祉施設夢御殿山	「花の会」において、介護老人福祉施設にて音楽演奏会を行うとともに「花かげ」等、童謡唱歌を会場と共に歌う。独唱披露し、歌の指導指揮も行う。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
17) 音楽活動 歌い継ぐ　～日本の心の歌　～	共同	平成 24 年 8 月	宝塚市福祉協議会 仁川デイサービスセンター	「花の会」フルート・琴奏者とともに、音楽演奏会を行う。歌唱を担当し、「茶摘み」等、童謡唱歌を会場と共に歌う。歌の指導指揮も行う。
18)第 63 回全日本中学校長会研究協議会・近畿中学校長会研究協議会式典において「国歌斉唱」の伴奏を務める。	単独	平成 24 年 10 月	大阪国際会議場	大阪で行われた第 63 回全日本中学校長会研究協議会・近畿中学校長会研究協議会式典において、「国歌斉唱」の伴奏を務め、全国から参集した中学校長の歌声が会場中に響き渡った。
19) 音楽活動 歌い継ぐ　～日本の心の歌　～	共同	平成 24 年 12 月	介護老人福祉施設夢御殿山	介護老人福祉施設にて音楽演奏会を行うとともに「ふるさと」等、童謡唱歌を会場と共に歌う。 独唱披露し、歌の指導指揮も行う。
20)鳴教会研修会に及び総会において歌唱指導指揮を行う。	共同	平成 25 年 3 月	武庫川女子大付属高校視聴覚室	鳴教会総会及び研修会において、「心身の健康」についての講和を受け、意見交流。副会長として学校教育における音楽をはじめとする情操教育の大切さを語るとともに、歌唱指導指揮を行い、共に歌い合う。
21) 音楽活動 歌い継ぐ　～日本の心の歌　～	共同	平成 25 年 7 月	介護老人福祉施設 ケアハウス花屋敷	「花の会」　瀧明知恵子（歌・ピアノを担当）、フルート・琴奏者とともに、介護老人福祉施設にて音楽演奏を行うとともに「朧月夜」等、童謡唱歌を会場と共に歌う。
22)敬老会コンサートに出場する	共同	平成 25 年 9 月	介護老人福祉施設夢御殿山	介護老人福祉施設での敬老会コンサートに出場する。講和を行うとともに、童謡唱歌「浜辺の歌」等を会場の指導指揮を行い、会場と共に歌う。
23) 音楽活動 ＜日本の心の歌 ～童謡・唱歌・わらべうたを歌い継ぐ～＞	共同	平成 26 年 6 月	介護老人福祉施設 ケアハウス花屋敷	「花の会」として、音楽演奏を行うとともに童謡唱歌「朧月夜」等を会場と共に歌う。会場の指導指揮も行う。
24) 敬老会コンサートに出場する	共同	平成 26 年 9 月	介護老人福祉施設 ケアハウス花屋敷	「花の会」として、敬老会コンサートに出場する。講話・演奏（フルート・琴）とともに歌唱指導を行う。童謡唱歌「もみじ」等を会場と共に歌う。
25) 樂朋会（武庫川女子大学音楽学部卒業生の会）演奏役員として、「樂朋会演奏会」 を行う。	共同	平 26 年 12 月	兵庫県芸術文化劇場小ホール	武庫川女子大学音楽学部後援 2 年に 1 回、出場者を募り、コンサートを開催する。独唱、アンサンブル、ピアノ独奏・連弾を行う。バイオリンアンサンブル他、演奏役員として貢献する。300 人の観客がおとずれる。
26)音楽活動 ＜日本の心の歌 ～童謡・唱歌・わらべうたを歌い継ぐ～＞	共同	平成 27 年 3 月	介護老人福祉施設 ケアハウス花屋敷	童謡・唱歌・わらべうたの講話・演奏「さくらさくら」・歌唱指導を行う。（他、声楽家 1 名） 講和・歌唱・ピアノを担当する。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
27)樂朋会（武庫川女子大学音楽学部卒業生の会）創立50周年記念コンサートに出演する。	共同	平成 27年4月	ホテル甲子園ノボテル甲陽の間	樂朋会創立 50 周年記念コンサートではピアノ独奏、連弾、独唱、重唱、コーラスの演奏。 「花」等、重唱を行う。 参加者 120 名
28）音楽活動 ＜日本の心の歌を歌い継ぐ～＞	共同	平成 27年8月	王寺ディサービスセンター	唱歌・叙情歌の講話・独唱「朧月夜」他。ピアノ伴奏・歌唱指導を行う。学生の演奏も披露し喜んでいただく。
29）音楽活動 ＜日本の心の歌を歌い継ぐ～＞	共同	平成 27年9月	介護老人福祉施設 ケアハウス花屋敷	依頼を受け、フルート奏者と共に敬老会コンサートに出場する。講和を行うとともに、独唱「夏の思い出」「浜辺の歌」等、ピアノ伴奏、会場の歌唱指導・指揮を行う。
30）音楽活動 ＜日本の心の歌を歌い継ぐ～＞	共同	平成 27年11月	三郷デイサービス	奈良学園大学学生とともに、わらべうた・唱歌・童謡の歌唱「虫の声」他。歌唱及び歌唱指導を行う。学生の演奏を披露し喜んでいただく。
31）音楽活動 ・社会貢献活動 ＜日本の心の歌を歌い継ぐ～＞	共同	平成 28年8月	王寺ディサービスセンター	奈良学園大学学生をとともに、音楽活動を行う。わらべうた・唱歌・童謡の歌唱「虫の声」他。歌唱及び歌唱指導を行う。学生の演奏も披露し喜んでいただく。
32）＜奈良学園大学から音楽の贈り物＞（社会貢献活動）	共同	平成 28年9月	三郷やわらぎデイサービス	奈良学園大学学生をとともに、音楽活動を行う。童謡・唱歌・わらべうたの講話・独唱「我は海の子」他。ピアノ伴奏・歌唱指導を行う。学生の振り付けや様々な楽器を入れるなど楽しんでいただく。
33）＜奈良学園大学から音楽の贈り物＞（社会貢献活動）	共同	平成 29年2月	三郷やわらぎデイサービス	奈良学園大学学生をとともに、音楽活動を行う。わらべうた・唱歌・童謡の箏演奏、歌唱「荒城の月」他。歌唱及び歌唱指導を行う。学生の箏演奏を披露し喜んでいただく。
34）信貴山寅祭りコンサートに出演	共同	平成 29年2月	信貴山朝護孫子寺	「箏・尺八演奏と日本の心の歌」和楽器と歌唱のコラボレーションを行う。筑紫鶯美会篠原歌鶯さんはじめ、まほろば会（尺八）と共に演奏する。

教　育　研　究　業　績　書

平成２９年３月３１日

氏名　山田　明広

研究分野	研究内容のキーワード
哲学、文学、文化人類学	漢文学、中国哲学、中国文学、文化人類学

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
１　教育方法の実践例 （１）効果的な漢文教育法の実践	平成19年4月1日～平成19年9月20日・平成26年4月1日～現在に至る	関西大学文学部総合人文学科の非常勤講師として平成19年4月～平成19年9月に担当した「中国古典文講読a」（専門教育科目、３年次以降配当、春学期、選択１単位、中高１種国語科教員免許取得のための科目）および「中国文学作品研究（一）a」（専門教育科目、３年次以降配当、春学期、選択２単位）において、花園大学文学部文学部日本文学科の非常勤講師として平成26年4月～現在にかけて担当している「漢文学Ⅰ」（講義科目、１年次以降配当、前期、選択２単位、中高１種国語科教員免許取得のための科目）および「漢文学Ⅱ」（講義科目、１年次以降配当、後期、選択２単位、中高１種国語科教員免許取得のための科目）において、また、奈良学園大学人間教育学部人間教育学科非常勤講師として平成28年4月～平成28年8月に担当した「漢文学入門」（専門科目、２年次以降配当、前期、選択２単位、中高１種国語科教員免許取得のための科目）および同大学同学部同学科の特任講師として平成28年9月～現在にかけて担当している「漢文学Ⅰ」（専門科目、２年次以降配当、後期、選択２単位、中高１種国語科教員免許取得のための科目）において、漢文法および漢文句法を受講生に一通り網羅的に解説し演習問題を解かせて理解・定着させた上で漢文の文章読解を行わせることにより、受講生が比較的正確で安定的に漢文を読解することが可能となった。
（２）問題解決能力を養わせるための授業の実践	平成20年4月1日～平成20年9月20日・平成22年4月1日～平成24年3月31日	関西大学文学部総合人文学科の非常勤講師として平成20年4月～平成23年9月に担当した「東洋比較文化論」（専門教育科目、１年次以降配当、春学期、選択２単位）のうち初年度（平成20年4月～平成20年9月）担当分において、また、関西大学文学部総合人文学科の非常勤講師として平成22年4月～平成24年3月に担当した「中国学演習」（専門教育科目、３年次配当、通年、必修２単位）において、先に基礎的な知識を講義し、その上で大まかなテーマを与えて受講生に順番に発表させ、そして、全体で討論させることにより、受講生に自ら問題を発見して考え、調査し、解決するという能力を養わせた。
（３）画像・映像資料を活用した分かりやすい授業の実践	平成20年4月1日～平成24年3月31日・平成26年4月1日～現在に至る	関西大学文学部総合人文学科の非常勤講師として平成20年4月～平成23年9月に担当した「東洋比較文化論」（専門教育科目、１年次以降配当、春学期、選択２単位）、平成22年4月～平成24年3月に担当した「中国学演習」（専門教育科目、３年次配当、通年、必修２単位）、平成26年4月～平成28年3月に担当した「現代アジアと日本1」（専門教育科目、２年次以降配当、春学期、選択２単位）および「現代アジアと日本2」（専門教育科目、２年次以

		降配当、秋学期、選択２単位)、平成 28 年 4 月～現在にかけて担当している「アジアの伝統文化と現代Ⅰ」(専門教育科目、２年次以降配当、春学期、選択２単位）および「アジアの伝統文化と現代Ⅱ」（専門教育科目、２年次以降配当、秋学期、選択２単位）において、また、奈良県立医科大学医学部教養教育部門の非常勤講師として平成 28 年 4 月～平成 28 年 9 月に担当した「アジア文化論」（講義科目、１年次配当、前期、必修１単位）において、本人が現地で撮影した写真および映像を用いて中国・台湾の宗教事象を中心とする諸文化を解説することにより、学生が授業内容について理解しやすくなっているとともに、興味を持つようになっている。
（4）リアクションペーパー使用による授業改善の工夫	平成26年4月1日～現在に至る	関西大学文学部総合人文学科の非常勤講師として平成 26 年 4 月～平成 28 年 3 月に担当した「現代アジアと日本 1」(専門教育科目、２年次以降配当、春学期、選択２単位）および「現代アジアと日本 2」（専門教育科目、２年次以降配当、秋学期、選択２単位）、平成 28 年 4 月～現在にかけて担当している「アジアの伝統文化と現代Ⅰ」（専門教育科目、２年次以降配当、春学期、選択２単位）および「アジアの伝統文化と現代Ⅱ」（専門教育科目、２年次以降配当、秋学期、選択２単位）において、花園大学文学部文学部日本文学科の非常勤講師として平成 26 年 4 月～現在にかけて担当している「中国文学史Ⅰ」(講義科目、１年次以降配当、前期、選択２単位、中高１種国語科教員免許取得のための科目）および「中国文学史Ⅱ」（講義科目、１年次以降配当、後期、選択２単位、中高１種国語科教員免許取得のための科目）において、また、奈良県立医科大学医学部教養教育部門の非常勤講師として平成 28 年 4 月～平成 28 年 9 月に担当した「アジア文化論」（講義科目、１年次配当、前期、必修１単位）において、適宜リアクションペーパーを使用して受講生から授業に対する感想・要望・質問を聞き、授業改善に生かしている。また、寄せられた質問については、後の授業にて可能な限り回答するなど、学生との意思疎通を図っている。
（5）パワーポイントの効果的活用による分かりやすい授業の実践	平成26年11月27日・平成27年11月30日・平成28年4月～現在に至る	関西大学文学部総合人文学科の非常勤講師として平成 26 年 4 月～平成 28 年 3 月に担当した「現代アジアと日本 2」(専門教育科目、２年次以降配当、秋学期、選択２単位）のうち「台湾の道教式死者救済儀礼」についての講義において、平成 28 年 9 月～現在にかけて担当している「アジアの伝統文化と現代Ⅱ」（専門教育科目、２年次以降配当、秋学期、選択２単位）の全講義において、また、奈良県立医科大学医学部教養教育部門の非常勤講師として平成 28 年 4 月～平成 28 年 9 月に担当した「アジア文化論」（講義科目、１年次配当、前期、必修１単位）の全講義において、パワーポイントで作成したスライドを全面的に活用することにより、学生にとって視覚的に見やすくまた理解しやすい授業を実践している。その結果、奈良県立医科大学の講義において実施したリアクションペーパーにおいては、見やすく分かりやすいといった類の意見が多数寄せられた。

２　作成した教科書，教材 （１）オリジナルプリント教材の作成	平成20年4月1日 ～現在に至る	関西大学文学部総合人文学科の非常勤講師として平成 20 年 4 月～平成 23 年 9 月に担当した「東洋比較文化論」（専門教育科目、１年次以降配当、春学期、選択２単位）、平成 20 年 4 月～平成 22 年 3 月にかけて担当した「中国学講義 a」（専門教育科目、２年次以降配当、春学期、選択２単位）および「中国学講義 b」（専門教育科目、２年次以降配当、春学期、選択２単位）、平成 22 年 4 月～平成 23 年 3 月に担当した「アジア文化研究 1」（専門教育科目、２年次以降配当、春学期、選択２単位）および「アジア文化研究 2」（専門教育科目、２年次以降配当、秋学期、選択２単位）、平成 23 年 4 月～現在にかけて担当している「中国思想文化論 1」（専門教育科目、２年次以降配当、春学期、選択２単位）および「中国思想文化論 2」（専門教育科目、２年次以降配当、秋学期、選択２単位）、平成 24 年 4 月～平成 25 年 9 月に担当した「漢字・漢文論１」（専門教育科目、２年次以降配当、春学期、選択２単位）、平成 26 年 4 月～平成 28 年 3 月に担当した「現代アジアと日本 1」（専門教育科目、２年次以降配当、春学期、選択２単位）および「現代アジアと日本 2」（専門教育科目、２年次以降配当、秋学期、選択２単位）、平成 28 年 4 月～現在にかけて担当している「アジアの伝統文化と現代Ⅰ」（専門教育科目、２年次以降配当、春学期、選択２単位）および「アジアの伝統文化と現代Ⅱ」（専門教育科目、２年次以降配当、秋学期、選択２単位）において、花園大学文学部文学部日本文学科の非常勤講師として平成 26 年 4 月～現在にかけて担当している「中国文学史Ⅰ」（講義科目、１年次以降配当、前期、選択２単位、中高１種国語科教員免許取得のための科目）および「中国文学史Ⅱ」（講義科目、１年次以降配当、後期、選択２単位、中高１種国語科教員免許取得のための科目）において、また、奈良県立医科大学医学部教養教育部門の非常勤講師として平成 28 年 4 月～平成 28 年 9 月に担当した「アジア文化論」（講義科目、１年次配当、前期、必修１単位）において、毎時間、事前に要点をまとめたオリジナルのプリントを作成し、そのプリントを使用して講義することで、学生の理解に資している。
３　教育上の能力に関する大学等の評価 （１）近畿大学経済学部国際経済学科平成24年度後期における学生による授業評価アンケート	平成 25 年 3 月	「中国語コミュニケーション 2」および「基礎中国語Ⅱ」について受講学生による授業評価アンケートを実施し、いずれの科目においても「授業内容に満足」ないし「ほぼ満足」と答えた学生が８割以上を占めていたほか、学生から「説明が丁寧で分かりやすい」などといったコメントが多数寄せられるなど、高い評価が得られた。
（２）関西大学文学部総合人文学科平成26年度春学期における学生による授業評価アンケート	平成 26 年 9 月	「中国思想文化論 1」および「現代アジアと日本 1」について受講学生による授業評価アンケートを実施し、いずれの科目もほとんどの項目において評価平均が 4.0（満点 5.0）以上であった。特に、「総合的に判断してこの授業は意義のあるものであった」という項目については、「中国思想文化論 1」では評価平均が 4.1 に、「現代アジアと日本 2」では評価平均が 4.1 となり、いずれも全学の平均である 4.0 を超えることができた。

（3）関西大学文学部総合人文学科平成26年度秋学期における学生による授業評価アンケート	平成 27 年 3 月	「中国思想文化論 2」および「現代アジアと日本 2」について受講学生による授業評価アンケートを実施し、「総合的に判断してこの授業は意義のあるものであった」という項目についての評価平均が「中国思想文化論 2」では 4.1 に、「現代アジアと日本 2」では 4.2 となり、いずれの科目においても全学の平均 4.0 を超えることができた。
（4）関西大学文学部総合人文学科平成27年度春学期における学生による授業評価アンケート	平成 27 年 9 月	「中国思想文化論 1」について受講学生による授業評価アンケートを実施し、多くの項目においてその評価平均が全学平均および文学部平均を超えた。特に、「総合的に判断してこの授業は意義のあるものであった」という項目については、評価平均が 4.2 となり、全学平均 4.0 および文学部平均 4.1 を超えることができた。
（5）関西大学文学部総合人文学科平成27年度秋学期における学生による授業評価アンケート	平成 28 年 3 月	「中国思想文化論 2」について受講学生による授業評価アンケートを実施し、ほとんどの項目においてその評価平均が全学平均および文学部平均を超えた。特に、「総合的に判断してこの授業は意義のあるものであった」という項目については、評価平均が 4.2 となり、全学平均 4.0 および文学部平均 4.1 を超えることができた。
（6）近畿大学法学部平成27年度後期における学生による授業評価アンケート	平成 28 年 3 月	「中国語総合 2」について受講学生による授業評価アンケートを実施し、「この教員の授業を 10 点法で評価して下さい」という項目についての平均値が 8.6 となり、全科目平均の 8.3 を超えることができた。また、「とても分かりやすかった」や「説明が丁寧であった」といった類のコメントが多数寄せられるなど、高い評価が得られた。
（7）花園大学文学部日本文学科平成27年度後期における学生による授業評価アンケート	平成 28 年 3 月	「漢文学Ⅱ」および「中国文学史Ⅱ」について受講学生による授業評価アンケートを実施し、いずれの科目もほとんどの項目において学生による評価の平均値が全学平均を超えることができた。特に、「先生の授業に対する取り組みに熱意や情熱を感じられますか」という項目については、前者が 4.0（満点 5.0）、後者が 4.28 といずれも比較的高い評価が得られた。
（8）奈良県立医科大学医学部看護学科平成27年度における学生による授業評価アンケート	平成 28 年 3 月	「中国語」について受講学生による授業評価アンケートを実施し、「総合的に満足できる授業であった」という項目についての平均値が 4.57（満点 5.0）となり、全体平均 4.1 を大きく超えるなど、高い評価が得られた。
（9）奈良教育大学平成28年度前期における学生による授業評価アンケート	平成 28 年 9 月	「中国語」および「漢文学特論」について受講学生による授業評価アンケートを実施し、両科目ともほとんどの項目において学生による評価の平均値が全学平均を超えることができた。また「わかりやすい授業であった」といった類のコメントが多数寄せられるなど、高い評価が得られた。
(10) 奈良県立医科大学医学部看護学科平成28年度における学生による授業評価アンケート	平成 28 年 9 月	「アジア文化論」について受講学生による授業評価アンケートを実施し、ほとんどの項目において学生による評価の平均値が全学平均を超えることができた。特に、「授業を受けることでテーマについてより興味・関心を持てた」および「総合的に満足できる授業であった」という項目の平均値がともに 4.0 近くなるなど比較的高い評価が得られた。

4　実務の経験を有する者についての特記事項 〔社会人対象の講演〕 （1）台湾の道教の現状と道教儀礼について 〔展覧会の解説の翻訳〕 （1）「道教信仰文化特展」の解説の日本語訳	平成27年9月11日 平成28年11月5日～平成29年2月19日	大阪日中友好協会の支援の下で設立された「くらしの智恵：道教に親しむ会」の第3回会合において、当会の要請により一般向けに行った講演。まず、中国道教の歴史について触れることで道教とはいかなる宗教か紹介した後、台湾では現在いかなる道教信仰が行われているか儀礼を中心に説明した。 台湾台南市鄭成功文物館で行われた「道教信仰文化特展」における李豊楙教授による中国語の解説文を日本語に翻訳した。
5　その他 〔科目担当実績〕 （1）関西大学における漢字論・漢文講読に関する講義 （2）関西大学における中国思想史に関する講義 （3）関西大学における現代の東アジアの宗教文化に関する講義	平成19年4月1日～平成20年3月31日・平成24年4月1日～平成26年3月31日 平成20年4月1日～現在に至る 平成20年4月1日～平成23年9月20日・平成26年4月1日～現在に至る	関西大学文学部総合人文学科の非常勤講師として、平成19年4月～平成20年3月に「中国古典文講読a,b」「中国文学作品研究（一）a,b」を、平成24年4月～平成26年3月に「漢字・漢文論1,2」を担当した。前二者においては、漢文法・語法を網羅的に解説して後、漢文の作品の講読を行い、後者においては、漢文を構成する漢字の歴史や変遷について講義して後、漢文の作品の講読を行った。いずれの科目においても、訓点付きの漢文の読解から始めて次第に訓点のない漢文の読解へと移行するなど、無理なく高度な漢文の読解ができるよう工夫した。 関西大学文学部総合人文学科の非常勤講師として、平成20年4月～平成22年3月に「中国学講義a,b」を、平成22年4月～平成23年3月に「アジア文化研究1,2」を、平成23年4月～現在にかけて「中国思想文化論1,2」を担当し、中国思想史に関する講義を行っている。いずれの科目においても、先秦から明代までの中国思想・宗教について儒教・仏教・道教の三教を基軸に通史的に講義しているが、思想・宗教のみならずその背景にある社会的文化的事象についても説明するなどして、受講生が理解しやすくなるよう工夫している。 関西大学文学部総合人文学科の非常勤講師として、平成20年4月～平成23年9月に「東洋比較文化論」（春学期のみ開講科目）を、平成26年4月～平成28年3月に「現代アジアと日本1,2」を、平成28年4月～現在にかけて「アジアの伝統文化と現代Ⅰ,Ⅱ」を担当し、主として現代の東アジアの宗教文化に関する講義を行っている。本人が現地調査を行って収集した画像・映像資料を用いたり講義のテーマに関わる映画を見せたりして、受講生の興味を喚起できるよう工夫している。授業において行うリアクションペーパーには、画像・映像資料が用いられていて分かりやすいとの反響が多数見られる。

（4）近畿大学における初級中国語に関する講義	平成21年4月1日～平成28年9月15日	近畿大学経済学部国際経済学科の非常勤講師として専門科目「基礎中国語Ⅰ,Ⅱ」（平成21年4月～現在）を、経営学部・法学部・理工学部教養・基礎教育部門非常勤講師として外国語科目「中国語総合1,2」（経営学部：平成22年4月～平成23年3月、法学部：平成24年4月～現在、理工学部：平成28年4月～現在）を担当し、大学1年次生に対して初級中国語を講義している。聞く・話す・読む・書くといった能力をバランスよく身に付けられるよう、教科書のみならずリスニング教材を用いたり、対話をさせたりするなど授業の進め方を工夫した。
（5）関西大学における中国学専修3年次生に対する演習科目	平成22年4月1日～平成24年9月20日	関西大学文学部総合人文学科の非常勤講師として、平成22年4月～平成24年3月に「中国学演習」（通年）を、平成24年4月～平成24年9月に「中国学専修ゼミ3」（春学期のみ担当）を担当し、中国学専修3年次の学生に対して卒論執筆に必要な情報・知識を教えるとともに、必要な能力を養わせた。文献検索の仕方、辞書の引き方、中国思想・宗教に関する基礎知識を講義して卒論執筆に必要な知識を身に付けさせ、その後、漢文読解を行って卒論執筆に必要な文献読解力を養わせ、最後に論文の書き方について講義してから受講生の関心あるテーマについて発表させ、全体で討論させることで問題意識を喚起させた。
（6）近畿大学における中級中国語に関する講義	平成22年4月1日～平成28年3月31日	近畿大学生物理工学部教養・基礎教育部門非常勤講師として平成22年4月～平成23年3月に「中国語応用Ⅰ,Ⅱ」を、理工学部教養・基礎教育部門非常勤講師として平成23年4月～平成24年3月に「中国語総合3,4」を、文芸学部基礎教育部門非常勤講師として平成23年4月～平成28年3月に「中国語総合C,D」を担当し、2年次以上の学生に対して中級中国語を講義した。生物理工学部には中国語会話に関する授業がないため、「中国語応用Ⅰ,Ⅱ」では聞く・話す・読む・書くといった能力をバランスよく身に付けられるよう、教科書のみならずリスニング教材を用いたり、対話をさせたりするといった授業を行ったが、他の学部には別に「中国語コミュニケーション」という中国語会話に関する授業が存在するため、「中国語総合3,4」および「中国語総合C,D」では、読む・書くといった能力の向上に焦点を絞り、教科書と演習問題を中心とした授業を行った。
（7）近畿大学における中国語会話に関する講義	平成23年4月1日～平成28年9月15日	近畿大学経済学部国際経済学科の非常勤講師として外国語科目「中国語コミュニケーション1,2」を担当し、中国語会話に関する講義を行っている。中国語の基本文法の確認を行ってから、その文法事項を会話の上でどのように用いるか講義するなど、種々の表現が可能となるような授業を行っている。また、教科書のみならずリスニング教材を用いるなど、「話す」だけでなく「聞く」という方面の能力も身に付くよう工夫した。
（8）奈良県立医科大学における初級中国語の講義	平成24年4月1日～平成28年3月31日	奈良県立医科大学医学部看護学科非常勤講師として「中国語」を担当し、大学1年次生に対して初級中国語を講義した。聞く・話す・読む・書くといった能力をバランスよく身に付けられるよう、教科書のみならずリスニング教材を用いたり、対話をさせたりするなど授業の進め方を工夫した。

（９）奈良教育大学における初級中国語の講義	平成24年4月1日～平成28年9月30日	奈良教育大学教育学部教育学科非常勤講師として「中国語」を担当し、大学1年次生に対して初級中国語を講義している。聞く・話す・読む・書くといった能力をバランスよく身に付けられるよう、教科書のみならずリスニング教材を用いたり、対話をさせたりするなど授業の進め方を工夫した。
（１０）花園大学における漢文学に関する講義	平成26年4月1日～現在に至る	花園大学文学部日本文学科非常勤講師として、平成26年4月～現在にかけて「漢文学Ⅰ,Ⅱ」を、平成26年9月～平成27年3月に「漢文学基礎」（後期のみ開講科目）を担当し、漢文読解に関する講義を行った。前者においては、漢文法・語法を網羅的に解説して後、訓点付きの漢文の作品の講読を行っている。後者においては、訓点付きの漢文の作品の読解から開始し、次第に訓点のない漢文の作品の読解へと移っていくなど、読解中心の授業を行っている。
（１１）花園大学における中国文学史に関する講義	平成26年4月1日～現在に至る	花園大学文学部日本文学科非常勤講師として「中国文学史Ⅰ,Ⅱ」を担当し、中国文学史に関する講義を行っている。先秦から明代までの中国文学の歴史について、毎回テーマを定めできる限り作品にも触れつつ通史的に概観しているが、テーマについて説明を行うだけではなく、その背後にある歴史的・社会的・文化的事象についても触れ、その作品や事象が起こった原因と結果についても考えていくよう工夫している。
（１２）奈良学園大学における漢文学に関する講義	平成28年4月1日～現在に至る	平成28年4月1日～8月31日までは奈良学園大学人間教育学部人間教育学科非常勤講師として、平成28年9月～現在にかけては奈良学園大学人間教育学部人間教育学科特任講師として、前期に「漢文学入門」および「漢文学Ⅱ」を、後期には「漢文学Ⅰ」および「語学・文学総合演習Ⅲ（漢文学）」を担当している。前期の「漢文学入門」においては、訓点付きの漢文を独力で読むための基礎学力を養生することを目標として、漢文の基礎事項・文法を講義し、「漢文学Ⅱ」においては、「漢文学Ⅰ」から一歩進めて抽象的・思想的内容を含んだ文章でも主体的に読み進めることができることを目標に、難易度の高い散文作品をその背景なども説明しつつ読解している。後期の「漢文学Ⅰ」においては、比較的平易な訓点付きの漢文の作品の講読し、「語学・文学総合演習Ⅲ（漢文学）」においては、「漢文学Ⅱ」よりもさらに進めて、返り点のない文章の読解を試みた。いずれの科目も教員免許取得のための科目であるため、いかに漢文を教えるべきかといった漢文教育という視点からの講義も行っている。

（１３）奈良県立医科大学におけるアジアの文化に関する講義	平成28年4月1日～平成28年9月20日	奈良県立医科大学医学部教養教育部門非常勤講師として「アジア文化論」（リレー講義、前期のみ開講）を担当し、本人は中華文化圏の諸文化について講義している。中華文化圏の地理と言語・飲食・年中行事・祭祀・喪葬のそれぞれをテーマとする５回に渡る授業を３クラスにおいて講義している。本人が現地調査を行って収集した画像・映像資料を用いるなど受講生が少しでも興味を持てるよう工夫した。
（１４）奈良教育大学における中国文学史に関する講義	平成28年4月1日～平成28年9月30日	奈良教育大学教育学部教育学科非常勤講師として「漢文学特講」（集中講義）を担当し、中国文学史に関する講義を行った。先秦から現代までの中国文学および芸能の歴史について、可能な限り作品にも触れつつ通史的に概観したが、特に中国の芸能の歴史については、画像・映像資料を用いるなどして、受講生にとって分かりやすく興味を持ちやすい授業となるよう工夫した。

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　　要
1　資格，免許 （1）博士（文学）	平成20年3月31日	関西大学文博第110号、論文題目「道教斎儀の研究」
2　特許等 なし。		
3　実務の経験を有する者についての特記事項 〔共同研究実績〕 （1）京都大学人文科学研究所「三教交渉の研究（Ⅱ）」共同研究班に参加	平成17年4月～平成22年3月	京都大学人文科学研究所において麥谷邦夫教授（現・名誉教授）を班長として平成17年4月～平成22年3月の5年間に渡って運営された「三教交渉の研究（Ⅱ）」共同研究班に班員として加わった。本研究班は、上記「三教交渉の研究」共同研究班の後を承けたものであり、本人は主として定期的に開かれた研究会に参加して陳垣『道家金石略』に収められている唐以前の金石資料の会読を行った。
（2）文部科学省学術フロンティア推進拠点・関西大学アジア文化交流研究センターにおける共同研究プロジェクトに参画	平成18年4月～平成22年3月	平成17年4月に文部科学省学術フロンティア推進拠点として設置された関西大学アジア文化交流研究センターの「東アジアにおける文化情報の発信と受容」をテーマとする5年間の共同研究プロジェクトに、平成18年4月～平成20年3月にはリサーチアシスタントとして、平成20年4月～平成22年3月にはポスト・ドクトラル・フェローとして参画した。 思想・儀礼研究班に所属し、台湾の道教儀礼を中心に宗教儀礼の研究に従事するとともに、センターの事務作業や研究会・シンポジウムの運営にも携わった。本研究プロジェクトに関わる研究業績として、共著書4冊、論文4本、学会発表4回、翻訳1本がある。

（3）関西大学グローバＣＯＥ「文化交渉学教育研究拠点」（ICIS）の「ICIS『朱子語類』研究会」に参加	平成19年12月～平成21年3月	関西大学グローバＣＯＥ「文化交渉学教育研究拠点」（ICIS）の進める書院・教育研究の一環として組織された「ICIS『朱子語類』研究会」に参加し、主として『朱子語類』巻 89・礼六・喪の訳注の作成に従事するとともに、定期的に開催された研究会に参加し、各メンバーが作成した訳注の検討を行った。本研究課題に関わる研究業績として、研究報告書 1 冊（共著）がある。
（4）文部科学省科学研究費補助金･特定領域研究「浙江・江蘇地域の道教・民俗信仰に関する廟宇・祭神・儀礼調査」に参加	平成20年4月～平成22年3月	関西大学・二階堂善弘教授を研究代表者として平成 17 年 4 月～平成 22 年 3 月にかけて行われた文部科学省科学研究費補助金・特定領域研究「浙江・江蘇地域の道教・民俗信仰に関する廟宇・祭神・儀礼調査」（研究課題番号 17083038）に平成 19 年 4 月より研究協力書として参加し、主として台湾の道教儀礼についての調査・研究を行った。本研究課題に関わる研究業績として、学会発表 1 回がある。
（5）文部科学省科学研究費補助金・基盤研究（A）「東アジアにおける伝統教養の形成と展開に関する学際的研究：書院・私塾教育を中心に」に参加	平成21年4月～平成25年3月	関西大学･吾妻重二教授を研究代表者として平成 21 年 4 月～平成 25 年 3 月にかけて行われた文部科学省科学研究費補助金・基盤研究（A）「東アジアにおける伝統教養の形成と展開に関する学際的研究：書院･私塾教育を中心に」に研究協力書として参加し、主として『朱子語類』巻 89・礼六・喪の訳注の作成に従事するとともに、定期的に開催された研究会に参加し、各メンバーが作成した訳注の検討を行った。本研究課題に関わる研究業績として、研究報告書 3 冊（いずれも共著）がある。
（6）関西大学東西学術研究所「日本仏教研究班」に参加	平成22年4月～平成23年3月	関西大学・原田正俊教授を主幹とする関西大学東西学術研究所「日本仏教研究班」に非常勤研究員として参加し、主として台湾の道教儀礼についての調査・研究に従事するとともに、研究例会に参加して報告・討論を行った。本研究班参加に関わる研究業績として、共著 1 冊、論文 1 本がある。
（7）慶應義塾大学東アジア研究所における高橋産業経済研究財団支援学術プロジェクト「日本・中国・韓国からみた海域文化の生成と変容－『東方地中海』をめぐる基層文化の比較研究」に参加	平成23年4月～平成26年3月	慶應義塾大学東アジア研究所において慶應義塾大学・野村伸一教授を研究代表者として進められた高橋産業経済研究財団支援学術プロジェクト「日本・中国・韓国からみた海域文化の生成と変容－『東方地中海』をめぐる基層文化の比較研究」に研究協力者として参画し、主として中国および台湾の道教・民間信仰の調査・研究に従事するとともに、不定期的に開催された研究会に参加し、日本・中国・韓国の基層文化に関する研究報告を聞き、討論した。本研究課題に関わる研究業績として､共著 1 冊がある。
（8）関西大学東西学術研究所「東アジアにおける規範と学芸研究班」に参加	平成23年4月～平成25年3月	関西大学・二階堂善弘教授を主幹とする関西大学東西学術研究所「東アジアにおける規範と学芸研究班」に非常勤研究員として参加し、主として中華文化圏と日本の喪葬儀礼の比較研究に従事するとともに、研究例会に参加して報告・討論を行った。本研究班参加に関わる研究業績として、論文 1 本がある。
（9）関西大学東西学術研究所「東アジア宗教儀礼研究班」に参加	平成25年4月～平成28年8月	関西大学・原田正俊教授を主幹とする関西大学東西学術研究所「東アジア宗教儀礼研究班」に非常勤研究員として参加し、主として中華文化圏の道教の死者救済儀礼についての調査・研究に従事するとともに、研究例会に参加して報告・討論を行った。

4　その他 〔論文の引用実績〕 （1）『唐前道教儀式史綱』が「塗炭齋考―陸修靜の三元塗炭齋を軸として―」を引用。	平成20年12月	呂鵬志『唐前道教儀式史綱』（中華書局、2008年）、223頁の注１において、塗炭斎法に関する参考文献として学術論文「塗炭齋考―陸修靜の三元塗炭齋を軸として―」が引用されている。また、292頁において、「**參考文獻**」のうちの「近人論著」の一つとして同論文が再度引用されている。
（2）「南臺灣靈寶道派放赦科儀之研究」が「道教斎儀の研究」を引用。	平成22年6月	**姜守誠**「南臺灣靈寶道派放赦科儀之研究」（南華大學宗教學研究所『世界宗教學刊』第15期、2010年）、172頁において、「**參考文獻**」の一つとして博士論文「道教斎儀の研究」が引用されている。
（3）「淡水靈寶道壇的功德儀式：以混玄壇為核心的探討」が「道教斎儀の研究」を引用。	平成23年年9月	蕭進銘「淡水靈寶道壇的功德儀式：以混玄壇為核心的探討」（財團法人施合鄭民俗文化基金會『民俗曲藝』173号、2011年）、239頁～240頁の本文および注16において、博士論文「道教斎儀の研究」が引用され、本人の台湾南部霊宝派拔度儀式に関する研究について、日本の数名の先学の研究を引き継いでいるが、功德儀礼中の専門的テーマについてより深く検討していると評されている。
（4）「練形與鍊度：六朝道教經典當中的死後修練與亡者救度」が「道教斎儀の研究」を引用。	平成24年12月	謝世維「練形與鍊度：六朝道教經典當中的死後修練與亡者救度」（中央研究院歴史語言研究所『中央研究院歴史語言研究所集刊』第83本第４期、2012年）、741頁の本文において、本人の現代の道教式功德儀礼に関する研究は台南地域と高雄・屏東地域の儀礼の次第を比較することで異なる道壇による功德儀礼の相違を考察したものであると紹介され、同注12で博士論文「道教斎儀の研究」が引用されている。
（5）「塗炭齋之後：道教民俗中首過儀式的扮犯表演」が「塗炭齋考―陸修靜の三元塗炭齋を軸として―」および「道教斎における自虐的行為の効能およびその衰退について――塗炭斎を中心として」を引用。	平成25年5月	李豊楙「塗炭齋之後：道教民俗中首過儀式的扮犯表演」（李豊楙、廖肇亨編『沉淪、懺悔與救度：中國文化的懺悔書寫論集』、中央研究院文哲所、2013年）、81頁の本文において、塗炭斎が次第に衰退した原因はすべてその自虐的行為に帰せられていると述べられており、同頁注16において、そのことを明確に述べた文献として、学術論文「塗炭齋考―陸修靜の三元塗炭齋を軸として―」および「道教斎における自虐的行為の効能およびその衰退について――塗炭斎を中心として」が引用されている。
（6）「援法入道：南宋靈寶傳度科儀研究」が「臺灣道教合符童子科儀之形成的初步探討」を引用。	平成26年12月	張超然「援法入道：南宋靈寶傳度科儀研究」（謝世維主編『經典道教與地方宗教』、政大出版社、2014年）、132頁の注１において、台湾の道教儀礼に関する研究の中でも異なる時代の文献を比較することで儀礼の変遷をたどった研究の一つとして、**学術論文「臺灣道教合符童子科儀之形成的初步探討」が**引用されている。
（7）「産難の予防、禳除と拔度：台湾南部と泉州地区に見られる道教科法を主として」が「台湾道教の縊死者に関する儀礼とその地域的差異―高雄・屏東地域と台南地域の比較を中心に―」および「台湾道教の縊死者に関する儀礼とその地域的差異―高雄・屏東地域と台南地域の比較を中心に―」を引用。	平成 27 年 3 月	謝聡輝著、山田明広訳「産難の予防、禳除と拔度：台湾南部と泉州地区に見られる道教科法を主として」（野村伸一編著『東アジア海域文化の生成と展開―〈東方地中海〉としての理解―』、風響社、2015 年）、355 頁注 28 において、台湾道教の異常死者救済に関する参考文献として、学術論文「台湾道教の縊死者に関する儀礼とその地域的差異―高雄・屏東地域と台南地域の比較を中心に―」および「台湾道教の縊死者に関する儀礼とその地域的差異―高雄・屏東地域と台南地域の比較を中心に―」が引用されている。

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（著書） 1.中日研究生国**际论坛**2007 **汉语汉**文化**论丛** 〔日本語訳：中日大学院生国際シンポジウム 2007 中国語・中国文化論叢〕	共著	2007 年 平成 19 年 6 月	白帝社	2007 年（平成 19 年）3 月 22 日～23 日に行われた「第一届中日研究生**汉语汉**文化国**际论坛**」の報告論文集。 編者　中日研究生国際論壇漢語漢文化論叢編集員会 共著者　黄燁・宝玉芳恵・氷野善寛・山田明広・阿部慎太郎・ほか 15 名 （A5 判・全 262 頁） 本人担当部分　「道教**斋仪**文**书**之地方性差异–以**现**代台湾南部地区**为**主的探**讨**」〔日本語訳：「道教斎儀文書の地域的差異―現代台湾南部地域を主とした考察」〕（83 頁～102 頁） 現在の台湾道教の功徳儀礼においては、昔の行政文書を模倣し漢文体により記された儀礼文書が多数使用されるが、本人が台湾で現地調査を行い収集した台南地域の儀礼文書と高雄・屏東地域の儀礼文書それぞれを読解し、種類、数量、内容、使用方法などといった観点から相互に比較することにより、隣り合う二地域の道教の功徳儀礼の儀礼文書にはいかなる共通点や相違点が見られ、それらは何を意味するのか考察した。中国語により著す。
2.東アジアの儀礼と宗教	共著	2008 年 平成 20 年 8 月	雄松堂出版	2007 年 7 月 20 日～21 日に関西大学アジア文化交流研究センターで開催された国際シンポジウム「東アジアの儀礼と宗教」の報告論文集。 （A5 判・全 425 頁） 編者　吾妻重二・二階堂善弘 共著者　李豊楙・三浦國雄・大形徹・黄進興・山田明広・ほか 9 名 本人担当部分　第 4 部「台湾道教に見られる合符童子科儀の成立に関する一考察」（383 頁～404 頁） 現在の台湾道教の功徳儀礼を構成する科儀の一つである「合符童子科儀」に関して、まず、その内容と構造および使用される儀礼文書について検討し、続いて、道教儀礼関連の漢文文献の中から関連のある儀礼を抽出し、その内容と構造および使用される儀礼文書について分析し、最後に、中でも特にこの科儀との関連性が高いと判明した南宋『王氏大法』所載の「童子合牒」を取り上げ、その内容を現在の合符童子科儀で使用される「童子符」の内容と相互に比較し考察を加えることで、台湾の合符童子科儀がいかにして成立したのか示した。
3.東亞文化交流與經典詮釋	共著	2008年 平成20年12月	臺大出版中心	2007 年 10 月 26 日～27 日に台湾大学にて台湾大学人文社会高等研究院「東亞經典與文化」研究計画と関西大学アジア文化交流研究センター共催により執り行われた「東亞文化交流與經典詮釋」国際学術研討会の報告論文集。 （A5 判・全 650 頁） 編者　徐興慶 共著者　黄俊傑・松浦章・甘懐真・山田明広・藤田高夫・ほか 14 名 本人担当部分　壹、文化交流篇「臺灣道教儀式文書之差異――臺南與高屏地區的比較」（257 頁～294 頁

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				上記 3『中日研究生国际论坛 2007 汉语汉文化论丛』において本人が担当した部分「道教斋仪文书之地方性差异-以现代台湾南部地区为主的探讨」を大幅に加筆修正したもの。考察の対象とする儀礼文書の範囲を広げ、より緻密な考察を行った。中国語により著す。
4. 東アジア文化交流と經典詮釋	共著	2009年 平成21年3月	関西大学アジア文化交流研究センター	2007 年 10 月 26 日～27 日に台湾大学にて台湾大学人文社会高等研究院「東亞經典與文化」研究計画と関西大学アジア文化交流研究センター共催により執り行われた「東亞文化交流與經典詮釋」国際学術研討会の報告論文集。上記 5『東亞文化交流與經典詮釋』の日本語版。 （A5 判・全 511 頁） 編者　関西大学アジア文化交流研究センター 共著者　松浦章・黄俊傑・藤田高夫・甘懐真・山田明広・ほか 14 名 本人担当部分　第 1 篇文化交流篇「台湾の道教儀礼文書の地域的差異―台南地域と高雄・屏東地域で使用される功徳儀礼文書の比較―」（113 頁～148 頁） 上記 5『東亞文化交流與經典詮釋』において本人が担当した部分「臺灣道教儀式文書之差異――臺南與高屏地區的比較」の日本語版。
5. 道教と共生思想	共著	2009 年 平成21年10月	大河書房	2008 年 12 月 17 日～19 日に東洋大学にて開催された「第三回日米道教研究会議」の報告論文集。 （A5 判・全 404 頁） 編者　田中文雄・テリークリーマン 共著者　山田利明・テリークリーマン・山田明広・森由利亜・丸山宏・ほか 19 名 本人担当部分　十三「台湾正一道紅頭道士の午朝科儀」（249 頁～272 頁） 現在の台湾の正一道紅頭道士が行う儀礼のうち、高位の神々に謁見して表疏文を上奏し祈願するという意義を持つ朝科、中でも最も複雑とされる午朝科儀について、まず、本人が現地調査を行い収集した漢文体による文字資料と画像・映像資料とを読解・分析することで、その儀礼構造や内容、使用される儀礼文書の内容を詳細に解明した。そして、その上で、紅頭道士の行う他の朝科とも相互に比較し午朝科儀特有の特色を洗い出すことで、午朝科儀が最も複雑とされる理由についても考察した。
6. 東アジアにおける文化情報の発信と受容	共著	2010年 平成22年2月	雄松堂出版	2005 年 4 月～2010 年 3 月の 5 年間に渡り「東アジアにおける文化情報の発信と受容」をテーマに研究活動を行ってきた関西大学アジア文化交流研究センターの研究成果報告論文集。 （A5 判・全 544 頁） 編者　松浦章 共著者　藤田高夫・沈国威・三浦國雄・山田明広・徐興慶・ほか 16 名 本人担当部分　思想・儀礼研究班「台湾道教の異常死者救済儀礼について―台湾南部地域を中心として―」（331 頁～362 頁） 台湾南部地域において見られる道教の異常死者救済儀礼について、いかなる場合にいかなる特殊な儀礼が行われるのか紹介したもの。まず、台湾における正常死と異常死の定義を述べ、そ

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				れから、台湾道教では亡魂がいかなる異常死を遂げた場合に道士はいかなる特殊な儀礼を行うべきだと考えられているか紹介、その後、道教の異常死者救済儀礼それぞれの儀礼構造や内容、功能について分析し、最後に、これらの作業を通して、人々はなぜこのような特殊な儀礼を必要とするのか考察した。
7.次世代国際学術フォーラム第２集・文化交渉による変容の諸相	共著	2010年 平成22年3月	関西大学文化交渉学教育研究拠点	2009年12月12日～13日に関西大学にて関西大学文化交渉学教育研究拠点（ICIS）主催で挙行された「第２回次世代国際学術フォーラム」の報告論文集。 （A5判・全357頁） 編者　篠原啓方・井上光幸・黄蘊・氷野善寛・孫青 共著者　ジョセフ・ボスコー・山田明広・井黒忍・川端泰幸・崔元硯・ほか13名 本人担当部分　セッション１「台湾の道教儀礼に見られる「水」」（53頁～74頁） 現在の台湾の道教儀礼の中から実際に「水」を使用する「敕水禁壇」などといった科儀や「噀水」などといった動作を抽出し、それらはいかなる目的の下、いかにして行われるのか紹介するとともに、それらにおいて「水」はいかなる意義を持ち、またいかに作用して儀礼の効能が発生しているのか、本人が台湾にて現地調査を行い収集した漢文体による文字資料や『道蔵』等道教関連文献に収められた儀礼関連の漢文資料などを読解することにより考察した。
8.日本古代中世の仏教と東アジア	共著	2014年 平成26年3月	関西大学出版部 全345頁	関西大学東西学術研究所の日本仏教研究班の研究成果報告論文集。東アジアにおける仏教史の総合的な様相を提示する書。 （A5判・全345頁） 編者　原田正俊 共著者　原田正俊・西本昌弘・長谷洋一・山田明広・上川通夫・ほか6名 本人担当部分　第二部第四章「現代台湾の鬼月における無縁死者救済儀礼について―道教の普度法会と仏教の盂蘭盆会の比較―」（207頁～240頁） 台湾の鬼月において無縁仏救済のために行われる「普度法会」および「盂蘭盆会」という祭祀・儀礼について、まず、現地調査により得た事例を用いてその現状を紹介し、その上で、仏教儀礼および道教儀礼関連の漢文資料を読解することを通じて、「中元」、「盂蘭盆」、「施餓鬼」（放焔口）という関連する事項の原義を示し、さらに、これらの事項の歴史的変遷を追うことで、「普度法会」および「盂蘭盆会」の成立と展開を明らかにした。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
9.台湾道教における斎儀―その源流と展開―	単著	2015年 平成27年2月	大河書房	漢文文献の読解と現地調査を有機的に組み合わせた研究方法を用いて、過去の道教儀礼と現在の台湾の道教儀礼の両方について分析することにより、道教の斎儀が現在に至るまでにいかに変容したのか、また反対に今なお古い斎儀の伝統がどれほど保存されているのか示そうとした書。三部七章より成る。本書を著すことにより、現在台湾で見られる道教儀礼の中には、歴史的意味での斎儀と現在的意味での斎儀の両方が並存しているということを明らかにした。 （A5 判・全 260 頁） 平成 26 年度科学研究費補助金研究成果公開促進費助成図書（交付額 1,100,000 円）
10.東アジア海域文化の生成と展開―〈東方地中海〉としての理解―	共著	2015年 平成 27 年 3 月	風響社	慶應義塾大学東アジア研究所の研究プロジェクト「日本・中国・韓国からみた海域文化の生成と変容」(2011 年度～2012 年度）の研究報告論文集。 （A5 判・全 750 頁） 編者　野村伸一 共著者　野村伸一・葉明生・謝聡輝・山田明広・鈴木正崇・ほか 7 名 本人担当部分　第二部第四章「福建泉州地域の寺廟・宗祠調査報告：王爺および観音信仰を中心に」(359 頁～393 頁）を藤野陽平と共著 2011 年 12 月 27 日～2012 年 1 月 2 日に福建泉州地域の寺廟や宗祠などを現地調査し見聞したものについて報告するとともに現地で見られた王爺信仰と観音信仰の特徴について考察したもの。福建泉州地域のいくつかの村落では観音信仰と王爺信仰が結合しているかと思われる祭祀が行われていること、および台湾では今なお行われている送王船の伝統が多くの廟において断絶してしまっていることを指摘した。本人は報告部分のおよそ 7 割（担当部分抽出不可能）および考察部分の全般（384 頁～390 頁）を担当した。 本人担当部分　第二部第五章第六節 6「鹿港天后宮における普度法会次第」（435 頁～445 頁） 2013 年 8 月 21 日（旧暦 7 月 15 日）に台湾彰化県の鹿港天后宮において施宣熹道長率いる保真壇により実施された道教の普度法会（無縁死者救済儀礼）の調査報告。本人が行った現地調査およびこれまでの先行研究に依拠しつつ主に法会の次第について解説した。また、本法会が一方で死者救済儀礼であるとともに、一方で生者救済儀礼でもあるということを示した。
（学術論文） 1.臺灣南部地域の放赦科儀について―高雄・屏東地域の放赦科儀を中心に― （査読付）	単著	2007 年 平成 19 年 5 月	東方宗教（日本道教学会） 第 109 号、73 頁～91 頁	現在、台湾の高雄・屏東地域で行われている道教式功徳儀礼を構成する科目のうち、放赦科儀および放龍鳳科儀を取り上げ、本人が台湾において現地調査して得た漢文体による文字資料と画像・映像資料を用いてそれぞれの科儀の構造や内容を解明するとともに、台南地域の放赦科儀と相互に比較することにより、高雄・屏東地域に見られる放赦科儀および放龍鳳科儀の請神法や文書処理法、儀礼中にみられるパフォーマンス、科儀全体に見られる意義や特色について考察した論文。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
2.道教斎儀の研究 （博士学位論文）	単著	2008年 平成20年3月	関西大学	道教儀礼の中でも最も重要である「斎」という儀礼について、後漢末から宋初ごろまで行なわれていたとされる塗炭斎、宋代以前までの斎儀礼中に見られる自虐的行為、宋代から明代にかけて編纂された道教儀礼関連の漢文文献所載の斎儀、および現在台湾南部地域で見られる道教の死者救済儀礼である功徳儀礼を中心に、その現況や歴史的変遷、地域的差異、パフォーマンス性などを漢文文献の読解と現地調査を組み合わせた研究方法により考察した論文。本文7章、付録1章よりなる。
3.台湾の道教儀礼に見られる口頭語によるパフォーマンス―高雄・屏東地域の放赦および放龍鳳科儀を例として―	共著	2008年 平成20年3月	アジア文化交流研究（関西大学アジア文化交流研究センター）第3号、281頁～299頁	台湾の道教式功徳儀礼の構成科目の一つである放赦科儀および龍鳳科儀においてしばしば見られ、閩南語の口頭語により行われる「做老婆」および「対答」というパフォーマンスについて、実際の事例に依拠しながらその内容を日本語および中国語にて紹介し、これらのパフォーマンスにはいかなる意義があるのか考察した論文。洪瑩発氏が閩南語により行われたパフォーマンスの内容を現代中国語で叙述し、本人がその中国語を日本語に翻訳して注釈を付すとともに、考察を加えた。 共著者　山田明広・洪瑩発 本人担当部分　日本語による内容紹介および考察部分（281頁～288頁・291頁～295頁・298頁～299頁）
4.台湾の道教儀礼に見られる玄天上帝	単著	2009年 平成21年3月	アジア文化交流研究（関西大学アジア文化交流研究センター）第4号、397頁～415頁	四霊獣の一つである「玄武」をその源流とし、道教や民間信仰において重要な位置を占め、台湾道教においては北極四聖の代表として特に尊崇されている玄天上帝について、現在の台湾の道教儀礼中のいかなる場面においていかなる形で登場するのか、主として儀礼空間および科儀といった二つの側面から教派ごとに分類して検討し、その意義や効果を指摘するとともに、さらにその結果を用いて台湾の道教儀礼に見られる玄天上帝の特徴について考察した。
5.台湾道教に見られる二種類の午朝科儀―儀礼構造の比較を中心として―	単著	2010年 平成22年2月	アジア文化交流研究（関西大学アジア文化交流研究センター）第5号、355頁～369頁	台湾道教で見られる紅頭道士の午朝科儀と烏頭道士の午朝科儀という二種類の午朝科儀について、まず、儀礼構造を中心に相互に比較することで両者の間の共通性と差異性を明らかにし、続いて、道教儀礼関連の漢文文献所載の関連のある儀礼と比較することによって、紅頭道士と烏頭道士はいずれも正一系の道士であるに関わらずなぜこれら二種類の異なる朝科が存在するのかという問題について考察し、併せて両儀礼の成立過程について一仮説を示した論文。
6.臺灣道教合符童子科儀之形成的初步探討 （査読付）	単著	2010年 平成22年12月	成大歴史學報（台湾・国立成功大学歴史学系）第39号、177頁～207頁	現在の台湾道教の功徳儀礼を構成する科儀の一つである「合符童子科儀」に関して、まず、その内容と構造および使用される儀礼文書について検討し、続いて、道教儀礼関連の漢文文献の中から関連のある儀礼を抽出し、その内容と構造および使用される儀礼文書について分析し、最後に、中でも特にこの科儀との関連性が高いと判明した南宋『王氏大法』所載の「童子合牒」を取り上げ、その内容を現在の合符童子科儀で使用される「童子符」の内容と相互に比較し考察を加えることで、台湾の合符童子科儀がいかにして成立したのか示した。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
7. 台湾道教の縊死者に関する儀礼とその地域的差異―高雄・屏東地域と台南地域の比較を中心に―	単著	2011 年 平成23年4月	東西学術研究所紀要（関西大学東西学術研究所）第 44 輯、109 頁～119 頁	現在、台湾の高雄・屏東地域と台南地域において見られる道教の縊死者に関する儀礼、すなわち抽楹放索科儀と絞台放索科儀の台湾における地域的差異について考察した論文。本人がそれぞれの地域において現地調査を行い入手した漢文体による文字資料と画像・映像資料を用いてそれぞれの儀礼の儀礼構造や内容、目的、意義などを詳細に描写し、さらに、両者を相互に比較して、両者の間にはいかなる相違性や共通性が見られ、それらはいかなる意味を有するのか検討した。
8. 台湾道教の水死者救済儀礼とその文書	単著	2012 年 平成24年4月	東西学術研究所紀要（関西大学東西学術研究所）第 45 輯、253 頁～277 頁	台湾道教の水死者救済儀礼である転水藏科儀について、まず、本人が台南地域と高雄・屏東地域で現地調査を行い入手した漢文体による文字資料と画像・映像資料を用いて各地域の転水藏科儀の構造や内容、目的、意義を解明してから両者を比較し、さらに、使用される文書についても、いかなるものが存在し、いかなる効能を有するか、地域ごとに考察してから相互に比較することで、転水藏科儀とその文書はいかなるものであり、それらにはいかなる地域差が見られるか考察した。
9. 道教血湖儀礼の初歩的考察―台湾南部地区を例として― （査読付）	単著	2014 年 平成26年3月	関西大学中国文学会紀要（関西大学中国文学会）第 35 号、113 頁～137 頁	道教において女性が難産死した場合に行われる「血湖」と呼ばれる特殊な死者救済儀礼について、まず、その淵源および歴史的変遷を道教儀礼関連の漢文文献を読解することによって検討し、その後、台湾で現地調査を行って収集した台湾南部地域の道教血湖儀礼に関する画像・映像資料および漢文体による文字資料を用いて、その儀礼構成や内容など具体的様相を明らかにするとともに、さらに、地域的差異、通常死の場合に行われる功徳儀礼との間の差異、歴史的位置づけなどを考察した論文。
10. 台湾道教の異常死者救済儀礼	単著	2015 年 平成27年8月	アジア遊学（勉誠出版）第 187 号「怪異を媒介するもの」、249 頁～258 頁	台湾道教で、縊死、溺死、難産死などの異常と認められる死因により人が亡くなった場合に行われる「抽楹放索」、「転水藏」、「血湖」などといった特殊な儀礼について、本人が台湾で現地調査を行い入手した漢文体による文字資料と画像・映像資料にもとづき考察した論文。最初に、通常死の場合に行われる死者救済儀礼はいかなるものか検討した後、異常死者救済儀礼のうち「抽楹放索」、「転水藏」を取り上げ、その実施法を具体的に描写することで、その意義や効能について考察した。
11. 台湾鹿港地域の道教式功徳儀礼について （査読付）	単著	2016 年 平成28年3月	関西大学中国文学会紀要（関西大学中国文学会）第 37 号、297 頁～317 頁	本人が 2013 年 9 月 6 日に台湾彰化県鹿港鎮にて道教式功徳儀礼を調査したその報告論文。まず、調査した功徳儀礼の基本データおよび儀礼のプログラムを提示し、その後、提示したプログラムの順に従って功徳儀礼を構成する各科儀についてその実施方法や効果、意義、使用された文書などを叙述し、最後に、ここまでの考察および本人のこれまでの経験を踏まえて台湾中部地域の道教式功徳儀礼の特徴であると言えそうなことを提示した。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
12. 道教実践者としての李白―李白の詩を通しての考察―	単著	2016 年 平成28年3月	奈良教育大学 国文 研究と教育（奈良教育大学国文学会）第 39 号、19 頁～31 頁	盛唐の詩の大家・李白が道教信者としていかなる道教的実践を行い、それは彼の漢詩の中ではどのように表現されているのか、李白の漢詩を分析することにより考察した論文。まず、李白の事績について述べ、それから、李白の漢詩の分析を通じて李白が授籙、煉丹服餌、存思といった道教的実践を行っていたことを提示し、最後に、これまでの考察を踏まえて、李白が天宝三年に長安の宮廷から放逐されたという挫折経験は、彼の道教信仰の上で、また詩作および人生の上で、大きなターニングポイントとなる出来事であったと結論付けた。
13. 大学での漢文教育における問題点（1）―学生側の問題点：何が学生の漢文読解の妨げになっているか―	単著	2016年 平成28年5月	教育ＰＲＯ（株式会社ＥＲＰ）第 46 巻 10 号、14 頁～15 頁	大学の授業で学生が漢文学を学習するに当たって、何が学生の理解の妨げになっているか、本人のこれまでの大学における漢文教育経験を踏まえて述べた論文。考察の対象を訓点付きの漢文を読解する場合のみに絞り、その場合、書き下し文から現代語へと翻訳するのが学生にとって最も困難であるとし、その上で、その原因は①漢文の読みと字義に対する知識の不足、②漢文の文法に対する理解の不足、③日本語の古典文法に対する理解の不足の三点にあるとして、各点について詳細に論じた。
14. 大学での漢文教育における問題点（2）―教員側の問題点：いかにして学生に漢文読解力を身に付けさせるべきか―	単著	2016年 平成28年5月	教育ＰＲＯ（株式会社ＥＲＰ）第 46 巻 11 号、14 頁～15 頁	学生が漢文学を学習するに当たって困難を覚える原因として①漢文の読みと字義に対する知識の不足、②漢文の文法に対する理解の不足、③日本語の古典文法に対する理解の不足の三要素が考えられるとした上で、教員はこれらの問題を解決して学生に漢文読解力を身に付けさせるために授業ではどのように取り組むべきか、また、学生に漢文に興味を持たせ継続的に学習させるにはどうすべきか、本人のこれまでの大学における漢文教育経験を踏まえて述べた論文。
（その他） 〔国際会議等発表〕 1. 台湾道教に見られる合符童子科儀の成立に関する一考察	―	2007 年 平成 19 年 7 月	関西大学CSAC第3回国際シンポジウム「東アジアの儀礼と宗教」（於関西大学）	現在の台湾道教の功徳儀礼を構成する科儀の一つである「合符童子科儀」に関して、まず、本人が台湾にて現地調査を行って収集した画像・映像資料および漢文体による文字資料を用いてその内容と構造および使用される文書の内容を明らかにし、続いて、宋～明代の道教儀礼関連の漢文文献から関連のある儀礼を抽出してその内容と構造および使用される文書の内容を検討し、その上で、両者の結果を相互に比較することにより、その成立と伝承系統について考察した研究発表。発表持ち時間約30分。
2. 臺灣的道教儀式文書之地方性差異―臺南地區所用的齋儀文書與高雄･屏東地區所用的齋儀文書之比較	―	2007 年 平成19年10月	東亞文化交流與經典詮釋國際學術研討會（於台湾・国立台湾大学）	台湾道教の死者救済儀礼である功徳儀礼で使用され、昔の行政文書を模倣し漢文体により記された儀礼文書について、台南地域の功徳儀礼の事例において使用されたものと高雄・屏東地域の功徳儀礼の事例において使用されたものとをその内容の読解などを通して相互に比較することにより、両地域間にはいかなる共通点や相違点が見られ、それは何を意味するのか考察した中国語による研究発表。発表持ち時間約20分、討論約10分。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
3. 臺灣道教儀式中的玄天上帝	—	2008 年 平成20年10月	2008宗教藝術國際學術研討會 （於台湾・国立屏東教育大学）	道教の中でも北極四聖の一人として高位の神に位置づけられ、台湾道教においては北極四聖の代表として特に尊崇されている玄天上帝が、台湾の道教儀礼中のいかなる場面においていかなる形で登場するか、主として儀礼空間および科儀といった二つの側面から教派ごとに分類して検討し、その結果を用いて台湾の道教儀礼に見られる玄天上帝の特徴について考察した中国語による研究発表。事前審査あり。発表持ち時間約20分。
4. 台湾正一道紅頭道士の午朝科儀	—	2008 年 平成20年12月	第3回日米道教研究会議「道教と共生思想」 （於東洋大学）	台湾の中北部に分布する正一派の道士が祈安醮などにおいて行う四種の朝科の中でも最も複雑とされる午朝科儀に関して、儀礼中に使用される文書、儀礼の構造や内容、および他の朝科との相違を本人が現地調査を行って収集した画像・映像資料および漢文体による文字資料を用いて考察した研究発表。会議論文は日本語によって作成したが、他に中国語のサマリーを提出して中国語により報告を行った。発表持ち時間約20分、討論約30分。
5. 臺灣道教齋儀文書之分析――臺南地區齋儀文書與高雄·屏東地區齋儀文書之比較	—	2008 年 平成20年12月	道教經典與儀式國際研討會 （於台湾・国立政治大学）	台湾道教の死者救済儀礼である功徳儀礼で使用され、昔の行政文書を模倣し漢文体により記された儀礼文書について、台南地域の功徳儀礼の事例において使用されたものと高雄・屏東地域の功徳儀礼の事例において使用されたものとをその内容の読解などを通して相互に比較することにより、両地域間にはいかなる共通点や相違点が見られ、それは何を意味するのか考察した中国語による研究発表。発表持ち時間約20分、討論約30分。
6. 臺灣道教的救濟異常死者之儀	—	2009 年 平成 21 年 5 月	台北大龍峒保安宮2009年「台灣道教與民間信仰神譜」國際學術會議 （於台湾・台北大龍峒保安宮）	人が溺死や難産死、縊死といった特殊な死因により死去した場合に亡魂を地獄から救済するために行われる道教式の特殊な儀礼について、その種類や実施方法、儀礼を行うに至る条件、儀礼の目的などを台南地域と高雄・屏東地域に分類して考察した中国語による研究発表。発表持ち時間約20分、コメンテーターよるコメント約10分、討論約20分。
7. 臺灣道教合符童子科儀之成立的初步探討	—	2009 年 平成21年11月	宗教傳播與宗教衝突：第二屆東亞歷史變遷國際學術研討會 （於台湾・国立成功大学）	現在の台湾道教の功徳儀礼を構成する科儀の一つである「合符童子科儀」に関して、まず、その内容と構造および使用される儀礼文書について検討し、続いて、道教儀礼関連の漢文文献の中から関連のある儀礼を抽出し、その内容と構造および使用される儀礼文書について分析し、最後に、中でも特にこの科儀との関連性が高いと判明した南宋『王氏大法』所載の「童子合牒」を取り上げ、その内容を現在の合符童子科儀で使用される「童子符」の内容と相互に比較し考察を加えることで、台湾の合符童子科儀がいかにして成立したのか示した。発表持ち時間約 20 分、コメント約 10 分、討論約 20 分。
8. 台湾の道教儀礼に見られる「水」と龍神信仰	—	2009 年 平成21年12月	関西大学 ICIS 第 2 回次世代国際学術フォーラム「文化交渉による変容の諸相―自然信仰、エスニック要素と宗教実践、言語概念と言語教育を手がかりに―」 （於関西大学）	台湾の道教儀礼において見られる「**噀水**」や「敕水禁壇」などといったその名前に「水」を含み、また実際に「水」を使用する科儀や動作について、それらはいかなる目的の下、いかにして行われるのか紹介するとともに、それらにおいて「水」はいかなる意義を持ち、またいかに作用して儀礼の効能が発生しているのか分析することにより、台湾の道教儀礼と「水」との関わりについて考察した研究発表。発表持ち時間約 25 分。討論約 15 分。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
9.玄天上帝在臺灣道教儀式中的特徴	―	2010年 平成22年4月	An International Sympo-sium: Divinity and Society: The Cult of Zhenwu in Imperial and Mordern China （中國歷史社會中的真武崇祀國際學述研討會） （於アメリカ・ラトガース大学）	道教の中でも高位の神に位置づけられ、台湾道教においては北極四聖の代表として特に尊崇されている玄天上帝が、台湾の道教儀礼中のいかなる場面においていかなる形で登場するか、主として儀礼空間および科儀といった二つの側面から教派ごとに分類して検討し、その結果を用いて台湾の道教儀礼に見られる玄天上帝の特徴について考察した中国語による研究発表。発表持ち時間約20分。討論約30分。
10.臺灣道教血湖儀式之初歩探討	―	2011年 平成23年6月	第7届国際道教学術研討会 （於中国・湖南省衡山神龍寿岳国際大酒店）	道教において女性が難産死した場合に行われるとされる「血湖」と呼ばれる特殊な死者救済儀礼について、現在の台湾ではそれがいかなる条件のもとで行われ、具体的にいかなるものであるのか、本人が台湾で行ってきた現地調査の経験にもとづいて述べ、さらに、通常死の場合に行われる功徳儀礼と比べるといかなる差異が見られるのか、また、歴史的にはどのように位置づけられるか考察した研究発表。発表時間10分。討論なし。
11.台湾道教の難産死者救済儀礼とその地域的差異―台湾道教の伝承系統考察の手がかりとして―	―	2011年 平成23年9月	渋沢栄一記念財団寄付・次世代国際フォーラム「世界の中の東アジア―多元文化交渉の諸相」 （於関西大学）	台湾において行われる道教の異常死者救済儀礼のうち、難産死の場合に行われる「血湖」と呼ばれる功徳について、それがいかなる条件のもとで行われ、具体的にいかなるものであるのか、台南地域と高雄・屏東地域との間の地域的差異という観点から検討し、さらに、なぜこのような異常死者救済儀礼を特別に行わなければならないのか考察した研究発表。発表時間15分、討論時間10分。
12.道教血湖儀礼の現状について―台湾南部地域の血湖の功徳を例として―	―	2013年 平成24年5月	東アジア文化交渉学会第5回年次大会「描かれる新しい世界：東アジアの歴史・文化と未来」 （於香港城市大学）	道教において女性が難産死した場合に行われるとされる「血湖」と呼ばれる特殊な死者救済儀礼について、まず、その淵源について道教儀礼関連の漢文文献を用いて検討した後、本人が台湾で行ってきた現地調査の経験にもとづき、台湾南部地域の道教血湖儀礼を例として、その具体的様相、地域的差異、通常死の場合に行われる儀礼との間の差異などについて考察した研究発表。発表時間15分、討論時間10分。
13.道教血湖科儀的初歩探討―以臺灣南部地區爲例―	―	2013年 平成24年7月	經典道教與地方宗教國際研討會 （於台湾・国立政治大学）	台湾道教において主として女性が難産死した場合に行われる血湖功徳について考察した中国語による研究発表。まず、道教儀礼関連の漢文文献を用いて難産死者が堕ちるとされる血湖地獄とはいかなるものか確認し、その後、現在の台湾で行われている「血湖功徳」について、本人が台湾南部地域で現地調査を行い得た漢文体のよる文字資料および画像・映像資料にもとづきつつその実施方法や一般の功徳儀礼との差異、使用される文書などについて検討した。発表時間20分、討論時間30分。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
14.台灣道教的救濟異常死者的儀式――以台南地區的對縊死者及溺水死者的儀式為主	―	2016年 平成28年	中国人民大学-羅格斯大学首届国際道教文化前沿論壇 （於中国・湖南省陽光大酒店）	台湾道教の異常死者救済儀礼について、縊死者救済儀礼と溺水死者救済儀礼を例として考察した中国語による研究発表。まず、何が異常死に当たるか定義づけした後、筆者が台南地域で調査した縊死者救済儀礼と溺水死者救済儀礼の事例を用いて、それぞれの儀礼の実施方法や特徴などを確認し、その後、なぜこれらの儀礼は各死者が生じた現場で行わなければならないのかということについて、儀礼を行った道士たちに対する聞き取りや彼らが持っている科儀書、筆記小説などによって検討した。発表時間20分、討論時間10分。
〔国内学会発表〕 1.台湾における異常死者救済儀礼について	―	2008年 平成20年12月	関西大学CSAC第12回研究集会「華南沿海地域における信仰の諸相」 （於関西大学）	最初に台湾において異常死とはいかなるものを指すのか検討し、続いて、異常死の中でも溺死や難産死、縊死といった死因により人が死去した場合に道士によって行われる転水藏、転血藏、絞台放索などといった特殊な儀礼について、その種類や実施方法、儀礼を行うに至る条件、儀礼の目的などを紹介し、さらに、人々はなぜ異常死の場合にこのような特殊な儀礼を行うのか考察した研究発表。発表持ち時間約40分。
2.台湾道教の異常死者救済儀礼で使用される文書について	―	2011年 平成23年3月	日本中国学会第1回若手シンポジウム「中国学の新局面」 （於東京大学）	台湾道教の中でも功徳儀礼が比較的盛んに行われている台湾南部地域の道教を主たる考察の対象として、まず、当該地域において異常死が発生した場合に行われる功徳儀礼や科目にはいかなるものが存在するか列挙し、その上でその際に使用される特殊な儀礼文書にはいかなるものがあり、その内容はいかなるものであるのか、台南地域と高雄・屏東地域の地域差にも留意しつつ考察した研究発表。事前審査あり。発表時間20分。討論時間10分。
3.道教では縊死者をいかにして救済するのか―台湾南部地域を例として―	―	2014年 平成26年3月	東アジア恠異学会第90回例会 （於園田学園女子大学）	台湾道教の異常死者救済儀礼のうち、人が縊死した場合に行われる特殊な儀礼について考察した研究発表。台南地域の縊死者救済儀礼である「抽楹放索」と高雄・屏東地域の縊死者救済儀礼である「絞台放索」を取り上げ、両者を相互に比較して両者の間に見られる相違について検討することで、「絞台放索」には死者を地獄から救済するという効能があるが、「抽楹放索」にはそのような効能はなくむしろ、縊死の原因である悪煞を祓うことに重点が置かれているという見解を示した。発表時間60分、討論60分。
4.伝統や文化に関する教育から国際理解へ―漢字・漢文教育を例として―	―	2017年 平成29年2月	日本人間教育学会第2回大会 （於奈良学園大学）	教育によって、日本人の中華文化圏の人々に対する理解を増進させるべきことを主張した研究発表。まず、伝統や文化に関する教育と国際理解教育の現状および相互の関係性について振り返り、その上で、中華文化圏から非常に多くの観光客が日本へと来ているにも関わらず、日本人の中華文化圏の人々に対する理解が足りないため、彼らに対する対応に不適切な点があるといった問題点を指摘した。そして、旧字体や漢文といった伝統や文化に関する教育に力を入れることで、中華文化圏の人々に対する理解増大につながるのではないかと提言した。発表時間20分、討論10分。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
〔翻訳〕 1. 巡狩―儀礼実践のデモンストレーション―	単訳	2008 年 平成 20 年 8 月	東アジアの儀礼と宗教（雄松堂出版）、3 頁～63 頁	原著者　李豊楙 原題　「巡狩：一種禮儀實践的宣示儀式」 台湾中央研究院中国文哲研究所研究員・李豊楙氏が、2007 年 7 月 20～21 日の両日に渡って関西大学にて行われた国際シンポジウム「東アジアの儀礼と宗教」の基調講演において報告を行うために著した中国語の論文「巡狩：一種禮儀實践的宣示儀式」を日本語に翻訳したもの。台湾で盛んに行われている王醮において行われる代天巡狩の儀礼および王府内での儀礼について、その根底には儒教が存在していることを念頭に置きつつ総合的に考察されている。
2. 転経―古霊宝派の宣教方法―	共訳	2009 年 平成21年10 月	道教と共生思想（大河書房）、76 頁～86 頁	原著者　Stephan R. Bokenkamp 原題　“Turning the Scriptures”: A Lingbao Proselytizing Technique アリゾナ州立大学教授 Stephan R. Boken-kamp 氏が著した英語の論文を日本語に翻訳し、訳者注を付したもの。これまで多種多様に研究され、道教研究において極めて重要な古霊宝経について、従来までの論に疑問を投げかけ、新ためて如何なる宗教集団が如何なる目的のもと作成するとともに、如何にしてそれを使用していたのかが考察されている。 共著者　酒井規史・山田明広 本人担当部分　前半部分およびその注（76 頁～81 頁、84 頁～86 頁）
3. 中国北方農村における民間宗教の復興とその策略	単訳	2010 年 平成 22 年 9 月	東アジアの思想と宗教（丸善出版）、293 頁～318 頁	原著者　范丽珠 原題　「中国北方乡村民间宗教的复兴及其策略」 復旦大学教授・范麗珠氏が、関西大学の渋沢栄一記念財団寄付講座「日中関係と東アジア」の一環として 2009 年 11 月 26 日に講演を行うために著した中国語による論文「中国北方乡村民间宗教的复兴及其策略」を日本語に翻訳したもの。共産党政権の下、迷信・俗信が禁止されている中国において、近年、民間宗教がどのような方法を用いて復興しつつあるのか社会学的視点から論じられている。
4. 書院―近世中国における教育の中心	共訳	2011 年 平成23年10 月	泊園記念会創立 50 周年記念論文集（関西大学出版部）、53 頁～71 頁	原著者　李弘祺 原題　「書院：近世中國教育的中心」 台湾国立交通大学教授・李弘祺氏が 2010 年 10 月 23 日に行われた平成二十二年度（第 50 回）泊園記念講座国際シンポジウム「東アジアの伝統教育と泊園書院」において基調報告を行うために著した中国語による論文「書院：近世中國教育的中心」を日本語に翻訳したもの。 共著者　山田明広・吾妻重二 本人担当部分　全文の下訳を分担したため抽出不可能

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
5. 異議の意義―東アジアの反理学思潮を論ず―	単訳	2012 年 平成 24 年 3 月	朱子学と近世・近代の東アジア（臺大出版中心）、236 頁～288 頁	原著者　楊儒賓 原題　「異議的意義――論東亞的反理學思潮」 台湾国立精華大学教授・楊儒賓氏が 2010 年 9 月 10 日に行われた朱子生誕 880 年記念国際シンポジウム「朱子学と近世・近代の東アジア―テキストをふまえたアプローチ―」において基調報告を行うために著した中国語の論文「異議的意義――論東亞的反理學思潮」を日本語に翻訳し、漢文文献からの引用文については書き下し文に改めたもの。荻生徂徠・丁若鏞・阮元などといった東アジアの反理学を主張する儒者の観点およびその理念について考察されている。
6. 朝鮮・丁若鏞と日本古学派	単訳	2012 年 平成 24 年 3 月	朱子学と近世・近代の東アジア（臺大出版中心）、379 頁～414 頁	原著者　蔡振豐 原題　「朝鮮丁若鏞與日本古學派」 国立台湾大学教授・蔡振豊氏が 2010 年 9 月 10 日に行われた朱子生誕 880 年記念国際シンポジウム「朱子学と近世・近代の東アジア―テキストをふまえたアプローチ―」において報告を行うために著した中国語の論文「朝鮮丁若鏞與日本古學派」を日本語に翻訳し、漢文文献からの引用文については書き下し文に改めたもの。朝鮮実学の集大成者・丁若鏞の著作を通じて、朝鮮の学者が日本との長年に渡る儒学交流の後、日本古学に対していかなる評価を下したのか考察されている。
7. 佐久間象山と張之洞	単訳	2012 年 平成 24 年 3 月	朱子学と近世・近代の東アジア（臺大出版中心）、415 頁～446 頁	原著者　張崑將 原題　「佐久間象山與張之洞」 国立台湾師範大学教授・張崑將氏が 2010 年 9 月 10 日に行われた朱子生誕 880 年記念国際シンポジウム「朱子学と近世・近代の東アジア―テキストをふまえたアプローチ―」において報告を行うために著した中国語の論文「佐久間象山與張之洞」を日本語に翻訳し、漢文文献からの引用文については書き下し文に改めたもの。日本幕末の朱子学者・佐久間象山の思想と中国清末の政治家・張之洞の思想を比較することにより、中国と日本との間の西洋の学問を受け入れるに当たっての認知の差異について考察されている。
8. 朱熹『白鹿洞書院掲示』の日本における流伝およびその影響	単訳	2012 年 平成 24 年 3 月	朱子学と近世・近代の東アジア（臺大出版中心）、518 頁～536 頁	原著者　張品端 原題　「朱熹《白鹿洞书院揭示》在日本的流传及其影响」 国福建省武夷学院・中国社会科学院哲学研究所宋明理学研究センター秘書長・張品端氏が 2010 年 9 月 10 日に行われた朱子生誕 880 年記念国際シンポジウム「朱子学と近世・近代の東アジア―テキストをふまえたアプローチ―」においてポスターセッションを行うために著した中国語の論文「朱熹《白鹿洞书院揭示》在日本的流传及其影响」を日本語に翻訳し、漢文文献からの引用文については書き下し文に改めたもの。朱子が再建し経営した白鹿洞書院の精神を記した『白鹿洞書院掲示』がいかに日本に流伝し、そして影響したかといったことが考察されている。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
9.産難の予防、禳除と抜度―台湾南部と泉州地区に見られる道教科法を主として―	単訳	2015年 平成27年3月	東アジア海域文化の生成と展開―〈東方地中海〉としての理解―(風響社)、299頁～357頁	原著者　**謝聰輝** 原題　「**産**難的預防、禳除與拔度：以南臺灣與泉州地區所見道教科法為主」 台湾師範大学教授・謝聰輝氏が著した中国語の論文を日本語に翻訳し、漢文文献や漢文体による儀礼書からの引用文については書き下し文に改めたもの。中国や台湾に伝わる女性の難産予防に関わる種々の儀礼やまじない、宗教医療について、主として文献を用いて詳細に分析するとともに、併せて、現今なお実施されている「血湖」と呼ばれる難産関連の道教儀礼について、台湾南部と泉州地区における現地調査を踏まえて仔細に論じている。
10.現代上海道教の宮觀および道士についての簡單な紹介	単訳	2015年 平成27年6月	東方宗教（日本道教学会）第125号、127頁～132頁	原著者　姚树良 原題　「当代上海道教宫观、道士现状简介」 2014年11月8日に開催された日本道教学会第65回大会において、上海市道教教会副会長・姚樹良氏により行われた中国語による講演の原稿を日本語に翻訳したもの。最初に文化大革命以降の中国道教の状況について紹介するとともに、中国道教の教派について説明し、その上で、上海の道教の現況について、宮観、儀礼、道士の養成方法、宮観と民衆とのかかわり、布教などといった側面から紹介されている。
〔研究報告〕 1.『朱子語類』礼関係部分訳注１	共著	2009年 平成21年3月	東アジア文化交渉研究（関西大学文化交渉学教育研究拠点）別冊第5号	関西大学グローバルＣＯＥ「文化交渉学教育研究拠点」の研究成果報告。南宋『朱子語類』の礼関係部分（巻84～91、礼一～礼八）の訳注を刊行したもの。『朱子語類』(南宋・黎靖徳編、王星賢点校標点本、理学叢書、北京・中華書局、1986年）を底本とし、その他テキストと校訂した上で、古典中国語による本文を現代語訳し、さらに詳細な訳者注を付けている。 編者　吾妻重二 共著者　吾妻重二・城山陽宣・井澤耕一・山田明広・ほか4名 本人担当部分　巻89・礼六・喪、第1条～第6条（95頁～101頁）
2.『朱子語類』礼関係部分訳注２	共著	2013年 平成25年5月	科学研究費基盤研究（A）（一般）「東アジアにおける伝統教養の形成と展開に関する学際的研究：書院・私塾教育を中心に」(研究代表者・吾妻重二)	科学研究費基盤研究（A）（一般）「東アジアにおける伝統教養の形成と展開に関する学際的研究：書院・私塾教育を中心に」（研究課題番号21242001）の平成21年度の研究成果報告書。『朱子語類』（南宋・黎靖徳編、王星賢点校標点本、理学叢書、北京・中華書局、1986年）を底本とし、その他テキストと校訂した上で、古典中国語による本文を現代語訳し、さらに詳細な訳者注を付けている。 編者　『朱子語類』研究会 共著者　吾妻重二・井澤耕一・白井順・山田明広・ほか4名 本人担当部分　巻89・礼六・喪、第7条（96頁～100頁）

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
3.『朱子語類』礼関係部分訳注３	共著	2011 年 平成 23 年 1 月	科学研究費基盤研究（A）（一般）「東アジアにおける伝統教養の形成と展開に関する学際的研究：書院・私塾教育を中心に」研究代表者・吾妻重二	科学研究費基盤研究（A）（一般）「東アジアにおける伝統教養の形成と展開に関する学際的研究：書院・私塾教育を中心に」（研究課題番号 21242001）の平成 22 年度の研究成果報告書。『朱子語類』（南宋・黎靖徳編、王星賢点校標点本、理学叢書、北京・中華書局、1986 年）を底本とし、その他テキストと校訂した上で、古典中国語による本文を現代語訳し、さらに詳細な訳者注を付けている。 編者　『朱子語類』研究会 共著者　吾妻重二・井澤耕一・白井順・山田明広・ほか 6 名 本人担当部分　巻 89・礼六・喪、第 8 条～第 9 条（89 頁～92 頁）
4.『朱子語類』礼関係部分訳注４	共著	2012 年 平成 24 年 1 月	科学研究費基盤研究（A）（一般）「東アジアにおける伝統教養の形成と展開に関する学際的研究：書院・私塾教育を中心に」研究代表者・吾妻重二	科学研究費基盤研究（A）（一般）「東アジアにおける伝統教養の形成と展開に関する学際的研究：書院・私塾教育を中心に」（研究課題番号 21242001）の平成 23 年度の研究成果報告書。『朱子語類』（南宋・黎靖徳編、王星賢点校標点本、理学叢書、北京・中華書局、1986 年）を底本とし、その他テキストと校訂した上で、古典中国語による本文を現代語訳し、さらに詳細な訳者注を付けている。 編者　『朱子語類』研究会 共著者　吾妻重二・井澤耕一・白井順・山田明広・ほか 6 名 本人担当部分　巻 89・礼六・喪、第 10 条～第 19 条（77 頁～85 頁）
5. 台湾道教の縊死者および溺死者救済儀礼に関する二、三の考察―台南地域を例として―	単著	2016 年 平成 28 年 9 月	奈良学園大学紀要（奈良学園大学）第 5 集	台湾道教の異常死者救済儀礼について、縊死者救済儀礼と溺水死者救済儀礼を例として考察した研究報告。まず、何が異常死に当たるか定義づけした後、筆者が台南地域で調査した縊死者救済儀礼と溺水死者救済儀礼の事例を用いて、それぞれの儀礼の実施方法や特徴などを確認し、その後、なぜこれらの儀礼は各死者が生じた現場で行わなければならないのかということについて、儀礼を行った道士たちに対する聞き取りや彼らが持っている科儀書、筆記小説などによって検討した。
〔書評〕 1. 志賀市子著『〈神〉と〈鬼〉の間―中國東南部における無縁死者の埋葬と祭祀』	単著	2013 年 平成 25 年 5 月	東方宗教（日本道教学会） 第 121 号、93 頁～99 頁	茨城キリスト教大学教授・志賀市子氏の著書『〈神〉と〈鬼〉の間―中國東南部における無縁死者の埋葬と祭祀』（風響社、2012 年）に対する書評。中国東南部、特に広東省東部沿海の潮汕および海陸豊地域における無縁死者の埋葬と祭祀を主な研究対象とし、その諸相および歴史的変遷を明らかすることを目的として書した本書について、その内容を簡単に紹介した上で、その研究方法および内容について評し、さらに問題点を指摘した。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
〔辞書〕 1.岩波世界人名事典	共著	2013年 平成25年12月	岩波書店 全3586頁	全世界の国・地域について、神話・伝説上の人物から現存者までを網羅した総合的な人名辞典。 編者　岩波書店辞典編集部 共著者　山田明広・吾妻重二・二階堂善弘・酒井規史・三浦國雄他550名 本人担当部分　中国の道教および民間信仰の神・神仙に関する項目のうち以下の11項目。 安期生（145頁）、王爺（484頁）、玉皇大帝（734頁）、元始天尊（924頁）、黄初平（950頁）、三官大帝（1117頁）、三山国王（1118頁）、三茅真君（1126頁）、東華帝君（1839頁）、保生大帝（2641頁）、媽祖（2743頁）
〔解説・総説・雑記等〕 1.道教關係著書論文目録〔2006（平成18）年〕	共著	2007年 平成19年11月	東方宗教（日本道教学会）第110号、1頁～37頁	2006年1月～12月に発表された道教あるいは関連分野に関する著作・論文・書評を収集し、邦文・中文・韓文・英文ごとに分類して目録としたもの。文献調査に当たっては2名の編者の他、関西大学の大学院生や諸外国の研究者からの協力を得、目録作成においては、主として本人が目録の作成を担当し、吾妻重二氏が編集責任者を担当する。 共著者　吾妻重二・山田明広 本人担当部分　共同作業につき抽出不可能。
2.屏東の林徳勝道長との出会いと交流―台湾道教のあり方を学ぶ―	単著	2014年 平成26年9月	日本台湾学会ニューズレター（日本台湾学会）第26号、13頁～14頁	日本台湾学会のニューズレターにおける特集「記憶の中の台湾―思い出の場所、思い出の人―」に寄せた文章。本人が台湾留学中に知り合い、道教儀礼を調査させていただいたほか多くの資料を提供していただくなど非常にお世話になった台湾屏東県在住の道士・林徳勝道長との出会いとこれまでの交流、および林道長の道教儀礼や信仰に対する態度についてエッセー形式で紹介するという内容のもの。

教　育　研　究　業　績　書

平成２９年３月３１日

氏名　太田　雄久

研究分野	研究内容のキーワード
教育学	教育方法(理科)・教科教育（理科)・学級経営

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
１　教育方法の実践例 （１）小学校理科レポート作成による科学的な思考力・表現力の育成	平成 19 年 4 月 ～26 年 3 月	小学校理科の学習指導要領改訂の改善の具体的事項で示されている「児童の科学的な見方や考え方が一層深まるように，観察・実験の結果を整理し考察し表現する学習活動」の充実として，子どもに各単元の終末でのレポート作成に取り組ませた。その結果，観察・実験の結果をグラフに整理したり，予想や仮説と関連づけて考察したりしたことを言語活動として表現する必要性を子どもに理解させることができるとともに，日々の授業での言語活動も充実することができ，相互に影響を与えつつ科学的な思考力や表現力を育成することができた。 （大阪教育大学附属天王寺小学校での実践）
（２）「Aエネルギー・粒子」領域における見えないものを見えるようにする理科の教材開発	平成 19 年 4 月 ～20 年 3 月	「Aエネルギー・粒子」領域における見えないものを可視化する教材開発を４年生理科の単元で行った。具体的には，「水の温まり方」では，対流が起こっているときの水の温度変化を可視化した示温インクゼリー，「水の体積変化」では，体積変化と温度変化を同時に見られるデジタル温度計付きゴム栓を作成した。その結果，「水の温まり方」では，「温まった水が上へ移動し，その結果上の冷たい水が下に移動し対流が起こること」が分かった。「水の温まり方」では「水の温度が上昇し体積も増加し，下がると体積も減少する」ことを，実験の結果から実感・納得を伴って理解させることができた。 （大阪教育大学附属天王寺小学校での実践）
	平成 25 年 4 月 ～26 年 3 月	「Aエネルギー・粒子」領域における見えないものをする可視化する教材開発を３年生理科の単元で行った。具体的には，「磁石の性質」の単元において，見えない磁石の力の働き方を可視化するために，棒磁石を同極同士長く連結したものと異極同士を長く連結したものを作った。それらにつく鉄でできた物のつき方の違いから，子どもは同極同士および異極同士近づけたときの磁石の力の働き方の違いをとらえることができた。また，「同極同士を近づけると退け合い，異極同士を近づけると引き合う」という現象について，子どもは見えない磁石の力の働き方に触れながら，自分なりの表現で説明することができるようになった。これらの姿は，３年生の「エネルギー」についての見方や考え方が育っていると評価できるものである。また，小学校３年生での「エネルギー」についての評価規準として，提案性のあるものとなった。 （大阪教育大学附属天王寺小学校での実践）

（３） 汎用測定装置「ＳＰＡＲＫ」を用いた小学校理科の授業開発	平成 23 年 4 月～24 年 3 月	大阪教育大学のイノベーション人材育成に向けたカリキュラムや教材・教授方法の開発とその実証を先導的に教育研究に取り組む「科学教育プロジェクト（通称）」において，小学校理科の目標の重点として挙げられている「児童が観察，実験などの結果を整理し，考察，表現する活動を行い，学びを生活とのかかわりの中で見直し，自然の事物・現象についての実感を伴った理解を図る活動」を具体化した授業開発として，５年生「電磁石のはたらき」の単元で，汎用測定装置を使った授業開発を行った。その結果，電流の強さやコイルの巻き数の変化などによる電磁石のもつ磁力の変化を定量的に認識し，電磁石の磁力の強さを変化させる条件を理解させた。 （大阪教育大学付属天王寺小学校での実践）
（４） 子どもの感性を働かせ科学的な見方や考え方を育む理科の授業指導方法開発	平成 25 年 4 月～26 年 3 月	理科の目標にある「科学的な見方や考え方」を育むために，３年生理科の授業で，子どもの感性を働かせるような授業開発を，年間を通じて行った。例えば，３年生はじめの「植物の体のつくり」の単元では，子どもの観察の視点（視線の向き，数，色，変化など）の意味付け，価値付けを指導者が行うことで，自然の事物・現象を見る際の視点を増やした。その結果，子どもの植物の観察の視点が増え，観察の質が向上した。また，以降の単元においても，初期事象の出会いや観察・実験の際に多様な気付きが生まれるようになり，子どもが主体的な問題解決を通して，科学的な見方や考え方を身に付けることができた。 （大阪教育大学附属天王寺小学校での実践）
２　作成した教科書，教材 （1）４年“水の温度とかさ教材”にＰＩＳＡ型プラスのヒント“ （再掲） 明治図書株式会社	平成 20 年 8 月	４年生「ものの温度とかさの変化」の単元授業実践をもとに，本単元におけるＰＩＳＡ型科学的リテラシーの育成を目指した授業改善案を提案した。具体的な提案として，仮説設定時におけるイメージ思考の導入，実験データのグラフ化や表への整理，考察したことの生活場面への転用の３つを行った。仮説設定時におけるイメージ思考の導入として，熱エネルギーに目が向くような初期事象の設定と，熱エネルギーの様子を図で表現させて可視化させる２つの手立てを行ったこと，実験データのグラフ化，表の整理では，単位時間あたりの水などの温度変化を折れ線グラフに表させたり，それぞれの時間の水などの様子を時系列で表にまとめさせたりしたこと，生活場面の転用としては，理科で使う棒温度計や空調設備の吹き出し口の向きなどについて，レポートの作成をさせたことを論じた。 （大阪府下小学校教員研修で使用）
（２） 天王寺教育ノート　第１３１号 大阪教育大学教育後援会	平成 21 年 12 月	「アサガオの観察～アサガオを好きにさせることで気付きの質を高める～」をテーマに生活科と理科の連続性について述べた。 理科での科学的な見方や考え方の育成のために，生活科で気付きの質を高める必要性を述べた。科学的な見方や考え方の基礎を養う授業実践についてレポートを行った。気付きの質を高めるためには対象との関わりを密にすること，観察カードの気付きを指導者が適切に意味付けたり価値付けたりした上で児童にフィードバックすることが重要であるということを論じた。 （兵庫県伊丹市立有岡小学校教員研修で使用）

(３)教育実習生パンフレット 大阪教育大学附属小学校理科部	平成 24 年 4 月	教育実習生の理科の授業づくりと指導の能力の向上を目的として作成した。具体的な内容は，理科室および理科準備室の環境整備，安全と危機管理，教材開発の仕方，板書の方法，教材や実験器具の特性，理科の目標，子どもの学習活動と指導者の支援，学習指導案の書き方などを述べた。さらに理科の授業づくり指導に関わる内容について，具体例や写真を多用し，教育実習生にとってわかりやすく理解できるように述べた。 Ａ４版　８ページ （平成 24 年度，25 年度大阪教育大学附属天王寺小学校の実習生指導で使用）
３　教育上の能力に関する大学等の評価 (１)大阪教育大学非常勤講師としての学生による授業評価アンケート結果	平成 24 年 9 月	大阪教育大学非常勤講師として学生による授業アンケートによると，本人が担当の「初等理科授業研究」は，総合評価で３．８点（４点満点中）高い評価を得ている。特に具体的な話で分かりやすい点で，学生の満足度が高い。また，授業の準備や工夫した教材の提示なども学生から好評であった。
	平成 25 年 9 月	前年度に引き続き大阪教育大学非常勤講師としての学生アンケート評価は総合評価で３．９点（４点満点中）であり，学生の出席率の高さ，教員の例示の分かりやすさ，学生の内容の理解度の３つの項目で特に高い評価を得た。
(２)科研費獲得のための研究補助	平成 26 年 3 月	大阪教育大学附属天王寺小学校教諭として，平成 25 年度科研費（奨励研究）に応募した。(研究協力者は，大阪教育大学科学教育センター特任准教授　仲矢史雄氏である。）テーマは「現場教員による一貫指導と授業収録システムによる教育実習生指導方法の開発」である。科研費としては不採用であったが，大阪教育大学の学内選考会より，科研費獲得に向けて継続的に研究を進める価値があるテーマであるとの評価を受けた。科研費獲得の研究補助（平成２６年度）として１０万円の研究補助費を獲得した。
(３)大阪教育大学附属天王寺小学校の副校長からの評価	平成 26 年 2 月	理科部では，科学教育プロジェクトの中心として大阪教育大学との連携を密にし，プロジェクト推進に寄与した。また，理科教育部の中心として新学習指導要領に基づいた研究を進めることにも貢献した。さらに，理科主任として，研究会議の場でも積極的に提案し，意欲的に新たな教材を開発し，研究推進に貢献した。学校および学年運営では，第３学年主任を務め，ミドルリーダーの役割を果たした。学年担任団をまとめ，児童への指導や保護者との連携を充実させ，学校を組織として機能させた。教育実習部では，教育実習主任を補佐し，教育基本実習，第２部４回生実習，１日教育実習，教育実習オリエンテーションなどの実習関連業務を滞りなく運営した。
(４)奈良学園大学人間教育学部採用に当たっての学長からの評価	平成 26 年 7 月	大阪教育大学附属天王寺小学校で理科教育を８年間担当し教育方法技術も豊かである。また大阪府下の小学校教員への指導歴も多く，理科が苦手な教員へ実験等の指導にも優れている。また，附属小学校で多くの教育実習生の指導経験もあり，本大学の教育実習指導にも力を発揮できると期待する。さらに，非常勤講師として大阪教育大学で理科教育において学生指導を担当した経験もあり，すでに非常勤であるが大学教員としての授業の経験がある。附属では担任や学年主任の経験もあり，学生指導においてもその経験を発揮できると考える。奈良学園大学の今後を支える若手研究者として期待できる。

４　実務の経験を有する者についての特記事項 （１）大阪教育大学の教育実習生指導担当	平成 18 年 4 月 ～ 平成 26 年 3 月 毎年 9 月 （昼間部）	毎年，大阪教育大学附属天王寺小学校に勤務した８年間，大阪教育大学教育学部の昼間部の学生を９月の１ヶ月間を指導した。教育実習部としては，当該年度の全ての実習生を指導した。大阪教育大学附属天王寺小学校は毎年度１００名程度の教育実習生を受け入れている。指導の内容は以下の通りである。 ・理科の授業づくりおよび指導案作成の指導（理科専科時） ・音楽科，図画工作科を除く，小学校全科および領域の授業づくりおよび指導案作成の指導，実習記録の仕方などの実習事務に関わる指導，学級経営などの学級担任としての心構えについての指導（学級担任時） ・教育実習生としての心構え，子どもとの関わり方，災害時などの教員の役割，守秘義務等学校教員としての規律などについての指導（教育実習部担当時）
	平成 18 年 4 月 ～ 平成 26 年 3 月 毎年 11 月 （夜間部）	大阪教育大学附属天王寺小学校に勤務した８年間，毎年，大阪教育大学教育学部の夜間部の学生約 40 名を 11 月に２週間指導した。教育実習部としては，当該年度の全ての実習生を指導した。指導の内容は以下の通りである。夜間部の学生はすでに小学校 2 種や他校種等の免許を取得している学生が多いので，一定の教職に対する知識を備えている。そのため特に以下の点について指導した。 ・指導案作成における観点別評価の規準の設定と実際の評価の方法について（理科専科時） ・学級づくりにおいて，特別に支援を要する児童への関わり方や，そのために組織として対応する必要性について（学級担任時） ・保護者や地域と連携し，児童を育てるための，教師としての心得や，保護者の苦情などを学級や学校づくりに生かす方法について（教育実習部担当時）
（２）大阪府下の小学校教員の指導力向上のための研修の指導助言	平成 21 年 8 月 【1 回目】	大阪教育大学の学長特別プロジェクト事業（地域貢献部門）の一環として実施した。目的は，大阪府下の教員の指導力向上である。 「観察・実験のアイデア！高学年理科」，の内容で指導し具体的な実験の指導ポイントは好評であった。 「予備実験の重要性に対する意識の向上」「理科に対する苦手意識の低下」に焦点を当てた指導を行った。指導の結果，理科授業に対する苦手意識がなくなったという受講者が多数であった。 （対象者　大阪府下小学校教諭２０名）
	平成 22 年 8 月 【2 回目】	大阪教育大学の学長特別プロジェクト事業（地域貢献部門）の一環として，昨年度に引き続き実施した。目的は，大阪府下の教員の指導力向上である。 「はじめての理科指導！安心安全理科実験基礎講座（初級編）」「理科実験基礎講座（中級編）」の指導を行った。理科教育の苦手な教員が多い中，安全面に視点を置いた研修は歓迎された。観察・実験における留意点や基本的な実験器具の使い方，理科室および理科準備室の環境整備，教科書に載っていない効果的な実験方法，科学クラブで楽しめるネタなど，観察・実験の充実を目的としている。 （対象者：　大阪府下小学校教諭２０名）

	平成 23 年 8 月 【3 回目】	大阪教育大学の学長特別プロジェクト事業（地域貢献部門）の一環として，連続講座 3 回目を実施した。目的は，大阪府下の教員の指導力向上である。 「初心者向け　観察・実験基礎講座」「子どもの科学的な見方や考え方を深める授業づくり」の指導を行った。「初心者向け　観察・実験基礎講座」は，安全面に視点を置いた研修である。具体的には，観察・実験における留意点や基本的な実験器具の使い方，理科室および理科準備室の環境整備，教科書に載っていない効果的な実験方法を指導し，参加教員の理科授業での観察・実験の充実を目的としている。「子どもの科学的な見方や考え方を深める授業づくり」は，子どもの目の付け所に着目した理科の授業づくりの研修である。具体的には，理科の内容で，子どもがつい注目するところを分析すること及び教材の特質を分析することの重要性を授業実践を例にしながら指導した。研修参加者にとって，明日からの授業にとって有意義な研修となった。 （対象者：　大阪府下小学校教諭 20 名）
	平成 24 年 8 月 【4 回目】	大阪教育大学の学長特別プロジェクト事業（地域貢献部門）の一環として，連続講座 4 回目を実施した。目的は，大阪府下の教員の指導力向上である。 「科学的な見方や考え方を深める授業づくり」をテーマに研究を行った。子どもの自然の事物・現象に対する見方や考え方を科学的なものに変容させるための授業づくりの考え方や授業実践例を紹介することで，理科の授業力向上を目的としている。「子どもが主体的な問題解決を行う理科の授業づくりには，児童分析と教材分析が必要不可欠であることを実感したこと」「単元および本時の授業後の子どもの姿を設定したうえで授業づくりを行うことの重要性」を論じた。結果，深い教材分析と的確な児童理解の重要性を受講生は理解することができた。 （対象者　大阪府下小学校教員約２０名）
（3）大阪教育大学教育学部（第二部）「理科教育法」実地講師としての授業を担当	平成 23 年 4 月 ～24 年 3 月 【１年目】	大阪教育大学教育学部（第二部）「理科教育法」において，「高学年の理科指導」をテーマとして，授業づくり，児童分析，教材分析についての講義，授業実践の紹介，模擬授業を行った。具体的には，６年生の「水溶液の性質」の授業実践例を，子どもの具体のノート記録を例に挙げながら，具体的な教材分析の仕方やノートの評価の仕方についても触れながら紹介した。６年生「もののもえ方」の単元で，見えない空気の流れに子どもが注目する導入時のアイデアを紹介した。具体例を多く取り入れたため，理科の授業に対する見方が変わった学生が多かった （受講者　大阪教育大学３回生および４回生を中心に約６０名）
	平成 24 年 4 月 ～25 年 3 月 【2 年目】	大阪教育大学教育学部（第二部）「理科教育法」において，「高学年の理科指導」をテーマとして指導した。まず高学年児童の発達段階と学習の特徴を説明した。さらに，授業づくり，児童分析，教材分析，及び目標と評価の観点についての講義を行った。授業実践の紹介とともに，模範授業も行った。具体的には，６年生の「もののもえ方」の授業実践例について，子どもの具体のノート記録を例に挙げながら，教材分析の仕方やノートを評価する方法や視点について紹介した。５年生「メダカのたんじょう」の単元では，子どもが「メダカを観察したい。」という願いをもつ導入時の授業を紹介した。授業実践例や模範授業を多く取り入れ，子どものノート記録も多数紹介したため，教育実習前の学生にとり，小学校現場での理科の授業や子どもの反応やその評価についてのイメージを持つことができ，有益な講義となった。 （受講者　大阪教育大学３回生および４回生を中心に約６０名）

	平成 25 年 4 月 ～26 年３月 【3 年目】	大阪教育大学教育学部（第二部）「理科教育法」において，「高学年の理科指導」をテーマとして，授業づくり，児童分析，教材分析及び評価の観点とその手立てについての講義を行った。高学年児童の発達と学習傾向について説明した。さらに授業実践の紹介，模擬授業(単元はメダカ，豆電球)を行った。「知っているのにメダカが描けない」，「リード線付きソケットがなくなっただけで，豆電球に明かりをつけることができない」この事実に気付かせたりする事例を紹介した。学生からは，「従来のメダカの見方が変わった。」「教材として豆電球の教育的な価値が分かった。」といった声が聞かれた。これにより深く幅の広い教材分析や事前の予備実験の重要性を十分に理解した学生が多数であった。 （対象者　大阪教育大学３回生および４回生を中心に約６０名）
	平成 26 年 4 月 ～27 年３月 【4 年目】	大阪教育大学教育学部（第二部）「理科教育法」において，「小学校理科授業の実際」をテーマとして，模擬授業や実践事例の紹介を通して，児童分析，教材分析，評価の観点とその方法について講義を行った。模擬授業では，リード線付きソケットを使わずに豆電球に明かりを付けることから，「見えない部分も含めて一続きの回路になっている」ことを理解させること，実践事例の紹介では，子どもの目線を動かすような課題設定や支援によって子どもの学びは深まることを指導した。学生からは，「目線が変わるだけで，ものの見方が変わることがわかった。」「自分たちが活動することで，学びがこれほど違うのかと驚きました。」などといった感想を得た。これらから，児童理解と教材分析をもとにした授業づくりの重要性を理解した学生が多数であったと言える。 （対象者　大阪教育大学３回生および４回生を中心に約６０名）
	平成 27 年 4 月 ～28 年３月 【5 年目】	大阪教育大学教育学部（第二部）「理科教育法」において，「小学校理科授業の実際」をテーマとして，模擬授業や実践事例の紹介を通して，児童分析，教材分析，評価の観点とその方法について講義を行った。模擬授業では，何も見ずにメダカを描かせることから，「知っているつもりを自覚させることが主体的な問題解決につながる」ことを理解させた。実践事例の紹介では，ゴムの働きの学習における子どもの目線の変化を根拠に，児童分析と評価の方法について言及した。学生からは，「教師の教材研究や児童理解がどれほど重要かを再確認できた。」「子どもに新しい視点を，教師がいかに与えるかが大切だと思った。」などの感想を得た。これらから，児童分析，教材分析，評価についての理解を深めた学生が多数であったと言える。 （対象者　大阪教育大学３回生および４回生を中心に約６０名）
	平成 28 年 4 月 ～29 年３月 【6 年目】	大阪教育大学教育学部（第二部）「理科教育法」において，「小学校理科授業の実際」をテーマとし，実践事例の紹介を通して，教材分析，指導方法の観点から講義を行った。実践事例の紹介では，３年生「植物の体のつくり」の学習でのノート記録や子どもの観察の様子を画像で紹介した。実際の板書を子どものノート記録や観察時の姿と関連付けながら，特に観察が中心となる「生命」の内容についての授業づくりについて言及した。また，観察の技能は一朝一夕に身につくものではなく，継続的な指導によって身につくことを，１名の児童の観察記録の変容を根拠に言及した。学生からは，「長期にわたる継続的な指導の重要性を実感した。」「植物の体のつくりの特徴を教えるのではなく，子どもが気付くことができるように観察のさせ方をどのように指導するかが大切であると思った。」「観察の指導を行う教師が教材について詳しく知っていることが重要であると考える。」などの感想を得た。これらから，教材分析，指導方法についての理解を深めた学生が多数であった

		と言える。 （対象者　大阪教育大学３回生および４回生を中心に約６０名）
（4）伊丹市立有岡小学校での指導講師	平成 24 年 4 月 ～25 年 3 月 【1 年目】	「自ら考え意欲的に学ぶ子をめざして～問題解決学習における言語活動の系統性を考える～」という研究テーマのもとで，理科，生活科の教科研究および提案授業についての指導を行った。計画的継続的に年間５回（提案授業の指導講評３回，夏期研修会での内容および２学期以降の授業指導案の指導１回，年度末の研究の成果と課題についての指導講評１回）の指導を行った。当時の有岡小学校の教員は「言語活動＝話し合い活動もしくはワークシートへの記録」と言語活動を間違って認識している傾向が強かったが,「体験活動の充実がなければ言語活動の充実はあり得ないこと」「言語活動は単元や本時の授業の目標ではなく，思考のツールである」ことを指導した。体験活動と言語活動の双方向的な学習効果について指導し，授業での言語活動が，価値ある体験活動に裏付けられたもの変わっていった。 （対象者：伊丹市立有岡小学校教員約４０名）
	平成 25 年 4 月 ～26 年 3 月 【2 年目】	「自ら考え意欲的に学ぶ子をめざして～体験活動を通した問題解決学習における言語活動の系統性を考える～」理科，生活科の教科研究および提案授業についての指導を行った。年間７回（提案授業の指導講評３回，年度初めの研究の方向性についての指導１回，夏期研修会での研究の内容および２学期以降の授業指導案の指導１回，伊丹市教育委員会指定の研究発表会での指導講評１回，年度末の研究の成果と課題についての指導講評１回）の指導を行った。指導の内容としては，子どもの思考が働くきっかけである体験活動の充実の必要性，授業後の具体の子どもの姿（発言，ノート記録など）を具体化してからその姿に変容させるための手立てを考えることの２点である。指導の結果として,「子どもの思考を働かせるきっかけとなる体験活動の充実を意識した授業提案が大幅に増えたこと」「形式的な言語活動が授業場面で減少したこと」「単元や本時の授業の目標を具体化して授業案を立てられる教員が増えたこと」が挙げられる。 （対象者　伊丹市立有岡小学校教員約４０名）
	平成 26 年 4 月 ～27 年 3 月 【3 年目】	「自ら考え意欲的に学ぶ子をめざして～自分の考えを持つための問題解決学習のあり方を考える～」という研究テーマのもとで指導を行った。年間５回（提案授業の指導講評３回，夏期研修会での研究の内容および２学期以降の授業指導案の指導１回，年度末の研究の成果と課題についての指導講評１回）の指導を行った。今年度の指導の内容は,「子ども一人一人の生活経験や学習経験によって，子どもの自然の事物・現象を見る目は決まっていること」「その決まっている目線をずらすことで，子どもの問題意識は生まれること」「思考の多様な表現方法の意味付けや価値付けを指導者が的確に行うことで，子どもの学習に対する意欲はさらに高まり，子どもが主体的な問題解決に取り組むことができるようになること」の３点である。指導の結果として,「児童の実態を詳細に記録した学習指導案が多くなったこと」「授業時の子どもの姿やノート記録をもとにした討議を行うことが定着したこと」「子どもの意見や疑問をもとに授業を進める場面が研究授業において多く見られるようになったこと」が挙げられる。 （研修対象者　伊丹市立有岡小学校教員約４０名）

	平成 27 年 4 月 ～28 年 3 月 【4 年目】	「自ら考え意欲的に学ぶ子をめざして～伝え合い，深め合う問題解決学習のあり方を考える～」という研究テーマのもとで指導を行った。年間５回（提案授業の指導講評３回，夏期研修会での研究の内容および２学期以降の授業指導案の指導１回，年度末の研究の成果と課題についての指導講評１回）の指導を行った。今年度の指導の内容は「子どもに伝え合い深め合わせるためには,『ホンネの問題意識』を持たせる必要があること」「子どもの意見や考えを授業のゴールに向かうように，指導者が意味付けたり価値付けたりする必要があること」の２点である。指導の結果として，「『ホンネの問題意識』を持たせるような事象の出会わせ方の工夫が多数見られたこと」「その工夫により子どもが自然と自らの伝え合うことができるようになったこと」が挙げられる。 （研修対象者　伊丹市立有岡小学校教員約４０名）
	平成 28 年 4 月 ～29 年 3 月 【5 年目】	「自ら考え意欲的に学ぶ子をめざして～伝え合い，深め合う問題解決学習のあり方を考える～」という研究テーマのもとで指導を行った。年間５回（年度初めの研究の方向性についての指導１回，提案授業の指導講評３回，夏期研修会での研究の内容および２学期以降の授業指導案の指導１回, 年度末の研究）の指導を行った。今年度は，年度末に控える伊丹市教育委員会指定の研究発表会に向けて,「子ども自らが形成的に自己評価を行える学びの環境づくりのあり方」「一連の問題解決的な子どもの学習を形成的な評価によって価値づける指導者の指導のあり方」の２点を主に指導した。指導の結果として，子どもが形成的な自己評価を行えるようなホワイトボードや掲示物を活用した授業を，年度末の研究発表会で実践することができた。 （研修対象者　伊丹市立有岡小学校教員約４０名）
（５）大阪府下の小学校教員の自由研究指導力向上のための研修の指導助言	平成 25 年 6 月 【1 年目】	大阪府教育センター主催の「自由研究指導力向上研修」で講話を行った。講話の内容は「自由研究の指導につながる理科の授業づくり」である。講話の目的は，日々の理科と自由研究を別物と考えるのではなく，日々の理科の授業を充実させることで，子どもが質の高い自由研究を行うことができるようにすることである。研修の結果として,「日々の授業で問題解決の道筋を子どもにたどらせることを繰り返すことが自由研究の質の向上につながることを参会者が実感したこと」が挙げられる。 （対象者　大阪府下小学校教員約３０名）
	平成 26 年 6 月 【2 年目】	大阪府教育センター主催の「自由研究指導力向上研修」で講話を行った。講話の内容は「自由研究の指導につながる理科の授業づくり」である。講話の目的は，日々の理科の授業内容を充実させることで，子どもが質の高い自由研究を行うことを論じた。研修後「子どもの素朴な見方や考え方の分析の重要性」「日々の授業で問題解決の道筋を子どもにたどらせることを繰り返すことが自由研究の質の向上につながること」の２つを参会者が実感した。 （研修対象者　大阪府下小学校教員約３０名）
（６）大阪教育大学ＣＳＴ養成プログラム実地講師	平成 25 年 8 月 【1 回目】	大阪教育大学科学教育センターが主催するＣＳＴ（コアサイエンスティーチャー）養成プログラムの学生プログラムである「理科教育法Ⅱ」で講義を行った。「子どもの科学的な見方や考え方を育む授業」をテーマとし，中学年の授業づくり，児童分析，教材分析についての講義，授業実践の紹介，模擬授業を行った。結果，理科に関わる知識だけでなく，具体の子どもの姿をイメージできるようになったと好評であった。 （対象者　ＣＳＴ養成プログラム受講学生約１０名）

	平成 26 年 3 月 【2 回目】	大阪教育大学科学教育センターが主催するＣＳＴ（コアサイエンスティーチャー）養成プログラムの学生プログラムである「理科教育法Ⅱ」で講義を行った。「子どもの科学的な見方や考え方を育む授業」をテーマとし，高学年の授業づくり，児童分析，教材分析についての講義，授業実践の紹介，模擬授業を行った。結果，理科内容に対する深い理解のみならず，学習者の姿をイメージし教え込みではない理科の授業の魅力を感じることができたりした学生が大勢であった。 （対象者　ＣＳＴ養成プログラム受講学生約１０名）
（７）大阪教育大学教育学部「教職入門」実地講師	平成 26 年 7 月	大阪教育大学教育学部「教職入門」において，「理科を教える教師としての資質」をテーマとして，理科教師として学ぶこと，教育実習生を指導して感じたことを話した。さらに理科の目標内容とそのための授業づくりおよび実践事例についての講義を行った。特に，授業づくりおよび実践例では，小学校理科で取り扱う教材を学生一人一人に使用させ模擬授業を体験させた。その体験をもとに，実際の授業での子どもの様子を写真で紹介したり，ノート記録をもとに評価基準や評価方法を紹介したりした。指導の結果，「現場経験のある先生の授業は参考になる」「もっと実際の授業を受けて学びたい」「子どもの思考を姿やノート記録から教師が的確に見取り評価することがどれだけ重要かを実感した」などの声が多数挙がった。 （受講者　大阪教育大学１回生約６０名）
（８）教育課題研修指導者海外派遣プログラム 事前研修	平成 26 年 8 月	和泉市立国府小学校教諭として，独立行政法人教員研修センター主催の平成２６年度教育課題研修指導者海外派遣プログラム事前研修に参加した。研修派遣先は，フィンランドである。派遣団の研究テーマは「ＰＩＳＡ型学力の育成について」である。その中でも「科学的リテラシーを育成するための理科授業のデザイン」の研修を進める班に所属することとなった。本事前研修では，フィンランドの教育システムや現在の課題のみならず，日本の教育システムと比較しつつ視察するべき理科教育の項目をまとめた。さらに，研修報告書のまとめ方などの講義を受けた。
（９）教育課題研修指導者海外派遣プログラム 海外研修参加 （独立行政法人教員研修センター主催）	平成 26 年 10 月	平成２６年１０月１４～２５日の間，和泉市立国府小学校教諭として，「ＰＩＳＡ型学力の育成について」をテーマに，フィンランドでの海外研修に参加した。現地での主な研修先は，国家教育局，ユバスキュラ大学附属学校園，ヘルシンキ大学附属学校園および教員養成実習校など，計１２カ所の機関および学校園である。研修先では，主に理科の授業見学と授業担当教員へのインタビューを行った。本研修で明らかになったことは，日本の学習指導要領は世界でも誇れるすばらしい物であること，フィンランドでのＩＣＴ活用の授業のレベルが高いこと，ＩＣＴに頼りすぎて本来授業で大切にすべき教材分析や板書，支援が十分に行われていないことなどが明らかになった。

（１０）伊丹市立有岡小学校初任者研修講師	平成 27 年 9 月	伊丹市立有岡小学校において,「理科室の環境整備と授業づくりの基本」というテーマで，平成 27 年度に採用された初任者に対して，理科室の環境整備，安全面の指導，授業づくりについて指導した。特に，安全面の指導では，中村重太の「自作 hazards drawing による児童・生徒の加熱実験操作に関する安全意識調査」で使用された図を用いて，安全指導が必要な部分を指摘させた。また，授業づくりの基本では，リード線付きのソケットを使用せずに豆電球に明かりを付ける活動から，絶縁体の価値，リード線付きソケットの構造と豆電球の構造の関連性について講義した。結果,「指導者として見えていないものへの安全意識も持つことが大切であることがわかった」「指導者が教材について深く理解することが子どもを引きつける授業に繋がることがわかった」などの感想を得られた。 （研修対象者　伊丹市立有岡小学校新任教員４名）
（１１）「保幼小接続期モデルカリキュラム（第２期）」検証のための幼稚園公開保育の指導講師	平成 28 年 2 月 【1 年目】	伊丹市立こうのいけ幼稚園において行われた「保幼小接続期モデルカリキュラム（第２期）」アプローチカリキュラムに基づいた公開保育及び研究討議における指導講話を行った。指導の内容としては,「子どもの多様な気付きを誘発したり，思いや願いに向けて子どもがすぐに働きかけたりすることができる環境構成の重要性」「子どもの行動や発言他者とつなげる支援の重要性」の２点である。これらを公開保育で見られた具体的な事例を根拠として述べた。指導の結果として,「生活科の学びは保育園や幼稚園のそれと繋がっており，保育から学んでいかなければならないと実感した小学校教員が増えたこと」「小学校での学びを見据えた保育が必要であると考えた保育園や幼稚園の教員が多数見られたこと」が挙げられる。 （対象者　伊丹市内の小学校教員，公立および私立幼稚園教職員，保育所職員，こども園職員　約７０名）
	平成 29 年 2 月 【2 年目】	伊丹市立中央公民館で行われた「保幼小接続期モデルカリキュラム（第３期）」アプローチカリキュラムに基づいた研修会において，指導講話を行った。指導の内容として，伊丹市立有岡小学校で行われた生活科の授業をビデオで流し，対象授業を根拠として，子どもの学びの環境構成のあり方について指導した。また，参会者にもグループ討議を行ってもらい，所属する校園の違いによる環境構成の考え方の違いから，保幼小の３校園の接続を念頭に置いた環境構成のあり方について考えてもらった。指導の結果として,「幼稚園や保育園の保育の実態を踏まえた生活科の授業づくりの重要性を実感した。」「小学校への接続や生活科と保育の系統性について改めて考えるいい機会となった。」という保育士や幼小教員の振り返りから，保幼小の接続期において，それぞれの校園での連携の重要性について気付いた保育士や教員が多数いたことが挙げられる。 （対象者　伊丹市内の小学校教員，公立および私立幼稚園教職員，保育所職員，こども園職員　約７０名）
（１２）八尾市立八尾小学校での指導講師	平成 28 年 4 月 ～29 年 3 月	「アクティブ・ラーニングの実現に向けて」というテーマをもとに指導を行った。年間５回（夏季研修での指導講話１回，研究授業の事前指導及び事後指導を３回，年度末の研究の成果と課題についての指導講話１回）の指導を，理科と算数科を中心に行った。指導の内容としては，子どもの思考が働くきっかけである課題設定の重要性，課題設定のための教師の教材分析と内容の系統性の分析の２点である。指導の結果として,「教材の特性や内容の系統性を踏まえた課題設定を授業のきっかけとして提示する授業が増加したこと」「展開部分での子どもへの形成的評価の必要性に気付く教員が出てきたこと」が挙げられる。 （対象者　八尾市立八尾小学校教員約４０名）

（１３）第４９回全国小学校理科研究大会大阪大会分科会指導講師	平成 28 年 11 月	堺市立浜寺石津小学校で行われた，第４９回全国小学校理科研究大会大阪大会の代４学年分科会において，研究授業３本と実践報告２本の指導講評を行った。指導の内容としては，季節による動植物のくらしでは，季節ごとの気温や日照時間の変化と動植物のくらしを関連付ける指導の在り方について述べた。また，空気や温度変化など目に見えないものを扱う単元では，それらをイメージ図等で可視化しながら学習を進めていくことの重要性について述べた。参会者からは，グラフ化やサーモグラフィ画像など，可視化することの効果を感じられる実践発表や指導であったので，大変勉強になった。」「地域ごとによる夏の気温の上がり方の違いもあり，大阪府内と他の地域での学習のさせ方の違いを知ることができ，今後の指導の参考になった。」などという意見が多数挙がった。 （対象者　第４９回全国小学校理科研究大会大阪大会 第４学年分科会 参会者 約４０名）
５　その他 ・大阪教育大学教育学部における非常勤講師としての教育実績 「初等理科授業研究」担当	平成 24 年 4 月 ～25 年 3 月	大阪教育大学教育学部の非常勤講師として担当の「初等理科授業研究」(専門科目，３年次配当，半期，選択２単位）において，小学校学習指導要領解説理科編の目標および内容についての講義，学習指導案の書き方についての講義，理科の教材研究と授業づくりの講義および実践事例の紹介，学生による模擬授業の指導案検討および授業討議会の実施とその指導を行い，それによって，教育実習を控えた学生に学習指導案の書き方，理科の授業づくり（児童分析，教材分析も含む）および授業分析の仕方を理解させる教育効果があった。
	平成 25 年 4 月 ～26 年 3 月	大阪教育大学教育学部の非常勤講師として担当の「初等理科授業研究」(専門科目，３年次配当，半期，選択２単位）において，理科の教材研究と授業づくりの講義および実習，学生による模擬授業の実施及び授業討議会での指導を行った。具体的には，授業で使用する教材を実際に作り，それを使った模擬授業をさせることで，教材の課題，板書や発問，支援などの課題を討議によって明らかにさせた。このような講義を通して，学生は教材分析の重要性や子どもに合った支援を行うことの重要性を理解することができた。

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　　要
１　資格，免許 小学校教諭専修免許状 中学校教諭１種免許状家庭 高等学校教諭１種免許状家庭	平成 29 年 3 月 平成 14 年 3 月 平成 14 年 3 月	平２８小専第１３号（大阪府教育委員会） 平１３中１第２４７４号（大阪府教育委員会） 平１３高１第２６３３号（大阪府教育委員会）
２　特許等 なし		
３　実務の経験を有する者について特記事項 (1) 大阪教育大学　科学教育プロジェクト実施委員	平成 23 年 4 月 ～24 年 3 月	大阪教育大学附属天王寺小学校のプロジェクト実施委員として，理科室および理科準備室の実験器具の充実や環境整備，二次元バーコードによる理科のノートデータの集積等に携わった。具体的には，理科室および理科準備室の充実や環境整備として，授業収録システムの導入，超音波洗浄機，大型乾燥機（実験器具用）の導入に携わった。また，子ども一人一人の二次元バーコードを作成し，それを専用スキャナーで読み取ることで，子ども全員の全てのノートデータを専用サーバーに蓄積することができた。

	平成 24 年 4 月 ～25 年 3 月	大阪教育大学附属天王寺小学校のプロジェクト実施委員として，理科室および理科準備室の実験器具の充実や環境整備に携わった。実験器具の充実では，高さ１．５ｍのアクリルパイプを１０本用意し，食塩の結晶１粒がどのように水に溶けるかを観察できるようにしたり，重い石と軽い砂の沈み具合の違いや地層のでき方を観察できるようにしたりした。環境整備としては，理科室への書画カメラ，スマートボードの導入およびその管理，子ども用いすの新調などに携わった。
(2) 大阪教育大学附属天王寺小学校　理科主任	平成 24 年 4 月 ～25 年 3 月	大阪教育大学附属天王寺小学校の理科主任として，理科教材の開発を行った。また授業でイメージを使った思考の場を取り入れて子どもの思考の可視化を図り，それをもとにした教師の支援や形成的評価を充実させることで，子どもの科学的な見方や考え方を育む授業研究および実践に取り組んだ。その結果，理科部全体で，単元の学習を通して育みたい子どもの見方や考え方を設定した上での授業計画や実践を行うことができるようになり，授業時の板書や支援が子どもの実態に即したものが増えた。子どもの理科学習に対する興味・関心を高めたり，科学的な思考・表現を深めることができた。理科主任として低学年生活科の気づきと 3 年生からの理科の科学的思考や知識理解の接続についてまとめることに貢献した。
	平成 25 年 4 月 ～26 年 3 月	大阪教育大学附属天王寺小学校の理科主任として，理科部の若手教員の育成に取り組んだ。具体的には，週１回の教科論に関わる文献の輪読会の開催，月１回の若手教員が行う授業見学とその事後指導を，年間を通じて行った。その結果，若手教員の文献を読む力がつくとともに，主任と部員が同じ方向性を持って日々の授業研究および実践を行うことができるようになった。学年の異なる理科担当者同士で学習指導要領を学び，目標や内容の系統性を確認し合った。さらには，本年度の研究発表会では，「いい提案授業であった。」「こんな理科の授業を見せてもらえるなら来年もぜひ来たい。」といった高い評価を受けた。
(3) 大阪教育大学附属天王寺小学校 第３学年主任	平成 25 年 4 月 ～26 年 3 月	学年の主任として，学年全員に「規律」「素直」「努力」の３つのキーワードを示して，学年全体経営，授業改善および生活指導にも取り組んだ。定期的に学年教材研究日を設ける等，教師としての資質を高める指導を行った。その結果，学年全体の子どもは落ち着いて授業を受けられるようになるとともに，保護者からの学校および学年教員団への信頼も大きくなった。
4　その他 なし		

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
１天王寺教育ノート第１２４号	共著	平成 19 年 9 月	大阪教育大学附属天王寺小学校教育後援会	学力向上のための授業改善の方向性と，そのための学習指導のあり方について各教科で述べた。 Ｂ５判　，全６０頁 編者：大阪教育大学附属天王寺小学校 共著者：藤永芳純，稲垣卓，八木義仁，石川隆之，松岡克典，森保，太田雄久，鈴木武司，清水大，多田和彦，西川理嘉，風間寛，青木志織，河野敬重，中野貴之，他５名 本人担当部分 「推理・推論する場の充実～４年『ものの温度とかさ』の実践から～」（ｐ２６－ｐ２９）の部分を単著 科学的な見方や考え方の育成の手立てとして，推理・推論する場の充実を授業場面に取り入れて授業改善を行ったことについて，レポートを行った。このレポートで明らかになったことは，これまでの学習経験や生活経験をもとに推理・推論することは，子どもの科学的な見方や考え方を育成するためには有効であること，また自然の事物・現象についての理解を深めることができることである。
２　天王寺教育ノート第１２７号	共著	平成 20 年 9 月	大阪教育大学附属天王寺小学校教育後援会	各教科等で，課題となることは何か，学校現場でどのような実践が求められているのかを各教科で具体的に述べた。 Ｂ５版　，全６４頁 編者：大阪教育大学附属天王寺小学校 共著者：岩﨑由紀夫，服部敬一，西川秀智，木戸安子，石川隆之，片山雅夫，森保，太田雄久，鈴木武司，小林佐知子，森元貴子，多田和彦，吉門妙子，康貴利，西川理嘉，他６名 本人担当部分 「これまでの観察・実験を見直す～４年『水の温度とかさ』の実践から～」（ｐ３４－ｐ３７）を単著 理科で「生きる力」を育むために，特に充実した観察・実験が重要であることを論じた。生きてはたらく科学的な知識を身に付けさせることに重点をおいて授業改善を行ったことをレポートした。明らかになったことは，水の体積変化と温度変化を同時に見とることにより，４年生の問題解決の目標である「関係付ける」という思考を子どもが身につけやすいことである。また学習によって得た知識を生活化・社会化する重要性である。
３　天王寺教育ノート第１２８号	共著	平成 20 年 12 月	大阪教育大学附属天王寺小学校教育後援会	新学習指導要領のもと教科等で，課題となることは何か，求められる実践について様々な視点から述べた。 Ｂ５判　，全６６頁 編者：大阪教育大学附属天王寺小学校 共著者：八木義仁，日髙敬造，藤倉憲一，山手隆文，石川隆之，太田雄久，多田和彦，今岡誠司，康貴利，風間寛，河野敬重，西川理嘉，青木志織，加藤徹也，他４名 本人担当部分 「つうしん『子どもの気付き』（ｐ６４－ｐ６５） 部分を単著 生活科のワークシートやあのねちょうの，子どもの言葉をもとに，子どもの気付きを意味付け価値付ける方法を紹介した。また，保護者が子どもの書いたワークシートやあのねちょうから，子どもの考えに共感したり，そのがんばりを評価したりすることが，子どもの観察力を養うことにつながることを述べた。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
4　天王寺教育ノート第１３０号	共著	平成 21 年 9 月	大阪教育大学附属天王寺小学校教育後援会	新学習指導要領を理解するために，現行の教育課程を振り返り，成果と課題をまとめたもの。 Ｂ５判　，全７２頁 編者：大阪教育大学附属天王寺小学校 共著者：岩﨑由紀夫，山手隆文，石川隆之，太田雄久，鈴木武司，康貴利，多田和彦，小林佐知子，森元貴子，川上康之，吉門妙子，風間寛，栫井大輔，西川理嘉，中野貴之，他２名 本人担当部分 「変わるものと変わらないもの」（p６－ｐ９）部分を単著 平成２０年の学習指導要領改訂に伴い，新旧学習指導要領の理科の目標および内容についての分析を行い，理科での不易と流行についての考察を行った。具体的には，これまで大切にされてきた基礎・基本の充実はもちろんのこと，科学的な思考力・表現力と実感を伴った理解に重点を置いて授業づくりを行うことの必要性を述べた。
5　天王寺教育ノート第１３１号	共著	平成 21 年 12 月	大阪教育大学附属天王寺小学校教育後援会	新学習指導要領を理解するために，現行の教育課程を振り返り，成果と課題をまとめた。 Ｂ５判，全６６頁 編者：大阪教育大学附属天王寺小学校 共著者：八木義仁，片山雅夫，森保，太田雄久，鈴木武司，小林佐知子，康貴利，川上康之，清水大，多田和彦，川端真由子，髙井大輔，河野敬重，中野貴之，他５名 本人担当部分 「アサガオの観察～アサガオを好きにさせることで気付きの質を高める～」（p４６－ｐ４９）部分を単著 理科での科学的な見方や考え方の育成のために，生活科の栽培活動の気付きの質を高める必要性を述べた。気付きの質を高めるためには対象との関わりを密にすること（栽培場所や一人一鉢など），観察カードの気付きを指導者が適切に意味付けたり価値付けたりすることが重要であるということを論じた。さらに生活科の気づきと理科の接続についても述べた。
6　天王寺教育ノート第１３３号	共著	平成 22 年 6 月	大阪教育大学附属天王寺小学校教育後援会	平成２２年２月実施の大阪教育大学附属天王寺小学校研究発表会の授業実践の分析集である Ｂ５判　，全８４頁 編者：大阪教育大学附属天王寺小学校 共著者：岩﨑由紀夫，山手隆文，石川隆之，片山雅夫，森保，太田雄久，鈴木武司，清水大，多田和彦，小林佐知子，森元貴子，髙井大輔，吉門妙子，風間寛，，他８名 本人担当部分 ５年理科「電磁石のはたらき」（p４４－ｐ４７）を単著 「電磁石のはたらき」の授業についての実践の振り返りとして分析と考察を行った。本授業で明らかになったことは，問題解決でのきっかけにあたる，自然の事物・現象への働きかけから仮説設定までのイメージ思考の充実が重要であること。観察・実験を通して行われる考察時に，イメージの価値付けや意味付けにつながるということである。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
7　天王寺教育ノート第１３５号	共著	平成 23 年２月	大阪教育大学附属天王寺小学 校教育後援会	各教科の特性をふまえつつ，子どもの発想や教材の本質にせまるための「板書・ノート指導」をまとめたもの。 Ｂ５判，全６６頁 編者：大阪教育大学附属天王寺小学校 共著者：岩﨑由紀夫，石川隆之，森保，太田雄久，清水大，小林佐知子，森元貴子，吉門妙子，川上康之，髙井大輔，三浦聡子，山本岳大，那賀典仁，栫井大輔 本人担当部分 「科学的な見方や考え方を養う授業～６年『てこの規則性』より～」(p３６－ｐ４１）を単著 本研究の目的は，「科学的」の根拠である「実証生」「再現 性」「客観性」を子どもが意識するような授業を実践することで，子どもの科学的な見方や考え方を育む効果的な指導手立てを明らかにすることである。明らかになったことは，手ごたえという個人差の大きい感覚をあらわすために，重さという客観的な数値を用いることの有効性を子どもに感じさせることである。
8　天王寺教育ノート第１３６号	共著	平成 23 年７月	大阪教育大学附属天王寺小学校教育後援会	平成２３年２月実施の大阪教育大学附属天王寺小学校研究発表会の授業実践分析集である。 Ｂ５判　，全８７頁 編者：大阪教育大学附属天王寺小学校 共著者：岩﨑由紀夫，八木義仁，山手隆文，藤倉憲一，稲葉正治，森保，太田雄久，鈴木武司，多田和彦，小林佐知子，髙井大輔，森元貴子，康貴利，吉門妙子，他８名 本人担当部分 ６年「発電と電気の利用」(p３２－ｐ３５）の部分単著 平成２３年２月に行われた大阪教育大学附属天王寺小学校研究発表会での授業についての実践報告および分析，考察を行った。本授業で明らかになったことは，子どもが主体的な問題解決に取り組むためには，子どもが「何とかして知りたい。」「絶対にこの課題の答えを知りたい。」というような気持ちをもつために，導入時の指導者の課題設定や発問が重要であると言うことである。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
９　天王寺教育ノート第１３７号	共著	平成 23 年 10 月	大阪教育大学附属天王寺小学校教育後援会	学習指導要領完全実施による，子どもの変容とどのように変えようとしているのかを各教科等で述べた。 Ｂ５判　，全８１頁 編者：大阪教育大学附属天王寺小学校 共著者：早草寛，山田良則，服部敬一，三島公徳，八木義仁，山手隆文，森保，太田雄久，鈴木武司，多田和彦，康貴利，森元貴子，風間寛，竹上由希子，粟生義紀，他 13 名 本人担当部分 「子どもが変わる，子どもを変える『科学的な表現力に着目して』」（p１４－p１５）の部分を単著 新学習指導要領で，理科で子どもをどのように変えるのか，また子どもの変容の過程を，授業実践を通して分析および考察を行った。評価の観点である「表現」が「科学的思考・表現」になったことで，子どもの思考を表現活動によって可視化することが授業で多く取り入れられるようになったこと，また子どもが思考の可視化によって，自分と他者の考えの比較を容易に行えるようになったことを述べた。
１０　天王寺教育ノート 第１３９号	共著	平成 24 年 7 月	大阪教育大学附属天王寺小学校教育後援会	平成２４年２月実施の大阪教育大学附属天王寺小学校研究発表会の授業実践の分析集である。 Ｂ５判，全７８頁 編者：大阪教育大学附属天王寺小学校 共著者：上東章，前田三男，八木義仁，大仲政憲，石川聡子，森保，太田雄久，鈴木武司，小林佐知子，多田和彦，松山雅子，髙井大輔，森元貴子，手取義宏，吉門妙子，柳本朋子，竹上由希子，石川聡子，小島律子，他１８名 本人担当部分 「創造性を育成する理科の授業　５年『もののとけ方』の部分（ｐ２６，p３１－ｐ３２）を単著 大阪教育大学附属天王寺小学校研究発表会での授業についての理科教科論と授業実践報告および分析，考察を行った。明らかになったことは，授業で子どもにイメージ図をかかせる活動を取り入れることで，子どもの感性の働きを指導者が適切に見取ることができるようになったことである。イメージ図の教育的効果を明らかにした。
１１　天王寺教育ノート 第１４０号	共著	平成 24 年 10 月	大阪教育大学附属天王寺小学校教育後援会	各教科・領域の視点から，言語活動の充実について述べた。 Ｂ５判　，全８１頁 編者：大阪教育大学附属天王寺小学校 共著者：八木義仁，山手隆文，森保，太田雄久，鈴木武司，小林佐知子，吉門妙子，森元貴子，川上康之，粟生義紀，松浦宏，木下清司，竹上由希子，三浦聡子，他 11 名 本人担当部分 「言語活動の充実『体験活動の充実が言語活動の充実につながる』」（p１０－ｐ１１）の部分を単著 理科で行われている言語活動のとらえ方とその充実の指導方法にいて，授業実践をもとに述べた，具体的には，言語活動とは子どもの思考が可視化されたものであること，言語活動は子どもの思考が働いてこそ行われること，子どもの思考を働かせるためには体験活動の充実が必須であることを述べた。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
１２　天王寺教育ノート 第１４１号	共著	平成 25 年 ２月	大阪教育大学附属天王寺小学校教育後援会	各教科・領域の視点から，言語活動の充実について述べた。 Ｂ５判　，全６８頁 編者：大阪教育大学附属天王寺小学校 共著者：八木義仁，安井義和，山手隆文，森保，太田雄久，鈴木武司，牧郁子，小林佐知子，吉門妙子，森元貴子，川上康之，栫井大輔，髙井大輔，粟生義紀，三浦聡子，竹上由希子，他９名 本人担当部分 「教材・教具の話『豆電球』」（p２６-ｐ２７）の部分を単著 ３年生等で取り扱う豆電球についての教材分析および授業実践例を紹介した。具体的には，なぜ３年生の電気の学習では豆電球を取り扱うのかということを，小学校理科の内容の系統性を具体的に示して述べた。そして豆電球の内側の導線のつながりを理解させることは小学校理科で電気の学習を進める導入段階としては重要であることを論じた。
１３　天王寺教育ノート 第１４２号	共著	平成 25 年 ７月	大阪教育大学附属天王寺小学校教育後援会	平成２４年２月実施の大阪教育大学附属天王寺小学校研究発表会の授業実践分析集である。 Ｂ５判　，全７６頁 編者：大阪教育大学附属天王寺小学校 共著者：萩原武士，大仲政憲，石川聡子，田中建司，山手隆文，森保，太田雄久，吉門妙子，髙井大輔，粟生義紀，松山雅子，手取義宏，柳本朋子，竹上由希子，三浦聡子，小島律子，佐藤賢司，入口豊，金光靖樹，山本岳大，他９名 本人担当部分 「子どもの科学的な見方や考え方を育む授業３年『ものと重さ』」（p１８－ｐ２０）部分を単著 大阪教育大学附属天王寺小学校研究発表会での授業についての理科教科論と授業実践報告および分析，考察を行った。明らかになったことは，体験活動を充実させることで子どもが言語活動の必要性を感じることである。子どもの素朴概念と授業の目標をもとに体験活動も言語活動も「何を」「どのように」の２つの視点を明らかにして設定することが大切であると述べた。体験に支えられた言語活動の重要性を論じた。
１４　天王寺教育ノート 第１４３号	共著	平成 25 年 12 月	大阪教育大学附属天王寺小学校教育後援会	思考力・表現力判断力の育成には，何を大切にし，どのように取り組むかを，各教科・領域の視点で述べた。 Ｂ５判　，全６７頁 編者：大阪教育大学附属天王寺小学校 共著者：矢谷健一，山手隆文，太田雄久，吉門妙子，髙井大輔，竹上由希子，井上由香里，田村真由子，山本岳大，吉森久展，栫井大輔，浜田美和，武智康文，角田浩太郎，清水貴之，他７名 本人担当部分 「思考力・表現力・判断力の育成とその評価『観察での思考力・表現力の育成とその評価』」（p８－ｐ９）の部分を単著 理科での思考力・表現力の育成について，観察という授業場面に焦点をあてて考察した。明らかになったことは，体験活動の充実と言語活動での指導者の目標に合わせた適切な意味付け，価値付けが思考力・表現力の育成につながるとことを論じた。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
１５　科学的な見方や考え方を育む理科授業	単著	平成 26 年 12 月	株式会社ＥＲＰ	小学校理科の目標である「科学的な見方や考え方を育む」ための理科授業づくりについて述べた。具体的な授業づくりの視点として，「児童理解」「教材分析」「単元目標の具体化」の３つをキーワードとして取り上げた。「児童理解」については，子どもの先行経験と内容の系統性をもとに，子どもが「知っていること」「知っているつもりになっていること」「全く知らないこと」の分析を行う「診断的評価」の重要性を述べた。「教材分析」は，教材がもつ単元目標に迫ることのできることのできる特質や価値を分析する目を養うことを述べた。さらに指導計画のなかに「形成的評価」をいかし，児童のつまずきを発見しそれを指導の改善に活かすことを主張した。「目標の具体化」については，「統合的な評価」を行うために目標達成に至った子どもの発言やノート記録を具体化することを述べた。３つのキーワードをもとにした小学校 3 年生「電気の通り道」，5 年生「天気の変化」など 6 年生までの授業実践例をのべた。 Ａ５判，全 55 頁
１６　人間教育を視点にした 教職入門	共著	平成 26 年 12 月	大学教育出版	人間教育に視点を当てて，教師を目指す学生に教育学の第一歩として，教育の目的や内容や学校組織について論じたものである。 Ｂ５判　２８０頁 編者：中田正浩 共著者：中田正浩，鎌田首治朗，松田智子，中田律子，金山憲正，瀧明知恵子，長居勘治， 本人担当部分（１０頁） 第 6 章第 2 節「小学校の学級経営」（Ｐ．172～Ｐ．180）の部分を単著 小学校は 6 歳から 12 歳までと，担当する児童の成長及び発達の幅が広い。その発達に応じた特徴を把握し，段階に応じた学級指導について，1 年から 6 年まで具体的に述べた。また，小学校学級担任の一日の仕事とその経営ポイントについて具体的に述べた。さらに，学校教育目標から学級教育目標を立てる手立てについて説明し，そのモデルとして 6 年生の例を示した。最後に PDCA サイクルで実践する学級経営の評価の重要性を論じた 本人担当部分（１０頁） 第 7 章第１節「小学校の生徒指導」（ｐ．212～ｐ．222）部分を単著 小学校という児童の発達年齢上，生徒指導は保護者及び地域の人々との連携なくしては，達成できない。また思春期の早期発達により，小学校高学年への対応は思春期初期の独特のプライドや自尊感情を傷つけないようにしつつも，毅然とした対応する必要性を述べた。小学校低学年・中学年・高学年の生徒指導のポイントを述べた。生徒指導の体罰・不登校・いじめなどが小学校でどのように解決するか方策を示唆した。また小１プロブレムや中１ギャップへ等への対応には接続する幼稚園・中学校との連携が，重要であることも述べた。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
(学術論文) １　ＰＩＳＡ型科学的リテラシーから見た授業改善案～４年生「ものの温度とかさの変化」の実践から～	単著	平成 20 年 4 月	日本初等理科教育研究会編 『初等理科教育第５２７号』 ｐ６４～６５	４年生「ものの温度とかさの変化」の単元授業実践をもとに，本単元におけるＰＩＳＡ型科学的リテラシーの育成を目指した授業改善案を提案した。具体的な提案として，仮説設定時に「ものの温まり方とその温度」の実験結果にすいて児童へのイメージ思考の導入を行った。さらに実験データのグラフ化や表への整理など情報を分類や分析させる。さらにそれらを考察したことを生活場面へ転用する力を養成することにより，子どもが自らの学びを納得し，理科教育の意義や有用感を実感することができることを具体的な授業展開とともに論じた。
２　４年“水の温度とかさ教材”にＰＩＳＡ型プラスのヒント	単著	平成 20 年 8 月	明治図書出版株式会社 『楽しい理科授業第５０４号』 ｐ４０～ｐ４１	４年生「ものの温度とかさの変化」の単元授業実践をもとに，本単元におけるＰＩＳＡ型科学的リテラシー育成のための教材提案をした。具体的には，ガラス管と棒温度計，もしくはガラス管とデジタル温度計をさしたゴム栓を提案した。提案の内容として，ものの体積変化と温度変化を同時に見させることで，水が持つ熱エネルギーの変化によって体積変化が起こっていることについて，児童が実感を伴って理解できることの重要性を述べた。これは理科教育を実生活との関連を一層深めることに繋がるっている。
３　子どもの気付きの質を高める授業～自然の不思議さや面白さを実感する学習活動を通して～	単著	平成 21 年 2 月	大阪教育大学附属天王寺小学校『研究紀要第３０巻』 Ｐ．１０３～Ｐ．１０６	学習活動の中で指導者が子どもの気付きを捉えるとともに的確な評価を行うことで，気付きの質を高めることを明らかにした。授業の構想段階において，活動から生まれる子どもの一面的な気付きと，次の活動や他の生活経験にもつながる多面的な気付きを設定する。そして，活動の中で，「比べる」「試す」「繰り返す」場を設定したり，気付きを表現したりする場を増やすことで，気付きの質が高まる（子どもの気付きが多面的になる）ことを提案した。本研究で明らかになったことは，指導者が気付きを表現する場を増やし，その気付きを目標に沿って適切に意味づけたり価値づけたりすることで，子どもは活動に没頭し，気付きの質がたかまることである。
４　創造性を育成する理科の授業	単著	平成 24 年 2 月	大阪教育大学附属天王寺小学校『研究紀要第３３巻』 Ｐ．８１～Ｐ．８４	子どもの素朴な見方や考え方を「創造性が育成された姿」に変容させるために，イメージ図などを使って自分の考えを表現する場，新しい科学概念を転用する場を設定する授業を提案した。「診断的評価」により児童の分析を行い，教師の教材分析その２つのズレをもと予想や仮説を立て，問題解決毎に子ども自身に結果を省察させた。そして，問題解決で明らかになったことが，生活化社会化され，別の現象を解釈する際にも有効であることに気付かせ子どもの見方や考え方を妥当性の高いものに変容することを明らかにした。本論を通して，子どもがイメージ図を使って自分の思考を可視化する言語活動を設定することで，指導者が的確な形成的評価が行えることを論じた。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
5　子どもの科学的な見方や考え方を育む授業	単著	平成25年2月	大阪教育大学附属天王寺小学校『研究紀要第３４巻』 Ｐ．７１～Ｐ．７６	授業において，子どもの経験が再構成されたり，子どもの感性が働いたりするような，挑戦的もしくは発見的な課題の設定について述べた。さらにそのために必要な体験活動と言語活動の充実という手立てを論じた。具体的には子ども自身に自分の立てた予想や仮説と結果を考察させ比べさせ，問題解決についての省察を行わせるとともに，他の児童の考え方にも触れさせることで，新たな気付きに導くことができる実践を述べた。適切な児童分析と教材分析をもとに行った挑戦的もしくは発見的な課題の設定により，子どもの問題意識は生まれること，それにより子どもの感性は問題解決に向けて適切に働くようになることを明らかにした。また適切な感性が働くことで，子どもが体験活動をもとに進んで考察や省察に取り組むようになることも述べた。
6　多面的に観察させることで，子どもの科学的な見方や考え方を育む	単著	平成 26 年 10 月	株式会社ＥＲＰ ｐ２４～ｐ２７　４頁	理科学習においては，子どものこれまでの先行経験によって，子どもの自然の事物・現象についての見方は一面的になる傾向が強い。そのためには単元導入前に「診断的評価」を行う必要がある。この子どもの見方は無意識的なものであるため，一面的な見方を変容するには，指導者の指導および支援が必要になる。また，その変容や指導の成果を確認するために，指導の全体計画に「形成的評価」を適宜設定しなければいけない。３年生の「植物の体のつくり」「昆虫の体のつくり」での子どもの観察記録の変容を例に挙げ，このような変容に至った指導者の指導や支援及び目標と評価について述べた。さらには，観察記録の変容を指導者が的確に価値付けたり意味付けたりすることで子どもにフィールドバックするなど，「指導と評価の一体化」を図ることにより，子どもの観察する視点を多面的・科学的なものに変容させることができることを述べた。さらに，評価を教師の指導改善に役立てる重要性についても論じた。
7　理科教育における人間教育とは	単著	平成 26 年 12 月	人間教育学研究 （人間教育学学会　第２号）	人間教育とは，子ども一人ひとりが個性的で主体的な存在として成長していくことを援助する教育である。この教育のための授業づくりの視点として，子どもの内面世界に注目し，授業実践を行うことである。理科教育で求められることは①主体的な問題解決を重視することである。特に小学校では子どもの発達段階を考慮して身近な自然現象を対象とし子どもが自ら問題を発見し，見通しをもった観察・実験などを通して心を動かしながら問題解決の能力を育てることである。②言語力を重視することである。観察やレポートを作成する際に，視点を明確にして事象の差異や共通点を捉えて報告することは，人間としての基本的思考力育成となる。さらに比較や分類あるいは関連付けて思考すると言った「生きる力」の基本となる考え方を理科教育は育てる。③自然体験・科学体験の充実である。子どものこれらの体験不足が，人間としての成長に少なからず影響を与えている。体験を通し科学的知識の定着を図るだけでなく，学習を基に自己の日常生活を振り返り，生活に活用することができれば学習の意義は深まる。上記の視点で，理科という教科を学ぶ意義と人間教育について，具体的な単元をあげながら目標や内容，そして評価について実践事例をもとにして論じた。具体的には，６年生「水溶液の性質」で「粒子の結合の変化」をとらえさせるために，単元を通して自分の考えを図化して学

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				習を進めさせた。考察の際に，図と比べさせ考察させることで，目には見えない「粒子の結合の変化」とらえることができるようにした。3年生「ゴムの働き」では，ゴムの伸びによって変化するゴムが持つエネルギーをとらえさせるため，決められた場所に車を止めるゲームを設定し，ゴムの伸びと車の進む距離の関係をドットシールでグラフ用紙に記録させた。完成した１次関数のグラフから「ゴムの伸びと車の進む距離にはきまりがある」ことに気付かせた。 ｐ83～ｐ90　　（８頁）
8　子どもの目の付けどころをもとにした小学校理科の授業づくりに関する一考察	単著	平成 27 年 9 月	奈良学園大学紀要　第３集	見る人が自然の事物・現象の何を見るかによって，その捉え方は変わる。また，同じ部分を異なる向きから見るかによっても，そのとらえ方は変わる。小学校理科の学習において，子どもの目の付け所を変えるような手立てを行うことは，自然の事物・現象を理解させたり見方を深めたりすることに非常に有効であると考えられる。このような想定の下で，小学３年生の「植物育ちとつくり」の実践事例をもとにして小学校理科の授業において子どもの目の付け所を変える手立てを行った。その手立てが子どもの自然の事物・現象の理解の深まりや見方の変容に効果的であったかを，子どものノート記録を根拠として論じた。授業実践を通して，指導者が観察の仕方を綿密に根気強く指導し続ける必要があると同時に，子どもの観察記録をもとに，その目の付け所を的確に意味付けたり価値付けたりする必要があることが明らかになった。また，このような指導を継続的に行うことで，子どもは自身の学び方のよさに気付くとともに，達成感を感じ，理科の学習に対しての自信を持つようになることが明らかになった。 ｐ169～ｐ176（８頁）
9　小学校理科教材「メダカ」の価値とその学習で獲得させたい「生命」についての見方や概念	単著	平成 27 年 12 月	人間教育学研究 （人間教育学学会　第３号）	前の指導要領の改訂によって，小学校理科の内容のうち，「動物の誕生」が選択から必修に変更された。その前の改訂時に選択になったのにもかかわらず，すぐに必修に戻されたことは，本内容には子どもに「生命」についての見方や考え方を養うための価値があると考えられる。このような考えのもとで，過去の教科書と現行の教科書の記述を分析することによって，「動物の誕生」の内容が持つ教育的な価値について論じた。教科書の分析から，子どもに獲得させたい「生命」についての見方や考え方は，メダカの雌雄によるひれの形の違いの持つ意味を理解し，受精卵の育ちを観察し，さらにはメダカを継続的に何世代にもわたって飼育するという体験を通して獲得される「生命の連続性」とであることが明らかとなった。また，「動物の誕生」の内容が持つ価値は，雌雄のひれの形の違いや受精卵の育ちという内容そのものが「生命の連続性」を意味していることであることが明らかとなった。 ｐ115～ｐ121（７頁）

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
１０　子どもの感性を育てる小学校理科授業の実践とその効果―小学校第５学年「電流の働き」の学習より―	単著	平成 29 年 3 月	平成28年度大阪教育大学大学院教育学研究科実践学校教育専攻　修士論文	これまでの日本の理科教育では，子どもが自然に働きかけたり自然から感じ取ったりすることは重要視されてきた。その根拠として，日置（2005）が論じている，我が国の理科教育のねらいは「子どもが素朴に自然を見つめて，自然に働きかけて，そこから得られた情報と自らの経験をもとにして，自分の考えをつくっていくこと」であること，「子ども独自の素朴な考え方をとりわけ重視しているので，理科の基盤には，子どもが自分で感じたことや考えたことが存在している」ことの２点を挙げることができる。また，平成 28 年 12 月の次期学習指導要領の改訂にむけての答申においても，育てたい子どもの姿として，子どもが豊かな感性を働かせながら新たな価値を創り出すことが明記されている。これらのことから，小学校理科で子どもの感性を育む授業を構想，実践することで，その効果を検証した。子どもの感性を育む授業を構想する前に，授業実践を行う子どものこれまでの自然体験と遊びの経験について，質問紙による調査を行った。その結果，授業実践を行う単元「電流の働き」の内容に関わる「乾電池を使ったおもちゃで遊んだことがある」「じ石を使ったおもちゃで遊んだことがある」の項目では，50%以上の子どもが「わりと経験がある」「かなり経験がある」ということが明らかとなった。一方で，「全く経験が無い」「あまり経験がない」子どもが，それぞれ 3.2%，9.7%いることも明らかとなった。質問紙調査の結果を受け，これまでの遊びの経験の差を埋めるために，導入部分で全員が電磁石で鉄を引きつけるという場を設定した。そして，その後の一連の問題解決において，森本（2013）による「対話的な授業を進めるための教師が取っている行動」により，指導者が子どもの表出させた感性を意味付けたり価値付けたりすることを繰り返し行うという授業を構想し，実践した。授業プロトコルの分析から，指導者が子どもの感性を意味付けたり価値付けたりすることを繰り返し行うことで，子どもは問題解決への見通しを持つことができるようになったり，実感を伴った理解へ至ることができるようになったりすることが明らかとなった。 この結果から，指導者が子どもの感性を意味付けたり価値付けたりすることで，子どもが「実感を伴った理解」に至るとともに，このような指導を繰り返し行うことで子どもの感性を育むことができるという知見が得られた。
（学会発表） １　創造性を育成する理科の授業	－	平成 23 年 3 月	第１回村山理科教育セミナー （アウィーナ大阪）	文部科学省初等中等教育局教科調査官村山哲哉氏を指導者とし，大阪市，堺市，大阪教育大学附属小学校教員を中心にした理科教育研究会である。「創造性を育成する理科の授業」をテーマに，授業づくりの考え方およびそれに基づいた実践発表を行った。内容は，課題解決の過程において，よりよく科学的な思考力を発揮させることで，子どもの素朴概念をより妥当性の高い科学概念へと変容させることである。それを６年生の「水溶液の性質」の単元で行った実践をもとに述べた。発表では，子どもの感性を働かせる場の設定の工夫，仮説設定時や考察時でのイメージ図などを使って自分の考えを表現させる場の設定の２つの手立てについて，実践をもとに述べた。 Ａ４，５ページ分の資料添付。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
２　附属学校における科学教育研究実践の効果とその評価	－	平成23年8月	日本理科教育学会第６１回全国大会 （於：島根大学）	ＰＩＳＡ２００６調査に採択されたアンケートをもとに，小学校４年生から高等学校２年生までの，科学に対する認識や興味関心を分析するとともに，附属学校の科学教育の取り組みがどのような影響をおよぼしているかを明らかにすることを目的とした研究である。明らかになったことは，学年が進むにつれて科学に対する認識や興味関心は低下すること，高等学校のＳＳＨカリキュラムによって高校生の科学への関心が高い傾向にあることである。 本人担当部分：小学校でのアンケート実施と分析補助 共同発表者：仲矢史雄，炭谷優穂，太田雄久，栗生義紀，小髙大輔，片桐昌直，畦浩二 発表抄録：Ｐ．４４１
３　子どもの感性を働かせる理科の授業	－	平成24年6月	「ＮＥＷ　ＥＤＵＣＡＴＩＯＮ　ＥＸＰＯ」 （大阪マーチャンダイズマート）	「新しい理科教育の考え方と独自の授業実践事例」をテーマに開催された。子どもが主体的な問題解決の中で，感性を適切に働かせることで，子どもの科学的な見方や考え方を育むための授業実践を発表した。 実践は，３年生の「風やゴムのはたらき」と６年生の「ものの燃え方」の単元を取り上げた。発表での重点は，見えない風やゴムの持つエネルギー，燃えたときの空気の成分の変化に子どもの目が向くような事象との出会わせ方，見えないものについての子どもの思考の可視化の方法，その思考の意味付けや価値付けの３つである。 担当部分：具体的な指導事例の提示 共同発表者　村山哲哉
４　汎用測定装置を用いた小学校理科の授業開発	－	平成24年8月	日本理科教育学会第６２回全国大会 （於：鹿児島大学）	汎用測定装置を取り入れた小学校理科の授業が，科学的リテラシーの高い人材育成と実感を伴った理解につながるかを明らかにすることを目的とした。明らかになったことは，汎用測定装置は子どもの目には見えないエネルギーの働き 方を数値の変化という視点で理解させることには有効であること，一方で，汎用測定装置を強調しすぎると小学校理科で大切な目の前の現象を観察したり関わったりすることに対して希薄になることである。 発表抄録：Ｐ．２９６
５　子どもの目のつけどころを意識した理科の授業	－	平成25年6月	「ＮＥＷ　ＥＤＵＣＡＴＩＯＮ　ＥＸＰＯ」 （大阪マーチャンダイズマート）	「小学校の理科教育に求められること」をテーマに開催された。個々の生活経験や学習経験によって，子どもの自然の事物・現象を見る目は決まっており，その目線をずらすことで，問題意識は生まれることについて授業実践をもとに述べた。実践例は，３年生「植物の体のつくり」である。発表では，チューリップの絵を描かせたときに，ほとんどの子どもは横向きに書くことを例に挙げ，観察する子どもの視線の向きを植物の上から，葉の裏側から，土の中へと変える手立てが，植物の体のつくりやその工夫についての実感を伴って理解につながることを述べた。 担当部分：具体的な指導事例の提示 共同発表者　村山哲哉

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
6　子どもの思考力を育成する理科の授業～子どもの目のつけ所を意識して～	－	平成25年8月	第３回村山理科教育セミナー（大阪市立苗代小学校）	文部科学省初等中等教育局教科調査官村山哲哉氏を指導者とし，大阪市，堺市，大阪教育大学附属小学校教員を中心にした理科教育の研究会である。発表内容は子どもの生活経験や学習経験の違いによって，子ども一人一人の自然の事物・現象への見方や感じ方が異なること。仮設設定や考察時に，この違いを指導者が適切に意味づけたり価値づけたりしながら対話的に授業を進めることで，科学的な思考力を育成するという考え方のもとで実践した具体例を述べた。 Ａ４，６ページ分の資料添付。
7　理科教育と命の教育	－	平成26年8月	第１回人間教育学会（奈良学園大学）	理科の「Ｂ生命」の内容を学習することを通して，小学校道徳の目標の解説にある「自他の生命の尊さ」を自覚できるきっかけを作ることを目的として実践した。実践した単元は，５年生「植物の発芽と成長」ある。明らかになったことは，理科の授業を通して「自然を愛する心情を育てる」こと，「実感を伴った理解を図る」ことができれば，「自他の生命の尊さ」を自覚できるきっかけを作ることができ，理科と道徳教育連携を図る授業の一案としての提案である。 Ａ４，４ページ分の資料添付。
8　理科教育と和文化	－	平成 26 年 11 月	第11回　和文化教育学会（東京都武蔵村山市）	天気の言い伝えである観天望気を，５年生「天気の変化」の単元で詳しく学習することを通して，天気を決定づける要因について実感を伴って理解させることを目的として実践した内容を発表した。具体的な内容としては，単元の終末に，教科書で紹介されている観天望気を調べる活動を設定し，観天望気を成立させる要因を探る活動，さらには，オリジナル観天望気を作り，その信頼性を調べる活動を設定した。そして，その活動を設定することで，子どもの天気の変化についての見方や考え方を科学的なものにしようとした授業実践の一案として提案した。 Ａ４，４ページ分の資料添付。
9　子どもの視点の分析をもとにした小学校理科の授業開発とその実践	－	平成28年3月	日本教師学学会第17回大会（奈良学園大学）	小学校理科授業において，この視点を動かすことで，子どもは「ホンネの問題意識」を持つことができ，主体的に問題解決の活動に取り組むようになると考え，授業実践を行った。実践の分析から，子どもの視点を動かす手立てを行うことは，子どもが実感を伴って理解すること，科学的な見方や考え方に変容することにつながることが明らかとなった。 Ａ４，４ページ分の資料添付。
１０　子どもの感性を育む支援のあり方－子どもの自然体験や遊びの経験をふまえて―	－	平成28年8月	日本理科教育学会第66回全国大会（信州大学）	子どもの自然体験や遊びの経験の違いによって，自然に対する感じ方や目の付け所に違いが出るとの仮説を立てた。そして，子ども一人一人に合った支援やコミュニケーションを含む協同的な場をデザインすることで，子どもの感性を育むことを目的とした授業を行い，その効果の検証を行った。質問紙調査の結果から，子どもの感性を育む支援を取り入れた授業を構想，実践した。授業実践から，子どもの自然に対する感じ方や目の付け所の違いを価値付けたり関連づけたりする指導者の支援が，子どもの感性を育むことにつながるという知見が得られた。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
１１　子どもの感性を活用した小学校理科授業の実践とその効果―小学校第５学年「電流の働き」の学習より―		平成 28 年 11 月	平成28年度日本理科教育学会近畿支部大会（大阪教育大学）	文部科学省（2011）は，感性・情緒に関する指導を行う際の留意点として，「①様々な事象に触れさせたり体験させたりするようにすること，②感性・情緒に関わる言葉を理解するようにすること，③事象や体験等について，より豊かな表現，より論理的で的確な表現を通して互いに交流するようにすること」の３点を挙げている。これらの３点は小学校理科の目標と重なるところがある。これらのことから，子どもの感性を小学校理科の授業に活用することは，言語活動の充実のみならず，小学校理科の目標達成に大きく関わる要素であると言える。本研究では，対話的な学び場で指導者が子どもの感性を活用する授業を計画，実践し，その指導の効果を検証した。 実践授業のプロトコルの分析から，指導者が対話的な学びの場で，子どもの感性を価値付けたり関連づけたりするとともに，問題解決に至るために必要な感性を表出させるための支援も行うことで，子どもが「実感を伴った理解」に至ることがわかった。

教　育　研　究　業　績　書

平成　29年　3月　31日

氏名　オチャンテ　村井　ロサ　メルセデス

研究分野	研究内容のキーワード
社会心理学・社会学	異文化理解、多文化共生、日系南米人、生徒指導

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例 1、講義用のプリント教材の活用	平成19年4月	学校法人聖母女学院高等学校でのスペイン語の授業「選択科目スペイン語」で実践した。 一クラス20人から30人の女子高校生を対象とした基礎的な文法と会話を中心とした授業。作成したプリントの練習問題を使い授業を行った。高校生が英語とは違った言語との出会いによって、他の文化や言語に興味を持つようになり、基礎的な会話を身に付けながら、視野を広げる手助けが出来た。
2、学生に伝わりやすいように実例を挙げての説明	平成23年10月	三重大学の非常勤講師の共通教育・総合教育科目「ことばと文化」講義で実践した。 ニューカマーの子どもたちの言語習得問題や、学校生活での実態について学んだ。学生がどのような職業、場面であっても、外国人労働者が抱える問題があることと、外国にルーツを持つ子どもたちの実態を伝えることが出来た。
3、ニューカマーの課題が、異文化理解の根底であることを身近に感じられるように工夫した	平成23年4月	愛知淑徳大学 非常勤講師で基幹科目（全学必修科目）「違いを共に生きる」での実践である。日本の多文化化社会の現状を知り、母国とは異なる日本の社会で生活しているニューカマーの人たちが抱えているさまざまな問題と、異国で生活するストレスを理解させる。講義を通して、受講生が文化や言葉の違いを越え、相手を受け入れ、互いに尊敬し合える者となるきっかけになることが出来た。
2　作成した教科書、教材 1、プリント教材の作成	平成19年4月	スペイン語の基礎的な文法と会話の授業で使う練習問題などのプリント教材を作成した。学生にとっても分かりやすく、興味を持たせるために、流行の話題などを練習問題のプリントに取り入れ、授業中、予習、復習のために使っていた。
2、どこでもだれでも日本語指導『日本語指導の基礎』DVD	平成22年8月	日本語指導の発想に基づく、外国人児童生徒への日本語による教科学習についての模擬授業の協力者として作成した。日本の義務教育現場で、教員が研修用に活用した。
3　教育上の能力に関する大学等の評価 1、伊賀市立友生小学校非常勤講師における学校長の評価	平成22年3月	学校長より、国際理解教育活動、外国人児童生徒の日本語指導と保護者の相談にあたって、学力の向上・学校と家庭の連携を深めたとの評価を受けた。
2、奈良県立法隆寺国際高等学校非常勤講師における学校長の評価	平成22年3月	奈良県立法隆寺国際高等学校校長より、外国籍児童生徒への熱心なサポートとロールモデルを果たしていることにあたっての評価を受けた。

3、愛知淑徳大学 非常勤講師における基幹科目運営委員会委員長の評価	平成23年4月	基幹科目運営委員会委員長より、学生にとって文化や言葉の違いを超え、相手を受け入れ、互いに尊敬し合える者となる、大変学び深い講義であったとの評価を受けた。
４　実務の経験を有する者についての特記事項 1、ESD授業デザインプロジェクト公開研究会　in 名古屋　日本国際理解教育学会「ESDと学校教育」実践研修会	平成 21 年 10 月	小学校外国語活動におけるESD・国際理解教育の視点をさぐる「実践から学ぶ国際理解教育･ＥＳＤの可能性」というセッションにおいて、日本で育った「在留外国人」としての生活や現在小学校で行っている授業などについて述べた。
2、首都大学東京国際交流　「日本の多言語コミュニティとの交流」講演会･ディスカッション	平成 24 年 10 月	外国人児童生徒巡回相談員として、かつて自身も外国人児童だったという経験を活かした支援活動についての講演をした。日本での外国人子女の教育に対して、指導の基本的な姿勢についての示唆を与えた。
５　その他 〈教育実績〉 1、愛知淑徳大学 非常勤講師　基幹科目（全学必修科目）「違いを共に生きる」講義	平成23年4月	基幹科目（全学必修科目）「違いを共に生きる」講義では、日本の多文化化社会の現状を知り、母国とは異なった環境の日本社会で生活しているニューカマーの人たちが抱えているさまざまな問題と、異国で生活するストレスを理解させる。講義を通して、受講生が文化や言葉の違いを超え、相手を受け入れ、互いに尊敬し合える者となるきっかけになった。
2、三重大学の非常勤講師　共通教育・総合教育科目「ことばと文化」講義	平成 23 年 10 月	共通教育・総合教育科目「ことばと文化」講義では、ニューカマーの子どもたちの言語習得問題や、学校生活での実態について学んだ。学生に、どのような職業、場面にあっても、外国人労働者が抱える問題があることと、外国にルーツを持つ子どもたちの実態を伝えた。

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項		
事項	年月日	概　　要
1　資格、免許 1、日本心理学会認定心理士認定証 2、修士（人文科学）	 平成17年4月 平成19年3月	 大学で心理学に関する標準的な基礎知識と基礎技術を修得していることを認定するものである。 人修第 224 号 修士（人文科学）、論文題目：「日系南米青少年の進路選択をめぐるジレンマ」
2　特許等 なし		
3　実務の経験を有する者について特記事項 1、NPO 伊賀の伝丸	平成19年4月～平成23年3月	様々な世代を対象に基礎的な会話を中心とした少人数による講座。 スペイン語圏へと長期出張する会社員への基礎的な会話と南米の文化についての講座。基礎的な会話を身に付けながら、文化を理解し、積極的に交流を深めようとするのをサポートした。 スペイン語・ポルトガル語翻訳・通訳、スペイン語講座担当していた。
2、伊賀市部室・伊賀市国際交流協会	平成19年4月～平成23年3月	毎月の伊賀市のスペイン語版情報紙作成した。日本語を母語としない市民に配布され、日常的な生活や文化の交流に役立つと評価を受けていた。
3、三重県教育委員会小中学校教育課外国人児童生徒巡回相談員	平成 23 年 4 月～平成 28 年 3 月	三重県内の公立小・中学校を訪問し、外国にルーツを持つ子どもたちへの教科などの教育支援及び日本語指導を行った。また、学校の多文化交流を深めるためには国際理解授業も企画し、互いの違いを受け入れ、多様な考え方を持つ子どもたちの育成を行う。
4　その他 なし		

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（著書） 1、『教育フォーラム51　いま求められる言語活動　読む力･書く力を重視して』	共著	平成25年2月	金子書房	学習指導要領が目指す学力を身につけるためには言葉の力が必要である。読む・書く力を 3 つの水準からとらえて理解する理論をはじめ、言語技術を中心とした教育実践などを紹介。 A5 判 全 166 頁 編者　梶田叡一 共著者名　梶田叡一、金澤孝夫、渡部久美子、伊崎一夫、阿部秀高、加藤明、湯峯裕、井上尚美、鎌田首治朗、高木章、蔵あすか、杉田郁代、オチャンテ　村井　ロサ　メルセデス 担当部分「不況後の日系南米の子どもたちの現状　親を取り巻く環境から学校生活まで」pp.145-155 を単著 本稿では小・中・高校のそれぞれの段階で、ニューカマーの子どもたちが抱えている諸問題について、筆者の修士論文のデータ、そして関わった子どもたちの体験から、公立学校または高等学校に通う外国人子どもたちの学校生活と現状について述べている。入国管理法が改正されてから、22 年経った今、不況を乗り越え、日本に留まった彼らを取り巻く問題、課題を再び考察し、現在の彼らの私生活について検討している。
2、『教育フォーラム52　新しい道徳教育のために　徳性をどう育てるか』	共著	平成25年8月	金子書房	人々の価値観が多様化している今でも、真の共生社会を実現していきたいという点においては、誰もが一致できるのではないだろうか。道徳教育をどうするかという長年の課題に対し、人としての高次の在り方を道徳的価値として示し、さまざまな学びに基本的な方向づけを与える考察と実践を紹介する。 A5 判 全 152 頁 編者　梶田叡一 共著者名　梶田叡一、渡邉規矩郎、押谷由夫、加藤　明、新川靖、小楠　徹、増井眞樹、 阿部秀高、鎌田首治朗、渡邉　満、蔵あすか、オチャンテ　村井　ロサ　メルセデス 担当部分「不況後にペルーに帰国した日系の子どもたちの現状」pp. 127-136 を単著 本稿では、日本の教育を受けて、リーマンショックの不況後にペルーへ帰国した子どもたち彼らの現状を知ると共に、日本の学校とは異なった学校生活への適応の問題について、ペルーのリマ市で最も日系人の子どもたちを受けいれているラ・ビクトリア日系人学校の訪問を通して、帰国している子どもたちの適応状況について検討する。筆者は 2008 年、ペルーの日系人学校調査で、ラ・ビクトリア日系人学校に調査訪問したことある（オチャンテ 2009　pp. 39～43.）が、製造業不況の前だったため、今とは異なっている点があると思われ、5 年前と比較しながら、現状を紹介していくこととする。また本稿では、日本の学校とペルーの学校で勉強したことある彼らのそうした体験を通して、日本に留まっている子どもたちの支援にヒントとなるものは何なのか考えることとする。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
3.『教育フォーラム 54 各教科等の学習を支える言語活動　言葉の力をどう用いるか』	共著	平成26年8月	金子書房	言葉の力を育てるためには、国語はもちろん、他の教科でも積極的な言語活動が必要となる。単元目標構造図や年間指導計画の活用などを考えながら、国語・算数・社会・理科・生活科・総合的な学習の時間などに特有の言語活動について、教師がどのような点に留意した指導を行えばよいのか、具体的な実践を踏まえて考察する。子どもに真の「賢さ」を育てるため、教師にできること・すべきことの提案。 A5 判 全 140 頁 編者　梶田叡一 共著者名　梶田叡一、加藤　明、金澤孝夫、阿部秀高、阿部秀高、櫻本明美、金山憲正、中田正浩、川俣　徹、松田智子、善野八千子、蔵あすか、オチャンテ　村井　ロサ　メルセデス 担当部分　「ニューカマーの子どもたちの義務教育後の進路選択と将来の展望」　pp. 118-126 を単著 　本稿ではそうしたこどもたち進路選択や高校入試の際に直面する問題を検討し、彼らの高校進学に対する思いと将来の展望に焦点を当てる。また進学先の選択の際、高校中途退学に繋がる要因が隠されていないかを分析する。 またこの研究を通して、進路指導をする際や高校への進学後どのようなサポートをしていけばよいかのヒントとなるものは何なのか考えることとする。
4.『教育フォーラム 58　主体的能動的な学習　アクティブ・ラーニングの精神を生かす』	共著	平成28年8月	金子書房	今、アクティブ・ラーニングの誤った解釈や実践が横行している感を免れない。教師に指示されたままの受身の授業参加ではなく、「子ども達だけで創る授業」を夢想するのでもない、今ここでの教育目標、授業での〈ねがい〉と〈ねらい〉を、教師も子どもも共通の認識として持ちながら、子どもが、主体的能動的にその場での学びに取り組んでいくためにはどうしたらよいか。様々な工夫、具体的実践的な提案をする。 A5 判 全 148 頁 編者　梶田叡一 共著者名　梶田叡一、鎌田首治朗、伊﨑一夫、吉田明史、角屋重樹、原田智仁、直山木綿子、菅井啓之、押谷由夫、瀧明知惠子、井上信子、オチャンテ　村井　ロサ　メルセデス 担当部分「日本の算数教材と絵本をペルーの学校に贈り続けて：現地の子どもたちの変化と学校の生徒指導への効果」pp.100-109 を単著 　筆者は 15 年間「大阪ラテンアメリカの会」“CALO”（カロ）という NGO（市民活動・非政府組織）グループにかかわり、日本の算数ドリルをスペイン語に訳して、現地で印刷して、年間 3 千冊以上、20 年以上に渡って 9 万人以上のペルーの子ども達に日本の教材、算数ドリルを配布している。また、算数ドリルの配布にあわせて 2001 年から、使われなくなった中古絵本にスペイン語の翻訳文を貼り付けて表紙にビニールカバーをつけ、ペルーのリマ市にある、生活困難地域の子ども達に配布している。筆者は現地の学校を定期的に訪問しながら、支援する側と受ける側の思いを観察してきた。本稿ではその成果と課題を挙げ、また算数ドリルや絵本を使って現地の学校で行われている生徒指導や、日本に対するイメージについて考察していく。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
5.『教育フォーラム 59 対話的な学び　アクティブラーニングの1つのキーポイント』	共著	平成29年2月	金子書房	主体的・対話的な深い学び、すなわちアクティブ・ラーニングを実現するには。実際の指導場面で役立つ工夫、具体的な提案をする。 A5 判 全 169 頁 編者　梶田叡一 共著者名　梶田叡一、湯峯　裕、鎌田首治朗、伊﨑一夫、金山憲正、菅井啓之・後藤紗貴、北　俊夫、赤堀博行、善野八千子、牧田秀昭、五百住満・中村　豊、石森広美、井上信子 オチャンテ　村井　ロサ　メルセデス 担当部分 「モザンビークの子ども達は今」pp. 136-146 を単著 本稿では、筆者が 2016 年 9 月 1 日から、9 月 15 日までの 2 週間に渡ってモザンビークで孤児院、幼稚園と小学校を視察した結果を述べるとともに、行く機会のあまりないアフリカ大陸の教育システム、子どもたちの今を筆者の体験を通して報告することとする。
（学術論文） 1.「ニューカマーの子どもたちが抱えている諸問題～学校生活のストレスから親の解雇まで～」	単著	平成21年3月	『日系ブラジル人・ペルー人の現在』三重大学人文学部多文化共存研究センター pp. 31-45	ここでは、学校生活で様々な問題を抱えているニューカマーの子どもたちについて検討した。小／中／高校別で個々に異なる諸問題や悩みについて、また現在問題になっている不況の影響について考えた。ニューカマーの子どもたちの教育問題を考えるには、親の抱えている問題や悩みも考えなければならない。そのため経済危機で職や住む場所を失っている外国人労働者問題を取り上げ、子どもたちに及ぼしている影響について筆者が関わったニューカマーの事例を基に取り上げた。
2、ロールモデルと協働　ニューカマーの生徒への教育支援	共著	平成21年6月	日本国際理解教育学会第 13 分科会第 19 回研究大会　研究発表抄録 pp. 143-144	ロールモデルとなる外国籍教員の存在は、ニューカマーの生徒にとってどのような意味を持つのか。また、高等学校において日本人教員と外国籍教員との協働は、どのような意味を持つかについて、奈良県立法隆寺国際高等学校での調査を実施。 共著者名　森川与志夫、オチャンテ　村井　ロサ　メルセデス 担当部分　　論文一部執筆
3.「ニューカマー」の生徒と「ロールモデル」の存在	共著	平成21年8月	第 30 回全国在日外国人教育研究集会広島大会資料集 pp. 58-61	高等学校に通うニューカマーの児童・生徒にかかわる教育課題と実態、そして彼らの教育支援においては、同じような経歴とマイノリティとしての体験を持つ「ロールモデル」の存在の重要性について論じた。 共著者名　森川与志夫、オチャンテ　村井　ロサ　メルセデス、 担当部分　論文一部執筆
4.「日系南米青少年の進路選択をめぐるジレンマ」	単著	平成22年5月	東北アジア文化学会第 20 次国際学術大会　第6分科　地域・社会 資料集 pp. 182-188	日系南米青少年の進路選択をめぐるジレンマについて、9 人の対象者の進路選択を調査分析した結果を発表した。日系南米青少年が直面してきた問題には共通性が見られ、親は不安定な立場にあり、子どもたちはその影響を受けるが、親はそんな状況でも子どもたちを進学へと励まし動機付けている。また学力の問題、経済的な面から来るジレンマや問題等が挙げられる。大学生の就職活動への不安、アイデンティティについての悩み、そして将来への希望を明るくかたっていることについても分析している。彼らは過去を振り返り、様々な経験を前向きに捉え、将来も向上を目指して努力し続けている。 担当部分　論文執筆

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
5、「外国人高校生を応援する仕組みづくりへの挑戦 ー NPO 法人Mixed Roots x ユース x ネット★ こんぺいとうの実践報告ー」	共著	平成26年2月	ボランティア学研究 Vol.14 pp.45-56	共著者名　渡辺 マルセロ、オチャンテ 村井 ロサ メルセデス、オチャンテ 村井 カルロス、小島 祥美 2014 担当部分　　論文一部執筆 本論は 、外国にルーツをもつ若者が設立した NPO の活動実践から後輩を応援することの意義を考察しながら、同じ境遇で育った先輩が後輩を応援する仕組みづくりのあり方を提案する。未だ外国人が置かれた教育環境が改善されず進学や進路で悩む外国人高校生が多い現状において、後輩との対話の場や難を乗り越える数々のヒントを先輩として提供している。
6、「公立の小-中学校の不登校-不適応における生徒指導の課題ー外国人児童生徒の困難な体験からの考察ー」	単著	平成28年9月	奈良学園大学紀要第 5 集 pp.27-35	外国のルーツを持つ子どもたち、いわゆる移民の第二世代が日本の公立の小・中学校に通い、その数が年々増える傾向にある。乳幼児で来日している場合や、日本生まれの子ども達が多いが、各家庭では、親の話している言語や文化の下で育っていくため、日本の公立学校に通うことになると適応の問題や言葉の問題が現れる。公立学校に通い、問題なく学校生活を送り、高校や大学へと進学しているケースが徐々に増えているが、未だに学校においてなんらかの困難を体験している者は少なくない。本稿ではそうしたケースを考察しながら、不登校や、不適応に繋がる要因を調べ、その原因を分析する。また他の研究で関わった成功の事例と照らし合わせ、生徒指導の課題について考える。 A4 判　229 ページ　担当部分　論文執筆
7、「高等学校中途退学の現状と生徒指導の課題―外国人児童生徒における体験からの考察―」	単著	平成29年3月	人間教育学研究第 4 号	本稿では、高校へ進学できたにも関わらず、中途退学などのドロップアウトをしたケースを扱いながら、 退学に 繋がる要因は何であるか、またドロップアウトに至った原因は何であるかをインタビューやフィールドワークを通して分析する。またドロップアウトを防ぐための必要な支援やサポート、学校で行われる生徒指導の在り方と課題について考えることとする。 A4 判　177 ページ　担当部分　論文執筆
＜教会での活動＞ 1、失業者支援への取り組み　～上野教会からの事例～	共著	平成 21 年 11月	京都教区時報　2009 年 11　月　号 No.384	リーマンショック後の経済危機で失業した外国人労働者等への上野カトリック教会の支援の取り組みを報告。 責任者　村上透磨 担当部分　執筆・データ収集　p.4
2、XXVI Jornada Mundial de la Juventud Madrid 2011 Arraigadosy edificados en Cristo, Firmes en la Fe (Col 2,7)	共著	平成24年9月	Alégrate María Boletín Católico No.6　2012	2011 年 8 月に行われた、第 24 回　世界青年の日マドリッド大会、「キリストに根を下ろして造り上げられ、信仰をしっかり守りなさい」（コロサイ 2,7）の報告である。 責任者　Fabiana Reartes 担当部分　執筆　pp.9-10

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
〈研究報告書〉 1、「外国出身生徒の進路－筆者の体験から－」『地域のグローバル化に即応した学生の養成－「チャンス事業」の概要と成果－』	共著	平成20年3月	平成 20 年度三重大学教育 GP プログラム成果 報告書､2008 年	筆者の体験をもとにしながら、外国出身生徒の進路について考える。筆者と同じように来日する前に親と別れて生活をしたことのあるケース、そして来日してからの状況。日本で歩んだ道について述べている。 A4 判 全 84 頁 共著者： 別府直苗　江成幸、林朝子、谷垣映子、オチャンテ　ロサ 担当部分　執筆　１．来日する前の状況、２．来日してからの状況、３．アイデンティティの悩み、４．進学の希望を決めた理由、５．進学のために必要な支援　pp.68-75
2、『地域のグローバル化に即応した学生の養成－「チャンス事業」の概要と成果－』	共著	平成21年3月	平成２１年度三重大学教育 GP プログラム成果報告書、2009 年	2009 年 2 月 5 日、三重大学人文学部で行われた、平成 20 年度三重大学教育 GP「チャンス事業」検討会　外国人児童生徒との学習体験から感じた報告のまとめ。 A4 判 全 112 頁 共著者：江成幸、林朝子、別府直苗、森正人、オチャンテ　ロサ 担当部分　執筆　１．学習支援ボランティアを体験した学生、２．母語を話すスタッフの重要性、３．安心感を与える学習支援教室、４．拠点校方式について、５．経済的不況と外国人児童生徒への影響、６．まとめ　pp.65-72
〈学会発表〉 1、「日系南米社会における宗教の実態とコミュニティ形成への影響－三重県伊賀市の調査を元に」	共同	平成 25 年 2 月	国際ボランティア学会第 14 回大会分科会②（名古屋市、愛知淑徳大学　）	部会Ｃにおいて、三重県伊賀市での宗教団体やコミュニティへの調査を元にしながら、日系南米社会における宗教の実態とコミュニティ形成への影響についての発表。 共同者名オチャンテ　カルロス、　オチャンテ　村井　ロサ　メルセデス 担当部分　共同で発表
2､「日本におけるエスニック集団のコミュニティ形成と宗教の関係性 ― 三重県伊賀市に住む日系南米人の事例―」	共同	平成 25 年 6 月 30 日	日本移民学会 第 23 回年次大会Ｃ会場（武蔵大学 江古田キャンパス内）	国際性の強い町である三重県伊賀市での調査をもとにしながら、エスニック集団のコミュニティ形成と宗教の関係性 について発表する。伊賀市におけるブラジル人コミュニティとペルー人コミュニティの実態を調べ、それぞれのコミュニティの実態に宗教がどのように関わっているか。コミュニティの団結力問題に宗教がどのように影響をしているのか発表する。これによってキリスト系エスニック集団の特性・異質を理解すると共に、多文化共生の一助になればと考える。 共同者名オチャンテ　カルロス、　オチャンテ　村井　ロサ　メルセデス 担当部分　共同で発表

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
3、「義務教育終了後の進路選択をめぐる教育課題 ―外国人児童・生徒の体験からの考察―」	個人	平成26年3月8日	日本教師学学会第15回自由研究発表　＜分科会D＞　会場：中講義室6（環太平洋大学 第1キャンパス PHILOSOPHIA内）	本発表では、彼らが進路選択という人生の岐路に立つとき、どのような問題に直面するのか、中学校卒業後の進路に向けた進路指導の体験から彼らが抱えている悩みや葛藤について考え、進路選択にどのような要因が影響しているのかなどの、進路をめぐる教育課題を考察する。さらに、小学校の進路指導についても言及する。 オチャンテ　村井　ロサ　メルセデス
4、「ニューカマーの子どもたちの進路選択と将来の展望 ーブラジル・ペルーにルーツを持つ子どもたちの事例調査からー」	個人	平成26年6月7日	異文化間教育学会 第35回大会個人発表第⑪会場（京都市、同志社女子大学　今出川キャンパス内）	本発表では、ニューカマーの子どもたちの進路選択の際に直面する問題、彼らの進路選択にどのような要因が影響するのか、小中学校での進路指導・高校への進学後どのようなサポートをしていけば良いかについて考察している。 オチャンテ　村井　ロサ　メルセデス
5、「ニューカマーの子どもたちのアイデンティティ形成時における宗教の影響について ー三重県伊賀市に住むニューカマーの事例ー」	共同	平成26年6月8日	異文化間教育学会第35回大会共同発表　第④会場　（京都市、同志社女子大学　今出川キャンパス内）	共同者名オチャンテ　カルロス、　オチャンテ　村井　ロサ　メルセデス 担当部分　共同で発表 本発表ではブラジル人とペルー人のルーツを持つ子どもたちのアイデンティティ形成に宗教がどのような影響を与えるかを扱う。アイデンティティ形成には母国文化としての宗教（特にキリスト教）が要素として欠かせないと思われる。本発表では三重県伊賀市に住むブラジル人やペルー人を対象に、アンケート調査と聞き取り調査の結果を明らかにする。彼らのアイデンティティ形成の特徴や過程を考察しながら、日本におけるエスニック集団の異文化理解に貢献したい。
6、「公立学校における不登校・中退における生徒指導の課題 ー外国人児童生徒の挫折体験からの考察ー」	個人	平成28年3月5日	日本教師学学会第17回自由研究発表① ＜分科会E＞ 会場:5215教室　（奈良学園大学三郷キャンパス内）	本発表ではいくつかの事例を挙げながら、不登校や高校中途退学に繋がる要因は何なのかを調べ、退学に至った原因、影響を検討する。彼らの家庭や学校での生活環境などの要因を探って、今後の生徒指導の課題やどのような配慮やサポートが必要になってくるのか考えていく。 オチャンテ　村井　ロサ　メルセデス

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
7、「ニューカマーの子どもたちの不登校・不適応―求められる支援と生徒指導－」	個人	平成29年2月11日	日本人間教育学会第2回大会　個人発表　第3会場（奈良学園大学　三郷キャンパス内）	現在223万人以上の外国人が日本に在留している。それに伴って学齢期の子どもたちも増え、文化の違いによる不適応の問題や、言葉の壁からくる様々な問題を抱えながら公立学校に通っている。高校に進学をし、その後大学等に進むなど成功している例も少しずつ増えているものの、不就学になっているケース、また学校を休みがちになったり、不登校や退学を体験している子どもたちも少なくない。 本稿では、そうした不適応、不登校を体験している若者にインタビューをし、不登校、不適応に繋がる要因は何であるか、また不登校や不適応に至った原因、影響について考えることとする。
8、「ニューカマーの若者たちの高等学校中途退学－求められる支援と生徒指導－」	個人	平成29年3月5日	日本教師学学会第18回自由研究発表②　＜分科会H＞会場：（早稲田大学 所沢キャンパス内）	本発表では、 高校へ進学できたにも関わらず、中途退学などのドロップアウトをしたケースを扱いながら、それに至った原因や要因は何であるかを検討する。またドロップアウトを防ぐために必要な支援やサポート、学校で行われる生徒指導の在り方と課題について考えることとする。
〈講演〉 1、「当事者として考える外国人児童生徒への支援とは何か」	単独	平成29年1月	平成２８年度在日外国人児童生徒に関する指導についての教育講演会（奈良県立教育研究所大講座室）	日本の多文化化社会の現状や公立学校に通う外国人児童生徒の学校生活の様子、文化や宗教観、家庭環境等の違いから生じる課題、必要とされる配慮や支援の在り方などについて、具体例を示しながら講演を行った。奈良県立の幼稚園、小学校、中学校、高等学校、中等教育学校及び特別支援学校の教職員、約180名の参加者があった。
〈セミナー発表〉 1、第二部　公開討論会「この国で育って」	共同	平成20年3月	地域の国際化セミナー2008 名古屋国際センター交流協力課民間交流係（名古屋市、名古屋国際センター）	「多文化社会への壁を越えて」をテーマにした公開討論会である。外国人にとって「壁とはなんだったのか、どのように克服したのか、必要だった支援など、日本育ちの若い外国人市民の体験をもとに、共生について議論した。 共同者名　イー　アルンヌリ、大島チアゴ、オチャンテ　村井ロサ　メルセデス、カルデニャス　イヴァン、曳地嵩宏、吉原ファビオ、イシ・アンジェロ 担当部分　第二部での意見発表
2、平和研究セミナーでの報告	共同	平成21年3月	2009年平和セミナー（名古屋市「ウィルあいち」セミナールーム６）	「日系南米青少年の進路選択をめぐるジレンマ」について発表。 共同者名　児玉克哉、竹峰誠一郎、佐藤史郎、根本雅也、オチャンテ　カルロス、オチャンテ　ロサ、等 担当部分　発表

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
3、多文化共生理解講演会　第 2 部パネルディスカッション	共同	平成 27 年 6 月 28 日	多文化共生理解講演会（三重県伊賀市　ハイトピア伊賀５Ｆ多目的大研修室）	「違いを楽しみ、力に変える～多文化共生のまちづくり～」をテーマにしたパネルディスカッションを行った。 共同者名　船見和秀氏、オチャンテ　ロサ、等 担当部分　発表

教　育　研　究　業　績　書

平成 29 年 3 月 31 日

氏名　西江　なお子

研究分野	研究内容のキーワード
教育学	家庭科教育、食育、授業づくりの方法技術

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例 ・児童の授業後の振り返りを、フィードバックさせることで形成的な評価を活用する実践	平成 16 年 4 月～21 年 3 月	全ての授業後に児童の振り返りを、次時の初めに学級全体にフィードバックさせ、個々の学びの内容の違いと共通点を認識させ、どのような学び方が重要であるかを、児童に自覚さえる取り組みを行った。授業の知識量としての差は、他のクラスと比べて顕著には現れなかったが、児童の学習に対する意欲が高まり、クラスへの所属意識までも高まりを見せた。 （大阪府池田市立石橋南小学校での実践）
・食品表示等を活用した消費者教育の実践	平成 22 年 2 月	家庭科と総合的な学習の時間で食の安全が問われる現状を踏まえ、食品表示を見て商品を購入することの意義と必要性を考え、実践力を育む授業法の検証を行った。商品広告を考え、売り手側の心理に迫り、宣伝広告と食品表示の違いに気付くことから、商品の本質を知る意義を考えさせた。児童が家庭で家族の安心・安全を守るために食材選定のポイントを提案し、実際に買い物場面で活用していると保護者から実生活化の報告を受けた。 （大阪教育大学池田附属小学校の実践）
・高光源特殊ライトを用いた快適な住まいの指導法の実践	平成 23 年 2 月	特別活動と総合的な学習の授業として、日常の清掃活動への取り組みの問題点を振り返らせ、清掃の意義を実感させるための手段として、「見える化」をはかって授業を行った。一見汚れがないと思われる場所を、高光源特殊ライトを用いて照らし、拭いきれていないごみや汚れを見せ、自分たちの清掃態度を根底から考えさせる実践研究である。この活動により、清掃の必要性を実感した児童はその後の清掃活動への取り組みが大きく変容すると同時に、家庭での実践へとつながった。 （大阪教育大学附属池田小学校の実践）
・快適な環境を実感させる、問題解決学習の実践	平成 24 年 2 月	家庭科において、まわりを取り巻く環境に興味・関心を抱き、課題点を見出し、改善するための方策を考え、自分に出来ることをみつけ実践する力を養うことをねらいとした実践である。授業では「快適」の定義を児童個々にイメージさせ定義づけし、めざす快適像を確立させる。そしてそれにむかうためにどのようなアプローチを踏めば実現可能となるのかを検証させ、実践へとつないだ。この活動により、自分を取り巻く周囲の環境に目を向け、より快適に過ごす手立てをうつ児童が増え、家庭での実践へとつながった。 （大阪教育大学附属池田小学校の実践）

・節電の効果とその意義を、実感を伴った理解へと導く「見える化」を図る実践	平成 25 年 2 月	家庭科と総合的な学習の実践である。東日本大震災後、節電という言葉を聞くが、継続するのは難しい。節電の意義を理解し実践する児童を育てることは重要である。そこで、課題を見出し、節電の方策を考え、自分にできることをする力を養う授業を行った。労力と電気の関係を実感するため、自転車発電機で実際に発電させる。また待機電力を測定し、その電力を年間に換算してどれほどの節電に繋がるのかをデータ化する。こうした実際に体を動かしたり数値化したりするなど様々な「見える化」のアプローチを経て、節電を実感させた。児童は校内の無駄な電気の消灯などに積極的になった。 （大阪教育大学附属池田小学校の実践）
・住環境の汚れに対し、意識下から意識化へと児童を変容させる指導法の実践	平成 26 年 2 月	家庭科の実践である。ドアノブや電気スイッチなど不特定多数の人が触れる場所や、一見きれいに見える壁や机まわりなどにも、拭いきれていない汚れが付着していることを光線の特殊なブラックライトを用いて照射し「見える化」する。そしてそれが人体に与える影響を考え、「きれいなはず」という意識を覆しどうすれば見えない汚れを取り除き、気持ちの良い環境づくりが実現するかを考えさせた。実際に自分の身近な物を雑巾等で拭い汚れを実感させることで、その後の清掃態度が激変すると同時に家庭でも同じような報告を保護者から受け、家庭での実践に繋がった。 （大阪教育大学附属池田小学校の実践）
・生活実践力向上を目指した小学校家庭科指導法の実践	平成 26 年 5 月～平成 27 年 3 月	小学校第５、６学年生を対象に、児童・教員の最も関心の低い分野である清掃学習において、本授業モデルによる実践を通して生活実践力がいかに高まるかを検証・考察した。その際、授業モデルの有効性を検証する目的で診断的評価・総括的評価を行い、児童の意識、態度の変容を調査した。また、家庭科の教科目標に対する評価も行った。教科の目標に対する評価においては４観点全てにおいて４段階評価の上位４、３が 85%以上を占め、概ね達成している結果となった。授業のまとめとして授業対象学年以外の児童に清掃の必要性のプレゼンを 5・6 年生が行い、学校全体で清掃の取り組みが活発となり活動が定着し成果を得ることができた。 （池田市立石橋南小学校の実践）
２　作成した教科書・教材 ・学級通信の役割と留意点 （大阪教育大学池田附属小学校家庭科部会発行）	平成 21 年 4 月	学級通信を出す意義と、掲載する内容について述べた。児童の状況を知らせるだけでなく、学習の狙いや学級担任の方針を保護者等に伝え、地域や家庭と連携して児童を育成する懸け橋となる、教育的な効果を狙うものであることを記載した。そして読み手の視点や挿絵の効果的な使用方法とか、技術的な面についても示唆した。大阪教育大学から受け入れた実習生を対象に学級運営について指導する際に使用し、具体的であると好評であった。 A4 判　8 頁
・教育実習生指導のてびき （大阪教育大学附属池田小学校発行） 【再掲】	平成 22 年 4 月	大阪教育大学の学生向けに教育実習時に必要な教員としての資質能力や授業づくりのポイント、指導案の書き方などを家庭科の視点から具体的に示した。特に家庭科の指導案作成の際に注意すべき点として、家庭科で求められている児童に育ませたい力とは何かを具体的事象を交えて提示するとともに、児童の実態把握の仕方や体験活動の効果的な取り入れ方、児童の興味・関心の向上を図り学習意欲を喚起する手立ての在り方を解説した。大阪教育大学の学生からは、指導案の書き方は元より実習への心構

		えとして把握しておくべき重要点が網羅されており、活用しやすいと好評を得ている。
・小学生夏休みの家庭学習用教材編集（文溪堂） 【再掲】	平成 22 年 4 月	事前に児童の実態調査を行い、長期休暇に行うべき学習課題を明確化し、各教科ごとの重要項目を簡潔にまとめ、児童のつまずきやすい内容を吟味し、問題作成し教材会社文渓堂に提示した。小学校 1 年～6 年までの全学年の学習用教材の企画と編集に関わった。全国の小学校で、使用されて使いやすいと好評を得ている。 A4 判　26 頁
・消費者教育のてびき （大阪教育大学附属池田小学校家庭科部会発行）	平成 22 年 5 月	消費者教育の授業を、生活科・社会科・家庭科の視点から分析し、それぞれの特徴と学校現場で実際に行われている学習内容を記載した。各教科間で学習内容が重複する部分や児童につけたい力を整理することにより、発達段階に応じた消費者教育の在り方を具体的に示した。大阪教育大学から受け入れた実習生を対象に家庭科における消費者教育について指導する際に使用し、具体的であると好評であった。 A4 判　8 頁
・家庭科で行う清掃のてびき （大阪教育大学附属池田小学校家庭科部会発行）	平成 23 年 6 月	家庭科の清掃の授業において、児童自らが清掃の意義や具体的な清掃方法について学び考え、意見交流を行った概要をまとめた。大阪教育大学から受け入れた実習生を対象に家庭科で行う清掃学習の意義を指導する際に使用し、具体的であると好評であった。 A4 判　2 頁
・家庭科指導法における指導案作成の手引き （奈良学園大学）	平成 26 年 11 月 14 日	家庭科指導法の受講生を対象に、家庭科指導案作成における重要点を明確に提示した。題材設定の理由や指導上の留意点の書き方などを、実際の指導案を示し具体性を重視した。学生からは、指導案の書き方が明確になり、重要点が示されているため書き漏れや書き損じを防ぐことができ分かりやすいと好評であった。 A4 判　2 頁
3　教育上の能力に関する大学等の評価 ・奈良学園大学学長からの「家庭科教育法」「衣食住の理解」を担当する非常勤講師として採用時の評価	平成 25 年 4 月	該当教員は、大阪教育大学池田附属小学校に家庭科主任として 4 年間勤務し、毎年全国発表会を行い具体的な教材開発や指導方法などを熟知している。また、毎年多くの家庭科教師を志望する大学生を実習生として受け入れ、大学生に対しての指導の経験も豊かである。実践だけでなく研究紀要や、現職教員対象の「教員免許更新」の教科書を作成するなど、研究に対する意欲も高い。学会での活動も開始し、豊かな実践だけでなく、理論面でも大学教員としての資格を備えていると判断する。
・奈良学園大学「衣食住の理解」授業終了時における学生アンケートによる評価	平成 27 年 8 月	授業改善のために設定した 5 項目と自由記述による学生アンケートを行った。家庭科に対する体験不足の学生が多いためか、授業内容を実生活に活用できる項目の満足度は 4 点満点中 3.8 であった。
4　実務の経験を有する者についての特記事項 ・池田市立石橋南小学校食育担当	平成 19、20 年	池田市立石橋南小学校食育担当として、学校代表として食育カリキュラム作成を行った。また食育の在り方について教職員の共通理解を図るとともに、池田市内の食育のパイロット校の役割を果たした。

・大阪府家庭科教育研究会家庭科部会役員としての教育研究	平成21年4月現在に至る	・平成21年から家庭科部会役員として、毎年実施される研究会の開催に向けて会長の指示のもと連絡調整を綿密に行い、教員の希望アンケートを集約し講師の選出など研究会の成功へと尽力した。
・大阪教育大学附属池田小学校における学年主任としての学年教員指導と調整	平成21年4月～26年3月	5年間学年主任として、管理職や他学年との連絡調整を綿密に行い、児童の教育に尽力した。年間学習カリキュラムを作成し、学年の目標到達に向けて各教員と話し合いを密に行い、児童の教育にあたった。また、各学級の児童の実態把握に努め、個別対応を要する児童についての会議を定期的に行い、学年全体で情報を共有し児童の指導を行い、安定した学年経営が実現し、保護者からの高い評価も得た。
・大阪教育大学附属池田小学校における家庭科主任として教育実習生の指導	平成21年4月～26年3月	平成21年から家庭科の主任を4年以上担当し、毎年教育実習生を、年2回受け入れ、家庭科教員希望者を8人程度実習指導した。実習指導の内容は、家庭科の学習指導要領に基づく教材内容の解釈、年間指導計画の立案、学習指導案の作成、効果的な実技指導の方法、安全な実習のための留意点、高学年児童の理解等におよんだ。さらに実際の授業をさせて、課題を指摘して、再挑戦させることで、実践力をつけさせた。
・近畿附属小学校連合会家庭科支部役員としての教育研究	平成21年4月～26年3月	役員として家庭科教育に関しての成果と課題を毎年分析し、他の附属校との意見交流を図る中で、PDCAサイクルを積極的に行い、研究会の成功に尽力した。
・大阪府家庭科研究会役員	平成21年4月～現在に至る	役員として研究会開催に向けて関係機関と研究目的について検討し、会の成功に尽力した。また、日ごろの家庭科学習の取り組みを他市と情報交換する会を行い、池田市の家庭科教育の発展に尽力している。
・池田市家庭科教科書採択委員	平成26年度	池田市教育委員会からの委嘱により、平成27年度からの使用となる家庭科教科書採択委員として、教科書の採択を行った。各社の教科書の特徴を分析し、特に児童の実態を鑑みて採択することができた。
・池田市家庭科研究協議会指導助言者	平成27年4月～現在に至る	池田市家庭科研究協議会からの委嘱により、池田市家庭科研究部会の指導助言として、平成27年10月開催の大阪府家庭科教育研究会における研究授業に関する指導助言を行った。提案性のある授業開発であったと他市からも高い評価を得た。
5　その他 なし		

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1．免許・資格 小学校教諭一種免許 幼稚園教諭一種免許 食育インストラクター2級 応急手当普及員	平成7年3月 平成7年3月 平成22年9月 平成22年8月	 平6小一第794号（兵庫県教育委員会） 平6幼一第368号（兵庫県教育委員会） DP-0900856 第　F4056006
2　特許等 なし		

3　実務の経験を有する者について特記事項 ・「食育カリキュラムの必要性」の研修会講師 会場：池田市立石橋南小学校 対象：池田市栄養士・調理師・教職員 14 人	平成 19 年 8 月	学習指導要領で食育の重要性がいわれ、市内の研究校として、食育のカリキュラムを作成し、校内研修で他校栄養士や調理師も含めて教職員 14 人を対象に、食育カリキュラムの必要性と内容について講演した。
・「食育研修会及び公開授業」研修会の指導助言 会場：池田市立石橋南小学校 対象：池田市栄養士・調理師・教職員 15 人	平成 20 年 8 月	平成 18 年度に作成した食育カリキュラムに基づき栄養士と担任が共同で、公開授業を行った。授業内容は栄養の 3 要素を具体的な給食の献立の中で、確認するものだった。何気なく食べている給食を、食育の観点で意識化させる必要性を助言した。
・協同出版教員採用試験対策講座講師【1 回目】 会場：大阪府社会福祉会館 対象：平成 22 年度採用試験受験者 50 人	平成 21 年 8 月	小学校教員採用試験に臨む受講生を対象に、教員採用試験合格を目的に対策講座の講師として講義した。特に教育基本法に述べられている、教職の意義や、それにふさわしい教員の姿について、実際の面接場面を想定して指導を行った。具体的な指導だと好評だった。
・「今求められている食育」 ＰＴＡ主宰における保護者対象教育講演会講師 会場：大阪教育大学附属池田小学校 対象；保護者、教職員 150 人	平成 22 年 6 月	大阪教育大学附属池田小学校の児童の食の実態調査結果をもとに、今求められている食育についての概要を全校保護者に向け講演を行った。レジメを用意し話した。講演会後のアンケートでは、児童の好き嫌いが減ったと感想が出て、児童の食生活の改善を図ることが出来た。
・協同出版教員採用試験対策講座講師【2 回目】 会場：大阪府社会福祉会館 対象：平成 22 年度採用試験受験者 50 人	平成 22 年 8 月	小学校教員採用試験に臨む受講生を対象に、教員採用試験合格を目的に対策講座の講師として講義した。模擬授業やロールプレーに対応できるように、学校現場で起きている実際の事例や、模擬授業における授業規律の必要性なども指導した。模擬授業の指導は、具体的だと好評だった。
・大阪府池田市教育委員会主催 ふくまる教志塾　講師 会場：池田市教育センター 対象：教員採用試験受験希望者	平成 24 年 7 月	池田市教育委員会主催の平成 25 年度教員採用試験突破を目指す大学生等を対象の講習講師を行った。採用試験に向けての学習法はじめ、家庭科など各教科授業づくりのポイント、保護者・児童への対応の仕方などを講義した。講習後のアンケートには、実際の小学校教員の生の声の影響は大きく、教職に対しての職務遂行能力の理解を促した。
・家庭科教育学会関西支部役員としての貢献	平成 24 年 8 月	日本家庭科教育学会第 43 回近畿地区会　大会を役員として成功させた。さらに西江本人も、実践・研究発表デザートのプレゼンを通して、望ましい消費者生活を提示した。
・大阪府豊能地区家庭科新任教員研修講師 会場：池田市立石橋南小学校 対象：平成 24 年度豊能地区新規採用教員	平成 24 年 8 月	平成 24 年度新規採用教員が対象の家庭科教育についての研修講師を行った。レジメを用い、家庭科の目的や、生涯学習での位置づけなどの学習指導要領の説明をした。また、45 分の授業の組み立て方を例示し、師範授業も行った。発問・板書・ノート指導・教材選定などを例示した。研修後のアンケートでは、教師の目線はじめ、言葉かけ、授業の組み立て方など参考にする要素が多いと評価を得た。
・「食卓を囲むことから始まる食育」 ＰＴＡ主宰における保護者対象教育講演会講師 会場：池田市立石橋南小学校 対象：池田市立石橋南小学校保護者 20 人	平成 26 年 10 月	孤食が取りざたされている現状を踏まえ、各家庭で会話をしながら食事をすることの意義と、身近にできる台所菜園についての講演を全校保護者向けにレジメを用意し行った。そして、今求められている食育についての概要を伝え、食を通しての人間形成について話をした。講演会後のアンケートでは、家族と食卓を囲むことの重要さに気付いたと感想が出て、保護者の食への関心を高めることができ一定の成果を生むことができた。

・池田市家庭科研究会指導助言【1回目】 会場：池田市立五月丘小学校 対象：池田市立小学校家庭科部会会員 20 名	平成 28 年 5 月	池田市家庭科教育研究会において、10 月に開催される大阪府家庭科研究会大会にむけての授業検討会の指導助言として、小学生対象の消費者教育をどのように進めていく必要があるのかを講師として指導助言を行った。具体的な指導だと好評だった。
・池田市家庭科研究協議会指導助言【２回目】 会場：池田市立五月丘小学校 対象：池田市立小学校家庭科部会会員 20 名	平成 28 年 6 月	池田市家庭科教育研究会において、10 月に開催される大阪府家庭科研究会大会にむけての授業検討会の指導助言として、指導案の作成及び発問や板書計画について具体的な指導を行った。消費者教育についての資料なども多種用意し、具体的な指導だと好評だった。
・池田市家庭科研究協議会指導助言【３回目】 会場：池田市立五月丘小学校 対象：池田市立小学校家庭科部会会員 20 名	平成 28 年 7 月	池田市家庭科教育研究会において、10 月に開催される大阪府家庭科研究会大会にむけての授業検討会の指導助言として、指導案の作成及び発問や板書計画について具体的な指導を行った。
・池田市家庭科研究協議会指導助言【４回目】 会場：池田市立五月丘小学校 対象：池田市立小学校家庭科部会会員 20 名	平成 28 年 8 月	池田市家庭科教育研究会において、10 月に開催される大阪府家庭科研究会大会にむけての授業検討会の指導助言として、指導案の作成の最終調整を行うと共に、7 月に行われた授業のビデオ視聴による授業検討を行った。
・池田市家庭科研究協議会指導助言【５回目】 会場：豊中市立東丘小学校 対象：池田市立小学校家庭科部会会員 20 名	平成 28 年 10 月	大阪府家庭科研究会大会において、5 月から行われてきた授業検討をもとに授業実践を行った教員の指導助言を行った。
・三宅町食育指導 会場：三宅町立三宅小学校 対象：三宅町立三宅小学校保護者・教員 25 名	平成 28 年 12 月	「小学生の体力向上に向けた食事のあり方」と題して、小学生に必要な栄養素を中心に、その適切な摂取方法や調理例を挙げ、保護者が家庭で行える食事のあり方について指導助言を行った。調理例や好き嫌いのある児童への対処の仕方など、無理なく行える食育として参会者に好評であった。
・奈良学園大学オープンキャンパス模擬授業 会場：奈良学園大学 対象：オープンキャンパス参加高校生・保護者 30 名	平成 28 年 8 月 21 日	奈良学園大学オープンキャンパスにおいて、高校生とその保護者を対象に、大学講義のイメージを持ち、本学入学への関心の向上を図るべく、「電力の見える化」の模擬授業を行った。自転車発電機による発電を体験したり、参加者同士の交流を誘ったりして大学での授業の雰囲気をつかめるよう工夫した。体験参加型の授業は、他生徒や大学教員との距離が縮まり大学での講義に興味を持てたと参加者に好評であった。
4　その他 なし		

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
(著書) 1. 教育実習生指導のてびき (大阪教育大学池田附属小学校発行) 【再掲】	共著	平成 22 年 4 月	大阪教育大学	大阪教育大学の学生を対象異にして、教育実習生時に必要な教員としての資質能力や授業づくりのポイント、指導案の書き方などを具体的に説明するために発行されたものである。 A4 判　　全143ページ 編者　大阪教育大学共著者：岩井陽介、竹本和哉、長田佳子、西江なお子、西村恭美、能川正人、原田朋哉、松井典夫、松浦めぐみ、升村誠志　他 20 名 担当部分：『家庭科教育』部分 P 114～116 を単著

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				家庭科の指導案作成の際に注意すべき点として、まとめた。 ①家庭科で求められている児童に育ませたい力とは何か。 ②具体的事象を交えて提示するとともに、児童の実態把握の仕方や体験活動の効果的な取り入れ方。 ③児童の興味・関心の向上を図り学習意欲を喚起する手立ての在り方。 以上、家庭科指導案を書く際、児童の実態把握をはじめ、児童の興味・関心の向上を図り家庭での実践へと継続していくための授業づくりを在り方を論じた。
2.「とごころ」創刊号	共著	平成23年2月	大阪教育大学附属池田小学校	大阪教育大学附属小学校の保護者や市民を対象にして、学校の方針を説明するために発行されたものである。 B5判　　全89ページ 編者　大阪教育大学池田附属小学校教育研究部 共著者：松井典夫、岩井陽介、能川正人、原田朋哉、垣内幸太、西村恭美、土師尚美、西江なお子、坂下剛　他７名 担当部分：「実感を伴った理解へとつないでいくための手立て」部分Ｐ58～を単著 小学校理科教育を例に挙げ、実感を伴った理解へと児童を導く授業法の研究をまとめた。 １．自然に親しませる。 ２．言語活動を充実させる。 ３．実験観察の仕方を工夫する。 ４．機器を活用する。 以上、児童に真の学びの場を用意し、実感を伴った理解へと導くための授業の在り方を研究実践として提案した。
3.「とごころ」第3号	共著	平成24年2月	大阪教育大学附属池田小学校	大阪教育大学附属小学校の保護者や市民を対象にして、学校の方針を説明するために発行されたものである。 B5版　63ページ 編者　大阪教育大学池田附属小学校教育研究部 共著者：佐々木靖、岩井陽介、垣内幸太、坂下剛、小林秀訓、升村誠志、井上伸一、樋口万太郎、荒川真一、西江なお子、　他９名 担当部分：「家庭科における言語活動」の実践 部分Ｐ44～45を単著 家庭科における体験的な活動を通して言語活動を充実させる授業法の研究をまとめた。 １．児童の実態把握。 ２．グループワークでの学習。 ３．異学年交流。 ４．振り返り活動。 以上、体験的な活動を学習に効果的に組み込むことを通して、言語活動の充実が図れていくことを教育実践として提案した。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
４．「とごころ」第４号	共著	平成24年10月	大阪教育大学附属池田小学校	大阪教育大学附属小学校の保護者や市民を対象にして、学校の方針を説明するために発行されたものである。 B5 判　　全63ページ 編者　大阪教育大学池田附属小学校教育研究部 共著者：松井典夫、岩井陽介、佐々木靖、加藤いつき、西江なお子、平野憲、津田一司、西田まなみ、孕石泰孝、井上伸一　　他７名 担当部分：『「家でもやってみたい」と思える授業づくりを目指して』部分Ｐ50～53 を単著 家庭科での学びがその場だけではなく、家庭での実践へとつながるための授業法の研究をまとめた。 １．学ぶ楽しさを感じる授業展開の工夫。 ２．児童の実態に適した教材選択の必要性。 ３．意識化するためのアプローチとしての「見える化」の提案。 ４．客観的思考での課題に迫る授業のアプローチ法。 ５．データ分析による事実把握。 ６．学びを家庭実践へと生かす方法。 以上、学びが児童の意識に根を強くおろし、家庭での実践へと継続していく研究実践として提案した。また、家庭科教育が児童の自立の過程における役割についても論じた。
５．「教師も子どもも“楽しい”と思える授業づくり教職実践演習テキスト」	共著	平成25年3月	大阪教育大学	大阪教育大学における家庭科教育法の授業における教職実践演習に使用するテキストとして、執筆されたものである。 A5 判　　全 52 ページ 編者　　大本久美子 共著者：瀧野聡平、川口綾、吻那啓子、西江なお子 担当部分：Ｐ18～24、Ｐ40～45 を単著 １．「授業づくり・子どもとのかかわりのヒント」高学年児童との関わり方はじめ、家庭科授業の組み立て方の工夫や板書計画、教材研究方法、教室環境整備のポイントなど、教師を目指す学生の指針となるよう項目だてし、理論と実践をまとめた。 ２．「魅力的な家庭科の授業例」実際の教材を２つ提示して、学校で家庭科の授業で使いやすいようにポイントを述べた。 ①「かしこい消費者になろう　～家族の一員として、わたしにできること～」と題し、買い手と売り手の双方を経験しながら消費者としてのあるべき姿を学ぶ授業展開を述べた。 ②「快適な住まい方　～今の私にできること～」と題し、自分のまわりの環境に興味・関心を持ち、そこから課題を見つけ、快適という概念を自分なりに模索しよりよい環境を作り出すにはどうすればよいか考え、実行するという住環境を考える住環境について学ぶ授業展開を論じた。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
６．教育プロ	共著	平成27年12月	株式会社 EPR	最新の教育情報や斬新な実践等をまとめ、教育関係者並びに児童・生徒の保護者を対象に広く告知するために執筆されたものである。 担当部分：「家庭科におけるアクティブ・ラーニング」Ｐ18，19を単著 ①清掃意識の実態把握。 ②見える化の体験による概念砕き。 ③言語活動による意識化と共有化。 ④メタ認知を行う。 ⑤学びを深化する。 以上、小学校家庭科教育において住まいの授業をアクティブ・ラーニングの方法で行うことにより、児童が自分の課題と向き合い、家族の一員としての自覚を持って生活し、主体的に生活する力が育成されると仮説を立て、研究実践として提案した。
（学術論文等） 1．消費者教育における効果的な授業方法に関する研究	単著	平成22年8月	大阪教育大学附属池田小学校教育振興会　第16号 P83～86	食の安全が問われる現状を踏まえ、食品表示を見て商品を購入することの意義と必要性を考え、実践力へとつなげていく教材研究と授業法の検証の研究のまとめである。教材は、広告を考え、売り手側の心理に迫り、宣伝広告と食品表示の違いを知ることから、商品の本質を知ることの意義を考えさせる。そして、家族の一員として自分に出来ることを考え、実践へとつないでいく。成果として、売り手の立場で商品を見ることにより、商品をより深く観察することが出来ると同時に、今までの自身の商品選択の視点に気付き、これからの自分を意識することが出来るようになったことである。本研究を通して、児童が家庭で家族の安心・安全を守るために食材選定のポイントを提案したり、実際に買い物場面で学びを生かした発言をしたりしたという保護者の報告を受け、一定の成果を得ることが出来た。この実践を本著により、消費者教育における効果的な授業方法に関する研究として発信した。
2．快適な住まい方 ～今の私にできること～	単著	平成24年2月	大阪教育大学附属池田小学校研究紀要 P101,102	まわりを取り巻く環境に興味・関心を抱き、課題点を見出し、改善するための方策を考え、自分に出来ることをみつけ実践する力を養うことをねらいとした授業実践と理論の記録である。授業では「快適」の定義を児童個々にイメージさせ定義づけし、めざす快適像を確立させる。そしてそれにむかうためにどのようなアプローチを踏めば実現可能となるのかを検証させ、実践へとつないだ。この学びを生かして冬場の教室内における空気の循環を効率よく行うよう窓の開け方を工夫したり、臭いや色彩といったものに着目してより快適な環境づくりに励み、家庭でも実践したことを保護者から報告を受けた。住生活における「快適」の定義を理解し、その環境を創造するための研究である。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
3. 私は我が家の節電大臣 ～今の私にできること～	単著	平成24年11月	大阪教育大学附属池田小学校 研究紀要 P50～53	節電という言葉をメディア等で目にするものの、何をどれだけ行えばよいかが分からないままでは、継続した節電は難しい。しかし、節電は現在の日本の重要課題と言っても過言ではなく、その意義を知り意識して取り組むことが出来る児童を育てることが必要である。そこで、節電の今ある課題を見出し、節電に繋がる様々な方策を考え、自分にできることを見つけ、実践する力を養うことをねらいとして授業を実践したまとめである。 労力と電気の関係を実感するため、自転車発電機で実際に発電させる。また待機電力を測定し、その電力を年間に換算してどれほどの節電に繋がるのかをデータ化する。こうした実際に体を動かしたり数値化したりするなど様々な「見える化」のアプローチを経て、節電を実感させた。この学びから児童は校内の待機電力を省き 7、無駄な電気の消灯などに積極的に取り組むとともに、家庭でも実践を続け、一定の成果を得ることができた。
4. 私は我が家のコーディネーター ～「見える化」をめざした家庭科の授業～	単著	平成25年2月	大阪教育大学附属池田小学校 研究紀要 P50～51	「汚れが見えていない＝清潔」という既成概念を覆し、清掃の在り方を見直し、清掃の意義を考え実践につないでいく授業の理論と実践のまとめである。ドアノブや電気スイッチなど不特定多数の人が触れる場所や、一見きれいに見える壁や机まわりなどにも、拭いきれていない汚れが付着していることを光線の特殊なブラックライトを用いて照射し「見える化」する。それが人体に与える影響を考え、「きれいなはず」という意識を覆し、見えない汚れを取り除き、気持ちの良い環境づくりが実現する方策を考えさえる授業記録である。実際に自分の身近な物を雑巾等で拭い汚れを実感させることで、その後の清掃態度が激変すると同時に家庭でも掃除機での掃除のみならず、拭き掃除も取り入れたという報告を保護者から受け、学びが家庭での実践に繋がり一定の成果を得ることができた。 住環境の汚れに対し、意識下から意識化へと児童を変容させる適切な指導法の研究を発信した。
5. ビブリオバトル～読んで聞いて話して～	単著	平成27年2月	池田市立石橋南小学校 研究紀要 P19～20	国語科でビブリオバトルというゲームの要素を持つ書評を行い、読む力・話す力・聞く力を身につけさせる指導法の在り方を研究した。初めは本の概要を説明する際、下書きをして読む練習を重ねていた児童も、回を重ねるうちに原稿を読むことなく与えられた時間内で、要点をつかみ聞き手に分かりやすく話すことができるようになった。また、聞く側も何を質問すればよいのか視点を絞りながらメモを取ることができるまでの力をつけることができた。この活動を通して聞く力と話す力、読む力を育てることができ、他の様々な場面でもその力を活用することができるようになり、成果を得ることができた。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
6. 人間教育学会　第4号	単著	平成27年12月	人間教育学会 P123～132	体験活動を積極的に取り入れることにより、児童が自分の課題と向き合い、家族の一員としての自覚を持って生活し、主体的に生活する力が育成されると仮説を立てて、家庭科教育の授業実践を行ったまとめである。 実践１：品質表示に注目する意義を体験活動を通して児童に意味づけし、家庭生活で実践することにより主体的な生活者の育成を目的として行った。 実践２：身近な活動であるにも関わらず、児童の興味・関心が低く積極的な取り組みが継続されにくい清掃活動の学習において、快適な環境とはどのようなものかを実感させ、家庭での実践へとつないでいくことを目的として行った。 見える化の活動や、消費者と売り手の両者の視点を経験させ、実感を伴った理解へと導く活動など、いずれも体験活動を通して児童の概念砕きを行った結果、児童の学習意欲の喚起につながり、自ら調査・分析したり、新たな課題を見つけそれを解決する方法を模索したりするなど、まさに学びの過程である「感覚→思考→実践」を一連の学習の中で行い、学びを深化させていくことができる、適切な指導法の研究を発信した。
7. 実践教育学論集2015―現代の教育問題を考える２０― 特集：◇私を変容に導いた受苦的「経験」	単著	平成28年3月	大阪教育大学　実践学校教育講座	自分自身を変容へと導いた受苦的経験を高橋橋勝の理論に基づいてメタモルフォーゼする過程とその要因について分析した。本分析をもとに、教員の在り方について考察した。
8. 奈良学園大学研究紀要	単著	平成28年12月	奈良学園大学	小学校家庭科教育における課題の一つとして、学習した知識や技術などが実生活で十分に活かされていないことが挙げられる。そこで、学びを生活の中で継続・実行し、生活をよりよくしようとする態度や技能を「生活実践力」と定義づけ、授業での学びを生活実践力に結び付けていくモデル開発を行い、体験活動による動機づけの教育的な効果について論じた。
9. 人間教育学会　第4号	単著	平成28年12月	人間教育学学会	小学校家庭科において、生活実践力を図るうえで重要な要素である体験、交流、評価についてそれぞれ検証し、その意義をまとめると共に、それら三つの往還による生活実践力向上を図る授業モデルを開発し、その有効性を検証した。
１０. 修士論文	単著	平成29年2月	大阪教育大学	「実践力を高める小学校家庭科教育のモデル開発　～家庭での実習を組み込んだ『ふり返り活動』の実践を手掛かりにして～」という研究テーマに沿って、家庭科教育の課題の一つである「実践力」を育成するための手立てを実践研究したまとめである。清掃学習に振り返り活動と家庭での学習を移動計画に組み込むことにより、継続した実践が行われた結果を分析し、実践力を高める授業モデルを開発、提案した。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
(その他)「依頼原稿等」 １．小学生夏休みの家庭学習用教材編集	共著	平成 22 年 4 月～平成 24 年 4 月	(株)文溪堂	事前に児童の実態調査を行い、長期休暇に行うべき学習課題を明確化し、各教科ごとの重要項目を簡潔にまとめ、児童のつまづきやすい内容を吟味し、問題作成し教材作成会社文溪堂に提示した。小学校 1 年～6 年までの全学年の学習用教材の企画と編集に関わった。執筆者は池田附属小学校の各教科の教師である。西江は教材全体の構成と、各教科等のバランスを調整校正を担当した。
２．保護者対象教育講演会資料冊子 「今求められている食育」	単著	平成22年6月	大阪教育大学池田附属小学校PTA主催	大阪教育大学池田附属小学校 PTA を対象に、孤食が取りざたされている現状を踏まえ、各家庭で会話をしながら食事をすることの意義と、身近にできる台所菜園についての講演を全校保護者向け行った際の資料であり、今求められている食育についてアンケート結果を盛り込みながらまとめた。
３．大阪府豊能地区新規採用家庭科教員研修会 資料冊子	単著	平成24年8月	豊能地区教育委員会 大阪教育大学附属池田小学校家庭科教育部会	平成 24 年度新規採用教員が対象の家庭科教育についての研修講師を行った。その際、家庭科教育の目的や生涯学習での位置づけなどの学習指導要領の説明を行う際の小冊子を作成し、それをもとに講義を行った。また、45 分の授業の組み立て方を例示し、師範授業も行い、発問・板書・ノート指導・教材選定の仕方などを例示した。 Ａ４判　６頁
4. 教育プロ	共著	平成29年2月	株式会社 EPR	平成 29 年 1 月 22 日開催の「いのちの教育研究会　第 8 回シンポジウム」におけるリポートを執筆した。アクティブラーニングを通して考える道徳をどうすすめるかをテーマに、基調提案・講演が行われ、それを受けて「子どもが命の大切さを実感するには」をテーマとして、グループ討議を行われたが、そこでの参会者の声やアンケート結果をもとに、いのちの教育についてまとめた。
「学会発表等」 1. デザートのプレゼンを通して、望ましい消費者生活を考えた　授業実践	—	平成24年8月	平成 24 年度日本家庭科教育学会第 43 回近畿地区会実践・研究発表抄録(p4) (大阪府、兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科大阪サテライト)	類似品が数多く並ぶ中、商品に記載されている多種多様な情報を見極め、必要とする商品を購入する力は、食品の安全がとりざたされている昨今、児童にとっても必要不可欠な力である。食品表示は食品の重要な情報であり、これを見て購入する習慣をつけることは、自分や家族の健康を守る上で大切なことである。本題材は、意識的に商品を見る姿勢を児童に芽生えさせ情報を取捨選択する力をつけさせることを目的として行い、この実践と支える理論を学会で発表した。
2. 生活実践力の向上を図る小学校家庭科教育のプログラム	—	平成29年3月	日本教師学学会第18回大会実践研究発表	現行の家庭科学習指導要領の目標は、実践的な態度を育てることである。しかし、日本家庭科教育学会による小学生を対象とした、家庭生活についての全国調査（2007）において、家庭科の学習は「将来家庭生活で役に立つ」と答えた割合に比べ「実生活で役に立つ」と答えた児童の割合が少ない結果となった。この現状を受け、「生活実践力」の育成を図るべく、「体験・交流・評価活動」を往還させる授業モデルを開発し、この実践と支える理論を学会で発表した。

教　育　研　究　業　績　書

平成 29年 3月 31日

氏名　　大淵　裕美

研究分野	研究内容のキーワード
社会学・ジェンダー・ 生活科学	教育社会学、家族社会学、ジェンダー、 家族関係学、生活経営学

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例 （1）授業時間外における学習を促進する取り組み：e-mailでの対応（天理看護学院助産学科「助産研究」科目）	平成20年12月～平成26年3月	助産学科は、各種実習に加えて年間10例の分娩介助が義務付けられており、授業の開講時期も4～7月、8月、12月と不定期開講であった。その為、授業時間外でもメールで随時進捗状況の報告や中間論文の提出を実施したり、相談に応じるなど、実習の合間でも効率よく論文を執筆できるよう工夫を行った。
（2）ワークショップ形式講義の導入 （大阪樟蔭女子大学学芸学部ライフプランニング学科「日本文化理解」科目・2年次後期開講）	平成23年10月～平成24年3月	体験を通した異文化理解や日本文化の理解を促すため、全15回の講義のうち3回（2回は講師を招く）、ワークショップ形式の講義を行った。具体的には、心理学のシミュレーションを活用した異文化体験ゲーム「移民シミュレーションゲーム」の実施、日本の前衛芸術・舞踏の専門家である田中誠司氏を招いた「舞踏ワークショップ」、さらに元営業職の会社員で外国人観光客を意識したcaféを経営する中西弘之氏を招いた「日本の企業文化と名刺交換ワークショップ」を実施した。「移民シュミレーションゲーム」を実施した際には、受講者は仮想の状況でありながらも、異文化と接触した時のカルチャーショックや仲間意識を体験した。また、「舞踏ワークショップ」では、「まっすぐ歩く」というワークを通じて、一つ一つの物事に対して心身を最大限集中させて取り組む重要性を学修した。最後に、「名刺交換ワークショップ」では、名刺をツールとして、多角的に他者との会話の可能性を切り開く視点を得た。これらを通じて、学生たちに、生身の身体を持つ自分自身が文化を媒体するメディアであることを発見するように促した。
（3）外部講師による特別講義の実施 （四天王寺大学社会学部「家族関係論」科目・2年次後期開講）	平成25年9月～平成27年3月	社会学部社会学科2年後期配当選択必修科目。現代日本社会における家族関係をめぐる様々な事象の考察を通して、物事に対する多様な見方・考え方（複眼的思考法）の習得を目指した。その際に、特別講師を招いた講義を実施し、学生たちに実感を伴う理解を促すよう工夫した。平成25年度は2名の特別講師をお招きした。「家族と離れて暮らす子どもたち――児童養護施設」をテーマに、群馬県前橋市の児童養護施設「地行園」施設長・須田昭司氏に特別講義を行っていただいた。また、「出産と身体」をテーマに、マタニティヨーガ講師・真鍋りょうこ氏をお招きし、講義とヨーガ体験を行っていただいた。平成26年度は、「育児期女性の起業経験」をテーマに、奈良のママが仕事をつくる会（愛称：ナラマーシカ）代表・井上京子氏をお招きし、ご自身の起業体験をお話いただくとともに、商品開発ワークショップを実施した。いずれの特別講義においても、学生から好評を得るとともに、多様な社会現象を理解する一助となった。

（4）フィールドワークに基づくプレゼンテーションの実施 （関西大学社会学部メディア専攻「基礎演習」科目・2年次前期開講）	平成26年4月～同年9月	関西大学社会学メディア専攻には、新聞やテレビ、広告等に関心があるのみならず、これらメディア関連企業への就職を希望する学生が多く在籍している。しかしながら、受講者の大半は、大学と自宅とアルバイトといった自分たちの身近な空間で生活をしている。そこで、メディア関連企業等で必要とされる取材力や観察力の涵養を目指すべく、関西大学前の商店街と大阪市内の商店街（天神橋筋商店街、松屋町商店街、福島商店街、道具屋筋商店街）へのフィールドワークを実施し、比較検討する課題を出した。商店街のどのような側面に焦点を当てて調査するかについては、各グループの自由意思に任せた。最終講義では、フィールドワークの結果に基づいたプレゼンテーションを実施した。その結果、学生たちは、音楽や看板といったメディア利用の相違、インターネットにおける商店街のイメージ戦略と実際の相違、店舗の相違等に着目しながら、各商店街の特性を分析していた。このフィールドワークを通じて、学生たちは、人々の生業の相違について学修するとともに、情報収集能力、課題発見能力、情報発信能力の一端を習得した。
（5）臨地講義の実施 （帝塚山大学文学部文化創造学科「現代日本の文化と社会」科目・1年次前期開講）	平成26年4月～同年9月	「奈良×仕事×文化創造＝ブライダル―ブライダル企業に伺う奈良の魅力発掘・発信法―」というテーマで、奈良市内にあるブライダル企業・アトリエステディ株式会社にて臨地講義を実施した。アトリエステディは、ビジュアルイメージを多用した会社のブランディングや、ブライダルを通じた地域おこしを行っている。文化創造学科の教育目標と親和性が高いと判断し、初年次教育、キャリア教育もかねた講義を依頼した。講義は、3部構成で実施した。Ⅰ部は、「奈良×仕事×文化創造＝ブライダル―ブライダル企業に伺う奈良の魅力発掘・発信法―」と題して、アトリエステディの谷口裕純専務より自社での特徴的な取り組みについて講話いただいた。Ⅱ部は、「専務と話そう！―さまざまな壁を飛び越えながら文化を創る戦略を探る―」。学生による専務へのインタビューを実施した。Ⅲ部は、「アトリエステディ×文化創造学科＝ファッションショー―文化が創られる瞬間を体験する―」と題して、ブライダル企業の演出によるファッションショーを体験した。本講義に際して、事前・事後授業を行うと共に、専任教員2名と協力しながら、学生が多角的に学修できるよう最大限の工夫を行った。
（6）コメントシートの作成と利用 （四天王寺大学社会学部「家族関係論」科目、関西学院大学社会学部「臨床社会特論A」科目、神戸松蔭女子学院大学「女性とメディア」科目、大阪教育大学教員養成課程「家族関係学Ⅱ」科目、群馬大学社会情報学部「比較文化論」科目、関西学院大学「人権からみたジェンダーB」科目）	平成26年9月～平成28年9月	受講者とのコミュニケーションを重視した講義を行うために、独自に作成した「コメントシート」を活用している。コメントシートは15回分の欄が設けられており、毎回講義開始前に資料とともに配布し、講義終了後に回収している。全学生のコメントに毎回必ず目を通し、疑問や感想についての対応を直接コメントシートに書き込んでいる。また、コメントを踏まえ、学生の理解が不十分だと判断した内容については、翌週の講義の一部ないし全体を使って必ず補足説明を行うなど、受講者の理解度を確認しながら講義を進める工夫をしている。
（7）ワークシートを用いたアクティブラーニングの実施（群馬大学「総合文化論」科目）	平成29年1月	教育政策や学習指導要領の変遷、学習塾や予備校などの学校教育と学校外教育の関係、学力低下に関する学説等を学修した。さらに、ワークシートやグループワーク等のアクティブラーニングを導入し、討議できるような発問を考え、社会学的な「問い」「仮説」「根拠」を導出する実践を行うなど、教育課題解決に資する複眼的思考力の醸成を目指した。（群馬大学「総合文化論」）

2　作成した教科書，教材 （1）『現代文化の社会学入門』（共著・ミネルヴァ書房・再掲）	平成19年4月30日	学校外教育を事例に、カリキュラム、クラス編成、教師―生徒関係、逸脱する学習者の統制を明らかにした。（pp:119～135）編者：小川伸彦・山泰幸 分担執筆：藤吉圭二・大淵裕美他10名（関西学院大学「臨床社会特論A」四天王寺大学「家族関係論」群馬大学「総合文化論」で使用）
（2）『教育社会学』（単著・（株）ERP・再掲）	平成29年3月7日	教育社会学とはなにか、教育社会学の考え方と学習方法、学校の社会的機能、学校教育をめぐる現代的課題、教育と家族、教育調査の方法論等を概説した。
3　教育上の能力に関する大学等の評価 （1）研究指導者としての評価（天理看護学院）	平成20年12月～平成26年3月	天理看護学院助産学科では、受講者が「助産研究」科目でまとめた研究内容を卒業後に奈良県母性衛生学会等で発表してきた。私が在職期間に指導した学生の大半が、毎年学会発表を可能とした。とりわけ平成24～26年度は、雇用先の助産学科専任教員の推薦により、指導者という立場で卒業生の学会報告に名前を連ねた。雇用先の天理看護学院および教員より、研究指導者としての能力を認めていただいたことを示している。
（2）学科の方針に沿った臨地講義実施に対する学長・専任教員からの評価（帝塚山大学）	平成26年4月～同年9月	帝塚山大学文学部の新設学科である文化創造学科で担当した「現代日本の文化と社会」では、「奈良×仕事×文化創造＝ブライダル―ブライダル企業に伺う奈良の魅力発掘・発信法―」というテーマで、奈良市内にあるブライダル企業・アトリエステディ株式会社にて臨地講義を実施した。臨地講義に際して、①事前・事後授業の実施のみならず、②専任教員の牟田口章人先生、河口充勇先生との複数回にわたる打ち合わせや学生の担当箇所の検討、③臨地講義先のアトリエステディ様との4回以上にわたる綿密な打ち合わせと準備実施し、学生が多角的に学修できるような工夫を行った。さらに、当日の講義には、帝塚山大学学長・岩井洋先生がご参加くださった。岩井学長より、本臨地講義が「文化創造学科のコンセプトを具現化するもの」であると評価を頂いた。さらに、講義の様子が文化創造学科のHPやFacebookページ「帝塚山大学学長のココロ」等にて紹介された。このことは、学科のコンセプトを的確につかむ能力や、地域の方々や専任教員の方々と連携した学外講義を実施する能力があることを示している。
（3）学生による授業評価の結果（関西学院大学社会学部「臨床社会特論A」科目・1年次前期開講）	平成27年4月～平成27年9月	社会学部1年前期配当科目。本講義では、健康や病気、身体など、私たちにとってあたりまえで根本的な問題について、社会学、ジェンダー論の知見を用いて相対化してみると、どのように見えるのかを検討した。受講生の特徴として、社会学部の1年生～4年生だけでなく、心理学、文学、法律学、経済学、社会福祉学といった他学部の1年生～4年生が受講するという状況であった。そのため、社会学を知らない学生や1年生に基準を置くとともに、コメントシートを活用して学生の理解度を確認しながら丁寧な授業実施を心がけた。その結果、学生による「授業に関する調査」において、平均よりも高い評価を得た。特に、「担当者が学生の理解度を確認しながらこの授業を進める工夫をしていた」や「全体としてこの授業に満足している」という項目では、5段階中「4.6」と評価された。このことは、講義科目であっても学生とのコミュニケーションをとりながらきめ細かく対応する能力を有していることを示している。

（4）奈良学園大学人間教育学部採用にあたっての学長評価	平成28年3月	奈良学園大学には教育社会学の科目がないため、社会問題と教育課題を関連付けて考える場が少ないので、教育社会学的な視点に学生の視野を広げる役割を期待して採用された。
4　実務の経験を有する者についての特記事項 （1）奈良学園大学人間教育学部「基礎ゼミナールⅠ」におけるアドバイザーとしての学生支援 （2）奈良学園大学人間教育学部にて特別支援を必要とする学生のアドバイザーとしての支援	 平成28年4月～現在に至る 平成28年4月～現在に至る	 高校から大学へのギャップで困惑する学生の退学防止のため、学生懇談を年3回行うとともに、リメディアル教育の参加を促進し、学力面や生活面での学生の支援を行った。 聴覚障害2級の学生が奈良学園大学人間教育学部に入学し、障害者差別解消法に基づき文部科学省が出した指導指針に基づき大学での特別支援学生責任者として関係機関との連携調整及び支援体制の構築に尽力ている。
5　その他		該当無し

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1　資格，免許 修士（文学） 博士（社会科学） 専門社会調査士	 平成17年3月24日 平成25年9月30日 平成25年10月1日	 奈良女子大学　修第784号 「日本バレエ界の構造と担い手」 奈良女子大学　博課第539号 「妊婦の社会学―現代日本における健康の制度化と妊娠期女性の「食事実践」―」 社会調査に関する問題点や妥当性の指摘、調査企画能力、運営管理能力、報告書執筆等の実践能力の獲得を示す資格である。
2　特許等		該当無し
3　実務の経験を有する者についての特記事項 （1）奈良女子大学女性研究者支援事業本部・教育研究支援員 （2）関西学院大学社会学部・研究支援者 （3）研究協力者	 平成23年2月～平成24年9月 平成24年5月～平成25年3月 平成25年4月～平成28年3月	 社会心理学を専門とする、奈良女子大学生活環境学部安藤香織准教授の下で、教育・研究の支援を行った。研究面では、先生の専門とする環境配慮行動の国際比較調査の研究支援、教科書作成のための作業支援、学会発表等の支援を行った。教育面では、授業の準備、学部生の卒業研究へのアドバイスを担った。支援業務の成果として、平成23年度には、国内学会・国際学会での共同報告の機会を得た。 関西大学社会学部村田泰子准教授の下で、研究支援を行った。村田先生とは妊産婦と食という共通の問題関心を共有していたため、本支援制度の申請段階で、支援者兼共同研究者として従事する契約をした。具体的には、論文執筆に必要な文献・資料の収集や要約、図表の作成等に従事した。その結果、村田先生は2本の学術論文を公表された。村田先生の論文執筆作業の支援を通して、支援者である私自身も、論理構成力のみならず、説得的な文献・データの用い方を学修する機会となった。その成果として、2本の論文掲載が可能となった。 科学研究費補助金基盤研究（C）「過疎と災害にresilientな妊産婦支援ネットワーク構築のための基盤研究」（平成25年4月～平成28年3月：研究代表者・田間泰子）に研究協力者として従事している。具体的には、奈良県吉野郡十津川村への共同調査の企画・調整・実施や、奈良県生駒市で実施する「妊産婦のための災害セミナー」に際して、奈良県助産師会との調整やスタッフとして参加した。

（4）滋賀大学環境総合研究センター・リサーチアシスタント	平成25年7月～平成25年9月	滋賀大学環境総合研究センターによる「統合的湖沼流域管理においてハートウェア（心・水文化・記憶）が果たす機能の研究」（文部科学省特別教育研究経費）の一環として実施された、環境NPOへの質問紙調査の作成とデータ入力の補助業務を担った。
（5）奈良女子大学大学院人間文化研究科・博士研究員	平成25年10月～平成28年3月	博士論文で行った研究を展開しながら、「現代日本における食を通じた妊婦と胎児の健康管理に関する社会学的研究」という研究課題に従事してきた。在籍期間中、9本の口頭発表と6本の学術論文を発表した。
（6）滋賀大学環境総合研究センター・プロジェクト研究員	平成25年10月～平成27年3月	リサーチアシスタントで従事した業務の継続として、「統合的湖沼流域管理においてハートウェア（心・水文化・記憶）が果たす機能の研究」（文部科学省特別教育研究経費）の一環として実施されている、環境NPOへの質問紙調査の作成、データ入力、分析、報告書執筆業務を担当した。
（7）平成26年度吉野町健康増進計画策定に伴う基礎事業アドバイザー	平成26年4月～平成27年3月	奈良県吉野郡吉野町において、健康増進計画策定に伴うアドバイザー業務に従事した。具体的には、吉野町町民の健康行動の実態と課題を把握するために、統括アドバイザーの奈良県立大学看護学部入江安子准教授と協力しながら、健康推進団体へのヒアリングや健康教室の開催への支援や助言を行った。この間、吉野町健康推進協議会で2回講演を行うとともに、本事業に関連する共著論文を発表した。
（8）奈良女子大学研究推進プロジェクト「大学広報の研究――ニーズ把握からコンテンツ構築・発信まで」統括事務局	平成26年7月～平成27年3月	奈良女子大学研究院人文科学系小川伸彦教授が研究代表を務める、奈良女子大学研究推進プロジェクト「大学広報の研究」の統括事務局を担当。本プロジェクトは、全学横断的に実績のあるメンバーを集め、大学広報研究という領域を包括的に深化させ、その成果を検証しつつ還元すべく、奈良女子大学の広報実践との連携の可能性を探ることを目的とする取り組みである。具体的には、広報実績とニーズの研究、コンテンツ構築方法論と応用実践、社会連携型コンテンツ構築を通じた大学ブランディングの検討、入試広報の研究に取り組む。私は、本プロジェクトの統括事務局の一員として、議事録の作成や、運営・経理業務を担当するとともに、メンバーとして大学グッズ開発にも従事した。本プロジェクトの成果として、プロジェクトメンバーによる共同論文を発表するとともに、学生・教職員・生協職員ともに新たな大学グッズ（包装紙・ビニール製手提げ袋・クリアファイル・学章最中等）を開発した。
（9）奈良女子大学文学部・研究員	平成27年5月～平成28年3月	科学研究費補助金基盤研究（B）「社会学のディシプリン再生はいかにして可能か――デュルケーム社会学を事例として」（平成27年4月～平成30年3月：研究代表者・中島道男）の推進事務局を担当。具体的な業務としては、毎月1回科研メンバー向けに配信するメールマガジン「部内報」の編集・配信作業や、共同研究者・連携研究者の旅費等に関する経理・事務作業に従事した。
4　その他		該当無し

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
（著書） 1『現代文化の社会学入門――テーマと出会う、問いを深める』	共著	平成19年4月	ミネルヴァ書房	担当章：「第7章　習い事――バレエ教室でどのように踊れるようになるのか」（単著）pp.119～135. 学校外教育が学校教育に与える影響について検討した。学校外教育の代表的な機関のひとつであるバレエ教室を事例に以下について論じた。技術習得度に応じた教室独自のカリキュラムとクラス編成、専門用具使用許諾を決める技術試験の実情、学習場面における教師―生徒の関係性の特徴や、生徒間の競争関係などが、児童生徒の学習に対する意欲や学校での行動に与える影響とともに論じた 編者：小川伸彦・山泰幸。分担執筆：名部圭一・澁谷知美・山田陽子・菅康弘・藤吉圭二・須藤廣・足立重和・寺岡伸悟・工藤保則・森真一・真鍋昌賢・大淵裕美（全298ページ）
2 『ポピュラーＴＶ』	共著	平成21年3月	風塵社	担当章：「『鹿男あをによし』と娘と共に歩んだ二〇〇八年――テレビドラマ『鹿男あをによし』に関するネット・DVD・奈良をめぐる一考察」（単著）pp.79～146. メディア論と地域社会学・観光社会学との接合を試みた。具体的には、テレビドラマ『鹿男あをによし』を事例に、テレビ・インターネット・DVDという三つのメディアを分析するとともに、ロケ地である奈良県内のフィールドワークと、番組制作に関わった地域の民間団体・住民等へのインタビュー調査を実施した。これらを通じて、テレビドラマが地域社会にどのように受容され地域資源として展開されたのかを検討した。 共著者：平井智尚・大淵裕美・藤田真文・島岡哉・小林義寛・小林直毅（全331ページ）
3 『教育社会学』	単著	平成29年3月	（株）ERP	教育社会学とはなにか、教育社会学の考え方と学習方法をはじめ、学校の社会的機能（知識伝達、ジェンダー、隠れたカリキュラム）、子どもをめぐる現代的課題（いじめ、不登校、教育格差）、教育と家族について解説した。さらに教育社会学の研究の方法論について概説した。最後に、教育社会学の視点が学校現場の具体的な課題を分析する上でどのように活用できるかについて展望した。（全80ページ）
（学術論文） 1「妊婦・授乳婦における嗜好品摂取の悩みと楽しみ――現代日本の出産・育児に関する文化社会学的研究」	単著	平成23年4月	嗜好品文化研究会・『平成21－22年度嗜好品文化研究会研究奨励事業報告書』pp.1-20.	妊娠中の「望ましい飲食物」という規範が、女性たちの情動にどのような影響を与えるかについて分析をした。具体的には、「自分は好きだが、胎児のためには良くない」という認知的不協和をどのように解決しているかを実証的に検証した。その結果、女性たちは、「自分たちが意識的・自発的に欲するもの」を摂取する場合に、罪悪感と満足感という両義的な情動を抱えることが明らかになった。加えて、逸脱的な摂取行動に対する罪悪感の解決方法として、飲食物の意味づけや摂取行動を柔軟に変化させていることが示唆された。
2「出産の医療化論再考――『妊婦中心の健診』と助産師教育・卒後研修にみる女性の抵抗の限界――」（査読付）	単著	平成25年2月	社会学研究会・『ソシオロジ』57(3) pp.73-89.	ヘルシズム論および教育制度分析の視点から、助産師の再生産システムの検討を通して、従来の出産の医療化論を再考することを目指した。特に、助産師の教育内容の高度化や国家試験作成メカニズムと助産師による妊婦健診の増加との相関関係を分析した。その結果、助産師による妊婦健診は、正常な経過をたどる女性にとって「脱医療化」ではなく「医療化」を徹底する作用があると指摘した。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
3「妊娠期女性の食事実践に関する研究―『パーフェクト妊婦』と情報収集―」（査読付）	単著	平成25年3月	奈良女子大学社会学研究会・『奈良女子大学社会学論集』20, pp. 83-101.	教育社会学の知見である「パーフェクトマザー論」を、妊娠期女性に当てはめて検討するために「パーフェクト妊婦」という概念を創出した。本概念を用いながら、妊娠期女性の食事を通じた胎児の養育責任の様相を、行動の判断となる情報収集や活用に着目して検討した。その結果、二つの知見がえられた。女性たちは、参照可能な情報を最大限収集しているだけでなく、自分にとって信頼できるという質を重視した情報収集を行っていた。また、高学歴女性であっても、収集した情報は胎児への自己犠牲のみならず、自分のニーズの根拠としても用いられる可能性が示唆された。女性たちは、各自の可能な範囲で「パーフェクト」な実践を行っていた。
4「妊婦の社会学――現代日本における健康の制度化と妊娠期女性の『食事実践』」	単著	平成25年9月	奈良女子大学（学位論文）	現代社会において妊娠という営みが、どのように位置づけられ、意味づけられているかの解明を目指した。特に、教育社会学の知見である「パーフェクトマザー論」を、妊娠期女性に当てはめて検討するために「パーフェクト妊婦」概念を創出し、妊婦の「食事実践」のあり方に焦点を当てた。複数の質的調査法を用いて調査研究を行なった結果、次の知見が示された。まず、胎児の養育責任の「個人化」の条件や仕組みと、「社会化」の可能性である。次に、妊婦という近代社会の個人概念から捨象されてきた存在の社会的位置づけや意味づけの重要性である。最後に、妊婦を中心に位置づけた人間社会の再構成を目指す理論的・実証的研究の可能性である。
5「奈良県山村における出産の施設化の様相――1960年代～1980年代に着目して――」	単著	平成26年8月	滋賀大学環境総合研究センター・『研究年報』11(1)pp. 89-97.	出産の施設化が地域によってどのように異なって進行するのかを、奈良県宇陀郡及び宇陀郡A村を対象に検討した。その結果、以下の三点が明らかになった。第一に、宇陀郡全体の出産の施設化は「病院出産型」施設化であることが示された。第二に、宇陀郡内においても施設化過程に地域差が見られた。具体的には、町部は「病院出産型」施設化であるのに対し、村部では「診療所出産型」施設化であった。第三には、A村では、診療所と村内の有床助産所が出産の施設化をけん引していた。
6「調理実践にみる妊娠期女性の経験と意識の変容 ―ある初産婦の食事日記とインタビューを事例として―」（査読付）	単著	平成26年11月	日本女性学研究会・『女性学年報』35, pp. 1-26.	妊娠期の女性が、調理を通じてどのように胎児への配慮と家族への配慮を実践しているのか、についての解明を目指した。具体的には、パーフェクト志向の高い初産婦1名に実施した日記調査とインタビュー調査に基づきながら、彼女が直面した調理をめぐる困難とそれに伴う家族のサポートの変化、当人の認識の変容について検討した。その結果、（１）妊娠期においては、自分の身体を通じた胎児への配慮と、夫をはじめとする眼前の他者への配慮の両立が、妊婦の悩みの要素になるという点や、（２）妊娠期において望ましいとされる食生活の実現には、妊婦自身のみならず家族も、調理に関する知識の幅や技術の習得程度が重要な要素となる点が明らかになった。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
7「インターネットコンテンツによる大学広報―奈良県内諸大学を事例とした比較分析―」	共著	平成26年12月	奈良女子大学文学部・『奈良女子大学研究教育年報』11,pp.9-33. 担当箇所：「８．奈良と大学―地域連携とイメージ活用―」（単著）pp.25-28.	奈良県内諸大学におけるインターネットコンテンツによる情報発信の現状の検証を通して、諸大学の参考となる知見の提示と奈良女子大学が学ぶべき点の解明を目指した論考。担当節では、大学が地域社会からいかにイメージを得ながらブランディングを行っているかについて、地域連携とイメージ的側面としてのキャッチコピーや図像の活用に着目して検討した。その結果、奈良女子大学の特徴として、以下の点が明らかとなった。まず、地域連携に関する情報発信については、社会連携センターが独自のウェブサイトを通して積極的に行っていることが明らかとなった。次に地域イメージの活用については、「奈良」という地域性を活かしたキャッチコピーと、大学独自の資源である記念館（国重要文化財）イメージを融合した図像が用いられていた。地域性と大学独自のブランドを組み合わせた情報発信の可能性について指摘した。執筆者：小川伸彦・藤野千代・磯部敦・井口高志・吉田信也・松永光代・大淵裕美・宮路淳子
8「地域診断におけるGISの活用」	共著	平成27年3月	奈良県立医科大学医学部看護学科・『奈良県立医科大学医学部看護学科紀要』11,pp.3-13.	奈良県吉野町保健センターでの地域診断で試みたGIS分析例を紹介し、今後のGISの活用方法について解説した。その結果、GISは地域の健康情報を可視化し、住民と協働できる地域診断づくりにつながることが分った。留意点としては、GISを用いて地域における地理的分布を解釈するには、人口分布との関連で捉える必要がある。また、GISの活用により空間的従属性を視覚化することが出来るので、行政の区分けである小地域の分類だけではなく、隣接性(近接性)も考慮した地域の区分けの必要性、及び空間演算ツールの活用が挙げられた。 執筆者：入江安子・南由貴代・上浦千明・山下延代・下迫由美・谷口莱那・大淵裕美（共同研究につき、本人担当部分抽出不可能）
9「女性の食生活をめぐる規定要因――子どもの存在・社会的要因の効果――」（査読付）	単著	平成27年10月	平成27年10月 奈良女子大学家政学会・『家政学研究』62(1),pp.1-11.	奈良女子大学家政学会・『家政学研究』62(1),pp.1-11.　子どもの存在が女性の食生活を規定する要因となりうるのかについて、女性の社会的要因を考慮しながら検証した。NHK放送文化研究所が2009年に実施した「健康に関する世論調査」の個票データのうち、20～49歳の女性663名を分析対象としてロジスティック回帰分析を行った結果、次の点が明らかになった。まず、子どもの存在は、多様な女性の食生活の中でも1日3食摂取するという食生活のリズムと、原産国や生産地に配慮するという食の安全性というごく限られた局面に影響していた。それに対して、社会的要因は女性の食生活の多方面に作用していた。以上より、女性の食生活改善には、社会的要因を考慮したアプローチが有効である可能性が示された。
10「妊婦にとって〈嗜好品〉とは何か」（査読付）	単著	平成28年3月	嗜好品文化研究会・『嗜好品文化研究』1,pp.93-101.	妊娠を契機に、「胎児にとって良くない」という理由から禁忌に分類される飲食物に対して、女性がどのように認識や行動を変化させるのかを検討した。その結果、妊婦にとっての＜嗜好品＞とは、妊娠前に常用していたもので、妊娠後は禁忌の対象となるにもかかわらず、親近と疎遠の間をゆらぎながらも当該期間中に断続的に摂取し続ける飲食物であり、胎児にとっては良くないという点で罪悪感を覚えつつも、自分の楽しみや気分転換のために摂取するものであることが明らかとなった。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
11「食を通じた妊婦と胎児の健康管理に関する歴史的変容－母子健康手帳Jにおける栄養の記述を中心に－」	単著	平成28年9月	奈良学園大学・『奈良学園大学紀要』5, pp. 13-25.	公的メディアのひとつである母子健康手帳に着目し、国家による食と栄養を通じた妊婦と胎児の健康管理の変遷を検討した。その結果、以下の点が明らかとなった。第一に、国家が示す栄養を通じた望ましい妊婦像が、時代とともに高度化していた。第二に、記述内容の科学化は、妊婦間における理解の格差を引き起こす可能性がある。第三に、呼称の女性化は、栄養と女性の結びつきを強化するジェンダー化作用のみならず、妊婦や胎児の健康状態に影響する諸要因の複雑性や社会的責任を隠蔽し、妊婦の自己責任へと矮小化する作用がある。
12「なぜ学校に行く気がしないのか―『NHK中学生・高校生の生活と意識調査・2012』の分析」	単著	平成29年3月	奈良女子大学社会学教育研究会・『奈良女子大学社会学教育研究論集』1, pp. 7-16.	中等教育を受ける生徒の登校回避意識が何によって規定されているのかを、「中学生・高校生の生活と意識調査 2012」を用いて検討した。その結果、中等教育においては、中学生よりも高校生の方が有意に登校回避意識が高いことが明らかとなった。また、学校回避意識には学校環境要因を含めた複数の要因が影響していることが確認された。特に、子どもにとっては、学級や家庭という複数の人々によって構成される場の安定性の程度によって、登校回避意識が左右されることが示唆された。このような要因を考慮した、教育現場における生徒対応や、家庭における保護者の関りの重要性を指摘した。
13「困難な状況下でも良好なライフスタイルを実践する女性たちの発掘と問題解決法の解明に関する探索的検討」	単著	平成29年3月	『厚生労働科学研究費補助金女性の健康の包括的支援政策研究事業 女性の健康における社会的決定要因とライフスタイルに関する研究　平成28年度　総括・分担研究報告書』, pp. 95-105.	困難な状況下でも主体的な健康づくりを実践する者（ポジデビ）の行動特性の解明を行った。具体的には、身体的・精神的な主観的健康感が良好なシングルマザー15名を対象にインタビュー調査を実施した。その結果、ポジデビ共通の特徴として、心身の健康を維持する行動、サポートネットワークの保持、経済的資源の確保が明らかになった。さらに、先鋭的なポジデビの特徴として、自らの力で問題解決する志向性、徹底的な情報収集に基づく意思決定、経済的資源の確保や節約法に関する知識・方法を保持し、暮らしを豊かにする行動の習慣化、確立されたライフスタイルと他者への発信が析出された。本研究を通じて、社会資源を生活資源に活用する行動特性が見られることが明らかとなった。
（その他） ◆学会・研究会発表 1「地域社会におけるテレビドラマの受容と利用過程――『鹿男あをによし』の事例から――」	単独	平成21年5月	『第60回関西社会学会』（京都大学）	地域に生きる人々の日常性に軸足を置き、ミクロな視点から地域活性化につながるプロセスの検討を試みた。具体的には、ドラマ『鹿男あをによし』を事例として、地域住民をはじめどのように活用され、地域資源となったのかを検証した。
2「妊婦・授乳婦における嗜好品摂取の悩みと楽しみ――現代日本の出産・育児に関する文化社会学的研究」	単独	平成22年5月	『第8回嗜好品文化フォーラム』（メルパルク京都）	現代日本社会における妊娠・授乳期の女性たちは、何を嗜好品ととらえどのような意味を付与しているのか。嗜好品摂取に関する悩みと楽しみとはいかなるものかについて考察した。
3「妊婦・授乳婦における嗜好品摂取の悩みと楽しみ―『悪の魅惑論』を手がかりとした嗜好品概念の再検討―」	単独	平成22年12月	『2010年度奈良女子大学社会学研究会秋の例会』（奈良女子大学）	妊婦・授乳婦たちの食生活に注目して女性たちの逸脱的な摂取行動や欲望がどのようなメカニズムによって生じるのかを、「悪の魅惑論」を手がかりに検討した。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
4「妊娠と食事をめぐる悩み・楽しみ――ある初産婦の妊娠日記とインタビューを事例に――」	単独	平成23年7月	『現代風俗研究会2011年度第4回例会』（徳正寺）	妊娠期の女性たちは、世相によって変化する食物規制や推奨にもまれながらどのような食生活を送っているのかについて、ある初産婦の妊娠日記とインタビューを手がかりに検討した。
5「妊婦・授乳期女性の食生活に見る乳児・胎児への配慮と欲望との葛藤――近畿圏でのインタビュー調査を手がかりに――」	単独	平成23年9月	『日本家族社会学会第21回大会』（甲南大学）	妊娠期・授乳期の女性たちの食生活の実践を明らかにする。女性たちは妊娠・授乳をきっかけにどのようなコンテクストに置かれるのか。相互交渉の過程の中で、社会規範はいかに立ち現れるのか。女性の欲望が先鋭化した摂取状態である「過剰摂取」はなぜ発生するのか。これらの点について詳細に検討した。
6「中国・日本における環境配慮行動の規定因の予備的分析：他者の実行度認知に着目して」	共同	平成23年9月	『日本社会心理学会第52回大会』（名古屋大学）	他者の実行度認知が環境配慮行動に及ぼす影響を、日本と中国との規定因の比較を通じて検討した。その結果、環境配慮行動の実行度については、日中間では大きな差は見られなかった。 報告者：安藤香織・大淵裕美・磯部香
7 'Determinants of Pro-Environmental Behaviors in China and Japan -The Role of Estimation of Others' Behaviors'	共同	平成23年12月	"The Second International Conference of Indigenous and Cultural Psychology" (University of Udayana, Indonesia)	他者の実行度認知の中でも、友人の実行度認知と地域住民の実行度認知が、環境配慮行動に及ぼす影響について、日本と中国との規定因の比較を通じて検討した。その結果、環境配慮行動の実行度については、日中ともに、友人の+E21実行度認知の方が強い影響がみられることが明らかとなった。 報告者：ANDO Kaori・OHBUCHI Yumi
8 'Practice of Eating Strategies among Pregnant Women: Accommodation and Resistance to Medical Knowledge	単独	平成24年2月	"ANU Japanese Studies Graduate Summer School" (Australian National University, Australia).	妊娠期の女性たちがどのように医学的アドバイスに順応し、抵抗しているのかを、専門知―素人知の概念を用いながら、食生活の実践に注目して検討した。
9「青年期における性教育方法の検討」	共同	平成24年7月	『第27回奈良県母性衛生学会』（奈良県医師会館）	ピアカウンセリングに代表される、主体的な参加を可能とする性教育方法の実施度や有効性を、質問紙調査を通じて検討した。その結果、主体的な参加型性教育方法は取り入れられていないことが明らかになった。主体的に参加できる性教育方法導入（ピアやグループワーク）にあたり、個人の経験や羞恥心などを十分考慮した上で、方法を決定することの重要性が示唆された。 報告者：田中智子・新谷祐美・西上紫萌・中村喜代美・大淵裕美
10「A市・B幼稚園における幼児期の性教育について―保護者の対応に関する実態調査―」	共同	平成24年7月	『第27回奈良県母性衛生学会』（奈良県医師会館）	幼児期の性教育に関する実態調査を、幼稚園の保護者を対象に質問紙法を用いて行った。家庭での性教育の実際を知り、幼児期の性教育の改善点や助産師が出来る援助の方向性を明らかにすることを目指した。 報告者：友田果那・川口恵理・仲谷依世・中村喜代美・大淵裕美
11「妊娠期の母親から見た夫のサポートと求める内容の把握」	共同	平成24年7月	『第27回奈良県母性衛生学会』（奈良県医師会館）	妊娠期の母親からみた夫のサポートの現状と母親の求める育児に注目し、実態調査を行った。助産学の立場から、早期から夫の育児参加行動を促進することが、どのように母親の良好な妊娠経過につながるのかについて模索した。 報告者：志賀加奈子・染川真美・神田菜々子・中村喜代美・大淵裕美

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
12「妊娠・出産研究における食のアプローチの意義」	単独	平成24年7月	『第14回奈良女子大学社会学研究会』（奈良女子大学）	妊娠・出産に関する研究群のうち、主に家族社会学における研究の到達点と課題を整理したうえで、食という視点からアプローチする意義について検討した。
13「出産の医療化論再考―『妊婦中心の健診』と助産師国家試験作成プロセスにみる女性の抵抗の限界―」	単独	平成24年9月	『日本家族社会学会第22回大会』（お茶の水女子大学）	ヘルシズム論および教育制度分析の視点から、助産師の再生産システムの検討を通して、従来の出産の医療化論を再考することを目指した。特に、助産師の教育内容の高度化や国家試験作成プロセスを分析した。その結果、助産師による妊婦健診は、正常な経過をたどる女性にとって「脱医療化」ではなく「医療化」を徹底する作用があると指摘した。
14「妊娠期女性の食事戦略――ある初産婦の食事日記を手がかりに――」	単独	平成24年10月	『第32回家族関係学セミナー』（岡山大学）	妊娠期の女性に見られる「食事戦略」を、ある初産婦の食事日記とインタビューデータをもとに検討した。具体的には、妊娠中の食事選択や料理行動に影響を与えた「塩分制限」と「絶対安静」の二つの困難に着目し、彼女が置かれた状況のなかで、どのような戦略をとったのかを考察した。
15「妊娠期女性の食事実践に関する研究 ―『パーフェクト妊婦』と情報収集―」	単独	平成25年2月	『2012年度第3回生活経営学部会・関西地区会』（同志社大学）	妊娠期における女性たちの食事実践について、行動の判断となる情報収集や活用に着目しながら、女性たちによる胎児の養育責任の様相を、「パーフェクト妊婦」という概念を用いて明らかにした。
16「出産経験と食事実践に関する検討―『NHK健康に関する世論調査』の二次分析を手がかりに―」	単独	平成25年6月	『2012年度第4回生活経営部会・関西地区会』（武庫川女子大学）	出産経験の有無が女性の食事実践にどのような影響を与えるのかについて、「健康に関する世論調査」の二次分析を通じて検討した。
17「出産の医療化論再考」	単独	平成25年7月	『第15回奈良女子大学社会学研究会大会』（奈良女子大学）	2013年2月に『ソシオロジ』に掲載された論文の合評会を行った。具体的には論文の概要について説明した後、コメンテーター2名との質疑の後、フロアからの質問に回答した。
18「妊婦健康診査の満足度に関する現状と課題―実施者・施設・環境に注目して―」	共同	平成25年7月	『第28回奈良県母性衛生学会』（奈良県医師会館）	妊婦健診の内容、方法、実施者の違いが妊婦たちの満足度に与える影響と、満足度を高めるために必要な内容を明らかにするために文献研究を行った。 報告者：田中佐世・野井歩・村田ちか子・大淵裕美
19「子どもを亡くした親・家族への支援―向き合い・寄り添える看護を目指して―」	共同	平成25年7月	『第28回奈良県母性衛生学会』（奈良県医師会館）	死産を経験した産婦や家族への支援の現状と課題を明らかにするために、文献検討を行った。その作業を通じて、今後必要とされる支援の可能性を示した。 報告者：南和弥・石原慶子・渡辺ひろみ・大淵裕美
20「医療過疎と少子化のエスノグラフィ―奈良県南部を事例に―」	単独	平成25年9月	『第20回関西若手ルーラル研究会』（キャンパスプラザ京都）	『第20回関西若手ルーラル研究会』（キャンパスプラザ京都）　少子化と医療過疎が進む農山村地域に住む妊婦たちの経験を検討した。具体的には、奈良県の東部・南部の県境にある宇陀郡御杖村、吉野郡野迫川村、吉野郡上北山村に在住する女性たちを取り上げる。村内出身者、都市部から村に移住した者、村から都市に移住した者の３つのタイプに分け、それぞれの経験の特徴を抽出する。その作業を通して、空間的制約と食事実践を通した妊婦の実践についての知見の析出を試みた。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
21「妊婦をめぐる食を通じた健康管理と＜母＞の変容―母子健康手帳における栄養の記述の変遷を中心に―」	単独	平成25年10月	『第33回家族関係学部会セミナー』（奈良大学）	国家による妊婦の管理の歴史的変遷について検討した。具体的には、母子健康手帳における栄養に関する記述の変化と栄養行政の変遷の分析を通して、食を通した胎児への配慮がどのように強化されていくのかを明らかにした。その作業を通じて、国家が示す理想的な食事を行う妊婦像＝＜母＞のイメージがどのように変化してきたのかについて考察した。
22「戦時下における身体を通じた少国民の形成―島田豊・児童舞踊・愛国行進曲―」	単独	平成25年12月	『2013年度奈良女子大学社会学研究会例会』（奈良女子大学）	戦時下（日支事変前後）における子どもの国民化の一側面を明らかにする。具体的には、大正中期より勃興し、昭和初期から終戦にかけて発展をとげた児童舞踊に着目する。特に、「児童舞踊」を公称したとされる島田豊（1900-1984）に焦点を当てながら、「愛国行進曲」「少国民愛国歌」を事例に検討する。以上を通して、「非常時」に備えた子どもの身体の形成が、メディアによる児童舞踊の産業化とともになされた点を指摘した。
23「若年層男女における食の安全性配慮に関する規定要因―「健康に関する世論調査2009」の分析―」	単独	平成26年1月	『2014年第2回生活経営学部会関西地区会』（武庫川女子大学）	20～30代の若年層は、出産・育児などの次世代の育成を担う世代である。この世代層が、主体的な生活者となるためには、どのような点に考慮して支援していけばよいのだろうか。本報告では、その前段階として、若年層における食品の安全性に配慮した行動にどのような要因が影響しているのかを量的手法を用いて検討した。
24‘Influence of Childcare Experience on Women’s Dietary Habits: Analysis of Public Opinion Poll on Health’	単独	平成26年7月	“ⅩⅧ ISA World Congress of Sociology”（パシフィコ横浜）	出産経験の有無が女性の食事実践にどのような影響を与えるのかについて、NHK「健康に関する世論調査」の二次分析を通じて検討した。その結果、「三食抜かずに食べる」という食事回数のみが出産経験の有無によって有意な差が見られた。
25 ”Acquisition of Ballet Technique: Collective Teaching in the Ballet Studio and Social Control	単独	平成26年7月	“ⅩⅧ ISA World Congress of Sociology”（パシフィコ横浜）	日本のバレエ教室を事例として、集団学習の際に生じる、他者に向けられた指導を、生徒たちはどのようなきっかけやプロセスを通して、自分の技術の向上へと結びつけていくのかについて検討した。その結果、集団でバレエを学習する生徒たちは、他の生徒に対する教師の指導を過大に理解するだけでなく、他者の身体の変化を観察して分析するという知覚や思考と、自らの身体の動作を結びつける訓練を繰りかえしながら、技を獲得していることが示唆された。
26「助産師が行う性教育のあり方～思春期におけるピアエデュケーションでの助産師の介入」	共同	平成26年7月	『第29回奈良県母性衛生学会』（奈良県医師会館）	思春期の性教育の実態や方法に関する文献検討を行った結果を報告した。具体的には、近年効果的な教育方法と言われているピアエデュケーションに着目しながら、助産師が行う性教育の有効性や意義について検討した。 報告者：秋月志保・岩本理沙・野口玲菜・梶間敦子・大淵裕美
27「出生前診断を受検する妊婦と家族へのケア―文献検索による研究―」	共同	平成26年7月	『第29回奈良県母性衛生学会』（奈良県医師会館）	出生前診断を受ける妊婦や家族の意思決定を支える支援の現状と課題を明らかにするために、文献レビューを行った。その作業を通じて、今後の支援の方向性を検討した。 報告者：飯塚望水・奥田恵美・小崎美智代・梶間敦子・大淵裕美
28「外国人の日本での出産における問題点とその関わり」	共同	平成26年7月	『第29回奈良県母性衛生学会』（奈良県医師会館）	在日外国人女性の妊娠・出産・育児に対するニーズや心理、外国人に対する母子保健、その他の医療制度や医療者側のケアの必要性に関する文献検討を行った。在日外国人女性が抱える課題を明らかにし、今後のケアやかかわりに活かす視点の析出を試みた。 報告者：谷口侑子・桑原萌・吉本有里・梶間敦子・大淵裕美

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
29「現代日本における妊娠期女性の調理実践と意識の変容」	単独	平成27年2月	『フィールドネット・ラウンジ企画「フィード(feed)×フィールド(field)：食べさせる／られる行為から社会関係を読み解く」』（東京外国語大学）	妊娠期女性の調理に注目し、家族との相互作用の結果が食卓のメニューにどのように現れるのかを検討し、その作業を通して、食べさせる／食べられる行為と社会関係との関連について考察した。
◆書評論文				
1「食制研究の手引書としての「三度の食事」」	単著	平成24年3月	奈良女子大学民俗学研究会『柳田國男を読む―女性研究者による柳田再読―』pp.17-20.	柳田國男『村と学童』に所収されている「三度の食事」に関する書評論文。「三度の食事」を柳田の食制研究のエッセンスとしてとらえ、稲作労働と民俗語彙に注目して紹介した。さらに、後続の研究者からの評価についても指摘した。
◆学会予稿集・二次抄録・その他論文				
1「A市・B幼稚園における幼児期の性教育について―保護者の対応に関する実態調査―」	共著	平成25年2月	奈良県母性衛生学会『奈良県母性衛生学会誌』26,pp.43-45.	幼児期の性教育に関する実態調査を、幼稚園の保護者を対象に質問紙法を用いて行った。家庭での性教育の実際を知り、幼児期の性教育の改善点や助産師が出来る援助の方向性を明らかにすることを目指した。 執筆者：友田果那・川口恵理・仲谷依世・中村喜代美・大淵裕美（共同研究につき、本人担当部分抽出不可能）
2「青年期における性教育方法の検討」	共著	平成25年2月	奈良県母性衛生学会『奈良県母性衛生学会誌』26,pp.46-48.	ピアカウンセリングに代表される、主体的な参加を可能とする性教育方法の実施度や有効性を、質問紙調査を通じて検討した。その結果、主体的な参加型性教育方法は取り入れられていないことが明らかになった。主体的に参加できる性教育方法導入（ピアやグループワーク）にあたり、個人の経験や羞恥心などを十分考慮した上で、方法を決定することの重要性が示唆された。 執筆者：田中智子・新谷祐美・西上紫萌・中村喜代美・大淵裕美（共同研究につき、本人担当部分抽出不可能）
3「妊娠期の母親から見た夫のサポートと求める内容の把握」	共著	平成25年2月	奈良県母性衛生学会『奈良県母性衛生学会誌』26,pp.27-28.	妊娠期の母親からみた夫のサポートの現状と母親の求める育児に注目し、実態調査を行った。助産学の立場から、早期から夫の育児参加行動を促進することが、どのように母親の良好な妊娠経過につながるのかについて模索した。 執筆者：志賀加奈子・染川真美・神田菜々子・中村喜代美・大淵裕美（共同研究につき本人担当部分抽出不可能）
4「子どもを亡くした親・家族への支援――向き合い・寄り添える看護を目指して」	共著	平成26年1月	奈良県母性衛生学会『奈良県母性衛生学会誌』27,pp.22-25.	死産を経験した産婦や家族への支援の現状と課題を明らかにするために、文献検討を行った。その作業を通じて、今後必要とされる支援の可能性を示した。 執筆者：南和弥・石原慶子・渡辺ひろみ・大淵裕美（共同研究につき、本人担当部分抽出不可能）
5「妊婦健康診査の満足度に関する現状と課題―実施者・施設・環境に注目して―」	共著	平成26年1月	奈良県母性衛生学会『奈良県母性衛生学会誌』27,pp.29-31.	妊婦健診の内容、方法、実施者の違いが妊婦たちの満足度に与える影響と、満足度を高めるために必要な内容について、文献研究を通じて明らかにした。 執筆者：田中佐世・野井歩・村田ちか子・大淵裕美（共同研究につき、本人担当部分抽出不可能）
6「助産師が行う性教育のあり方―思春期におけるピアエデュケーションでの助産師の介入―」	共著	平成27年1月	奈良県母性衛生学会『奈良県母性衛生学会誌』28,pp.12-13.	思春期の性教育の実態や方法に関する先行研究レビューを行った。具体的には、近年効果的な教育方法と言われているピアエデュケーションに着目しながら、助産師が行う性教育の有効性や意義について検討した。 執筆者：秋月志保・岩本理沙・野口玲菜・梶間敦子・大淵裕美（共同研究につき、本人担当部分抽出不可能）

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
7「出生前診断を受検する妊婦と家族へのケア―文献検索による研究―」	共著	平成27年1月	奈良県母性衛生学会『奈良県母性衛生学会誌』28,pp.16-19.	出生前診断を受ける妊婦や家族の意思決定を支える支援の現状と課題を明らかにするために、文献レビューを行った。その作業を通じて、今後の支援の方向性を検討した。 報告者：飯塚望水・奥田恵美・小崎美智代・梶間敦子・大淵裕美（共同研究につき、本人担当部分抽出不可能）
8「外国人の日本での出産における問題点とその関わり」	共著	平成27年1月	奈良県母性衛生学会『奈良県母性衛生学会誌』28,pp.25-28.	在日外国人女性の妊娠・出産・育児に対するニーズや心理、外国人に対する母子保健、その他の医療制度や医療者側のケアの必要性に関する文献検討を行った。在日外国人女性が抱える課題を明らかにし、今後のケアやかかわりに活かす視点の析出を試みた。 報告者：谷口侑子・桑原萌・吉本有里・梶間敦子・大淵裕美（共同研究につき、本人担当部分抽出不可能）
9「教育社会学といじめ経験―『考え、議論する道徳』に生かす可能性」	単著	平成29年2月	（株）ERP『教育PRO』47(3),pp.20-21.	「いじめ」の要因について、「家庭格差論」について紹介するとともに、教育社会学で行われている教育調査の手法である、徹底的な議論による自らの仮説の構築と、アンケートやインタビュー調査に基づく実証的な検証方法について概説した。教育社会学の視点や方法の導入は、新学習指導要領の「考え、議論する道徳」に寄与する可能性を指摘した。
◆講演・講師				
1「住民と共に取り組む健康づくり―聞き取り調査事業第１報―」	単独	平成26年6月	『平成26年度吉野町第1回健康づくり推進協議会会議』（吉野町保健センター）	吉野町の保健師による健康事業が、住民の健康活動に与えた影響の解明を目指した。具体的には、吉野町で活動する3つの団体へのヒアリングを実施し、保健事業が住民に与えた効果を分析し「吉野町モデル」を析出した。この作業を通じて、吉野町における「健康を核とした地域づくり」の方向性を示した。
2「はっぴぃ明日流 妊産婦の為の防災を考えよう」	単独	平成26年12月	『はっぴぃ明日（あーす）の会』（Women’s Future Center）	妊産婦のための防災について、ワークショップを行った。具体的には、「新潟中越沖地震」で被災した妊婦の声や日本助産師会等が発行する防災マニュアルを紹介しながら、居住地域の特性を踏まえた平時からできる備え等について検討した。
3「健康増進計画策定事業取組の現状と課題～住民が主役の健康づくりとは～」	単独	平成27年2月	『平成26年度吉野町第2回健康づくり推進協議会会議』（吉野町保健センター）	平成26年度の吉野町健康増進計画策定事業の実績と、次年度への展望を報告した。具体的には、平成26年度の調査を通じて、住民が主役となる「健康を核とした地域づくり」活動が一定程度なされていたことが確認された。それを踏まえ、次年度以降では、「住民主役型」地域づくりや、生活習慣病・介護予防の両側面において切れ目のない持続可能な「新・吉野モデル」の展開可能性を示した。
◆セミナー企画・司会等				
1「ケア・支援をめぐる現状と可能性―養護・保育・介護の視点から―」	共同	平成25年9月	奈良女子大学大学院人間文化研究科「キャリア開発のための院生自主企画」採択プログラム（奈良女子大学）	本企画は、二部構成で実施した。まず、第一部では、児童養護施設の施設長・須田昭司氏より、「家族と離れて暮らす子どもたちの未来」という題で基調講演をいただいた。第二部では、「ケア・支援の可能性～保育・介護・養護の視点を踏まえて～」と題して、2名の学内教員からの話題提供と、須田氏を交えたパネルディスカッションを実施した。ケア労働や地域との交流について議論をした後、「保育・介護・養護について一般市民ができること」についての暫定的回答をいただいた。本企画は、奈良女子大学ポストドクター・キャリア開発事業との共催であった。登壇者：須田昭司・久木元美琴・井口高志・大淵裕美（セミナー企画・司会・コーディネーターを担当）

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
2「「命」のつながりを考える」	共同	平成26年3月	『河瀬直美監督作品「垂乳女」上映会＆クロストーク』（奈良女子大学）	出産という次世代を産み育てる営みを通して、生きること、家族とのつながり、医療現場との関わりなどについて検討する機会を設けた。具体的には、映画監督・河瀬直美氏ご自身の出産経験を映像化したドキュメンタリー映画『垂乳女』の上映会の後に、河瀬氏を交えながら、助産師・出産経験者・研究者によるクロストークを行った。 登壇者：河瀬直美・左古かず子・芝田和美・真鍋りょうこ・大淵裕美（企画協力ならびに司会・コーディネーターを担当）
3「社会に活かす 子育て経験者の力～ママの仕事、ママがつくり出す！」	共同	平成27年2月	『奈良女子大学ポストドクター・キャリア開発事業ワークスタイルセミナー』（奈良女子大学）	「奈良のママが仕事をつくる会＜愛称：ナラマーシカ＞」代表・井上京子氏を講師に招き、子育て経験者の力を社会に活かすための起業体験談や商品開発ワークショップを行った。（企画協力ならびに当日の司会・コーディネーターを担当）
◆競争的資金獲得状況				
1「妊婦・授乳婦における嗜好品摂取の悩みと楽しみ――現代日本の出産・育児に関する文化社会学的研究」	代表	平成21年4月～平成22年8月	『研究奨励事業（研究助成）』嗜好品文化研究会	現代日本社会における妊娠・授乳期の女性たちは、何を嗜好品ととらえどのような意味を付与しているのか。嗜好品摂取に関する悩みと楽しみとはいかなるものかについて、近畿圏在住の妊婦・出産経験者へのインタビュー調査を通じて明らかにした。
2「助産師のライフコース・キャリアに関する社会学的研究――奈良県・福井県の事例を手がかりに――」	代表	平成21年6月～平成22年3月	『平成21年度若手女性研究者支援経費』奈良女子大学	福井県と奈良県に在住する開業助産師たちにインタビュー調査を実施し、彼女たちのライフコース・キャリアの一端を明らかにした。
3「妊娠・出産期の食生活への認識と実践に関する社会学的研究――近畿圏都市部・農村部におけるインタビュー調査に基づく男女間・世代間比較を中心に――」	代表	平成23年4月～平成24年2月	『笹川科学研究助成』日本科学協会	「医療機関への距離と受診機会の多寡という地理的制約が、妊娠期における食の規制をどの程度左右しているのか」という仮説を検証するために、近畿圏都市部・農村部在住の妊婦や出産経験者にインタビュー調査を実施した。
4「医療過疎地における妊娠・出産期家族の生活戦略に関する社会学的研究―奈良県農山村地域における食生活の認識と実践を中心に―」	代表	平成24年6月～平成25年3月	『平成24年度若手女性研究者支援経費』奈良女子大学	「地域的制約の中での食事管理の困難さ」に焦点を当て、奈良県の農山村地域を対象に、医療機関への距離という地理的制約が、食の規制をどの程度左右するのか、という問いの解明を目指した。
5「妊娠期女性をめぐる食を通じた健康管理と＜母＞の変容に関する社会学的研究―母子健康手帳・母子健康手帳副読本における栄養の記述の変遷に注目して―」	代表	平成25年6月～平成26年3月	『平成25年度若手女性研究者支援経費』奈良女子大学	国家がいかに妊娠期の女性たちに対して、「理想の＜母＞像」を提示してきたのかについて、主に栄養に関する記述の変遷に着目して検討した。具体的には、財団法人母性衛生研究会が発行する『母子健康手帳副読本』や、『母子健康手帳』を収集・分析した。
6「食を通じた妊婦の健康管理の科学化に関する社会学的研究―「妊産婦のための食生活指針」策定過程に着目して―」	代表	平成27年6月～平成28年3月	『平成27年度若手女性研究者支援経費』奈良女子大学	2000年代以降における国家による妊婦の健康管理政策の形成過程に着目して検討する。具体的には、平成18年に発表され母子健康手帳にも反映された「妊産婦のための食生活指針」の策定過程に着目して、医師、助産師、栄養士などの専門家たちが、それぞれの専門領域を踏まえながらどのように妊婦へのメッセージを策定しようとしたのか、また国における他の政策（「食育」をめぐる政策）とどのように関連しながら形成されたのかを明らかにした。
7「女性の健康における社会的決定要因とライフスタイルに関する研究」	研究分担者	平成28年7月～平成29年3月	厚生労働省：平成28年度厚生労働科学研究費補助金（女性の健康の包括的支援政策研究事業）	研究分担者として、「困難な状況下でも良好なライフスタイルを実践する女性たちの発掘と問題解決法の解明に関する探索的検討」という研究テーマで、シングルマザーを対象にインタビュー調査を実施した（研究代表者：女子栄養大学・林芙美）。

教育研究業績書

平成29年3月31日

氏名　安藤　邑惠

研究分野	研究内容のキーワード	
高齢者看護　　高齢者福祉	高齢者の看護と介護（認知症ケア・高齢者のQOL・家族の介護負担）	
教育上の能力に関する事項	年　月　日	概　　要
1　教育方法の実践例 1）老年看護概論； 高齢者擬似体験演習の計画・実施	平成7年9月-現在に至る	授業前調査では学生の約75％は高齢者との生活体験ばかりではなく会話さえも経験したことがない現状である。高齢者擬似体験演習の目的は、老年看護学の授業開始に先立ち高齢者を全人的にイメージ化し易くするために行っている。装具は80歳の高齢者の身体的特徴を想定して、眼は色ゴーグルで白内障を、耳は耳栓で難聴を、手先の巧緻性の低下は手袋を着け、四肢には砂嚢を装着し動きや行動の自由度を制約して体験する。学習内容は日常生活行動を行う。例えば箸で食事をする、自販機に小銭を入れ飲料水を購入し、水分補給をする、トイレに座って排泄時の体勢を行うというものである。この体験を通して学生は、なぜ高齢者の行動がゆっくりなのか、なぜ転倒し易いかといったことに気づき、高齢者にどのような配慮が必要か、看護者としてどのようなこころ構えを持たなければならないかを学生自身が引き出している。この体験により学生は以後の講義内容に強い関心とリアルな感覚をもって参加している。
2）老年看護概論； メディア機器を活用した授業	平成7年4月-現在に至る	看護基礎教育においては、経験知の学びよりも理論に力点が置かれている傾向にある。生活経験の少ない学生の理解を深めるには経験知によって生活実態を知らせることも重要と考える。老年看護学は高齢者を対象とするところから老い、加齢、生命、生活という現実の理解を促す事を重視して教育に携わっている。老年看護学概論は抽象的な内容や法的な内容が多く、社会問題と接点をもって伝えて行くために最新の統計資料や高齢者関連の新聞記事等の教材を提供し、解説だけでなく学生との意見交換に用いている。またスライドやVTRによって重要な内容や看護ケアの活動現場をビジュアルに示し理論との統合を図っている。
3）老年看護概論； 学生自身による、「健康な高齢者へのインタビューレポート」を活用した演習（ディスカッション）	平成9年4月-現在に至る	健康な高齢者へのインタビューの目的は高齢者との接点が少ない学生が高齢者の生活ぶりや人生を知り、高齢者理解を深めることにある。インタビューは後期高齢者を対象としている。方法は学生の身近にいる高齢者のある１日を一緒に過ごし、高齢者とじかに触れあう。内容は高齢者が１日をどのように時間を使っているか、高齢者が愉しみにしていることは何か、高齢者の暮らし振りや望んでいること、考えている事を直接聞き、考察を加えてレポートにする。クラスではこの体験の学びを持ち寄りディスカッションしている。その中で後期高齢者の共通性、相違点、個別性を整理することによって、時代的な背景ばかりでなく、ある種の共通した価値観があることに気づいている。高齢者をよりリアルに理解できる効果があり、高齢者との距離が縮まり、尊敬とともに近親感を覚え、高齢者へのポジティブな見方について修正を行っている。

教育上の能力に関する事項	年　月　日	概　　要
4）老年看護学における授業と 演習・実習の統合化に向けての学習課題	平成9年4月-現在に至る	平成9年度、新カリキュラム移行後、老年看護概論、老年臨床看護、老年看護学臨地実習の3教科が統合して学習が進められるよう授業・演習・実習を関連づけた学習課題を提示している。この課題は各科目の終了時に学習のポイントを示し、系統的に知識を整理している。これは机上の知識から看護実践への活用・応用ができるように、解剖学・生理学・病態学を含め保健・医療・福祉行政も視野に入れて看護援助を関連づけている。これは知識を活用し、ベッドサイドの看護に偏らず、保健・医療・福祉を視野に置いて有機的に関連して学習できるよう配慮している。この学習課題は、実習で看護展開を行う時の参考資料として活用でき、また国家試験の学習手引きとしても活用している。国試対策の補講ではこれらに加え、最新のデータや情報の追加を行う。卒業生は実習中や国試対策に大いに参考になったという反応があった。学生は各自のオリジナルな学習ノートを作成し、内容の追加等は学生が必要に応じて行い、教員は個別指導や資料の紹介をして補い、出題基準も意識づけながら実習カンファレンスのテーマとしても活用している。
5）老年看護学臨地実習指導の展開の工夫 ①３年生（病院・老健）実習 ―導入・指導・まとめ―	平成12年4月-現在に至る。	平成9年度、新カリ変更後、老年看護学臨地実習は、病院と老人保健施設で４週間の臨地実習を行っている。この展開の導入に際しては、受持ち患者は可能な限り、学生の学習課題にそって臨床指導者との詳細な打ち合わせにより選択する。学生には個々の実習目的を明確にし、指導者との共通理解を図った上で、学生が実習に集中できる環境作りをする。内容は実習目的・目標を個々のレベルに合わせて提示し、事例の看護展開と技術演習を実施させる。看護の現場で実際に行わなければならない看護技術の確認や修正等は個別指導を含み、学内演習を必要に応じておこなう。実習記録では、問題解決思考によって展開されているかを確認する。4週間の実習を通して高齢者看護への関心を高めることを重視している。実習最終日は老年看護学のまとめと位置づけ、異なる２施設の実習場で学習してきた学生を一同に会し、受け持ち患者の看護から引き出された高齢者の理解や看護の意味づけを行う。学習方法は、実習グループとは異なるメンバーで構成し、ディスカッションを行う。学習効果は、実習施設の看護の特色は異なるが、高齢者看護の目指すところや高齢者看護の目標や原則を現場体験と関連づけ、個々の大切な要素は共通していること、すなわち老年看護概論で学んだ内容を確認している。また、看護職と介護職との役割の違い、連携の重要さについて現場の事例を教材として理解を深めている。
②３年生/老年看護学実習場面での学生相談・面接時間の設定	平成12年4月-現在に至る。	老年看護学臨地実習中、4週間の臨地実習を円滑に運ぶために教員配置は、実習時間中助手１人が実習場に常駐し、学生の相談、実習内容・技術の指導にあたっている。教員は2～4病棟で実習する学生10人数人を担当し、患者との関係、病棟と調整を必要に応じて行っている。学生にはいつでも相談にのることを伝えているが相談に来られない学生もいるため、ケア現場を確認したり、指導者との意見交換を蜜にし、学習が進まなかったり、戸惑っている学生には面接時間を設定している。このような環境を設定することよって長期欠席者以外は全員及第している。これ以外にも教員が必要と考えた時は適宜相談・面接時間を設け、円滑な実習ができるよう環境調整をしている。

教育上の能力に関する事項	年　月　日	概　　要
③老人福祉施設での臨地実習調整 －実習打ち合わせと施設指導者との関わり－	平成18年度－現在に至る （岐阜医療科学大学）	実習施設への指導は、学生に学ばせて欲しいことを明確に伝え、理解を得るために直接教員が出向き担当者と密な調整をしている。具体的には施設指導者が毎日のまとめに短時間でも関わり、学生の疑問に答えてもらうよう、また実習記録に目を通してもらい気づいたことをその時・その場で伝えてもらうように依頼している。学生には実習の総括として「老人福祉施設実習を通して学んだこと」と題し、レポートを課している。実習施設へはこのレポートを送付している。施設は学生の率直の意見や考えを知り、高齢者への直接ケアとともに学生指導に還元され、年を追って学生への理解が深まり。指導内容が向上し、施設の実習環境が整いつつある。
6）ICF(国際生活機能分類)を用いた高齢者理解の授業　－医療モデルから社会モデルの理解に向けて－	平成20年4月-現在に至る。	看護過程の展開をICF（国際生活機能分類）の枠組みにそった授業内容を工夫した。2005年の介護保険改正により、ICFは保健・医療・福祉・教育等の職種を越えての「共通言語」になり、これを用いてケアすることが明示された。これは身体障害者だけに留まらず、高齢者の分野においてもICFの概念に基づいたポジティブな視点が重要となる。授業では基本概念をはじめ、「医療モデル」と「生活モデル」の違いや高齢者が「その人らしく生活する」とはどのようなことかを理解することをねらいとした。方法は老人保健施設に入所している脳梗塞をもった利用者を事例として用いた。看護過程の演習をしながらディスカッションを交え、これまで医療モデルの枠組みで思考していた情報収集やアセスメントを社会モデルとして生活の全体像を理解できるよう、すなわちICFの視点に転化できるよう対比表を用いた。これは臨地実習にも活用を予定しているため、実習記録用紙の形式に則って書き方を含め個別指導し、事例のモデル回答も示した。
7）ICF(国際生活機能分類)を用いた高齢者理解の実習記録用紙の工夫	平成20年9月-現在に至る。	ICF（国際生活機能分類）の概念を用いた実習記録用紙の工夫を行った。ICF研究会で制作したICFケアプラン記録用紙を参考に「医療モデル」と「生活モデル」が併記できるようにした。ICFケアプラン記録用紙は心身機能・構造、活動、参加の３点を中心として、対象者を中心として多面的に情報を収集し、アセスメントに結びつけることができるという特徴がある。またICFケアプラン記録用紙には利用者の望みや家族の望みを記入する箇所や援助計画に対してこれまでの「看護問題」一辺倒でなく、その人の生活の視点から達成したい課題・希望を「生活課題」として付加した。医療の視点に重視される、心身機能・構造だけではなく、生活の視点に立ってその人を総合的に、幅広くアセスメントができ、高齢者のQOLについて学習を深めることができた。

教育上の能力に関する事項	年　月　日	概　　要
8）高齢者をトータルに理解する手段としての「高齢者総合的生活評価」の導入	平成22年4月-現在に至る	看護ケアのアウトカムとして、実施したケアの効果を可視的に評価できる工夫を行った。ケアのアウトカムは医療経済や人材育成にも重要な視点であり、国試の出題基準にも含まれている。これは看護過程の一部であり、高齢者のケアニーズにどのくらい近づくことができたかを機能、心理・認知、満足度に関連する各種の尺度を用い、EBNとして客観的に生活のQOLを査定しケアの優先度や効果を評価する指標となる。今回は学生が理解しやすいように、多くの教科書が採用している6つの視点、「意欲」「ADL」「うつ状態」「認知度」「社会関係性」「生活満足度」を主軸とした。評価時期は実習で高齢者を受持った直後と実習終了直前の2回行った。評価を6つの視点からレーダーチャートに示すことで「看護問題」、「生活課題」が浮き彫りになり、その視点に重点を置き相互の関係を考察しながらケアプランを立てた。レーダーチャートに置き換えることによってケア効果を可視化でき、効果があった原因、効果が少なかった原因を学生自身で考察ができ、高齢者独特の課題、自身の学習不足を自覚し、看護師からの助言等も参考しながら探究心や学習意欲の向上につながった。
2　作成した教科書、教材 1)科目　老年看護学概論 ー外国の高齢者の保健・医療・福祉の教材としてー オーストラリアの高齢者ケアの実情に関する教材の入手	平成10年4月～現在に至る	学生には広い視野を持たせるために外国の高齢者ケア事情を提供する１つとしてオーストラリアを取り上げている。教材はオーストラリアの共同研究者の協力を得て自ら入手したり、現地のケアスタッフとのカンファレンスにより、制度の違い、ナースの活動、社会サービスの利用状況等をVTRやDVDをはじめ看護用品（大腿骨骨折予防パンツ）を紹介している。 インターネットを利用し、オーストラリアの認知症協会や友人を介して、NSWハモンド財団から新しい情報を得ている。学生は日豪の比較はもとより、日本の制度やしくみの課題を考えることにつながった。
2）老年看護学臨地実習の実習記録の工夫	平成18年4月 - 平成25年3月 （岐阜医療科学大学）	新設校であり、実際の使用は平成20年9月からであるが、大学の教育理念、学科の教育目標、学生のレディネス、卒業時目標を学科全体で討議した上で、老年看護実習の目的・目標・方法等について実習施設と指導内容の協議を繰り返しながら行った。実習の基本方針を①医療モデルに偏らず、生活モデルも含めた包括的に対象を捉えることができることとした。②実践を重視し問題思考過程がスムーズに展開ができるよう、また記録の負担が重くなりすぎないよう配慮した。具体的にはICF（国際生活分類）にそって情報・アセスメントができ、その人らしさを大切にできるケアプランが立案できる枠組みとした。必要に応じて、既存の生活評価尺度を活用し、学生が自分のケア評価、課題が発見でき、次の実習につなぐことができた。 安藤邑惠、渡邊美幸、上平公子、和田裕子、吉村雅世、木村裕美子、藤吉恵美

教育上の能力に関する事項	年　月　日	概　　要
3)老年臨床看護：看護実践のアセスメントのための手引書として「ICF の視点に基づく高齢者ケアプロセス」(共著)「学文社」	平成21年3月 （再掲）	高齢者ケアにおいては、病院完結型の医療制度は終わりを告げ、生活の質を保証する療養の場、ケアの質の高い継続した支援が高齢者ケアに求められるようになってきた。改正された介護保険制度では、WHOで20001年に国際生活機能分類（International Classification of Functioning Disability, and Health）（以下ICF）の視点に基づきケアが必要であるという指針を出した。本著はICFの視点に基づき、高齢者ケアプロセスに必要なアセスメントの知識を提示し、根拠あるプランの流れを理解でき、かつ事例展開の演習によって、確かな力をつけることができるように工夫をした。本著では、ICFの第1レベルでの情報収集内容を選りすぐり、ICFの視点で得た情報をマズロー理論、ナイチンゲール理論、ヘンダーソン理論などで展開ができるよう工夫を行った。 B5判、168ページ 編著者：安藤邑惠、小木曽加奈子 担当分：第1章　第3節、第2章　第1節・第2節、第3章第1節４、第4節　第1節 共著者：阿部隆春、今井七重、佐藤八千代、柴田益江、高野晃伸、田村禎章、樋田小百合、中川千代、中澤秀一、祢宜佐統美、保坂亮、平澤泰子、森由香子、八島妙子、山下科子
3　当該教員の教育上の能力に関する大学等の評価 1)学生による授業評価		平成14年度から全学的に「学生による授業評価」が実施となる。
①　老年看護概論	平成19年10月 -　平成25年3月 （岐阜医療科学大学）	学生の総合評価は78～83%が「よい」としている。12評価項目は平均5点中3.6～4.2であり、「わかりやすい」としている。抽象的な内容については「もう少し丁寧に説明してほしい」との要望があり、レジュメに「必要な基礎知識欄」を設け学習のポイントを示した。
②　老年臨床看護（演習）	平成19年10月 - 平成24年3月 （岐阜医療科学大学）	老年臨床看護は臨地(特別養護老人ホーム)実習を視野に演習を行っている。内容は「高齢者擬似体験」「嚥下障害のある高齢者の援助」「体圧と安楽な姿勢」「脳血管障害のある患者の看護過程演習」。演習に入る前に講義を行い、学生はあらかじめ課題に取り組み、それにそって演習を実践する。「学生による授業評価」は総合評価では80%が「よい」としている。その理由は「学生が必要とする時に適切な指導をした」「デモンストレーション・VTRは理解の助けになった」「教員は授業に熱意を持いる」の項目を高く評価をしている。 演習の性格上準備･片付け等も含むため「授業開始時間・終了時間が適切でない」と55%が評価し時間内に授業を完結するための工夫が求められている。
③　在宅看護論	平成23年3月 - 平成25年3月 （岐阜医療科学大学）	平成23年4月から科目担当が「在宅看護論」に変更した。具体的なイメージが持てるようにDVDの活用や訪問看護実践者をゲストスピーカーとして起用した。学生の総合評価は83～89%が「よい」としている。12評価項目は平均5点中3.6～4.6であり、「わかりやすい」としている。演習内容が多く、具体的な内容が多いため「わかりやすかった、身についた」との意見があり、「もう少し繰り返して実施したかった」と技術内容への要望が多かった。

教育上の能力に関する事項	年　月　日	概　　要
④　在宅看護学概論（2年次生）	平成27年9月 - 現在に至る （奈良学園大学）	新設校の1期生、2期生の授業である。本科目は制度との係わりが深く、学生はイメージが持ちにくい授業内容である。パワーポイントやipadでイラスト、紙芝居的な要素を用いて補足資料を作成し、視覚化に努めた。学生による授業評価では、「理解しやすい・分かり易い」が75%、「文字がやや小さい」20%であった。評価が低かったのは、「声が小さくて聞き取りにくい」15%あり、私語対策と共にマイクの音量を調整して当面の課題は解決した。定期試験の平均GPAは2.65であり、試験問題の難易度ばかりでなく学生の理解度も妥当であったと評された。受験した学生には60点以下の学生はいなかった。
⑤　在宅看護学援助論（3年次生）	平成27年9月 - 現在に至る （奈良学園大学）	本科目は、これまで学んだ看護の内容を在宅看護でどのように活用すればよいか、どのような配慮を必要とするかを、統合し実践に向けて知識・技術を学生に定着する指導課題がある。在宅の現場で理解しやすいように、業者の協力を得、人工呼吸器の現物に触れさせる機会を持っている。特に訪問看護師の業務・役割である療養上の世話、診療の補助については資格上の権限と責任を自覚するよう強調している。学生の技術力や基礎学力の不足に対してミニテストやDVDを用いて印象付けながら指導に当たっている。
⑥　老年看護学臨地実習（3 - 4年生）	平成20年9月 - 平成23年3月 （岐阜医療科学大学）	実習に関する授業評価は実施していないが学習状況にそって臨地にて個別指導を行い、「困ったときにいつでも相談に乗ってもらえ、看護が好きになった」と言い、老年看護学の実習目標を達成し卒業、国家試験合格に結びついた。
⑦　在宅看護実習（3 - 4年生）	平成23年9月 - 平成24年3月 （岐阜医療科学大学）	実習では具体的場面を多く提示し、法的根拠については授業内容を想起し、個別指導を行った.「困ったときにいつでも相談に乗ってもらえ、看護が好きになった」と言い、老年看護学の実習目標を達成し卒業、国家試験合格に結びついた。
⑧　在宅看護学実習（3年生）	平成28年9月～ 平成29年3月 （奈良学園大学部）	1 期生の実習であり、15 施設（訪問看護ステーション）で行った。在宅看護学実習は、看護学の統合と発展科目であり、学生自身が療養者宅に訪問することの意味を考え、看護者としての役割を果たすとはどのようなことかを考える機会を持った。実習施設は小規模であるが、同行訪問するナースはベテランばかりである。学生は看護の知識・技術の習得ばかりなく、看護師の関わり方が療養者の心身にどのような影響や意味があるかを理解できるようカンファレンスの機会を計画し、生活者としての全体像も併せて理解を深める指導を促す。
4　実務家教員についての特記事項 1)実習指導実績 (1) 老年看護学臨地実習Ⅰ（２年次生）	平成18年5月-平成19年12月 （岐阜医療技術短大学） 平成20年9月-現在に至る （岐阜医療科学大学）	短大から4大学部の移行期によりカリキュラムのちがいに伴ってより指導時期が異なるが、老年看護学（老年看護概論・老年臨床看護・老年看護学臨地実習）の指導内容は同質である。 ４大学への移行期に伴い、カリキュラムの構成のちがいに伴い、指導時期は異なるが、老年看護学に指導内容は同質である。老年看護学実習では今後社会的問題として顕在化する認知症患者の看護を主に学習できるよう実習施設との実習内容について協議した。老人福祉施設での認知症患者の看護は、生理的老化の理解だけでなく認知症患者へ対応についても場面をとらえ直接指導し、カンファレンスにおいても理解を深めている。高齢者ケアは全人的な視点として、医療的な問題と生活課題を把握しプランを立案、実施評価を課し、看護の成果を客観的に判断できる指導をしている。

教育上の能力に関する事項	年　月　日	概　　要
(2) 老年看護学臨地実習Ⅰ・Ⅱ (3･4 年次生)	平成18年5月-19年12月（岐阜医療技術短大） 平成20年9月-平成24年3月（岐阜医療科学大学）	実習指導の総括及び科目の単位認定を行っている。指導内容は高齢者の特徴を理解し、健康問題・生活問題に着眼し、その状況に応じた看護を学生は１人の受持を持って継続的に看護し、看護の過程を通して問題解決の思考過程を培っている。例えば患者の観察の仕方、発言の理解、その経過の中での思考の整理、直接的な援助技術等に関わっている。また実習施設や病棟看護師とも患者の援助や学生と患者間の調整を行っている。学生の思考を深めるために、週に1回臨地実習指導者を交えてカンファレンスを開き、また実習進行上の課題解決に向けて必要時学生の面接指導も実施している。1～3期生は、全員目標達成した。
(3) 在宅看護臨地実習 (3･4 年次生)	平成23年4月-現在に至る （岐阜医療科学大学）	担当科目の変更があった。実習指導の総括及び科目の単位認定を行っている。臨地での指導は場所・時間に制約があり、授業内容を反映するために、臨地実習指導者を交え、訪問看護場面との突合せができるようカンファレンステーマを提示しディスカッションの時間をもっている。全員が目標達成できるよう学生の進捗状況に応じて個別指導についても配慮している。全員目標達成し、履修できた。
在宅看護学実習（3 年生）	平成28年9月～平成29年3月 （奈良学園大学）	本実習体制は訪問看護ステーションの看護師との同行訪問し、療養者・家族に対して健康上の課題を解決すべき看護行動を学習する。実習にあたっては、学習方策だけでなく訪問の心得や言葉遣いには特に配慮して指導している。受講学生は全員履修した。
2）研究論文指導 卒業論文指導（必修）	平成19年4月-12月 （岐阜医療技術短大）	平成19年度(必修)指導学生数6名 6名がグループで「中高年者の高齢者のイメージと介護意識」に取り組んだ。学生個々が進行に配慮しながら、文献検討、研究計画、論文作成と学生間の共同学習が強化され、慣れないグループワークを駆使して20ページの論文を完成させた。研究する愉しみも同時に実感で来た。全員が履修できた。
看護基礎セミナー（必修）	平成18年4月-22年7月 （岐阜医療科学大学）	指導学生数7人 目的は1年生を対象にアカデミックスキルを身につけることにあり、特にディスカッション、文章表現を重視して開講される。テーマは、前期は関市の事象を写真に取り、その中からグループで課題発見や文献を調べ、自己の意見を述べ、レポートにする一連の学習プロセスを指導する。後期は、書籍を教材に、精読、文章理解、レポートと文書指導を行った。学生の要望や視野を拡大するために行政や関係職種に働きかけ、学生は高校と異なった学習法への関心を高くし楽しく学ぶヒントを獲得できた。学習成果は、スライドソフトのパワーポイントで作成しプレゼンテーションを行いて評価会を受けた。
卒業研究指導（必修）	平成21年度 （通年）	指導学生数５人 4年間の看護学の集大成として、各自の問題意識、から文献検索、文献検討によって研究計画作成、発表まで行う。この間の個別指導に対応した。本学は研究計画までを課題としているが、文献検索、文献レビューを重視し、そこからの問題意識によって課題に取り組むことを指導している。本年度の研究テーマは「高齢者と服薬行動と課題」「介護を引き受ける中高年者の認知症高齢者のイメージ」「排泄ケアのジレンマ」「高齢者の口腔ケアの策定」「認知症高齢者の生活環境」である。テーマの選定は学生が関心を持った視点で取り組んでおり全員修得できた。

教育上の能力に関する事項	年　月　日	概　　要
	平成22年度 （通年）	指導学生数４人 　本年度、学生が取り組んだテーマは「臨場感のある看護過程の学び方-情報収集から問題発見へ」（2名で）、「地域に住む『閉じこもり』予備群の実態-インタビュー調査から」、「認知症におけるタッチングの効果-手と手の触れ合いがもたらすリラクゼーション効果-」であり、全員修得でき、看護師国家試験合格した。
	平成23年度 （通年）	指導学生数６人 　本年度、学生が取り組んだテーマは、「嚥下訓練を継続することで得られる効果-食事をおいしく食べる為に-」、「脳血管性認知症患者の徘徊による身体的影響」、「高齢末期がんの在宅療養者を支える家族への看護-家族介護者へのインタビューを通して-」、「寝たきり高齢者の有効な口腔ケアの検討-スポンジブラシとガーゼの比較-」、「老々介護における主介護者の介護負担感に関する実態調査」、「認知症に対するアニマルセラピーの有効性-認知症の周辺症状の変化と身体的変化-」であり、全員修得し、 看護師国家試験合格した。
	平成24年度 （通年）	指導学生数5人（卒研テーマ入力） 　本年度、学生が取り組んだテーマは、個々の問題意識に立脚し「ガン患者の終末期ケアにおける看護職の専門性に対する意識」、「看護師のバーンアウトに関する研究-ターミナルケアに従事する看護師と一般病棟に勤務する看護師の比較-」、「在宅療養支援時に伴う病棟看護師のジレンマ」、「老老介護における主介護者のQOL－社会的側面に着眼して－」、「受持ち患者の死亡体験における看護学生の感情変化」、であり、全員修得しでき保健師・看護師国家試験合格した。
3)公開講座・社会教育講座等の講師・指導		
(1) 特養ホーム/ハートタウン平成の杜（岐阜県関市）の職員学習会講師	平成19年4月-平成20年3月 (岐阜医療科学大学)	目的は「介護現場に活かされる知識と技術」について3回の講義・演習を行った。内容は、「嚥下のメカニズムと看護・介護」「フィジカルアセスメントと緊急対応」「安全な移乗介助」であり、講義と演習を行い、現場の方にも一緒に参加してもらった。
(2)のぞみの丘ホスピタル(岐阜県美濃加茂市)の職員研修会講師	平成20年4月28日 (岐阜医療科学大学)	目的は「接遇のあり方と実際」である。接遇についての理念は理解しているが､適切な場面で適切に行動化できていない現状の分析と対応について講義･演習を行った。
(3) 模擬講義「在宅看護」（本学にて）	平成26年12月10日 (奈良学園大学)	大和高田市の高校2年生30名を対象に模擬講義を行った。看護学に関心が高く、本学をすでに希望している生徒もあり、多くの質問が出た。講義の後、本学の見学を希望し案内をした。

教育上の能力に関する事項	年　月　日	概　　要
5　その他 1)介護老人保健施設における ICF の視点でのケアの実態とケア実践者の職務満足度との関係（調査研究：共著）	平成21年3月 財団法人ユニベール財団	介護老人保健施設におけるICFの視点を用いたケア尺度を2回の予備調査を経て作成を行った。それを用いて、ケア実践者（看護職・介護職）のケアに対する充実度や職務満足度の関連性を検証した。介護老人保健施設では「心身機能・身体構造」よりも「活動と参加」へのケアが多かったが、セルフケアに偏ったケア内容であり、その人らしさを反映したケアの実践が希薄であることが示唆された。また、その人らしさを反映した高齢者への支援は、ケア実践者のケアに対する充実度につながる。ケアに対する充実度は職種による違いがあり、看護職では職務満足度が高くなるが、介護職は他の要因に影響を受けることが明らかとなった。（財団法人ユニベール財団研究助成金による研究である）A4版本文18ページ、付録資料21ページ 研究代表者：安藤邑惠、研究分担者：小木曽加奈子、阿部隆春、平澤泰子、原田正美

職務上の実績に関する事項	年　月　日	概　　要
1　資格，免許 看護師免許	昭和54年 4月	第356877号
2　特許等		
3　実務家教員についての特記事項 1）看護短期大学部（助教授） (1) 老年・在宅看護学実習場の協力・開拓	平成18年4月-現在に至る	岐阜医療科学大学は地域的な特性があり、遠方で受け入れ学生数が少なく、教員が出向いての指導は時間的な負担が多く、学生一人の指導時間が十分取れない。 この対策として、実習場の指導者にもきめ細かい説明や配慮をもとめ、協力が得られ実習のまとめを最終日に確認し、目的達成ができるようスケジュールを工夫している。 実習指導時間を十分確保する為に、利便性がよく、受け入れ態勢が整っている施設の開拓は今後も継続していく。
(2) 岐阜医療技術短期大学（教授）	平成18年4月-平成20年3月	岐阜医療科学大学（教授）との併任で閉校になるまでの期間、3年生、2年生の教育、及び学内運営に携わった。担当は老年看護学（老年看護概論・臨床看護・臨地実習）、卒業研究に携わった。 短大最終の学生のため、国家試験全員合格に向けて学習支援を行った。
(3) 岐阜医療科学大学（教授）	平成18年4月-平成26年3月	岐阜医療技術短期大学（教授）との併任で学部1期生からの教育、学内運営に関わった。老年看護学（老年看護概論・臨床看護・臨地実習）、基礎セミナー、総合看護学、卒業研究、学科運営に携わった。 学部最初の卒業生であり、大学あげての総意もあり、国家試験全員合格に向けて学習支援を行った。 老年看護学実習においては従来使用していた実習施設に不測の事態が生じ、新たな施設の開拓を行った。
(4) 学内　セクシャルハラスメント防止委員会（委員長）	平成18年4月-平成25年3月（岐阜医療科学大学）	セクシャルハラスメントの予防対策について教職員合同委員会、学園委員会と連携をとりながら、パンフレットを作成し、教職員の勉強会を設け、周知に努めた。

教育上の能力に関する事項	年　月　日	概　　要
(5) 学科内　4年生/学年担任 (学年主任)	平成18月-平成26年3月（岐阜医療科学大学）	担任制、持ち上がり制をとっている。学生一人ひとりの学習環境の整備や支援を、4名の学年担任と定期的に会議を持ち、学年の課題を検討し学科長はじめ他教員の協力を得て解決を図っている。また年に数回、学生と面談し学生の状況を把握している。必要に応じて保護者と連絡を取り学校と担任との意思疎通を密に取っている。就職相談、国家試験に向けての学習相談にも応じた。また個別の経済的な相談は学生課をはじめ関係部署と調整を図り卒業にこぎつけた。看護師国家試験は100%合格した。
(6) 学科内　臨地実習分科会（分科会長）	平成20年4月-平成22年3月（岐阜医療科学大学）	看護学科における実習全体のとりまとめを行った。7領域の実習配置計画は、年度、学年をまたぐこともあり、複雑であり実習施設との交渉、学内での調整を蜜に行った。学生に対しては、実習前のオリエンテーションを企画し、周知できるよう時間を十分とって行った。実習がスムーズに移行できるために、準備から実施、その後の進捗状況の把握を行った。学内では実習指導に関わる教員勉強会を開催し本学の実習の課題を共有した。課題については継続的に検討、意見交換を行っていくことを共有理解し次年度へ引き継いだ。対外的には実習施設の実習指導者との意見交換会を年1回開催している。
(7) 学外 岐阜県医療審議会委員	平成21年1月- 平成22年12月	メンバーは医師会、歯科医師会、薬剤師会の代表、医療を受ける立場の代表、学識経験者、計22名で構成されており、学識経験者として参加した。平成21・22年度の県内の医療圏における病床等の整備計画について審議した。
(8) 学内　セクシャルハラスメント等防止委員会（委員長）	平成22年4月-平成26年3月（岐阜医療科学大学）	学園・大学規程は平成22年4月から改正施行され、セクシャルハラスメント等の内容が拡大されたため、さらに予防対策について教職員全員が周知できるように研修会、勉強会を企画している。 合同委員会、学園委員会と連携をとりながら、パンフレットの改正や関連学習教材の充実に向けて活動する。
(9) 学内　就職委員会（委員）	平成22年4月-現在に至る （岐阜医療科学大学）	3学科協力体制で行う。他学科の模擬面接、小論文指導、エントリーシートの添削など、学生が自信をもって就職試験に望めるようアドバイスをおこなう。 また、看護学科主催の実行委員として就職セミナーを開催し、看護学科在校生に就職指導とともに、病院看護部からの訪問者の対応などを行い、学生への情報開示をし、適宜、就職相談に対応する。
(10) 学外 関市総合計画審議会委員 関市老人福祉計画推進委員会委員	平成23年6月-平成24年3月 （岐阜医療科学大学）	メンバーは、医療機関代表者、学識経験者、福祉関係代表者、被保険者代表者、費用負担関係者、関係行政機関等18人で構成された。審議内容は、第4･5期老人福祉計画（平成23･24年度）を高齢者等実態調査結果に基づいて、サービス整備状況、運営状況等を検討し、第5期実施計画まで策定した。
(11) 学内　3期生（4年生） 担任（副学年主任）	平成23年4月 - 現在に至る （岐阜医療科学大学）	卒業要件の取得、看護師・保健師国家試験の支援を行う。4月には保護者会の企画、個別面接や就職相談も適宜おこなう。学年全体の生活指導も合わせて行う。平成23年度は82名全員卒業し、看護師国家試験は100%合格した。
(12) 学外 第43（平成24年度）回日本看護学会－地域看護－学術集会学会準備委員会委員	平成24年5月 - 平成24年9月 （岐阜医療科学大学）	メンバーは岐阜県看護協会長（橋本氏）をはじめ県下の看護系関係者（看護協会・行政・臨床・教育）16人によって構成された。平成24年9月6･7日（長良川国際会議場）に開催される本学会の準備委員会委員として、演題抄録の選考及び採択の決定、テーマ別の群分類等に参画した。

教育上の能力に関する事項	年　月　日	概　　要
(13) 大学内　　評議員	平成26年4月-現在に至る （奈良学園大学）	保健医療学部の一員として大学運営の会議である評議会に参画した。
(14) 大学内 学生委員会・学生支援センター運営委員会センター長	平成28年4月-現在に至る （奈良学園大学）	学生の正課内･正課外活動の支援及び学習環境等野整備に努め、学習意欲を引出し、ディプロマポリシ―を備えた学生を育成することを目的に活動する。
(15) 学部内　学生生活部会長	平成26年4月-現在に至る （奈良学園大学）	学部新設校であるが､大学は医療系カリキュラムを運営するのは初めてである｡学習環境が未整備の点を学生のニードを把握しながら整備した｡学生の自治活動室の確保や､学生生活のルールつくり学習環境等について､学生が学びやすい環境を整えるための活動のサポートを行っている。
４　その他 (1) 岐阜医療科学大学保健科学部看護学併任岐阜医療技術短期大学看護学科（教授）	平成18年4月-平成20年3月	岐阜医療技術短期大学看護学科学生の講義、実習、卒論指導にも2年間携わった。平成20年3月閉校。
(2) 岐阜医療科学大学保健科学部看護学科（教授）	平成20年4月-平成26年3月	平成20年度から学部生指導に当たった。教授会に参加し、個人情報保護委員会メンバーに参加し、またセクシャルハラスメント委員長を担い学部運営に貢献した。
(3) 奈良学園大学保健医療学部看護学科（教授）	平成26年4月-現在に至る	学部新設校であり、新設のため学部機能や運営が未整備の点があり、委員会、WGを設け教員全般で取り組み、学部機能や学生の学習環境を事務方の協力を得て進めている。大学全体の評議会に委員として参加、学部では学生生活部会長として学生生活全般及び学習環境の調整をWG活動を通して学部運営に貢献している。

著書、学術論文等の名称	単著、共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
Ⅰ．著書 1.　ICFの視点に基づく高齢者ケアプロセス	共著	平成21年3月	学文社 B5判　全159頁。	高齢者ケアにおいては、病院完結型の医療制度は終わりを告げ、生活の質を保証する療養の場、ケアの質の高い継続した支援が高齢者ケアに求められるようになってきた。改正された介護保険制度では、WHOで20001年に国際生活機能分類（以下ICF）の視点に基づきケアが必要であるという指針を出した。本書はICFの視点に基づき、高齢者ケアプロセスに必要なアセスメントの知識を提示し、根拠あるプランの流れを理解でき、かつ事例展開の演習によって、確かな力をつけることができるように工夫をした。本著では、ICFの第1レベルでの情報収集内容を吟味し、ICFの視点で得た情報をマズロー理論、ナイチンゲール理論、ヘンダーソン理論などで展開ができるよう工夫している。 編著者：安藤邑惠、小木曽加奈子 共著者：阿部隆春、今井七重、佐藤八千子、柴田益江、高野晃伸，田村禎章，樋田小百合，中川千代，中澤秀一，祢宜佐統美，服部紀子，彦坂亮，平澤泰子，森由香子，八島妙子（50音順） 本人担当分：第１章3節（8-23），第2章第１節・3節（38-42），第3章1節（46-53），第4章第1節（96-114）。全編集作業。
2.　ナースのための地域看護概論　－看護の継続をめざして－ 第4版・第5刷	共著	平成23年1月	ヌーヴェルヒロカワ	上記11.の同名の書と主旨・内容は同じであるが、介護保険制度の改正に伴って担当分の加筆修正を行った。 編著者：眞船拓子、杉本正子。共著者：秋山正子、足立啓子、虻川美紀、荒賀直子、安藤邑惠、飯田澄美子、杉本正子、眞船拓子他他38名。 本人分担分：「第3章Ⅴ.地域活動の実際と看護の継続性」（2.介護老人保健施設における看護活動、P256-262）
3.　認知症がある人をケアすること；BPSDによる生活場面の困難さ	編著 共著	平成24年6月	学文社 B5版　全246頁	認知症ケアの歴史的経過を知り、現在の高齢社会における認知症の課題を明らかにした。本著は、認知症の種別により、ケアのあり方も異なることを踏まえ、認知症高齢者の生活場面での困難さ、非薬物療法の実際などをより多く紹介している。また、認知症ケアを実践するうえで、パーソンセンタードケアやセンター方式を紹介している。具体的な困難場面を想定して、その対応の1例も紹介している。 監修・編著者：佐藤八千子、小木曽加奈子 編著者：阿部隆春、安藤邑惠、祢宜佐統美、平澤泰子、山下科子、著者：今井七重、今津尚人、梅田雅子、齋藤隆司、齋藤妙子、田村禎章、高木房代、温水理佳、彦坂亮、本荘鈴子、森由香子、渡邊美幸、吉田章子 本人担当分：第５章第１節、第２節（P105-128）

著書、学術論文等の名称	単著、共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
4.　高齢者ケアの質を高めるICFを活かしたケアプロセス	共著	平成27年3月	学文社 B5版　全218頁	類書「ICFの視点に基づく高齢者ケアのプロセス」の内容を踏まえ、高齢者を取り巻く社会環境、ケアの概念と多職種の連携、ICFの概念と活用方法等の紹介。さらに高齢者ケアの場や病状や生活状況に伴う変化に応じて、1事例を＜回復期リハビリテーション病院＞＜在宅＞＜介護福祉施設（特別養護老人ホーム）＞という3つの療養の場でケアプロセスを展開している。同じ対象であっても療養の場の特徴を踏まえたアセスメントの方法や必要なケアが異なることを理解できるよう工夫した。 編著：小木曽加奈子、阿部隆春、安藤邑惠、 今井七重、佐藤八千子、平澤泰子他13名 本人担当分：第1章第2節、（P8-14）
5.　介護職のための医療的ケアの知識と技術 -ポートフォリオを活用して自らの成長をはぐくむ -Caring process of elderly people that uses international Classification of Functioning,Disability and Health	共著	平成 28 年 8 月	学文社 B5 版　全 149 頁	医師をはじめとする医療職種の人材不足の影響により介護職の医療ニーズが求められ、介護職の業務範疇が拡大していることを受け、介護養成校医療的ケアの教育内容が重要な指導課題となった。喀痰吸引や経管栄養を含む 7 領域を学ぶにあたって各領域別に「知識・技術のチェックリスト」を組み込んだ。学生がアクティブラーニングができるように、ポートフォーリオ形式で編纂した。 本書の特徴は 3 つある。①文章を短く簡潔にした。②法的背景を加えた　③介護職としての力量形成の向上を目指した。 編者：平澤泰子、小木曽加奈子 著者：安藤邑惠、今井七重、小木曽加奈子、高木剛、祢宜佐統美、林由美子、平澤泰子、古田弥生、真木明子、山下科子
Ⅱ.　学術論文 1.　老年看護学臨地実習記録の内容分析と課題 - ICFの視点から考える看護の展開-（査読あり）	共著	平成20年1月	第38回日本看護学会論文集 - 看護教育 - P278 - 280	目的は老年看護学臨地実習で使用している実習記録の内容をICF（国際生活機能分類）の視点で分析し、真の意味で学生が対象を「全人的理解の上に立った援助」ができる教育的課題や工夫の糸口を見つけるための基礎資料とする。対象者は同意が得られた看護系短期大学生3年次生33名。介護老人保健施設実習（90時間）の実習記録33部を分析した。情報収集で内容が多い領域は「心身機能」「身体構造」「活動と参加」であり、アセスメント及び看護計画の記述は情報収集よりも減少している。学生の実習記録の特徴として、「心身機能」「身体構造」に関連する内容が多く、従来の医療に志向した傾向にあることが確認できた。実習指導に際して、その人らしく全人的な生活を支援する指導のあり方を工夫することが課題となった。 共同研究者：安藤邑惠、小木曽加奈子 本人担当分：研究企画、調査計画、調査票考案、調査実施、データ分析、論文作成

著書、学術論文等の名称	単著、共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
2.　老年看護学臨地実習記録の内容分析と課題―認知症高齢者の生活機能領域からの分析― （査読あり）	共著	平成20年1月	第38回日本看護学会論文集 －看護教育－ P281－283	介護老人保健施設の認知症病棟実習で使用している実習記録の内容を生活機能領域から分析し，学生の対象理解や援助の捉え方の傾向を把握する目的で研究を行った。調査対象者は看護系短期大学生3年次33名。老年看護臨地実習，全180時間の内，老人保健施設実習（2週90時間）の実習記録33部を分析した。「心身機能」については「尿路・性・生殖等」及び「神経筋骨格と運動等」はすべての学生が，情報収集ができた。 　心身機能は看護の展開が出来ている学生が多かった。「身体構造」については，「消化器系等の構造」「尿路生殖器の構造」「運動等の構造」は看護の展開ができている学生が多かった。今後の多方面から情報収集のできる実習指導体制の工夫が必要である。 共同研究者：小木曽加奈子、安藤邑惠 本人担当分：研究企画、調査計画、調査票考案、調査実施、データ分析、論文作成
3.看護学生の老年期の性意識－老年者のオムツ着用の弊害から波及する問題－	共著	平成20年3月	岐阜医療科学大学紀要　第2号 P21－31	オムツ着用」に関連してSD法及びRLによる内容を質的に分析した。結果は高齢者のオムツの弊害によって蒸れ、皮膚炎などによって局所の痒み部分を掻く行為を自慰行為と誤認しやすい。学生は先入観でなく、高齢者の行動の情報収集を十分行う必要性に関する表現が多かった。学生は知識をえることで先入観は肯定的なイメージは変化した。 共著者：松村三千子、上平公子、泉川孝子　安藤邑惠 本人担当分：研究全般に関するスーパーバイズ
4.看護学臨地実習記録の内容分析と課題―ICFの視点から考える看護の展開― （査読あり）	共著	平成21年3月	岐阜医療科学大学紀要　第3号 P29－35	介護老人保健施設の看護職4名と介護職4名にICF（国際生活機能分類）における「活動と参加」領域に対する認識についてのインタビュー調査を質的に分析を行った。結果、看護職は利用者の情報収集・アセスメントを充実させる視点が強く、介護職は生活の直接ケアに重点をおきながらも安全で楽しく過ごせることへの視点が強いことが分かった。 共著者：小木曽加奈子、安藤邑惠 本人担当分：研究企画、計画書作成、調査票考案、調査実施、データ分析、スーパーバイズ
5.ICFにおける「心身機能・身体構造」の領域に対する看護職と介護職の認識の違い －介護老人保健施設のケア実践者に対するインタビュー調査から－	共著	平成21年3月	岐阜医療科学大学紀要第3号 P29-36	老人保健施設の看護職と介護職に対するインタビュー調査からICFにおける「心身機能・身体構造」の領域に対する看護職と介護職の認識の違いが明らかにするため研究を行った。1年以上介護老人保健施設に勤務する看護職4名及び介護職4名を対象にした。 「心身機能・身体構造」に該当する看護職の語彙数は429，介護職は190であった。看護職は，「心血管系・血液系・免疫系・呼吸器系の機能」に関する語彙数が最も高く，医療的な側面からのサポートに関する視点が強かった。介護職は「消化系・代謝系・内分泌系の機能」に関する語彙数が最も高かった。食事摂取に関することや排泄（排尿）に関することは日々の生活に欠かせない分野への直接的な支援・援助に関する視点が強かった。 共同研究者：小木曽加奈子、安藤邑惠 本人担当分：研究企画、調査計画、データ収集・分析、スーパーバイズ

著書、学術論文等の名称	単著、共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
6.　ICFにおける「活動と参加」の領域に対する看護職と介護職の認識の違い～介護老人保健施設のケア実践者に対するインタビュー調査から～	共著	平成21年3月	岐阜医療科学大学紀要第3号 P37-48	ICF における「活動と参加」の領域に対する看護職と介護職の認識の違いが明らかにするため研究を行った。1 年以上介護老人保健施設に勤務する看護職 4 名及び介護職 4 名を対象にインタビュー調査を行った。「活動と参加」に該当する語彙数は看護職 541 語彙数，介護職 430 語彙数であった。「活動と参加」のケア内容は，介護老人保健施設における看護職と介護職は共通した視点と異なる視点があることが分かった。介護老人保健施設におけるさまざまな療法への関心は看護職が高いことは，高齢者の現在ある機能を維持・更新させるための療法への期待として考えられる。これらの療法は認知症高齢者への周辺行動を沈静化させるためにも活用されていることが多く治療に重きを置く医学モデルの思考が伺える。 共同研究者：小木曽加奈子、安藤邑惠 本人担当分：研究企画、データ収集・分析、スーパーバイズ
7.　加齢・障害擬似体験を活用したアクティビティ企画運営演習の学習効果　（査読あり）	共著	平成21年3月	日本老年看護学会誌 Vol13,(2) P87 - 96	研究目的は、老年看護学演習「アクティビティの企画運営」を受講した看護学生（2 年生）42 名の課題レポートをもとに学習内容を質的に分析し、演習効果と課題を明確にすることである。学習内容は「参加高齢者が持っている力を生かすための支援」「参加高齢者の安全を確保するための支援」「アクティビティを楽しめなかった原因」、「参加高齢者間の交流を促進するための支援」「アクティビティにおける看護の役割」の５カテゴリーが形成された。演習効果は、演習後の意見交換によって看護者、高齢者、観察者役割体験よって達成できなかった企画運営について気づくことができた。課題は、安全確保の支援、高齢者間の交流促進の内面的アプローチ、意図的、効果的に高齢者が持っている力を生かすための教育的支援の必要性が明らかになった。 共著者：服部紀子、安藤邑惠、青木律子 本人担当分：研究企画、データ収集・分析、スーパーバイズ
8.　介護老人保健施設におけるケア実践者の離職意向～看護職と介護職の認識の違い～ （査読あり）	共著	平成21年4月	第 39 回日本看護学会論文集-看護管理- P108-110	本研究は，介護老人保健施設における看護職と介護職の離職意向の違いを調査し，効果的な労働環境改善方法を検討するための基礎的資料を得ることを目的とした。郵送法による質問紙の返却があった看護職48名（96.0%）・介護職44名（88.0%）を分析対象とした。介護職の約半数は離職を考えたことがあった。「働くにあたっての労働環境」は看護職と介護職の意見が異なり，看護職では『ケアに対する施設の方針との相違』が最も多かった。「ケア実践におけるケアの考え方」の『医療機関ではない老健での医療のあり方に対する戸惑い』からも看護職が目指すケアが実施できないジレンマが伺える。「他のスタッフ及び利用者との関わり」は他職種との連携の悪さを示しているが，介護職は意識していないという認識のずれも示した。 共同研究者：小木曽加奈子、安藤邑惠，平澤泰子，阿部隆春 本人担当分：研究企画、データ収集・分析、スーパーバイズ

著書、学術論文等の名称	単著、共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
9. 介護老人保健施設における認知症ケアに対する職場教育の課題について	共著	平成22年3月	岐阜医療科学大学紀要第4号 P27-32	本研究目的は介護老人保健施設における認知症ケアに対する職場教育の課題を看護職と介護職の視点から明らかにすることである。対象者1,000名（看護職500名，介護職500名）のうち、看護職28名（5.6%）、介護職29名（5.8%）の「認知症ケアの職場教育」に関する自由記述の回答を質的な分析対象とした。一文一義の語彙数は看護職77、介護職69であり，「組織のスタイルと構造」看護職43（55.8%）・介護職45（65.2%），「認知症教育のあり方」看護職34（44.2%）・介護職24（34.8%）の２つの領域となった。 共同研究者：小木曽加奈子、安藤邑惠，阿部隆春，平澤泰子 本人担当分：研究企画、調査計画、データ収集・分析、スーパーバイズ
10. 看護学生における高齢者理解の構造-ライフヒストリーのインタビューを基にした内容分析-（査読有）	共著	平成22年2月	教育医学 55 巻 3 月	看護学生における高齢者へのライフヒストリーのインタビューによる高齢者理解の構造を明らかにすることを目的とし，看護学生 20 名のインタビューから「高齢者に対する印象や学生の考え」について内容分析をした。文脈単位は 261，記述総数は 444。分析の結果、40 サブカテゴリーから 10 カテゴリーが形成され，さらに 4 つの領域に分析できた。＜高齢者の過去に関する内容＞，＜高齢者の現在に関する内容＞，＜学生が抱いた高齢者像＞，＜学生自身が自分のあり方を考える＞であった。結果、学生の高齢者理解のプロセスは、①時間軸として「過去から現代へ…そして未来へ（時間軸）」，②相互作用として「関わり合うことによって生まれる学び（相互作用）」の 2 方向から成立していることが明らかになった。 共同研究者：小木曽加奈子、安藤邑惠 本人担当分：研究企画、データ収集・分析、スーパーバイズ
11. 介護老人保健施設入所者の介護に対する家族の現状と求められる役割について-介護老人保健施設に勤務する看護職の視点から-（査読有）	共著	平成22年4月	第 40 回日本看護学会論文集-地域看護- P154-156	研究目的は、介護老人保健施設入所者の家族の現状と，求められている役割を看護職の視点から明らかにすることである。アンケート回答 309(61.8%)名のうち，「家族との関わり」に関する記述があった 27(5.4%)名の自由記述を質的分析した。看護職の平均年齢±SD は，46.51±7.19 歳であり，女 27 名（100.0%）。回答内容を一文一義とし，総数の 64 語彙は 5 カテゴリーを形成し，さらに，「介護が必要な高齢者の生活の場所」と「在宅生活の難しさ」の 2 つの領域となった。現在の高齢者の生活を支える社会制度下では，在宅での家族による介護には限界があり，施設の利用が高齢者の終の棲家として選択されている場合が多いことが明らかとなった。 共同研究者：山下科子,小木曽加奈子，安藤邑惠，平澤泰子，阿部隆春 本人担当分：研究企画、データ収集・分析、スーパーバイズ

著書、学術論文等の名称	単著、共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
12. 介護老人保健施設におけるケアスタッフの仕事全体の満足度・転職・離職の要因：職務における9つの領域別満足度との関連を中心に（査読有）	共著	平成22年12月	社会福祉学 51 巻第 3 号 P103-118	本研究目的は，介護老人保健施設のケアスタッフの仕事全体の満足度･転職・離職の要因を9つの領域別満足度との関連を中心に明らかにすることである。看護職249票（49.8%）・介護職284票（56.8%）を有効回答。ロジスティック回帰分析において，看護職では，仕事の満足度は9つの領域の中の『業務の内容』と『労働条件』に関係があり，介護職では，『業務の内容』・『労働条件』・『職場における管理』に関係性がみられ，転職は，両職種ともに同じ傾向がみられ，『職業に対する誇り』に関係性がみられた．両職種とも職務満足度の傾向は類似性があり，『業務の内容』と『労働条件』に関係がみられ，転職や離職の意思決定に影響があることが示唆された。『職場における管理』が離職に関係性があることを示した。 共同研究者：小木曽加奈子、阿部隆春，安藤邑惠，平澤泰子 本人担当分：研究企画、データ収集・分析、スーパーバイズ
13. ICFの視点に基づく高齢者ケアプロセスの実践	共著	平成22年11月	日本福祉図書文献学会誌第 9 号 P139-142	本書は平成19年度財団法人ユニベール財団の研究助成を受けた調査研究の過程で得られた見地を、高齢者ケアに関わる人々から高齢者ケアプロセスについて実践的で活用し易い書籍として編纂した。高齢者のQOLを保証する専門職として，看護師と介護福祉士を目指す学生等にとって，高齢者ケアプロセスの展開を身につけることは必修である。また看護職・介護職がお互いのケアの専門性を尊重し，連携ができることをねらい，ICFという共通言語を用い双方が認識できることを重視し，高齢者ケアプロセスが理論体系を踏まえて展開できることを目的とした。 共同研究者：安藤邑惠、小木曽加奈子 本人担当部分：編纂計画、執筆計画、編集作業
14. 国際生活機能分類に基づく第1レベルの分類による高齢者ケア実践　（査読あり）	共著	平成23年3月	教育医学56巻3号 P283-291	研究目的は、介護老人保健施設における高齢者ケアに対する看護職と介護職の実践内容を ICF に基づく第 1 レベルの分類を用い特徴を明らかにすることである。アンケート調査により看護職 249 票(49.8%)・介護職 284 票（56.8%）を分析した。心身機能・身体構造の領域でにおいては，看護職は，精神機能のアセスメント・尿失禁の種別の把握と適合したケアの選択・皮膚の観察とトラブル予防に関するケア実践が多かった。介護職は，高齢者の感覚機能や心疾患の状態を把握し，具体的なケアに結びつける傾向があることがわかった。 共同研究者：小木曽加奈子、阿部隆春，平澤泰子，安藤邑惠 本人担当分：研究計画、調査計画、考察等スーパーバイス。

著書、学術論文等の名称	単著、共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
15. 介護老人施設で暮らす軽度認知症高齢者の日常での経験 （査読あり）	共著	平成23年3月	横浜看護学雑誌 VOL4(1)63-70	介護老人施設で暮らす軽度認知症高齢者の日常での経験内容を明らかにすることを目的とし、5人の対象者に半構造化面接を実施し、質的帰納的分析を行った。結果、「世話になって生活するしかない」、「安心して暮らせる」、「出来るだけ世話にならずにできることをする」、自分の「行動の意味を分かってもらえないとしている」という経験をしている。対象者は新しい自分らしさをつくりだす途上であり、ケアに当たるものはそれを見出す支援の必要性が示唆された。 共著者：服部紀子、安藤邑恵、中里知弘、池田沙矢香、青木律子 本人担当部分：研究計画の企画、デ－タ分析。
16. Moore機能的認知症評価尺度による認知症高齢者のBPSDの変化 -認知症の症状に関する機能評価尺度を用いて-	共著	平成23年3月	岐阜医療科学大学紀要5号 P9-19	目的は中程度認知症高齢者7人を対象にBPSD変化を生活の中での変化を知るためにMoore認知症評価尺度を用いて調査した。結果「排泄」に関連するケア は増加、感情のコントロールに関する内容は減少傾向に、「徘徊」に関する内容はケア介入によって軽減する傾向にあることが分かった。 本研究は日本生命財団助成金による研究の一部である。研究代表者：小木曽加奈子、 共著者：安藤邑恵,阿部隆春、平澤泰子、山下科子 本人担当分：研究計画案策定、調査介入、スーパーバイズ。
17. 認知症高齢者のケアに対する「環境因子」に関する看護職と介護職の認識の違い -介護老人保健施設のインタビュー調査から-	共著	平成23年3月	岐阜医療科学大学紀要5号 P1-8	介護老人保健施設の看護職と介護職に「環境因子」に関するケアについての認識の違いを明らかにすることを目的とし4名にインタビューを行い、質的分析した。看護職は認知症ケアに関わる介護職に苦手意識を持っている。介護職は自然環境や人に対して肯定的な態度を示して入ることが分かった。 本研究は日本生命財団助成金による研究の一部である。研究代表者：小木曽加奈子 共著者：安藤邑恵, 本人担当分：研究計画案策定、調査介入、スーパーバイズ。
18. DVD作成 陰部洗浄とおむつ交換 （研究題名：基礎看護教育の技術項目を自己学習できるシミュレーション教材の構築）	共著	平成23年3月	平成21年度科学研究費補助金（若手研究）の研究助成金にて作成 課題番号：20791660	本DVDは学生の自己学習用教材として作成した。排泄物を尿（緑茶）、便（チョコレート＋小麦粉）に見立て、局所に付着していることを想定し、シミュレーターを用い高齢者の陰部洗浄とおむつ交換の場面を作成した。本DVD は事例設定、画像学習前ワークと画像学習後ワークの3部構成としてプログラミングし、学生が演習室のモニターを見ながら技術を確認し繰り返し学習ができる。習熟度が高まり、実習場面でも活用できた。 研究代表者：渡邊美幸、研究協力者：安藤邑恵、小木曽加奈子、樋田小百合、 本人担当分：研究計画案作成、技術行動プロセスの指導、スーパーバイズ

著書、学術論文等の名称	単著、共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
19. 認知症ケアにおけるケア実践者のケア充実感と職務満足度の関係について -ICF の視点に基づく「認知症ケア内容尺度」の開発-	共著	平成23年9月	平成 21・22 年度財団法人日本生命財団助成金 A4 版　本文 121 頁、資料43頁	ケア実践者が困難を感じている認知症高齢者像に焦点をあて、全人的なケアの思想と手法を ICF の視点から分析し「認知症ケア内容尺度」を策定した。本研究は,介護老人保健施設における看護職と介護職の認知症ケアとケアの充実感・職務満足度・離職志向との関連性を知ることを目的とし 5 つの調査を実施した. ケア充実感の傾向は,両職種ともに同様な傾向がみられ,認知症ケア実践とケア充実感は関係があることが明らかになった. 職務における相関関係は,すべてに相関関係がみられ,認知症ケア充実感の各質問項目間も強い相関関係がみられた. 看護職, 介護職ともに仕事の全体満足度と転職・離職意向は, マイナスの相関を示した. また, 看護職,介護職とも転職意向と離職意向はプラスの相関がみられた. 仕事の全体満足度が高いと転職・離職意向が低くなり,転職の意向と離職の意向は関係があることが示された. 研究代表者：小木曽加奈子 研究分担者：安藤邑恵, 阿部隆春, 平澤康子, 山下科子、研究協力者 :今井七重、佐藤八千子、樋田小百合、祢宜佐統美、棚橋千弥子、柴田由美子 本人担当分：研究計画、調査介入、スーパーバイズ。
20　地域で暮らすことを視野に入れた認知症高齢者への家族の関わり -介護老人保健施設における看護職と介護職の認識-	共著	平成25年3月	岐阜医療科学大学紀要 (7) 35-45	研究目的は、介護老人保健施設における認知症家族への関わりに対する看護職と介護職の認識を分析することにより、在宅転帰に対する課題を明確にすることである。対象者は看護職21名、介護職23名に「認知症高齢者への家族のかかわり」に関する自由記述を、テキストマイインド法を用いて分析した。 結果、看護職は少ない家族情報のなかで家族の疾患の理解不足やクレーム等について対応し、介護職は家族が疾患として理解できるよう家族支援を行っており、家族のエンパワメント効果をもたらし、在宅転移の可能性を示唆した。 共著者：安藤邑恵　小木曽加奈子 本人担当分：研究計画、調査実施、分析、論文作成
21　医療系大学生の相互依存様式に対する意識 -看護学科,臨床検査学科,放射線学科の比較-	共著	平成26年3月	岐阜医療科学大学紀要 (8) 87-98	研究目的は、医療職を希望している学生に対して、相互依存における意識の在り方の違いの有無を知るために、ロイの適応モデルを基づいた質問調査を行った。対象は看護学科、臨床検査学科、放射選技師学科の同意をえられた1,016名の学生である。結果、3学科共通して相互依存が最も高かった。学科間で有意差のある概念は疎外、関係統合、重要他者であった。看護学科は関係的統合が最も高く、疎外では他学科より高かった。 共著者:藤生君江　中野照代　安藤邑恵　山田小夜子　吉川一枝、 本人担当分：スーパーバイズ、調査実施、分析、論文校正

著書、学術論文等の名称	単著、共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
22　「その人らしさ」・「関係性」・「個別性」を生かした認知症ケアと職務満足度の関係 （査読付き）	共著	平成26年6月	社会福祉科学研究所（3）47-58	研究目的は、介護老人保健施設スタッフの「その人らしさ」・「関係性」・「個別性」を生かした認知症ケアの実践と職務満足度の関係性を知ることである。対象は看護職629名、介護職734名を質問紙調査を行った。結果、認知症ケア実践が高ければ仕事全体の満足度は高い。職種の違いは、看護職では「職業に対する誇り」との関係が、介護職では「関係性」、「個別性」を大切にした関わりは「職業に対する誇り」との関連がみられなかった。 共著者 :小木曽加奈子　阿部隆春　平澤泰子　佐藤八千子、棚橋千弥子　柴田由美子　祢宜佐統美　安藤邑惠、今井七重 本人担当分：研究計画、分析、論文校正　スーパーバイズ
23　AHP理論に基づいたBPSDサポート尺度作成における検討 （査読付き）	共著	平成26年7月	地域福祉サイエンス（1），147-152	本研究目的は、先行研究によって導き出された困難に感じる4領域BPSDとよい反応を得られたケアの指標にAHP理論を用い検討し、BPSDサポート尺度案を作成することである。介護老人保健施設5施設のケア実践者6名（計30名）に対して、AHP理論を用いた調査を実施した。 分析は、単純集計、重みベクトル、一致率を用いた。対象者の平均年齢は45.0±12.6であり，所持している免許（複数回答）は、看護師は6名（20.0%）、介護福祉士21名（70.0%）などであった。困難に感じる4領域BPSDでは、「易怒・興奮」の3質問項目の重みベクトルの差があった。 一致率が最も高かったのは、「行動的攻撃（暴力）」の14名（46.7%）であった。よい反応を得られたケア4領域BPSDでは、「易怒・興奮」と「不潔行為」の3質問項目の重みベクトルの差があり、一致率が最も高かったのは、「拒薬・拒食・拒絶」と「不潔行為」の7名（23.3%）であった。 これらの結果からBPSDサポート尺度として用いることが可能であると考える。 共著者：小木曽加奈子，山下科子，佐藤八千子，安藤邑惠、 本人担当部分：研究計画,分析、アドバイザー
24　介護老人保健施設における認知症高齢者のBPSD に対する認識の傾向-デルファイ法を用いた意見収束の試み- （査読付き）	共著	平成26年7月	ソーシャルワーク　ぎふ，(20)，62-73. 岐阜県社会福祉士会誌	本研究目的は、認知症の「易怒・興奮」「拒薬・拒食・拒絶」「行動的攻撃（暴力）」「不潔行為」について利用者のよい反応を得られたケアに着目し、デルファイ法を用いて意見収束を行った。対象者は老年看護学分野の研究者など8名である。第1段階は、「易怒・興奮」の具体的な言動の1質問と「拒薬・拒食・拒絶」の具体的な言動の1質問は合意が低かった。第2段階は、「行動的攻撃（暴力）」の具体的な言動の4質問と「不潔行為」の具体的な言動の1質問は合意が低かった。第3段階は、「行動的攻撃（暴力）」の具体的な言動の3質問と、「不潔行為」の具体的な言動の1質問は合意が低かった。「行動的攻撃（暴力）」の具体的な言動をどのように捉えるのかということに対しては、十分な意見収束を図ることができず、どのように捉えるのかということは、課題が多いことが示唆される。 共著者：小木曽加奈子、安藤邑惠、佐藤八千子 本人担当分：研究計画、調査参加、スパーバイズ。

著書、学術論文等の名称	単著、共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
25　介護福祉士養成課程における医療的ケアの学修状況-専門学校・短期大学・大学の違いに焦点をあてて-	共著	平成 26 年 7 月	愛知高齢者福祉研究会誌 (2) P57-65	介護福祉士養成課程における医療的ケアの学修状況を明らかにするために、専門学校・短期大学・大学の各 1 養成施設を抽出し、医療的ケア教育の開始時期・内容等の教育の現状を調査した。データは各養成機関のシラバスから関連用語を抽出し、講義内容をカテゴリー化した。結果、喀痰吸引等の教育が行われている一方で感染、救急処置や薬物療法等の教育は一部のみであることが分かった。 共著者：真木明子、平澤泰子、安藤邑惠、佐藤八千子 本人担当分：研究計画、調査企画、アドバイザー
26　看護系大学生の相互依存様式における意識 -学年による比較-	共著	平成 27 年 3 月	岐阜医療科学大学紀要第 9 号 P41-57	研究目的は、医療職を希望している学生が相互依存における意識の違いについて知り学生指導の基礎データとする。調査内容はロイモデルの 9 重要概念を基軸に質問紙による調査を実施した。対象者は看護学科 1～4 年次生 368 名。結果全学年において「相互依存」が最高値を示した。最低値は 1－3 年次の「愛情充足」4 年次は「重要他者」であった。 クラスター分析の結果、他者と安心・安全の関係を築く「相互依存」の視点は看護職としてキャリア継続にもつながるという傾向があった。 共著者：藤生君江、中野照代、安藤邑惠、山田小夜子、吉川一枝、渥美陽子 本人担当分：調査実施、分析、論文校正
27　介護福祉士養成課程において現場が必要と認識する医療的ケア　介護老人保健施設に勤務している看護職・介護職のインタビュー調査から（査読付き）	共著	平成 27 年 7 月	社会福祉科学研究 （4）, 105-113	本研究は、介護福祉士養成課程において現場が必要と認識する医療的ケア教育について明らかにすることを目的とする。介護老人保健施設 2 施設の看護職と介護職各 2 名に対してインタビュー調査を実施した。その結果、得られた記録単位は 423 であり、「医薬品を用いたケアを学ぶ」、「ヘルスアセスメントを学ぶ」、「痰の吸引を学ぶ」、「緊急時の対応を学ぶ」、「経管栄養を学ぶ」、「専門用語を学ぶ」、「排泄を促すケアを学ぶ」の 7 領域となった。介護老人保健施設は病院と在宅の中間施設として「医療的ケアやリハビリテーションを実施し、在宅復帰を目指す施設」という特性もあり、医学的な管理に関する知識や技術が求められている現状が明らかになった。 共著者:平澤 泰子(浦和大学 短期大学部), 小木曽 加奈子, 安藤 邑惠, 佐藤 八千子, 山下 科子, 祢宜 佐統美, 今井 七重, 阿部 隆春 本人分担分：アドバイザー、文書校正

著書、学術論文等の名称	単著、共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
28　認知症高齢者の「不潔行為」の現状と対応方法；看護職と介護職の捉え方の違いに着目をして（査読付き）	共著	平成 27 年 10 月	地域福祉サイエンス（2），15-24,	本研究は、介護老人保健施設における認知症ケアのあり方を検討するために、認知症ケア実践者の看護職と介護職に自由記述調査を行った。認知症高齢者の「不潔行為」の具体的な言動とその時に実施した対応でよい反応を得られたケアを明らかにすることを目的とする。得られたデータはカテゴリー化し、キーワードの関連性は、 PASW Text Analysis for Surveys を用い分析を行った。有効回答は、看護職 23 名（92.0%）、介護職 23 名（92.0%）であった。 不潔行為の具体的な言動では、両職種「便ということが認識できず弄ぶ」行動に困難を感じることが多く、介護職の方がより多く認識されていた。 不潔行為のその時に実施した対応でよい反応を得られたケアでは、両職種「タイミング良くトイレ誘導を行う」であり、できるだけトイレでの排泄を試みるケアの方向性が示された。 共著者：小木曽加奈子，安藤邑惠，平澤泰子，山下科子，祢宜佐統美，佐藤八千子，阿部隆春，今井七重 本人担当分：研究計画、調査、分析、アドバイザー
29　医療系大学生の相互依存様式における意識-身近な人間関係との関連から-	共著	平成 28 年 3 月	岐阜医療科学大学紀要　第 10 号 P83-96	研究目的は、医療系大学生（看護学科・臨床検査学科・放射線技術学科）が身近じかにいる人をどのように意識しているかを、ロイ適応モデルを基に 9 重要概念 56 項目からなる質問票を用いて、「関係的統合」「疎外」（逆転項目）との関連を検討する。結果、家族有群は「関係的統合」は 3 学科とも高かった。「疎外」有群は、看護学科のみ関連性が見られなかった。家族有・友人等有群は「関係的統合」「疎外」3 学科共に高かった。大学生は、安心安全な人間関係がうかがわれた。家族無・友人有群「関係的統合」「相互依存」「サポートシステム」が高く特に友人等の存在の重要性が示唆された。 共著者：藤生君江　中野照代　渥美陽子　安藤邑惠　山田小夜子　吉川一枝 本人分担分：スーパーバイズ、調査実施、分析、論文校正

著書、学術論文等の名称	単著、共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（学会発表） 1　老年看護学臨地実習記録の内容分析と課題 - ICFの視点から考える看護の展開 -	共著	平成19年8月	第 38 回日本看護学会 - 看護教育 -　千葉 （19．8．10）	研究目的は老年看護学実習で学生が高齢者を全人的理解の上に援助ができるための教育的課題を明確にすることにある.結果, 「身体機能・構造」の内容は多く,その人らしい生活を支援する「活動と参加」「環境」に関連する内容が少なく認識が浅いことが分かり,指導に際しての示唆を得ることができた. 共著者：安藤邑惠,小木曽加奈子 本人担当分：研究企画,データ収集,分析,論文作成,
2　老年看護学臨地実習記録の内容分析と課題 - 認知症高齢者の生活機能からの分析 -	共著	平成19年8月	第 38 回日本看護学会 - 看護教育 - 千葉 （19．8．10）	研究目的は介護老人保健施設認知症病棟で使用している実習記録を生活機能領域から分析し,学生の対象者理解や援助の捉え方の傾向を把握し,指導課題を明確にする.同意が得られた学生33名の老年看護学実習記録のアセスメントシートを項目別に分析した.結果,医学モデルを象徴する「心身機能・構造」はほぼ満たされていたが,社会モデルであるその人らしさや個別性を象徴する「環境因子」「個人因子」についての内容は十分でなかった.認知症高齢者に対する全人的な理解を基盤とする看護の展開においては指導内容や指導体制の工夫が必要である. 共著者：小木曽加奈子　安藤邑惠 本人担当分：研究企画,データ収集,分析,スパーバイズ
3　老年看護学演習における加齢変化および障害擬似体験による学習効果 -「レクリエーション企画・実践」演習後のレポートの分析から -	共著	平成19年11月	第 12 回日本老年看護学会学術集会　神戸 （19．11．10）	研究目的は老年臨床看護の「レクリエーションの企画・実践」演習における参加者の疑似体験の学習内容から学習効果を検討し,演習の教授活動について検討することにある.対象は同意の得られた看護系大学生43名とし,課題レポートを質的に分析した. 学生は自分の感覚を遮断して疑似装具装着することで不自由さと同時にさまざまな感情を体験している.看護の現場で集団レクリエーションを実施することによって身体機能のみならず精神・心理社会面につい学ぶ機会となる.教育課題としては高齢者のADLの正しいアセスメントとレクリエーション内容との選択指標を検討する必要がある. 共著者：青木律子　服部紀子　安藤邑惠 本人担当分：研究企画,データ収集,分析,論文作成,スーパーバイズ

著書、学術論文等の名称	単著、共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
4　中高年の健康状態と生活の満足の関係について-ボランティア活動に参加している中高年の意識調査から-	共著	平成20年10月	日本看護学会-地域看護-　(静岡)(20.10.11)	研究目的は,ボランティア活動に参加している中高年の健康状態と生活の満足に対する傾向を把握する.対象者は,同意が得られた 60 歳以上 100 名の記入式アンケート回答を分析した.対象の傾向は無職が 67%,活動の場は作業所,授産所が 35%と多く,複数の施設を掛け持っていることが分かった.健康状態は 10 段階で 7.23 と比較的健康を保っていた.健康状態と生活満足は相関係数.630 と相関関係が見られた.最もストレスを感じていることは,「社会や行政に対する不満」が 20.9 と最も多かった. 共著者:安藤邑惠,小木曽加奈子,阿部隆春,平澤泰子,勅使河原隆行,原田正美 本人担当分：研究企画,データ収集,分析,論文作成
5　ボランティア活動に参加している中高年のコーピングについて	共著	平成20年10月	日本看護学会 - 地域看護 - 静岡 (20. 10.11)	精神保健ボランティア活動に参加している中高年のコーピング機能の傾向を把握する.対象者は,同意が得られた 60 歳以上 100 名が回答したコーピング尺度を分析した.コーピング尺度の下位尺度の「問題焦点型」は平均値 13.21,「情動焦点型」は平均値 8.45,「回避・逃避型」は平均値 18.80 であった.情動焦点型と回避・逃避型は相関係数.432 と相関関係がみられた.コーピング尺度の下位尺度は平均値が高く,コーピング機能が優れているという結果を得た.中高年者は定年など生活の大きな変化を迎える時期である.自発的に精神保健ボランティア活動に参加するという能動的な行動は,さまざまなストレスに対するコーピング能力との関連性があることが分かった. 共著者：小木曽加奈子,安藤邑惠,勅使河原隆行,原田正美,平澤泰子,阿部隆春 本人担当分：研究企画,データ収集,分析,論文作成,スーパーバイズ
6　ICF（国際生活機能分類）における『活動と参加』のケアの実際-介護老人保健施設のケア実践者のインタビュー調査から-	共著	平成20年10月	日本福祉学会全国大会　岡山（20.10. 12）	研究目的は,1CF における「活動と参加」領域のケア内容についての実態を把握することにある.対象は介護老人保健施設に勤務する看護職・介護職各 2 名とし,半構造化インタビューにおけるフィールドノートで得られたケア内容を質的に分析した.「活動と参加」の領域は,カテゴリー「セルフケア」が 3 分の 1 を占め,サブカテゴリーの上位を占めた“利用者のメッセージを受け取る”“心の潤いの工夫”は,その人らしさを大切にした支援･援助のあり方に対する内容である.入所者は,何らかの介護が必要な状態であり,セルフケアを中心として日々のケアが提供される.ケア実践者は,施設が利用者にとって過ごしやすいような人的環境や物質的環境に着目していることが分かった.本研究は岐阜医療科学大学研究倫理委員会の承認を得て実施した.財団法人ユニベール財団研究助成（代表　安藤邑惠）の研究成果の一部である. 共著者：小木曽加奈子,安藤邑惠,平澤泰子,阿部隆春,勅使河原隆行 本人担当分：研究企画,データ収集,分析,論文作成,スーパーバイズ

著書、学術論文等の名称	単著、共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
7　ICF（国際生活機能分類）における『環境因子』のケアの実態-介護老人保健施設のケア実践者のインタビュー調査から-	共著	平成20年10月	日本福祉学会全国大会（岡山）2008．10．11	研究目的は,介護老人保健施設における ICF の「環境因子」のケアについての実態を把握することにある.対象は介護老人保健施設に勤務する看護職・介護職各 2 名とし,半構造化インタビューにおけるフィールドノートで得られたケア内容を質的に分析した.ICF が提唱する「その人らしさを尊重する,理解する」は,毎日ケアを行っているケア実践者が重要であると認識している姿勢が現われている.ケア実践者が忙しい業務の中にあっても高齢者に穏やかに接し,利用者の笑顔を励みに,高齢者のケアに携わっている実態が浮かびあがっている.また高齢になるほど体温調節が困難になり,環境の変化によって風邪を引きやすく,夏などはうつ熱,脱水症に容易に陥ることを理解した上でケア実践者は,健康管理を行い,高齢者の日々のケアを実践にあたっている実情がある. 共著者：安藤邑惠,小木曽加奈子,平澤泰子, 阿部隆春,勅使河原隆行 本人担当分：研究企画,データ収集,分析,論文作成
8　介護老人保健施設における ICF の視点での「ケアに対する充実度」の尺度作成	共著	平成20年6月	日本老年社会科学会　大阪（20．6．27）	研究目的は,介護老人保健施設で行われているケアの実態を ICF の視点でその特徴を知り,ケア実践者の「ケアに対する充実度」を測定するための尺度作成の資料である.対象は介護老人保健施設に勤務する看護職・介護職で同意が得られ,アンケート回答に欠損値のない有効回答 45 部について分析した.アンケート内容は27項目,135質問をリッカート法にて行った.結果は主成分分析法による共通性は.733～.974と高い共通因子であった.信頼性係数は,標準化されたクロンバックの３領域のα係数は①.955,②.979,③.966 と高い内的整合性が認められ,この尺度は採択可能であると考える 共著者：阿部隆春,小木曽加奈子,安藤邑惠,平澤泰子,勅使河原隆行 本人担当分：研究企画,データ収集,分析,論文作成,スーパーバイズ
9　介護老人保健施設におけるケアの実態；ＩＣＦの「心身機能・身体構造」領域の分析	共著	平成20年6月	日本老年社会科学会（大阪）（20．6．27）	研究目的は,介護老人保健施設のケアの実態を ICF の視点から「心身機能・身体構造」領域の特性を知ることにある.対象は介護老人保健施設に勤務し,同意の得られた看護職及び介護職各 2 名に,半構造化インタビュー内容を KJ 法によって分析した.「心身機能・身体構造」の８つのカテゴリーのうち『精神機能』の語彙数が最も多く,利用者には認知症をはじめとする精神機能への配慮が必要な場合が多いことを示している.次いで『心血管系・血液系・免疫系・呼吸器系の機能』の語彙数が多く,加齢による心肥大によって心不全に配慮が必要な場合が多い.心臓疾患は生活行動の制限に直結することが影響していると考える.『神経筋骨格と運動に関連する機能』の語彙数が多いことは,介護が必要な場合は,利用者の現存機能を正しく評価することが重要というケア実践者の認識の強さを示している. 本研究は岐阜医療科学大学研究倫理委員会の承認を得て実施した財団法人ユニベール財団研究助成（代表者：安藤邑惠）の研究成果の一部である. 共著者：平澤泰子,小木曽加奈子,阿部隆春, 安藤邑惠,勅使河原隆行

著書、学術論文等の名称	単著、共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				本人担当分：研究企画,データ収集,分析,論文作成,スーパーバイズ
10　ICF における「環境因子」のケアに対する看護職と介護職の認識の違い－介護老人保健施設のケア実践者に対するインタビュー調査から-	共著	平成 20 年 11 月	日本老年看護学会（金沢　石川県立音楽堂）（20. 11. 9）	老人保健施設で行われている ICF の「環境因因子」に関連するケアを看護職と介護職の認識の違いについて検討する資料にする.対象者は 4 名に半構成的インタビューを質的に分析した.結果,看護職は医療面,介護職は生活を豊かにする側面の認識が高いことが分かった.「サーービス・制度・政策」に関する内容は両者認識が高かった. 共著者：安藤邑恵,小木曽加奈子 本人担当分：研究企画,データ収集,分析,論文作成,
11　認知症高齢者のケアに対する看護職と介護職の認識のちがい～「心身機能・身体構造」に着目をして～	共著	平成 21 年 3 月	第13回日本看護研究学会東海地方会学術集会（豊明）2009.3.	介護老人保健施設の看護職と介護職に対するインタビュー調査から認知症高齢者のケアに対する ICF の視点での「心身機能・身体構造」の領域に対する看護職と介護職の認識の違いを明らかにすることを目的とした.対象者は看護職 4 名と介護職 4 名である.看護職は，認知症の行動心理学的徴候（Behavioral and Psychological Symptoms of Dementia 以下 BPSD）に対して，充分な観察を行う必要性が高いと認識していることが明らかになった. 共著者：小木曽加奈子,安藤邑恵 本人担当分:研究企画,データ収集,分析,スーパーバイズ
12　介護老人保健施設における「ICF の視点でのケア内容」尺度の検討	共著	平成 21 年 6 月	第51回日本老年社会科学会,（横浜）2009.6.	本研究は，ICF の視点を踏まえたケア内容を尺度として汎用できるかの検討を行うことを目的とした.調査対象期間は,2007 年 11～12 月.介護老人保健施設に勤務する介護職，看護職 96 名を対象にアンケートを実施した.76 名の回答（回収率 81.2%）のうち，欠損値なしの有効回答 45 名（有効回答率 57.6%）を分析対象とした.信頼性係数は標準化された Cronbach のα係数.955～.979 と高い内的整合性が認められた.また ICF3 領域は強い相関関係が見られた.本ケア内容の尺度は共通性,信頼性，内的整合性が認められ統計的に尺度として汎用できることが検証できた.介護老人保健施設での利用者の全人的ケアには 3 領域の視点でのケアが重要であることが分かった. 共著者：安藤邑恵,小木曽加奈子，阿部隆春，平澤泰子 本人担当分:研究企画,データ収集,分析,論文作成
13　介護老人保健施設におけるケア実践者の高齢者ケア充実感 －ケア充実感の高いグループと低いグループの特性について－	共著	平成 21 年 6 月	第51回日本老年社会科学会,（横浜）2009.6.	高齢者にとって質の高い生活は，自分らしい生活の維持であり，ケア実践者の充実感が関連していると考える.本研究の目的は，介護老人保健施設で働くケア実践者の充実感を検証することである.1,000 人に調査を実施し,看護職 309 票(61.8%),介護職 340 票(68.0%)，計 649 票(64.9%)を有効回答とした. 共著者：平澤泰子,小木曽加奈子，安藤邑恵，阿部隆春，山下科子

著書、学術論文等の名称	単著、共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
14　介護老人保健施設のケア実践者における職務満足度 －看護職と介護職の意識の比較から職務環境改善を考える－	共著	平成21年6月	第51回日本老年社会科学会,（横浜）	本研究は，介護老人保健施設で働く看護職と介護職の職務満足の違いを調査し効果的な労働環境改善を検討することを目的とした.対象者1,000名(看護職500名･介護職500名)にアンケート調査し有効回答は，649票(64.9%)であり，看護職309票(61.8%)，介護職 340 票(68.0%)であった.看護職･介護職は，仕事に対する誇りややりがいや職員間のチームワーク，協力に高い満足感を感じている.両職種とも心理的な面が仕事への支え，意欲に繋がっていることが窺えた. 共著者：阿部隆春,小木曽加奈子，安藤邑惠，平澤泰子，山下科子 本人担当分：研究企画,データ収集,分析,論文作成,スーパーバイズ
15 認知症高齢者のケアに対する看護職と介護職の認識の違い～「活動と参加」に着目をして～	共著	平成21年8月	第35回日本看護研究学会,（横浜）	介護老人保健施設の看護職と介護職に対するインタビュー調査から ICF における[活動と参加]の領域に対する看護職と介護職の認識の違いを明らにすることを目的とした.2007年11月～2008年2月に，1年以上勤務する看護職4名及び介護職4名を対象に実施した.[活動と参加]に該当する看護職の語彙数は681，介護職は564であった.両職種ともセルフケアに対する語彙数が多いが，サブカテゴリーは，看護職は『食べること』に集中しており，一方介護職は分散傾向であった.看護職と介護職の差異が最も大きいカテゴリーは「学習と知識の応用」であり，看護職は『療法の機会』のみならず,『意思を表出する』,『ニーズを引き出す』ことなど現在ある機能を維持･向上させることに努力している姿が伺える. 共著者：小木曽加奈子,安藤邑惠 本人担当分：研究企画,データ収集,分析,論文作成,スーパーバイズ
16 A Correlation of Job Satisfaction and Sense of Fulfilment from caring at the Nursing Home-Recognition among Nurses and Care Workers-	共著	平成21年8月	The 13th Korea－Japan Health Education symposium & The 57th Japanese Society of Education and Health science, Kyunghee University	As for the elderly care, the labor shortage of the care spot has been a social problem. Therefore, this study was aimed at clarifying the differences and the common features among nurses and care workers who work at the nursing homes from the viewpoints of sense of fulfilment from caring and job satisfaction. The questionnaire collection rate was 309 responses from nurses (61.8%), 340 responses from care workers (68.0%). For both nurses and care workers, it was clear that sense of fulfilment from caring increased as job satisfaction became high. In terms of job satisfaction among nurses, there was a correlation with the age and the number of years. On the other hand, in terms of job satisfaction among care workers, there was no correlation with the age and the number of years. 共著者：小木曽加奈子,安藤邑惠，阿部隆春，平澤泰子，田久浩志，河口尚子 本人担当分：研究企画,データ収集,分析,スーパーバイズ

著書、学術論文等の名称	単著、共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
17 The examination of the characteristics of the care of the elderly provided by care workers in nursing homes using factor analysis	共著	平成21年8月	The 13th Korea－Japan Health Education symposium & The 57th Japanese Society of Education and Health science, Kyunghee University	The purpose of this research is to analyze the nature of the care provided by care workers in nursing homes in terms of ″the ICF-based measurement of the nature of care″ by factor analysis and examination of its characteristics. We collected the questionnaires from 340 care workers (68.0%). Their average age and its standard deviation was 34.58±11.117syears old. We took a factor analysis by the varimax rotation that was a principal component analysis. We deleted items which showed factor loading of under 0.400 and adopted the constituent items of the factor concerned. In the end we adopted 16 factors in 66 items. The percentage of accumulation contribution in the 66 items was 67.812%.We found the commonality in which care workers respected the person as an individual in ten items, so we named the first factor in ten items as ″support that respects people as individuals″. 共著者：安藤邑惠,小木曽加奈子, 平澤泰子, 阿部隆春, 田久浩志 本人担当分：研究企画,データ収集,分析,論文作成
18 A Relation of Participants' Health Condition and their Life Satisfaction in Moral Volunteer Activity-Research of Participants' Opinion Roll-	共著	平成21年8月	The 13th Korea－Japan Health Education symposium & The 57th Japanese Society of Education and Health science, Kyunghee University	We aimed at clarifying the relation between the participants' health condition in the moral volunteer activity and the degree of their life satisfaction. We carried out the questionnaire to 253 people who participated in ″the meeting of a moral volunteer″ in A prefecture and agreed with the meaning of this research. We evaluated a degree of their health condition and their satisfaction in 10 steps. There were many women 209 (82.6%) as overwhelmingly as a male 42 (16.6%). Age has most 60years-old generation 81 (32.0%). About experience which took the volunteer lecture, and many 185 (73.1%) were taking a lecture. They was making health condition good, thinking the present experience beneficial and raising the degree of their life satisfaction. 共著者：平澤泰子,小木曽加奈子, 安藤邑惠, 阿部隆春 本人担当分:研究企画,データ収集,分析,スーパーバイズ

著書、学術論文等の名称	単著、共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
19 高齢者の暮らしを支えるシステムの課題～介護老人保健施設に勤務する看護職の視点から～	共著	平成21年9月	第40回日本看護学会-老年看護-（福島）	介護老人保健施設のケアを高齢者の暮らしを支える社会システムの視点からの課題を明らかにすることを目的とした.介護老人保健施設に勤務している看護職43名の「社会で高齢者を支えるしくみ」に関する自由記述を分析対象とした.看護職の平均年齢±SDは46.02±8.31歳であり，女42名（97.7％），男1名（2.3％）.190語彙数は11カテゴリーを形成し，更に類似性の高いカテゴリーを集めて「高齢者を社会全体で支える」,「施設ケア体制」，「これからの高齢者ケアのあり方」の3領域となった. 共著者：山下科子,小木曽加奈子，安藤邑惠，平澤泰子，阿部隆春 本人担当分：研究企画,データ収集,分析,スーパーバイズ
20 ICF の視点に基づく高齢者ケアプロセスの実践	共著	平成21年9月	第12回日本福祉図書文献学会全国大会,（京都）	高齢者の QOL を保証する専門職として,看護師と介護福祉士を目指す学生等にとって,高齢者ケアプロセスの展開を身につけることは必修である.また看護職・介護職がお互いのケアを尊重し,連携ができることをねらい,ICF と言う共通言語を用い双方が認識できることを重視し,高齢者ケアプロセスが理論体系を踏まえて展開できることを目的とした.入所期間が短くなり,ケアのアウトカムを出なければならない看護･介護現場で,今後は,エビデンス（根拠）に基づいたケアが重要となり,アセスメントツールの活用はケアプロセスの一助となる. 共著者：安藤邑惠,小木曽加奈子 本人担当分：研究企画,データ収集,分析,論文作成
21 Recognition in Care for the Elderly among Nurses and Care Workers -Content Analysis Based on International Classification of Functioning, Disability and Health-	共著	平成21年9月	The 1st International Nursing Research Conference of World Academ of Nursing,（神戸）	We analyze the recognition in care for the elderly among nurses and care workers from the viewpoint of ICF. The questionaire collection rate was 309 votes for nurses (61.8%), care worker 340 votes (68.0%). We classified ICF in three domains of ″ body functions and body structures ″ ″ activities and participation ″″environmental ″. As for the post of nursing, care to the infection prevention and the evacuation control was high in ″body functions and body structures″.″The tool from viewpoint of ICF″ which we made will be able to use generally. It will be an indicator to investigate whether daily supplied care is the one which the people are respected. 共著者：小木曽加奈子,安藤邑惠 本人担当分：研究企画,データ収集,分析,スーパーバイス

著書、学術論文等の名称	単著、共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
22 ボランティア活動に参加している中高年者の健康状態と生活の満足	共著	平成21年10月	日本社会福祉学会第 57 回全国大会（東京）（2009.10. 11）	研究目的は,ボランティア活動に参加している中高年の健康状態と生活の満足に対する傾向を把握することである.対象は同意が得られた 60 歳以上の 100 名のアンケート回答を分析した.調査内容は,ボランティア活動の状況と健康状態,生活の満足,ボランティア活動を行っていてストレスと感じていること(自由記述式）である.健康状態と生活の満足とは相関があり,中高年者がネットワーク人材として活躍できるためにはまず,健康維持・増進をはじめ各種の福祉活動を推進する施策・環境整備が今後の課題となる. 共著者:安藤邑惠,小木曽加奈子,阿部隆春,平澤泰子,勅使河原隆行 本人担当分：研究企画,データ収集,分析,論文作成
23 介護老人保健施設における施設運営管理について-認知症ケアに焦点をあてて-	共著	平成21年10月	日本社会福祉学会第 57 回全国大会（東京）2009.10. 10	看護職と介護職の視点から,認知症ケアを実践する上での施設運営管理の課題を明らかにすることによって,効果的な労働環境改善方法を検討するための基礎的資料を得ることを目的とした.同意が得られた看護職 48 名・介護職 52 名の認知症ケアにおける施設運営管理に関する自由記述を質的分析の対象とした.介護老人保健施設は,利用者個々に合わせた療養の場や医療の場として活用されることが求められており,認知症ケアにおいては,柔軟にケアが提供できるように施設のハード面の整備とソフト面の整備が必要である.また，マンパワーの不足が深刻であり人手不足から業務に追われている現状がある.ケア実践者の働く環境を整備することが重要となる. 共著者：小木曽加奈子,安藤邑惠,阿部隆春,平澤泰子 本人担当分:研究企画,データ収集,分析,スーパーバイス
24 認知症ケアに対する現場教育の課題について～介護老人保健施設の認知症ケアに着目をして～	共著	平成 21 年 10 月	第 40 回日本看護学会-看護教育-,（岡山）	介護老人保健施設における認知症ケアに対する現場教育の課題を看護職と介護職の視点から明らかにすることを研究目的とした.2008 年 4 月～5 月.認知症ケアを実践している看護職 28 名・介護職 29 名の認知症ケアの現場教育に関する自由記述を本研究の分析対象とする.両職種ともマンパワーに関する内容が多く，現場教育を充実することが必要だと感じている.看護職はケア実践者個々の能力差を感じており，パーソンフッドとウエルビーイングを高めるパーソンセンタードケアの実践の側面が希薄であると感じている.施設内の教育体制として，看護職は認知症専門職の配置が必要と考えている. 共著者：小木曽加奈子,安藤邑惠，阿部隆春，平澤泰子，山下科子 本人担当分:研究企画,データ収集,分析,スーパーバイス

著書、学術論文等の名称	単著、共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
25　児童虐待に対する意識調査-「親が子供に対してしつけのためにする体罰」に焦点をあてて	共著	平成21年10月	日本社会福祉学会第57回全国大会　法政大学多摩キャンパス 2009.10. 11	「親が子どもに対してしつけのためにする体罰」をどう思うか」ということから「適切な行使」意識を明らかにすることを目的とした.対象は同意を得られた253名のアンケート回答を分析した.精神保健ボランティア集会の参加者の 74.1%は 50 歳以上であり,男女別では,女性は 82.6%である.叱ったり褒めたりする しつけに対して,しつけのための体罰を「どんな場合でも否定的」と考える人は26.9%であり,「やむをえない,条件付で肯定する」と考 える人は 62.1%である.回答なしは,11.1%であった.本調査結果を一般化はできないが,親が子どものためにするしつけのための体罰を肯定的と見る意識の存在が多いことが窺えた. 共著者：阿部隆春,小木曽加奈子,安藤邑惠,平澤泰子 本人担当分：研究企画,データ収集,分析,論文作成,スーパーバイズ
26 認知症ケアにおけるICF の視点による環境因子の認識　- 看護職と介護職の比較	共著	平成21年11月	第29回　日本看護科学学会学術集会　（千葉・幕張） （21. 11. 27）	介護保険上の新たな課題の１つとして,認知症高齢者の増加があり,「環境因子」に関連するケアは生活機能と障害への外的影響をもたらす背景因子として重要な課題の１つである.ICF の分類にそって, 認知症ケア実践者のインタビュー内容を分析することにより,環境因子に関連するケアに対する看護職と介護職の認識の違いが明らかになったためここに報告する.介護老人保健施設に勤務する看護職 4 名及び介護職 4 名.データ収集として, 半構造化インタビューにおける逐語録で得られたケア内容を分析対象とした.「環境因子」に該当する語彙数は看護職 397, 介護職 186 であり,『生産品と用具』『自然環境と人間がもたらした環境変化』『支援と関係』『態度』『サービス・制度・政策』の 5 カテゴリーに分類した. 共著者：安藤邑惠,小木曽加奈子 本人担当分：研究企画,データ収集,分析,論文作成
27 介護職の視点からの介護老人保健施設における高齢者ケアの課題	共著	平成21年11月	人間福祉学会2009inぎふ,（岐阜）	介護老人保健施設における高齢者ケアの課題を介護職の視点から明らかにすることを目的に研究を行った.介護職500名のうち,340票（68.0%）の回収があり,その内の70名（14.0%）による認知症ケアの課題に関する自由記述の回答を本研究の分析対象とする.279語彙は, 17カテゴリーを形成し,「介護する側の現状」「目指したい高齢者ケアのあり方」「高齢者ケアの難しさ」「社会全体の中での高齢者ケア」の4つの領域となった. 共著者:小木曽加奈子,安藤邑惠, 阿部隆春, 平澤泰子,山下科子 本人担当分:研究企画,データ収集,分析,スーパーバイズ

著書、学術論文等の名称	単著、共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
28 介護老人保健施設スタッフの転職意向と職務満足度との関連-看護職と介護職の比較から-	共著	平成22年6月	日本老年社会科学会第52回大会（愛知）	介護老人保健施設の看護職と介護職の転職意向が低いスタッフはどのような職務満足と関連があるのかを検討することを目的とした.回収したアンケートのうち,「高齢者以外の仕事がしたい」に欠損値がない介護職338（67.6%）名，看護職305（61%）名を有効回答とした.看護職は，転職意向と年収には関連性が強いことが明らかになっており，介護職においては,職務満足項目として高齢者ケアの仕事への誇りをもつこと,利用者に直接サービスを提供すること,安心して働き続けられる職場への改善が,定職率の向上に繋がることが示唆された. 共著者:阿部隆春,小木曽加奈子，安藤邑惠，平澤泰子 本人担当分:研究企画,データ収集,分析,スーパーバイズ
29 介護老人保健施設で支える高齢者ケアの現状と課題認識-介護職の想いをことばに-	共著	平成22年6月	日本老年社会科学会第52回大会（愛知）	介護職が高齢者ケアの現状をどのように認識し，社会に向けてどのような課題を認識しているか，を明らかにすることにより，介護現場の理解を深める一石としたく調査を行った.自由記述の回答内容うち「高齢者ケアを社会で支える人材と して思うところ」に関する記述のあった46名を分析対象とした.第1カテゴリーは現在の施設ケアは，介護職の善意に依存し人手不足による介護業務の過重,施策がもたらす施設ケアと在宅ケアのアンバランスを，第2カテゴリーは，施策・制度の見直し，身近な地域の体制の改善,将来の介護環境に対する不安や危機感を指摘し，早急な対策を切望している. 共著者：安藤邑惠,小木曽加奈子，平澤泰子，阿部隆春，山下科子 本人担当分：研究企画,データ収集,分析,論文作成,
30 介護老人保健施設入所者とその家族との介護職の関わりについて一家族とともに支える介護-	共著	平成22年6月	日本老年社会科学会第52回大会（愛知）	介護老人保健施設に勤務する介護職の施設入所者の家族に関する認識を分析することにより,家族との関係において求められる役割についての基礎的な資料を得ることができたためにここに報告する.由記述の中に,「家族との関わり」について記述があった17名を分析の対象とした.記述内容は39語彙に分類でき,4 カテゴリーを形成した.家族による介護は限界があり，施設への入所などの利用も必要となっている.入所により,家族との関係が希薄となり,施設での介護に依存的になっている現状が明らかになった. 共著者:山下科子,小木曽加奈子，安藤邑惠，平澤泰子,阿部隆春 本人担当分:研究企画,データ収集,分析,スーパーバイズ
31 介護老人保健施設における転職意向の低い介護職員とケア実践との関連-ICFの視点でのケア実践に着目をして-	共著	平成22年6月	日本老年社会科学会第52回大会（愛知）	介護職員の転職率が高い昨今,転職意向の低い介護職員とケアの実践内容との関連を明らかにするため,郵送法にて調査を行った.介護職「高齢者ケア以外の仕事がしたい」項目に欠損値がない338票（67.6%）分析対象とした.転職意向が低い介護職は,年齢や収入,勤続年数の関連性はなく，ケア実践における「活動と参加」の領域，特に日常生活の活動的な生活の支援の実践に関連が深い.利用者の個別性を大切にするケアが転職の低減に役立つことが明らかになった. 共著者：平澤泰子,小木曽加奈子，安藤邑惠,，阿部隆春 本人担当分:研究企画,データ収集,分析,スーパーバイズ

著書、学術論文等の名称	単著、共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
32 介護老人保健施設におけるケア充実感とケア実践の関連性-看護職と介護職の認識の違いに着目をして-	共著	平成22年6月	日本老年社会科学会第52回大会（愛知）	介護老人保健施設のケア実践者である看護職と介護職に対して，ケア充実感とICFの視点におけるケア実践の関連性を看護職と介護職の認識の違いに着目をして明らかにすることを目的とした．常勤勤務でありケア充実感の質問項目に欠損値がない看護職274票(54.8%)・介護職314票(62.8%)を有効回答とし分析対象とした．看護職は，生命に直結する循環管理を行うことでケア充実感が高くなるが，介護職では，入浴などのセルフケア・身体を洗うことが充実感を低めることが明らかになった． 共著者：小木曽加奈子，安藤邑惠，阿部隆春，平澤泰子 本人担当分：研究企画，データ収集，分析，スーパーバイズ
33 生活全体に配慮が必要な認知症高齢者のBPSDの変化-認知症の症状に関する機能評価尺度を用いて-	共著	平成22年8月	第58回日本教育医学会学術集会（大阪）	ケア実践者が困難性を感じている認知症高齢者像として，「認知症の症状に関する機能評価尺度（以下，認知症尺度）」を用い，生活全体に配慮が必要な30点以上の認知症高齢者に焦点をあて調査をし，BPSDの変化に対する基礎的資料を得ることを目的とした．対象者は，認知症尺度30点以上の利用者7名である．認知症が高度であると，セルフケアに関する生活全般の配慮が必要であり，改善はみられない傾向が明らかになった．しかし，記憶と問題行動のチェックリストなどの精神的な混乱は関わりによって改善傾向がみられることが明らかになった． 共著者：小木曽加奈子，安藤邑惠，阿部隆春，平澤泰子，山下科子 本人担当分：研究企画，データ収集，分析，スーパーバイズ
34 介護老人保健施設における看護職のケアの方向性-「ICFの視点でのケア尺度」を用いた因子分析から-	共著	平成22年9月	第41回日本看護学会-老年看護-，（奈良）	介護老人保健施設で実施している看護職の高齢者ケアの方向性を「ICFの視点でのケア尺度」を用いて，統計的手法の因子分析によってその方向性を検討することを目的とした．回収され不備 票を除く309票（61.8%）を有効回答とし，分析対象とした．因子分析の結果，9因子44質問肢となり，Cronbachのα係数は0.858～0.908と高い内的整合性が認められた．看護職は，高齢者ケアにおける「自立支援」や「尊厳の保持」などの基本理念を大切にし，全人的に高齢者を理解しケアを実践していることが明らかになった． 共著者：小木曽加奈子，安藤邑惠，平澤泰子，阿部隆春 本人担当分：研究企画，データ収集，分析，スーパーバイズ

著書、学術論文等の名称	単著、共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
35 看護介護課長の視点における家族支援のありかた介護老人保健施設の認知症高齢者に着目をして~	共著	平成22年9月	第 41 回日本看護学会-老年看護-,（奈良）	認知症高齢者とその家族への支援の課題を看護職の視点から明らかにすることを目的とした. A県のプリセプター制度を取り入れている介護老人保健施設を対象とした.インタビューで得られたデータはテキストマインド法を用いて分析を行った.認知症高齢者の家族は,戸惑いや不安を抱えながら施設ケアを利用している現状があり,看護介護課長はケアスタッフは,家族が受け入れがたい現実を家族と共に受け止めるなど支援を行うことが必要だと認識していることが明らかになった. 共著者： 山下科子,小木曽加奈子, 安藤邑惠 本人担当分：研究企画,データ収集,分析,スーパーバイズ
36 認知症ケアにおける介護老人保健施設の課題；インタビュー調査による看護・介護課長の視点から	共著	平成22年11月	第 15 回日本老年看護学会, 群馬県民会館	介護老人保健施設（以下，老健）の看護・介護課長の視点から認知症ケアにおける施設の課題に対する基礎的な資料を得ることを目的とした.プリセプター制度を取り入れている 2 施設を対象 としインタビュー調査を行った.133語彙は,20サブカテゴリーから成り，6カテゴリーを形成し，更に「老健という施設の役割に対する課題」「認知症と向き合うケア実践への課題」の2つの領域となった認知症という疾患に着目をするのではなく，1人の高齢者として捉え，ケアを考えるという思考が伺える. 共著者：小木曽加奈子,安藤邑惠 本人担当分：研究企画,データ収集,分析,スーパーバイズ
37 看護学生における高齢者に対する陰部洗浄とおむつ交換の学びの傾向	共著	平成23年6月	日本老年社会科学会第53回大会,（新宿）	研究目的は,陰部洗浄・おむつ交換の演習において看護学生の学びの内容を明らかにすることとし,A大学看護学科３年生（男子13名，女子68名）の計81名に調査を行った.陰部洗浄とおむつ交換の演習で意識したこととして351内容を得た.学生が意識して行った内容は,22個のサブカテゴリーと６個のカテゴリーが形成された.学生は演習で難しかったことや上手くいかなかった内容を今後の課題として意識していた. 共著者：渡邊美幸,小木曽加奈子, 安藤邑惠 本人担当分：研究企画,データ収集,分析,スーパーバイズ
38 介護職のケアの特性と領域別職務満足度の相関関係-介護老人保健施設における介護ケア特性 16 因子と領域別職務満足度の相関関係-	共著	平成23年6月	日本老年社会科学会第53回大会,（新宿）	研究目的は,介護老人保健施設では，介護度が高い利用者が多くなる傾向にあり，高齢者ケアの向上には,ICF 視点での介護職ケア内容の検討を行った.6 因子と 9 領域別職務満足度の Peason の相関係数（両側）1%水準で有意 0.3 以上は第 1 因子と「職員間相互の影響」.310,「職場における管理」.386,「制度・法律の変化への対応」.325.第 3 因子と「職業に対する誇り」.338 であった. 「その人らしさを尊重した援助」と職員間の助け合い協力,ケア方法の満足,現場が対応できている等及び,「人格を尊重した援助」は仕事をしていることに誇りを持っていると関連している. 共著者：阿部隆春,安藤邑惠，小木曽加奈子，平澤泰子，山下科子 本人担当分：研究企画,データ収集,分析,スーパーバイズ

著書、学術論文等の名称	単著、共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
39　介護老人保健施設のケアスタッフの教育支援や研修；プリセプター制度を取り入れている施設の調査から	共著	平成23年10月	日本社会福祉学会第 59 回全国大会，（千葉）	研究目的は介護老人保健施設における認知症ケアの「ケアスタッフへの教育支援や研修」の内容を明らかにするために，1 人 30～45 分程度の半構成的面接で行った．語彙数は 83，14 サブカテゴリーを形成し，5 カテゴリーとなった．語彙数 30 を示したサブカテゴリーは，『現場職員による職員教育』『現場職員による新人教育』『施設の現場は介護が主体』で構成され，“皆がいい関わりをするためには，その職員達が実践する”“周りのスタッフに助けてもらって新人は成長していく”“医療行為は多いけれど介護が主”であることが示された．カテゴリーは，「生活の場における介護の視点の重要性」とした． 共著者：平澤泰子，小木曽加奈子，阿部　隆春，安藤邑惠 本人担当分：研究企画，データ収集，分析，スーパーバイズ
40　国際生活機能分類の視点を用いた「認知症ケア尺度」開発プロセス	共著	平成23年10月	日本社会福祉学会第 59 回全国大会，（千葉）	研究の目的は，生活全体に配慮が必要な認知症高齢者に対する「認知症ケア尺度」の原案（3 領域，27 項目，135 質問）を作成する．開発した「認知症ケア尺度」（3 領域，27 項目，81 質問）の信頼性を検討する，ことである．「看護版」と「介護版」はいずれも下位項目尺度は安定した数値として 0.800 以上を得ることができ尺度の信頼性を検証できた．各尺度の質問は一部違いがあり，「看護版」は医学的視点が強い尺度としての特性を持ち，「介護版」は日常生活をサポートするスキルに対する視点が強い尺度としての特性を持った． 共著者：小木曽加奈子，阿部隆春，平澤泰子，佐藤八千子，棚橋千弥子，柴田由美子，祢宜佐統美，安藤邑惠 本人担当分：研究企画，データ収集，分析，スーパーバイズ
41　認知症高齢者ケア充実感と 9 つの領域別職務満足度の関係；認知症ケア実践者である看護職と介護職に着目をして	共著	平成24年6月	日本老年社会科学会第54回大会，（長野）	認知症高齢者の増加とともに重度化が問題となっている．認知症は重度となるとBPSDにより，ケアの困難性が増し，ケア実践者のケアに対する充実感及び職務満足度が低い可能性がある．本研究目的は，認知症ケアに対する充実感と職務満足度の関係を明らかにした．認知症ケア充実感と仕事全体の満足度は，両職種とも関連が強かった．認知症ケアの充実感を高めるためには，それぞれの職種の違いを認識し，職務の細かな領域に着目をしていくことが重要であることが示唆される． 共著者：小木曽加奈子，阿部隆春，平澤泰子，山下科子，安藤邑惠，佐藤八千子，樋田小百合，祢宜佐統美 本人担当分：研究企画，データ収集，分析，スーパーバイス
42　認知症高齢者ケアに携わる介護職の職務満足度と転職，離職との関係について；介護職としての通算勤務年数に着目して	共著	平成24年6月	日本老年社会科学会第54回大会，（長野）	本研究の目的は，介護職の通算勤務年数と職務満足度，転職，離職の関連の検討である．通算勤務年数，仕事全体の満足度，転職，離職の Pearson の相関係数は，転職と離職は.365 であった．仕事全体の満足度と転職は-.350，離職は-.332 と負の相関を示した．通算勤務年数と転職は-.114 と負の相関を示し 1%水準で有意であった． 共著者：阿部隆春，小木曽加奈子，平澤泰子，山下科子，安藤邑惠，佐藤八千子，樋田小百合，祢宜佐統美 本人担当分：研究企画，データ収集，分析，スーパーバイズ

著書、学術論文等の名称	単著、共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
43 介護老人保健施設における介護職の認知症ケアに対する認識	共著	平成24年6月	日本老年社会科学会第 54 回大会,（長野）	本研究は介護老人保健施設の介護職の認知症ケアに対する認識を明らかにすることを目的とした.有効回答は87名（87.0%）.「心身機能・身体構造」の領域は7つの因子で構成され,αは.627～.788であった.「活動と参加」の領域は8つの因子で構成され,αは.741～.903であった.「環境因子」の領域は3つの因子で構成され,αは.732～.835であった.共著者:佐藤八千子,小木曽加奈子,阿部隆春,平澤泰子,山下科子,安藤邑惠,樋田小百合,祢宜佐統美 本人担当分:研究企画,データ収集,分析,スーパーバイズ
44 看護職員による認知症高齢者ケアの重要性の認識と実践の違い	共著	平成24年6月	日本老年社会科学会第 54 回大会,（長野）	介護老人保健施設における認知症ケアの重要性の認識とその実践の違いについて,看護職員の視点から明らかにすることを目的とした.重要と認識していても,実践に及んでいないことが多いことが明らかになった.＜心身機能・身体構造＞は,認知症の BPSD への対応についての実践は希薄な傾向がみられた.＜活動と参加＞は,生活を豊かにする視点のケアが希薄な傾向がみられた.＜環境因子＞は,重要性の認識があっても,実践が伴わないことが多く,課題が多い領域であることが明らかになった. 共著者:山下科子,小木曽加奈子,平澤泰子,阿部隆春,安藤邑惠,佐藤八千子,樋田小百合,祢宜佐統美 本人担当分:研究企画,データ収集,分析,スーパーバイズ
45 介護福祉士養成における介護福祉実習の問題点;介護福祉実習に事前に修得すべき点に焦点をあてて	共著	平成24年6月	日本老年社会科学会第 54 回大会,（長野）	本研究の目的は,養成校が介護福祉実習施設を実施するにあたり,学生が事前に修得すべき点を明らかにすることである.実習生は実習の前に,学内でしっかり介護技術の基本を身につけ,コミュニケーションを通して利用者を深く理解し学ぼうとする姿勢が求められていることが明らかになった.そして,養成校は,「求められる介護福祉士像」が学生に根づくように,介護福祉士の理想を掲げ指導をしていかなくてはならないことが示唆された. 共著者:平澤泰子,小木曽加奈子,,山下科子,阿部隆春,安藤邑惠,佐藤八千子,樋田小百合,祢宜佐統美 本人担当分:研究企画,データ収集,分析,スーパーバイズ
46 認知症高齢者のケア実践における看護職と介護職の相違―ICF の視点「環境因子」に着目して―	共著	平成24年8月	第 60 回日本教育医学学会,（筑波）	介護老人保健施設に勤務する認知症高齢者をケアする看護職,介護職の認知症ケア実践の相違を ICF の視点「環境因子」に着目して研究を行った.看護職有効回答 719 名（46.8%),介護職有効回答 765 名（49.8%)であった.共に「自然環境と人間がもたらした環境変化」が最も高く,「サービス・制度・政策」の平均値が最も低かった.実践について最も差が見られたのは,「支援と関係」で看護職のほうが介護職よりも平均値が高かった.看護職の 5 つの「環境因子」項目の Pearson の相関係数は,.493**～.659**と全て 1%水準で有意であった.介護職の 5 つの「環境因子」項目の Pearson の相関係数も,.485**～.683**と全て 1%水準で有意であった. 共著者:阿部隆春,小木曽加奈子,平澤泰子,山下科子,安藤邑惠,佐藤八千子,今井七重,祢宜佐統美,樋田小百合 本人担当分:研究企画,データの収集,分析,スーパーバイズ

著書、学術論文等の名称	単著、共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
47　看護職員が認識する国際生活機能分類に基づく認知症高齢者のケア	共著	平成24年8月	第60回日本教育医学学会 （筑波）	本研究では,介護老人保健施設における認知症ケアの認識について，ICF の視点で作成された「看護職版認知症ケア尺度」を用い，看護職員の視点から明らかにすることを目的とした．有効回答は 85 名（85.0%）であった．＜心身機能・身体構造＞は,4 因子から構成され,,＜活動と参加＞は,6 因子から構成され,＜環境因子＞は 2 因子から構成された.因子分析の結果，すべての質問項目は，因子寄与率が 0.400 あり，除外が必要な質問項目はなかった．また，各因子におけるα係数においても 0.800 以上あり，探索的な方法であるが，一元性と信頼性を確保することができた. 共著者：山下科子,小木曽加奈子,平澤泰子，　阿部隆春，　安藤邑惠，佐藤八千子，今井七重，樋田小百合，祢宜佐統美 本人担当分：研究企画,データ収集,分析,スーパーバイズ
48　介護職員による認知症高齢者ケアの重要性の認識と実践の違い―国際生活機能分類に基づくケアの視点からの検討―	共著	平成24年8月	第60回日本教育医学学会 （筑波）	研究目的は,在宅復帰を目標としている介護老人保健施設における介護職員の認知症高齢者ケアの重要性の認識とその実践の違いについて,国際生活機能分類に基づくケアの視点から明らかにすることである.介護職員は認知症ケアを重要であると認識していても,実践には及んでいないことが多いことが明らかになった．＜心身機能・身体構造＞においては，認知症の BPSD への対応についての実践は希薄な傾向がみられた．＜活動と参加＞においては，「セルフケア」の面では認識と実践の差が小さかったが，「その人らしい生活の確保」といった視点のケアでは差が大きく，ケアの希薄な傾向がみられた．＜環境因子＞においては，重要性の認識があっても，実践が伴わないことが多く，課題が多い領域であることが明らかになった. 共著者：平澤泰子,小木曽加奈子,山下科子，　阿部隆春，安藤邑惠，佐藤八千子，今井七重，樋田小百合，祢宜佐統美 本人担当分：研究企画,データ収集,分析,スーパーバイズ
49　介護老人保健施設における介護職員による「その人らしさ」と「関係性」を大切にしたケアの実際	共著	平成24年10月	第60回日本社会福祉学会 （兵庫）	本研究は高齢者の生活支援･援助を行う機会が多い介護職に着目をし，パーソン・センタード・ケアが提唱する「その人らしさ」と「関係性」を大切にしたケアの実践を ICF の視点を用いて明らかにすることを目的とした.心身機能・身体構造の領域では，感情失禁や興奮に対応するケアを行うことと,何を言っているか分からない利用者に対しても心から耳を傾けるという実践が,「その人らしさ」と「関係性」と関係があった.活動と参加の領域でも，コミュニケーションの大切さが示されており，認知症高齢者の BPSD を低減させるためには,非言語的コミュニケーションの活用が重要であることが示唆される.また，環境因子としては介護職員自身の態度として,利用者にとっては何が大切か考えることや利用者のペースに合わせる実践がされていた. 共著者：小木曽加奈子,平澤泰子,阿部隆春，佐藤八千子,棚橋千弥子，柴田由美子，祢宜佐統美,安藤邑惠 本人担当分：研究企画,データ収集,分析,スーパーバイズ

著書、学術論文等の名称	単著、共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
50 介護の専門性を学ぶ介護教育の工夫-介護実習施設に勤務する看護職・介護職のインタビュー調査から-	共著	平成26年6月	老年社会科学第56回大会（岐阜）	目的は介護実習現場の職員に着眼して教育課題を明らかにする.同意の得られた看護職・介護職 24 名に半構造的面接法を行った.結果,抽出された 3 カテゴリーは「介護に関する知識と経験を育む」「高齢者に対する尊敬の念を育む」「教育方法の工夫により介護の力を育む」である.介護現場の工夫は教育現場での指導内容との乖離があり教育内容や技術方法についての課題があることが分かった. 山下科子　小木曽加奈子,平澤泰子　阿部隆春 安藤邑惠　佐藤八千子　祢宜佐統美　今井七重 本人担当分：研究企画,分析,スーパーバイズ
51 介護現場における業務と人員配置の課題-介護現場に勤務する看護職・介護職のインタビュー調査から-	共著	平成26年6月	日本老年社会科学会第56回大会（岐阜）	介護現場における課題を介護保険上の異なった 3 施設の認識を明らかにする.対象施設に勤務し,同意の得られた看護職・介護職24名に半構造的面接法を行った.結果,療養型は「ベッドサイドケアをする時間が少ない」,老健は「看護職の配置が不十分」,特養は「看護職の配置が不十分」のカテゴリーが抽出され,医療的ケアが増える中,介護職と看護職がどのように役割分担をしていくかが課題として問われている. 阿部隆春 小木曽加奈子 平澤泰子　安藤邑惠 佐藤八千子 山下科子　祢宜佐統美　今井七重 本人担当分：研究企画,分析,スーパーバイズ
52 介護福祉士養成課程において現場が必要と認識する医療的ケア-介護老人保健施設で勤務する看護職・介護職のインタビュー調査から-	共著	平成26年6月	日本老年社会科学会第56回大会（岐阜）	研究目的は護現場が「介護福祉士養成教育において必要と認識する医療的ケア」を明らかにする.介護現場で勤務し,同意が得られた看護職・介護職８名を対象に半構造的面接を調査した.分析は１内容１記録とし関連のある用語を集約し,結果７カテゴリーを形成し,ネーミングした.いりゅ的ケアについては,治療の継続のための医薬品の知識や技術が高く求められていることが分かった. 平澤泰子　小木曽加奈子　安藤邑惠　佐藤八千子 山下科子　祢宜佐統美　今井七重　阿部隆春 本人担当分：研究企画,分析,スーパーバイズ
53 介護福祉士養成課程において現場が必要と認識する医療的ケア-介護老人保健施設で勤務する看護職・介護職の認識の違い-	共著	平成26年6月	日本老年社会科学会第56回大会（岐阜）	研究目的は介護現場に着目して,「介護福祉士養成教育において必要と認識する医療的ケア」に対する看護職と介護職の認識の違いを明らかにする.介護現場で勤務し,同意が得られた看護職・介護職８名を対象に半構造的面接を調査した.分析は１内容１記録とし関連のある用語を集約した.結果 8 カテゴリーを形成し,ネーミングした. 介護老人保健施設は夜間常駐のない看護職と夜間勤務する介護職との連携の重要性が指摘された. 佐藤八千子　平澤泰子　小木曽加奈子　安藤邑惠 山下科子　祢宜佐統美　今井七重　阿部隆春 本人担当分：研究企画,分析,スーパーバイズ

著書、学術論文等の名称	単著、共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
54　介護福祉士養成課程で学ぶ医療的ケアのチェックリスト作成に向けて-デルファイ法を用いた意見収束-	共著	平成26年8月	第62回日本教育医学会大会（岐阜大学）	介護福祉士養成課程の学生が学ぶ医療的ケアのチェックリスト作成の示唆を得るために 3 段階のデルファイ法を持ちた。福祉系研究者 3 人、看護系研究者 3 人、介護施設勤務者 2 人を対象とした。 結果、アセスメント力、痰の吸引や経管栄養の実践力が重要であることが分かった。緊急的な対応、転倒・転落、救急蘇生、感染症対策など多岐にわたって知識技術が教育の中で必要であることが浮き彫りになった。 共著者：小木曽加奈子、平澤泰子、今井七重、佐藤八千子、安藤邑惠 本人担当分：研究計画、スーパーバイズ
55　介護老人保健施設におけるケア実践者が実践する認知症高齢者の「その人らしさ」を大切にした関わり	共著	平成26年11月	第34回日本看護科学学会学術集会（名古屋）	研究目的は認知症の人をケアする実践者が行う「その人らしさ」を大切にした関わりを質問調査した.対象は同意が得られた看護職・介護職99名である.結果,「その人らしさ」大切にしたケア状況の平均値は看護職 3.0±0.71,介護職±2.80 であった.テキストマインドを用いた分析では,看護職16キーワード,介護職18キーワード を中心とした有向レイアウトは両職種とも同様な傾向を示し,「その人」を大切にしてケアを実践していることが分かった. 小木曽加奈子　今井七重　安藤邑惠
56　ケア実践者の職種や勤務形態の違いによる 9 つの領域別職務満足度の現状と職務継続意向	共著	平成28年6月	日本老年社会科学会第58回大会（松山）	本研究目的は、介護老人保健施設の認知症ケア実践者1,275人を対象とし、職種や勤務形態の違いによる9つの領域別職務満足度の現状と職務継続意向を明確にする。調査内容は 9 つの領域別職務満足度尺度を用い、仕事全体の満足度、転職・離職について5段階評価とした。分析法は基礎統計量を算出し、看護職・介護職の職務継続意思に対する影響要因のモデルの適合度を確認した。9つの領域別職務満足度、転職・離職意向を調整変数とし、職種・勤務形態を従属変数とし 2 項目間のロジスティク回帰分析を用い関連性を検討した。有意水準は5%未満とした。「給与」は、看護職では満足度が高く、介護職は低かった。「業務内容」は看護職は満足度が低く、介護職は低かった。職種や勤務形態の違いを認識し職務環境を整える必要性が高いことが示唆された。 共著者：小木曽加奈子、阿部隆春、平澤泰子,佐藤八千子,樋田小百合,安藤邑惠,山下科子 本人担当分：研究計画、スーパーバイズ

著書、学術論文等の名称	単著、共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
57 看護職簡略版認知症ケア尺度を用いた介護老人保健施設の看護職におけるケア実践	共著	平成28年8月	第42回日本看護研究学会、学術集会（筑波）	本研究は看護職の ICF の視点を活かした認知症ケア実践を明らかにすることである。研究対象は、介護老人保健施設の看護師1,275 人である。調査内容は、基本属性（年齢・性別・経験）、先行研究から導いた「簡略認知症ケア尺度」を用いて評価した。分析は Spss5,210 及び Amos にて統計処理を行った。構成概念の妥当性を再検討するために主成分分析、プロマックス法を用いた。信頼性の確認にはクロンバッハのα係数を求め指標の妥当性と信頼性を検討した。属性との関連では須ピルマンの順位相関係数を算出した有意水準は5%未満とした。結果、認知症ケアの年数が長ければ、対象の心と体に状況を的確にアセスメントし、それをケア実践にいかされていることが明らかになった。 共著者：小木曽加奈子、樋田小百合,今井七重, 安藤邑惠 本人担当分：研究計画、スーパーバイズ
58 介護老人保健施設の看護職と介護職が考える職務環境で改善してもらいたいこと	共著	平成28年8月	第58回日本医療病院管理学会総会（東京）	介護老人保健施設の看護職と介護職に着目して職務環境の改善に対する認識を明らかにし、職務継続意向に対する示唆を得ることである。対象者は、施設に勤務する看護職 1,275 人と介護職 1,275 人である。調査内容は、基本属性（年齢・性別。経験）と自由記述（職務環境で改善してもらいたいこと）である。分析は基本属性は単純集計、自由記述は質的帰納的に行った。結果、「国レベルでの制度改革」を進めることで「安心し生活が営める給与体制」を構築できる。「職員の確保と定着」ができれば必要な休暇も確保しやすく、ワークライフバランス実現」になり、「職務継続意向」につながる。それぞれの専門性を高めるには「キャリアアップの機会の確保」や「様々な職種や人との連携」も重要であり、ハード的な施設環境を整えるために、「施設の営利を優先させない」方向性が求められる。このような様々な要因が「職務継続意向」を高めることが示唆された。 共著者：小木曽加奈子、祢宜佐統美、今井七重, 安藤邑惠 本人担当分：研究計画、スーパーバイズ
59 介護老人保健施設における認知症ケアのアウトカムと職務継続意向の関係	共著	平成28年7月	日本老年看護学会第21回学術集会（大宮）	研究目的は、BPSD に向き合うケアと仕事継続意向のモデルから,介護老人保健施設のケア実践者の職務継続意向を高める認知症ケアの実践への示唆を得ることである。対象は施設の看護師1,275人、介護職1,275人。調査内容は基本属性（年齢・性別・経験）と BPSD サポート尺度、一人の人と関る実践、認知症ケアにおける充実感、仕事全体の満足感、職務継続意向を用いた。分析方法は、SPSS521.0 及び Amos を用いた。看護職と介護職の違いは 2 項目間のロジスティック回帰分析にてオッズ比を検討した。看護職と介護職の認知症高齢者ケアのアウトカムと職務継続意思に対する影響要因のモデルから仕事に対する継続意向に関連する要因を明らかにした。結果、両職種とも＜BPSD に向き合うケア＞＜一人の人として関る実践＞＜職務に向き合う力＞＜職務継続意向＞が共通して抽出された。介護老人保健施設のケア実践者の職務継続意向を高めるには、認知症の BPSD に向き合う力を育むことが重要と示唆された。 共著者：小木曽加奈子、平澤泰子、樋田小百合、祢宜佐統美、佐藤八千子,安藤邑惠 本人担当分：研究計画、スーパーバイズ

著書、学術論文等の名称	単著、共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（その他） 1　看護師必修問題集攻略ブック 10 年度版	共著	平成 21 年 12 月	成美堂出版 A5版，本文350頁 別冊57頁， 全407頁	看護師国家試験出題基準が平成 22 年から改正により，必修問題が 50 問となり，出題基準も大幅な変更になった．本著は看護師国家試験必修レベルで習得すべき内容をコンパクトにまとめ，それぞれの出題基準に沿って模擬問題及び一問一答を作成した．編者として，すべての箇所の確認と総括を行った 本人担当分：「Ⅱ．看護の対象者および看護活動の場に対する基礎的知識を問う」の一部．P．72-107「人間の成長と発達」，P．108-129「患者と家族」 監修：安藤邑惠，共編者：小木曽加奈子，今井七重，著者：安藤邑惠，今井七重，今井一，小木曽加奈子，乙村優，上平公子，河口尚子，近藤邦代，正村静子，高野晃伸，樋田小百合，服部紀子，林由美子，松井いづみ，真野啓子，八島妙子，山下科子（50音順）
2　看護師必修問題集攻略ブック 11 年度版	共著	平成22年8月	成美堂出版	糖尿病の診断基準の改正や内容等の一部を最新のものに変更し，看護師国家試験必修レベルで必ず習得すべき内容をコンパクトにまとめ，それぞれの出題基準に沿って模擬問題及び一問一答を作成した．編者として，すべての箇所の確認と総括を行った A5 版　本文 350 頁　別冊 57 頁　全 407 頁 監修：安藤邑惠，共編者：小木曽加奈子，今井七重，中山かおり，著者：安藤邑惠，今井七重，今井一，小木曽加奈子，乙村優，上平公子，河口尚子，近藤邦代，正村静子，高野晃伸，樋田小百合，服部紀子，林由美子，松井いづみ，真野啓子，八島妙子，山下科子，渡辺美幸 （50音順）
3　看護師必修問題集攻略ブック 12 年度版	共著	平成23年6月	成美堂出版 A5版，本文350頁 別冊57頁 全407頁	試験の傾向を踏まえ，主要な統計資料を過去3年分記載するよう改定を行った．それぞれの出題基準に沿って模擬問題及び一問一答を作成した．編者として，すべての箇所の確認と総括を行った． 監修：小木曽加奈子 共編者：今井七重，中山かおり 著者：安藤邑惠，今井七重，今井一，小木曽加奈子
4　看護師必修問題集攻略ブック 13 年度版	共著	平成 24 年 6 月	成美堂出版	気管支喘息など新しい診断基準を加筆し，看護師国家試験必修レベルで習得すべき内容をコンパクトにまとめ，それぞれの出題基準に沿って模擬問題及び一問一答を作成した．監修として，すべての箇所の確認と総括を行った A5 版　本文 350 頁　別冊 57 頁　全 407 頁 監修：小木曽加奈子 共編者：今井七重，中山かおり 共著者：安藤邑惠，今井七重，今井一，小木曽加奈子，乙村優，上平公子，河口尚子，近藤邦代，柴田由美子，正村静子，高野晃伸，棚橋千弥子，樋田小百合，服部紀子，林由美子，松井いづみ，真野啓子，八島妙子，山下科子，渡辺美幸（50 音順）

教　育　研　究　業　績　書

平成　29年　3月　31日

氏名　　上本野　唱子

研究分野	研究内容のキーワード
看護学	小児看護学、がん看護学

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例 １）　ICT（Information and Communication Technology）の活用 (1)パワーポイントの使用	平成11年10月～現在 講義時間全てにおいて実施	三重県立看護大学　看護学部 看護学科における小児看護方法Ⅰ・Ⅱの講義、奈良県立医科大学 医学部 看護学科における小児看護学概論、小児看護学援助論及び看護経営の講義、岐阜医療科学大学保健科学部 看護学科 小児看護学概論の講義全てにおいてパワーポイントを使用して講義をおこなった。文字の大きさと色、アニメーション時の文字の出し方に注意しスライドを作成した。学生からは「見やすい」との意見が得られた。平成20年頃より、パワーポイントのスライドをそのまま印刷するのではなく、ワードでレジメを作成し、説明の進度に応じてレジメに書き込むことができるよう空欄を設け、その部分を記入するという方法に変更した。意図的に書き込むことにより、眠くならない、飽きが来ないという意見を得た。
(2)クリッカーを用いた授業	平成28年10月～12月 7コマの内各コマ5～7分程度	奈良学園大学 保健医療学部 看護学科 小児看護学概論において、身体機能別の看護において各単元とも4～5問程度の小テストを実施し、解答をクリッカーで応答するようにした。学生はクリッカーを使用することで頑張ろうという気持ちになるし、楽しいという意見を述べた。小テストへの取り組みが積極的になったという印象を受けた。
２）プレゼンテーションを導入した授業	平成19年10月～21年3月 各年2コマ（4時間）	奈良県立医科大学 医学部 看護学科 小児看護学概論の授業において、参加型授業の一環として学生に事前にテキストの範囲を割り当て、各発達段階における心理的・身体的・社会的特徴について発表するという授業の工夫を行った。学生が自主的に調べ発表することで、主体的な学びにつながっていた。
	平成19年10月～ 平成22年11月 各年3コマ（6時間）	奈良県立医科大学 医学部 看護学科 看護経営の授業において、マーケティングの市場調査の視点から、学生や地域住民に対し聞き取りを行い、内容を分析して看護経営を考えるという授業を行った。実際に聞き取り調査を行い分析することにより授業内容の理解を深めることにつながった。
３）シュミレーションを取り入れた授業 Low-tech simulation	平成22年4月～23年7月、平成27年10月～平成28年1月 各年2コマ（4時間）	奈良県立医科大学 医学部 看護学科 小児看護学概論及び奈良学園大学 保健医療学部 看護学科 小児看護学概論において小児の日常生活の援助（清潔・抱っこ・衣服の交換、調乳・離乳食の調理）において、モデル人形を使い日常生活の援助を行うという授業を行った。モデル人形であっても「体験」することにより、学習効果を高めることにつながった。

事項	年月日	概要
	平成19年4月～ 平成24年7月 平成28年4月～7月 各年2コマ（4時間）	奈良県立 医科大学医学部 看護学科 小児看護学援助論、岐阜医療科学大学 保健科学部 看護学科 小児臨床看護及び奈良学園大学 保健医療学部 看護学科 小児看護学援助論において小児の特殊技術（身体計測、バイタルサインの測定、骨髄穿刺・腰椎穿刺時の看護、点滴の固定、検査・処置時の身体抑制）の授業においてバイタルサイン人形、モデル人形を用いて演習を行った。特殊技術の学習効果を高めることにつながった。
４）アクティブラーニング (1)TBL（Team Based Learnig）	平成24年10月～25年1月 6時間	岐阜医療科学大学 保健科学部看護学科 小児看護学概論の日常生活援助（抱き方、あやし方、衣類の選択、着脱方法、おむつ交換、清潔）の授業において、アクティブラーニングの一環としてTeam Based Learnigを取り入れ、事前自己学習をすることにより教育効果を高めることができた。
	平成27年10月～1月 6時間	奈良学園学大学 保健医療学部 看護学科 小児看護学概論の日常生活援助（抱き方、あやし方、衣類の選択、着脱方法、おむつ交換、清潔）の授業において、アクティブラーニングの一環としてTeam Based Learnigを取り入れ、事前自己学習をすることにより教育効果を高めることができた。
５）評価表の作成 ルーブリックに準ずる評価表の作成	平成27年4月	平成27年4月、28年4月の入学時早期に行われる「新入生学外宿泊研修」において、研修計画を立案し、それに基づいてルーブリックによる評価表（到達目標4項目、評価基準3段階のスケール）を作成した。到達目標毎の達成状況の理解に役立った。
2　作成した教科書、教材		
1）臨地実習指導マニュアル	平成19年9月	奈良県立医科大学 医学部看護学科 小児看護学教授として、小児看護学実習の指導をする助教に対し、学生や患児の安全を第一に考えた「実習指導マニュアル」を作成した。口頭での説明時間の省略に役立った。
2)小児看護学援助論 看護過程の補助教材用映像編集	平成21年9月	奈良県立医科大学 医学部看護学科 小児看護学教授として、小児看護学援助論の看護過程演習のための白血病患児の事例をテレビで放映されたものをもとに作成した（5分程度）。 看護の対象者のイメージ化に役立った。
3）小児看護学概論補助教材用映像作成	平成28年1月	奈良学園大学 小児看護学教授として、小児看護学概論 日常生活援助の中の、調乳と衣服の着脱およびケア実践時の安全に関するVTRを作成した。事前学習として視聴することを求めたため、時間内の実施がスムーズに運んだ。
4）実習要項	平成19年5月～平成25年5月	奈良県立医科大学　医学部看護学科　小児看護学教授として、小児看護学実習（3年次配当、2単位）の要項、記録類および評価表の作成を行った。臨地実習を遂行するためのガイドラインになった。
	平成28年7月	奈良学園大学 小児看護学教授として、小児看護学実習要項、実習評価表の作成を行った。臨地実習を遂行するためのガイドラインになった。

事項	年月日	概要
5)看護過程資料の作成	平成21年9月	奈良県立医科大学 医学部 看護学科 小児看護学教授として、患児・家族からの情報収集をしやすくするため、どのように質問（尋ねる）したらよいかについて、NANDAの分類の領域毎に、「NANDAの分類Ⅱに基づいた看護アセスメントの枠組みと情報収集の視点」という資料を作成した。臨地実習の看護過程展開の情報収集段階において活用していた。
	平成21年9月	奈良県立医科大学 医学部看護学科 小児看護学教授として、学生の小児看護学実習目標（9項目）の到達度を高めるため、「小児看護学実習行動目標および評価項目」を作成した。臨地実習を行う際のガイドラインにすることができた。
6）看護過程事例の作成	平成19年9月	奈良県立医科大学医学部看護学科小児看護学教授として、小児看護学援助論の看護過程演習のための白血病患児の事例を作成した。
7）看護過程の事例の関連図の作成	平成27年4月	奈良学園大学小児看護学教授として、小児看護学援助論の看護課程用の事例7種類について病態に基づいた、個別性に即した関連図を作成し、それを基に授業を行った。病態や病態が日常生活に及ぼす影響について、一目でわかるようになっているため、病態の理解につながった。
3　教育上の能力に関する大学等の評価		
1）大学設置・学校法人審議会教員組織審査	平成19年8月	奈良県立医科大学大学院 医学研究科（修士課程）看護学専攻　教授　「小児健康生活支援学」M可、特別研究「小児健康生活支援学」M○合
	平成23年8月	大学設置･学校法人審議会の教員組織審査において奈良県立医科大学大学院看護学研究科（修士課程） 看護学専攻　看護学コース教授　「小児看護学」M可、特別研究「小児看護学」M○合と判定
	平成25年8月	奈良学園大学 保健医療学部看護学科　教授 「小児看護学概論」「小児看護学援助論」「小児看護学実習」「ターミナルケア論」「統合看護学実習」「卒業研究Ⅱ」可
2）学生による教員の授業評価	平成19年～平成21年後期	奈良県立医科大学の学生による授業評価において、課題に関する項目（課題の量、提出期限など）は3点代もあるがそれ以外は“ややそう思う”“そう思う”の評価を得ている。授業進度の途中で、授業に関する意見を求め、その内容を検討し微修正を常に行っている。
	平成27年後期	奈良学園大学学生による小児看護学概論の授業評価により満足度3.32（全体平均3.25）の評価を得た。

事項	年月日	概要
4　実務の経験を有する者についての特記事項		
1）看護教員養成講習会講師		
(1)奈良県看護協会　実習指導者講習会講師	平成19年9月 平成20年9月 平成21年9月 平成22年8月 平成23年9月 平成24年9月 平成25年9月 平成26年9月 平成27年9月	看護理論3時間担当 看護理論3時間担当 看護経営3時間担当 看護経営3時間担当 看護経営3時間担当 看護経営3時間担当 看護経営3時間担当 看護経営3時間担当 看護経営3時間担当
2）その他の研修会講師		
(1) 三重県立看護大学関連	平成17年～平成19年	高校の総合学習の時間に進路先決定に関する模擬授業として「小児期の不慮の事故とその予防」の内容で三重県内3校の高校生徒に対し授業を行った。
(2) 奈良県立医科大学関連	平成20年7月	奈良県立橿原高校の3年生に対し進路先決定の動機づけの目的で「小児期に起こりやすい事故とその予防」について模擬授業を行った。
3）研究指導	平成19年5月～平成24年3月	奈良県立医科大学 附属病院小児科病棟の看護師に研究指導を行い、日本小児がん看護研究会（第5回：平成19年）、近畿小児がん研究会（第33回：平成23年）と小児がん看護学会誌で発表した。
4）公開講座		
(1) 奈良県立医科大学公開講座 くらしと医学	平成19年9月	橿原文化会館において「知って生かそう　福祉関連商品」というテーマで地域住民を対象に講演を行った。
(2) 平成20年度「教職員のための夏の公開講座」	平成20年8月	奈良県立医科大学において公立学校の教職員を対象に「疾患を持った児童の生活上の理解」というテーマで講演を行った。
(3) 奈良学園大学公開シンポジュウム （シンポジスト） 「食と教育ー食と教育・食と健康・食と文化の視点からー」	平成26年11月	王寺町地域交流センターリーベルホールにおいて食と健康というテーマでシンポジストとして発表した。
5　その他		
1)　マニュアル作成	平成21年3月	在宅児を訪問する訪問看護ステーションの職員を対象とした研修会「長期療養児童在宅医療・在宅訪問推進研修会」（主催：奈良県周産期医療対策協議会）の「在宅訪問医療マニュアル」作成にかかわった。
2)　担当実績 評価表の作成 ルーブリックに準ずる評価表の作成	平成27年4月	平成27年4月、入学時早期に行われる「新入生学外宿泊研修」において、研修計画を立案し、それに基づいてルーブリックによる評価表（到達目標4項目、評価基準3段階のスケール）を作成した。到達目標毎の達成状況の理解に役立った。平成28年度も同様のものを活用し、同程度の成果を得た。
	平成28年9月	小児看護学実習の評価表を保育園実習、医療機関実習毎に作成した。目標到達状況について把握することができた。

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項		
事項	年月日	概要
1　資格、免許		
1）看護婦免許	昭和51年5月	第300621号
2）任用資格（8種）	昭和59年3月	昭和59年3月　日本福祉大学卒業時に取得 社会福祉主事、精神薄弱者福祉士、児童福祉士、児童指導員、家庭児童相談室主事、身体障害者福祉士、精神衛生相談員、社会教育主事
3）教員免許 （1）普通免許状	昭和59年3月	昭和59年3月　日本福祉大学卒業時に取得 昭58中一普第4215号 （中学校教諭一級普通免許状「社会」） 昭58高二普第4955号 （高等学校教諭二級普通免許状「社会」）
（2）専修免許状	平成7年3月	平成7年3月三重大学大学院修了時に取得 平6中専第35号 （中学校教諭専修免許状「社会」） 平6高専第188号 （高等学校教諭専修免許状「公民」）
4）修了証	平成2年6月～11月	平成2年度（厚生省認定　三重県実施）看護教員養成講習会
5）学位 （1)修士(社会学)	平成7年3月	三重大学大学院人文社会科学研究科　社会科学専攻修了　修士（社会科学）　人修第24号 修士学位論文題目：シルバービジネスのマーケティングー四日市市における実態調査を中心にしてー
（2）博士（学術）	平成18年9月	信州大学大学院工学系研究科　生物機能工学専攻博士後期課程　修了　博士（学術） 博士学位論文題目：看護情報として使用する測定値に影響を与える因子の分析―成人女性の呼吸機能および出生後早期の新生児体温測定値からの検討―
6）修了証書	平成19年12月	マインドマップ基礎講座 ブザン・ワールドワイド・ジャパンによる マインドマップ基礎講座修了認定
7）　認定証	平成21年7月	米国NLP（神経言語プログラミング）協会 神経言語プログラミング、マスタープラクティショナー
2　特許等		
特記事項なし		
3　実務の経験を有する者についての特記事項		
特記事項なし		

事項	年月日	概要
4　その他		
１研究助成金の獲得		
1）大和ハウス工業（株） 研究代表者：上本野唱子 研究題目：小児科外来における特徴の海外病院との比較	平成21年9月～22年3月	小児病院・病棟の病室環境整備状況の一環として、台湾の病院の環境と国内の小児病院及び環境改善に取り組んでいると思われる病棟を抽出し、ぞれぞれの医療機関の分析と台湾の病院の比較を行った。
2 プロジェクト共同研究員	平成23年4月	「千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター、教育－研究－実践をつなぐ組織変革型看護職育成支援プログラムの開発」（平成26年3月まで）。　「実習評価ツール」を開発した。
3 委員会活動		
1）奈良県立医科大学関連	平成19年4月	学務委員会委員（26年3月まで）
	平成19年4月	カリキュラム部会委員（26年3月まで）
	平成19年4月	助産コース選考委員（平成23年3月まで）
	平成19年4月	実習部会委員（平成20年3月　まで）
	平成21年7月	実習部会委員（平成26年3月まで）
	平成19年4月	ファカルティ・ディベロップメント委員会委員長（平成26年3月まで）
	平成21年4月	国家試験対策部会委員長（平成20年3月まで）
	平成19年6月	入学試験委員会編入学学科試験委員（平成24年3月まで）
	平成22年4月	大学院医学研究科修士課程（看護学）設置準備委員会委員（平成24年3月まで）
2）岐阜医療科学大学関連	平成24年4月	国家試験対策ワーキング長（平成26年3月まで）
	平成24年4月	4年生学年主任（平成26年3月まで）
	平成24年4月	国際交流委員会副委員長（平成26年3月まで）
	平成24年4月	研究倫理委員会委員（平成26年3月まで）
3）奈良学園大学関連	平成26年4月	奈良学園大学評議員（現在に至る） 学生支援センター長　学生委員長（平成28年3月まで） （保健医療学部） 国家試験対策委員長（平成27年3月まで） 教務部会部会長（平成28年3月まで） 実習部会副部会長（平成28年3月まで）
	平成28年4月	国際交流センター運営委員（現在に至る）
	平成28年10月	FD委員会委員（現在に至る）

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
（著書）				
1.　介護福祉士養成シリーズ①『介護の基礎』	共著	平成22年10月	黎明書房	介護の考え方について理解するとともに、介護を必要とする対象者を生活の視点からとらえ、介護を適切に行う能力と態度を養うことを目的として著した。介護の意義や役割、介護サービスのあり方など介護の考え方について、初めて学ぶ人でも分かるようていねいに解説。介護福祉援助実践で活用できるコミュニケーションの知識と技術についても詳しい説明となっている。 A5判　全204頁 編著：守本とも子、星野政明 共著者：守本とも子、星野正明、三浦辰哉、原田理恵、溝上五十鈴、土田耕司、羽柴香恵、河野喬、新谷奈苗、吉村雅世、西薗貞子、西元康世、甲田宗嗣、上本野唱子、石崎利恵、川合百合子 本人担当部分：第11章「介護におけるコミュニケーションの基本」というタイトルで、高齢者とコミュニケーションを図る上での留意点について記述した。P.152-P.161
（学術論文）				
1.　Cross-Sectional Survey Study on the Relationship between Dairy Product Intake and Bone Density among Adult Women, High School Girls, and High School Boys, both With and Without Exercise. （成人女性・高校生の骨密度に及ぼす乳製品摂取の効果） （査読付）	共著	平成19年6月	Pergamon Press （Elsevie r Ink） Nutrition research Vol.27、2007 P.618-P.624 A4判	女子・男子高校生（15～18歳）4761名の相対骨密度値を右踵骨で骨強度測定超音波法により測定し、運動習慣と乳製品の摂取頻度との関連を検討した。男子生徒の牛乳摂取と運動群、非運動群の相対骨密度はいずれの群も増加を示した。女子生徒では運動群の牛乳摂取頻度の多かったものが増加したが、牛乳摂取が「毎日」であったものの骨密度は大きく低下した。運動習慣のある女子高校生では牛乳摂取頻度は骨密度低下に影響することの示唆が得られた。 本人担当部分：骨強度測定、アンケート調査、データ整理 共同研究者：Setsuko Yoshii、Shoko Kamimotono、Shiho Sawai、Masako Backman Matsushita、Fumio Tanaka、Darunee Rujkorakarn
2. Influence of Physical Characteristics on Temperature Profile in Normal Neonates at an Early Neonatal Stage . （出生後早期新生児の体格が体温に及ぼす影響） （査読付）	共著	平成19年7月	Japanese Society of Human Environmental System P.63-P.69 Journal of the Human Environment System Vol.10, No.2, 2007 P.63-P.69 A4判	同一環境下で看護されている児であっても体温が低く推移する児とそうでない児がいる為、体温と体格との関連を検討した。正常出生した在胎週数37週以上、出生時体重2500ｇ以上、アプガールスコア1分値9点以上の新生児10名の生後2時間から7時間までの体温を胸部深部温、抹消（足底）深部温を深部体温計で測定した。測定期間中の体温の推移が低く経過した児は体表面積／体重指数が有意に大きく、頭囲は有意に小さかった。 本人担当部分：論文執筆 共同研究者：Shouko Kamimotono、Kesami Sakaguchi、Takayuki Fujiwara、Iwao Yamamoto

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
3.　化学療法を受ける患児の口内炎発症と白血球数との関連 （査読付）	共著	平成21年4月	小児がん看護研究会 小児がん看護　第4巻 P.37-P.41	化学療法を受ける児の口内炎発生状況を知るため、13名の診療記録から口内炎発症と白血球数、使用薬剤の組み合わせ、治療コースおよび年齢から検討した。口内炎の発症と白血球数との関連はなく、有意であったのは、年齢の高い児であった。発症の高い傾向を示したのは、多剤併用、1コース目の治療であった。化学療法中の児の口内炎発症は年齢、治療薬剤の組み合わせおよび治療コースなども考慮する必要性が示唆された。 本人担当部分：データ収集、データ処理、結果、考察、論文執筆における指導 共同研究者：大牟田美幸、高木梢、辻奈緒子、和田容子、西薗貞子、上本野唱子
4.　出生後早期新生児における啼き声の音声分析による検討 （査読付）	共著	平成21年8月	日本臨床体温研究会 臨床体温　第27巻1号 P.42-P.45	啼泣と体温上昇について検討するため、生後2時間半から7時間までの胸部と足底の深部温および行動状態を記録し体温上昇に伴う啼き（上昇群）とそうでない啼き（非上昇群）について音声分析により解析した。1回5秒間の啼泣中の発声回数は上昇群の方が多く、発声時間、息継ぎ時間ともに上昇群の方が有意に短かった。体温上昇に繋がった啼泣は発声回数が多く、発声時間、吸気時間ともに短い、激しい頻呼吸状態であった。 本人担当部分：データ収集、データ分析、論文執筆 共同研究者：上本野唱子、山内正憲
5.　看護師がとらえた慢性疾患を持つ学童への看護ケアの意味 （査読付き）	共著	平成24年3月	奈良県立医科大学医学部看護学科紀要第7巻 P.75-P.81	慢性疾患を持つ学童への看護ケアの意味を看護師の体験から明らかにすることを目的に、慢性疾患病棟に勤務する看護師16名に半構成面接を行い、内容を質的帰納的に分析し、5カテゴリー（①子どもに寄り添う関係②慢性疾患をもつ子どもと関わることへの喜びの実感③慢性疾患を持つ子どもの看護の本質に触れる④子どもの成長発達の一課程へのかかわり⑤慢性疾患を持ちながら成長するこどもの将来的な見通し）とサブカテゴリー15、コード43を抽出した。 本人担当部分：論文執筆指導 共同研究者：別所史子、山田晃子、上本野唱子
6.　小児慢性疾患外来における看護ケア実践のプロセスと外来看護の専門性	共著	平成24年3月	へるす出版 小児看護　第35巻第3号 P.375-P.379	小児慢性疾患外来における家族に対する看護ケア実践のプロセスを明らかにし、外来看護の専門性について検討するため、外来に勤務する看護師5名に対し面接調査を行い、内容分析を行った。得られた結果は5大カテゴリー（入院とは異なる信頼関係構築プロセス、医師と患児・家族との信頼関係の存在、子どもを理解する手がかり、外来受診全体のプロセスに対して留意する、在宅で子どものケアを担う家族）と11サブカテゴリー、31コードが抽出された。 本人担当部分：論文執筆指導 共同研究者：別所史子、田崎あゆみ、山田晃子、上本野唱子

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
7.　東大寺における「親子レスパイトケア」の取り組み―障がい児とそのきょうだい支援を通して― （査読付）	共著	平成25年2月	日本看護協会出版会 家族看護学　第11巻1号 p.155～161	対象の児とその家族が離れてレスパイトケアを受けるのではなく、きょうだい（姉や弟）と共にレスパイトケアを受けたきょうだいの、レスパイトケア時における支援の在り方を2日間のケアを通して検討したところ、きょうだいのレスパイト時における支援のポイントは、家族が揃って時間を共有すること以外に①きょうだいがケアの受け手になることの重要性②きょうだいの発達段階に応じた支援③障がいのある子どもも一緒に過ごすであった。 本人担当部分：論文執筆指導 共同執筆者：山田晃子、入江安子、別所史子、上本野唱子、富和清隆
8.　在宅の重症心身障害児・者と家族のレスパイトケア利用に関する研究（第1報） （査読付）	共著	平成25年5月	日本小児保健協会 小児保健研究　第72巻3号 p.419～426	奈良県下に在住する障がい児・者の家族128名の有効回答から、①ショートステイの認識と利用状況②多次元介護負担感尺度（BIC‐11）による介護者の介護負担感を検討し、利用状況においては医療的ケアのあるもので特に「人工呼吸器、吸引」の必要ありの者の「必要だが利用できない」で有意差を認め、BIC‐11との関連ではショートステイを「必要と感じているが利用できない」と回答したものの得点が最も高かった。 本人担当部分：論文執筆指導 共同執筆者：山田晃子、入江安子、別所史子、上本野唱子、富和清隆
9.　在宅で過ごす重症心身障害児・者と家族のレスパイトケア利用に関する研究（第2報） （査読付）	共著	平成25年5月	日本小児保健協会 小児保健研究　第72巻3号 p.427～434	奈良県下に在住する障がい児・者の家族の回答からレスパイトに関する自由記述を質的に分析した。レスパイトできている群のカテゴリーは①サービス利用の時間②教育機関に行っている時間③自分の時間をつくる④時間がある時にレスパイトしている、と認識しており、できていない群のカテゴリーは①ケアのためにこの子のそばを離れられない②この子の介護だけではない③安心できる資源の不足、によりレスパイトできていないと認識していた。 本人担当部分：論文執筆指導 共同執筆者：山田晃子、入江安子、別所史子、上本野唱子、富和清隆
10. 看護系大学と実習病院のトップ管理者間の連携の構成要素に関する研究 -看護教育・実習連携評価ツールの開発に向けて- （査読付き）	共著	平成28年7月	日本看護学教育学会 日本看護学教育学会誌 第26巻1号 p.15～28	看護学実習における看護系大学と附属病院のトップ管理者間の連携成立要素と連携状況の評価ツール開発のため、大学及び附属病院のトップ管理者に対しインタビューを行い、kj法による分析を行った結果、シンボルマーク5つと連携の軸4つ（大学・病院間の連携を推進・維持する仕組み、トップ双方の対等な関係性に基づく目標の共有、大学・病院の連携を円滑にする大学側の要因、大学・病院の連携を円滑にする病院側の要因）が見いだされた。 本人担当部分：インタビュー、データ分析、結果の検討 共同執筆者：河部房子、黒田久美子、小山田恭子、上本野唱子、池袋昌子、西山正惠、野地有子、若杉歩、赤沼智子

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
（その他）				
「研究報告書」				
1.　「小児科病棟・外来における特徴の海外病院との比較」	共著	平成21年11月	奈良県立医科大学 平成21年度　病室環境研究成果報告集p.67～p.77 総ページ数104頁	台湾の大学附属病院の小児科病棟と国内の小児専門病院および小児科外来・小児科病棟の環境において何らかの工夫を凝らしていると思われる病院6施設を選び視察、ヒアリングを行い、その取り組みにおける実態の調査を行った。国内の施設と異なり台湾の附属病院においては、身体の臓器別のパネルや出生から死までの過程を記したパネルによる説明があり、環境の改善の中で、教育的側面も有していることが分かった。 本人担当部分：該当部分の報告書作成 共同執筆者：上本野唱子、宇佐美祐美
2. 奈良県重度心身障害児・者等在宅医療支援調査に関する報告書	共著	平成23年3月	奈良小児在宅医療支援ネットワーク 奈良県重度心身障害児・者等在宅医療支援調査に関する報告書 総ページ数58頁	奈良県や関係機関及び関係者による支援の在り方を明らかにするため、奈良県下に居住する障がいを持つ方や家族を対象に、現在困っていること、必要とすることを明らかにするため質問紙を用いた調査を行い有効回答数41.2%（調査数553人）から在宅療養児・者および施設入所者に分け分析を行った。在宅療養児・者に見られた特徴的なことは、医療的ケアの必要性と宿泊を伴うショートステイが必要だが受けられないがともに高かった。 本人担当部分：データ分析 共同執筆者：平成22年度奈良小児在宅医療支援ネットワーク（富和清隆、島緑倫、富田直秀、樋口嘉久、松本善孝、山田全啓、下岡久志郎、玉井良忠、高橋幸博、金廣裕道、米倉竹夫、三木直樹、岡崎伸、久保田優、上本野唱子、星田徹、西野正人、箕輪秀樹、平康二、大島圭介、堀内恵子、鷲尾隆元、富田令子、奥西緑、帰山一志、庵前美智子、喜谷昌代）
3.　「実習評価ツール」の開発	共著	平成26年3月	千葉大学 「実習評価ツール」の開発 総ページ数12頁	看護系大学とその実習病院のトップ管理者同士が今後の連携推進の方向性を話し合うコミュニケーションツールとして、大学と病院の共通の設問3項目、大学と病院で異なった設問3項目からなる「看護教育－実践連携評価ツール」の内の「実習評価ツール」を開発した。 本人担当部分：ツールの質問項目の検討、妥当性 共同開発者：河部房子、黒田久美子、小山田恭子、上本野唱子、池袋昌子、西山正惠、野地有子、若杉歩、赤沼智子
「実践報告」				
1.　小児科病棟・外来における特徴の海外病院との比較	共著	平成23年3月	奈良県立医科大学医学部看護学科紀要第7巻 P.61-P.66	台湾の大学附属病院へ見学に行った際、小児病棟・外来が心理的準備、気晴らし、リラクゼーションに加え病院へ来訪する人に対し“教育”の側面も有していると思われたため、国内の小児専門病院、NPO子ども健康フォーラムのプロジェクトによる病院、官学共同事業による病院及び独自の取り組みをしている病院を選び視察、ヒアリングをし、比較したところ、国内の小児病棟、外来においては教育的側面を有しているものは見当たらなかった。 本人担当部分：論文執筆 共同研究者：上本野唱子、宇佐見祐未、山田晃子、別所史子

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
2.　重症心身障害児とその家族のレスパイトケアの検討 ―東大寺における「親子レスパイトケア」の取り組みを通して―	共著	平成23年3月	奈良県立医科大学医学部看護学科紀要第7巻 P.82-P.87	現在のレスパイトケアは各種制度により、児のみを預かりの対象にして行われている。2010年7月に東大寺（奈良県奈良市）において、東大寺建立の精神と東大寺の持つ独特の雰囲気を楽しんでもらおうと、各種の制度にとらわれない “親子レスパイトケア”を実施した。親と子両方が同時に体験できる試みは、様々な分野のボランティアの協力を必要とするが、双方ともに身体を休めることになり、効果の大きいことが考えられた。 本人担当部分：論文執筆指導 共同執筆者：山田晃子、入江安子、別所史子、上本野唱子、富和清隆
「看護師国家試験模擬試験問題作成」				
1.　国家試験模擬試験作成状況設定問題1事例3題作成	単著	平成22年7月	メディカ出版 2011年度受験者対象第2回 P.68-P.69	メディカ出版が行っている「メディカコンクール2011年受験者対象第2回看護師国家試験対策テスト」の「川崎病」1事例の状況設定問題2題の試験問題を作成した。
2.　国家試験模擬試験作成状況設定問題1事例3題作成	共著	平成22年11月	メディカコンクール 2011年度受験者対象第3回 メディカ出版 P.129-P.130	メディカ出版が行っている「メディカコンクール2011年受験者対象第3回看護師国家試験対策テスト」の「熱性けいれん」1事例の状況設定問題3題の試験問題を作成した。 本人担当部分：出題内容の検討、選択肢の検討、フィードバック内容の検討など出題全般に関する編集。 共同担当者：上本野唱子、山田晃子
「国内学会発表」				
1.　出生後早期新生児に帽子を被せることによる体温、行動状態への影響	―	平成19年8月	日本臨床体温研究会 第22回学術集会（札幌市） 日本臨床体温研究会 22回学術集会－プログラム・抄録集－ p.10	出生児早期にある保温方法を検討するため、出生児体重2500～3600ｇ、在胎週数37～41週および8時～午後5時半の間に出生した正常新生児20名（コントロール10名）に、出生後2～7時間まで帽子を被せ、その間の胸部と末梢の深部体温と行動状態（睡眠、覚醒、啼泣）を検討した。体温変化は両群で有意ではなかったが、帽子を被せた群は啼泣が少なく、覚醒状態が有意に多く、体重減少は少ない傾向であった。 本人担当部分　：論文執筆 共同発表者：上本野唱子、西元康世、西薗貞子、山内正憲
2.　化学療法を受ける患児の口腔炎発生と白血球数との関連	―	平成19年12月	第49回日本小児血液学会 第23回日本小児がん学会学術集会 第5回日本小児がん看護研究会 第4回血友病看護研究会 第12回がんの子どもを守る会公開シンポジウム 第5回日本小児がん看護研究会（仙台市） 平成19年12月 トータルケアの原点に戻る～子共と家族の継続的支援～プログラム・総会号 p.425	化学療法を受ける児の口内炎発生状況を知るため、13名の診療記録から口内炎発症と白血球数、使用薬剤の組み合わせ、治療コースおよび年齢から検討した。口内炎の発症と白血球数との関連はなく、有意であったのは、年齢の高い児であった。発症の高い傾向を示したのは、多剤併用、1コース目の治療であった。化学療法中の児の口内炎発症は年齢、治療薬剤の組み合わせおよび治療コースなども考慮する必要性が示唆された。 本人担当部分：データ収集、データ処理、結果、考察、論文執筆における指導 共同研究者：大牟田美幸、高木梢、辻奈緒子、和田容子、西薗貞子、上本野唱子

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
3.　出生後早期新生児における啼き声の音声分析による検討	―	平成20年8月	日本臨床体温研究会 第23回学術集会（札幌市） 日本臨床体温研究会 第23回学術集会 - プログラム・抄録集 - p. 6	啼泣と体温上昇について検討するため、生後2時間半から7時間までの胸部と足底の深部温および行動状態を記録し体温上昇に伴う啼き（上昇群）とそうでない啼き（非上昇群）について音声分析により解析した。1回5秒間の啼泣中の発声回数は上昇群の方が多く、発声時間、息継ぎ時間ともに上昇群の方が有意に短かった。体温上昇に繋がった啼泣は発声回数が多く、発声時間、吸気時間ともに短い、激しい頻呼吸状態であった。 本人担当部分：データ収集、データ分析、論文執筆 共同研究者：上本野唱子、山内正憲
4.　看護・保育学生の福祉用具に対する認識の検討	―	平成20年11月	日本福祉工学会　第12回学術講演会（甲府市）	福祉用具に対する認識状況を知るため、保育学生（専門課程110名、短大生110名）、看護学生（大学3年次生80名）に対し、質問紙調査により福祉用具、離乳食、調理された食品及び遊び道具について高齢者、小児どちらに使用する認識が高いかについて検討した。看護と保育専門課程の学生は類似の傾向を示し、ほとんどの項目において高齢者が使用するという認識が高かった。保育短大生においては遊びに関して子どものものと認識していた。 本人担当部分：データ分析、論文執筆 共同発表者：上本野唱子、守本とも子
5.　化学療法中、後の患児の味覚の実態～健常児との比較を試みて～	―	平成23年2月	第33回近畿小児がん研究会（神戸市） 第33回近畿小児がん研究会プログラム・抄録集 p. 37	小児がんの子どもの化学療法中における味覚障害の実態を知ることを目的に、入院して化学療法を受けている学童期の患児5名、化学療法後外来に通院している患児6名及びコントロール群として健康な児4名を対象として濾紙ディスクによる味覚定性定量検査による検査を、左右鼓索神経、舌咽神経別に甘味、塩味、苦味、酸味について行った。化学療法を受けている児の非味覚検知は2例であり、有意差を認めたのは舌咽神経側の苦味についてであった。 本人担当部分：研究方法から論文執筆に至るまでの研究指導 共同発表者：志野友香、岩本さやか、高木梢、築脇陽子、峯尚美、大川美加、久保田優、永井亜矢子、上本野唱子
6.　看護系大学と実習病院との連携・協働を構成する要因に関する研究組織長間の連携に関する事例分析を通して （文部科学省H23年度助成事業「教育―研究―実践をつなぐ組織変革型看護職育成支援プログラムの開発」の一部	―	平成24年12月	日本看護科学学会 第32回日本看護科学学会学術集会（東京） 日本看護科学学会学術集会講演集32回p. 513	看護系大学、大学の実習施設の看護系組織長間の連携状況に関し、附属病院との連携を構成する要素を明らかにし、教育機関と臨地実習施設との連携状況を診断・評価するツールの開発に向けた資料とするため、6大学の看護学部長及び附属病院の看護部長に対しインタビューを行い質的に分析し、その要素として①大学側の要素（1要素）②病院側の要素（1要素）③大学・病院間の連携の要素（6要素）④環境的要素（2要素）の4つを見い出した。 本人担当部分：データ分析 共同発表者：河部房子、黒田久美子、野地有子、北池正、小山田恭子、上本野唱子、福本良之、若杉歩

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
7.　大学と実習病院との組織間連携がもたらす指導者間の連携に関する事例分析（文部科学省H23年度助成事業「教育―研究―実践をつなぐ組織変革型看護職育成支援プログラムの開発」の一部）	―	平成24年12月	日本看護科学学会 第32回日本看護科学学会学術集会（東京） 日本看護科学学会学術集会講演集32回p.513	看護系大学、大学の臨地実習における附属病院との連携を構成する要素を明らかにし、教育機関と臨地実習施設との連携状況を診断・評価するツールの開発に向けた資料とするため、A大学の実習指導教員1名、同附属病院の実習指導者1名のインタビュー記録を、両者の連携状況を知るため質的に分析し、①両組織の構成員が相互理解する場②柔軟な対応③信頼に基づく効果的な役割分担④教員／指導者のポリシー⑤高いモチベーションの要素を見出した。 本人担当部分：データ分析 共同発表者：小山田恭子、黒田久美子、河部房子、野地有子、北池正、上本野唱子、福本良之、若杉歩
8. 看護系大学トップ管理者に焦点をあてた看護教育－実践連携評価ツールの開発（文部科学省H23年度助成事業「教育―研究―実践をつなぐ組織変革型看護職育成支援プログラムの開発」の一部）	―	平成25年8月	日本看護学教育学会 第24回学術集会（千葉市） 24巻学術集会講演集 p.203	臨地実習における看護系大学と実習施設との連携状況や課題を評価するための評価ツールを作成し、それの妥当性の検討を表現の適切性、内容の不測の有無、ツール活用の有用性について、大学のトップ管理者5名に対しインタビュー調査を行った結果、ツールの有用性に関して、現状の振り返りになる、病院側とのコミュニケーション促進につながる、新たな課題は明らかにならないという意見があり、意見に基づきツールの修正を行った。 本人担当部分：インタビュー調査結果の検討および修正 共同発表者：河辺房子、黒田久美子、野地有子、小山田恭子、上本野唱子、赤沼智子、池袋昌子、西山正恵、粟井直子

教　育　研　究　業　績　書

平成 29年 3月 31日

氏名　新谷　奈苗

研究分野	研究内容のキーワード
公衆衛生看護学　産業看護（労働衛生全般） 労働者のストレス　がん看護	労働者・ストレス・がんと就労・サーモグラフィー ストレス軽減のための森林医学

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例		
公衆衛生看護活動展開論Ⅱ　14ｈ 広島文化学園大学 （非常勤講師）	平成17年4月～現在に至る	産業看護学の講義では、産業保健・看護の歴史を理解するなかで、産業構造・職業の変遷を知り、それにより起こる職業疾病とそれを防止するための法律があるという関連を理解させるため、パワーポイントによる資料を作成し講義に使用した。労働衛生の現場（会社組織や工場内の様子）は学生にとっては過去に縁がなく理解しづらい部分である。臨場感が伝わるよう産業保健推進センターからビデオを借り、視聴覚を適宜活用した。また企業内での健康管理看護活動の実際においては、保健活動で実際に使用している資料をみせ説明し、許可を得て社内の写真を見せ、理解につなげられるよう工夫をした。また講義の初めには、前回講義の要点をまとめた資料を配布し、10分程度の復習を行い、理解の上次の章に入っていけるようにした。 どの講義においても、講義中に配布した資料とテキストをみることで、講義後もある程度の理解ができるよう、理解しやすい資料作成に努めた。また実習時や卒業後にも役立つ資料を考えて作成した。
チュートリアル　広島国際大学 （常勤講師）	平成18年4月～平成22年3月	本講義の全てにおいて担当した。 チュートリアルでは自らが主体的にテーマを決め、それについて文献検索をし、これらの資料を読み込み、重要な部分を要約しまとめ、他の学生に伝わるように発表資料を工夫し発表するまでを行った。新入生が初めて経験するゼミ形式の講義であるということも踏まえ、ゼミメンバーのグループダイナミクスを効果的に生かせるようにも配慮した。平成20年からは、座学に加え活動も含めるようにした。栄養という観点から「らっきょ漬け」をした。らっきょについての栄養素や保存食としての由来や活用、漬ける際の注意点などをそれぞれがまとめ発表をし、実際にらっきょ漬けをおこなった。食文化や栄養学を伝え実践した。
老年看護学Ⅰ　広島国際大学 （常勤講師）	平成18年4月～平成22年3月	全15コマを3人の教員がオムニバスで講義を行う。私の担当科目は「介護保険とケアプラン」「慢性期・終末期の看護」「高齢者のケアマネージメント」「高齢者のフィジカルアセスメント」である。講義に添付する資料は、復習時にも理解しやすい内容を心がけ作成した。また介護保険において、テキストは難しいという学生の声があり、市役所の介護保険課で一般向けのパンフレットを入手しまずはそれを用いて説明をし、その後テキストを使用するという二段階で教授した。
老年看護学Ⅱ　広島国際大学 （常勤講師）	平成18年4月～平成22年3月	全15コマを3人の教員がオムニバスで演習の講義を行う。私の担当科目は「高齢者体験」「高齢者の摂食・嚥下障害」「エンパワーメント」「高齢者アセスメントの特徴、ケアニーズとケアプラン」である。講義では具体的な事例やそれに関する資料を取り入れ、より理解しやすく工夫した。また演習の講義で体験した内容について、深く考えることができるよう、考えることを導くような資料の作成を心がけた。

事項	年月日	概　　要
老年看護学実習　広島国際大学 （常勤講師）	平成18年4月～平成22年3月	実習施設との調整、実習前オリエンテーション、実習後の評価資料の作成と施設への報告、来年度の実習調整等を行った。 実習においては、高齢者看護の実習を行うなかで、それぞれの個別性や疾患だけでなく、加齢による変化をおさえ、これらが高齢者の心と身体や生活にどのように影響を及ぼしているか、またそれを看護者としてどのようにサポートしていったら良いのかを考えながら看護できる人材を育成するよう指導した。また、高齢者をとりまく介護者や家族の状況、また医療制度や介護保険といった制度、福祉サービスとの連携についても同時に考えられるよう指導をおこなった。またこれらの指導内容に加え、心を添えた看護がおこなえるよう、また人の命を預かる責任の重い仕事であるということを実感できるよう、この点においては重点的に指導をおこなった。その具体的方法としては、患者と接するケアの機会を増やし活用し、患者と関わることから看護を考え、振り返る機会を多くした。学内では学生と共に、その場面を振り返り考えるという機会を多く持つようにした。
卒業研究　広島国際大学 （常勤講師）	平成18年4月～平成22年3月	担当学生の論文作成の全てにおいて担当した。 毎年5～6名の学生の卒業研究を担当した。研究の手法は文献学的検討が主であった。学生が興味を持ったテーマについて先行文献を分析し考察を行った。研究目的と分析、結果、考察がひとつの流れの中で論理的に流れ、書かれているかについて指導を強化した。
国家試験対策講座（老年看護）　広島国際大学 （常勤講師）	平成18年4月～平成22年3月	学内国家試験対策の一環として、国家試験対策講座を3コマ担当した。近年の社会情勢を踏まえ、老年看護学において頻出している問題の傾向をおさえ、重要な問題とそうでないものについての区分けができるよう、高齢者を取り巻く近年の状況についての説明に時間をかけた。その後、問題を解かせ回答と解説を行った。
ふれあい実習　岐阜医療科学大学 （常勤准教授）	平成22年 4月～平成24年３月	本実習については、科目責任者として実習施設の開拓、調整、要項作成、学生へのオリエンテーション、実習指導、まとめの発表会、評価のすべてにおいてかかわった。 学生にとっては、はじめての実習ということもあり、今後の学習のやる気につながるような実習になるよう努めた。ふれあい実習は地域で生活をする生活者である対象を理解するということから、地域と対象者とのつながりから、対象者に影響を与える地域の文化や歴史、気候、コミュニティといった背景も同時に考えられるよう指導した。
アカデミック・ライティング 岐阜医療科学大学 （常勤准教授）	平成22年 4月～平成24年3月	１５コマを２人の教員で担当した。新谷の担当部分は８コマであり、主に文章の読み書きや要約、文章構成、といったレポートの作成にかかわる部分であった。 本講義は、大学生として身に付けておくべき、文章の読み方、書き方、要約の仕方、ノートの取り方、文献の探し方、引用の仕方等について講義を行った。クリティカルシンキングなどの理解しにくい箇所においては、学生の身近な例をとって具体的に説明をおこなった。講義と演習を交互に入れ、理解が実践につながりやすいよう講義を進めた。
基礎ゼミナール　岐阜医療科学大学 （常勤准教授）	平成22年 4月～平成24年3月	１５コマのすべてを担当した。ひとつのテーマについて、多方面から見つめること、そしてそれについて深く考えることができるよう指導している。ひとつのテーマに対し、数名の学生で議論を深めることで、個々の考え方の違いを知る。また異なる意見をひとつにまとめ、テーマに基づいて他者が理解しやすい方法を考慮し、的確な媒体を用いて発表を行うなかでグループワークの力を身に付ける。またグループダイナミクスを体験させられるようかかわった。
看護学概論　岐阜医療科学大学 （常勤准教授）	平成22年 4月～平成24年3月	本講義は基礎看護学の教授と共にオムニバスで教授した。 新谷担当分は７コマ／１５コマ

事項	年月日	概　　要
看護理論　岐阜医療科学大学 （常勤准教授）	平成22年 4月～平成24年3月	本講義は基礎看護学の教授と共に８コマを教授した。はじめに各理論家の理論について概説し、そのあと、グループワークにて各理論についてより深く調べ、示すことが可能な理論については身近な事例と共に発表してもらった。看護を学ぶ初学者が、看護における環境とは何か、看護の対象とは何か、健康とは、病気とは、死とは何かということを考え理解することができるよう、ナイチンゲールの環境論や看護覚え書きを用いながら概説した。また看護とは何かについて学生なりに考えの礎ができることを目指した。また看護学概論での基礎的な学びが、今後の学習につながるよう教授した。「考える」看護が展開できるよう、随所に考える機会を設けた。いものではなく、身近な生活や看護のなかにあることを理解できるよう努めた。
看護過程演習　岐阜医療科学大学 （常勤准教授）	平成22年 4月～平成24年3月	科目責任者として１５コマのすべてを担当した。看護過程の一連の流れが理解できるよう、それぞれの過程ごとに丁寧に概説したあとに、過程ごとに全員に同じ事例を展開させ、それを確認していくという方法をとった。学生がわかりにくい難しい言葉を避け、よりわかりやすい言葉を使うようにしたり、理解しがたいところは、例えを用いて置き換えて説明したりした。またわかりにくい箇所は復習の時間を組み込み、放課後についても質問に対応し全員理解に努めた。
臨床看護総論　岐阜医療科学大学 （常勤准教授）	平成22年 4月～平成24年3月	科目責任者として１５コマのすべてを担当した。 どの講義においても、看護が初学者である学生の理解を深めるため、図や写真、DVDを活用しながら、わかりやすい講義を行うことに力を注いでいる。理解できる段階を経た後は、考える講義内容にしている。テーマを決めてグループワーク形式にし、ディスカッションを行うことで他者の異なる意見から、考える力を養う。また教員自身も学生たちの理解が深まるよう、口を出し過ぎないことに努め、ファシリテーター役を行っている。視点を広く持つこと、社会の流れに関心を持つことを意識させるよう、新聞や雑誌からテーマを選択し、意見交換ができるような時間も設けている。常に学生が講義を聴くばかりではなく、参画できるようなアクティブ・ラーニングを心がけている。
基礎看護技術Ⅰ　岐阜医療科学大学 （常勤准教授）	平成22年 4月～平成24年3月	本講義は講師を含め２人の教員とのオムニバスで行ったが、科目責任者であったことから、講義・演習などの授業計画を進め、講師担当分については指導に付いた。 基礎看護技術ⅠとⅡでは、それぞれの看護技術において”なぜそのような手順で行うのか”なぜそれが必要か“の根拠が考えられるよう講義や演習のなかで、事例を用い、必要時はその対象を見せるなどの工夫をした。また、看護技術のなかには日常生活を送るなかでの生活経験が多く必要となることから、日々の生活のおくり方に立ち戻り、生活体験が看護技術にどのようにつながるのかについて考えさせるよう努めた。 また技術を教える中で、看護者としての姿勢、態度についても厳しく教授した。
基礎看護技術Ⅱ　岐阜医療科学大学 （常勤准教授）	平成22年 4月～平成24年3月	本講義は講師を含め３人の教員とのオムニバスで行ったが、科目責任者であったことから、講義・演習などの授業計画を進め、講師担当分の講義については指導に付いた。 看護技術のひとつ一つの根拠が理解できるよう考える看護を教授した。手技に関しては教員同士で行うデモンストレーションをビデオで撮影し、学生が、放課後のおさらい時に活用できるようにした。 また1もⅡも演習は40人ずつの2クラスに分け、必要時、同じ講義を2回行い、演習時に教員の目が行き届くよう配慮した。一方のグループが演習に入っているときには、もう一方のグループにはワークシートを作成し演習の予習・復習ができるよう工夫した。

事項	年月日	概　　要
基礎看護学実習Ⅰ・Ⅱ　岐阜医療科学大学 （常勤准教授）	平成22年 4月～平成24年3月	1とⅡの実習において、実習施設の不足分の開拓。調整、要項作成、実習オリエンテーション、実習、まとめの会、評価、来年度の実習調整のすべてにおいてかかわった。 基礎看護実習においては、第一に看護の喜びが感じられ、今後の学びの原動力なるような経験につなぐことを目標としている。生活体験の少ない学生に対して、まずは基礎看護技術Ⅰ・Ⅱのなかで細かなところまで教育し、実習時に学んだことが応用できるよう具体的に指導した。基礎看護実習Ⅱにおいては、看護過程の展開の基礎をしっかりマスターさせること、看護の対象となる患者の個別性を押さえた援助をおこなうことを主としているが、個別性を押さえるうえで、患者の強みをみつけ、それを看護ケアに生かすよう指導している。
国家試験対策特別講座　岐阜医療科学大学 （常勤准教授）	平成23年10月	本大学の国家試験学内対策として、各専門領域で講座をもった。基礎看護学では3コマを担当し、そのうち2コマを新谷が担当した。過去問題を眺め、問題傾向を把握し、今後の傾向についても情報を集め、今の時代に沿った傾向と対策が基礎看護領域において話せるよう努めた。
在宅看護論　岐阜医療科学大学 （常勤准教授）	平成23年10月 ～平成24年3月	本講義は科目責任者として15コマを講師を含めて2人で担当した。 新谷担当分は8コマ呼吸器疾患を持つ療養者の看護、胃瘻を必要とする療養者の看護、在宅酸素療法を必要とする療養者の看護、家族支援、意思決定、介護保険とケアプランなどである。演習科目については共同で行った。
在宅看護学実習　岐阜医療科学大学 （常勤准教授）	平成23年10月 ～平成24年3月	科目責任者として、実習にかかわる施設との調整、オリエンテーション、実習指導、評価、来年度の調整について講師を含め2人で担当した。 実習においては地域で療養しながら生活を送る、生活者であるという視点を持つこと、家族やさまざまな他職種との連携で療養生活が支えられていること、制度をおさえること、医療依存度が高い療養者において、訪問看護が果たすべき役割や看護ケア、医師との連携について理解できるよう復習を兼ねながらの実習を行った。
卒業研究　岐阜医療科学大学 （常勤准教授）	平成22年 4月～平成24年3月	担当学生の論文作成の全てにおいて担当した。 毎年5～6名の学生の卒業研究を担当した。研究の手法は文献学的検討が主であった。学生が興味を持ったテーマについて先行文献を分析し考察を行った。研究目的と分析、結果、考察がひとつの流れの中で論理的に流れ、書かれているかについて指導を強化した。
地域看護活動論　広島都市学園大学 （常勤准教授）	平成24年4月～平成25年3月 産業保健は延長して、非常勤講師として平成25年9月まで担当した	15コマを3人の教員で科目担当した。新谷担当分は公衆衛生看護活動における技術・理論（健康教育・保健指導の技術）、産業保健、家庭訪問である。公衆衛生看護活動に必要な理論を概説し、それが実際の健康相談や健康教育などの看護活動にどのように活かされているのかについて、事例を含め理解につなげた。
地域看護学実習　広島都市学園大学 （常勤准教授）	平成24年4月～平成25年3月	学校保健、県・市町村保健センター、産業保健についての実習準備と指導、まとめの会、評価、来年度の施設開拓のすべてについて行った。 地域看護実習では、地域において保健師は、個人・集団・組織に対しどのような健康管理活動をしているのか。その具体的方法として、健康相談、健康教育などがあることを理解させた。具体的には、地域診断から健康課題を見出し、それに沿って健康教育をおこなうことを計画に入れ、実習前に指導をしながら健康教育の準備をさせ、実習施設で実践できるようにした。

事項	年月日	概　　要
老年看護学概論　広島都市学園大学 （常勤准教授）	平成24年4月～平成25年9月	科目責任者ではなかったが、オムニバスで講義を進めた（2人）。新谷担当分は8コマであった。 老年看護の基礎的知識を習得させるため、近年の高齢者に関係する社会のデータをニュースの記事なども参考に理解できるようにした。また看護過程ができるよう加齢変化をしっかりとおさえさせた。
発達看護学　広島都市学園大学 （常勤准教授）	平成24年4月～平成25年3月	科目責任者ではなかったが、小児看護の教員と共に新谷は8コマを担当した。発達課題をおさえることの重要性と、成人・高齢者のライフステージに合わせての発達段階の特徴について教授した。
学習技術　関西国際大学 （常勤准教授）	平成25年4月～平成27年3月	本講義15コマのすべてを科目責任者として担当した。大学に入学した初学者が身に付けるべきスキル（ノートテイキング・文章を読む・要約する・書く・図書館の利用・文献を調べる・文献の引用の書き方・パワーポイントを作成する・発表する）の一連のスキルについて教授した。毎回の講義において、講義・ワークシートを用いての演習の繰り返しで知識を実践につなぐようにした。
公衆衛生看護概論　関西国際大学 （常勤准教授）	平成26年10月～平成27年3月	本講義は教授が科目責任者であり、そのなかで産業保健活動を担当し講義した。また地域診断においては、対象地域の地域診断の模範解答を作成し、授業の際に配布した。地域診断の演習時の指導、地区踏査の指導を行った。試験問題作成においても講義担当箇所について作問した。
看護理論　関西国際大学 （常勤准教授）	平成26年5月	基礎看護学分野の講義である看護理論において、担当となった理論の教授と10名の学生のグループワークの指導を行った。
基礎看護学概論　近代姫路大学 （常勤教授）	平成27年4月～平成28年3月	科目責任者として基礎看護学概論の全講義を担当した。 看護を学ぶ初学者が看護における環境とは何か、看護の対象とは何か、健康とは、病気とは、死とは何かということを考え理解することができるよう、ナイチンゲールの環境論や看護覚え書きを用いながら概説した。また看護とは何かについて学生なりに考えの礎ができることを目指した。また看護学概論での基礎的な学びが、今後の学習につながるよう教授した。「考える」看護が展開できるよう、随所に考える機会を設けた。
健康生活環境論　近代姫路大学 （常勤教授）	平成27年4月～平成28年3月	科目責任者として基礎看護学概論の全講義を担当した。 健康とそれを支える環境に焦点を充て、広義の意味での環境とは何か、健康を維持するために環境を調整することの重要性について、ナイチンゲールの環境論をおさえながら概説した。本講義の聴講が学生自らの健康生活につながるよう、自分たちの環境と健康に置き換えて考えられるよう努めた。
健康生活環境論演習　近代姫路大学 （常勤教授）　（基礎看護技術Ⅰ・Ⅱのこと）	平成27年4月～平成28年3月	本講義は講師を含め２人の教員とのオムニバスで行ったが、科目責任者であったことから、講義・演習などの授業計画を進め、講師担当分については指導に付いた。技術演習については助手も技術指導に入ってもらい行った。 基礎看護技術ⅠとⅡでは、それぞれの看護技術において”なぜそのような手順で行うのか”なぜそれが必要か“の根拠が考えられるよう講義や演習のなかで、事例を用い、必要時はその対象を見せるなどの工夫をした。また、看護技術のなかには日常生活を送るなかでの生活経験が多く必要となることから、日々の生活のおくり方に立ち戻り、生活体験が看護技術にどのようにつながるのかについて考えさせるよう努めた。 また技術を教える中で、看護者としての姿勢、態度についても厳しく教授した。

事項	年月日	概　　要
看護シミュレーション演習　近代姫路大学 （看護過程） （常勤教授）	平成27年4月～平成28年3月	科目責任者として授業計画を立案し、演習を含め講師とともに共同で担当した。看護過程の一連の流れが理解できるよう、それぞれの過程ごとに丁寧に概説したあとに、過程ごとに全員に同じ事例を展開させ、それを確認していくという方法をとった。学生がわかりにくい難しい言葉を避け、よりわかりやすい言葉を使うようにしたり、理解しがたいところは、例えを用いて置き換えて説明したりした。またわかりにくい箇所は復習の時間を組み込み、放課後についても質問に対応し全員理解に努めた。
看護倫理　近代姫路大学 （常勤教授）	平成27年4月～平成28年3月	科目責任者として看護倫理8コマのほとんどを担当した。一部、教育のため2コマを2名の講師に担当させ自分は指導を行った。 看護倫理に関しては、倫理的ジレンマ、アドボカシー、意思決定などについてはテキストに基づいて教授した後、倫理の具体について理解を深めるために、学生にとって身近な事例を用いて考えさせたり、DVDを見せたりした。またシネマエデュケーションのなかで「映画：恍惚の人」を視聴し、学生に討論させ、倫理について考えさせた。
健康生活環境論実習　近代姫路大学 （常勤教授）	平成27年4月～平成28年3月	科目責任者として、実習施設調整、オリエンテーション、実習指導、まとめの会、評価、来年度の実習調整のすべてについてリーダーとしてかかわった。 地域で生活をする人を対象に、障がい者施設で実習をおこなった。対象者と環境をテーマに、対象者が健康な生活を送るためにどのような環境が必要なのかについて考えさせる実習を目指した。
基礎看護学実習Ⅱ （常勤教授）	平成27年4月～平成28年3月	科目責任者として、実習施設調整、オリエンテーション、実習指導、まとめの会、評価、来年度の実習調整のすべてについてリーダーとしてかかわった。 既習の看護技術が患者の個別性を尊重し展開できるよう、事前に看護過程の復習、日常生活援助の復習を行い実習に臨ませた。実習においては、学生に看護の楽しさを感じてもらえるよう、個々の成長を大切にみるよう配慮にした。また、根拠をおさえた看護技術が実施できるように、行う看護のすべてに根拠があることを理解できるよう教授した。病態のアセスメントが十分に行えるよう、事前に、教員の指導力を向上させるよう、教員に対する看護過程研修を行うなどの取り組みも行った。
卒業研究　近代姫路大学 （常勤教授）	平成27年4月～平成28年3月	担当学生の論文作成を担当した。 毎年5～6名の学生の卒業研究を担当した。研究の手法は文献学的検討が主であった。学生が興味を持ったテーマについて先行文献を分析し検討を行った。研究目的と分析、結果、考察がひとつの流れの中で論理的に流れ、書かれているかについて指導を強化した。
基礎看護技術Ⅰ・Ⅱ　奈良学園大学（非常勤講師）	平成27年4月～9月	移乗・移送、体位変換、環境等について4コマ担当し教授した。看護技術には根拠があり、その根拠を理解し実践する意味と必要性を理解する。 移乗や移送、体位変換については人間工学的な知識が必要であり、それについても教授し、看護技術とどのようにつながっているのかについて理解できるよう教授した。看護を学ぶ上で他の学問が有用であること広い視点を持つことを心がけることも合わせて教授した。
公衆衛生看護学Ⅰ（公衆衛生）奈良学園大学 （常勤教授）	平成28年4月～現在に至る	科目責任者としてすべてを担当した。一部、2コマ講師に担当してもらい、そのときは指導に付いた。 公衆衛生看護の対象を教授し、対象が個人・集団・組織であること、そこにどのように公衆衛生看護活動を展開していくのかについて概説した後、地域診断の理論や方法について概説し、近隣市の地域診断を行った。 地域を診る必要性とそこから健康問題をどのように見つけ出すかについて、地域診断を行いながら具体的に説明をした。

事項	年月日	概　　要
公衆衛生看護学Ⅲ（産業保健） （常勤教授）	平成28年4月～現在に至る	科目責任者としてすべてを担当した。一部、2コマ講師と助教に担当してもらい、そのときは指導に付いた。 職場訪問と工場見学の際は、講師、助教、助手も指導に加わった。 産業保健の現場は学生に理解しにくいことから、労働衛生に関する基礎的な知識、関係法規、歴史、環境と健康との調和、労働災害、健康診断等について学んだあとは、DVDの活用により臨場感を感じさせたり、新谷が産業看護職の際に作成した資料を配布して説明したりした。また作業環境測定の実践も行った。15コマの中で、職場訪問として、大学近隣の企業に出向き、働く人々の職場環境を知るとともに、働く人々にインタビューを行い、職業アイデンティティを感じたり、健康保険組合の組織を理解した。また夏季休暇には三菱重工神戸造船所の向上に出向き、職場巡視の実習も行った。
公衆衛生看護方法論Ⅰ （常勤教授）	平成28年4月～現在に至る	科目責任者としてすべてを担当した。一部、講師と助教に担当してもらったが、その際は指導に付いた。
公衆衛生看護方法論Ⅱ （常勤教授）	平成28年4月～現在に至る	科目責任者としてすべてを担当した。一部、講師に担当してもらったが、その際は指導に付いた。
広島国際大学・岐阜医療科学大学・広島都市学園大学・近大姫路大学・関西国際大学・奈良学園大学のすべてにおいて心がけ実践していること	教員経験期間	まず、シラバス作成に関しては、学生との契約書であるとの考えから、ディプロマポリシー、アドミッションポリシー、カリキュラムポリシーのつながりを意識して作成すること、また学生が見てわかりやすいものをと心がけている。 それぞれのポリシーの達成と、学士力と看護師・保健師国家試験に合格できるだけの力を身に付けられるよう常に意識し各講義内容を検討している。 その具体として、講義・演習においては「考える力」「問題解決能力」「文章構成力」を養うこと、広く「社会の動向に関心を持つ」ことを念頭において教授している。 また学問は看護学だけでなく、他の学問領域（心理学・経済学・工学など）の理論や知識も織り交ぜながら、学ぶことの楽しさ、考えることの楽しさを伝える講義内容を考えている。そのため、座学だけでなく演習を組み込むことが多く、知識を身に付けた後は実践し考え、分からないところは、また学び実践するという繰り返しにより点の知識が面につながるよう、その方法論について考えて行っている。
２　作成した教科書，教材		
ふれあい実習	平成22年4月	実習要項作成
基礎看護学実習Ⅰ	平成22年4月	実習要項作成
基礎看護学実習Ⅱ	平成22年4月	実習要項作成
アカデミック・ライティング	平成22年4月	シラバス作成
基礎看護技術Ⅰ	平成22年4月	シラバス作成
基礎看護技術Ⅱ	平成22年4月	シラバス作成
看護過程演習	平成22年4月	シラバス作成
臨床看護総論	平成22年4月	シラバス作成
臨地実習のてびき	平成22年4月	実習要綱（てびき）作成
在宅看護論	平成23年10月	シラバス作成
在宅看護学実習	平成23年10月	実習要項作成
基礎看護学概論	平成27年4月	シラバス作成

事項	年月日	概　　要
健康生活環境論	平成27年4月	シラバス作成
看護シミュレーション演習	平成27年4月	シラバス作成
看護倫理	平成27年4月	シラバス作成
健康生活環境論演習	平成27年4月	シラバス作成
健康生活環境論実習	平成27年4月	要項作成
基礎看護学実習Ⅰ	平成27年4月	要項作成
基礎看護学実習Ⅱ	平成27年4月	要項作成
フィジカルアセスメント演習	平成27年4月	シラバス作成
治療看護技術論	平成27年4月	シラバス作成
コンパクト福祉系講座「医学一般」	平成19年4月	このなかで「高齢者の生活機能と機能回復（リハビリテーション）」20章を担当、P130～139．2007 日野原重明監修，巽典之，星野政明編著、金芳堂
老年看護学	平成19年4月	このなかで「高齢者のリハビリテーション看護」「疾病をもつ高齢者の看護」3,4章を担当 P127～135、P214～221．2007 川野雅資監修、守本とも子編著　日本放射線技師会出版会
新・QOLを高める専門看護、介護を考える　下巻	平成21年 4月	このなかで「バーンアウトに陥らないための条件」スタッフのQOLを高めるための条件」を担当した。 守本とも子，星野政明編、中央法規出版
３　教育上の能力に関する大学等の評価		
広島国際大学FD委員会	平成18年4月～平成22年3月	講義最終回において大学が作成した授業アンケートを実施オムニバス講義もあり、個人への評価としては正確ではないが、広義については、おおむね理解しやすかったという結果であった。しかし演習授業時において、学生人数が100名を超えるため2クラスで実施していたが、体験できない学生もいたため、領域内で調整を図った。
岐阜医療科学大学FD委員会	平成22年 4月～平成24年3月	講義最終回において大学が作成した授業アンケートを実施すべてにおいて、理解しやすかった。放課後の質問にも対応できていた。実習前の演習の復習も手厚かったのでよいという評価を得た。なかでも看護過程演習と臨床看護総論の評価がよく、これについては、ほとんど単独での講義実施だったため、自信に繋がった。
広島都市学園大学FD委員会	平成24年4月～平成25年3月	講義最終回において大学が作成した授業アンケートを実施担当した講義はオムニバスのため正確な判断はできない。そのため自らの講義の質を上げたいため、教員になって以来、常に講義後に感想カードを配布し、講義内容について学生からの意見を聴取している。感想カードで出た意見は、必ず次の講義で返すようにしている他、改善に時間がかかると考えられること（私語や他学生の講義マナーなど）に関しては、次回の講義で、その対策について学生に示し、ケースによっては、良い講義を目指して、学生の協力も求めるようにしている。

事項	年月日	概　　要
関西国際大学FD委員会	平成25年4月～平成27年3月	関西国際大学ではFD活動が非常に活発であった。また新谷も教育開発委員会、カリキュラム委員会に所属し、2年目には副委員長になったこともあり、FD活動に積極的に取り組んだ。 ディプロマポリシー、アドミッションポリシー、カリキュラムポリシーのつながりを意識しながらシラバスを作成し、その達成を目標に、講義内容を組んでいくこと、また4年間のカリキュラムマップを全教員が意識しながら教育活動に取り組めることを活動として行った。 個人的な授業評価については、学習技術を担当し、大学生が身に付けておくべきスキルについて、学習技術の著者と共に取り組むことができたことは財産となった。授業評価も平均点以上の結果であり、その結果は学内PCで全教員に配信される仕組みにより配信された。
近大姫路大学FD委員会	平成27年4月～平成28年3月	近大姫路大学ではFD委員会が活発ではなかったので、授業評価に信頼性が乏しいと感じ、講義後の学生からの感想カードで、常に評価を得るようにした。 感想カードに書かれた学生の意見を大切にし、必ず次回の講義でこちらの対策を示すことにした。結果、学生と教員との関係も良好であり、風通しも良く、講義のよい評判は理事長の耳に入るまでになった。
奈良学園大学FD委員会	平成28年4月～平成29年3月	学生の感想カードからの意見抽出と迅速な対応、改善に力を注いでいる。 よい講義は教員の努力と学生の協力もありできることを話し、その結果、新谷の講義では私語はなく順調に講義が進んでいる。 講義技術の向上に関しては、講師、助教の講義作成資料に細かく目を通し意見を述べるようにしているほか、教員同士の意見交換も活発に行うようにしている。
４　実務の経験を有する者についての特記事項		
ヤクルト本社福山工場　（広島県福山市） 【労働者のストレス】 セルフケア研修 管理監督者研修 ストレス対処力研修 役員幹部に対して報告会と改善案提言を行った	平成23年4月～平成24年3月	ヤクルト本社の社員に対して、ストレスに対するセルフケア研修を管理者対象に管理監督者研修、全社員を対象にストレス対処力研修の3つの教育研修を行った。 くわえてメンタルヘルス調査・全員面談の結果を踏まえ報告書を作成し役員幹部にプレゼンテーションを行い、現労働現場に対する提言を行った。
ヤクルト本社兵庫三木工場（兵庫県三木市） 【労働者のストレス】 セルフケア研修　2回 管理監督者研修 役員幹部に対して報告会と改善案提言を行った	平成26年4月～平成27年3月	職場巡視とヤクルト本社の社員に対して、ストレスに対するセルフケア研修、管理者対象に管理監督者研修２つの教育研修を行った。 くわえてメンタルヘルス調査・全員面談の結果を踏まえ、報告書を作成し、役員幹部にプレゼンテーションを行い、現労働現場に対する提言を行った。
横河電機株式会社（東京立川市） 【労働者のストレス】 役員幹部に対して報告会と改善案提言を行った	平成24年4月～平成25年3月	横河電機株式会社の社員に対しストレスチェックを行い、その結果をまとめ報告書を作成した。悪院幹部の前でプレゼンテーションを行い、現労働現場に対する改善策などの提言を行った。
ヤクルト本社医薬広島支店（広島市） 【労働者のストレス】 うつ傾向にある社員の面談を年間通じて行った	平成27年4月～平成28年3月	うつ傾向にある社員の面談によるフォローを年間通じて行った。
広島中央ヤクルト販売 【労働者のストレス】 セルフケア研修 役員幹部に対して報告会と改善案提言を行った	平成26年4月～現在に至る（現在は2年間に渡り活動中）	職場巡視とヤクルト本社の社員に対して、ストレスに対するセルフケア研修、管理者対象に管理監督者研修２つの教育研修を行った。 くわえてメンタルヘルス調査・全員面談の結果を踏まえ、報告書を作成し、役員幹部にプレゼンテーションを行い、現労働現場に対する提言を行った。

事項	年月日	概　　要
税務大学校　広島研修所 昇格する社員に対し、管理者研修のなかでストレスマネジメントについて研修を行った。	平成24年8月	昇格する税務署の社員に対する、管理者研修において、ストレスマネジメントの研修を行った。ストレスのメカニズム、ストレスの構造、ストレス状態の兆候、管理者として部下に行うべき取り組みや対応について90分間の講義を行った。
ヤクルト健康保険組合　（保健師）年間契約にて毎年更新	平成19年4月から現在に至る	特定保健指導を行っている
ヤクルト本社福山工場（保健師）年間契約	平成23年4月～平成24年3月	労働者のメンタルヘルスを対象にストレスチェック、全員面談、分析、報告書の作成、役員対象にプレゼンテーションを行い、組織の改善に向け提言を行う。
横河電機株式会社（保健師）	平成24年4月～平成25年3月	労働者のメンタルヘルスを対象にストレスチェック、全員面談、分析、報告書の作成、役員対象にプレゼンテーションを行い、組織の改善に向け提言を行う。
ヤクルト本社兵庫三木工場（保健師）年間契約	平成26年4月～平成27年3月	労働者のメンタルヘルスを対象にストレスチェック、全員面談、分析、報告書の作成、役員対象にプレゼンテーションを行い、組織の改善に向け提言を行う。
ヤクルト本社医薬広島支店（保健師）	平成27年4月～平成28年3月	労働者のメンタルヘルスを対象に、うつ傾向にある社員に対し定期的な面談によるフォローを行っている。また、組織の改善に向け提言を行う。
広島中央ヤクルト販売（保健師）年間契約	平成26年4月～現在に至る（現在は2年間に渡り活動中）	労働者のメンタルヘルスを対象にストレスチェック、全員面談、分析、報告書の作成、役員対象にプレゼンテーションを行い、組織の改善に向け提言を行う。
富士通エフ・オー・エムと共同 でメンタルヘルスプロジェクト事業開始　（保健師）	平成26年4月～平成28年3月	ストレスチェックの法制化に向けて、ICTを用いたストレスチェックと改善策が行えないか、プロジェクトを立ち上げ事業を開始した。
５　その他		
広島国際大学	平成18年4月～平成20年3月	看護学科のFD委員 FD委員として授業評価の基準作成、授業満足度アンケート、授業改善アンケート内容の作成、評価結果の公開方法の検討、FD研究会の開催準備～実施～報告書の作成を委員と共に行った。
関西国際大学	平成25年4月～平成27年3月	関西国際大学全学のFD関連委員会の委員 教育開発委員会（2年目から副委員長） カリキュラム委員会委員 教育開発委員会は大学のなかでの、教育改革を推し進める委員会であり、他大学でおこなってきたFD委員会とは異なっている。大学間連携共同教育推進事業において他大学から本学に1年間の出向をされている先生方と共に、主体的な 学びのための教学マネジメントシステムの構築について取り組みを行ってきた。 具体的にはアクティブ・ラーニングやディープ・ラーニング、ベンチマークの作成、学生ポートフォリオの導入と活用と多岐に渡り教育改革事業に参加した。
近大姫路大学	平成27年4月～平成28年3月	学内のFD委員長として授業満足度アンケート、授業改善アンケートの検討やFD研究会の開催を行った。
社会福祉法人秀楽会 しゅうらくえん　評議委員	平成26年4月～現在に至る	社会福祉法人秀楽会しゅうらくえんの事業・運営全般について専門職として意見を述べている
兵庫県三木市 健康増進課 健康政策将来検討会	平成26年4月～平成25年3月	三木市の保健福祉の施策づくりに対し、健康増進課から依頼を受け、三木市総合保健センターにて専門職者としての意見を述べた。
産業保健と看護（株）メディカ出版　編集同人	平成26年7月～現在に至る	産業保健と看護という月刊雑誌の編集同人として、編集内容に意見を述べている
第11回　日本乳癌学会　中部地方会シンポジスト	平成26年9月	日本乳癌学会において、就労とがんという自身の研究成果をもとに、シンポジストとして発表を行う

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項		
事項	年月日	概　　要
１　資格，免許		
看護師免許	平成14年 3月	登録番号：第1153497号
保健師免許	平成14年 4月	登録番号：第104574号
養護教諭２種免許	平成14年12月	平14養2第12号
第一種衛生管理者	平成16年11月	第13001082121号
准看護師免許	昭和56年 3月	登録番号：第17081号
２　特許等		
なし		
３　実務の経験を有する者についての特記事項		
全国保健師教育機関協議会	平成25年8月	第2回秋季研修会受講
全国保健師教育機関協議会	平成25年11月	平成25年度 第6回日本DMAT隊員養成研修 見学参加
日本サーモロジー学会	平成27年6月	第34回臨床熱画像検査法講習会受講
日本看護協会	平成27年7月	災害医療と看護受講
沖縄県国頭郡金武町	平成28年8月	乳幼児歯科健康診査　新生児訪問　参加
全国保健師教育機関協議会	平成28年8月	第31回夏季教員研修会受講
奈良県看護協会	平成28年9月	平成28年度奈良県看護協会保健師職能研修会受講
全国保健師教育機関協議会	平成28年10月	東海・近畿ブロック研修会受講
全国保健師教育機関協議会	平成28年10月	第5回秋季研修会受講
兵庫県看護協会	平成28年12月	災害支援ナースを目指すあなたへ（リーダー編）受講
日本看護協会	平成28年12月	災害支援ナース取得
沖縄県国頭郡金武町 ３歳児健康診査　街角健康診査	平成28年12月	保健師として、3歳児検診に健康教育で参加 健康教育内容：手洗い
４　その他		
なし		

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
（著書）				
コンパクト福祉系講義 医学一般	共著	平成19年 4月	金芳堂	こころとからだのしくみ・働き・病気から，保健・医療制度・倫理まで，福祉に求められる医学関連の幅広い領域をカバーしつつ，授業時間数内でこなせるようコンパクトにまとめた。現代社会の福祉に直接リンクする医学関連知識を収録した。 担当部分：第20章 高齢者の生活機能と機能回復（リハビリテーション） 日野原重明監修，巽典之，星野政明編著 守本とも子、新谷奈苗、他
老年看護学	共著	平成19年 4月	(日本放射線技師会出版会)	特に高齢者の身体的・心理的特長を十分把握した上で、高齢者のQOLの向上を目指した看護実践を意識的にとりあげた。また、国家試験対策のテキストとしても活用できる。本書は、看護学生を対象とするばかりではなく、高齢者の医療・福祉をともに担うコメディカルワーカーや介護福祉士などの社会福祉専門職の方にも活用できる。 担当部分：第3章 高齢者のリハビリテーション看護 p.127～p.135、第4章 疾病をもつ高齢者の看護 p.214～p.221 川野雅資監修、守本とも子編著、新谷奈苗、他
生活支援技術・介護過程	共著	平成22年 6月	(黎明書房)	居住環境の整備や身じたく、移動、食事、入浴、排泄、睡眠等における実践的な介護の方法と、介護過程の意義から実例をふまえた介護の実践的展開やチームアプローチまでを、初めて学ぶ人でも分かるようイラストや図を交え解説。専門用語など読みにくい漢字には振り仮名を付けました。 担当部分：第6章 自立に向けた入浴・清潔保持の介護 p.99～p.117、第12章 介護過程の展開 p.175～p.185 守本とも子，星野政明編著、新谷奈苗、他
介護福祉士養成シリーズ １．介護の基本・コミュニケーション技術	共著	平成22年 9月	(黎明書房)	第1部では、介護の意義や役割、介護サービスのあり方など介護の考え方について、初めて学ぶ人でも分かるようていねいに解説。第2部では、介護福祉援助実践で活用できるコミュニケーションの知識と技術について詳しく説明している。 担当部分 第７章　p101～117を執筆 守本とも子　星野政明　著　新谷奈苗他
看護学実践　-Science of Nursing-　老年看護学	共著	平成22年12月	(ピラールプレス)	本書は、高齢者の身体的・心理的特徴を十分把握したうえで、高齢者のＱＯＬの向上を目指した看護実践を意識的に取り上げた『老年看護学』（監修：川野雅資、編集：守本とも子、2007年）の改訂版である。国家試験対策のテキストとしても活用されてきた旧版の内容をさらに掘り下げ、高齢者の疾病構造の変容、健康に関連した高齢者のニーズの多様性などを考慮にいれて、老年看護の実践に向けての質の評価への取り組みを盛り込んだ看護学生必携のテキストとなっている。 担当部分：第4章 おもな疾患と看護 3.呼吸器系の疾患 p.142～p.151，第5章 疾患のある高齢者の援助看護 2.薬物療法を受ける高齢者の看護 p.229～p.239，3.高齢者のリハビリテーション看護 p.240～p.247 川野雅資監修、守本とも子編著、新谷奈苗、甲田宗嗣、山形力生、奥百合子、他
介護実習入門（介護福祉士養成シリーズ）	共著	平成24年 3月	(黎明書房)	介護福祉士の高等教育に向けた豊かな専門性と人間性の構築という主旨を踏まえたうえで、介護の専門援助に焦点を当て、その内容・方法を具体的に示した。介護福祉士養成シリーズ①～⑤のうち⑤介護実習入門である。 担当部分：第3章 第1節 介護過程の意義と目的 p.68～p.70，第2節 介護過程の流れ p.71～p.78 守本とも子，星野政明編著、新谷奈苗、辻下守弘、岡崎大資、川口ちづる、他

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
看護職をめざす人の社会保障と社会福祉	共著	平成27年4月	(株式会社みらい)	看護職(看護師・保健師・助産師)養成校で初めて社会保障・社会福祉を学ぶ人に最適なテキスト。看護職が多職種と連携する際や利用者のニーズに応えるために必要な社会保障・社会福祉の知識を体系的に理解できるよう編集した。各章の導入部分には、看護職が社会保障・社会福祉を学ぶ理由や学びのポイント等を示し、スムーズに本文を読み進められるよう工夫している。 守本とも子編集　新谷奈苗他
【シリーズ・看護・介護・福祉のための「教育学」】全４巻 看護のための教育学-教育心理をふまえた教育指導実践の手引き－	共著	平成27年9月	（あいり出版）	看護ケアのひとつである指導について、教育学の視点から理論を用い、かつ事例を踏まえ具体的に展開している。 担当分は、がんの疾患説明とがんに罹患し退院する患者に対して、教育学的な理論を用いて患者指導を展開する章。 守本とも子編者　松田智子、虎杖真智子、鎌田首治朗、新谷奈苗他
産業保健と看護　8巻5号	単独	2016 Vol.8 No.5	メディカ出版	和訳：警察官のストレス：州警察におけるストレス関連症状の原因、有病率、および重症度の検討 「今月の海外文献」を担当　p78
（編者） 【シリーズ・看護・介護・福祉のための「教育学」】全４巻 介護のための教育学-教育心理をふまえた教育指導実践の手引き－	共著 （監修）	平成29年1月25日	（あいり出版）	本シリーズは全4巻の2巻である。対象を「生活体としての人」という見地に立ち、対象者が行動変容をし、健康行動を身に付ける際の、専門職者が行う支援の技法を紹介している。具体的には、学問的に体系化されてきた教育学の理論を主として紹介し、事例を展開するなかで、その理論を活かした効果的な指導の方法を展開している。事例を展開するなかで、教育学的な視点を取り入れることは、専門職者としての役割、機能の発展である。 編者：新谷奈苗 章の担当部分：4章の1と2、8章の2、10章の2
（翻訳） 多文化社会の看護と保健医療 グローバル化する看護・保健のための人材育成	翻訳	平成26年12月	福村出版株式会社	看護・医療は多文化状況にいかに対応すべきか。英国で現場の視点から作られた文化ケアのための包括的教材。 そんそなかでも、多文化における社会においての男性の役割と保健医療との関連についてカレン・ホランドが書き記したものを日本語に訳し整理した。 カレン・ホランド 著　クリスティン・ホグ 著 日本赤十字九州国際看護大学　国際看護研究会 監訳 担当部分：新谷奈苗 (8章) P127～138
（学術論文）				
Virtual Switch that used VR glass and RFID tag 和訳 VR眼鏡とRFIDタグを用いたバーチャルスイッチ	共著	平成19年 8月	19thICPR International Conference on Production Research)	産業の領域では，工場現場で働く社員の安全を確保するために，設備の対象ごとに，表示装置と入力装置が必要となる。そこで操作者の携帯用コンピュータに接続したVRグラスを表示装置とし，その画像中に表示されるバーチャルなスイッチを入力装置とする方法を使い労働災害防止のための安全確保について検討した。 担当部分：研究計画の段階から論文作成まで関わった。共著者にはディスカッションへの参加、論文の指導（吉江修先生）をしてもらった。 新谷奈苗、永岡裕康、大谷力、織田泰司
快適職場づくりを目指した生活・仕事上のストレス及びストレス対処能力向上要因の検討（査読付）	共著	平成20年 3月	広島国際大学医療福祉学科紀要第4巻 ,111-121頁	本研究では働きやすい職場づくりに向けての基礎資料とするために、A社全社員の職場におけるストレス評価をおこない、生活および仕事上の要因と、ストレスによる心身反応との関連を明らかにすることを目的とした。一方、ストレス対処能力を高める要因についても検討した。 担当部分：研究計画の段階から論文作成まで関わった。共著者（高尾文子先生）には論文の指導をしてもらった. 新谷奈苗，高尾文子，中村百合子，田村友則

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
森林擬似環境におけるリラックス度の検討（査読付）	共著	平成21年 1月	日本サーモロジー学会機関誌 Vol.28(No.2),34-37頁	概要：本研究では、企業において従業員のストレスを軽減するのために、リフレッシュエリアを設け、その意義について論ずるために、森林の視覚的映像、鳥のさえずりなどの環境音、香りの各要素が、人体にどのような効果をもたらすかを定量的に明らかにすることを研究の目的とした。 担当部分：研究計画の段階から論文作成まで関わった。共著者にはディスカッションへの参加、論文のアドバイスをしてもらった。 新谷奈苗，高尾文子，中村百合子
森の香りの計算負荷ストレスに対するストレス緩和作用　鼻頭温度からみたA型行動と非A型行動パターンのリラックス度の違い（査読付）	共著	平成22年 1月	日本サーモロジー学会機関誌 Vol.29(No.2),44-49頁	計算負荷メンタルストレスに対する森の香りのリラックス効果の可能性について明らかにすると共に、A型行動パターンの人が香りにどのように反応するかクロスオーバー法で検討した. 担当部分：研究計画の段階から発表まで全般にわたって関わった。 高尾文子、新谷奈苗、中村百合子
EFFECTS OF A STUFFED ANIMAL DESIGNED FOR NURSING CARE（査読付） 和訳 介護用縫いぐるみの効果	共著	平成22年 8月	6th International Conference of Health Behavioral Science ICHBS2010	施設入所高齢者の癒しとQOL向上の効果を検討するため、「温かい介護用縫いぐるみ」を使用してもらった前後の行動変化を分析した. 担当部分：研究計画の段階から発表まで全般にわたって関わった。 守本とも子、新谷奈苗
A questionnaire to determine Nursing and Child care tudents` Understanding of welfare equipment（査読付） 和訳 看護・保育学生の意識調査「福祉用具の理解」	共著	平成22年11月	Ergonomics for All, Celebrating PPCOE's 20 years of excellence	看護学生と保育学生を対象に、福祉用具に対する認識の違いを検討した. 担当部分：論文作成時のディスカッションに参加した。 守本とも子、上本野唱子、新谷奈苗
Discussion of emergency notification device for elderly people（査読付） 和訳 高齢者向け緊急通報機器に関する考察	共著	平成22年11月	Ergonomics for All, Celebrating PPCOE's 20 years of excellence216-221頁	高齢者向け緊急通報機器の使用状況を明らかにすることで，高齢者にとって活用しやすい、あるいは有用な機器の開発や運用方法の改善につなげる. 担当部分：研究計画の段階から論文作成まで関わった。共著者にはディスカッションへの参加、論文のアドバイスをしてもらった。 新谷奈苗、永岡裕康、堀口和子、守本とも子
Correlation between autonomic nervous function and forehead/nasal temperatures in seniors during leg press（査読付） 和訳 高齢者のレッグプレス負荷時の自律神経機能と前額/鼻頭温度との相関	共著	平成23年 7月	17th International Conference on Thermal Engineering and Thermogrammetry (THERMO)	高齢者のレッグプレス負荷時の自律神経機能と前額/鼻頭温度との相関関係について検討した. 担当部分：研究計画、研究対象の確保、データ収集、分析とすべてにおいて関わった。 高尾文子、坊岡正之、 奥本泰久、中村一美、新谷奈苗、中村百合子
Study about Quality of Life(QOL) of Home Oxygen Therapy Patients and Related Factors of Actual Life Situation（査読付） 和訳 在宅酸素療法患者の生活の質（QOL）に影響を及ぼす生活実態に関連する要因の検討	共著	平成23年10月	Ergonomics In Asia: Development, opportunities, and Challenges 295-230頁 (CRC Press)	在宅酸素療法患者のQOLに影響を及ぼす、生活実態に関連する要因を検討した. 担当部分：研究計画の段階から論文作成まで関わった。共著者にはディスカッションへの参加、論文のアドバイスをしてもらった。 新谷奈苗、守本とも子

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
基礎資格の違いからみえる介護支援専門員の課題とマネジメント（査読付）	共著	平成24年10月	産業保健人間工学研究14,25-28頁	介護支援相談員が持つ基礎資格により行うマネジメントに差異はどの程度あるのか、またそれにより療養者の回復度について調査を行い、その結果と今後の課題について考察した。 担当部分：本研究については、フィールドの依頼、調整、質問紙作成、分析、考察の検討を行った。 大浜恵美子、新谷奈苗
老いの受容（受容困難要因の検討）（査読付）	共著	平成24年10月	産業保健人間工学研究14,21-24頁	老いについて，老いることへの受容が困難で日々の生活にも影響を及ぼしている高齢者が存在する一方，老いを受け止め，老年期を肯定的に捉えている高齢者が存在する．この相反する状況には，老いの受容を妨げる何らかの要因があると考えられ，先行する研究論文からその要因を明らかにする． 担当部分：研究計画から、分析、学会への発表、論文さくせいまで、すべてにおいてかかわった。 新谷奈苗,照屋郁美,大浜恵美子,永岡裕康
乳がん患者のワーク・トリートメントバランスを支える患者支援プログラムの開発 「科学研究費助成成果報告書」	単著	平成26年3月	http://hataraku.ec-net.jp/ 上記ホームページを開設して掲載しているが、冊子としても作成している	成人期の女性の乳がん患者が、外来で化学療法を受けながら仕事と治療と家庭生活を両立している困難について明らかにし、必要な保健師の役割についてまとめた。 担当部分：研究計画から研究対象者の確保、データの収集、分析、まとめと、すべてにおいて行った。 新谷奈苗のみ
労働者の精神的健康度と生活習慣・SOCとの関連（査読付）	共著	平成26年10月	医療福祉情報行動科学誌(２)，１－７頁	本研究は，食品製造業に従事する労働者を対象として，精神的健康度と生活習慣，健康保持能力といわれる首尾一貫感覚（以下，SOCとする）との関連を検討することを目的とした。対象は，工場合併のため１年後に転勤を余儀なくされた食品製造会社に勤務する全社員63名（男性 45，女性 18，平均年齢；43.5±10.75）であった。精神的健康度を良好に維持していくためには，睡眠状況が安定していることが重要であり，SOCでは実践の能力に近い処理可能感が最も重要である。また生活習慣とSOCの関係における運動習慣は，例えば練習という努力を重ねることで着実に実力が向上する実感を得，あるいはチームプレイのなかで自らが果たすべき役割を認識する訓練が行われた，といった経験が関係すると考えられた。 担当部分：研究計画から研究対象者の確保、データの収集、分析、まとめと、すべてにおいて行った。岩永先生には指導をいただいた。 新谷奈苗　岩永誠
外来化学療法を受けている乳がん患者の仕事継続への困難（査読付）	共著	平成27年10月	医療福祉情報行動科学誌(２)，１２－１８頁	初発の乳がん患者で，手術療法の後に化学療法の２回目を終了した以降の患者から，仕事を継続している患者を対象とし，「仕事を継続していく上での困難」について個別に半構造的インタビューを行った。そしてその逐語録を意味の取れる程度のまとまった単位で区切り，仕事を継続していく上での困難について抽出，カテゴリー化を行った。5コードからは、【治療方針決定の際の迷い】【家族の協力がないこと】【職場の仲間の理解がないこと】【病気を知られることの煩わしさ】【治療費等にかかる費用負担】【かつらの違和感】【家事を一人でこなせず家族に負担をかけること】【病院までの距離】【長期に渡る再発への不安感】の9カテゴリーが得られた。医療者から説明を受けていても、患者にとって治療方針決定の際の判断にかかる負担は大きく、医療者からの方向付けは必要である。また乳がんの経過は長く、一応の治療が終了した後も、常に心に再発への不安を抱えており、将来のキャリアビジョンを考えていくときの壁になっていることがわかった。 担当部分：研究計画から研究対象者の確保、データの収集、分析、まとめと、すべてにおいて行った。小池さんには対象者の確保協力をいただいた。 新谷奈苗,小池恵理子,守本とも子

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
Comparison of Public Health Care System between Taiwan and Japan; Focusing on Long-Term Oxygen Therapy（査読付） 和訳 公衆衛生保健ケアシステムの国際比較（台湾と日本）-在宅酸素療法に焦点を当てて-	共著	平成27年 1月	Bridging Research and Good Practices towards Patient Welfare(the CRC Press, an imprint of Taylor and Francis) ISBN; 978-1-138-02716-9 Page:55-59	海外赴任者の労働と生活の支援のために、慢性呼吸器疾患により在宅酸素療法を受けながら日本と台湾とで生活をしている人々に対する医療･福祉の実態を調査･比較した。日本では呼吸療法士の資格制度の検討が示唆された。また、台湾では酸素濃縮機や携帯陽酸素ボンベの提供を福祉ではなく継続医療の視点で行う必要があることが明らかとなった。 担当部分：全般的な論文の指導にかかわった SHIGEKI TATSUKAWA、NANAE SHINTANI、AYAKO KAJIMURA
Consideration of occupational stressors that influence Senses of Satisfaction at work in Japan（査読付） 和訳 仕事満足度に影響する職業性ストレスの検討	共著	平成27年 1月	Bridging Research and Good Practices towards Patient Welfare(CRC Press, an imprint of Taylor and Francis) ISBN; 978-1-138-02716-9 Page:191-196	仕事満足度を向上させる環境づくりを提案することを目的に職業性ストレスと仕事満足度の関連について重回帰分析を行った。職業性ストレスの"Friendly Environment","Well-developed Relationship","Job Discretion","Workload"が仕事満足度に影響していた。健康的職場環境を構築するためには、特に"Friendly Environment","Well-developed Relationship"について産業保健師の関与が重要であることが明らかとなった。 担当部分：研究計画、対象者の確保、分析、論文の作成、指導に至るまで、全てにおいてかかわった。 AYAKO KAJIMURA、NANAE SHINTANI、SHIGEKI TATSUKAWA
The relation between occupational stress and supports by occupations.（査読付） 和訳 職業性ストレスとサポートの職種別の関係	単著	平成27年1月	New Ergonomics Perspective, CRC Press, @2015 Taylor & Francis Group, London ISBN 978-1-138-02751-1 pp207-210	本研究では、労働者がストレッサーを認知してストレス反応が表れる過程において、緩衝要因としての上司・同僚・家族のサポートの影響を、職種別に明らかにすることを目的とした。本研究から明らかになったことは、職種によりストレスの受けとめ方が異なることである。ストレス反応に与える影響を交互作用でみるときも、職種に着目し、介入していくことが重要であることが示唆された。日本経済を支える成人期男性への心身の健康管理に対する保健指導の方向性を探ることができた。 担当部分：研究計画、対象者の確保、分析、論文の作成に至るまで、全てにおいて行った。 新谷奈苗
How Do You Support Breast Cancer Patients on Work-Treatment Balance?（査読付） 和訳 乳がん患者のワークトリートメント・バランスへの支援	共著	平成27年1月	Bridging Research and Good Practices towards Patient Welfare(CRC Press, an imprint of Taylor and Francis) ISBN;978-1-138-02716-9 Page:71-77	乳がんによる化学療法治療中の患者が抱える困難を明らかにすることによりQOLを向上することを目的とし、乳がんによる化学療法治療中の患者へインタビューを実施しテキストマイニングによる分析を行った。インタビュー分析の結果、14項目の困難に分類された。そして、自信を与えるようなサポート体制を様々な機関が連携しながら構築することが大切であると明らかになった。 担当部分：研究計画、対象者の確保、分析、論文の作成に至るまで、全てにおいて行った。 共著者：Nanae Shintani、Hiroyasu Nagaoka、Eriko Koike、Shigeki Tatsukawa、Ayako Kajimura
Consideration of support using areal feature and SNS (Social Network Service) for nursing-students job-hunting - Viewpoints of Public Health on community and Authentic Voices -（査読付） 和訳 SNSを活用した看護学生の就職活動支援方法の検討-地域特性と住民の声を反映して-	共著	平成28年2月	The 14th Annual Hawaii International Conference on Education, Hawaii International Conference on Education Conference Proceeding http://www.hiceducation.org/EDU2016.pdf Page：1264-1270	本研究は,中小規模医療機関の看護部長にインタビューを行い,就職採用に伴う苦悩を調査し,更に就職活研究計画、対象者の確保、分析、論文の作成に至るまで、全てにおいて行った。動中の看護学生に就職活動方法をアンケート調査することにより,新たな就職活動支援方法を導き出す基礎調査を行った.中小規模医療機関では新人看護師の十分な数の確保が困難な現状があることがわかった.更に,看護学生のアンケート調査からインターネットの活用,先輩や看護教員に聞く,インターンシップを活用するなどの方法により就職活動を行っているものの,その地域の環境や住民の声を反映した地域特性を知りたいとの思いを持っていることがわかった.SNSを活用することで双方の困難を減少に導くことができるのではないかと示唆された. 担当部分：論文の投稿指導にかかわった 共著者：TATSUKAWA Shigeki、SHINTANI Nanae、SUZAKI Yoshika、KAJIMURA Ayako、SATO Ikuyo、INOUE Chieko、TOYODA Satoshi

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
A strategy for understanding of Public Health Nursing -Consideration of Educational Effectiveness by ” Practice lessons of community exploration” - （査読付） 和訳 公衆衛生看護学初学者の教育的効果 -地域診断演習を試みて-	共著	平成28年2月	The 14th Annual Hawaii International Conference on Education, Hawaii International Conference on Education Conference Proceeding http://www.hiceducation.org/EDU2016.pdf Page：1709-1716	看護大学２年時の公衆衛生看護学初学者の学生に,公衆衛生看護学概論の講義において,地域を踏査する演習を実施した.公衆衛生看護学概論では,座学で必要な知識を学んだあと,地域を踏査する演習を通して,実践のなかから地域を含めた視点を養う取り組みを行った.演習は,A市をコミュニティアズパートナーモデルを用い全体像を把握した上で,公民館を拠点に市を５つのブロックに分けた.演習時はコミュニティアズパートナーモデルの視点に沿って,それぞれの公民館の周囲を踏査し,公民館事業に参加している住民を対象に「この街に生活して思うこと,感じること」についてインタビューを行った.結果として,個人の全体像を捉えるゴードンの11のカテゴリー以外に,自然環境,教育,制度,地形,治安,地域文化,地域においてのコミュニケーション力等の,地域を捉えたカテゴリーが抽出された.学生が対象者とその対象者の背景にある地域を含んで理解するには,概論の段階から地域を踏査する演習を組み込むことに効果あることがわかった. 担当部分：研究計画、対象者の確保、分析、論文の作成に至るまで、全てにおいて行った。 共著者：SHINTANI Nanae、TATSUKAWA Shigeki、SUZAKI Yoshika、KAJIMURA Ayako、INOUE Chieko、KINJO Natsuki
Study of the Child Care Support in Japan (2nd Report)（査読付） ＜和訳＞ 育児ケアについての現状調査　第２調査研究	共著	平成28年2月	The 14th Annual Hawaii International Conference on Education, Hawaii International Conference on Education Conference Proceeding http://www.hiceducation.org/EDU2016.pdf Page：1655-165	本研究は,育児ケアサポートセンターを利用している程度と育児ケアについて現状を把握することを目的とし,M市において育児ケアサポートセンターを利用しながら育児を行っている父親５人と母親１２４人にアンケート調査を実施した.結果として,育児ケアサポートセンターを利用する理由に「親同士の友人作り(26%)」「子育ての心理的転(24%)」が多く,子育てに対して「子育て方法を見て欲しい(91.4%)」が最も多かった.なお,見て欲しい子育て方法には,「子供の発達(28%)」「子供の学習(20.9%)」「子供の身体的発達のため(18.6%)」などが含まれていた.以上の育児ケアについての現状から,母親が不安なく地域で子育てをするために,活力かる地域性を生み出すと共に,子育てについての診断的尺度が必要であるとわかった. 担当部分：論文の投稿指導にかかわった 共著者：SUZAKI Yoshika、SHINTANI Nanae、TATSUKAWA Shigeki
Evaluation of the educational effectiveness in a new clinical nursing knowledge acquisition system（査読付） ＜和訳＞ 新たな臨床看護知識獲得システムにおける教育効果の評価	共著	平成28年2月	The 14th Annual Hawaii International Conference on Education, Hawaii International Conference on Education Conference Proceeding http://www.hiceducation.org/EDU2016.pdf Page：1413-1418	本研究は,新たに構築した看護ニーズを評価するための支援システムの有効性を,看護師の日々の看護業務と教育の必要から調査した.結果は,我々のシステムを使用した場合,あのモデルケースでは,評価成績が大幅に改善することを示しました.したがって,新たに構築した看護ニーズと評価フィールドの表示機能は,看護ニーズに関する知識の獲得を容易にするための効果的な教育ツールであると考えられる. 担当部分：論文の投稿指導にかかわった 共著者：KAJIMURA Ayako、TATSUKAWA Shigeki、SHINTANI Nanae、INOUE Chieko
Education for health-care-workers to popularize Animal Assisted Therapy (AAT) in Japan（査読付） ＜和訳＞ 日本で動物介在療法が普及するために必要な医療従事者の教育検討	共著	平成28年2月	The 14th Annual Hawaii International Conference on Education, Hawaii International Conference on Education Conference Proceeding http://www.hiceducation.org/EDU2016.pdf Page：1255-1260	本研究の目的は,日本で動物介在療法を普及するために問題となっていることを明確化することである.動物介在療法は2010年子ども病院において,初めて看護師がハンドラーとなりファシリティードッグを導入しその効果が世に広まった.しかし現段階で医療従事者がハンドラーとなりファシリティードッグを導入している病院は,子ども病院２件,回復期病院で1件の計3件と中々普及に至っていない.その原因を考察した結果,文化や動物観の違いにより,①動物介在療法の制度が確立されていない②医療従事者の知識不足によりイヌが病院に導入されることに抵抗があるがあげられた.それらの原因を排除するために は,医療従事者の教育とトレーナーの育成が大切であり,さらには導入されている効果を科学的に実証することが必要であると考えられる. 担当部分：論文の投稿指導にかかわった 共著者：INOUE Chieko、KAJIMURA Ayako、TATSUKAWA Shigeki、SHINTANI Nanae

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
Investigation of evaluation methods of bed-bath technics in Nursing freshmen education （査読付） ＜和訳＞ 初年次教育における看護技術（清拭技術）評価方法の検討	共著	平成28年5月	Journal of Modern Education Review (ISSN 2155-7993) Volume 6, Number 5, May 2016 Page348-353 Academic Star Publishing COMPANY LIMITED	本研究では清潔・衣生活技術の講義の中の清拭技術評価を通じ,1つ1つの項目がどのように影響しあっているのかを明らかにし,今後の教授活動の示唆を得ることを目的とした. 対象者は便宜的に抽出した学生57名とし,清拭評価表（20項目）を用い,2人1組の学生（看護師役・患者役）の技術演習を教員1名が観察法を行った結果を①清拭評価表（20項目）の相関をピアソンの積率相関係数を統計解析ソフトSPSS Statistics.19.0を用いて分析した.その結果,「身だしなみ」は「実施の確認」「説明と同意」「作業域の確保」「タオルの用い方」「好みの拭き圧」「コミュニケーション」と,「実施の確認」は「説明と同意」「眼の拭き方」「コミュニケーション」と,「説明と同意」は「眼の拭き方」「上肢の拭き方」と,いずれも1%水準で有意な正の相関がみられた.そこで,1）「身だしなみ」を整える意欲・態度が「技術」に関与することが示唆された.2)対象者にわかりやすく説明し,同意を得る方法を身に付けることは,延いては対象者の希望に合わせた技術を提供できることにつながる.様々な技術演習でも教授としていく必要があることが示唆された. 担当部分：論文の投稿指導にかかわった 共著者：SATO Ikuyo、SHINTANI Nanae、TATSUKAWA Shigeki
Issues related Emergency Hospital Visit for Foreign-Residents - Consideration about Medical Care Support Systems of Foreign-Residents in Public Health - （査読付） ＜和訳＞ 在日外国人の緊急外来受診に伴う問題　-公衆衛生的視点による医療ケア支援体制づくり-	共著	平成28年5月	Journal of Modern Education Review (ISSN 2155-7993) Academic Star Publishing COMPANY LIMITED	急遽受診が必要となった在日外国人労働者のサポートシステムの検討を外国人対応を常に行っている旅行業界関連勤務者（18名）と共にKJ法を用い行った.結果,3つのMajor-itemsと17のSecondary-itemsに分類された.企業･行政･医療（保健を含む）それぞれのサポート不足の側面に分かれ,検討が必要なサポート体制を整理することができた.また,産業保健師が医療機関と連携を取り,在日外国人労働者のサポート体制を充実させる必要性が示唆された.また,行政保健師と入国管理所の連携も必要であると示唆された. 担当部分：論文の投稿指導にかかわった 共著者：TATSUKAWA Shigeki、SHINTANI Nanae
Influence on coping behavior by Job stressor cognition（査読付） ＜和訳＞ 職業性ストレス認知と対処行動の関係	共著	平成29年1月	医療福祉情報行動科学誌	仕事に伴うストレスは，ストレスの原因である仕事ストレッサーを認知し，それへの対処の結果，ストレス反応が生起するという大きな枠組みで規定される。これに認知や対処に影響する個人特性や周囲からの関わりが緩衝要因となってストレス反応に影響する本研究の対象者においてもストレス反応に影響する仕事ストレッサーを明らかにする必要があることから，初めにストレス反応を規定する仕事ストレッサー因子を検討した。またストレス反応はストレッサーに加え，採用する対処行動の影響を受けて変化しているといわれている。そのためストレス反応の軽減には，ストレッサーの規定因子と対処行動の交互作用的影響の検討を行う必要がある。本研究では，仕事ストレッサーが対処行動に及ぼす影響を検討することを目的とした。本研究の結果，計画的対処には，要求度、裁量度、技能活用が促進的に関係しており，自己管理能力が高く，目標達成まで自分なりに計画を立て行動する傾向にある者が計画的対処を採用する傾向にあることがわかった。また，積極的協力依頼には，サポートと技能活用が促進的に関係しており，周囲とコミュニケーションが良好でサポーティブな状況が背景にあり，また課題を整理し他者に伝えられる知識や技術のある者が，積極的協力依頼を採用する傾向にあることがわかった。 このことから、計画的対処，積極的協力依頼といったポジティブな対処を実行するためには，本人の知識や技術を活用できる仕事に就かせること，また普段からのサポーティブな組織作りが大事であると考えられる。 担当部分：研究計画の段階から論文作成のすべての過程において自身で行った。永岡は協力者としてすべてにかかわった。 共著者：新谷奈苗、永岡裕康、守本とも子

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
コンカレントエンジニアリングにおける設計変更波及範囲の見える化（査読付）	共著	平成29年1月	医療福祉情報行動科学誌	もの作りにおける設計・生産準備プロセスでは、短期間で効率的な開発を行うため、コンカレントエンジニアリングが進んでいる。しかしその弊害として、わずかな設計変更が他の領域に及ぼす影響を伝えきれず品質の悪化を及ぼす可能性が高まっている。そういった課題を解決するために、設計変更の影響が及ぶ範囲を容易に見つけられる仕組みを検討した。 担当部分：自身の産業現場における研究と合致する部分があり、研究計画、論文構成、考察部分にかかわった 共著者：永岡裕康、新谷奈苗
地域で生活する高齢者の災害時非難状況に関する文献検討（査読付）	共著	平成29年1月	医療福祉情報行動科学誌	世界各地で自然災害が増加している。このような状況にありながら近年,わが国の高齢化は加速しており,高齢者人口の割合は世界で最も高い。東日本大震災では死者のうち60歳以上の比率はおよそ6割であった。そこで,2006年から2016年までの文献を検討することで,高齢者の防災の実態を分析し,今後の課題を明らかにすることを目的とした。その結果,現在,国などの関係機関が防災対策に多く取り組んでおり,高齢者の防災意識も高い一方で,実際の防災行動が十分に取れていないといった不合理な結果が得られた。災害が続発する中,早急に対応を検討する必要がある。 担当部分：研究計画、論文構成と作成、考察のすべてに指導でかかわった。 共著者：丸上輝剛、新谷奈苗、守本とも子
（その他）				
（学会発表）				
Equipment maintenance system hat makes virtual switch interface based on agent 和訳 エージェントに基づいたバーチャルスイッチインタフェースにより実現する機器保守システム	ー	平成19年 8月	第19回 ICPR（International Conference on Production Research）	産業現場における設備保全の安全性を向上させるため、バーチャルスイッチとエージェントを用いた仕組みを作った。この方法により労働者の負担を軽減することができ，このことは労働者の安全と健康につながるものである。 担当部分：担当部分：研究計画の段階から発表まで関わった。共著者にはディスカッションへの参加、研究の指導（吉江修先生）をしてもらった。 共著者：織田泰司、大谷力、新谷奈苗、永岡裕康、吉江修
Virtual Switch that used VR glass and RFID tag 和訳 VR眼鏡とRFIDタグを用いたバーチャルスイッチ	ー	平成19年 8月	第19回 ICPR（International Conference on Production Research）	産業の領域では，工場現場で働く社員の安全を確保するために，設備の対象ごとに，表示装置と入力装置が必要となる。 そこで操作者の携帯用コンピュータに接続したVRグラスを表示装置とし，その画像中に表示されるバーチャルなスイッチを入力装置とする方法を使い労働災害防止のための安全確保について検討した。 担当部分：研究計画の段階から発表まで関わった。共著者にはディスカッションへの参加、研究の指導（吉江修先生）をしてもらった。 共著者：新谷奈苗、永岡裕康、大谷力、織田泰司、吉江修
高齢者の体表面温度と体力機能との関連	ー	平成19年 8月	日本サーモロジー学会第24回大会	高齢者の運動前後にサーモグラフィでの測定と体力測定をおこない、運動の効果を検証した。 担当部分：共同研究につき本人担当部分抽出不可能 共著者：中村百合子、新谷奈苗、高尾文子
高齢者の体温と体力機能および日常生活との関連	ー	平成19年10月	第66回日本公衆衛生学会総会	概要：高齢者のボールを使った筋トレ教室開始前後の体温変化を明らかにし、また、高齢者の体温と関連する体力機能および生活要因について明らかにした。 担当部分：研究計画の段階から発表まで関わった。共著者にはディスカッションへの参加、研究の指導（高尾文子先生）をしてもらった。 共著者：新谷奈苗、中村百合子、高尾文子

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
在宅酸素療法患者の生活実態とQOL関連要因の検討	－	平成19年12月	第3回日本医学福祉情報行動科学会	在宅酸素療法患者の生活実態を明らかにし、生活実態とQOLの関連を明らかにした。 担当部分：研究計画の段階から発表まで関わった。共著者には研究の指導（守本とも子先生）をしてもらった。 共著者：新谷奈苗、守本とも子
能動的音楽療法の効果	－	平成19年12月	第3回日本医学福祉情報行動科学会	能動的音楽療法の効果に焦点をあて、文献学的に考察した。 担当部分：共著者は学生のため、研究の全般から発表時の資料作成、発表まですべてにおいて関わった。 共著者：吉田睦美、新谷奈苗
認知症高齢ドライバーの実態	－	平成19年12月	第3回日本医学福祉情報行動科学会	認知症高齢ドライバーが増加している状況において、認知症高齢ドライバーのさまざまな実態と問題点、その課題について文献学的に明らかにした。 担当部分：共著者は学生のため、研究の全般から発表時の資料作成、発表まですべてにおいて関わった。 共著者：松本美由紀、新谷奈苗
森環境の疑似体験におけるリラックス度の検討	－	平成20年 6月	日本サーモロジー学会第25回大会	概要：映像と音により森環境を疑似的に体験させ、それによるリラックス度について検討した. 担当部分：研究計画からデータ分析、結果まですべてにおいて関わっている。 共著者：高尾文子、新谷奈苗、中村百合子
擬似的森林環境が心身に与えるリラックス度の検討	－	平成20年10月	第67回日本公衆衛生学会総会	概要：映像と音による擬似的森林環境が、心身に与えるリラックス度について検討した. 担当部分：研究計画からデータ分析、結果まですべてにおいて関わっている。 共著者：高尾文子、新谷奈苗、中村百合子
在宅酸素療法患者と介護者のQOL－国民標準値との比較―	－	平成21年 6月	第4回日本医療福祉情報行動科学会	概要：本研究ではSF-36を用いて、患者と介護者のQOLを把握し国民標準値と比較検討した. 担当部分：研究計画の段階から発表まで関わった。共著者には研究の指導（守本とも子先生）をしてもらった。 共著者：新谷奈苗、守本とも子
計算負荷ストレスに対して、森の香りのストレス度および末梢温度に及ぼす作用	－	平成21年 6月	日本サーモロジー学会第26回大会	概要：森の香りを室内に漂わせ、そのなかで計算負荷というストレスを与え、森林の香りが末梢神経にもたらす影響について検討した. 担当部分：研究計画からデータ分析、結果まですべてにおいて関わっている。 共著者：高尾文子、新谷奈苗、中村百合子
QOL of Home Oxygen Therapy Patients and Caregivers: Comparison with Standard Value 和訳 在宅酸素療法患者と介護者のQOL状況の国民標準値との比較	－	平成21年 8月	第13回日・韓健康教育シンポジウム兼第57回日本教育医学会大会	在宅酸素療法患者と介護者のQOLの状況をSF-36により調査し、それぞれの年代ごとに国民標準値と比較検討した. 担当部分：研究計画の段階から発表まで関わった。共著者にはディスカッションへの参加をしてもらった。 共著者：新谷奈苗、守本とも子
高齢者のレッグプレス負荷時の自律神経機能と前額、鼻頭温度	－	平成22年 6月	日本サーモロジー学会第27回大会	概要：高齢者のレッグプレス負荷時の自律神経機能と前額、鼻頭温度について検討した. 担当部分：主にデータの収集、分析に関わった 共著者：高尾文子、坊岡正之、 奥本泰久、中村一美、新谷奈苗、中村百合子

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
Do working conditions and lifestyle habits affect occupational stress? 和訳 職場環境と生活習慣が職業性ストレスに及ぼす影響	―	平成22年 8月	第3回国際産業看護・第2回アジア産業看護ジョイント学術集会 (ICOHN&ACOHN Joint Conference 2010)	職場環境と生活習慣が職業性ストレスに及ぼす影響を、相互作用を含めて検討した. 担当部分：研究計画の段階から発表まで関わった。共著者には分析の指導、研究の指導（岩永誠先生）をしてもらった。 共著者：新谷奈苗、佐藤文彦、岩永誠
EFFECTS OF A STUFFED ANIMAL DESIGNED FOR NURSING CARE 和訳 介護用縫いぐるみの効果	―	平成22年 8月	6th International Conference of Health Behavioral Science	施設入所高齢者の癒しとQOL向上の効果を検討するため、「温かい介護用縫いぐるみ」を使用してもらった前後の行動変化を分析した. 担当部分：主にデータの収集と分析、考察、翻訳について関わった。 共著者：守本とも子、新谷奈苗
A questionnaire to determine Nursing and Child care students` Understanding of welfare equipment 和訳 看護・保育学生の意識調査「福祉用具の理解」	―	平成22年11月	The 9th Pan-Pacific Conference on Ergonomics 2010 (PPCOE2010)	看護学生と保育学生を対象に、福祉用具に対する認識の違いを検討した. 担当部分：主にデータの収集と分析、翻訳について関わった。 共著者：守本とも子、上本野唱子、新谷奈苗
Discussion of emergency notification device for elderly people 和訳 高齢者向け緊急通報機器に関する考察	―	平成22年11月	The 9th Pan-Pacific Conference on Ergonomics 2010 (PPCOE2010)	高齢者向け緊急通報機器の使用状況を明らかにすることで，高齢者にとって活用しやすい、あるいは有用な機器の開発や運用方法の改善につなげる. 担当部分：研究計画の段階から発表まで関わった。共著者にはディスカッションへの参加、アドバイスをしてもらった。 共著者：新谷奈苗、永岡裕康、堀口和子、守本とも子
高齢者の体力・生活・社会的つながりと体表面温度との関係	―	平成23年 6月	日本サーモロジー学会第28回大会	概要：高齢者の体表面温度と体力、日常の生活や社会的つながりとの関係について検討した. 担当部分：主にデータの収集と分析に関わった 共著者：高尾文子、新谷奈苗、中村百合子
Correlation between autonomic nervous function and forehead/nasal temperatures in seniors during leg press 和訳 高齢者のレッグプレス負荷時の自律神経機能と前額/鼻頭温度との相関	―	平成23年 7月	17th International Conference on Thermal Engineering and Thermogrammetry (THERMO)	高齢者のレッグプレス負荷時の自律神経機能と前額/鼻頭温度との相関関係について検討した. 担当部分：主にデータの収集と分析、考察に関わった 共著者：高尾文子、坊岡正之、 奥本泰久、中村一美、新谷奈苗、中村百合子
Study about Quality of Life(QOL) of Home Oxygen Therapy Patients and Related Factors of Actual Life Situation 和訳 在宅酸素療法患者の生活の質（QOL）に影響を及ぼす生活実態に関連する要因の検討	―	平成23年10月	East Asia Ergonomics Federation Symposium 2011 (EAEFS2011)	在宅酸素療法患者のQOLに影響を及ぼす、生活実態に関連する要因を検討した. 担当部分：研究計画の段階から発表まで関わった。共著者にはディスカッションへの参加をしてもらった。 共著者：新谷奈苗、守本とも子
Difficulty in continuing job for breast cancer patients getting chemotherapy 和訳 化学療法中の乳がん患者が仕事を継続するうえでの困難	―	平成24年 3月	30th International Congress on Occupational Health (ICOH2012)	通院により化学療法を受けている乳がん患者の、仕事を継続していく上での困難を明らかにする. 担当部分：研究計画の段階から発表まで関わった。共著者にはディスカッションへの参加をしてもらった。 共著者：新谷奈苗、守本とも子

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
在宅酸素療法患者のQOLに影響を与える介護者の支援方策の検討	ー	平成24年 3月	第7回日本医療福祉情報行動科学会	概要：在宅酸素療法患者のQOLに影響を及ぼす、介護者の生活実態に関連する要因を検討した. 担当部分：研究計画の段階から発表まで関わった。共著者にはディスカッションへの参加をしてもらった。 共著者：新谷奈苗、守本とも子
職業性ストレスと生活習慣・首尾一貫感覚との関係	ー	平成24年 6月	第27回日本保健医療行動科学会学術大会	職業性ストレスからくる精神疾患を予防するという視点に立ち、生活習慣とストレス対処能力、パーソナリティ、職業性ストレッサー、ストレス反応との関係を明らかにした．その結果、間食の頻度、睡眠状態、平均睡眠時間は多くの因子に関係していた．またストレス対処能力は生活習慣のなかでも、運動が好きでないことと負の相関があった．本調査の結果から、生活習慣は職業性ストレスの多くの因子に関連していた. 担当部分：研究計画の段階から発表まで 関わった。共著者には研究の指導（岩永誠先生）をしてもらった。 共著者：新谷奈苗、岩永誠
労働者の精神的健康度とパーソナリティの関連	ー	平成25年11月	日本産業看護学会　第2回学術集会(梅花女子大学)	近年中高年のうつ病が増加し，自殺者数も高い水準を維持しており，その背景にある職業性ストレスの問題が注目されている。ストレッサーの除去や緩和には限界があることから，より能動的に健康を維持・獲得していくというヘルスプロモーションの視点が重要となる。本調査では，1年後の合併により現工場がなくなり転勤を余儀なくされるというストレス負荷の高い労働者を対象とし，精神的健康度とパーソナリティの関係について，時間経過による変化を含め明らかにすることを目的とした。3期ともにともに自尊感情が低いほどCES-Dが高くなることがわかった。1期，2期ではTypeAもCES-Dに関係していたが，2期，3期とストレスイベントが近づくにつれ，対処行動や対処柔軟性がCES-Dとの関係を強めていくという結果であった。 担当部分：研究計画の段階からすべてにおいて行った。 共著者：新谷奈苗　岩永誠　立川茂樹　伊東愛
慢性呼吸器疾患に関する保険･福祉制度の国際比較 ―海外赴任者の労働と生活の支援をめざしてー	ー	平成25年11月	日本産業看護学会　第2回学術集会(梅花女子大学)	海外赴任者の労働と生活の支援のために、慢性呼吸器疾患により在宅酸素療法を受けながら日本と韓国とで生活をしている人々に対する医療･福祉の実態を調査･比較した。慢性呼吸器疾患を持つ労働者の海外赴任は、赴任前の処方箋や診断書（英文）の入手に加え、酸素供給機器提供会社とも調整を行う必要があること。韓国への渡航では、携帯用酸素ボンベ確保方法の事前準備が必要であり、渡航前の産業看護師による関与が重要だと示唆された。 担当部分:発表資料の作成、指導にかかわった。 共著者：立川茂樹、新谷奈苗、伊東愛
乳がん患者のワーク・トリートメントバランス支援方略の検討	ー	平成26年 2月	第28回　日本がん看護学会学術集会(新潟県朱鷺メッセ)	本論では，仕事と治療を継続していく上での困難を明らかにし，その支援方略を検討することを目的とした．コードから，【治療方針決定の際の迷い】【家族の協力がないこと，負担をかけること】【職場の仲間の理解がないこと】【知人に病気を知られることの煩わしさ】【治療費等にかかる費用負担】【かつら等副作用対策の煩わしさ】【病院までの距離】【長期に渡る再発への不安感】の8カテゴリが得られた．医療者から説明を受けていても，患者にとって治療方針決定の判断に対する負担は大きく，医療者からの方向づけは必要である．また乳がんの経過は長く，一応の治療が終了した後も，常に心に再発への不安を抱えており，将来のキャリア像を考えていくときの壁になっていることがわかった. 担当部分：研究計画から発表まで全てにおいて行った。 小池には対象者の選定を、永岡には指導をもらった。 共著者：新谷奈苗　小池恵理子　永岡裕康

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
Comparison of Public Health Care System between Korea and Japan; Interviews with COPD Out-Patients under Long-Term Oxygen Therapy 和訳 公衆衛生における保健ケアシステムの国際比較（韓国・日本）-慢性閉塞性肺疾患による在宅酸素療法実施中の在宅患者からのインタビューを通して-	―	平成26年 5月	35th International Association for Human Caring Conference(Kyoto International Conference Center (Kyoto, Japan))	韓国・日本における保健医療システムの違いが各国の疾患を持ちながら地域で暮らす人々のQOLにどのように影響しているか、地域の人々へインタニューを行うことによる国際比較研究を実施した。その結果、日本人は散歩や日帰り旅行などを行っているものの、韓国人は殆ど行っておらず、外出への不安を持っていることが明らかとなった。 担当部分：発表資料作成の指導にかかわった 共著者：Shigeki TATSUKAWA、Nanae SHINTANI
Consideration about the Relation between Nursing Record Leakage and writing time in Nursing Support System 和訳 看護記録の記載漏れと看護サポートシステム記載時間の関係	―	平成26年 5月	35th International Association for Human Caring Conference(Kyoto International Conference Center (Kyoto, Japan))	看護記録の記載漏れと看護サポートシステム記載時間の関係を検討した。調査の結果、Nursing Care Needs evaluation timeと記入漏れには関連が見られなかったことから、看護記録の記入漏れはヒューマンエラーであることが示唆された。 担当部分：共同研究のため担当部分の抽出不可能 共著者：Ayako KAJIMURA、Shigeki TATSUKAWA、Akane HASHIYA、Nanae SHINTANI
Consideration of how to support Breast Cancer Patients on Work-Treatment Balance - Achieving a good Work-Treatment Balance in many types of job members around patients- 和訳 乳がん患者の労働と治療の両立に向けた支援方法の検討	―	平成26年 5月	35th International Association for Human Caring Conference (Kyoto International Conference Center (Kyoto, Japan))	就労しながら乳がんの治療を行っている労働者のワークトリートメントバランス構築のため、人事課勤務者、産業保健師、乳がん認定看護師、地域連携室勤務者、人材派遣会社勤務者による検討を行った。ひとりの患者は家族、職場の同僚、医療職者によりサポートされている。そこで、生活者の側面、労働者の側面、治療を受ける患者の側面によりそれぞれの困難を分類することで、産業的サポートと医療的サポートの必要性を導きだした。 担当部分：すべてにおいて行った。永岡には全般的に指導をもらった。 共著者：Nanae SHINTANI、Shigeki TATSUKAWA、Hiroyasu NAGAOKA、Eriko KOIKE
Influences of Occupation Types and Organizational Climate on Occupational Stress 和訳 職業タイプの組織風土や職業性ストレス,仕事満足度,抑うつ度への影響	―	平成26年 5月	35th International Association for Human Caring Conference(Kyoto International Conference Center (Kyoto, Japan))	職業タイプが組織風土と職業性ストレス、仕事満足度、うつ度（CES-D）にどのように影響しているのかを調査した。その結果、White-Collar workersには適材適所の配置が、Grey-Collar workersには仕事のサポートが、Blue-Collar workersには明確な仕事の提示と不満を聞いてあげる体制作りが必要であることが示唆された。 担当部分：すべてにおいて行った。永岡には全般的に指導をもらった。 共著者：Nanae SHINTANI、Shigeki TATSUKAWA、Ayako KAJIMURA、Hiroyasu NAGAOKA
Comparison of Public Health Care System between Taiwan and Japan; Focusing on Long-Term Oxygen Therapy 和訳 公衆衛生保健ケアシステムの国際比較（台湾と日本）-在宅酸素療法に焦点を当てて-	―	平成26年 6月	The 4th. International Conference on Healthcare Systems Ergonomics and Patient Safety (The Grand Hotel in TAIPEI)	人々に対する医療･福祉の実態を調査･比較した。日本では呼吸療法士の資格制度の検討が示唆された。また、台湾では酸素濃縮機や系大陽酸素ボンベの提供を福祉ではなく継続医療の視点で行う必要があることが明らかとなった。 担当部分：共同研究のため担当部分は抽出不可能 共著者：SHIGEKI TATSUKAWA、NANAE SHINTANI、AYAKO KAJIMURA
Consideration of occupational stressors that influence Senses of Satisfaction at work in Japan 和訳 仕事満足度に影響する職業性ストレスの検討	―	平成26年 6月	The 4th. International Conference on Healthcare Systems Ergonomics and Patient Safety(The Grand Hotel in TAIPEI)	仕事満足度を向上させる環境づくりを提案することを目的に職業性ストレスと仕事満足度の関連について重回帰分析を行った。職業性ストレスの"Friendly Environment", "Well-developed Relationship", "Job Discretion", "Workload"が仕事満足度に影響していた。健康的職場環境を構築するためには、特に"Friendly Environment", "Well-developed Relationship"について産業保健師の関与が重要であることが明らかとなった。 担当部分：研究計画、対象者の選定、尺度の選定、分析、考察のすべてにおいて行った。 共著者：AYAKO KAJIMURA、NANAE SHINTANI、SHIGEKI TATSUKAWA

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
How Do You Support Breast Cancer Patients on Work-Treatment Balance? 和訳 乳がん患者のワークトリートメントバランスへの支援	―	平成26年 6月	The 4th. International Conference on Healthcare Systems Ergonomics and Patient Safety(The Grand Hotel in TAIPEI)	乳がんによる化学療法治療中の患者が抱える困難を明らかにすることによりQOLを向上することを目的とし、乳がんによる化学療法治療中の患者へインタビューを実施しテキストマイニングによる分析を行った。インタビュー分析の結果、14項目の困難に分類された。そして、自信を与えるようなサポート体制を様々な機関が連携しながら構築することが大切であると明らかになった。 担当部分：研究計画、対象者の選定、尺度の選定、分析、考察のすべてにおいて行った。小池には対象者の準備調整を、永岡には研究全般への指導をもらった。 共著者：Nanae Shintani、Hiroyasu Nagaoka、Eriko Koike、Shigeki Tatsukawa、Ayako Kajimura
高温環境下での馴化測定条件におけるサーモグラフィによる発熱判定の検討	―	平成26年 6月	日本サーモロジー学会第31回大会	ＳＡＲＳ、新型インフルエンザの感染制御の水際対策のため、検疫所では発熱の確認手段としてサーモグラフィが用いられた。しかし、現在検疫所で用いられている方法は、科学的に立証されたガイドラインが定められているとは言い難い。 我々はサーモグラフィを手法とした感染制御のための発熱判定基準の構築を目指しており、これまでに健常者と発熱患者の顔面サーモグラフィを比較検討し報告した。今回は高温環境下で馴化した健常者のサーモグラフィ測定を行い、高温環境によって体表温が上昇する可能性がある場合でも、発熱により上昇する体表温の検出が可能かについて検討した。 担当部分：研究対象者の選定と調査協力、データ分析にかかわった。 共著者：芝田宏美、堀江修、新谷奈苗、中村百合子、津田智子、大浜恵美子、藤尾明子、永岡裕康、夏秋優、小柴賢洋
日本からカナダに持ち込まれた麻疹感染のリスク	―	平成26年 7月	第２９回びわ湖国際フォーラム(ピアザ淡海滋賀県大津市)	麻疹に罹患した15歳日本人女学生が修学旅行にてカナダに渡航し、その他の修学旅行生からも感染者が発生した。その際のカナダの対応とて、生徒のかかりつけ医にインタビューを実施した結果について学校保健および国際保健の視点でまとめた。 担当部分：共同研究のため担当部分は抽出不可能 共著者：立川茂樹　新谷奈苗
How Do You Support Breast Cancer Patients on Work- Treatment Balance-2 和訳 乳がん患者のワークトリートメントバランスへの支援第２報	―	平成26年9月	The 21st Asian Conference on Occupational Health(Hilton Fukuoka Sea Hawk)	乳がん化学療法治療中の患者が抱える困難を明らかにし就労支援を行うことを目的に、乳がん化学療法治療中の患者へインタビューを実施し、テキストマイニングによる分析を行った。インタビュー分析の結果、14項目の困難に分類された。そして、自信を与えるようなサポート体制を様々な機関が連携しながら構築することが大切であると明らかになった。 担当部分：研究計画から発表までのすべてに渡り行った。 共著者：Shintani Nanae , Tatsukawa Shigeki, Nagaoka Hiroyasu , Kajimura Ayako
Issues related Emergency Hospital Visit for Foreign Workers - For Consideration about Medical Care Support Systems of Foreign Workers - 和訳 在日外国人労働者の緊急医療受診に関する問題　−緊急医療サポート体制の検討−	―	平成26年9月	The 21st Asian Conference on Occupational Health (Hilton Fukuoka Sea Hawk)	急遽受診が必要となった在日外国人労働者のサポートシステムの検討を外国人対応を常に行っている旅行業界関連勤務者と共にKJ法を用い行った。結果、企業･行政･医療（保健を含む）について検討が必要なサポート体制を整理することができた。 担当部分：共同研究のため担当部分は抽出不可能 共著者：Shigeki Tatsukawa, Nanae Shintani, Ikuko Kajimura

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
性格特性と職業性ストレスがストレス反応に及ぼす影響	―	平成26年9月	日本産業看護学会 第3回学術集会	労働者を対象に,仕事の要求度，性格特性としての自己愛とストレス反応を取り上げ，性格特性と職場環境がストレス反応に及ぼす影響を職種別（ホワイトカラー・グレーカラー・ブルーカラー）で検討し，労働現場における対応策を考察した。（1）過敏型自己愛はすべての職種についてストレス反応に影響を及ぼしていた（2）ホワイトカラーは，内的制御が低い場合，要求度が高いほどストレス反応が高くなるが，内的制御が高い場合は要求度による変化がなかった（3）ブルーカラーは，外的制御が高い場合，要求度が高いほどストレス反応が高くなるが，外的制御が低い場合は要求度による変化がなかった(4) グレーカラーは制御欲求によるストレス反応への影響は見られなかった．ホワイトカラーは自律的な業務が多いため内的制御の高さが求められ，ブルーカラーは外的制御を抑えることが必要であることがわかった。管理監督者は，性格を把握し対応することが望ましく，本結果を適正配置に活用もできることが明らかになった。 担当部分：研究計画から発表まですべてを行った。 共著者：新谷奈苗、立川茂樹、伊東愛、永岡裕康
労働者のストレス対処行動と生活習慣の関連	―	平成26年9月	日本産業看護学会 第3回学術集会	労働者を対象に,ストレス対処行動と生活習慣の関連を明らかにすることを目的に、重回帰分析を行った。平均睡眠時間が少ないこと」,「週あたり運動量が少ないこと」と「自己批判的対処因子」に,「運動が好きなこと」,「規則正しい食事を行わないこと」と「サポートと願望因子」に,「規則正しい食事を行わないこと」と「計画的行動因子」に関連がみられた.運動習慣のある者は,自己肯定的対処を行い,問題解決や心の支えとしてソーシャルサポートを持っていることが分かった.また,食生活のストレス対処行動に対する影響は,今後更なる検討が必要である. 担当部分：研究計画から発表資料の作成まですべて行った。発表資料の原案作りと発表について立川が、研究全般の指導については永岡が加わった。 共著者：立川茂樹　新谷奈苗　伊東愛　永岡裕康
地方自治体における多時間外勤務の実態	―	平成26年9月	産業保健人間工学　第19回大会	地方自治体における時間外労働の実際の状況をまとめ、実労働時間とその内容について考察した。 担当部分：共同研究のため担当部分は抽出不可能 共著者：洲崎好香、新谷奈苗
成人期単身赴任者への支援のあり方　―単身赴任者が日々の生活を楽しむ要因―	―	平成27年1月	第3回　日本公衆衛生看護学科学術集会	本研究は,単身赴任者のストレス対処方略である「日々の生活を楽しむ要因」を明らかにし,単身赴任者への支援のあり方を提案することを目的に,単身赴任者55人を対象に,半構成的面接を実施し,「日々の生活を楽しむための思いや行動」を抽出し，内容分析を用い,ラベルを作成･グループ化を行った.結果,18項目抽出され,『毎日の暮らし』,『家庭生活』,『職場生活』,『前向きな心の持ちよう』に集約された.『毎日の暮らし』では,地域の商業施設や娯楽施設へ外出することで人と交流を持っていた．『家庭生活』では,離れて暮らす家族との時間を積極的につくっていた.『職場生活』では,快適な仕事環境構築のためにコミュニケーションを大切にし，職場外でも同僚や上司,後輩と交流する機会をつくっていた.そして,『前向きな心の持ちよう』が,その他の3グループの全てに関係していることがわかった.彼らの家族との時間を大切にしつつ,地域や職場の人々と積極的に交流するといった行動は,単身赴任者のストレス対処方略を検討する上で重要であり,地域等も含めた多方面からの支援の必要性が示唆された. 担当部分：研究計画から発表まですべて行った。立川、伊東、小坂には分析に同席してもらった。永岡は研究全般において指導を行った。 共著者：立川茂樹　伊東愛　新谷奈苗　小坂素子　洲崎好香
漁村地区における公衆衛生看護活動	―	平成27年1月	第3回　日本公衆衛生看護学科学術集会	漁村地区の特徴的な問題を明らかにし、それに対た。して必要な特徴的保健師活動の実際をまとめた。 担当部分：データ収集、考察を共に行った。 共著者：洲崎好香、新谷奈苗

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
在日外国人留学生の健康認識と健康行動および国民健康保険の認識 ―地域を含めた保健支援体制の検討―	―	平成27年6月	第30回日本保健医療行動科学会学術大会(京都看護大学,京都)	在日外国人留学生の健康認識や健康行動,国民健康保険の認識について調査し,在日外国人留学生の公衆衛生および学校保健的支援を考える際の基礎資料とすることを目的とし,4年制大学に籍をおく在日外国人留学生を対象に,自記式質問紙による調査を行った.その結果,大半の外国人留学生はアジア青年期であり,生活習慣の良し悪しにかかわらず,自分自身が健康だと認識している者が圧倒的に多いことが明らかとなった.そこで,模範的な生活習慣や健康についての情報提供や情報収集方法の的確なアドバイスを行う大学内窓口の充実化が必要だと考えられた.また,日本人学生と積極的に交流している在日外国人留学生は国民健康保険の認識ができていた.そこで,学校保健師と行政保健師が情報を共有しながら,在日外国人留学生の支援を行う必要があると示唆された. 担当部分：共同研究のため担当部分は抽出不可能 共著者：立川茂樹　新谷奈苗　金城夏樹　大濱恵美子
市町村保健センターの「健康サークル事業」に参加する高齢者の主観的幸福感	―	平成27年6月	第30回日本保健医療行動科学会学術大会(京都看護大学,京都)	PGCモラール主観的幸福感尺度を用い,高齢者の主観的幸福感と関連する生活上の要因を見出し,高齢者が幸福な老いを迎えるための保健指導の一助にすることを目的とし,市町村保健センター事業の一環として老人会が自ら計画・実施している「健康サークル」に参加した高齢者40名を対象に,自記式質問紙による調査を行った.その結果,幸福感の大きさには身体,夜よく眠れるという意識,気分が大きく関連していることが明らかになった.また,睡眠薬の使用頻度が低いほど幸福感が高く,また眠れない人ほど睡眠薬を服用している傾向があることから,睡眠薬を飲まないで眠れる人ほど幸福感が高いということが明らかになった.このことから,高齢者の睡眠が主観的幸福感についてのひとつの指標となることがわかった.そこで,保健指導として,良好な睡眠を促進することにより,高齢者が幸福な老いを迎えるための一助となることが明らかとなった. 担当部分：研究計画から発表まですべてにおいて行った。永岡には研究全般の指導を大浜には質問紙作成、データの収集、分析を協力してもらった。 共著者：新谷奈苗　大濱恵美子　立川茂樹　永岡裕康　金城夏樹
保健指導の効果をめざした「禁煙を阻害する要因」の検討 －Text Mining Studioでの分析－	―	平成27年6月	第30回日本保健医療行動科学会学術大会(京都看護大学,京都)	看護学生の喫煙の現状と禁煙を阻害する要因を明らかにすることを目的に,A大学看護学部看護学科3年生(20名), 4年生(20名)の喫煙者を対象に,自記式質問紙調査票による意識調査を実施した.その結果,約9割の学生が将来的に禁煙を望んでいるものの,今すぐ禁煙するという意識は低く,全喫煙者が禁煙グッズや禁煙外来について知識はあるが,利用したことはなかった. また,身体的害について認識しているものの, 精神的には肯定的に捉えていた.Text Mining Studio3.2の分析では,費用の面や将来,きっかけがないという意見が抽出された.禁煙に繋がると思う援助については喫煙が困難な状況作り, 禁煙補助の費用面, 周囲の喫煙者に関する意見が得られた.そこで,喫煙が困難な施設内環境整備と,学生自身のストレス対処能力を高める支援,具体的な費用を含む禁煙グッズの種類や利用方法についての保健指導が必要であるともに,将来的に看護職として自分自身が患者や対象者,学生などへたばこに関する保健指導をする立場になることをイメージさせることで禁煙へのきっかけ作りを行う必要があると示唆された. 担当部分：研究計画から発表まで、すべてにおいて行った。 共著者：金城夏樹　新谷奈苗　立川茂樹
訪問看護師が自宅で看取りを行った家族への支援	―	平成27年8月	第18回日本地域看護学会学術集会	予期悲嘆からのケアが死別後の悲嘆プロセスを順調に経過させると言われている。予期悲嘆からケアを提供している訪問看護師により、家族は悲嘆からの立ち直り、生活の再建をすることができているか否かを検証することを目的に本調査を実施した。自宅で看取りを行った家族に対し、悲嘆ケアを行ったことのある訪問看護師10名を対象に、悲嘆ケアが上手くいったと考える事例について半構造化面接法による聞き取り調査を実施した。逐語録を作成しデータ化しKJ法による質的分析を行った。　訪問看護師が自宅で看取りを行った家族への支援は、5つの大カテゴリ『在宅療養への思い（中カテゴリ数4）』『看取り前に訪問看護師が行うケア（中カテゴリ数4）』『患者・家族のこころに寄り添う（中カテゴリ1）』『家族との最期（中カテゴリ2）』『看取り後の悲嘆ケア（中カテゴリ4）』に分類された。 担当部分：研究計画から考察までかかわった。 共著者：大浜恵美子　新谷奈苗

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
外国人労働者の緊急時医療体制問題について	－	平成27年11月	日本産業看護学会第４回学術集会	外国人労働者の多いA県にて,医療通訳士実際に経験した医療通訳場面の問題を抽出し,外国人労働者の更なる産業保健的サポート体制の検討を行うことを目的に,医療通訳士29名（英語20名,スペイン語2名,中国語7名）を対象とし,過去に経験した「外国人労働者が緊急な医療機関受診を余儀なくされた際に実際に直面した問題」をラベル化,中項目と大項目にグループ化することで,質的に統合した.結果,14の中項目と3つの大項目<Ⅰ>医療機関側の問題<Ⅱ>医療機関を受診する外国人労働者の不安<Ⅲ>医療通訳上の問題に分類された.今日の日本において増加している外国人労働者が健康に就労するため,産業保健的サポートは極めて重要であり,彼らへのサポートを行う上で産業保健師は行政保健師や医療機関,医療通訳士と常に連携を取ることが重要であると考える. 担当部分：共同研究のため担当部分は抽出不可能 共著者：立川茂樹　新谷奈苗　洲崎好香　佐藤郁代
仕事ストレス生起プロセスにおけるストレッサー認知の職種・役職による違いの検討	－	平成27年 11月	日本産業看護学会第４回学術集会	労働政策研究・研修機構が、業種・規模別に100,000人を対象に行った職業意識に関する調査(2005)において、仕事に精神的ストレスを感じる労働者60.9%のなかで、最もストレスを感じていたのは管理的な仕事に従事している労働者であり、次いで技術的な仕事であった。管理職者は肉体労働者に比して、急性心筋梗塞死が多いという結果もあり、管理職という立場がよりストレスの要因となり発症につながっていたと考察される（張,河合,岡田,1987）。このように、高いポストに就いたことで、心理的負荷が強まったケースもあり、役職がもたらすストレスの大きさを物語っている。また仕事ストレッサーには、ストレス促進要因もあるが、裁量度のようなストレス抑制要因もあり、これらはホワイトカラーで高く、ブルーカラーでは低いという傾向にある（垂水，萩原，森本,2004）。そこで本研究では、仕事ストレッサー認知において役職や職種の違いを明らかにし、それぞれに合った介入につなげることを目的とし研究を行った。 担当部分：研究計画から発表までのすべてを行った。 共著者：新谷奈苗，洲崎好香，立川茂樹 ，佐藤郁代
５年間にわたる産業保健活動の評価検討	－	平成27年11月	日本産業看護学会 第４回学術集会(島根県立大学出雲キャンパス,島根県)	メンタルヘルスが全く実施されていない中規模事業場に介入し産業保健活動を実施し,その後5年間個人面談やメンタルヘルス教育などを継続したことによる産業保健活動について,活動の評価を実施した.結果,継続的な産業保健活動の前後で,うつ状態,神経症的傾向,心身症的傾向,アルコール依存度,失感情症的傾向,生活満足度で有意差がみられた.全勤労者と個別に面談している中で約75％の対象者が,不満要因が引き金となり,アルコール依存度の高値や生活満足度の低下となってあらわれた可能性が考えられた.特に男性勤労者においては,うつ傾向・神経症的傾向・心身症的傾向値が高値である等種々のストレス関連疾患の傾向が多くみられた.職場環境の改善と共に継続的な産業保健活動に向けて取り組むことで,ストレス状態が改善し,同時に企業業績にも変化が現れたこのことから,産業保健活動が有用であることが証明できた. 担当部分：共同研究のため担当部分は抽出不可能 共著者：洲崎好香　新谷奈苗　立川茂樹
Consideration of support using areal feature and SNS (Social Network Service) for nursing-students job-hunting - Viewpoints of Public Health on community and Authentic Voices - （査読付） ＜和訳＞ SNSを活用した看護学生の就職活動支援方法の検討 -地域特性と住民の声を反映して-	－	平成28年1月	The 14th Annual Hawaii International Conference on Education, Hawaii International Conference on Education(Hilton Hawaiian Village Waikiki Beach Resort,Hawaii, USA)	本研究は,中小規模医療機関の看護部長にインタビューを行い,就職採用に伴う苦悩を調査し,更に就職活動中の看護学生に就職活動方法をアンケート調査することにより,新たな就職活動支援方法を導き出す基礎調査を行った.中小規模医療機関では新人看護師の十分な数の確保が困難な現状があることがわかった.更に,看護学生のアンケート調査からインターネットの活用,先輩や看護教員に聞く,インターンシップを活用するなどの方法により就職活動を行っているものの,その地域の環境や住民の声を反映した地域特性を知りたいとの思いを持っていることがわかった.SNSを活用することで双方の困難を減少に導くことができるのではないかと示唆された. 担当部分：共同研究のため担当部分は抽出不可能 共著者：TATSUKAWA Shigeki SHINTANI Nanae、SUZAKI Yoshika、KAJIMURA Ayako、INOUE Chieko、TOYODA Satoshi

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
A strategy for understanding of Public Health Nursing -Consideration of Educational Effectiveness by ” Practice lessons of community exploration” - （査読付） ＜和訳＞ 公衆衛生看護学初学者の教育的効果 -地域診断演習を試みて-	－	平成28年1月	The 14th Annual Hawaii International Conference on Education, Hawaii International Conference on Education(Hilton Hawaiian Village Waikiki Beach Resort,Hawaii, USA)	看護大学２年時の公衆衛生看護学初学者の学生に,公衆衛生看護学概論の講義において,地域を踏査する演習を実施した.公衆衛生看護学概論では,座学で必要な知識を学んだあと,地域を踏査する演習を通して,実践のなかから地域を含めた視点を養う取り組みを行った.演習は,A市をコミュニティアズパートナーモデルを用い全体像を把握した上で,公民館を拠点に市を５つのブロックに分けた.演習時はコミュニティアズパートナーモデルの視点に沿って,それぞれの公民館の周囲を踏査し,公民館事業に参加している住民を対象に「この街に生活して思うこと,感じること」についてインタビューを行った.結果として,個人の全体像を捉えるゴードンの11のカテゴリー以外に,自然環境,教育,制度,地形,治安,地域文化,地域においてのコミュニケーション力等の,地域を捉えたカテゴリーが抽出された.学生が対象者とその対象者の背景にある地域を含んで理解するには,概論の段階から地域を踏査する演習を組み込むことに効果あることがわかった. 担当部分：研究計画から発表まですべてを行った。立川はデータ収集、分析、考察にかかわった。 共著者：SHINTANI Nanae、TATSUKAWA Shigeki、SUZAKI Yoshika、KAJIMURA Ayako、INOUE Chieko、KINJO Natsuki
Study of the Child Care Support in Japan (2nd Report) （査読付） ＜和訳＞ 育児ケアについての現状調査　第２調査研究	－	平成28年1月	The 14th Annual Hawaii International Conference on Education, Hawaii International Conference on Education(Hilton Hawaiian Village Waikiki Beach Resort,Hawaii, USA)	本研究は,育児ケアサポートセンターを利用している程度と育児ケアについて現状を把握することを目的とし,M市において育児ケアサポートセンターを利用しながら育児を行っている父親５人と母親１２４人にアンケート調査を実施した.結果として,育児ケアサポートセンターを利用する理由に「親同士の友人作り(26%)」「子育ての心理的転(24%)」が多く,子育てに対して「子育て方法を見て欲しい(91.4%)」が最も多かった.なお,見て欲しい子育て方法には,「子供の発達(28%)」「子供の学習(20.9%)」「子供の身体的発達のため(18.6%)」などが含まれていた.以上の育児ケアについての現状から,母親が不安なく地域で子育てをするために,活力かる地域性を生み出すと共に,子育てについての診断的尺度が必要であるとわかった. 担当部分：データ収集、分析、考察にかかわった。 共著者：SUZAKI Yoshika、SHINTANI Nanae、TATSUKAWA Shigeki
Evaluation of the educational effectiveness in a new clinical nursing knowledge acquisition system （査読付） ＜和訳＞ 新たな臨床看護知識獲得システムにおける教育効果の評価	－	平成28年1月	The 14th Annual Hawaii International Conference on Education, Hawaii International Conference on Education(Hilton Hawaiian Village Waikiki Beach Resort,Hawaii, USA)	本研究は,新たに構築した看護ニーズを評価するための支援システムの有効性を,看護師の日々の看護業務と教育の必要から調査した.結果は,我々のシステムを使用した場合,あのモデルケースでは,評価成績が大幅に改善することを示しました.したがって,新たに構築した看護ニーズと評価フィールドの表示機能は,看護ニーズに関する知識の獲得を容易にするための効果的な教育ツールであると考えられる. 担当部分：共同研究のため担当部分は抽出不可能 共著者：KAJIMURA Ayako、TATSUKAWA Shigeki、SHINTANI Nanae、INOUE Chieko
Education for health-care-workers to popularize Animal Assisted Therapy (AAT) in Japan （査読付） ＜和訳＞ 日本で動物介在療法が普及するために必要な医療従事者の教育検討	－	平成28年1月	The 14th Annual Hawaii International Conference on Education, Hawaii International Conference on Education(Hilton Hawaiian Village Waikiki Beach Resort,Hawaii, USA)	本研究の目的は,日本で動物介在療法を普及するために問題となっていることを明確化することである.動物介在療法は2010年子ども病院において,初めて看護師がハンドラーとなりファシリティードッグを導入しその効果が世に広まった.しかし現段階で医療従事者がハンドラーとなりファシリティードッグを導入している病院は,子ども病院２件,回復期病院で1件の計3件と中々普及に至っていない.その原因を考察した結果,文化や動物観の違いにより,①動物介在療法の制度が確立されていない②医療従事者の知識不足によりイヌが病院に導入されることに抵抗があるがあげられた.それらの原因を排除するために は,医療従事者の教育とトレーナーの育成が大切であり,さらには導入されている効果を科学的に実証することが必要であると考えられる. 担当部分：共同研究のため担当部分は抽出不可能 共著者：INOUE Chieko、KAJIMURA Ayako TATSUKAWA Shigeki、SHINTANI Nanae

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
Investigation of evaluation methods of bed-bath technics （査読付） ＜和訳＞ 清拭技術評価方法の検討	－	平成28年1月	The 14th Annual Hawaii International Conference on Education, Hawaii International Conference on Education(Hilton Hawaiian Village Waikiki Beach Resort,Hawaii, USA)	本研究では清潔・衣生活技術の講義の中の清拭技術評価を通じ,1つ1つの項目がどのように影響しあっているのかを明らかにし,今後の教授活動の示唆を得ることを目的とした. 対象者は便宜的に抽出した学生57名とし,清拭評価表（20項目）を用い,2人1組の学生（看護師役・患者役）の技術演習を教員1名が観察法を行った結果を①清拭評価表（20項目）の相関をピアソンの積率相関係数を統計解析ソフトSPSS Statistics.19.0を用いて分析した.その結果,「身だしなみ」は「実施の確認」「説明と同意」「作業域の確保」「タオルの用い方」「好みの拭き圧」「コミュニケーション」と,「実施の確認」は「説明と同意」「眼の拭き方」「コミュニケーション」と,「説明と同意」は「眼の拭き方」「上肢の拭き方」と,いずれも1%水準で有意な正の相関がみられた.そこで,1）「身だしなみ」を整える意欲・態度が「技術」に関与することが示唆された.2)対象者にわかりやすく説明し,同意を得る方法を身に付けることは,延いては対象者の希望に合わせた技術を提供できることにつながる.様々な技術演習でも教授としていく必要があることが示唆された. 担当部分：研究計画と分析にかかわった。 共著者：SATO Ikuyo、SHINTANI Nanae、TATSUKAWA Shigeki、SUZAKI Yoshika、KAJIMURA Ayako
看護分野における体温に関する研究の動向 （査読付）	－	平成28年5月	日本サーモロジー学会第３３回大会（奈良）,(奈良学園大学,奈良,日本)	看護分野におけるサーモグラフィをはじめとする体温に関する研究動向を明らかにした.研究方法1)対象文献：医学中央雑誌Web版を文献データベースとし，「体温」，「サーモグラフィ」，「温度」，「皮膚温」のいずれかをキーワードとした看護に関する原著論文を検索し，抽出された文献1207件（調査日:2015年3月17日)より，文献の発表年度，キーワード,研究者所属機関,研究領域テーマを抽出した.キーワードについては統計ソフトSPSS Ver23.0を使用し，文献の発表年との相関係数を算出した.看護分野における体温に関する研究は1980年より見られ，2000年頃よりさらに増加し，約40件/年以上は見られており，発表年と正の相関を示していることから関心が高まってきていると考える.また，キーワードに「手術室看護」が多く，感染症をテーマにした研究より体温管理が求められる領域での研究の取り組みが多いことが示唆された. 担当部分：すべてにおいて指導を行った。 共著者：梶村郁子、立川茂樹、金城夏樹 足日和美、新谷奈苗
サーモグラフィを用いた基礎看護教育に関する調査 （査読付）	－	平成28年5月	日本サーモロジー学会第３３回大会（奈良）,(奈良学園大学,奈良,日本)	看護基礎教育においてサーモグラフィを活用した教育の有無を明らかにするために，日本看護系大学協議会の会員校を対象に基礎看護領域のシラバスの調査を行った.シラバス調査の結果，会員校248校のうちシラバスが一般公開されている会員校は173校であった.しかし，「サーモ」，「サーモグラフィ」，「皮膚温」のいずれかの記載がある基礎看護領域の科目は見られなかった.サーモグラフィは人や物体の温度変化を可視化するため，視覚情報による教育効果が期待できると考えられるが，本調査の結果，基礎看護教育にサーモグラフィを用いた授業を実施している大学が存在する可能性は低いことが示唆された. 担当部分：すべてにおいて指導を行った。 共著者：金城夏樹、梶村郁子、足日和美、立川茂樹、新谷奈苗
清拭後の「押さえ拭き」効果の検証 （査読付）	－	平成28年5月	日本サーモロジー学会第３３回大会（奈良）,(奈良学園大学,奈良,日本)	看護技術の一つである清拭の手順で実施される「押さえ拭き」に，体表面温度変化や寒気の感覚としての効果があるのかについて，サーモグラフィを用いて検討を行った.日本アビオニクス社製ThermoShotF30を用い,実験環境はエアコン等による気流の変化を無くすため送風口を塞ぎ，ドア・窓は閉め切った室内環境とした.室温：26.2～27.2度，湿度：40～67%であった.押さえ拭き有りの方が「寒気を感じない」において効果があった.体表面温度については,被験者Aは同等で被験者Bは押さえ拭き有りの方が高かった.これらのことから寒気を感じる体表面温度には個人差があることがわかった.看護において，患者の安楽を考えると，寒気を感じさせないための押さえ拭きには一定の効果があることがわかった. 担当部分：すべてにおいて指導にかかわった。 共著者：立川茂樹、梶村郁子、井上葉子 足日和美、金城夏樹、新谷奈苗

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
The Occupational Position Differences that Influence Coping Behaviors with the Stress Responses of Workers （査読付） ＜和訳＞ 職業性ストレスにおける対処行動に影響を及ぼす役職の違い	－	平成28年7月	The 3rd KOREA-JAPAN Joint Conference on Community Health Nursing(Busan Bexco, Busan, KOREA) 第3回韓日地域看護学会共同学術集会	本研究は,仕事ストレッサーが対処行動を経てストレス反応に及ぶ過程において,精度の高いストレス軽減のための介入を行うために,個人が置かれている役職といった環境の違いが対処方略にどう影響を及ぼすかについて明らかにすることを目的とした.食品製造業B社の全従業員168名（男性134名，女性34名，年齢M=40.19，SD=11.87）を分析の対象とし,対処行動尺度（田尾，久保，1996）の16項目を用いアンケート調査を実施した.なお,役職は管理職,一般社員に分類した.初めに対処行動尺度16項目を因子分析し,4因子を抽出した.次いで説明変数を役職（一般職,管理職）とし,目的変数を対処行動の各因とした一要因分散分析を行った.結果として,対処行動4因子において,役職の影響は認められなかった.役職の違いは対処行動に影響せず,むしろ対処行動に影響を及ぼすのは個人のパーソナリティなのではないかと考えられた. 担当部分：研究計画から発表師匠作成まですべてにおいて行っている。また立川の指導にかかわった。 共著者：TATSUKAWA Shigeki、SHINTANI Nanae
The Occupational Position Differences that Influence the Stress Responses of Workers （査読付） ＜和訳＞ 労働者のストレス反応に影響を及ぼす要因の 役職による違い	－	平成28年7月	The 3rd KOREA-JAPAN Joint Conference on Community Health Nursing(Busan Bexco, Busan, KOREA) 第3回韓日地域看護学会共同学術集会	本研究は,仕事に精神的ストレスを感じる労働者のストレス反応を軽減するために,仕事ストレッサーが対処行動を経てストレス反応に及ぶ過程において,役職による違いがないかについての検討を行い,適切な介入方法を探ることを目的とした.調査対象者は,電気機器製造業A社の全従業員1204名（男性1030名，女性174名，年齢M=45.15，SD=10.07）を分析の対象とし,2013年7月10～19日の調査期間にてアンケート調査を実施した.調査項目は日本語版NIOSH職業性ストレス調査票のストレス反応,役職は管理職,一般社員に分け実施した.まず初めに,ストレス反応16項目の因子分析を行った.次に役職がストレス反応に及ぼす影響を検討するため,説明変数を役職（一般職,管理職）とし,目的変数をストレス反応の各因子,CES-Dとする重回帰分析を行った.その結果,ストレス反応に対して,一般職はサポートが大きければ有意にストレス反応が軽減されるが,管理職はサポートの影響は有意ではなかった.管理職はサポートを受けられる環境でないことに加え,ストレス対処能力が高い自律した存在であることがわかった. 担当部分：研究のすべてにおいて自身で行っている。 共著者：SHINTANI Nanae、TATSUKAWA Shigeki
A Public Health Nurse Activity of Hikikomori adulthood 1 （査読付） ＜和訳＞ ケーススタディ１　地域包括支援センター保健師が遭遇した成人期の引きこもり	－	平成28年9月	The 48th Asia-Pacific Academic Consortium for Public Health Conference (APACPH 2016) (Teikyo University, Tokyo, Japan)	本研究は,実際の成人期のひきこもり事例に遭遇した地域包括支援センター所属の保健師より,成人期のひきこもりの発見手段とその介入方略を聞き出し,今日の日本における成人期のひきこもり対策についての問題点を導き出し,今後の調査基盤とすることを目的とした.事例はA氏50歳代の男性である.70歳代の母親とともに暮らしていたが,母親の認知症様症状が出現したため,保健師が認知症疑いの母親を訪問した際に,ひきこもり状態にあるA氏を発見した.母親に聞くとA氏は全く自分の部屋から出てこず,毎日の配膳と下膳でA氏の安否確認をしていたという.母親は関わり方がわからず,どうして良いのかわからなかったという.保健師は母親への訪問を通して間接的にA氏に関わり,A氏を精神科受診へと導いた事例であった.平成22年度から内閣府は「ひきこもり地域支援センター」を全国の都道府県・指定都市に整備を進めている.本事例より,ひきこもり地域支援センターが第一次相談窓口としての機能の充実が必要であることが明らかとなった.今後も,さらなる事例を調査し,第一次相談窓口としての機能の充実を図る必要性が示唆された. 担当部分：発表以外の、研究のすべてにおいて自身で行っている。 共著者：Shigeki Tatsukawa, Nanae Shintani, Yoshika Suzaki, Keiko Ono, Yoko Sakakura

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
A Public Health Nurse Activity of Hikikomori adulthood 2 （査読付） ＜和訳＞ ケーススタディ２　地域包括 支援センター保健師が遭遇し た成人期の引きこもり	―	平成28年9月	The 48th Asia-Pacific Academic Consortium for Public Health Conference (APACPH2016) (Teikyo University, Tokyo, Japan)	研究の目的は,成人期のひきこもり事例を経験している地域包括支援センターの保健師に,ひきこもりの事例についてインタビュー調査を行い,課題と支援方法を明らかにすることである.インタビュー内容は,ひきこもり発見のきっかけとその後の支援についてである.インタビューは逐語録に起こし,保健師3名と研究者3名で課題と支援方法について議論した.事例はB氏50歳代の男性であり,80歳代の母親と2人暮らしである.母親が認知症を発症したことから,保健師が母親を訪問した際に,ひきこもり状態にあるB氏が同居していることを聞いた.一室の窓がタバコのヤニで汚れていたことから,人がいること,喫煙者であることがわかった.B氏は,終日自分の部屋から出ることなく,母親が部屋の前に置く食事で生活できていた.母親が認知症を発症し,B氏の食事の配膳を忘れてしまったことから,B氏の生存が危機的状況になった.市役所から事情を聞いた弟が母親の貯金を管理し,定期的に兄に送金をしてくれることになった.課題は,親が子どもの閉じこもりを隠すので発見が遅れる,親がとじこもりを問題視しないことから発見が遅れることである.家族がとじこもりを客観的にスクリーニングできるような指標の作成,民生委員等のサポートだけでなく,企業のCSR活動を有効に活用する必要がある. 担当部分：研究のすべてにおいて自身で行っている。 共著者：Nanae Shintani, Shigeki Tatsukawa, Yoshika Suzaki, Keiko Ono, Yoko Sakakura
海外派遣者の歯科健診と診療について － 産業保健的介入の検討 － （査読付）	―	平成28年11月	日本産業看護学会 第5回学術集会（アクトシティー浜松コングレスセンター,静岡 日本）	本調査は,海外人事担当者より,彼らが経験した事例や企業の対応方法について質問紙調査を行い,その結果より,海外派遣者の歯科診療や歯科健診への産業保健的介入の必要性について考察することとした.結果より,海外派遣者の歯科診療の補助方法は企業により違うものの,治療の詳細を確認しながら,海外派遣者と海外人事担当者,保険組合で話し合い,健康保険給付分や自己負担分,企業負担分を決めている企業が11社に上っていた.また,日本国内で行われない治療や治療用素材を使用される者が少なくないものの,赴任前や一時帰国中,帰国後に歯科健診を行っている企業はなく,海外人事担当者は歯科診療や歯科健診において産業保健的介入が必要と認識していなかった.そこで,赴任期間中の歯科健診の必要性と,彼らの帰国後の継続治療を見据えた歯科保健対策の検討を,海外人事担当者と産業保健師が連携し,行う必要があると考える. 担当部分：研究に対しての指導を行った。 立川茂樹、新谷奈苗、金城夏樹
乳がん患者のワーク・トリートメントバランス支援方略の検討　医療者・雇用者・ 社会資源調整者の立場から見 た治療と就労の両立 （査読付）	―	平成28年11月	日本産業看護学会 第5回学術集会（アクトシティー浜松コングレスセンター,静岡 日本）	本研究では，１．患者への聞き取りから就労を継続できた/できなかった要因を明らかにしたうえで，２．乳がん患者の治療と就労の両立を支えるために関係領域が課題を明らかにし，これらの結果から乳がん患者の支援について，領域を超えた方略を導くことを目的に，半構造的インタビューの結果から就労を継続できた/できなかった要因を抽出した.そして,医療者・雇用者・その他の社会資源調整者の立場から,治療と就労を両立させるための問題・課題を内容分析により明らかにした.その結果,病院と企業,そして地域で活動する多岐にわたる関係機関は,互いにそれぞれの業務内容を知ることから始め,強い連携を実現したうえで,個々の患者に接することが大切である.そのためには,まず情報交換,さらに人材交流で互いの理解を深め,最終的には相互業務支援といった協力を実現していくことが,乳がん患者の治療と就労の両立を支えることになるのではないかと考えられた. 担当部分：研究計画から発表までのすべてにおいて自身でおこなった。永岡の指導を得た。 共著者：新谷奈苗、立川茂樹、金城夏樹

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
治療と就労の両立に伴う困難要因の職種による違い（査読付）採択	ー	平成29年2月	第31回日本がん看護学会学術集会（高知県立県民文化ホール,高知日本）	本研究は,乳がん患者の治療と就労の両立における困難の職種による違いを明らかにし,より具体的支援に導く一助となることを目的とし,がん拠点病院で乳がんと診断され,化学療法を受けている職種の異なる患者5名（異なる職種に従事する）に,患者の治療と就労を継続していく上での困難について個別に半構造的インタビューを行い,さらに職種ごとの困難性が明らかになるようまとめた.治療と就労の両立において,化学療法の副作用が,職種によって異なる困難をもたらす.食品を扱う職場では,製品に異物を混入させないために脱毛は大きな障害となる.人間を相手にする介護職,保母職では,体力が必要であり,さらにその体力が回復するまでの時期が見通せないことが,売店販売員の就労を困難にさせていた.また同じように人間を相手にする職種であっても,より外見を気にするケースもあることがわかった.就労を阻害する要因は,職種によって外見上の要素のみならず,食品への混入という要素も問題になる.また体力も回復の時期が見通せることで就労が継続可能になる.治療と就労を両立させるには,産業保健師と臨床看護師とのさらなる連携が望まれる. 担当部分：研究のすべてにおいて自身で行った。小池には対象者の選定をしてもらった。 共著者：新谷奈苗、小池恵理子、金城夏樹、立川茂樹
（招待講演）				
第11回　日本乳癌学会　中部地方会　学術集会（看護セミナー）	単独	平成26年9月	第11回　日本乳癌学会中部地方会(岐阜県)	日本乳癌学会のシンポジウムにおいて、乳がん治療と就労の継続について講演を行った。
（外部資金の実績）				
乳がん患者のワークトリートメント・バランスを支える患者支援プログラムの開発	代表者	平成23年5月～平成26年3月	科学研究費補助金 基盤C 採択	外来で化学療法を受けながら仕事と家庭を両立している乳がん患者の思いについて明らかにした。すでに研究は終了し報告書をまとめ提出している。 担当部分：研究計画から研究対象者の確保、データの収集、分析、まとめと、すべてにおいて主で行っている。 研究代表者：新谷奈苗
乳がん患者の就労を支えるJob recovery pathの開発	代表者	平成26年5月～平成29年3月	科学研究費補助金 基盤C 採択	本研究は、乳がん患者が治療開始から罹患前に近い状態に回復するまでの治療と就労、家庭生活に関わる道筋（path・パス）を、患者の治療の個別性や労働態様、家族形態といった生態的特性等を踏まえたうえで明確にすることで、就労の継続を促すことを目的とする。研究最終年度である。 担当部分：研究計画から研究対象者の確保、データの収集、分析、まとめと、すべてにおいて主で行っている。 研究代表者：新谷奈苗
サーモグラフィを体温管理に応用した基礎および感染症看護ケアシステムの構築	分担者	平成25年4月～平成27年3月31日	挑戦的萌芽研究採択	看護ケアの体温管理と検疫所での新型感染症の水際対策のために、サーモグラフィを手法として発熱を検出する方法について検討した。発熱患者群の顔面サーモグラフィと体温の相関は有意であった。しかし、発熱患者を確実に全例検出できるほどの強い相関はなかった。また、高温環境下でもサーモグラフィによる発熱症状の測定は可能であることがわかった。以上から、看護ケアのための体温管理には応用が可能であるが、感染制御のためにはカットオフ値による判定方法だけではパンデミックの回避は困難であることがわかった。 研究分担者：小柴賢洋、夏秋優、堀江修、新谷奈苗、中村百合子、津田 智子
サーモグラフィを看護業務に応用するための画像転送および判定システムの開発	分担者	平成27年4月～平成29年3月	科学研究費補助金 基盤C 採択	現在研究継続中である 研究分担者：新谷奈苗
エボラ出血熱や急性熱性感染症の制御を目指した放射温度計による発熱判定基準の構築	分担者	平成27年4月～平成28年3月	科学研究費補助金 基盤C 採択	現在研究継続中である 研究分担者：新谷奈苗

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
（共同研究）				
高齢者が快適に暮らすための筋肉・身体トレーニング継続の意義～筋電図、快適性（α波）および末梢循環の変化と身体適応力～	分担者	平成21年5月～22年3月	広島国際大学「特別研究助成」　採択(広島国際大学学内教員を対象にした研究助成金)	高齢者の健康生活には筋力を落とさないことが大切であるという仮説のもとに、身体トレーニングを継続して行うことの有用性を明らかにした。身体トレーニングを継続して行うことは、日常生活のさまざまな場面において適応力を高めることにつながることが、生体情報の計測結果から明らかになった。また運動は精神的にリラックスすることも確認できた。 高齢者にとって継続してトレーニングを行う場合、どの程度の運動量、運動の方法が適切なのかが明らかになった。 担当部分：研究計画、研究対象者の確保、データ収集、分析において主で関わった。 共著者：高尾文子（研究代表者）、坊岡正之、新谷奈苗、中村百合子
成人期のひきこもりの発見と介入方略の検討-保健師のソーシャルキャピタル機能を活用して-	分担者	平成28年4月～平成29年3月	奈良学園大学保健医療学部共同研究費助成金採択	現在、地域で問題となっている成人期の閉じこもりについて、その現状を把握し今後の対策を探る 担当部分：研究計画から研究全般の指導を行うとともにフィールドの確保も主なっている。 共著者：立川茂樹、金城夏樹、丸上輝剛、新谷奈苗
舌癌患者の治療と就労の継続困難要因の検討	分担者	平成28年4月～平成29年3月	奈良学園大学保健医療学部共同研究費助成金採択	自身の研究である乳がん患者の治療と就労継続の困難の舌癌版である。研究計画から研究全般にわたるまですべてにおいて関わっている。 共著者：金城夏樹、新谷奈苗、守本とも子
（保健師としての企業での講演等）				
ヤクルト本社 福山工場 (160名) メンタルヘルス研修 １．セルフケア研修 ２．管理監督者研修 ３．ストレス対処能力向上研修 各60分	単独	平成23年 9月 平成24年 12月 2月	広島県福山市 ヤクルト本社福山工場にて	セルフケア研修では、ストレスとどう向き合うか、自分自身の心身の健康をどのように守るかなど、具体的な方略について話をした。 また管理監督者研修では、ライン管理とは、ライン管理者の責務について講演した。 ストレス対処能力向上研修では、SOCや自己効力感を用いて、物事をどのように捉え受け入れたらよいかについて研修をした。
ヤクルト本社 福山工場 本工場の現状と課題、今後の対策 について報告書を作成（20頁）、プレゼンテーションをする	単独	平成24年4月	広島県福山市 ヤクルト本社福山工場にて	メンタルヘルス調査・分析、全員面談のあと、 報告書を作成し、それをもとに工場長や総務部長を対象に本組織の現状と課題、今後の対策についてプレゼンを行った。
横河電機株式会社　(1800名) 本社と各支店の組織の現状と課題、今後の対策についての報告書（20頁）を作成しプレゼンテーションをする	単独	平成24年 12月	東京都立川市 横河電機本社にて	メンタルヘルス調査・分析のあと、報告書を作成し、それをもとに役員幹部を対象に本組織の現状と課題、今後の対策についてプレゼンを行った。
ヤクルト本社 兵庫三木工場 (180名) メンタルヘルス研修 １．セルフケア研修 ２．管理監督者研修 各60分	単独	平成25年 9月 平成26年 2月	兵庫県三木市志染町 ヤクルト本社 兵庫三木工場にて	セルフケア研修では、ストレスとどう向き合うか、自分自身の心身の健康をどのように守るかなど、具体的な方略について話をした。 また管理監督者研修では、ライン管理とは、ライン管理者の責務について講演した。
ヤクルト本社 兵庫三木工場 本工場の現状と課題、今後の対策 についての報告書を作成し（25頁）プレゼンテーションをする	単独	平成26年3月	兵庫県三木市志染町 ヤクルト本社 兵庫三木工場にて	メンタルヘルス調査・分析、全員面談のあと、 報告書を作成し、それをもとに役員幹部、工場長や総務部長を対象に本組織の現状と課題、今後の対策についてプレゼンを行った。
広島中央ヤクルト販売 （170名） メンタルヘルス研修 １．セルフケア研修 60分	単独	平成27年 10月	広島県呉市焼山 広島中央ヤクルト販売本社にて	セルフケア研修では、ストレスとどう向き合うか、自分自身の心身の健康をどのように守るかなど、具体的な方略について話をした。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
広島中央ヤクルト販売 本販売会社の現状と課題、今後の対策についての報告書を作成し(21頁)プレゼンテーションをする	単独	平成28年3月	広島県呉市焼山 広島中央ヤクルト販売本社にて	メンタルヘルス調査・分析、全員面談のあと、 報告書を作成し、それをもとに役員幹部、社長や総務部長を対象に本組織の現状と課題、今後の対策についてプレゼンを行った。
広島中央ヤクルト販売 （170名） メンタルヘルス研修 １．ストレス対処能力向上研修 60分	単独	平成28年11月	広島県呉市焼山 広島中央ヤクルト販売本社にて	ストレス対処能力向上研修では、SOCや自己効力感を用いて、物事をどのように捉え受け入れたらよいかについて研修をした。
広島中央ヤクルト販売 本販売会社の現状と課題、今後の対策についての報告書を作成し（20頁）プレゼンテーションをする	単独	平成28年12月	広島県呉市焼山 広島中央ヤクルト販売本社にて	メンタルヘルス調査・分析、全員面談のあと、 報告書を作成し、それをもとに役員幹部、社長や総務部長を対象に本組織の現状と課題、今後の対策についてプレゼンを行った。
小規模多機能居宅介護もえぎ	単独	平成28年12月15日	広島県安芸郡海田町	小規模多機能供託介護もえぎに勤務する職員に「ソーシャルキャピタルの実際とそのマネジメント」のテーマで研修を行う。
広島県広島市安芸区健康保健センター	単独	平成29年2月8日	安芸区健康保健センター	総合支援事業においてのソーシャルキャピタルの活かし方・ ヒューマンサービスにおけるストレス対処をテーマに2時間の研修を行う。
（学会等への貢献）				
日本サーモロジー学会	評議委員			平成25年より現在に至るまで、日本サーモロジー学会の評議委員をしている
日本産業看護学会	評議委員			平成27年より現在に至るまで日本産業看護学会の評議委員をしている
日本産業看護学会 産業看護学体系化検討委員会近畿地方ワーキンググループ	近畿地方ワーキンググループ長			平成28年10月より現在に至る
日本公衆衛生看護学会学術集会	実行委員・座長			平成27年1月、神戸市で行われた第二回大会において座長を行う
日本サーモロジー学会学術集会　第33回大会	大会長			平成28年6月、奈良市で行われた第33回学術集会の大会長を行う
日本保健医療行動科学会 第27回学術大会	副事務局長			平成23年6月、岐阜市で行われた第27回学術集会の実行委員長を行う
日本医療福祉情報行動科学会　第6回学術大会	実行委員長兼準備委員長			平成23年3月に岐阜市で行われた第6回大会学術集会の実行委員長兼準備委員長を行う
（公的貢献）				
兵庫県三木市 健康増進課 健康政策将来検討会 役員		平成26年4月～ 平成27年3月		兵庫県三木市役所の健康増進課が作成する三木市の健康保健計画の作成や、今後の三木市の健康政策について検討した。 この会には、医師会長・歯科医師会長・民生委員・自治会長など、さまざま役割のなかから選ばれた人たちが集まっていた。自身は有識者として参加していた。
社会福祉法人秀楽会 しゅうらくえん　評議委員		平成26年4月～ 現在に至る		三木市にある社会福祉法人秀楽会が経営するしゅうらくえん（老人保健施設・特別養護老人ホーム）の経営や将来構想について、町の有識者が集まり検討会をおこなう。
産業保健と看護（株）メディカ出版　編集同人		平成26年7月～ 現在に至る		産業看護職者が購読する専門職雑誌の編集同人を担っている。

教 育 研 究 業 績 書

平成 29年 3月 31日

氏名　中馬　成子

研　究　分　野	研　究　内　容　の　キ　ー　ワ　ー　ド
看護学	基礎看護学,臨床看護学（慢性期）

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項

事項	年　月　日	概　　要
1　教育方法の実践例 宝塚大学 1）基礎看護学Ⅰ（概論）講義の工夫	平成24年4月～平成26年3月	24年度から、ナイチンゲールの「看護覚え書き」とヘンダーソンの「看護の基本的となるもの」をグループで読み合わせ、要約を発表する機会をつくった。読むこと、要約することが苦手とする学生像から、看護の本質を捉えることを目的にアカデミックスキルズも体得できるように演習とした。学生の評価では、看護について考えを深めたことやグループによる学びもあり、有意義な講義・演習と評価できた。 25年度からは、実習中の言動や倫理的な態度が十分ではない学生もいたことから、上記のグループワークに加え、実習中の身だしなみおよび言動、実習生の倫理的ジレンマの場面を取り上げた事例を使い、グループワークと成果発表会を行った。実習態度に関する発表では、看護学生としてのあるべき態度について共通理解ができた。倫理的問題については、事前に倫理の原則を講義したこともあり、原則を踏まえた考察と行うべき態度が発表できていた。1年次とはいえ、これらのテーマの必要性を十分認識し、グループワークを行えていたことから、学習テーマ、学習方法として適切であったと評価できた。
2）基礎看護学Ⅵ（看護過程）演習の工夫	平成26年4月～平成27年3月	西南女学院大学において成人看護学で看護過程を教授した経験がある。その経験を生かし、2年次生への理解を深められるように教授内容を考案した。事例展開で用いる病態を骨折という比較的理解しやすい病態を用いた。また、問題点を日常生活に焦点化し、病態の理解よりも看護過程の思考過程を踏めることを重要視した。看護過程の各ステップを丁寧に教授し、学生の反応を見ながら次のステップへと進めている。特にアセスメントすることの理解が最も困難であることから、個人課題、グループワーク、模範解答の提示など繰り返し教授する中で理解を深めるように工夫した。アセスメントのグループワークの発表では、予想以上の成果がみられた。しかし、グループメンバー全員で取り組んだグループとそうではないグループもあり、個人の能力が問われるが、仲間評価を行い、グループワークの効果を高めることもねらいとしている。そこで、学生の危機感と個人の看護過程展開能力を高めるために、期末試験の中での事例展開を計画している。
2　作成した教科書、教材 なし		

事項	年　月　日	概　　要
３　教育上の能力に関する大学等の評価 西南女学院大学 宝塚大学看護学部 1）学生による授業評価	平成25年7月 平成25年7月 平成26年2月 平成26年2月	基礎看護学Ⅰ（概論）　4.2、全科目平均4.0 基礎看護学実習Ⅰ（対象理解）担当学生（17名）による総合評価：大変良い14名、良い3名、やや悪い0、悪い0 基礎看護学実習Ⅱ（看護過程）全学生（116名）による総合評価　大変良い73名、良い40名、やや悪い1名、悪い2名 成人看護学Ⅲ（慢性期・終末期援助論）3.9、全科目平均3.8
４　実務家教員についての特記事項 関西看護医療大学 1）セミナー講師	平成19年5月	兵庫県淡路市の住民を対象に、生活習慣を見直し、再構築することを目的に、５回シリーズの健康教育セミナーを開催した。成人看護学、老年看護学を専門とする教員３名で担当した。生活習慣に関する講義および自宅で行える運動を組み入れた。
宝塚大学 2）講演	平成21年11月～12月	兵庫県川西市立病院（兵庫県川西市）看護部からの依頼により看護スタッフを対象に、「看護診断の学びのための中範囲理論」というテーマで講演を行った。臨床で適切な看護診断を確定するには、基盤となる中範囲理論の理解が必要と考え３回シリーズで中範囲理論と看護診断の関係を中心に講義した。
3）講演	平成26年11月、12月	関西電力病院（大阪府大阪市）看護部からの依頼により看護スタッフを対象に、「看護過程と看護記録」というテーマで2回にわたり講演を行った。看護過程の一般的な考え方に加え、看護記録との関連および看護記録の法的な側面から講演した。
５　その他 なし		

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項

事項	年　月　日	概　　要
１　資格，免許 看護婦免許証	昭和56年5月	（第412077号）
修士（経営学）	平成13年3月	九州産業大学経営学部経営学科博士前期課程第001130号
修士（看護学）	平成19年3月	大阪府立大学大学院看護学研究科博士前期課程　第13号
博士（看護学）	平成27年3月	大阪府立大学大学院看護学研究科博士後期課程 甲第1590号　看第23号
２ 特許等 なし		

事項	年　月　日	概　　要
３　実務家教員についての特記事項 宝塚大学看護学部看護学科学科長	平成23年4月～平成26年3月	宝塚大学看護学部看護学科学科長として、学部長を補佐し学科の運営に携わった。
宝塚大学看護学部看護学科研究倫理委員会副委員長	平成24年4月～平成26年3月	宝塚大学看護学部看護学科看護学科の研究倫理に関して、副委員長とした携わった。
宝塚大学看護学部看護学科教務委員長	平成26年4月～平成27年3月	宝塚大学看護学部看護学科看護学科の教務に関する業務に委員長として携わった。
奈良学園大学保健医療学部看護学科教務部会長	平成28年4月～現在に至る	奈良学園大学保健医療学部看護学科の教務に関する業務に委員長として携わった。
４　競争的研究資金獲得		
５　その他 なし		

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（著書） 1. 看護師国家試験直前対策107	共著	平成19年11月	メヂカルフレンド社	看護師国家試験に頻出するキーワードから重要ポイントを学習する対策を示した。内分泌・代謝の範囲で糖尿病、インスリン療法、甲状腺疾患、メタボリックシンドローム、脂質代謝異常について、国家試験直前に知識を確認するために必要な情報を絞って提示した。 共著者：小平京子、中馬成子、神谷千鶴 担当部分：40頁（インスリン療法），42頁（メタボリックシンドローム），44頁（脂質代謝異常）
（学術論文） 1.Q市における在宅高齢糖尿病者のセルフケア（査読付き）	共著	平成21年2月	関西看護医療大学紀要，1号，pp. 3-14	本研究は，Ｑ市の在宅高齢糖尿病者のセルフケアを明らかにすることを目的とした。２型糖尿病のＱ市内の病院に通院している65～74歳までの前期高齢者を対象に，半構成的面接を行い質的帰納的に分析した。その結果，糖尿病とその治療に対するとらえ方や考え方として【病気とは別物に思える糖尿病】【糖尿病はきちんとしていなかった自分を証明する病気】【インスリン注射は回避したいマイナスイメージの治療】【糖尿病の脅威の知覚は身近な人から】，糖尿病の療養行動として【自分で決めた血糖値の目標に向かうために専門家に頼らない自己流の努力】【外来受診・入院・糖尿病教室はひそかな自己点検・自己評価の腸】【ボーダーライン提示の希望】，療養行動の思いとして【心構えの背後には罪悪感】，療養行動と思いに影響するものとして【季節・地域特性が影響するカロリーオーバー】【気持ちと受診行動のサポート】のカテゴリーを抽出した。地域における多様な特性を踏まえた場において，在宅高齢糖尿病者の療養に対する看護介入の必要性が示唆された。 共著者：森田智子，神谷千鶴，中馬成子，魚里明子，小平京子，神山幸枝（共同研究につき本人担当部分抽出不可能）

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
2.糖尿病看護学領域における看護診断の検討，京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻紀要（査読付）	共著	平成21年3月	京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻紀要，５巻，pp. 71-74.	糖尿病看護学領域における看護診断を明確にしていく第１弾として，糖尿病看護領域に従事している看護師らを対象に臨床現場で糖尿病患者に適用している診断ラベルを調査した。その結果，NANDA-I看護診断の診断ラベルから17項目と，修正もしくは独自の診断ラベルとして６項目が抽出された。これら23個の診断ラベルが表す問題状況は，糖尿病看護領域特有の看護診断の候補として挙げられることとなった。今後は，糖尿病看護領域特有の看護診断として確定していく上でも，診断ラベルが示す状態の確認をはじめ，診断ラベルと判断指標となる症状等との照合やその表記の妥当性について検討していく必要がある。 共著者：本田育美，奥津文子，小平京子，笠岡和子，神谷千鶴，中馬成子，江川隆子（共同研究につき本人担当部分抽出不可能）
3.2型糖尿病患者のインスリン療法に対する心理的行動的反応の変遷（査読付）	共著	平成23年12月	日本看護研究学会雑誌，第34巻，第5号，59-69.	2型糖尿病患者のインスリン療法に対する心理的行動的反応を明らかにするために、インスリン療法を1年以上継続していえる20名を対象とした。インタビュー内容から質的帰納的に分析した。その結果、インスリン療法の告知時は、【インスリン療法に対し否定的感情】をもっていたが、その後【インスリン療法の知識による認識の変化】がもたらされ、【インスリン療法の開始を決意】し、インスリン自己注射を実施し体験する過程を経て、【インスリン自己注射に対する安心感を獲得】しており、【インスリン療法を維持する意志と行動】という肯定的な態度へと変遷していた。治療開始時の心理的行動的問題を焦点化したうえで、早期から正しい知識と安心感が得られる情報を提供し、肯定的認識と行動をとるための援助が重要であることが示唆された。 共著者：中馬成子，土居洋子（主たる研究遂行者）
4.標準化死亡比の高い地域における2型糖尿病患者の療養行動の実態-療養行動の継続の看護支援に向けて-（査読付き）	単著	平成24年3月	大阪府立大学看護学部紀要，第18巻，第1号，97-106.	糖尿病の標準化死亡比の高い地域の治療中断の経験を有する2型糖尿病患者の療養行動の実態を調査した。10名に半構成的面接を行い質的帰納的に分析した。療養行動を左右する病状の認識は【目標値と現在の血糖値を比較して病状を理解している】【病状はわからない】【合併症は怖いから回避したい】【合併症は自分のこととして考えられない】病気の管理に関する理解は【食事療法が基本である】【自己管理により病状が改善する】【生活に生かせるほど理解していない】が抽出された。実践している療養行動は【食事内容･量を変更した】【運動療法を継続している】など，実践できていない療養行動は【適切な食事量を継続できない】【教育後すぐには療法行動がとれない】などが抽出された。医療・生活環境を考え，患者が生活の中で療養行動を継続するためのセルフレギュレーションへの支援が必要であると示唆された。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
5.2型糖尿病患者の療養行動の継続を促すセルフレギュレーションに基づく介入効果 （博士論文）	単著	平成27年3月	大阪府立大学大学院看護学研究科	都市部と異なりへき地では糖尿病の専門職が少なく，必要な療養指導が実施されていない現実がある。今回，へき地の一つである農漁村地域における2型糖尿病患者を対象に，その療養行動を明らかにし，自立をうながすと考えられるセルフレギュレーション（以下，SR）に基づく支援プログラムを作成し患者に用い，統計解析しその効果を明らかにした.その結果，糖尿病に関する知識と自己管理下位尺度（フットケア，規則正しい生活）について介入後の変化量に有意差がみられた.摂取カロリーも介入群の方が減少傾向にあった.SR過程（目標設定，療養行動のｾﾙﾌﾓﾆﾀﾘﾝｸﾞ，療養行動についての自己判断，療養行動の結果の自己反応）を達成した患者は，19名中14名であった.達成できなかった5名の患者の理由は，農作業や介護ストレス，友人等の地域の付き合いなどの環境的要因により適切な療養行動がとれず，否定的な自己反応を示していた.地域とのつながりが強い農漁村地域では，療養行動と地域との付き合いや家業・介護との折り合いをつけるための支援の強化が重要であることが示唆された. A4 全87頁
（その他） 1. 2型糖尿病患者のインスリン療法に対する思いの変遷	―	平成19年8月	日本慢性看護学会第１回学術集会　口演発表	インスリン療法を生涯において不可欠とされた2型糖尿病患者がインスリン療法に対して抱いている思いとその変遷について明らかにし看護の示唆を得ることを目的に、大阪府下にある糖尿病代謝内科外来に通院している2型糖尿病患者でインスリン療法を1年以上継続している者20名に半構成的面接を行った。その結果、インスリン療法に対する思いは、【否定的な思い】から始まり、【インスリン療法を開始することに抵抗することを断念】した後、【インスリン療法を継続しようとする意志をもちそれを反映した行動】をとるという肯定的態度に至るプロセスがあることが明らかになった。 共同発表者：中馬成子（主たる研究遂行者）、土居洋子
2. 看護学生のドメスティック・バイオレンスの捉え方ーリプロダクティブ・ヘルス／ライツを踏まえてー	―	平成21年8月	第1回日中韓看護学会，北京	ジェンダーの視点の導入と学生の生き方や生きる力の形成の一助となることをねらいとして、看護学生に対して性の現状と問題を踏まえたドメスティック・バイオレンスに対しての講義を組み入れている。看護大大学生92人対象の講義内で視聴したドメスティック・バイオレンス教材の感想を自由記載させたものを分析した。その結果、13のカテゴリーが抽出された。①『DVに対する支援・対策』②『加害者におけるDVの要因』③『DVの実態に対する思い』④『被害者におけるDV被害の要因』⑤『加害者によるDV行為への思い』⑥『DVに対する疑問』⑦『DV防止の願望』⑧『被害者の苦痛』⑨『DVの性質・構造・要素』⑩『被害者にとってほしい行動』、⑪『愛することの意味』⑫『被害者の立場に立った思い・考え』⑬『被害者の気持ちの理解』が抽出された。これらの結果から、学生はドメスティック・バイオレンスの本質を捉えながら、被害者である女性を支援し、保護することを考え、暴力に対して非難する立場をとっていた。そして、人を愛することの意味を考え、女性の権利について、被害者および加害者の立場に立って客観的に思考していた。 共同発表者：上山直美，中馬成子，小出水寿英、内山和美

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
3. Discontinued Consulting Behavior of Patients with Type-2-Diabetes Mellitus in an area having Less-Number of Health Service Facilities（糖尿病専門職の少ない地域における2型糖尿病患者の療養行動の中断について）	―	平成21年	The 1st International Nursing Research Conference of World Academy of Nursing Science，p.141.	**Purpose:**To clarify discontinued consulting behavior of type-2 diabetes patients living in sn area having less-number of health service facilites. **Method**:Data were obtained from 10type-2 diabetes patients by using a structured or semi-structured interview. **Results:**1) Reasons why discontinued consulting a doctor were ; (1) work or community activity was more prioritized,(2) not able to pay for consulting,etc 2) In terms of difficulty in consulting a doctor regularly, the following responses were obtained ; no problem because of being able to reserve the consulting day,etc.3) What patients perceived about diabetes were; I don't understand well, complications never happen to me, complications are dreadful, etc.4） Major Problems with Self-Care Behavior Following Diabetes Education (1)Inability to acquire accurate knowledge　(2)Unable to implement proper self-care behavior despite having knowledge of that behavior (3)Implementation of incorrect self-care behavior. **Conclusion**: It is important to provide diabetes knowledge according to what patients perceived about diabetes, what makes them feel fear, and how they handle their inconvenience for consulting. Nariko　Chuman 本研究の目的は糖尿病専門職の少ない農漁村地域における2型糖尿病患者の療養行動を明らかにし、主体的な療養行動の継続を目指したセルフレギュレーション（以下、SR）に基づく支援プログラムを作成すること、支援プログラムの実践によりその効果を明らかにすることである。1.対象：成人期以降の2型糖尿病患者 2.研究デザイン：準実験研究　3. 調査内容と尺度 (1) 患者特性：基本属性、療養状況など (2)自己管理状況：糖尿病の知識（糖尿病治療手引きより作成）、簡易的自記式食事歴法質問表、歩行数、目標達成度、糖尿病自己管理行動尺度、認知行動的セルフモニタリング尺度、生理学的データ（BMI、HbA1c）(3)自己効力感：慢性疾患患者の健康行動に関するセルフエフィカシー尺度 (4)SR過程：SR評価基準 5)データ収集方法：介入前、介入3か月後に質問紙調査を行い、面談や電話による介入時にSR状況を聴取した。両群の自己管理に関する介入前と終了後の変化量は、介入群の知識（p=0.001)、糖尿病自己管理下位項目（フットケア等）（p=0.048）が有意に高まり、摂取カロリーは減少傾向にあった(p=0.080)。糖尿病専門職の少ない農漁村地域において、患者自身が療養行動をコントロールする過程を支援するSRを基盤にした支援プログラムは、自分の病状や療養行動の問題点を評価するための一般的な知識や生活管理するための実践的知識の獲得を促進し、行動変容とその継続へ肯定的な反応をもたらしており、その有効性が確認できた。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
4　農漁村地域におけるセルフレギュレーションに基づく介入後悔－セルフレギュレーションの未達成要因の分析から -	―	平成27年8月	第10回日本ルーラル・ナーシング学会 口演発表	2型糖尿病患者に対し、セルフレギュレーション(SR)に基づく支援プログラムを実践し、SR過程が達成できなかった要因を明らかにすることを目的に成人期以降の2型糖尿病患者5名を対象とした。BanduraのSR過程をもとに評価基準を作成し対象者の発言と照合し質的に分析した。面接回数は計７回であった。各過程の発言は目標の進度については、友人と会っている時は過食する、忙しくて目標を守れない、我慢の反動で過食する、など。規則性は、農繁期は忙しいから間食しないが農閑期は過食する、ボランティア・親の介護・農作業で忙しい、など。療養行動を実践する価値については、間食が悪いのはわかっているが止められない、友人にダイエットをしていると話すと笑われるから断れない、など。行動の原因帰属については、友人といると断れない、農作業や孫の世話で忙しい、仕事が忙しい、など。自己反応については、計画はするものの行動が伴わないから困る、実行できたりできなかったりと落ち着かない、実行しなくてはと思いながらできなかった、などであった。3世代家族における女性は、近隣の人々との付き合い、農作業や介護の負担などから自己管理の優先度が低くなり自己管理の帰属を自分と考えることには困難が伴い、生活上の価値を自身の療養行動よりも人間関係の維持に置いていた。
5　2型糖尿病に対するセルフレギュレーションに基づく介入効果－糖尿病専門職の少ない地域における3か月間の面談結果の分析―	―	平成27年9月	第20回日本糖尿病看護・教育学会 口演発表	2型糖尿病患者に対し、セルフレギュレーション(SR)に基づく支援プログラムを実践し、SR過程が達成できた要因を明らかにすることを目的に成人期以降の2型糖尿病患者14名を対象とした。BanduraのSR過程をもとに評価基準を作成し対象者の発言と照合し質的に分析した。面接回数は計７回であった。各過程でも発言は、食事はカロリーを減らす調理法に変えた、食事量を抑えた、野菜を増やした、など。運動は遠回りして歩数を増やした、足の調子により歩行時間を変えた、正月休みも歩いたなど。自己判断の過程は、歩行により血糖値が下がり、運動により体重が落ち、友人から体重減少を賞賛された、歩数の増加に達成感をもち、目標に向けた実施が励みになり、生活習慣が問題だから自分で努力する、など。最終の自己反応は、療養行動を継続する、元の生活に戻らないようにする、療養行動に自信がついた、などであり、最終の過程では、療養行動を変えたことで体重が減量し、HbA1c値も改善したので今後も努力する、といった肯定的反応を示す発言が多かった。SRの過程を支援することにより、SRのセルフモニタリングの段階で自分の行動を振り返り、行動を継続し、体重とHbA1c値の改善がみられた者が多かった。その結果、目標に向けた行動の価値を見出し、療養行動を自分のこととして考え始めた。そこで認知変容が生じ、行動変容を引き起こしたと考えられた。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
6　2型糖尿病に対するセルフレギュレーションに基づく介入効果－専門職の少ない地域における自己管理－	―	平成27年12月	第35回日本看護科学学会口演発表	本研究の目的は、セルフレギュレーション(SR)に基づく支援プログラムを実践し、その効果を明らかにすることであった。データは介入前、介入3か月後に糖尿病の知識（糖尿病治療手引きより作成）、簡易的自記式食事歴法質問表、歩行数、目標達成度、糖尿病自己管理行動尺度、認知行動的セルフモニタリング尺度、自己効力感、慢性疾患患者の健康行動に関するセルフエフィカシー尺度を用いて調査した。生理学的データは診療録、目標実行度はセルフモニタリングノートから収集した。対象者の概要は、介入群19名（年齢59.8±6.1歳）、対照群10名（年齢64.3±3.9歳）であった。介入前の両群間には年齢(p=0.048)を除き有意差はなかった。支援プログラムの効果として、両群の自己管理に関する介入前と終了後の変化量は、介入群の知識（p=0.001)、糖尿病自己管理下位項目（足の観察と清潔を保つ、規則正しい生活）（p=0.048）が有意に高まり、摂取カロリーは減少傾向にあった(p=0.080)。SRを基盤にした支援プログラムは、自分の病状や療養行動の問題点を評価するための一般的な知識や生活管理に関する実践的知識の獲得を促進していた。その結果、食事摂取量を減らし、足の清潔と生活を整え、糖尿病の自己管理の基本的な療養行動に影響していた。合併症を防止し、患者のQOLを維持するための教育的支援の質を担保する教育方法が示唆された。
7　Intervention effect based on self-regulation to promote the continuation of self-care behavior of patients with type-2 diabetes mellitus （２型糖尿病患者の療養行動の継続を促すセルフレギュレーションに基づく介入効果）	―	平成28年3月	19th EAFONS (East Asian Forum of Nursing Scholars) (Poster)	The purpose of this study was to clarify the self-care behaviors offered to type 2 diabetes patients in rural areas with an insufficient number of diabetes specialists, to create a support program based on self-regulation that aimed at continuing self-care behaviors, and to clarify the effect by implementing the support program. 1. Subjects: Adult patients with type 2 diabetes. 2. Study Design: Quasi-experimental design 3. Data Collection Methods and Outcome Measures 1) Patient Characteristics: medical treatment situation, etc. 2) self-care : Self-care knowledge of diabetes, Brief-type self-administered diet history questionnaire, Scale of diabetes self-care behaviors, Cognitive behavioral self-monitoring scale, and physiological data (BMI, HbA1c) 3) self-efficacy Questionnaire was answered before intervention and 3 months after intervention. The difference of change regarding self-care in both groups before and after intervention showed that the knowledge (p=0.001), Diabetes self-care behaviors subscale(foot care) (p=0.048) of the intervention group increased significantly, and the calorie intake showed a tendency to decrease (p=0.080). This programs supported the process of controlling self-care behaviors by patients themselves in rural areas with an insufficient number of diabetes specialists are significant in acquiring and managing concrete knowledge for patients in order to understand the condition of the disease and to identify the problems in their daily lives. Nariko　Chuman

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				本研究の目的は糖尿病専門職の少ない農漁村地域における2型糖尿病患者の療養行動を明らかにし、主体的な療養行動の継続を目指したセルフレギュレーション（以下、SR）に基づく支援プログラムを作成すること、支援プログラムの実践によりその効果を明らかにすることである。 1 .対象：成人期以降の2型糖尿病患者 2.研究デザイン：準実験研究　3. 調査内容と尺度 (1）患者特性：基本属性、療養状況など (2)自己管理状況：糖尿病の知識（糖尿病治療手引きより作成）、簡易的自記式食事歴法質問表、歩行数、目標達成度、糖尿病自己管理行動尺度、認知行動的セルフモニタリング尺度、生理学的データ（BMI、HbA1c）(3)自己効力感：慢性疾患患者の健康行動に関するセルフエフィカシー尺度 (4)SR過程：SR評価基準 5)データ収集方法：介入前、介入3か月後に質問紙調査を行い、面談や電話による介入時にSR状況を聴取した。両群の自己管理に関する介入前と終了後の変化量は、介入群の知識（p=0.001)、糖尿病自己管理下位項目（フットケア等）（p=0.048）が有意に高まり、摂取カロリーは減少傾向にあった (p=0.080)。糖尿病専門職の少ない農漁村地域において、患者自身が療養行動をコントロールする過程を支援するSRを基盤にした支援プログラムは、自分の病状や療養行動の問題点を評価するための一般的な知識や生活管理するための実践的知識の獲得を促進し、行動変容とその継続へ肯定的な反応をもたらしており、その有効性が確認できた。

教　育　研　究　業　績　書

平成 29年　3月 31日

氏名　辻下　守弘

研究分野	研究内容のキーワード
外科系臨床医学	理学療法学、運動器リハビリテーション学

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例		
2　作成した教科書，教材		
3　教育上の能力に関する大学等の評価 学生による授業評価	平成21年9月	甲南女子大学において、全教員を対象に授業科目ごとに学生による授業評価を行った。 質問内容「あなたはこの授業を受講して総合的に満足していますか?」 ［理学療法概論］　5点満点で4.3点 ［内部障害系運動療法学］　5点満点で4.8点 ［脳血管障害理学療法学］　5点満点で4.3点 ［理学療法行動科学］　5点満点で4.1点
4　実務の経験を有する者についての特記事項		
5　その他 (1)　甲南女子大学看護リハビリテーション学部理学療法学科教務委員会委員	平成19年4月	甲南女子大学看護リハビリテーション学部理学療法学科の教務委員を務めた。教務委員の職務は、教育課程および授業科目の履修、授業および時間割、試験や単位認定および卒業判定、教室および教材、学生の入学、転学、転学科、留学、休学、復学、退学、除籍、および卒業に関する事項を月1回の会議で審議している。
(2)　奈良学園大学社会連携センター長	平成28年4月 ～ 現在に至る	奈良学園大学社会連携センター長として、大学と地域社会との連携をスムーズにするためのコーディネーターとしての役割を果たした。具体的には、大学が立地する市町村との連携事業である公開講座の企画運営、大学シーズと地域ニーズとのマッチング、産官学連携による共同研究の推進と実施などに関して実施責任者としての活動を行った。

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1　資格、免許 (1)　理学療法士免許（厚生労働省）	昭和60年5月	国家資格免許である理学療法士免許を取得(第13729号)
(2)　認定健康心理士資格取得（日本健康心理学会）	平成13年4月24日	日本健康心理学会が認定する認定健康心理士資格を取得　(第246号)
(3)　専門健康心理士資格取得（日本健康心理学会）	平成18年2月2日	日本健康心理学会が認定する認定健康心理士資格の習得から5年間が経過し、昇格審査に合格して専門健康心理士資格を取得　(第246号)
(4)　専門理学療法士資格取得（日本理学療法士協会）	平成18年2月2日	公益社団法人日本理学療法士協会から脳卒中(第3-102号)、運動器(第3-562号)、内部障害理学療法(第4-323号)の3分野に対する専門理学療法士の資格を取得
(5)　認定理学療法士資格取得（日本理学療法士協会）	平成18年2月2日	公益社団法人日本理学療法士協会から神経(第2-481号)、運動器(第7-79号)、代謝(第13-25号)の3領域に対する認定理学療法士の資格を取得
2　特許等 (1)　特許申請中 「リハビリテーション用用具」	平成12年3月	本発明は、身体の動作機能を正常に発揮し得ない障害者や高齢者等に当該機能の回復と発現を容易にならしめるためのリハビリテーションに用いられる器具およびその利用プログラムに関するものである。この発明用具は、リハビリテーション医療や健康増進の場面において、音楽を利用した運動療法に使用する目的で開発された。内容としては、複数本の棒を結合させ枠を形成した構造物と片端に固着用部を持つ可撓性アームを備えた複数個の楽器からなり、該楽器を前記構造物の任意の位置、方向に取付けてなるリハビリテーション用用具である。 出願番号　特願2000-114436
3　実務の経験を有する者についての特記事項 (1)「住之江競艇場従業員健康づくり推進運動」事業への参加	平成15年4月 ～ 平成20年3月	大阪競艇施行者協議会が運営する「住之江競艇場従事員健康づくり推進運動」において、延べ1400人の頸肩腕障害、腰痛、そして肥満に関する調査と調査結果に基づいた健康指導に携わり、従事員の健康意識の向上に努めた。
(2)　平成16年度福山市運動普及推進事業調査研究および「健康ふくやま21」さわやか運動教室事業への参加	平成16年4月 ～ 現在に至る	福山市では、「健康ふくやま21」の具体的活動として、福山市民の運動習慣を増進することを目的とした運動普及推進事業を展開している。平成16年度からは、「さわやか運動教室」を福山市内の小学校区単位で開催している。事業内容としては、小学校体育館を使用して、運動の必要性についての啓発と具体的な運動方法としてウォーキングの基本と実技指導を行っている。また、各小学校区から10名の希望者を集め、より具体的な運動習慣の形成とそれによる効果を検証する疫学研究も同時進行させている。福山市内の成人では、その77%が運動不足を感じており、本事業によりその割合を50%までに抑えることを目標にしている。事前にアンケート調査を実施し、その結果に基づいて健康心理学の知識と各種技法を用いた介入により、目標を効果的に達成するよう取り組んでいる。

事項	年月日	概　　要
(3)　厚生労働省理学療法士・作業療法士国家試験委員会委員としての活動	平成18年4月 ～ 平成27年4月	厚生労働省の理学療法士作業療法士国家試験委員会の委員として国家試験作成に従事した。
(4)　重度認知症高齢者の感情反応と行動を手がかりにした基本的生活支援技術の開発	平成18年度 ～ 平成20年度 科学研究費補助金研究成果報告書（基盤研究B）	重度認知症高齢者の基本的な日常生活支援技術の開発を行い、その教育・研修プログラム開発により重度認知症高齢者のQOLの向上を図ることが研究の目的である。研究の結果、①認知症高齢者へのケア場面のビデオテープ分析から固有の感情反応・行動のレベルの存在を明らかにし、その尺度を用いてケアの質が測定可能である。②重度認知症高齢者に対する小集団回想法の有効性を明らかにした。③手織りプログラムの生活活性化に与える効果を明らかにした。④重度認知症高齢者とのコミュニケーションの具体的方法を明らかにした。以上の成果からコミュニケーションの糸口を探索する方法、重度認知症高齢者のサインを読解する方法等の具体的な援助技術研修プログラムを作成し、研修を実施し、概ね良好との評価を得た。 研究代表者：臼井キミカ 共同研究者：上西洋子、辻下守弘、佐瀬美恵子、白井みどり、佐々木八千代、兼田美代、津村智恵子、後藤由美子、山本美輪、山本裕子、川井太加子、鷹居樹八子、柴田幸子 担当部分：主に③の手織りプログラムの生活活性化に与える効果について、近赤外線分光法による脳イメージングを用いた高齢者の脳機能に及ぼす影響に関する研究を担当した。
(5)　性差と加齢を考慮した労働者の睡眠の質改善のためのセルフケア・プログラムの開発	平成24年度 ～ 平成26年度 科学研究費補助金研究成果報告書（基盤研究C）	本研究の目的は、労働者の睡眠の質における性差と加齢の影響を明確にし、性別と加齢に応じた睡眠の質改善のプログラムを開発することである。研究対象者は中規模事業場で働く35歳以上の男女であった。研究期間中の健康診断時期に調査を実施した。1年目の調査結果では、男性の睡眠の質には運動習慣、女性の睡眠の質には教育歴や喫煙状況が関連していた。2年目には、23項目の睡眠チェックリストを作成した。3年目には、睡眠の質改善のためのセルフケア・プログラムの効果評価を行った結果、介入群において3項目に改善が認められた。今後は産業保健スタッフが睡眠改善指導にどのように活用するかを検討する必要がある。 研究代表者：廣川空美 共同研究者：藤井保人、谷口敏代、辻下守弘 担当部分：男女の睡眠の質に関する睡眠チェックリストの作成と睡眠改善指導ビデオの作成および運動習慣が睡眠に及ぼす影響に関する研究を担当した。
(6)　介護老人保健施設でのパソコンを用いた介護職員指導に関する研究－行動分析学の枠組みによる移乗介助指導－	平成26年度 ～ 平成28年度 科学研究費補助金研究成果中間報告書（挑戦的萌芽研究）	介護老人保健施設において良質なサービスを提供することは入所高齢者の生活の質を高めるだけでなく、早期の在宅復帰を促す重要な事項である。本研究では、パソコンを用いたeラーニングシステムを構築し、職場や家庭で場所を選ばずに介護職員の移乗介助指導を可能とすることとその効果について検証することである。1年目では、介護老人施設おける介護指導の実態を調査し、移乗介助指導において職員間の達成度が異なることを明らかにした。現在2年目の研究では、この結果に基づき行動分析学の枠組みを用いたeラーニング教材の作成を行っており、現場における検証を準備している。3年目ではこのシステムの効果を検証する。 研究代表者：小林和彦 共同研究者：辻下守弘 担当部分：介護老人保健施設での介護状況を調査するとともに移乗介助指導におけるeラーニングシステムの開発を担当した。3年目では、開発したシステムの検証も担当する予定である。

事項	年月日	概　　要
4　その他 (1)　京都市立芸術大学大学院美術研究科美術専攻博士（後期）課程の博士論文審査委員	平成27年12月 ～ 現在に至る	京都市立美術大学大学院美術研究科美術専攻博士（後期）課程において、美術作品をリハビリテーション医療に活かす研究を博士論文の課題としている学生に対して、リハビリテーション医療に携わる研究者として博士論文の審査を行っている。平成28年2月には第1回の博士論文報告会があり、発表論文への試問を実施し、博士論文審査委員会において論文への評価と今後の課題について報告を行った。

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（著書） 1　腰痛の理学療法	共著	平成20年5月	三輪書店	近年、医療のみならず産業面にも多大な経済負担を与え、また高齢社会到来でますます増加傾向中の腰痛は、国の財政や産業基盤をも脅かす問題となっている。このような現状を踏まえ、本書ではいまだ解決策が見出されたとはいえない「腰痛」について、その最前線で活躍する研究者および臨床家が近年明らかになった知見を中心に科学的根拠に基づいて解説した。 （編者：伊藤俊一、鶴見隆正　分担執筆者：関口美穂、内田賢一、白土修、矢吹省司、辻下守弘、甲田宗嗣、岡崎大資、他18名） 担当部分：第3章第7節「労働従事者における腰痛とその指導」 労働従事者に生じる職業性腰痛を定義し、その実態ついて職業別、作業姿勢別に整理した。職業性腰痛の発症リスク因子をこれまで報告されている文献をレビューしながらまとめた。リスク因子は身体・人間工学的因子と心理・社会的因子に分け、自験例も含めて解説を行った。特に、心理・社会的因子についてはタイプA行動という行動特性や日常苛立ち事というストレス源が腰痛発症リスク因子として重要なことを指摘した。さらに、職業性腰痛に対する理学療法として応用行動分析学と行動指向型段階的活動プログラムを紹介した。 (pp. 168～178、単著) 担当部分：第4章第4節「慢性腰痛に対する認知行動療法」腰痛における痛みの認知と痛みの行動について解説し、認知行動療法の重要性と意義について論述した。また、認知行動療法の基礎理論である応用行動分析学に基づいて慢性腰痛患者の腰痛発症メカニズムを解明した。さらに、慢性腰痛に対する認知行動療法を導入する上での評価と技法について詳細に解説し、その実際については症例を供覧した。 (pp. 234～244、共著)

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
2　筋電図バイオフィードバック療法	共著	平成22年6月	金芳堂	リハビリテーション医療における筋電図バイオフィードバック療法について基礎から臨床までを解説した。本全体の編集を担当した。 (監修：エリック・ペパー、編者：辻下守弘、中川　朋　分担執筆者：エリック・ペパー、中川　朋、甲田宗嗣、平山秀和、工藤弘行、井川英明、鳥谷部太、辻下守弘、他10名) 担当部分：第1章「バイオフィードバックとは何か」 バイオフィードバック療法の歴史からリハビリテーション医療における位置づけを解説した上で、筋電図バイオフィードバック療法の応用例や普及の状況、そしてリハビリテーション医療に導入する利点などを解説した。 (pp.1～4、単著)
3　バイオフィードバック入門	単著	平成23年12月	秀和システム	腰痛、頭痛などの痛み、失禁・便秘から老い、ADD、うつなどといったきわめて広い範囲の病を、薬を使わずに自己コントロールでなおす「バイオフィードバック」治療法について解説した。バイオフィードバックとは、心拍計などの医療器具を使って心拍数、血圧、呼吸数、皮膚温、筋緊張、脳波などをモニタリングし、病状や症状を初期段階で発見し、呼吸法や瞑想など適切な対応をする治療法である。本書では、バイオフィードバックの理論とその実践を基礎から解説し、頭痛や腰痛、排泄トラブル、パニック障害、うつ状態、さらには集中力向上やメンタルトレーニングの方法などを解説しています。
4　医療福祉学の道標	共著	平成24年3月	金芳堂	本書は、「健康と病気」という問題に社会科学の側面からアプローチした。健康は医学だけでは守ることができないため、学際科学的，統合的，総合的視野から，「医療福祉学」という新しい学問が必要となることを言及した。 (編者：星野政明、高内克彦、土田耕司　分担執筆者：秋山智久、天野博之、安藤詳子、石村由利子、辻下守弘、他43名) 担当部分：第8章B「身体障害者への医療福祉の実践と課題」 身体障害者の定義と法的根拠、その実態などを概説した上で、身体障害者および身体障害児に対する医療福祉サービスの現状と課題について論説した。 (pp.100～104、単著)

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
5　日常生活活動学・生活環境学	共著	平成24年9月	医学書院	本書は、「日常生活活動学」と「生活環境学」の二部構成である。「日常生活活動学」は、総論でADLの歴史、概念、評価などの基本事項を解説し、各論で疾患別の評価方法とADL指導を具体的に提示し、「生活環境学」では、概念や法的諸制度、住宅改修や生活支援機器について解説した。 （編者：鶴見隆正、隆島研吾　分担執筆者：秋若山佐一、林　克郎、辻下守弘、他25名） 担当部分：第1章第4節「ADLの運動学的分析」 運動学の基本事項を整理した上で、日常生活動作を運動学的に分析するための基礎を詳細に解説した。また、起き上がりや立ち上がりなどの動作に対する運動学的分析を具体例も上げながら論述した。 （pp.36～51、単著）
6　脳卒中理学療法の理論と技術	共著	平成25年6月	メジカルビュー社	本書は、臨床の場で用いられる実践的な理学療法と、その基礎となる解剖学・生理学の知識をはじめ、病態生理の知識、理学療法評価の技術、運動処方および生活指導のための理論的背景と技術を解説した。 （編者：原　寛美、吉尾雅春　分担執筆者：渡辺雅彦、中村　元、辻下守弘、他22名） 担当部分：第Ⅴ章「理論と理学療法」の中の「バイオフィードバック療法」を担当した。 バイオフィードバック理論の基礎となる学習理論を解説した上で、バイオフィードバックが使う各種モダリティーや国内の代表的な機器について紹介した。また、脳卒中片麻痺患者に対するバイオフィードバックとニューロフィードバックについても論述した。 （pp.445～456、単著）
7　生活支援の基礎理論	共著	平成27年4月	光生館	本書は、地域での生活を支援する介護福祉士として必要な基礎知識を，保健，心理，栄養，居住環境，家族支援などの関連分野から体系的に学習できるように解説している。 （編者：上之園佳子、谷口敏代、鈴木聖子、分担執筆者：本名靖、太田貞司、土室修、辻下守弘、他16名） 担当部分：第５章「介護福祉の基礎となる心理学」の中の「学習」を担当した。 学習の定義と介護福祉領域で必要となる重要事項を解説した上で、認知心理学的な考え方と行動分析学的な考え方に分けて各理論を具体例を入れながら解説した。 （pp.98～102、単著）

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
8　痛みのケア	共著	平成29年3月	ピラールプレス	本書は、看護現場で求められる痛みのケアについて、哲学・倫理学的理解と痛みの理論からはじまり、痛みの治療と看護ケアについて解説した上で、看護実践事例について検討されている。 (編者：守本とも子　分担執筆者：池辺寧、沖本克子、梶村郁子、辻下守弘、他15名) 担当部分：第Ⅱ部「痛みの理論」第５章「痛みの行動科学的理解」を担当した。 看護現場における痛みの生物医学的アプローチの問題点を指摘した上で、慢性的な痛みを行動科学的にアプローチすることの重要性について解説している。また、痛みの社会的強化により出現する痛み行動に対する理解と看護現場での具体的なケアの方法論について提案している。 (pp. 34～41、単著)
(学術論文) 1　疼痛を有する対象者の包括的理学療法 [筆頭論文] （査読付）	共著	平成20年2月	理学療法ジャーナル第42巻 平成20年2月 pp. 113～121	疼痛を有する対象に対して身体的アプローチだけでなく心理・社会的アプローチも含めた包括的理学療法を行うことの意義を論述した。まず、慢性痛の多面的理解について解説し、疼痛とパーソナル・コントロール、痛み行動と随伴性といった鍵概念を解説した上で、理学療法士が果たす役割を論述した。この中では特に応用行動分析学を用いた慢性疼痛のアプローチを紹介した。また、応用行動分析学に基づいた包括的理学療法の方法論を解説した上で、具体的なアプローチについては事例を供覧しながら説明を加えた。(9頁) (分担執筆者：辻下守弘、永田昌美、甲田宗嗣、鶴見隆正、川村博文) 担当部分：症例への介入および論文の構成と論文の大部分の執筆を担当した。
2　運動行動変容段階および運動態度が女性の更年期症状に及ぼす影響 （査読付）	共著	平成20年3月	甲南女子大学研究紀要第1号 平成20年3月 pp. 53～60	閉経前後女性事務員335名(平均年齢51.0±8.2歳)に対してアンケート調査を行い、運動行動変容段階(運動段階)および運動態度が更年期障害に及ぼす影響を検討した。年齢、体格、月経状態、更年期症状、運動段階、運動態度、うつ傾向の調査結果より、運動段階と運動態度が良好であれば更年期症状は軽症であり、運動の習慣化は更年期症状の発症を抑制する可能性が示唆された。また、閉経前ではうつ傾向が、閉経後では運動態度が更年期症状を強めることが判明し、多重ロジスティック回帰分析でも更年期症状を発症させる有意なリスク要因として運動態度の不良とうつ傾向ありが挙げられた。更年期症状の発症と重症化の予防には、運動段階を維持期にステップアップさせる介入や、うつ傾向の緩和と運動態度の改善を促すアプローチが必要と考えられた。(8頁) (分担執筆者：永田昌美、青田絵里、辻下守弘) 担当部分：調査票の作成と配布及び回収とデータの多変量解析を担当した。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
3　高コレステロール血症の運動療法の効果とその阻害因子に関する検討 （査読付）	共著	平成20年3月	理学療法の臨床と研究 第17号 平成20年3月 pp.25～28	空腹時血清総コレステロール値が200mg/dl以上の運動習慣のない中年者40例を対象として、運動強度90%AT、運動頻度を週2回で、3ヵ月間、有酸素運動、柔軟性運動、筋力運動を組み合わせた運動を実施し、高コレステロール血症に対する運動療法の効果を検証した。また同時に、運動療法の阻害因子についても検討した。血清総コレステロール値は、初診時に比較して3ヵ月後には有意な減少が認められた。運動療法の阻害因子としては、高血糖のみに有意な関連性が認められた。以上の結果により、高コレステロール血症に対する運動療法の有効性が認められたが、高血糖を合併している場合は運動療法の効果を得がたい可能性が考えられた。(4頁) (分担執筆者：仁田靖彦、辻下守弘、藤村宜史、沼田義弘、丸橋暉) 担当部分：運動負荷試験の実施と統計処理及び論文執筆の一部を担当した。
4　理学療法を取り巻く「認知」の最前線	単著	平成20年10月	理学療法ジャーナル 第42巻第9号 平成20年10月 pp.791～798 （査読あり）	脳科学が進歩し、理学療法士も「認知」という言葉をよく使うようになったが、「認知」という言葉の定義があいまいなまま使われていることも多くなっている。本論文では、認知とは何かを理学療法学の立場から定義した上で、認知領域、認知障害、認知症、認知リハビリテーション、認知療法と認知行動療法、そして認知運動療法などリハビリテーション領域で認知とつく用語を論説した。最後には、理学療法学において認知および認知的アプローチが抱える課題や方向性について論述した。(8頁)
5　骨関節疾患の理学療法とバイオメカニクス　日常生活動作、応用動作を中心に	共著	平成20年11月	理学療法ジャーナル 第42巻第9号 平成20年10月 pp.821～827 （査読あり）	本研究の目的は、バイオメカニクス研究に基づいて骨関節疾患に対する理学療法を検討することである。日常生活動作や応用動作におけるバイオメカニクスについて、2例の健常者を対象として炊事動作中の膝関節角度をホルター電気角度計を持ちて測定した。その結果、2例であっても動作中の膝関節角度は異なり、動作のバイオメカニクスには個人差のあることがわかった。また、高齢者を対象として、椅子からの立ち上がり動作を三次元動作解析装置で分析した結果、転倒経験によって身体重心の移動に有意な違いのあることを明らかにした。(7頁) (分担執筆者：甲田宗嗣、辻下守弘、川村博文、鶴見隆正、新小田幸一、山田直樹) 担当部分：高齢者を対象とした三次元動作解析装置での解析を担当した。
6　理学療法士のための行動分析学入門	単著	平成20年12月	理学療法兵庫 第14号 平成20年12月 pp.1～7	本論文では、理学療法士に必要な行動分析学の知識と技法について論述した。まず、行動分析学の理論について、スキナーが提唱した随伴性という考え方を中心に解説し、理学療法における応用可能性を言及した。さらに、臨床場面で遭遇する様々な問題を呈した患者に対する具体的な行動分析学的アプローチの有効性について、事例報告を通して検証した。最後に、行動分析学に基づく人間観についてエコロジカルな視点から論述した。(7頁)

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
7　座位作業を主体とした女性従事員の職業性腰痛と心理・社会的要因および生活習慣との関連性について （査読付）	共著	平成21年3月	甲南女子大学研究紀要 （看護学・リハビリテーション学編） 第2号 平成21年3月 pp.89～97	本研究の目的は、座位作業を主体とする女性従事員の職業性腰痛と生活習慣および心理・社会的なストレスとの関連を明らかにすることである。対象は、某公共遊技場にて座位作業を主体とした労務に従事する女性1326名であり、最終的には1324名(採択率99.8%)のデータを分析に用いた。多変量解析の結果、オッズ比が有意であった項目は、BMIの「肥満体重」がオッズ比1.43、頸肩腕症状の「陽性」がオッズ比6.46、日常苛立ち事の「陽性」がオッズ比1.63、そして不健康な生活習慣の「(1)不規則な生活」がオッズ比1.51、「(5)飲酒習慣」がオッズ比1.34であり、これらの項目が腰痛と有意に関連していることがわかった。(9頁) (分担執筆者：辻下守弘、永田昌美、甲田宗嗣、 田辺暁人) 担当部分：調査票の作成から統計処理と論文作成の全般を担当した。
8　特別養護老人ホーム入所者における車いす座位の問題点に関する検討 （査読付）	共著	平成21年3月	甲南女子大学研究紀要 （看護学・リハビリテーション学編） 第2号 平成21年3月 pp.99～106	高齢者が長時間快適に座るために必要な車いすの機能を検討する目的で、車いす座位に問題のある特別養護老人ホーム入所者と30代女性を対象に、車いす着座中の座面および背もたれの圧力分布測定を行った。高齢者では座面において坐骨と仙尾骨に高圧力部が観察され、背もたれにおいては接触面積が狭く、胸椎、肩甲骨、腰椎、骨盤のいずれかに限局して高圧力部が観察され、高齢者特有の円背、骨盤後傾が圧力分布に大きく影響していることが分かった。これらの結果から、高齢者の車いすを検討する際には、座面における圧力分布を均等にすること、および背もたれの接触面積を広くして体幹をサポートすることに配慮する必要性が示唆された。(8頁) (分担執筆者：永田昌美、辻下守弘、 甲田宗嗣、 吉田正樹) 担当部分：高齢者の背部座圧分布の計測とデータ処理、論文作成の一部を担当した。
9　リハビリテーション医療現場におけるBFの応用可能性について （査読付）	単著	平成21年10月	バイオフィードバック研究 第36巻第2号 平成21年10月 pp.173～177	リハビリテーション医療におけるバイオフィードバック療法の意義や位置づけを論じた上で、バイオフィードバック療法の使用実態について検討した。また、一般的に使われている筋電図バイオフィードバック療法の神経疾患や整形外科疾患に対する適用と問題点、そして最近注目されている平衡機能障害に対するバイオフィードバック療法の方法論と効果について検討した。最後に、センサーとアンプの技術革新により可能となったマルチチャンネルバイオフィードバック療法についての可能性を論じた。(5頁)

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
10　モチベーションを高める行動分析学的アプローチについて	単著	平成21年12月	理学療法兵庫 第15号 平成21年12月 pp.18～24	本論文では、理学療法士の臨床において避けることのできない患者のモチベーションに関して考察した。まず、行動分析学の立場から理学療法臨床におけるモチベーションの機能を検討した上で、患者のモチベーションを高めるため具体的な行動分析学的アプローチを提示し、実際に介入した事例の分析を通して、行動分析学的アプローチの有効性についても論述した。最後に、理学療法臨床における行動分析学的アプローチは、エコロジカル（生態学的）アプローチつまり環境調整による行動変容介入であることに言及して、今後の理学療法臨床への応用可能性を考察した。(7頁)
11　女性公共遊技場従事員の腰痛発症における心理・社会的要因および生活習慣に関する縦断的研究 （査読付）	共著	平成22年3月	甲南女子大学研究紀要 （看護学・リハビリテーション学編） 第4号 平成22年3月 pp.59～67	本研究は、女性従事員の腰痛発症における心理社会的要因および生活習慣に関する縦断研究である。対象は、某公共遊技場に勤務する女性従事員を対象として、1997年（n=1326名、以下基本調査）と2001年（n=910名、以下追跡調査）に腰痛と頸肩痛および生活習慣に関する質問紙調査を実施した。研究の結果、頸肩痛の粗オッズ比が1.94（95%CI 1.24-3.04）、調整オッズ比が1.82（95%CI 1.21-3.83）、日常いらだち事の粗オッズ比が2.39（95%CI 1.22-4.67）、調整オッズ比が2.13（95%CI 1.13-4.32）、コーヒー等の摂取習慣の粗オッズ比が0.59（95%CI 0.36-0.94）、調整オッズ比が0.64（95%CI 0.42-0.96）であった。以上の結果から頸肩腕痛や日常いらだち事の存在およびコーヒー等の摂取習慣が腰痛発症のリスク要因となることがわかった。(9頁) (分担執筆者：辻下守弘、永田昌美、甲田宗嗣) 担当部分：調査票の作成から統計処理および論文作成の全般を担当した。
12　Relationship between life satisfaction and sympathovagal balance in healthy elderly males at home at night （夜間在宅における健常老年者の生活満足度と交感神経バランスとの関連性） （査読付）	共著	平成24年10月	Health Vol.4 No.11 pp.1068-1072	本研究の目的は、老年者における夜間在宅での生活満足度が交感神経バランスと関連するかを検討することであった。健常老年者39名を対象として、アクティブトレーサーにより72時間の心拍変動と身体活動量を計測した。測定の結果、生活満足度と交感神経バランスとの間には-0.47の有意な相関関係を認めた。(5頁) (分担執筆者：吉野公三、守本とも子、板垣孝弘、池谷茂隆、永田昌美、辻下守弘) 担当部分：データ収集から統計処理および論文の結果部分を担当した。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
13 Effects of a hardness discrimination task in failed back surgery syndrome with severe low back pain and disturbed body image: case study （身体像の認知課題作業が背部の術後症候群による重度な腰痛症に対する影響：事例研究） （査読付）	共著	平成24年10月	Journal of Novel Physiotherapies 2012 Open Access	本研究では背部の術後に重度な腰痛を発症した20歳の女性に対して認知課題による疼痛緩和のアプローチを行った。初期の疼痛はNRSで10と最大の痛みを訴えていた。また、身体像の認知に障害を持っていた。介入として1日20分、週6日の認知課題のトレーニングを4週間にわたり行ったところ、痛みがNRSで5と半分に緩和され、歩行や日常生活動作能力も改善していた。(6頁) (分担執筆者：西上智彦、奥埜裕之、中野英樹、大村裕、清水ミッシェルアイズマン、辻下守弘、壬生彰、牛田孝博) 担当部分：症例の理学的評価と訓練および論文の結果部分を担当した。
14 運動器疾患を有する高齢者の生活機能に対する理学療法の取り組み　通所リハビリテーション利用者の心理・社会的側面に着目して （査読付）	共著	平成26年4月	理学療法 第31巻第4号 平成26年4月 pp.376～382	1.運動器疾患を有する高齢者の生活機能の改善には、高齢者の身体活動の開始と継続に関する要因を理解する必要があり、心理・社会的要因が大きく関連している。2.どのような治療を選択するにしても、高齢者個々の心理・社会的要因を認識し、オーダーメイドの治療を実施することが必要である。3.高齢者の心理・社会的要因を認識するための第一歩は、対象者とのコミュニケーションである。単なるコミュニケーション技法を用いるのではなく、対象者を支えている信念や認識に触れる関わり方がオーダーメイドの治療を実施できた。(7頁) (分担執筆者：大門恭平、米田大人、辻下守弘、川村博文) 担当部分：高齢者の運動機能に関する要因の分析と論文の一部執筆を担当した。
15 Central neural mechanisms of interindividual difference in discomfort during sensorimotor incongruence in healthy volunteers: an experimental study （健康対象者における感覚運動不一致による不快感が個人差に関する中枢神経メカニズムについて：実験的研究） （査読付）	共著	平成26年10月	Rheumatology 2014 Open Access	本研究の目的は、感覚運動認知の不一致に関する個人差に関して、その中枢神経メカニズムを明らかにすることである。対象は、18名の健常若年女性であり、感覚運動認知の不一致課題を独自に作成し、その認知課題中における脳波を分析し、脳内メカニズムをLORETA法によって解析した。その結果、不一致の個人差は前部帯状回および後部帯状回の活動状況の違いと一致していることがわかった。　(8頁) (分担執筆者：分担執筆者：西上智彦、中野英樹、大住道弘、辻下守弘、壬生彰、牛田孝博) 担当部分：データ収集から統計処理および論文の結果部分を担当した。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
16　バイオフィードバックの発展に向けての提言　日本バイオフィードバック学会企画委員会からのアンケート結果報告 （査読付）	共著	平成26年10月	バイオフィードバック研究 第41巻第2号 平成26年10月 pp.95～102	2012年の第40回学術総合においてアンケート調査を実施した。学術総会に参加した25人の学会員から回答を得た。その結果、1.医学・工学・心理学の研究面の連携に関して学会の存在意義を認める回答が多かった。2.学会に望むことについては、次世代を担う若い研究者・学生が積極的に参加できる環境づくりを指摘する意見が目立った。3.会員以外には、バイオフィードバックについて正しく分かりやすく理解してもらう情報提供の必要性を訴える意見が多かった。以上の結果に基づいて今後学会の方向性に関する提案を行った。(8頁) (分担執筆者：中尾睦宏、大須賀美恵子、廣田昭久、佐久間春夫、志和資朗、竹林直紀、辻下守弘) 担当部分：アンケート調査の作成からデータ整理と統計分析および考察の一部の執筆を担当した。
17　高齢者に対する視覚誘導性到達課題を用いた音楽運動療法の開発とその効果に関する研究 ［筆頭論文］ （査読付）	共著	平成27年3月	医療福祉情報行動科学研究 第3号 平成27年3月 pp.27～32	本研究では、視覚誘導性到達運動課題を用いた音楽運動療法を開発することとこれが高齢者のバランス能力に及ぼす影響を明らかにすることであった。対象は70歳以上の健常高齢者16名であり、実施群8名と対照群8名の2群に割り付けた。評価は機能的バランス尺度（BBS)、TUG、FRTおよび静的重心動揺計と動的姿勢制御検査とした。5回の練習後、BBS、FRTそして動的姿勢制御検査の有意な改善を認めた。(6頁) (分担執筆者：辻下守弘、川村博文、永田昌美、前田吉樹) 担当部分：研究全般を実施し論文全体の執筆を担当した。
18　Kinectセンサーを使った仮想環境が高齢者の運動機能に及ぼす影響について （査読付）	共著	平成27年4月	バイオフィードバック研究 第42巻第1号 平成27年4月 pp.57～62	Microsoft社により開発されたKinectセンサーを使った風船割りゲーム「キネリハシステム」を使って高齢者にゲームを定期的に行ってもらい、仮想環境が高齢者の運動機能にどのように影響を及ぼすかを検討した。デイケアに週2回以上通う高齢者23名に対しキネリハシステムを週2回以上4週間実施した。この前後に(1)10m歩行 (2)TUG(3)5StepTestを測定し4週間完遂した者について結果を比較した。その結果、継続してゲームを行い施行期間の最後まで継続してやり遂げ(1)～(3)を測定できた者は7名だった。ゲーム後の結果が(2)と(3)において有意に向上していた($p<0.05$)。(6頁) (分担執筆者：小貫睦巳、有田元英、井上悦治、辻下守弘) 担当部分：データ収集から統計処理および論文の結果と考察の一部の執筆を担当した。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
19　介助者による介助の経時的変化に基づいた介助評価方法の検討－認知症を有する高齢障害7 者への介護職員による移乗介助場面の行動論的分析－ （査読付）	共著	平成27年12月	理学療法科学 第30巻第6号 平成27年12月 pp. 933-937	車椅子からベッドへの移乗課題を用い、介助を基準に被介助者の遂行レベルを査定する評価法の妥当性を行動論の視点から検討した。対象は施設介護職員および入所中の認知症を有する高齢障害者とした。介助者の4段階の介助系列をもとに6段階の遂行レベルを設定し、各単位行動が遂行されたときの介助を遂行機会ごとに図示し、介助の経時的変化を被介助者の遂行レベルの推移の視点から分析した。その結果、被介助者による遂行過程は単位行動ごとに異なった遂行レベルを推移しており，従来ADL評価法とは視点の異なる情報が得られた。 (分担執筆者：小林和彦、辻下守弘) 担当部分：症例の評価と介入指導および論文の結果と考察の一部の執筆を担当した。
20　生体センシング技術を使った仮想現実によるゲームが高齢者の運動機能に及ぼす影響について （査読付）	共著	平成27年12月	理学療法科学 第30巻第6号 平成27年10月 pp. 811-815	生体センシング技術を使ったゲームを高齢者に行わせ仮想現実を利用したゲームが高齢者の運動機能にどう影響を及ぼすかを予備的調査した。高齢者23名に対しゲームシステムを週2回以上4週間実施した。4週間実施前後の①10m歩行②TUG③5StepTestの3つのパフォーマンステストの結果及びゲームの測定機能を利用したゲームに対する平均反応速度とゲームの成功率について比較した。その結果、②と③及び平均反応速度・成功率に於いて施行後が施行前に比べ有意に向上していた。またゲーム完遂者に運動習慣があるものが有意に多かった。 (分担執筆者：小貫睦巳、有田元英、井上悦治、辻下守弘) 担当部分：データ収集から統計処理および論文の結果の一部の執筆を担当した。
21　中年女性に出現する肩こりと腰痛の重複症状の実態とその関連要因に関する研究 （査読付）	共著	平成28年3月	甲南女子大学研究紀要（看護学・リハビリテーション学編）第10号 平成28年3月 pp. 1-10	本研究では、パソコン操作を主体とした作業に従事する中年女性従業員335名を対象として、肩こりと腰痛の重複症状が出現する実態を明らかにするとともに、その身体的、心理的、社会的な要因との関連性について検討した。症状なし群、肩こり単独群、腰痛単独群、そして両者重複群という4群間において各要因を比較したところ、分散分析により有意な主効果を認めたのは、年齢、運動態度、食行動、K6、そしてクッパーマン指数であった。多重ロジスティック回帰分析の結果、肩こりと腰痛の両者重複と関連する要因は、低いBMI、高いK6スコア、そして高いクッパーマン指数であった。 (分担執筆者：辻下 守弘、永田 昌美、芝寿実子、前田 吉樹、川村 博文、小貫 睦巳) 担当部分：データ収集から統計処理および論文執筆を担当した。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
22　心身のストレスおよび作業量からみた体圧移動で座面が変化するERチェアの評価　健常成人女性および高齢者を対象としたプレテストの結果から （査読付）	共著	平成28年3月	甲南女子大学研究紀要（看護学・リハビリテーション学編）第10号 平成28年3月 pp.19-28	本研究は、高齢者用に開発したERチェアと通常の椅子を比較し、対象者の心身のストレスにどのような影響をもたらすかを検証することとした。被験者は、参加条件を満たした健常成人女性6名と高齢者8名の計14名である。研究デザインはクロスオーバー・デザインとし、被験者にはERチェアと通常の椅子の2種類の椅子に座った際に5つの課題を課した。分析の結果、主観的疲労感の全身倦怠感において、被験者全体の操作実施前後の平均値はERチェアが減少したが、通常の椅子は増加し、平均値の差の比較で統計的に有意な差が認められた(p=.04)。また、唾液アミラーゼ量において、高齢者の操作実施前後の平均値はERチェアがやや減少し、通常の椅子が増加して統計的に有意な差が認められたが(p=.04)、交互作用が認められた。 (分担執筆者：丸尾 智実、兼田 美代、臼井キミカ、辻下 守弘、速水 裕子) 担当部分：データ収集から統計処理および論文の結果の執筆を担当した。
23　骨盤臓器脱術後の便失禁症状に骨盤底筋の筋電図バイオフィードバック療法が奏効した症例 （査読付）	共著	平成28年4月	バイオフィードバック研究 第43巻第1号 平成28年4月 pp.19-26	今回、骨盤底筋の選択的筋収縮が困難であった便失禁を有する症例に対して、骨盤底筋の筋放電を確認しながら筋収縮を確認し、筋収縮を調整する筋電図バイオフィードバック療法が症状の改善に有効であったので報告した。症例は、膀胱瘤により骨盤臓器脱術を受けた70歳の女性である。骨盤臓器脱の症状は手術により改善したが、運動時にガス程度の便失禁が4～5回以上認められた。評価および介入は、Thought Technology社製のMyotrac3を用い、骨盤底筋と腹筋を分離して筋収縮させることを目的として実施した。10セッション実施の結果、持続的収縮においては8セッションから骨盤底筋のみを収縮させることが可能となった。運動時の失禁頻度は6セッション時から減少した。 (分担執筆者：松谷 綾子、青田 絵里、西上智彦、辻下 守弘、服部 耕治、木村 俊夫) 担当部分：症例の評価と治療および論文の症例報告と考察の一部の執筆を担当した。
24　行動分析学の枠組みを用いたコンピューターシミュレーション教材による介護老人保健施設介護職員への介助指導 － 高齢障害者に対するベッドから車椅子への移乗介助指導効果の検討 － （査読付）	共著	平成28年8月	行動療法研究 第42巻第2号 平成28年8月 pp.201-213	本研究においては、行動分析学の視点から理論および介助の方法論を解説したパソコン上で作動する教材を開発し、介護職員3名に自己学習とセルフチェックを行ってもらい、介護老人保健施設入所者に対するベッドから車椅子への移乗介助技能への効果を、単一事例実験計画法を用いて検証した。その結果、3名とも適切な介助の頻度が増加(平均46.2%)し、彼らが日頃介助している入所者も、より少ない介助で移乗が行えるようになった。また、移乗介助指導の効果が同じ入所者の脱衣介助に反映されることも確認された。さらに、指導プログラムの内容や意義に関しても比較的良好な受け入れや評価が得られた。以上から、従来の指導方法によるデメリットを補完する役割を果たすことができ、本教材が介護職員指導における効果的な方法論として位置づけられる可能性が示唆された。 (分担執筆者：小林和彦、辻下守弘) 担当部分：共同研究につき本人担当部分抽出不可能。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
25　疼痛に対する物理療法・運動療法	共著	平成28年8月	The Japan Journal of Rehabilitation Medicine 第53巻第8号 平成28年8月 pp.604-609	本論文では、疼痛に対する治療としての物理療法、運動療法について、有効性に関わる理論的な裏付けから臨床のエビデンスを交えて検討した。その結果、急性痛と慢性痛とでは、対応が異なり、急性痛には過度な不活動を避け、原因となる組織損傷の治療を下級的早期に進めることと、可能な限り疼痛を抑制し長期化を阻止することが重要であることが分かった。また、慢性痛では、感覚面に着目する以外に、情動面や認知面などの多面的、複合的な側面での特性の認識理解が不可欠であり、ADLやQOL向上を目的として、TENSなどの物理療法、運動療法、学際的集学的治療を導入することが重要であることがわかった。 (分担執筆者：川村博文、西上智彦、伊藤健一、大矢暢久、辻下守弘) 担当部分：文献収集と整理および論文の慢性疼痛に関する部分の執筆を担当した。
26　インタラクティブ・メトロノーム法の紹介とリハビリテーションへの応用可能性	単著	平成28年9月	奈良学園大学紀要 第5集 平成28年9月 pp.1-9	本論文では、運動・認知機能のリハビリテーションに欠けていた脳内時計と時間情報処理能力を高めるというコンセプトを導入した新しいトレーニング方法であるインタラクティブ・メトロノーム法（Interactive Metronome®：以下IMと略す）について、その歴史、原理と方法、トレーニングの手順、そして科学的根拠を概説した上で、リハビリテーションへの応用可能性について解説した。IMの利点は、リズム音に手と足の動きを同調させてタイミングをとるといった非常にシンプルなトレーニングであり、2歳程度の幼児から高齢者まで適用範囲が広く、生体への侵襲も全くないため、従来のリハビリテーションへ併用して使用可能なことである　ただし、現在の問題点は、科学的根拠を裏付けるIMの臨床研究が国際的にも不足していることやIMシステムが日本における医療機器の薬事承認を得てないことであった。
(その他) 1　行動変容法を用いた転倒予防教室の効果［会議録］	共著	平成19年5月	The Japanese Journal of Rehabilitation Medicine 第44巻Suppl p.S449	三原市で開催した転倒予防教室の効果について報告した。本教室では継続性を高めるために応用行動分析学を導入したところ、参加者の多くが継続性を維持することで体力向上が認められ転倒予防の目的を果たすことができた。(1頁) (共同研究者：辻下守弘、鶴見隆正、川村博文、菅原憲一、田辺暁人) 担当部分：共同研究につき本人担当部分抽出不可能。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
2　手織りプログラムへの参加が認知機能の活性化に与える影響 ［口頭発表］	―	平成22年1月	第14回日本在宅ケア学会学術集会（東京） p. 94	Sシルバー人材センターに登録中の58歳から77歳の女性で、手織り機を用いて作品を作成するプログラム参加者43人を対象に、週1回1クール3ヶ月間のコースを2回実施した結果、事象関連電位P300と近赤外線分光法を用いた脳イメージングによる測定で、前頭前野の左側部が有意に活性化していることが明らかとなった。 （共同研究者：臼井キミカ、中川知音、丸山麻衣、佐瀬美恵子、兼田美代、辻下守弘、山口道弘、佐々木八千代、白井みどり、上西洋子、津村智恵子） 担当部分：事象関連電位P300と近赤外線分光法による脳イメージング測定を担当した。
3　膝蓋大腿関節機能不全に対する筋電図バイオフィードバック療法の一経験 ［口頭発表］	―	平成25年4月	第41回日本バイオフィードバック学会学術集会（神奈川） バイオフィードバック研究第40巻第1号2013年 p. 88	交通事故により膝蓋腱損傷を受傷し，再建術後に膝蓋大腿骨腎機能不全となった症例に対して筋電図バイオフィードバック療法（以下BF と略す）を実施し、歩行障害の改善に著効を認めたので、その実施方法と経過について報告した。退院時には、不安定性や疹痛もなく、階段昇降やスクワット動作も問題なくスムーズ に可能となっていた。 （共同研究者：辻下守弘、西上智彦、笹田朋香、 山本昇吾、孫 康基、梶原沙央里、田辺暁人） 担当部分：症例の評価から治療および論文の執筆まで研究の全般を担当した。
4　高齢者に対するキネクトセンサーを用いたインタラクティブ・リハビリテーションの効果 ［口頭発表］	―	平成26年4月	第42回日本バイオフィードバック学会学術集会（東京） バイオフィードバック研究第41巻第1号2014年 p. 50	本研究の目的は、高齢者を 対象としてキネリハを用いた運動トレーニングを実施し、全身の機能的身体運動能力やバランス能力に及ぼす 影響および認知脳機能に対する効果について検討することであった。対象は、認知症や中枢神経系疾患のないことが確認された健常高齢者3名であった。キネリハの所要時間は休息も入れて約15分とし，週3回の頻度で2週間継続した。キネリハの結果3名ともにFRTはリーチ距離が改善し、TUGは所要時間が短縮していた。ファイブ・コグテストは手先の運動スピードと注意分割機能が3名とも向上していた。 （共同研究者：辻下守弘、川村博文、西上智彦、松谷綾子、井上悦治） 担当部分：症例の評価から治療および論文の執筆まで研究の全般を担当した。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
5　認知症患者に対するインタラクティブ・メトロノームの症例報告 ［口頭発表］	―	平成27年3月	第1回認知症の早期発見、予防・治療研究会（東京） 抄録集 p.14	本研究では、認知機能の改善を目的としたIMトレーニングが、高齢者の認知症に対しても同様の効果が期待できると考え応用を試みたので報告する。対象は、IMトレーニングを3ヶ月間継続できた認知症高齢者2名とし、認知症の評価には、改訂長谷川式簡易知能評価スケール（HDS-R）とIMの専用ソフトに内蔵されているミリ秒単位でタイミング誤差を測定する評価ツールを使用した。IMは、1セッション約20分とし、提示される1分間54のテンポに対して正確にタイミングを合わせて両手、左右片手といった3種類のリズム運動を週3回、3ヶ月間実施した。被験者2名は、IMに対する意欲が3か月間維持され、トレーニング開始時に比較して、タイミング誤差が大幅に短縮し、それに伴ってHDS-Rの改善も認められた。IMは、認知症の認知機能の改善にも効果が期待できる。
6　タイミング誤差のフィードバックトレーニングが時間認知に及ぼす影響 ［口頭発表］	―	平成27年4月	第43回日本バイオフィードバック学会学術集会（つくば） バイオフィードバック研究第42巻第1号2015年 p.85-86	本研究では、注意欠陥多動性障害（ADHD）と認 知症といった代表的な認知機能障害に対してタイミング誤差のフィードバックトレーニングを継続的に実施する機会を得た。対象は、ADHDの中学生1名とアルッハイマー型認知症の高齢者1名であった。トレーニングには、インタラクティブ・メトロノー ム法（IM）を用いた。IMは、1セッション約30分とし、提示されるテンポに対して正確にタイミングを合わせてリズム運動を行う課題を8週間で合計56セッション実施した。その結果、ADHDではセッション中期以降でタイミング誤差が小さくなり、認知症ではセッション中期で急激にタイミング誤差が小さくなっていた。 （共同研究者：辻下守弘、西上智彦、松谷綾子、青田絵里） 担当部分：症例の評価から治療および論文の執筆まで研究の全般を担当した。

教　育　研　究　業　績　書

平成 29年 3月 31日

氏名　　服部　律子

研究分野	研究内容のキーワード
看護学(生涯発達看護学)	母性・女性看護、助産学

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　要
1　教育方法の実践例		
大学院 (1)　ディスカッションの導入	平成15年4月～ 平成20年7月	名古屋市立大学大学院看護学研究科「性・生殖看護学特論Ⅱ」（大学院博士前期課程1年次配当、半期、2単位）において周産期、特に産褥期を中心に、心身のアセスメント方法や心身の関連性についてディスカッションを中心とした授業を行っている。当番制で毎回1名の学生が設定されたテーマにあわせて発表を行い、教員がさらにそれに関連した国内外の文献を紹介し、それらに基づいてディスカッションを行う。このことにより、学生の臨床経験等に基づいた意見だけに偏重することなく、科学的根拠に裏付けされた具体的な看護実践についてディスカッションすることができるようになった。また、授業で取り扱ったアセスメント方法を、看護実践場面で具体的にどう活用するのかについてもディスカッションできるようになった。
(2)　双方向授業	平成15年10月～ 平成21年3月	名古屋市立大学大学院看護学研究科「性・生殖看護学演習」（大学院博士前期課程1年次配当、半期、2単位）は文献のクリティークによる研究疑問の設定を行う科目である。学生が興味をもったテーマ、なかでも周産期を中心とした女性の健康に関するテーマを担当し、双方向的授業を試みた。学生が興味をもっているテーマや疑問を抱いている内容を出してもらい、それに関する国内外の文献を紹介しクリティークを行う。社会人学生がほとんどであるので、時にはe-mailを活用しながら演習を進めている。双方向的に進めることにより、研究疑問の設定や研究方法の検討の過程において、学生の興味や疑問が明確になり、それを発展させたり解決できるよう工夫した。
大学院(助産学の科目)・看護学部・看護短期大学部・専門学校 (3)　ロールプレイの活用	平成8年4月～ 平成27年7月	名古屋市立大学看護短期大学部専攻科助産学専攻講義・演習科目「助産診断・技術学Ⅱ」（半期、必修科目、3単位、専攻科生15人クラス）、名古屋市立大学看護学部演習科目「助産診断・技術学Ⅰ」（４年次配当、半期、選択科目、2単位、助産選択科目履修生8人クラス）ならびに「助産診断・技術学Ⅱ(4年次配当、半期、選択科目、3単位、助産選択科目履修生8人クラス)、名古屋市立大学大学院看護学研究科博士前期課程(助産師国家試験受験資格取得コース)講義・演習「助産実践演習Ⅰ」（１年次配当、半期、必修科目、2単位、コース選択学生11名、2単位）、愛知県医師会立名古屋助産師学院講義・演習科目「助産診断・技術学Ⅰ」（通年、必修科目、1単位、助産学生20～22名）ならびに「助産診断・技術学Ⅱ」（通年、必修科目、2単位、助産学生20～22名）、椙山女学園大学看護学部演習科目「母子支援看護論演習Ⅱ(母性)」（半期、必修科目、1単位）において実践してきた。

事項	年月日	概　　要
		これらの科目の中でも、学生が特に苦手とする観察技術や保健指導技術の教育において、ロールプレイを取り入れた。学生は妊産婦役と看護師・助産師役に分かれ、提示された場面設定・条件を基に診察や保健指導を展開し、終了後全体でディスカッションする。 このことにより、看護者としての行動を客観的に観察するだけでなく、妊産婦の気持ちを理解することができるようになり、講義で学習した技術を自らの行動レベルで理解できるようになり、少ない実習場面でその技術を習得できるようになった。さらに、実習への移行をスムースにした。
(4)　課題による学習内容の統合	平成8年4月～ 平成27年７月	名古屋市立大学看護短期大学部専攻科助産学専攻「助産診断・技術学Ⅱ」（半期、必修科目、3単位）名古屋市立大学看護学部専門科目「助産診断・技術学Ⅱ」（4年次配当、半期、選択科目、3単位）、名古屋市立大学大学院看護学研究科博士前期課程（助産師国家試験受験資格取得コース）「助産診断技術特論Ⅰ」（1年次配当、半期、必修科目、2単位）、愛知県医師会立名古屋助産師学院「助産診断・技術学Ⅱ」（通年、必修科目、2単位）、椙山女学園大学看護学部講義・演習科目「母子支援看護学概論」（半期、必修、2単位）「母子支援看護論Ⅱ(母性)」（半期、必修、1単位）「母子支援看護論演習Ⅱ(母性)」（半期、必修、1単位）において実施してきた。 これらの科目は、産科学の講義内容を基に助産診断と助産技術または看護診断と看護技術について学習する科目である。学生は母体の生理的変化や胎児の発育などと、妊産婦に現れる症状や身体的変化、そして助産診断内容を理解する過程において、それらを統合して理解することに困難を生じる。そこで、妊娠や分娩の時期毎に、講義・演習終了後に時期にそってそれらを一覧表にまとめる課題を課し、誤りや不足している点などについて指導し、追加・修正を行った後再提出させる。このことにより、学生自身が理解不十分な点が認識できるようになり、関連する複数の科目の学習内容を統合させて助産診断と助産実践に活用できる知識として整理できるようになった。学生は実習中にも返却された課題を携帯し、実習に活用すると共に、さらに実習で学習した内容を追加しており、このことから、課題による学習効果はあったものと考えられる。また、この課題を通して教員側でも学生個々の理解が不十分な点を把握することができ、実習においてその点を重点的に指導することができるようになった。
(5)　シラバスの活用	平成11年4月～ 平成25年3月	名古屋市立大学看護短期大学部専攻科助産学専攻「助産診断技術学Ⅰ，Ⅱ，Ⅲ」（全て半期、必修科目、計８単位）、名古屋市立大学看護学部専門科目「周産期看護学」（３年次配当、半期、必修科目、２単位）「助産診断・技術学Ⅱ」（４年次配当、前半期、選択科目３単位）、「助産管理」（４年次配当、半期、選択科目、１単位）、名古屋市立大学大学院看護学研究科博士前期課程（助産師国家試験受験資格取得コース）の担当のすべての必修科目、愛知県医師会立名古屋助産師学院「助産学概論」（通年、必修科目、1単位）、「助産診断・技術学Ⅰ」（通年、必修科目、１単位）、「助産診断・技術学Ⅱ」（通年、必修科目、２単に）において実施した。

事項	年月日	概　　要
		統一した様式で作成されているシラバスに加え、単元毎に到達目標を提示したシラバスを独自に作成し、学生に提示し、これらに沿って授業を進めている。授業では単元毎の到達目標を提示する以前に比べ、各単元終了時に学生が質問するようになり、学習内容の整理を試験直前まで持ち越さないよう努力する学生が増えた。
(6)　実技試験の導入	平成14年4月～ 平成20年7月	名古屋市立大学看護学部専門科目「助産診断・技術学Ⅱ」（4年次配当、半期、選択科目、３単位）において学内での演習終了後に分娩介助モデルを用いた分娩介助技術の実技試験を導入している。助産学実習における学習効率を上げ、実習中の事故を防止するため、学内での技術の到達目標を学生に提示し、実技試験を実施している。技術の習得には学生間の個人差が大きく、それに応じて学習に要する時間が異なる。到達度を明確にすることによって、学生自身が自分の習得状況に応じて学習時間を設定して学習できるようになった。技術学習にあたっては、学生の自己学習時間中は助手を中心に教員がつき、いつでも学生の質問に応じられるよう支援している。さらに、ビデオ撮影を導入し技術の到達度を学生自身で確認しながら進められるようにするとともに、学生の求めに応じて中間でチェックを行うなど、学生自身が常に自己の課題を明確にし、指導を受けながら学習を進められるよう支援体制を整えている。実技試験導入により、分娩介助実習１例目から学生が積極的に実習できるようになり、各事例での実習内容が充実し、効果的な実習による学習ができるようになった。
(7)　総合演習の導入	平成15年4月～ 平成25年3月	名古屋市立大学看護学部専門科目「助産診断・技術学Ⅱ」（4年次配当、半期、選択科目、3単位）、名古屋市立大学大学院看護学研究科博士前期課程（助産師国家試験受験資格取得コース）「助産実践演習Ⅰ」（1年次配当、半期、必修科目、2単位）、愛知県医師会立名古屋助産師学院「助産診断・技術学Ⅱ」（通年、必修科目、2単位）において、妊娠期や分娩期の助産過程の総合的な演習を実施している。事例を提示し、その所見から助産診断を行い、助産方針・計画を決定し、それに基づく保健指導や分娩介助技術の実践までを演習し、最後に助産診断や助産計画の妥当性を検討する。この一連の演習を3事例程度繰り返す。総合演習を導入したことによって、学習内容を統合し、助産実践に活用できる形へと整理できるようになった。また、総合演習は課題による学習内容の統合の段階では学生の取り組みにかなりの差が生じること、整理した知識を助産診断の過程でどう使用するのかについて十分に理解できない学生がみられるが、学内でシミュレーションすることにより、ある一定のレベルまで到達させることができるようになった。このことにより、実習における助産診断がスムースにできるようになったことや、助産診断や計画の立案の段階で知識が整理できるようになったこと、そして事例に応じた保健指導や分娩介助技術について考えられるようになるなどの効果を上げている。

事項	年月日	概　　要
(8)　産後の母子の看護過程学習におけるアクティブラーニングの導入	平成25年4月～ 平成28年3月	椙山女学園大学看護学部「母子支援看護論演習Ⅱ（母性）」（３年次配当、半期、必修科目、1単位）において、産後の母子の看護過程の授業でアクティブラーニングを導入している。臨床場面で経験する状況に沿って事例を提示し、看護過程の段階ごとにグループワークと発表、解説等を相互に繰り返しながら展開している。このことにより、学生たちからは実践的思考と看護過程の展開の流れが理解できるようになったと評価が得られている。
(9)　周産期の看護過程学習におけるロールプレイ形式での演習の導入	平成26年4月～ 平成27年7月	椙山女学園大学看護学部「母子支援看護論演習Ⅱ（母性）」（３年次配当、半期、必修科目、1単位）において、実践的な技術の習得を目的に、ロールプレイ形式での実践的な技術の演習を導入している。 設定に基づいて教員が妊婦・褥婦を演じ、学生は看護師として臨床場面に即した観察を行う。このことにより、学生はコミュニケーション技術とフィジカルアセスメント技術を統合させ、看護行為としての観察技術が学習できるようになったと評価を得ている。
(10)　クリッカーの活用	平成26年4月～ 平成28年2月	椙山女学園大学看護学部「母子支援看護学概論」（２年次配当、半期、必修科目、２単位）において、授業内でクリッカーを活用し、学生の意見をきいたり、授業への導入の小テストを行った。
(11)　母性看護技術演習における反転授業の導入	平成27年4月～ 平成27年7月	椙山女学園大学看護学部「母子支援看護論演習Ⅱ（母性）」（３年次配当、半期、必修科目、1単位）において、母性看護技術部分を反転授業で実施した。事前にＶＴＲで事前学習した技術を、授業では“声掛け”やその時に観察すべきこと、留意点などと統合して「看護行為」として組み立てることができ、学生は、実習場面でも一連の行為としてスムーズに実施できるようになった。
(12)　観察に基づく理論の学習の試み	平成27年9月～ 平成29年2月	奈良学園大学保健医療学部「母性看護学概論」（２年次配当、半期、必修科目、２単位）において、母性看護学の基本となる理論の理解を促すため、日常生活場面で母子の観察結果をグループで理論に基づいて分析しながら理論の理解と看護場面への理論の活用方法の理解を促す取り組みを行った。実際に自分が観察してきた具体的な場面と理論が結びつくことにより理解が深まっていた。
２　作成した教科書，教材		
(1)　分娩介助マニュアルの作成	平成14年4月～ 平成20年7月	名古屋市立大学看護学部専門科目「助産診断・技術学Ⅱ」（４年次配当、半期、選択科目、３単位）で分娩介助技術を教授するにあたり分娩第Ⅱ期の介助手順の冊子を作成した。分娩室移室から分娩第４期と事後の処理までの手技等について、時間軸に沿って記述した。観察や判断のポイント、手技の要領、必要物品などを要所に盛り込み、学生が基本的な手技を理解できるよう工夫した。また、清潔介助者と間接介助者の行動を並列で記述することによりそれぞれの役割と相互の関係について理解しやすいようにした。これにより、学生が分娩の流れをイメージし、それに即した分娩介助手技を理解するまでの時間が短縮した。

事項	年月日	概　　要
(2)　実習手引きの作成	平成14年4月～平成20年7月	名古屋市立大学看護学部専門科目「助産学実習」（4年次配当、通年、選択科目7単位）、「助産管理実習」（４年次配当、半期、選択科目、１単位）、「看護学総合実習」（4年次配当、半期、必修科目、3単位）の実習のために、実習手引きを作成した。 これらの実習では、学生は初めての実習施設で今まで経験してきた実習とは異なる実習を行う。そのため、実習の初期では緊張も高く、些細なことにも疑問が生じる。オリエンテーション内容も一度聞いた程度では忘れていることも多い。そこで、実習の進め方や各実習施設の様子、実習中の学生の行動、実習記録用紙などについてオリエンテーション内容を詳細に記述した冊子を作成し、実習中の学生の緊張や不安、戸惑いを軽減し、スムースに実習が行えるよう工夫している。事前に実習手引きを読むことで予備知識をもって実習に望めるようになり、早期から主体的に実習に取り組めるようになった。
(3)　インターネット上で利用できる復習用教材の作成	平成24年4月～平成25年3月	愛知県医師会立名古屋助産師学院において、基礎助産学系科目と助産診断・技術学系科目とを統合し、周産期の助産診断について段階的に復習ができる教材を作成した。モジュール学習の考え方を基本に、周産期の助産診断を導き出すための知識の整理、アセスメントの統合を段階的に行える教材を作成し、インターネット上で利用できるようにした。在学生はいつでも、どこからでもアクセスして学習できるため、試験のための復習だけでなく、実習中にも閲覧して診断プロセスを復習できるようになり、繰り返しの学習が可能となった。
(4)　母性看護技術のＶＴＲ	平成27年4月～平成27年7月	反転授業用に、授業内容に沿った技術のＶＴＲを作成した。要点はキャプチャーを入れるなど、授業と連動する内容とした。学生からは「眠くならない」「実習前の復習にも使え思い出しやすい」などの評価を得た。
３　教育上の能力に関する大学等の評価		
(1)　学生による授業評価	平成25年7月 平成27年7月	平成25年度に椙山女学園大学で実施された授業アンケートでは、看護学部「母子支援看護論演習Ⅱ（母性）」ABCDクラス、EFGHクラスにおいて、総合的にみて満足であった学生は、「その通りである」が86.5～77.1%「どちらかと言えばそのとおりである」20.8～13.5%という結果であった。授業の理解のしやすさは「その通り」が73.1～77.1%、「どちらかといえばその通り」が22.9～26.9%となっていた。平成27年の授業評価でもほぼ同様の結果で、満足度の高い授業と評価された。
(2)　授業の教員の相互評価	平成27年12月	椙山女学園大学での教員の授業相互評価において授業デザインの明確さとグループワークのファシリテートで学生の主体的取り組みと学びが整理されていると評価された。
４　実務の経験を有する者についての特記事項		
特記すべき事項なし		

事項	年月日	概　　要
5　その他		
(1)　博士論文・修士論文指導	平成15年10月～ 平成21年3月	副指導教員として博士論文・修士論文の指導を行った。 〔博士論文〕 「母乳保育をする女性の自己効力感尺度開発に関する研究」 〔修士論文〕 「会陰切開がバースライツに及ぼす影響」 「母親の出産に立ち会った子どもの体験と助産ケア」 「家庭での性教育における親役割達成に向けた看護支援」 「母子相互作用の発達に関する研究」 「産後の精神状態と育児に関する縦断的研究」

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　　要
1　資格，免許		
(1)　看護師免許	昭和63年6月15日	登録番号第642045号（添付1）
(2)　助産師免許	平成元年4月28日	登録番号第91302号　（添付2）
2　特許等		
該当なし		
3　実務の経験を有する者についての特記事項		
(1)　思春期の健康教育講師等	平成5年4月～ 平成29年2月	神戸山手女子高等学校（6年間）、神戸市立本庄中学校（3年間）、愛知県立小坂井高等学校（3年間）、ノートルダム女学院中学校（13年間）、北名古屋市立師勝中学校（2年間）、奈良県葛城市立北新庄小学校などにおいて、男女のからだのしくみや妊娠・出産のしくみ、性行動と性感染症など、性と生殖に関する内容を中心に、思春期の健康教育の講師を務めている。また、平成22年度より、栃木県における思春期ピアカウンセラー養成に携わっている。平成25年度からは椙山女学園大学において、主になって思春期ピアカウンセラー養成と活動支援を行っている
(2)　病院での看護研究指導	平成12年1月～ 現在に至る	愛知県厚生連海南病院（15年間）及び稲沢厚生病院(8年間)において、院内看護研修の一環として行われている看護研究の研修会（クリニカルラダー・レベル2並びに3）の講師を務めクリニカルラダー看護研究指導を行うと共に、院内で実施されている看護研究の指導を行っている。
(3)　女性やセクシュアリティへの健康支援活動	平成24年4月～ 現在に至る	平成24年度から週末に愛知県助産師会女性の健康なんでも相談、思春期電話相談の相談員としての活動を行っている。平成28年1月からはSANE（性暴力被害者支援看護師）の認定を取得し、名古屋第二赤十字病院性暴力救援センターで被害者支援の臨床活動に携わっている。
4　その他		
該当なし		

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
（著書） 1. 周産期ナーシング改訂第2版	共著	平成23年3月	ヌーヴェルヒロカワ	「ハイリスク妊娠」の章を担当し、妊娠中に起こりやすい異常の病態と看護の基本を解説し、事例を示して看護につい説明した。B5版全428頁本人担当部分：総頁数428頁中32頁を担当（パートⅢ－Ⅳ章） 村本淳子,高橋真理編集,石原昌,今田葉子,大関信子,大森智美,上澤悦子,岸田佐智,崎山貴代,塩野悦子,島袋香子,清水清美,常磐洋子,鳥越郁代,服部律子,永山くに子,野澤美江子,春名めぐみ,福井トシ子,古田祐子,村本淳子，和智志げみ
2.主体的な生き方を支えるピア・カウンセリング実践マニュアル改訂新版	共著	平成27年4月	小学館	「ピア活動の有効性」の章を担当し、先行研究と筆者らの研究結果を踏まえて、中高生とピアカウンセラー自身へのピア活動の有効性について解説した。 B5版全143頁 本人担当部分：総頁数143頁中19頁を担当(4-1,4-2) 高村寿子編集，高村寿子,江角伸吾,堀内成子,前田ひとみ,渡辺純一,安達久美子,沼尾歩,小川正美,岩間薫,遠藤明希,高田昌代,川崎由紀子,井戸修一,堀井千華子,渡辺恵美子,船橋悠希,渡邉至,篠澤倪子,佐々木明子,池田悦子,服部律子
3.セクシュアリティがわかる本	共著	平成27年7月	一般社団法人日本家族計画協会	避妊法、性感染症、ネゴシエーション、トピックス(月経痛、マスターベーション、性的犯罪、レイプ、リベンジポルノ、カレシ・カノジョより友達？)を担当し、解説した。 B5版全57頁本人担当部分：総頁数57頁中26頁を担当(５章～７章)高村寿子編著、安達久美子、服部律子
（学術論文） 1. 足浴が分娩第1期の経過にもたらす効果 （査読付き論文）	共著	平成19年12月	愛知母性衛生学会誌第25巻	分娩期の助産ケアとして日常的に実施されている足浴について、その効果と安全性を検証することを目的に、正常な経過の産婦60名を、無作為に足浴群と非足浴群に分け、陣痛の変化、胎児心拍数の変化、産婦の体温の上昇等についてデータを収集し分析した。結果、足浴により陣痛持続時間の短い産婦では持続時間が平均持続時間程度に延長することが明らかとなり、分娩の正常な経過を維持するために効果があることが示唆され、足浴を実施しても胎児心拍数の変化や産婦の体温の上昇は認められず、安全なケアであることも示唆された。 論文掲載：pp55～P59 本人担当部分：研究計画の立案、結果の分析とまとめを行った。 共同執筆者：武田亜子,水本安由美,船木智子,中嶋(服部)律子

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
2. 大学生男女の親になることへの意識 （査読付き論文）	単著	平成20年6月	思春期学26巻2号	近い将来親になる可能性のある大学生男女が親になることをどのように捉えているのかを明らかにするため、人文社会学系学部の学生153名を対象に自由記述式と文章完成法による質問紙調査を実施し、88名から回答を得た。KJ法で分析した結果、親になるということは「家庭をつくる」や「子どもの養育」といった機能があり、子育てへの自覚と責任感を持ち、人間的に成長している、精神的ゆとりと強さを備えている、子育ての協力者や環境が整っているなどの親になるための要件が必要で、親になることの意味・価値と親になることへの回避感情を相対的に評価しながら子どもをつくるということについて考えていることが明らかとなった。また、現代青年の個人化志向などの強まりから、子どもをもつことへの不安感や親になることによって生じる制限や制約、負担を考え親になることに対して負担感を抱いていることが示唆された。 pp261～267
3. 親準備性尺度作成のための因子抽出の試み（査読付き論文）	単著	平成20年12月	思春期学26巻4号	現代の青年自身が親になることについてどのように意識しているかという観点から親準備性を捉え、「親準備性尺度」の因子の抽出を試みた。大学生の親になることへの意識を明らかにした先行研究で得られたカテゴリーを基に、4段階のリッカート尺度を作成し、大学生男女802名を対象に調査を実施し、491の有効回答を得た。因子分析(主因子法、バリマックス回転)を行い、第1因子[子どもの養育](α=.89)、第2因子[親になることの意義](α=.89)、第3因子[親になることへの負担感・不安感](α=.84)、第4因子[親になるための要件](α=.80)、第5因子[世代の継承](α=.70)の5つの下位尺度が抽出された。 pp428～432
4. 青年期の親準備性－子育て経験者との比較－ （査読付き論文）	共著	平成21年3月	名古屋市立大学看護学部紀要8巻	子育て経験者との違いから、近い将来親になる可能性のある青年期男女の親になることへの意識の特徴を明らかにすることを目的に調査を実施した。結果、子育てを経験している男女にくらべ、青年では子育てへのイメージから親になることへの意識が形成されているために、親になることの意義よりも、子どもの養育や親になることへの要件への意識が高く、親になることへの負担感や不安感を抱いているという特徴が明らかになった。また、アイデンティティの基礎となる基本的信頼や自律性が十分に確立されていない男女では子育てへの負担感や不安感が強くなることが示唆された。 論文掲載：pp9～15 本人担当部分：研究全体を主になって行った。 共同執筆者：中嶋(服部)律子，後藤宗理
5.青年期における親準備性の形成 （博士論文）	単著	平成21年3月	名古屋市立大学大学院	青年期に親準備性の形成について、その関連要因や、変容について明らかにした。またその過程において、親準備性尺度を開発した。青年の親準備性は、親にの役割に関する認識だけでなく、親になることへの意義や、親になることへの負担感と不安感、さらに、親になる要件や世代の継承といった要因によって構成されていることが明らかになった。親になることへの負担感・不安感には基本的信頼が関連していることや、家庭の形成や子育てイメージの形成には被養育体験が関連していることが明らかとなった。 総頁数：136頁

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
6. 大学生男女が親になることについて考えるきっかけ	共著	平成21年3月	椙山女学園大学看護学研究1巻	青年期男女がどのようなことをきっかけに親になることについて考えているかについて明らかにし、親準備性を促す支援のあり方について検討するため、半構造化面接を行い、質的帰納的に分析した。その結果、「親子モデルの観察による子育てイメージの形成」、「子どもとの接触によって引き出された子どもへの好感情」、「子どもや子育ての学習」、「親からの影響」、「親密な異性との家庭形成の空想」、「就職活動をきっかけとしたライフデザインの模索」のカテゴリーが抽出された。 論文掲載：pp97～105 本人担当部分：研究の計画、データ収集等研究全体を主になって行った。 共同執筆者：服部律子，後藤宗理，中嶋文子，大久保摩里子
7. 愛知県助産師会による電話相談事業10年間のまとめ （査読付き論文）	共著	平成23年12月	愛知母性衛生学会誌第29号	愛知県助産師会が実施している女性の健康に関する電話相談事業について、過去10年間の相談内容と相談者の傾向とその推移について分析した。電話相談では精神的問題や思春期の悩みの相談が多く、次いで妊娠中の各種症状、母乳、育児、月経に関することとなっていた。妊娠や育児に関する相談では出産年齢の高齢化に伴い相談者の年齢も高くなっていた。また、少数ではあるが虐待に関する相談も認められ、他機関とどのように連携するかが今後の課題であることが明らかとなった。 論文掲載：pp37～44 本人担当部分：研究計画を立案し、分析とまとめを主になって行った。 共同執筆者：石川真奈美，服部律子，若山正代，岩田勝子
8. 小規模病院、有床診療所に勤務する助産師の学習ニーズ （査読付き論文）	共著	平成25年1月	愛知母性衛生学会誌第30号	わが国の出産の約半数を担う小規模病院および有床診療所で勤務する助産師の学習ニーズの特徴を明らかにするため、愛知県内の分娩を取り扱っている小規模病院および有床診療所で勤務する助産師を対象に自己記入式質問紙調査を実施し、記述内容を質的に分析した。その結果、これらの施設で勤務する助産師の約７割が学習希望を有しており、助産実践の中で困ったり不安を感じた経験のある助産師のほうがその割合が有意に高かった。学習ニーズはステップアップへの欲求から生じており、スキルアップと知識のブラッシュアップのニーズがあることが明らかとなった。 論文掲載：pp72～77 本人担当部分：研究計画の立案から分析とまとめまでを主になって行った。 共同執筆者：服部律子，石川真奈美，若山正代，鈴木明日香

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
9.分娩を取り扱う小規模病院、有床診療所に勤務する看護師の学習ニーズ（査読付き論文）	共著	平成26年1月	愛知母性衛生学会誌第31号	分娩を取り扱う小規模病院や有床診療所では助産師よりも看護師の勤務者数のほうが多く、看護師が周産期の様々なケアに携わっている現状を踏まえ、これらの施設に勤務する看護師を対象に自己記入式質問紙調査を実施し、記述内容を質的に分析した。その結果、調査対象者の約半数が学習希望を有しており、仕事の中で困難感や不安感を抱いた経験のある者のほうが希望する割合が多かった。これは、「仕事上不足している知識の補充」や、「知識や技術の発展」「自己実現への欲求」からくるものであることが明らかとなった。 論文掲載：pp52～60 本人担当部分：研究計画の立案から分析とまとめまでを主になって行った。 共同執筆者：服部律子，中嶋文子,奥川ゆかり，水信真美子，石川真奈美，鈴木明日香，若山正代
10.青年期女子のライフデザインと親準備性	共著	平成27年3月	椙山女学園大学看護学研究7巻	女性を対象としたライフデザイン教育のあり方を検討するための基礎資料を得ることを目的に、Ａ大学１年生510人を対象に青年期女子のライフデザインや親準備性について明らかにした。結果、約６割の学生は将来の職業を決めて１年次から準備をしており、約８割の者が将来結婚を、約７割の者が出産を考えており、その予定平均年齢はそれぞれ、26.3歳、27.7歳であった。また離職のタイミングとしては第２子出産時が最多であった。 論文掲載：pp41～49 本人担当部分：研究計画の立案から分析とまとめまでを主になって行った。 共同執筆者：服部律子，後藤宗理
（その他） ―報告書― 1.より効果的な妊娠出産包括支援事業としての産後ケアのあり方に関する研究	共著	平成28年3月	公益社団法人日本助産師会 平成27年度子ども・子育て支援推進調査研究事業報告書	厚生労働省の補助金を得て産後ケアの実態について調査し、今後のあり方について提言した。 論文掲載：pp59～90 本人担当部分：「有床助産所ならびに病院・診療所で行っている産後ケアならびに産後ケア事業に係わる実地調査」を分担研究し、その結果を主になってまとめた。 共著者：島田真理恵,佐藤香,安達久美子,稲田千晴,服部律子,葛西圭子,相良有紀,市川香織,國分真佐代
2.本学看護学部におけるクリッカー導入の評価	共著	平成28年3月	椙山女学園大学看護学研究8巻	アクティブラーニングの一貫として新たに導入したクリッカーの効果について、学生の質問紙調査とグループインタビューの結果から分析した。その結果クリッカーの使用による「ライブ感」が学生の授業への積極的参加を促している、他学生との類似点や相違点を見出したことが学習への動機づけとなっているという効果が明らかとなった。 論文掲載：pp47～55本人担当部分：評価の計画、データ収集、分析、まとめの全般を主になって実施した。共著者：服部律子,和田貴子,佐原弘子,竹井留美,又吉忍,後藤宗理

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
3.健やか親子21(第2次)を推進するための思春期の母性保健の向上を目的とした効果的な保健指導のあり方についての調査研究	共著	平成29年3月	厚生労働省平成28年度子ども・子育て支援推進調査研究事業報告書	厚生労働省の補助金を得て、思春期の母性保健の向上を目的とした効果的な保健指導のあり方について提言し、研究結果に基づき保健指導媒体として「Asolescence わからないことがここにある」を作成した。 本人担当部分：研究計画、調査用紙の作成、４校におけるデータ収集、考察を共に担当し、「性の自己受容(多様性)・gender identiyuに対する保健指導」について文献レビューを行った(pp127-129に掲載)。保健指導媒体では、「からだの性、こころの性　～これって変？～(p18)を執筆した。 共著者：永光信一郎、安達久美子、石井隆大、内山有子、岡明、岡永真由美、葛西圭子、片岡弥恵子、川名敬、熊谷智子、小林順子、小柳憲司、齋藤伸治、鴇田夏子、永山美千子、二宮啓子、野々山未希子、服部律子、松岡美智子、松嵜くみ子、三牧正和、村上佳津美
―講演― 1.母と子のメンタルヘルスのために助産師ができること、助産師がすべきこと	―	平成28年5月	第2回母と子のメンタルヘルスフォーラム(於名古屋市)	青年期の親準備性形成に関する研究成果と、前年度に取り組んだ「より効果的な妊娠出産包括支援事業としての産後ケアのあり方に関する研究」の結果から、そして現代の若者の特徴などから、親となる人々の特性を理解し、妊娠中から子育て期までを包括したケアのあり方ににについて概観し発表した。
2.母と子のメンタルヘルスのために助産師ができること、助産師がすべきこと	―	平成28年10月	第57回日本母性衛生学会総会・学術集会教育講演 （於東京）	平成27年度子ども・子育て支援推進調査研究事業「より効果的な妊娠出産包括支援事業としての産後ケアのあり方に関する研究」成果を基に、産後の母親の特徴を解説するとともに、親準備性研究の成果に基づいて妊娠前から子育て期までの継続的で包括した支援の必要性について講演した。
3.子育て支援と社会資源の活用	―	平成28年11月	平成28年度奈良県アウトリーチ型子育て支援モデル事業子育て支援者研修会	親準備性研究や産後ケアのあり方に関する研究での結果を踏まえ、子育て支援の対象の特性について解説し、子育て支援者に求められる姿勢などについて講演した。
―学会発表― 1. 足浴が分娩第１期の進行と産痛緩和にもたらす効果	―	平成19年11月	第47回日本母性衛生学会 （於名古屋市）	分娩期の助産ケアとして日常的に実施されている足浴について、その効果と安全性を検証することを目的に、正常な経過の産婦60名を、無作為に足浴群と非足浴群に分け、陣痛の変化、胎児心拍数の変化、産婦の体温の上昇等についてデータを収集し分析した。結果、足浴により陣痛持続時間の短い産婦では持続時間が平均持続時間程度に延長することが明らかとなり、分娩の正常な経過を維持するために効果があることが示唆され、足浴を実施しても胎児心拍数の変化や産婦の体温の上昇は認められず、安全なケアであることも示唆された。 本人担当部分：研究計画の立案、結果の分析とまとめを行った。共同発表者：武田亜子,船木智子,中嶋(服部)律子

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
2. 家庭での性教育における親役割達成に向けた看護支援	―	平成20年3月	第22回日本助産学会学術集会(於神戸市)	親と子どもの性教育に関する認識を明らかにし、家庭での性教育に対して親が果たすべき役割とそのための看護支援を探究することを目的に、中学１年から3年までの男女とその親224組に対する質問紙調査と、その中から面接調査に同意の得られた親子10組に対する半構造化面接を行った。質問紙調査では、子どもは性教育を学校で受けることを望んでいるが、親は学校だけでは不十分であり家庭でも性教育が必要と考えていることや、親は家庭での性教育の必要性を認識しているものの、半数の親は性教育に自信がないことなどが明らかとなった。面接調査から性教育で親が果たすべき役割の認識に関して46のカテゴリーが抽出され、親自身が親としての役割を達成するためには学校と親との間の情報伝達等、調整役が必要であることが示唆された。本人担当部分：分析･まとめの指導を行った。 共同発表者：小倉由紀子,北川眞理子,中嶋(服部)律子
3. Experienceofchildrenpresentatbirthofyoungersibling,andmidwiferycare（きょうだいを主産する母親の出産に立ち会った子どもの体験と助産ケア）	―	平成20年6月	InternationalConfederationofMidwives28thTriennialCongress(於連合王国･グラスゴー)	母親の出産に立ち会った子どもの体験を明らかにするため、参加観察法により調査を行った。その結果、感情のゆらぎを引き起こす体験、生・性への豊かな感情をはぐくむ体験、出産への参加から思いやりを高める体験、自我を脅かすストレスフルな体験、親密な他者の存在を実感する体験、母子の関係性をゆるがされる体験、新たなきょうだい関係を構築する体験という７つのカテゴリーが抽出された。本人担当部分：研究計画、データの分析とまとめについて指導した。 共同発表者： NOHATA(KURAMOTO)Naoko,KITAGAWAMariko,NAKAJIMA(HATTORI) Ritsuko
4. 親準備性尺度作成の試み	―	平成20年8月	第27回日本思春期学会学術集会(於千葉市)	現代青年の親になることへの意識やその発達に影響を及ぼす要因を検討するための第1段階として、親準備性尺度の作成を試みた。大学生男女を対象とした自由記述式と文章完成法によって得られた内容から4段階のリッカート尺度を作成し、大学生男女に質問紙調査を実施した。因子分析の結果、「子どもの養育」「親になることの意義」「親になることへの負担感･不安感」「親になるための要件」「世代の継承」の5因子(43項目)が抽出された。今後、基準関連妥当性の検討が必要である。
5. 青年期の親準備性-子育て経験者との比較-	―	平成20年9月	日本ヒューマン･ケア心理学会第10回大会(於京都市)	子育て経験者と比較することにより、青年期の親準備性の特徴を明らかにすることを目的に、18歳から25歳までの大学生や社会人684名と保育所や小学校に通う子どもをもつ男女923名を対象に親準備性尺度とアイデンティティ尺度からなる質問紙調査を実施した。結果、子育て中の親のほうが「親になることの意義」が高かった一方、青年では「親になることへの負担感･不安感」や「親になる要件」、「子どもの養育」、「世代の継承」が有意に高かった。親になることをイメージしている段階の青年では親としての機能や親になる要件に対する意識が高い一方、負担感や不安感も強く、親になることへの意義が感じられないでいることが明らかとなった。本人担当部分：研究全体に関わり、中心になって研究を実施した。共同発表者：中嶋(服部)律子，後藤宗理

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
6. 青年期の親準備性とその関連要因	ー	平成22年11月	第51回日本母性衛生学会学術集会(於金沢市)	青年期の親準備性とそれに関連する要因を明らかにすることを目的に青年期の男女867名を対象に質問紙調査を実施し、519名から回答を得た。その結果、青年期の親準備性には、基本的信頼や自律性などアイデンティティ確立の基礎となる部分と、親との信頼感、家庭への満足度、子どもへの関心や好感情、子どもと接した経験が影響していることが明らかとなった。 本人担当部分：研究全体に関わり、中心になって研究を実施した。共同発表者：服部律子，後藤宗理，石川真奈美，西富代
7.思春期ピアカウンセラー養成の現状と課題	—	平成25年8月	第32回日本思春期学会学術集会（於和歌山市）	日本ピアカウンセリング・ピアエデュケーション研究会認定プログラムを用いた過去6年間の思春期ピアカウンセラー養成数の推移や受講者の受講後の感想等から実態を分析した。その結果、若者気質の変化により友人に相談できなくなっていることなどから思春期ピアカウンセラーへのニーズは高まっているものの、同じ若者気質の変化により自らが思春期ピアカウンセラーになろうという若者は減少しているという課題が存在していることが明らかとなった。本人担当部分：研究全体に関わり、特にデータの分析とまとめを主になって行った。 共同発表者：服部律子，高村寿子，石田登喜子，渡辺純一
8.助産所・病院・診療所で行われている産後ケアの実態	—	平成28年10月	第75回日本公衆衛生学会総会（於大阪市）	わが国における産後ケアのあり方を検討するための基礎資料として、助産所、病院、診療所計9施設において、インタビュー調査を行った。結果、母親が育児技術を獲得し、自信をもって家庭生活へのスタートが切れるよう支援することが求められていた。また、産後ケア施設を提供するためには経済面、感染対策と癒しの空間の確保など施設面での課題があることが明らかとなった。 共同発表者：市川香織，服部律子，國分真佐代，稲田千晴，相良有紀，島田真理恵
―翻訳― 1. CecilyL.BetzandLindaA.Sowden小児看護ハンドブックー病態生理と看護診断第２版	共訳	平成19年5月	医学書院	小児の疾患についてその病態生理を解説し、看護診断と看護介入のポイントを解説したMosby'sPediatricNursingReference,4thEd.を翻訳した書。新生児の疾患を中心に翻訳を担当した。 A5変型全811頁本人担当部分：総頁数811頁中28頁を担当（第20章呼吸窮迫症候群,第44章脊椎側湾症,第46章先天性股関節脱臼,第64章乳幼児突然死症候群） 共著者：石黒彩子,山田知子監訳,浅野みどり,石黒彩子,遠藤淑美,杉浦太一,田中千代,中嶋(服部)律子,奈良間美保,堀田法子,三浦清世美,山田知子

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
―その他―				
1. 看護・介護・福祉の百科事典	共著	平成20年4月	朝倉書店	看護、介護、福祉に関する基本的事項を広く集めた事典である。この中で、母性看護学の褥婦への支援について解説した。 A5版全633頁本人担当部分：総頁数633頁中3頁を担当（第1編－3-6） 糸川嘉則総編集,交野好子,成清美治,西尾祐吾編集,著者139名。 母性看護学の著者；遠藤俊子,伊藤幸子,森谷美智子,岩谷澄香,黒田緑,中嶋(服部)律子,関島英子,島袋香子
2.外来通院糖尿病患者の治療行動に影響を及ぼす要因	共著	平成25年11月	へるす出版 月刊「臨床看護」	外来で通院治療を受けている、研究への協力に同意の得られた糖尿病患者19人に対して半構造化面接を実施し、保健行動理論に基づいて質的に分析した。結果、治療行動には病気の悪化への危機感や治療行動による効果の自覚、知識が影響していることが明らかとなった。また、糖尿病患者は治療行動の必要性の認識と同時に逃避欲求も抱いて逃避するための理由を探していることが明らかとなった。今後は、自己効力感にも着目し、今回明らかとなった要因との関連性を明らかにする必要がある。 論文掲載：pp1941～1947（「投稿」の中の１編） 本人担当部分：専門としている健康行動の観点から、研究の各プロセスと論文執筆について指導を行い、専門とする保健行動の観点から結果の分析、考察を共に行った。 共同執筆者：吉田和恵、服部律子、伏屋小夜子、牧田久仁子
3.新・青年心理学ハンドブック	共著	平成26年1月	福村出版	青年心理学に関する事項を広く解説したハンドブックである。この中で、トピック「青年期の親準備性」を担当した。 B5変形(27cm)版全714頁 本人担当部分：総頁数714頁中1頁(Topic32)を担当。 後藤宗理,二宮克美,高木秀明,大野久,白井利明,平石賢二,佐藤有耕,若松養亮編著,ほか114名著。 Topic32服部律子。
文部科学省科学研究費およびその他の研究助成				
1. 青年期女子の親準備性とキャリアデザイン、ライフデザインの関連性	―	平成25年6月	椙山女学園大学学園研究費助成(B)	妊娠に伴い身体的変化を来す女性を対象とした、妊孕性や家庭形性、妊娠・出産・子育てと仕事の両立なども含めた女性ならではのライフデザイン、キャリアデザインへの支援のあり方を検討するため、青年期女子に対する女子大学生510人を対象に、親準備性と現在描いているライフデザインについて実態について研究した。

教　育　研　究　業　績　書

平成 29年 3月 31日

氏名　東中須　惠子

研究分野	研究内容のキーワード
精神看護：人間関係づくりに関する研究　メンタルヘルス　感性教育	看護学生、コミュニケーション、感性、精神障碍者処遇と法

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例 1)帝京高等看護学院、弘前学院大学看護学部、呉大学看護学部、日本保健医療大学保健医療学部、奈良学園大学保健医療学部 2)教材導入による段階的感性育成及びロールプレイング体験によるコミュニケーション力修得等の授業の実践	平成5年～ 現在に至る	・看護学生の感性教育を目的に教材の工夫をしており、定期的に実践評価の目的も含め成果報告も継続している。これまで精神看護学授業を担当したすべての看護学生に感性教育を継続的に実施している。授業に絵本の読み聞かせ、感動探し、構成的グループエンカウンターを教材として導入し、段階的に学生の感性に刺激を与えるよう工夫している。学生は特に幼児期から学童期に体験した快の感情を表現し事象をとらえる際に自己の感情に気づくことの大切さを学修している。見えない自己のこころに触れることで、見えない他者の喜怒哀楽を感じることの大切さや必要性に気がつくことができる。また、演習で看護職としての自己を知る目的と、コミュニケーション技術の修得目的で集団コラージュ、バウムテスト、ロールプレイングの体験を取り入れている。グループダイナミックスの重要性、グループでの自己の役割体験、こころを病んだ人の自己表現法の一つとしての芸術療法をも体験することで精神看護の面白さや課題発見に繋がっている。
2　作成した教科書、教材		
3　教育上の能力に関する大学等の評価 １）奈良産業大学（現：奈良学園大学）	平成25年10月	大学設置・学校法人審議会の教員組織審査において、奈良産業大学保健医療学部看護学科教授「基礎看護学実習Ⅱ」「精神看護学概論」「精神看護学援助論」「精神看護学実習」「統合看護学実習」「卒業研究Ⅰ」「卒業研究Ⅱ」可と判定
4　実務の経験を有する者についての特記事項 1)看護実践者、介護福祉士実務専門家への研修の資料作成	平成18年 ～現在に至る	・各研修会における精神科看護実践者、各地域の子育て支援課研修、実務している介護福祉士の実務専門家への研修用資料作成を実施している。
2)保育園・幼稚園教諭を対象とした現任教育	平成20年7月	・呉大学（現広島文化学園大学）が主催した地域連携の一環で行った現任教育。「精神保健」「発達理論」を2日間担当した。講義・演習を実践。特に、エリクソンの発達理論をもとにした子供のこころの発達支援と保護者へのかかわり方、また、演習においては、構成的グループエンカウンターを実施したが、その資料作りと演習計画の作成を独自で行った。
3）芸術療法導入のため教材の作成（１）	平成27年10月・11月～現在に至る	・精神看護学概論『芸術療法の体験』を授業に導入するにあたり、カウンセリングで取り入れているコラージュ療法を体験させたるための教材を作成した。非言語的コミュニケーションと自己理解を目的に、ハサミと雑誌を使い自由に切り貼り、作品完成に至るまでのプロセスを教材化し体験させた。また、風景構成法を体験させ、自己を内面化させるための教材を作成した導入した。

事　項	年月日	概　　要
5　その他 1)大学院での指導	平成19年度	・呉大学（現広島文化学園大学）で学生1名の研究指導を行った。また、「精神看護学実習において学生に受け持たれる患者の経験」（主査）
	平成20年度～ 成21年度	・呉大学（現広島文化学園大学）で学生1名の研究指導を行った。また、「精神障碍者の地域支援－社会資源の活用」（主査）
2)公開講座講師	平成22年7月	・日本保健医療大学保健医療学部看護学科公開講座講師：こころ…ときどき曇り鮮度抜群…」を担当し資料づくりと公開講座を担当した。

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　要
1　資格、免許		
1.看護師免許	昭和50年6月	第0028160号
2 修士（学術）	平成13年3月	論文題目：「植物相互間におけるコミュニケーション」
3.博士（生物工学）	平成17年3月	筑波大学　博甲第3758号 論文題目：「種子発芽過程におけるアレロパシー」
4.精神科デイケア実施者資格	昭和54年12月	第128号
5.実習指導者資格	昭和55年12月	
6.看護教員養成研修修了	平成3年12月	第45号
7.日本教育カウンセラー協会認定 上級カウンセラー	平成17年3月	第3076025号
8.日本カウンセリング学会認定カウンセラー	平成24年2月	第1202号
2　特許等 なし		
3　実務の経験を有する者についての特記事項 なし		
4　その他 1)日本保健医療大学	平成22年4月～ 平成27年3月まで	・学生委員会・教務委員会・公開講座委員会・紀要委員会に所属した。
2)奈良学園大学	平成27年4月～ 現在に至る	・カリキュラム検討WG,実習部会、教務部会、キャリア支援委員会、広報委員会に所属した。

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（著書） 1. カウンセリング心理学事典	共著	平成20年11月	誠信書房	カウンセリング心理学と臨床心理学を異同したいために書かれたカウンセリング心理学の事典。 A5版　全563頁 監修：国分康孝　共著者：大友秀人、国分久子、小林厚子、東中須恵子 他多数 本人執筆部分：第Ⅵ章インターベンション1インフォームドコンセント（P.208）インフォームドコンセントの定義と意義、今後の課題など事例を用いながら実践者に効果的・効率的に用いられるよう解説した。
2. 自己決定を支える―精神科医療現場―	共著	平成22年1月	大学教育出版	・精神科医療現場で、患者へのインフォームドコンセントがどのように実践されているのか紹介することを目的に出版した。精神科医療現場で実働しているコメディカルスタッフが、治療を行う際に日常的に実践している患者への説明をありのままに紹介している。 A5版　全112頁 編者：東中須恵子、塚本一 著者：小川智子、渡辺洋文、飯野勝子、河岸光子、矢部寛子、花立幸代、櫻井美子、和田純子、木城有里子 本人担当：本書の構成を立案し、文章執筆指導を行った。
3. 多次元のコミュニケーション2	共著	平成24年10月	大学教育出版	・平成18年度に出版された「多次元のコミュニケーションの続編。 A5版　全231頁 編筆者：長谷川宏司　共著：井上進、田崎知恵子、山本俊光、東中須恵子、藤崎香奈子、石田匠志、岡村重信、細野稔人、鳥塚篤広、音松俊彦、常盤ひかり 本人執筆部分：第5章「うつ病患者とのコミュニケーション」を単著。こころに不安をもつ人のパーソナリティの特徴と関わり方のポイントについて事例を紹介しながらわかりやすく解説した。
4.看護学生のための精神看護学概論	共著	平成27年7月	大学教育出版	・看護学生が精神の健康を病気の予防や健康の増進といった狭義の視点からだけではなく、社会や福祉の視点から広義に９とらえ、支援ができる学習教材として出版した。また、精神の健康とそれに関わる問題を広く考えることができるよう工夫した。精神保健問題を人の成長に関わる社会のしくみや環境の問題から、個人と個人の置かれた状況双方から理解できる多様な知識の情報を盛り込んだ。 編筆者：東中須恵子　共著：五十嵐愛子、阿部由香、後藤美津子、本田優子、板橋直人、

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（学術論文） 1. 精神看護学実習において看護学生の経験に関する研究（査読付）	共著	平成20年8月	日本看護協会学会論文集―看護教育― P.92-P.94	・精神看護学臨地実習で学生に受け持たれた経験のある患者に、受け持ちを引き受けようと思った時の気持ち、依頼は誰からあったか、受け持たれたときの気持ち、受け持たれた時の生活の変化などについてインタビューを行った。逐語録を作成しコード化したキーワードを抽出した結果、有意義な時間、学生への期待、相互作用の深まりなどの肯定的経験と、受け持たれることへの不安、生活時間を削られる、拒否できないなどの否定的経験が明らかになり、実習指導と受け持ち患者の選定などに示唆が得られた。 本人担当部分：研究計画書作成、データ分析指導、論文作成指導と論文作成を担当した。 共著者：村木士郎、東中須恵子、岡本響子
2. コミュニケーション　―植物の場合―（査読付）	単著	平成20年9月	看護学統合研究 P.23-P.29	・種々の植物の、発芽過程において植物相互間で繰り広げられる化学的コミュニケーションについて研究を行った。特に、エンドウの発芽種子から放出されるピサチンは相手植物の成長を阻害することがわかった。また、ゴボウ種子はアークチゲニン酸とアークチゲニンを放出し、相手植物と友好的なコミュニケーションを図っていることがわかった。これらの結果から、植物は化学物質によって相手植物とコミュニケーションをとっていることがわかった。
3. 精神看護学臨地実習における看護学生の学びに関する研究　―学生の記述から見る学びの分析―	共著	平成20年12月	看護学統合研究 P.31-P.38	・目的はK大学看護学部精神看護学実習要項の見直しを実施するための基礎的資料にする。学生の実習終了後レポートをデータとし、看護概念創出法を行った。実習目標としている精神保健医療における看護師の役割、患者理解、患者・看護師関係をキーワードとし分別した結果、精神医療における看護師の役割に関する記述が最も多く、次いで患者・看護師関係、患者理解であった。結果を検定し証明した。 本人担当部分：研究計画書作成、データ分析、論文作成を担当した。 共著者：東中須恵子、村木士郎、岡本響子
4. 歴史に見る精神障がい者の処遇　―鹿児島県公立病院の場合―（査読付）	単著	平成20年12月	看護学統合研究 P.59-P.63	・先の日本看護暦学会で発表したものに加筆し論文として投稿した。離島を抱えた鹿児島県の精神科医療の変遷を知り、精神障害者の処遇について考察した。鹿児島県に調査に赴き入手した、1924年当事の公立病院に関する資料と勤務医だった0氏の回想を整理しまとめた。2点の情報によると、公立病院の建設は天皇の軍事訓練査察のために建てられたものであったこと、私宅監置の悲惨さ、当事の治療が催眠療法中心であったこと、一部の病者だけが治療を受けられたこと、特に、離島においては、拘束具が日常的に使われていたこと等についてまとめ考察を加えた。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
5. 服薬アドヒアランスの獲得に向けての看護者の役割　（査読付）	共著	平成21年12月	看護学統合研究 P.27-P.32	・単科精神科病院社会復帰病棟で看護職が実施している入院患者の服薬管理に向けた指導方法を検証したものである。研究対象は10名の入院患者で看護者が作成した絵画を用い学習会を開いた後、患者の認知レベルに合わせて服薬自己管理を最大1週間自己管理できる方向へ進めていった。10名中1名が完全に自己管理できるようになった。しかし、服薬の必要性について十分理解できていない患者がいることが明らかになり、日々の意識づけの方法を検討することが今後の課題となった。 本人担当部分：研究計画書作成指導、データ分析指導、論文作成指導と論文作成を担当した。 共著者：吉元初美、藤崎由美子、川友美、眞形弘美、上野博之、宮洋子、宮本陽子、東槇徹、岡本響子、村木士郎、東中須恵子
6. 学生が考え実践できる臨地実習の工夫―経験型実習の試み―（査読付）	共著	平成22年12月	看護学統合研究 P.26-P.36	・精神看護学実習に導入している学生の経験を重視した実習指導の方法を振り返り、学生への実習指導の在り方の示唆を得ることが目的である。2名の実習指導教員の学生への指導方法を事例とし指導方法を検証した。学生が経験したことを学生と指導教員が共有し行う指導の方法は現象が捉えやすく的確な指導ができ学生の学びに直接的に繋がることが明らかになった。 共著者：東中須恵子、村木士郎、岡本響子 本人担当部分：研究計画書作成、データ分析、と論文作成を担当した。
7. 学生は何を学んだか- 自然散策の体験による基礎ゼミナールグループの学び-	単著	平成23年3月	日本保健医療大学紀要 P.49-P.55	・基礎ゼミナールに導入した自然散策の体験が学生の学びにどのように繋がっているか明らかにし、基礎ゼミナールの進め方の基礎的資料とする。感想レポートに記述されている文章を内容分析しカテゴリーを抽出した。体験を通して学んでいると考えられる記述が全63文抽出された。63文から＜五感を使って感じる＞＜自然を満喫＞＜開放感＞＜団結力＞＜仲間としての意識＞＜感動＞＜人と触れ合うこと大切＞＜社会性を持つ＞の8つのサブカテゴリーが抽出され、【感受性を養う】、【団結力】、【日常生活で人との繋がり大切】の3つのカテゴリーが生成された。自然散策は、興味や関心を持ちながら体験をとおして学生を感動へ導く体験学習の1つであることが明らかになった。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
8. 文献にみる大学教育における基礎ゼミナールの考えと進め方（査読付）	共著	平成23年3月	日本保健医療大学紀要 P.25-P.30	・本稿はこれからの基礎ゼミナール教育はいかにあるべきかの示唆を得るための基礎データにしたいと考え、各大学で行われている基礎ゼミナールの教育目的や方法、成果を文献検索によって明らかにしたものである。検索した文献は和文7件、英文1件で、看護系大学3件、福祉系大学2件であった。いずれの大学も教育課程の初年次教育プログラムに取り入れ、その目的は大学入学生に対する能動的な高等教育への導入であった。看護系大学においては専任教員が中心に担当し、福祉系の大学においては演習教育指導員が1グループ10～15名程度の学生を担当し、グループワーク形式で実施していた。いずれの大学も、学生の参加姿勢や態度、グループ間の人間関係づくりの困難さが述べられ、実施と方法について課題を抱えていた。 本人担当部分：研究計画書作成、データ分析、論文作成 共著者：東中須恵子、松永洋子、近藤誓子
9. 入院中の衣服の選択理由と衣服が闘病意欲に与える影響因子の考察（査読付）	共著	平成28年9月	奈良学園大学紀要第5集	・衣服の自由選択を前提に病衣貸与制を導入している病院に入院中の患者62名を対象に、衣服を選択する理由とその衣服が闘病意欲に与える影響を考察することを目的に、質問紙に基づいた聞き取り調査を行った。結果、病衣に対して不満を持っていた患者の割合は50％で、男性よりも女性の方が20％多かった。病衣に対する不満理由からは、「恥辱感」「個の尊厳の喪失感」「不合理性」「不快感」の4つの因子が抽出された。衣服と闘病意欲と性別の関係では、男性よりも女性の方が闘病意欲がX2乗検定の結果1％水準で有意に高かった。以上から、退院後も家庭で、役割を持つ女性が、私服を着用することによって社会性を維持していくことへの影響が考えられ、入院生活であっても、個の尊厳を維持できる衣生活に向けて心がけることの重要性が示唆された。 本人担当分：原稿作成 共著者：田中里奈　若林たけ子　東中須恵子
（発　表） 1. 鹿児島県における精神科医療の変遷―公立病院を中心に―（査読付）	―	平成20年8月	日本看護歴史学会（発表）	・離島の多い鹿児島県の精神科医療と患者の処遇について調査した結果を発表した。日本で第2番目に建てられた鹿児島県立病院に関する資料と当事勤務医であった0氏の回想をもとに、1924（大正13）年鹿児島県立鹿児島病院（現鹿児島大学病院）の精神科分院として診療が開始されて当時の事をまとめた。治療を受けられたものは僅かであり、殆どの患者が私宅監置で24時間拘束された状態であったことが明らかになった。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
2. Issues recognized by floor nurses working in the psychiatric ward,who had the first experience with providing students guidance about practical training（初めて臨地実習を受け入れた精神科病棟における看護師の認識）（査読付）	―	平成24年10月	3rdworld Academy of Nursing Science(発表)	・初めて臨地実習を受け入れた精神科救急病棟看護師が実習指導中に意識した教育上の課題を、アンケート調査によって明らかにした。その結果「受け入れは肯定的である」「大学との共同する方法」「指導者としての知識・技術の向上の方法」が課題であると回答した。今後、教育現場と臨床現場の情報交換や共同して学修の場を持つ必要性が示唆された。 本人担当文：研究計画、データ分析、論文作成 共同発表者：東中須恵子　阿部由香　下嶽ユキ　松永洋子
3. 救急・急性期病棟看護師職の実習受け入れに対する認識（査読付）	―	平成25年10月	日本看護協会学会－看護教育－（発表）	・精神科救急病棟看護師96名にアンケート調査による、看護学生の実習受け入れについて意識調査を行った。全員が実習受け入れについて肯定的で、「業務の煩雑さはあるが、自己の資質の向上が期待できるので、今後も受け入れたい」と回答した、さらに、「指導者として資質の向上を図りたい」と回答し、教員との学習会を希望していた。 本人担当：計画書作成、データ分析、論文作成 共同研究者：石川昌恵、小林真理子、東中須恵子
4. 臨地実習に見る看護学生の学びと課題－精神科救急病棟の場合－（査読付）	―	平成25年3月	日本医学看護学教育学会（発表）	・看護学生が実習終了後に提出した「精神看護学実習で学んだこと」の64のレポートを内容分析し、学生の学びを明らかにした。学生は、人間関係づくりに悩んでいる。患者との関わりを効果的に学習に活かした実習が行われているが、多面的に患者をとらえる指導方法の検討が必要である。 本人担当：計画書作成、データ分析、論文作成 共同発表者：有江壬子　東中須恵子　小林真理子　阿部由香
5. 「カンボジア、クラチェ州コツ・チュレイン島の住民の健康調査からみた支援の検討（査読付）	―	平成25年3月	日本医学看護学教育学会（発表）	・カンボジアの島の一つであるコツ・チュレイン島の住民に健康調査を実施した。島民120名の村民ほとんどが、子どもと老人や女性で、男性のほとんどが首都へ出稼ぎに出ている。栄養バランスの悪い食生活、無医村のなか体調悪化を訴える住民もいた。ボランティアの協力調査により得られた情報は、成人病を発症する要因を抱えていることが推測された。今後健康教育などを検討していく。 本人分担：現地調査、データ収集と分析 共同発表者：下嶽ユキ、東中須恵子、大下静香、小出浩久
6. カンボジア、コツ・チュレイン島における住民のメンタルチェックから見えたこと（査読付）	―	平成25年3月	日本医学看護学教育学会（発表）	・カンボジアの島の一つであるコツ・チュレイン島の住民にメンタルに注目し健康調査を実施した結果、不眠やうつ傾向、イライラ感の持続など精神的な問題を抱えていることが明らかになった。今後、精神的健康の向上に向け環境調整指導が必要である。 本人分担：計画書作成、現地調査、データ分析、論文作成 共同発表者：板橋眞人、東中須恵子、下嶽ユキ、阿部由香

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
7. ″A health survey of Cambodians: a cmoparative study on Island and City residents″ カンボジア人の離島と都市部の健康調査から見えたもの （査読付）	―	平成25年9月	International Forum on Quality and Safety in Healthcare:Asis 香港	・カンボジアの島の一つであるコツ・チュレイン島の住民と都市部住民のの健康調査（血液検査、尿検査など）を実施した。その結果、糖尿病、高血圧など成人病の罹患が疑われる人が多かった。健康指導の必要性が示唆された。 本人分担：データ分析 共同研究者：下嶽ユキ、東中須恵子、小出浩久
8. いじめ体験者がリフレクションできた関わりのプロセス （査読付）	―	平成26年8月	日本カウンセリング学会	・女子看護学生がいじめグループをつくり、同じクラスの女子学生をいじめ退学に追い込んだ。仲間の一人からの情報でいじめの中心的学生と面談を実施。その結果、いじめの原因が明らかになった。定期的な関わりのプロセスを追った結果、いじめ学生の生活環境を整えるという関わりの示唆が得られた。
9. いじめから顔面醜形と思い込み対人恐怖を持つ看護学生への支援 （査読付）	―	平成27年9月	日本アデイクション看護学会	・中学生の時、顔が醜いといじめにあっていた女子学生がマスクで顔を隠して生活してきた（約7年）マスクを外すことのできない日常の中で、定期的に関わりを実施した結果一時的にマスクを外すことができるようになった。その関わりから共感的に関わる効果が見えた。

教　育　研　究　業　績　書

平成29年3月31日

氏名　　守本とも子

研究分野	研究内容のキーワード
看護学	在宅脳卒中患者，在宅酸素療法患者，介護者，QOL

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例		
1）疑似体験学習の導入	平成14年4月～ 平成20年3月	関西学院大学社会学部社会福祉学科の非常勤講師として，身体障害の特徴を理解するために「体験くん」の補助具を活用した。具体的には難聴体験のための補聴器，関節可動域の障害を体験するための下肢装具，視力障害体験のためのグーグルなどである。実施後のアンケート結果より，学生からは身体障害の疑似体験は障害のある人を理解するために大変有意義であったとの評価を受けた。
2）視聴覚教材のための資料作成	平成20年4月～ 平成25年3月	関西学院大学人間福祉学部人間福祉研究科の非常勤講師として視聴覚教材のための資料を作成した。具体的には人体解剖・人体機能，疾病や加齢について，難解な用語の解説や重要事項のまとめなどを資料として作成し，各授業ごとに資料の配布を行った。
2　作成した教科書，教材		
―教科書―		
1）看護学実践 ―Science of Nursing― 老年看護学（再掲）	平成19年4月 日本放射線技師会出版会 全261頁	Chapter 2　高齢者の理解「加齢と老化」P.4，P.45-P.52 高齢者の心と身体について加齢現象の視点から理解するとともに，高齢者の特徴を十分できるように記述した。 単著
2）系統看護学講座　専門分野1 「基礎看護技術Ⅱ基礎看護学[3]」 第14版第6刷　（再掲）	平成20年4月 医学書院 全348頁	第5部第1章A「生活環境を整える」　P.64-P.74 主に療養生活の環境（病室，人的環境など）のアセスメントと調整及びベットメーキングについて述べた。 共著者：守本とも子，岡本啓子，吉村雅世 第5部第1章C「衣服を用いる」P.121-P.127 主に衣類を用いることの意義，衣生活に関するニーズのアセスメント，病衣の選び方，病衣交換の方法について述べた。 共著者：守本とも子，岡本啓子，吉村雅世
3）系統看護学講座　専門分野1 「基礎看護技術Ⅱ基礎看護学[3]」 第15版第1刷（再掲）	平成21年2月 医学書院 全495頁	第2部 第1章 B「病床環境の調整」P.22-P.32 本章では生活環境を整えるための技術の習得を通して，病床環境を多角的にとらえ，患者の安全・安楽への配慮を具体的な行為として実践できる力を養う。同時に，患者の病床環境に対していつも自然に目配りができ，安全や安楽を阻害する因子を早期に発見し，即座に対応できる感性を養う。 共著者：守本とも子，岡本啓子，吉村雅世 第2部 第5章 C「病床での衣生活の援助」P.185-P.192 本章では人間生活の基盤となる三大要素の一つである衣生活への援助について述べる。衣生活には生理的意義，社会的意義，心理的意義があることを理解する。また，対象に応じた衣生活をアセスメントし，適切な援助ができるための方法を習得する。 共著者：守本とも子，岡本啓子，吉村雅世

事項	年月日	概　　要
4）国際看護への学際的アプローチ（再掲）	平成21年3月 日本放射線技師会出版社 全211頁	第1章「異文化理解のための看護理論」P.7-P.18 　世界でトピックとなっている健康課題とその背景を国際保健医療活動の実例を交えながら紹介し，看護の国際的な活動に必要な知識や思考について述べた。 単著
5）新・QOLを高める専門看護，介護を考える（再掲）	平成21年3月 中央法規出版(株) 全204頁	第2章　「高齢者の痛みへのアプローチ」P.61-P.80 　第1節「高齢者の痛みについて」高齢者の痛みの特徴を述べた。 　第2節「痛みの特定」痛みの特定方法につい主訴，動作，疾患との関連について述べた。 　第3節「痛みのアセスメントスケール」痛みの質と強さのアセスメントについて著者らが作成したVASスケールを紹介した。 　第4節「痛みの治療とケアプラン」非薬物，薬物的介入と痛み治療薬の主要なタイプ，ケアプランについて述べた。 　第5節「倫理的責任」痛みの治療におけるガイドラインと倫理的課題について述べた。 単著 第3章「高齢者の嚥下困難へのアプローチ」P.81-P.94 　第1節「嚥下障害とは」嚥下の生理，嚥下障害のタイプと原因，観察のポイントとチームアプローチについて述べた。 　第2節「嚥下療法の工夫と技術」食物形態の改善，嚥下方法，筋肉強化訓練，緊急時の対処について述べた。第3節「スタッフの役割」嚥下・食事評価スケールを紹介した。 単著 第5章「QOLを高める日常生活動作への援助」P.113-P.123 　第1節「認知症高齢者の入浴テクニック」入浴中の不穏を低下させるプロトコールと安全策について述べた。 第6章「認知症高齢者への安全テクニック」P169-P.177を 　1節「認知症高齢者について」認知症についての概要と特徴について述べた。 　第2節「認知症高齢者の行動特性と対策」認知症高齢者の特徴的な行動とそれに対する対処方法を述べた。 単著 第7章「QOLを高める高齢者の遊び療法」P179-P.201 　第1節「遊び療法とボランテイア活動」ボランテイアの集め方，活動の説明について述べた。 　第2節「遊びマニュアルの使い方」レクレーション遊具のつくり方と使い方及び遊具を紹介する際の注意点について述べた。 単著
6）介護の基本・コミュニケーション技術（再掲）	平成22年9月 黎明書房 全202頁	本書は介護の考え方について理解するとともに，介護を必要とする対象者を生活の視点からとらえ，介護を適切に行う能力と態度を養うことを目的とする。 編者：守本とも子，星野政明
7）生活支援技術・介護過程（再掲）	平成22年6月 黎明書房 全219頁	第10章「終末期の介護」P.159-P.168 　終末期における介護の意義と目的，対象者のアセスメント，医療との連携，ブリーフケアについて述べ，終末期にある高齢者の最も安楽で威厳に満ちた死を可能にする方法を探る。 単著 編者：守本とも子，星野政明（編著）

事項	年月日	概　　要
8）老年看護学 Geriatric Nursing （再掲）	平成22年12月 PILAR　PRESS 全288頁	第2章　2．高齢者の理解　「加齢と老化」P.2，P.57-P.65を単著。 高齢者の生理的機能の変化，疾患の特徴，感覚機能の変化（視覚，聴覚，味覚，嗅覚，触覚，痛覚）また，その他の諸機能として，加齢による心臓，血管，血液，外皮系について述べた。そして，加齢がもたらす精神的変化と社会的変化についても述べた。 単著 編著：守本とも子
9）医療福祉学の道標（再掲）	平成23年1月 金芳堂 全200頁	第2章 C 生活の変化と保健･医療･福祉の統合 P.23-P.26を単著。 　生活の変化として家計の動向，家族形態の変化，介護問題について解説したうえで生活を支える保健・医療・福祉の統合の意義について述べた。 第13章 A 少子高齢社会での医療福祉　P.163-P.165を単著。 　今日抱える医療福祉の課題として少子高齢化社会での医療福祉のあり方について述べた。特に高齢者の一人暮らしに焦点をあて，現状と対策について考察した。 C 介護福祉から医療介護福祉へ　P.170-P.172を単著。 　介護福祉から医療介護福祉へのパラダイムシフトの必要性について述べた。特に介護の専門性について再度考察し，今後の介護福祉士のあり方と課題について考察した。 G 情報化社会における医療福祉　P.184-P.185を単著。 　情報化社会における医療福祉について，特に医療福祉とIT（Information Technology）との関連で述べた。今後，医療福祉のどの分野においてITがどのように活用されていくのか，その意義について考察した。
10）子ども家庭のウェルビーイング（再掲）	平成23年3月 金芳堂 全128頁	第1章 A「少子化の進行と家庭・地域の変容」P.1-P.5 第3章 B「子ども家庭福祉の実施体制」P.39-P.41 　現代社会における子どものウェルビーイングを追及するため，子供を取り巻く社会福祉的問題や今日的課題を明らかにするとともに，子ども家庭福祉のあり方と支援策について解説する。 単著
11）系統看護学講座　専門分野1 「基礎看護技術Ⅱ基礎看護学[3]」第15版第8刷 （再掲）	平成24年2月 医学書院 全495頁	第2部 第1章 B「病床環境の調整」P.22-P.32 　本章では外部環境を病床環境に限定し，「病床環境の調整」と「ベットメーキング」「リネン交換」についての技術を習得する。病床環境の調整には，病床の温度と湿度。光と音，病室の色彩，空気の清浄性とにおい，人的環境の調整のほか，ベットのマットレスやまくらなどの寝具も含まれる。 共著者：守本とも子，岡本啓子，吉村雅世 第2部 第5章 C「病床での衣生活の援助」P.185-P.192 　本章では本章では人間生活の基盤となる三大要素の一つである衣生活への援助について述べる。衣生活には生理的意義，社会的意義，心理的意義があることを理解する。また，対象に応じた衣生活をアセスメントし，適切な援助ができるための方法を習得する。 共著者：守本とも子，岡本啓子，吉村雅世
12）介護実習入門（再掲）	平成24年3月 黎明書房 全128頁	本書において対象者への実際的な福祉的援助の方法を学び，専門職としての基盤を構築することが可能であると考える。 編集：守本とも子，星野政明

事項	年月日	概　　要
13）系統看護学講座　専門分野1 「基礎看護技術Ⅱ基礎看護学[3]」第16版 （再掲）	平成25年2月 医学書院 全508頁	第1章　A「環境調整技術」P.9-P.21 　本章では療養生活の環境を構成する要素を理解し，病室・病床のアセスメントと調整について学ぶ。また，ベット周囲と病床の環境整備，ベットネーキング，リネン交換の実際について学ぶ。 共著者：守本とも子，岡本啓子，吉村雅世 第6章　B「清潔・衣生活援助」P.192-P.200 　衣類を用いることの生理的・社会的・心理的意義を理解する。また，衣生活に関するニーズのアセスメントや援助の実際について学ぶ。 共著者：守本とも子，岡本啓子，吉村雅世
14）高齢者のせん妄 安心をとどけるケアと介護の心得（再掲）	平成26年10月 すぴか書房 全140頁	第3章「せん妄を起こしやすい状況-こわれやすい心へのおもいやり」P45-72 本章では，せん妄を起こしやすい状況を紹介している。高齢者の心は壊れやすく，とても脆くなってきている。高齢者に対しては身体的な援助とともに心のケアが重要な課題となる。高齢者ケアにかかわる人にとって，せん妄の知識は必須だと言える。 単著 第4章「せん妄が起きてしまったら」P73-86 せん妄の症状は特定の病気のあらわれではなく，さまざまな要因によって引き起こされた異常な状態である。意識障害であることを理解し，症状への適切な対応を学ぶ。 単著 編者：守本とも子
15）これからの国際看護学 国境を越えた看護実践のために（再掲）	平成26年11月 ピラールプレス 全163頁	第3節「国際協力機関の取り組み」P22-28 国際協力のいくつかの方法について知り，世界中のすべての人々がより良く生きられる未来を目指す。 単著 監著：守本とも子
16）看護職をめざす人の社会保障と社会福祉（再掲）	平成27年4月 みらい 全211頁	本書は看護職（看護師・保健師・助産師）をめざす読者が社会保障・社会福祉について学ぶテキストである。また，すでに医療現場で看護職やコメディカルとして活躍している方々の学びのふりかえり等にも十分対応できる内容である。 編者：守本とも子
17）シリーズ　看護・介護・福祉のための「教育学」 教育心理をふまえた患者教育指導実践の手引き1 看護のための『教育学』（再掲）	平成27年12月 あいり出版 全151頁	第2章　3「教授理論」P22-25 第2章　4「現代の教授理論」P25-28 　教授理論とは教授者が学習者に知識・技能をさずけるために有用な理論である。具体的な教授理論を学ぶ前に，教授（指導）するためのよりどころとする原理について述べたのち（第2章 3），主要な教授理論について説明する（第2章 4）。 単著 第2章　5「人格」P28-P29 　教育はたんに知識や技術を習得させるためのものではなく，全人的形成が目標となる。したがって教育は人格形成過程の一環として行われなければならない。 単著 第2章　6「教育心理学と患者指導」P29 　本章で学んだ内容が患者指導に生かされることを目的に構成しているが，教育心理学がどのように患者指導に有用か，例をあげて考える。 単著 編者：守本とも子

事項	年月日	概　　要
18）系統看護学講座　専門分野1 「基礎看護技術Ⅱ基礎看護学[3]」第17版 （再掲）	平成29年1月 医学書院 全520頁	第2部 第1章 B「病床環境の調整」P.10-P.24 本章では外部環境を病床環境に限定し，「病床環境の調整」と「ベットメーキング」「リネン交換」についての技術を習得する。病床環境の調整には，病床の温度と湿度。光と音，病室の色彩，空気の清浄性とにおい，人的環境の調整のほか，ベットのマットレスやまくらなどの寝具も含まれる。 共著者：守本とも子，吉村雅世 第2部 第5章 C「病床での衣生活の援助」P.153-P.211 本章では本章では人間生活の基盤となる三大要素の一つである衣生活への援助について述べる。衣生活には生理的意義，社会的意義，心理的意義があることを理解する。また，対象に応じた衣生活をアセスメントし，適切な援助ができるための方法を習得する。 共著者：守本とも子，吉村雅世
19）痛みのケア 第1版 （再掲）	平成29年3月 ピラールプレス 全180頁	第9章　「高齢者の慢性的な痛みの治療と看護」　P.36－P.49 慢性的な高齢者の痛みについて，痛みと動作について説明し，痛みに関する観察の力を養う。そして高齢者の痛みの主訴の特徴を述べ，痛みの原因となる疾患または治療について述べる。また，痛みのアセスメントツールを紹介し看護者が利用できる一般的な痛みのアセスメントスケールを学ぶ。代表的な痛みのツールはVisual Analogue Scales (VAS)である。さらに本書では痛みの有無に焦点をしぼるpain VASを紹介し，看護ケアの実践として痛みの治療とケアプランについて述べる。 単著 編者：守本とも子
―事典―		
1）介護福祉学事典（再掲）	平成26年10月 ミネルヴァ書房 全829頁	「障害児に対する介護福祉」 障害児の定義・概念・考え方について述べ，障害児に関する介護，福祉の実践や制度の現状を明らかにした。また，障害児に対する介護について，近現代史から，ノーマライゼーションの浸透までの背景や経過を説明し，障害のある子どもも社会の中で他の人々と同じように生活でき，活動することができるための展望と課題について考察した。 P546-547 分担執筆
―教材―		
３　教育上の能力に関する大学等の評価		
なし		

事項	年月日	概　　要
4　実務の経験を有する者についての特記事項		
―海外研修学生引率―		
1）タイ　チェンマイ市 チェンマイ大学看護学部　学術交流	平成19年8月	奈良県立医科大学医学部看護学科　海外研修学生引率 プログラムオリエンテーション レクチャー：Introduction of nursing midwifery education in the Faculty of Nursing, Chiang Mai University, Reproductive health in Thailand　他 スタディビジット:Local health care service (khun Kong Health Care Clinic) Community reproductive facilities, Location Clinic Chiang Mai Health promotion Hospital 他
2）タイ　チェンマイ市 チェンマイ大学看護学部　学術交流	平成20年8月	奈良県立医科大学医学部看護学科　海外研修学生引率 プログラムオリエンテーション レクチャー: Elderly in Thailand, Health status of children in Thailand,　Health care service and health promotion of children in Thailand　他 スタディビジット：Elderly club at Faculty on nursing,　Day care center FON CMU, Pediatric Units, Pediatric Intensive Care Unit, Nursery, and Well baby clinic at university hospital,　Traditional Thai Massage Center　他
―講演―		
1）(財)健康管理・開発センター　健康講話 講師	平成19年10月11日	(財)健康管理・開発センター主催の健康講和で講師を務め，「女性のうつ　特徴を知ろう」と題した講演を行った。 会場：住之江競艇場（大阪市住之江区）
2）(財)健康管理・開発センター　講演会 講師	平成21年2月24日	(財)健康管理・開発センター主催の講演会で講師を務め，「たばこの害について」と題した講演を行った。 会場：住之江競艇場（大阪市住之江区）
3）日本保健医療行動科学会　講師	平成24年6月	日本保健医療行動科学会主催の講習会において，「医療系大学におけるチーム医療教育の実際―医療のパラダイムシフトに向けて―」についての講義を行った。 会場：じゅうろくプラザ（岐阜県岐阜市）
4）奈良学園大学　公開講座 講師	平成26年6月28日	奈良学園大学　公開講座で講師を務め，「高齢者のうつ」と題した講演を90分行った。 対象：地域住民60名 会場：りーべる王寺西友（奈良県北葛城郡王寺町）
5）日本サーモロジー学会　第33回大会　講師	平成28年5月	日本サーモロジー学会　第33回大会で講師を務め，「がん看護と体温」について招待講演を行った。 対象：200名 会場：奈良学園大学登美ヶ丘キャンパス（奈良県奈良市）
―講習会―		
1）社団法人奈良県看護協会 実習指導者講習会　講師	平成19年9月	社団法人奈良県看護協会主催の実習指導者講習会において，「看護論」の講義を行った。 会場：奈良県看護研修センター(奈良県橿原市) 時間：3時間
2）社団法人奈良県看護協会 実習指導者講習会　講師	平成20年9月	社団法人奈良県看護協会主催の実習指導者講習会において，「看護論」の講義を行った。 会場：奈良県看護研修センター(奈良県橿原市) 時間：3時間

事項	年月日	概　　要
3）社団法人奈良県看護協会 実習指導者講習会　講師	平成21年9月8日	社団法人奈良県看護協会主催の実習指導者講習会において，「看護論」の講義を行った。 会場：奈良県看護研修センター(奈良県橿原市) 時間：6時間
4）社団法人奈良県看護協会 実習指導者講習会　講師	平成22年9月	社団法人奈良県看護協会主催の実習指導者講習会において，「看護論」の講義を行った。 会場：奈良県看護研修センター(奈良県橿原市) 時間：6時間
5）社団法人奈良県看護協会 実習指導者講習会　講師	平成23年9月	社団法人奈良県看護協会主催の実習指導者講習会において，「看護論」の講義を行った。 会場：奈良県看護研修センター(奈良県橿原市) 時間：6時間
6）社団法人岐阜県看護協会 実習指導者講習会　講師	平成24年6月13日 ～7月11日	社団法人岐阜県看護協会主催の実習指導者講習会において，「看護理論」の講義および演習指導を行った。 専任教員養成講習会受講生：30人 会場：社団法人岐阜県看護協会特別研修室，岐阜県県民ふれあい会館第1棟5階（岐阜県岐阜市） 時間：15時間（講義），15時間（演習指導）
7）社団法人奈良県看護協会 実習指導者講習会　講師	平成24年9月	社団法人奈良県看護協会主催の実習指導者講習会において，「看護師教育課程」の講義を行った。 会場：奈良県看護研修センター(奈良県橿原市) 時間：6時間
8）社団法人奈良県看護協会 実習指導者講習会　講師	平成25年8月	社団法人奈良県看護協会主催の実習指導者講習会において，「看護師教育課程」の講義を行った。 会場：奈良県看護研修センター(奈良県橿原市) 時間：6時間
9）社団法人奈良県看護協会 実習指導者講習会　講師	平成26年8月	社団法人奈良県看護協会主催の実習指導者講習会において，「看護師教育課程」の講義を行った。 会場：奈良県看護研修センター(奈良県橿原市) 時間：6時間
―教員養成講座講師―		
1）大阪府看護協会 大阪府看護教員養成講習会　講師	平成22年4月～平成22年7月	大阪府看護協会主催の大阪府看護教員養成講習会において，「看護論演習」の講義を行った。 受講生：79人 時間：30時間 大阪府看護協会桃谷センター（大阪市天王寺区）
2）社団法人岐阜県看護協会 岐阜県看護教員養成講習会　講師	平成23年6月13日 ～7月27日	社団法人岐阜県看護協会主催の岐阜県看護教員養成講習会において，「看護論」「看護論演習」の講義を行った。 専任教員養成講習会受講生：30人 時間：15時間（講義），15時間（演習指導） 会場：社団法人岐阜県看護協会特別研修室，岐阜県県民ふれあい会館第1棟5階（岐阜県岐阜市）

事項	年月日	概　　要
3）社団法人岐阜県看護協会 岐阜県専任教員養成講習会　講師	平成25年5月20日 ～6月4日	社団法人岐阜県看護協会主催の岐阜県専任教員養成講習会において，「専門領域別看護論演習・老年看護学」の講義を行った。 専任教員養成講習会受講生：19人 時間：18時間 会場：社団法人岐阜県看護協会特別研修室，岐阜県県民ふれあい福寿会館第1棟5階（岐阜県岐阜市）
4）社団法人奈良県看護協会 奈良県専任教員養成講習会　講師	平成25年7月29日 平成25年12月4日 ～12月12日	社団法人奈良県看護協会主催の奈良県専任教員養成講習会において，「専門領域別看護論演習・老年看護学」の講義を行った。 専任教員養成講習会受講生：30人 時間：14時間 会場：奈良県看護研修センター，奈良県看護協会ホームナーシングセンター（奈良県橿原市）
5　その他		
―担当教科―		
1）「老年看護学概論」の担当	平成16年4月～ 平成22年3月	奈良県立医科大学医学部看護学科の学生を対象に「老年看護学概論」を担当した。「老年看護学概論」は必修科目で2単位（2時間×15回）の半期科目である。講義内容は「加齢に伴う変化」と老年期の人々のQOLの向上をめざす理論と技術についてである。
2）「老年看護学援助論」の担当	平成17年4月～ 平成22年3月	奈良県立医科大学医学部看護学科の学生を対象に「老年看護学援助論」を担当した。「老年看護学援助論」は必修科目で2単位（2時間×30回）の通年科目である。講義内容は老年期にある人の健康の増進，疾病の予防といった看護実践の理論と技術についてである。
3）「社会福祉学」の担当	平成17年4月～ 平成22年3月	奈良県立医科大学医学部看護学科の学生を対象に「社会福祉学」を担当した。「社会福祉学」は必修科目で2単位（2時間×30回）の通年科目である。講義内容は社会保障・社会福祉の理念や原理及び障害者・高齢者の生活問題の現状を把握し，それに対する社会福祉制度と最近の政策動向についてである。
4）「国際看護論」の担当	平成17年4月～ 平成22年3月	奈良県立医科大学医学部看護学科の学生を対象に「国際看護論」を担当した。「国際看護論」は選択科目で2単位（2時間×30回）の通年科目である。講義内容は学際的視点から世界で展開する看護活動について理解を深め，実際に外国での看護教育・看護活動の演習を通して，新しい看護の視点と可能性を探る。
5）「看護研究概論」の担当	平成18年4月～ 平成22年3月	奈良県立医科大学医学部看護学科の学生を対象に「看護研究概論」を担当した。「看護研究概論」は必修科目で1単位（2時間×7回）の半期科目である。講義内容は看護研究を進めていく上での基礎的能力を育成するとともに研究的態度および看護観及び研究の意義，研究課題の立て方，研究方法，研究結果のまとめ方，考察，発表の方法についてである。
6）「看護学特論」の担当	平成18年4月～ 平成22年3月	奈良県立医科大学医学部看護学科の学生を対象に「看護学特論」を担当した。「看護学特論」は必修科目で1単位（2時間×15回）の半期科目である。講義内容は国内外における看護研究の動向と課題及び国内外で関心のある看護問題や課題についての研究計画書を作成する方法についてである。

事項	年月日	概　　要
7)　「介護概論」の担当	平成20年4月～ 平成25年3月	関西学院大学人間福祉学部の学生を対象に「介護概論」を担当した。「介護概論」は必修科目で1単位（2時間×15回）の半期科目である。講義内容は，介護の主たる対象となる高齢者を理解しながら，介護の目的，方法，専門職としての役割を学ぶ，また，それらを基に実践と自己研鑽を積むことのできる専門性を育てることを目的とする。
8)　「介護技術」の担当	平成20年4月～ 平成25年3月	関西学院大学人間福祉学部の学生を対象に「介護技術」を担当した。「介護技術」は必修科目で1単位（2時間×15回）の半期科目である。講義内容は，障害や疾病あるいは加齢により，他の人の支援を必要とする対象者のQOLを高める介護上の援助技術について，その考え方および身体的状況に応じたよりよい介護技術を学ぶ。授業は講義と演習であり，全体の1/2は体験的学習で構成する。
9)　「からだのしくみと生活」の担当	平成20年4月～ 平成25年3月	関西学院大学人間福祉学部の学生を対象に「からだのしくみと生活」を担当した。「からだのしくみと生活」は必修科目で1単位（2時間×15回）の半期科目である。講義内容は，対象の自立支援にむけて必要なこころとからだの基礎的な知識を学び，適切な介護の実践ができる能力を養うことを目的とする。
10)　「加齢と障害の理解」の担当	平成20年4月～ 平成25年3月	関西学院大学人間福祉学部の学生を対象に「加齢と障害の理解」を担当した。「加齢と障害の理解」は必修科目で1単位（2時間×15回）の半期科目である。講義内容は，人間の成長と発達における心理や身体機能の変化を学び，それらが日常生活に与える影響について理解することを目的とする。
11)　「看護学原論」の担当	平成22年4月～ 平成25年3月	岐阜医療科学大学保健科学部看護学科の学生を対象に「看護学原論」を担当した。「看護学原論」は必修科目で1単位（2時間×15回）の半期科目である。講義内容は，看護学における主要概念を理解し，看護の本質と専門職としての役割を学ぶ。そのために，看護の対象である人間を全人的にとらえる知識と感性を養う。また，自己の看護観を形成し，発展させる能力を養うことを目的とする。
12)　「国際看護論」の担当	平成22年4月～ 平成25年3月	岐阜医療科学大学保健科学部看護学科の学生を対象に「国際看護論」を担当した。「国際看護論」は必修科目で1単位（2時間×15回）の半期科目である。講義内容は，国際社会の動向を知り，グローバルな視点で活動できる教養を養うことを目標とする。それぞれの国の分化，資源，環境など，多角的な視点について考え，異文化を持つ人々への看護の在り方に対する理解を深めていく。
13)　「ターミナル看護」の担当	平成22年4月～ 平成25年3月	岐阜医療科学大学保健科学部看護学科の学生を対象に「ターミナル看護」を担当した。「ターミナル看護」はは必修科目で1単位（2時間×15回）の半期科目である。講義内容は，ターミナルケアの意味を理解し，看護者自身の生死観が確立できる基礎を養う。また，ターミナルケアを実践するうえでの知識と技術を学ぶ。
14)　「看護理論」の担当	平成22年4月～ 平成25年3月	岐阜医療科学大学保健科学部看護学科の学生を対象に「看護理論」を担当した。「看護理論」は必修科目で1単位（2時間×15回）の半期科目である。講義内容は，看護の見方・考え方の基礎として，様々な看護理論が現れてきた社会背景を知り，看護理論を学ぶ。代表的な理論家の理論が看護実践の根拠になることや，その活用方法を知る。さらに，理論を研究に活用するための方法について理解する。

事項	年月日	概　　要
15)　「チーム医療論」の担当	平成22年4月～ 平成25年3月	岐阜医療科学大学保健科学部看護学科の学生を対象に「チーム医療論」を担当した。「チーム医療論」は必修科目で1単位（2時間×15回）の半期科目である。講義は3学科の教員で行う。チーム医療における協調性，責任感，コミュニケーション能力の向上は必須である。また専門分野以外の学習も「学際性」を伸ばすために必要である。3学科共通の科目を持ち学科の壁を越えて本科目を履修することにより医療現場において必要とされる資質を習得することを目的とする。
16)「看護学概論」の担当	平成25年4月～ 平成25年9月	岐阜医療科学大学保健科学部看護学科の学生を対象に「看護学概論」を担当した。「看護学概論」は必修科目で1単位（2時間×15回）の半期科目である。講義内容は，看護学における主要概念を理解し，看護の本質と専門職としての役割を学ぶ。そのために，看護の対象である人間を全人的にとらえる知識と感性を養う。また，自己の看護観を形成し，発展させる能力を養うことを目的とする。
17)　「保健医療学概論」の担当	平成26年4月～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部看護学科の学生を対象に「保健医療学概論」を担当した。「保健医療学概論」は必修科目で1単位15時間の半期科目である。講義内容は，全人的ケアに主眼をおいた保健医療学について，その背景や基本的な考え方，諸外国及び日本における現状と実践例，クオリティ・オブ･ライフ（QOL）の視点を含む医療と看護の原点などについて幅広く学び，その後の主体的な学習の礎とする。
18)　「看護理論」の担当	平成26年4月～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部看護学科の学生を対象に「看護理論」を担当した。「看護理論」は必修科目で1単位15時間の半期科目である。講義内容は，代表的な理論家の理論がどのような医療環境や社会背景のもとに構築されてきたかを知る。また，それらの理論が看護実践の根拠となることを理解し，看護過程の展開に有効に活用する方法を学ぶ。
19)　「チーム医療論」の担当	平成26年4月～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部看護学科の学生を対象に「チーム医療論」を担当した。「チーム医療論」は必修科目で1単位15時間の半期科目である。講義内容は，チーム医療の重要性，看護領域におけるチーム医療の変遷について学ぶ。そして現在のチーム医療のなかでの看護師の位置づけおよび看護師が果たす役割について理解する。また，チーム医療における看護の在り方および今後の課題について考察する。
20)　「成人看護学概論」の担当	平成26年4月～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部看護学科の学生を対象に「成人看護学概論」を担当した。「成人看護学概論」は必修科目で2単位30時間の半期科目である。講義内容は，人間の成長発達課題における成人期の特質について，身体的・精神的・社会的側面から理解する。また，成人期にある人々の様々な健康障害の原因や要因を学び，健康の回復，あるいは健康の保持増進に向けての看護援助の方法について学ぶ。
21)　「社会福祉」の担当	平成26年6月～ 平成26年9月	大和高田市立看護専門学校の学生を対象に「社会福祉」を担当した。「社会福祉」は必修科目で１単位（2時間×15回）の半期科目である。講義内容は，社会保障・社会福祉の理念や原理及び障害者・高齢者の生活問題の現状を把握し，それに対する社会福祉制度と最近の政策動向について学ぶ。
22)　「ターミナルケア論」の担当	平成26年10月～ 平成27年3月	岐阜医療科学大学保健科学部看護学科の学生を対象に「ターミナルケア論」を担当した。「ターミナルケア論」は必修科目で1単位（2時間×15回）の半期科目である。講義内容は，ターミナルケアの意味を理解し，看護者自身の生死観が確立できる基礎を養う。また，ターミナルケアを実践するうえでの知識と技術を学ぶ。

事項	年月日	概　　要
23）「国際看護論」の担当	平成26年10月～ 平成27年3月	岐阜医療科学大学保健科学部看護学科の学生を対象に「国際看護論」を担当した。「国際看護論」は必修科目で1単位（2時間×15回）の半期科目である。講義内容は，国際社会の動向を知り，グローバルな視点で活動できる教養を養うことを目標とする。それぞれの国の分化，資源，環境など，多角的な視点について考え，異文化を持つ人々への看護の在り方に対する理解を深めていく。
―実習指導―		
1）老年看護学実習	平成18年10月～ 平成22年3月	奈良県立医科大学医学部看護学科の3年次学生を対象に「老年看護学実習指導」（指導人数95人，指導期間10週）を担当した。指導内容は老年期にある人の看護，主に高齢者施設における老年看護の視点とその方法を実践的に学び，老年看護の役割・機能を理解させる。
2）総合実習	平成19年5月～ 平成22年3月	奈良県立医科大学医学部看護学科の4年次学生を対象に「総合実習指導」（指導人数11人，指導期間10週）を担当した。

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　　要
1　資格，免許		
1）幼稚園教諭2級普通免許	昭和53年3月31日	昭52幼2普第3230号
2）保母資格	昭和53年3月21日	第保755
3）看護婦免許	昭和61年5月14日	第568532号
4）養護学校教諭1級普通免許	昭和63年9月25日	昭63養学1普め第10号
5）看護教員資格	平成3年11月29日	第946号 平成3年度厚生省認定による看護教員養成講習会
6）修士（学術）	平成9年3月25日	大阪教育大学第2090号
7）博士（社会福祉学）	平成15年10月15日	関西学院大学（甲社第十四号）
2　特許等		
特記事項なし		
3　実務の経験を有する者についての特記事項		
特記事項なし		
4　その他		
1）岐阜医療科学大学 研究倫理審査委員長	平成22年4月～ 平成24年9月	岐阜医療科学大学保健科学部看護護学科，放射線技術学科，臨床検査技師学科合同の研究倫理審査委員会において研究倫理審査委員長を務めた。

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　要
（著書）				
1. 看護学実践 -Science of Nursing- 老年看護学	共著	平成19年4月	日本放射線技師会出版会	時代のニーズに応える実践的な看護の教科書として，サブテキストとして，実習の参考書として，臨床で調べる丁寧な辞書として，など多様に活用できることを意識して製作された。 A5版　全261頁 監修：川野雅資 編者：守本とも子 共著者：今井充子，岡本啓子，新谷奈苗，田中麻里，谷村友子，中丸弘子，新川泰弘，守本とも子，吉村雅世 本人担当部分:編集 Chapter 2　高齢者の理解「加齢と老化」P.4，P.45-P.52を単著。 高齢者の心と身体について加齢現象の視点から理解するとともに，高齢者の特徴を十分できるように記述した。
2. 系統看護学講座　専門分野1 「基礎看護技術Ⅱ基礎看護学[3]」 第14版第6刷	共著	平成20年4月	医学書院	本書は看護技術の教科書として最新の方法を紹介している。単なる手順の方法ではなく看護職者が最も重要と考える「臨床判断」の過程を含めて解説し，卒業までのすべての領域実習で手引書として活用できる内容としている。 B5判，全348頁 共著者：守本とも子，藤崎　郁，任和子，有田清子，井川順子，石賀奈津子，岡本啓子，尾崎章子，小林優子，茂野香おる，竹林直紀(他10名) 本人担当部分: 第1章A「生活環境を整える」　P.64-P.74を共著。 主に療養生活の環境（病室，人的環境など）のアセスメントと調整及びベットメーキングについて述べた。 共著者：守本とも子，岡本啓子，吉村雅世 第1章C「衣服を用いる」P.121-P.127を共著。 主に衣類を用いることの意義，衣生活に関するニーズのアセスメント，病衣の選び方，病衣交換の方法について述べた。 共著者：守本とも子，岡本啓子，吉村雅世
3. 住居医学	共著	平成19年8月	米田出版	本書は「病室環境改善」についての調査・研究の成果をまとめたものである。より，現実に即したニーズをとらえ，現存の病室環境をいかに改善するかを考案していくことを目的としている。 四六判，全211頁 監修：吉田修 共著者：吉田修，三村浩史，筏　義人，大﨑茂芳，内山巌雄，尾崎二郎，細井裕司，喜多英二，和中明生，守本とも子，車谷典男 本人担当部分:第10章「デンマークの優れた高齢者住居」P.177-P.192を単著。 日本の現状を背景に，北欧諸国の中でも「高齢者住居」について独自な発展を遂げ，1987年に施設建設を凍結するという政策転換（法律公布）に踏み切ったデンマークの高齢者住宅と日本の画期的な高齢者共生住宅の事例を取り上げ，新しいステージに突入した日本の高齢者住居の有り様を検討した。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
4. 系統看護学講座　専門分野1 「基礎看護技術Ⅱ基礎看護学[3]」 第15版第1刷	共著	平成21年2月	医学書院	本書は看護技術の教科書として最新の方法を紹介している。単なる手順の方法ではなく看護職者が最も重要と考える「臨床判断」の過程を含めて解説し，卒業までのすべての領域実習で手引書として活用できる内容としている。 B5判，全495頁 共著者：守本とも子，藤崎　郁，任和子，有田清子，井川順子，石賀奈津子，岡本啓子，尾崎章子，小林優子，茂野香おる，竹林直紀(他10名) 本人担当部分： 第2部　第1章 B「病床環境の調整」P.22-P.32を共著。 主に療養生活の環境（病室，人的環境など）のアセスメントと調整及びベットメーキングについて述べた。 共著者：守本とも子，岡本啓子，吉村雅世 第2部　第5章 C「病床での衣生活の援助」P.185-P.192を共著。 主に衣類を用いることの意義，衣生活に関するニーズのアセスメント，病衣の選び方，病衣交換の方法について述べた。 共著者：守本とも子，岡本啓子，吉村雅世
5. 国際看護への学際的アプローチ	共著	平成21年3月	日本放射線技師会出版社	本書は世界でトピックとなっている健康課題とその背景について，国際保健医療活動の実例を紹介し，今後の国際的な活動に必要な知識や思考を深める機会を提供することを目的とした。 B5判，全211頁 監修：守本とも子 編者：堀内美由紀 共著者：守本とも子，中園直樹，宮本和子，伊達卓二，馬場雄司，川端眞人，中谷香，堀内美由紀，田瀬和夫，岡崎悦子，正楽藍，瀧尻明子 本人担当部分:（部分執筆） 第1章「異文化理解のための看護理論」P.7-P.18を単著。 世界でトピックとなっている健康課題とその背景を国際保健医療活動の実例を交えながら紹介し，看護の国際的な活動に必要な知識や思考について述べた。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
6. 新・QOLを高める専門看護，介護を考える	共著	平成21年3月	中央法規出版(株)	本書は高齢者への理解を深めるため，加齢が及ぼす身体的・心理的変化を学び，加齢が高齢者にどのような影響を及ぼすのか，また，結果としてどのような障害が起こってくるのかを理解する。そして高齢者のQOLを高める日常生活援助について学ぶ。 B5判，全204頁 監修：アンドレア・ストレイト・シュライナー 編者：守本とも子，星野政明 本人担当部分：（部分執筆） 第2章　「高齢者の痛みへのアプローチ」P.61-P.80を単著。 第1節「高齢者の痛みについて」高齢者の痛みの特徴を述べた。第2節「痛みの特定」痛みの特定方法について主訴，動作，疾患との関連について述べた。第3節「痛みのアセスメントスケール」痛みの質と強さのアセスメントについて著者らが作成したVASスケールを紹介した。第4節「痛みの治療とケアプラン」非薬物，薬物的介入と痛み治療薬の主要なタイプ，ケアプランについて述べた。第5節「倫理的責任」痛みの治療におけるガイドラインと倫理的課題について述べた。 第3章「高齢者の嚥下困難へのアプローチ」P.81-P.94を単著。 第1節「嚥下障害とは」嚥下の生理，嚥下障害のタイプと原因，観察のポイントとチームアプローチについて述べた。第2節「嚥下療法の工夫と技術」食物形態の改善，嚥下方法，筋肉強化訓練，緊急時の対処について述べた。第3節「スタッフの役割」嚥下・食事評価スケールを紹介した。 第5章「QOLを高める日常生活動作への援助」P.113-P.123を単著。 第1節「認知症高齢者の入浴テクニック」入浴中の不穏を低下させるプロトコールと安全策について述べた。 第6章「認知症高齢者への安全テクニック」P169-P.177を単著。 第1節「認知症高齢者について」認知症についての概要と特徴について述べた。第2節「認知症高齢者の行動特性と対策」認知症高齢者の特徴的な行動とそれに対する対処方法を述べた。 第7章「QOLを高める高齢者の遊び療法」P179-P.201を単著。 第1節「遊び療法とボランテイア活動」ボランテイアの集め方，活動の説明について述べた。第2節「遊びマニュアルの使い方」レクレーション遊具のつくり方と使い方及び遊具を紹介する際の注意点について述べた。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
7. 生活支援技術・介護過程	共著	平成22年6月	黎明書房	専門職としての基盤を構築することを目的とした。心身の状況に応じた介護を実践するための生活支援の方法とそれらを展開していくための一連の過程として「介護過程の展開」について具体的な内容を盛り込んだ。 A5判，全219頁 編著：守本とも子，星野政明 本人担当部分: 第10章「終末期の介護」P.159-P.168を単著。 終末期における介護の意義と目的，対象者のアセスメント，医療との連携，ブリーフケアについて述べ，終末期にある高齢者の最も安楽で威厳に満ちた死を可能にする方法を探った。
8. 介護の基本・コミュニケーション技術	共著	平成22年9月	黎明書房	本書は介護の考え方について理解するとともに，介護を必要とする対象者を生活の視点からとらえ，介護を適切に行う能力と態度を養うことを目的とした。 A5判，全202頁 編著：守本とも子，星野政明 共著者：三浦辰哉，原田理恵，溝上五十鈴，土田耕司，羽柴香恵，河野喬，新谷奈苗，吉村雅世，西薗貞子，西元康世，甲田宗嗣，上本野唱子，石﨑利恵，川合百合子 本人担当部分：編集
9. 老年看護学 Geriatric Nursing	共著	平成22年12月	ピラールプレス	本書は高齢者の身体的・心理的特徴を十分把握したうえで高齢者のQOLの向上を目指した看護実践を意識的に取り上げた「老年看護学」（監修:川野雅資，編集：守本とも子,2007年）の改訂版である。国家試験対策のテキストとしても活用されてきた旧版の内容をさらに掘り下げ，高齢者の疾病構造の変容，健康に関連した高齢者のニーズの多様性などを考慮して，老年看護の実践に向けて，看護学生の必携のテキストとなっている。 A5版　全285頁 監修：川野雅資 編者：守本とも子 共著者：今村美幸，上平悦子，岡崎大資，岡本啓子，奥百合子，川口ちづる，甲田宗嗣，新川泰弘，新谷奈苗，土田耕司，富永尭史，舩瀬孝子，三宅美恵子，溝上五十鈴，守本とも子，山形力生，吉村雅世 本人担当部分：編著 第2章　2. 高齢者の理解　「加齢と老化」P.2，P.57-P.65を単著。 高齢者の生理的機能の変化，疾患の特徴，感覚機能の変化（視覚，聴覚，味覚，嗅覚，触覚，痛覚）また，その他の諸機能として，加齢による心臓，血管，血液，外皮系について述べた。そして，加齢がもたらす精神的変化と社会的変化についても述べた。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
10. 医療福祉学の道標	共著	平成23年1月	金芳堂	本書は社会福祉学の視点から現代医療の課題を探求，解決していこうとすると同時に医療というフィールドにおける社会福祉的視点の意義への接近を試みた。医療の分野における社会福祉的なものとは何か，という課題に迫ろうとしている。①クライエントの心身の健康，②クライエントの住む時代と社会の状況，③クライエント個人（家族）の生活実態と生活背景と地域の状況，④医療と福祉の援助専門職の理論と技術，⑤医療と福祉の援助専門職の価値観，⑥援助専門職の連携について，の道標を明示することを目的としている。 B5判，全200頁 監修：日野原重明，西三郎，前原澄子，秋山智久 編集：星野政明，高内克彦，土田 耕司 共著者：守本とも子，天野博之，安藤詳子，石村由利子，伊藤健次，伊藤孝治，井上眞人，石﨑利彦，牛津信忠，大山朝子（他32名） 本人担当部分: 第2章 C 生活の変化と保健･医療･福祉の統合 P.23-P.26を単著。 生活の変化として家計の動向，家族形態の変化，介護問題について解説したうえで生活を支える保健・医療・福祉の統合の意義について述べた。 第13章 A 少子高齢社会での医療福祉 P.163-P.165を単著。 今日抱える医療福祉の課題として少子高齢化社会での医療福祉のあり方について述べた。特に高齢者の一人暮らしに焦点をあて，現状と対策について考察した。 C 介護福祉から医療介護福祉へ P.170-P.172を単著。 介護福祉から医療介護福祉へのパラダイムシフトの必要性について述べた。特に介護の専門性について再度考察し，今後の介護福祉士のあり方と課題について考察した。 G 情報化社会における医療福祉 P.184-P.185を単著。 情報化社会における医療福祉について，特に医療福祉とIT（Information Technology）との関連で述べた。今後，医療福祉のどの分野においてITがどのように活用されていくのか，その意義について考察した。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
11. 子ども家庭のウェルビーイング	共著	平成23年3月	金芳堂	近年，子どもの成長，発達を阻害する社会的因子や子どもへの虐待問題など，多くの課題が明らかになっている。子どものウェルビーイングを目ざした子ども家庭福祉のあり方と支援策について解説している。 B5判，全128頁 編集代表：星野政明 編集：真鍋顕久，三友雅夫 共著者：守本とも子，荒木照子，伊藤博美，大熊信成，大谷恵，大塚弘子，河合由嘉，川添公仁，木村由美，嶋田芳男　(他19名) 本人担当部分: 第1章 A 少子化の進行と家庭・地域の変容 P.1-P.5を単著。 少子化の現状と家庭・地域の変容について概説した。また，現代社会における家庭・地域で生活する子どもの生活課題と対策について考察した。 第3章 B 子ども家庭福祉の実施体制 P.39-P.41を単著。 子ども家庭福祉について，どのような目的でどのような施策が実施されているのか，その現状について述べるとともに，今後の課題についても考察した。
12. 系統看護学講座　専門分野1 「基礎看護技術Ⅱ基礎看護学[3]」 第15版第8刷	共著	平成24年2月	医学書院	本書は「第1部　看護技術総論」「第2部　16領域の看護技術」の2部構成としている。第1部では看護技術の4つの基本原則とその優先順位について説明を行い，第2部では看護技術を16の領域に分けて説明している。改定にあたっては，それぞれの技術についてできるだけ，最新の方法を紹介し，その根拠を示すように心がけている。 B5判，全495頁 本人担当部分： 第2部　第1章 B「病床環境の調整」P.22-P.32を共著。 主に療養生活の環境（病室，人的環境など）のアセスメントと調整及びベットメーキングについて述べた。 共著者：守本とも子，岡本啓子，吉村雅世 第2部　第5章 C「病床での衣生活の援助」 P.185-P.192を共著。 主に衣類を用いることの意義，衣生活に関するニーズのアセスメント，病衣の選び方，病衣交換の方法について述べた。 共著者：守本とも子，岡本啓子，吉村雅世

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
13. 介護実習入門	共著	平成24年1月	黎明書房	本書は介護の現状について述べ，介護の倫理，介護の原則についてわかりやすく説明している。また，介護施設の概要と入所者の特徴について述べている。次にそれらの知識を踏まえ，介護実習前の基礎知識として，まず，介護実習の意義と目的について述べ，介護を専門職とする人のための姿勢，そしてコミュニケーションの基本とコミュニケーションの実際について知識と技術が同時に学ぶことができるように工夫されている。 最後に介護過程について事例をもとにわかりやすく解説し，介護に必要な援助技術について述べている。 A5判，全128頁 編集：守本とも子，星野政明 共著者：横井賀津志，川口ちづる，真辺一範，土田耕司，奥百合子，辻下守弘，守本幸次，大山末美，新谷奈苗，真辺一範，岡崎大資，甲田宗嗣，山形力生，長島万弓，石井和 本人担当部分：編集
14. 系統看護学講座　専門分野1 「基礎看護技術Ⅱ基礎看護学[3]」 第16版	共著	平成25年1月	医学書院	本書は，多くの写真やイラストによって看護技術の手順をわかりやすく解説した。また，主な看護技術の手順については，動画で見られるように工夫し，動画の活用によって技術習得が容易となり，より効率的・効果的に技術レベルが向上することが期待される。 B5判，全528頁 共著者：有田清子，有田秀子，井川順子，岡本啓子，尾崎章子，小林優子，坂下貴子，茂野香おる，立野淳子，田中靖代，田村富美子，内藤知佐子，任和子，林静子，比田井理恵，平松八重子，三富陽子，守本とも子，屋宜譜美子，山勢博彰，吉村雅世 本人担当部分： 第1章 A 「環境調整技術」P.9-P.21を共著。 主に療養生活の環境（病室，人的環境など）のアセスメントと調整及びベットメーキングについて述べた。 共著者：守本とも子，岡本啓子，吉村雅世 第6章 B 「清潔・衣生活援助」P.192-P.200を共著。 主に衣類を用いることの意義，衣生活に関するニーズのアセスメント，病衣の選び方，病衣交換の方法について述べた。 共著者：守本とも子，岡本啓子，吉村雅世

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
15. 高齢者のせん妄 安心をとどけるケアと介護の心得	共著	平成26年10月	すぴか書房	本書のテーマは「高齢者の」せん妄である。治療者の視点ではなく生活援助者の視点で，「安心をとどける」ためにどうすべきかを述べた。 A5判　全140頁 編者：守本とも子 共著者：守本とも子，野中浩幸，酒井千知，奥百合子，川口ちづる，大谷須美子，川田美和，鎗内希美子，大西恵，横嶋清美，山田ゆきこ，亀山紀代美 本人担当部分： 第3章「せん妄を起こしやすい状況-こわれやすい心へのおもいやり」P45-72を単著。 本章では，せん妄を起こしやすい状況を紹介している。高齢者の心は壊れやすく，とても脆くなってきている。高齢者に対しては身体的な援助とともに心のケアが重要な課題となる。高齢者ケアにかかわる人にとって，せん妄の知識は必須だと言える。 第4章「せん妄が起きてしまったら」P73-86を単著。 せん妄の症状は特定の病気のあらわれではなく，さまざまな要因によって引き起こされた異常な状態である。意識障害であることを理解し，症状への適切な対応を学ぶ。
16. これからの国際看護学 国境を越えた看護実践のために	共著	平成26年11月	ピラールプレス	本書では，発展途上国の現状，リプロダクティブヘルスと母子保健のほか，我が国に滞在する外国人への看護についても取り上げている。また，学生が将来勤務地として希望するであろう発展途上国，および先進国への就業のほか，欧米諸国への就職についても紹介している。 B4判　全163頁 監著：守本とも子 編著：田中和奈 共著者：城戸口友香，高嶋愛里，高橋里沙，田中和奈，長谷川恵介，溝尾朗，守本とも子，龍現寺素子 本人担当部分： 第3節「国際協力機関の取り組み」P22-28を単著。 国際協力のいくつかの方法について知り，世界中のすべての人々がより良く生きられる未来を目指す。
17. 看護職をめざす人の社会保障と社会福祉	共著	平成27年4月	みらい	本書は看護職（看護師・保健師・助産師）をめざす読者が社会保障・社会福祉について学ぶテキストである。また，すでに医療現場で看護職やコメディカルとして活躍している方々の学びのふりかえり等にも十分対応できる内容である。 B4判　全211頁 編者：守本とも子 共著者：虎杖真智子，井上深雪，小澤香，鍵本由起子，黒野伸子，新谷奈苗，鈴木久美子，高林新，玉井純子，土屋昭雄，富永堯史，松浦信，真鍋顕久，三宅美恵子，村山くみ，森田隆夫，守本幸次，山口佳子 本人担当部分：編集

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
18. シリーズ　看護・介護・福祉のための「教育学」 教育心理をふまえた患者教育指導実践の手引き1 看護のための『教育学』	共著	平成27年12月	あいり出版	本書では看護専門職者が患者への健康面での教育指導を実践するにあたって，学ぶべき教育原理・教育心理学を踏まえた患者教育指導のノウハウを読者に伝え，日常の看護実践のスキルアップに繋げていきたい。 B4判　全151頁 編者：守本とも子 共著者：守本とも子，松田智子，虎杖真智子，鎌田首治朗，松浦純平，中尾友美，武富由美子，山口曜子，佐々木千恵，新谷奈苗，東中須恵子，岡本響子 本人担当部分： 第2章　3「教授理論」P22-25を単著。 第2章　4「現代の教授理論」P25-28を単著。 教授理論とは教授者が学習者に知識・技能をさずけるために有用な理論である。具体的な教授理論を学ぶ前に，教授（指導）するためのよりどころとする原理について述べたのち（第2章3），主要な教授理論について説明する（第2章4）。 第2章　5「人格」P28-P29を単著。 教育はたんに知識や技術を習得させるためのものではなく，全人的形成が目標となる。したがって教育は人格形成過程の一環として行われなければならない。 第2章　6「教育心理学と患者指導」P29を単著。 本章で学んだ内容が患者指導に生かされることを目的に構成しているが，教育心理学がどのように患者指導に有用か，例をあげて考える。
19. 系統看護学講座　専門分野1 「基礎看護技術Ⅱ基礎看護学[3]」 第17版	共著	平成29年1月	医学書院	本書は，多くの写真やイラストによって看護技術の手順をわかりやすく解説した。また，主な看護技術の手順については，動画で見られるように工夫し，動画の活用によって技術習得が容易となり，より効率的・効果的に技術レベルが向上することが期待される。 B5判，全520頁 共著者：有田清子，有田秀子，井川順子，今井宏美，尾崎章子，後藤奈津美，小林優子，坂下貴子，茂野香おる，立野淳子，田中靖代，辻守栄，内藤知佐子，任和子，林静子，比田井理恵，平松八重子，三富陽子，守本とも子，屋宜譜美子，山勢博彰，吉村雅世 本人担当部分： 第1章 A 「環境調整技術」P.10-P.24を共著。 主に療養生活の環境（病室，人的環境など）のアセスメントと調整及びベットメーキングについて述べた。 共著者：守本とも子，吉村雅世 第6章 B 「清潔・衣生活援助」P.153-P.211を共著。 主に衣類を用いることの意義，衣生活に関するニーズのアセスメント，病衣の選び方，病衣交換の方法について述べた。 共著者：守本とも子，吉村雅世

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
20. 痛みのケア	共著	平成29年3月	ピラールプレス	本書は看護職が患者への最善の痛みケアを提供できるよう，第Ⅰ部で「痛みと人間」をテーマに「痛みと性」，「痛みの意味」，「痛みと倫理」「痛みと医療」について述べ，人間と痛みの関係を理解する。そして第Ⅱ部5章～８章で「痛み理論」を紹介し，痛みに関する理論をもとに痛みについての理解を深める・第Ⅲ部では「痛みと看護」をテーマに「高齢者の慢性的な痛みの治療と看護」，「検査に伴う痛みの看護」，「治療に伴う痛みの看護」「ターミナルケアと緩和医療」といった臨床の場面を想定した痛みのケアを学ぶ。そして，第Ⅳ部では「痛みケアにおける看護実践例」として，術後疼痛，癌性疼痛，急性・慢性疼痛，出産に関連した痛みの看護，小児に関連した痛みの看護といった主な疾患や状況における痛みケアの展開事例を紹介する。 B5判　全180頁 編者：守本とも子 共著者：守本とも子，池辺寧，辻下守弘，前田吉樹，篠原百合子，棚橋千弥子，田中登美，梶村郁子，　立川茂樹，新谷奈苗，小池恵理子，澤田京子，横山美菜，室津史子，高垣麻衣 本人担当部分： 「第9章　高齢者の慢性的な痛みの治療と看護」P36－P49を単著 慢性的な高齢者の痛みについて，痛みと動作について説明し，痛みに関する観察の力を養う。そして高齢者の痛みの主訴の特徴を述べ，痛みの原因となる疾患または治療について述べる。また，痛みのアセスメントツールを紹介し看護者が利用できる一般的な痛みのアセスメントスケールを学ぶ。代表的な痛みのツールはVisual Analogue Scales (VAS)である。さらに本書では痛みの有無に焦点をしぼるpain VASを紹介し，看護ケアの実践として痛みの治療とケアプランについて述べる。
（学術論文）				
1. Factors Relating to Life Satisfaction and Subjective Healthy Feelings in Respiratory Patients During Home Oxygen Therapy （在宅酸素療法中の呼吸不全患者における主観的健康感と生活満足度の関連因子） （査読付）	共著	平成21年3月	Journal of Information and Behavioral Science for Health and Welfare 日本医療福祉情報行動科学学会誌 vo.1 No.1 March 2010 P.5-P.12	在宅酸素療法中の呼吸不全患者（32名）を対象に面接とBaseline Dyspnea Index(BDI)，Geriatric Depression Scale（GDS），Modified Barthel Index（MBI）などの質問紙票調査を行い，主観的健康感と生活満足度に有意相関を持つ項目を探索した。主観的健康感は自信，呼吸困難感，疲労感と有意相関を示し，生活満足度は収入，呼吸困難感，日常抱える課題と有意相関を示した。GDS平均値は7.6と高値を示し鬱傾向にあった。以上より主観的健康感の低下は自信喪失とうつ状態を惹起し，呼吸困難は主観的健康感と生活満足度の両者に影響することが示唆された。症状軽減が在宅酸素療法患者の健康関連QOLを向上させると考えられた。 本人担当部分：統計解析及び研究の総括をおこなった。 共著者:守本とも子，下内章人，馬場隆明

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
2.　精神学的障害者の気分アセスメント～ヴィスアルアナローグ気分スケールの日本語版の妥当性～ （査読付）	共著	平成21年5月	日本福祉工学会誌 11(1) P.42-P.48	本研究の目的はヴィスアルアナローグ気分スケールの日本語版(VAMS)の妥当性を調べることにある。 VAMスケールは，脳卒中，アルツハイマーあるいは外傷脳などの神経学的障害をもつ患者の気分を調べるために開発された。典型的な心の健康と気分を測定するスケールは被験者の言語能力を基礎にしている。しかし，これらの検査は神経学的障害者にはしばしば不適切である。したがって，VAMスケールはこの母集団の気分を評価するために開発されたものであり，被験者の認識能力および/あるいは発言能力に依存しているスケールよりも，いくつかの点において有利である。 VAM スケールの妥当性は高齢者の二つの母集団を対象に調査された。 対象は1.ある民間の精神病院から抽出した重症あるいは軽症の鬱病と診断された高齢者（37人）と，2.地域のレクレーションセンターから抽出した精神病の既往歴のない高齢者（74人）であった。 担当部分：統計解析と考察をおこなった。 共著者:守本とも子，Andrea S. Schreiner，早川浩，馬場孝明
3.　部屋の住み心地に及ぼす物理的・感覚的因子の組み合わせ解析 ―ファジィニュートラルネットワークによる住居環境解析― （査読付）	共著	平成21年6月	日本感性工学会論文誌 Vol.9 No.1 P.97-P.102	本研究により，住居環境，すなわち住居に関する物理的因子(室内環境や室内空間)や感覚的因子(部屋から受ける情感)が住む人の満足感に深く関連していることが明確となった。今回FNN解析により選択された項目から，住居環境を工夫して整えること(例えば，新しいカーテンを取り入れて部屋の色彩を変える，寝室用のフロアライトやテーブルライトの購入により夜間照明を変え，くつろげる雰囲気を作るなど)が，住む人のQOLを高めるために重要な要因であることを示唆していると考えられる。 本人担当部分：統計解析及び研究の総括をおこなった。 共著者:牛田泰徳，加藤竜司，守本とも子，本多裕之
4.　Restraint Plus Water-immersion Stress (RWIS)-induced Stomach Ulsers in Mice are Depressed by a Conditioning Heat Treatment （あらかじめの温熱環境曝露による水浸拘束誘発マウス胃潰傷の抑制） （査読付）	共著	平成21年9月	Japanese Journal of Hyperthermic Oncology 日本ハイパーサーミア学会誌 Vol.25, NO.3. September,2009 P81-P87	温熱耐性として，あらかじめの温熱処理が重篤な温熱誘導生物影響を抑制することはよく知られている。本論文において，われわれはあらかじめの温熱処理が水浸拘束ストレス(RWIS)による胃壁の損傷を抑制するかどうかを確かめた。RWISによる胃潰瘍は42%発生したのに対して，あらかじめ37℃で温熱処理をすると9%に抑制された。さらに，胃におけるRWIS誘導アポトーシス頻度は13%であったのに対して，あらかじめ温熱処理をすると8%に抑制された。温熱ショックタンパク質(HSP)誘導剤のゲラニルゲラニルアセトン(GGA)も胃潰瘍の発生を抑制したことから，あらかじめの温熱によるHSPがアポトーシス誘導の抑制を介してRWISによる胃壁の損傷を抑制していることが示唆された。 本人担当部分:統計解析及び研究の総括を行った。 共著者:Rikio Yamagata, Akihisa Takahashi, Xiaoming Su, Tomoko Morimoto, Takeo Ohnishi

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
5.　Effects of a Stuffed Animal Designed for Nursing Care （介護用“動物の縫いぐるみ”の効用） （査読付）	共著	平成22年9月	Proceedings of 6th International Conference of Health Behavioral Science 日本保健医療行動科学会第6回国際会議論文集 P.260-P.262	本研究は高齢者の癒しとQOLの向上のための温かい介護用縫いぐるみを考案し，認知症高齢者が実際に縫いぐるみを使用した後，どのような変化が見られたかをコーエンマンスフィールド（CMAI）スケールを使用して検討した。縫いぐるみを使用する前後1週間の観察をもとに比較検討した。変化の見られた行動は，同じことを繰り返し質問する，机を何度も叩く，といった行動が有意に減少した。高齢者が温かい縫いぐるみを身近におくことは高齢者の癒しに効果をもたらすことが示唆された。 本人担当部分：データーの解析，研究の総括を行った。 共著者：Tomoko Morimoto, Nanae Shintani
6.　Discussion of emergency notification device for elderly people （高齢者のための緊急通報機器の検討） （査読付）	共著	平成22年11月	Ergonomics for All：Celebrating PPCOE’S 20years of excellence－Lin&Chen(eds) P.495-P.501	高齢者の緊急時の不安を軽減し安心して暮らせる社会を実現すべく，各市町村では家庭用緊急通報機器の貸与による支援をおこなっており，これにより高齢者の不安解消と安全確保，QOL向上を目指している。しかしながらますます需要の拡大が予測されているにも関わらず実際は低い普及率である。本研究ではH市に居住する在宅高齢者を対象に聞き取り調査をおこない，緊急通報機器の使用状況を明らかにし，高齢者にとって活用しやすい機器の開発や，運用方法の改善につなげることを目的とした。その結果，緊急通報機器の使い方の理解や緊急通報機器の形状について改善すべき点が明確になった。 本人担当部分：調査および結果の考察を行った。 共著者:Nanae Shintani, Hiroyasu Nagaoka, Kazuko Horiguchi, Tomoko Morimoto
7.　A questionnaire to determine Nursing and Child care students` Understanding of welfare equipment （看護と保育を学ぶ学生の福祉用具の認識についての認識） （査読付）	共著	平成22年11月	Ergonomics for All：Celebrating PPCOE’S 20years of excellence－Lin&Chen(eds) P.529-P.532	子どもと大人の主要な福祉用具への認識について，看護と保育を学ぶ学生間の比較を目的に調査を行った。その結果，認識の違いはカリキュラム等の教育の内容によって影響を受けていることが考えられた。また，因子分析の結果により，双方とも「遊び」が重要なキーワードであることが考えられた。 本人担当部分：研究の企画および結果の考察をおこなった。 共著者:Tomoko Morimoto, Shoko Kamimotono, Nanae Shintani

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
8.　Study of quality of life (QOL) in home oxygen therapy patients and related factors of actual life situation （在宅酸素療法患者の生活実態とQOLの関係） （査読付）	共著	平成23年10月	East Asian Ergonomics Federation Symposium 2011 (EAEFS 2011) Ergonomics In Asia:Development, Opportunities, and Challenges P.295-P.300	在宅酸素療法は種々の在宅医療の中で最も普及し，その効果は単に患者の生命予後を延長するばかりでなく，人間的な生活とQuality of Life (QOL) を保証するものとして高く評価されている。しかし反面，社会的・精神的・身体的煩わしさのため，社会活動が制限され，閉じこもりがちとなることで抑うつ症状となり，急性増悪を招くという報告もある。そこで生活実態とQOLとの関係をより深め明らかにするため，患者のQOLに影響を及ぼす生活実態の関連要因を検討することを本研究の目的とした。結果，「患者活力」と「患者心の健康」が「肺理学療法理解度」に有意に関連していた。肺理学療法の理解度が高い者は，認知能力も高く自己管理ができており，これが自分の疾患を前向きに受けとめ，活力を維持することにつながっていると考えられ，自己管理能力を身につけるための患者教育を繰り返し行ない，普及させていくことの必要性が示唆された。 本人担当部分：研究の総括を行った。 共著者：Nanae Shintani，Tomoko Morimoto
9.医療系大学におけるチーム医療の実際―医療のパラダイムシフトに向けて― （査読付）	単著	平成24年6月	日本保健医療行動科学会雑誌 Vol.28 No.1 2013 P.2-P.6	チーム医療教育は岐阜医療科学大学の建学の精神である「人間性」「学際性」「国際性」の向上を目的とし，本学の特色を活かした独自のプログラムである。 チーム医療に最も必要とされる資質を担保し，現在の医療現場で通用する”医療人”となることを目標とした教育の充実について考察した。
10.　Relationship between life satisfaction and sympathovagal balance in healthy elderly males at home at night （健常高齢男性の夜間における交感神経バランスと生活満足度との関連） （査読付）	共著	平成24年10月	Health Vol.4 No.11 2012 P.1068-P.1072	夜間自宅で起床中の健常高齢男性39名の心拍変動（RR間隔）と身体加速度を計測した。 身体加速度の低い時間についてのみ，心拍変動データの高周波帯域パワーの規格値（値が高いほど副交感神経優位）を算出した。その値と質問紙より点数化した生活満足度との間に統計的有意な負の相関を確認した。この結果より，生活満足度の高い健常高齢男性ほど，夜間自宅で起床安静時に交感神経系優位にあることが示唆された。 本人担当部分：データー解析と論文の構成を担当した。 共著者：Kohzoh Yoshino，守本とも子，Takahiro Itagaki，shigetaka Iketani，Masami Nagata，　Morihiro Thujishita
11. The Factors that Inhibit the Health Behaviors of Adulthood Women （成人女性の保健行動を抑制する因子について） （査読付）	共著	平成27年3月	医療福祉情報行動科学研究　第3号 2015　P.1-P.8	本研究では，初発の乳がん患者で，手術療法の後に化学療法の2回目を終了した以降の患者から，仕事を継続している患者を対象とし，「仕事を継続してく上での困難」について個別に半構造的インタビューを行った。 この結果，7つのカテゴリー，「治療の副作用からくる身体的苦痛」「仕事に穴をあけることに対する申し訳なさ」「再発への不安から仕事をセーブする」「職場の配慮不足」「受診のしにくさ」「治療の副作用から仕事の能力が落ちているのではないかという不安」「病名告知により同僚に気を遣われる辛さ」で構成されていた。 本人の担当：研究の総括を行った。 共著者：新谷奈苗，小池恵理子，守本とも子

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
12.　身体拘束一時的中断に関する看護師のアセスメントの視点についての考察 （査読付）	共著	平成27年3月	医療福祉情報行動科学研究　第3号 2015　P.13-P.19	本研究の目的は，精神科病棟で身体拘束中患者のケアに携わる看護師が，日常生活援助場面において，拘束一時中断が可能かどうかのアセスメントをどのような視点で行っているかを明らかにすることである。 その結果，≪疎通が図れる≫≪約束が出来る≫≪興奮・大声がない≫≪暴力がない≫≪緊張がない≫≪穏やかである≫≪食事が食べられる≫≪夜間睡眠がとれる≫≪自傷がない（うつ状態の患者）≫の9つのカテゴリーが見出された。 本人担当部分：研究の総括をおこなった。 共著者:上山千恵子，守本とも子
13.　認知症高齢者を介護する娘介護者の体験 ―介護生活の中で体験する困難と，介護生活の支えとなるもの―	共著	平成28年10月	奈良学園大学紀要第5集 p. 67-79	在宅認知症高齢者の介護者（娘）が体験する困難と，介護者の介護生活での支えとなっている要因について明らかにした。調査対象は在宅娘介護者15名で半構成的面接調査をおこなった。その結果，介護者が体験する困難として「親の現状を受け止める難しさ」「役割の両立から生じる困難」　「自分がやらなければ」「介護協力者との間に生じるずれ」などの7カテゴリーが，生活の支えとなっているものとして「変わっていく親を共有できる存在」「介護を分担してくれる家族」「介護効果の実感」などの4つのカテゴリーが抽出された。このような娘介護者特有の状況を理解したうえでの支援が重要であることが示唆された。 本人担当部分：調査と研究の総括をおこなった。 共著者:上山千恵子，田場真理，守本とも子
14.　Influence of Job Stressor on Coping Behavior （仕事ストレッサーが対処行動に与える影響） （査読付）	共著	平成29年2月	Journal of Information and Behavioral Science for Health and Welfare 医療福祉情報行動科学研究 Vol 4. 2017 p. 51-60.	食品製造業者に勤務する従業員168人を対象とし，仕事ストレッサー因子が対処行動にどのように結びついているかを検証した。重回帰分析の結果，計画的対処行動と要求度，裁量度，技能活用に有意な関連性があり，自己管理能力が高く，目標達成まで自分なりに計画を立て行動する傾向にある者が計画的対処を採用する傾向にあることがわかった。また，積極的協力依頼行動と，サポート・技能活との間に有意な関連性があり，周囲とコミュニケーションが良好でサポーティブな状況が背景にあり，また課題を整理し他者に伝えられる知識や技術のある者が，積極的協力依頼を採用する傾向にあることがわかった。計画的対処，積極的協力依頼といったポジティブな対処を実行するためには，本人の知識や技術を活用できる仕事に就かせることや，普段からのサポーティブな組織作りが大事であると考えられる。 本人担当部分：研究の総括をおこなった。 共著者: Nanae Shintani, Hiroyasu Nagaoka, Tomoko Morimoto

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（その他 ）				
―事典―				
1.介護福祉学事典	共著	平成26年10月	ミネルヴァ書房	本書は「介護福祉学」の構築のためのエビデンスを確立することを主たる目的としている。隣接領域の学問を学びつつ介護福祉学特有の学問体系を構築することが重要である。 「介護福祉学事典」は介護の社会的ニーズに対して，専門的な知識を持って対応できる人材の育成とサービスの向上に寄与するため，教育の根拠となる「介護福祉学」に関する知識・技術の共通理解のツールとして活用できる内容とした。 B5判　全829頁 共・編者：日本介護福祉学会事典編纂委員会 本人担当部分：P546-547を単著。 「障害児に対する介護福祉」 障害児の定義・概念・考え方について述べ，障害児に関する介護，福祉の実践や制度の現状を明らかにした。また，障害児に対する介護について，近現代史から，ノーマライゼーションの浸透までの背景や経過を説明し，障害のある子どもも社会の中で他の人々と同じように生活でき，活動することができるための展望と課題について考察した。
―研究報告書―				
1.　「部屋の住み心地に及ぼす物理的・感覚的因子の組み合わせ解析」	共著	平成20年3月	平成20年度住居医学共同研究成果報告集 奈良県立医科大学　住居医学大和ハウス寄付講座 P.1-P.9	本研究は実際に住まいする住環境の住み心地と部屋の物理的データーとの因果関係の調査をおこなった。具体的には自宅で睡眠時を除き最も長時間過ごしている部屋の住み心地として30項目の部屋の物理的因子や感覚的因子をVsual Analog Scale法によってアンケート調査しニューラルネットワークの一手法であるファジーニューラルネットワークで解析した。 本人担当部分：統計解析及び研究の総括をおこなった。 共著者：守本とも子，吉村雅世，上平悦子，三毛恵美子，吉野公三，本多裕之
2.　チエンマイ大学看護学部海外研修報告書	共著	平成20年3月	奈良県立大学医学部 看護学科紀要　Vol.2 P.63-P.70	看護系大学に於ける海外研修の概観を述べた。また，本学での国際看護論の位置づけと変遷について述べ，実際の海外研修の体験をもとに，今後の国際看護論の展望について議論した。 本人担当部分:統計解析及び研究の総括をおこなった。 共著者:勝井伸子，守本とも子，Phanida Juntasopeepun

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
3.　「健常高齢男性の住居内QOLと自立神経活動との関連性」	共著	平成21年3月	平成21年度住居医学共同研究成果報告集 奈良県立医科大学　住居医学大和ハウス寄付講座 P.115-P.116	本研究の目的は，健常高齢男性の暮らし・部屋全般や各住居内環境因子に対する主観的評価度と生活の自立神経活動との間の関連性を明らかにすることである。研究結果より，「くらし・部屋」全般に関する項目の中では生活に満足している被験者ほど，HFnuの値が低い傾向が確認された。「住居内環境因子」に関する項目と心拍変動指数との間には統計的有意な相関を示す組み合わせはなかった。これらの結果から，生活に満足している健常高齢男性ほど，夜間20:00時から20:50までの在宅・覚醒・低運動時に交感神経系有意（精神的にアクティブな状態）にある傾向が示唆された。 本人担当部分：統計解析および研究の総括をおこなった。 共著者：守本とも子，吉村雅世，吉野公三，上平悦子，三毛美恵子，板垣孝寛， 池谷茂隆，永田昌美，辻下守弘
4.「乳がん患者のワーク・トリートメントバランスを支える患者支援プログラムの開発」	共著	平成26年3月	文部科学省学術振興会 文部科学省科学研究費助成金（基盤研究C）研究成果報告書 （平成23年～平成25年） A4判，全27頁	本研究では，乳がんを患い外来で化学療法を受けているものの就労を継続している者を対象として，対象者の抱えている苦悩や課題をインタビューにより明らかにした。またその結果をもとに，患者支援の関係機関が集まり，援助のあり方についての検討を行った。 本人担当部分：統計解析および研究の総括をおこなった。 共著者：新谷奈苗，守本とも子，立川茂樹，岩永誠，堀口和子，中村百合子，小池恵理子，永岡裕康，新谷昌也
―総説―				
1.　アルツハイマー病患者家族介護者へのサポートグループを用いた対処技術指導について	共著	平成20年9月	看護実践の科学 看護の科学社 VOL.33 NO.10 P.72-P.80	対処技術を指導する上でのサポートグループ利用法に注目し，支援グループを指導する看護師のグループセラピーの方法について述べる。特に支援グループを始める前のグループセラピー理論とその技術の必要性を述べる。 本人担当部分:統計解析及び研究の総括をおこなった。 共著者:アンドレア・S・シュナイザー，佐伯あゆみ，守本とも子
2.　地域で生きるデンマークの高齢者住居	単著	平成22年5月	大阪保険医雑誌 大阪府保険医協会 第38巻522号 P.30-P.35	北欧諸国のなかでも「高齢者住居」について独自な発展を遂げ，1987年に施設建設を凍結するという政策転換に踏み切ったデンマークの高齢者住居と日本の画期的な高齢者共生住宅の事例を取り上げ，新しいステージに突入した日本の今後の高齢者住居の在り方を検討した。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
3.終末期透析についての意識と実態調査報告書	共著	平成28年3月	ばんび NPO法人奈良県腎友会 2016年　春号　No.87 P.3-P.12	終末期医療についての関心の高まりとともに終末期腎不全医療のありかたについての議論も高まりをみせている。透析患者の終末期の意思決定を支える医療・ケアは転換期を迎え，今まさにその実現に向けて大きく動きはじめている。しかし，透析患者は生きるため，命を繋ぐために透析を選択しているのであって，終末期のことを主体的に考えることは，健康な人がそれについて考えるほど容易なものではない。 そこで，平成27年8月下旬～9月下旬にかけて奈良県腎友会事務所の協力を得て，会員の皆様を対象に「終末期透析についての意識と実態調査」を実施し，その結果をまとめた。 本人担当部分:統計解析及び研究の総括をおこなった。 共著者:守本とも子，田場真理
4.地域で生活する高齢者の災害時非難状況に関する文献検討	共著	平成29年2月	医療福祉情報行動科学研究 vol.4 P.19-P.25	世界各地で自然災害が増加している。高齢者人口の割合が世界で比較的高い国々での自然災害が増加しているという現状がある。このような状況にありながら近年,わが国の高齢化は加速しており,高齢者人口の割合は世界で最も高い。東日本大震災では死者うち60歳以上の比率はおよそ6割であった。そこで,2006年から2016年までの文献を検討することで,高齢者の防災の実態を分析し,今後の課題を明らかにすることを目的とした。その結果,現在,国などの関係機関が防災対策に多く取り組んでおり,高齢者の防災意識も高い一方で,実際の防災行動が十分に取れていないといった結果が得られた。災害が続発する中,早急に防災行動が迅速かつ適切に行えるための対策を検討する必要があることが示唆された。 共著：丸上 輝剛，新谷 奈苗，守本 とも子. 本人担当部分：研究の総括をおこなった。
―国際会議発表―				
1.　Effects of a Stuffed Animal Designed for Nursing Care （介護用ぬいぐるみの効果）	－	平成22年9月	6th International Conference of Health Befavioral Science Sustainable Health Promotion:Dialogue on Well-being & Human Security in Environmental Health (Kuala Lumpur, Malaysia)	本研究の目的は，施設入居高齢者の癒しとQOLの向上を考慮した「温かい介護用縫いぐるみ」の効用を検討することである。コーエンマンスフィールド（CMAI）調査票をもとに縫いぐるみ使用前・後の高齢者の行動の変化を比較した。結果として「同じことを繰り返し言う（質問する）」に有意な差がみられた。 担当部分：研究の総括を行った。(P.86) 共同発表者:守本とも子，新谷奈苗
2.　Study about quality of life(QOL) of home oxygen therapy patient and related facters of actual life situation （在宅酸素療法患者のＱＯＬと生活実態との関連について）	－	平成23年10月	Proceeding of the 2nd East Asian Ergonomics Federration Symposium (EAEFS 2011)National Tsing Hua University, Hslnchu Taiwan, 4-8 October 2001　P.48	在宅酸素療法患者の生活実態とQOLの関連を明らかにするために，患者のQOLに関連する生活実態の要因を検討した。その結果，患者の活力や心の健康に肺理学療法の理解度が高いことが明らかになった。肺理学療法の理解度が高い患者は認知能力も高く，自己管理ができており，疾患があっても前向きな生活を送っていることが明らかになった。自己管理能力を身につけるためにも理学療法などを積極的に行う患者教育の重要性が示唆された。 本人担当部分：研究データーの解析，総括を行った。 共著者：Nanae　Shintani，Tomoko Morimoto

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
3.　Difficulty in continuing job for breast cancer patients getting chemotherapy （化学療法後の乳がん患者が仕事を続ける上での困難）	－	平成24年3月	30th Congress of the International Commission on Occupational Health (ICOH　2012),Cancun center (Mexico)	乳がんの治療は化学療法を含むことから，副作用による身体的苦痛を伴う。しかし外来通院で治療を受けながら仕事をこなしている患者が多いことから，通院により化学療法を受けている乳がん患者の仕事と治療を継続していく上での困難を明らかにすることを研究の目的とする。 A県内のがん拠点病院で乳がんと診断され，化学療法を受けている患者で仕事を継続している患者6名を対象とし，「仕事を継続していく上での困難」について半構造的インタビューを行った。結果から７つのカテゴリが抽出された。カテゴリは【治療の副作用からくる身体的苦痛】【仕事に穴をあけることに対する申し訳なさ】【再発への不安から仕事をセーブする】【職場の配慮不足】【病院のシステム上の不便】【治療の副作用から仕事の能力が落ちているのではないかという不安】【病名告知により同僚に気を遣われる辛さ】で構成されていた。 本人担当部分：研究の総括を行った。 共同発表者：Nanae Shintani，Tomoko Morimoto
―国内学会発表―				
1.　高齢者むけの快適住居環境作りとその臨床的評価	－	平成20年3月	「住居医学」共同研究成果報告会抄録集 （奈良県　奈良医科大学）	高齢者向けの快適な環境作りのための快適性を評価する指標を作成する。快適性を表現すると思われる項目についてアンケート調査（220名）を行い，因子分析をおこなった。結果として三つの因子が抽出された。 本人担当部分:統計解析及び研究の総括をおこなった。 共同発表者:守本とも子，吉野公三，本多裕之，吉村雅世，三毛恵美子
2.　住居における快適性評価スケールの開発	－	平成20年11月	日本福祉工学会第12回学術講演会講演論文集 山梨大学（甲府市）	本研究では，住居環境要因と心理的・身体的QOLの関係性を分析するための基礎資料として住居の快適性評価スケールを作成した。その結果，3因子が抽出され，第1因子は“空間”，第2因子は“光”，第3因子は“情緒”と解釈された。また信頼性の検討のため，クローンバックのα係数を算出したところ，各下位尺度とともに0.78以上の内部一貫性がみられた。(P.89-P.90) 本人担当部分:統計解析及び研究の総括をおこなった。 共同発表者：守本とも子，青山美智代，浅見恵梨子，上平悦子，岡本啓子，勝井伸子，三毛美恵子，吉村雅世，星野政明
3.　看護・保育学生の福祉用具に対する認識の検討	－	平成20年11月	日本福祉工学会第12回学術講演会講演論文集 山梨大学（甲府市）	福祉用具に対する認識状況を知るため，保育学生（専門課程110名，短大生110名），看護学生（大学3年次80名）に対し，質問紙調査により福祉用具，離乳食，調理された食品及び遊び道具について高齢者，小児どちらに使用する認識が高いかについて検討した。看護と保育専門課程の学生は類似の傾向を示し，ほとんどの項目において高齢者が使用するという認識が高かった。保育短大生においては遊びに関して子どものものと認識していた。 本人担当部分:統計解析及び研究の総括をおこなった。 共同発表者：上本野昌子，守本とも子

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
4.　在宅酸素療法患者と介護者のQOL ～ 国民標準値との比較～	－	平成21年3月	日本医療福祉情報行動科学会 第４回大会抄録集 （兵庫県　甲南女子大学）	患者と介護者の在宅生活をよりよい健康生活へ導く方策を検討するために，SF-36v2 質問紙をもちいて，患者と介護者のQOL を把握し，性，年代それぞれの国民標準値と比較した。 本人担当部分:統計解析及び研究の総括をおこなった。(P.15) 共同発表者:新谷奈苗，守本とも子
5.　脳血管障害患者の心理適応面の数量化について ～障害受容スケールの作成と臨床的応用～	－	平成21年3月	日本医療福祉情報行動科学会 第４回大会抄録集 （神戸市）	医療者の経験などによらない客観性の高い，簡便な評価法の検討が必要と考え，脳血管障害患者について障害受容スケールによる数量化の可能性と臨床的応用について述べた。 本人担当部分:統計解析及び研究の総括をおこなった。(P.16) 共同発表者:山形力生，　櫻井秀雄，守本とも子
6.　QOL of home oxygen therapy patients and caregivers comparison with standard value （標準値を用いた在宅酸素療法患者と介護者のQOLの比較）	－	平成21年8月	第13回日韓健康教育シンポジウム 兼　第57回日本教育医学会大会抄録集 （ソウル市）	本研究では，患者と介護者の在宅生活をよりよい健康生活へ導く方策を検討するために，SF-36V2質問紙をもちいて，患者と介護者のOQLを把握し，性別，各年代それぞれの0-100得点標準値と比較し検討した。 対象者は40歳以上で広島県T市の訪問看護ステーションとH市の総合病院に通院している在宅酸素療法患者とその介護者30組であり，訪問による面接調査を実施した。 本人担当部分:統計解析及び研究の総括をおこなった。(P.77) 共同発表者:新谷奈苗，守本とも子
7.　あらかじめの温熱刺激によるストレス防御効果について	－	平成23年3月	日本医療福祉情報行動科学会第6回大会抄録集 （岐阜市）	精神的ストレスの一種として，マウス個体に対する水浸拘束ストレスによる胃潰瘍発生モデルを用い，あらかじめの温熱刺激がその後のストレス暴露への防御効果を示すことを検討した。免疫染色法の解析結果で，あらかじめの温熱処理群では8.2%のアポトーシスの減少がみられた。(P.11) 本人担当部分：結果の分析をおこなった。 共同発表者:山形力生，高橋昭久，守本とも子，大西武雄
8.　地域における福祉講演「QOLを高める高齢者の生き方」（１）―「ストレスに関する学びの検討を中心に―」	－	平成23年6月	日本保険医療行動科学会第26回学術大会抄録集 （大阪府高槻市）	本研究の目的はQOLを高める高齢者の生き方をテーマとした地域住民のために企画した福祉講演への参加による地域住民の学びの成果を検討した。福祉講演での学びを今後の生活の中で具体的に活用していこうと考えているとともに，福祉講演会に参加したことが今後の生きる糧になっていたことが推測された。 本人担当部分：福祉講演会の講師であり，講演後のアンケートの分析を行った。 共同発表者：新川泰弘，守本とも子

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
9.　在宅酸素療法患者のQOLに影響を与える介護者の支援方策の検討	－	平成24年3月	日本医療福祉情報行動科学会第7回大会抄録集 （大阪市　メルパルク大阪）	不可逆的に進行する肺病変がある慢性呼吸不全患者の在宅療養生活を維持するためには，気道感染の予防や日常生活活動の適切な制限といった患者自身の自己管理に加え，それを支える介護者の役割が重要である。本研究では，患者のQOLに影響を及ぼす介護者への支援方策を検討することを目的とした。(P.12) 本人担当部分：統計解析及び研究の総括をおこなった。 共同発表者：新谷奈苗，守本とも子
10.　看護師国家試験の出題基準に沿った講義内容の検討	－	平成24年6月	日本保健医療行動科学会第27回　抄録集 （岐阜市）	本研究では，看護師国家試験出題基準に沿った小項目に対する講義の有無を明らかにし，教授内容の過不足や効果的な教授について検討することを目的とした。(P.78) 本人担当部分：研究の総括を行った。 共同発表者：渡邊美幸，奥百合子，小平由美子，箕浦文枝，守本とも子
―シンポジウム―				
1.　第23回日本保健医療行動科学会学術大会	－	平成20年6月	主催：日本保健医療行動科学会事務局 山梨県甲府市 山梨学院大学	一般演題発表　座長
2.　第56回教育医学会学術大会	－	平成20年8月	主催：教育医学会 大阪府柏原市 大阪教育大学	一般演題発表　座長
3.　第25回　日本保健医療行動科学会学術大会	－	平成22年6月	主催：日本保健医療行動科学会 群馬県前橋市　前橋プラザ元気21	一般演題発表　座長
4.　第41回日本看護学会老年看護　学術集会	－	平成22年9月	主催：日本看護学会 奈良県奈良市 なら100年会館　大ホール	演題：「高齢者のQOLを追及する―今果たすべき看護の役割」 コーディネーター
5.　6th International Conference of Health Befavioral Science （第6回国際保健医療行動科学会議）	－	平成22年9月	主催：International Conference of Health Befavioral Science マレーシア クアラルンプール	演題:"Religious Hypnosis" ファシリテーター
6.　第26回　日本保健医療行動科学会　学術大会	－	平成23年6月	主催：日本保健医療行動科学会 大阪府高槻市 大阪医科大学看護学部	基調講演：「災害とリスクコミュニケーション」座長 ポスター発表　座長
7.　第27回　日本保健医療行動科学会　学術大会	－	平成24年6月	主催：日本保健医療行動科学会 岐阜県岐阜市 じゅうろくプラザ	基調講演：「医療系大学におけるチーム医療教育の実際―医療のパラダイムシフトに向けて―」 講師
8.　第9回　日本フットケア学会　岐阜セミナー	－	平成24年9月	主催：日本フットケア学会 岐阜県岐阜市 じゅうろくプラザ	一般講演：「フットケアのための足の解剖とケアそして歩行」 座長

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
9.　日本サーモロジー学会第33回大会	－	平成28年5月	主催：日本サーモロジー学会 奈良県奈良市 奈良学園大学登美ヶ丘キャンパス	招待講演：「がん看護と体温」 講師
―マスコミ―				
1.　新聞	－	平成20年8月	奈良新聞社 ならリビング	高齢者の住まいに関する記事。これから必要なのは，生きる主体として高齢者を考えることであり，自分の人生は自分でデザインすることが大切である。
2.　新聞	－	平成20年9月	毎日新聞	介護用縫いぐるみの効用についての研究結果に関する記事。認知症高齢者に遊び療法の必要性を述べた。
文部省科学研究費およびその他の研究助成金				
1.　大和ハウス「住居医学」研究奨励金	－	平成19年	大和ハウス	研究題名：高齢者向けの快適住居環境作りとその臨床的評価 研究助成金：1,500千円 研究代表者：守本とも子
2.　大和ハウス「住居医学」研究奨励金	－	平成20年	大和ハウス	研究題名：高齢者向けの快適住居環境作りとその臨床的評価 研究助成金：1,300千円 研究代表者：守本とも子
3.　大和ハウス「住居医学」研究奨励金	－	平成21年	大和ハウス	研究題名：高齢者向けの快適住居環境作りとその臨床的評価 研究助成金：1,500千円 研究代表者：守本とも子
4.　文部科学省科学研究費補助金　基盤研究C	－	平成23年～平成25年	文部科学省	研究題名：乳がん患者のワーク・トリートメントバランスを支える患者支援プログラムの開発 研究助成金：4,200千円 研究代表者：新谷奈苗 分担者：守本とも子
5.文部科学省科学研究費補助金　基盤研究C	－	平成26年～平成28年	文部科学省	研究題名：乳がん患者の就労を支える Job recovery path の開発 研究助成金：4,550千円 研究代表者：新谷奈苗 分担者：守本とも子
6.　奈良学園大学保健医療学部共同研究費	－	平成28年	奈良学園大学	研究題名：看護学生と進める健康づくり支援キャラバン隊―奈良県内過疎地域を対象に―【2015年度継続課題】 研究助成金：500千円 研究代表者：東中須惠子 分担者：守本とも子
7.　奈良学園大学保健医療学部共同研究費	－	平成28年	奈良学園大学	研究題名：照度アップ窓のブライトケアの可能性の研究―認知症高齢者の睡眠支援― 研究助成金：400千円 研究代表者：□村雅代 分担者：守本とも子

教　育　研　究　業　績　書

平成 29年 3月 31日

氏名　吉村　雅世

研究分野	研究内容のキーワード
看護学	高齢者、老年看護学、QOL、物語、人間行動科学

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例 ―講義― 1）奈良県立医科大学看護短期大学部看護学科「老年看護学Ⅱ」（援助論）		奈良県立医科大学看護短期大学部看護学科「老年看護学Ⅱ」（援助論）　（2年次生80名、通年2単位60時間）で講義内容と進行計画及び評価方法等を示すことで、学生に授業の概要を周知すると共に、予習・復習できる内容を示すことで学習効果を高めることを目的とした。
①シラバスの活用	平成16年4月 ～平成17年3月	①授業概要、評価方法、教科書・参考図書を示した。学生の授業評価は、「シラバスに沿った授業である」、「資料の量は適当であった」という評価が高かった。
②プロジェクターを用いたスライドの活用	平成16年4月 ～平成17年3月	②教科書の中で重要事項はパワーポイントを用いてスライドにして示した。スライドは資料として印刷し配付した。学生の授業評価は、「シラバスに沿った授業である」、「資料の量は適当であった」という評価が高かった。
③教科書以外に講義用資料を作成し活用	平成16年4月 ～平成17年3月	③最新の統計や教科書にない情報、最新の情報などはその都度、別資料を作成し配布して活用した。　学生の授業評価は、「シラバスに沿った授業である」、「資料の量は適当であった」という評価が高かった。
④「出席表」によるミニレポートの活用	平成16年4月 ～平成17年3月	④学生の理解した内容・程度、授業の感想を知るために活用した。同時に、学生自身が記述することで自己の学びを確認・強化することを支援する方法として活用した。 毎回、出席表として、学び・感想、時にはテーマを示し、学生のコメントを書かせた。学生は熱心に記入していた。学生の記述から学習の程度や状況を確認できた。また、次の時間に一部を紹介したり、補足したり、質問に答えたりすることでフィードバックを行うことができた。その1つに、初講の時に高齢者のイメージを色にたとえて記述してもらい、次の講義で学生が何色を示しているか傾向を統計でフィードバックする方法を活用している。学生は次の出席表の感想で、自分たちが高齢者をどの色でイメージしているか、他の学生はどのようにイメージしているかを知ることができたと感想をのべている。この方法は、後述の「老年看護概論」「介護概論」と、援助の対象が高齢者となる科目を学ぶ学生達に活用している。学生の色イメージの傾向は、灰色、茶　深緑、オレンジをイメージする傾向にあった。この結果を学生に示すことで、自分たちが高齢者をどのように色イメージしているかに気づき、今後の授業を通して、これからの高齢者を心身社会的に理解することに役立つと考える。出席票のコメントから高齢者を肯定的に見ようとする姿勢が感じられた。

事項	年月日	概　　要
⑤事例による看護過程のペーパーシュミレーションの活用	平成16年4月 ～平成17年3月	⑤疾患を抱える高齢者理解を深める、また、看護過程をリアリティに考える能力を高める学習方法として活用した。 高齢者に特徴的な疾患の事例を多用し、看護過程の展開を、1人で、又はグループでペーパーシュミレーションする演習に活用した。演習では、グループで立案した看護計画を実演・発表し、クラスでの共通理解を図った。事例は、脳梗塞、大腿骨頸部骨折、肺炎、パーキンソン病、認知症、COPDといった高齢者に特徴的な疾患を持つ事例とした。
⑥講義用教科書の作成と授業への活用 一部執筆（再掲）	平成16年4月 ～平成17年3月	⑥授業する内容を１冊のまとめた教科書を作成し活用した。 「老年看護学」の一部を執筆し講義用の教科書を作成した。著書の項目を参照。B5版で、国家試験の老年の領域に関する問題に対応している。疾患を抱える高齢患者看護の知識・事前学習として活用できるものである。特に、事例の演習や実習で活用できる図書であると確信している。
⑦グループワークと発表を活用	平成16年4月 ～平成17年3月	⑦自己の学びを表出する場、他者の意見を聞く場として活用した。 他者の考えや力を借りて自己の考えを発展させることを目的とした。毎回10分程度3～4人の学生同士で話し合い、発表する時間を作った。特に、学生が対話し意見を交換することで、人の話が聞ける、自己の思考を外在化する、他者の意見を取り入れる、自己の学びを発展させる、学びを共有する、といった学習効果をねらった。実施後のレポート・感想より学生は他の学生の意見が聞けた、自分と同じ意見の人がいることで自己を肯定できた、自分とは違う意見が参考になった、看護について考えを発展できたといった感想があり、短時間のグループワークは効果があると評価できた。
⑧課題レポートの活用	平成16年4月 ～平成17年3月	⑧学生が、自ら課題を持って高齢者理解に取り組むことの支援として活用した。また、45時間の学習時間を効果的に使う方法として活用した。 約3000字程度で、老年看護で特に学びを期待したい点をテーマにした。（例：貴方の高齢者イメージ、老年看護の特徴等）レポートから学生は個々に高齢者の特徴を掴んでいると判断でき、高齢者について記述する機会を作ることは教育的効果があると評価できた。
⑨高齢者体験の活用 市販の高齢者・障害者体験装具の活用 学生と共にOHPシートを用いて高齢者眼鏡を作成し、体験学習で活用する。	平成16年4月 ～平成17年3月	⑨学生が経験したことのない運動機能・視聴覚機能の低下した高齢者を理解することの支援として活用した。 高齢者体験装具、白内障眼鏡を活用し、学生にとって、加齢による視聴覚機能と運動機能の障害という未知の世界を体験することで、高齢者に対する看護の必要性を理解し、看護の方法を検討し実施する創意工夫と行動力が養われることをねらいとしている。 体験内容は視力、聴力、皮膚の触覚、四肢の関節拘縮等である。生活体験を取り入れることで、生活機能のアセスメントにも役立っている。体験レポートには看護学生として体験した加齢に対する驚きや看護の必要性が記述されていた。学生は体験を高齢者理解に役立て、老年看護の目的を理解することで実践に向けて創意工夫がなされると評価している。

事項	年月日	概　　要
⑩視聴覚教材の活用	平成16年4月 ～平成17年3月	⑩高齢者をイメージしにくい環境に暮らす学生に、よりアクチュアリティな高齢者理解を支援するため活用した。高齢者の実際や加齢による身体機能の低下を動画（ビデオ・DVD）で見せることで、より現実的な高齢者理解を図ろうとした。
⑪ビデオ・DVD映像の活字化 資料作成、活用	平成16年4月 ～平成17年3月	⑪DVD・ビデオの内容を活字にして印刷資料とて作成し、高齢者理解の学習支援として活用した。視聴中は映像に集中し、後で資料を確認することで学びを深めることを期待した。 授業評価で映像は効果的に使われていたと言う評価であった。また、出席表の感想でも映像の資料がよかったという記述があった。
⑫アクティビティケアの企画・実践を演習として実施する。	平成16年4月 ～平成17年3月	⑫レクリエーション実践方法・技術を獲得することで、アクティビティケアの能力を高めることを目的とした。グループでレクリエーションを企画し学生同士で実践・演習を行う。 演習では、企画書を作成し、目的・目標、方法、注意事項を明らかにしておく。実施後は目標の達成状況をまとめ次回の課題まで検討する。アクティビティケアは介護老人保健施設での実習で活用できる援助技術の能力を高める。また、企画書を用いた実践は、問題解決思考の訓練であり、看護過程の実践練習も意図している。学生には企画・アイデア・発想の力があり、アクティビティケアを企画し実践することを通して、看護の企画力・行動力の向上を図れると考えた。学生は自分たち学生が相手であるが、できるだけ高齢者をイメージしようと高齢者体験装具を活用するなど積極性と行動力が見られた。次年度の老年看護実習（特別養護老人ホーム、介護老人保健施設）で実際の入所者に対して実践するときその成果が発揮できていると自己評価している。 また、看護過程の展開を指導する歳、学生が教室で経験した出来事も実在性を持つ経験として学びを助けていると考え、学生の体験・経験の機会を作る工夫をしている。
⑬ナラティブアプローチの視点を取り入れたグループワーク	平成16年4月 ～平成17年3月	⑬前述の「⑦グループワーク」をより効果的に実施できる方法として、学生の姿勢を明確にするために「ナラティヴ」論を活用した。 テーマについて語り合い、語られたものを発表する機会を「ナラティヴ」の考え方で指導した。全体で10～15分のナラティヴ・アプローチといえるもので、「学生は発表しなければ」という気持ちから「自分の意見を語る」という気分の転換があると考えている。感想では、「グループ内での語り合いは、他の学生の意見や思いを知ることができ、考えを広げることができた」「全体での発表も様々な考えがあることがわかった」と好評であった。
⑭福祉パーク　体験見学の活用	平成16年4月 ～平成17年3月	⑭奈良県立福祉パークが保持する、介護具、自助具、住宅設備を活用し、学校で保持するものよりさらに多くの用具を用いて高齢者体験や生活体験を行い、高齢者理解を深めることを目的とした。奈良福祉パークは学校から車で15分の場所にある介護実習室を持つ施設である。 ここでは、高齢者体験装具を装着して、介護住宅体験、各種車椅子・トイレ・浴室・自助具の体験をおこなう。また、車椅子の自走・他走や視覚障害者として運動公園、模擬交差点などを散策・歩行体験をおこなう。実施後のレポートから、学内ではできない、より生活に近づいた体験ができたという感想があった。

事項	年月日	概　　要
⑮アセスメントツーツの冊子の作成・活用	平成16年4月 ～平成17年3月	⑮看護過程を展開する際、多様で個別的なの高齢者の情報収集とアセスメントを助けるツールとなることを目的に作成した冊子である。　領域責任者と共同で作成し活用した。（片面印刷32頁） 高齢者の「日常生活行動」、「感覚器」、「栄養」、「認知機能」をアセスメントすることを助けるもので、観察とアセスメントの視点を示し、実際に記述できるシートを綴った。改良長谷川式認知症簡易スケールや褥瘡のスケール、転倒スケール等も使用した。その後の、「老年看護学実習」で実際に活用し、高齢者理解を深め高齢者の多様性と個別性の理解に役立てることができていたと評価している。
⑯看護の実際をリアリティにシュミレーションするための事例の工夫・活用	平成16年4月 ～平成17年3月	⑯高齢者の健康レベルに応じた看護過程の展開を学習できる事を目的に事例を作成した。 事例は転倒・骨折の発症から、搬送、入院、治療、リハビリ、施設入所、在宅へと一連の経過を持つ事例を作成した。学生は各健康レベルに取り組み、看護過程の展開をペーパーシュミレーションしていった。⑦⑬のグループワーク・発表を併用した。
⑰「昭和を生きた高齢者」をテーマにグループワーク、スライドで成果発表の活用。	平成16年4月 ～平成17年3月	⑰自分たちとは違う世代の高齢者の理解を深めること、また、積極的な高齢者理解を行うことを目的に「昭和を生きた高齢者」というテーマで6～7名のグループワーク・発表を課題として計画した。 各グループで食事、生活、道具、音楽、娯楽、ファッション、流行、医療、戦争といったテーマを決め、グループワークをおこなった。グループワークの概要は初講時に示し、発表は終講時に行った。成果はパワーポイントでスライドを作成し発表した。発表内容は学生達が体験したことのない、今まで直接関わったことのない、高齢者（後期）の生きてきた社会についてであった。スライドは発表資料として冊子にした。学生に配布するとともに、実習施設へも学生のレディネスとして配布した。レポートでは高齢者の活きた時代に近づけたという感想があった。これらの活動・学びは、次の年の各論実習に生かされ、高齢者の視点で生活を考えることができていると自己評価している。学生の発表内容は一部学生達の同意を得て、オープンキャンパスで掲示している。参加している学生より付き添いの父母から「懐かしい」と好評である。
	平成17年4月 ～平成22年3月	奈良県立医科大学医学部看護学科「老年看護学概論」（2年次生80名、前期30時間中、4～6時間）において左記①～④、⑥～⑪、⑬を工夫･活用した。
	平成22年4月 ～平成23年3月	奈良県立医科大学医学部看護学科「老年看護学概論」（2年次生80名、前期30時間）において左記①～④、⑥～⑪、⑬を工夫･活用した。
	平成23年4月 ～平成23年3月	岐阜医療科学大学保健科学部看護学科「看護学概論」（2年次生100名、後期30単位）で左記①～④、⑥～⑪、⑬を工夫･活用している。
	平成23年4月 ～平成23年3月	岐阜医療科学大学保健科学部看護学科「老年臨床看護」（3年次生100名、前期60単位）で左記①～⑰を工夫･活用している。

事項	年月日	概　　要
	平成23年4月 ～平成23年3月	岐阜医療科学大学保健科学部放射線学科、臨床検査学科選択科目「看護概論」（3年次生100名、後期15単位）で左記①～④、⑥～⑪、⑬を工夫･活用している。
⑱デジタル教科書の活用	平成24年12月 ～平成23年3月	ナーシンググラフィカ全34冊の電子教科書を活用している。特に「高齢者の健康と障害」「高齢者看護の実践」を講義中では、図表や映像をスライドとして活用している。岐阜医療科学大学保健科学部看護学科「老年臨床看護」「老年臨床看護実習」で活用している。
２）奈良学園大学保健医療学部看護学科 「老年看護学概論」(2年次　後期　80名) 「老年看護学援助論」(3年次　前期　80名)	平成27年10月 ～現在に至る 平成28年4月 ～現在に至る	奈良学園大学保健医療学部看護学科「老年看護学概論」(2年次　後期　80名)「老年看護学援助論」(3年次　前期　80名)では授業計画を作成し、授業計画に沿って15回の講義を行っている。 前述の①～⑤、⑦～⑫、⑯～⑱は一部変更し継続した。②での　毎回スライドは16枚とし、ファイルしやすいように工夫した。④の毎回の小レポートでは、必要時フィードバックし共有している。学生が誤った理解している場合の対応、学生の質問に答える機会にもなっている。授業初日の小レポートには「高齢者のイメージを色で示すことを促す」。毎年ではあるが灰色、茶色、オレンジが多い。これは介護学生も、放射線科の学生も同じ傾向にある。 ⑥作成に関わった教科書は使用せず、ナーシンググラフィカシリーズ(メディカ出版）と看護学講座(医学書院）をデジタル版と伴に活用した。⑨高齢者体験装具は部分的装着型の「老いたろう」からスーツタイプに変更した。高齢者体験めがねの材料を透明クリアホルダと黄色セロファンに変更した。⑭福祉パーク見学は地域的に活用困難となり、その代わり学内演習に組み込み継続している。⑮アセスメントツールは規模を縮小して活用している。⑱では⑥と重複するが医学書院のデジタル版を併用し活用している。
⑲　動画の作成　ipadで活用 ・高齢者体験の方法 ・呼吸器検査の看護	平成27年10月 ～現在に至る	⑲動画　ipadで学生が視聴できる動画を作成した。訳10分　高齢者体験用装具の装着、歩行や階段昇降、見え方、巧緻作業の困難等を順を追って経験できるように工夫した。学生は個々にipadから実際の映像で予習をして、演習に望むことを期待している。
⑳認知症サポーター養成講座　1コマを使い認知症とケアの理解を深める。認知症サポーターとして認知症患者と関わる動機付けも期待している。	平成28年4月 ～現在に至る	⑳授業の中で大学の所在地の地域包括支援センターに依頼し、学生を対象に認知症サポーター口座を開催した。既習の認知症ケアの認知症サポーターではあるが認知症患者と関わる動機付けが期待した。学生はサポーターという役割に興味を持っていた。
―実習― ３）奈良県医科大学看護短期大学部「成人看護学実習」（3年生次、4単位　180時間、1グループ8名5グループ計40名を担当し、以下の取組を行った。	平成9年4月 ～平成13年3月	実習調整、学生への実習指導を実施した。指導の内容は、実践の見守り、実習環境の整備・調整、相談、学習支援、看護モデル、安全確保、カンファレンス等である。臨地実習において学生が自己の実習目標を達成できる環境を作る為に、教材や方法に工夫した。実習は、血液・呼吸器内科病棟において、１人の成人期の患者を学生に受け持ち看護過程の展開を実施するもので、成人慢性期の実習であった。
①毎日、実習開始～終了時間を実習指導の時間とした。学生が必要とするときに必要な指導を行う。	平成9年4月 ～平成13年3月	①学生の実習中は共に病棟で過ごし、常時指導できる体制をとることを目的に行った。
②看護過程の展開を中心に看護を実践する	平成9年4月 ～平成13年3月	②看護過程を展開ができることを目的に、実習方法は１人の患者を受持つ方法を用いた。

事項	年月日	概　　要
③実習マニュアル（要項）の作成、活用	平成9年4月 ～平成13年3月	③学生が実習に望む際に可能な限り不安や心配を取り除き、実習目標を理解し、実習行動が取れることを意図して作成した。実習要項は、実習の目的、到達すべき目標、具体的な実習方法、注意事項を内容とし「要項を読めば口頭説明は~~は~~不要」というスタンスで作成した。
④実習記録用紙の作成、活用	平成9年4月 ～平成13年3月	④学生が実習目標を達成できる方法と手順として、項目を吟味して実習記録用紙を作成した。データーベースは単位認定者の助言を下に「科学的看護論」をベースして作成した。記録用紙の項目に沿って記述すれば実習目標が達成できることをねらい作成した。
⑤実習計画ワークシートの作成、活用	平成9年4月 ～平成13年3月	⑤学生の実習目標を達成できる環境を作ることを目的に実習計画ワークシートは作成した。指導教員、臨地指導者用の記録である。ワークシートにより担当する8名の学生の行動をは把握すると共に、実習指導者との連携や、他のスタッフとの調整に役立てた。
⑥実習において毎日カンファレンスをおこなう	平成9年4月 ～平成13年3月	⑥1日をまとめ、明日の計画を立案する機会を設ける環境として、毎日、カンファレンスを実施した。
⑦実習前にバイタルサインの測定についての技術チェックを行う	平成9年4月 ～平成13年3月	⑦実習に際しての技術確認、基本的看護技術の確認のためバイタルサイン測定の技術チェック、必要な観察事項の事前学習を行った。実習が始まるまでにチェックをして実習に望んだ。 受持患者はほとんどが肺がん、血液のがん患者であった。学生はがん患者との対話に悩みながら徐々に良い関係性を築き、ほとんどの学生が実習最終日までには受け入れられる存在となり、必要な情報が得られ、慢性期看護、がん看護の特徴を学んでいた。
4）奈良県医科大学看護短期大学部看護学科「老年看護学実習」		奈良県医科大学看護短期大学部看護学科「老年看護学実習」3年次生通年4単位180時間1グループ8名4週間の実習期間は「介護老人福祉施設実習1週間、介護老人保健施設実習1週間」、「病院実習2週間」で構成されていた。そのうち、「病院実習」、10グループ計80名を担当した。今までの成人慢性期の実習から、学生にとって患者、家族、実習指導者、病棟看護師との人間関係が学生の学びに少なからず障害になっていると感じた。そこで、指導では以下の2つ⑧⑨を追加し工夫活用した。前述の①～⑦に以下を加えた。
⑧実習施設における学生の出迎え	平成13月4月 ～平成17年3月	⑧実習初日は、学生が病棟で受け入れられる存在であることを感じることを期待して、病棟で学生を出迎えるようにした。 学生にとって、その実習場所で自分たちが尊重して受け入れられているか否かで実習成果に影響を及ぼすと考える。実習指導者と協力しながら、共に学生を待ち受ける姿勢を示す工夫をした。学生は病院実習、スタッフへの緊張感を和らげ、持てる力を発揮できたと評価している。

事項	年月日	概　　要
⑨実習指導に際し、ナラティヴ・アプローチを活用。	平成13月4月 ～平成17年3月	⑨実習指導の個別面接の方法としてナラティヴ・アプローチを活用した。 整形外科病棟での実習で、加齢による関節の変形により運動障害から生活障害を抱え手術治療を受ける高齢者が主な対象であった。寝たきりになる不安を抱える高齢者であるが、若い学生には実感が薄いと考えられた。特に工夫したのは、学生の語りをカンファレンスや面接から意図的に「聴く」機会を設け、語られた「実習の物語」から、学生が自己を振り返り看護の学びを深めていくことをねらい、実習記録を見ながらナラティヴアプローチによる指導（聴き取り）を実践した。学生の物語では、自分の看護の力たらず、知識の未熟さ、看護への思い、コミュニケーションの困難さ、自分の対応に対する患者の反応でうれしかったこと等が語られていた。また、自分の学習不足やどのように学んでいこうかという気持ちの表出もあり、学生のさまざまな思いを看護の指導に活かしていった。同時に、学生には受け持ち患者の「病の物語」を聞くことの効果や活用することの有効性を指導している。実際に体験することで「語ること」「聞くこと」の効果を実感する学生もいた。
５）公立学校法人奈良県立医科大学医学部看護学科「老年看護学実習」	平成17年4月 ～平成23年3月	公立学校法人奈良県立医科大学医学部看護学科「老年看護学実習」（3年生次後期、2単位90時間必修）１グループ8名　5グループ計80名担当1週間の介護老人福祉施設、1週間の介護老人保健施設の計2週間の実習を計画した。前述の①～⑨に以下の2つ⑩⑪を加えた。
⑩介護老人保健施設でアクティビティケアを実習項目とした。	平成17年4月 ～平成23年3月	⑩アクティビティケアは、高齢者の健康を守る、QOLを高める、認知症高齢者へのアプローチ、といった高齢者支援の方法を学習することを目的に実習方法に加えた。 方法は、学生は実習グループで受け持ち高齢者を含む入所者の集団にレクリエーションを実施することを企画し実践することとした。目的、目標、方法、注意点をまとめた企画書を作成する事から始め、準備し、施設のスタッフの協力を仰ぎながら実施した。看護過程の展開でも、アクティビティケアを積極的に取り入れ、高齢者とのコミュニケーションや人間関係の醸成につなげ、施設における高齢者看護の能力を修得していると評価できた。実施後の反省会で、目標とした利用者の活発な参加や、自発的行動、積極性や笑顔が見られた、できないと思っていた人があんなに体を動かせることがわかった、といった意見が上がり、実施したケアの効果を実感することで、学びにつながったと評価できる。
⑪高齢者のアセスメントツールの冊子制作と活用。	平成17年4月 ～平成23年3月	⑪アセスメントツールは、「―講義―」の項で述べたとおり領域責任者と共同開発した。学内の演習で使用し、実習では生活機能のアセスメントのための道具として用いた。 学生の実習に対する授業評価は全体で平均3.5（5点満点）であった。教員の自己評価としては、疾患と加齢による身体機能の低下の両方から生活機能をアセスメントすることに活用できていると評価している。

事項	年月日	概　　要
６）岐阜医療科学大学保健科学部看護学科「老年看護学実習」3年生次後期4単位180時間1グループ5名　10グループ計50名担当、4週間の実習期間を「介護老人保健施設2週間」「病院2週間」と計4週間の実習を行っている。 前述の①～⑪に以下を加えた。 ⑫看護過程の展開で、データベースを身体の系統的分類（循環器、呼吸器等）から、ゴードンの11項目の分類を活用した。	平成23年4月 ～平成26年3月	⑫老年看護の学習の視点として生活機能のアセスメントに注目することがもとめられている。従来の系統的アセスメントでは学生に生活や心理面のアセスメントにとまどいが見られていた。そこで、ゴードンの11項目を用いて、身体・心理・社会の3側面から高齢者を捉える方法に変更した。学内演習で事例を用いて十分ペーパーシュミレーションを行い、実習で活用している。「病院実習」「施設施設」とも同じ方法で看護過程の展開を実践できるように工夫した。
７）奈良学園大学保健医療学部看護学科 「基礎看護学技実習Ⅱ」 2年次前期　80名	平成27年4月 ～現在に至る	担当者の一人として実習計画を把握し、オリエンテーションに参加している。実習進行上の教員の相談にのる、あるいは、教員を支援して臨地で実習指導を行った。　平成28年度は学生4名を担当し、実習指導、実習環境調整、評価等を行った
８）奈良学園大学保健医療学部看護学科 「基礎看護学技実習Ⅰ」 1年次後期　80名	平成27年4月 ～現在に至る	担当者の一人として実習計画を把握し、オリエンテーションに参加している。実習進行上の教員の相談にのる、あるいは、教員を支援して臨地で実習指導を行った。
９）奈良学園大学保健医療学部看護学科 「老年看護学概論」 2年次　前期　80名	平成27年4月 ～現在に至る	基礎看護学技術演習の内、食事の援助、通常の食事の援助、経管栄養を受ける患者の援助、輸液を受ける患者の援助の講義を実施し演習を計画した。実際の演習を統括し、教員指導と学生の学習支援を行った。
１０）奈良学園大学保健医療学部看護学科 「基礎看護学技術演習」 2年次　後期　80名	平成27年4月 ～現在に至る	基礎看護学技術演習の内、排泄の援助を担当し、排泄の援助　導尿　浣腸　摘便の講義を実施し、演習を計画した。実際の演習を統括し、教員指導と学生の学習支援を行った。
１１）奈良学園大学保健医療学部看護学科 「老年看護学実習Ⅱ」病院実習 3年次　後期　80名	平成28年9月 ～現在に至る	医療機関における臨地実習を計画した。 全５施設で１クール４グループが実習を行う。 全体の統括　各教員の指導　実習調整、全学生の単位認定に関わる。前述の①～⑨⑫を実施、活用した。⑪⑫は規模を縮小し必要時活用した。
１２）奈良学園大学保健医療学部看護学科 「老年看護学実習Ⅰ」 介護老人保健視閲　デイケア等 3年次　後期　80名	平成28年9月 ～現在に至る	介護老人保健施設における臨地実習を計画した。 ６施設で１クール６～２グループが実習を行う。 全体の統括　各教員の指導　実習調整を主なぎゅむとするが、学生を担当し実習指導も行う。　28年度は2施設で計25名の学生を担当し実際に指導し評価単位認定に関わった。残りの学生も含む全体の単位認定に関わった。前述の①～⑨⑫を実施、活用した。⑪⑫は規模を縮小し必要時活用した。
―その他―		
２　作成した教科書・教材 １）岐阜医療科学大学保健科学部看護学科実習要項（実習の手引き）編集総括	平成23年4月 ～平成26年3月	4年間のすべての実習における、実習マニュアルとして作成した。岐阜医療科学大学保健科学部看護学科実習委員会委員長として編集を行った。

事項	年月日	概　　要
2）事例教材	平成17年4月 ～平成23年3月	加齢に起因する疾患と看護、成人期から抱える慢性病と加齢が及ぼす生活機能の障害と看護等が学習できる事例を考案した。 ① 脳梗塞に罹患し介護老人保健施設に入所する高齢者 ② パーキンソン病を抱える高齢者の看護 ③ 慢性閉塞性呼吸器疾患を抱える高齢者の看護 ④ 生活者としての高齢女性の転倒・骨折救急搬送、周手術期、回復期、慢性期、在宅復帰までの健康障害のレベルを追った看護 奈良県立医科大学医学部看護学科「老年看護学援助論」で作成し、現在に至る。毎年見直しながら、学生の特性に応じて修正して使用している。
3）老年看護学アセスメント・ツールとしてのマニュアル教材（冊子）	平成17年4月 ～平成23年3月	高齢者の身体・精神機能を評価するツールとしてアセスメントマニュアルを共同で作成した。高齢者の感覚機能、栄養状態、認知状態、日常生活機能を評価する方法として、既存の尺度を用いた冊子である。奈良県立医科医学部看護学科「老年看護学援助論」で作成した。
	平成23年4月 ～平成26年3月	岐阜医療科学大学保健科学部看護学科「老年臨床看護」において、高齢者を総合的に評価する視点から改正した。
4）授業毎に授業内容のポイントをまとめたスライドの教材を作成し授業に活用した。（パワーポイントを用いる）	平成16年4月 ～平成26年3月	担当する講義の要点をスライドにまとめ講義の教材とした。制度の変更や新しい視点、知見等、変更しながら作成し、活用している。 奈良県立医科大学医学部看護学科「老年看護概論」「老年看護学援助論」で作成し、活用した。 岐阜医療科学大学保健科学部看護学科「老年看護概論」「老年臨床看護」において、作成し活用した。 岐阜医療科学大学保健科学部放射線学科・臨床検査学科「看護概論」において、作成し活用した。 関西学院大学社会学部社会福祉学科「介護概論」において活用した。 関西学院大学人間福祉学部「介護概論」「介護技術」において作成し活用した。
5）「生活支援技術・介護過程」教科書、一部執筆（再掲）	平成24年4月 ～平成24年9月	介護福祉士養成を目的にした教科書であるが、老年看護では介護施設も看護の場である。老年看護として看護学生が学ぶ内容になるように工夫した。 「介護者の倫理」の執筆を担当した。高齢者ケアに携わる職種の倫理としてまとめたもので、看護職にもあてはまるものである。特に、個人情報、電子情報、実習学生の守秘義務など、近年の社会情勢を考慮した内容を工夫した。 関西学院大学人間福祉学部「介護概論」「介護技術」で使用した。
6）「介護の基本　コミュニケーション技術」教科書　一部執筆（再掲）	平成24年4月 ～平成24年9月	「睡眠と援助」の執筆を担当した。看護学生も学ぶ内容になるように工夫した。 関西学院大学人間福祉学部「介護概論」で使用した。

事項	年月日	概　　要
・奈良学園大学　保健医療学部看護学科 実習要綱の作成	平成26年5月 ～現在に至る	開学申請時に作成した実習要綱を再確認した。新たに追加が必要な内容を挿入した。 （例）気象警報発令時の対応区域、個人情報保護について
・奈良学園大学保健医療学部看護学科 「基礎看護学技術演習Ⅱ」2年次　前期　80名 排泄の援助　演習計画書の作成 演習評価表の作成　模擬便の作成	平成27年4月 ～現在に至る	演習計画書は　便器・尿器の取り扱い方　寝たままでの便・尿器の介助、寝たままでのオムツ交換モデルを用いた導尿（男女）、モデル人形による浣腸・摘便、からなる。 よりリアリティな演習になるよう、模擬便を作成しオムツ交換の演習を計画した。絵具、洗濯用化学のり、ケイ砂によるスライムを模擬便として作成した。
・奈良学園大学保健医療学部看護学科 「基礎看護学技術演習Ⅱ」 2年次　前期　80名 食事の援助　演習計画書の作成　演習評価表の作成	平成27年4月 ～現在に至る	演習計画は　形態の違う食物の摂取と介助、食事摂取を支援する自助具・介助具の実際、モデル人形を用いた経管栄養法からなる。
・奈良学園大学　保健医療学部看護学科 老年看護学概論 講義教材：高齢者の身体的加齢変化 ＤＶＤ学習資料の作成	平成27年9月 ～現在に至る	身体の加齢変化を説明するＤＶＤのナレーションを筆記し活字としてＡ４用紙にＤＶＤ資料を作成した。全６ページ。文章中、特に学んでほしい単語には白地で隠し、学生が映像を見ながら記入できるように工夫した。学生は全部埋めることが出いていないことがわかり、次回の授業初めに正解を口頭で説明した。
・奈良学園大学　保健医療学部看護学科 老年看護学概論 講義教材：高齢者の身体的加齢変化 呼吸機能の変化　体験	平成27年9月 ～現在に至る	スパイロメーターを用い、肺活量、１秒量から肺年齢を測定した。全員は体験できなかったが、一部の学生が実施できた。時間的制約で全員が体験できない現状から、後にＤＶＤ作成に至った。
・奈良学園大学　保健医療学部看護学科 老年看護学概論 講義教材：高齢者の身体的加齢変化 見え方の変化体験グッズ作成	平成27年9月 ～現在に至る	透明でない曇りのあるクリアフォルダーを高齢者の眼球の水晶体に見立て、白内障の体験とした。クリアフォルダーに、黄色セロハンをはさみ、水晶体が変性した高齢者の見え方を体験できるようにした。クリアフォルダーは学生各１枚を配布した。黄色のセロファンは、10×3センチほどにカットしたものを学生に配布した。
・奈良学園大学　保健医療学部看護学科 老年看護学概論 講義資料作成 １講義スライド16枚　A3用紙	平成27年9月 ～現在に至る	講義資料は1コマスライド16枚とし、Ａ３用紙に裏表で印刷するようにし、半分に折るとA4冊子としてファイルできるよう工夫した。高齢者の加齢変化では、スライド中の重要語句を白字で書くし、学生と一緒に回答しながら、進めた。国家試験の老年看護領域で問われやすい問題であることを印象付けたかった。　中間期授業評価で、スライド、資料で見にくいという意見はなかった。「スライドに対応する教科書のページを入れてほしい」といった希望など、学習上必要と思われる希望には掻痒に努めた。
・奈良学園大学　保健医療学部看護学科 老年看護学概論 演習用動画制作　高齢者体験	平成28年3月 ～現在に至る	学内演習用に、高齢者体験についての動画を制作し、授業に活用している。動画は奈良学園大学のipadを使った学習支援の一環のなかで、専用のアプリを用いて閲覧できる。シナリオ作成、撮影監督　編集に関わった。□村雅世、田中和奈

事項	年月日	概　　要
・奈良学園大学　保健医療学部看護学科 老年看護学概論 演習用動画制作 呼吸器検査の看護	平成28年3月 ～現在に至る	高齢者の呼吸器系のアセスメントとして、呼吸器検査を受ける高齢者の看護の動画を作成した。シナリオ作成、撮影監督　編集に関わった。□村雅世、田中和奈
・奈良学園大学　保健医療学部看護学科 老年看護学実習Ⅰ 実習要項、記録用紙の作成	平成28年5月 ～現在に至る	老年看護学領域の他2名の教員と共に作成した。実習の目的、方法、注意事項等、「本冊子を読むことで、学生は実習の行動目標が立てられる」という目的を持って作成した。実習記録は、学生が容易にコピーできないようにあらかじめ必要な枚数を綴じた冊子を作成した
・奈良学園大学　保健医療学部看護学科 老年看護学実習Ⅱ 実習要項、記録用紙の作成	平成28年5月 ～現在に至る	老年看護学領域の他2名の教員と共に作成した。実習の目的、方法、注意事項等、「本冊子を読むことで、学生は実習の行動目標が立てられる」という目的を持って作成した。実習記録は、学生が容易にコピーできないようにあらかじめ必要な枚数を綴じた冊子を作成した
・奈良学園大学　保健医療学部看護学科 老年看護学概論　　授業教材 ①授業スライド ②ＤＶＤ資料 ③高齢者の視覚体験用具	平成28年10月 ～現在に至る	①授業資料のスライド資料　平成28年度版で、今年度発表の人口動態の統計をもとに作成した。②27年度のものに今年度の統計を補足した。③クリヤホルダーと黄色のセロファンを用い、授業の中で学生各自が水晶体の混濁と色覚の異常が体験できることを狙った。クリヤホルダーは3種類の透明度になるようにした。
・奈良学園大学　保健医療学部看護学科 老年看護学概論 授業教材　グループワーク資料	平成29年1月 ～現在に至る	グループワークの成果として学生が作成したスライドを発表用資料として冊子を作製した。
３　教育上の能力に関する大学等の評価 １）学生の授業評価アンケート結果	平成20年3月 ～平成23年3月	奈良県立医科大学医学部看護学科　「老年看護学援助論」「老年看護学実習」　で授業評価を行った。 平成20年の「結果は、援助論平均４．０(5段階評価）、実習は３．９であった。評価の高かった項目は「シラバスに沿った内容」「授業への取り組み」であり、低かった項目は「レポート課題が多い」という結果であった。
	平成24年3月	岐阜医療科学大学保健科学部看護学科　「老年看護学概論」「老年臨床看護」「老年看護学実習」学生評価を行った。 「老年看護学概論」の評価は平均４．０であった。良かった点では教材がわかりやすかったといったコメントがあった。改善点ではマイクを使っているが聞き取りにくかったと言ったコメントがあった。 「老年臨床看護」の評価は平均４０．１５であった。良かった点と改善点では資料が見やすかった。もっとパワーポインタを使ってほしいと言ったコメントがあった。 老年看護学実習では平均４．２５であった。丁寧に教えてもらった、もう少し関わってほしかったといったコメントがあった。 岐阜医療科学大学保健科学部放射線学科、臨床検査学科　「看護学概論」の学生評価を行った。平均４．７７であった。

事項	年月日	概　　要
大学業務評価	平成24年度	岐阜医療科学大学保健医療学科期末評価　前年度と比べ評価に変化はなかった。
大学業務評価	平成25年度	岐阜医療科学大学保健医療学科期末評価　前年度と比べ評価に変化はなかった。
・学生の授業評価アンケート結果	平成27年10月	奈良学園大学保健医療学部 「老年看護学概論」 授業4回目で中間評価を行った。大きな改善の必要な項目はなく平均と考えられた。学生には結果と改善するところを伝えた。改善の必要なところ　スライドに対応する教科書のページを追加する
・学生の授業評価アンケート結果	平成28年2月	奈良学園大学保健医療学部 「老年看護学概論」 学生評価　授業終了時 資料、内容　シラバスとの整合性など　特に意見はなかった。
・学生の授業評価アンケート結果	平成28年10月	奈良学園大学保健医療学部 「老年看護学概論」 授業4回目で中間評価を行った。大きな改善の必要な項目はなく平均と考えられた。学生には次の授業で、評価の結果と改善するところを伝えた。改善の必要な項目では、資料についてで、資料の内容に教科書の該当ページを追加した。
４．実務の経験を有する者についての特記事項 １）高校生に対する講義 「看護学」		
	平成26年10月	奈良文化女子高等学校学校見学におけるミニ講義　高齢者の身体的加齢について
	平成28年8月	オープンキャンパスミニ講義　2回　　高齢者の身体的加齢について
２）研修会講師	平成19年	第67回日本保健医療行動科学会　近畿支部研究会講師　「老年看護と物語」
	平成19年 ～平成22年	奈良県看護協会臨地実習指導者講習会講師 「老年看護学実習」
	平成22年5月	平成22年度高取町地域法活支援センター研修会講師　「高齢者ケアとナラティヴアプローチ」
	平成24年3月	平成24年「養成期間と医療機関の連携」事業研修会　講師　「実習指導に望むこと」
	平成24年9月	平成24年中濃地区特別養護老人ホーム看護職能研修会　講師　「高齢者体験から理解する高齢者」
	平成25年9月	奈良県看護協会臨地実習指導者会講師 老年看護学実習　4時間 以下の目的目標で内容を計画し講義を行った。 ・老年看護学実習の展開について理解を深め、演習等を通してその実際を学ぶ。実習の目標、指導展開・計画方法を知る。実習の組み立てを知る。指導者の役割を知る。
	平成26年9月	奈良県看護協会臨地実習指導者会講師 老年看護学実習　4時間 以下の目的目標で内容を計画し講義を行った。 ・老年看護学実習の展開について理解を深め、演習等を通してその実際を学ぶ。実習の目標、指導展開・計画方法を知る。実習の組み立てを知る。指導者の役割を知る。

事項	年月日	概　　要
	平成27年9月	奈良県看護協会臨地実習指導者会講師 老年看護学実習　4時間 以下の目的目標で内容を計画し講義を行った。 ・老年看護学実習の展開について理解を深め、演習等を通してその実際を学ぶ。実習の目標、指導展開・計画方法を知る。実習の組み立てを知る。指導者の役割を知る。
	平成28年9月	奈良県看護協会臨地実習指導者会講師 老年看護学実習　4時間 以下の目的目標で内容を計画し講義を行った。 ・老年看護学実習の展開について理解を深め、演習等を通してその実際を学ぶ。実習の目標、指導展開・計画方法を知る。実習の組み立てを知る。指導者の役割を知る。
３）シンポジウム　講師	平成19年9月	第３回日本質的心理学会自主シンポジウム「臨床看護におけるナラティヴ：現場における時間性と生の現実」において、高齢看護の立場から「高齢者患者におけるナラティヴ（老い・病いの現実）と時間性」というテーマで話題を提供した。 コーディネータ：紙野雪香 高齢者が語る言葉の中に老いの現実が現れてくる過程を聞き手の視点から描き出した事例を発表した。 　臨床看護の場でナラティヴの考え方やナラティヴ・アプローチをどのように使うかという視点から、高齢看護の場では「高齢者は語ること」で老いの現実を表出している。そして、「看護者が聴くこと」が臨床での看護の実践であることを伝えることを意図した。
４）会員企画シンポジウム　講師	平成25年8月	第10回日本質的心理学会　一般企画シンポジウム「今あらためて質を問う」にて、話題を提供した。テーマは「高齢者の語り場面の「質感」の記述　―看護場面の会話から到達する看護師の「聴く」こと－である。 コーディネーター：森岡正芳　質的データを量的データに変換し分析する傾向にある質的研究をについて、現場の質をもう一度考え直そうとするを趣旨で企画された。心理学、社会福祉学、教育学の立場から話題提供される中で、看護学の立場から現場を質感豊かに描き出すかていを紹介した。平成24年3月の博士論文（奈良女子大学）の一部を加筆修正した。
５）フェスタ出典 　けいはんな体感フェア2016 　「来て・見て・感じて学研都市のテクノロジー」　-光の不思議や生命の神秘・・・等最先端の研究内容を体験してみよう！-	平成28年11月20日	フェスタに出展者として参加した。 　テーマ：「年を取ると見え方聞こえ方動きはどうなるの」　高齢者体験をメインに体感イベントとした。約300名の一般の参加者（子供から成人まで）の入場があり、約50名ほどが高齢者体験に参加した。　場所　グランフロント大阪北館ナレッジキャピタル
６）研究会　講師　　シーズ紹介講演 　超高齢社会における生活支援にむけら地域産業創出を考える研究会	平成28年12月1日	超高齢社会における生活支援にむけら地域産業創出を考える研究会 　テーマ：高齢者看護・介護とアクティビティケア　-- 高齢者の気分転換活動の不足に対するケアや付き合い方-　高齢者ケアの現状と活性化の支援の必要性を老年看護学教育の中から経験したことを踏まえ講演とした。

事項	年月日	概　　要
5　その他		
1）公立学校法人奈良県立医科大学医学部後看護学科における教育実践	平成17年4月 ～平成23年3月	奈良県立医科大学医学部看護学科講師として「老年看護学援助論」（専門科目、2年次配当通年、必修2単位）において、老年看護の実践論について授業を行った。これにより、学生は老年看護の方法について理解を深め、臨地実習に大いに活用して、老年看護の学びを得ていた。「老年看護学実習」（3年次配当通年　必修2単位）において実習指導を行った。「卒業研究」（4年通年配当）において研究計画書作成、論文作成の指導をおこなった、これにより、学生は実習で経験したを出来事を理論的に説明し、今後の可能性・課題を見出していた。「看護研究特論」（3年次前期）において、研究計画書作成につて指導した。
2）関西学院大学社会学部社会福祉学科における教育実績	平成18年4月 ～平成20年3月	関西学院大学社会学部社会福祉学科非常勤講師として「介護概論」（2・3年次春期　選択2単位）において、社会福祉士受験資格としての介護概論の授業を行った。介護の目的論、対象論、実践論について理解を深めた。
3）岐阜医療科学大学　保健科学部看護学科における教育実績	平成23年4月 ～平成26年3月	岐阜医療科学大学保健科学部看護学科教授として「老年看護学概論」（2年次後期、2単位　専門必修）、「老年臨床看護（演習）」（3年次前期、2単位　専門必修）、「老年看護学実習」（3年次後期、4単位専門必修）、「卒業研究」（4年次通年、2単位専門必修）、「アカデミック技法」（1年次前期2単位一般必修）において授業、演習、実習をおこなった。保健科学部放射線学科、臨床検査学科の「看護概論」（3年次後期、2単位　専門選択）において授業を行った。
4）岐阜医療科学大学　保健科学部看護学科実習調整の実績	平成23年4月 ～平成26年3月	実習部会長として、実習全体の統括を行った。医療機関との連携や実習調整を行っている。
5）関西学院大学人間福祉学部おける教育実績	平成24年4月 ～平成24年9月	関西学院大学人間福祉学部社会福祉学科非常勤講師として「介護概論」（1～4年次春期　選択2単位）、「介護技術」（1～4年次春期　選択2単位）において社会福祉士国家試験内容に基づき介護の目的論、対象論、実践論について授業を行った。文学部、法学部の学生も若干選択していた。学生それぞれが学ぶ目的を持ち、様々な感想を持って学習を深めていた。
6）奈良学園大学保健医療学部看護学科における実習調整の実績	平成26年4月 ～現在に至る	実習部会長として、実習全体の統括を行った。医療機関との連携や実習調整を行っている。
7）奈良学園大学保健医療学部看護学科における教育実績	平成26年７月 ～現在に至る	奈良学園大学保健医療学部教授として以下の科目の実習を担当した。「早期体験演習」（1年次、1単位　専門必修）複数の実習場所をラウンドし、実習の進行を支援した。時に指導の必要な学生の実習指導を行った。
8）奈良学園大学保健医療学部看護学科における教育実績	平成27年2月 ～現在に至る	奈良学園大学保健医療学部教授として以下の科目の実習を担当した。「基礎看護学実習Ⅰ（1年次、後期　　2単位　専門必修）複数の実習場所をラウンドし、学生や教員を支援した。時に指導の必要な学生の実習指導を担当した。

事項	年月日	概　　要
９）奈良学園大学保健医療学部看護学科における教育実績	平成27年4月 ～平成27年7月（前期）	奈良学園大学保健医療学部教授として以下の科目の授業を行った。「基礎看護技術演習Ⅱ」（2年次、2単位専門必修）
１０）奈良学園大学保健医療学部看護学科における教育実績	平成27年4月 ～現在に至る	奈良学園大学保健医療学部看護学科教授として以下の科目の企画・実施に関わった。「基礎看護技術演習Ⅱ」「基礎看護技術演習Ⅲ」「基礎看護実習Ⅰ」「早期体験演習」
１１）奈良学園大学保健医療学部看護学科における教育実績	平成27年9月 ～現在に至る	奈良学園大学保健医療学部教授として以下の科目の授業を行った。「老年看護学概論」（2年次　後期　2単位　専門必修）「老年看護学援助論」年次、2単位専門必修）
１２）奈良学園大学保健医療学部看護学科における教育実績	平成28年4月 ～現在に至る	奈良学園大学保健医療学部教授として以下の科目の演習を行った。「老年看護学援助論」3年次、2単位　専門必修）3名の教員と共同した。
１３）奈良学園大学保健医療学部看護学科における教育実績	平成28年9月 ～現在に至る	奈良学園大学保健医療学部教授として以下の科目の実習を担当した。「基礎看護学実習Ⅱ（2年次、前期　　2単位　専門必修）　学生1グループを担当し、実習指導を行った。
１４）奈良学園大学保健医療学部看護学科における教育実績	平成28年9月 ～現在に至る	奈良学園大学保健医療学部教授として以下の科目の実習を担当した。「老年看護学実習Ⅰ（施設）」（3年生　後期　2単位）　「老年看護学実習Ⅱ（病院）」3年生後期　2単位　専門必修） 実習の企画、臨地調整、学生オリエンテーション、実習指導を行った。領域教員の実習指導能力の向上に関わった

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　　要
１　資格、免許		
1）看護師免許	昭和55年4月	第389473号
2）修士（看護学）	平成15年3月	国立学校法人香川医科大学大学院医学系研究科看護学専攻了 修士（看護学）（香修第十九号） 修士論文題目：ナラティブを看護ケアに導入した老年患者の語りの構造と変化の研究
3）博士（学術）	平成24年3月	国立学校法人奈良女子大学大学院人間文化研究科博士課程 社会生活環境学専攻　人間行動科学講座 博士（学術）（博課第501号） 博士論文題目：看護における「聴き取り」の生態ーナラティヴ・アプローチの可能性と限界
２　特許等 なし		

事項	年月日	概　　要
３　実務の経験を有する者についての特記事項		
学会誌の編集 日本保健医療行動科学会　学会誌 拡大編集委員	平成24年6月 ～平成25年12月	日本保健医療行動科学会雑誌の拡大編集委員として、依頼論文の原稿の編集を行った。2013Vo128 №1～№2　　執筆者の意向を確認しながら、原稿に図表を配置し、雑誌用の原稿を作り上げた。
学会誌の査読 日本保健医療行動科学会　学会誌 拡大編集委員	平成25年11月 ～平成28年6月	日本保健医療行動科学会雑誌の拡大編集委員として、論文査読を行った。雑誌は年2回発行され1刊に2編ほど査読を行った。投稿論文を担当し、学会誌の質を保証できる研究論文になるように査読を行った。研究方法の整合性や論文としての論旨に疑問がある場合には掲載不可の判定もやむなしの場合もあった。通常の査読者は２名であり他の査読者と査読の判定が大きく異なることはなかった。2014～2017年前期まで年2冊　計7冊にの雑誌の査読を行った。
研究会への参加・運営 臨床看護実践ナラティヴ研究会	平成26年10月 ～現在に至る	臨床看護実践ナラティヴ研究会メンバーとして、臨床看護の場において、ナラティヴ・アプローチを実践することの意味、実際の実践について、研究・勉強会を行っている。自己の研究の報告、メンバーの研究についての意見交換、海外の研究者の論文についての意見交換を行っている。月1回の定期的な研究会である。輪番で話題を提供し討議する。ブルーナの意味論、ベイトソンの学習理論、リクールの物語と時間などを担当した。　成果の一部は　商業雑誌の特集に組み込まれた。 「『病の語り』　会話の産物と現実　看護実践と社会構成主義」：Ｎ：ナラティヴとケア. 第7号. 看護実践におけるナラティヴ. 紙野雪香　野村直樹編. 参照
研究助成金の獲得	平成28年4月	平成28年度　奈良学園大学保健医療学部看護学科研究助成制度において以下のタイトルで助成金を獲得した「照度アップ窓のブライトケアの可能性の研究―認知症高齢者の睡眠支援―」
学会誌の査読編集 日本保健医療行動科学会　　理事 学会誌　編集委員　　査読と編集	平成28年７月 ～現在に至る	日本保健医療行動科学会　理事、編集委員に就任し、学会雑誌の編集を行っている。
４　その他		
―学内委員会活動―		
１）奈良県立医科大学医学部看護学科 学生生活部会員	平成16年4月 ～平成20年3月	学生生活について関わった。健康診断、保健室管理、1年生研修旅行等を担当した。
２）奈良県立医科大学医学部看護学科 実習部会委員	平成20年4月 ～平成23年3月	実習に関して関わった。各論実習の実習配置表の作成、学生のグループ分け、統合実習の計画、その他、メンバーで実習に関する問題対応の情報交換、協議していった。
３）岐阜医療科学大学保健科学部看護学科 実習部会長	平成23年4月 ～平成27年3月	1年生から4年生までの実習を統括する。 実習施設からの相談の窓口となり対応する。
４）岐阜医療科学大学保健科学部看護学科 領域実習ワーキング長	平成23年4月 ～平成27年3月	各論実習の統括を行う。特に、実習病院・施設への実習依頼や計画配置の相談等、領域をとりまとめて実習施設との窓口となる。

事項	年月日	概　　要
５）岐阜医療科学大学保健科学部	平成23年4月 ～平成27年3月	学内教員の研究の倫理審査にあたる。
６）岐阜医療科学大学保健科学部	平成23年4月 ～平成27年3月	学内教員の研究活動を支援する。学内で定める研究推進費について審査を行う。教員の学内研究発表や講演等を企画・運営する。
７）岐阜医療科学大学保健科学部 生涯教育委員会副委員長	平成23年4月 ～平成27年3月	委員会活動として、年6回ほど地域のイベントで地域住民に健康教育を実施している。 シンポジウムやセミナー等を同窓会と協力して企画・運営し卒業生を対象に研究発表の場を設ける活動をしている(25年度から)
８）奈良学園大学保健医療学部における教員組織活動 実習部会長	平成26年4月 ～現在に至る	実習全体の統括 年間の実習計画の枠組み　企画　各実習施設への依頼　実習協議会の企画・開催　など　月１回定例会議を主催し、実習に関する協議を行う。基礎実習　領域実習　統合実習　課程選択実習に関する報告をまとめ調整する。実習場での感染症対策や事故などの危機管理等も行う。
９）奈良学園大学保健医療学部における教員組織活動 領域実習ワーキング長	平成26年4月 ～現在に至る	3年生領域実習に関する、企画調整　　月１回定例会議を企画し討議を行う。成人　老年など各領域実習からの報告をまとめ、協議し実習部会に上申する。
10）奈良学園大学における教員組織活動 学生生活委員会メンバー	平成26年4月 ～現在に至る	奈良学園全体の、学生生活に関する協議を行っている。主に学生の奨学金　表彰等について協議した。
11）奈良学園大学における教員組織活動 学生支援センター委員会メンバー	平成26年4月 ～現在に至る	学生の健康診断、学校祭について協議した。
12）奈良学園大学保健医療学部における教員組織活動 学生生活ワーキングメンバー	平成26年4月 ～平成27年3月	学生生活について協議した。学生の健康管理を担当した。
13）奈良学園大学保健医療学部新入生宿泊研修の企画担当	平静26年9月 ～平成27年3月	４月に行われる１年生宿泊研修を企画し実施した。
14）奈良学園大学保健医療学部新入生宿泊研修の企画責任者	平成27年4月 ～現在に至る	４月に行われる１年生宿泊研修を企画し実施した。企画実行の責任者として運営していった。
15）奈良学園大学保健医療学部における教員組織活動 教務ワーキングメンバー	平成27年4月 ～現在に至る	主に実習での単位修得や実習履修の要件について担当している。

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
（著書） 1.　基礎看護技術Ⅱ基礎看護学〔3〕 系統看護学講座専門分野Ⅰ	共著	平成18年6年 第14版 平成21年2月 第15版 平成24年6月 第16版	医学書院	基礎看護技術の教科書。 A4版　全490頁 編集：藤崎郁、任和子 執筆者：岡本啓子、守本とも子、□村雅世（執筆者全21名） 本人担当部分：以下の章を共同で執筆した。 第2部16領域の看護技術　第1章「環境調整技術B：病床環境の調節」P.22-P.32　第5章「清潔・衣生活援助技術C：病床での衣生活の援助P.185-P.192 看護の基礎教育を受ける学生が臨床で応用できる看護技術の教科書となるように工夫した。（共同執筆の為分担の境界不明。共同で構想し、資料、写真、イラスト、文章を作成した。） 病床環境の調整では現在臨床で実際に行われている内容を伝えようとした。ベッド・床頭台といった病室環境の備品、ICUベッドや高齢者ベッド等、健康障害のレベルに応じたベッドや、その選び方等、資料収集・イラストの作成をおこなった。病床での衣生活援助では点滴を行っている人の寝衣交換を、モデル人形を用いて写真撮影し文章を作成した。基本を前提にしながらも臨床での安全で安楽な寝衣交換の工夫を盛り込んだ。
2.　看護学実践science of nursing「老年看護学」	共著	平成19年4月 平成22年12月改訂	黎明書房	奈良県立医科大学医学部看護学科授業科目「老年看護学概論」、同「援助論」、岐阜医療科学大学「老年臨床看護」で教授する内容を、資料を含め1冊にまとめたものである。内容は看護師国家試験出題基準に対応させた。 A5版　全285頁 監修:川野雅資 編集:守本とも子 執筆者：新谷奈苗　田中麻里、谷村友子、中丸弘子　新川泰弘、□村雅世　他10名 本人担当部分：以下の章の執筆を担当した。 Chapter3：高齢者の健康生活への看護援助　ⅰ．高齢者の健康　P.60-P.65 Chapter4：主な疾患と看護　ⅴ．内分泌系の疾患　P.144-P.153　ⅶ．泌尿器系の疾患　P.168-P.175 ⅷ．感覚器系の疾患　P.177-P.193 各系統において高齢者に多い疾患を取り上げ、病態、検査、治療、看護を示した。改訂版ではChapter４を担当した。
3.　介護福祉士養成シリーズ2「生活支援技術・介護過程」	共著	平成22年6月	黎明書房	介護福祉士を目指す学生用教科書。 A5版　全219頁 編著:守本とも子、星野政明 執筆者：川口ちづる、山形力生、今村美幸、大崎大資、横井加津志、高畑進一、新谷奈苗、三毛美恵子、石崎利恵、山田多賀子、□村雅世、木村洋子、その他5名 本人担当部分：以下を担当した。 第9章　「高齢者の睡眠の援助」P.151-P.157 自立を促す睡眠の必要性、爽快な目覚めの援助、自立を促す睡眠の介助の実際、について執筆した。日常生活のリズムを整える基本的方法や不眠の際の援助の方法が理解できることを意図して具体的な方法を示した。看護の基礎技術「睡眠の援助」を基本にしている。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
5.　介護福祉士養成シリーズ1「介護の基本　コミュニケーション技術」	共著	平成22年9月	黎明書房	介護福祉士を目指す学生用教科書。 A5版　全202頁 編著：守本とも子、星野政明 執筆者：三浦辰哉、原田理恵、溝上五十鈴、土田耕司、羽柴香恵、河野蕎、新谷奈苗、□村雅世、その他7名 本人担当部分：以下の章を担当した。 第8章「介護従事者の倫理」P.118-P.124 国家資格を持つ者の責任と責務の視点から信用失墜行為の禁止、守秘義務、人権擁護の重要性、及び実践の内容を具体的に示していった。看護の概論となる看護師の倫理を基本としている。
4.系統看護学講座 専門分野Ⅰ 基礎看護技術Ⅱ 基礎看護学３	共著	平成24年6月 第16版	医学書院	基礎看護技術の教科書。 A4版　全490頁 編集：藤崎郁　任和子 執筆者：岡本啓子、守本とも子、□村雅世（執筆者全20名） 改定の為、内容の見直し文言の変更を行った。 本人担当部分：以下の章を共同で執筆した。 第2部16領域の看護技術 第1章「環境調整技術B：病床環境の調節」P.22-P.32 第5章「清潔・衣生活援助技術C：病床での衣生活の援助P.185-P.192 看護の基礎教育を受ける学生が臨床で応用できる看護技術の教科書となるように工夫した。（共同執筆の為分担の境界不明。共同で構想し、資料、写真、イラスト、文章を作成した。） 病床環境の調整では現在臨床で実際に行われている内容を伝えようとした。ベッド・床頭台といった病室環境の備品、ICUベッドや高齢者ベッド等、健康障害のレベルに応じたベッドや、その選び方等、資料収集・イラストの作成をおこなった。 病床での衣生活援助では点滴を行っている人の寝衣交換を、モデル人形を用いて写真撮影し文章を作成した。基本を前提にしながらも臨床での安全で安楽な寝衣交換の工夫を盛り込んだ。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
5.系統看護学講座 専門分野Ⅰ 基礎看護技術Ⅱ 　基礎看護学３	共著	平成29年2月 第17版	医学書院	基礎看護技術の教科書。 大幅な改定が行われた。写真・図票の充実と動画の追加が大きな改定内容。 A4版　全505頁 編集：任和子 執筆者：守本とも子、□村雅世（執筆者全21名） 16版を改正した。内容の洗練化、イラストを写真に変更、動画を追加等の改正を行った。ページ数も増えた。 本人担当部分：以下の章を共同で執筆した。 第2部16領域の看護技術 第1章「環境調整技術B：病床環境の調節」P.22-P.32　第5章「清潔・衣生活援助技術C：病床での衣生活の援助P.185-P.192 今回の改定では、ページ数が増えたこと、今までのイラストを写真、あるいは動画として追加した。 看護の基礎教育を受ける学生が臨床で応用できる看護技術の教科書となるように工夫した。（共同執筆の為分担の境界不明。共同で構想し、資料、写真、イラスト、文章を作成した。第17版では、新たにイラストを映像に変更、動画を制作した） 病床環境の調整では現在臨床で実際に行われている内容を伝えようとした。ベッド・床頭台といった病室環境の備品、ICUベッドや高齢者ベッド等、健康障害のレベルに応じたベッドや、その選び方等、資料収集・イラストの作成をおこなった。新たに、療養にふさわしくない病室環境の写真を追加し、療養にふさわしい環境調整の根拠を強化した。 病床での衣生活援助では点滴を行っている人の寝衣交換を、イラストから実写の写真に変更し、文章も見直した。動画も追加した。基本を前提にしながらも臨床での安全で安楽な寝衣交換の工夫を盛り込んだ。
（学術論文） 1.　住居における快適性評価スケールの開発 （査読付）	共著	平成19年6月	日本福祉工学会誌 2008.10巻2号 Journal of The Japan Society for Welfare Engineering Vol.1 No.2 P.89-P.90	性別、年齢を均等に割り振った合計500名の日本人に住居の快適性についてアンケート調査を実施した。年齢別にその人が心地よいと思う快適な住居いついてまとめると共に、アンケート内容を今後のスケールとして用いることの評価を行った。 本人担当部分：主にアンケート作成と調査を担当した。 共著者：守本とも子、青山美智代、浅見恵梨子、上平悦子、岡本啓子、勝井伸子、三毛美恵子、□村雅世、星野政明
2.　看護の場における「聴く姿勢」に関する文献研究 （査読付）	単著	平成20年1月	公立大学法人奈良県立医科大学 医学部看護学科紀要 Vol.5 P.37-44	看護者が「聴くこと」についてどのように研究・実践されてきたか動向と課題を明らかにした文献研究。ほとんどが特定の疾患を抱える患者の心理面の結果から、その支援として「聴くこと」「傾聴」が必要であると示唆するにとどまり、具体的な「聴くこと」の技術に関する研究は極めてすくないことが明らかになり、「聴くこと」の技能を研究する意義につなげることができた。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
3.　看護者のための“聴き取り”技能の開発に向けて ―対話場面の意味生成過程と看護者の自己内対話による物語化― （査読付）	単著	平成21年3月	日本保健医療行動学会年報 Vol.25 P.218-P.234	78歳女性患者へのナラティヴ・インタビューの場面を「聴き手」であるインタビューアー（筆者）の自己内対話として描き出し、聴き取りの場面を可視化した。自己内対話では、高齢者の特徴とも言える聴き取りつらさ（話し語尾が途切れる、同じ話しを繰り返す、代名詞が多い）のなかで、意味を作り出しながら聴き取っていることを明らかにした。この時の看護師の姿勢に「物語化」があると推察し、高齢者看護において日常看護の対話をナラティヴ・アプローチとして検討することの可能性を示唆した。
4.　看護場面の4つの対話における「聴き取り」の特徴―「物語化」を実践する看護師― （査読付）	共著	平成22年6月	公立学校法人 奈良県立医科大学医学部看護学科紀要 Vol.7 P32-44	高齢者の看護において看護師が「物語化」を実践していることを明らかにすることを目的に、実際の看護の場における「聴き取り」の実際を聴取し、可視化した「聴き取り」の特徴を検討した。 76歳と78歳の高齢女性に対する看護場面で、患者と看護師がどのような思いで相手の言葉を受け取り会話をしていたかを、双方へのナラティヴ・インタビューから聴収し、高齢者と対話する看護師の「聴き取り」の特徴を明らかにした。その結果、「質問の意味を持つ言葉による対応」が聞き取りの特徴にあることを示唆した。看護師は経験年齢の異なる4名の看護師とした。 本人担当部分：研究計画、データまとめ、論文作成を担当した。 共著者：□村雅世、永野由美子、寺山美由紀、豊田真千子、叶祐子、齋籐和博
5.　看護における「聴き取り」の生態 ―ナラティヴ・アプローチの可能性と限界― （博士論文）	単著	平成23年3月	国立学校法人奈良女子大学大学院人間文化研究科社会生活環境学専攻行動科学講座	高齢者看護において、発語に特徴を持つ高齢者の話を聴き取る技能として「物語化」に注目した。従来から言われる「傾聴」の技能が看護の場では「物語化」であると考え、高齢者看護における「聴き取り技能」としてナラティヴ・アプローチの可能性を論じた。 76歳女性、78歳女性、67歳男性の3名の高齢者との看護において看護者がどのように患者の言葉を受けとめ、対話を行っているか、また、患者もどのように看護師の言葉を受けとめ対話を継続しているかを双方へのナラティヴ・インタビューから可視化した。患者の気持ちが表出されている場面では、看護師は語尾が途切れる、言葉を繰り返す、代名詞で省略するといった加齢が及ぼす発語の特徴に対し、相手の視点から意味を作り出し「物語化」を実践する傾向があった。この時の看護師は「相づち」や「うなずき」といった対応をしていた。しかし、高齢患者の思いを横に置き、健康回復をめざす看護師の視点から対応することもあった。このことは、看護師は「老いの物語」や「病の物語」を聴き取り、高齢者の多様性や個別性を理解しようとするが、対応は看護師の視点からされる傾向があると考えられた。経験年数の長いベテラン看護師にその傾向があった。高齢患者と対話する看護師の「聴き取り」は1つの「ナラティヴ・アプローチ」といえるが、必ずしも「傾聴」といえないことに、高齢者看護において「ナラティヴ・アプローチ」を活用することの限界があるとした。 A4判　全131頁

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
6.高齢者の語り場面の「質感」の記述　―看護場面の会話から到達する看護師の「聴く」こと（査読付）	単著	平成25年12月	質的心理学フォーラム，2013 Vol.5 P24-31	平成25年9月に開催された、第10回質的心理学会シンポジウム「今あらためて質を問う」の内容が加筆修正され特集として編集されたもの。前23の博士論文研究を一部、加筆した論文である。ここでは、「特集　現場の質感をどう記述するか」という大きなテーマのもと、言葉と思考が相互に絡み合い新しい物語が生成される会話の場面から、看護師の「聴く」ことを分析するために、会話場面を質感豊かに描き出す過程を紹介した。看護の質的研究でも、看護場面を質感豊かに記述し可視化し分析することの必要性を述べた。
7.病院実習における高齢者に対する個別アクティビティケアの効果に関する看護学生への調査	共著	平成25年3月	岐阜医療科学大学紀要　第8号75-85	高齢者介護の場である施設で実施されることが多いアクティビティケアを、医療が行われている病院で看護師が実施することの可能性を明らかにしようとした。今回は、対象を看護学生とし、実習におけるケアをアクティビティの視点から調査研究した。講義科目講義、実習指導と実習後のデータ収集、論文作成を分担して行った。　藤吉恵美、和田裕子、□村雅世
8. 通所サービスを利用している要介護高齢者の健康づくりのための対処行動	共著	平成26年3月	岐阜医療科学大学紀要　第9号33-39	通所サービスを受ける高齢者の健康観を調査した。介護を受ける高齢者であっても骨折や転倒予防が健康に対する認識であった。研究計画書の作成、データ収集を担当した。藤吉恵美、和田裕子、田中和奈良、□村雅世
9.「病の語り」会話の産物と現実　-看護実践と社会構成主義-　（査読付）	単著	平成28年1月	N：ナラティヴとケア第7号47-53	「看護実践におけるナラティヴ」というタイトルの特集の中の「進化、これからどうしていきたいか」をテーマにした章の中で看護実践と社会構成主義について論じたものである。実際の看護場面の患者との会話を例に挙げることで看護の場は社会構成主義の実践で場であることを論じた。
10.「病の語り」会話の産物と現実　-看護実践と社会構成主義-　（査読付）	単著	平成28年1月	N：ナラティヴとケア第7号47-53	「看護実践におけるナラティヴ」というタイトルの特集の中の「進化、これからどうしていきたいか」をテーマにした章の中で看護実践と社会構成主義について論じたものである。実際の看護場面の患者との会話を例に挙げることで看護の場は社会構成主義の実践で場であることを論じた。
その他 ―国内発表― 1.　看護場面の対話における高齢患者の認知・情動の変容過程の研究―物語の時系列分析から描き出す聞き手の姿勢―	―	平成21年3月	日本看護研究学会第22回　近畿・北陸地方会学術集会	高齢患者の病の語りがネガティヴなものからポジティブなものに変わる時の聞き手の対応を自己内対話として記述し認知・情動の変容に働きかける「聞く姿勢」を検討した。 その結果、聞き手は自己の持ついくつかの立場の1つから患者の言葉に意味を作り出していた。看護者の立場より患者の生活を知らない無知の姿勢に効果があると考察した。
2.　物語生成のプロセスから検討する「視点」の聴き取り技能としての可能性―高齢患者と看護者の対話の継起的分析から―	―	平成22年4月	第5回保健医療福祉情報行動科学会大会	5名の高齢者患者に対するナラティヴ・アプローチにおいて、患者の心情が変化したと判断した場面における、聴き手の姿勢を聴き手の自己内対話から可視化し、分析した。話を発展させよう炉するリフレクシブクエスチョンの有効性を示唆した。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
3.　高齢者の話を聴き取る技能の研究―物語生成の継起的分析から検討する聴き手の視点―	―	平成23年3月	第6回保健医療福祉情報行動科学会大会	80歳の女性へのインタビューからインタビューアーの「聴き取り」について検討した。聞き手は高齢者の何度も繰り返される話の中から、「これ」「その」あの」といった代名詞をの意味を推測したり、「で・・・」といった止まった言葉の先を推測したり、聞き手の視点を移動させて聴きながら物語を共同生成している実態を明らかにした。
4.　認知症高齢者の思い出の語りを「聞くこと」の看護としての研究～事例から考える関係性を築くための質問～	―	平成23年3月	第6回保健医療福祉情報行動科学会大会	グループホームで暮らすお年寄りに対して昔の思い出をテーマに、グループフォーカスによる「聴き取り」を実施した。語られた内容から、自己の対応を分析し、関係性を築く為の質問の有効性を考察した、学部生の卒業研究である。 本人担当部分：担当として指導した。 共同発表者：東仁美、□村雅世
5.　日常看護の会話の中で実践される「傾聴」の研究―経験と聴き取りの特徴―	―	平成23年6月	第26回保健医療行動科学会	看護の対象は高齢者が多く、高齢者と会話する機会が多く「傾聴」を必要とする機会も多くなっている。看護師は日常看護の会話の中でどのようには「傾聴」を行っているか、看護師経験の違いから検討した。博士論文研究の一部である。 経験年数の2年未満と4年以上の看護師各2名が、76歳と78歳の女性患者の看護を実践する中で「傾聴」していると判断できる部分を取り出し、そのときの思いを看護師・患者から聴取し「聴き取り」の特徴を明らかにした。その結果、経験年数の多い看護師ほど医療的な専門職としての視点で聴き取り、経験年数の浅い看護師ほど、医療的な視点でなく生活者の視点で聴き取る傾向があった。経験の少ない看護師のほうが、看護師としての力量は未熟であるが患者の気持ちに働きかける「傾聴」に近い聴き取りを実践していると考えた。 本人担当部分：研究計画書の段階からすべてに担当した。データ収集。分析を共同で行った。 共同発表者：□村雅世、永野由美子、寺山美由紀、豊田真千子、叶祐子、齋籐和博

教　育　研　究　業　績　書

平成　29年　3月　31日

氏名　　若林　たけ子

研究分野	研究内容のキーワード
看護学　看護管理	人的資源管理、キャリア開発、職務満足、医療安全管理

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例 1)看護管理学における紙面、画像の組み合わせとグループ学習の導入（三重県立看護大学）	平成20年4月～平成26年4月	看護管理学のイメージが捉えにくい現状にあることから、看護管理の構造やシステム、管理プロセスなどについてパワーポイントを用いて図式化しながら説明を加えた。レジュメの中に作成した資料を盛り込み、医療事故に伴う判例などを提示しながら具体的にイメージできるようにした。また、ビデオ鑑賞を通して、看護師としての倫理のあり方について具体的な場面を想定できるようにし、考えを深めたものをレポートにまとめるようにした。最終的にグループワークを導入し、看護管理学全般を通して理解できるようにした結果、積極的な授業への参加が見られ、管理に対する関心度が高まった。
2)ディスカッションによる思考の訓練と演習との統合（三重県立看護大学）	平成22年4月～平成26年4月	看護倫理を具体的に理解し、実践との統合を図るために、数種の事例を提供し、デスカッションによって倫理的事柄の抽出と倫理綱領との照合を行った。また、倫理的葛藤が生じる場面をビデオ鑑賞し、そのふり返りから新たな発見を行うようにした。その結果、倫理という言葉に臆せず、看護師の介入内容と場面について自主的に自分の意見が言えるようになった。
2　作成した教科書、教材 特記事項なし		
3　教育上の能力に関する大学等の評価 1）大学における自己点検・評価での結果	平成20年4月～平成27年3月 平成28年3月～29年3月	定量・定性評価において平均点85点以上／100点獲得 （三重県立看護大学） 総合点9点／10点　総合評価A
2）学生による授業評価、教員による相互評価結果	平成19年～平成27年3月	学生評価点平均3.8～4.2／5点　「丁寧、わかりやすい、これから活用できるなどの評価」 教員相互評価平均4.5／5点　「教育方法について参考にできるなどの評価」
4　実務の経験を有する者についての特記事項 1)三重県看護協会特別委員会ー看護管理者教育運営委員	平成19年 4月～平成23年3月	三重県看護協会セカンドレベル教育についてカリキュラム企画と運営について検討
2)三重県地方産業教育審議会委員	平成20年 12月～平成25年12月	三重県における地方産業の理事ならびに社長達と高校生・大学生の地方での育成について審議
3）津市情報公開・個人情報保護審査会委員	平成21年4月～平成26年3月	津市に対して寄せられた情報公開要求に対しての対策について審議

事項	年月日	概　　要
（講演会）		
1)厚生連松阪中央総合病院リーダー研修会	平成19年8月	厚生連松阪中央総合病院の看護職員経験3年目以上の看護師を対象に「リーダーシップの理解と実践」について講演（2時間）
2)三重県病院協会職員研修会	平成19年11月	三重県病院協会の病院職員を対象とした人権問題に関する研修会において「専門職者として患者の権利擁護者になるために」について講演（90分）
3)三重県　医療安全管理研修会	平成19年11月	三重県立総合医療センター　医療安全管理部・リスクマネジメント部会主催。三重県立総合医療センター職員を対象に医療安全管理について講演（90分）
4)鈴鹿回生病院看護管理者研修会	平成20年8月	三重県内の鈴鹿回生病院看護管理者を対象に「リーダーシップの理解と実践」について講演（90分）
5)三重県紀南病院講演会	平成22年3月	三重県紀南病院及び周辺施設の職員を対象に「患者の人権について（１）」の講演（90分）
6)花の丘病院講演会	平成22年3月	三重県内施設の花の丘病院の職員を対象に「患者の人権について」を公開講座として講演（90分）
7)日本赤十字社病院研修会	平成23年3月	三重県在住の日本赤十字社職員を対象に「患者の人権」について講演（90分）
8)吉田クリニック職員研修会	平成23年6月	三重県内施設である吉田クリニックの職員を対象に「患者の人権」について公開講座として講演（90分）
9)三重県暲純会武内病院研修会	平成23年6月	三重県内施設である暲純会武内病院の職員を対象に「患者の人権」について講演（90分）
10)県立志摩病院看護師研修会	平成23年11月	三重県立志摩病院看護師を対象に「リーダーシップの理解と実践」について講義（90分）
11)国立津医療センター管理者研修	平成23年12月	国立津医療センターの看護管理者を対象に「管理の基本から管理能力の向上を目指そう―マネジメント能力をつけよう―」のテーマで講演（3時間）
12)三重県紀南病院講演会	平成24年1月	三重県紀南病院及び周辺施設の職員を対象に「患者の人権と病院へのクレーム」について講演（90分）
13)藤田保健衛生大学七栗サナトリウム研修会	平成24年2月	藤田保健衛生大学七栗サナトリウムの職員を対象に「患者の人権」について講演（60分）
14)みえアカデミックセミナー２０１３	平成25年2月	三重県民を対象に「日本の医療費と患者の権利」について講演（90分）
15)特別養護老人ホーム百楽職員研修	平成25年9月	特別養護老人ホーム百楽の職員を対象に「生きることと死ぬこと」について、出前授業として講演（90分）
16)国立病院機構鈴鹿病院研修会	平成26年5月	国立病院機構鈴鹿病院及び周辺施設の医療職員を対象に「患者のクレームは何故起こる？」について講演（60分）
17）奈良県吉田病院看護管理者研修会	平成28年1月～2月	看護管理の基礎と概要について5回講義（450分）

事項	年月日	概　　要
（講習会）		
1)平成19年度看護管理者教育セカンドレベル研修講師	平成19年8月～11月	三重県看護協会主催の認定看護管理者セカンドレベル研修において、看護組織論「看護管理研究の活用」について講義（6時間）と演習（15時間）
2)平成19年度看護管理者ファーストレベル教育講師	平成19年9月～10月	三重県看護協会主催の看護管理者ファーストレベル教育において、「看護管理概説」について講義（10時間）とレポート評価
3)平成20年度認定看護管理者制度ファーストレベル教育講師	平成20年4月	奈良県看護協会主催の認定看護管理者制度ファーストレベル教育において「看護管理概説」について講義（6時間）
4)平成20年度看護管理者教育セカンドレベル研修講師	平成20年8月	三重県看護協会主催の認定看護管理者セカンドレベル研修において、看護組織論「看護管理研究の活用」について講義（6時間）
5)平成20年度看護管理者ファーストレベル教育講師	平成20年9月	三重県看護協会主催の看護管理者ファーストレベル教育において、「看護管理概説」について講義（6時間）とレポート評価
6)平成21年度認定看護管理者制度ファーストレベル教育講師	平成21年4月	奈良県看護協会主催の認定看護管理者制度ファーストレベル教育において「看護管理概説」について講義（6時間）
7)平成21年度看護管理者教育セカンドレベル研修「課外指導」講師	平成21年8月～平成22年2月	三重県看護協会主催の認定看護管理者セカンドレベル研修において、「看護管理実践課題」について課外指導として講義（12時間）
8)平成21年度看護管理者ファーストレベル教育講義	平成21年9月	三重県看護協会主催の看護管理者ファーストレベル教育において、「看護管理概説」“新しい時代の看護の課題看護管理とは”について講義（6時間）
9)平成21年度看護管理者教育セカンドレベル研修講師	平成21年10月	三重県看護協会主催の認定看護管理者セカンドレベル研修において、看護組織論「看護管理研究の活用」について講義（6時間）
10)平成22年度認定看護管理者制度ファーストレベル教育講師	平成22年4月	奈良県看護協会主催の認定看護管理者制度ファーストレベル教育において「看護管理概説」について講義（6時間）
11)平成21年度看護管理者ファーストレベル教育講師	平成22年8月	三重県看護協会主催の看護管理者ファーストレベル教育において、「看護管理概説」“新しい時代の看護の課題看護管理とは”について講義（6時間）
12)三重県立看護大学遠隔授業講師	平成22年12月	大学の遠隔地にあたる施設（三重県立志摩病院他）の職員を対象に「看護管理ー組織論ー」について講義（90分）
13)平成23年度認定看護管理者制度ファーストレベル教育講師	平成23年4月	奈良県看護協会主催の認定看護管理者制度ファーストレベル教育において「看護管理概説」について講義（6時間）
14)平成23年度看護管理者教育セカンドレベル研修講師	平成23年7月	三重県看護協会主催の看護管理者セカンドレベル研修において「看護組織論」「看護管理研究の活用」について講義（12時間）
15)平成23年度看護管理者教育セカンドレベル研修講師	平成23年8月	三重県看護協会主催の看護管理者セカンドレベル研修において「看護組織論」「看護管理研究の活用」について講義（12時間）
16)平成23年度看護管理者教育セカンドレベル研修講師	平成23年8月	三重県看護協会主催の看護管理者セカンドレベル教育において「看護組織論　看護管理に必要な知識体系」（6時間）
17)平成23年度認定看護管理者制度ファーストレベル教育講師	平成23年8月	三重県看護協会主催の認定看護管理者ファーストレベル教育において、「看護管理概説」“新しい時代の看護の課題看護管理とは”について講義（6時間）

事項	年月日	概　　要
18)平成23年度三重県立看護大学地域交流センター認定看護師教育課程「感染管理」講師	平成23年8月	三重県立看護大学地域交流センター主催の認定看護師教育課程「感染管理」において、「組織論」について講義（4時間）
19)平成23年度三重県専任教員養成講習会講師	平成23年8月	三重県看護協会主催の三重県専任教員養成講習会において「看護管理」について講義（６時間）
20)看護研究ステップアップ講座「初学者のための看護研究」講師	平成23年8月	三重県内の看護師を対象に「研究計画書の書き方と立て方」について講義（90分）
21)独立行政法人国立病院管理学講座講師	平成23年12月	三重県内の国立病院看護管理者を対象に「管理の基本から管理能力の向上を目指そうーマネジメント能力をつけよう」について講義（3時間）
22)平成24年度認定看護管理者制度ファーストレベル教育講師	平成24年4月	奈良県看護協会主催の認定看護管理者制度ファーストレベル教育において「看護管理概説」について講義（6時間）
23)平成24年度看護管理者教育セカンドレベル研修講師	平成24年6月	三重県看護協会主催の看護管理者セカンドレベル教育において「看護組織論　看護管理に必要な知識体系」（6時間）
24)看護研究ステップアップ講座「看護研究の基本ステップ」講師	平成24年7月	三重県内の看護師を対象に「研究計画書の書き方と立て方」について講義（90分）
25)平成24年度三重県立看護大学地域交流センター認定看護師教育課程「感染管理」講師	平成24年7月	三重県立看護大学地域交流センター主催の認定看護師教育課程「感染管理」において、「組織論」について講義（4時間）
26)平成24年度認定看護管理者制度ファーストレベル教育講師	平成24年7月・8月	三重県看護協会主催の認定看護管理者ファーストレベル教育において、「看護管理概説」“新しい時代の看護の課題看護管理とは”について講義（18時間）
27)平成24年度看護管理者教育セカンドレベル研修講師	平成24年9月	三重県看護協会主催の看護管理者セカンドレベル研修において「看護組織論」「看護管理研究の活用」について講義（12時間）
28)平成25年度認定看護管理者制度ファーストレベル教育講師	平成25年4月	奈良県看護協会主催の認定看護管理者制度ファーストレベル教育において「看護管理概説」について講義（6時間）
29)平成25年度認定看護管理者教育課程セカンドレベル研修講師	平成25年6月	三重県看護協会主催の看護管理者セカンドレベル教育において「組織マネジメントの基本理論」について講義（6時間）
30)平成25年度三重県立看護大学地域交流センター認定看護師教育課程「感染管理」講師	平成25年7月	三重県立看護大学地域交流センター主催の認定看護師教育課程「感染管理」において、「組織論」について講義（4時間）
31)平成26年度認定看護管理者教育課程ファーストレベル研修講師	平成26年7月・8月	三重県看護協会主催の看護管理者ファーストレベル教育において、「看護管理の概要」「看護管理に必要な基礎知識」について講義（18時間）
32)平成26年度認定看護管理者教育課程ファーストレベル講師	平成26年5月	奈良県看護協会主催の認定看護管理者制度ファーストレベル教育において「看護管理概論」について講義（6時間）
33)平成26年度認定看護管理者教育課程セカンドレベル研修講師	平成26年6月	三重県看護協会主催の看護管理者セカンドレベル教育において「組織マネジメントの基本理論」について講義（6時間）
34)平成27年度認定看護管理者制度ファーストレベル教育講師	平成27年7月・8月	三重県看護協会主催の認定看護管理者ファーストレベル教育において、「看護管理概説」“新しい時代の看護の課題看護管理とは”について講義（18時間）

事項	年月日	概　　要
35)平成27年度認定看護管理者教育課程セカンドレベル研修講師	平成27年6月	三重県看護協会主催の認定看護管理者セカンドレベル教育において「組織マネジメントの基本理論」について講義（6時間）
36)平成28年度認定看護管理者教育課程セカンドレベル研修講師	平成28年6月	三重県看護協会主催の認定看護管理者セカンドレベル教育において「組織マネジメントの基本理論」について講義（6時間）
５　その他 ―担当教科― １＜学部＞ １）三重県立看護大学「看護管理学」の担当 平成16年前期 平成17年前期 平成18年前期	平成16年4月～平成26年9月	マネジメントの機能は看護のある所全てにおいて必要とされていることをふまえ、看護管理の基礎的概念、看護マネジメントの対象と場について理解することを目的に、看護サービス提供の効率的な運用、日本の医療制度の仕組み、医療におけるサービスの構造、医療安全の基本的な考え方を通して、看護職の果たす役割や責任について教授
2）三重県立看護大学「看護学特論」の担当前期	平成19年4月～平成26年9月	看護実践の指針となる看護倫理を体系的に捉え、倫理問題に関する言語と思考の枠組みを持つことの重要性について熟考し、様々な対象に提供される看護場面を通しての倫理的分析と意思決定を助ける判断力、自律した看護実践能力について教授
3）三重県立看護大学　卒業研究論文作成指導（4年生）前期・後期	平成16年4月～平成27年3月	毎年3～5名の学生を看護管理学ゼミ生として担当看護管理に関する研究テーマを見出し、研究計画書の立案と実施を行い、得られた結果を基に論理的に考察した成果を研究報告書としてまとめて提出し、卒業研究発表会で報告するまでの指導に着手
4)奈良学園大学　看護学概論の担当 平成27年前期 平成28年前期	平成27年4月～現在にいたる	平成27年度は主に看護管理基本的な内容と医療事故について教授。平成27年度は看護とは何かについて、人間を看護していく上での重要な視点としての健康と環境を主軸に、看護の歴史を紐解きながら現在の看護のありようについて教授
5)奈良学園大学「看護理論演習」の担当後期	平成27年11月～現在にいたる	各看護理論家毎にグループ編成された学生のグループワークに参加し、グループ発表ができるまでの助言と援助
２＜大学院＞ 1)三重県立看護大学「社会機能系看護学特論」の担当 平成16年前期 平成17年前期	平成16年4月～平成23年9月	看護職の史的考察から社会機能としての看護活動について議論し、かつ看護職の社会機能的活動の実態をふまえて、専門職としての看護職について考察を深め、看護職の社会機能を発展させるための課題を抽出していくことについて教授
2）三重県立看護大学「看護管理論」の担当　前期 平成25年より後期	平成16年4月～現在にいたる	組織論、組織行動科学に関する諸理論を通して、マネジメントの原理とリーダーシップについて言及し、看護管理の実際を探求しながら、看護職者の社会的使命について考察を深めていくことを教授
3）三重県立看護大学「看護管理学」の担当　前期	平成17年4月～平成24年9月	看護管理学の概念と看護管理が看護サービスに影響する要因を多角的に考察し、看護職のリーダーとして、問題解決能力を高め、看護の機能を効果的、かつ円滑に展開するため技法と基礎理論について教授
4）三重県立看護大学「看護管理学演習」の担当前期・後期	平成19年4月～平成25年3月	看護管理の実践力を高めるために必要とされる研究や、組織における具体的な看護管理上の問題と課題に取り組むための計画立案とセミナー運営について教授

事項	年月日	概　　要
5）三重県立看護大学「社会機能系看護学特別研究」の担当	平成19年4月～ 平成25年3月	社会機能系看護学領域における特論・演習をふまえて、看護管理学に有用な研究課題に沿って、その研究方法を探求し、研究計画書の作成と研究課題に関する論文作成及び発表について教授
6）三重県立看護大学「看護研究ー看護研究のための倫理ー」の担当　後期	平成20年4月～ 平成23年3月	看護学研究における研究倫理に関する基盤となる指針や理論とともに研究対象者への倫理的配慮について教授
7）三重県立看護大学「看護管理学特論」の担当　前期	平成25年4月～ 平成26年9月	看護管理学の概念と看護管理が看護サービスに影響する要因を多角的に考察し、看護職のリーダーとして、問題解決能力を高め、看護の機能を効果的、かつ円滑に展開するため技法と基礎理論について教授
8）三重県立看護大学「看護管理学演習Ⅰ」の担当　前期	平成25年4月～ 平成26年9月	看護管理の対象とその特性に対応していくために必要とされる優先的な研究課題について討論し、看護管理学研究を推進していくための有用な
9）三重県立看護大学「看護管理学演習Ⅱ」の担当　後期	平成25年7月～ 平成27年3月	看護管理学特論・演習Ⅰで学習した概念や理論、文献検討で得られた知見に基づき、臨床の看護管理上の課題に対して、自らの研究課題を明確にしたうえでの研究計画立案について教授
10）三重県立看護大学「看護管理学特別研究」の担当　前期・後期	平成25年4月～ 平成27年3月	看護管理学の特論・演習をふまえて、看護管理学に有用な研究課題を見出し、看護管理学発展に向けての研究方法を探求し、研究課題に関する論文作成と発表について教授
11)三重県立看護大学「看護研究概論ー看護研究の概念、看護研究の意義、研究プロセスの概要についてー」の担当　前期	平成25年4月～ 平成26年9月	看護専門職者が行う研究の意義やあり方について、看護ケアを受ける患者および看護ケア提供者の課題を体系的に探究・検証する方法と研究プロセスの概要を理解するための研究プロセスの背景や研究プロセスにおける研究デザインなどについて教授
12)三重県立看護大学　修士論文作成指導	平成20年～ 平成27年3月	平成22年修了生1名輩出 平成23年修了生2名輩出 平成26年修了生1名輩出 その他毎年1～2名の副査を担当 平成26年～1名担当
３＜学外教育＞ 1）奈良県立医科大学医学部看護学科「看護管理論」の担当　後期	平成19年10月 ～ 平成21年3月	奈良県立医科大学医学部看護学科において「看護管理論」の講義。看護管理の基礎的概念、看護マネジメントの対象と場について理解することを目的に、日本の医療制度の仕組み、医療におけるサービスの構造、動機づけ、医療安全の基本的な考え方について教授
2）岐阜大学大学院医学系研究科看護学専攻修士課程「看護マネジメント論」担当　後期	平成21年10月 ～ 平成27年3月	岐阜大学大学院医学系研究科看護学専攻修士課程において「看護マネジメント論」の講義。組織論、組織行動科学に関する諸理論を通して、マネジメントの原理とリーダーシップについて言及し、看護管理の実際について教授
―実習指導―		
1)三重県立看護大学　基礎看護学実習Ⅰ（後期）	平成16年9月～ 平成27年3月	健康課題を持つ人とのコミュニケーションや看護師との関わりを通して、療養生活の実際を知り、看護の役割について考える。
2)三重県立看護大学　基礎看護学実習Ⅱ（後期）	平成16年10月 ～ 平成27年3月	健康課題を持つ人との健康の回復・維持のために看護過程を展開し、さらに個別性に合わせて安全・安楽・自立に向けた日常生活援助を実施する能力を養う実習

事項	年月日	概　　要
3)三重県立看護大学　看護総合実習（前期）	平成16年4月～ 平成26年9月	4年生を対象に、既習の看護知識、理論、技術を統合して活用しうる総合的能力を養い、自らの看護観や看護技術を創意し発展させて看護実践能力を高める実習
4)奈良学園大学　早期体験演習（前期）	平成27年4月～ 現在にいたる	看護師のシャドーイングを通して看護師の役割を考える実習で、実習に行くまでの事前演習90時間と併せて看護師になるにあたっての心構えについて学習
5）奈良学園大学　基礎看護学実習Ⅱ（前期）	平成27年4月～ 現在にいたる	健康課題を持つ人との健康の回復・維持のために看護過程を展開し、さらに個別性に合わせて安全・安楽・自立に向けた日常生活援助を実施する能力を養う実習
6)奈良学園大学　基礎看護学実習Ⅰ（後期）	平成27年9月～ 現在にいたる	健康課題を持つ人とのコミュニケーションや看護師との関わりを通して、療養生活の実際を知り、看護の役割について考える。

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　　要
1　資格、免許		
1）看護婦免許	昭和49年5月13日	第256565号
2）修士（看護学）	平成16年3月25日	三重大学大学院医看修第11号
2　特許等		
特記事項なし		
3　実務の経験を有する者についての特記事項		
（看護師）		
1）三重県立看護大学　学生委員会委員	平成23年3月 平成21年4月～	主に4年生を担当し、進路に向けてのガイダンスや「就職説明会」「ようこそ先輩」などの企画に携わる。
2）三重県立看護大学　実習小委員会委員	平成17年4月～ 平成20年3月	総合実習作業部会の責任者として、報告や実習にあたっての学生配置、担当教員の決定などに携わる。
3）三重県立看護大学　ＩＳＯ特別委員会委員	平成19年4月～ 平成20年3月	学内の環境管理に関する年次計画の立案や遂行のための運営に参加。ＩＳＯ活動に関する行事企画に沿い、ＯＡ用紙使用料削減活動、電気使用料削減活動の自己評価表のまとめや、部署担当の廃棄物管理活動の監視などを実施
4）三重県立看護大学　学生委員会委員長	平成19年4月～ 平成23年3月 平成25年4月～ 平成27年3月	学習相談や指導の充実を図るために、オフィスアワーの設置やチューター制度の充実と活用の推進。また大学生活に関するアンケート結果を基に、学生の生活支援や健康管理の活動内容の見直し促進。さらに就職支援体制の充実のために、就職ガイダンスや就職情報の収集と提供など、主に学生が主体的に活動できる支援をサポートするために委員会活動を統括。
5）三重県立看護大学　研究科常任委員会委員	平成20年4月～ 平成27年3月	研究科における教育研究の活性化と学生がより履修しやすい環境の整備等について検討。
6）三重県立看護大学　教務委員会委員会委員 （カリキュラム検討小委員会委員） （国家試験対策作業部会統括）	平成20年4月～ 平成22年3月 平成23年4月～ 平成25年3月	カリキュラム検討小委員会の責任者として平成21年度適用のカリキュラム改正案への対応などの検討に参加。 国家試験対策作業部会の担当教務委員として、国家試験対策に向けての検討を行う。

事項	年月日	概　　要
７）三重県立看護大学　研究倫理審査会員	平成21年～ 平成22年3月 平成25年4月～ 平成27年3月	研究倫理審査会員として、提出された研究倫理審査申請書の査読と審議に参加。
８）三重県立看護大学　研究倫理審査会長	平成22年4月～ 平成25年3月	学内組織による教員の倫理上の問題の審査を充実させ、研究倫理を堅持するために、定期的な審査会の開催を実施。また、公正な審査及び速やかな結果通知を行うための審査体制の点検評価の実施と研究輪審査手順書の作成。
９）三重県立看護大学　オープンキャンパス・父兄会ワーキング	平成21年4月～ 平成23年3月	オープンキャンパスの企画運営について検討し、当日のスムーズな進行及び実施後の見直しと評価。アカデミックオープンキャンパスとして高校生を対象に入試対策等の講習会の開催。保護者会として、父兄などを対象に大学の状況や学生の状況などを伝え相互のコミュニケーションを通しての連携の強化にワーキングとして参加。
10）三重県立看護大学　FD委員会委員	平成23年4月～ 平成25年3月	「教員相互の授業点検評価」や「学生による授業評価」の結果の分析と改善点の検討。「研究・コロキウム」「FD講演会」の継続開催のための検討。
11）三重県立看護大学　予算委員会委員	平成25年4月～ 平成27年3月	当初予算における理事長裁量枠の設定と教育・研究の質の向上を目指した環境整備や省エネルギー推進への取り組みなどに関しての重点的な予算配分の検討に委員として参加。
12)奈良学園大学　実習部会員	平成27年4月～ 平成28年3月	早期体験演習の責任者として演習要項の作成や実習病院との調整、学生配置、担当教員との決定や連携に携わる
13)奈良学園大学　教務部会員	平成27年4月～ 現在にいたる	卒業研究ワーキング長として、卒業研究の到達目標の設定や、実施要項、評価基準、スケジュール、学生配置、シラバス作成に携わりながらワーキングの統括。
14)奈良学園大学　大学院設置ワーキング員	平成27年4月～ 現在にいたる	平成30年開設に向けて、ワーキングに参加
４　その他		

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
（著書）				
1．変化するニーズに対応した介護支援専門員とサービス事業所	共著	平成20年9月	第一法規，ケアマネジメント実践事例集 P4131－4145	突然動けなくなった利用者の在宅生活再構築のために、変化するニーズに介護支援専門員とサービス事業所が協働で対応していくプロセスについて事例を通して紹介。 若林たけ子，川口ちづる （P4131 - 4142担当）
（学術論文）				
1. グループスーパービジョンを用いたケアマネジャーサポートの試み	共著	平成22年3月	日本医療福祉情報行動科学会 P 13-22	在宅介護の推進と多様化するサービスの中で、その対応に困窮しているケアマネジャーへのサポートの試みとして、7名のケアマネジャーを対象に4回のグループスーパービジョン（GSV）を通して、その効果と有用性について検討。結果としてGSVはケアマネジメント業務に対するケアマネジャーの自己評価に変化を与えるとともに、業務内容の意識変化を生じさせ、ケアマネジャーの支援策として有効な手段になり得る可能性が示唆された。 若林たけ子・小池敦・川口ちづる （研究全体の企画、運営、統括、分析、考察、執筆担当）
2．師長がとらえる臨床現場における人材育成の課題	共著	平成22年4月	第40回日本看護学会論文集－看護管理 - 40号 P 243－245	臨床現場における人材育成について、看護師長がどのような思いを抱いているのかを明らかにすることを目的に、500床以上の総合病院1施設の看護師長22名を対象に自由記述による意見収集を行い、質的に分析し、カテゴリーを抽出した。結果、看護師長が思っている人材育成の課題は、11のサブカテゴリーで構成され【看護師長の教育ビジョン】【教育システム】【個々の関わり】【職場環境の整備】【看護師長のジレンマ】の5つであることが明確になった。 松嵜美紀，松井和世，谷眞澄，松本ゆかり，若林たけ子，藤井洋子，灘波浩子，小池敦 （分析一部、考察一部担当）
3．看護師長の看護管理上の負担感	共著	平成22年4月	第40回日本看護学会論文集－看護管理 - 40号 P 231-233	臨床現場における看護師長の看護管理上の負担感を明らかにするために、500床以上の総合病院1施設の看護師長22名を対象にグループインタビューを用いて調査し、その内容の録音、逐語録を質的に分析し、カテゴリーを抽出した。結果、看護師長の看護管理上の負担感は、11のサブカテゴリーで構成され【業務負担】【病院運営】【人間関係への関与】【看護管理者としての役割意識】の5つであることが明確になった。 谷眞澄，松井和世，松本ゆかり，松嵜美紀，若林たけ子，藤井洋子，灘波浩子，小池敦 （分析一部、考察一部担当）
4．7対1看護配置が看護師の仕事ストレッサー・疲労蓄積度および職務継続意思に及ぼす影響	共著	平成24年9月	日本看護研究学会雑誌，35巻4号 P 65－74	看護配置の違いが看護師にもたらす影響を検証することを目的に、看護師868名を対象に看護周辺業務の実施状況、『臨床看護師の仕事ストレッサー尺度』、『労働者の疲労蓄積度自己診断チェックリスト』、職務継続意志を調査し、7対1看護配置届出病院と（７：１群）と10対1看護配置届出病院（10：１群）を比較分析した。結果、7:1群は10：1群より看護周辺業務の搬送業務実施が有意に少なく、ストレッサー尺度の〈職場の人的環境〉〈仕事の量的負担〉、疲労蓄積度の〈自覚症状の評価〉が有意に低く、職務継続意志では、所属病院を良い病院と思う比率が有意に高かった。 灘波浩子、小池敦、若林たけ子 （研究企画提案、全体の指導、分析一部、考察一部担当）

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
５．Factors associated with nurses'reporting of patients'aggressive behavior：A cross‐sectional survey. (患者の攻撃的行動に対する看護師の反応に関する一調査)	共著	平成24年12月	International Journal of Nursing Studies 50(2013) P1368-1376	（概要） 看護師は患者から多くの攻撃的行動を受けながらも、その多くは未報告であることをふまえ、それらの要因と報告との関連性を検討し、過少申告の理由を明らかにすることを目的に、日本における2地域の急性期病院6施設に勤務する看護師1953名を対象に質問紙調査を行った。回収（回収率）1498（76.7%）からの有効回答1385（70.9%）を分析対象とした。結果、回答者の三分の一以上が、軽度レベルの影響を受けており、それらの70%は、ほとんどインシデントを報告しなかった。看護師は軽度の被害は報告しない傾向にあり、臨床経験が少ない看護師ほど軽度の被害は報告しない傾向にあった。看護師が上司の対応を被支援的と感じているほど報告しない傾向にあることと関連していた。Kana Sato, Takeko Wkabayashi, Hiroko Kiyoshi-Teo,Hiroki Fukahori （対象者の選定、データ収集と回収、考察一部担当）
６．新人教育の研修受講経験の有無による新人教育に対するやりがい感の違いについて	共著	平成25年3月	岐阜医療科学大学紀要第7号 P 77～83	新人教育研修（研修）の受講経験と新人教育に対するやりがい感の関係性を明らかにする目的で、在職2年以上の看護師387名を対象に、研修の有無、新人教育に対するやりがいの程度とその理由について自記式質問紙調査を行った。結果、受講経験あり群がなし群に比較して有意に高いやりがい感を持っていたことが明らかになった。また、高やりがい群は、新人の将来について希望を描き、教育するものとしての自己評価の成長としてとらえていた。一方、未研修者は、教育者としての自己の未熟さを多くあげていた。 藤井洋子，灘波浩子，若林たけ子，小池敦，松嵜美紀，松本ゆかり，谷眞澄，松井和世 （研究企画提案、分析一部、考察一部担当）
７．Effects of a 7:1 Patient-to-Nurse Staffing Ratio on Nurses' Stressors, Accumulated Fatigue, and Intention to Continue Working （7対1看護配置が看護師の仕事ストレッサー、疲労蓄積度、職務継続意思に及ぼす影響）	共著	平成26年3月	Yearbook on Journal of the Japan Society of Nursing Research 2013 Ｐ1～11	（概要） 看護師868名を対象に看護周辺業務の実施状況、『臨床看護師の仕事ストレッサ―尺度』、『労働者の疲労蓄積度自己診断チェックリスト』、職務継続意志を調査し、看護配置の違いが看護師にもたらす影響を検証することを目的とした。7対1看護配置届出病院と10対1看護配置届出病院を比較分析した結果、７：１群は10：１群より看護周辺業務の搬送業務実施、ストレッサ―尺度の〈職場の人的環境〉〈仕事の量的負担〉、疲労蓄積度の〈自覚症状の評価〉がそれぞれ有意に少なく低かった。７：１群は職務継続意志について、所属病院を良い病院と思う比率が有意に高かった。 Hiroko Namba, Atsushi Koike Takeko Wakabayashi （研究企画提案、全体の指導、分析一部、考察一部担当）
８.看護配置の違いと看護師の職務満足度及び組織定着との関係	共著	平成26年3月	三重県立看護大学紀要第17巻 P 79～88	看護配置の違いが看護師にもたらす影響を検証することを目的に、看護師868名を対象に、『臨床看護師の職務満足度質問紙』、『定着可能度分析尺度』「看護周辺業務の実施状況」を調査し、７：１看護師配置病院と10：１看護師配置病院の看護師群を比較し、相関係数を算出した。結果、7：1群は10：1群に比較して【職業的地位】と【看護師間相互の影響】に関する満足度が高く、看護配置は【職業的地位】と【看護師間相互の影響】に関する職務満足度と組織定着可能性に関連し、看護周辺業務の実施状況看護師の職務満足と職務定着可能性に関連していた。灘波浩子、小池敦、若林たけ子 （研究全体の指導、分析一部、考察一部担当）

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
９．12時間二交代で働く看護師が抱く現勤務体制の満足感と思い	共著	平成27年3月	三重県立看護大学紀要第18巻 P　27～36	12時間二交代制を導入している施設の看護師を対象に12時間二交代制に対する満足感と思いを調査し、看護師が働き続けやすい勤務体制を検討することを目的とした。調査施設は1983年から12時間二交代制を導入している同一系列病院3施設で、　対象者は調査施設に勤務する看護師で12時間二交代制以外の勤務を経験している病棟勤務看護師175名であった。分析は量的データは記述統計とし、質的データは意味内容をごとに分類しカテゴリー化した。満足感の比較はt検定と一元配置分散分析、満足感と充実感などとの関係についてはpearsonの相関係数を算出した。結果、12時間二交代制の満足感は、看護師経験年数5年以上、既婚者、同居者有の者が高く、夜勤後残業時間と私生活との充実感と関連していた。12時間二交代制への肯定的意見は【連休の取得しやすさ】【規則的なクール体制】【自分の時間の確保】【充実した余暇活動】【生活リズムのつけやすさ】【心身の負担の少なさ】などで、対象者の90%以上が現体制を支持していた。灘波浩子、若林たけ子、小池敦、楠本順子、中村純子、眞野恵子 （分析一部、考察一部担当）
10.看護師の職務満足度が高い施設の看護部長に共通する管理方針	共著	平成27年5月	日本医療マネジメント学会雑誌　第16巻第1号 ｐ28～33	看護師の職務満足度が高い施設の看護部長の看護管理方針について調査し、看護部長に共通する看護管理上の因子を明らかにすることを目的とした。職務満足度の高い病院の看護部長5名を対象に半構成的面接を行い、質的機能的に分析した結果、【看護の質を保証するための戦略】【多様な情報源と聞くことの重視】【充実した教育体制】【権限の委譲と支援体制】【ワークライフバランスのとれた労働環境】の5つの共通因子が抽出された。また、看護部長が管理を行う上での基盤として【良好な人間関係を基盤にした看護部に理解ある病院組織】の存在が認められた。さらに、看護部長の共通背景には30年以上の看護師経験と認定看護管理者を取得していた。灘波浩子、若林たけ子、小池敦 （分析一部、考察一部担当）
11.入院中の衣服の選択理由と衣服が闘病意欲に与える影響要因の考察	共著	平成28年9月	奈良学園大学紀要第5集 p113～121	衣服の自由選択を前提に病衣貸与体制を導入している病院に入院中の患者62名を対象に、衣服を選択する理由とその衣服が闘病意欲に与える影響を考察することを目的に、質問紙に基づいた聞き取り調査を行った。結果、病衣に対して不満を持っていた患者の割合は50%で、男性よりも女性の方が20%多かった。病衣に対する不満理由からは、「恥辱感」「個の尊厳の喪失感」「不合理性」「不快感」の4つの因子が抽出された。衣服と闘病意欲と性別の関係では、男性よりも女性の方が闘病意欲が高く、病衣と私服と闘病意欲の関係では、私服の方がχ２検定1%水準で有意に高かった。以上から、退院後も家庭で役割を持つ女性が、私服を着用することによって社会性を維持していくことへの影響が考えられ、入院中であっても、個の尊厳を維持できる衣生活に向けて心がけることの重要性が示唆された。　田中里奈　若林たけ子　東中須恵子 （研究全体の指導、分析一部、考察一部担当）

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（総説）				
1. 被抑圧者としての看護師の背景と看護管理の考察	共著	平成29年2月	日本医療福祉情報行動科学会　vol.2 P19-23	ヘルスケアにおける支配／従属関係から生み出された被抑圧者としての看護師の背景から，今後の看護管理のあり方を考察した。看護師が被抑圧者となった背景には，広範囲な性差別や階級差別による政治的闘争があり、長期間にわたる隷属的地位の影響は，看護師を他の被抑圧者集団と同じような特徴をもつ集団とさせていった。歴史の中で看護師は自分たちのアイデンティティを見失い，変革に対する消極性と共に依存性を生み出してきた。看護師のアイデンティティは、看護としてのさまざまな価値観の総体となるため、社会化とその経験から形づくられて行かなければならない。今後の看護管理は看護職としてのアイデンティティの確立を確実にし、自らの具体的実践の中で臨床の知を開拓していかなければならない。今必要とされている看護管理者のリーダーシップは，このような知識労働者であると考察された。若林たけ子、田中里奈、東中須恵子 （研究全体の企画、運営、統括、分析、考察、執筆担当）
（その他 ）				
1.誌上セミナー　三重県立看護大学地域交流研究センターによる看護研究の基本ステップ 第3回　文献の読み方と計画書の書き方	単著	平成19年6月	日総研，看護記録 Vol.17 No.3 P69-76	看護研究における文献の読み方と計画書の書き方について解説
2.. 看護管理概説―　看護管理者の役割	単著	平成19年6月	日総研，主任＆中堅 Vol.16 No. 6 P9-16	看護管理者に求められる「看護管理学」の知識と看護管理者の仕事としての、パワーの源とその有効活用および変革理論について解説
―研究報告書―				
1.県内中堅病院のネットワーク構築に向けた取り組み（平成20年度取り組み）	共著	平成21年5月	三重県立看護大学地域交流研究センター年報 VOL ，12 P66～67	県内中堅病院のネットワーク構築に向けた取り組み（平成20年度取り組み）について報告。 若林たけ子，小池敦，灘波浩子（研究全体の企画推進、分析、考察、執筆担当）
2. 県内中堅病院のネットワーク構築に向けた取り組み（平成21年度取り組み）	共著	平成22年5月	三重県立看護大学地域交流研究センター年報 VOL ，13 P48～49	県内中堅病院のネットワーク構築に向けた取り組み（平成21年度取り組）について報告。 若林たけ子，小池敦，灘波浩子（研究全体の企画推進、分析、考察、執筆担当）
3. 看護職のサスティナブル（持続可能な）キャリアデザイン構築支援プログラムの開発	共著	平成22年6月	科学研究費助成事業（萌芽研究）研究成果報告書	看護職のサスティナブル（持続可能な）キャリアデザイン構築支援プログラムの開発について成果報告 深堀浩樹，山本則子，若林たけ子，河合富美子（研究対象者の選出、一部考察担当）
4. 県内中堅病院のネットワーク構築に向けた取り組み（平成22年度取り組み）	共著	平成23年5月	三重県立看護大学地域交流研究センター年報 VOL ，14 P56～59	県内中堅病院のネットワーク構築に向けた取り組み（平成22年度取り組）について報告。 若林たけ子，小池敦，藤井洋子，灘波浩子，井上直子（研究全体の企画推進、分析、考察、執筆担当）
5. 県内中堅病院の連携活動評価と支援	共著	平成24年5月	三重県立看護大学地域交流研究センター年報 VOL ，15 P73～75	県内中堅病院の連携活動評価と支援について成果報告。 灘波浩子，井上直子，小池敦，若林たけ子（研究全体の企画推進、分析、考察、執筆担当）

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
6. 県内中堅病院のネットワーク構築に向けた取り組み　平成21年～23年度	共著	平成25年3月	三重県立看護大学地域交流研究センター事業報告書 P1～162	県内中堅病院のネットワーク構築に向けた取り組みについて平成21年～23年度にかけての成果報告。 若林たけ子，小池敦，藤井洋子，灘波浩子，井上直子（研究全体の企画推進、分析、考察、執筆担当）
7. スケールデメリットを抱える中規模病院の卒後研修システム構築支援プログラムの開発	共著	平成26年6月	科学研究費助成事業（基盤研究C）研究成果報告書	スケールデメリットを抱える中規模病院の卒後研修システム構築支援プログラムの開発についての報告。若林たけ子，小池敦，灘波浩子，井上直子（研究全体の企画推進、分析、考察、執筆担当）
8.目標管理の実践で困っていませんか？	共著	平成27年3月	三重県立看護大学地域交流研究センター年報 VOL，１７ P48～51	小規模病院に勤務する看護師たちが、目標管理に関する不安や課題を多く抱えていることが背景にあることを踏まえ、小規模病院の看護管理者を対象に目標管理の成功実現に貢献することを目的に事業を展開した。若林たけ子，阿部敬子，丹生かづ，藤田佳子，灘波浩子，平田育代，林智世（研究全体の企画推進、分析、考察、執筆担当）
9.看護学生の感性をくすぐる―共感と自己受容の関連―	共著	平成29年2月	日本医療福祉情報行動科学会 vol.2 P31-36	某大学看護学科3年次生で研究同意の得られた44名を対象に、看護学生の体験から得た感動を共感としてとらえ、それらの特徴と精神看護の主な要素である自己受容との関連を明らかにした。対象者が①自由に校内を散策しながら感動した事象の発見、②①の感動体験が過去にあったかどうかを振り返り、その時期や風景を表現、③散策後の自分の気持ちを絵画で表現の3つの課題について「自然散策演習課題レポート」に記したものを内容分析した。結果、132の回答が得られ、①は「植物」「自然を体験」「生活環境」「人」「絵本」、②は「幼児期」「大学入学前後」「思春期」「その他」、③は今日の体験が楽しく感動」「あたたくこころがワクワク」「追及爽快、ワクワク」など、今を肯定的にとらえている表現が多く、植物や青空を描写した作品が多かった。散策による体験学習は自然や植物などを五感でとらえ、これまでの自分の体験を重ね合わせたことで自己の感情を素直に受け入れ自己受容に発展し、とらえた事象が過去の体験を通して強化され共感へ発展し、自己受容に繋がったと考えられる。東中須恵子、田中里奈、若林たけ子 （考察一部担当）
―国際会議発表―				
1．Care managers’worries about the case management process, and group supervision as a support measure. （ケアマネジャーが抱える困難事例の支援方法としてのグループスーパービジョンの有効性の検討）	―	平成19年5月	ICN Conference Nurses At the forefront: Dealing with the unexpected Yokohama,1 June 2007	（概要） 介護支援専門員が対応過程で悩む事例について分析し、その共通因子を明らかにすることで、介護支援専門員への支援のあり方を検討することを目的とした。介護支援専門員対象に実施したグループスーパービジョンにおいて、バイザーとして提出されたケース6例について分析し、バイザーの事例提出理由および事例をまとめた後の考察、セッション後の気付きと変化について、記述的調査を行い質的に分析した。 事例提出理由は「援助方法の模索」、「関わり方の妥当性」、「支援限界範囲」であった。事例をまとめた後は、「初回面談時の情報に対する固執」、「制度の基準に対する固定観念」「キーパーソン選択基準」について考察されていた。セッション後は「つもり違い」、「思い込み」「情報の不確かさ」に気付き、「新たな発見」から「方向性の明確化」へと変化した。 共同発表者　Takeko Wakabayashi, Atsushi Koike,Tizuru　（研究全体の企画推進、分析、考察、発表担当）

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
２．The Psychological Impact of Patient's Aggressive Behavior on Nurses in Japan（日本における患者の攻撃的行動に対する看護師の精神的影響）	－	平成24年6～7月	World Health Organization, The 9th International Conference with the Global Network of WHO Collaborating Centres for Nursing and Midwifery	（概要） バーンアウトの概念、定義、測定を導入し、有病率の概要と考えられる原因、および日本の看護師のバーンアウトの結果から、看護師の間でのバーンアウトを防ぐ方法を探求することを目的とした。私たちは15年以上日本の労働者のバーンアウトを研究していることから、以前に行われた研究をレビューしてまとめた。 共同発表者　Kana Sato，Takeko wakabayashi，Hiroki Fukahori（データ収集、一部考察担当）
３．Issues in various in-service education systems faced by medium-sized hospitals in regional areas of Japan（日本における中規模病院の現任教育の課題）	－	平成25年10月	9th INC & 3th WANS : International Nursing Conference & World Academy of Nursing Science	（概要） 大規模病院や都市部の病院に比較して、管理的資源の確保に困難を極めている地方の中規模病院の現任教育体制の課題を整理しその要因を探究することを目的に、地方の某県内における中規模病院（100床以上500床未満）40施設の看護部長を対象に質問紙調査を行った。結果、現任教育体制、経年別教育制度、キャリアラダー制度、混合教育等多様であった。課題は【評価を活かせない】【アウトカムの設定が困難】【成長の個人差への対処】などなど複数の課題を抱えていた。現任教育については様々な状況況を勘案して導入したにもかかわらず、十分な機能しているとはいえずそれぞれで課題を抱えることになっていた。課題の要因は看護師の様々な背景が大きく影響しており、多様な組み合わせを必要とし、それが教育体制との不一致を生み、十分な教育の機能を逸していた。教育体制の導入の意図と目的の再考察が必要である。 共同発表者　Takeko Wakabayashi，Hiroko Namba，Naoko Inoue，Astushi（研究全体の企画推進、分析、考察、発表担当）
―国内会議発表―				
1．サービスが希少な透析利用者に対する介護支援専門員の関わりを振り返ったセッションの事例報告	－	平成20年2月	第2回日本介護支援専門員協会全国大会in大阪 近畿介護支援専門員研究大会大阪大会	動けなくなった利用者の在宅生活再構築のために、変化するニーズに介護支援専門員とサービス事業所が協働で対応していくプロセスの事例紹介 共同発表者　川口ちづる・若林たけ子・加田美智子 大山みち代・柴山則子（研究企画提案、一部分析、一部考察担当）
2．院内研修に関して研修センター設立がもたらした変化	－	平成20年8月	第34回日本看護研究学会学術集会	□ 地方の総合病院において、看護職員を中心とする研修センター「センター）の立ち上げによる院内研修の充実が新たに試みられたのを機に、センター設立前後の研修状況を比較し、センター設立がもたらした変化について検討した。 共同発表者　灘波浩子・若林たけ子・小池敦・小林美智子・石谷操・宮門郁代（研究企画提案、一部分析、一部考察担当）
3．研修センターによる新人看護師教育プログラム作成に向けた医療安全領域の知識習得度調査	－	平成20年8月	第34回日本看護研究学会学術集会	□ 研修センターが新たに設立されたのを機に、新人看護師の通常業務において医療安全領域の知識がどの程度獲得されるかを明らかにし、その結果を研修センターにおける新人看護師教育プログラムとしての作成に反映させた。 共同発表者　小林美智子・石谷操・宮門郁代（研究企画提案、一部分析、一部考察担当） 灘波浩子・若林たけ子・小池敦

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
4. 新卒看護師のストレスに関する検討―職務満足度との関連から―,	―	平成21年8月	第35回看護研究学会学術集会	新卒看護師のストレスの特徴について、新卒看護師27名と就職2年目の看護師13名を対象に、「臨床看護師の仕事ストレッサ―測定尺度」と「看護師の職務満足度」を用いて調査し、2年目との比較から新卒看護師のストレスの特徴を明らかにした。 共同発表者　灘波浩子，藤井洋子，若林たけ子，小池敦，松嵜美紀，谷眞澄，松井和世（研究企画提案、一部分析、一部考察担当）
5. 新人教育の研修受講経験の有無による新人教育に対するやりがい感の違いについて	―	平成21年11月	第29回日本看護科学学会	新人教育の研修受講経験が、新人教育のやりがい感について、在職2年以上の看護師387名を対象に、自記式質問紙調査を行い、研修の有無による新人教育のやりがい感の違いについて明らかにした。 藤井洋子，灘波浩子，若林たけ子，小池敦，松嵜美紀，松本ゆかり，谷　眞澄，松井和世（一部分析、一部考察担当）
6. 看護必要度と病棟スタッフの職務満足度およびストレス要因の関係についての検討	―	平成21年11月	第29回日本看護科学学会	急性期病院の看護師230名を対象に「臨床看護師の仕事ストレッサ―測定尺度」と「看護師の職務満足度尺度」を用いて調査し、看護必要度と病棟スタッフの職務満足度及びストレス要因の関係について検討した。 松井和世，松嵜美紀，松本ゆかり，谷　眞澄，若林たけ子，藤井洋子，灘波浩子，小池敦（一部分析、一部考察担当）
7. 人員配置の違いによる看護師の職務満足度の比較	―	平成22年8月	第36回日本看護研究学会,	200床以上を有する病院の看護師2213名を対象に「看護師の職務満足度質問紙」を用いて調査し、7:1看護配置病院の看護師（7:1群）と10:1看護配置病院の看護師（10:1群）の職務満足度の違いを明らかにした。 共同発表者　灘波浩子，井上直子，藤井洋子，若林たけ子，小池敦，松井和世，松嵜美紀，松本ゆかり，谷　眞澄（一部分析、一部考察担当）
8. 新卒看護師のストレスに関する検討（第2報）－年代比較より－	―	平成22年8月	第36回日本看護研究学会,	X年にA病院に入職した新卒看護師21名とその前年に入職した新卒看護師27名を対象に、「臨床看護師の仕事ストレッサ―測定尺度」を用いて調査し、仕事ストレスの入職年度ごとの違いについて明らかにした。 井上直子，灘波浩子，藤井洋子，若林たけ子，小池敦，松井和世，松嵜美紀，松本ゆかり，谷眞澄（一部分析、一部考察担当）
9. 離職・転職を経験した看護師の離職・復職の理由	―	平成22年8月	第14回日本看護管理学会年次大会,	離職や転職を経験した看護師の離職・転職及び復職の理由を看護師自身を対象とした面接調査により明らかにし、看護師が継続して働くことへの支援に役立つ知見を得た。 榊茜，深堀浩樹，若林たけ子（研究対象者選出、一部考察）
10. 看護必要度と病棟看護管理者のストレス要因及び職務満足度の関係についての検討	―	平成22年8月	第14回日本看護管理学会年次大会,	看護必要度と病棟看護師長、係長が業務上直面するストレッサ―及び職務に対する満足感との関係について、急性期病院の11病棟に勤務する師長11名、係長33名を対象に、「臨床看護師の仕事ストレッサ―測定尺度」を用いて調査し検討した。 共同発表者　小野厚子，松井和世，谷眞澄，松本ゆかり，松嵜美紀，若林たけ子，井上直子，灘波浩子，藤井洋子，小池敦（一部分析、一部考察担当）

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
11. 看護配置からみた看護師の仕事ストレッサ―および疲労度の検討-7対1看護配置と10対1看護配置の比較	―	平成22年12月	第30回日本看護科学学会学術集会	県内の一般病床200床以上を有するA病院の一般病棟に勤務する看護師2213名を対象に、「臨床看護師の仕事ストレッサ―測定尺度」と「労働者の疲労蓄積度自己診断チェックリスト測定尺度」を用いて調査し、看護配置の違いによる看護師のストレスや疲労度について明らかにした。 灘波浩子，若林たけ子，小池敦（研究全体の指導、一部分析、一部考察担当）
12. 看護師長が捉えた看護管理上の課題-グループインタビューを用いて-	―	平成22年12月	第30回日本看護科学学会学術集会	A病院に勤務する看護師長22名を対象に、看護管理上の思いについて自由な意見交換を行うグループインタビューを実施し、看護管理上の課題についてどのように捉えているのかを明らかにした。 共同発表者　松井和世，谷眞澄，松本ゆかり，松嵜美紀，小野厚子，井上直子，灘波浩子，藤井洋子，小池敦，若林たけ子（一部分析、一部考察担当）
13. A看護大学における総合実習での学びに関する研究	―	平成22年12月	第30回日本看護科学学会学術集会	A看護大学の看護総合実習を履修した4年生5名を対象に、実習前の「実習計画書」、実習中の「日々の記録」、実習後の「実習レポート」から看護総合実習の学びの内容について分析した。 共同発表者　片岡えりか，藤井洋子，小池敦，若林たけ子　（研究全体の指導、一部分析、一部考察担当）
14. 看護職へのクレームに関する測定尺度の作成	―	平成23年8月	第37回日本看護研究学会学術集会	500床以上の一般病院に勤務する看護師4128名を対象に「クレーム頻度尺度」と「クレームのストレス強度尺度」を用いて調査し、クレームに関する測定尺度を開発した。 共同発表者　平田育世，若林たけ子，小池敦（研究全体の指導、一部分析、一部考察担当）
15. 看護職のチームワークと組織的環境との関連についての検討	―	平成23年8月	第37回日本看護研究学会学術集会	一般病棟に勤務する看護職者2579名を対象に、「看護職版チームワーク測定尺度」を用いて調査し、看護職チームワークと看護職を取り巻く組織的環境要因との関連について検討した。 共同発表者　井上直子，若林たけ子，斎藤真，玉田章（研究全体の指導、一部分析、一部考察担当）
16. 病棟管理における看護師長の環境整備に対する意識	―	平成23年8月	第37回日本看護研究学会学術集会	総合病院の病棟看護師長6名を対象に、病棟管理を担う看護師長が患者の療養環境と看護師の環境整備に対する行動をどのように捉えているかについて、半構成的面接法用いて調査し、その内容を明らかにした。 共同発表者　山本珠希，若林たけ子，橋本秀実，灘波浩子（研究全体の指導、一部分析、一部考察担当）
17. 新人看護師に対する接遇教育のあり方に関する研究	―	平成23年8月	第37回日本看護研究学会学術集会	A県内の総合病院の看護部長5名を対象に、接遇教育を企画する看護部長の新人看護師に対する考えと、教育の現状について半構成的面接法により調査し、その実態について検討した。 共同発表者　杉浦恵理香，若林たけ子，橋本秀実，灘波浩子（研究全体の指導、一部分析、一部考察担当）
18. 看護配置による看護周辺業務実施状況の違い	―	平成23年8月	第37回日本看護研究学会学術集会	200床以上を有する病院の一般病棟に勤務する看護師2213名を対象に調査し、7:1看護配置届出病院の看護師群と10:1看護配置届出病院の看護師群の看護周辺業務の実施状況の違いを明らかにした。 共同発表者　灘波浩子，若林たけ子，小池敦（一部分析、一部考察担当）

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
19. 看護職チームワークと組織的環境の関係についての検討	－	平成23年8月	第15回日本看護管理学会年次大会	看護職のチームワーク育成に効果的に働く組織的環境について、一般病棟に勤務する2579名の看護師を対象に、「看護職版チームワーク測定尺度」を用いて調査し、看護職チームワーク育成には、「組織的環境」の4因子が効果的な影響を与えていることを明らかにした。井上直子，若林たけ子，斎藤真（研究全体の指導、一部分析、一部考察担当）
20. 看護配置による看護周辺業務実施状況の違いと職務継続意思の関係	－	平成23年8月	第15回日本看護管理学会年次大会	200床以上を有する病院の一般病棟に勤務する看護師2213名を対象に調査し、7:1看護配置届出病院の看護師群と10:1看護配置届出病院の看護師群の看護周辺業務の実施状況と職務継続意志を比較しその違いを明らかにした。 共同発表者　灘波浩子，若林たけ子，小池敦（一部分析、一部考察担当）
21. 新人教育に関わる看護師の負担感―新人教育の研修受講経験の有無との比較から―	－	平成23年12月	第31回日本看護科学学会学術集会,	A病院の在職2年以上の看護師387名を対象に、新人教育受講経験の有無による新人教育に関わる看護師の負担感の違いについてを明らかにした。 共同発表者　藤井洋子，灘波浩子，若林たけ子，小池敦，松嵜美紀，松本ゆかり，谷眞澄，松井和世（一部分析、一部考察担当）
22. 看護師の職務満足度が高い施設の看護部統括者に共通する管理方針に関する検討	－	平成23年12月	第31回日本看護科学学会学術集会,	看護職者の職務満足度が高かった５施設の看護部統括者を対象に半構成的面接法を行い、共通する看護管理方針を抽出した。 共同発表者　灘波浩子，若林たけ子，小池敦（一部分析、一部考察担当）
23. 看護師の職務満足度の高い10対1看護配置病院の特徴に関する一考察	－	平成24年7月	第38回日本看護研究学会学術集会発表	７：１看護配置病院よりも看護職の職務満足度が高い１０：１看護配置病院1施設の存在をふまえ、低満足度の7:1群との比較を「臨床看護師の仕事ストレッサ―測定尺度」「労働者の疲労蓄度チェックリスト」「看護周辺業務10項目」を用いて行い、人員配置以外で看護師が満足して働くことができる環境について考察し、この病院の特徴を明らかにした。 共同発表者　灘波浩子,若林たけ子,小池敦（一部分析、一部考察担当）
24. スケールデメリットを抱える中規模病院の卒後研修体制の現状と課題ログラムの開発(第１報)	－	平成24年11月～12月	第31回日本看護科学学会学術集会	卒後研修の努力義務化をふまえ、スケールデメリットを抱える中規模病院の看護部長40名を対象に質問紙調査を行い、院内研修指導体制の現状と卒後研修の努力義務化を達成するにあたっての課題を抽出した。 共同発表者　井上直子，若林たけ子,灘波浩子,小池敦（研究全体の企画指導、一部分析、一部考察担当）
25.定着可能群の特徴からみた看護師の確保・定着対策の検討	－	平成24年11月12月	第31回日本看護科学学会学術集会	200床以上を有する病院の一般病棟に勤務する看護師2213名を対象に、「看護師の定着可能度分析尺度」を用いて調査し、定着可能性の高い看護師群の特徴を個人属性及び所属組織属性から明らかにし、看護師の確保・定着に必要な対策を検討した 灘波浩子，小池敦，若林たけ子（一部分析、一部考察担当）
26. A県内中堅病院のネットワーク構築に向けた取り組み	－	平成25年8月	第17回日本看護管理学会年次大会	大規模病院との設備の違いからくる現任教育体制や管理体制の各課題について、中規模病院の看護部長7名を対象にインタビュー調査を行い、看護管理上の課題を抽出し、各施設間の課題の共有と克服について検討し、ネットワークの構築について明らかにした。 井上直子，灘波浩子，小池敦，若林たけ子（研究全体の企画指導、一部分析、一部考察担当）

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
27. 臨床経験年数3年未満の看護師が患者から攻撃的行動を受けた際の上司への報告行動における関連因子	―	平成25年8月	第17回日本看護管理学会年次大会	患者からの攻撃的行動による看護師の被害状況が国際的に問題になっている中で、特に被害を受けやすいとされる臨床経験年数3年未満の看護師1835名を対象に、「不十分な組織の報告体制」など、報告を阻害しうる5要因について質問紙調査を行い、過去一か月間の患者からの攻撃的行動の被害とその報告の頻度に関連する要因について明らかにした。 共同発表者　佐藤可奈，喜吉テオ紘子，若林たけ子，深堀浩樹（データ収集、一部考察担当）
28.12時間二交代制で働く看護師の感じるメリット・デメリット	―	平成25年8月	第17回日本看護管理学会年次大会	12時間二交代制の病院に勤務する看護師175名を対象に、12時間二交代制のメリットとデメリットについて調査し、その実態を明らかにした。 共同発表者　灘波浩子，楠本順子，中村純子，眞野恵子，小池敦，若林たけ子（一部分析、一部考察担当）
29. 看護師の職務満足度が高い10対1看護配置病院の看護管理方針に関する一考察	―	平成25年8月	第39回日本看護研究学会	看護職の職務満足度が高い１０：１看護配置病院1施設A病院の存在をふまえ、「臨床看護師の仕事ストレッサ―測定尺度」「労働者の疲労蓄度チェックリスト」を用いて、低満足度を示す10:1看護配置病院３施設とA病院との比較を行い、さらにA病院看護部長の半構成的面接から人員配置以外で看護師の職務満足度に良い影響を与える看護管理方針の検討とその病院の特徴を明らかにした。 共同発表者　灘波浩子,若林たけ子,小池敦（研究全体の指導、一部分析、一部考察担当）
30. 12時間2交代制で働く看護師の現勤務体制満足度に関連する要因	―	平成25年12月	第33回日本看護科学学会学術集会	現在12時間二交代制で勤務し、過去に現勤務体制以外の経験を持つ看護師131名を対象に、現勤務体制の満足度（VAS法）を用いて調査し、現勤務体制に対する満足度に関連する要因の検討を行った。 灘波浩子、楠本順子、中村純子、眞野惠子、小池敦、若林たけ子（研究全体の指導、一部分析、一部考察担当）
31. 看護組織における3職位の役割ストレスと役割受容―師長、副師長、副主任の比較―	―	平成26年8月	第18回日本看護管理学会学術集会	同一設置主体で300床以上の総合病院10施設に勤務する師長・副師長・副主任の429名を対象に、無記名自記式質問紙調査を行った。調査内容には役割ストレス尺度と役割受尺度を用い、尺度間の相関を算出し、職位間の役割ストレスと役割受容得点の差について一元配置分散分析を行った。結果、役割受容と役割ストレスの得点は、副主任が相対的に低い傾向にあり、役割受容では師長が相対的に高い傾向を示した。役割ストレスと役割受容との関連では、役割葛藤と役割のあいまいさ、役割過重との関連では3職位とも、強い正の相関を示した。 共同発表者　田中千裕，若林たけ子（研究全体の指導、一部分析、一部考察担当）
32. 新人看護師が働きがいを感じる出来事	―	平成26年11月	第34回日本看護科学学会学術集会	新人看護師が仕事の中で感じる働きがいを明らかにし、働きがいを持てるような支援の在り方を検討することを目的に、臨床経験２年目の看護師６名を対象に半構成的面接法を用いて調査した。結果、新人看護師が働きがいを感じる出来事は、【看護実践能力の向上】【患者・家族からの良好な反応】【上司・先輩看護師からの良好な反応】【看護師としての感性の高まり】【他のスタッフとの協働】【患者の退院・病状の回復した姿】の７つのカテゴリーに分類された。新人看護師が働きがいを持てるような支援としては、上司・先輩看護師からの看護実践能力の向上に関するポジティブフィードバックが有効であることが示唆された。 共同発表者　市川絢子，井上直子，灘波浩子，橋本秀実，若林たけ子（一部分析、一部考察担当）

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
33. 新人指導担当看護師の指導の現状―新人看護師への指導の思いと負担感―	―	平成26年11月	第34回日本看護科学学会学術集会	新人指導担当看護師が新人看護師をどのようにとらえ、どのような思いで何に注意して指導し、どのような負担を感じているかについて明らかにすることを目的に、総合病院で専属新人看護師指導として勤務している看護師5名を対象に半構成的面接法を用いて調査した。結果、新人看護師のとらえ方からは【個性を尊重する】【消極的で自己主張がない】【応用力の不足】【基礎学力の定着】、指導時の注意からは【根拠に基づいた指導】【寛大な対応】【聴く姿勢と待つ姿勢】【1年後の到達目標を目指す】「自己肯定感の醸成】【子でつに対応した指導】、負担感からは【順調な成長への責任感】【可能性への心配】【自分自身の内的コントロール】【伝わらない感覚】【時間管理ができないことへの忍耐】【任務への気持ちの重荷】【業務量の増加】がそれぞれに抽出された。 共同発表者　加藤梓，若林たけ子，橋本秀実，灘波浩子，井上直子（研究全体の指導、一部分析、一部考察担当）
34. 病棟スタッフの新任看護管理者への意識と期待すること	―	平成26年11月	第34回日本看護科学学会学術集会	病棟看護管理者に任命されて1年未満の看護管理者に対する病棟スタッフの意識を調査し、看護管理者が新任であることを意識したかかわり方を明らかにすることを目的に、新任看護管理者の下に配属されている4総合病院の看護師132名を対象に調査した。分析は記述統計と質的データ分析を用いた。結果は、新任看護管理者就任後、53.7%が雰囲気の変化を意識していた。その中で75.0%が「明るくなった」と回答し、内容は【話しやすく相談しやすくなった】【親しみやすくなった】【仕事への緊張感ができた】【気遣いを感じるようになった】【安心感が持てるようになった】であった。また、人間関係は87.1%、モチベーションでは76.7%がそれぞれ「良くなった」「上がった」と回答しており、内容は【良好なコミュニケーション】【協力関係の成立】【直接看護の時間が取れる】【認めてくれる】であった。利見佳瑠菜，若林たけ子，橋本秀実，灘波浩子，井上直子（研究全体の指導、一部分析、一部考察担当）
35. 2交替制勤務における疲労感と満足感―３交替性勤務との比較―	―	平成26年11月	第34回日本看護科学学会学術集会	勤務形態を3交替制から２交替制に変更した病院の看護師４０名を対象に、異なる勤務形態による疲労感と満足感の違いを明らかにした。結果３交替制は、疲労感の「気分が悪い、めまいがする、目が痛い、やる気が乏しい、いらいらする、肩がこる、腰が痛い、ものがぼやける」で有意に多く、「足がだるい」は有意に少なかった。生活満足感では「やりたいことのできる勤務形態」で２交替制が有意に多く、「余暇時間は充実している」は３交替制が有意に少なかった。勤務形態選択において２交替制を希望したものが有意に多かった。 共同発表者　斎藤沙也加，灘波浩子，井上直子，若林たけ子，橋本秀実（一部分析、一部考察担当）
36. 看護部統括者の一般診療外来看護構想に関する研究	―	平成26年11月	第34回日本看護科学学会学術集会	看護部統括者が考えている一般診療外来の看護に関する問題を明らかにし、今後の展望についての構想を見出すことを目的に、総合病院５施設の看護部統括者５名を対象に半構成的面接法を用いて調査した。結果、外来看護の質に関する問題からは【患者指導のための時間確保の困難】【回避できない待ち時間への対応不足】、展望からは【連携】【人材育成】【待ち時間対策】が抽出された。展望実現のために【組織理念に基づいた看護の展開】【看護の本質を追及していくケア】【１回きりの短時間内で最大の看護力の発揮】【他部門との調整力】を外来看護師に期待していた。 共同発表者　奥出草妙，若林たけ子，灘波浩子，橋本秀実，井上直子（研究全体の指導、一部分析、一部考察担当）

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
37.総合病院に勤務する看護師のWLBに関連する要因の検討	－	平成27年12月	第35回日本看護科学学会学術集会	総合病院に勤務する役職のない49歳以下の病棟看護師200名を対象に無記名自記式質問紙調査票を用いて、WLBと精神的健康度、ライフイベント、基本属性から満足度に焦点を当てたWLBに関連する要因を明らかにした。結果、子どものいない看護師のほうがいる看護師よりWLBと仕事の満足度高く、理想と現実の優先度が一致している看護師のELB度は一致していない看護師より高かった。ピアソンの相関分析では、WLBと精神的健康度に弱い関連を認めた。 共同発表者　加藤清香，難波浩子，若林たけ子，橋本秀美（一部分析、一部考察担当）

教　育　研　究　業　績　書

平成29年3月31日

氏名　梶間　敦子

研究分野	研究内容のキーワード
助産学	地域・いのち・性・生

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例		
助産学科　助産学概論 助産の歴史の授業方法	平成19年～26年	学生と共に奈良県内外在住の助産師（70歳代、80歳代）にインタビューをし、今日の助産師に求められることは何かを考察する授業展開を行った
助産学科　地域母子保健 母親参加型の授業展開	平成19年～26年	子育て中の母親の協力を得て、ディスカッション、ワークショップをし、サービスを受ける側の女性と家族の理解に勤める。助産師としてのモチベーションを高める授業の工夫
助産学科　地域母子保健 国際看護の授業方法	平成19年～26年	在日外国人への助産ケアの配慮について、まず海外での出産経験者を招いて、体験談を聞いたり、お産・子育て用品の紹介等を通して、異文化における出産・育児について理解を深める授業を行った。徐々に在日外国人女性の協力も得ることができた。
助産診断・技術学 外国人研修生との交流授業	平成21年	ケニアからの研修生とともに、現在日本では使用しない教材を使用しての診断技術の指導、異文化における助産に必要な技・態度についてのディスカッションを取り入れた
プリセプターシップを導入した、基礎実習の指導	平成21年～26年	助産基礎実習にプリセプターシップを導入。指導者、学生が共に学びながら、以降の実習でのコミュニケーションの向上にもつながった。
2　作成した教科書，教材		
手作り教材　性教育用教材の作成	平成19年～26年	性教育、マザークラス用教材、乳幼児用衣類、未熟児用衣類等の作成。学生だけでなく、地域の女性の協力を得ながら作成。子どもたちや受講者の方々が興味を示し、手作りのぬくもりから、大切に扱う心を養うことにもつながっている。
助産学実習実習記録用紙の作成	平成21年～26年	従来の記録用紙を評価し改善を加える。効率よい実習ができるよう、授業内容を復習を兼ねた、スタンダードプランを示すようにした。
3　教育上の能力に関する大学等の評価		
4　実務の経験を有する者についての特記事項		
個人情報保護法に基づく「患者等個人情報記載用紙の取扱い方法」マニュアルの作成	平成19年～26年	個人情報保護法について研修会等で学習および情報収集、委員会で作成したガイダンスをもとに、実習で活用する「患者等個人情報記載用紙の取扱い方法」マニュアルを作成、使用。現在も活用している。

実習中における学生の針刺し・血液暴露事故対処規定の素案作成	平成19年～26年	学生が実習中に針刺し事故および血液による暴露事故に遭遇した場合の対処法について、実習病院、校医に相談しマニュアルの素案作成、危機管理検討会で検討し、活用している。
5　その他		

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1　資格，免許		
1)准看護師	昭和45年4月1日	第2025号（奈良県）
2)看護師	昭和51年5月19日	第296880号
3)助産師	昭和52年5月16日	第74567号
4)受胎調節実地指導員（大阪府認定）	昭和51年3月10日	第885号
5)保育音楽検定2級	昭和48年9月26日	音検証10696号
6)保育技能検定2級	昭和50年3月18日	保検証302345号
4　その他		

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
（著書）				
産む・育てる・伝える	共著	2009.1	風響社	出産をとりまく社会の変化
出産の民俗学・文化人類学	共著	2014.5	勉誠出版	助産師として40年の雑感
（学術論文）				
助産師の役割・責務に対する認識度の把握～働く女性が求める支援～	共著	2007.7	第22回 奈良県母性衛生学会	ケアを受ける、女性とその家族が、助産師な役割・責務に認識を持っているかの調査
先輩助産師から受け継ぐ、助産師の技・心～T市における支援～	共著	2008.7	第23回 奈良県母性衛生学会	戦後から、現在も活躍中の助産師からの聞き取りを通しての学び
看護学生の清潔に対する意識調査,第二報	共著	2008.11	平成20年度 奈良県看護研究学会	看護教育は、若者の清潔感に影響を与えているか
分娩介助技術教育のプロセスの検討	共著	2009.3	第23回 日本助産学会（東京）	助産学科開設後3年間の分娩介助教育のプロセスについて考察、報告
妻の妊娠・出産を経験した父親の思い －意識変化の要因－	共著	2009.5	第65回 日本助産師学会（奈良）	妻の妊娠・出産時の夫の姿勢が、父性にどの様な影響を与えているかの調査
先輩助産師と学ぶフリースタイル分娩	共著	2009.7	第24回 奈良県母性衛生学会（奈良）	先輩助産師と助産学生が共に学ぶことでの効果
助産基礎実習におけるプリセプターシップ導入の効果第1報	共著	2010.3	第24回日本助産学会（つくば）	実習指導にプリセプターシップを導入しての、学生・指導者の学び

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
出生後の父性意識形成における助産師のかかわり　　－父親自身のニーズの把握－	共著	2010.7.1	第25回　奈良県母性衛生学会　（奈良）	助産師のかかわりが、父性意識向上に、どのように影響するか
在日外国人母子への出産前後のサポート体制に関する一考察　　-N県内外国人市民にむけての	単著	2011.1	吉備国際大学大学院連合国際協力研究科　修士論文	在日外国人14名（12か国）の女性より聞き取り調査をし、支援における課題の明確化
里帰り分娩を経験した母親の育児不安について－産後１ヶ月健診後－	共著	2011.7	第26回 奈良県母性衛生会　（奈良）	里帰りすることも、産後の生活にもたらす問題が多い。
ケニア共和国母子保健の現状報告第一報　　-マタニティセンターを視察して-	共著	2012.5.1	第26回 日本助産学会学術集会　（札幌）	マタニティーセンターと、村での生活を視察し、ケニアの母子保健の現状把握
ケニア共和国母子保健の現状報告第二報　　-出産準備教育のプレゼンテーションを実施して-	共著	2012.5.1	第26回 日本助産学会学術集会（札幌）	ケニアの医療スタッフへ、出産準備教育の紹介
在日外国人母子への出産前後のサポート体制に関する一考察　　-A県での聞き取り調査より-	単著	2012.7.14	第27回 奈良県母性衛生会　（奈良）	在日外国人の出産・育児の困難さとサポートの重要性
国際助産を身近に学ぶ授業の工夫　　－海外で出産した日本人の体験談から学ぶ-	単著	2013.5.2	第27回 日本助産学会学術集会　（石川）	国際看護を、身近かなことと捕える授業の工夫を紹介
助産師が行う性教育のあり方　　～思春期におけるピア	共著	2014.7	第29回 奈良県母性衛生学会　（奈良）	ピアエデュケーション有効性について検討
出生前診断を受検する妊婦と家族へのケア　　－文献検索による研究－	共著	2014.7	第29回 奈良県母性衛生学会　（奈良）	出生前診断を受ける妊婦と家族の意思決定について文献レビュー
外国人の日本での出産における問題点とその関わり	共著	2014.7	第29回 奈良県母性衛生学会　（奈良）	日本で出産する外国人女性の不安や問題点を明確にし、今後の関わりに活かす
奈良県助産師活動の90年（中間報告）	共著	2015.7	第30回 奈良県母性衛生学会　（奈良）	助産師会90年の歴史を聞き取り調査、先輩助産師の心と技を次代に伝えたい
（その他）				

教　育　研　究　業　績　書

平成29年3月31日

氏名　　嶋田　理博

研究分野	研究内容のキーワード
天文学、科学教育	光学赤外線天文学、恒星物理学、自然科学教育（理科、地学、情報）

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例		
1）		
2　作成した教科書，教材		
1）		
3　教育上の能力に関する大学等の評価		
1）		
4　実務の経験を有する者についての特記事項		
1）		
5　その他		
1）王寺町りーべるカレッジ「さよなら冥王星、ようこそエリス～天文学の進歩と広がる太陽系～」講演	平成19年9月29日	主催：王寺町、共催：奈良産業大学 2006年に国際天文連合が、冥王星を「準惑星」と定義したのを受け、18世紀末の天王星の発見から現在に至るまでの人類の太陽系観の変遷を振り返った。観測技術の進歩が太陽系を拡大してきたこと、地球から遠く離れた太陽系外縁の天体を知ることが人類にどのように関わってくるか、という観点から現在の太陽系天文学を解説した。
2）少年宇宙教室「太陽をさぐる」講師	平成20年8月23日	独立行政法人 科学技術振興機構 地域科学技術理解増進活動推進事業 平成20年度 地域活動支援企画No.20183 後援：三郷町教育委員会 地域の小学生とその保護者を対象とした科学教室を開催した。過去の太陽黒点数の変化から、太陽黒点が11年周期で変化していることを紹介し、現在、そして参加者の誕生年には太陽がどのような状態にあったかを考察してもらった。また、過去の太陽表面のスケッチや撮像写真を公開データベースから取得し、参加者や家族の生まれた頃の太陽がどのような状況であったかを印刷した簡単な冊子を制作してもらった。
3）奈良県公共図書館・大学図書館 横断検索システムの制作と管理・運営	平成20年9月 ～現在	本学情報学部 中尾准教授（当時）とともに、ゼミ学生を指導し、奈良県内の公共図書館・大学図書館を串刺しにして検索するシステムを開発・公開した。当時、公共図書館だけの横断検索や大学図書館だけの横断検索は例があったが、両方を横断する検索はほとんど例がなく、先駆的であった。また、GoogleMapsと連携し、図書館の所在が地図上に示されるのも特徴である。 http://www.nara-su.ac.jp/~rihaku/library/search.html

４）少年宇宙教室「星の光のふしぎ」講師	平成20年10月18日	独立行政法人 科学技術振興機構 地域科学技術理解増進活動推進事業 平成20年度 地域活動支援企画 No.20183 後援：三郷町教育委員会 　地域の小学生とその保護者を対象とした科学教室を開催した。レプリカグレーティングと紙箱を使い、簡易分光器の製作を指導した。製作した分光器を通して、身近にある様々な光源を観察し、光源によってスペクトルが違うこと、太陽（青空）のスペクトルには吸収線が見えることに気づいてもらい、分光観測によって、対象の物理状態を知ることが出来ることを解説した。
５）教職員のための公開講座2008「パーソナルコンピュータの製作」講師	平成20年12月25日	主催：奈良産業大学 後援：大阪府教育委員会、奈良県教育委員会 　幼稚園、小・中・高等学校、支援学校の教職員研修のための公開講座を開催した。市販のパーツを組み合わせて、コンピュータを製作するとともに、各パーツの働き、コンピュータの動作原理を解説した。組み立てたパソコンにはLinuxをインストールし、ネットワーク接続の設定や、各種ユーティリティーソフトの使い方を解説し、ウェブサーバソフトをセットアップするまでを実習した。
６）奈良県高等学校体育連盟テニス専門部ウェブサイトの制作と管理・運用	平成20年12月 ～現在	平成21年に奈良県で高校総体（「近畿まほろば総体」、テニス競技開催地は奈良県）が開催されるにあたり、奈良県高体連テニス部から、テニス競技のウェブサイトを開設したいとの要請を受けた。ゼミ学生を指導し、サーバレンタル契約やドメイン名取得から始め、ウェブサイトをゼロから構築した。現在も更新業務を行い、維持・管理中である。 http://hsaf.nara-tennis.org/
７）教職員のための公開講座2009「パーソナルコンピュータの製作」講師	平成21年8月5日	主催：奈良産業大学 後援：大阪府教育委員会、奈良県教育委員会 　幼稚園、小・中・高等学校、支援学校の教職員研修のための公開講座を開催した。市販のパーツを組み合わせて、コンピュータを製作するとともに、各パーツの働き、コンピュータの動作原理を解説した。組み立てたパソコンにはLinuxをインストールし、ネットワーク接続の設定や、各種ユーティリティーソフトの使い方を解説し、ウェブサーバソフトをセットアップするまでを実習した。
８）少年宇宙教室「手作り望遠鏡で観測する木星とその衛星」講師	平成21年10月24日	独立行政法人 科学技術振興機構 地域の科学舎推進事業 平成21年度 地域活動支援企画No.21120 世界天文年2009公認イベント No. 2900601 後援：三郷町教育委員会 　地域の小学生（主に低学年）とその保護者を対象とした科学教室を開催した。「世界天文年2009」の公認イベントの1つとして、400年前にガリレオ・ガリレイが天体観測に用いたのと同口径の口径4cmの望遠鏡の製作を指導した。あいにく曇天だったため、天体は観測できず、ポインティング、ピント合わせなど望遠鏡の操作法を練習した。あわせて、ガリレオが発見した木星の４大衛星の運行について、模型を用いて解説した。
９）少年宇宙教室「手作り望遠鏡で観測する夜空の星々」講師	平成21年11月28日	独立行政法人 科学技術振興機構 地域の科学舎推進事業 平成21年度 地域活動支援企画No.21120 世界天文年2009公認イベント No. 2900602 後援：三郷町教育委員会 　「世界天文年2009」の公認イベントの1つとして、10月に開催した「少年宇宙教室」に引き続き、参加者が製作した望遠鏡を用いて、月、木星とその衛星の観測を行った。あわせて、望遠鏡の結像の仕組みを数十cmサイズのフレネルレンズを使った模型を使って解説した。また、星座早見盤も製作した。
１０）教職員のための公開講座2009「パーソナルコンピュータの製作」講師	平成21年12月25日	主催：奈良産業大学 後援：大阪府教育委員会、奈良県教育委員会 　幼稚園、小・中・高等学校、支援学校の教職員研修のための公開講座を開催した。市販のパーツを組み合わせて、コンピュータを製作するとともに、各パーツの働き、コンピュータの動作原理を解説した。組み立てたパソコンにはLinuxをインストールし、ネットワーク接続の設定や、各種ユーティリティーソフトの使い方を解説し、ウェブサーバソフトをセットアップするまでを実習した。

１１）教職員のための公開講座2010「パーソナルコンピュータの製作」講師	平成22年8月4日	主催：奈良産業大学 後援：大阪府教育委員会、奈良県教育委員会 　幼稚園、小・中・高等学校、支援学校の教職員研修のための公開講座を開催した。市販のパーツを組み合わせて、コンピュータを製作するとともに、各パーツの働き、コンピュータの動作原理を解説した。組み立てたパソコンにはLinuxをインストールし、ネットワーク接続の設定や、各種ユーティリティーソフトの使い方を解説し、ウェブサーバソフトをセットアップするまでを実習した。
１２）少年宇宙教室「探査機『あかつき』でさぐる宇宙」講師	平成22年8月21日	主催：奈良産業大学、後援：三郷町教育委員会 　地域の小学生（主に低学年）とその保護者を対象とした科学教室を開催した。金星探査機「あかつき」の打ち上げに関連し、地球とは全く異なる金星の物理状態・気象状態、そして金星探査機「あかつき」のミッションと期待される観測成果について紹介した。また、金星がなぜ満ち欠けして見えるかを理解するために、太陽・地球・金星とそれらの位置関係を再現する模型の製作を指導し、地球の位置から見た金星が満ち欠けし、大きさも変化することを解説した。
１３）教職員のための公開講座2010「パーソナルコンピュータの製作」講師	平成22年12月27日	主催：奈良産業大学 後援：大阪府教育委員会、奈良県教育委員会 　幼稚園、小・中・高等学校、支援学校の教職員研修のための公開講座を開催した。市販のパーツを組み合わせて、コンピュータを製作するとともに、各パーツの働き、コンピュータの動作原理を解説した。組み立てたパソコンにはLinuxをインストールし、ネットワーク接続の設定や、各種ユーティリティーソフトの使い方を解説し、ウェブサーバソフトをセットアップするまでを実習した。
１４）奈良学園登美ヶ丘小中高　天体観望会　講師、講演「星の一生と星雲・星団」	平成23年3月12日	主催：奈良学園登美ヶ丘小中高 　奈良市、生駒市、木津川市、精華町在住の小学生と保護者対象の公開講座において、天体観望会に先立って講演を行った。当日参加者が望遠鏡で観望する星雲・星団は星の生死と関係があり、それらを観測することによって星が誕生してから最期を迎えるまでの物理が分かることを紹介した。
１５）少年宇宙教室「太陽を回る星々」全３回 実施主担当者	平成23年8月7日 平成23年8月20日 平成23年10月16日	独立行政法人 科学技術振興機構 科学コミュニケーション連携推進事業 平成23年度　機関活動支援 企画No.2300217 後援：三郷町教育委員会 　地域の小学生とその保護者を対象とした科学教室を開催した。「太陽を回る星々」をテーマに、 ・太陽系の８惑星 ・海王星以遠の小天体 ・太陽系外の惑星 のそれぞれを実験や体験を通じて学ぶ全３回の科学教室を実施責任者として企画・実施した。
１６）少年宇宙教室「300年ぶりの天文ショー 金環日食を見よう」講師	平成24年5月19日	主催：奈良産業大学 後援：三郷町教育委員会 　地域の小学生とその保護者を対象とした科学教室を開催した。奈良県下では282年ぶりに見られる平成24年5月21日の金環日食について、日食の起こる原理や観測方法を解説し、日食観測用のサングラスを製作した。あわせて、近年活発になりつつある太陽活動のダイナミズムを、太陽観測衛星「ひので」や「SDO」の画像を交えて紹介した。当日の活動は奈良新聞5月20日版にて取り上げられた。
１７）王寺町りーべるカレッジ「宇宙の誕生と加速膨張」講演	平成24年9月1日	主催：王寺町、共催：奈良産業大学 　人類が歴史上どのように星や銀河までの距離を測り、宇宙の大きさを測ってきたのか、について紹介し、宇宙膨張が発見された経緯や当時の宇宙観への影響について解説した。また、2011年にノーベル物理学賞を受賞した宇宙の加速膨張の発見とその意義について論じた。

１８）王寺町りーべるカレッジ「もう一つの地球を探す」講演	平成24年9月15日	主催：王寺町、共催：奈良産業大学 　1995年に初めて発見されて以降、現在、700個以上の太陽系外惑星が発見されている。これら太陽系外惑星を発見する観測手段を解説するとともに、見つかった太陽系外惑星の特徴や、地球に似た惑星が存在する可能性について論じた。
１９）教職員のための公開講座2010「プレゼンテーションツールPrezi講座」講師	平成24年12月25日	主催：奈良産業大学、後援：奈良県教育委員会 　PowerPointのような紙芝居的なプレゼンではなく、キャンバス上に二次元的に配置された素材の間を移動・ズーミングしてプレゼンするツールとして脚光を浴びているPreziの講習を行った。Preziのアカウント取得方法を始め、基本的な活用から、グループワークへの応用までを実習を交えて解説した。
２０）少年宇宙教室「宇宙を調べるモノづくり」実施主担当者および講師	平成25年8月10日 平成25年8月31日 平成25年10月12日	主催：奈良産業大学 情報学部 後援：三郷町教育委員会 助成：独立行政法人 科学技術振興機構（平成25年度 科学技術コミュニケーション推進事業：企画No.250068） 　地域の小学生とその保護者を対象とした科学教室を開催した。「宇宙を調べるモノづくり」をテーマに、 　・惑星探査車 　・ロケット 　・天体望遠鏡 のそれぞれを実験や体験を通じて学ぶ全３回の科学教室を実施責任者として企画・実施した。また第３回の望遠鏡をテーマに取り上げた回では、講師を務めた。
２１）少年宇宙教室「レンズのふしぎと望遠鏡」	平成26年11月29日	主催：奈良学園大学 社会連携センター 地域の児童の宇宙や科学への関心を高めるため、工作や観測などの体験を通じて楽しく学べる科学教室を開催した。 レンズが結ぶ２種類の像、実像と虚像の仕組みと、その２つを組み合わせた望遠鏡の原理について解説し。参加者に、市販の紙筒とプラスチックレンズを組み合わせた望遠鏡を製作してもらい、ピント合わせ等の操作練習した後、屋外で月のクレーターを観測した。
２２）「けいはんな科学フェスティバル2015」出展～けいはんな子ども天文クラブ～星の光のひみつ～	平成27年2月7日	主催：けいはんな科学コミュニケーション推進ネットワーク 共催：(公財)関西文化学術研究都市推進機構、京都大学(COC事業)、奈良教育大学 「けいはんな科学フェスティバル2015」の中で、１ブース展示を担当した。 レプリカグレーティングを用いた簡易分光器を展示し、白熱電球や蛍光灯、ナトリウムランプ、LEDなど様々な光源によるスペクトルの違いを、参加者に観察してもらった。目に見える光は，様々な色の成分が合成されて出来ていること、発光する物質によってそのスペクトルのパターンが異なることを解説した。さらに、望遠鏡で撮影した恒星や銀河のスペクトルの写真を展示し，遠く離れた天体でも、スペクトルを観測することにより，天体に含まれている元素の量や，温度や密度などの物理状態、運動状態を知ることが出来ることを解説した。
２３）けいはんな科学体験プログラム「けいはんな子ども天文クラブ～星の光のひみつ～」実施主担当者および講師	平成27年10月31日 平成27年11月7日 平成27年12月5日 平成27年12月19日	主催：けいはんな科学コミュニケーション推進ネットワーク 　地域の小学生向けの天文教室を開催し、分光観測をテーマとして取り上げた。分光観測は、太陽をはじめ、天体に含まれている元素の量や、物理状態、運動状態を知ることが出来る手段である。参加者は、分光観測に必要な光の性質や分光器の原理について学び、レプリカグレーティングを用いた簡易分光器を製作し、太陽の分光観測を行った。観測結果から太陽の元素組成を調べ、天文学者がどのように天体からの情報を引き出しているのかを、体験を通じて学習した。光を分光することによって、手に取れない遠くの天体でもその物理状態を知ることが出来ること、そして、その情報を活用して宇宙の成り立ちについて知ることが出来ることを、工作と実験・観察を通して体験した。

２４）「けいはんな科学フェスティバル2016」出展	平成28年2月6日	主催：けいはんな科学コミュニケーション推進ネットワーク 共催：精華町、奈良教育大学、(公財)関西文化学術研究都市推進機構 「けいはんな科学フェスティバル2016」の中で、１ブース展示を担当した。 レプリカグレーティングを用いた簡易分光器を展示し、白熱電球や蛍光灯、LEDなど家庭にある光源、水素、ヘリウム、ネオン、水銀の各放電管のスペクトルの違いを、参加者に観察してもらった。目に見える光は，様々な色の成分が合成されて出来ていること、発光する物質によってそのスペクトルのパターンが異なること、水素やヘリウムのスペクトルが天文学の研究とどのような関係にあるかを解説した。
２５）けいはんな科学体験プログラム「けいはんな子ども天文クラブ～手作り望遠鏡で星を見よう～」実施主担当者および講師	平成28年9月10日 平成28年10月8日 平成28年11月5日 平成28年12月10日	主催：けいはんな科学コミュニケーション推進ネットワーク 地域の小学生とその保護者を対象とした天文教室を開催した。天体望遠鏡の組立工作を指導し、その望遠鏡を用いて、月、土星から、明るい星雲・星団までを対象とした観測指導を行った。
２６）けいはんなサイエンスプログラム in KICK「太陽の光を調べよう」講師	平成29年1月8日	主催：けいはんな科学コミュニケーション推進ネットワーク グレーティングシートと工作用紙を使った簡易分光器の製作を指導した。また、それを用いた、白熱電球や蛍光灯、LEDなど家庭にある光源、水素やヘリウムなど各種元素の放電管スペクトルの観察を行った。発光する物質によってスペクトルのパターンが異なることを学び、分光が天文学の研究でどのように使われているかを解説した。
２７）けいはんな科学フェスティバル2017「けいはんな子ども天文クラブ2016年活動報告」「太陽・月を観測しよう」出展	平成29年2月4日	主催：けいはんな科学コミュニケーション推進ネットワーク 共催：精華町、（公財）関西文化学術研究都市推進機構、奈良教育大学、京都府立大学 「けいはんな科学フェスティバル2017」の中で、「けいはんな子ども天文クラブ2016年活動報告」「太陽・月を観測しよう」の２ブースの展示・体験コーナーを担当した。前者では上記２５）の活動成果を報告した。後者では、Ｈαナローバンドフィルタを備えた太陽観測望遠鏡を用いた太陽表面プロミネンス、プラージュの観測、通常の天体望遠鏡を用いた月表面のクレーターの観測を行なった。

職務上の実績に関する事項

事項	年月日	概要
１　資格，免許		
１）修士（理学）	平成3年3月	京都大学 第3900号 論文題目「Ｂ型主系列星の線輻射圧と質量放出現象」
２　特許等		
１）		
３　実務の経験を有する者についての特記事項		
１）		
４　その他		
１）けいはんな科学コミュニケーション推進ネットワーク　サイエンス・サポーター	平成26年9月10日 ～現在	けいはんな学研都市で実施する科学イベントや科学体験プログラムについて企画・参加・支援している。（宇宙分野担当）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
（著書）				
1）				
（学術論文） 1）The Anisotropy of Cosmic Ray Pursued with Chaos Analysis	共著	平成23年8月	Proceeding of International Cosmic Ray Conference, Beijing, 2011, Vol.1, 70.	エアシャワーサイズ時系列のカオス解析において、カオス性に寄与する宇宙線を選別し、その到来方向の分布を求めた。その結果、Crab, Mrk421, Cyg-Xなど、特定の活動銀河が高エネルギーガンマ線宇宙線源である可能性を示すことができた。 共著：S.Ohara, T.Konishi, A.Mukai, M.Shimada, A.Iyono, H.Matsumoto, I.Yamamoto, N.Takahashi, T.Nakatsuka, K.Okei, S.Tsuji, N.Ochi
2）Searching for cosmic ray nuclei above the KNEE energies through the Gerasimova-Zatsepin effect with the LAAS experiments	共著	平成23年8月	Proceeding of International Cosmic Ray Conference, Beijing, 2011, Vol.1, 170.	Gerasimova-Zatsepin効果による原子核宇宙線の崩壊過程を考慮して、大広域エアシャワーデータを解析し、Knee領域以上の宇宙線について考察した。 共著：A.Iyono, H.Matsumoto, K.Okei, S.Tsuji, S.Ohara, N.Ochi, T.Konishi, N.Takahashi, I.Yamamoto, T.Nakatsuka, A.Mukai, M.Shimada
3）情報学部プロジェクト演習における「フィジカルコンピューティング」教育の実践	単著	平成25年2月	情報学フォーラム紀要（奈良産業大学），8，131-140.	2009年度から2012年度の４年間、情報学部「ラジコン製作プロジェクト」において、「フィジカルコンピューティング」教育を実践した。教材としてSun SPOTまたはArduinoを主に用い、合計７つのシステムを製作し、各年度の学園祭に出展した。自らハードウェアとソフトウェアの設計を行い、部品の選定・購入から始めてシステムを完成させる体験は、学生にとって有意義な学修であったと考える。
4）太陽系外惑星発見と情報学	単著	平成25年2月	情報学フォーラム紀要（奈良産業大学），8，159-164.	1995年に初めて発見されて以降、700個以上発見されている太陽系外の惑星について、それらを発見する観測手段や、見つかった惑星の特徴、地球に似た星が存在する可能性について論じた。これらの成果には、ＣＣＤなどの受光素子の技術革新による性能向上や、コンピュータによる自動観測、画像の自動解析など、情報技術の進展による寄与が大きい。
5）奈良県 公共図書館・大学図書館横断検索システムの構築	共著	平成25年3月	奈良産業大学紀要，29，69-75.	平成20年度、奈良県図書館協会大学・専門図書館部会の依頼を受け、奈良県内の公共図書館および大学・研究所図書館の蔵書を検索できるシステムを開発し、インターネット上に公開した。従来の検索システムと異なり、地図上で図書館の位置が確認できることと、専門図書館を含めた大学図書館と公共図書館を一括して検索できるのが特徴である。 共著：嶋田理博、中尾泰士
6）地域における地学教育の実践と課題	共著	平成25年3月	奈良産業大学紀要，29，185-191.	現在、地域に根差した理科教育として、サイエンスカフェや実験教室が各地で実施されている。本学でも地元住民向けの公開講座や小学生を対象とした科学教室を実施し、学外においても積極的に理科教育の振興に取り組んできた。こうした取り組みへの参加者は常に一定数を見込むことができるが、その多くはもともと科学に興味・関心を抱いていたリピーターであり、理科に関心をもたない住民の目を向けさせる工夫が必要である。 共著：向井厚志・嶋田理博

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
7）少年宇宙教室　−宇宙を調べるモノづくり−	共著	平成26年9月	奈良学園大学紀要，1，173-179.	平成25年度に奈良産業大学（現・奈良学園大学）情報学部が主催した公開講座「少年宇宙教室　〜宇宙を調べるモノづくり〜」の報告である。宇宙を探査・観測する機器・装置をテーマに、計３回の講座を開催し、参加者数は小学生児童とその保護者を中心に153名を数えた。参加者の感想はおおむね好評で、地域における科学コミュニケーション活動に一定の役割を果たせたと考える。 共著：嶋田理博・向井厚志・中尾泰士
8）グループ方式によるアンケート分析演習の実践と課題	共著	平成27年12月	神戸山手短期大学紀要，58，41-56	2015年度前期に開講された「アンケート演習(1)」はアンケート分析を主目的とした必修科目であった。授業を終えて、本科目の教育方法や成果を検討すると同時に、本科目で採用されたグループ方式によるアンケートの計画・実施・分析・発表の利点と問題点を考察した。 共著：渡辺卓也、飯田一郎、本多佐知子、嶋田理博
（その他）				
「学会発表」				
1）プロジェクト型演習を通じたアプリケーション開発の学習	共同	平成20年12月	平成20年度　情報教育研究集会 （於福岡県北九州市）	共同発表者：嶋田理博、中尾泰士、向井厚志 情報学部のプロジェクト型演習「ITシステム構築プロジェクト」において、平成19年度に行った、ウェブサーバとRDBMSの構築、それらを連携させた掲示板、ストリートビューシステム、教室使用状況表示システムの制作について報告した。
2）小学生を対象とした天文教育活動「少年宇宙教室」の報告	共同	平成21年9月	日本天文学会 2009年秋季年会 （於山口大学）	共同発表者：中尾泰士、嶋田理博、向井厚志 地域の小学生を主たる対象とした地球・宇宙分野の体験型講座「少年宇宙教室 〜ロケット・太陽・スペクトル〜」を企画し、科学技術振興機構の「平成20年度　地域科学技術理解増進活動推進事業　地域活動支援」の支援活動の1つとして採択された。参加した子供達とその保護者に対して行ったアンケートなどをもとに、われわれの活動について報告した。
3）小学生向け体験型天文教室「少年宇宙教室」の報告２：「宇宙を調べる」	共同	平成22年9月	日本天文学会 2010年秋季年会 （於金沢大学）	共同発表者：嶋田理博、向井厚志、中尾泰士 2009 年度には科学技術振興機構の支援を得て開催した体験型講座「少年宇宙教室」について報告した。「宇宙を調べる」をテーマとした全４回の講座は、望遠鏡の製作とそれを使っての月・木星の観測を行い、観測の楽しさや宇宙に対する興味を感じてもらえるなど、参加者の満足度の高いものだったと考える
4）小学生向け科学教室『少年宇宙教室』の活動	共同	平成22年11月	第54回 宇宙科学技術連合講演会 （於静岡県静岡市）	共同発表者：嶋田理博、向井厚志、中尾泰士 2008年度から地域の小学生を対象として開催している科学教室「少年宇宙教室」について報告した。子ども達が楽しみながら学べるよう、講義ではなく、工作や実験などの体験を中心とした内容は、科学や宇宙に関心のある参加者に対してはもちろん、初参加の子供や、関心のなかった保護者に対しても興味を引き出すことに成功していると言える。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
５）The Anisotropy of Cosmic Ray Pursued with Chaos Analysis	共同	平成23年8月	Proceedings of 32nd International Cosmic Ray Conference, Vol.1 ,70-71.（at Beijing, China）	共同発表者：大原荘司、小西健陽、向井厚志、嶋田理博、伊代野淳、松本宏樹、山本勲、高橋信介、中塚隆郎、桶井一秀、辻修平越智信彰 宇宙線時系列データについて、観測粒子密度分布より一次宇宙線エネルギーを算出し、エネルギー時系列データ約５万イベントのカオス解析を行った。エネルギー範囲に対応するカオスの出現頻度の解析から、5.0×10^15～7.5×10^15eVの範囲のエネルギーをもった一次宇宙線が、300イベント連続する時系列データのカオス性の出現にもっとも寄与していることが見出された。
６）看護教育IT化の一考察：教える側教わる側の思いとサービスデザイン	共同	平成27年7月	情報処理学会　第47回ユビキタスコンピューティングシステム・第2回高齢社会デザイン合同研究発表会（於 立命館大学 大阪いばらきキャンパス）	共同発表者：笹嶋宗彦、高岡良行、嶋田理博、吉岡隆之 看護教育における教材の電子化においては、単純に教科書を電子書籍や補助教材で置き換えるのではなく、教える側と教わる側の双方の要望に応える形で教材とサービスをデザインすることが重要である。筆者らは看護知識と技術を教育するためのタブレット型ツールを新設の看護学科に導入し、設立準備期間を含めて約2年間運用してきた。本発表では、その過程で得られた知見を報告した。

教　育　研　究　業　績　書

平成 29年 3月 31日

氏名　田中　和奈

研究分野	研究内容のキーワード
老年看護学	認知症，高齢者，疼痛管理，緩和ケア

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例 1）演習の効果的な活用	平成22年4月1日～ 平成29年5月31日	老年看護学援助論（3年次，前期，必修）の授業として食演習では，食形態および体位による嚥下状態の変化について学生に実際の体験を通して嚥下状態に影響を与える因子の理解をしてもらう内容にしたところ，学生アンケートの結果も学生の満足度が高かった．また，移動援助技術の演習の授業では，学生に看護師役と患者役のロールプレイをしてもらい，麻痺患者の歩行介助および車いす移送の体験をする授業を行った．その結果，具体的に体験することで患者の恐怖感や不安感を体験することができたというフィードバックが演習後の学生のレポートに書かれていた．
2）実習の効果的な活用	平成22年5月1日～ 平成29年2月28日	看護学科の専門科目「老年看護学実習」では，学生・教員・指導者が参加してのカンファレンスを毎日行い，学生が実習中に感じる困難の解決や実習中の課題に目が向けられるように調整を行った．
3）予習レポートによる事前知識の確認	平成22年5月1日～ 平成29年2月28日	看護学科の専門科目「老年看護学実習」では事前学習レポートを実習前に提出をさせ，実習時の学習目標についても記載を行わせた．その結果，学生がどのようなことを実習中に学びたいのかということが事前に把握ができ，学生が自己学習目標が達成できるように指導を行った．また，実習前に予習が不十分な学生に対して事前に指導を行うことで，患者の病態把握に学生が戸惑いを感じないように支援することができた．
4）グループワークの活用	平成25年4月1日～ 平成29年2月28日	老年看護学援助論では，患者事例を授業資料として提示し，学生間でグループワークを行い，発表を行ってもらった．また，「老年看護学実習」では，高齢者入居施設での実習時には，アクティビティケアを各グループで企画を行い，入居者の方を対象にケアの提供を実施できるようにグループメンバー間で協力して行えるように調整を行った．その結果，学生間で意見交換をすることで，一人では思いつくことができないような様々な援助方法を学生が考えることができており，学習効果が上がったと考えられる．
2　作成した教科書，教材 1）老年看護学演習冊子作成	平成22年4月1日～ 平成25年3月31日	中部大学生命健康科学部保健看護学科の「老年看護学演習」で行う移動援助技術，排泄介助（おむつ交換），食事援助技術，看護過程事例演習に関する冊子を作成し，毎年改訂を行った．
2）老年看護学実習の手引き作成	平成22年6月1日～ 現在に至る	中部大学生命健康科学部保健看護学科の専門科目「老年看護学実習」の手引きを作成．毎年内容を検討し，追加事項の確認を行い，追加・修正など改訂を実施した． また，岐阜医療科学大学保健科学部看護学科においても老年看護学実習要項を作成し，毎年改定を行った． 平成27年6月現在，奈良学園大学保健医療学部看護学科の老年看護学実習実習要項の作成を行っている．

事項	年月日	概　　要
3）老年看護学実習記録の作成	平成22年6月1日～現在に至る	中部大学生命健康科学部保健看護学科の実習講師として専門科目「老年看護学実習」の老年看護学実習記録用紙を作成．毎年内容を検討し，追加事項の確認を行い，記録用紙改訂を実施した． 岐阜医療科学大学保健科学部看護学科においても老年看護学実習の記録用紙を作成し，毎年改定を行った． 平成27年4月現在，奈良学園大学保健医療学部看護学科の老年看護学実習記録用紙の作成を行っている．
4）老年看護学演習講義用補助教材	平成22年4月～平成25年3月	中部大学生命健康科学部保健看護学科の専門科目「老年看護学演習」で行う移動援助技術，食事援助技術，看護過程事例演習の講義資料として講義内容の要点が理解できるようにアウトラインを毎回作成し，その資料を授業で配布した．
5）老年臨床看護講義用補助教材	平成25年4月1日～平成27年3月31日	岐阜医療科学大学保健科学部看護学科の講師として専門科目である「老年臨床看護」の授業資料として，講義内容の要点については学生自身が記載できるようにパワーポイントのスライドとは別に配布資料用としてプリントを作成して配布した．
6）演習レポートの作成	平成25年4月1日～平成29年3月31日	専門科目である「老年看護学援助論」では，グループワークとして学生間で話し合い，レポートを作成させているため，グループワークの演習レポート用の患者事例を毎回作成し，学生が患者事例について分析が行えるように配布した．
7）老年看護学概論講義用補助教材	平成25年4月1日～平成27年3月31日	岐阜医療科学大学保健科学部看護学科の講師として専門科目である「老年看護額概論」の授業資料として，講義内容の要点について学生自身が記載できるように配布資料を作成して配布を行った．
8）老年看護学概論講義用補助教材	平成27年4月1日～平成28年3月31日	奈良学園大学保健医療学部の専門科目である「老年看護学概論」の授業資料として，講義内容の要点について学生自身が記載できるように配布資料の作成を行った．
9）統合看護学実習実習要項および実習記録用紙の作成	平成29年1月～3月	「統合看護学実習」の実習要項および実習記録用紙の作成を行った．
3　教育上の能力に関する大学等の評価 1）岐阜医療科学大学	平成25年4月1日～平成27年3月31日	上半期・下半期ともに講師としての職務および個人の到達目標は達成しているとの評価であった．
4　実務の経験を有する者についての特記事項 1）（研修会）在宅地域ケア研究センター訪問看護師向け研修「在宅エンドオブライフケア基本レベル研修会」運営委員	平成20年11月29日	在宅地域ケア研究センター主催の研修会のエンドオブライフケアの実践例に関するグループワークの運営を担当した．
2）（講演会） いのちのアレグリア，埼玉県立大学，越谷市	平成23年3月	日本における在宅死数は欧米などの諸外国と比べて少ない傾向にある．こういった日本の在宅死の現状および今後の課題について，諸外国との比較を行った．また，日本における在宅死の事例紹介や英国のホスピスケアおよび家族支援の現状から死をどのようにとらえ，受け入れるべきかというテーマで埼玉県立大学看護学部の学生を対象に講演を実施した．

事項	年月日	概　　要
３）（研修会） 介護保険施設における看護職の包括的ストレスマネジメント研修会,愛知県立大学長久手キャンパス	平成24年1月	愛知県立大学看護学科老年看護学の百瀬由美子教授が科学研究費の助成を受けて実施した研究の一部として,介護保険施設に勤務する看護職を対象に,看護職のストレスを軽減することを目的に,看護職から学習したいと要望のあった認知症高齢者のための疼痛管理に関する講義を行った.
４）（研修会） Dementia Care in Japan,　英国国立病院Royal Free Hospital医師研修会	平成24年11月	英国国立病院の大学教授および医師対象の研修会講師として招かれ，日本の認知症ケアについての講義を行った．講義内容に関するアンケート結果は，最高評価をつけていた医師が過半数を占めていた.
５）（研修会） 三重県看護職海外看護研修事前研修会，英国における医療と看護，三重県津市吉田山会館	平成28年2月	三重県看護職の英国における海外研修の研修生第1期生に対する事前研修会として，英国の医療と看護に関する講義を行った.
６）（研修会） 三重県看護職海外看護研修事前研修会，英国における医療と看護，三重県津市吉田山会館	平成28年７月	三重県看護職の英国における海外研修の研修生第2期生に対する事前研修会として，英国の医療と看護に関する講義を行った.
５　その他 なし		

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　　要
１　資格，免許		
１）准看護師免許	平成4年3月	准看護師免許　登録番号第14123
２）看護師免許	平成6年6月	看護師免許　登録番号第851090
３）英国看護師免許	平成１８年３月	英国看護師免許　Registered Nurse 登録番号06C4020
２　特許等 なし		
３　実務の経験を有する者についての特記事項		
１）（国内調査研究） 認知症高齢者グループホームにおける看護師による終末期ケアの課題と改善方法の検討	平成20年4月～ 平成21年3月	平成20年度科学研究費補助金若手スタートアップ（研究課題番号：20890211）の助成を受けて，認知症高齢者のためのグループホームにおける終末期ケア提供の課題を明らかとすることを目的とし，看取りを行った経験のあるグループホームに働く介護職員および医療連携により訪問看護を実施した訪問看護師に対して半構造的インタビュー調査を行った.
２）（国内調査研究） 高齢者入居施設における疼痛評価ツール開発	平成22年9月～ 平成23年3月	日本における高齢者を対象にした疼痛評価ツールの開発は現在までにほとんど行われていない現状にある．本研究は，高齢者入居施設に勤務する看護師が使用する，認知機能障害が軽度の高齢者のための疼痛評価ツールの開発を行い，疼痛評価ツール試用による入居者の疼痛管理に関する看護職の認識変化の検討を目的とし疼痛評価ツールの導入調査を中部大学特別研究費Ａ（採択課題番号22ⅡM10A）の助成を受けて実施した.

事項	年月日	概　　要
３）（国内調査研究） 高齢者入居施設における疼痛教育プログラムの開発	平成26年4月～ 現在に至る	平成26年度より科学研究費基盤Ｃ研究（課題番号：26463475）の助成を受けて，高齢者入居施設に勤務する看護職を対象とした疼痛教育プログラムの開発を研究代表者として行っている．
４）（国内調査研究） 介護老人保健施設退所者の在宅療養支援に関する調査事業	平成26年4月～ 平成27年3月	公益社団法人全国老人保健施設協会が実施した調査において，調査研究事業班の班員として疼痛管理に関する調査項目の主担当者として調査活動を行った．
５）（国内調査研究） 認知症の人と家族とともに創る認知症ケア対応力向上教育プログラムの開発	平成27年4月～ 現在に至る	百瀬由美子教授が平成27年度より科学研究費基盤B研究（課題番号：15H05097）の助成を受けて実施する介護老人保健施設における調査について，研究分担者として担当している．
６）（海外調査研究） 軽度認知症高齢者のための疼痛評価ツールの海外における汎用性の検討	平成23年度～ 平成25年度	平成23年度より科学研究費基盤Ｃ研究（課題番号：23593479）の助成を受けて，研究代表者として軽度認知症高齢者のために開発した疼痛評価ツールの海外における汎用性検討調査を英国，マレーシアの2カ国において行った．共同研究者　百瀬由美子，研究協力者　溝尾朗
７）平成20年神奈川県大井松田町地域福祉計画・松田町社協活動計画策定部会策定部員	平成20年5月～ 平成21年3月	介護保険策定部会の部員として，大井松田町の介護福祉政策について老年看護の専門家として助言を行った．
８）岐阜社会保険病院院内看護研究外部講師	平成25年4月～平成26年3月	岐阜社会保険病院（現在の可児とうのう病院）の看護職を対象に，院内看護研究の研究指導を行った．
９）東海記念病院院内看護研究外部講師	平成25年4月～ 平成28年3月	愛知県春日井市にある東海記念病院の看護職を対象とした事例研究の外部講師として指導を行っている．
１０）三重県国際交流財団海外私費留学奨学生選考委員	平成25年4月～ 平成27年3月	三重県津市にある三重県国際交流財団が毎年行っている海外私費留学奨学生の選考委員として奨学生の選考業務を行った．
１１）公益社会法人全国老人保健施設協会　介護老人保健施設退所者の在宅療養支援に関する調査研究事業班班員	平成26年4月～ 平成27年3月	平成26年度に実施した介護老人保健施設退所者の在宅療養支援に関する調査の班員として疼痛管理に関する調査項目の作成を担当した．
１２）三重県健康福祉部医療対策局　看護分野における国際連携推進ワーキンググループ委員	平成27年2月～ 現在に至る	三重県が実施する看護分野における国際連携推進のワーキンググループ委員として，英国における連携候補先大学との連携内容の検討，連携協定に向けた調整，研修生を対象とした事前研修会講師を担当している．
１３）高の原中央病院院内看護研究外部講師	平成28年4月～ 現在に至る	高の原中央病院の看護職を対象とした看護研究の外部講師として指導を行っている．

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　要
（著書） 1 在宅エンド・オブ・ライフケア（終末期ケア）	共著	平成20年12月	株式会社イニシア A4判全189頁	人生の最期をどのように迎えるかということは個々人・家族にとって,また国としても関心が高まり,近年,終末期にある患者が,「より良い死」を迎えるためにどのような援助ができるかについての研究が医療・福祉・介護の分野で行われるようになってきた. 本人担当部分は，第1章と第10章を担当した. 第1章　エンド・オブ・ライフケアの理念と国内外の動向 　第１章では，米国，カナダ，オーストラリア，日本の４カ国における終末期ケアの歴史と動向について紹介し，今後の終末期ケアの質を高めるための課題について考察した.(pp.6-10) 　第10章　施設・グループホームにおけるエンド・オブ・ライフケア 　日本における居宅サービス事業所数の移り変わり，看取りの場所の推移について述べ，在宅で看取りを行うことを中心に考えた専門家と利用者家族にとってのケアプログラムであるエンド・オブ・ライフケアプログラムの使用方法について事例を交えて紹介している.エンド・オブ・ライフ・ケアプログラムはプログラムの手順に沿ってケアを行えば,サービス評価を確認しながら一定水準のケアの質向上が図られることを目的として作成されており，グループホームでのエンド・オブ・ライフケアの利用例と在宅・施設・グループホームにおけるペインマネジメントの留意点を考察した.(pp.129-136) 著者名　島内節，薬袋淳子，野村美香，中谷久恵，和田洋子，土地邦彦，辻彼南雄，田中和奈他6名
2 多職種で支える在宅高齢者終末期ケア	共著	平成25年12月	株式会社三恵社 B5判　全52頁	平成24～26年度厚生労働科学研究費補助金長寿科学総合研究事業の補助金を受けて行われた「高齢者在宅医療に関する多職種協働の阻害要因を克服する教育システムの構築に関する研究」の教育テキストの作成を行った. 本人担当部分は第13章と第19章. 13. 苦痛のアセスメントと緩和ケア，pp.20-21. 19.グリーフケア，pp.30-31. 著者名　百瀬由美子，藤野あゆみ，天木伸子，平木尚美，田中和奈他3名

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
3. これからの国際看護学 -国境を越えた看護実践のために-	共著	平成26年11月	株式会社ピラールプレス B5判　全163頁	現代の社会では，国際的な規模における交流が盛んになってきている．本書では，開発途上国の現状や宣せ印刻における看護の現状についてなどの解説を行っている． 本人担当部分は，第1章，第1節，第2節．第2章第1節，第2節．第4章第1節，第2節．第6章第1節，第2節．第8章第1節，第2節，第3節．第9章第1節．第10章第1節． 第1章　国際看護の概念と国際保健 第1章では，国際看護の概念および国際保健の歴史的背景について紹介し，国際看護の臨床場面で重要となる異文化看護の理解について考察した．pp.10-21. 第2章先進国・経済先進国における看護の現状と課題　pp.30-36. 第4章リプロダクティブヘルスと母子保健．pp.62-77. 第6章日本における外国人看護師の現状と課題．pp.100-105. 第8章海外で看護師になる．pp.116-122.pp.125-126.p.128. 第9章海外で看護師として働く．pp.130-133 第10章海外の大学院で学ぶ.pp.150-151. 著者名　守本とも子，田中和奈他6名
（学術論文） 1. Social Support for the Elderly Living Independently in Japan and the role of Japanese Councils of Social Welfare. （日本の独居高齢者に対する社会福祉サービスと社会福祉協議会の役割） （査読付）	単著	平成20年11月	イギリス国立ポーツマス大学老人学修士課程修士論文 （A4判　全44頁）	（目的）日本の社会福祉協議会は独居高齢者の社会福祉サービスの提供に重要な役割を担っている.しかし，独居高齢者のための福祉サービスに関する研究は現在までにあまり行われていない.そのため,社会福祉協議会が提供している独居高齢者が利用可能な福祉サービスについて明らかにすることを本研究の目的とした.（方法）全国の社会福祉協議会から無作為抽出した60ヶ所の社会福祉協議会を対象とし，社会福祉協議会が提供している独居高齢者が利用可能な福祉サービスについて郵送による質問紙調査を行った.（結果）32ヶ所の社会福祉協議会から回答が得られた.社会福祉協議会が提供している独居高齢者のための社会福祉サービスには地域差があり，利用できるサービスの内容や利用料金，利用できる頻度についても地域格差があることが明らかとなった. （課題）すべての独居高齢者が包括的な福祉サービスを受けられるようなシステム作りの検討が必要である.

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
2. 高齢者入居施設における高齢者の疼痛評価ツール - 文献レビューから考える高齢者の疼痛評価 - （査読付）	共著	平成22年3月	日本看護福祉学会誌 15（2），pp.137-147.	（目的）高齢者の生活の質改善のためには疼痛マネジメントは非常に重要である.しかし，高齢者の疼痛に関する研究は日本においては現在までにほとんど行われていない.欧米においては，様々な疼痛評価ツールが開発されており，高齢者の疼痛に関する研究も盛んに行われている.そのため，欧米における高齢者の疼痛マネジメントの実態を明らかにすることを本研究の目的とした. （方法），欧米において開発された，高齢者入居施設で使用可能な疼痛評価ツールの種類および欧米における疼痛マネジメントの現状把握を文献検討により行った.（結果）欧米では認知症高齢者に使用可能な疼痛評価ツールが数十種類存在している.しかし，臨床での有用性が高いと評価されている疼痛評価ツールの場合でも，疼痛評価項目の数が多すぎるため疼痛評価に時間がかかるなど，看護職の配置が少ない高齢者入居施設において使用するには課題は多いと考えられる.高齢者の疼痛評価を行う際には，個人的特性に見合った評価ツールを選択した上で，疼痛評価を行うことが重要であると考えられた.（考察）表情やしぐさなどを項目に加えた疼痛評価ツールを開発し，疼痛評価ツールの使用方法や疼痛マネジメントに関する事前研修を行うことが高齢者の疼痛マネジメントの質改善のためには重要である. 本人担当部分：文献検索および内容の検討を行い，筆頭著者として論文の執筆を行った. 共著者：田中和奈，　百瀬由美子
3. 介護老人保健施設入所者の疼痛に対する看護職の評価法の実態調査 （査読付）	共著	平成24年1月	日本老年医学会雑誌,49(1),pp.99-106.	（目的）全国の介護老人保健施設に勤務する看護職による入所者に対しての疼痛評価の実施状況,疼痛評価に関する看護職の認識,疼痛に関する研修会についての実態を把握し課題を検討することを本研究の目的とした. （方法）全国の介護老人保健施設から無作為に抽出した500施設のうち,承諾の得られた60施設487名の看護職を対象に質問紙調査を実施した.質問項目は，実施頻度,疼痛評価ツール使用の有無,ツールの種類などであり,看護職の疼痛評価に関する認識については,疼痛評価に対する自信,困難感,さらに研修会について受講状況と受講の必要性についてなどを把握した.（結果）有効回答数は443名で,疼痛評価の実施頻度は,「行っていない」が最も多く196名（44.2%),「痛みの訴えがあったときのみ」183名（41.3%),「一日一回」20名（4.5%),「一日二回」14名（3.2%)という結果であった.また,74.7%の看護職は入所者の疼痛評価を適切に行う自信がないと回答しており,高齢者の疼痛に関する研修会受講者は44名（9.9%）と少数であった.（結論）疼痛評価について,実施していないという回答と訴えがあった時のみ実施の回答合計は8割以上に及んでおり,さらに疼痛評価を適切に行う自信のない看護職が7割以上いることが明らかとなった.認知機能低下などで自ら疼痛を訴えられない入所者が増加傾向にある状況において,看護職が自信を持って入所者の疼痛評価が行えるような働きかけが必要であることが示唆された. 本人担当部分：研究代表者として質問紙の作成およびデータ収集，データ分析，結果の考察などを行い，論文の取りまとめおよび執筆を行った. 共著者：田中和奈，百瀬由美子

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
4. 介護老人保健施設における疼痛評価ツール開発 （査読付）	単著	平成24年3月	愛知県立大学大学院看護学研究科博士学位論文（A4判全55頁）	（目的）日本の介護老人保健施設で生活する軽度認知症高齢者の疼痛の有無を看護職が観察することによって確認可能な疼痛評価ツールの開発および妥当性の検討を行うことを目的とした.（方法）本研究への協力承諾が得られた3箇所の介護老人保健施設に入所する鎮痛剤の使用や非薬学的療法の疼痛ケアを受けている,口頭で痛みの訴えが行える65歳以上のHDS-Rの評価が10点以上の高齢者12名に対して,疼痛評価ツールの試用を1週間から1ヶ月間行った. （結果）介護老人保健施設において疼痛評価項目チェックリストの試用を1週間から1ヶ月間,12名の入所者に対して実施した.調査を行った結果,入所者の訴えと看護職の観察項目による評価の関連では,入所者の疼痛の訴えと不穏状態,表情,発声反応,身体的反応,行動・動作の変化に関する看護職が評価した項目との間に関連があることが示唆された.入所者に対して2名の看護職が同時に行った疼痛評価について,疼痛評価項目毎に評定者間で一致した項目の割合を算出し,評定者間の一致率とした.その結果,90%以上の一致率を認めた項目は28項目中20項目にのぼった. （考察） 対象者本人の疼痛の訴えと評定者が評価した不穏状態,表情,発声反応,身体的反応,行動・動作の変化との間に関連があり,これらの疼痛評価項目の妥当性が示唆された （結論）日本では開発が行われていなかった日本の介護老人保健施設で働く看護職や老人専門看護師が必要であると感じている疼痛評価項目の設定がされたツールを開発し妥当性検討を行ったことは,高齢者入居施設で生活する高齢者の生活の質改善のために意義あることと考える.
5. 老年看護学臨地実習における学生の困難状況と対処行動 ―第一報　実習初期における困難状況の実態― （査読付）	共著	平成24年3月	生命健康科学研究所紀要,Vol.8, pp.91-105.	（目的）実習初期の看護学生が老年看護学臨地実習において抱く困難状況と,それに対する対処行動を明らかにすることを本研究の目的とした. （方法）保健看護学科3年次に在籍する学生で,平成23年10月～11月に老年看護学臨地実習を終了した学生42名を対象に自記式質問紙調査を実施し質的内容分析を行った. （結果）学生が困難と感じた内容は,【老年者とのコミュニケーション】,【老年者の状況に応じた看護援助】,【看護過程の展開】,【教員・臨地実習指導者との関わり】,【実習記録】,【老年者の特徴理解】,【実習における報告】の７カテゴリーが抽出された.今回は実習初期であったため,老年者の理解やコミュニケーションの他に,実習記録の書き方や看護過程の展開に伴うアセスメントに関する困難がみられたと考えられる.また,これら困難に対する学生の対処行動は,【指導者・看護師からの支援】,【老年者への対応の工夫】,【カンファレンス・学生間での話し合い】,【援助の効率化を考慮した対応】,【手技および知識の再確認】,【老年者への指導の検討】,【情報収集】の７カテゴリーであった. （考察）特に実習経験の少ない初期の学生に対して,老年者の理解や関係形成に必要なコミュニケーション方法,看護援助の学内での学習の強化を図るとともに,臨地実習では教員が,環境調整や看護モデルを見せながら,学習の意味付けを示していく指導が重要ということが示唆された. 本人担当部分：データ入力およびカテゴリー抽出作業を行った.共著者：福田峰子，安藤好枝，田中和奈，伊藤紀枝，梅田奈歩，粥川早苗

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
6.通所介護事業所における虚弱高齢者の口腔機能向上サービスに関するニーズと職員の認識（査読付）	共著	平成24年12月	愛知県立大学看護学部紀要,Vol.18，pp.63 - 69.	（目的）口腔機能向上サービスの該当者が多いと推定される通所介護事業所を利用している虚弱高齢者の口腔機能向上サービスに関するニーズと職員の認識を明らかにすることを目的とした.（方法）1044の通所介護事業所職員を対象に郵送による自記式質問紙調査を行った.（結果）272名から回答が得られた（回収率26.1%）.口腔機能向上サービスのニーズを有する利用者や通常の口腔ケアの実施は多いものの,口腔機能向上の算定はわずかであった.算定しない理由は,職員のケアに対する自信が低いことがあがっていた.（結論）口腔機能向上サービスの促進と成果を高めるには,職員への教育の充実を図る重要性が示唆された. 本人担当部分：研究協力者との調整業務，論文内容確認，英訳業務 共著者：百瀬由美子,藤野あゆみ,天木伸子,山根友枝,田中和奈,鎌倉やよい
7. 老年看護学臨地実習における実習時期からみた学生の困難状況と対処行動（査読付）	共著	平成25年3月	生命健康科学研究所紀要,Vol.9，pp.84-101	（目的）老年看護学臨地実習において学生が抱く困難状況とその対処行動の実習時期別の変化を明らかにすることを目的とした.（方法）老年看護学実習を履修する看護学生を対象に，実習終了後に自記式質問紙調査を実施した.（結果）実習時期にかかわらず学生が困難を感じていたのは【老年者とのコミュニケーション】，【老年者の状況に応じた看護援助】，【看護過程の展開】，【実習記録】であった.その中でも，【老年者とのコミュニケーション】は実習時期に関わらず学生が最も困難に感じていた.実習初期では老年者の性格的特徴に関連したことでコミュニケーションに困難を感じており，中期と後期では難聴や言語障害などの影響，老年者の家族とのコミュニケーション，学生自身のコミュニケーション能力不足に関連した内容であった.時期別にみると実習初期では，困難に感じる内容が実習経験の少なさからくるものであり，中期・後期になるにつれて，対象にあわせた看護を行う上で生じる内容へと変化がみられた.実習での困難に対する学生の対処行動は，【臨地実習指導者・看護師からの支援】，【老年者への対応の工夫】がどの時期においても多かった.しかし，実習後期になると【実習困難に対する問題解決行動】が多くなっており，実習で遭遇する多様な困難状況に対して，自己解決する行動へと変容がみられた.（考察）学生にとって臨地実習は，看護の実践を学ぶ学習の機会であり，多様な困難に遭遇しながら成長する場でもある.よって，教員は個々の学習段階に応じた支援を適切に行う実践能力が求められる. 本人担当分：筆頭著者としてデータの分析およびカテゴリー抽出作業，グラフの作成，論文の執筆および取りまとめ作業を行った.共著者：田中和奈，福田峰子，安藤好枝,梅田奈歩，粥川早苗

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
8. 通所サービスを利用しているよう介護高齢者の健康づくりのための対処行動	共著	平成27年3月	岐阜医療科学大学紀要第9号，pp.33-40.	本研究の目的は，通所サービス（デイケア・デイサービス）を利用している要介護高齢者が実施している健康づくりのための対処行動を明らかにすることである．通所サービスを利用している要介護高齢者9名に半構成的面接を行い，その結果を内容分析した．インタビューの途中，語りのきっかけとして骨ウェーブで骨強度を測定したが，測定前後でインタビュー内容に変化はなかった．ほとんどの対象者に転倒歴があり，その約半数は骨折の既往があった．分析の結果，【健康管理】【活動的な生活】【食事への配慮】【自分なりの生活】の4つのカテゴリーが得られた．語りのなかで『運動習慣』や『リハビリをうける』は，「歩行」に重点をおいており，「畑仕事」も活動の一部として認識されていた．対象者は骨粗鬆症予防，転倒予防，骨折予防につながる対処行動を実施していると捉えることができた．そのため，今後在宅で長く生活するために通所サービスなどを活用し，実施している対処行動を継続できる支援が必要である． 本人担当分：データ収集および結果の分析，カテゴリーの抽出作業を行った． 著者名：藤吉恵美，田中和奈，和田裕子，吉村雅世
9. End-of Life Care Priorities in a Japanese Group Home for Older People with Dementia.（日本のグループホームにおける終末期ケアの課題）	単著	平成27年3月	岐阜医療科学大学紀要,第9号,pp.81-87.	（目的）認知症高齢者のためのグループホームにおける終末期ケア提供の課題を明らかとすることを本研究の目的とした．（方法）看取りを行った経験のあるグループホームに働く介護職員および医療連携により訪問看護を実施した訪問看護師に対して半構造的インタビュー調査を行った．（結果）グループホームに勤務する介護職員へのインタビュー調査の結果，入居者の急変への対処方法について不安に思っている介護職員が多いことが明らかとなった．（結論）グループホームにおける終末期ケアの改善を図るためには，介護職員が研修会へ参加し終末期ケアの知識を向上し,入居者の急変に落ち着いて対応できる環境の整備が今後必要と考える．
10. 介護老人保健施設入所者に対する看護職による非薬物的疼痛ケア（査読付）	共著	平成27年3月	日本看護福祉学会誌，20（2）.pp.59-69.	介護老人保健施設入所者に対する看護職による非薬物的疼痛ケアの実態を明らかにすることを目的とした． 無作為抽出した全国500箇所の介護老人保健施設の看護職に対して郵送による無記名自記式質問紙調査を実施した．非薬物的疼痛ケアの実態把握の調査内容として，「鎮痛剤が処方されていない入所者に疼痛が存在すると評価した際の対処方法」，「非薬物的疼痛ケアの内容」について調査を行った． 有効回答数は443件であった．鎮痛剤が処方されていない入所者に疼痛症状があった場合の対処方法として，非薬物的疼痛ケアを実施していたのは120名（27.1%）という結果であった．また，疼痛評価に自信がある群は有意に多く非薬物的疼痛ケアを実施していた． 本研究の結果，非薬物的疼痛ケアの実施を促すためには，看護職が自信をもって疼痛評価が行えるよう，高齢者の疼痛管理に関する教育が必要であることが示唆された． 本人担当分：研究代表者として，質問紙作成，データ分析，論文の執筆と取りまとめ作業を行った． 田中和奈，百瀬由美子

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
11.Benefits of Studying other Countries' Welfare Systems, through a Comparison of German and Japanese Long-Term Care Insurance Systems （福祉政策の国際比較の利点：日本とドイツの介護保険制度の比較を通して）	単著	平成29年3月	奈良学園大学紀要第6集. （全１０頁）	日本とドイツの介護保険制度を比較することで社会福祉政策の国際比較の利点について明らかにすることを目的とし，文献検討を行った．その結果，同じような社会背景を持つ他国の福祉政策の考察を行い，そのまま他国の政策を導入するのではなく，自国の特徴に合わせた内容の福祉政策に修正を行ったうえで制度を導入することが，自国の福祉政策の改善には必要であることが示唆された．
（その他） （研究報告書） 1. 認知症高齢者グループホームにおける看護師による終末期ケアの課題と改善方法の検討	単著	平成22年5月	平成20年度～平成21年度科学研究費補助金（若手スタートアップ）研究成果報告書	平成20年度科学研究費補助金若手スタートアップ（研究課題番号：20890211）の助成を受けて，認知症高齢者のためのグループホームにおける終末期ケア提供の課題を明らかとすることを目的とし，看取りを行った経験のあるグループホームに働く介護職員および医療連携により訪問看護を実施した訪問看護師に対して半構造的インタビュー調査を行った． その結果，入居者の急変への対処方法について不安に思っている介護職員が多く，職員が研修会へ参加し終末期ケアの知識を向上し，夜間の職員の増員を行い，入居者の急変に落ち着いて対応できる環境の整備が必要であることが示唆された．
2. 軽度認知症高齢者のための疼痛評価ツールの海外における汎用性の検討	共著	平成26年5月	平成23年度～平成25年度科学研究費補助金（基盤研究（C））研究成果報告書	平成23年度より科学研究費基盤Ｃ研究（課題番号：23593479）の助成を受けて，研究代表者として海外の高齢者に対しても使用可能な英訳版疼痛評価ツール開発のために，マレーシアの有料老人ホームおよび英国の有料老人ホームに入居する65歳以上の高齢者を対象に，日本の介護老人保健施設の入所者を対象に開発した疼痛評価ツールP-COP（Pain Checklist for Older People）の英訳版を用いて，疼痛ケア提供前後に疼痛評価を実施した． その結果，入居者本人の疼痛の訴えと評定者が評価した攻撃的状態，不穏状態，表情，発声反応，身体的反応，生理的反応，行動・動作の変化，顔色の変化との間に関連があり，これらの疼痛評価項目の妥当性が示唆された． 本人担当部分：研究代表者として調査結果のまとめ，報告書の記載を行った． 共同研究者：百瀬由美子，田中和奈，研究協力者溝尾朗
3. 介護老人保健施設退所者の在宅療養支援に関する調査研究事業報告書	共著	平成27年3月	公益社団法人全国老人保健施設協会　調査研究事業報告書．（A4判　全63頁）	（研究背景と目的） 平成25年度に実施した調査研究事業から調査対象者を増やし，調査機関を退所後1ヶ月から退所後3ヶ月までに広げることにより，老健施設退所後の状態像変化を深く追跡調査するとともに，「健康維持・向上」に作用する環境要因に関する検討を行い，在宅復帰後も良好な居宅生活が維持できるように老健施設および居宅におけるケアマネジメントに反映させていくことを本研究の目的とする． （調査内容） 介護老人保健施設退所者の施設在所中から退所ご在宅生活を送るなかでの状態像の変化を把握するため「退所者生活機能調査」を計5回にわたり実施した． （結果） 在宅復帰する老健利用者は入所中に機能改善がみられるが，自宅に帰ると機能は少しずつ低下することが明らかとなった． 本人担当部分：疼痛に関する質問項目および調査用紙の作成，調査結果のまとめに関する助言を行った． 共同著者名：東憲太郎，大河内二郎，安藤繁，小川勝，折茂賢一郎，助川未枝保，鷲見よしみ，高椋清，田中和奈，他9名．

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（依頼原稿） 1.海外医療事情⑦西オーストラリア州パース市の医療事情	単著	平成22年1月	ロングステイ財団季刊誌 LONG STAY 2010年冬号, pp.14-15.	オーストラリアにおける医療機関の紹介と医療事情および旅行者が体調管理面で注意しなければいけない日焼けや虫刺されの対応策についての報告を行った.
2. 海外医療事情⑳高山病の予防について	単著	平成25年4月	ロングステイ財団季刊誌 LONG STAY 2013年春号, pp.38-39.	ハイキングや登山時に高山病を予防するための注意点や対応策についての紹介を行った.
3.日本における国際看護ー異文化看護の理解ー	共著	平成27年6月	新宿区医師会会誌第55巻6, pp.15-18	日本における国際看護の現状と留意点について英国での対応策を例に用いて考察を行った. 田中和奈，溝尾朗
4. 高齢者入居施設における終生期の疼痛管理	単著	平成29年3月	臨床老年看護，2017年3・4月号,pp.50-56, 日総研.	高齢者入居施設の入居者を対象とした疼痛評価の視点や疼痛緩和方法についての紹介を行った.
（国内学会発表） 1. がんと非がん事例の在宅終末期経過時期別ニーズとアウトカム到達度　ー第１報 疼痛症状のマネジメントー	－	平成20年12月	第28回日本看護科学学会学術集会,福岡：福岡国際会議場.	（目的）在宅療養する終末期訪問看護利用者の在宅療養開始期7日間から，状態が安定した小康期（開始8日後から臨死期前），臨死期（死に至る7日間）の経過時期別に，ニーズとアウトカム到達度の変化を明らかにすることを目的とし，第一報では，ペインマネジメントに焦点をあてた.（結果）郵送法による自記入式質問紙調査を実施.得られた回答はがん148例，非がん122例，有効回答はがん145例，非がん120例.全経過において，がんの40%以上に存在したニーズは疼痛の観察，疼痛増強時の対応，疼痛表現の指導，鎮痛薬の副作用の便秘であった.また，全経過にわたって，ケア実施が60%未満であったのは薬剤の変更・増量の検討であり，ケアアウトカムにおいても，疼痛観察やレスキュードーズの使用法は，アウトカム到達度の低い事例が臨死期まで多い傾向であった.（課題）利用者の変化に応じた薬剤の変更・調整が必要であることが示唆された. 本人担当部分：調査結果のまとめおよび演題抄録の作成を行った. 共同研究者：野村美香，島内節，薬袋淳子，大橋渉，田中和奈，長崎光枝，和田洋子
2. がんと非がん事例の在宅終末期経過時期別ニーズとアウトカム到達度　ー第２報 疼痛以外の症状マネジメントー	－	平成20年12月	第28回日本看護科学学会学術集会，福岡，福岡国際会議場.	（目的）がんと非がん患者の在宅終末期経過時期別（在宅ケア開始期・小康期・臨死期）に，１報に続いて疼痛以外の症状についてニーズ内容，そのニーズの重要度と困難度，ケア実施度，アウトカム到達度を明らかとすることを本研究の目的とした.（方法）がんと非がん両群の相違点と類似点,必要なケアについて分析を行った.（結果）疼痛以外の症状の出現率は7個の中項目（呼吸困難，消化器症状，嚥下困難，発熱・感染，水分・栄養，スキントラブル，倦怠感）について，がんと非がんともに開始期<小康期<臨死期と次第に高くなっていた.ニーズ内容は（１）全期間を通してがんと非がんともに水分出納バランスと栄養・スキントラブルが多く81-94%に出現，がんは倦怠感が81-84%で非がんより高率（P<0.01）. （２）臨死期では両群ともに全7項目が急上昇し，呼吸困難はがん87%，非がん90%に達し，ニーズが多発していた.臨死期のニーズは水分と栄養，呼吸困難，スキントラブルが多かった.両群ともにニーズの経過パターンは臨死期に各ニーズが高率，かつ多様化していた.（課題）今後，両群のニーズの経過時期別変化に注目したケアが必要である. 共同研究者：島内節，野村美香，薬袋淳子，大橋渉，田中和奈，長崎光枝，和田洋子

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
3. 認知症高齢者グループホームにおける看護師による終末期ケアの課題と改善方法の検討	－	平成21年4月	平成20年度科学研究費補助金若手スタートアップ研究実績報告書	（目的）認知症高齢者のためのグループホームにおける終末期ケア提供の課題を明らかとすることを本研究の目的とした.（方法）看取りを行った経験のあるグループホームに働く介護職員および医療連携により訪問看護を実施した訪問看護師に対して半構造的インタビュー調査を行った.（結果）グループホームに勤務する介護職員へのインタビュー調査の結果，入居者の急変への対処方法について不安に思っている介護職員が多いことが明らかとなった.（結論）グループホームにおける終末期ケアの改善を図るためには，介護職員が研修会へ参加し終末期ケアの知識を向上し,入居者の急変に落ち着いて対応できる環境の整備が今後必要と考える.
4. 介護老人保健施設における看護師による疼痛評価時の着目点	－	平成22年10月	日本公衆衛生雑誌，57（10），376，東京.	（目的）介護老人保健施設に勤務する看護師の疼痛評価時の着目点について明らかにすることを目的とした.（方法）無作為抽出した全国500箇所の介護老人保健施設に勤務する4,500名の看護師に対して郵送による無記名自記式質問紙調査を実施した.（結果）高齢者の疼痛評価時の着目点について，欧米で開発された高齢者の疼痛評価ツールとして臨床での実用性が高いと評価されている疼痛評価ツールに共通する項目から，日本の高齢者に当てはまると考えられる疼痛評価項目25項目を選び，「重要でない」から「重要である」の5段階評定のリッカート尺度を用いて質問を設定した.調査協力の承諾が得られた60施設487名の看護師に質問紙が配布され442名より回答を得た.高齢者の疼痛評価実施時の着目点に関して無回答であった回収データは無効回答とし，有効回答数417を分析対象とした.因子分析の結果，固有値1以上の5因子が抽出された.「拒否的・攻撃的・不穏な状態」，「表情と発語反応」，「行動と動作の変化」，「身体反応」，「顔色の変化」の5因子23項目が観察項目として抽出され，内的整合性が確認された（Cronbach　α係数＝0.954）.また，抽出された5因子全てで内的整合性が確認された.（考察）因子分析の結果，抽出された5因子全てで内的整合性が確認された. 以上のことから，介護老人保健施設における疼痛評価時の看護師の着目点が構造化されたと考える. 本人担当部分：研究代表者として質問紙の作成，データ解析，結果のまとめ，抄録作成，発表業務を担当した. 共同研究者：田中和奈，百瀬由美子
5. 介護老人保健施設における看護師による疼痛管理の実態	－	平成22年12月	第30回日本看護科学学会学術集会，札幌.	（目的）介護老人保健施設における疼痛評価の実態把握を目的として調査を行った.（方法）無作為に抽出した全国500箇所の介護老人保健施設に勤務する看護師に対して質問紙調査を実施し，調査協力の承諾が得られた60施設442名の看護職員より回答を得た.高齢者の疼痛評価実施時の着目点25項目に関して無回答であった回収データは無効回答とし，有効回答数417を分析対象とした.（結果）高齢者の疼痛評価ツールを使用することの必要性と高齢者の疼痛に関する研修受講の必要性についてピアソンの積率相関係数を算出したところ，かなり相関関係（0. 456）がみられた.高齢者の疼痛評価を行う自信に関する質問に対して，自信がないという回答が75.5%を占めており，これは自信があると回答した21.6%の約3.5倍という結果であった.疼痛評価の実施頻度については，「行っていない」が最も多く43.9%という結果であった.（考察）介護老人保健施設において定期的に疼痛評価を実施している施設は10%以下にとどまっており，高齢者の疼痛評価を行うことは難しいと感じていることが明らかとなった.介護老人保健施設における疼痛管理の質的改善のためには，短時間で定期的に疼痛評価を行うための疼痛評価ツールの導入と疼痛管理に関する研修会の実施が必要であると考える. 共同研究者：田中和奈，　百瀬由美子

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
6.高齢者入居施設における軽度認知症高齢者のための疼痛評価ツール開発	－	平成24年11月	第32回日本看護科学学会学術集会,東京	（目的）日本の介護老人保健施設で生活する軽度認知症高齢者の疼痛の有無を看護職が観察することによって確認可能な疼痛評価ツールの開発および妥当性の検討を行うことを目的とした. （方法）介護老人保健施設に入所する鎮痛剤の使用や非薬学的療法の疼痛ケアを受けている,口頭で痛みの訴えが行える65歳以上の軽度認知症高齢者12名を対象に疼痛評価ツールの試用を行い,それらの施設に勤務する看護職員24名が疼痛評価とツールへの記載を実施した.入所者本人の痛みの訴えであるVRSと疼痛評価ツールの各項目の強度との関連についてスピアマンの順位相関係数にて分析を実施した.また,評定者間一致率については,2名の評定者の評価が一致した項目数の割合を算出した.（結果）入所者の訴えと看護職の観察項目による評価の関連では,入所者の疼痛の訴えと不穏状態,表情,発声反応,身体的反応,行動・動作の変化に関する看護職が評価した項目との間に弱いながらも関連が認められた.入所者に対して2名の看護職が同時に行った疼痛評価について,90%以上の一致率を認めた項目は28項目中20項目であった.（結論）対象者本人の疼痛の訴えと評定者が評価した不穏状態,表情,発声反応,身体的反応,行動・動作の変化との間に関連があり,これらの疼痛評価項目の妥当性が示唆されたが,ごく弱い相関にとどまっていた.そのため,VRS以外のツールを主観的尺度として用いることも今後検討する必要がある.今後は対象者数を増やし,疼痛評価項目の更なる精選が必要である.
7.英国におけるコミュニティホスピタルの役割	－	平成25年11月	第28回日本国際保健医療学会学術大会，沖縄p.190.	国立のコミュニティホスピタルにおける看護師としての勤務経験，Rapid Response Teamとの同行研修の体験，有料老人ホームや医療機関の3回の視察結果，文献検討から，英国のコミュニティホスピタルの役割について検討を行った．英国では，地域の特性によってコミュニティホスピタルで提供されているサービスは異なるが，様々な専門家が住民が地域で生活できるように支援していた．また，近年急性期病院のケアの質の低下が問題となっており，コミュニティホスピタルが地域高齢者の医療の根幹を担っている．ＮＨＳの財政危機解決のためには，コミュニティホスピタルは必要不可欠であり，在宅復帰の支援という側面でもコミュニティホスピタルは重要な役割を担っている．
8.英国におけるコミュニティケア	－	平成25年11月	第28回日本国際保健医療学会学術大会，沖縄p.190.	【目的】英国では，コミュニティケアが国営保健サービス（NHS: National Health Service）存続の鍵を握っていると近年考えられている．そのため，英国の医療・介護施設におけるケアおよび在宅ケアの実情と課題を検討することを本研究の目的とする． 【研究方法】Nursing Home，Residential Home，ホスピス，病院の4施設の視察と職員へのインタビューを実施した．視察内容およびインタビュー内容を研究発表として使用させていただくことを口頭で説明し，同意を得た．写真撮影と研究発表時の写真の使用についても承諾を得た． 【結果】英国のホスピスでは，24時間365日専門家のケアを自宅で受けることができる在宅ホスピスサービスをスタートするためのチャリティーイベントが開催されていた．また，Nursing Homeにおいても24時間体制で緩和ケアの専門家に助言を求めることができるホットラインが整備されており，施設の垣根を越えて専門家の支援を受けることができる体制が整っていた．在宅ケアにおいては，電動介護リフトなどの機器が無料で貸し出され，訪問介護の職員が介護機器を使用して移乗介助が行えるように整備されていた．しかしその反面，介護職員は低賃金のために複数の職業を兼務しなければ生活できない状況にあった． 【考察】日本とは異なり，英国の場合は介護施設や在宅でも24時間体制で専門家の支援を受けることができるため，住み慣れた環境で最期を迎えることが可能になると考えられた．その一方で，コミュニティーケアの質改善のためには介護職員の雇用条件の改善が必要であることが示唆された． 本人担当部分：研究代表者として海外施設の視察，結果のまとめ，発表業務を行った． 共同研究者：田中和奈，百瀬由美子，溝尾朗

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
9.マレーシアの高齢者施設における英訳版疼痛評価ツールの妥当性検討	－	平成25年12月	第33回日本看護科学学会学術集会，大阪	【目的】日本の介護老人保健施設の入所者を対象に本研究者が開発した疼痛評価ツールの英訳版を作成し試用することで，マレーシアにおける英訳版疼痛評価ツールの汎用性の検討を目的とした. 【方法】１）データ収集 マレーシアクアラルンプール市内の有料老人ホーム1施設に入居する鎮痛剤を使用している口頭で痛みの訴えができる65歳以上の高齢者20名を対象に，作成した英訳版疼痛評価ツールを試用した. ２）疼痛評価項目の内容 英訳版疼痛評価ツールは合計27項目で構成されたチェックリストであり，入居者本人の痛みの訴えについては,Verbal rating Scale(VRS)を用いて評価した. 【結果】 疼痛評価ツール試用対象者の属性は,女性15名,男性5名,平均年齢は79.6歳（SD＝6.3）であった. 疼痛評価ツールへの記載を実施した評定者の属性は女性2名であった.入居者の訴えと看護職の観察項目による評価の関連では,入居者の疼痛の訴えと攻撃的・不穏状態，行動・動作の変化に関する看護職が評価した項目との間に正の相関が認められ，表情と発声反応，身体的反応・生理的反応，顔色の変化に関する項目では弱いながらも正の相関が認められた. 【考察】 関連がごく弱い相関にとどまっていた観察項目もあったため,VRS以外のツールを主観的尺度として用いること，相関の弱い項目の削除について検討するなど更なる項目の精選を行う必要があると考える. 本人担当部分：研究代表者として質問紙作成，現地調査，調査結果の分析とまとめ，発表業務を担当した. 共同研究者：田中和奈，百瀬由美子
10.看護大学生における老年看護学実習前後の老年者とのコミュニケーション自己評価の変化と実習時の困難感	－	平成26年6月	第19回日本老年看護学会学術集会，名古屋	（目的）老年看護学実習の直前にロールプレイを取り入れたコミュニケーション技術演習を実施し，実習前後でのコミュニケーションに関する自己評価の変化と実習時の老年者とのコミュニケーションに関する困難感の出現について明らかにすることを目的とした. 【方法】Ａ大学老年看護学実習直前に行われたコミュニケーション技術演習に参加した学生127名を対象に自記式質問紙調査を実施した．演習では学生がペアになって老年者役，看護師役になり，看護場面を想定したロールプレイを行った．調査内容は基本属性に加え，上野が開発したコミュニケーション技術評価スケールを使用して，演習での自己のロールプレイ（以下：実習前自己評価）および実習中の受け持ち患者との関わり（以下：実習後自己評価）の計2回測定した．（結果）分析対象者は67名（回収率52.8％）であり，平均年齢は21.58±2.05歳であった．コミュニケーション自己評価得点の平均値は，実習前86.09±10.56点，実習後94.03±15.74点であり，実習前のロールプレイに関する自己評価得点に比べて実習後に行った受け持ち患者との関わりに関する自己評価得点のほうが有意に高くなっていた($p<0.01$). （考察）実習前後の老年者とのコミュニケーションに関する自己評価得点の変化から，学生は実習前のロールプレイ時よりも実際の受け持ち患者との関わりのほうが自己のコミュニケーション技術に自信をもって実習に取り組んでいたことがわかった．現代の対人関係能力が低下しているといわれる看護学生に対しては，老年者とのコミュニケーションについての自信を高めるだけでなく，老年者特有の特徴をふまえたコミュニケーションの実践を可能にするための具体的なスキルの育成が必要であることが示唆された. 共同研究者：梅田奈歩，福田峰子，安藤好枝，百々望，田中和奈，粥川早苗

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
11.介護老人保健施設における非薬学的疼痛ケア	－	平成26年6月	第19回日本老年看護学会学術集会，名古屋	（目的）高齢者入居施設における高齢者の疼痛評価に関する報告は日本国内でほとんど行われていない状況にある．そこで，本研究では，鎮痛剤が処方されていない介護老人保健施設入居者に対する非薬学的疼痛ケアの実態を明らかにすることを目的とした． （方法）無作為抽出した全国500箇所の介護老人保健施設に勤務する4,500名の看護師に対して郵送による無記名自記式質問紙調査を実施した非薬学的疼痛ケアの実態把握の調査内容としては，「鎮痛剤が処方されていない入居者に疼痛が存在すると評価した際の対処方法」，「非薬学的疼痛ケアの内容」について調査を行った．444名（回収率91.2%）の看護職から回収したデータのうち，回答者の属性のみに記載のあった1名の回答を除いた443名を分析対象とした．（結果）対象者の属性としては，女性407名（91.9%），男性35名（7.9%），平均年齢は45.3歳（SD=10.85）であった．鎮痛剤が処方されていない入居者に疼痛症状があった場合の対処方法としては，「医師への連絡」という回答が283名（51.5%）と最も多く，次いで，「薬を使わない疼痛ケアの提供」という回答が120名（27.1%）という結果であった．（考察）介護老人保健施設に勤務する看護職の約3割は，鎮痛剤の処方がされていない疼痛を有する入居者に対して，薬を使わない疼痛ケアの提供を行っていることが明らかとなった．高齢者の場合，薬の副作用が出現しやすいという特徴があるため，鎮痛剤の使用だけに頼る疼痛ケアを行うのではなく，非薬学的疼痛ケアも活用した疼痛管理を行うことが重要であると考える． 本人担当部分：研究代表者として調査結果のまとめと発表資料の作成，発表業務を行った．． 共同研究者：田中和奈，百瀬由美子
12. Validity of the Pain Assessment Tool, Based on Pain Symptom Changes, Pre- and Post-Pain Medication, in a Malaysian Nursing Home (マレーシアの高齢者入居施設における疼痛評価ツールの疼痛ケア前後の症状の変化による妥当性検討)	－	平成26年11月	The 34th Academic Conference of Japan Academy of Nursing Science, Nagoya 第34回日本看護科学学会，名古屋（英語口演発表）	開発した英訳版Pain Check List for Older People(P-COP）の海外における汎用性検討のため，マレーシアの有料老人ホーム1施設において口頭で痛みの訴えができる65歳以上の高齢者を対象に英訳版P-COPを用いて調査を実施した．疼痛ケア前後の疼痛症状の変化をwilcoxsonの符号順位和検定を用いて分析を行った．その結果，マレーシアにおけるP-COP試用対象者の属性は，女性15名，男性5名．疼痛評価場面数は200場面であった． 疼痛観察項目27項目中16項目において疼痛ケア後に有意に疼痛症状の改善がみられ，これらの項目の疼痛ケア前後の疼痛症状の変化を確認する観察項目としての妥当性が示唆された．今後は，残り11項目についての更なる妥当性検討が必要と考える． 共同研究者：田中和奈，百瀬由美子，溝尾朗

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
13. マレーシアおよび英国における高齢者疼痛評価ツールの汎用性検討	－	平成26年11月	第29回日本国際保健医療学会学術集会，東京	高齢者の生活の質改善のためには，的確な疼痛マネジメントが必要であることが考えられる．本研究では，日本の介護老人保健施設にて妥当性検証を実施した高齢者のための疼痛評価ツール（P-COP）英訳版の海外における汎用性検討を行うことを本研究の目的とした． マレーシアの有料老人ホーム1施設および英国の有料老人ホーム1施設に入居する口頭で痛みの訴えができる65歳以上の高齢者をP-COP試用の対象とした．入居者本人の痛みの訴えであるVRSと疼痛評価ツールの各項目の強度との関連についてSpearmanの順位相関係数にて分析を実施した．その結果，マレーシアにおけるP-COP試用対象者の属性は，女性15名，男性5名．疼痛評価場面数は200場面であった． 英国におけるP-COP試用対象者の属性は女性2名，疼痛評価場面は192場面であった． VRSと看護職による評価の関連では，攻撃的・不穏状態の4項目，行動・動作の変化3項目，表情と発声反応3項目，身体的反応・生理的反応3項目，顔色の変化2項目の15項目においてマレーシアと英国共に弱～強い関連が認められた．入居者本人の疼痛の訴えと27項目中15項目に関連が認められたため，これらの項目の妥当性が示唆された．しかし，残り12項目については，今後観察項目の精選を行う必要がある． 本人担当部分：研究代表者として調査結果のまとめと発表資料の作成，発表業務を行った．． 共同研究者：田中和奈，百瀬由美子
14. 介護保険施設の看護職および介護職が認知症者ケアにおいて体験する困難のメタ統合（第一報）	－	平成28年6月	第29回日本看護福祉学会学術集会，奈良	（研究目的）本研究では介護保険施設の看護職および介護職が認知症ケアにおいて体験する困難の様相を幅広く把握するために，国内の質的研究の知見を統合し，認知症高齢者ケアにおける困難に焦点を当てたシミュレーション教育の基礎資料を得ることを目的とした． （研究方法）分析はPatersonらのメタ統合の手法を参考にカテゴリ，サブカテゴリ，生データを抽出した．次にサブカテゴリと生データをもとにして，内容が類似するものをグループに分けグループの内容を示すサブカテゴリ名をつけ，さらに類似したサブカテゴリをまとめてカテゴリ名をつけた． （結果）介護保険施設の看護職・介護職が認知症者ケアにおいて体験する困難として6つのカテゴリに統合された． （考察）介護保険施設の看護職・介護職は，認知症高齢者との関係構築，認知症高齢者の理解・対応に困難を感じるだけでなく，施設のケア体制や業務にも困難を抱いており，認知症ケアにおける困難は多様かつ多重に生じる実態が伺えた．そして，介護保険施設の看護職・介護職が自らの困難を，認知症高齢者が暮らしの場でどのような不自由を感じているのかという視点から捉え直すきっかけを作り，自身の認知症ケアに活かせるように支援することが重要であると考えた． 本人担当部分：施設班の研究分担者として文献検討を行い，共同研究者と共に分析を行った． 共同研究者：藤野あゆみ，山本さやか，田中和奈，百瀬由美子

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
15．介護保険施設の介護職および看護職が認知症高齢者へのケアにおいて体験する困難に対する対応(第二報)	－	平成28年6月	第29回日本看護福祉学会学術集会，奈良	（研究目的）本研究は介護保険施設の介護職および看護職が認知症高齢者へのケアで体験する困難に対する対応の様相を幅広く把握するために，国内の質的研究の知見を統合し，介護保険施設における認知症高齢者への対応困難を想定したシミュレーション教育の基礎資料を得ることを目的とした． （研究方法）該当した72文献から，一次論文選定基準に基づいて14件を選定した．一次論文の選定基準は，研究対象が介護保険施設で認知症高齢者をケアする介護職および看護職であること，認知症高齢者をケアする中で経験する対応が記述されていること，質的分析を用いた研究であること，結果の記述が目的に沿って明確に記されていることとした．内容が類似するものをグループに分けグループの内容を示すサブカテゴリ名をつけ，さらに類似したサブカテゴリをまとめてカテゴリ名をつけた． （結果）介護保険施設の介護職および看護職が認知症高齢者へのケアで体験する困難に対する対応方法は，8カテゴリに統合された． （考察）介護保険施設の介護職および看護職は認知症高齢者の行動を抑制するなどの【高齢者不在の介助者本位な対応】をしており，介護保険施設における認知症高齢者への対応には課題があることが示唆された．介護保険施設における認知症高齢者への対応を改善するためには，本研究結果を活用したシナリオを作成してシミュレーション教育を行い，介護職および看護職が自らの行為を振り返りながら，必要な態度・知識・技術を身につけられるように支援する必要があると考える． 本人担当部分：施設班の研究分担者として文献検討を行い，共同研究者と共に分析を行った． 共同研究者：田中和奈，山本さやか，藤野あゆみ，百瀬由美子
16．The Contents of the Pain Management Education Required by Nurses who Work in Residential Facilities for Older People (高齢者入居施設に勤務する看護職が求める疼痛管理教育の内容)	－	平成28年12月	第36回日本看護科学学会学術集会．東京	（目的）本研究は高齢者入居施設に勤務する看護職を対象とした疼痛教育プログラム開発の基礎資料を得るために，看護職が求める疼痛管理教育の内容について把握することを目的とした． （方法）介護老人保健施設1施設と特別養護老人ホームと認知症対応型共同生活介護を併設する1施設に勤務する看護職を対象に，半構造化面接を実施した．分析は意味内容の類似性に基づいて，老年看護の専門知識を有する研究者4名で意見の一致が見られるまで検討を重ね，カテゴリー化を行った． （結果）分析の結果，研修会で受講したい教育内容として，7カテゴリーが抽出された． （考察）高齢者入居施設では常勤医師がいない場合も多く，治療ではなく生活重視の施設のため，重度の疼痛を有する入居者がいる場合は対応に苦慮することが予測される．そのため，看護職が自信を持って入居者の疼痛管理が行えるように，高齢者の疼痛管理に関する知識の向上が必要であると考えられる．本研究の結果，高齢者入居施設における疼痛管理の質向上のためには，鎮痛剤の適切な使用方法や高齢者の特徴に応じた疼痛管理方法に関する教育，他施設での疼痛管理の成功事例の提示などが看護職に対して必要であることが示唆された． 本人担当部分：研究代表者としてインタビューの実施，データ分析，調査結果のまとめ，発表業務を行った． 共同研究者：田中和奈，百々望，高橋晶，百瀬由美子

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（海外学会発表） 1. Outcome Improvement Factors of Independence for the Elderly Requiring Basic Care Assistance. （在宅軽度要介護高齢者の自立度の改善率とその要因）	－	平成20年9月	Elderly Care Seminar, Seinajoki City Hall, Finland.	（目的）在宅軽度要介護高齢者の自立度の改善率とその要因を明らかにすることを本研究の目的とした.（方法）在宅軽度要介護高齢者の自立度について，2ヶ月2時点調査からアウトカム改善率とその要因を利用者背景，生活の仕方，サービスから分析し，国内地域比較および国際比較により，アウトカム改善に有効なケアについて検討した.（結果）日本では同居者が多く，視力・聴力はよい状態であった.スウエーデンとフィンランド間には利用者背景に相違はなかった.自立改善と維持はスウェーデンが最もよく，サービスのあり方が影響しているのではないかと考えられた.自立への意欲の上昇と維持は個別ケアの多いフィンランドが一番高く，次に日本，スウェーデンの順であった.家族の自立への協力度は同居率が高いことにより日本が一番高い結果であった.（課題）日本は個別ケアとしての看護・介護・リハビリテーションを増やし，同居家族が多い・視力・聴力が比較的よいことを活用した.フィンランドは個別ケアの部分を集団ケアに振り分ける，または集団ケアを追加する.スウェーデンにおける意欲を高めるケアを意図的な実施の検討が必要と考える. 本人担当部分：調査結果のまとめと英文翻訳業務，発表資料の作成を行った. 共同研究者：Setsu Shimanouchi, Junko Minai, Helli Kitinoja, Jaakko Kontturi, Lena Sahlqvist and Haruna Tanaka
2. Perspectives on Needs Assessment, Care Implementation and Outcomes Evaluation in End-of-Life Care at Home －Comparative Analysis Between Family Caregivers and Nurses －. （在宅で終末期ケアを受けた患者の家族介護者と訪問看護師間のニーズ評価）	－	平成21 年8月	The 4th International Conference on Community Health Nursing Research, Adelaide Convention Centre, Australia	(目的)在宅で終末期ケアを受けた患者の死別前7日間における家族介護者と訪問看護師間のニーズ評価，ケアの実践，成果評価に関する認識の違いについて明らかにすることを本研究の目的とした.（方法）2007年2月に訪問看護ステーションに質問紙を郵送し，2006年に在宅で死亡したがん92事例と非がん93事例について，家族介護者と訪問看護を提供した訪問看護師に対して質問紙調査を実施した.（結果）がん事例の平均年齢は75歳，非がん事例の平均年齢は89歳であった.がん事例においては，訪問看護師と家族介護者ともに栄養，呼吸困難，排泄，発熱のニーズが一貫して高かった.がん事例のケアの実施に関しては，栄養と不眠に関してのケアの実施が高い結果であった.非がん事例の場合は栄養，呼吸困難，皮膚トラブルのニーズが一貫して高いことが明らかとなった. 本人担当部分：調査結果のまとめと英文翻訳業務，抄録の作成を行った. 共同研究者：Setsu Shimanouchi, Junko Minai and Haruna Tanaka

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
3. Problems and Needs of End-of-Life Care in a Japanese Group Home for People with Dementia. （日本のグループホームにおいて終末期ケアを提供する上での問題点）	－	平成23年3月	26th International Conference of Alzheimer's Disease International, Toronto, Canada.	（目的）日本のグループホームにおいて終末期ケアを提供するうえでの問題点を明らかにすることを目的とした.（方法）入居者の看取りを行った経験のあるグループホームに勤務する介護スタッフおよびその施設で終末期ケアを提供した訪問看護師に半構造的インタビュー調査を実施した.（結果）グループホームで終末期ケアを提供することの問題点として，看護職が勤務していないことや介護スタッフは終末期ケアの知識をもっていないことから終末期ケア提供に不安があると介護スタッフは感じていることが明らかとなった.また，多くのグループホームの経営者が訪問看護ステーションと契約を結ぶのを躊躇してしまうため，グループホームで終末期ケアを提供することを難しくしていると訪問看護師は考えていることが示唆された.終末期ケアを提供するためには，介護スタッフと家族との連携やスタッフの増員，終末期ケアに関する知識の向上などが必要であると介護スタッフは考えており，訪問看護師は医療従事者と介護スタッフ，家族との連携が終末期ケアを提供するためには必要と考えていることが明らかとなった.（結論）終末期ケアに関する介護スタッフの知識向上および医療連携が日本のグループホームにおける終末期ケア提供のためには重要であることが示唆された.
4. Changing Perceptions of Pain Assessment among Nurses in Japanese Long-term Care Facilities （日本の介護老人保健施設における入所者の疼痛管理についての看護職の認識の変化）	－	平成24年3月	27th International Conference of Alzheimer's Disease International, ExCel London, London, UK.	（目的）軽度認知症高齢者を対象に開発した疼痛評価ツールを3箇所の介護老人保健施設において試用したことにより,入所者の疼痛管理についての看護職の認識の変化を明らかにすることを目的とした.（方法）疼痛評価ツール試用後に,3箇所の介護老人保健施設に勤務し,実際に疼痛評価ツールを使用して疼痛評価を実施した18名の看護職に対して,平成23年6月～7月にかけて半構造化グループインタビューを実施した.許可を得て録音したインタビュー内容から逐語録を作成し,コンテントアナリシスにより分析した.（結果）看護職の認識の変化については,「介護老人保健施設における疼痛ケア提供前後の疼痛評価の必要性」,「疼痛評価による入所者の疼痛部位と程度の理解度」,「日常の疼痛ケアを通しての入所者の痛みに対する反応の特徴理解と対応方法」,「認知症高齢者の痛みの認識に対する把握の困難感」の4つのカテゴリーに分類された.（結論）認知症高齢者を対象として開発した疼痛評価ツールを用いて,定期的に入所者の疼痛評価を実施することで,入所者の疼痛評価に対する看護職の関心が高まり,疼痛ケア前後の疼痛評価の必要性の再認識や入所者の痛みに対する反応の特徴の再認識,日常行ってきた疼痛ケアの適切さの再確認などにつながった. 本人担当部分：研究代表者として調査結果のまとめと英文翻訳業務，発表資料の作成，発表業務を行った．. 共同研究者：Haruna Tanaka，Yumiko Momose
5. Pain Assessment Tool Validation, Based on Pain Symptom Changes (Pre- and Post-Pain Medication) in Japanese Nursing Homes. （日本の介護老人保健施設における疼痛評価ツールの妥当性検討ー疼痛ケア前後の症状の変化からの考察ー）	－	平成27年4月	30th International Conference of Alzheimer's Disease International, Perth Convention Centre, Perth, Australia.	日本の介護老人保健施設の入所高齢者を対象に開発した疼痛表チェックリスト（Pain Check List for Older People:P-COP）の疼痛評価項目の妥当性検討を行うことを本研究の目的とした．12名の介護老人保健施設入所者に対して疼痛ケア前後にP－COPを試用して疼痛評価を実施した．その結果，28項目中23項目が疼痛症状として観察され，そのうち12項目において疼痛ケア前後で有意な差がみられ，疼痛ケア前後の疼痛症状の変化を観察する項目としての妥当性が示唆された. 本人担当部分：研究代表者として調査結果のまとめと英文翻訳業務，発表資料の作成，発表業務を行った. 共同研究者：田中和奈，百瀬由美子

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（講演会） 1.いのちの現在，過去，未来	―	平成23年3月	いのちのアレグリア，埼玉県立大学，越谷市.	日本における在宅死数は欧米などの諸外国と比べて少ない傾向にある.こういった日本の在宅死の現状および今後の課題について，諸外国との比較を行った.また，日本における在宅死の事例紹介や英国のホスピスケアおよび家族支援の現状から死をどのようにとらえ，受け入れるべきかというテーマで埼玉県立大学看護学部の学生を対象に講演を実施した. 本人担当部分：英国のホスピスに関する資料作成と情報提供を行った. 共同研究者：宮子あずさ，田中和奈，溝尾朗
（研修会） 1.在宅エンドオブライフケア基本レベル研修会	―	平成20年11月	在宅エンドオブライフケア基本レベル研修会,コンベンションホールＡＰ浜松町.	本人担当部分：在宅地域ケア研究センター主催の研修会のエンドオブライフケア研修会で実践例に関するグループワークの運営を担当した. 共同研究者：薬袋淳子，田中和奈，長崎光枝
2 .軽度認知症の疼痛アセスメントとケア	―	平成24年1月	介護保険施設における看護職の包括的ストレスマネジメント研修会,愛知県立大学長久手キャンパス.	愛知県立大学看護学科老年看護学の百瀬由美子教授が科学研究費の助成を受けて実施した研究の一部として,介護保険施設に勤務する看護職を対象に,看護職のストレスを軽減することを目的に,看護職から学習したいと要望のあった認知症高齢者のための疼痛管理に関する研修を行った. 認知症高齢者の疼痛評価方法,海外で使用されている疼痛評価ツールの紹介,日本と欧米の高齢者入居施設における疼痛管理の状況についての講義を行った.
3. Dementia Care in Japan 日本における認知症ケア	―	平成24年11月	英国国立病院Royal Free Hospital医師研修会	英国国立病院の大学教授および医師対象の研修会講師として招かれ，日本の認知症ケアについての講義を行った.講義内容に関するアンケート結果は，最高評価をつけていた医師が過半数を占めていた.
4.事例研究とは	―	平成27年6月	東海記念病院院内看護研究研修会	東海記念病院に勤務する看護職を対象に，事例研究についての概要についての講義を行った.
5. 読み手に伝わりやすい事例研究のまとめ方	―	平成27年9月	東海記念病院院内看護研究研修会	東海記念病院に勤務する看護職を対象に，事例研究に関する論文のまとめ方と抄録の作成方法に関する講義を行った.

教　育　研　究　業　績　書

平成　29年　3月　31日

氏名　大山　末美

研究分野	研究内容のキーワード
看護学	臨床看護学（がん看護学，補完代替療法，メンタルヘルス）

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例 1）看護技術習得に向けての能動的な看護技術習得の試み （奈良県立医科大学看護学部1年次・2年次学生対象，看護技術）	平成20年 4月 ～ 平成22年 3月	学生の看護技術演習場面を天井に設置したビデオに録画して，学生自身が自己評価し，繰り返し演習できるようにした。バイタルサイン測定，移送，シーツ交換におけるボディメカニクスで実施した。学生は，演習終了後に撮影した自身のビデオを確認し，自分の看護技術到達度に関して，目標に沿って評価し，自主的に繰り返し演習できていた。学生は自身を客観的にみることで，どの部分を改善すればよいか自分で考え，テキストや参考書を確認しながら，学生同士で意見を出し合い，自己演習できるようになった。その結果をThe 1st International Nursing Research Conference of World Academy of Nursing Scienceで発表した。基礎看護学領域教員全員で企画・運営した。
2）医療安全の向上に焦点化した看護技術演習でのガイドラインの活用 （奈良県立医科大学看護学部1年次・2年次学生対象，看護技術）	平成20年 4月～ 平成22年 3月	衛生学的手洗い，吸引，注射，採血の診療の補助に関する看護技術演習に関して，医療安全の向上に焦点化して講義・演習を展開した。日本看護協会，厚生労働省および関連学会が報告している各種ガイドラインを紹介し，自身が行う診療の技術に関して準拠しなければならない内容を理解できるように講義した。このことで，学生はガイドラインの重要性およびその内容を確認をすることが医療安全の向上を促進できることが理解できるようになった。
3）学びの深化を目指した少人数制によるフィジカルアセスメントの導入 （奈良県立医科大学看護学部2年次学生対象）	平成20年 4月～ 平成22年 3月	少人数グループの学生に事前に提示したフィジカルアセスメントの目的と，テキストとDVDを用いた事前学習を実施してもらった。その後，学生同士で学習内容に沿って，全身の概要，消化器，呼吸器，循環器の視診，触診，打診，聴診の演習を行い，フィジカルアセスメントの目的が達成できたか否かを討議してもらった。討議で不明確な部分として挙がった点と，教員が学生の演習を観察した中でフィジカルアセスメントの目的が達成していない部分について，デモンストレーションを行い適切な技術を説明・実演した。学生からは，「事前学習ではわかったつもりでいたことを実際にすると，できない部分がたくさんあった。それを討議で話し合い，その後，先生の技術を見たので，理解が深まった」「一度自分たちで実践して，その後先生の説明があったので，テキストの内容の意味がよく理解できた」と意見があった。少人数による学生同士の討議のしやすさ，教員への質問のしやすさにより，より理解が深まった。

事項	年月日	概　　要
4）実習での対象理解と援助を目的としたクリティカルシンキングの導入 （奈良県立医科大学看護学部2年次，3年次学生対象，兵庫医療大学看護学部3年次4年次学生対象）	平成20年 4月～ 平成22年 3月 平成22年11月～ 平成25年 3月	学内で行ったクリティカルシンキングを取り入れた問題解決能力を活かして実習に取り組んだ。教員は学生とともに患者を訪床し，その後「どんなことを観察したか」「その観察から気づいたこと」を確認した。「その観察から気づいたこと」に対する学生の回答を活かし，その気付きから立てた仮説（症状などの患者の状態）を確認するためにはさらにどのようなことを観察すればいいかなど，目的的・系統的に観察できるように促した。最初は，系統的に観察できていなかったが，実習後半で学生は，「学内で看護過程を演習した時に，観察する目的や目的に沿った観察内容を考えるのと同じだった」ことに気付くことができた。その結果，スムースに患者理解に必要な情報や援助するために必要な観察項目などを考え，実施できる学生もみられた。
5）学習の動機づけを目的とした講義終了時小レポートまたは小テストの活用 （奈良県立医科大学看護学部1年次，2年次，兵庫医療大学3年次学生対象）	平成20年 4月 ～ 平成22年 3月 平成23年 4月 ～ 平成25年 3月	学生が，当該講義での疑問点，説明でわかりにくかったこと，講義を聞いて発見したことを記述できるように，講義時間を5分程度取り，小レポートを用いて振り返りを行った。その内容を次の講義時までにまとめ，疑問点などの補足説明を行うとともに，前回の講義内容を想起できるようにし，今回の講義につなげるように工夫した。学生からは，「次の時間に疑問点を補足してもらえることと，前の授業内容を思い出せるのでわかりやすい」と反応があった。
（梅花女子大学1年次，2年次学生対象）	平成25年 4月～ 平成28年 3月	梅花女子大学の非常勤講師として，基礎看護援助論Ⅱ，Ⅳの一部を担当している。技術内容を事前にCCS（学内ランで結ぶeラーニング）で確認するとともに，教科書や他の文献で事前学習をし，その内容に沿って演習を実施している。演習内容の重要項目に関しては演習直後に事後テストを行い，知識の確認をすることで，知識の定着をはかっている。テストを行うことで，学生は空いた時間に教科書や事前学習内容を見直す機会ができていた。また，事後テストは国家試験問題から抽出するようにし，正答を選択できる思考過程の育成にもなっていた。
（梅花女子大学保健学部2年次学生）	平成25年10月～ 平成28年 3月	梅花女子大学看護保健学部非常勤講師として実施した。2年次学生を対象に，口腔内吸引，気管内吸引の演習において，事前学習として吸引ガイドラインを読み，注意事項および看護技術の根拠となる内容を確認するよう準備した。「テキストや参考文献では載っていない実施者の必要条件や吸引する患者の適応条件があることに驚いた。こういう内容を知っておかないと危険だ」「実施者の必要条件を読んで，看護師がちゃんと解剖生理がわかっていないといけないことを知って，勉強しなければいけないと思った」などの感想があった。学生の感想から，看護技術を行う際の看護師が遵守する医療安全の責任について考える姿勢の向上につながった。

事項	年月日	概　　要
6）知識と技術の総合化を目的としたシャドーイングの導入 （奈良県立医科大学看護学部2年次学生対象）	平成20年 4月～ 平成22年 3月	基礎看護学実習にシャドーイングを導入した。病棟看護師に1日ついてまわり，患者への声掛けの方法，清拭など日常生活援助の説明の方法，他スタッフとの情報伝達について観察した。学生はシャドーイング後に，その看護師に質問ができるようにした。学生は，「講義でコミュニケーションを学習したが，オープンドクエスチョン，クローズドクエスチョンの使い方の実際をみることができた」「清拭など，時間や方法を患者と一緒に決めていて，学内の演習で行った方法だけでなく他の方法も学べた」など，講義と実際とが一部結びつき，知識と技術の総合化ができた。
7）医療安全の向上を考慮した使用物品の特性を選択できる能力の育成 （奈良県立医科大学看護学部1年次，2年次学生対象，梅花女子大学1年次，2年次学生対象）	平成20年 4月～ 平成22年 3月 平成25年 4月 ～平成28年 3月	食事（経管栄養），吸引，排泄（導尿），点滴の技術において，対象に適切な医療器具を選択できる能力の育成を目的として実施した。具体的には，まず講義で多種多様な医療器具の素材・価格・適用，長所・短所について説明し，体験学習である演習時に，類似した医療器具（チューブ類），同種で素材違いの物品を準備した。成人期にある患者事例を提示し，その患者に適した素材，価格，適用，長所・短所を考え，医療器具を選択するようにした。医療器具について，太さしか覚えていない学生は，医療器具の選択に躊躇していた。躊躇している学生に，再度，テキスト，資料を確認するようにし，事例に応じた適切な医療器具が選択できるようにした。学生は，「医療器具の素材とか意識していなかったけど，すごく大事だとわかった」「患者に合った医療器具を選ばないと，皮膚にトラブルを起したり，不要な費用がいることがわかった」「病院では，いろんな物品から患者に合ったものを選ばなくてはいけないことを実感した」と多くの学びがあった。
8）学士力の育成のための学生参画型授業の導入 （奈良県立医科大学看護学部1年次.2年次学生対象）	平成21年 4月～ 平成22年 3月	中央教育審議会の定義する「学士力」育成目的で，学生参画型授業を取り入れた。安楽，食事，環境，清潔に関して学生参画型授業を取り入れた。教員は学生に，単元目標および参考文献を提示し，その単元の講義60分，演習60分の時間で授業を展開するように指導した。教員は，講義内容，講義資料，演習について，5-6回のゼミをグループごとに開き，アドバイスをするのみに徹した。学生は「しんどかった。先生に授業をしてもらう方が楽だ」「しんどかったが，授業するまでにこんなに大変な作業がいることが分かって，他の授業では寝ないようにしようと思った」「資料の探し方や，人にわかるように伝えるための順序，資料作り，講義，演習を考える中で，理解が深まった」などの意見があった。
9）クリティカルシンキングを取り入れた少人数制の問題解決能力の育成 （奈良県立医科大学看護学部2年次学生対象）	平成21年 4月 ～平成22年 3月	小グループに対して成人期にある対象を事例にした看護過程を展開する上で，クリティカルシンキングの思考の育成を試みた。初期の頃，学生は，「正しいか」「間違っているか」に視点があった。学生から「この情報はこれで合ってますか」という問いには，「そのアセスメントの目的は何か」を確認し，学生が情報から系統的にアセスメントできるように具体的な発問をするようにした。後半のグループワークでは，学生自身が，「こう考えるためには，あとどんな情報がいるか考えよう」など，目的的かつ系統的に思考する姿が見られた。

事項	年月日	概　　要
10）学びの総合化を目的とした実習指導者参加型の看護技術演習の導入 （奈良県立医科大学看護学部2年次学生対象）	平成21年 4月 ～ 平成22年 3月	基礎看護学実習Ⅱに行く前の看護技術演習で，実習病棟の指導者または主任に，バイタルサイン，清潔の看護技術演習に参加してもらった。実習指導者は，学生のレディネスを知ることができ，学生は，実習指導者の患者への援助に至る思考過程について解説を受けることで，学生自身と指導者の情報をアセスメントする思考の違いを理解することができた。また，病棟スタッフが参加することでよい緊張感があった。この試みにより，基礎看護学実習に行った際，演習で指導を受けたスタッフがいることで，安心して援助に参加できると共に，演習で確認した指導者の援助に至るまでの思考を活かすことができた。援助計画を立案・実施することで，学内での演習と臨地実習での援助過程の統合について向上がみられた。
11）研究的態度，思考の育成を目指した卒業研究 （奈良県立医科大学看護学部4年次学生対象）	平成21年 4月～ 平成22年 3月	卒業研究において，看護学および看護実践を発展させるための研究的態度および自己研鑽能力を養うために，既習した知識・理論・技術を統合し，自己の研究課題を追求し看護学領域の理解を目指すための演習指導を行った。対象学生は3名で全員論文執筆ができ，自己の課題に対する看護学領域におけるケアについて学習成果を得た。
12）能動的に実習を展開するための学生主体による実習の導入 （奈良県立医科大学看護学部1年次学生対象）	平成21年 4月 ～ 平成22年 3月	成人期から老年期にある「療養生活をおくる対象の環境理解」を目的に実施した。実習前に学内で，環境が人間の健康に及ぼす影響を知るためにどのような情報が必要であるか，ディスカッションするように時間を設け，思考し，まとめるようにした。学生は臨地実習初日，事前にディスカッションした環境が人間の健康に及ぼす影響内容に沿って，学生自ら情報収集できた。不足の内容は，教員，指導者の発問により気づくようにし，さらに情報収集できるようにした。学生は「自分たちで考え，計画して，それに沿って情報収集ができたので自信がついた」など意欲的に学習できていた。
13）研究成果を教育へ反映させた安楽と排泄援助を考える工夫 （奈良県立医科大学看護学部2年次学生対象，梅花女子大学保健医療学部2年次学生対象）	平成21年 4月 ～ 平成22年 3月 平成25年 4月 ～ 平成28年 3月	安楽と排泄（排便促進）について学生は，「腹部を温める」ことを挙げていることが多い。しかし，実際に実習などでは，「どの部位に，何度のものを，何分使用」するのか具体的にしていないことが多く，いわゆる経験値で行っている。そこで，研究論文を3篇程度紹介し，便秘予防目的，安楽（副交感神経優位）目的では，使用する物品，時間，部位が異なることを提示した。その上で，成人期にある対象の排便促進，安楽目的で行うためのアセスメントと援助計画を立案し，演習で実施するようにした。学生は，「目的に応じて，温度とかを変えなければいけないことや，その根拠を論文などで調べなければいけないことがわかった」を学べたと報告する学生もいた。

事項	年月日	概　　要
14）アクティブリスニングとフィードバックによるコミュニケーションの理解と実践の工夫 （兵庫医療大学看護学部3年次，4年次学生対象）	平成22年11月～ 平成25年 3月	実習最終日における実習のまとめを，実習グループごとに発表した。その際，発表者に対して「聞いている」ことを非言語的に伝えること，良いところをフィードバックすることをルールとして実施した。評価された学生は，評価内容について感じたことを評価者に再度フィードバックすることを行った。この一連の実践により，他人の考え，感じ方をしっかりと聴くことで相手の良いところを見つけることができること，良いところを言語化して伝えることで，評価者も学べることが経験できた。これは，実習の中間発表会にも実施し，翌週から対象者とのコミュニケーションにも用いることができていた。学生からは，「コミュニケーションは，お互いの感情を伝えなければいけないことを実感できた。患者さんとのコミュニケーションも同じだと思ったので，来週の実習で実践したい」「批判されることを怖がっていたが，批判されない安心感があり，自分の失敗もみんなに伝えることができ，同じ失敗をしないように伝えることができた」「よいところを探すのは難しかったが，良いところを探すためによく聞くことができた。誉める方も誉められる方も気持ちよくて，心に残った」と評価していた。
（兵庫医科大学看護学部3年次，4年次学生対象）	平成22年 11月 ～ 平成25年　3月	成人期にある対象の薬物の副作用による便秘ケアが必要な患者を実習で受け持った学生に対しての援助をカンファレンスで討議してもらった。その中で学生は，腹部を温める，マッサージをするなどの看護計画を立案してきた。しかし，その根拠となるものが不明確であったため，研究論文を探すように指導し，学内実習日に文献検索ツールを用いて共に探した。検索した研究論文結果に基づき，患者と共に排便促進に必要な物品の準備，温める部位，時間をリーフレットにして作成できた。「ちゃんと研究論文で明らかになったことを自信をもって患者さんと共に考え，実施できた」と達成感をもつことができた。
15）成人期にある対象理解を促進する視覚教材としての映画利用 （兵庫医療大学看護学部2年次学生対象）	平成23年 4月～ 平成25年 3月	成人期にある不安症状をもつ対象を理解することを目的に，映画を用いた。視覚教材として映画を用いることで，不安症状をもつ対象の症状の実際と，その症状が日常生活に及ぼす影響およびその時の対象の辛さについて理解の促進ができた。このような対象に，看護ケアとしてどのような技術が必要かを考えるように促した。学生は，不安症状という漠然とした患者の状態を映画の主人公の発言や行動からその辛さを理解するとともにどのようにかかわるか考える動機づけとなった。
16）成人期にある対象のメンタルヘルスの理解促進のための，インターネット記事の利用 （兵庫医療大学看護学部3年次学生対象）	平成23年 4月～ 平成25年 9月	近年，話題となっている成人期のうつ病に関して社会問題を自身の問題として考えることができるように講義した。学生には，新聞，雑誌の記事およびインターネットで話題とされているうつ病についてまとめ，発表してもらった。発表してもらった記事で誤って認識されている話題や考え方などを挙げ，適切な考え方を説明した。疾患を正しく理解してもらったうえで，がん，脳卒中，糖尿病などの疾患を持つ対象及びその家族に，うつ病が多いこと，その辛さ，症状が及ぼすQOLの低下，入院期間の延長，身体症状のコントトールも悪くなることを説明した。学生は，「疾患を持つ対象の心理面のケアが大事だと思っていたが，漠然と考えていた。もっと心理面を理解して関わる必要がある」と感想をもった。

事項	年月日	概　　要
	平成23年 10月 ～ 平成25年 3月	薬物依存など，成人期に陥りやすいメンタルヘルスの保持に関して講義した。薬物依存，インターネット依存など，学生が興味をもつ内容から，依存が脳の悪循環サイクルによるものであることを理解してもらい，その苦痛が影響を及ぼす日常生活，人間関係に関して，その理解に深化をめざしDVDを用い講義した。学生は，「薬物依存などは，気持が弱いからだと思っていたが，病気だったとわかった」と感想をもった。
17）臨床現場での事例を用いた看護師のメンタルヘルスの理解の促進 （兵庫医療大学看護学部3年次学生対象）	平成23年 4月～ 平成25年 3月	患者の自殺や自殺企図があった際の看護師のメンタルヘルスに関して講義した。自殺および自殺企図は，現在の医療では根治が困難ながん患者など，精神科以外でもあることを説明した。患者の自殺，自殺企図に関わった際の看護師の心理状況と，病棟でどのように組織的に取り組むかを，精神科で行われているカタルシスの方法の実際を紹介し，説明した。学生は，「一般病棟でも自殺や自殺企図があることに驚いた。自分がその場面にかかわったら，罪悪感を持つと思う。でも，かかわった看護師の責任ではないことや，そのような場面でスタッフみんなで対処する方法があることを知って学習になった」と感想があった。
18）慢性的な症状をもつ成人期にある対象のセルフケア支援に着目した看護過程の展開 （兵庫医療大学看護学部3年次学生対象）	平成23年 4月～ 平成25年 3月	オレム―アンダーウッドのセルフケア理論に基づき，ペーパーペイシェントの事例を作成し，それを用いて慢性期にある患者の看護過程の展開を行った。学生は，「ほとんどセルフケアができているかのように思える患者だが，セルフケアが不足していて，セルフケアが不足していることもその人なりの理由がある」「看護者の価値観で考えるのではなく，セルフケアができない患者の理由を引き出す必要性がわかった」と感想をもった。その人の意思を尊重すると同時に，成人期という社会的役割をもつ対象が，生涯に渡り症状のコントロールをするためにどのように関わっていくのかを，情報の取り方，アセスメント，看護計画立案を通して考えることができた。
19）学生によるプレゼンテーション能力向上の工夫 （兵庫医療大学看護学部3年次生対象）	平成23年 4月～ 平成25年 3月	成人期にある患者の看護過程で行った学生グループの看護計画までの思考過程を，ポスター形式で展示し発表するようにした。学生個々には，全グループのポスターを読み，自分たちのグループの相違点の抽出と，疑問点を記載するようにした。各グループのポスターを見る時間1コマ，ポスター前でのプレゼンテーション1コマを取り，その後，学びの共有1コマを使用した。学生からは，「各グループでそれぞれ看護問題とするところの優先順位が違ったりして，その理由を間近で質問できたりして，ずっと座って聞いているより良かった」「ポスターなので，クラスの人たちが間近で聞いてくれているのがわかって張り合いになった」と感想があった。
20）統合実習モチベーションの向上の工夫 （兵庫医療大学看護学部4年次学生対象）	平成23年 4月～ 平成25年 3月	身体疾患をもつ精神疾患の患者を対象に総合実習を構築した。モチベーションを高めるために，総合実習前にリエゾン看護専門看護師に特別講義を依頼し，身体疾患をもつ精神疾患患者のケアの実際などを講義してもらった。精神看護学他教員とともに企画，運営した。

事項	年月日	概　　要
21）臨地実習での統合的な学習経験と創造的思考力を育成する工夫 （兵庫医療大学看護学部3年次，4年次学生対象）	平成23年 4月～ 平成25年 3月	学生が臨地実習において，学習する内容，実践可能な内容を明確化し，学内での講義・演習，臨地での実践を統合するために，まずは，実習目標の理解の促進を行った。学生主体で実習目標の理解を発表，討議し，その内容から，学内での講義・演習をどのように活かすと効果的か，また臨地で学生が主体的に体験できることは何かを討議できる時間を設けた。実習目標にそって，学生個々が自身の目標を明確化でき，目標にそって学習の内容，計画を具体的に表現できる学生もいた。
22）初年次教育の実践 （兵庫医療大学看護学部1年次学生対象）	平成24年 4月～ 平成25年 3月	学士力を身につける一つとして高校から大学への円滑な移行と大学で学ぶとはどのようなことかということに取り組んだ。具体的には，スタディスキル（書く，聴く，話す，プレゼンテーションスキル），スチューデントソーシャルスキル（大学生として身につけておくメール送信法，電話の仕方，研究室訪問の方法，教室の入り方）の育成を行った。特に，スタディスキルにおいてはLTD（Learning Through Discussion）を取り入れ，話し合い学習を実施し，学習者一人ひとりの学習と理解を深めることの成果が得られた。
23）少人数制によるシュミレーションモデルを用いた一次救命技術習得 （愛知県立大学看護学部4年次生対象）	平成26年 5月～ 平成26年 9月	ティーチングアシスタントとして実施した。シュミレーションモデルを用いて，一次救命の方法を学生に事前学習してもらったうえで，学生一人ずつの技術の正確性をコンピューターで解析した。解析結果に基づき学生は自身の技術でできているところ，できていないところを確認し，他のメンバーから同様に評価フィードバックするようにした。学生が互いに互いの技術を確認することで，自分の技術向上にも役立てていた。
24）人体の生理学，解剖学と看護実践との総合化を目的としたヘルスアセスメントの工夫 （奈良学園大学看護学部2年次生対象）	平成28年 4月	ヘルスアセスメントの全身，呼吸器，消化器の講義および，呼吸器，消化器，循環器の演習を担当した。講義では，人体の解剖を立体的に考えられるように，医学書など学生にわかりやすい図を用い，想像できるように説明した。特に，呼吸器では学生自身の体を自分で触れながら位置関係および呼吸時の呼気・吸気の働きを考えながら行うことで想像しやすいようであった。その上で，打診，聴診，視診，触診を実際に行い，DVDで再度確認することで理解が深まった。学生は，「立体的に想像する意味がよくわかった」「DVDで確認することでわかりやすかった」と感想があった。
25）個人思考，シンクペアシェアを用いた問題解決能力の向上の工夫 （奈良学園大学看護学部2年次生対象）	平成28年 4月	成人期にある対象が生涯に渡り，症状をコントロールするためにどのようなケアが必要かを思考できるようにした。近年の学生の傾向から個人の発言が困難なことを考慮し，まずは個人思考をしてまとめる時間を設け，次いで個人思考の内容を少人数で共有するようにした。少人数での意見交換で抽出された内容を数グループに説明してもらった。

事項	年月日	概　　要
26）手術を受ける対象の生体侵襲を理解する基礎的思考の育成 （奈良学園大学2年次生対象）	平成28年　9月	手術侵襲の理解は，内分泌反応を伴うため学生にとって理解が難しい。そこで，生体は恒常性を保つことを想ｇ起できることから解説した。生体が常に一定の状態を保つ原滝があること，そのために内部環境がどのように働くかを図示することで，理解が深まった。学生からは，「ホメオスタシスの意味がようやくわかった」「人体はすごい働きがある」「生体が回復するために表れる反応は，正常な過程なんだとわかった。そのためにどんな看護をすればよいか，看護と解剖や生理学のつながりがわかりかけた」と反応があった。
27）がんの化学療法，放射線療法を受ける患者の看護について理解を深めるための学生同士の協働学習を通した実践 （奈良学園大学3年次生）	平成28年　9月 ～ 平成29年　1月	がん治療における化学療法は目覚ましい勢いで変化している。それに伴い，有害事象も多様化している。臨地実習において，がん化学療法で使用されている薬剤，その有害事象の種類，好発時期を学生と共に調べ，薬剤特有の有害事象とその好発時期について学生カンファレンスの時間を利用し発表できるようにした。知識を他学生に伝えることや他学生からの質問により，学びが深まった。学生カンファレンスで共に学びあう中で，どのような看護が学生として提供できるのか，文献を用いながらディスカッションした。学生は自身の看護計画の中にディスカッションした内容を盛り込み，実践し，再度，学生カンファレンスで報告会を行うことができた。また，一部の学生は，フェイススケールを毎日用い，自身の提供した看護計画の実施を評価できた。 放射線療法も同様に協働学習する中で，皮膚障害に着目し看護と患者指導につなげることができた。
28）がんの集学的治療を受ける患者の疼痛管理と疼痛に関連する精神症状との関連の理解 （奈良学園大学2年次生対象）	平成28年10月～ 平成28年11月	がん治療は集学治療を基本とし，その中で患者のQOLの低下や闘病意欲を低下させる原因は疼痛である。疼痛は，精神症状，特に抑うつ状態と関連があることが明確化されており，看護では疼痛と抑うつに特化した介入を行い成果を上げている。そのような研究論文を紹介し，わかりやすく解説した。我が国のがん疼痛について厚生労働省が出した指針を紹介し，がん疼痛の原因から，薬剤の使用方法のフローなどを解説した。学生は，「疼痛にも種類があることが分かった」「薬の使い方も決まりがある」など理解できた。
２　作成した教科書，教材 1）国際的動向を鑑みた資料の作成 （奈良県立医科大学看護学部，1年次，2年次学生対象，梅花女子大学保健学部2年次生対象，奈良学園大学3年次学生対象）	平成20年 4月～ 平成22年 3月 平成25年 4月～ 平成28年 3月 平成28年 4月	医療の進歩はめざましく，医療のエビデンスは刻々と変化する。自身が提供する援助の基準をどのように確認すればよいのか，また最新情報はどのように入手すればよいのかを知ることが，今後の医療従事者には必要である。それを理解すると共に，世界基準でとらえることができるための初段階として，授業資料を作成した。例えば，職業性ストレス軽減のために策定されているThe National Institute for Occupational Safety and Health (NIOSH)のガイドライン，安全を守るための感染に関してThe Centers for Disease Contorol and Prevention(CDC)ガイドラインを原文で紹介，また国内の吸引ガイドライン，成人喘息患者のガイドラインなどを紹介するなどの教材作成を行なった。特にアメリカの基礎看護学のテキストの図を利用することで，学生は理解しやすかったと反応があった。

事項	年月日	概　　要
2）エビデンスに基づく看護技術理解のための資料作成 （奈良県立医科大学看護学部1，2年次学生対象）	平成20年 4月～ 平成22年 3月	看護技術に関する現時点でのエビデンスがどこまで明確にされているのか，研究論文を紹介している。研究論文を紹介しながら，どの程度の効果が明らかにされているのか，またその効果を得るためには具体的な材料，時間，方法はどのようなものか理解できるようにした。
3）安全な看護技術を提供するための医療安全推進のための情報紹介 （奈良県立医科大学看護学部1，2年次学生対象，梅花女子大学保健学部2年次生対象）	平成20年 4月～ 平成22年 3月	医療安全は，看護師にとって絶対的に遵守できる必要がある。しかし，そのエビデンスやルールは常に変化している。このような変化に学生が対応できるよう，看護師としてどのように正しい情報にアクセスすればよいかなどを紹介した。例えば，医療安全や医療事故は日本看護協会のホームページに最新情報があることを紹介した。
4）効果的なフィジカルアセスメントを行うための教材作成 （奈良県立医科大学看護学部2年次学生，奈良学園大学2年次生対象）	平成20年 4月～ 平成22年 3月 平成28年 4月	人体の解剖，および生理学に関して，医学生または研修医が用いる詳細に記載している文献から抜粋した補助教材を作成した。各部の正式名称，日常生活時における人体の機能が理解できるようにし，フィジカルアセスメント演習で活用できた。
5）医療安全を向上するための教材作り （奈良県立医科大学看護学部1，2年次学生対象，梅花女子大学保健学部2年次生対象）	平成20年 4月～ 平成22年 3月 平成25年 4月～ 平成28年 3月	安全を守る技術（無菌操作）では，無菌物のパック内にごく小さな異物を同時に入れ込み，異物混入が確実に見つけれられているかを確認できる教材を作成した。その他，有効期限切れを多数の無菌物の中に数個混ぜておき，確実に確認ができているか見つけられるように作成した。確実に有効期限または異物混入を確認していない学生もおり，その内容を即時フィードバックすることで，学生自身が確実に確認できていなかった部分が明らかになるようにした。学生は，「ちゃんとみているつもりでもみていなかった」「つい，有効期限の確認を抜かしたら，期限が切れていた。『つい』が，患者にとって危険なのもになることを痛感した」と，医療安全に対する経験値が深まった。
6）精神症状の理解のための補助教材作成 （兵庫医療大学看護学部2年次学生対象）	平成23年 4月～ 平成25年 3月	精神症状を理解するために，スヌーピーのキャラクターを用いた補助教材を作成した。例えば，不安と恐怖の違いをチャーリーブラウンの不安，その妹のサリーの恐怖についてマンガを用いることでその違いを理解しやすくした。学生は，不安と恐怖の違いがよくわかったと反応があった。
7）対象の感情理解のための補助教材作成 （看護学部2年次学生対象）	平成23年 4月～ 平成25年 3月	対象の感情理解を目的に，映画を用いて説明した。映画の主人公の苦悩から，日常生活に影響する症状がどのような苦痛を及ぼしているかを思考するように促した。学生は，症状を理解しやすくなり，対象がもつ感情を理解するとともにどのようにかかわるか考える動機づけとなった。
8）成人期にある対象のメンタルヘルスの理解 （兵庫医療大学看護学部看護学部2年次学生対象）	平成23年 4月～ 平成25年 3月	新聞，雑誌記事およびインターネットによる，成人期のうつ病，依存症に関する内容を紹介した。インターネットの記事では，正しくない情報を紹介し，医療者としての正しい知識をもって，情報を理解できるようにした。

事項	年月日	概　　要
9）成人期にある疾患を持つ対象のメンタルヘルス理解 （兵庫医療大学看護学部看護学部3年次学生対象）	平成23年 4月～ 平成25年 3月	研究論文を紹介し，がんをはじめとする身体疾患を持つ対象がもつ精神症状に関して紹介した。学生は，「患者さんは不安だけををもつと思っていたが，うつ病も多いことがわかった。身体も精神も観察できなければいけない」と感想をもった。
10）抽象的な看護技術を理解するための教材の工夫 （兵庫医療大学看護学部看護学部2年次学生対象）	平成23年 4月～ 平成25年 3月	看護学の援助の一つに「寄り添う」ことの大切さがあるが，言葉では理解しにくい。よって，スヌーピー漫画を用いた教材作成を行った。学生は，寄り添われることで対象が安心感をもつことが具体的に理解できたと評価した。
11）精神症状と，身体のつながりに関する理解のための教材 （兵庫医療大学看護学部看護学部2年次学生対象）	平成23年 4月～ 平成25年 3月	看護問題で挙げられる頻度が多い「不安」に関して，その定義と，不安のレベル，不安のレベルに応じた身体の変化が理解しやすいように教材を作成した。不安に関する全身の臓器，神経を一覧できるよう解剖学などから資料を取り込み用いた。学生からは，不安は傾聴するんだと思っていたが，身体の変化があることを知って驚いた，という感想をもち，不安が及ぼす身体の変化が理解できたと評価した。
12）成人期にある対象の問題解決能力向上のためのペーパーペイシェント作成 （兵庫医療大学看護学部看護学部3年次学生対象）	平成23年 4月～ 平成25年 3月	慢性疾患をもち，社会復帰を目指す対象のケアを展開するための事例を作成した。入院前の日常生活から，入院に至るまでの経緯，データ，健康を維持するための本人価値観，入院してからの治療への態度，日常生活，社会復帰への希望などを記載した。主に，社会復帰するためのセルフケアについて看護過程が展開できるように作成した。
13）身体から精神までを包括するためのアセスメントシートの作成 （兵庫医療大学看護学部看護学部4年次学生対象）	平成23年 4月～ 平成25年 3月	総合実習に使用できるように，精神疾患を持つ対象を理解するために，精神症状だけでなく，精神症状が及ぼす身体への影響をアセスメントするための用紙を作成した。精神看護学教員全員で作成した。
３　教育上の能力に関する大学等の評価		
1）奈良県立医科大学（基礎看護学）	平成20年 4月～ 平成22年 3月	基礎看護技術Ⅰ～Ⅳ，基礎看護学実習Ⅰ，Ⅱに関して，学生評価は5段階で平均3.8以上であった。
2）兵庫医療大学（精神看護学）	平成22年11月 ～ 平成25年 3月	精神看護学援助論，精神看護学実習ともに，学生評価は5段階で4.2以上あった。
3）梅花女子大学（基礎看護学非常勤）	平成25年 4月 ～ 平成26年 3月	基礎看護学援助論Ⅰ，Ⅱ，Ⅲ，Ⅳはすべての評価項目が5段階で4.0以上あった。
4）奈良学園大学（成人看護学非常勤）	平成28年 4月	ヘルスアセスメント，成人看護学援助論の担当単元の学生評価は，「講義内容の理解：よくわかった92%以上」「資料の見やすさ，活用のしやすさ：よい90%以上」「話すスピード：ちょうど良い90%以上」「パワーポイントのみやすさ：よい92%以上であった。

事項	年月日	概　　要
5）奈良学園大学（成人看護学　専任講師）	平成28年 8月	大学設置・学校法人審議会の教員組織審査において，奈良学園大学保健医療学部看護学科専任講師「早期体験演習」「ヘルスアセスメント」「基礎看護学実習Ⅰ」「基礎看護学実習Ⅱ」「成人看護学援助論Ⅰ（急性期・周手術期）」「成人看護学援助論Ⅱ（慢性期・回復期・終末期）」「成人看護学実習Ⅰ（急性期・周手術期）」「成人看護学実習Ⅱ（慢性期・回復期・終末期）」「統合看護学実習」「卒業研究Ⅱ」可と判定
４実務の経験を有する者についての特記事項		
1）奈良県立医科大学病院看護部研究講師	平成21年 4月～ 平成21年12月	看護職員に対して文献検索方法，文献クリティーク方法の講義アシスタント，および研究グループの継続指導を行なった。指導研究事例3例。
2）大和高田市立病院　4年目看護師対象研修「看護研究」講師	平成21年 4月 ～ 現在に至る	病院看護師に対して研究方法の研修講師を行っている。指導研究事例20例で，全例学会発表ができている。
3）ポートアイランド4大学連携事業 こころ元気講座	平成24年10月	地域住民に対して，ストレスとうまく付き合うための公開講座に携わった。自律神経機器を用いたストレス度合チェック，およびこころと体の健康に関する相談を担当した。
4）播磨看護専門学校教員対象　教育方法ワークショップファシリテーター	平成25年 8月	看護専門学校教員を対象に看護教育方法論のディスカッションファシリテーターを行った。
5）大和高田市立病院看護師対象　補完代替療法を取り入れた看護援助講師	平成25年11月	当該病院の要望により，睡眠の促進，安楽を目的とする補完代替療法の一つとして，看護に用いるためのアロマセラピーの技術について講演とともに実際を行った。
6)大和高田市立病院がん患者サポート「さくら会」 ストレス軽減としてのアロマセラピー講師	平成28年10月	乳がん患者の患者会の講演会で，ストレス軽減のためのアロマセラピーの特徴，使用の注意点，自宅で行える簡単な方法について講演した。
５　その他		
1）看護学部学生の国家試験対策（学年全体）	平成21年 8月 ～ 平成22年 1月	奈良県立医科大学医学部看護学科の担当学生の国家試験模擬試験の判定や学生の正答解答を分析し，個別に国家試験対策を行なった。また，学生の国家試委員と連携し，模擬試験，集中講義の案内などのフォローを行った。
2）看護学部学生の国家試験対策（個人に対する指導）	平成21年 8月 ～ 平成22年 2月	学生模擬試験判定の思わしくない学生に対し，学生個々の学習状態の確認を行い，学習計画を共に考え，学習進行状況を随時確認した。学生は，学習方法の改善ができ，保健師，看護師とも合格した。
3）兵庫医科大学医学部，兵庫医療大学看護学部，薬学部合同「チーム医療演習」チューター （1単位・必修科目）	平成24年10月～ 平成25年 3月	当該大学の医学部3年次，看護学部，薬学部4年次の学生の64グループに対して実施するチーム医療演習のチューターを行った。設定されたシナリオの患者に対するQOLの向上を目指し，医療職種ごとに問題を明確化する中で，他職種とのコミュニケーションの実際，問題解決能力，社会的責任，チームワークの必要性を体験しチーム医療の実際が学べた。

事項	年月日	概　　要
4）大阪労災病院看護専門学校非常勤講師 「メンタルヘルス」集中講義・演習	平成25年 4月～ 現在に至る	看護専門学校2年生を対象に，メンタルヘルスの講義，演習を行っている。メンタルヘルスを保持するソーシャルスキルの一つの方法として，アサーショントレーニングを3日間で15時間の集中講義を実施している。
5）大阪労災病院看護専門学校非常勤講師 「看護研究」	平成27年 4月 ～ 現在に至る	看護専門学校2年次生を対象に，看護研究方法論の第1段階として，適切な文献検索方法，そのまとめ方，発表までを担当している。30時間/年の講義。

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　　要
1　資格，免許 1）看護師免許	平成 2年 6月	第707203号
2）オーストラリア　クイーンズランド州立 グリフィス大学保健学部看護学科　通信課程	平成10年10月～ 平成12年 3月	通信課程による看護学教育 BACHELOR OF NURSING　（番号1354069 68429 ）
3）厚生労働省認定看護教員養成講習会修了	平成13年12月	厚生労働省認定看護専門学校教員養成講習会
4）看護管理者研修（ファーストレベル）修了	平成14年 1月	日本看護協会認定看護管理者
5）臨床教育学（修士）	平成19年　3月	武庫川女子大学　第269号
6）日本アロマセラピー学会認定看護師	平成21年 9月～ 現在	日本アロマセラピー学会認定看護師
7）看護学（博士）	平成28年 3月	愛知県立大学　看甲第14号
2　特許等 なし		
3　実務の経験を有する者についての特記事項 1）大阪厚生年金病院 手術室看護師	平成19年 7月～ 平成20年 3月	術前訪問，術後訪問を通して，不安の軽減のケアを実施した。特に，不安の強い対象に対しては，病棟看護師との，情報交換による連携を強化した。また，術前に手術室入室までを対象とともにシュミレーションするなど，情報提供することで十分な理解ができるようにし不安の軽減に対するケアを実践した。また，手術中の体温低下予防のための実践方法を検討した。その成果を解説として発表した。
4　その他 1）文部科学省研究助成金（基盤C） 研究分担者：大山末美　（代表：青山　美智代） 題目：「看護技術の修得レベルを適切に評価する取り組み」 助成金額：4,800,000円 （うち，80,000円）	平成20年度～ 平成22年度	看護技術の修得ベルを適切に評価する取り組み看護系大学1年次の学生に対し，看護技術教育の血圧測定・脈拍測定の指導に対し，認知領域・精神運動領域の習熟度を測定するためCWT(Confidence-Weighted Testing:確信度テスト）と天井のビデオで撮影した学生の血圧測定う，脈拍測定場面を用いた。学生のCWT自己評価と教員の評価結果を学生にフィードバックし，ビデオ撮影した学生自身の血圧測定，脈拍測定場面について自己リフレクションを行い，再度CWTを行なった結果，精神運動領域において有意な得点の上昇が認められた。 その成果をThe 1st International Nursing Research Conference of World Academy of Nursing Science で発表した。

事項	年月日	概　　要
2）奈良県立医科大学　オープンキャンパス	平成21年 8月～ 平成21年10月 平成22年 8月～ 平成22年10月	オープンキャンパスに来学した高校生を対象に，バイタルサイン，注射の援助に関する展示，説明を行った。
3）兵庫医療大学における入試広報活動	平成23年 6月～ 平成23年 9月 平成24年 6月～ 平成24年 9月	大阪府，兵庫県内の高校に対して，入試広報を担当する高校の進路指導教師を訪問し，看護学部の教育状況，国家試験対策などの説明を行った。訪問実績6校。
4）兵庫医療大学オープンキャンパス　領域別企画	平成23年 8月 ～ 平成23年11月 平成24年 8月 ～ 平成24年11月	オープンキャンパスに来学する高校生，その保護者が興味を引く内容の企画，運営を行った。臨地実習での学生のカンファレンス内容を例示し，学習内容を理解してもらうと共に，高校生への興味・関心を高めるために心理テストの紹介と実施を行った。
5）兵庫医療大学　精神看護学実習要項作成	平成23年11月～ 平成24年 3月	精神看護学実習における，学習課題，学ぶ内容，健康管理，注意事項を担当し作成した。
6）兵庫医療大学　実習要綱作成	平成24年 5月～ 平成24年12月	看護学臨地実習全領域に共通する実習要綱の，健康管理，感染予防，インシデント発生時の対処部分を臨地実習委員会メンバーとして作成した。
7）兵庫医療大学1年次対象学生生活アドバイザー	平成23年 4月～ 平成23年12月平成24年 4月～ 平成24年12月	新入学学生が，早期に大学生活に適応できるよう，各部の学部生を混合した小グループに対する生活アドバイザーを行った。日帰り旅行，懇親会などを学生と企画し，それを通じて各学部の交流，学生生活上の不安などの解決ができるよう進めた。
8）LTD（Learning through Discussion)を用いた学士課程入門　企画・運営 （兵庫医療大学看護学部1年次学生対象・1単位必修科目）	平成24年 4月～ 平成25年 3月	大学で学ぶためのスチューデントソーシャルスキルおよびスタディースキルにおける基礎的能力を身に付けるために，大学での学び方を学ぶ目的でLTD（Learning through Discussion)を用いたグループディスカッションのチューターを行った。学生が課題に対する事前学習に対して，ディスカッションを通して学び方を学べるようかかわった。この成果を「看護学部における初年次教育の導入と成果」として論文にまとめた。学士課程入門企画・運営メンバーとして実施した。
9）兵庫医療大学2，3，4年次生対象リフレクション員会メンバーとしての企画，運営および， チューター	平成24年10月～ 平成25年 3月	2，3，4年次生対象に，各年次におけるの学習到達度をみきわめ，今後の学習到達のための課題と方略を明確化するために実施した。リフレクション委員会メンバーとしての企画運営，チューターを行った。
10）兵庫医療大学3年次リフレクションにおける卒業生，4年次学生の参画による学習動機づけの促進の試み	平成24年10月～ 平成25年 3月	3年次から開始する臨地実習への学習の動機づけとして，卒業生および4年次生に参画してもらった。先輩たちの臨地実習での楽しかったこと，学んだこと，不安であったことを聴くと共に，どのように問題を解決したかをスピーチしてもらった。先輩たちが語るスピーチ内容は，3年次の学生たちには現実感が強く，また希望となった。3年次学生からは，先輩のスピーチが非常に好評であり，勉強しなければならない必要性と，勉強して乗り越えることであんなに自信に満ちることができるんだという感想があった。リフレクション委員として提案，運営した。

事項	年月日	概　　要
11）公益社団法人日本アロマ環境協会研究助成金 研究代表者：大山末美 題目：「セルフハンドトリートメントの縦断的研究」 助成金額：1,000,000円	平成24年 4月～ 平成25年 3月	成人期で社会的役割をもち，かつ近年ストレスの高い介護職員を対象に精油を用いて継続的なセルフハンドマッサージを実施することでストレス評価としたバーンアウト，STAI（不安尺度）の低下の有無を検討した。精油使用群，オイル群，コントロール群に4週間自身でハンドマッサージを実施した結果，コントロール群と精油群，オイル群に有意差はなかった。しかし，反復測定一元配置分散分析の結果精油群は1週間目でオイル群，コントロール群よりバーンアウト，不安得点が有意に低下した。精油を用いた自身で行うハンドマッサージは1週間継続することでストレス軽減につながることが示唆された。 その成果を，The 1st International Congress of Aromatherapyで発表およびアロマテラピー学雑誌に論文投稿した。
12）臨地実習委員会活動　ガイダンス運営 （兵庫医療大学）	平成24年 4月～ 平成24年 9月	臨地実習委員会メンバーとして，実習ガイダンスの運営，進行，資料作成に携わった。各領域の資料収集，ガイダンス時間調整，ガイダンス内容の精選などをメンバーと共に行った。また，統合実習では，学生の希望する領域決定の参考資料の作成，領域決定方法の検討と実際をメンバーと共に行った。
13）臨地実習指導者を招いた実習指導者会の運営 （兵庫医療大学）	平成23年 5月～ 平成23年 7月 平成24年 5月～ 平成24年 7月	臨地実習指導者を招いて，本年度の実習の評価，学生の学習内容，単位修得状況，インシデント報告および，次年度度にむけての実習内容の説明会を実施した。精神看護学領域教員と共に企画・運営を行った。
14）3.4年次学生保護者対象の保護者会運営 （兵庫医療大学）	平成24年 4月 ～ 平成24年10月	臨地実習および国家試験に向けての保護者に対して，学習環境の提供，日常生活，アルバイト，成績評価に関する保護者会の運営を他の看護学部教員と運営した。
15）公益社団法人　安田医学記念財団　平成25年度　癌看護研究助成（大学院生用） 研究代表者：大山末美 題目「がん患者の抑うつを早期発見するためのアセスメントツール開発における基礎的研究」 助成金額：300,000円	平成25年 4月～ 平成26年 3月	がん患者の抑うつに関する文献検討結果から抽出した内容をDSM-Ⅳ-TRのエピソードに基づき整理し，32項目を抽出した。がん患者の精神症状などの論文を筆頭で1篇以上執筆している，がん看護専門看護師，精神看護専門看護師を対象に修正デルファイ法による調査・会議を実施した。その結果，24項目の抑うつ症状を抽出した。抽出した項目の内容妥当性指数（CVI）は0.8以上あり，内容妥当性の確保ができた。 その成果を癌研究助成成果報告集13で報告した。
16）がん患者の抑うつを早期発見するためのアセスメントツール作成における基礎的研究 （研究報告）	平成27年 3月 癌研究助成成果報告集13， pp.132-135	がん患者の抑うつに関する文献検討結果から抽出した内容をDSM-Ⅳ-TRのエピソードに基づき整理し，32項目を抽出した。がん患者の精神症状などの論文を筆頭で1篇以上執筆している，がん看護専門看護師，精神看護専門看護師を対象に修正デルファイ法による調査・会議を実施した。その結果，24項目の抑うつ症状を抽出した。抽出した項目の内容妥当性指数（CVI）は0.8以上あり，内容妥当性の確保ができた。 A4版，総150ページ
17）卒業研究執筆要項作成 （奈良学園大学）	平成28年10月～ 現在に至る	卒業研究ワーキンググループにおいて，学部学生の卒業研究執筆要項を主担当者として作成した。

事項	年月日	概　　要
18）看護学部統合実習要綱作成 （奈良学園大学）	平成28年 9月～ 現在に至る	成人看護学領域の統合実習の目的，学習内容，方法について領域担当者として実習要項を主担当として作成した。
19）高校生に対する看護を理解するための模擬授業 （奈良県立五條高等学校）	平成29年 2月	高校2年生に対して，看護を理解するために，手術を受ける対象の看護に関する模擬授業を行った。高校生からは，「思っていた以上に看護師さんは一つ一つの患者の動きをしっかり観察していてすごいと思った」「絶対看護師になりたいと思った」など多数の感想を得ることができた。

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
（著書） 1.介護実習入門（介護福祉養成シリーズ5）	共著	平成24年 3月	黎明書房	介護をする人にとって必要な介護の現状，倫理，原則，特徴から実習で必要な技術に関するテキストである。 担当部分：第4節5頁で，「コミュニケーションの実際」であり，内容は，対象者と関わる際のコミュニケーション方法の具体適齢とその理由を記述当した。（A5版，全120ページ/担当部分：pp.61-66） 著者：守本とも子，星野政明，大山末美，他
（学術論文） 1）アロマセラピストの職業性ストレス因子の探索 （原著）（査読付）	共著	平成23年 5月	日本アロマセラピー学会誌，vol.10，No.1，pp.31-38	成人期で専門的職業をもつアロマセラピストのストレス因子とバーンアウトの関係を共分散構造分析において解析した。ストレス因子はバーンアウトとやや強い相関を示した。アロマセラピストの職業性ストレスモデルを作成し，適合度を確認した。セラピストのストレスは職業性への不安・技術不足に対する不安がやりがい感の低下に繋がることが示唆された。 担当部分：研究計画，データ収集，分析，執筆 著者：大山末美，宮里文子，大門美智子，神保太樹
2）看護専門学校教員の職業性ストレスとバーンアウトの関連 （研究報告）（査読付）	単著	平成24年 3月	日本看護福祉学会誌，Vol.17 No.2，pp.79-92	成人期で対人援助職である看護専門学校教員を対象とした職業性ストレスとバーンアウトの関連を調査した。看護専門学校教員のストレス因子は4因子抽出された。看護専門学校教員の職業性ストレス4因子とバーンアウトの下位因子のうち「情緒的消耗感」「脱人格化」と関連していることが明らかとなった。
3）看護専門学校教員のバーンアウトと対処能力 （原著）（査読付）	単著	平成25年 4月	日本看護学会論文集精神看護，2014，pp.215-218	成人期で対人援助職である看護専門学校教員を対象にバーンアウトとその対処能力（SOC）を検討した。バーンアウトの要因において，年齢，経験年数は有意差がなく，SOC高得点群，つまり対処能力の高い群はバーンアウト下位因子の得点が有意に低かった。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
4）看護学部における初年次教育の導入と成果 （研究報告）（査読付）	共著	平成26年11月	兵庫医療大学紀要　，第1巻　第2号，pp.43-54	看護学部1年次生を対象に初年次教育プログラムを科目とした導入の成果と今後の課題を検討した。行動目標8項目，スタディースキル習得のための本科目の有用性8項目を評価としてアンケート調査を行った。行動目標の到達度は，「グループディスカッションに積極的に参加できた」と回答した者が一番多く，科目の成果では，「他者の意見を聴く力」が一番多かった。科目の目標達成や，スタディースキルの習得ができたと肯定的に評価する学生が多いことが明らかとなった。 担当部分：データ収集・分析 著者：鈴木久美，西村明子，工藤里香，高山京子，大山末美 他
5）介護職員における継続的なセルフハンドトリートメントのバーンアウトと不安に対する効果 （原著）（査読付）	共著	平成27年 3月	アロマテラピー学雑誌，Vol.15，No. 1，pp.104-114	成人期で社会的役割をもち，かつ近年ストレスの高い介護職員を対象に精油を用いて継続的なセルフハンドマッサージを実施することでストレス評価としたバーンアウト，STAI（不安尺度）の低下の有無を検討した。精油使用群，オイル群，コントロール群に4週間自身でハンドマッサージを実施した結果，コントロール群と精油群，オイル群に有意差はなかった。しかし，反復測定一元配置分散分析の結果精油群は1週間目でオイル群，コントロール群よりバーンアウト，不安得点が有意に低下した。精油を用いた自身で行うハンドマッサージは1週間継続することでストレス軽減につながることが示唆された。 担当部分：研究計画，データ収集，分析，論文執筆 著者：大山末美，宮里文子，大門美智子，今西二郎
6）緩和ケア病棟におけるがん患者の抑うつを早期発見するためのアセスメントに関する基礎的研究 （研究報告）（査読付）	共著	平成27年 9月	日本がん看護学会誌，Vol.29,No.2，pp.79-90	全国で同意が得られた80病院250名の看護師を対象にがん患者の抑うつを早期発見するためのアセスメントに関して調査した。客観的観察項目を“いつもする”“時々する”合わせて75%以上あった項目は35項目中32項目，主観的質問項目は37項目中10項目，コミュニケーションスキルは22項目中19項目であった。決定要因は“いつもする”が75%以上あった項目は38項目中20項目であった。客観的観察項目と主観的質問項目を因子分析し，抽出した各因子を目的変数に，コミュニケーションスキルの平均点，看護職・緩和ケア経験年数を説明変数に重回帰分析を行った結果，コミュニケーションスキルと有意に相関があった（β=0.247～0.414，$p<0.001$）。 担当部分：研究計画，データ収集，分析，論文執筆 著者：大山末美，深田順子，鎌倉やよい

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
7）がん患者の抑うつを早期発見するためのアセスメントツールの開発 ＜博士論文＞ （博士後期課程担当教員5名の審査あり）	単著	平成28年 3月	愛知県立大学大学院看護学研究科博士後期課程　博士論文	成人期から老年期にあるがん患者の抑うつを早期発見するために、DSM-Ⅳ-TRの大うつ病エピソードに沿ったアセスメントツールを開発した。項目の内容妥当性は，修正デルファイ法で，パイロットスタディにおける2名の看護師の評定間信頼性，5分以内の実施可能性を確保した24項目のアセスメント項目が開発できた。アセスメント項目をがん患者400名に実施した。ベック抑うつ質問票（以下，BDI-Ⅱ）を至適基準に，項目選定分析，基準関連妥当性，信頼性分析，アセスメントツールの抑うつ重症度を確認した。結果，I-T分析，G-P分析の結果21項目となった。5因子21項目を検証的因子分析し，すべてのパス係数は0.48～0.99（p<0.001)の範囲であり，重相関係数は，0.32～0.88であり，構成概念妥当性を確認した。BDI-Ⅱの重症度分類別にアセスメントツール21項目の合計得点を算出し，Kruskal-Wallis検定を実施した。その結果，極軽度と軽度，極軽度と中等症，極軽度と重症に有意差があり（それぞれ，p=0.016，p=0.007，p=0.011），基準関連妥当性が確認できた。α係数は0.651～0.979であり，内的整合性が確保できた。これらの結果から妥当性，信頼性を確保したアセスメントツールが開発できた。 A4版，全137ページ
8）医療安全の観点から見た時短勤務者退勤後のインシデント調査 （原著）（査読付）	共著	平成28年 4月	日本看護学会論文集，看護管理，2015，pp.267-269	本研究は，日勤帯で時短勤務者が不在となった時間帯におけるヒヤリハットの内容･実態を調査し医療安全の観点から看護業務の改善点を検討することを目的とした。A病院8病棟にフルタイムで勤務する看護師を対象に，時短勤務者退勤後のヒヤリハットに関して調査した。ヒヤリハットの内容は，薬剤（点滴）4件，輸血1件，治療処置1件，医療機器等1件，療養上の世話1件，その他5件であった。看護師経験年数別でのヒヤリハット件数は，1～3年目はヒヤリハット報告は4.3%，4～10年は8.3%，11年以上は3.2%であった。時短勤務者退勤後のヒヤリハットは薬剤が多く，看護師経験年数とは関連がなかった。 担当部分：研究計画，データ分析，論文執筆（結果部分） 著者：中谷亜輝子，河本昌美，西北千恵，野間田紗安佳，大山末美
9）病棟看護師における弾性ストッキング装着パンフレットの有用性の検討 （原著）（査読付）	共著	平成28年 4月	日本看護学会論文集，慢性期看護，2015，pp.210-213	成人期から老年期の対象に，手術前後に深部静脈血栓予防目的である弾性ストッキングの効果を最大限にするために，病棟看護師が適切に弾性ストッキングを装着できるように教育した。パンフレットおよび教育内容は，弾性ストッキングを開発・販売している2社から，内容妥当性を得た。パンフレットを用いた教育前後に，弾性ストッキング使用看護師に10項目の弾性ストッキング装着チェックアンケート調査した。結果，パンフレットを用いた教育前は，10項目中6項目について「問題あり」と回答した割合が有意に高かったが，教育後は10項目7項目が「問題なし」と回答した割合が有意に高かった。 担当部分：研究計画，データ分析，論文執筆（結果部分） 著者：佐々木修吾，吉岡香，北側麻耶，浅田淳，大山末美

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（その他）				
「解説」 1）「体温管理に必要な外回り看護のスキル」	共著	平成20年 3月	月刊実践手術室看護 Vol.1，No.11,pp.82-85	手術時における体温変化のメカニズムから体温管理の重要性を述べた。体温管理の実践として，体温測定の実際と手術室入室から退室までの体温管理の実際を写真などで紹介した。 担当部分：体温変化のメカニズム，体温管理の実際部分の紹介，執筆。 共著者：平野淑美，大山末美，竹内千佳
2）高齢者医療におけるアロマセラピーの可能性	共著	平成23年 5月	Aromatopia，20巻3号，pp.3-8	アロマセラピーがもたらす効果に関して高齢者や認知症患者への効果に関して解説した。 担当部分：認知症におけるアロマセラピーの使用方法を解説，執筆。 共著者：神保太樹，糸数七重，大山末美，梅本充子
「研究報告」 1）がん患者の抑うつを早期発見するためのアセスメントツール作成における基礎的研究	単著	平成27年 3月	癌研究助成成果報告集 13，pp.132-135	がん患者の抑うつに関する文献検討結果から抽出した内容をDSM-Ⅳ-TRのエピソードに基づき整理し，32項目を抽出した。がん患者の精神症状などの論文を筆頭で1篇以上執筆している，がん看護専門看護師，精神看護専門看護師を対象に修正デルファイ法による調査・会議を実施した。その結果，24項目の抑うつ症状を抽出した。抽出した項目の内容妥当性指数（CVI）は0.8以上あり，内容妥当性の確保ができた。 A4版，総150ページ
「国際学会発表」 1）The effects of training regarding knowledge and technique to improve hand-hygiene behavior among Japanese Nurses（日本人看護師における衛生学的手洗いの知識と技術改善のためのトレーニングの効果）	—	平成21年 1月	The Joint Scientific Meeting of IEA Western Pacific Region and Epidemiological Association Conference，S254 Saitama Prefectural University Saitama,Japan	病棟勤務看護師に対して，感染予防の基本である衛生学的手洗い方法をCDCガイドラインに基づき感染予防教育を病院看護師を対象に実施し，予防教育前後の調査を行なった。結果，CDCガイドラインに基づく手洗い方法を実施できる看護師割合の増加が認められた。 担当部分：データ分析 共著者： HUJITA Hisako，SUDOU Seiko ,OHYAMA Suemi
2）Burnout on Teachers at Nursing School（看護専門学校教員のバーンアウト）	—	平成21年 7月	The First Asia-Pacific Conference on Health Promotion and Education ，439 Makuhari Messe International Hall，Chiba，Japan	看護教員に対して日本版Maslach Burnout Inventoryを用い，年齢・教員経験年数別の調査を行なった。一元配置分散分析の結果，年齢別では31-35歳の群と36-40歳・41-45歳の群間にバーンアウトの主症状とされる情緒的消耗感の得点が他の症状よりもに有意に高かった。経験年数別では得点間に有意差は認められなかった。 著者：SUEMI OYAMA

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
3) A study of student's confidence regarding their knowledge and psychomotor skills on fundamental nursing skills using Conference-Weighted Testing(CWT)（確信度テスト（CWT）を利用した基礎看護技術教育における学生の認知領域と精神運動領域の習熟度に関する研究）	—	平成21年 9月	The 1st International Nursing Research Conference of World Academy of Nursing Science , 231 kobe,Japan	看護系大学1年次の学生に対し，看護技術教育の血圧測定・脈拍測定の指導に対し，認知領域・精神運動領域の習熟度を測定するためCWT(Confidence-Weighted Testing:確信度テスト）と天井のビデオで撮影した学生の血圧測定う，脈拍測定場面を用いた。学生のCWT自己評価と教員の評価結果を学生にフィードバックし，ビデオ撮影した学生自身の血圧測定，脈拍測定場面について自己リフレクションを行い，再度CWTを行なった結果，精神運動領域において有意な得点の上昇が認められた。 担当部分：データ分析 共著者：Michiko Aoyama, Youichi Ishikawa, Yumi Tamura, Takao Morita, Mieko Miyake, Seiko Sudou, Suemi Ohyama
4) Mental Health among teachers on nursing school（看護教員のメンタルヘルス）	—	平成22年11月	2nd,Japan China Korea Nursing, 215-216, conference,Kyoto,Japan	看護教員の首尾一貫感覚（SOC）とバーンアウトとの相関関係を確認した。SOCとバーンアウト得点とにやや強い相関があった。 著者：SUEMI OYAMA
5) Effects of hand treatment on the burnout and anxiety（バーンアウトと不安に対するハンドトリートメントの効果）	—	平成24年 9月	The 1st International Congress of Aromatherapy, Program&Abstract, 95	ハンドマッサージが副交感神経を有意にし，リラックス状態を導くことから，ハンドマッサージ前後にstate-trait anxiety inventory（STAI）とpines burnout inventoryを用いてハンドマッサージの効果を検討した。結果，両得点ともハンドマッサージ後の得点が有意に低下した。 担当部分：研究計画，データ収集，分析，抄録執筆 共著者：Suemi Oyama, Aya Miyazato, Michiko Daimonn, Jiro Imanishi
「国内学会発表」 1) 看護教員のストレス，バーンアウト，SOCとの関係	—	平成19年12月	第27回日本看護科学学会学術集会，352	看護教員のストレス因子に着目し独自に作成したストレス調査票，バーンアウトスケール，SOCスケール（メンタルヘルス保持要因）を用い，因子分析後の因子得点の相関を調べた。結果，ストレス因子得点とバーンアウト因子得点には比較的強い正の相関を認め，SOC得点とストレス因子得点・バーンアウト因子得点との間に比較的強い負の相関を認めた。 著者：大山末美
2)アロマセラピストの職業性ストレスの検討	—	平成21年10月	アロマセラピー学会誌，9巻2号 P88	アロマセラピスト200名を対象にストレス因子を探索した。ストレス因子は，3因子13項目が抽出され，3因子はそれぞれ「スキルへの不安」「やりがい感の低下」「人的資源の乏し さ」と命名した。Cronbach's α係数はそれぞれ0. 69，0. 67，0. 66であった。 担当部分：研究計画，データ収集・分析，執筆 共著者：大山末美，宮里文子，大門美智子，神保太樹

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
3）精油別にみた芳香付マスク使用時における看護師の疲労度の検討	—	平成22年 6月	日本アロマセラピー学会関西地方会講演集，21	4種類の精油の香りを付着したマスクを用い，勤務前後の身体的・精神的疲労度を調査した。結果，精神的疲労度得点の減少が有意にみられたが身体的疲労度得点には有意差が見られなかった。4種類の精油の群間比較を一元配置分散分析で行い，リナロール含有量の多いローズマリーに精神的疲労度得点の有意差を認めた。 担当部分：研究計画参画，データ分析，結果執筆 共著者：片岡美穂，芦高瞳，渡邊智美，大山末美
4）統合失調症患者の摂食・嚥下に関する研究の動向	—	平成23年 3月	日本医療福祉情報行動学会学術総会，第27回論文集，78	統合失調症をもつ対象の医療事故において，摂食・嚥下による窒息が多いことに着目した。摂食・嚥下に関する研究は医師・理学療法士による報告が半数であり残りの半数は看護であった。摂食・嚥下による窒息に対しての効果的な援助についてはまだ明らかにされておらず，事例研究が多くあったことから，今後，要因・予防ケアに関する研究の必要性が示唆された。 著者：大山末美
5）がん患者の抑うつに関する研究の動向と看護における課題	—	平成24年12月	日本看護科学学会第33回学術集会，389	がん患者の抑うつに関する文献検討を実施した。看護学系論文では，抑うつとQOLの関連を検討していたものが多かったが，今後，抑うつと身体症状の関連，社会的側面との関連における検討が必要であることが示唆された。 担当部分：研究計画，データ収集，分析，執筆 共著者：大山末美，深田順子
6）看護専門学校教員のバーンアウトと対処能力	—	平成25年9月	第44回日本看護学会精神看護学術集会抄録集，59	看護専門が学校教員の精神健康の維持のためのバーンアウトの現状と対処能力との関連を検討した。バーンアウトの下位因子である「個人的達成感の後退」が他の下位因子より高かった。これは，先行研究にある対人援助職に対する結果と同様であった。対処能力が高い群はバーンアウトのすべての下位因子も低い（バーンアウトしていない）状態であった。対処能力を高めることがバーンアウト予防につながる方法の一つであることが明らかとなった。 著者：大山末美
7）意図的なコミュニケーションが及ぼす新人看護師への効果の検討	—	平成25年10月	第44回日本看護学会看護教育学術集会抄録集，133	プリセプティーが新人看護師に対して，意図的に承認を行うポジティブフィードバックを行うことで生じる自己効力感の向上と精神的支援の効果を検討した。新人看護師は，先輩看護師であるプリセプティーから承認を得ることで，プリセプティーからの承認前と比較し，1，2ヶ月後ともに，ソーシャルサポート感が有意に向上し，自己効力感の得点も上昇傾向にあった。 担当部分：研究計画参画，データ分析，抄録執筆（結果部分） 共著者：杉田由希，大矢千里，萬家由香，南明希，樋口孝子，大山末美

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
8）がん患者の抑うつに関する研究の動向と看護における課題	—	平成26年11月	日本看護科学学会第33回学術集会，669，389.	がん患者の抑うつに関する文献検討を実施した。看護学系論文では，抑うつとQOLの関連を検討していたものが多かったが，今後，抑うつと身体症状の関連，社会的側面との関連における検討が必要であることが示唆された。 担当部分：研究計画，データ収集，分析，執筆 共著者：大山末美，深田順子
9)看護師経験年数におけるがん患者の抑うつ観察頻度の検討	—	平成27年11月	日本看護科学学会第34回学術集会，669	がん患者に多く合併するうつ病，適応障害の主要症状は抑うつであるが，医療者に見逃されやすいと報告がある。そこで，看護師経験年数とがん患者の抑うつ症状の観察頻度の関係を検討した。緩和ケア経験年数が短いと客観的な観察が十分にできず，抑うつの早期発見が遅れるリスクがあることがわかった。経験年数に関係なくがん患者の抑うつ症状を観察できる必要性が示唆された。 担当部分：研究計画，データ収集，分析，執筆 共著者：大山末美，深田順子，鎌倉やよい
10）医療安全の観点から見た時短勤務者退勤後のインシデント調査	—	平成27年9月	第46回日本看護学会看護管理学術集会抄録集，347	日勤帯で時短勤務者が不在となった時間帯におけるヒヤリハットの内容･実態を調査し医療安全の観点から看護業務の改善点を検討することを目的とした。8病棟において実態調査を行った結果，時短勤務者退勤後のヒヤリハットは薬剤が多く，情報伝達不足に起因する事例が多くを占めていた。また，看護師経験年数とは関連がなかった。 担当部分：研究計画参画，データ分析，抄録執筆（結果部分） 共著者：中谷亜輝子，河本昌美，西北千恵，野間田紗安佳，大山末美
11）病棟看護師における弾性ストッキング装着パンフレットの有用性の検討	—	平成27年9月	第46回日本看護学会慢性期看護学術集会抄録集，123	手術後の肺血栓予防のために，弾性ストッキングの装着は必須となる。しかし，その装着方法は，看護師個人に委ねられており，適切かつ効果的に行えているとは言い難い。そこで，弾性ストッキングの適切かつ効果的な装着方法をパンフレットを用いて看護師に教育することによる有用性を検討した。パンフレットおよび看護師への教育内容は，弾性ストッキング製造販売をしている上位2社からその内容の保障を得た。その結果，装着に問題ありと回答する項目が10項目中6項目から3項目へと減少し，その得点も有意に低下した。 担当部分：研究計画参画，データ分析，抄録執筆（結果部分） 共著者：佐々木修吾，吉岡香，北側麻耶，浅田淳，大山末美

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
12）がん患者の抑うつを早期発見するためのアセスメントツール開発	―	平成28年12月	日本看護科学学会第36回学術集会，PC-21-02	アセスメントツールは，がん患者の精神症状やストレスに関する論文を筆頭で1篇以上発表した，がん看護専門看護師3名，精神看護専門看護師2名を対象に修正デルファイ法でコンセンサスが得られ，内容妥当性を確認した項目に対し，パイロットスタディで評定者間一致率を確認した。377名のがん患者を対象にアセスメントツールを用い，ゴールドスタンダードとして用いたBDI-Ⅱの評価を検討した結果，構成概念妥当性，基準関連妥当性，信頼性が確認できた。 担当部分：研究計画，データ収集・分析，執筆 共著者：大山末美，深田順子，鎌倉やよい

教　育　研　究　業　績　書

平成 29年 3月 31日

氏名　梶村 郁子

研究分野	研究内容のキーワード
看護情報学	電子カルテ、アクセスログ分析、看護業務分析

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例		
成人看護学援助論	2008年4月～011年3月、2014年4月～2015年3月、2016年4月～現在	シミュレーターを用いた学内演習を行った。シミュレーターを用いることにより、実際の患者の身体状況をイメージさせやすくなり、ロールプレイでは実現が難しい臨床現場での学びの再現につながる演習となるように実践した。
成人看護学実習(急性期)	2008年4月～2011年3月、2016年4月～現在	急性期・周手術期にある患者および家族を対象とし、身体的・心理的・社会的な特性を統合的に捉え、侵襲の予測と回避、生体機能の回復、苦痛の緩和、社会生活の適応に向けた全人的な看護実践能力を養うことを目標の下、実習指導を行っている。特に、身体の変化が大きい急性期の患者について、解剖生理、病態生理に基づき、また、周手術期の患者の身体の変化を捉えた上で患者に必要な看護は何かを考える力を獲得することを目指した指導を行っている
成人看護学実習(慢性期)	2016年4月～現在	慢性状況にある患者および家族の健康生活の保持・向上に向けて生活を調整し、QOLの向上をはかるための看護実践能力を養うことを目標に、実習指導を行っている。特に患者の病態だけでなく、生活にも着目した上で、症状マネジメントや継続して治療に取り組むために求められる看護援助とはどのようなものかを考える力を獲得することを目指し指導を行っている。しかし、学生の学力・日々の学習可能な容量には個人差があるため、学生の進捗状況に応じた課題を提示しながら、実習目標を到達できるように指導を行っている
2　作成した教科書，教材		
看護援助論Ⅱでは慢性期・回復期・終末期(奈良学園大学):看護職・看護学生のための「痛みケア」(株式会社ピラールプレス)	2017年3月21日	成人看護援助論Ⅱにおいて終末期の患者を対象とした看護の講義で、終末期の患者の看護の在り方、考え方についての紹介に使用している
成人看護学実習領域実習施設(奈良学園大学)	2016年1～4月	対象病院は大阪国際がんセンター、大和郡山病院、総合病院高の原中央病院と病院規模、看護体制が異なる中、全領域共通の実習目標到達を目指した実習となるため、成人看護学の特色も踏まえた実習展開、実習内容の検討の他、3病院共通の実習目標が到達できるものに、実習内容を病院の看護部と交渉し、学習環境の整備を行った。
3　教育上の能力に関する大学等の評価		
4　実務の経験を有する者についての特記事項		
大阪教育大学 外部講師	2014年12月 2015年12月	養護教諭教員養成課程の学生に対し「看護学Ⅰ(情報倫理)」を担当した
5　その他		

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項		
事項	年月日	概　　要
1　資格，免許		
看護婦免許	平成10年 4月 7日	登録番号：第984008号
保健師免許	平成17年 4月12日	登録番号：第126459号
医療情報技師認定	平成18年11月 1日	認定番号：第20060858号
2　特許等		
3　実務の経験を有する者についての特記事項		
4　その他		

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
（著書）				
看護職・看護学生のための「痛みケア」		2017年3月	88～100頁、株式会社PILAR PRESS	看護職及び看護学生を対象とした最善の痛みにケアについてのテキストである。第Ⅲ部第11章の「ターミナルケアと緩和医療」について現在の日本におけるターミナルケアの在り方などについて執筆した。 共同執筆につき本人担当部分抽出不可能
（学術論文）				
看護必要度を活用した看護支援システムの開発－看護必要度評価及び看護診断・看護計画立案支援の評価－（修士論文）	単著	2008年3月	兵庫県立大学大学院応用情報科学研究科応用情報科学専攻ヘルスケア情報科学コース	評価者養成を必要とする看護必要度評価の支援および看護必要度を活用した看護計画立案を行うシステムを開発し、評価支援の有効性と計画立案支援の有効性について検討した。評価漏れの減少、模範解答との一致率の上昇を認め、本システムの看護必要度評価支援の有効性はあったが、評価漏れが無くならなかったこと、評価時間の延長も見られた。また、 看護必要度は看護診断を行うためのひとつの指標として活用することは有効であるが、有効な支援のためには、今後さらなるシステムの開発が必要である。
看護必要度を活用した看護支援システムの開発と今後の課題	共著	2009年6月（査読付）	医療情報学28巻(3号)、147-153頁、日本医療情報学会	看護必要度評価支援システムを開発し、システムの有効性について、チェック票を用いた看護必要度評価と、システムを用いた看護必要度評価の結果から比較検討した。システム使用により評価漏れは、減少し、模範解答との一致率の平均は上昇した。一致率の上昇、評価漏れの減少より本システムの看護必要度評価支援の有効性はあったと考える。 担当部分：共同研究につき本人担当部分抽出不可能 梶村郁子、石垣恭子、原由行、押山伸次郎、中根浩二
一般市民のがん医療と看護に対する認知およびがん医療従事者への期待	共著	2012年 3月（査読付）	大阪府立大学看護学部紀要第18巻(第1号)、85-95頁、大阪府立大学	一般市民のがん医療と看護に対する認知およびがん医療従事者への期待を明らかにするためインターネット調査を行った。市民はがんを命に関わる怖い病気、経済的な負担があると認識していた。このことから、看護師は専門的知識を生かし市民のがんや治療に対しての恐怖心を和らげ、必要な情報及び思いを医師に伝えていくことが求められる。 担当部分：共同研究につき本人担当部分抽出不可能 田中登美、梶村郁子、林田裕美、田中京子、高辻功一
養護教諭養成課程における臨床実習の学びの分析	共著	2012年 9月	大阪教育大学紀要第III部門(自然科学・応用科学)61(1)、55-62頁、大阪教育大学	臨床実習での学びの内容から今後の教育課題を検討することを目的に、養護教諭養成課程の臨床実習における学生の学びについてテキストマイニングを行った。その結果、【患者への接し方―医師・看護師の声かけ】、【コミュニケーションと観察、連携―患者把握のための情報・観察、コミュニケーションと連携】をはじめとする養護教諭にとって重要となることを学んでいることが明らかとなった。しかし、患者の健康を保つための支援に関する記述はほとんど見られなかった。今後は、医療従事者が行っている健康保持のための支援にも目が向けられるよう、学内での講義や実習の内容の検討などを行う必要があることが示唆された。 担当部分：共同研究につき本人担当部分抽出不可能 橋弥 あかね、梶村 郁子

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
消化器系ストーマセルフケア情報提供システムの開発・検証	共著	2012年11月（査読付）	医療情報学32(5)、227-234頁、日本医療情報学会	Web上でストーマ造設者のセルフケア情報を提供するシステムを開発することを目的とし、ユーザビリティ評価を行った。システム開発後、看護師7名と消化器系ストーマ造設者5名を対象として、System Usability Scale(SUS)とWeb Usability Scale(WUS)を用いたユーザビリティ評価を行った。システムの好感度、役立ち感、見やすさのWUSが低い傾向にあった。そのため、利用者のニーズに合わせた内容のほか、システムのユーザビリティの改善として、表示方法なども検討する必要があることが明確となった。 担当部分：共同研究につき本人担当部分抽出不可能 橋弥あかね、山足慶子、石田朋子、中瀬彰子、梶村郁子、笹井浩介
養護教諭養成課程におけるモバイルラーニング導入の事前調査	共著	2014年 2月	大阪教育大学紀要第Ⅲ部門(自然科学・応用科学)62(2)、23-30頁、大阪教育大学	養護教諭養成課程の学生の臨床実習の感想文をテキストマイニングで分析し、臨床実習が学生にどのような影響を及ぼしたのかを臨床実習に参加した養護教諭養成課程3回生30名対象に行った。【養護教諭としての役割認識】、【子どもを預かるという責任】を含む5つのグループが抽出できた。実習中の困難の内容も明らかとなり、学内での講義・演習内容の検討や、実習支援システムやサポート体制の検討が必要であることが示唆された。 担当部分：共同研究につき本人担当部分抽出不可能 橋弥あかね、梶村郁子
Consideration of occupational stressors that influence Senses of Satisfaction at work in Japan	共著	2015年 1月（査読付）	Bridging Research and Good Practices towards Patient Welfarepp.191-196頁、the CRC Press、@2015 Taylor & Francis Group、 London	This study aims to find the factor which influences ""Senses of Satisfaction at work"" such as ""Worthwhile Job"" and to consider the needs of improvement of the environment for employees to carry ""Senses of Satisfaction at work"". Factors of ""Friendly Environment at work"" and ""Well-developed Relationship"" are essential to ""Senses of Satisfaction at work"". And it is very important to build corporate organizations with better communication as normal circumstances. 担当部分：共同研究につき本人担当部分抽出不可能 AYAKO KAJIMURA、 NANAE SHINTANI、SHIGEKI TATSUKAWA
Comparison of Public Health Care System between Taiwan and Japan; Focusing on Long- Term Oxygen Therapy（査読付）	共著	2015年 1月（査読付）	Bridging Research and Good Practices towards Patient Welfarepp.55-59頁、the CRC Press、@2015 Taylor & Francis	Although prevalence estimates for COPD are being published for many areas of the world、 high-quality estimates are lacking for key regions、 and differences in measurement methodology hinder meaningful comparison of published study. Moreover、there is almost no previous study for health care system comparison of Long-Term oxygen therapy among countries. This study aims to find potential issues of Long-Term Oxygen Therapy between Taiwan and Japan、by Comparison of Public Health Care System、 and to make a proposition of solution approach for COPD patients bringing better quality of life. 担当部分：共同研究につき本人担当部分抽出不可能 SHIGEKI TATSUKAWA、 NANAE SHINTANI、AYAKO KAJIMURA

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
How Do You Support Breast Cancer Patients on Work-Treatment Balance?（査読付）	共著	2015年 1月（査読付）	Bridging Research and Good Practices towards Patient Welfarepp.55-59頁、the CRC Press、@2015 Taylor & Francis	The number of patients who contract or die of breast cancer in Japan is increasing year by year、 and this direction is expected to continue. A peak age of onset of breast cancer is late 40s、 so some patients have to work and receive chemical treatments at the same time in their productive years. This paper aims at demonstrating those patients' difficulties and proposing how to support them. The need to encourage and support the patients by various institutions to which the patients belong to work in onsideration of their disease characteristics. 担当部分：共同研究につき本人担当部分抽出不可能 Nanae Shintani、 Hiroyasu Nagaoka、Eriko Koike、 Shigeki Tatsukawa、Ayako Kajimura
The factors of nurses that influence Accurate Nursing Records' Inputting on electronic Medical Record System.	単著	2015年 2月（査読付）	New Ergonomics Perspectivepp.85-88頁、the CRC Press、@2015 Taylor & Francis Group、 London	For the previous study of mine、 I had some nurses used this system to evaluate ″the Nursing Care Needs″. And there were some mistakes of the Nursing Care Needs and Nursing Record Leakage. So in this study、 it aims to consider the factors of nurses that influence Accurate Nursing Records' Inputting on Electronic Medical Record System.Accurate Nursing Records' Inputting on this system is for Accurate Inputting of Nursing Care Needs evaluation. The number of years using computers is one of the scales to know about the knowledge of computer use. So it should be possible that nurses input wrong evaluation of the Nursing Care Needs. It is necessary to consider about nfluences between Knowledge of computer use and Accurate Nursing Records' Inputting for further study.
Evaluation of the educational effectiveness in a new clinical nursing knowledge acquisition system	共著	2016年1月	Conference Proceedings、1413-1418頁、15th Annual Hawaii International Conference on Education. Honolulu、HI.（Jan.）2016.	We constructed a support system for evaluating Nursing Care Needs and investigated the effectiveness of the Nursing Care Needs education on nurses. The results indicated that in a single model case、 the academic performance of the evaluations significantly improved when our system was used. Therefore、 we believe that the Nursing Care Needs and evaluation field display function is an effective educational tool to facilitate the knowledge acquisition regarding Nursing Care Needs. 担当部分：共同研究につき本人担当部分抽出不可能 Ayako KAJIMURA、Shigeki TATSUKAWA、 Nanae SHINTANI、 Chieko INOUE
（その他）				
看護情報学専攻の大学院前期課程修了者に求める情報スキルの検討	共著	2007年11月	第27回 医療情報学連合大会 （第8回 日本医療情報学会学術大会）（兵庫県）	近年、医療現場において情報化により看護情報学教育の必要性が高まり、積極的かつ適切なシステムの活用、情報の活用できるようなシステム運営者、設計者としての役割が求められるのではないかと考える。情報科学分野に関する知識や技術を必要としている一方、看護師の配置がまだまだ少ない要因については、さらなる検討が必要である。 担当部分：共同研究につき本人担当部分抽出不可能 仲村祐子、石垣恭子、高見美樹、臼井麻里子、佐々木菜穂、梶村郁子、中西寛子

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
看護学生を対象にした学習支援システムの検討	単著	2009年11月	第30回 医療情報学連合大会 （第11回 日本医療情報学会学術大会）（静岡県）	看護実習で学生は患者の病態や心理、社会背景を把握するために実習期間中においても実習記録以外の追加学習が必要となる。そこで、インターネットを用い、学生の学習支援システムの内容の検討及び開発を行った。本システムでは疾患、看護、検査、薬剤の項目別に情報を提示する構成とし、看護学生の自己学習支援を図れるかを評価していく必要がある。
消化器系ストーマ造設者のセルフケア情報情報提供システムの開発	共著	2010年11月	第30回 医療情報学連合大会 （第11回 日本医療情報学会学術大会）（静岡県）	退院後にセルフケアが必須となる消化器系ストーマ造設者であるが、在院日数の短縮などにより看護師が必要な時期に必要なセルフケア情報を十分に提供できないという現状がある。そこで、文献からセルフケアについての内容を抽出、分析し、ストーマセルフケア情報データベースの構築を行った。今後は、システムの有用性について検討が必要である。 担当部分：共同研究につき本人担当部分抽出不可能 橋弥あかね、梶村郁子
がん医療・看護に対する一般市民の認知及び看護師への期待	共著	2011年 2月	第25回日本がん看護学会学術集会（兵庫県）	がん医療・看護に対する市民の認知と看護師に期待している内容を明らかにするため、20～79歳の市民1500名を対象にインターネット調を行った。年代や性によって差はあるものの、市民はがんを命にかかわる怖い病気と認知し、経済的な負担があることも認知されていた。看護師へは治療や生活の相談相手として、また、医師とのコミュニケーションの円滑化の役割を期待されていた。 担当部分：共同研究につき本人担当部分抽出不可能 田中登美、梶村郁子、林田裕美、田中京子
Difficulties in Activities of Daily Living in Patients Who Have Undergone Hip Arthroplasty	共著	2013年10月	3rd World Academy of Nursing Science(Korea)	This study aimed to reveal difficulties in activities of daily living (ADL) experienced by patients who had undergone hip arthroplasty.The results of this study revealed that patients who had undergone hip arthroplasty experienced difficulty acclimating to their prosthesis due to a short hospital stay and a negative outlook on living with an artificial joint. Although the patients tried to adapt their ADL, the lack of useful information available to them to help them expand their activities made the adjustment difficult. Therefore, an appropriate support system is needed to educate patients on living with an artificial joint. 担当部分：共同研究につき本人担当部分抽出不可能 Akane Hashiya, Hiroko Takeshita, Ayako Kajimura, Hiroshi Oota, Masumi Azuma
股関節置換術を受けた患者の退院後の情報ニーズ	共著	2013年12月	第33回日本看護科学学会学術集会（大阪府）	人工股関節置換術を受けた患者の退院後の情報ニーズを明らかにし、今後の情報提供のあり方を検討した。その結果、患者が必要とする情報は、日常生活動作だけでなく、日常生活全体を通した情報であることが明らかとなった。患者がその困難に主体的に取り組もうとした時に情報を入手する手段がないため、必要時に必要な情報が得られないのではないかと考える。そのため、個々のニーズに応えることができる継続した情報提供手段について検討する必要がある。 担当部分：共同研究につき本人担当部分抽出不可能 橋弥あかね、梶村郁子、竹下裕子、大田博、東ますみ

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
Comparison of Public Health Care System between Taiwan and Japan: Interviews with COPD Out-Patients underLong-Term Oxygen Therapy	共著	2014年 5月	35th International Association for Human Caring Conference (Kyoto, Japan)	This study aims to find some potential issues of QOL for out-patients under LTOT between Taiwan and Japan, by interviewing out-patients in both country, and to make a proposition of solution approach for their better QOL. Japanese all wished to go for some trips, although Taiwanese didn't even wish to go out and have worries about the worsen condition more. It is strongly recommended to increase the number of COPD patients using the home-visit nursing care service to get rid of worries of worsen condition in both Taiwan and Japan. And health behavior of going for a walk encouraged the suggestion of introducing an item "Portable Oxygen Tank" for treatment of Long-Term Oxygen Therapy under Long-Term Care Insurance by previous study for better QOL. 担当部分：共同研究につき本人担当部分抽出不可能 Shigeki Tatsukawa, Nanae Shintani, Ayako Kajimura
Consideration about the Relation between Nursing Record Leakage and writing time in Nursing Support System	共著	2014年 5月	35th International Association for Human Caring Conference (Kyoto, Japan)	The e-Japan strategy was proposed in Japan, and medical care information system such as electronic medical Record has been positively introduced at many Japanese hospitals since 2001. Following the current Information Technological Innovation, Smart-Device has expanded as a tool of medical care information system. On the other had, there are lots of complaints about usability. System with poor usability such as many screen transition or requirement of text-entry instead of command-input is a burden on Users. And it may cause leakage of imputing. To consider the value about Nursing Support System developed in order to make it possible to record one of Nursing services, "Writing Nursing Record", quick and accurately. 担当部分：共同研究につき本人担当部分抽出不可能 Ayako Kajimura, Shigeki Tatsukawa, Akane Hashiya, Nanae Shintani
Influences of Occupation Types and Organizational Climate on Occupational Stress	共著	2014年 5月	35th International Association for Human Caring Conference (Kyoto, Japan)	Increasing number of depression people in their prime and suicide victims makes Occupational- Stress focused recently. The number of workers' compensation claims for mental illness in Japan was 325 in 2011 while it was 14 in 1999(Japanese Ministry of Health, Labour and Welfare, 2011). Sick-leaves with mental problems extend, cause low- productivity and bring financial and emotional weight to workers and their families. So it's very important to consider its prevention. To clarify how Occupational-Stress and Organizational-Climate influence on Job-Satisfaction and CES-D (Center for Epidemilogic Studies Depression Scale) by occupation types for further consideration of its prevention.It's necessary to put the right people in the right jobs for White-Collar workers, to support their work and groups for Grey-Collar workers, and to clarify tasks and to listen to their complaints for Blue-Collar workers. 担当部分：共同研究につき本人担当部分抽出不可能 Nanae Shintani, Shigeki Tatsukawa, Ayako Kajimura, Hiroyasu Nagaoka

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
Comparison of Public Health Care System between Taiwan and Japan; Focusing on Long-Term Oxygen Therapy	共著	2014年 6月	The 4th. International Conference on Healthcare Systems Ergonomics and Patient Safety(The Grand Hotel in TAIPEI)	Although prevalence estimates for COPD are being published for many areas of the world, high-quality estimates are lacking for key regions, and differences in measurement methodology hinder meaningful comparison of published study. Moreover, there is almost no previous study for health care system comparison of Long-Term oxygen therapy among countries. This study aims to find potential issues of Long-Term Oxygen Therapy between Taiwan and Japan, by Comparison of Public Health Care System, and to make a proposition of solution approach for COPD patients bringing better quality of life. 担当部分：共同研究につき本人担当部分抽出不可能 SHIGEKI TATSUKAWA, NANAE SHINTANI, AYAKO KAJIMURA
Consideration of occupational stressors that influence Senses of Satisfaction at work in Japan	共著	2014年 6月	The 4th. International Conference on Healthcare Systems Ergonomics and Patient Safety(The Grand Hotel in TAIPEI)	This study aims to find the factor which influences "Senses of Satisfaction at work" such as "Worthwhile Job" and to consider the needs of improvement of the environment for employees to carry "Senses of Satisfaction at work".Factors of "Friendly Environment at work" and "Well-developed Relationship" are essential to "Senses of Satisfaction at work". And it is very important to build corporate organizations with better communication as normal circumstances. 担当部分：共同研究につき本人担当部分抽出不可能 Ayako KAJIMURA, Nanae SHINTANI,Shigeki TATSUKAWA
How Do You Support Breast Cancer Patients on Work-Treatment Balance?	共著	2014年 6月	The 4th. International Conference on Healthcare Systems Ergonomics and Patient Safety(The Grand Hotel in TAIPEI)	The number of patients who contract or die of breast cancer in Japan is increasing year by year, and this direction is expected to continue. A peak age of onset of breast cancer is late 40s, so some patients have to work and receive chemical treatments at the same time in their productive years. This paper aims at demonstrating those patients' difficulties and proposing how to support them.The need to encourage and support the patients by various institutions to which the patients belong to work in consideration of their disease characteristics. 担当部分：共同研究につき本人担当部分抽出不可能 Nanae Shintani, Hiroyasu Nagaoka, Eriko Koike, Shigeki Tatsukawa, Ayako Kajimura
健常女性に対する下肢循環を促すセルフ式マッサージの効果	共著	2014年 6月	日本サーモロジー学会第31回大会(大阪)	健常女性に対するセルフ式下肢マッサージによる効果を下肢末梢皮膚温と主観的暖かさによって明らかにした。ヒラメ筋に着目したセルフ式下肢マッサージを実施したが、有意水準はなく、更なるマッサージ部位の検討が必要だと考える。20分間のマッサージでも血流を促進する効果があることが示唆された。今後はデータ数を増やしていくことが必要だと考える。 担当部分：共同研究につき本人担当部分抽出不可能 牛越幸子、梶村郁子、立川茂樹、髙垣麻衣、神宮寺陽子

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
看護必要度データの研究への利活用の動向と課題	共著	2014年 8月	第15回日本医療情報学会看護学術大会（岩手県）	看護必要度データの看護研究への活用の動向を分析し、看護必要度データの利活用の方向性を検討した。その結果、看護管理業務への看護必要度データを活用した研究が一番多く、看護業務への看護必要度データを活用した研究はなかった。看護研究における統計学的分析は研究で得られた結果の根拠を示すためにも重要な手段である。研究結果の根拠を科学的に証明し、課題を提示していくためにも、看護必要度データを用いた研究は分析方法の検討と、分析の精度を高めていく段階にあると考える。 担当部分：共同研究につき本人担当部分抽出不可能 梶村郁子、橋弥あかね
How Do You Support Breast Cancer Patients on Work-Treatment Balance-2	共著	2014年 9月	The 21st Asian Conference on Occupational Health(Hilton Fukuoka Sea Hawk)	The purpose of this study is to clarify patient's thoughts and problems for continuing work while getting chemotherapy, and to contribute to inproving the "Quality Of Life" ob breast cancer patients. From the extracted codes, we got categories as follow: "Difficulty of the treatment plan to take into account of life events", etc. It is necessary to exchange information and cooperation crossover between various areas such as personal staffs, social workers, school health, beauty care. 担当部分：共同研究につき本人担当部分抽出不可能 Shintani Nanae, Tatsukawa Shigeki, Nagaoka Hiroyasu, Kajimura Ayako
Issues related Emergency Hospital Visit for Foreign Workers - For Consideration about Medical Care Support Systems of Foreign Workers -	共著	2014年 9月	The 21st Asian Conference on Occupational Health(Hilton Fukuoka Sea Hawk)	This study aims to find to "issues related emergency hospital visit for foreign-workers" in Japan from a viewpoint of tourism- industry and categorize them into Major/Secondary -items by Affinity Diagram for further consideration about medical-care-support-systems of foreign-workers.We came to reach of understanding "Lack of preparation on the hospital- side, the employer-side, and the public-side". There were many items for foreign-worker occupational support especilly in the employer-side. 担当部分：共同研究につき本人担当部分抽出不可能 Shigeki Tatsukawa, Nanae Shintani, Ayako Kajimura
人工股関節置換術を受けた患者の日常生活情報システムの開発	共著	2014年11月	15回 日本医療情報学会学術大会）（千葉県）	近年、人工股関節置換術を受けた患者の退院後も継続的な情報提供や患者支援を行うための方策として、ICT技術を活用した遠隔看護が挙げられる。本研究では退院後も継続的な情報提供や患者支援を行うため、Web上で閲覧可能なTHAを受けた患者に対する日常生活情報を提供する遠隔看護システムの開発を行った。今後は、新情報や暗黙知といった情報をデータベースに取り入れる方法を検討し、より多くの情報をユーザに提供できるようにすることが課題である。 担当部分：共同研究につき本人担当部分抽出不可能 橋弥あかね、梶村郁子、大田博、東ますみ

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
電子カルテにおける画面遷移と看護業務の関係性の分析	共著	2014年11月	15回 日本医療情報学会学術大会）（千葉県）	現在、医療現場には様々な医療情報システムが存在している。システムの導入によって、チーム医療を前提とした情報共有や、三点認証などの安全管理業務の徹底、医師からの指示の明確化による証拠性の担保が図られている一方で、電子カルテを操作することによる負荷の増大が問題となりつつある。負荷のひとつに、「画面展開の多さ」が挙げられる。そこで本研究では、電子カルテにおける操作の負担を調査することを目的として、画面展開と個々の看護師との関係について分析を行った結果、ユーザー毎の特性が示唆された。 担当部分：共同研究につき本人担当部分抽出不可能 梶村郁子、竹村匡正、藤田健一郎、疋田智子、橋弥あかね、黒田知宏
Study of the self-massage method on the lower extremities of healthy woman	共著	2015年 2月	18th East Asian Forum of Nursing Scholars (Taiwan)	The Purpose ob study was to clarify the effect that Self-Massage has on autonomic nervous activity and the feeling of relaxation in healty woman. A trend towrds an increase of the feeling of relaxation was obsered in all durations; however, there were no significant differences.Trends towards an increase in the parasympathetic activity index were observed in all durations; however there were no significant differences. 担当部分：共同研究につき本人担当部分抽出不可能 Yukiko Ushigoe, Ayako Kajimura, Shigeki Tatsukawa, Mai Takagaki
日勤看護師における業務開始前の電子カルテ利用実態の分析	共著	2015年11月	第35回医療情報学連合大会（第16回 日本医療情報学会学術大会）（沖縄県）	電子カルテのアクセスログの分析によって、看護業務の実態を明らかにできるのかを検証することを目的として、日勤看護師が業務開始前に行っている業務分析を行った。分析の結果、業務開始前という限られた時間の中で看護師は、看護計画など看護に関する情報よりも、患者の状態や処置などの医療情報を業務開始前には優先して収集している傾向があることが示唆された。また、電子カルテのアクセスログの分析が、看護師の業務状況として業務開始前の情報収集の実態を明らかにし得ることが示された。 担当部分：共同研究につき本人担当部分抽出不可能 梶村郁子、竹村匡正、疋田智子、藤田健一郎、吉原和音、橋弥あかね、黒田知宏
電子カルテシステムにおけるGUIの現状分析およびユーザビリティの検討	共著	2015年11月	第35回医療情報学連合大会（第16回 日本医療情報学会学術大会）（沖縄県）	電子カルテ及びその背後にある病院内の診療業務を分析し、病院情報システムのあり方について再検討を行った。その結果、実際の使用ログデータによる画面遷移は多岐に渡り、ユーザーに大きな負担を強いていることが予測された。今後は利用されている機能、利用されていない機能等を明らかにし、背後に存在する診療業務を調査し、電子カルテのユーザビリティを再検討する。 担当部分：共同研究につき本人担当部分抽出不可能 吉原和音、竹村匡正、藤田健一郎、疋田智子、梶村郁子、岡本和也

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
全人工股関節置換術を受けた患者に対する遠隔看護システムの開発	共著	2015年11月	第35回医療情報学連合大会（第16回 日本医療情報学会学術大会）（沖縄県）	全人口股関節置換術(THA)を受けた患者は継続的な情報提供を目的に、遠隔看護システムを開発した。提供する情報はTHAを受けた患者へのインタビューに基づいているため、患者のニーズを充足する可能性が高い。しかし、情報登録者に制限があり、情報収集に時間を要する。今後はオープンデータなどを活用し、情報収集方法を検討する。 担当部分：共同研究につき本人担当部分抽出不可能 橋弥あかね、中川芳剛、當山達也、辻川葉子、梶村郁子、東ますみ
Evaluation of the educational effectiveness in a new clinical nursing knowledge acquisition system	共著	2016年1月	2016 Hawaii International Conference on Education(Hawaii)	We constructed a support system for evaluating Nursing Care Needs and investigated the effectiveness of the Nursing Care Needs education on nurses. The results indicated that in a single model case, the academic performance of the evaluations significantly improved when our system was used. Therefore, we believe that the Nursing Care Needs and evaluation field display function is an effective educational tool to facilitate the knowledge acquisition regarding Nursing Care Needs. Ayako KAJIMURA, Shigeki TATSUKAWA, Nanae SHINTANI, Chieko INOUE
Education for Health-care-workers to Popularize Animal Assisted Therapy (AAT) in Japan	共著	2016年1月	2016 Hawaii International Conference on Education(Hawaii)	This study aims to clarify the issues to popularize Animal Assisted Therapy (AAT) in Japan. From the result of literature research, we found that there were 2 points of causes. 1: Not to be established AAT’s system. 2: There is resistance to introduce therapy dogs by lacking of knowledge of health-care-workers. It is important to educate health-care-workers and to cultivate handlers. Further more, it is necessary to demonstrate the scientific effects as well. 担当部分：共同研究につき本人担当部分抽出不可能 Chieko INOUE, Ayako KAJIMURA, Shigeki TATSUKAWA, Nanae SHINTANI
Consideration of support using Areal Feature and SNS (Social Network Service) for nursing-students job-hunting-Viewpoints of Public Health on community and Authentic Voices -	共著	2016年1月	2016 Hawaii International Conference on Education(Hawaii)	This study aims to find another way of nursing-students’ job-hunting tool by interviewing with small-and-medium-sized hospitals about how to employee enough number of novice nurses, and current situation of nursing-students’ job-hunting tools. We found that small-and-medium-sized hospitals had difficulties to introduce their hospitals, nursing-students had difficulties of job-hunting from varieties of hospitals. Social Network Service can possibly make those difficulties decrease from both sides. 担当部分：共同研究につき本人担当部分抽出不可能 Shigeki TATSUKAWA, Nanae SHINTANI, Yoshika SUZAKI, Ayako KAJIMURA, Chieko INOUE, Satoshi TOYODA

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
A Strategy for Understanding of Public Health Nursing - Consideration of Educational Effectiveness by "Practice Lessons of Community Exploration"	共著	2016年1月	2016 Hawaii International Conference on Education(Hawaii)	We offered "Practice lessons of community exploration" during the 15 times lectures' program of "Introduction to Public Health Nursing" to second year students at the Nursing University to develop their viewpoints of people as community residents. The students extracted categories with viewpoints of people having lives in a community such as "Nature environment", "Education", "Institution", "Topography", "Public safety", "Local culture", and "Communication skills in community" apart from "Gordon's 11- functional- health-patterns" after the experience. 担当部分：共同研究につき本人担当部分抽出不可能 Nanae SHINTANI, Shigeki TATSUKAWA, Yoshika SUZAKI, Ayako KAJIMURA, Chieko INOUE, Natsuki KINJO
Usability evaluation of a telenursing system for total hip arthroplasty patients	共著	2016年3月	19th East Asian Forum of Nursing Scholars (Chiba, Japan)	The objective of this study was to evaluate the usability of a telenursing system, which we had developed for total hip arthroplasty (THA) patients, from the standpoint of nurses. The results demonstrate that there are no usability issues with the telenursing system used in this study. However, it is not possible to directly apply the results of this study to THA patients because most THA patients are elderly. Therefore, we will need to verify the utility of the system by evaluating usability with THA patients 担当部分：共同研究につき本人担当部分抽出不可能 Akane Hashiya, Ayako Kajimura, Nobue Ishibashi, Masumi Azuma
看護分野における体温に関する研究の動向	共著	2016年5月	19th East Asian Forum of Nursing Scholars (Chiba, Japan) 日本サーモロジー学会第33回大会(奈良)	看護分野におけるサーモグラフィをはじめとする体温に関する研究は1980年より見られ，2000年頃よりさらに増加し，約40件/年以上は見られており,関心が高まってきていると考える。キーワードに「手術室看護」が多く，体温管理が求められる領域での研究の取り組みが多いことが示唆された。「サーモグラフィ」をキーワードとした看護研究の領域は，基礎看護技術の検証にサーモグラフィを活用した研究が最も多く，看護分野においてもサーモグラフィを活用した研究の発展の可能性があると考える。 担当部分：共同研究につき本人担当部分抽出不可能 梶村郁子，立川茂樹，金城夏樹，足日和美 ，新谷奈苗
清拭後の「押さえ拭き」効果の検証	共著	2016年5月	19th East Asian Forum of Nursing Scholars (Chiba, Japan) 日本サーモロジー学会第33回大会(奈良)	全身清拭後の押さえ拭きに，体表面温度変化や寒気の感覚としての効果があるのかについて，サーモグラフィを用いて検討を行った。その結果，押さえ拭き有りの方が「寒気を感じない」において効果があった。体表面温度についても個人差が見られ、寒気を感じる体表面温度には個人差があることがわかった。看護において，患者の安楽を考えると，寒気を感じさせないための押さえ拭きには一定の効果があることがわかった。 担当部分：共同研究につき本人担当部分抽出不可能 立川茂樹，梶村郁子，井上葉子，足日和美，金城夏樹，新谷奈苗

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
サーモグラフィを用いた基礎看護教育に関する調査	共著	2016年5月	19th East Asian Forum of Nursing Scholars (Chiba, Japan) 日本サーモロジー学会第33回大会(奈良)	看護基礎教育においてサーモグラフィを活用した教育の有無を明らかにするために，日本看護系大学協議会の会員校を対象に基礎看護領域のシラバスの調査を行った。基礎看護系の科目において，サーモグラフィを用いた授業計画が公開されているシラバスは見られなかった。サーモグラフィは人や物体の温度変化を可視化するため，視覚情報による教育効果が期待できると考えられるが，本調査の結果，基礎看護教育にサーモグラフィを用いた授業を実施している大学が存在する可能性は低いことが示唆された。 担当部分：共同研究につき本人担当部分抽出不可能 金城夏樹，梶村郁子，足日和美，立川茂樹，新谷奈苗
Nurses' Actual Usage of Electronic Medical Records: An Access Log-Based Analysis	共著	2016年6月	13th International Congress in Nursing Informatics(Swiss)	Access logs for EMRs are a useful source of data for understanding how nurses' perform their duties. The purpose of this study was to better understand how nurses' used an EMR system, by inspecting and analysing EMR access logs. Analysis of the logs of nurses' actual accessing of the Outcomes Input screen, which is mainly used to view and input details such as observation outcomes and time, showed that they used it continually throughout the day. Further, that they prioritized the viewing and information input obtained from observations, in order to monitor patients' conditions over tasks such as keeping nursing records. 担当部分：共同研究につき本人担当部分抽出不可能 Ayako KAJIMURA, Tadamasa TAKEMURA, Tomoko HIKITA, Kenichiro FUJITA, Waon YOSHIHARA, Akane HASHIYA, Tomohiro KURODA
日勤業務開始前の看護師のアクセスログからみる電子カルテの画面展開の実態	共著	2016年7月	第17回日本医療情報学会看護学術大会(兵庫県)	看護業務遂行において電子カルテ操作に多くの画面展開が必要になることが避けられず、電子カルテ利用の煩わしさの問題が生じている。そこで、本研究では、業務開始前の情報収集等において、どの程度の画面展開が必要とされているのかをアクセスログ分析にて検証した。その結果、業務開始前に多数の画面にアクセスしており、また、一画面のアクセス時間が短いことから目的の画面に到達するまでに画面展開が多く行われていることが示唆された。 担当部分：共同研究につき本人担当部分抽出不可能 梶村郁子、竹村匡正、疋田智子、藤田健一郎、橋弥あかね、黒田知宏
＜講演＞ 看護実践の評価とそのシステム化		2008年 9月	2008年度 第4回 Meet the Experts(神戸)	『看護実践の評価とそのシステム化』をテーマに看護必要度を用いた看護計画立案支援システムについて、システム概要およびシステムの今後の活用の方向性に関して講演を行った。

教　育　研　究　業　績　書

平成　29年　3月　31日

氏名　　川口　ちづる

研究分野	研究内容のキーワード
看護学	在宅高齢者、介護支援専門員

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例 1）学習成果のフィードバック	平成20年4月～ 平成22年3月	奈良県立医科大学医学部看護学科「老年看護学援助論」（2年次2単位）において、学生が提出したレポートや授業の感想カードの内容を要約し、次の授業で学生にフィードバックした。その成果として学生からは、前回授業の復習ができる、他学生の多様な思考・見解を知ることができるという反応が得られた。また、学生が授業の理解度を自己確認する姿勢を確立する第一歩になった。
2　作成した教科書，教材 1）総合実習指導マニュアル作成	平成20年4月～ 平成22年3月	奈良県立医科大学医学部看護学科において、新しい実習施設が増えたこと、実習指導者が変更になったことから、実習指導マニュアルを作成した。実習環境を整え、実習指導者と協働し、実習目標を達成することを目的とした。 その結果、実習指導者と教員の役割が明確になり、実習目標が達成できた。
3　教育上の能力に関する大学等の評価 1）天理医療大学設立準備委員会における評価	平成23年3月	当該教員は、国立病院において8年間勤務し、急性期から慢性期の看護を展開してきた。藤田保健衛生大学七栗サナトリウムでは、介護支援専門員として要介護者のケアマネジメントに従事した。また、在宅介護支援センター職員として入院患者の退院支援、いきいきサロンなど地域高齢者の介護予防を担った。大学教育においては、実践力の向上を目指し、演習や学生の自己学習の充実に努めている。授業では、プロジェクト学習を取り入れ、学生が主体的に学ぶ教育を実践している。 以上のことから本学において予定している授業科目を担当するに充分な教育上の能力を有していると考える。
2）大学設置・学校法人審査会の教員資格審査における天理医療大学医療学部看護学科　専任講師	平成23年8月	大学設置審議会教員資格審査　天理医療大学医療学部看護学科　講師 「広域発展看護学概論」「広域発展看護学(継続看護)」「広域発展看護学Ⅲ(在宅看護)」「広域発展看護学実習Ⅰ」「広域発展看護学実習Ⅱ」「卒業研究Ⅱ」「統合実習」「相互扶助論Ⅰ」「相互扶助論Ⅱ」可と判定
3）大学設置・学校法人審査会の教員資格審査における奈良学園大学保健医療学部看護学科　専任講師	平成28年2月	大学設置審議会教員資格審査　奈良学園大学保健医療学部看護学科　講師 「早期体験演習」「基礎看護学実習Ⅱ」「老年看護学援助論」「在宅看護学援助論」「基礎看護学実習Ⅰ」「老年看護学実習Ⅰ」「老年看護学実習Ⅱ」「在宅看護学実習」「統合看護学実習」「卒業研究Ⅱ」可と判定

事項	年月日	概　　要
4）大学設置・学校法人審査会の教員資格審査における奈良学園大学保健医療学部看護学科　科目追加	平成28年12月	大学設置審議会教員資格審査　奈良学園大学保健医療学部看護学科　講師 「家族援助論」可と判定
4　実務の経験を有する者についての特記事項		
5　その他 1）奈良県立医科大学医学部看護学科にける教育実績	平成20年4月～平成22年3月	奈良県立医科大学医学部看護学科の専任教員（平成20年4月から平成22年3月まで講師）として、以下のような科目を担当した。
「老年看護学援助論」	平成20年4月～平成22年3月	奈良県立医科大学医学部看護学科の講師として担当の「老年看護学援助論」（専門科目2年次配当、通年、必修2単位）において、高齢者の日常生活を理解する講義を行なった。
2）岐阜医療科学大学保健科学部看護学科における教育実績	平成22年4月～平成23年3月	岐阜医療科学大学保健科学部看護学科の専任教員（平成22年4月から現在に至るまで講師）として、以下のような科目を担当した。
「在宅看護論」	平成22年4月～平成23年3月	岐阜医療科学大学保健科学部看護学科の講師として担当の「在宅看護論」（専門科目2年次配当、前期、必修2単位）において、在宅ケアシステム、チーム医療と連携について講義を行なった。学生が苦手な介護保険制度など在宅ケアシステムでは、ノート形式の資料にしたり、確認テストを行ない、理解が得られるようにした。
「地域看護方法Ⅱ（在宅看護）」	平成22年4月～平成23年3月	岐阜医療科学大学保健科学部看護学科の講師として担当の「地域看護方法Ⅱ（在宅看護）」（専門科目2年次配当、後期、必修2単位）において、プロジェクト学習を導入し、さまざまな疾患をもつ療養者の看護について学ぶと共に、主体的に学習する過程を学ぶことができた。

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項		
事項	年月日	概　　要
1　資格，免許 1）看護師免許 2）修士課程修了（看護学）	 平成4年4月 平成18年3月	 第745245号 国立三重大学大学院医学系研究科看護学専攻（修士課程）修了看護学　第25号
2　特許等 なし		
3　実務の経験を有する者についての特記事項 1）四日市市北地域包括支援センター　認知症初期集中支援チーム　看護師	平成27年4月～ 平成28年3月	四日市市北地域包括支援センターにて「認知症初期集中支援チーム」の発足に携わった。 地域の実情に応じたオリジナルの「マニュアル」「記録用紙」を作成し、県内外の市町村から視察の依頼がある。
4　その他 1）特定非営利活動法人　日本オスラー協会研究助成 研究代表者：川口ちづる 研究題目：芸術活動を取り入れた教育カリキュラムの効果評価 ―医療人をめざす学生のコミュニケーション能力の獲得と豊かな人間性形成をめざして― □	平成24年4月～ 平成25年3月	コミュニケーション能力の育成科目「生命と芸術実践演習Ⅰ～Ⅷ 」を履修することにより開学初年度１年間という初期段階で、学生にどのようなコミュニケーション能力が育成されたかの効果を明らかにすることを目的とした。 研究方法は①テキストマイニング用ソフトウェアを用いて、終講時レポートを言語分析した。②学生の授業評価で最も高い評価と最も低い評価を得た科目を履修した学生、それぞれ2名に半構造化インタビューを行い、逐語　碌を作成し分析した。 結果①自分のコミュニケーションの特徴を知る機会、②新たな自分の発見、③他者認識力の向上、④伝える力の向上が道地き出された。 本人担当分：授業の補助、インタビュー、分析、論文作成 共著者：川口ちづる、吉田いつこ他

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
（著書） 1．ケアネジメント実践事例集	共著	平成20年9月	第一法規出版	介護保険制度とケアマネジメントについての解説編、解決課題別ケアプラン・事例検討編から構成されている。介護保険制度の改正に伴い、追録版を出版している。 B5版　加除式 編者：ケアマネジメント実務研究会鎌田ケイ子他 共著者：若林たけ子、川口ちづる 本人担当部分：「第4編解決課題別ケアプラン・事例検討編　第2章在宅におけるケアプラン　突然動けなくなった利用者の在宅生活再構築のために、変化するニーズに介護支援専門員とサービス事業者が対応」（Ｐ．4137～Ｐ．4145）を共著。 グループスパービジョンを用いて振り返った本事例は、腹膜透析患者が在宅生活を再構築する過程を介護支援専門員を支援した事例であった。事例提供した介護支援専門員は、潜在するニーズに対応できなかった事例と考察していたが、セッション後は「変化するニーズを把握することができた」「サービス提供事業所が腹膜透析利用者を受け入れることができるよう連絡調整が図れた」と相談過程を振り返ることができた。できる能力に気づく自己洞察力を身につけることは、介護支援専門員の相談援助技術の向上になることを考察している。 本人担当部分：事例のまとめ、ケアプランの作成、考察を担当 共著者：若林たけ子、川口ちづる
2．生活支援技術・介護過程	共著	平成22年6月	黎明書房	介護福祉士養成講座の概論テキストである。 B5版　219頁 編者：守本とも子 共著者：川口ちづる、三毛美恵子他 本人担当部分：「第1部生活支援技術第1章生活支援」（Ｐ．14～Ｐ．23）を単著、「第1部生活支援技術第7章自立に向けた排泄介護」（Ｐ．118～Ｐ．134）を共著。 第1章生活支援においては、高齢者の生活支援は、日本の風土を生かした区切りある生活習慣を取り入れる意義を述べている。また、その生活を支える援助者は、説得しない話し方、指導より提案する姿勢、相手に関心を持ち見守る忍耐力が必要であると述べている。 第7章自立に向けた排泄介護においては、気持ちよい排泄を支える介護として、がまんさせない工夫、恥ずかしくなく排泄ができる環境づくり、自立の支援を述べている。安全・的確な排泄の技法として、トイレ、ポータブルトイレでの転倒を予防しながら自立を支援する排泄方法を紹介している。そして高齢者に特徴的な感覚機能、運動機能、認知機能が低下している人への援助の留意点を述べている。 本人担当部分：気持ちよい排泄を支える介護、トイレ・ポータブルトイレでの安全・的確な排泄の技法、機能が低下している人の介護の留意点、他の職種の役割りと機能の記述と写真撮影。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
3．老年看護学	共著	平成22年12月	ピラールプレス出版	看護基礎教育における老年看護学のテキスト。 B5版　285頁 監修：川野雅資、編集：守本とも子 共著者：川口ちづる、吉村雅世他 本人担当部分：第6章老年看護学の場と役割第1節保健・医学・福祉施設における看護、第2節：在宅療養高齢者の看護（P．269～P．277）を単著。 在宅医療が推進される背景を受け、高齢者看護が展開される場所も多様化しつつある。保健・医学・福祉施設における看護では、健康を維持しながら、その人らしく生きる支援について解説している。特に、自己決定を含めた自立支援、アドボカシーとしての看護の役割など高齢者の権利を尊重する援助のあり方について述べている。在宅療養高齢者の看護においては、チーム医療において看護師がケアマネジメント能力を発揮する重要性を解説している。社会資源の理解、連携能力の向上など在宅ケアシステムを活用することも在宅高齢者の生活支援には不可欠であることを述べている。
（学術論文） 1. Preliminary Study of Support for Care Managers with Group Supervision (グループスーパービジョンを用いたケアマネジャーサポートの試み) (査読付)	共著	平成22年3月	「日本医療福祉情報行動科学会誌」 第1巻第1号 P.13～P.22	ケアマネジャーサポートの試みとしてグループスーパービジョン(以下GSV)を用い、その効果と有効性を検討した。対象は、ケアマネジャー7名で、効果は既存のケアマネジメント業務調査票を参考に自己評価尺度(4段階)を作成し、GSVの実施前後で比較検討した。事例提供者であるバイジーは、自己評価尺度において低下した項目はなく、「モニタリング」「評価」などの5領域で「上昇」および「上昇と無変化」を示した。GSVはケアマネジャーの支援策として有効な手段となりえる可能性が示唆された。 本人担当部分:自己評価尺度の作成、スーパービジョンの実施、尺度データ分析、論文作成の一部 共著者:若林たけ子、小池敦、川口ちづる A4判　総60頁
2. 芸術活動を取り入れた教育カリキュラムの効果評価―医療人をめざす学生のコミュニケーション能力の獲得と豊かな人間性形成をめざして―	共著	平成25年12月	特定非営利活動法人日本オスラー協会研究助成金報告書 (2012年　特定非営利活動法人　日本オスラー協会研究助成金)	コミュニケーション能力の育成科目「生命と芸術実践演習Ⅰ～Ⅷ」を履修することにより開学初年度1年間という初期段階で、学生にどのようなコミュニケーション能力が育成されたかの効果を明らかにすることを目的とした。 研究方法は①テキストマイニング用ソフトウェアを用いて、終講時レポートを言語分析した。②学生の授業評価で最も高い評価と最も低い評価を得た科目を履修した学生、それぞれ2名に半構造化インタビューを行い、逐語 碌を作成し分析した。 結果①自分のコミュニケーションの特徴を知る機会、②新たな自分の発見、③他者認識力の向上、④伝える力の向上が道地き出された。 本人担当分:授業の補助、インタビュー、分析、論文作成 共著者:川口ちづる、吉田いつこ他 A4判　総14頁

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
3. 看護系大学初年次生が救護奉仕活動に参加した意味 (査読付)	共著	平成26年4月	「日本看護学会論文集. 看護教育 」44, 30-33,	人格形成に重要な影響を及ぼす時期である青年期にある看護学生が、「イベントの救護班」という奉仕活動参加することにより、学生自身にどのような意識の変化をもたらし、看護を志す者としての成長にどのように寄与しているのかについて明らかにすることを目的とした。 教護奉仕活動に参加した初年次生6名にインタビューを行い、語られた内容を質的帰納的に分析した。 結果、以下の4カテゴリーが抽出された。1)積極的動機づけによる活動参加。2)人と関わることで得られる喜び。3)困難さの認識とモデルからの積極的学び。4)専門職として目覚め、奉仕活動中の経験を現在の学習や将来の方向性につなげ成長する。 本人担当分:奉仕活動の企画・学生支援、インタビュー、データ分析、論文作成の一部 共著者:茂野香おる、吉田いつこ、川口ちづる
（その他） 「国内学会口頭発表」 1. サービスが希少な透析利用者に対する介護支援専門員の関わりを振り返ったセッションの事例報告	―	平成20年2月	介護支援専門員協会全国大会第2回大会 （於マイドーム大阪）	介護支援専門員のケアマネジメントの質の向上を目的とし、グループスーパービジョンに提示された処遇困難ケースの事例研究を行なった。 本事例は、退院を余儀なくされた腹膜透析利用者の在宅生活を再構築する過程を、介護支援専門員を支援した事例であった。 介護支援専門員は事例提供理由を、自己のケアマネジメント能力の不足、対象のニーズ把握ができていなかったことの振り返りと述べた。しかし、セッション後は「変化するニーズを把握することができた」「サービス提供事業所が利用者を受け入れるよう連絡調整が図れた」と相談過程を振り返ることができた。スパービジョンにより自己のできる力に気づき、ケアマネジメントへの自信につながるなどの有効性が示唆された。 本人担当部分：スーパービジョンの実施、事例のまとめ、セッションの要約と分析、口頭発表 共同発表者：川口ちづる、若林たけ子、加田美智子、柴山則子
2. 在宅高齢者の活動能力と食生活の関連	―	平成21年3月	日本医療福祉情報行動科学会第4回大会 （於甲南女子大学）	A市の高齢者150名の活動能力（老研式活動能力指標によるADLとIADLの状況）と食生活の実態を調査し、SPSS8.0を用いて因子分析を行なった。 その結果、性、年齢、家族構成では有意な差はなかった。活動能力が高く、一人で外出できる者、調理ができる者は、一人で食生活を営むことができる傾向であった。一方で、買い物ができる能力があっても、他者に食事作りを依存する傾向があった。その背景は、男性で食事作りの習慣がない、身体機能低下により食事作りが負担に感じることが影響していた。食事作りは活動能力だけでなく、食習慣や食事に対する価値観も影響すると明らかになった。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
3．介護保険制度を利用している在宅介護者の主観的介護負担に影響する要因の検討	―	平成22年1月	日本在宅ケア学会学術集会第14回大会（於聖路加看護大学）	1年以上在宅サービスを利用する高齢者を介護している家族の介護負担感を明らかにすることを目的とした。要介護者の心身の状態、介護負担（Zarit介護負担尺度日本版）に関する75項目の質問調査を郵送法で実施した。有効回答103名を対象に、SPSS11.0を用いてX2検定など統計的に分析した。 結果、日常生活において排泄や食事に介助が必要な高齢者、視聴覚障害をもつ高齢者を介護する家族は、介護負担感が大きいことが明らかになった。1日の中で援助時間が長い食事や排泄援助、意思疎通の困難さが介護負担に影響を及ぼすことが示唆された。 本人担当部分：データ分析 共同発表者：大倉美鶴、村田伸、川口ちづる
4．介護支援専門員がスーパービジョンを希望した事例の検討	―	平成22年3月	日本医療福祉情報行動科学会第5回大会（於犬山市民会館）	介護支援専門員を対象としたグループスーパービジョンで提示される事例の傾向明らかにすることを目的とした。10事例に記述された事例提出理由とその背景に関する内容をカテゴリ化し、質的に分析した。 その結果、事例対象の要介護度は1～3が7例、4～5が3例であった。主な例提出の理由は「ケアマネジメントの方向性が利用者の生き方や生命を左右することへの不安」「家族調整ができないことに能力不足を感じる」であった。介護支援専門員には、個別性の尊重した生活支援や家族の調整に関する能力も必要であることが示唆された。 本人担当部分：スーパービジョンの実施、事例のまとめ、セッションの要約と分析、口頭発表 共同発表者：川口ちづる、若林たけ子
「辞典」 1．看護大事典第2版	共著	平成22年3月	医学書院	看護用語の解説書である。 B5版　2900語 編者：和田攻、南裕子、屋宜譜美子他 共著者：屋宜譜美子、川口ちづる他 本人担当部分：「エアマットレス」（P．342）の解説を単著。 自力で体位変換できない場合など、褥瘡予防のために使用されるビニール製のマットのこと。モーターで、管状に仕切られた二相または三相の換気チューブを収めた管に空気を送る。 本人担当部分：「宿便」（P．1388）の解説を単著。 大腸内の通過時間遅延により、水分が吸収されてかたくなった糞便。大腸疾患による器質的な通貨障害、入院などのストレスから副交感神経抑制で腸蠕動運動が低下して起こる。 本人担当部分：「腸洗浄」（P．2015）の解説を単著。 手術や検査の前処置として糞便などを除去するために肛門から薬液を注入し、腸内を洗浄する。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
「資格試験テキスト」 1．2013年年版　看護師国家試験問題　解答・解説		平成24年4月	メヂカルフレンド社	看護師国家試験対策テキスト。 A4版　1310頁 編集：メヂカルフレンド社編集部 共著：蔵谷範子、川口ちづる他 本人担当分：在宅看護学の解答・解説
2．看護師国試につかえるこれだけ！公衆衛生・関係法規	共著	平成28年5月	技術評論社	看護師国家試験対策テキスト。 B5版　240頁 監修：川口ちづる 看護師国家試験における公衆衛生・関係法規の対策本である。過去25年の問題を分析し、わかりやすくまとめた。

教　育　研　究　業　績　書

平成 29年　3月 31日

氏名　　北島　洋子

研究分野	研究内容のキーワード
看護教育学	社会人基礎力、学習者オートノミー、自己主導型学習、看護研究

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例		
1）グループディスカッション、ブレインストーミング、マインドマップを活用した思考過程の開発支援	平成24年4月～平成24年7月	兵庫県立大学看護学部の専門教育科目「看護学概論」1年次配当、30時間2単位のうち6時間(クリティカルシンキング、看護過程)担当した。看護過程は問題解決型思考を看護に応用したものであり、クリティカルシンキングを基盤としている。対象学生は1年次生であり、看護の初学者の思考回路を刺激し看護専門職としての考え方を開発する必要がある。まずブレインストーミングを活用し批判非難の無い環境で自由にテーマに関する意見を述べあう機会を提供した。これによりグループワークを通して今日のチーム医療に求められる協働する力の素地が培われた。また、与えられたテーマについてマインドマップを活用し思考を深める作業を行い、学生は自己の内面に気づくことができ充実した学びとなったとの声が聞かれた。
2）グループディスカッション、ディベートを活用した倫理的意思決定の思考過程の開発支援、および授業アンケート、フィードバックの活用	平成24年10月～平成24年12月	兵庫県立大学看護学部の専門教育科目「看護倫理」4年次配当、30時間(1単位)のうち10時間(看護倫理、関連する倫理概念)担当した。看護倫理の学習を通して学生は看護専門職としての自己のあり方を考え、様々な倫理的意思決定の支援を行えるようになる必要がある。グループディスカッションやディベートはメンバーの多様な考えに触れ価値の多様性を学習する好機となり、多様性に触れることで自己への気づきも促進された。グループで倫理的意思決定のプロセスを緻密に踏み思考を深め、倫理原則に従った判断をする基礎を身につけることができた。 毎時ごとの授業アンケート、フィードバックを活用し次回の講義に反映することで、学生の理解度を確認しながら授業を進め、学生のつまずいているところに戻った指導を行い、学生の理解を深めることができた。
3）PBL(Problem Based Learning)チュートリアルを活用した自己主導型学習の支援	平成24年6月～平成24年7月	兵庫県立大学看護学部の専門教育科目「コミュニティヘルスケア実習」(1年次配当、1単位)は1年次生の初回の実習であり、学生が地域に赴きコミュニティで生活する人々の健康問題について考察する実習である。実習指導においては、情報収集、問題抽出、対応策の検討等を学生主体で行い、教員はチューターとしてアドバイスを行った。学生は高校でこのような学習を行ったことがなく、大学生らしい学習方法だとの感想を述べ、どの学生もいきいきと積極的に実習に取り組んだ。また、実習後の学習成果の発表会でも有意義な学びが多数報告された。
4）PBL(Problem Based Learning)チュートリアル、ポートフォリオを活用した自己主導型学習の支援	平成24年5月～平成24年6月	兵庫県立大学看護学部の専門教育科目「総合実習」(4年次配当4単位)は、4年次生のこれまでの学習を統合し将来の看護専門職としての活動につなげるという目的がある。したがって実践に近い形の実習となり、より一層学生の自律性が求められる。ポートフォリオを活用し日々自己の目標を明確にしたことにより、学生は目的的に学習を行い、最終的に自己の変化を実感することができた。実習開始前にアンドラゴジーに関する講義を組み込み本実習は自己主導型を標榜することを示した。学生の学習姿勢は4年生であっても受動的な学生がほとんどであったが、4週間の実習を終了するころには個人差はあるものの能動的な実習を行い学習成果をあげることが可能となった。PBLの活用により、クリティカルシンキング、問題解決型の思考を磨くことができた。

事項	年月日	概　　要
5）ポートフォリオを活用した自己主導型学習の支援	平成26年7月～平成29年2月	奈良学園大学保健医療学部看護学科の早期体験演習、1年次配当（1単位）において実習の企画、運営、実習指導を担当した。学生は初めて臨地に赴き医療の現場に触れるため、看護の学習者としての準備性を高め、主体的な学習態度を身につける必要がある。事前の学習課題としてマナー、コミュニケーション方法を学び、実習中はポートフォリオにより省察的姿勢を養うように工夫した。
6）反転授業を取り入れた看護技術演習の工夫	平成26年9月～平成29年2月	奈良学園大学保健医療学部看護学科の基礎看護技術演習Ⅰ、1年次配当60時間（2単位）のうち清潔の援助16時間を担当した。学生には穴埋め型のドリル形式の事前学習課題のプリントを配布し、テキストを参考に清潔の援助に関する基礎知識を習得した上で講義に臨むよう指導した。講義では事前に習得した基礎知識を活用しグループワークで演習計画書を作成し、実習室における技術演習の準備性を高めることを目指した。学生からは主体的に事前学習課題を行うことにより知識の記憶に効果的であったとの評価を得た。
7）ポートフォリオを活用した自己主導型学習の支援	平成26年7月～平成29年2月	奈良学園大学保健医療学部看護学科の基礎看護学実習Ⅰ、1年次配当（1単位）において実習の企画、運営、実習指導を担当した。学生にとっては早期体験演習に続き2回めの臨地実習であるが、半年以上期間が開いているため、実習における主体的な学習姿勢を改めて意識付けることが必要となる。そこで、ポートフォリオを活用し自己の目標設定や目標達成を自己管理し、学生が自分の成長を確認しながら実習できるよう工夫した。
2　作成した教科書，教材		
1）講義用補助教材	平成24年4月～平成24年7月	兵庫県立大学看護学部の専門教育科目「看護学概論」1年次配当、30時間2単位のうち6時間(クリティカルシンキング、看護過程)担当した。看護過程の展開のための事例を複数例作成し、事例展開に活用した。また、事例展開のプロセスを詳細にパワーポイントで示し、学生の理解がスムーズになった。
2）講義用補助教材	平成24年10月～平成25年3月	兵庫県立大学看護学部の専門教育科目「看護倫理」4年次配当、30時間(1単位)のうち11時間(看護倫理、関連する倫理概念)担当した。倫理的意思決定の練習のための事例を複数例作成した。事例の登場人物の背景や状況を詳細に加えることで、学生の状況理解が深まり、文脈を読み解く能力が高まった。
3　教育上の能力に関する大学等の評価 1）兵庫県立大学看護学部教員評価委員会による、平成23年度教員活動報告書、平成23年度の目標に対する成果・実績、平成23年度領域別評価表、平成24年度目標設定に基づく評価	平成24年9月27日	総合評価として、科目群の一部分担していること、他領域などへの支援も積極的にしていることを評価された。
4　実務の経験を有する者についての特記事項		
1）なし		
5　その他		
1）兵庫県立大学看護学部における教育実績	平成24年4月～平成24年7月	兵庫県立大学看護学部の専門教育科目「看護学概論」1年次配当、30時間2単位のうち6時間(クリティカルシンキング、看護過程)担当した。
2）兵庫県立大学看護学部における教育実績	平成24年10月～平成25年3月	兵庫県立大学看護学部の専門教育科目「看護倫理」4年次配当、30時間(1単位)のうち11時間(看護倫理、関連する倫理概念)担当した。

事項	年月日	概　　要
３）奈良県立医科大学医学部看護学科における教育実績	平成25年4月～平成25年9月	基礎看護技術Ⅱ、基礎看護学実習、　基礎看護学実習Ⅱ、老年看護学実習を担当した。
４）千里金蘭大学看護学部看護学科における教育実績	平成25年11月	小児看護学実習を担当した。
５）大阪府立大学地域保健学域看護学類における教育実績	平成25年10月～平成26年3月	生活支援論、生活支援看護学実習を担当した。
６）奈良学園大学保健医療学部看護学科における教育実績	平成26年4月～	早期体験演習、基礎看護学実習Ⅰ、基礎看護学実習Ⅱ、基礎看護技術演習Ⅰ、基礎看護技術演習Ⅱ、基礎看護技術演習Ⅲを担当し、現在に至る。

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　　要
１　資格，免許		
１）看護師免許(第597138号)	昭和62年5月	
２）日本心理学会　認定心理士(第17799号)	平成18年8月	
３）日本選択理論心理学会　准選択理論心理士(第23号)	平成18年11月	
４）修士（看護学）	平成21年3月	大阪府立大学大学院　第６６号 修士論文題名「看護系大学生の社会人基礎力の構成要素と関連要因」
５）博士（看護学）	平成28年9月	大阪府立大学大学院　第３２号 博士論文題名「新人看護師の社会人基礎力が職場適応に与える影響」
２　特許等		
１）なし		
３　実務の経験を有する者についての特記事項		
１）兵庫県立大学看護学部　実習調整委員会	平成22年4月	実習調整委員として、学生の実習環境の調整、実習教育セミナーの企画運営にあたった。
２）兵庫県立大学看護学部　生涯学習委員会	平成23年4月	生涯学習委員として、社会貢献の一環として公開講座の企画運営にあたった。
３）兵庫県立大学看護学部　入試委員会	平成24年4月	入試委員として、入試関連データの入力業務等に携わった。
４）科学研究費助成金（基盤研究Ｃ）課題番号２５４６３３３３	平成25年4月	研究代表者として、研究題名「新人期看護師の社会人基礎力と関連要因の検討」科学研究費助成金を獲得し研究遂行し、現在に至る。
５）奈良学園大学　社会連携センター運営委員会	平成26年4月	社会連携センター運営委員として、社会連携推進の企画、運営に携わった(平成28年3月まで)。
６）奈良学園大学保健医療学部看護学科　実習部会	平成26年4月	実習部会の委員として、実習要綱作成、実習要項作成、その他実習関連業務に携わった(平成28年3月まで)。
７）奈良学園大学保健医療学部看護学科　教務部会	平成26年9月	教務部会の委員として、業務等に携わった(平成28年3月まで)。
８）奈良学園大学保健医療学部看護学科　学生部会	平成28年4月	学生部会の委員として、業務等に携わり、現在に至る。
４　その他		
１）なし		

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
（著書）				
（学術論文）				
1）看護系大学生の社会人基礎力と看護実践力および日常生活経験の関係 （修士論文）	単著	平成22年3月	大阪府立大学大学院	看護系大学生の社会人基礎力の構成要素を確認し、社会人基礎力と関連要因との関係を明らかにし、現状を把握する目的で、看護系大学8施設の１年次と４年次に在籍する学生1043名に質問紙調査を実施した。社会人基礎力の構成要素は共分散構造分析による確認的因子分析と多母集団分析により、3分類12能力要素から構成されるひとつのまとまりある概念であることが示された。社会人基礎力の関連要因はSpearmanの相関係数、Mann-WhitneyのU検定、多重ロジスティック回帰分析による検討を行った。社会人基礎力と看護実践力は有意な正の相関関係にあった。社会人基礎力の3分類すべてに対し影響していたのは看護実践力の「自己の学習課題の解決に向けた取り組みをしている」と、日常生活経験の「授業時間以外に自己学習する」であった。 Ａ4判　全68頁
2）看護系大学生の社会人基礎力の構成要素と属性による相違の検討 （査読付）	共著	平成23年 3月	大阪府立大学紀要第17(1)	本研究の目的は看護系大学生の社会人基礎力の構成要素を確認し、属性による相違について検討することである。社会人基礎力は経済産業省により3分類12能力要素の構成とされている。看護系大学8施設の1年次と4年次の学生1043名を対象に、社会人基礎力を問う36項目の質問紙調査を実施した。構成要素の検討は構造方程式モデリングによる確認的因子分析と多母集団同時分析、属性による相違の検討はMann-WhitneyのU検定を用いた。社会人基礎力の構成要素は経済産業省の定義に基づく構造のまとまりある一つの概念であることが示された。学年別と性別の多母集団同時分析において、このモデル構成は学年および性別による母集団の相違に対応していることが示された。社会人基礎力合計得点はMann-WhitneyのU検定において、社会人未経験者より経験者、1年次生より4年次生、女子学生より男子学生が有意に高値を示した。看護学基礎教育における社会人基礎力の伸長の可能性が示唆される。 本人担当部分：研究計画、研究遂行、論文執筆 共著者：北島洋子，細田泰子，星和美，
3）学会誌掲載論文から見た臨床看護職が行っている看護研究の現状と課題 （査読付）	共著	平成24年 3月	兵庫県立大学看護学部・地域ケア開発研究所紀要，19，1-15	【目的】臨床看護職による学会誌掲載論文の現状を把握し、EBPの推進に寄与できる看護研究の実践に向け課題を明らかにする。【研究方法】2004年から2008年の5年間に25学術誌に掲載された原著論文、研究報告、実践報告として掲載された論文1545編を対象とし、自作の研究デザイン別チェックリストに従い論文の記述内容を検討した。【結果】臨床看護職が第一著者である論文は210編(全体の13.6%)であり、論文の種類は研究報告、実践報告の占める割合が大きかった。質的研究のうち事例研究はResearch Questionが明確でない文献が多かった。実態調査・量的記述的研究のほとんど(85.7%)は標本の代表性に関する記述がなく、便宜的サンプリングが実施されていた。量的研究全般において、収集する変数の説明が明確でなく、自作アンケートによるデータ収集が多かった。【考察】臨床看護職による研究は看護のエビデンスの構築に充分寄与していないことが示唆され、緻密な研究のプロセスを踏む必要があると考えられた。 本人担当部分：データ整理、論文執筆 共著者：北島洋子，西平倫子，西谷美保，太尾元美，宮芝智子，坂下玲子，

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
4) Critique看護学生の看護の認識:4学年群についての記述的研究	共著	平成24年　6月	インターナショナルナーシングレビュー, 135(4),23-27	原文：Safadi RR , Saleh MY , Nassar OS , Amre HM , Froelicher ES(2011):Nursing students' perceptions of nursing: a descriptive study of four cohorts.Int Nurs Rev. ; 58(4):420-7. 上記論文のクリティークを実施し解説した論文である。本研究のサンプリング方法や倫理的配慮、データ分析方法にいくつかの疑問点はあるが、記述的に明らかにされた本研究の結果は、学生の看護の認識の発達に応じたカリキュラムを設計する際の基礎的資料となるものと考えられた。また、個人特性により看護の認識が異なる傾向があることを念頭に置いて、個々の学生への学習支援のあり方を考える、という意味において本研究結果は有用と考えられた。 本人担当部分：対象論文の分析、クリティークと論文の執筆を行った。 共著者：北島洋子，坂下玲子
5) 看護系大学生の社会人基礎力と看護実践力および日常生活経験の関係 （査読付）	共著	平成24年 7月	日本看護学教育学会誌, 22(1), 1-12	【目的】看護系大学生の社会人基礎力と看護実践力および日常生活経験の関係を明らかにする。【方法】看護系大学4年次生に質問紙調査を実施し、有効回答270をSpearmanの相関係数、多重ロジスティック回帰分析にて検討した。【結果】社会人基礎力と看護実践力は有意な正の相関を示し、社会人基礎力の下位概念である12の能力要素と看護実践力の4つの下位尺度ごとにおいても、すべての下位尺度間で有意な正の相関を認めた。社会人基礎力に影響を示した学習活動は「学校の担任やアドバイザーの教員に相談する」「授業の中でロールプレイする」「授業の中でディスカッションする」「授業時間以外に自己学習する」であった。【考察】看護学基礎教育において社会人基礎力は看護実践力と相互作用的な関係にあり、看護学基礎教育による伸長の可能性が示唆された。日常生活経験における多様な人々との関わり、相互作用的な教授－学習活動、授業外学習を取り入れた授業設計が社会人基礎力の伸長に効果的である。 本人担当部分：研究計画、研究遂行、論文執筆 共著者：北島洋子，細田泰子，星和美，
6) 臨床から発表される論文の検討	単著	平成24年12月	看護研究，45(7)，649-658,医学書院	臨床において看護職によって行なわれている看護研究は看護学の知の創造に結びついているのか、またどのようにすれば知の創造に結びつけていけるのかをテーマに、臨床の看護職が学会誌に投稿し掲載されている論文から臨床における看護研究の現状を明らかにし、課題を分析した。さらに臨床から発表される論文が一層価値あるものとなるために、臨床の看護研究に比較的多く見られる課題をとりあげ、ケースごとに研究方法や取り組み方に関する改善のヒントを示し、新たな知の創造に向けた臨床の看護研究の具体的なあり方について考察した。
7) 看護系大学生の社会人基礎力及び自己教育力と自己調整学習方略との関係（査読付）	単著	平成25年　2月	医学と生物学, 157(2),222-228	【目的】看護系大学生の社会人基礎力と自己教育力に影響する自己調整学習方略を明らかにし、看護学基礎教育への示唆を得ること。【方法】平成23年11月に A大学看護学部学生の1年次から4年次生を対象とし、社会人基礎力、自己教育力、自己調整学習方略の質問紙調査を実施した。【結果】質問紙の回収は131名(回収率33.1%)であった。社会人基礎力と自己調整学習方略の下位尺度は全て有意な正の相関を示した。自己教育力の全ての下位尺度に対し自己調整学習方略の認知的方略が有意な正の相関を示した。多重ロジスティック回帰分析の結果、社会人基礎力に影響を示した自己調整学習方略の下位尺度は、努力調整方略とモニタリング方略であった。自己教育力にはモニタリング方略と認知的方略が影響を示した。【考察】学生の社会人基礎力と自己教育力は、自己調整学習方略を多く使用するほど高くなり、特にモニタリング方略の使用は効果的と考えられた。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
8）中・大規模病院における看護研究に関する全国調査（査読付）	共著	平成25年　3月	看護科学会誌，33(1)，91-97	【目的】臨床の看護職に適した看護研究のあり方を検討するため、臨床の看護研究の現状を明らかにする。【方法】全国の100床以上の病院のうち無作為抽出した3000施設への質問紙調査。【結果】100床以上の規模の病院では高い割合で，看護研究が実施されている。研究する目的は「スタッフの教育」「患者サービス向上」「業務の改善」であり、質問紙法による実態調査が多く、研究期間や研究時間は短く、文献検討や研究資金は不十分、研究成果を論文として発表する率は低かった。【結論】データ分析や研究法の知識・技術に関する臨床のニーズに対し、組織外のリソースを活用した研究支援の必要性が示唆された。 本人担当部分：データの整理、分析、論文とりまとめを行った。 共著者：坂下玲子，北島洋子，宮芝智子，西平倫子，西谷美保，太尾元美
9）新人看護師の社会人基礎力が職場適応に与える影響（博士論文）	単著	平成28年　9月	大阪府立大学大学院	【目的】新人看護師の職場適応尺度を開発し、社会人基礎力が職場適応に与える影響について明らかにする。【方法と結果】①新人看護師の職場適応の質的帰納的研究において、2年目の看護師16名を対象に職場適応行動と職場適応状態を問う半構成的面接法を用いてデータを収集し職場適応行動は96サブカテゴリー、35カテゴリー、5コアカテゴリー、職場適応状態は53サブカテゴリー、14カテゴリー、4コアカテゴリーを抽出しアイテムプールを作成した。②新人看護師の職場適応尺度項目の表面妥当性・内容妥当性の検討を5名のエキスパートパネルにより実施し、尺度項目は職場適応行動98項目職場適応状態54項目に洗練された。③新人看護師の職場適応尺度項目の内容妥当性指数を用いた検討を看護教育学の研究者9名を対象に実施しI-CVIが0.78未満の項目は尺度原案から削除し、職場適応行動82項目と職場適応状態51項目が、内容妥当性を有する項目として採択された。④新人看護師の職場適応尺度の信頼性・妥当性の検討を新人看護師1297名を対象に実施し、職場適応行動尺度は5因子34項目、職場適応状態尺度は4因子26項目が抽出され、信頼性と妥当性が確認された。⑤社会人基礎力尺度の新人看護師への適用可能性の検証を新人看護師473名を対象に実施し、社会人基礎力尺度は新人看護師への適用可能と考えられた。⑥新人看護師の社会人基礎力が職場適応に与える影響の検討を新人看護師1964名を対象に実施し、共分散構造分析により社会人基礎力から職場適応への影響を確認しモデル適合度は良好であった。【考察】新人看護師の職場適応行動尺度と職場適応状態尺度は、構成概念妥当性、基準関連妥当性、内的一貫性と安定性による信頼性を確保した尺度と考える。社会人基礎力は職場適応に影響を与えることが確認され、新人看護師の円滑なトランジションに資する能力のひとつとして、社会人基礎力を伸長させることは効果的である。 A4版　全244頁。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
「学会発表」				
1）看護系大学生の社会人基礎力の構成要素	ー	平成22年 8月	第20回日本看護学教育学会学術集会（大阪）	【目的】看護系大学生の社会人基礎力の構成要素を確認し、社会人経験の有無、学年、性別による社会人基礎力の相違について検討する。【方法】看護系大学8施設の1年次と4年次の学生1043名に質問紙調査を実施し、共分散構造分析による確認的因子分析と多母集団分析、Mann-WhitneyのU検定で分析した。【結果】確認的因子分析のモデルの係数の推定値は全て有意で、適合度指標はデータのモデルへの良好なあてはまりを示した。社会人基礎力は、社会人未経験者より社会人経験者、1年生よりも4年生、女子学生よりも男子学生のほうが有意に高かった。【考察】看護系大学生の社会人基礎力は、企業の管理者と若手就労者による実践的知見に裏付けられたモデル構成と良好な適合度により、まとまりのあるひとつの概念であり、社会人基礎力は就労経験や学年の進行に伴い伸長すると考えられる。 本人担当部分：研究計画、研究遂行、学会発表 共著者：北島洋子，細田泰子，星和美，
2）看護系大学生の社会人基礎力と看護実践力の関係	ー	平成22年 8月	第36回日本看護研究学会学術集会（岡山）	【目的】看護系大学生の社会人基礎力と看護実践力の関係を明らかにする。【研究方法】看護系大学8施設の4年次の学生451名に質問紙調査を実施し、Spearmanの相関係数、多重ロジスティック回帰分析を実施した。【結果】社会人基礎力と看護実践力は有意な正の相関関係にあった。看護実践力20項目のうちの8項目が社会人基礎力に対して1.75から3.49のオッズ比を示し、その中でも「自己の学習課題の解決に向けた取り組みをしている」がアクション・シンキング・チームワークのすべてに対し正の影響を示していた。【考察】社会人基礎力と看護実践力は相互作用的な関係で伸長し、看護学基礎教育において看護学を学習していくことは、同時に社会人基礎力を身につけていくことにも寄与していると考えられる。 本人担当部分：研究計画、研究遂行、学会発表 共著者：北島洋子，細田泰子，星和美，
3）院内看護研究の実施状況に関する全国実態調査	ー	平成22年12月	第30回日本看護科学学会学術集会（北海道）	【目的】100床以上の病院の看護部が行っている看護研究の実態を明らかにする。【研究方法】全国の病院8918のうち100床以上の病床を持つ5471病院より無作為抽出した3000病院に無記名質問紙を送付し看護研究推進担当者に回答を依頼した。【結果】1130病院から回収し、87.3%の病院が看護研究に取り組んでいると回答した。その目的はスタッフ教育が最も多く、次いで患者サービス向上であった。【考察】臨床看護職による研究は学問領域で考えられている新しい看護知識の提示をめざした研究とは異なり、教育の側面が強いことが明らかになった。今後臨床で看護研究という言葉で表現されている活動の目的や内容をさらに明確にし、臨床看護職が取り組む看護研究の意義について検討する必要があることが考えられた。 本人担当部分：データ整理 共著者：坂下玲子,宮芝智子,高谷嘉枝,北島洋子,若村智子

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
4）看護系大学生の社会人基礎力と日常生活経験の関係	ー	平成23年 3月	第21回日本医学看護学教育学会学術学会（出雲）	【目的】看護系大学生の社会人基礎力に関連する日常生活経験を明らかにする。【方法】看護系大学生1043名に質問紙調査を行い、多重ロジスティック回帰分析を行った。【結果】社会人基礎力のアクション・シンキング・チームワークの3分類すべてに影響を示したのは「授業時間以外に自己学習する」であった。その他に社会人基礎力に対し正の影響を示した項目は、学習経験では「学校の教師とコミュニケーションをもつ」「授業の中でロールプレイする」「授業の中でグループワークする」「学校の担任やアドバイザーの教員に相談をする」「学校の行事に参加する」であった。【考察】看護系大学生の社会人基礎力の育成にあたり、ロールプレイやディスカッション、グループワークを組み込んだ教授－学習活動、課外学習を取り入れたインストラクショナル・デザイン等が効果的であることが示唆された。 本人担当部分：研究計画、研究遂行、学会発表 共著者：北島洋子、細田泰子、星和美
5）新人看護師の職場適応行動	ー	平成26年12月	第34回日本看護科学学会学術集会（名古屋）	【目的】新人看護師の職場適応について、適応行動の側面から質的帰納的に明らかにする。【方法】研究参加者は2年目の看護師16名(新卒で新規採用の社会人としての就業経験や准看護師経験がない、同一部署にて就職後1年を経た者)。半構成的面接法によりインタビューを実施し、質的記帰納的に分析した。【倫理的配慮】本研究は大阪府立大学看護学研究倫理委員会の承認を得た。【結果】269コードから96サブカテゴリー、35カテゴリー、5コアカテゴリー【職務上必要な専門知識を学ぶ行為】、【新たな関係を構築する行為】、【職務を円滑にする行為】、【仕事に備え自己を整える行為】、【仕事に臨む心構え】が生成された。【考察】Piagetの説明する適応と同様に、新人看護師は、新規参入した職場において新たな行為や思考を取り入れたり、自己のそれまでの考え方を変容させたりして職場に適応する行動をとっていることが明らかになった。本研究は科学研究費助成事業(研究課題番号:25463333)の助成を受けて実施した研究の一部である。 本人担当部分：研究計画、研究遂行、学会発表 共著者：北島洋子、細田泰子
6）高齢者のための認知機能低下予防教室「脳いきいき教室」への継続参加の評価	ー	平成26年12月	第34回日本看護科学学会学術集会（名古屋）	【目的】認知機能低下予防教室への継続参加による認知機能への効果を明らかにする。【方法】65歳以上の認知症がなく自力歩行が可能な高齢者164名。測定尺度としてMMSEとファイブ・コグを用いた。継続参加者と単年度参加者別に分析を行った。【教室の概要】教室は4回、開催期間は6週間。内容は健康ミニ講座、知的活動を促すアクティビティ、有酸素運動、交流会。自宅での継続課題と散歩を課した。大阪府立大学看護学研究倫理委員会の承認を得た。【結果】MMSEの単年度群と継続群間の初回参加時の得点およびフォロー時の得点において有意な差が見られなかった。群ごとにみた初回参加時とフォロー時では、継続群においてフォロー時のMMSE得点が有意に高かった（P<.05）。ファイブ・コグでは、初回参加時の単年度群と継続群間において有意な差はなかった。【考察】８年間の取り組みである「脳いきいき教室」への継続参加による認知機能の評価を行なった。継続参加の効果が示されたことは、高齢者の認知機能が訓練により維持・改善できる可能性が示唆された。 本人担当部分：教育プログラムの実施、データ収集、データ整理 共著者：中村裕美子、深山華織、北島洋子

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
7）新人看護師の認識する職場適応状態	―	平成27年 3月	第25回日本医学看護学教育学会学術学会（出雲）	【目的】新人看護師の職場適応状態について質的帰納的に明らかにする。【方法】近畿圏にある日本医療機能評価機構に認定されている200床以上の一般病院4施設に所属する2年目の看護師16名(新卒で新規採用の社会人としての就業経験や准看護師経験がない、同一部署にて就職後1年を経た者)を対象に、職場に慣れてきた、馴染んできた状態について半構成的にインタビューを実施し、その内容を質的帰納的に分析した。【倫理的配慮】本研究は大阪府立大学看護学研究倫理委員会の承認のもと実施した。【結果】130コードを抽出し53サブカテゴリー、4カテゴリー「チームへの所属感」「看護実践の手応え」「自律的な役割の遂行」「仕事に対する自己効力感」が生成された。【考察】本調査の結果は新人看護師自身の認識によるものであり、新人看護師の職場適応の自己評価尺度として活用可能なデータと考えられる。科学研究費助成事業(研究課題番号:25463333)。 本人担当部分：研究計画、研究遂行、学会発表 共著者：北島洋子、細田泰子
8）新人看護師における社会人基礎力の関連要因の検討	―	平成27年 8月	日本看護研究学会第41回学術集会	【目的】本研究は新人看護師における社会人基礎力の関連要因を明らかにすることを目的とした。【方法】新人看護師473名。調査期間：平成26年8月1日～平成26年12月31日。調査方法：無記名自記式質問紙法。郵送法により回収した。分析方法：社会人基礎力の内的整合性、社会人基礎力と看護実践力の相関関係、日常生活経験による社会人基礎力への影響について検討した。倫理的配慮：大阪府立大学看護学研究倫理委員会の承認を受け実施した。【結果】回収数154名(回収率32.6%)、分析対象131名。新人看護師の社会人基礎力尺度のCronbach’α係数は、尺度全体で0.92。社会人基礎力尺度全体と看護実践力尺度全体とのSpearmanの相関係数は0.59の有意な正の相関を認めた。ロジスティック回帰分析によって社会人基礎力に対し影響を示す日常生活経験が明らかになった。【考察】社会人基礎力尺度は内的整合性が認められ、新人看護師を対象としても信頼性のある尺度と考える。社会人基礎力は看護実践力と相互作用的に伸長していく。学生時代の日常生活経験は新人看護師の社会人基礎力に影響を与え、職場で多様な人々と協働する上で必要な力を養うには、学生時代に色々な経験を積み、主体的に学習することが大切と考える。 科学研究費助成事業(研究課題番号:25463333)。 本人担当部分：研究計画、研究遂行、学会発表 共著者：北島洋子、細田泰子
9）Assessing content validity of the workplace adaptation scale for new graduate nurses.（新人看護師の職場適応尺度の内容妥当性の検討）	―	平成28年 3月	19th East Asian Forum of Nursing Scholars.	【目的】新卒看護師の職場適応尺度項目の項目妥当性を評価する。【方法】9名の看護教育研究者を対象に郵送法による質問紙調査を実施した。参加者はすべての項目と対応する概念との関連性について、I-CVI値を使用して項目の内容妥当性を評価した。本研究は大阪府立大学看護研究倫理審査委員会の承認を受けた。【成果】I-CVIの値は全項目で0.22から1.00の範囲であった。職場適応行動に関する16の項目は不適当とみなされ、82項目が残された。職場適応状態は3項目が不適当とみなされ、51項目が残された。【結論】全体で19項目の妥当性が低いと判断されたため質問項目から削除した。最終的に看護師の職場適応尺度は、職場適応行動は82項目、職場適応状態は51項目に構成された。今後は尺度の十分な信頼性と有効性を確保するために、尺度項目をさらに精錬させていく必用がある。 科学研究費助成事業(研究課題番号:25463333)。 本人担当部分：研究計画、研究遂行、学会発表 共著者：北島洋子、細田泰子

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
10）新人看護師の職場適応行動尺度の信頼性・妥当性の検討.	―	平成28年 8月	日本看護研究学会第42回学術集会	【目的】新人看護師の職場適応行動をアセスメントする「職場適応行動尺度」を作成し、その信頼性と妥当性を確認する。【方法】対象：新人看護師1297名。調査期間：平成27年7月から12月。無記名自己記入式質問紙調査、調査票回収は郵送法。分析方法：項目分析、探索的因子分析、信頼性係数算出、職務満足測定尺度とのPearsonの積率相関係数算出、テスト・リテスト法によるPearsonの積率相関係数算出。倫理的配慮：本研究は研究者所属施設倫理委員会の審査を受けて実施した。【結果】調査票回収348名(回収率26.8%)、分析対象304名。探索的因子分析(主因子法、プロマックス回転)を実施し、5因子34項目が抽出された(累積因子寄与率53.12)。尺度全体のCronbach’α係数は.930。職場適応行動尺度と職務満足測定尺度は有意な正の相関係数にあった。テスト・リテスト法により有意な正の相関関係を認めた。【考察】新人看護師の職場適応行動尺度は、内的一貫性、基準関連妥当性、安定性が確認され、職場適応行動尺度は新人看護師の職場適応行動を測定するにあたり有用性のある尺度と考える。 科学研究費助成事業(研究課題番号:25463333)。 本人担当部分：研究計画、研究遂行、学会発表 共著者：北島洋子、細田泰子
11）新人看護師の職場適応状態尺度の信頼性・妥当性の検討.	―	平成28年 8月	日本看護学教育学会第26回学術集会	【目的】新人看護師の職場適応状態をアセスメントする「職場適応状態尺度」を作成し、その信頼性と妥当性を検討する。【方法】新人看護師1297名。調査期間：平成27年7月から12月。調査方法：無記名自己記入式質問紙調査(郵送法)。倫理的配慮：本研究は研究者所属施設倫理委員会の審査を受けて実施した。【結果】調査票回収348名(回収率26.8%)、分析対象304名。因子分析の結果、4因子26項目が抽出された(累積因子寄与率57.27)。第1因子「看護実践への効力感」10項目、第2因子「仕事への肯定感」７項目、第3因子「チームへの所属感」6項目、第4因子「独り立ちした自覚」3項目から構成され、因子間相関は.446～.675の間であった。職場適応状態尺度のCronbach’α係数は全体で.946であった。テストリテスト法において有意な正の相関関係を認めた。職場適応状態尺度と職務満足測定尺度は有意な正の相関であった。【考察】職場適応状態尺度の4因子26項目は内的一貫性および安定性を有することが確認された。職場適応状態尺度と職務満足測定尺度の相関係数から、職場適応状態尺度の基準関連妥当性が確認された。職場適応状態尺度は新人看護師の職場適応の状態を測定するにあたって活用可能であり有用な尺度と考える。 科学研究費助成事業(研究課題番号:25463333)。 本人担当部分：研究計画、研究遂行、学会発表 共著者：北島洋子、細田泰子
12）The Effects of New Nurses’ Fundamental Competencies for Working Persons on Workplace Adaptation（社会人基礎力が職場適応に与える影響）	―	平成29年 3月	20th East Asian Forum of Nursing Scholars.	【目的】新人看護師の職場適応に及ぼす社会人基礎力の影響を明らかにすること。【方法】1,964人の新人看護師に質問紙調査を実施した。調査票は社会人基礎力尺度、職場適応行動尺度、職場適応状態尺度、およびから構成された。分析は記述統計、尺度の信頼性係数の算出、共分散構造分析を実施した。【結果】662名から調査票が回収（33.7%）され、有効回答613名を分析対象とした。本研究の概念枠組に基づく多重指標モデルを作成し共分散構造分析を実施した。社会人基礎力の職場適応へのパス係数は0.77であり、決定係数は0.59であった。モデルの適合度指数は、GFI = 0.990、AGFI = 0.962、CFI = 0.993、およびRMSEA = 0.070であった。【結論】社会人基礎力が職場適応に影響することが確認された。 科学研究費助成事業(研究課題番号:25463333)。 本人担当部分：研究計画、研究遂行、学会発表 共著者：北島洋子、細田泰子

教　育　研　究　業　績　書

平成29年3月31日

氏名　　立川　茂樹

研究分野	研究内容のキーワード
公衆衛生看護学　産業保健	産業保健　海外派遣労働者　在日外国人労働者 在日留学生の健康 保健システムの国際比較　患者国際搬送　メディカルツーリズム

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例 内閣府 中国遺棄科学兵器処理事業　参加	平成19年 4月 ～ 平成20年 2月	内閣府の左記事業に緊急時対策マニュアルを作成する目的の元,看護職専門員として参加
国立健康栄養研究所 健康増進プログラム運動ガイドラインプロジェクト　参加	平成21年 5月 ～ 平成22年 7月	運動と食事の併用に関する研究ならびに,厚生労働省のエキソサイズガイドライン改正に資する研究に看護技術補佐員として参加
沖縄県主催　メディカルツーリズム 医療現場における通訳入門セミナー　（講師）	平成23年12月	沖縄県主催　メディカルツーリズム　医療現場における通訳入門セミナーにて,講師として参加
沖縄県主催　メディカルツールズム 医療現場における通訳入門セミナー　（講師）	平成24年12月	沖縄県主催　メディカルツーリズム　医療現場における通訳入門セミナーにて,講師として参加
筑波大学大学院修士課程人間総合科学研究科 スポーツ・健康マネジメント専攻（非常勤講師）	平成25年10月 ～ 平成26年 3月	スポーツ健康科学論Ⅲ（講義） 授業概要 スポーツ健康科学論Ⅲ（講義） スポーツや健康に関する高度専門職業人として現職を持つ修了生が,現場における問題の所在の究明や解決,および様々な実践に関して講義する.さらに,筑波大学院で学び,研究したことがどのように生かされているのか,その方法論についても講義する.そして,研究した成果のさらなる進歩,今後の可能性について言及し,研究の視野を広げることを目指し,教授した. 担当　4回/4回(0.5単位)
沖縄県沖縄県主催　観光と医療現場における外国人受け入れ対応力セミナー　観光事業者向け（講師）	平成25年12月 12日	観光事業者向けに,以下の項目について講演を行った. −日本の医療ツーリズム施策と他国（主にアジア国）の施策との違い −日本の保険制度と外国の保険制度の違い −海外旅行保険の活用方法 −外国人観光客が急に医療機関受診を行わなければならなくなった場合の対応
沖縄県主催　観光と医療現場における外国人受け入れ対応力セミナー　医療機関向け　（講師）	平成26年 1月 10日	医療機関の関係者（理事長,院長,医師,看護師長,事務局長など）を対象に,現在の医療ツーリズム施策と英語圏･中国語圏の医療機関事情と日本におけるそれとの違いについて講演を行った.
奈良学園大学保健医療学部看護学科（非常勤講師）	平成26年10月 ～ 平成27年3月	基礎看護技術演習Ⅰ（演習） 授業概要 基礎看護技術演習Ⅰ 人間工学を取り入れたボディメカニクス･安全安楽を提供する技術としての体位変換,体位保持･移乗および移送･睡眠を促す技術の講義演習を通して,基礎看護学技術を教授した. 担当　4回/15回(2単位)
奈良学園大学保健医療学部看護学科（非常勤講師）	平成26年10月 ～ 平成27年3月	基礎看護学実習Ⅰ（実習） 授業概要 基礎看護学実習Ⅰ 日常生活援助の提供を通して,患者の病態理解と援助の必要性を教授した. 担当：45時間（1単位）

沖縄県主催　医療通訳者養成講座　（講師）	平成26年12月12日 ～平成26年12月23日	沖縄県にて,現医療通訳者に対して,医療通訳者の養成を担うことのできる講師として素材の発掘および育成を目的とし本セミナーの講師を行った. -世界の医療ツーリズムの現状 -日本政府の医療ツーリズムのの取組 -医療コーディネート組織の役割 -医療通訳と観光通訳の違い -旅行中で怪我や病気になった外国人の対応 -異文化によるトラブルの発生や対応方法 -講義の設計と方法 -講義の種類
関西国際大学保健医療学部看護学科（常勤助教）	平成25年 4月 ～ 平成25年 9月	学習技術（講義） 授業概要 学習技術 大学で授業を受けるにあたって必要となる基礎的な能力を養う.基礎的な能力として聴く,読む,書く,調べる,整理する,まとめる,表現する,伝える,考えるの9つを設定し,受講の際に必要なる能力から順に習得していく. 全15回にわたり,准教授が教授する際の補助として授業に参加した.
関西国際大学保健医療学部看護学科（常勤助教）	平成25年 4月 ～ 平成25年 9月	基礎演習（演習） 授業概要 基礎演習 大学で授業を受けるにあたって,必要となる能力を養う.時に,グループワークやプレゼンテーションなどの方法について,一つのテーマを元に実践的に行うことへ指導した. 担当：10回/15回（2単位）准教授同伴のもと担当した.
関西国際大学保健医療学部看護学科（常勤助教）	平成25年 4月 ～ 平成25年 9月	基礎看護学実習Ⅰ（実習） 授業概要 基礎看護学実習Ⅰ（早期体験実習） 早期体験学習として位置づけ,看護専門職者となるための学習の動機づけを図ることをねらいとする.医療施設において,病棟や外来などの看護実践の場に赴き,療養環境を把握するとともに,対象者の療養・診療の援助,自立の援助などの看護活動を見学・学習し,対象の健康ニーズと対応する看護専門職者の役割・機能について理解を深め,学習の方向性と在り方を探求し,今後の自己の学習目的を定める. 実習指導を行った. 担当：45時間（1単位）
関西国際大学保健医療学部看護学科（常勤助教）	平成26年 4月 ～ 平成26年 9月	学習技術（講義） 授業概要 学習技術 大学で授業を受けるにあたって必要となる基礎的な能力を養う.基礎的な能力として聴く,読む,書く,調べる,整理する,まとめる,表現する,伝える,考えるの9つを設定し,受講の際に必要なる能力から順に習得していく. 全15回にわたり,准教授が教授する際の補助として授業に参加した. 担当：2回/15回（2単位）准教授同伴のもと担当させてもたった.
関西国際大学保健医療学部看護学科（常勤助教）	平成26年10月 ～ 平成27年 3月	基礎看護学実習Ⅱ（実習） 授業概要 基礎看護学実習Ⅱ（看護援助過程） 健康障害により日常の生活援助を必要とする患者に対して,既習の看護学の知識・技術・態度を適用・応用し,患者を総合的に理解して,個別的な看護活動を実施するための基礎的能力を習得する.1名の患者を受け持ち,患者と援助的人間関係を築き,安全・安楽に基づき看護を展開するプロセスについて学ぶ.実習指導を行った. 担当：90時間（2単位）

奈良学園大学保健医療学部看護学科（非常勤講師）	平成26年10月 ～ 平成27年 3月	基礎看護学実習Ⅰ（実習） 授業概要 基礎看護学実習Ⅰ 健康障害により日常の生活援助を必要とする患者に対して,患者を生活援助技術を行うための基礎的能力を習得する.1名の患者を受け持ち,患者と援助的人間関係を築き,安全・安楽に基づき生活援助技術を行が行えるよう,実習指導を行った. 担当：45時間（1単位）
奈良学園大学保健医療学部看護学科（非常勤講師）	平成27年 4月 ～ 平成27年 9月	ヘルスアセスメント（演習） 授業概要 ヘルスアセスメント ゴードンの「11の健康機能パターン」をもとに,フィジカルアセスメント方法およびフィジカルエグザミナーションについて講義演習を通して教授した. 担当：4回/8回（1単位）
奈良学園大学保健医療学部看護学科（非常勤講師）	平成27年 4月 ～ 平成27年 9月	公衆衛生看護学概論（講義） 授業概要 公衆衛生看護学概論（講義） コミュニティーアズパートナーモデルをもとに地区診断の方法を教授した. 担当：6回/15回（2単位）教授同伴のもと講義とグループワークを担当させてもらった.
奈良学園大学保健医療学部看護学科（非常勤講師）	平成27年10月 ～ 平成28年 3月	基礎看護実習Ⅱ（実習） 授業概要 基礎看護学実習Ⅱ（看護援助過程） 健康障害により日常の生活援助を必要とする患者に対して,既習の看護学の知識・技術・態度を適用・応用し,患者を総合的に理解して,個別的な看護活動を実施するための基礎的能力を患者を受け持ち,患者と援助的人間関係を築き,安全・安楽に基づき看護を展開するプロセスについて実習を通じて指導した. 担当：90時間（2単位）
奈良学園大学保健医療学部看護学科（非常勤講師）	平成27年10月 ～ 平成28年 3月	公衆衛生看護学Ⅰ（地域活動）（講義） 授業概要 公衆衛生看護学Ⅰ（地域活動）（講義） 地域看護の対象である「地域集団」に焦点をあて,地域診断に必要な理論と技術を学び,地域組織活動の問題解決プロセスの方法をについて学習する.そのためには情報収集や分析の視点,健康づくり計画の立案,実施,評価,修正の実際について理解を深め,地域活動計画および評価について科学的視点に基づいた根拠を持つ必要がある.さらに保健師の専門的技術となる保健指導についても掘り下げて学習していく. 地域看護の対象である「地域集団」に焦点をあて,看護診断に必要な理論と技術を学び,地域組織活動の問題解決プロセスの方法について教授した. 担当：5回/15回（2単位）教授同伴のもと講義とグループワークを担当させてもらった.
近大姫路大学看護学部看護学科（常勤講師）	平成27年 4月 ～ 平成27年 9月	健康生活環境論（講義） 授業概要 健康生活環境論（講義） 環境が人々の健康に影響することを教授した. 担当：1回/15回（2単位）
近大姫路大学看護学部看護学科（常勤講師）	平成27年 4月 ～ 平成27年 9月	看護倫理Ⅰ（講義） 授業概要 看護倫理Ⅰ（講義） 看護を実践する上で,必要な倫理に関する基本的な知識と倫理的な考え方および方法の中で,重要な用語の意味（インフォームド・コンセント,アドボカシー,意思決定など）について事例を踏まえながら教授した. 担当：1回/8回（1単位）

近大姫路大学看護学部看護学科（常勤講師）	平成27年 4月 ～ 平成27年 9月	健康生活環境論演習（演習） 授業概要 健康生活環境論演習（演習） 日常生活援助（ベッドメイキング,衛生的手洗い,環境整備,臥床患者のシーツ交換,車椅子移乗・移送,体位変換,ボディメカニクス）について教授した. 担当：8回/15回（2単位）
近大姫路大学看護学部看護学科（常勤講師）	平成27年 4月 ～ 平成27年 9月	看護シミュレーション演習（演習） 授業概要 看護シミュレーション演習（演習） ヘンダーソンの基本的ニードによる看護過程について教授した. 担当：1回/15回（2単位）
近大姫路大学看護学部看護学科（常勤講師）	平成27年 4月 ～ 平成27年 9月	治療看護技術論（演習） 授業概要 治療看護技術論（演習） 診療の補助業務（滅菌操作,滅菌手袋装着方法,ホルター心電図検査,2点誘導心電図検査,12誘導心電図検査,造影CTおよびMRI検査,検尿・検便検査,採血検査,レントゲン検査,静脈内注射,点滴治療,皮下注射,皮内注射,筋肉注射,経口与薬,直腸内与薬）について教授した. 担当：2回/23回（3単位）
近大姫路大学看護学部看護学科（常勤講師）	平成27年 4月 ～ 平成28年 3月	健康生活環境論実習（実習） 授業概要 健康生活環境論実習（実習） 実習に伴う施設調整および日常生活援助技術の学生指導を行った. 担当：90時間（2単位）
近大姫路大学看護学部看護学科（常勤講師）	平成27年 4月 ～ 平成27年 9月	看護システム実習（実習） 授業概要 看護システム実習（実習） 医療機関および福祉・介護施設と実習に伴う施設調整を行った.
近大姫路大学看護学部看護学科（常勤講師）	平成27年 4月 ～ 平成27年 9月	基礎看護実習Ⅰ（実習） 授業概要 基礎看護実習Ⅰ（実習） 医療機関と実習に伴う施設調整を行った.
近大姫路大学看護学部看護学科（常勤講師）	平成27年10月 ～ 平成28年 3月	基礎看護実習Ⅱ（実習） 授業概要 基礎看護実習Ⅱ（実習） 健康障害により日常の生活援助を必要とする患者に対して,既習の看護学の知識・技術・態度を適用・応用し,患者を総合的に理解して,個別的な看護活動を実施するための基礎的能力を患者を受け持ち,患者と援助的人間関係を築き,安全・安楽に基づき看護を展開するプロセスについて教授した. 担当：90時間（2単位）
奈良学園大学保健医療学部看護学科（常勤講師）	平成28年 4月 ～ 平成28年 9月	公衆衛生看護学Ⅲ（産業保健）（講義） 授業概要 公衆衛生看護学Ⅲ（産業保健）（講義） 産業保健の目的と活動を理解し,労働安全衛生管理の制度とシステム,基本法律について学ぶ.産業の場における看護職の役割と多岐にわたる健康相談と保健指導の意義や特徴について学ぶ.また,看護活動の展開方法について理解し,職場環境と人・仕事の調和への支援について考察し,産業医,地域の保健師,家庭との連携について考える. 労働衛生管理の仕組み（労働衛生管理の方法,作業環境管理,作業管理）について,　職業性疾病の原因と予防・看護（頸肩腕症候群,腰痛症,VDT症候群,有機溶剤,特定化学物質,電離放射線）について教授した. 担当：3回/15回（2単位）教授同伴のもと,講義とグループワークを担当した.

奈良学園大学保健医療学部看護学科（常勤講師）	平成28年 4月 ～ 平成28年 9月	公衆衛生看護学方法論Ⅰ（講義） 授業概要 公衆衛生看護学方法論Ⅰ（講義） 公衆衛生看護活動の対象となる集団の特性をライフステージから理解し,各ステージ特有の健康課題を把握する基礎的知識を習得する.また,保健師の行う保健指導の方法論を学び,個人・家族・集団を対象にした健康問題の解決を目指した看護介入の実際と技術を学び,実践する基礎的知識を身につける. 保健指導の基本：保健指導の基本技術について教授した.また,成人保健指導：成人保健活動の理念について及び成人期の生活特性と保健指導,健康教育の技術,成人保健活動,高齢者保健活動につい教授した.高齢者保健指導：高齢者保健活動の理念について及び高齢者の生活特性と保健指導につい教授した. 担当：4回/15回（2単位）
奈良学園大学保健医療学部看護学科（常勤講師）	平成28年 4月 ～ 現在に至る	公衆衛生看護学方法論Ⅱ（講義） 授業概要 公衆衛生看護学方法論Ⅱ（講義） 地域の健康水準や住民の生活の質を高めることを目標とした地区看護活動を理解する.地域住民の健康意識や認識を高め,行動変容に導く主要な方法として,健康教育の理念と目的,その展開方法および基礎的実践能力を習得する.また地区看護活動を展開する上で必須となる地区組織活動を理解し,グループの持つ力を意識的に活用し,組織化させていく基礎的方法を学ぶ.対象グループが主体的に問題解決をしていくために,グループ自身の力量を形成する支援方法について,具体的事例から学びを深める. 健康教育の定義・目的,プリシード・プロシードモデル,健康教育の企画・実施・評価・フォローについて教授した.また,健康教育の企画,健康教育の実際：健康教育の指導案作成,健康教育の実際：健康教育の教材作成のグループワーク演習を実施した. 担当：4回/15回（2単位）
奈良学園大学保健医療学部看護学科（常勤講師）	平成28年 4月 ～ 平成28年 9月	基礎看護学実習Ⅱ（実習） 授業概要 基礎看護学実習Ⅱ（看護援助過程）（実習） 健康障害により日常の生活援助を必要とする患者に対して,既習の看護学の知識・技術・態度を適用・応用し,患者を総合的に理解して,個別的な看護活動を実施するための基礎的能力を患者を受け持ち,患者と援助的人間関係を築き,安全・安楽に基づき看護を展開するプロセスについて教授した. 担当：90時間（2単位）
奈良学園大学保健医療学部看護学科（常勤講師）	平成28年10月 ～ 平成29年 3月	公衆衛生看護学Ⅰ（地域活動）（講義） 授業概要 公衆衛生看護学Ⅰ（地域活動）（講義） 地域看護の対象である「地域集団」に焦点をあて,地域診断に必要な理論と技術を学び,地域組織活動の問題解決プロセスの方法をについて学習する.そのためには情報収集や分析の視点,健康づくり計画の立案,実施,評価,修正の実際について理解を深め,地域活動計画および評価について科学的視点に基づいた根拠を持つ必要がある.さらに保健師の専門的技術となる保健指導についても掘り下げて学習していく. 地域看護の対象である「地域集団」に焦点をあて,看護診断に必要な理論と技術を学び,地域組織活動の問題解決プロセスの方法について教授した. 担当：7回/15回（2単位）教授同伴のもと,講義とグループワークを担当した.

2　作成した教科書，教材 介護のための『教育学』 看護・介護・福祉のための「教育学」４巻 あいり出版 ISBN：978-4-86555-037-5 Page:121-139	平成29年 1月	本書は,諸外国に例をみないほど急速に進展している高齢化から地域包括ケアシステムの推進を進めている今日の日本において,高齢者がすみ慣れた地域で介護や医療,生活支援サポート及びサービスを受けられるよう,介護職への期待もさらに大きくなっている.そこで,「生活体としての人」という見地に立ち,対象者が行動変容をし,健康行動を身につける際の,専門職者が行う支援の技法を紹介している.具体的には,学問に体系化されてきた教育学の理論を主として紹介し,事例を展開するなかで,その理論を生かした効果的な指導の方法を紹介している. 本書のなかで,第9章 視覚・聴覚障害を担当し,加齢性白内障の対象者と接した介護職者がABC理論を活用して対象者に関わった事例と,老人性難聴の対象者と接した介護職者がコンボイモデルを活用して対象者に関わった事例を紹介した. あいり出版 全161page　B4サイズ　Page:121-139を担当 新谷奈苗　編著 吉田武大　坂中尚哉　虎杖真智子　今野理恵 堀口和子　鈴木千枝　大濱恵美子　坂井晶子 守本幸次　立川茂樹　瀬戸光エミ子　高橋宏幸
看護職・看護学生のための「痛みケア」　Pain Care 株式会社ピラールプレス ISBN：978-4-86194-172-6 Page:102-113	平成29年 3月21日	本書は,第I部で「痛みと人間」をテーマに「痛みと性」「痛みの意味」「痛みと倫理」「痛みと医療」について述べ,　人間と痛みの関係を記している.また,第II部5～8章で「痛み理論」を紹介し，痛みに関する理論をもとに痛みについての理解を深めている.第III部では「痛みと看護」をテー マに「高齢者の慢性的な痛みの治療と看護」「検査に伴う痛みの看護」「治療に伴う 痛みの看護」「ターミナルケアと緩和医療」といった臨床の場面を想定した痛みのケアを紹介している.そして,第IV部では「痛みケアにおける看護実践例」として，術後疼痛，癌性疼痛，急性・慢性疼痛，出産に関連した痛みの看護，小児に関連した痛みの看護といった主な疾患や状況における痛みケアの展開事例を紹介している.以上の内容により，看護職においては日々の看護実践のヒントが得られるように，また看護学生においては一連の看護実習の手引書として活用できるように構築されている. 本書のなかで,第IV部 12章「術後疼痛のある患者の看護]を担当し,胃がんの外科的治療に伴う痛みのケアの実際を事例とともに紹介した. 株式会社ピラールプレス 全175page　B4サイズ　Page:102-113を担当 守本とも子　編著 池辺寧　沖本克子　梶村郁子　小池恵理子　澤田京子 篠原百合子　新谷奈苗　高垣麻衣　立川茂樹　田中登美 棚橋千弥子　辻下守弘　松浦純平　室津史子　守本とも子 横山美菜
3　教育上の能力に関する大学等の評価 「平成23年度・授業評価アンケート」	平成23年 7月	平成23年度は,授業「危篤・終末期の看護（15時間/1単位,学生数38名）,成長発達に伴うアセスメント（15時間/1単位,学生数42名）,内部環境調節機能障害とその治療（15時間/1単位,学生数42名）」を実施し,終了後に学生へ授業評価アンケートを実施,その結果において,授業内容に満足（積極的に参加できた.集中することができた.学習意欲が増した.）,と回答した学生が8割以上を占めた.加えて,実習「基礎看護学実習（90時間/2単位,学生数6名）,成人看護学実習（135時間/3単位,学生数5名）,精神看護学実習90時間/2単位,学生数30名」を実施し,学生が積極的に実習に取り組めるよう指導にあたった.実習中は看護師国家試験を視野に入れることができる様に指導内容に取り入れた.結果,全学生（計41名）が単位を修得した.

4　実務の経験を有する者についての特記事項			
日本エマージェンシーアシスタンス（株）	育成および指導	平成19年 4月	主任として,部下の育成および指導
シンガポール駐在邦人の健康セミナー	セミナー講師	平成19年 7月	感染症,鳥インフルエンザ,生活習慣病等のセミナー講師
日本エマージェンシーアシスタンス（株）	セミナー講師	平成20年 6月	新型インフルエンザと政府水際対策等のセミナー講師
東京電力株式会社	セミナー講師	平成20年 6月	新型インフルエンザと政府水際対策等のセミナー講師
沖縄県	セミナー講師	平成23年12月	医療現場における通訳入門セミナー講師
沖縄県	セミナー講師	平成24年12月	メディカルツールズム　医療現場における通訳 入門セミナー　（講師）
沖縄県	セミナー講師	平成25年12月	観光と医療現場における外国人受け入れ対応力セミナー 観光業者向け　（講師）
沖縄県	ワークショップ ファシリテーター	平成25年12月	「外国人観光者の医療体制支援のあり方プログラムの開発」 検討会　ワークショップ（ファシリテーター）
沖縄県	セミナー講師	平成26年 1月	観光と医療現場における外国人受け入れ対応力セミナー 医療機関向け　（講師）
筑波大学大学院人間総合科学研究科 スポーツ・健康マネジメント専攻（非常勤講師）		平成25年10月 ～ 平成26年 3月	スポーツ健康科学論Ⅲ　（非常勤講師）
関西国際大学国際交流課	セミナー講師	平成26年 7月	教員向け危機管理講習 「学生が病気になった場合の対応について・必要最低限の医療知識 ・感染症などにかかった場合の応急処置」（講師）
筑波大学　大学の世界展開強化力事業	セミナー講師	平成26年10月	AIMS プログラム説明会 「渡航前準備と現地で医療機関にかかる際の心得」（講師）
千代田化工建設株式会社 危機管理ユニット	セミナー講師	平成26年10月	第三回地域情勢報告会 「パンデミック･感染症に関する会社対応･個人対応」（講師）
奈良学園大学保健医療学部看護学科（非常勤講師）		平成26年10月 ～ 平成27年3月	基礎看護技術演習Ⅰ,基礎看護学実習Ⅰ
沖縄県	セミナー講師	平成26年12月	医療通訳講師養成講座（講師）
関西国際大学 保健医療学部看護学科		平成25年 4月 ～ 平成27年3月	学習技術,基礎演習,基礎看護学実習Ⅰ,基礎看護学実習Ⅱ
関西国際大学 就職委員会		平成25年 4月 ～ 平成27年3月	関西国際大学 就職委員会メンバー
日本公衆衛生看護学会	学術集会実行委員	平成27年 1月	第3回学術集会実行委員
関西国際大学国際交流課	セミナー講師	平成27年 1月	グローバルスタディ危機管理講習 「学生が病気になった場合の対応について・必要最低限の医療知識 ・感染症などにかかった場合の応急処置」（講師）
近代姫路大学看護学部看護学科		平成27年 4月 ～ 平成28年 3月	看護リテラシーⅠ,健康生活環境論,看護倫理Ⅰ, 健康生活環境論演習,健康生活環境論実習, 看護シミュレーション演習,基礎看護学実習Ⅰ, 看護システム実習,基礎看護学実習Ⅱ,治療看護技術論, 統合実習,卒業研究
近代姫路大学看護学部 実習調整委員会		平成27年 4月 ～ 平成28年 3月	近代姫路大学看護学部 実習調整委員会メンバー
奈良学園大学保健医療学部看護学科	非常勤講師	平成27年 4月 ～ 平成28年 3月	ヘルスアセスメント 公衆衛生看護学概論 基礎看護学実習Ⅱ
奈良学園大学保健医療学部看護学科	ゲストスピーカー	平成27年10月 ～ 平成28年 3月	公衆衛生看護学Ⅰ（地域活動）
奈良学園大学保健医療学部 平成28年度課程選択履修者選考資料作成委員		平成27年10月 ～ 平成28年 3月	奈良学園大学保健医療学部 平成28年度課程選択履修者選考資料作成委員
奈良学園大学保健医療学部 平成28年度課程選択履修者選抜問題作成委員		平成27年10月 ～ 平成28年 3月	奈良学園大学保健医療学部 平成28年度課程選択履修者選抜問題作成委員
奈良学園大学保健医療学部		平成28年 4月 ～ 平成29年 3月	基礎看護学実習Ⅱ,公衆衛生看護学Ⅰ(地域活動), 公衆衛生看護学Ⅲ(産業保健),公衆衛生看護方法論Ⅰ, 公衆衛生看護方法論Ⅱ,

奈良学園大学 自己点検・評価委員会	平成28年 4月 ～ 平成29年 3月	奈良学園大学 自己点検・評価委員会メンバー
奈良学園大学保健医療学部 学生部会	平成28年 4月 ～ 平成29年 3月	奈良学園大学保健医療学部 学生部会メンバー（主に３年次担当）
奈良学園大学保健医療学部 国家試験対策ワーキンググループ	平成28年 4月 ～ 平成29年 3月	奈良学園大学保健医療学部 国家試験対策ワーキンググループメンバー
日本サーモロジー学会学術集会　　企画運営委員長	平成28年 5月 13日～平成28 年 5月15日	日本サーモロジー学会第３３回大会 企画運営委員長
奈良学園大学保健医療学部 平成29年度課程選択履修者選考資料作成委員	平成28年10月 ～ 平成29年 3月	奈良学園大学保健医療学部 平成29年度課程選択履修者選考資料作成委員
奈良学園大学保健医療学部 平成29年度課程選択履修者選抜問題作成委員	平成28年10月 ～ 平成29年 3月	奈良学園大学保健医療学部 平成29年度課程選択履修者選抜問題作成委員
日本産業看護学会 産業看護学体系化検討委員会近畿地方ワーキンググループ	平成28年10月 ～ 現在に至る	日本産業看護学会 産業看護学体系化検討委員会近畿地方ワーキンググループ グループメンバー
大和高田市立看護専門学校　　非常勤講師	平成28年12月	災害看護と国際看護
５　その他		
Clinical Study2012年12月号 メヂカルフレンド社	平成24年12月	国家試験対策　国試合格トレーニング「精神看護学」問題と解説を作成 山本恵美子 立川茂樹
平成23年度沖縄県医療ツーリズム促進事業 報告書 メディカル通訳初心者セミナー（英語）	平成24年 2月	平成23年度沖縄県医療ツーリズム促進事業報告書を作成 「メディカル通訳初心者セミナー（英語）」担当 立川茂樹
平成24年度沖縄県医療ツーリズム促進事業 報告書 沖縄　医療通訳セミナー	平成25年 2月	平成24年度沖縄県医療ツーリズム促進事業 報告書 「沖縄　医療通訳セミナー 医療従事者用,医療通訳者用」担当 立川茂樹
平成25年度県内医療ツーリズム・ウエルネスツーリズム促進のための基盤形成事業 報告書 県内医療ツーリズム・ウェルネスツーリズム促進にむけた人材育成講座の実施運営及び教材等の作成について	平成26年 2月	平成25年度県内医療ツーリズム・ウエルネスツーリズム促進のための基盤形成事業 報告書 「観光と医療現場における外国人受け入れ対応力セミナー　観光業者向け」「外国人観光者の医療体制支援のあり方プログラムの開発検討会」「観光と医療現場における外国人受け入れ対応力セミナー　医療機関向け」担当 立川茂樹
平成26年度沖縄型ウェルネスツーリズム等推進事業 報告書 外国人観光者の医療体制支援のあり方についての検討 −沖縄県の外国人観光者を受け入れる体制作り−	平成27年 2月	平成26年度沖縄型ウェルネスツーリズム等推進事業 報告書 「外国人観光者の医療体制支援のあり方についての検討−沖縄県の外国人観光者を受け入れる体制作り−」 「医療通訳講師養成講座」担当 立川茂樹
産業保健と看護 9巻1号(通巻49号) メディカ出版	平成29年 1月	「今月の海外文献」担当 Systematic review; Work Time ControlとWork/Non-workバランス, 健康とWell-being, 仕事関連の成果の関連性について 立川茂樹

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項		
事項	年月日	概　　要
1　資格，免許 保健師免許取得	平成17年 5月	登録番号：第130411号
看護師免許取得	平成17年 5月	登録番号：第1333721号
日本集団災害医学会セミナー受講	平成20年 2月	一般社団法人　日本集団災害医学会開催
第13回NBC災害・テロ対策研修受講	平成20年 2月	厚生労働省　ＮＢＣ災害・テロ対策研修事業
BDLS（Basic Disaster Life Support）取得	平成20年 3月	
国家資格受胎調節実地指導員取得	平成20年 9月	第4251号
国家資格第一種衛生管理者取得	平成20年 9月	第13001304811
日本家族計画協会認定　思春期保健相談士取得	平成21年 1月	第7744号
日本看護協会 災害支援ナース取得	平成29年 2月	登録番号：第357号
2　特許等 なし		
3　実務の経験を有する者についての特記事項 日本エマージェンシーアシスタンス（株）	平成18年 9月 ～ 平成21年 4月	メディカル部主任とし,以下の職務を取りまとめた. ･産業保健業務および衛生管理者業務 ･国際搬送調整業務（入院医療機関確保,航空会社との調整,現地主治医と家族および患者間の医療情報共有,医療英語通訳および翻訳,診療情報提供書の作成など） ･管理業務（部内業務管理,業務時間管理,業務環境管理）
インターナショナルSOSジャパン株式会社	平成21年 5月 ～ 平成22年 6月	･産業保健業務および衛生管理者業務 ･国際搬送調整業務（入院医療機関確保,航空会社　との調整,現地主治医と家族および患者間の医療情報共有,医療英語通訳および翻訳,診療情報提供書の作成など）
かながわレインボーセンター SHIP　ボランティア	平成21年 4月 ～ 平成22年 7月	･HIV採血検査及びHIV陽性対象者へカウンセリング
独立行政法人国立健康・栄養研究所	平成21年 5月 ～ 平成22年 7月	･健康増進プログラム 看護技術補佐員
財団法人博慈会　博慈会高等看護学院	平成23年 3月 ～ 平成25年 3月	第一看護学科教務副主任として下記委員会に携わる. ･教育課程編成委員会,IT委員会,入試委員会,国家試験対策委員会,学年委員会委員長 ･1年生学生係,学院祭係,課外活動係,実習調整者,ケーススタディ発表調整 また,下記実習にて学生の実習指導を行った. ･基礎看護学実習Ⅰ,基礎看護学実習Ⅱ,成人看護学実習Ⅰ,成人看護学実習Ⅱ,老年看護学実習Ⅰ,老年看護学実習Ⅱ,精神看護学実習,在宅看護論実習,統合看護学実習 下記授業項目を担当した. ・内分泌機能障害とその治療,生体防御機能障害とその治療,関係法規,特殊な環境下での看護,成長発達に伴うアセスメント,日常看護援助技術演習,総合看護技術演習
しらかば診療所	平成23年 1月 ～ 平成25年 3月	看護職員 ･外来看護全般 ･HIV罹患者の内服薬相談,HIV検査の検査内容説明および陽性者のカウンセリング
全国保健師教育機関協議会 第2回秋季研修会受講	平成25年 8月	
全国保健師教育機関協議会 平成25年度 第6回日本DMAT隊員養成研修受講	平成25年11月	

株式会社ヤクルト三木工場	平成26年 4月 ～ 平成27年 3月	産業保健師 ・メンタルケア面談 ・メンタルケア調査 ・メンタルケア　コーピング事業 ・メンタルケア　コーピングセミナー
日本サーモロジー学会 第34回臨床熱画像検査法講習会受講	平成27年 6月	第34008号
日本看護協会 災害医療と看護受講	平成27年 7月	リ-兵庫　第38号
沖縄県国頭郡金武町 乳幼児歯科健康診査	平成28年 8月	保健師 ・乳幼児歯科健康診査　参加
全国保健師教育機関協議会 第31回夏季教員研修会受講	平成28年 8月	
奈良県看護協会 平成28年度奈良県看護協会保健師職能研修会受講	平成28年 9月	
全国保健師教育機関協議会 東海・近畿ブロック研修会受講	平成28年10月	
全国保健師教育機関協議会 第5回秋季研修会受講	平成28年10月	
兵庫県看護協会 災害支援ナースを目指すあなたへ（リーダー編）受講	平成28年12月	
沖縄県国頭郡金武町 ３歳児健康診査	平成28年12月	保健師 ・手あらいの健康教育を実施
全国保健師活動研究会 第49回全国保健師活動研究集会参加	平成29年 1月	
４　その他 なし		

研究業績等に関する事項

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
（著書） 1オウンドメディア研究会 研究報告書１	共著	平成27年3月9日	有限会社マーケティングメソッド研究所 ASIN: B00UD93DQQ Page:96-116	2013年8月に発足したオウンドメディア研究会より,メディアサイエンス研究所の大島一豊研究室として2年間の研究期間をスタートし,その中間報告としての本報告書を研究員とともに各回研究テーマに基づきまとめた.本著において,第5章「医療機関におけるメディア・マネジャーの必要性」を担当し,SNSを利用した新人看護師の新しい雇用形態および雇用方法の検討を行った. 全185page　B5サイズ　Page:96-116を担当 大島一豊,前田稔,上久保訓,小林永 林歩,豊田サトシ,立川茂樹
2介護のための『教育学』 看護・介護・福祉のための 「教育学」４巻	共著	平成29年1月25日	あいり出版 ISBN：978-4-86555-037-5 Page:121-139	本書は,諸外国に例をみないほど急速に進展している高齢化から地域包括ケアシステムの推進を進めている今日の日本において,高齢者がすみ慣れた地域で介護や医療,生活支援サポート及びサービスを受けられるよう,介護職への期待もさらに大きくなっている.そこで,「生活体としての人」という見地に立ち,対象者が行動変容をし,健康行動を身につける際の,専門職者が行う支援の技法を紹介している.具体的には,学問に体系化されてきた教育学の理論を主として紹介し,事例を展開するなかで,その理論を生かした効果的な指導の方法を紹介している. 本書のなかで,第9章 視覚・聴覚障害を担当し,加齢性白内障の対象者と接した介護職者がABC理論を活用して対象者に関わった事例と,老人性難聴の対象者と接した介護職者がコンボイモデルを活用して対象者に関わった事例を紹介した. あいり出版 全161page　B4サイズ　Page:121-139を担当 新谷奈苗　編著 吉田武大　坂中尚哉　虎杖真智子　今野理恵 堀口和子　鈴木千枝　大濱恵美子　坂井晶子 守本幸次　立川茂樹　瀬戸光エミ子　高橋宏幸

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
3看護職・看護学生のための「痛みケア」　Pain Care 株式会社ピラールプレス ISBN：978-4-86194-172-6 Page:102-113	共著	平成29年 3月21日	株式会社ピラールプレス ISBN：978-4-86194-172-6 Page:102-113	本書は,第I部で「痛みと人間」をテーマに「痛みと性」「痛みの意味」「痛みと倫理」「痛みと医療」について述べ，人間と痛みの関係を記している.また,第II部5～8章で「痛み理論」を紹介し，痛みに関する理論をもとに痛みについての理解を深めている.第III部では「痛みと看護」をテー マに「高齢者の慢性的な痛みの治療と看護」「検査に伴う痛みの看護」「治療に伴う 痛みの看護」「ターミナルケアと緩和医療」といった臨床の場面を想定した痛みのケアを紹介している.そして,第IV部では「痛みケアにおける看護実践例」として，術後疼痛，癌性疼痛，急性・慢性疼痛，出産に関連した痛みの看護，小児に関連した痛みの看護といった主な疾患や状況における痛みケアの展開事例を紹介している.以上の内容により，看護職においては日々の看護実践のヒントが得られるように，また看護学生においては一連の看護実習の手引書として活用できるように構築されている. 本書のなかで,第IV部 12章「術後疼痛のある患者の看護]を担当し,胃がんの外科的治療に伴う痛みのケアの実際を事例とともに紹介した. 株式会社ピラールプレス 全175page　B4サイズ　Page:102-113を担当 守本とも子　編著 池辺寧　沖本克子　梶村郁子　小池恵理子　澤田京子 篠原百合子　新谷奈苗　高垣麻衣　立川茂樹　田中登美 棚橋千弥子　辻下守弘　松浦純平　室津史子　守本とも子 横山美菜
（学術論文） 1慢性呼吸器疾患に関する保険･福祉制度の二国間比較 -日本･韓国- -海外赴任者の労働と生活の支援をめざして-（査読付）	単著	平成25年10月	医療福祉情報行動科学研究(2) 日本医療福祉情報行動科学会 ISSN:2185-1999 Page8-11	海外赴任者の労働と生活の支援のために,慢性呼吸器疾患により在宅酸素療法を受けながら日本と韓国とで生活をしている人々に対する医療･福祉の実態を調査･比較した.そして,慢性呼吸器疾患を持つ労働者の海外赴任は,赴任前の処方箋や診断書（英文）の入手に加え,酸素供給機器提供会社とも調整を行う必要があること.韓国への渡航では,携帯用酸素ボンベ確保方法の事前準備が必要であり,渡航前の産業看護師による関与の重要性が示唆された. 立川茂樹
2Comparison of Public Health Care System between Taiwan and Japan; Focusing on Long-Term Oxygen Therapy（査読付） ＜和訳＞ 公衆衛生保健ケアシステムの国際比較（台湾と日本）-在宅酸素療法に焦点を当てて-	共著	平成27年1月	Bridging Research and Good Practices towards Patient Welfare, the CRC Press, @2015 Taylor & Francis Group, London ISBN;978-1-138-02716-9 Page:55-59	海外赴任者の労働と生活の支援のために,慢性呼吸器疾患により在宅酸素療法を受けながら日本と台湾とで生活をしている人々に対する医療･福祉の実態を調査･比較した.日本では呼吸療法士の資格制度の検討が示唆された.また,台湾では酸素濃縮機や系大陽酸素ボンベの提供を福祉ではなく継続医療の視点で行う必要があることが明らかとなった. SHIGEKI TATSUKAWA NANAE SHINTANI AYAKO KAJIMURA 本人担当部分：研究計画立案,情報収集および整理,データ収集,分析及び論文執筆
3Consideration of occupational stressors that influence Senses of Satisfaction at work in Japan（査読付） ＜和訳＞ 仕事満足度に影響する職業性ストレスの検討	共著	平成27年1月	Bridging Research and Good Practices towards Patient Welfare, the CRC Press, @2015 Taylor & Francis Group, London ISBN;978-1-138-02716-9 Page:191-196	仕事満足度を向上させる環境づくりを提案することを目的に職業性ストレスと仕事満足度の関連について重回帰分析を行った.職業性ストレスの"Friendly Environment","Well-developed Relationship","Job Discretion","Workload"が仕事満足度に影響していた.健康的職場環境を構築するためには,特に"Friendly Environment","Well-developed Relationship"について産業保健師の関与が重要であることが明らかとなった. AYAKO KAJIMURA NANAE SHINTANI SHIGEKI TATSUKAWA 本人担当部分：研究計画整理,分析及び論文執筆
4How Do You Support Breast Cancer Patients on Work-Treatment Balance?（査読付） ＜和訳＞ 乳がん患者のワークトリートメントバランスへの支援	共著	平成27年1月	Bridging Research and Good Practices towards Patient Welfare, the CRC Press, @2015 Taylor & Francis Group, London ISBN;978-1-138-02716-9 Page:71-77	乳がんによる化学療法治療中の患者が抱える困難を明らかにすることによりQOLを向上することを目的とし,乳がんによる化学療法治療中の患者へインタビューを実施しテキストマイニングによる分析を行った.インタビュー分析の結果,14項目の困難に分類された.そして,自信を与えるようなサポート体制を様々な機関が連携しながら構築することが大切であると明らかになった. NANAE SHINTANI HIROYASU NAGAOKA ERIKO KOIKE SHIGEKI TATSUKAWA AYAKO KAJIMURA 本人担当部分：データ収集,分析及び論文執筆補助

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
5Consideration of the medical-care-support-system for Non-Japanese Visitors in Okinawa (査読付) ＜和訳＞ 沖縄県の外国人観光客に対する医療ケア支援システムの検討	単著	平成27年1月	New Ergonomics Perspective,CRC Press, @2015 Taylor & Francis Group, London ISBN 978-1-138-02751-1 Page:211-215	本研究は,観光産業の観点から沖縄の外国人訪問者のための救急病院訪問の問題を発見することを目的とし,質的研究を行った.観光産業に従事する人々（18名）から収集された61のラベルを19 Secondary-items,9 Major-itemsに分類した.それらのSecondary-items,9 Major-itemsは観光業界独特の特徴的な項目があった.今後,医療ケア支援システムについて,さらなる検討する必要性が示唆された. SHIGEKI TATSUKAWA
6Consideration of support using areal feature and SNS (Social Network Service) for nursing-students job-hunting - Viewpoints of Public Health on community and Authentic Voices - (査読付) ＜和訳＞ SNSを活用した看護学生の就職活動支援方法の検討　-地域特性と住民の声を反映して-	共著	平成28年2月8日	The 14th Annual Hawaii International Conference on Education, Hawaii International Conference on Education Conference Proceeding URL:http://hiceducation.org/wp-content/uploads/proceedings-library/EDU2016.pdf Page：1264-1270	本研究は,中小規模医療機関の看護部長にインタビューを行い,就職採用に伴う苦悩を調査し,更に就職活動中の看護学生に就職活動方法をアンケート調査することにより,新たな就職活動支援方法を導き出す基礎調査を行った.中小規模医療機関では新人看護師の十分な数の確保が困難な現状があることがわかった.更に,看護学生のアンケート調査からインターネットの活用,先輩や看護教員に聞く,インターンシップを活用するなどの方法により就職活動を行っているものの,その地域の環境や住民の声を反映した地域特性を知りたいとの思いを持っていることがわかった.SNSを活用することで双方の困難を減少に導くことができるのではないかと示唆された. TATSUKAWA Shigeki SHINTANI Nanae SUZAKI Yoshika KAJIMURA Ayako SATO Ikuyo INOUE Chieko TOYODA Satoshi 本人担当部分：研究計画立案し情報収集および整理,データ収集,分析及び論文執筆
7A strategy for understanding of Public Health Nursing -Consideration of Educational Effectiveness by ”Practice lessons of community exploration” - (査読付) ＜和訳＞ 公衆衛生看護学初学者の教育的効果 -地域診断演習を試みて-	共著	平成28年2月8日	The 14th Annual Hawaii International Conference on Education, Hawaii International Conference on Education Conference Proceeding URL:http://hiceducation.org/wp-content/uploads/proceedings-library/EDU2016.pdf Page：1709-1716	看護大学２年時の公衆衛生看護学初学者の学生に,公衆衛生看護学概論の講義において,地域を踏査する演習を実施した.公衆衛生看護学概論では,座学で必要な知識を学んだあと,地域を踏査する演習を通して,実践のなかから地域を含めた視点を養う取り組みを行った.演習は,A市をコミュニティアズパートナーモデルを用い全体像を把握した上で,公民館を拠点に市を５つのブロックに分けた.演習時はコミュニティアズパートナーモデルの視点に沿って,それぞれの公民館の周囲を踏査し,公民館事業に参加している住民を対象に「この街に生活して思うこと,感じること」についてインタビューを行った.結果として,個人の全体像を捉えるゴードンの11のカテゴリー以外に,自然環境,教育,制度,地形,治安,地域文化,地域においてのコミュニケーション力等の,地域を捉えたカテゴリーが抽出された.学生が対象者とその対象者の背景にある地域を含んで理解するには,概論の段階から地域を踏査する演習を組み込むことに効果あることがわかった. SHINTANI Nanae TATSUKAWA Shigeki SUZAKI Yoshika KAJIMURA Ayako INOUE Chieko KINJO Natsuki 本人担当部分：研究計画立案,情報収集および整理,データ収集,分析及び論文執筆補助
8Study of the Child Care Support in Japan (2nd Report) (査読付) ＜和訳＞ 育児ケアについての現状調査 第２調査研究	共著	平成28年2月8日	The 14th Annual Hawaii International Conference on Education, Hawaii International Conference on Education Conference Proceeding URL:http://hiceducation.org/wp-content/uploads/proceedings-library/EDU2016.pdf Page：1655-1658	本研究は,育児ケアサポートセンターを利用している程度と育児ケアについて現状を把握することを目的とし,M市において育児ケアサポートセンターを利用しながら育児を行っている父親５人と母親１２４人にアンケート調査を実施した.結果として,育児ケアサポートセンターを利用する理由に「親同士の友人作り(26%)」「子育ての心理的転(24%)」が多く,子育てに対して「子育て方法を見て欲しい(91.4%)」が最も多かった.なお,見て欲しい子育て方法には,「子供の発達(28%)」「子供の学習(20.9%)」「子供の身体的発達のため(18.6%)」などが含まれていた.以上の育児ケアについての現状から,母親が不安なく地域で子育てをするために,活力かる地域性を生み出すと共に,子育てについての診断的尺度が必要であるとわかった. SUZAKI Yoshika SHINTANI Nanae TATSUKAWA Shigeki 本人担当部分：共同研究で抽出不可能

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
9Evaluation of the educational effectiveness in a new clinical nursing knowledge acquisition system（査読付） ＜和訳＞ 新たな臨床看護知識獲得システムにおける教育効果の評価	共著	平成28年2月8日	The 14th Annual Hawaii International Conference on Education, Hawaii International Conference on Education Conference Proceeding URL:http://hiceducation.org/wp-content/uploads/proceedings-library/EDU2016.pdf Page：1413-1418	本研究は,新たに構築した看護ニーズを評価するための支援システムの有効性を,看護師の日々の看護業務と教育の必要から調査した.結果は,我々のシステムを使用した場合,あのモデルケースでは,評価成績が大幅に改善することを示しました.したがって,新たに構築した看護ニーズと評価フィールドの表示機能は,看護ニーズに関する知識の獲得を容易にするための効果的な教育ツールであると考えられる. KAJIMURA Ayako TATSUKAWA Shigeki SHINTANI Nanae INOUE Chieko 本人担当部分：データ分析及び論文執筆補助
10Education for health-care-workers to popularize Animal Assisted Therapy (AAT) in Japan（査読付） ＜和訳＞ 日本で動物介在療法が普及するために必要な医療従事者の教育検討	共著	平成28年2月8日	The 14th Annual Hawaii International Conference on Education, Hawaii International Conference on Education Conference Proceeding URL:http://hiceducation.org/wp-content/uploads/proceedings-library/EDU2016.pdf Page：1255-1260	本研究の目的は,日本で動物介在療法を普及するために問題となっていることを明確化することである.動物介在療法は2010年子ども病院において,初めて看護師がハンドラーとなりファシリティードッグを導入しその効果が世に広まった.しかし現段階で医療従事者がハンドラーとなりファシリティードッグを導入している病院は,子ども病院２件,回復期病院で1件の計3件と中々普及に至っていない.その原因を考察した結果,文化や動物観の違いにより,①動物介在療法の制度が確立されていない②医療従事者の知識不足によりイヌが病院に導入されることに抵抗があるがあげられた.それらの原因を排除するために は,医療従事者の教育とトレーナーの育成が大切であり,さらには導入されている効果を科学的に実証することが必要であると考えられる. INOUE Chieko KAJIMURA Ayako TATSUKAWA Shigeki SHINTANI Nanae 本人担当部分：研究計画立案,情報収集および整理及び論文執筆補助
11Investigation of evaluation methods of bed-bath technics in Nursing freshmen education （査読付） ＜和訳＞ 初年次教育における看護技術（清拭技術）評価方法の検討	共著	平成28年 5月	Journal of Modern Education Review (ISSN 2155-7993) Volume 6, Number 5, May 2016 Page348-353 Academic Star Publishing COMPANY LIMITED	本研究では清潔・衣生活技術の講義の中の清拭技術評価を通じ,1つ1つの項目がどのように影響しあっているのかを明らかにし,今後の教授活動の示唆を得ることを目的とした. 対象者は便宜的に抽出した学生57名とし,清拭評価表（20項目）を用い,2人1組の学生（看護師役・患者役）の技術演習を教員1名が観察法を行った結果を①清拭評価表（20項目）の相関をピアソンの積率相関係数を統計解析ソフトSPSS Statistics.19.0を用いて分析した.その結果,「身だしなみ」は「実施の確認」「説明と同意」「作業域の確保」「タオルの用い方」「好みの拭き圧」「コミュニケーション」と,「実施の確認」は「説明と同意」「眼の拭き方」「コミュニケーション」と,「説明と同意」は「眼の拭き方」「上肢の拭き方」と,いずれも1%水準で有意な正の相関がみられた.そこで,1）「身だしなみ」を整える意欲・態度が「技術」に関与することが示唆された.2)対象者にわかりやすく説明し,同意を得る方法を身に付けることは,延いては対象者の希望に合わせた技術を提供できることにつながる.様々な技術演習でも教授としていく必要があることが示唆された. SATO Ikuyo SHINTANI Nanae TATSUKAWA Shigeki 本人担当部分：研究計画立案,情報収集および整理及び論文執筆補助
12Issues related Emergency Hospital Visit for Foreign-Residents - Consideration about Medical Care Support Systems of Foreign-Residents in Public Health -（査読付） ＜和訳＞ 在日外国人の緊急外来受診に伴う問題　-公衆衛生的視点による医療ケア支援体制づくり-	共著	平成28年 7月	Journal of Modern Education Review (ISSN 2155-7993) Volume 6, Number 7, July 2016 Page478-482 Academic Star Publishing COMPANY LIMITED	急遽受診が必要となった在日外国人労働者のサポートシステムの検討を外国人対応を常に行っている旅行業界関連勤務者（18名）と共にKJ法を用い行った.結果,3つのMajor-itemsと17の Secondary-itemsに分類された.企業･行政･医療（保健を含む）それぞれのサポート不足の側面に分かれ,検討が必要なサポート体制を整理することができた.また,産業保健師が医療機関と連携を取り,在日外国人労働者のサポート体制を充実させる必要性が示唆された.また,行政保健師と入国管理所の連携も必要であると示唆された. TATSUKAWA Shigeki SHINTANI Nanae 本人担当部分：研究計画立案し情報収集および整理,データ収集,分析及び論文執筆

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（その他） 1国家試験対策　国試合格トレーニング「精神看護学」問題と解説	共著	平成24年12月	Clinical Study2012年12月号 メヂカルフレンド社	国家試験対策　国試合格トレーニング「精神看護学」問題と解説を作成 山本恵美子 立川茂樹
2「メディカル通訳初心者セミナー（英語）」	共著	平成24年 2月	平成23年度沖縄県医療ツーリズム促進事業 報告書 沖縄県	平成23年度沖縄県医療ツーリズム促進事業報告書を作成 「メディカル通訳初心者セミナー（英語）」担当 立川茂樹
3「沖縄　医療通訳セミナー医療従事者用,医療通訳者用」	共著	平成25年 2月	平成24年度沖縄県医療ツーリズム促進事業 報告書 沖縄県	平成24年度沖縄県医療ツーリズム促進事業 報告書 「沖縄　医療通訳セミナー 医療従事者用,医療通訳者用」担当 立川茂樹
4「観光と医療現場における外国人受け入れ対応力セミナー　観光業者向け」 「外国人観光者の医療体制支援のあり方プログラムの開発検討会」 「観光と医療現場における外国人受け入れ対応力セミナー　医療機関向け」	共著	平成26年 2月	平成25年度県内医療ツーリズム・ウエルネスツーリズム促進のための基盤形成事業 報告書 沖縄県	平成25年度県内医療ツーリズム・ウエルネスツーリズム促進のための基盤形成事業 報告書 「観光と医療現場における外国人受け入れ対応力セミナー観光業者向け」「外国人観光者の医療体制支援のあり方プログラムの開発検討会」「観光と医療現場における外国人受け入れ対応力セミナー　医療機関向け」担当 立川茂樹
5「外国人観光者の医療体制支援のあり方についての検討-沖縄県の外国人観光者を受け入れる体制作り-」 「医療通訳講師養成講座」	共著	平成27年 2月	平成26年度沖縄型ウェルネスツーリズム等推進事業 報告書 沖縄県	平成26年度沖縄型ウェルネスツーリズム等推進事業 報告書 「外国人観光者の医療体制支援のあり方についての検討-沖縄県の外国人観光者を受け入れる体制作り-」 「医療通訳講師養成講座」担当 立川茂樹
6「今月の海外文献」担当 Systematic review; Worktime ControlWork/Non-workバランス，健康とWell-being，仕事関連の成果の関連性について	単著	平成29年1月10日	産業保健と看護 9巻1号（通巻49号） メディカ出版	「今月の海外文献」担当 Systematic review; Work Time ControlとWork/Non-workバランス，健康とWell-being，仕事関連の成果の関連性について 立川茂樹

教　育　研　究　業　績　書

平成 29年 3月 31日

氏名　松浦　純平

研究分野	研究内容のキーワード
成人看護学	急性期看護、周手術期看護、術後せん妄、テキストマイニング

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例		
1）「ストーマ造設術を受ける患者の看護」講義・演習に模擬ストーマを装着させて患者体験を実施した。	平成21年5月～平成25年3月	奈良県立医科大学医学部看護学科にて、科目名「成人看護学援助論Ⅰ」、近大姫路大学看護学部看護学科にて、科目名「治療看護技術論」のストーマ造設術を受ける患者の看護の講義を担当した。講義後の学生アンケートでは、ストーマの写真を初めて見て非常に勉強になった。講義内容が分かりやすくて良かったなどの感想が書かれていた。講義後の演習にて、学生へ模擬ストーマを装着させて半日過ごすことでストーマ造設患者の体験をさせた。演習後の評価として、ほぼ全員の学生からストーマ造設患者の心理状況がよく理解できたとの感想が聞かれた。
2）卒業研究にて1名の学生の卒業研究を指導した。	平成23年4月～平成24年2月	奈良県立医科大学医学部看護学科にて、科目名「看護研究」にて４年生1名の卒業研究を指導した。研究テーマは「臨床看護師が考えるレジリエンスについて」であった。
3）卒業研究にて4名の学生の卒業研究を指導した。	平成25年4月～平成26年2月	近大姫路大学看護学部看護学科にて、科目名「看護研究」にて４年生４名の卒業研究を指導した。研究テーマは「術後せん妄に関する文献検討」、「術後の足浴実施のリラクセーション効果について」、「術後せん妄発症の要因と対策に関する文献検討」、「乳がん患者の手術を受ける意思決定に関する文献検討」であった。
4）講義内容の知識の定着を確認する目的にて、担当講義中に講義内容に合った看護師国家試験の過去問題を提示し解答させた。解答後、解説をした。	平成25年5月～現在に至る	近大姫路大学看護学部看護学科にて、科目名「治療看護技術論」、奈良学園大学保健医療学部看護学科にて、科目名「成人看護学援助論Ⅰ」の毎講義の残り5～10分間で、講義内容に見合った過去に看護師国家試験に出題された問題を提示し、解答させた。解答後、解説を行った。学生からは、講義の内容をふまえて実際の国家試験問題を解答することができて良かったとの感想が聞かれた。
5）看護過程の展開を学習するために成人期の術後患者の事例を作成してグループ演習を行った。	平成25年5月～現在に至る	近大姫路大学看護学部看護学科にて、科目名「治療看護技術論」、奈良学園大学保健医療学部看護学科にて、科目名「成人看護学援助論Ⅰ」の演習の中で後期からの臨地実習に向けて、胃がん患者と大腸がん患者の事例を作成して、グループワークにて紙上での看護過程の展開を行った。学生からは実習に向けて看護過程が良く理解できたとの感想が多く聞かれた。
6）生体シミュレーターモデル「シムマン」を使用して異常呼吸音および異常心音の聴取の演習を行った。	平成25年6月～現在に至る	近大姫路大学看護学部看護学科にて、科目名「治療看護技術論」、奈良学園大学保健医療学部看護学科にて、科目名「成人看護学援助論Ⅰ」の演習の中で後期からの臨地実習に向けて、生体シュミレーターモデルを使用して、異常呼吸音と異常心音の聴取の演習に取り組んだ。学生からは、異常呼吸音と異常心音の聴き分けができるようになり、実習前の不安が軽減したとの感想が数多く聞かれた。
7）心肺蘇生法練習用人形モデルとAEDを使用して一次救命処置（BLS）の実際の演習を行った。	平成25年6月～現在に至る	近大姫路大学看護学部看護学科にて、科目名「治療看護技術論」、奈良学園大学保健医療学部看護学科にて、科目名「成人看護学援助論Ⅰ」の救命処置の講義後の翌週に心肺蘇生法練習用人形とAEDを使用して一次救命処置を実際に行う演習を行った。学生からは救命処置の実際を経験できて学びが深まったとの感想が聞かれた。

事項	年月日	概　　要
８）術前呼吸訓練として「トリフロー」と「トライボール」を使用して体験する演習を行った。	平成25年10月～現在に至る	近大姫路大学看護学部看護学科にて、科目名「治療看護技術論」、奈良学園大学保健医療学部看護学科にて、科目名「成人看護学援助論Ⅰ」の中の術前呼吸訓練の講義後の演習として、トリフローとトライボールの2種類の器具を使用して演習を行った。学生からは術前呼吸訓練の実際を経験することができて勉強になったとの感想が聞かれた。
９）周手術期の講義中に、イメージがつきやすいように挿管時に使用する気管チューブ、喉頭鏡などの器具を実際に手に取り見せて説明した。	平成25年10月～現在に至る	近大姫路大学看護学部看護学科にて、科目名「治療看護技術論」、奈良学園大学保健医療学部看護学科にて、科目名「成人看護学援助論Ⅰ」の周手術期の講義の中で挿管時に使用する気管チューブ、スタイレット、喉頭鏡の実物を手に取り見せて説明した。学生からは実物を見ることができて挿管時のイメージが理解できたとの感想が聞かれた。
１０）卒業研究にて6名の学生の卒業研究を指導した。	平成26年4月～平成27年2月	近大姫路大学看護学部看護学科にて、科目名「看護研究」にて４年生６名の卒業研究を指導した。研究テーマは「術後せん妄予防のための音楽療法の効果について」、「せん妄の発症と予防に関する文献検討」、「術後患者に対する音楽療法の効果について」、「足浴実施によるリラクセーション効果の検証」、「術後せん妄発症の要因に関する文献検討過去５年間の文献より」、「乳がん患者の治療方法決定に関する自己決定に関する文献検討」であった。
１１）卒業研究にて3名の学生の卒業研究を指導した。	平成27年4月～平成28年2月	近大姫路大学看護学部看護学科にて、科目名「看護研究」にて４年生３名の卒業研究を指導した。研究テーマは「術後の音楽療法の効果に関する文献検討」、「看護師の考える感情労働に関する現状と課題」、「看護系大学生の考える性教育に関する現状と課題」であった。
１２）生体シミュレーターモデル「フィジコ」を使用して異常呼吸音および異常心音の聴取の演習を行った。	平成28年6月～現在に至る	奈良学園大学保健医療学部看護学科にて、科目名「ヘルスアセスメント」の講義後の演習にて生体シュミレーターモデルを使用して、異常呼吸音と異常心音の聴取の演習に取り組んだ。学生からは、異常呼吸音と異常心音の聴き分けができるようになり、実習前の不安が軽減したとの感想が数多く聞かれた。
１３)術前呼吸訓練の講義後にインセンティブスパイロメトリーを使用した術前呼吸訓練の演習を実施した。	平成28年12月～現在に至る	奈良学園大学保健医療学部看護学科にて、科目名「成人看護学援助論Ⅰ」の術前呼吸訓練の講義後にインセンティブスパイロメトリーを演習にて実際に使用して術前呼吸訓練を実施した。学生からは実際に実施したことで難しさがよく理解できたとの感想が数多く聞かれた。
１４）一次救命処置の講義後に演習にて救命蘇生用トレーニング人形とAEDを使用して一次救命処置の練習を実施した。	平成28年12月～現在に至る	奈良学園大学保健医療学部看護学科にて、科目名「成人看護学援助論Ⅰ」の一次救命処置の講義後に演習にて救命蘇生用トレーニング人形とAEDを使用して一次救命処置の練習を実施した。演習後、学生からは講義で学んだだけでは大変さが分からなかったが、実際に演習で実施することで胸骨圧迫の深さや難しさが理解できたとの声が多く聞かれた。
１５）術後離床の講義後に演習にて点滴チューブ、ドレーン、尿道留置カテーテル等を付けて術後離床時の看護援助の演習を実施した。	平成28年12月～現在に至る	奈良学園大学保健医療学部看護学科にて、科目名「成人看護学援助論Ⅰ」の術後離床の講義後に演習にて点滴チューブ、ドレーン、尿道留置カテーテル等を付けて術後離床時の看護援助の演習を実施した。実施後、学生からは術後の患者の具体的な状況や心理が分かったやまた看護師がいかに安全・安楽に離床を進める必要があるか理解が深まったとの意見が多く聞かれた。

事項	年月日	概　　要
2　作成した教科書，教材		
1）成人看護学演習サブテキスト開発（ストーマサイトマーキング）	平成21年5月～平成25年3月	奈良県立医科大学医学部看護学科にて、科目名「成人看護学援助論Ⅰ」、近大姫路大学看護学部看護学科にて、科目名「治療看護技術論」の講義後の演習にてストーマサイトマーキングの部位が分かるような資料を作成した。演習後、学生からはストーマ造設時の位置決めが分かりやすかったとの意見が聞かれた。
2）成人看護学知識確認資料	平成25年5月～現在に至る	近大姫路大学看護学部看護学科にて、科目名「治療看護技術論」、奈良学園大学保健医療学部看護学科にて、科目名「成人看護学援助論Ⅰ」の毎講義の残り5～10分間で、講義内容に見合った過去に看護師国家試験に出題された問題を提示し、解答させた。解答後、解説を行った。学生からは、講義の内容をふまえて実際の国家試験問題を解答することができて良かったとの感想が聞かれた。
3）看護過程アセスメントサブマニュアル（ゴードンの枠組み）開発	平成25年5月～現在に至る	近大姫路大学看護学部看護学科にて、科目名「治療看護技術論」、奈良学園大学保健医療学部看護学科にて、科目名「成人看護学援助論Ⅰ」の演習の中で後期からの臨地実習に向けて、胃がん患者と大腸がん患者の事例を作成して、グループワークにて紙上での看護過程の展開を行った。アセスメント実施時の分類のための資料を作成し活用した。学生からは実習に向けて看護過程が良く理解できたとの感想が多く聞かれた。
4）異常呼吸音および異常心音サブテキスト開発	平成25年6月～現在に至る	近大姫路大学看護学部看護学科にて、科目名「治療看護技術論」、奈良学園大学保健医療学部看護学科にて、科目名「成人看護学援助論Ⅰ」の演習の中で後期からの臨地実習に向けて、生体シュミレーターモデルを使用して、異常呼吸音と異常心音の聴取の演習に取り組んだ。学生からは、異常呼吸音と異常心音の聴き分けができるようになり、実習前の不安が軽減したとの感想が数多く聞かれた。
5）一次救命処置（BLS）サブマニュアル資料開発	平成25年6月～現在に至る	近大姫路大学看護学部看護学科にて、科目名「治療看護技術論」、奈良学園大学保健医療学部看護学科にて、科目名「成人看護学援助論Ⅰ」の救命処置の講義後の翌週に心肺蘇生法練習用人形とAEDを使用して一次救命処置を実際に行う演習を行った。演習時に胸骨圧迫の部位、速さ、深さなどを書いた資料を見ながら演習に取り組んだ学生からは救命処置の実際を経験できて学びが深まったとの感想が聞かれた。
6）術前呼吸訓練サブマニュアル開発	平成25年10月～現在に至る	近大姫路大学看護学部看護学科にて、科目名「治療看護技術論」、奈良学園大学保健医療学部看護学科にて、科目名「成人看護学援助論Ⅰ」の中の術前呼吸訓練の講義後の演習として、トリフローとトライボールの2種類の器具を使用して演習を行った。学生からは術前呼吸訓練の実際を経験することができて勉強になったとの感想が聞かれた。
3　教育上の能力に関する大学等の評価		
1）近大姫路大学看護学部学生授業評価	平成27年2月	私が担当した「症状マネジメント論」「看護援助論Ⅱ」講義後の学生からの感想として、「とても理解しやすかった。国試に出やすいと先生が言うと集中して覚えようとします。」、「分かりやすかったです。」などの感想が多く記載されていた。
2）大学設置・学校法人審議会教員組織審査	平成28年2月	奈良学園大学保健医療学部看護学科専任講師「早期体験演習」「ヘルスアセスメント」「基礎看護学実習Ⅰ・Ⅱ」「成人看護学援助論Ⅰ（急性期・周手術期）」「成人看護学実習Ⅰ（急性期・周手術期）」「成人看護学実習Ⅱ（慢性期・回復期・終末期）」「統合看護学実習」「卒業研究Ⅱ」可と判定。

事項	年月日	概　　要
３）大学設置・学校法人審議会教員組織審査	平成29年2月	奈良学園大学保健医療学部看護学科准教授「早期体験演習」「ヘルスアセスメント」「基礎看護学実習Ⅰ・Ⅱ」「成人看護学援助論Ⅰ（急性期・周手術期）」「成人看護学実習Ⅰ（急性期・周手術期）」「成人看護学実習Ⅱ（慢性期・回復期・終末期）」「統合看護学実習」「卒業研究Ⅱ」可と判定。
４　実務の経験を有する者についての特記事項		
１）三重大学医学部附属病院にてプリセプターとして１年目の看護師の教育指導した。	平成19年4月1日～平成20年3月31日	三重大学医学部附属病院耳鼻咽喉頭頸部外科病棟にて、1年間1年目の新卒看護師の教育指導をした。1年間指導することで新人看護師と共に私自身の成長にもつながった。
２）三重大学医学部附属病院にて院内BLS（一次救命）講習を受けBLSインストラクターとして指導に関わった。	平成19年4月1日～平成21年3月31日	院内の一次救命処置の講習を受講し、BLSインストラクターとして他の看護師の指導に関わった。院内の急変時にも冷静に対応することができた。
３）三重大学医学部附属病院にて院内看護研究の代表者として他3名の看護師と看護研究に取り組んだ。	平成20年4月1日～平成21年3月31日	院内看護研究として、喉頭がん患者の喉頭摘出手術を受ける意思決定の過程に関する研究に取り組み院内看護研究発表会で発表した。
４）奈良県立医科大学医学部看護学科「成人看護学実習Ⅰ」「成人看護学実習Ⅱ」実習指導	平成21年9月～平成25年2月	奈良県立医科大学医学部看護学科3年生を対象に「成人看護学実習Ⅰ」、「成人看護学実習Ⅱ」臨地実習指導を担当した。
５）国立病院機構敦賀医療センター主催「2012年度院内看護研究発表会」へ招聘	平成23年12月	院内看護研究発表会にて総評を述べた。
６）2013年度福井大学医学部看護学科公開セミナー「質的研究と量的研究のコラボレーション」招聘講演	平成24年8月	福井大学医学部看護学科公開セミナーにて「質的研究と量的研究のコラボレーション」をテーマとしてテキストマイニング手法に関する講演を行った。
７）第6回Project AKI全国集会「テキストマイニングの紹介」招聘講演	平成25年1月	Project AKI全国集会にて「テキストマイニングの紹介」に関する講演を行った。
８）近大姫路大学看護学部看護学科「成人看護学実習Ⅰ」「成人看護学実習Ⅱ」実習指導	平成25年9月～平成28年2月	近大姫路大学看護学部看護学科3年生を対象に「成人看護学実習Ⅰ」、「成人看護学実習Ⅱ」臨地実習指導を担当した。
９）奈良学園大学保健医療学部看護学科「成人看護学実習Ⅰ」「成人看護学実習Ⅱ」実習指導	平成28年9月～平成29年2月	奈良学園大学保健医療学部看護学科3年生を対象に「成人看護学実習Ⅰ」、「成人看護学実習Ⅱ」臨地実習指導を担当した。
５　その他		
１）奈良県立医科大学医学部看護学科助教として講義担当	平成21年4月～平成25年3月	「ヘルスアセスメント」「フィジカルアセスメント」「看護援助論Ⅰ」「看護援助論Ⅱ」「成人看護学実習Ⅰ（急性期）」「成人看護学実習Ⅱ（慢性期）」「看護研究特論」「看護研究」
２）近大姫路大学看護学部看護学科専任講師として講義担当	平成25年4月～平成28年3月	「看護対象論Ⅰ」「症状マネジメント論」「看護援助論Ⅱ」「治療看護技術論」「看護展開実習Ⅰ（急性期）」「看護展開実習Ⅱ（慢性期）」「統合看護学実習」「看護課題ゼミ」「補完代替療法と看護」
３）奈良学園大学保健医療学部看護学科専任講師として講義担当	平成28年4月～現在に至る	「ヘルスアセスメント」「成人看護学援助論Ⅰ」「成人看護学実習Ⅰ」「成人看護学実習Ⅱ」

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項		
事項	年月日	概　　要
1　資格，免許		
1）看護師国家資格	平成16年4月	（第1272430号）
2）修士号（看護学） （四日市看護医療大学大学院第22号）	平成27年3月	四日市看護医療大学大学院看護学研究科看護学専攻修士課程を修了した。「修士論文題名：術後せん妄の発現を予測するスクリーニングツール開発のための基礎的研究」
2　特許等		
1）該当なし		
3　実務の経験を有する者についての特記事項		
1）三重大学医学部附属病院にて感染予防リンクナースとして活動した。	平成16年4月1日～平成20年3月31日	三重大学医学部附属病院耳鼻咽喉頭頸部外科病棟および第１外科病棟（肝胆膵外科）にて、感染予防リンクナースとして病棟内の感染予防対策に取り組んだ。
2）三重大学医学部附属病院主催の就職希望者向けの病院説明会にて、男性看護師としての院内での業務および活動を紹介した。	平成21年12月	三重大学医学部附属病院主催の就職希望者向けの病院説明会にて、男性看護師としての院内での業務および活動を紹介した。参加者から分かりやすく是非三重大学医学部附属病院で働きたいとの声が聞かれた。
4　その他		
1）助成団体名：ダイワハウス工業株式会社病室環境研究助成,	平成21年5月～平成22年3月	本研究は、がん患者サロンに関する認識と現在の利用状況を明らかにすることを目的として研究に取り組んだ。対象はA県がん患者会会員430名を対象とした。 研究方法は、質問紙調査法とした。回収率は158名、有効回答数は148名であった。本研究結果からサロンのニーズは非常に高いこと、立地場所としては公共交通機関から近いことサロン利用者は臨床心理士の配置を希望していることが明らかになった。 研究代表者氏名：松浦純平 研究題目：がん患者が求める『患者サロン』活用への支援の検討患者サロンに関する認識と活用の実際
2）助成団体名：日本学術振興会科学研究費助成事業（基盤研究C）	平成22年5月～平成25年3月	本研究の目的は看護学生の話し手としての看護学生のコミュニケーション技法が聞き手の自律神経系に与える影響を明らかにすることを目的とした。研究方法は3つの看護系大学の看護学生710名を対象とし有効回答372名を分析対象とした。看護学生のコミュニケーション技報はポジティブな内容は副交換神経に優位に働き、ネガティブな内容は交感神経に優位に働いていたことが明らかになった。 研究代表者氏名：上野栄一 研究題目：話し手としての看護学生のコミュニケーション技法が聞き手の自律神経系に与える影響
3）助成団体名：日本学術振興会科学研究費助成事業（若手研究B）	平成24年5月～平成27年3月	本研究の目的は術後せん妄アセスメントスケールを開発することである．本研究は，文献検討，面接調査，質問紙調査,質問紙調査に基づく術後せん妄前駆症状の抽出の順に実施した．全国国立大学医学部附属病院19病院に勤務する外科経験年数3年以上看護師725名を対象とした．相関分析，I-T相関分析，天井・床効果の検討，尖度と歪度の検証，因子分析を実施した．結果10因子40項目からなるアセスメントツールを開発した． 研究代表者：松浦純平 研究題目：我が国史上初の術後せん妄を早期発見するためのアセスメントスケールの開発

事項	年月日	概　　要
4）助成団体名：大阪ガスグループ福祉財団	平成25年5月～平成26年3月	本研究は、手術後の高齢者に高確率で発症する術後せん妄の発症前駆症状に関して、臨床経験豊富な看護師の経験知に基づく術後せん妄発症を早期に発見するための術後せん妄アセスメントツール開発につなげるための基盤とすることである。研究方法は質問紙調査とし、対象は全国20病院に勤務する臨床看護経験年数5年以上を有し外科病棟での臨床経験3年以上の看護師300名を対象とした。回収数は71通、有効回答数は66通であった。記述統計分析の結果、行動、混乱、陰性症状、睡眠、妄想、排泄の6つのカテゴリーが抽出された。 研究代表者：松浦純平 研究題目：高齢患者の術後せん妄発症を早期に発見するための術後せん妄アセスメントスケールの信頼性に関する予備的検討
5）近大姫路大学臨地実習委員会委員	平成25年4月1日～平成26年3月31日	臨地実習委員会メンバーとして、実習病院との日程および受け入れ可能人数等の調整、実習病院の新規開拓などに取り組んだ。
6）近大姫路大学入試委員会委員	平成25年4月1日～平成27年3月31日	入試委員会メンバーとして、本学および地方会場（高知・豊岡・岡山・大阪）の入学試験の準備および試験監督として入試業務に携わった。またオープンキャンパスの企画、運営に取り組んだ。
7）近大姫路大学地域貢献活動委員会委員	平成25年4月1日～平成27年3月31日	地域貢献活動員会メンバーとして、年2回大学周囲の清掃美化に取り組んだ。また9月にエイズ予防キャンペーンを学生と共に企画運営しJR姫路駅前にて開催した。
8）近大姫路大学倫理審査委員会委員	平成25年4月1日～平成26年3月31日	研究倫理審査員会のメンバーとして、毎月1回開催された研究倫理審査に携わった。
9）助成団体名：三重大学新研究プロジェクト	平成27年10月～平成28年10月	本研究の目的は、頭部外傷によるQOL低下をもたらす嗅覚障害に対する嗅覚神経再生に関する因子は何かを明らかにすることである。マウスを使用した実験の結果,受傷早期にIgGを投与することにより嗅覚障害が改善される可能性が示唆された。 研究代表者：松浦純平. 研究題目：頭部外傷によるQOL低下をもたらす嗅覚障害に対する嗅覚神経再生に関する研究
１０）奈良学園大学倫理審査委員会委員	平成28年4月1日～現在に至る	研究倫理審査員会のメンバーとして、毎月1回開催されている研究倫理審査に携わっている。
１１）奈良学園大学学生生活委員会委員	平成28年4月1日～現在に至る	生活委員会メンバーとして、毎月1回開催されている会議にて保護者会、3者面談等の計画、運営に携わっている。
１２）奈良学園大学FD委員会委員	平成28年4月1日～現在に至る	FD委員会メンバーとして、毎月1回開催されている会議に出席して、年2回開催のFD講演会の企画、運営等に携わっている。
１３）奈良学園大学スポーツ振興委員会委員	平成28年4月1日～現在に至る	スポーツ振興委員会メンバーとして、毎月1回開催されている委員会会議に出席して、スポーツ振興活動に関する協議に携わっている。
１４）助成団体名：岡三加藤文化振興財団.	平成28年4月～現在に至る	本研究の目的は、頭部外傷によるQOL低下をもたらす嗅覚障害に対する嗅覚神経再生に関する因子は何かを明らかにすることである。マウスを使用した実験の結果,受傷早期にIL-6を投与することにより嗅覚障害が改善される可能性が示唆された。 研究代表者：松浦純平 研究題目：外傷性嗅覚障害患者のQOL向上を目指した嗅神経の再生に関する基礎的研究

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
（著書）				
1.身体拘束の適切な考え方と看護記録	共著	平成23年2月	株式会社日総研出版（看護きろくと看護過程2・3月号）	ケアの根拠が見える記録を効率よく書けるようになることを目的とする。A4変型判　全104ページ編者：岸田良平共著者：一ノ山隆司，松浦純平，舟崎起代子，上野栄一，滝内香里，山本美千代，高野悦子．本人担当部門：p52-61を単著。認知症高齢者に対する適切な身体拘束、倫理に即した看護記録の記載方法について事例を通して検討した。身体拘束は必要な医療と患者の安全のためにやむを得ず行動制限を行う場合がある。その場合は倫理的配慮を行い家族の理解と協力を得て必要最低限に留めチームとして治療計画を再検討する必要性を解説した。
2.看護師が遭遇する倫理的ジレンマとは	共著	平成24年3月	株式会社日総研出版（主任＆中堅+こころサポート3・4月号）	管理・教育・業務の実践とスキルを強化することを目的とする。B5変型判　全120ページ編者：岸田良平,共著者：一ノ山隆司，舟崎起代子，松浦純平，上野栄一．本人担当部門：p48-52を単著。看護師が臨床で遭遇する倫理的ジレンマについて原因と対応について具体的な場面を想定して検討した。その結果、看護師が倫理問題に冷静に向き合う姿勢が大切であることを解説した。
3.看護のための『教育学』	共著	平成27年10月	株式会社あいり出版（看護・介護・福祉のための「教育学」第１巻）	患者教育指導において看護者に必要な視点を、心理学・教育学の成果を生かして主要な疾患についての概要と実際の事例を紹介した。B5判　全158ページ編者:守本とも子,共著者：松田智子,虎杖真智子,鎌田首治朗,松浦純平,中尾友美,武富由美子,山口曜子,佐々木千恵,新谷奈苗,東中須恵子,岡本響子．本人担当部門：第４章「糖尿病」p43-58を単著。主要な疾患についての教育原理・教育心理を踏まえた患者教育指導実践の展開事例と治療の実際について、糖尿病患者の退院指導および在宅での治療継続について教育理論を用いて具体的な事例を2例提示して図・表を入れて解説した。
（学術論文）				
1.わが国のせん妄に関する看護研究の動向と課題　―文献検討を通して―（査読付）	共著	平成22年4月	日本看護学会論文集看護管理第40号．p264-266．2010．	本研究の目的は、我が国における看護分野でのせん妄に関する研究について、文献検討により研究の動向と課題を明らかにし、患者のケアへの示唆を得ることである。研究方法は医学中央雑誌を用いキーワードはせん妄と看護とした。その結果、178編の文献の中から31編の文献を抽出し分析対象とした。結果、研究の動向としては2004年を除き年間20編程度の研究がなされていた。研究デザイン別では量的研究が91編、質的研究は14編、事例研究は15編であった。研究対象者は患者であるものが105編であった。筆頭研究者は臨床看護師が94件、看護系大学教員は17編、両者の共同研究が9編であった。フィールド別では整形外科17編、外科病棟12編、ICU5編、CCU4編、一般外科4編であった。せん妄発症要因について研究されたのは31編であった。せん妄評価尺度は日本語版ニーチャム混乱・錯乱状態スケールが11編であった。本研究結果から予防に関する研究が少なかったため、今後はせん妄発症予防ケアの充実を図るための研究が期待されることが明らかになった。 （本研究の代表者として、中心となり研究に取り組んだ。） 共著者：松浦純平，上平悦子．

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
2.外科領域における術後せん妄発症予測要因 （査読付）	単著	平成23年11月	医学生物学155巻11号. P825-829. 2011.	経験豊富な看護師が直観的に感じる術後せん妄発症の前駆症状は何かを明らかにする目的で，2病院外科病棟に勤務する看護師20名へ半構成的面接を実施した．逐語録を分析し，カテゴリ化した．せん妄予測項目の名詞78個を分類した結果，【時間感覚】，【置かれた環境】，【対象者】，【認識】，【情意】，【対象物】，【表情】，【コミュニケーション】，【患者の反応】など12カテゴリが生成された．経験豊富な看護師は，表情，失見当識，看護師の説明に対する認識，反応等から術後せん妄発症予測し，前駆症状として捉えていた．これらの観察視点は，経験の浅い新人看護師が気付きにくい観察項目である．今後，この重要観察項目の共通理解を深めることで術後せん妄の早期発見・早期対応につながることが示唆された．
3.がん患者サロンに対する患者会会員の認識と課題 （査読付）	共著	平成24年2月	日本地域連携精神看護学研究誌第3巻p82-88. 2012.	本研究の目的は、Ａ県内のがん患者会会員が考えるサロンにおけるメンタルヘルスに関する認識および現状を明らかにすることである．研究対象はＡ県がん患者会会員400名．調査方法は，対象者に本研究の主旨と自記式無記名質問紙調査を同封し郵送した．調査項目は，基本的属性，サロンの認識，サロン立地条件，サロン利用者，サロンに必要と考える医療従事者，サロンへの期待の6項目．分析方法は，PASW Statistics18.0を用いて単純集計を行った．結果、以下の3点が明らかとなった．1．地域に暮らす患者にとってサロンのニーズ・期待度は，非常に高い．しかし，実際にサロンを利用している人は少ない．2．サロン設置場所として通いやすい立地条件であることを望んでいた．3．サロン内にメンタル面のフォローができる専門職の配置を望んでいた． （本研究の代表者として、中心となり研究に取り組んだ。） 共著者：松浦純平，上野栄一．
4.テキストマイニングによる看護師の考える術後せん妄発症予測について　―経験豊富な看護師へのインタビューの分析― （査読付）	共著	平成24年3月	日本看護学会論文集成人Ⅰ第42号p62-65. 2012.	研究の目的は外科病棟に勤務する看護師が考える術後せん妄発症予測につながる前駆症状を明らかにすることである．調査対象者は病院外科病棟に勤務する看護師20名である。研究方法は術後せん妄発症前の段階でアセスメントをどのような視点で実施しているかについて半構成的面接を実施した．分析方法はインタビューより得られた逐語録について形態素解析，コロケーション解析を実施した． データ解析ソフトは，WinCha，KWIC Finderを使用した．結果、せん妄発症アセスメント項目は「行動」「コミュニケーション」「行動対象」「表情」「睡眠」「訴え」など9カテゴリが生成された． （本研究の代表者として、中心となり研究に取り組んだ。） 共著者：松浦純平，喜田加奈子，福田弘子，上野栄一，水野正延．

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
5.頭頸部外科領域における術後せん妄発症要因の検討―内容分析，セブン・クロス（7×7）法の分析より― （査読付）	共著	平成24年3月	富山大学看護学会学会誌11巻1号p9-18．2012．	本研究の目的は，頭頸部外科病棟に勤務する経験豊富な看護師が考える術後せん妄発症要因は何かを明らかにすることである．対象は，A病院頭頸部外科病棟に勤務する看護師5名．術後せん妄発症要因について半構成的面接を実施，結果はKrippendorffの内容分析手法およびセブン・クロス法にて分析した．内容分析の結果から【性格特性】，【理解力不足】，【長期安静】，【高齢】，【不眠】，【男性】，【独居】の7つのカテゴリーが生成された．セブン・クロス法の結果から優先順位が高い順に【不眠】，【性格特性】，【高齢】，【長時間手術】，【術中出血量】，【眠剤の影響】，【術前不安】の 7つのカテゴリーが生成された．内容分析とセブン・クロス法の両方に含まれていたのは【高齢】，【不眠】，【個人特性】の3カテゴリーであった． （本研究の代表者として、中心となり研究に取り組んだ。） 共著者：松浦純平，喜田加奈子，上野栄一．
6.異なる血圧測定技術教育方法による技術習得状況の違い （査読付）	共著	平成25年3月	医学と生物学157巻3号p313-318．2013．	本研究は血圧測定の教育方法として、測定手技の手順を教授する方法と主に測定手技の根拠を教授する方法のどちらが血圧測定技術の習得状況によい影響をもたらすのかを検討した。結果、測定手技の根拠を教授した方が患者役に対して測定に伴う苦痛を減少させることや正しく測定できることが明らかになった。 （調査実施、データ分析、考察の論文執筆を担当した。） 共著者：吉岡一実，一ノ山隆司，石井秀美，大川智恵子，菊地淳，有馬義貴，松浦純平，吉岡多美子．
7.患者情報から看護問題を抽出する際の脳活動に関する研究-近赤外分光法による看護学生の前頭葉賦活状況について- （査読付）	共著	平成25年4月	医学と生物学157巻4号p450-454．2013．	本研究は、患者情報から看護問題を抽出する際の前頭葉の賦活状況を、学年のことなる看護学生計2名を対象に比較検討したものである。患者情報を5枚のスライドで提示したあとに、看護問題を抽出する課題を与えた。前頭葉の賦活状況は近赤外分光法を用いて測定し、22か所で酸素化ヘモグロビン濃度により評価した。測定終了後には、それぞれのスライド提示時にどのようなことを考えたのかを質問紙で調査した。その結果、前頭葉の賦活状況には被験者間で差がみられ、これが看護問題を抽出する際の思考の違いであると示唆された。 （データ分析、考察の論文執筆を担当した。） 共著者：吉岡一実，菊地淳，平野大輔，入江裕子，一ノ山隆司，石井秀美，大川智恵子，松浦純平，有馬義貴，吉岡多美子．
8.血圧測定時における前頭葉の賦活の様相―看護学生と看護師との比較検討― （査読付）	共著	平成25年5月	医学生物学157巻5号p565-568．2013．	本研究は血圧測定時における測定者の前頭葉の賦活状況を、近赤外分光法を用いて看護学生と看護師とで比較検討した。その結果、前頭葉の21部分で賦活状況を比較したところ、両手技とも手技前に比べて看護学生は看護師の2倍の部位で有意に酸素化ヘモグロビン濃度が上昇していた。このことは血圧測定技術の習得度と前頭葉の賦活状況が反比例していることを示しており、初学者は前頭葉をより賦活化させて測定していることが明らかになった。 （データ分析、考察の論文執筆を担当した。） 共著者：吉岡一実，菊地淳，平野大輔，入江裕子，一ノ山隆司，松浦純平，有馬義貴，石井秀美，大川智恵子，吉岡多美子．

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
9.看護師が実践している術後せん妄発症予防について―テキストマイニングを利用した分析― （査読付）	共著	平成25年6月	医学生物学157巻6号 p1372-1376．2013.	本研究は術後せん妄発症予防のために看護師が取り組んでいる看護実践を明らかにすることである。2施設の外科病棟に勤務する看護師20名を対象に半構成的面接調査を実施した。分析は形態素解析にて分析した。その結果，頻出名詞はせん妄，患者，説明などが多かった。説明に関するコロケーション解析の結果「見当識障害予防を意識した説明をすること」や「本人・家族へ術後はせん妄発症の可能性があることを説明する」などであった。「予防」に関する結果から「昼夜逆転予防を意識した早期離床の援助の実施。」などの文脈が抽出された。本研究結果から以下の4点が明らかになった。術前より患者本人へ術後の状況について説明を実施していた。術後はサーカディアンリズムを整えるために積極的な早期離床を行なっていた。見当識障害予防のため日時を伝えるなどを実施していた。術後疼痛緩和の援助を実施していた。 （本研究の代表者として研究に取り組んだ。）共著者：松浦純平，一ノ山隆司，吉岡一実
10.臨床看護師が実践している術後せん妄発症予防の取り組み （査読付）	共著	平成25年6月	医学生物学157巻6号 p1377-1381．2013.	本研究は、臨床看護師の術後せん妄発症予防に対する取り組みを明らかにすることである。テキストマイニング手法の共起関係ネットワーク分類の結果から、次の4点が明らかになった。1点目は、術後の生活リズムの再構築を意識した積極的な早期離床を実施していること。2点目は、体位変換に生じる身体的苦痛の除去に努めていること。3点目は、手術前には具体的な説明を実施していること。4点目は、環境整備の実施や術後疼痛の緩和に対する援助に取り組んでいることであった。 （データ分析、考察の論文執筆を担当した。） 共著者：一ノ山隆司，松浦純平，吉岡一実
11.在宅で精神障がい者と生活する家族の負担に関する研究 （査読付）	共著	平成25年6月	医学と生物学157巻6号 p1382-1386．2013.	本研究の目的は、在宅で精神障がい者と生活する家族の負担要因を明らかにし、今後の家族支援への示唆を得ることである。A県内の11の地域家族会に所属している精神障がい者と同居する家族236人の「日頃から気になること」への記述を分析データとした。データ分析は、内容分析の手法を参考に形態素解析、コロケーション解析を行った。結果、【病気に関する不安】、【家族自身の体調の心配】、【将来の生活に対する焦り】、【社会や周囲および身内からの理解不足に関する苛立ち】、【責任を持ってケアする重圧】、【同居することで生じる束縛感】、【地域の施設が整わないことへの不満感】の7つのカテゴリーを生成し、家族が精神障がい者のケアの担い手であっても、家族はケアの対象者である観点から地域連携の精神看護に反映させていく有効な知見が示唆された。 （データ分析、考察の論文執筆を担当した。） 共著者：一ノ山隆司，松浦純平

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
12.精神科臨床経験3年未満の看護師が抱く陰性感情の特徴 （査読付）	共著	平成25年6月	医学生物学157巻6号 p1387-1392. 2013.	本研究は、精神科病棟に勤務する精神科臨床経験3年未満の看護師3人対象として、彼らが抱く陰性感情の特徴を把握することが目的である。半構成的面接法により陰性感情に関する調査を行った結果、陰性感情として8カテゴリー生成することができた。患者に対しては否定的な捉え方によって生じる【不安感】、患者から被害を受けるといった【恐怖心】、患者との対応における未熟さから生じる【困惑】、どこにもぶつけることができない感情から生じる【怒り】、患者に自分の思いが受け入れてもらえないことによる【苛立ち】、患者とのかかわりから生じていく落胆から引き起こされる【疲弊感】、患者の対応を他の看護師と比べることによって生じる【劣等感】、患者との関係性や対応を振り返ることから生じる【自責感】であった。 （本研究の代表者として、中心となり研究に取り組んだ。） 共著者：松浦純平，一ノ山隆司，菊地淳，吉岡一実
13.FACTORS RELATED TO THE USE OF HOME CARE SERVICES BY STROKE PATIENTS UNDER JAPAN'S LONGTERM CARE INSURANCE SYSTEM （日本における長期間の介護保険システム下の脳卒中患者による在宅ケアサービス使用要因） （査読付）	共著	平成26年12月	International Journal of Medical Research & Health Sciences 4 (1) p103-109. 2014.	脳卒中患者は、在宅ケア看護サービスを利用者数の中では最も多い。本研究の目的は、日本の介護保険システムの下で在宅ケア・サービスの使用状況との利用者の関係を決定するために脳卒中患者の鍵となる要因と主な介護者の関係を明らかにすることである。研究方法は東海と近畿地域で14の主題と彼らの介護者を対象とした。質問紙調査票が主な介護者のために使用した、データ分析方法は、一変量分析により分析した。結果、バルテルIndex（BI）得点より高い脳機能障害が、長期の介護保険の使用率と関連があることが明らかになった。またBI得点低下と在宅ケア率は増加した。結論：脳卒中患者の2つの特徴が長期の介護保険の使用率に関連することが明らかになった。 （質問紙票作成、データ入力、データ分析、考察の論文執筆を担当した。） 共著者：Kazuya Ikenishi,Jumpei Matsuura 2015年度インパクトファクター：0.18
14.術後せん妄の発現を予測するスクリーニングツール開発のための基礎的研究 （修士論文）	単著	平成27年3月	四日市看護医療大学大学院看護学専攻修士課程 p1-36.2015.A4版 総頁数36	本研究の目的は経験年数を問わず臨床看護師が簡便に使用できる術後せん妄スクリーニングツール開発に向けての予備的研究として術後せん妄発症前駆症状の構成因子を明らかにすることである．本研究は，調査Ⅰの文献検討，調査Ⅱの面接調査，調査Ⅲの質問紙調査，質問紙調査に基づく術後せん妄前駆症状の抽出の順に実施した．調査Ⅲは全国国立大学医学部附属病院19病院に勤務する外科経験年数3年以上看護師725名を対象とした．相関分析，I-T相関分析，天井・床効果の検討，尖度と歪度の検証，因子分析を実施した．PASW 18を使用した．因子分析の結果【妄想支配による精神的訴え】，【活動意欲の減退】，【意味のない行動】，【認識機能の低下】，【外見的興奮】，【理解力の違和感】，【恐怖・心配の訴え】，【失見当識】，【排尿に関する愁訴】，【睡眠覚醒サイクルの障害】10因子40項目を抽出した．本研究で明らかになった新しい知見は【外見的興奮】，【理解力の違和感】の2因子であった．

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
15.Early detection and treatment ： an examination of prodromal symtoms of post operative delirium in elderly patients （早期発見と処置：高齢患者の術後せん妄の前駆症状について） （査読付）	単著	平成27年4月	International Journal of Clinical and Biomedical Research. 1（2）p1-6.2015.	研究目的は，臨床経験豊富な看護師の経験知に基づく術後せん妄発症を早期に発見するための術後せん妄アセスメントスケール開発のための基盤とすることである。対象は看護師300名とした。結果，看護師が術後せん妄前駆症状として考えている症状は「看護師へ遠慮して何も言わない」「自分で寝返りを打たない」であった。術後せん妄前駆症状を症状別に類似するカテゴリー別に分類した。その結果「行動」「混乱」「陰性症状」「睡眠」など6カテゴリーに分類された。 2015年度インパクトファクター：3.3
16.Initial development of a screening tool for postoperative delirium prodrome （術後せん妄スクリーニングツールの開発） （査読付）	共著	平成27年6月	International Journal of Current Advanced Research.4(7)p165-167.2015.	本研究の目的は、術後せん妄発症を早期に発見するためのアセスメントツールを開発することである。全国の国立大学医学部附属病院の看護師725名を対象に質問紙調査を実施した。結果、10因子38項目からなる術後せん妄アセスメントツールを開発した。（本研究の代表者として、中心となり研究に取り組んだ。） 共著者：Jumpei Matsuura, Eiichi Ueno 2015年度インパクトファクター：5.438
17.The needs of post-operative delirium assessment tool for clinical nuese （臨床看護師の考える術後せん妄スクリーニングツールの必要性に関する研究） （査読付）	共著	平成27年6月	RA Journal of Applied Research.1(6)p219-226.2015.	本研究の目的は、臨床看護師が考える術後せん妄アセスメントツールについてのニーズを明らかにすることである。 対象は全国の大学病院19病院の外科系病棟に勤務する看護師725人である。 アセスメントツールの必要性について「必要である」、「やや必要である」と回答した対象者の割合は全体の85.5%であった。このことからアセスメントツールの必要性について、非常に受容があることが明らかになった。 （本研究の代表者として、中心となり研究に取り組んだ。） 共著者：Jumpei Matsuura, Eiichi Ueno 2015年度インパクトファクター：3.62
18.The Relationship Between Work-Life Balance And Nwi-R Score Among Unmarried Nurses Working For Less Than Two Years In Hospital. (病院の勤務年数2年以下の未婚看護師におけるワークライフバランスとNwi-R得点との関連）（査読付）	共著	平成27年7月	International Journal Of Medical Science And Clinical Invention. 2(7)p1120-1125.2015.	近年、ワークライフバランスに関する研究が増加している。本研究の目的は経験年数が2年以下の看護師についてワークライフバランス（WLB）とNWI-R得点の関連を明らかにすることである。 調査対象者は東海地区と関東地区の病院に勤務する看護師とした。収集したデータは年齢、性別、経験年数、ワークライフバランス、NWI-Rとした。回答者は117人だった。経験年数が１年未満の看護師は61人、1年以上2年以下は56人だった。WLBでは、満足と回答したのは37人、不満足は36人、どちらとも言えないは44人だった。クラスカルウォリス検定の結果、この3群間ではNWI-R得点に有意差を認めた(p=0.0013)。結果、育児や家事以外の私生活に関する時間を有効に活用できるように職場の改善が必要なことが示唆された。 （質問紙票作成、データ入力、データ分析、考察の論文執筆を担当した。） 共著者：Kazuya Ikenishi,Jumpei Matsuura 2015年度インパクトファクター：3.301

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
19.テキストマイニングを用いたセラピストとクライエントの会話分析 （査読付）	共著	平成27年12月	精神看護におけるディスコース分析研究会誌第3巻p87-94.2015.	本研究の目的は，うつ病患者へのカウンセリング場面を会話分析にてカウンセラーの援助の特徴を明らかにして今後のうつ病患者へのカウンセリングに活用することである．カウンセラーが話した「思う」についてコロケーション解析を実施した結果，ポジティブな発言内容は10回中6回であった．ネガティブな発言内容は10回中1回であった．このカウンセラーのクライエントへの関わり方は意図的にクライエントの積極的な発語を引き出す重要な手法であるのではないかと推察する． （本研究の代表者として、中心となり研究に取り組んだ。） 共著者：松浦純平,川野雅資
20.テキストマイニングを用いたうつ病患者へのカウンセリング時の会話分析 （査読付）	共著	平成28年5月	精神看護におけるディスコース分析研究会誌第4巻p67-74.2016.	本研究の目的はうつ病患者へのカウンセリング場面の会話分析からセラピストの援助の特徴を明らかにすることである。対象はうつ病患者へのカウンセリングを実施したセラピストとクライエントの発語とした。分析はセラピストとクライエント別に記述統計，階層的クラスター分析，多次元尺度法，共起ネットワーク分類を行った。セラピストの発語内容を多次元尺度法にて分析した結果，同調や促しの「うん」以外は，非常にバランスが取れた発語であったことが明らかになった。共起ネットワーク分類にて分析した結果，「調整」と「気分」と「楽観」の3つに関する話題に分類された。 クライエントの発語内容を多次元尺度法にて分析した結果，A氏、先生に関する発言が多いことが明らかになった。　共起ネットワーク分類にて分析した結果，「A氏と先生との会話」と「雇用に関する将来の不安」と「休職したことの自責の念」の3つに関する話題に分類された。 （本研究の代表者として、中心となり研究に取り組んだ。） 共著者：松浦純平,川野雅資
21.スライディングシート導入後の現状と課題 －トラウマインフォームドケア（TIC）の観点より－ （査読付）	共著	平成28年9月	第1回臨床精神看護学研究会誌2016年.p77-79.2016.	本研究の目的は，TICの観点に基づき対象者と医療スタッフのそれぞれの立場から移送用スライディングシートの導入後の現状と課題は何かを明らかにすることである。対象は，X病棟に入院中の対象者5名と同病棟にて勤務する医療スタッフ5名。データ収集方法は研究者がスライディングシートの導入前と導入後の使用後の感想をそれぞれに直接聞き取り調査を実施した。対象者の肯定的意見は，「抱えられるよりは全然怖くないね。」，「安心感があるよ。」などの意見が聞かれた。否定的意見は「ゆっくりとしないと勢いよくすると滑り過ぎる時があるね。」との意見が聞かれた。医療スタッフの肯定的意見は「腰への負担が少なくなった。」，「僅かな力でも簡単にシートがよく滑るから使いやすい。」などであった。ノーリフトの基本理念は，対象者を抱えずに滑らせて移動する方法である。TICの基本的な考え方は，対象者にいかにトラウマ体験をさせないかである。スライディングシート導入後，対象者と医療スタッフからは肯定的意見が多く聞かれた。このことからスライディングシート導入による患者へ恐怖心を与えない看護の提供が出来たことで看護の質の向上など一定の効果はあったのではないかと考える。 （データ収集、データ分析、結果、考察の論文執筆を担当した。） 共著者：西木一美，香田美帆，松浦純平

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（その他）				
「研究費助成報告書」				
1.がん患者が求める「患者サロン」活用への支援の検討　―「患者サロン」に関する認識と活用の実際―	共著	平成21年3月	平成21年度病室環境研究成果報告集奈良県立医科大学住居医学大和ハウス寄付講座．p17-23.2009.	本研究は、がん患者サロンに関する認識と現在の利用状況を明らかにすることを目的として研究に取り組んだ。対象はA県がん患者会会員430名を対象とした。 研究方法は、質問紙調査法とした。回収率は158名、有効回答数は148名であった。本研究結果からサロンのニーズは非常に高いこと、立地場所としては公共交通機関から近いことサロン利用者は臨床心理士の配置を希望していることが明らかになった。 （本研究の代表者として、中心となり研究に取り組んだ。） 共著者：松浦純平，瀬川睦子 全ページ104ページ
2.高齢患者の術後せん妄発症を早期に発見するための術後せん妄アセスメントスケールの信頼性に関する予備的検討	単著	平成25年5月	大阪ガスグループ福祉財団研究報告書26号.p111-116.2013.	本研究は、手術後の高齢者に高確率で発症する術後せん妄の発症前駆症状に関して、臨床経験豊富な看護師の経験知に基づく術後せん妄発症を早期に発見するための術後せん妄アセスメントツール開発につなげるための基盤とすることである。研究方法は質問紙調査とし、対象は全国20病院に勤務する臨床看護経験年数5年以上を有し外科病棟での臨床経験3年以上の看護師300名を対象とした。回収数は71通、有効回答数は66通であった。記述統計分析の結果、行動、混乱、陰性症状、睡眠、妄想、排泄の6つのカテゴリーが抽出された。 全146ページ
3.我が国史上初の術後せん妄を早期発見するためのアセスメントスケールの開発	単著	平成26年8月	日本学術振興会科学研究費助成事業若手B研究報告書.2014.	本研究の目的は術後せん妄アセスメントスケールを開発することである．本研究は，文献検討，面接調査，質問紙調査,質問紙調査に基づく術後せん妄前駆症状の抽出の順に実施した．全国国立大学医学部附属病院19病院に勤務する外科経験年数3年以上看護師725名を対象とした．相関分析，I-T相関分析，天井・床効果の検討，尖度と歪度の検証，因子分析を実施した．結果10因子40項目からなるアセスメントツールを開発した． 全6ページ
「国際学会発表抄録」				
1.Examination of nurse's communication skills in role playing. （看護師のコミュニケーションスキル向上を目指したロールプレイングの効果の検証）	―	平成23年1月	The 3rd Korea-China-Japan Nursing Conference,p239.2011.	本研究は統合失調症患者との対話場面におけるコミュニケーションスキルアップにつながる示唆を得ることを目的とした。対象はα県内精神病院に勤務中の看護師5名である。面接内容は同意が得られた場合のみICレコーダーにて録音し，逐語録を作成した。分析方法はインタビューより得られた逐語録について形態素解析，コロケーション解析を実施した．データ解析ソフトは，WinCha，KWIC Finderを使用した．結果、統合失調症患者との対話場面においての看護師が患者に対して話した発語項目の中から名詞のみを対象とした。その結果688個の構成要素を抽出した。コミュニケーション（120） 沈黙（114）相手（110）時間（74）などの6カテゴリが生成された．本研究から統合失調症患者との対話場面におけるコミュニケーションスキルアップにつながる要因として看護師の配慮がスキルアップにつながる可能性が示唆された。 （逐語録作成、データ分析、考察の論文執筆を担当した。） 共著者：Ryuji Ichinoyama,Kiyoko Funasaki,Jumpei Matsuura

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
2.The characteristis of nursing literature on the family nursing during 15 years past. （過去15年間の世界における家族看護に関する研究の特徴）	―	平成23年6月	The 10th International Family Nursing Conference,p243.2011.	本研究の目的は，世界における家族看護に関する研究の特徴を明らかにすることである．文献検索は，PubMedを用い，キーワードは「characteristis」「Family」「 Care」「Nursing」で検索した．遡及期間は1995年～2010年の過去15年間とした．対象は抽出された文献126件を分析対象とした．方法は126件の文献に含まれるキーワードに注目して類似するキーワードからカテゴリ化を行い，記述統計を実施した．結果,6個のカテゴリと26個の項目を導き出した．カテゴリは，それぞれ家族，ケア，関係など6種類であった．項目では，家族，患者，父親，高齢者,老人，母など26個であった．対象は，家族が一番多い結果であった．傾向は，分野別では，在宅ケア，高齢者などが多い結果であった．システム理論を発展させ更に家族療法を組み合わせた考え方の家族システム看護の視点から分析するとコミュニケーションについて伝達内容だけでなく家族の関係性も重要であることが明らかになった。また家族成員の変化が発生した場合は家族メンバー間で認知変化を注意して観察していく必要があると考える． （データ収集、データ分析、考察の一部執筆を担当した。） 共著者：Eiichi Ueno, Jumpei Matsuura
3.Trend and problem of research on family nursing in the world from the review of the literature for past 15 years. （世界における家族看護に関する研究の現状と課題 過去15年間の文献検討）	―	平成23年6月	The 10th International Family Nursing Conference,p251.2011.	本研究の目的は，世界における家族看護に関する研究の動向と課題を明らかにすることで今後の家族看護に対する研究の方向性の示唆を得ることである．文献検索は，文献検索オンラインデータベースPubMedを用い，キーワードは「Family」,「 Care」，「Nursing」で検索した．遡及期間は1995年～2010年の過去15年間とした．対象は抽出された文献106件を分析対象とした．方法は106件の文献に含まれるキーワードに注目して類似するキーワードからカテゴリ化を行い，記述統計を実施した．結果,8個のカテゴリと33個の項目を導き出した．カテゴリは，それぞれ対象，関係，分野など8種類であった．項目では，家族，患者，親族，年配，子供新生児，老人，母，看病など33個であった．対象は，家族が一番多い結果であった．傾向は，新生児・子供から高齢者まで多岐に渡り幅広かった．分野別では，集中，救命が多い結果であった．種類では，看護，医療，介護，研究，教育の順で幅広い結果であった．家族看護学には，看護とシステム理論と家族療法を組み合わせた考え方の家族システム看護という考え方がある．このことから，変化が起こった場合には，家族間での知覚の変化を注意して観察していくことが必要ではないかと考える． （本研究の代表者として、中心となり研究に取り組んだ。） 共著者：Jumpei Matsuura,Eiichi Ueno

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
4.The caring concerns of the reducing the incidence of postoperative deliria in the field of head and neck. （ケアリングの視点に基づく外科病棟における術後せん妄発症率を減らすための方略）	―	平成24年3月	International Hirosima Conference on caring and Peace, p196.2012.	本研究は，外科病棟における術後せん妄発症予防のために病棟看護師が実践しているケアリングについてを明らかにすること．対象者は病院外科病棟に勤務する看護師の看護師7名について半構成的面接を実施した.分析方法は逐語録を文脈内容から意味のある内容を単一記録として区切り帰納的分類を実施してカテゴリ化を実施した.10個項目と41個のカテゴリを導き出した．項目は時間，コミュニケーションなどであった．カテゴリは現在，時間などであった.分析結果から術後せん妄発症予防に関して，看護師は，術後患者に対して「認知」，「睡眠」に関するケアを特に注意して実施している事が明らかになった.ケアリングの概念の中の「関わり」「交流」をベースとして「支持的態度」「コミュニケーション」「情報提供」「患者へ安楽の提供」に当てはまると推察する. （本研究の代表者として、中心となり研究に取り組んだ。） 共著者：Jumpei Matsuura,Eiichi Ueno
5.The desired nursing students’ ability of communication from the caring standpoint. （ケアリングの見地から見た看護学生のコミュニケーション能力）	―	平成24年3月	International Hirosima Conference on caring and Peace, p263.2012.	本研究の目的はケアリングの視点から見た看護学生のコミュニケーション能力について明らかにすることである。対象A大学看護学部学生120名とした。段階別コミュニケーション能力評価尺度を用いて学年別に評価した実施した。ケアリングの視点としては相手への思いやりである。結果、相手が話すまで待つや相手が話すことを真剣に聞くなどが多項目よりも高い結果であった。これらの視点はケアリングの考えに基づくコミュニケーションであると推察する。今後はこの部分を更に伸ばすような指導を授業、演習、実習を通して行っていく必要性が示唆された。 （データ入力、データ分析、考察の論文執筆を担当した。） 共著者：Eiichi Ueno, Jumpei Matsuura
6. The present conditions and problem about professionalism and the stress on the nurse in the world （世界における看護師のプロフェッショナリズムとストレスに関する現状と課題）	―	平成28年7月	The 6th Asian Congress of Health Psychology2016	本研究の目的は、世界の看護師のプロフェッショナリズムとストレスに関する研究の現状と課題を明らかにすることである。PubMedを使用してキーワードは「professionalism」、「nursing」、「stress」とした。結果、抽出された17編の論文の中から内容を精査した結果15編の論文を対象にした。国別に分類した結果、USA 3編、Swedish 2編、Germany 2編、Australia 2編、Taiwan 2編、France1編、Canada1編、UK 1編、Spanish 1編であった。研究デザイン別は，質的研究6編、量的研究7編、報告1編、文献研究1編であった。研究目的別は、成人のがん病棟の患者と看護師間の相互作用のユーモアの使用について、プロ意識とチームワークの関係についてなどであった。研究対象者別分類は、臨床看護師10編と最多であった。研究フィールド別分類は、臨床8編で最多であった。日本では取り組みがなされていないかったため今後取り組む必要性が示唆された。 （本研究の代表者として、中心となり研究に取り組んだ。） 共著者：Jumpei Matsuura, Eiichi Ueno

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
7. The characteristicon the past paper concerns of mental health caused when a disaster strikes (災害発生時における精神衛生に関する文献研究)	―	平成28年7月	The 6th Asian Congress of Health Psychology2016	本研究の目的は、災害発生時の精神衛生に関する動向と課題を明らかにすることである。対象はPubMedを使用した1973年から2015年の894論文である。 分析方法は内容分析である。ソフトはKH Coderを使用した。結果、ハリケーンのような多くの災害地震と津波について研究されていた。災害は、個人とコミュニティにおいて精神衛生で最も重要であり優先度が高い問題である。今後はプログラム開発など多くの種類の災害への適切な支えとなる方法を提供する必要性がある。 （テキストマイニングソフトを使用しての分析、考察の執筆、スライドの一部作成を担当した。） 共著者：Eiichi Ueno, Nobuaki Maegawa, Jumpei Matsuura, Sanae Naruse
「国内学会発表抄録」				
1.わが国のせん妄に関する看護研究の動向と課題　―文献検討を通して―	―	平成21年5月	第40回日本看護学会学術集会看護管理抄録集.p119.2009.	本研究の目的は我が国における看護分野でのせん妄に関する研究について、文献検討により研究の動向と課題を明らかにし、患者のケアへの示唆を得ることである。研究方法は医学中央雑誌を用いキーワードはせん妄と看護とした。結果、31編の文献を対象とした。研究デザイン別では量的研究が91編、質的研究は14編、事例研究は15編。研究対象者は患者105編。筆頭研究者は臨床看護師94編、看護系大学教員17編、共同研究9編。フィールド別では整形外科17編、外科病棟12編、ICU5編、CCU4編。せん妄発症要因については31編。せん妄評価尺度はニーチャム混乱・錯乱状態スケール11編。本研究結果から予防に関する研究が少なかったため、今後はせん妄発症予防ケアの充実を図るための研究が期待されることが明らかになった。 （本研究の代表者として、中心となり研究に取り組んだ。） 共著者：松浦純平, 上平悦子
2.看護学生のコミュニケーション能力からみたカリキュラムの開発	―	平成22年3月	第23回日本看護研究学会近畿・北陸地方会学術集会プログラム・抄録集.p49.2010.	本研究の目的は看護学生の段階別コミュニケーション能力評価尺度を用いて、効果的な授業プログラムを開発することを目的とした。研究方法は3つの看護系大学の看護学生710名を対象とし有効回答372名を分析対象とした。看護学生の段階別コミュニケーション能力評価制度を用いた学生のコミュニケーション能力を測定した。結果、４学年が多くの項目で高得点を示したが2学年になるとコミュニケーション能力が低下する傾向であった。今後は看護学生のコミュニケーション能力を向上させるために各学年別に客観的指標を基に重点項目を教授することが大切である。そのためには各学年にコミュニケーションを教授する科目を効果的に配置するカリキュラムが必要である。 （データ入力、データ分析、スライド作成の一部を担当した。） 共著者：上野栄一,明神一浩,松浦純平

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
3.術後せん妄発症要因と予防に関する文献検討　―過去5年間の国内文献より―	―	平成22年3月	第23回日本看護研究学会近畿・北陸地方会学術集会プログラム・抄録集.p51.2010.	本研究の目的は文献検討から国内におけるせん妄発症要因と予防について明らかにすることである。研究方法は医学中央雑誌を用いキーワードはせん妄と術後と要因と予防とした。その結果、202編の文献の中から31編の文献を抽出し分析対象とした。結果、要因に関する論文は18編、予防に関する論文は10編であった。要因としては認知症、65歳以上などが多い結果であった。予防目的の取り組みとしてはビデオメッセージ、リアルオリエンテーションなどがあった。本研究から以下の2点が明らかになった。1点目は発症要因としては「消化器外科病棟」、「認知症」「65歳以上」が多い結果であった。予防については「環境の変化」「睡眠障害」など誘発因子への介入が発症予防に効果があることが分かった。 （本研究の代表者として、中心となり研究に取り組んだ。） 共著者：松浦純平，上野栄一
4.患者の暴力に対する看護師の予測マネージメントの研究	―	平成22年3月	第23回日本看護研究学会近畿・北陸地方会学術集会プログラム・抄録集.p55.2010.	本研究の目的は精神科病棟におけるベテラン看護師の危険予測について語りを振り返り臨床現場での実践に示唆を得ることを目的とした。研究方法はα県内の精神科病院に勤務する精神科臨床経験10年以上の看護師6名を対象とした。 研究方法は半構成的面接法より得られたデータを質的帰納的に分析した。結果、患者の暴力に対する予測過程を抽出した。結果、「患者の行動パターンの把握」、「過去に起こった場面の想起」、「患者の話す内容の整合性」の3つのカテゴリーが生成された。今後は精神病患者の暴力を予測するための客観的評価についても更に量的・質的に検証するため必要がある。 （逐語録作成、データ分析、スライド作成の一部を担当した。） 共著者：明神一浩,上野栄一,松浦純平
5.高齢男性介護者の介護に対する自己の構え	―	平成22年7月	日本看護研究学会学術集会プログラム・抄録集.p113.2010.	本研究の目的は高齢男性介護者の介護に関わる介護者の構えについて明らかにすることである。対象は高齢男性介護者の介護に関わる介護者4名を対象とした。対象者へ半構成的面接を実施した。結果、「喜び」「孝行」「負担」「責任」の4カテゴリが抽出された。今後は男性介護者の気持ちを大事にして関わっていく必要性が示唆された。 （逐語録作成、分析、スライド作成の一部を担当した。） 共著者：上平悦子，松浦純平，船瀬孝子，明神一浩，上野栄一

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
6.看護師のコミュニケーションスキルをレベルアップするための方略	―	平成22年9月	第17回ヘルスカウンセリング学会学術大会・総会プログラムおよび講演抄録集．p60.2010.	本研究の目的は、看護師のコミュニケーションスキルをレベルアップする要因を明らかにすることである。看護系大学α大学の看護学生１学年～４学年まで各学年70名、合計280名を対象に調査を実施した。方法は「看護師における患者とのコミュニケーションスキル測定尺度」を中心にそれぞれの技法の場面設定の質問紙を作成し5段階評定で、それぞれのコミュニケーション場面で、その時の感情について評価した。分析は対応のあるt-test、一元配置分散分析を実施した。看護学生236名の回答があった学年別のコミュニケーション技法の平均値は2.88±0.28であった(p＜0.0001)。得点の高かったコミュニケーション技法は情報提供4.31 ±0.82、協同提言4.26±0.91であった。治療的技法の場面で非治療的技法の場面よりも快度は有意に高い結果であった。これらの結果を今後のコミュニケーションに活用していくことでスキルアップにつながることが示唆された。（データ入力、データ分析、スライド作成の一部を担当した。） 共著者：明神一浩，上野栄一，松浦純平，一ノ山隆司
7.がん患者サロンに対する患者会会員の認識と課題	―	平成22年12月	第3回日本地域連携精神看護学研究学術集会会誌，p4.2010.	本研究の目的は、Ａ県内のがん患者会会員が考えるサロンにおけるメンタルヘルスに関する認識および現状を明らかにすることである．研究対象はＡ県がん患者会会員400名．調査方法は，対象者に本研究の主旨と自記式無記名質問紙調査を同封し郵送した．調査項目は，基本的属性，サロンの認識，サロン立地条件，サロン利用者，サロンに必要と考える医療従事者，サロンへの期待の6項目．分析方法は，PASW Statistics18.0を用いて単純集計を行った．結果、以下の3点が明らかとなった．1．地域に暮らす患者にとってサロンのニーズ・期待度は，非常に高い．しかし，実際にサロンを利用している人は少ない．2．サロン設置場所として通いやすい立地条件であることを望んでいた．3．サロン内にメンタル面のフォローができる専門職の配置を望んでいた． （本研究の代表者として、中心となり研究に取り組んだ。） 共著者：松浦純平，上野栄一
8.福島第一原発事故に起因する食品と安全と消費行動に対する実態調査	―	平成23年1月	第70回日本公衆衛生学会総会抄録集,p418.2011.	本研究の目的は福島第一原発事故に起因する食品と安全と消費行動を明らかにすることである。対象はインターネットで研究参加に同意をした成人男女450名を対象とした。設問項目は食品産地を見て買うかどうか。福島第一原発事故の前後で食品産地を見てから購入するかどうか。結果、原発事故の前後では事故後が生産地を見てから買うようになった項目で有意差がみられた。このことは報道が消費行動に影響を与えている可能性が示唆された。 （データ入力、データ分析を担当した。） 共著者：御輿久美子，守田貴子，水野静枝，松浦純平，濱田美来，尾花尚弥，今村知明

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
9.看護師の就労継続をエンパワメントする因子についての研究	―	平成23年1月	第70回日本公衆衛生学会総会抄録集，p492.2011.	本研究の目的は、看護師の就労継続をエンパワメントする因子を明らかにすることである。調査対象はα・β県内の病院施設の看護師であり，研究参加への同意が得られた250名。記述データは自記式質問紙の自由記載項目とした。データ分析方法は文脈の意味内容を精読し，その内容の類似性に基づき分類し，カテゴリー化した。スーパーバイザーに指導を受けてカテゴリー化した。分析の結果【看護職としてのやりがい】【家族を支えるために必要な経済的資源】【看護職への誇り】【帰属意識の高さ】の4カテゴリリーが生成された。看護師不足である現状の中継続して就労している看護師が継続している要因は様々なであるが、患者家族からの感謝の気持ちの表明、家族の支援などが就労継続に影響している結果となった。今後、この結果を基に看護師の就労継続の可能性が示唆された。 （逐語録作成、分析を担当した。） 共著者：加藤礼識，伊藤雪絵，水野静枝，松浦純平，御輿久美子，今村知明
10.看護体制の違いによる職務満足の検討	―	平成23年1月	第42回日本看護学会看護管理抄録集,p57. 2011.	本研究の目的は看護体制の違いが職務満足度の影響に関する研究について形態素解析を行うことにより職務満足に関する研究の動向を明らかにすることである。対象は医学中央雑誌で過去10年間に発表された研究タイトル670件を分析対象とした。解析方法はベレルソンの内容分析法を使用した。結果、看護体制が10対1と7対1の看護体制では職務満足度に相違が見られた。今後は看護体制が職務満足度にどのように影響をしているのかを明らかにする必要性が示唆された。 （文献収集、データ分析、スライド作成の一部を担当した。） 共著者：明神一浩,上野栄一,松浦純平
11.統合失調症患者との対話場面におけるコミュニケーションスキルに関する研究	―	平成23年1月	第42回日本看護学会精神看護抄録集,p49. 2011.	本研究は統合失調症患者との対話場面におけるコミュニケーションスキルアップに向けて示唆を得ることを目的に取り組んだ。対象はα県内精神病院に勤務中の看護師5名。面接内容から逐語録を作成。分析方法はインタビューより得られた逐語録について形態素解析，コロケーション解析を実施した．データ解析ソフトは，WinCha，KWIC Finderを使用した．結果、統合失調症患者との対話場面においての発語項目に該当する名詞に着目し，718個の構成要素を抽出した。コミュニケーション行動（130）］［行動（123）］[対象（120）][陰性症状（76）]などの8カテゴリが生成された．形態素解析で最頻度名詞の『気遣い』25個に着目しコロケーション解析した結果，「活動量増加（19）」「体動増加（12）」などであった．本研究から統合失調症患者との対話場面におけるコミュニケーションスキルアップにつながる要因としてなど看護師の配慮がスキルアップにつながる可能性が示唆された。 （逐語録作成、分析、スライド作成の一部を担当した。） 共著者：明神一浩,上野栄一,松浦純平

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
12.頭頸部外科領域における術後せん妄発症要因に関する看護師の視点について	―	平成23年3月	第10回富山大学看護学会学術集会会誌 10（1），p30.2011.	本研究の目的は，頭頸部外科病棟に勤務する経験豊富な看護師が考える術後せん妄発症要因は何かを明らかにして，臨床での術後せん妄発症患者に対する看護実践への示唆を得ることである．対象は，A大学医学部附属病院頭頸部外科病棟に勤務する看護師5名．術後せん妄発症要因について半構成的面接を実施，結果内容分析手法およびセブンクロス法にて分析した．内容分析の結果から【性格特性】【理解力不足】【長期安静】【高齢】【不眠】【男性】【独居】の7つのカテゴリーが生成された．セブンクロス法の結果から，優先順位が高い順に【不眠】【性格特性】【高齢】【長時間手術】【術中出血量】【眠剤の影響】【術前不安】の 7つのカテゴリーが生成された．内容分析とセブン・クロス法の両方に含まれていたのは，【高齢】【不眠】【個人特性】の3つのカテゴリーであった． （本研究の代表者として、中心となり研究に取り組んだ。） 共著者：松浦純平，喜田加奈子，上野栄一
13.一般外科領域における術後せん妄発症予測要因の検討　―経験豊富な看護師へのインタビューより―	―	平成23年8月	第37回日本看護研究学会学術集会抄録集，p178.2011.	本研究の目的は一般外科病棟に勤務する経験豊富な看護師が直観的に判断している術後せん妄の発症予測につながる患者の前駆症状を明らかにすることである．対象者は病院外科病棟に勤務する看護師20名とした．半構成的面接を実施した．逐語録を形態素解析分析し，抽出した名詞を類似性に基づき分類し，意味内容の共通性に基づきカテゴリ化した．類似性により分類した結果【表情】【認識】【患者の反応】【置かれた環境】【コミュニケーション】【時間感覚】【失見当識】【行動】，【対象者】【対象物】【情意】【直観】，【患者特性】【不安】【睡眠】の15のカテゴリが生成された．本研究結果から経験豊富な看護師の術後せん妄発症予測につながる前駆症状の観察視点としては，患者の眼に代表される表情，失見当識，看護師の説明に対する認識とその反応等から術後せん妄の発症を予測していた． （本研究の代表者として、中心となり研究に取り組んだ。） 共著者：松浦純平，福田弘子，上野栄一.
14.内容分析による最近の診療報酬の特徴	―	平成23年8月	第37回日本看護研究学会学術集会抄録集，p227.2011.	本研究では過去1年間の診療報酬に焦点を当ててその特徴を明らかにすることを目的とした。過去1年間の診療報酬の看護に関する記事を抽出してカテゴリー化した。結果、1236件の記事が検索された。記事内容を分類した結果、120種類のカテゴリーに分類された。最も多かったのは診療報酬（222）介護保健（192）DPC（68）などであった。これらのことから診療報酬についてDPC制度導入、診療報酬改正などを視野に入れて取り組みがなされていた。今後も診療報酬改定に注目して動向を注視していくことが重要であると考える。 （逐語録作成、分析、スライド作成の一部を担当した。） 共著者：上野栄一，一ノ山隆司，明神一浩，松浦純平，上平悦子.

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
15.認知症高齢者および家族の地域生活を阻害する困難要因	―	平成23年8月	第37回日本看護研究学会学術集会抄録集,p339.2011.	本研究では介護保険適応施設の従事者が認知症高齢者およびその家族を地域で支えていく困難性をどのように捉えているのかを把握することを目的とした。対象は介護保険施設の従事者27人。記述データは自記式質問紙の自由記載項目。データ分析方法は内容の類似性に基づきカテゴリ化した。結果，【認知症に対する理解不足と偏見】【支えるために必要な経済的資源の欠如】【職種間の連携と情報不足】【行動心理症状の理解と対応困難】4カテゴリを抽出した。認知症高齢者に対して家族や地域住民，介護保険適応施設の従事者が，認知症の種類や中核症状・行動心理症状に関して理解不足が偏見を助長し，さらに理解不足が対応の困難性を高める原因になっており，職種間の連携にも影響を及ぼしていたことが明らかになった。 （逐語録作成、分析、スライド作成の一部を担当した。） 共著者：京谷和哉，一ノ山隆司，舟崎起代子，松浦純平.
16.データマイニングによる看護師の考える術後せん妄発症予測について　―経験豊富な看護師へのインタビューの分析―	―	平成23年8月	第42回日本看護学会学術集会成人Ⅰ抄録集,p60.2011.	本研究目的は外科病棟に勤務する経験豊富な看護師が考える術後せん妄発症予測につながる前駆症状を明らかにすることである．調査対象者は病院外科病棟に勤務する看護師20名。研究方法は術後せん妄発症前の段階でアセスメントをどのような視点で実施しているかについて半構成的面接を実施した．分析方法は逐語録について形態素解析，コロケーション解析を実施した．データ解析ソフトはWinCha，KWIC Finderを使用した．結果、718個の構成要素を抽出。［行動］［コミュニケーション］［行動対象］［表情］［睡眠］［訴え］［時間］［幻覚］［認知］の9カテゴリが生成された。 （本研究の代表者として、中心となり研究に取り組んだ。） 共著者：松浦純平，喜田加奈子，福田弘子，上野栄一，水野正延.
17.看護理論にみるカウンセリング技法の特徴	―	平成23年9月	第18回ヘルスカウンセリング学会学術大会・総会プログラムおよび講演抄録集,p48.2011.	本研究では、カウンセリング技術にはどのようなものがるかを明らかにし、さらにカウンセリング理論との関係について明らかにすることを目的とした。ナイチンゲールは、優れた看護師の能力として、患者にどのようなことを感じているか読み取れ、患者の顔に現れる変化についての意味を理解できると確信が持てる研究をすべきと明言している。ヘンダーソンは、完全で成熟した優れた看護師とは患者に同情を寄せ、かつ敏感に反応する能力、自分の情緒的な反応と技術的な対応を活用する機会をもつと述べている。 看護理論にはコミュニケーション技術、カウンセリング技術に関する独自の看護論が存在していた。それらは、治療的コミュニケーション技術をベースに傾聴、受容、共感的理解、自己決定へと看護過程を展開する中で展開していることが明らかとなった。 （文献収集、データ分析、スライド作成の一部を担当した。） 共著者：上野栄一,松浦純平，明神一浩.

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
18.看護学生のコミュニケーション技法と感情との関係	―	平成23年9月	第24回健康心理学会抄録集,p89.2011.	本研究の目的は看護学生の学年別コミュニケーションの技法がどのように感情に影響を与えているかについて明らかにする。対象は看護系大学α大学の看護学生１学年～４学年280名。方法は看護師における患者とのコミュニケーションスキル測定尺度を使用し技法の場面設定の質問紙を作成し５段階評定でコミュニケーション場面で、その時の感情（快―不快）について評価した。分析は、対応のあるt-test、一元配置分散分析を実施した。看護学生236名の回答があった１学年58名、２学年60名、３学年55名、４学年63であった。治療的技法の平均値は2.88±0.28、非治療的技法の平均値は2.5±9.43であった(p＜0.0001)。治療的技法で快得点の高かったコミュニケーション技法は情報提供4.31 ±0.82、協同の提言4.26±0.91であった。平均治療的技法の得点と非治療的得点の学年別にみた比較を一元配置分散分析した結果、平均治療的技法（F=4.35; p<0.05）では平均治療的技法得点は１学年2.95±0.28 ２学年2.92±0.28３学年2.83±0.27４学年2.80±0.25であり１学年と４学年（p<0.05）１学年と３学年（p<0.1）２学年と４学年（p<0.1）との間に有意な差を認めた。 （データ収集・入力、データ分析を担当した。） 共著者：上野栄一,松浦純平.
19.医療政策の中での看護の動向	―	平成23年11月	日本看護研究学会第24回近畿・北陸地方会学術集会プログラム・抄録集,p29.2011.	本研究では過去1年間の医療政策の中で、看護の政策に焦点を当ててその特徴を明らかにすることを目的とした。過去1年間の医療政策の中の看護に関する記事を抽出してカテゴリー化した。結果、2291件の記事が検索された。記事内容を分類した結果、225種類のカテゴリーに分類された。最も多かったのは診療報酬（302）介護保健（292）インフルエンザ（222）などであった。看護に注目すると「看護教育」「外国人看護師」「人材養成」「訪問看護」などのカテゴリーが抽出された。これらのことから看護政策においては看護教育、カリキュラム改正、特定看護師に関するものが多くまた外国人看護師への支援策も具現化されていた。多くの施策が提示される中、今後看護教育、看護サービスを充実させるために看護施策の情報をいかに取り入れ教育施設、各病院での取り組みを考えることが重要であると考える。 （文献収集、データ分析、スライド作成の一部を担当した。） 共著者：上野栄一，一ノ山隆司，明神一浩，松浦純平，上平悦子，八塚美樹.

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
20.頭頸部外科領域における術後せん妄発症予測要因の検討　―経験豊富な看護師へのインタビューより―	―	平成23年11月	日本看護研究学会第24回近畿・北陸地方会学術集会プログラム・抄録集,p34.2011.	本研究の目的は、外科病棟に勤務する経験豊富な看護師が直観的に感じている術後せん妄発生予測につながる前駆症状は何かを明らかにすることである。調査対象者は外科病棟に勤務する看護師7名を対象とした。看護師へ、外科領域における認知症を併発していない術後せん妄患者への関わりを想起してもらい，外科領域における術後せん妄発症予測についてのアセスメントをどのような視点で実施しているかについて，半構成的面接を実施し，逐語録を作成した。術後せん妄発症予測アセスメント項目に該当する名詞に着目した結果718個の構成要素を抽出した。意味内容の類似性に基づき分類した結果，9カテゴリーが生成された。結果から得られた観察ポイントは，経験豊富な看護師の長年の経験に基づく熟練の技に該当する部分だと考える。経験の少ない新人看護師が気付きにくい観察項目であると考えるため，この部分に注目し，共通理解を深めることでせん妄の早期発見・早期介入が可能となるため重要なポイントだと推察した。 （本研究の代表者として、中心となり研究に取り組んだ。） 共著者：松浦純平，上野栄一，一ノ山隆司，明神一浩，福田弘子.
21.過去10年間の職務満足の研究タイトルの分析による研究動向の検討	―	平成23年11月	日本看護研究学会第24回近畿・北陸地方会学術集会プログラム・抄録集,p48.2011.	本研究の目的は看護師の職務満足度に関する研究について形態素解析を行うことにより職務満足に関する研究の動向を明らかにし今後の研究に示唆を得ることである。対象は医学中央雑誌で過去10年間に発表された研究タイトル895件を分析対象とした。解析方法は内容分析法を使用した。結果、新人看護師、中堅看護師、職員定着、キャリア、看護体制、自律性などが抽出された。看護体制が職務満足度にどのように影響をしているのかをみた研究が増加傾向である。新人看護師の離職予防について職場に愛着を持たせるような帰属意識も重要であることが本研究から示唆された。 （文献収集、データ分析、スライド作成の一部を担当した。） 共著者：明神一浩，前川哲弥，森下憂一，松浦純平，上平悦子，上野栄一.

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
22.わが国における術後せん妄発症予測に関する研究の動向　―過去27年間の文献検討より―	―	平成23年11月	日本看護研究学会第24回近畿・北陸地方会学術集会プログラム・抄録集,p57.2011.	研究目的は，看護分野におけるせん妄発症予測に関して患者ケアに示唆を得ることである．文献検索は，医学中央雑誌を用い，キーワードは「せん妄」，絞込み検索は「看護」，「原著論文」とした．遡及範囲：1983年～2010年の27年間とした.対象は12件の文献とした．分析方法はデータの示す傾向や性質を把握ため，12件の文献を各フィールド別，予測項目別に記述統計の手法で分析した．結果,予測項目のカテゴリ別分類では，「認知力障害」20件，「ルート類」19件，「環境の変化」15件，「患者属性」11件，「活動抑制」・「性格」・「薬剤」10件，「身体症状」・「周手術期」9件であった.看護師の術後せん妄発症予測項目には，同じことを何度も聞く，指示動作困難等，点滴刺入部，心電図電極を不必要に触る，　緊急入院，個室への移動，70歳以上，身体拘束，几帳面な性格，麻薬・精神薬服用中，脱水，疼痛，5時間以上の手術等があり，術後せん妄発症予測を行っていることが明らかとなった．今後，上記の項目を重視して術後の患者のケアに活かしていく必要性が示唆された. （本研究の代表者として、中心となり研究に取り組んだ。） 共著者：松浦純平，上野栄一，一ノ山隆司，明神一浩，福田弘子.
23.臨床看護師が考える術後せん妄発症予防に関する看護実践について ―KH Coderを利用した分析―	―	平成23年12月	第11回富山大学看護学会学術集会抄録集 11（1），p38．2011.	本研究目的は，外科病棟に勤務する看護師が術後せん妄発症予防のために取り組んでいる看護実践は何かを明らかにすることである．対象は病院外科病棟に勤務する看護師20名．調査方法は半構成的面接法を実施した．分析は記述統計，対応分析，階層的クラスター分析，共起ネットワーク分類を実施した．術後せん妄発症予防についての取り組みは「説明」「術前」「自分」「家族」などであった．階層的クラスター分析結果から，疼痛除去，十分な睡眠の確保，積極的離床に基づく生活リズムの再構築等など8つのクラスターに分類された．抽出名詞の出現パターンの類似性を線で結んだ共起ネットワーク分類の結果から，看護師は術前に患者家族へ十分な説明の実施，術後における十分な睡眠確保などの看護実践に取り組んでいた．本研究結果から看護師は術前の段階より患者家族へ術後の環境および状況の変化について十分な説明を実施し理解を促す様に努めていたことが明らかになった。 （本研究の代表者として、中心となり研究に取り組んだ。） 共著者：松浦純平，上野栄一，一ノ山隆司，京谷和哉，上平悦子，梅林かおり.

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
24.経験豊富な看護師が考える術後せん妄発症予測要因の検討　―データマイニングを用いたインタビューの分析―	―	平成23年12月	第31回日本看護科学学会学術集会講演集,p393.2011.	本研究の目的は，外科病棟での臨床経験豊富な看護師が考える術後せん妄の発症予測につながる前駆症状とは何かを明らかにすることである．対象者は2病院の外科病棟に勤務する経験豊富な看護師21名である.調査者対象者へ認知症の併発がなく術後にせん妄を発症した患者を想起してもらい，術後せん妄発症予測に関するアセスメント内容について半構成的面接を実施し逐語録を作成した．分析方法は逐語録の言語すべてについて形態素解析分析を行い，記述統計および抽出した名詞について形態素間の共起関係を検証するため対応分析を実施した.術後せん妄発症前駆症状に関する発言を形態素解析した結果，総単語数33,447個より2,249個1,806種類±27.08（mean±SD）の名詞を抽出．結果，70歳以上の高齢であることを前提とした上で眼に代表される【表情】言語・非言語的コミュニケーションを含む【コミュニケーション】家族のことを気にする，家族への面会要求等の理由により【安静保持不能】尿意，術後創部痛があるが対処できていないことによる【不快感】ガーゼ・ルート・ドレーン類が気になる等の【術後処置に伴う影響】の5つのカテゴリが生成された. （本研究の代表者として、中心となり研究に取り組んだ。） 共著者：松浦純平，一ノ山隆司，上野栄一
25.看護学生の授業における3e-Analyzer による学習効果	―	平成24年3月	日本看護研究学会　第25回近畿・北陸地方会学術集会プログラム・抄録集,p37.2012.	本研究の目的は新しい看護学生の授業における3eAnalyzerを用いての看護学生の授業における3eAnalyzerによる学習の効果を明らかにすることである。研究方法はα大学の授業で3eAnalyzerを用いて学生60名に調査を実施した。3eAnalyzerで答えることのできる質問を10項目設定した。分析方法はテキストマイニングによる単語解析、ことばのネットワーク分析、対応分析を実施した。結果、回収は49名、有効回答は44名であった。頻出単語は良い、楽しい、面白いなどの肯定的表現が上位を占めた。ことばのネットワークでは楽しい、良いという単語に参加できる、凄いといった単語と連動していた。対応分析では「楽しい、参加できる」と「良い、授業、刺激」が抽出された。3eAnalyzerの使用した授業の感想について自由記載を分析したところすべてが肯定的な回答であった。3eAnalyzerの特徴である教員と学生が双方向でリアルタイムで回答表示でき学生へのフィードバックが即時にできることが学生の学習意欲を上げて高い肯定的評価を得た。 （データ収集・入力、データ分析を担当した。） 共著者：上野栄一，松浦純平，上平悦子.

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
26. テキストマイニングによる看護管理の研究の動向－過去 10年間の文献より－	―	平成24年3月	日本看護研究学会　第25回近畿・北陸地方会学術集会プログラム・抄録集,p47.2012.	本研究の目的はテキストマイニングを用いて看護管に関する国内文献の研究タイトルの分析から看護管理に関する研究の動向と今後のの示唆を明らかにすることである.調査対象は検索結果から抽出した368文献の研究タイトルとした.分析方法は形態素解析，記述統計とコロケーション解析を行った.結果,368文献の研究タイトルを形態素解析した結果，総抽出語数は4250語，2226種類であった．高頻度に出現した単語に着目した結果，管理（22）管理者（18）看護部（10）新人看護師（6）研修（5）などが抽出された.早期離職予防に関する研究が多い結果であった．管理の単語に注目し，管理の先行と後続文脈（前後文脈）を抽出するため，コロケーション解析した結果，新人看護師を対象にした研修の研究,離職予防に関する研究が実施されていた．研修の前後文脈からはラダー制度や能力別研修などの文脈が得られた．本研究結果から今後，新人看護師の早期離職予防のための研修内容の充実を図りその後の評価を検証していく必要性が示唆された. （文献収集、データ分析、スライド作成の一部を担当した。） 共著者：上野栄一，松浦純平，上平悦子，安東則子，八塚美樹，神保浩子.
27.過去10年間の医療機関における暴力に関する研究の動向	―	平成24年3月	日本看護研究学会　第25回近畿・北陸地方会学術集会プログラム・抄録集,p55.2012.	本研究の目的は過去10年間におよぶ暴力に関する文献の特徴を明らかにして今後の暴力に対する看護への示唆を得ることである。対象は医学中央雑誌で過去10年間に発表された研究タイトル1700件を分析対象とした。分析方法は内容分析法を使用した。結果、暴力に関する研究は1508タイトルであった。対象をクラスター解析結果から「暴力の実態」「暴力予防」「暴力場面」「暴力防止」「DV被害」「暴力認知」「暴力の危機介入」の7つのクラスターを抽出した。暴力の実態を明らかにした研究や事例を通じて暴力行為に至る過程やせん妄による暴力を認知できない患者による暴力が問題になっていることが明らかになった。 （文献収集、データ分析、スライド作成の一部を担当した。） 共著者：明神一浩，上野栄一,松浦純平，上平悦子.

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
28.テキストマイニングを用いた術後せん妄に関する研究論文タイトルの分析	―	平成24年3月	日本看護研究学会　第25回近畿・北陸地方会学術集会プログラム・抄録集,p57.2012.	本研究の目的は，我が国における術後せん妄に関する研究論文タイトルから研究の動向と課題を明らかにすることである。調査方法は医学中央雑誌を使用してキーワードは「術後せん妄」，絞り込みは看護と原著論文として，期間は1982年以前～2011年とした。調査対象は検索結果より抽出した129文献とした。分析方法は計量テキスト分析ソフトKH Coderを使用した。記述統計，階層的クラスター解析，共起ネットワーク分類にて分析した。結果129本の論文タイトルを分析可能な意味をなす最小単位である形態素に解析した結果，総抽出語数は2,043語，420種類であった。そのうち抽出された名詞774個の中から高頻度に出現した名詞に着目した結果発症（44）要因（33）検討（30）予防（28）術前（16）分析（15）などであった。階層的クラスター解析の結果「関連分析」「リスク評価」，「実態調査」「予防効果の検討」の5個のクラスターに分類された。共起ネットワーク分類にて分析した結果，せん妄発症予防を重視した研究，患者の状態を日本語版NEECHAM混乱・錯乱スケールを用いて分析した研究に取り組んでいることが明らかになった。 （本研究の代表者として、中心となり研究に取り組んだ。） 共著者：松浦純平，梅林かおり，植木健康，安東則子，八塚美樹，上野栄一.
29.臨床看護師が考える術後せん妄アセスメントツールに関する分析	―	平成24年8月	第38回日本看護研究学会学術集会抄録集, p127.2012.	本研究の目的は,術後せん妄アセスメントツールに関するニーズについて明らかにすることである。対象者は全国の19病院の外科病棟勤務の看護師725人。看護経験年数別に5群に分け,アセスメントツールの必要性,使用希望,項目数,所要時間を一元配置分散分析にて分析した。ツールが必要と回答した割合は85.5%,使用希望割合は82.5%,全体のアセスメントツール項目平均数は10.4項目,経験年数20年以上の群が平均21項目であった。経験年数別のアセスメントツール必要性,使用希望,所要時間に関する5群間の多重比較では有意差がなく,項目数の群間比較において,経験年数20年以上の群が他4群の全てと比較して有意な差が生じた。 （本研究の代表者として、中心となり研究に取り組んだ。） 共著者：松浦純平，梅林かおり，石澤美保子，京谷和哉，一ノ山隆司，上野栄一.

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
30.テキストマイニングを用いた周手術期における皮膚トラブルに関する 研究の動向と課題－過去29年間の論文タイトルの分析－	―	平成24年8月	第38回日本看護研究学会学術集会抄録集,p141.2012.	本研究の目的はテキストマイニング手法を用いて我が国における周手術期における皮膚トラブルに関する研究の動向と課題を論文タイトルから明らかにすることである。調査方法はWeb版医学中央雑誌を使用。検索キーワードは「手術室」「手術体位」とした。調査期間は1982年以前～2011年とした。調査対象は検索結果より抽出した93編。分析方法は計量テキスト分析ソフト「KH Coder」を使用した。93編の論文タイトルについて形態素解析を実施し記述統計，階層的クラスラー解析，共起ネットワーク分類を行った。形態素解析より総抽出語数1465語253種類を抽出した。抽出された名詞575語の名詞に関して記述統計の結果頻度順に手術（36）使用（24）体位（20）検討（13）などが抽出された。階層的クラスター分析より「発赤予防のための物品の工夫」「仰臥位時の皮膚調査」「褥瘡発生予防」「術中体位の工夫」「術中体位固定についての効果の検討」の5カテゴリーに分類された。周手術期看護において，褥瘡発生に代表される皮膚障害が問題視されている。本研究の分析結果から，術中同一体位による褥瘡発生予防に関して，物品を用いて様々な工夫を行い研究に取り組んでいた。 （文献収集、データ分析、考察の一部、スライド作成の一部を担当した。） 共著者：西山和成，松浦純平，上野栄一.
31.話し手の治療的コミュニケーション技法と非治療的コミュニケーション技法が聞き手の感情に与える影響―ＰＯＭＳを用いた調査から―	―	平成24年8月	第19回ヘルスカウンセリング学会学術大会・総会プログラムおよび講演抄録集,p33.2012.	話し手のコミュニケーション技術が聞き手の感情にどのような影響を与えているかPOMSを用いて感情の変化を調べた。調査期間は平成23年10月。対象はα看護系大学学生20名に実施。方法は聞き手が治療的技法群と非治療的技法群に分けて実施した。質問は半構成的面接を用いた。治療的技法を用いた群は、非治療的技法を持ちいた群に比較して、D（抑うつ－落込み）、A-H（怒り－敵意）、F（疲労）、C（混乱）の得点は有意に下がり、V（活気）の得点は逆に有意に上昇した（$p<0.05$）。受容的態度をとる治療的コミュニケーション技術は、話し手の内容を聞き手が認めることを意味する。聞き手にとり自分の話す内容を話し手が受けとめてくれることは自分を理解してくれているという気も落ちが生じ心に快の状態を作り出すと考えられる。 （文献収集、データ分析、考察およびスライド作成の一部を担当した。） 共著者：上野栄一，松浦純平.

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
32.コミュニケーションにおける話し手と聞き手の発話量の比較	―	平成24年8月	第19回ヘルスカウンセリング学会学術大会・総会プログラムおよび講演抄録集,p51.2012.	本研究では、コミュニケーションにおける話し手と聞き手の発話量の比較をし、特徴を明らかにすることを目的とした。調査期間は平成23年８月。対象は看護系大学の学生10名に実施した。方法は聞き手が治療的技法を用いる群と非治療的技法を用いる群に分けて実施した。2人の間の相互交渉内容を分析した。会話の内容について逐語禄を作成後、両者の文字数をカウントして会話量とし、両者の会話量をMann-Whitney U-testにて分析した。治療的技法で話を聞いた聞き手は、非治療的技法を用いた聞き手よりも有意に高い発語量の変化を示した。また、非治療的技法では、話し手の治療的技法を用いた発話量に比べて少ない発話量の変化であった。話し手が治療的技法を用いた場合は、聞き手は、受容的な接し方に共感的理解が深まり、自分から話すモチベーションが高まったと考えられる。逆に話し手が非治療的技法を用いた場合は、聞き手は自分の意見を拒否されるため不快な感情が生じ話す気にはなれない気持になったと推察する。 （本研究の代表者として、中心となり研究に取り組んだ。） 共著者：松浦純平，上野栄一.
33.EBNに基づいた会話分析とは何か	―	平成24年8月	第19回ヘルスカウンセリング学会学術大会・総会プログラムおよび講演抄録集,p52.2012.	本研究では、会話分析の方法について研究者らが用いている方法についてその特徴を明らかにすることを目的とした。会話分析の種類について、これまでの方法について、会話を分析するという視座にたち、その特徴を明らかにし、ＥＢＮに基づいた会話分析について示唆を得ることとした。テキストマイニングソフトを用いると、言葉とことばの関係性が一目瞭然にビジュアル化できる。たとえば「看護師はである」「看護師は優しい」といった会話例を分析すると次のようなスキ―マに表わすことができる。これは共起分析とも呼ばれ、言葉のネットワークとして図式化できるので会話を可視化することができるので会話の構造を調べるのに適していると考える。最近は、コンピュータを利用したテキストマイニングのソフトが開発されている。電子化テキストの最小構成単位としての 文字について、 文字連鎖の出現頻度、あるいは文字の次に生起する文字の確率が算出できる。 また、クラスター解析が可能となる。従来の質的研究と併用することにより信頼性のある精度の高い分析が可能になると期待される。 （文献収集、考察およびスライド作成の一部を担当した。） 共著者：上野栄一，松浦純平.

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
34.話し手としての看護学生のコミュニケーション技法が聞き手の自律神経系と感情に与える影響	―	平成24年11月	第32回日本看護科学学会学術集会講演集,p206.2012.	本研究の目的は、話し手のコミュニケーション技術が聞き手の感情にどのような影響を与えているか自律神経測定装置を用いて感情の変化を明らかにすることである。対象はα看護系大学学生20名に実施。方法は聞き手が治療的技法群と非治療的技法群に分けて実施した。質問票はPOMSで「気分の状態」を6尺度で測定治療的技法を用いた群は、非治療的技法を持ちいた群に比較して、D（抑うつ－落込み）、A-H（怒り－敵意）、F（疲労）、C（混乱）の得点は有意に下がり、V（活気）の得点は逆に有意に上昇した（p<0.05）。受容的態度をとる治療的コミュニケーション技術は、話し手の内容を聞き手が認めることを意味する。聞き手にとり自分の話す内容を話し手が受けとめてくれることは自分を理解してくれているという気も落ちが生じ心に快の状態を作り出すと考えられる。 （文献収集、データ入力、データ分析、考察およびスライド作成の一部を担当した。） 共著者：上野栄一，松浦純平.
35.テキストマイニングによる術後せん妄アセスメントツールのニーズに関する自由記述の分析	―	平成24年11月	第32回日本看護科学学会学術集会講演集 p288.2012.	本研究の目的は、臨床看護師が考える術後せん妄アセスメントツールのニーズに関する自由記述内容をテキストマイニング手法から明らかにすることである。対象は全国の19病院の外科病棟に勤務する看護師725人。データ分析方法は記述内容を形態素解析，記述統計，コロケーション解析，クラスター分析，共起ネットワーク分類した。分析対象は、自由記述回答数51部。記述統計結果の頻出名詞は、せん妄、術後、アセスメントツール、使用、発見、対応、判断、必要、早期発見であった。アセスメントツールの前後文脈の意味内容を読み取る解析から「活用したい」「便利である」「リスク管理としても効果的」「術前から使用可能」などの文脈を得た。クラスター分析では「発症の早期発見」「予防」「臨床での活用」など5個のクラスターを抽出し共起ネットワーク分類から「予防効果」「リスクアセスメント」など7カテゴリーに分類された。 （本研究の代表者として、中心となり研究に取り組んだ。） 共著者：松浦純平，一ノ山隆司，上野栄一.
36.テキストマイニング分析について	―	平成25年1月	第6回Project AKI全国集会p2.2013.	大阪府内に勤務する臨床看護師を対象にした研修会にて新しい研究手法であるテキストマイニング法について事例に基づき説明した。具体的には、日本看護研究学会で口演発表したスライドを使用し具体的なポイントを示しながら実施した。結果、参加者から具体的な質問が出て本研究手法の興味の高さが明らかになった。 （本研究の代表者として研究に取り組んだ。）著者：松浦純平.

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
37.スピリチュアルケアに関する研究の動向	―	平成25年1月	日本がん看護学会誌 27（1），p269.2013.	本研究の目的はテキストマイニングを用いてスピリチュアルケアに関する国内文献の研究タイトルの分析からスピリチュアルケアに関する研究の動向と今後の示唆を明らかにすることである.調査対象は検索結果から抽出した457文献の研究タイトルとした.分析方法は形態素解析，記述統計とコロケーション解析を行った.結果,457文献の研究タイトルを形態素解析した結果，総抽出語数は4250語，2226種類であった．高頻度に出現した単語に着目した結果，スピリチュアルケア（42）看護（18）がん（10）ターミナル（6）看護（5）などが抽出された.スピリチュアルケアの精神面に関する研究が多い結果であった．スピリチュアルケアの単語に注目し，先行と後続文脈（前後文脈）を抽出するため，コロケーション解析した結果，スピリチュアルケアを対象にした研修の研究,スピリチュアルケアの実践に関する研究が実施されていた．本研究結果から今後，スピリチュアルケアのための研修内容の充実を図りその後の評価を検証していく必要性が示唆された. （逐語録作成、データ分析、考察の一部、スライド作成の一部を担当した。） 共著者：上野栄一，長光代，松浦純平.
38.テキストマイニングを用いたせん妄とメラトニンに関する研究の分析	―	平成25年8月	第39回日本看護研究学会学術集会抄録集,p267.2013.	本研究目的はせん妄とメラトニンに関する英語文献の研究タイトルの分析から研究の動向と今後のせん妄看護への示唆を明らかにすることである.PubMedを使用しDelirium,Melatoninのキーワードとした.対象は検索結果から抽出した42文献の研究タイトルである.分析方法は研究タイトルをKH Coderを使用し形態素解析,記述統計,コロケーション解析を行った．結果,せん妄とメラトニンに関する研究は，1969年の1件から2004年の2件で増加傾向であった.42文献の研究タイトルを形態素解析した結果，総抽出語数は870語，226種類であった．高頻度に出現した単語はDelirium（22）Melatonin（18）Postoperative（10）Patients（10）Sleep（6）など.Melatoninの単語に注目しMelatoninの先行，および後続文脈を抽出するためコロケーション解析した結果術前，術後におけるメラトニン分泌量の研究，サーカディアンリズムとメラトニン分泌量に関する研究が実施されていた周手術期におけるMelatoninの使用についてサーカディアンリズムとMelatonin分泌についての研究やMelatoninの分泌を促すことで患者を落ち着かせることができたなどの文脈が得られた. （本研究の代表者として、中心となり研究に取り組んだ。） 共著者：松浦純平，一ノ山隆司，吉岡一実.

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
39.NANDA-Ⅰ看護診断における「急性混乱」の変遷およびその特徴について	―	平成26年7月	第20回日本看護診断学会学術大会抄録集,p112-113.2014.	本研究の目的は、NANDA-Iの急性混乱の定義および診断指標・関連因子の各項目の記載内容を分析することでせん妄の早期発見につながる観察の視点やケアへの示唆を得ることである。対象はNANDA-Ⅰ看護診断名の急性混乱とした。対象期間は1997-1998から2012-2014までとし、年度区分別に定義・診断指標・関連因子の各項目についてまとめた。結果、急性混乱の定義の変遷は、1997-1998から2012-2014までの間に3回変更されていた。1回目は1997-1998の「障害のクラスターの突然の発生」から1999-2000には「障害がひとかたまりになった」へ変更された。2回目は2005-2006の「注意，認知，精神運動性活動，意識レベル，そして／または睡眠／覚醒周期の包括的で一過性の変化および障害がひとかたまりになった突然の発生」から2007-2008「短時間で発達する，意識・注意・認知および知覚の可逆的な混乱の突然の発生」へ変更された。3回目は2009-2011「短時間で発達する，意識・注意・認知および知覚の可逆的な混乱の突然の発生」から2012-2014「短時間に進行する，可逆的な障害が意識・注意・認知・知覚に突然発症した状態」へ変更された。本研究では、看護診断を使用する看護師が共通認識の元で使用しやすいように定期的に見直しされており年々完成度が高まっていることが明らかになった。 （本研究の代表者として、中心となり研究に取り組んだ。） 共著者：松浦純平，上野栄一.
40.Text miningを用いたディスコース分析	―	平成26年8月	第40回日本看護研究学会学術集会抄録集,p118.2014.	テキストマイニング手法の紹介をした。本研究の目的は，うつ病患者へのカウンセリング場面の会話分析からうつ病患者へのカウンセラーの援助の特徴を明らかにすることである．研究対象はカウンセリング対象であるうつ病患者へのカウンセリングを実施したカウンセラーの発語．方法はカウンセラーのカウンセリング時の会話内容を録音し録音内容から逐語録を作成した．分析は計量テキスト分析ソフト「KH Coder」を使用した．具体的方法は記述統計，共起関係ネットワーク分類，コロケーション解析を実施した．結果はカウンセラーの発語総数は520種類，2,583語であった．カウンセリング中に高頻度に発語されていた単語に着目した結果，「うん」（50），「そう」（43），などが抽出された．関連の強い語同士を視覚的に表した共起関係ネットワーク分類の結果，会話中にカウンセラーは「うん」，「そう」，「ああ」という特徴的な相槌を多用していた．カウンセラーが話した「思う」という動詞についてコロケーション解析を実施した結果，ポジティブな発言内容は「心配ないと思う」，「それだけでも十分だと思う」，「そういう能力は落ちてないと思う」など10回中6回であった．ネガティブな発言内容は「いらないと思います」の10回中1回であった． （本研究の代表者として研究に取り組んだ。） 共著者：松浦純平，川野雅資.

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
41.テキストマイニングを用いたうつ病患者へのカウンセリング場面の会話分析	―	平成26年8月	第40回日本看護研究学会学術集会抄録集,p302.2014.	本研究の目的は，うつ病患者へのカウンセリング場面の会話分析からうつ病患者へのカウンセラーの援助の特徴を明らかにすることである. 研究対象はカウンセリング対象であるうつ病患者へのカウンセリングを実施したカウンセラーの発語．方法はカウンセラーのカウンセリング時の会話内容を録音し録音内容から逐語録を作成した．分析は計量テキスト分析ソフト「KH Coder」を使用した．具体的方法は記述統計，共起関係ネットワーク分類，コロケーション解析を実施した．結果はカウンセラーの発語総数は520種類，2,583語であった．カウンセリング中に高頻度に発語されていた単語に着目した結果，「うん」（50），「そう」（43），などが抽出された．関連の強い語同士を視覚的に表した共起関係ネットワーク分類の結果，会話中にカウンセラーは「うん」，「そう」，「ああ」という特徴的な相槌を多用していた．カウンセラーが話した「思う」という動詞についてコロケーション解析を実施した結果，ポジティブな発言内容は「心配ないと思う」，「それだけでも十分だと思う」，「そういう能力は落ちてないと思う」など10回中6回であった．ネガティブな発言内容は「いらないと思います」の10回中1回であった. （本研究の代表者として、中心となり研究に取り組んだ。） 共著者：松浦純平，川野雅資，上野栄一.
42.テキストマイニングによる休職した看護師の復職に対する支援の実際	―	平成26年8月	第40回日本看護研究学会学術集会抄録集,p303.2014.	メンタルヘルス不調によって休職した病院看護師の復職支援に関する実際を明らかにすることを目的とした．研究対象はA圏内の200床以上の総合病院102施設の看護管理とした. データ収集方法は質問紙調査票の自由記載項目である「看護師のメンタルヘルス不調者の復職において，どのような援助を行っているのか」に記述された内容である．データ分析方法は記述内容をKH Codeを使用して，形態素解析後，共起関係ネットワーク分析を実施した．記載内容を形態素解析した結果，総抽出語数は3,168語，675種類に分類された．共起関係ネットワーク分析の結果，[復職，本人，プログラム，支援，業務，職場]，[看護，勤務，調整]，[体制，サポート，休職，姿勢、相談，面談]，[専門，面接，必要，メンタル，不調]の語句の結びつきなどが明らかになった。そして，「職場復職支援プログラム」，「面談・相談」，「勤務調整」，「専門職によるフォロー」の4因子に分類された. （本研究の代表者として、中心となり研究に取り組んだ。） 共著者：松浦純平，一ノ山隆司，大津聡美，遠藤加奈子.

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
43.メンタルヘルス不調によって休職した看護師への復職支援	―	平成26年8月	第40回日本看護研究学会学術集会抄録集,p328.2014.	本研究の目的はメンタルヘルス不調によって休職した看護師の復職に関して看護管理者がどのような援助を行なっているのかを明らかにすることである.研究対象は某地方の精神科病院を除く200床以上の総合病院350病院とし，全体的に看護職員のことを把握している看護部長および管理職とした．データ収集方法は質問紙調査票の一部の自由記載文であり，「看護職のメンタルヘルス不調による休職後の復職に関してどのような援助を実施しているのか」についてである．データ分析方法は回答が得られた102件の記述内容をKH Codeにて分析した．記述内容を形態素解析した結果，総抽出語数は3,168語，675種類に分類された．高頻度に出現した単語に着目し記述統計を実施した結果，頻出順に「復職」(27)，「サポート体制」(25)，「本人」(23)，「休職」(19)，「プログラム」(16)，「メンタルヘルス」(16)等が抽出された．階層的クラスター分析では，5つのクラスターに分類され，看護管理者の復職支援に対する傾向が明らかになった。 （逐語録作成、データ分析、考察の一部、スライド作成の一部を担当した。） 共著者：一ノ山隆司，松浦純平，大津聡美，遠藤加奈子.
44.テキストマイニングを用いたうつ病患者へのカウンセリング場面におけるカウンセラーの会話分析	―	平成26年12月	第3回ディスコース分析研究会抄録集,p28.2014.	本研究の目的は，うつ病患者へのカウンセリング場面の会話分析からうつ病患者へのカウンセラーの援助の特徴を明らかにすることである．対象はカウンセリング対象であるうつ病患者へのカウンセリングを実施したカウンセラーの発語。方法はカウンセラーのカウンセリング時の会話内容を録音し録音内容から逐語録を作成した．分析は計量テキスト分析ソフト「KH Coder」を使用した．具体的方法は記述統計，共起関係ネットワーク分類，コロケーション解析を実施した．結果カウンセラーの発語総数は520種類，2,583語であった．「思う」という動詞についてコロケーション解析を実施した結果，ポジティブな発言内容は「心配ないと思う」，「それだけでも十分だと思う」，「そういう能力は落ちてないと思う」など10回中6回であった．ネガティブな発言内容は「いらないと思います」の10回中1回であった．本研究の結果よりうつ病患者へのカウンセラーの援助の特徴として以下の2点が明らかになった。1点目はカウンセラーのカウンセリング時のコミュニケーション技法としては効果的な相槌を打っていた．2点目は意図的にクライエントへポジティブな発言を投げ掛けることで承認をしていた. （本研究の代表者として、中心となり研究に取り組んだ。） 共著者：松浦純平,上野栄一,川野雅資.

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
45.看護政策に関わる研究の動向について	―	平成27年2月	第28回日本看護研究学会近畿・北陸地方会学術集会プログラム・抄録集,P21.2015.	本研究の目的は、過去の看護政策に関連する文献を分析し、その特徴を明らかにすることである。医学中央雑誌（Web版）にてキーワードとして看護政策も含む「医療政策」（1976～2014）（原著論文）とし検索した1030件の研究タイトルを対象とした。抽出された研究タイトル名を抽出し、テキストマイニングStudioにて、単語頻度分析、係り受け分析、共起分析、対応バブル分析をした。解析文章は、延べ単語数6593件であった。1)単語解析では、頻度順に、日本80、研究66、現状62、検討61と続いた。係り受け頻度解析では、頻度順に18年度-診療報酬改定12、診療報酬改定-影響7と続いた。共起分析では、影響と診療報酬、「介護政策」「医療」が「実証的検証」と連動していた。「医療政策」と「転機」、「日本」と「米国」、「日本食品標準成分表」などが連動していた。対応バブル分析では、「医療政策、診療報酬改定、食事栄養基準」と「取り組む」、「検討」、「展望」の４つに分類された。 （データ分析、考察、スライド作成の一部を担当した。） 共著者：上野栄一，成瀬早苗，増田安代，松浦純平，内田真紀，山本勝也.
46.テキストマイニングを用いた看護診断に関する研究の分析	―	平成27年7月	第21回日本看護診断学会学術大会抄録集，p102-103.2015.	本研究目的は，国内における看護診断に関する研究についてどのような視点で取り組まれているのかを明らかにすることである。検索データベース医学中央雑誌Web版Ver.5を使用し，遡及期間は1976年以前から2015年とした。対象は看護論文，原著論文のみとした。検索キーワードは「看護診断」とした。検索結果から抽出した1,022文献の研究タイトルを対象とした。分析方法は研究タイトルを計量テキスト分析ソフトKH Coderを使用し，形態素解析，記述統計，出現パターンの類似性を解析する目的にて，階層的クラスター分析と共起関係ネットワーク分類を実施した。1,022文献の研究タイトルを形態素解析した結果，高頻度に出現した単語とし看護診断（792），看護（724），患者（280），などが抽出された。階層的クラスター分析の結果，「標準計画ケア」，「看護診断」，「実習における看護診断」，「アセスメントの診断パターン」，「実態調査」の5つのクラスターに分類された。 （本研究の代表者として、中心となり研究に取り組んだ。） 共著者：松浦純平,上野栄一.

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
47.テキストマイニングによる「先制医療」の視点からみたせん妄発症予防の実際	―	平成27年8月	第41回日本看護研究学会学術集会抄録集,p239.2015.	本研究目的は，先制医療に基づいたせん妄に関する国内文献の研究タイトルを分析することで研究の動向と今後のせん妄看護への示唆を明らかにすることである.調査方法医学中央雑誌Web版Ver.5を使用し，原著論文を対象にした．キーワードは「先制医療」，「せん妄」とした．調査対象は検索結果から抽出した196文献の研究タイトル．分析方法は研究タイトルを計量テキスト分析ソフトKH Coderを使用し，形態素解析，記述統計，コロケーション解析，階層的クラスター分析，共起関係ネットワーク分類にて分析した．結果，196文献の研究タイトルを形態素解析した結果，総抽出語数は3682語，648種類であった．記述統計の結果，高頻度に出現した単語として，予防（90），看護（86），検討（32），要因（27）などが抽出された．「ケア」と「取り組み」の単語に注目してコロケーション解析を行った結果，「ケア」については24編中9編が予防ケアに特化した関わりであった．「取り組み」については18編中10編が予防に関する取り組みであった．階層的クラスター分析の結果，6つのグループに分類された. （本研究の代表者として、中心となり研究に取り組んだ。） 共著者:松浦純平,足日和美,中上昌代,上野栄一.
48.テキストマイニングによる日本国内における災害時の透析看護に関する研究の動向と課題	―	平成28年11月	第35回 日本看護科学学会学術集会講演集,p521.2015.	本研究の目的は，先制医療に基づいた災害時の日本における透析看護に関する研究の動向と課題を明らかにすることである．対象は75文献とした．75文献を計量テキスト分析ソフトKH Coderを使用し，形態素解析，記述統計，コロケーション解析，階層的クラスター分析，共起関係ネットワーク分類にて分析した．結果「透析患者の災害発生時の具体的対策」，「災害発生時の対策に関する意識調査」の2つのカテゴリーに分類された. （文献収集、テキストマイニングでの分析、考察およびスライド作成の一部を担当した。） 共著者：足日和美,松浦純平.
49.世界における嗅覚障害看護の現状と展望　ーテキストマイニングによる定量的分析ー	―	平成28年12月	第36回日本看護科学学会学術集会プログラム集,p91.2016.	世界における嗅覚障害に関する看護論文の分析より本研究の目的は,嗅覚障害看護の現状と展望を明らかにすることである.対象は検索データベースPubMed。を使用し,キーワード検索はNursing, Olfactory Dysfunctionとした.調査対象は看護分野以外の論文11編を除いた25編とした.領域別分類では，老年15編，小児4編，母性3編，精神2編，成人1編であった。研究者の国別では，U.S.A 6編，JAPAN 4編，ITALY 3編，FRANCE 2編，AUSTRALIA 2編，CANADA 2編であった.テキストマイニングにて形態素解析の結果，総抽出語数1,449語，404種類,平均出現回数1.76回，標準偏差3.54であった.高頻度出現した単語は，Disease〈7〉，Older〈6〉，Parkinson〈6〉，Factors〈4〉などであった．疾患別ではパーキンソン病が5編と最多であった．語の関係性を可視化する共起関係ネットワーク分類の結果，Disease，Older，Factorsがキーワードとして抽出された．抽出語を類似した語句に分類したクラスター解析の結果，4クラスターに分類された．看護の視点での介入についてはケアリングの観点に基づく看護に関する研究が1編であった.このことから今後は，有効的かつ具体的な看護援助に関する研究に取り組む必要性がある. （本研究の代表者として、中心となり研究に取り組んだ。） 共著者：松浦純平,上野栄一.

教育研究業績書

平成 29年 3月 31日

氏名　井上　葉子

研究分野	研究内容のキーワード
看護学	公衆衛生看護学、生活援助、難病

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例		
1）演習「ロールプレイ」による基礎看護技術トレーニング	平成23年4月 ～ 平成24年8月	学校法人青丹学園関西学研医療福祉学院看護学科の専門科目「基礎看護技術演習Ⅰ」（1年次配当、1単位、40人クラス）において実践した。看護技術は人間関係の成立が第１要件であるといっても過言ではない。このことをふまえて、基礎看護技術演習Ⅰでは、簡単な事例を設定して、ロールプレイの演習を取り入れ、コミュニケーション技術および日常生活援助を中心とする看護技術の習得に努めた。
2）看護研究の指導	平成23年4月 ～ 平成24年8月	探求心をもって研究に取り組み自己研鑽に努めることは専門職業人として必要なことである。このことをふまえ、学校法人青丹学園関西学研医療福祉学院看護学科３年生が取り組んだ、実習で担当した患者についてのケーススタディの指導を担当した。学生は研究目的・方法の設定、データの収集・分析の一連の過程を体験し、研究的態度および論理的思考についての学習を深めることができた。
3）演習「ロールプレイ」による基礎看護技術トレーニング	平成23年4月 ～ 平成24年8月	学校法人青丹学園関西学研医療福祉学院看護学科の専門科目「基礎看護技術演習Ⅱ」（1年次配当、1単位、40人クラス）において実践した。看護技術は人間関係の成立が第１要件であるといっても過言ではない。このことをふまえて、基礎看護技術演習Ⅰでは、簡単な事例を設定して、ロールプレイの演習を取り入れ、コミュニケーション技術および診療の補助に関する援助を中心とする看護技術の習得に努めた。
2　作成した教科書，教材		
1）住まい学習のデジタル教材「おかあさん　お家の中でもご用心！！―赤ちゃんとの暮らしの中に潜む危険―」	平成23年1月	保健指導の教材の見本として、乳幼児の家庭内での窒息、転落、熱傷、誤飲などの事故防止を保護者に啓発するための教材として、絵本のデジタル教材を作成した。
2）「平成23年度基礎看護学実習Ⅰ実習要項」	平成23年5月	学校法人青丹学園関西学研医療福祉学院看護学科の専門科目「基礎看護学実習Ⅰ」（２年次配当）で、学生が実習目的、実習目標に到達するための具体的な学習内容と方法、記録の書き方、実習心得などについてまとめた冊子を作成した。
3）「平成23年度基礎看護学実習Ⅱ実習要項」	平成23年10月	学校法人青丹学園関西学研医療福祉学院看護学科の専門科目「基礎看護学実習Ⅱ」（２年次配当）で学生が実習目的、実習目標に到達するための具体的な学習内容と方法、記録の書き方、実習心得などについてまとめた冊子を作成した。

4) 「平成24年度基礎看護学実習Ⅰ実習要項」	平成24年5月	学校法人青丹学園関西学研医療福祉学院看護学科の専門科目「基礎看護学実習Ⅰ」（２年次配当）で、学生が実習目的、実習目標に到達するための具体的な学習内容と方法、記録の書き方、実習心得などについてまとめた冊子を作成した。
5) 「在宅看護論実習の手引き」	平成25年8月	宝塚大学看護学部の「在宅看護論実習」（３年次配当）において、学生が実習目的、実習目標に到達するための具体的な学習内容と方法、思考過程、記録をする際の留意点、実習心得などについてまとめた冊子を作成した。
３　教育上の能力に関する大学等の評価 特記事項なし		
４　実務の経験を有する者についての特記事項		
1) 基礎看護学の担当	平成23年4月 ～ 平成24年8月	学校法人青丹学園関西学研医療福祉学院看護学科の専門分野Ⅰの科目「基礎看護技術Ⅰ」（１年次配当、30時間）、「基礎看護技術Ⅱ」（１年次配当、10時間）、「基礎看護技術演習Ⅰ」（１年次配当、30時間）、「基礎看護技術Ⅲ」（１年次配当、10時間）、「基礎看護技術Ⅳ」（１年次配当、22時間）、「基礎看護技術演習Ⅱ」（１年次配当、22時間）を担当した。
2) 臨地実習の担当	平成23年4月 ～ 平成24年8月	学校法人青丹学園関西学研医療福祉学院看護学科での臨地実習のうち「基礎看護学実習Ⅰ」（２年次配当）、「基礎看護学実習Ⅱ」（２年次配当）を担当した。
3) 臨地実習の担当	平成25年4月 ～ 平成25年7月	宝塚大学での臨地実習の「地域看護学実習」（４年次配当）を担当し、保健所・保健センターにおける実習指導を担当した。
4) 臨地実習の担当	平成25年9月 ～ 平成25年12月	宝塚大学での臨地実習の「在宅看護実習」（３年次配当）を担当し、訪問看護ステーションにおける実習指導を担当した。
5) 地域看護学Ⅴの担当	平成25年10月 ～ 平成25年10月	宝塚大学看護学部での「地域看護学Ⅴ」（３年次配当）のうちの2時間を担当し、地域看護診断の演習を指導した。
6) 臨地実習の担当	平成25年12月 ～ 平成25年12月	白鳳女子短期大学総合人間学科看護学専攻での臨地実習「基礎看護学実習Ⅱ」（2年次配当、60時間）を担当し病院における実習指導を担当した。
7) 在宅看護論の担当	平成26年4月 ～ 平成27年3月	白鳳女子短期大学総合人間学科看護学専攻での統合分野の科目「在宅看護概論」（2年次配当、15時間）、「在宅看護論」（2年次配当、15時間）、「在宅看護論演習」（2年次配当、45時間）、「家族看護論」（2年次配当、45時間）、「在宅看護論実習」（3年次配当、60時間）を担当した。
8) 臨地実習の担当	平成26年6月 ～ 平成26年6月	白鳳女子短期大学総合人間学科看護学専攻での臨地実習「基礎看護学実習Ⅱ」（2年次配当、60時間）を担当し病院における実習指導を担当した。
9) 臨地実習の担当	平成26年12月 ～ 平成26年12月	白鳳女子短期大学総合人間学科看護学専攻での臨地実習「基礎看護学実習Ⅰ」（1年次配当、30時間）を担当し病院における実習指導を担当した。

10）地域看護学Ⅰ（地域活動）の担当	平成27年10月 ～ 平成28年3月	奈良学園大学保健医療学部看護学科での「公衆衛生看護学Ⅰ（地域活動）」（２年次配当）のうちの６時間を担当し、地域保健活動計画における保健師の役割、地域保健活動の目標と計画の策定、在宅看護のためのシステム・ケアマネジメント、人材管理、健康危機時の管理の内容について教授した。
11）公衆衛生看護学の担当	平成28年4月 ～ 平成29年3月	奈良学園大学保健医療学部看護学科での「公衆衛生看護学」「公衆衛生看護学Ⅰ（地域活動）」（２年次配当）のうちの６時間を担当し、地域保健活動計画における保健師の役割、地域保健活動の目標と計画の策定、在宅看護のためのシステム・ケアマネジメント、人材管理、健康危機時の管理の内容について教授した。
５　その他 特記事項なし		

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
１　資格，免許		
1）看護師免許	平成4年5月13日	（第757084号）
2）養護教諭一種免許	平成6年3月31日	（平５養１第2033号）
3）保健師免許	平成6年5月19日	（第75175号）
4）第一種衛生管理者免許	平成6年8月10日	（第29000056651号）
5）受胎調節実地指導員免許取得	平成8年2月24日	（第448号）
２　特許等 特記事項なし		
３　実務の経験を有する者についての特記事項		
１）シリンクス株式会社　非常勤看護師	平成20年4月 ～ 平成20年5月	国際電気通信基礎技術研究所において行われていた看護師の業務に関する調査研究のデータ収集・分析作業に従事した。
２）奈良県　医療政策部　保健予防課　母子・保健対策係　石綿ばく露健康リスク調査担当　非常勤保健師	平成24年10月 ～ 平成25年6月	環境省からの委託で行っている奈良県内の住民に対する石綿ばく露健康リスク調査担当の非常勤保健師として従事し、問診から結果通知、データ管理などの一連の業務を担った。問診では生後から現在までの数十年におよぶ住環境、生活状況、石綿ばく露の状況を本人より聴き取る必要がある。そのため、年代ごとの写真やイラストを用いた媒体を作成し過去の状況を思い起こせるように工夫をし問診を行った。また石綿の製品、石綿ばく露の危険がある状況について写真やイラストを用いた媒体を作成し石綿ばく露健康リスク調査の意義や目的について住民の方に理解していただけるように努めた。
３）奈良県難病相談支援センター　難病専門相談員（非常勤保健師）	平成27年4月 ～ 平成28年3月	奈良県難病相談支援センターの難病相談専門員として、難病患者・家族等の療養生活上の相談業務に従事した。特に、難病患者の就労支援のための相談体制づくりとして、就労相談票の作成、相談内容のデータベースのフォーマット作成、ハローワークの難病患者就職サポーターとの定期的な打ち合わせを行った。また、難病専門医による医療相談の実施、難病患者患者会活動への支援、難病に関する講演会の企画や準備、難病相談支援センターの広報誌の作成にも関わった。さらに、全国難病センター研究会に出席し、奈良県難病相談センターの現状を伝えると共に、他府県の先進的な取り組みについて情報収集し、担当者同士のつながりを作ることに努めた。

4　その他 特記事項なし		

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
（著書）				
（学術論文） 1.生活経験からみた看護専門学校学生の看護技術力に関する研究	共著	平成26年３月	大阪教育大学家政学研究会「生活文化研究」	著者名：井上葉子・碓田智子 担当の箇所については、共同研究につき抽出は不可能。 ３年課程の看護専門学校４校の１年生147名 第51巻，P.33～P.41
２．在宅看護論における生活経験の重要性を再認識するための授業実践 ―ワークショップを用いた教育プログラムの検討	単著	平成27年２月	白鳳女子短期大学研究紀要	短期大学看護学専攻学生２年生122名を対象に、生活経験を再認識するための講義とワークショップを組み合わせた授業実践を行い、学生の認識の変化と教育的効果について検討した。 第９巻，P.47～P.54
３．避難生活体験とポスターセッションを取り入れた学内演習の実践と評価　　―生活環境を主体的に理解することを目指した在宅看護論の授業展開―	共著	平成28年１月	大阪教育大学家政学研究会「生活文化研究」	著者名：関谷まり・井上葉子・碓田智子 担当の箇所については、共同研究につき抽出は不可能。 短期大学看護学専攻学生２年生122名を対象にした、在宅看護論の学内演習での避難生活環境の体験演習の学習効果と、体験演習の学習のまとめとしてポスターセッションを活用したことによる共同学習の効果と課題を検討した。 第53巻，P.57～P.67
４．訪問看護ステーション実習での看護計画立案による学習効果について ―実習目標の到達度の比較からの分析―	共著	平成28年４月	第46回日本看護学会論文集 看護教育	著者名：西村和子・田村和子・井上葉子・松村あゆみ・北畠昭弥・北出千春 ３年課程の看護専門学校３年生36名を対象に、訪問看護ステーション実習において、看護計画立案の有無によって学習効果に違いがあるかどうかを質問紙調査の結果から比較検討した。　P.23～P.26
（その他） 1.看護専門学校学生の生活経験からみた看護技術力に関する研究 ―療養上の世話に関する看護技術に着目して― （修士論文）	単著	平成25年１月	大阪教育大学大学院	３年課程の看護専門学校４校の１年生147名に生活経験に関する質問紙調査を実施しその傾向をまとめた。また、看護専門学校１校の１年生を対象に４つの基礎看護技術の習得状況と生活経験の程度についての関係性を検討した。さらに、３年課程の看護専門学校１年生を対象に、生活経験を補完するためのワークショップを用いた授業を試行し、その教育効果についても論じた。 A4判　全102頁
（学会発表） 1.地域看護学実習における学生の看護の視点の広がりに関する検討 ―在宅療養者の社会資源活用に関する学びを分析して―	単独	平成19年8月	第38回日本看護学会―看護教育― （於　千葉県千葉市）	4年制の統合カリキュラムの専門学校の3年次に行われる在宅看護実習での学生29名の記録を分析することにより、看護の視点を地域レベルで捉えるという実習の教育効果を検討した。 抄録集　P.46

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
２.看護学生の生活経験と看護技術力の対応関係	共同	平成24年9月	第43回日本看護学会―看護教育―（於　岩手県盛岡市）	３年課程の看護専門学校４校の１年生147名に生活経験に関する質問紙調査を実施し、１年で学習する４つの基礎看護技術の習得状況との関係性を検討した。 共同発表者：碓田智子 抄録集　P.36
３.基礎看護学実習におけるフィジカルアセスメント技術の活用の実態	共同	平成24年9月	第43回日本看護学会―看護教育―（於　岩手県盛岡市）	３年課程の看護専門学校４校の学生196名を対象に基礎看護学実習でのフィジカルアセスメント技術に関する質問紙調査を実施し、講義と実習との連動を強化した教育プログラムのあり方について検討した。 共同発表者：山﨑陸世・中川利子・田畑典子・中嶌雅子・丸野由美・村川まゆみ 抄録集　P.85
４.看護学生による災害看護演習の評価に関する考察　―避難生活の看護活動を考える演習について―	共同	平成27年8月	第17回日本災害看護学会（於　宮城県仙台市）	短期大学看護学専攻学生２年生122名を対象にした、在宅看護論における避難生活体験を題材とした演習の方法と学習効果についてを検討した。 共同発表者：関谷まり 抄録集　P.160
５.ポスターセッションを活用した在宅看護論演習の学習展開―「避難生活支援演習」の実践事例―	共同	平成27年8月	第46回日本看護学会―看護教育―（於　奈良県）	短期大学看護学専攻学生２年生122名を対象にした、在宅看護論の学内演習での避難生活環境の体験演習の学習効果と、体験演習の学習のまとめとしてポスターセッションを活用したことの効果と課題を検討した。 共同発表者：関谷まり 抄録集　P.107
６.訪問看護ステーション実習での看護計画立案による学習効果について―実習目標の到達度の比較からの分析―	共同	平成27年8月	第47回日本看護学会―看護教育―（於　奈良県）	３年課程の看護専門学校３年生36名を対象に、訪問看護ステーション実習において、看護計画立案の有無によって学習効果に違いがあるかどうかを質問紙調査の結果から比較検討した。　共同発表者：西村和子・松村あゆみ・田村和子・北畠昭弥・北出千春　抄録集　P.85
７．看護基礎教育における難病患者の就労支援に関する教員の認識	共同	平成28年10月	第75回日本公衆衛生学会総会（於　大阪府）	看護専門学校教員129名を対象にした質問紙調査から、難病患者の就労支援についての認識を明らかにし、難病患者の就労支援を教育に取り入れる上での課題について検討した。 共同発表者：西村和子　松村あゆみ　内田勇人 抄録集　P.539
８.看護基礎教育における難病看護に関する教育の実態	共同	平成28年12月	第37回奈良県公衆衛生学会（於　奈良県）	看護専門学校教員129名を対象にした質問紙調査から、難病患者の就労支援についての教育の実情を明らかにし、難病患者の就労支援を教育に取り入れる上での課題について検討した。 共同発表者：西村和子　松村あゆみ　奥西志穂　早味妙　駒井由美子 抄録集　P.7

教　育　研　究　業　績　書

平成　29年　3月　31日

氏名　　岡　　居久代

研究分野	研究内容のキーワード
看護学　社会医学　社会学	生涯発達看護学　地域看護学　社会学　衛生学　公衆衛生学

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例		
1）地域ボランティア活動の実践	平成20年4月～平成22年3月	白鳳女子短期大学看護学専攻科学生に対し精華町育児支援事業に月1回程度1年間を通し参加させ、教室の運営の準備、実施中の補助などを行った。毎回のレポートなどで学習成果を振り返り、支援を行う際の観察の視点、母子との関わりについて考える機会を与えた。年度末の学生のレポートでは、「講義のときにイメージがつきやすかった、赤ちゃんのあやし方がわかった」などの声が寄せられた。
2）学校祭での助産師学生による性教育、妊娠分娩教育の実践	平成22年10月	白鳳女子短期大学学校祭において助産学専攻学生に、他学部学生及び留学生、一般の方を対象に、学内演習で企画、演習した集団保健指導を実施した。実際の指導場面では留学生の母国の事情、若年学生の生の声などを指導の効果として学生個々に感じ取ることができ、教材の工夫、声のかけ方などの学習に繋げる事ができた。
3）学生に新生児蘇生法「1次」コース取得をカリキュラムに導入	平成23年1月	白鳳女子短期大学助産学専攻科において助産学専攻学生に新生児蘇生「一次」コース資格を得て卒業を迎えることができるようカリキュラムに導入した。助産師の技術には重要な事項であり、学生にも好評であった。
4）母と子を取り巻く環境について多角的な視点を養うためのディスカッションの導入	平成24年9月～平成25年月	学校法人青丹学園関西学研医療福祉学院看護学科の非常勤として担当の「母性看護学概論」（専門科目、1年次配当、半期必修1単位）において、母子を取り巻く環境、社会問題など個々が興味を持つテーマを選定しグループで関連する統計、歴史、法律、報道などの側面から調べた内容をプレゼンテーションし、その後ディスカッションを行った。母子の看護を行う上での対象理解の重要性に気付き学生の母子を取り巻く問題への視点が広がった、グループワークの重要性がわかったなど学習効果を学生が認識できた。
5）妊婦体験スーツを着用し模擬的な母親学級を受講する体験型学習の導入	平成20年7月～平成24年7月	白鳳女子短期大学看護学専攻科学生に対し、「母性看護学」（2年次配当、半期1単位）において対象理解のため妊娠体験スーツを着用しての模擬的な母親学級を実施し、妊婦体操、呼吸法、リラックス法、マッサージなどを体験学習した。受講する妊婦の気持ちを推察し、妊娠中にどのような動き、運動が適切かなど実際に体感した。この講義は学生からも理解しやすいと好評で、青丹学園関西学研医療福祉学院看護学科及び国立病院機構京都医療センター附属京都看護助産学校看護師科の非常勤として担当の「母性看護学」の講義にも導入し学生の理解力向上につながっている。
6）パワーポイントを利用した分娩に関する理解を促す教育技術の工夫	平成20年7月～平成24年7月	白鳳女子短期大学看護学専攻科学生に対し、「母性看護学」（2年次配当、半期1単位）において分娩開始徴候及び分娩機転理解のためパワーポイントの教材を作成した。分娩開始時の身体の変化や子宮の様子を示し理解を促した。この教材は学生からも理解しやすいと好評で、青丹学園関西学研医療福祉学院看護学科及び国立病院機構京都医療センター附属京都看護助産学校看護師科の非常勤として担当の「母性看護学」の講義にも導入し学生の理解力向上につながっている。

事項	年月日	概　　要
７）実習でよく出会う事例を作成しイメージ化を図った学内技術演習の実践	平成20年7月～平成21年11月	白鳳女子短期大学看護学専攻科学生に対し、「母性看護学」（2年次配当、半期２単位）において実習で受け持つ可能性の高い事例を作成しより実践的な動きをイメージしやすい産褥期の観察に関する技術演習を行った。この演習を通し学生がより臨床の場で必要な学習課題を明確にすることができた。
８）卒業論文の指導	平成21年4月～平成23年2月	白鳳女子短期大学助産学専攻科において、2年間で10名の学生の卒業論文の指導を行い学位を持たない学生は学位授与機構に提出、合格まで関わった。
９）短期大学助産学専攻科におけるグループでの助産学研究の指導	平成22年4月～平成23年3月	白鳳女子短期大学助産学専攻科において、「自分なりの母乳育児を見出すための支援とは～産後2か月までの初産婦の思い～」をテーマに学生の関心のある母乳育児支援に関する質的調査を指導し、発表まで関わった。
10）実践的な事例を導入しての演習	平成21年4月～平成22年7月	白鳳女子短期大学助産学専攻科「助産診断技術学」において、実習場面において体験する事例を作成しより実践に近い形での演習とさらにその結果を提示しアセスメントから診断に至るまでの過程を一連の流れでシュミレーションできるよう指導した。この演習により実習に行く前に学生の特徴を把握し、個性を把握して実習での指導方法を工夫することができた。
11）幼少時に身内に看病された体験をケアに活かすディスカッションの導入	平成24年8月～平成25年3月	大阪キリスト教短期大学幼児教育専攻の非常勤として担当の「子どもの保健Ⅱ」（専門科目、２年次配当、半期毎必修２単位）において、言葉を巧みに表現できない子どものケアに大切なものは何かを、幼少時の体験から想起しディスカッションを行う中で「寄り添う」ことの重要性に気付き心理面のケアなど学生の理解度が向上した。
12）助産師学生の実習及び就職活動前のマナー講座の実施	平成22年4月～平成23年3月	白鳳女子短期大学助産学専攻科「助産診断技術学」において、助産師学生の実習及び就職活動前のマナー、コミュニケーションを修得す目的でマナー講義を講師を招いて学生に実施した。単にマナーだけにならないよう学生の遭遇する場面設定を工夫し講師とともに必要な点を作り上げた。
２　作成した教科書，教材		
１）「母性看護学学内技術手引書」	平成19年4月	白鳳女子短期大学看護学専攻科において学内での母性看護技術の向上と学生間の自己学習を促すため母性看護学教員で作成し冊子として学生に配布した。
２）母性看護学の「模擬カルテ」の作成	平成20年6月	白鳳女子短期大学総合人間学科看護学専攻科において母性看護学実習の母性看護学看護過程への導入のため模擬事例及び模擬カルテを作成し学生の情報収集能力を支援した。
３）妊娠期分娩期産褥期新生児期の学習ポイントまとめ冊子の作成	平成16年6月～平成23年3月	京都中央看護専門学校において学生が理解しやすいように妊娠分娩産褥新生児各期の学習ポイントをまとめ実習時に活用し整理できるまとめ冊子を作成した。この資料は、白鳳女子短期大学看護学専攻、助産学専攻でも改良を加えながら利用。実習、国家試験対策などにも継続して活用し、助産学生の復習にも利用することができた。
４）パワーポイント教材の作成	平成19年4月～平成24年2月	白鳳女子短期大学看護学専攻において母性看護学（2年次配当、半期２単位）の講義の中で必要な解剖生理、性周期、妊娠経過などの理解を促すためにパワーポイントを作成し視覚的な面を補う教材作成を試みた。この教材は理解を促すのにイメージが付きやすいと学生から好評で、学校法人青丹学園関西学研医療福祉学院看護学科や独立行政法人国立病院機構京都医療センター附属京都看護助産学校看護師科でも妊娠経過への導入として改良し活用できており好評である。

事項	年月日	概　　要
５）助産学実習実習要項の作成	平成21年4月～ 平成22年12月	白鳳女子短期大学専攻科助産学専攻科において助産学実習の導入のため実習目標から全体の実習概要を作成し学生が実習時に行動できるよう支援した。また、実習時の事故対応、連絡網等安全対策、倫理要綱なども検討を行い学生に指導した。
３　教育上の能力に関する大学等の評価		
１）大阪キリスト教短期大学「子どもの保健Ⅱ」の学生の講義評価	平成24年8月～ 平成25年3月	大阪キリスト教短期大学幼児教育専攻の非常勤として担当の「子どもの保健Ⅱ」（専門科目、２年次配当、半期必修科目において学生の評価は5段階の平均4.5であり、全体の平均を全て上回っておりわかりやすかったと好評であった。
４　実務の経験を有する者についての特記事項		
1）NPO精華育児支援事業サポーター講座	平成20年8月	NPO法人、精華育児支援事業主催の、育児支援を実施する人が受講する講習会。産前産後のサポート、産後女性の心身の変化に関して講義をした。
2）精華町役場における地域保健実習の受け入れ	平成20年8月	京都橘大学看護学部学生4名の地域保健実習において京都府相楽郡精華町の子育て支援事業の見学と、現場での立ち位置観察方法アセスメントなどの指導を行った。
3）精華町民生児童委員研修会「今の母の状況・育児事情」	平成22年5月	京都府相楽郡精華町の民生児童委員の研修会。現代の母の状況と育児支援の実態、民生児童委員の役割の再構築を目的に民生委員が家庭訪問を実施するに当たり配慮するべき注意点などを講演した。
4）大和郡山市学科指導教室「ASU」講師	平成23年7月	市内小・中学校に在籍する不登校児童生徒に向け「命の学習」というテーマで特別講義を行った。
5）精華町子育てパートナー養成講座講師	平成23年7月	京都府相楽郡精華町の子育て支援を実施するボランティア養成講座。現代の母の状況と育児支援の実態配慮するべき注意点などを講演した。
6）精華町役場子育て支援事業における実習生の受け入れ	平成24年8月～ 平成24年12月	畿央大学助産学専攻学生2グループ4名の実習生を受け入れ、パパママ教室などの事業に参加させ現場での指導を行った。
7）同志社女子大学現代社会学部現代子ども学科笠間ゼミナール研究協力	平成19年10月～ 平成24年3月	同志社女子大学現代社会学部現代子ども学科笠間ゼミナール学生の卒業グループ研究として実施している妊娠出産に関するガイドブック作成に当たり、特別講義、および情報の提供を行い、冊子作成に協力した。
8）精華町児童育成課主催事業「お孫さんと楽しく」講師	平成24年10月	京都府相楽郡精華町の児童育成課主催事業として精華町在住の幼い孫のいらっしゃる祖父母を対象に講演会を行った。
５　その他		
１）看護師国家試験対策委員	平成20年4月～ 平成23年2月	白鳳女子短期大学の看護師・助産師国家試験対策において、実習と関連させた学習指導、練習問題の作成、受験手続、学生指導など国家試験に関連すること全てを担当した。
２）助産学専攻科カリキュラム改正	平成21年5月～ 平成21年7月	白鳳女子短期大学の助産学専攻科の学生数増加に伴い、カリキュラム改正を行い主な担当者として全てに関わった。
３）研究紀要編集委員	平成20年4月～ 平成23年3月	白鳳女子短期大学において2年間研究紀要編集委員として紀要作成すべての業務に関わった。

事項	年月日	概　　要
４）白鳳女子短期大学総合人間学科看護学専攻における教育実績	平成19年4月～平成21年3月	白鳳女子短期大学総合人間学科看護学専攻科の専任教員として（平成19年4月から平成20年3月まで講師、平成20年4月から平成21年3月まで准教授）として以下のような科目を担当した。 「母性看護学概論」（専門科目1年次配当、必修、半期１単位）母性を取り巻く環境や母性看護に必要な解剖生理など基本的な母性の授業を行った。 「母性看護学方法論」（専門科目2年次配当、必修、通年2単位）妊娠分娩産褥新生児期の内容の授業を行い学生が実習に行く前の母性看護の基本となる知識、技術を理解させる教育効果があった。 「母性看護学実習」（必修、3年次配当、通年、3単位）臨床の場での母性看護実践をサポートしながら学生を指導した。実践に即した学習は学生の応用力を身につける効果があり、状況をイメージする効果があった。 「基礎看護学実習Ⅱ」（必修２年次配当3週間）看護の基本的実践となる実習への指導を行った。 「地域ボランティア活動」（選択科目、半期、1年次配当、1単位）学生の自主性を育成し、地域への実践活動を体験する機会として講義と実践活動を行った。
５）白鳳女子短期大学専攻科助産学専攻における教育実績	平成21年4月～平成23年3月	白鳳女子短期大学専攻科助産学専攻科の専任教員（平成20年4月から平成23年3月まで准教授）として以下のような科目を担当した。 「助産学概論」（必修、半期、1単位）助産師とは、助産の歴史、母子保健、助産師の社会的役割などの授業を行い、助産師に必要な要件などを考えさせた。 「助産診断技術学」（必修、半期、1単位）助産師に必要な具体的技術について授業し技術伝達を行った。 「地域母子保健」（必修、半期、1単位）地域での助産師活動について授業を行い助産師の地域での役割を学習させた。 「助産学実習」（必修、半期、５単位）分娩介助、助産診断などの臨床展開を行った。 「助産学研究」（必修、半期、1単位）助産学研究に関する講義と論文指導を行った。
６）白鳳女子短期大学総合人間学科幼児保育専攻における教育実績	平成20年4月～平成22年3月	保育士養成課程必修科目である「小児栄養」（保育士専門科目、2年次配当、半期、必修1単位）を担当し母乳栄養や離乳食、小児の栄養に関する講義を行った。それにより学生の栄養、小児の栄養、健康と食への意識が向上した。
７）白鳳女子短期大学総合人間学科国際人間学専攻における教育実績	平成20年4月～平成22年3月	留学生のクラスの選択科目として位置づけられた「母親学」を担当した。（選択科目、半期、１単位）各国の妊娠出産育児事情や子どもを取り巻く環境、世界の母子保健の課題などをグローバルな視点で学べるよう講義した。
８）畿央大学専攻科助産学専攻科における教育実績	平成24年4月～平成26年3月	畿央大学専攻科助産学専攻科において非常勤講師として次の授業を行った。 「乳幼児の成長発達」（必修、半期、1単位）助産師に必要な乳幼児の知識と保健指導について授業を行った。これにより学生のアセスメント能力向上に役立った。「フィジカルアセスメント」（必修半期1単位）助産診断に必要なフィジカルアセスメントの基本的知識を授業した。これによりフィジカルアセスメントの具体的方法を学生が身につけた。 「助産診断技術学」（必修、半期、1単位）分娩介助に必要な介助技術演習と授業を行った。実習前の分娩介助の方法を身につけさせた。 「助産学実習Ⅱ」（必修、半期、1単位）臨床の場で学生の分娩技術、診断能力向上に努めた。 「助産学実習Ⅲ」（必修、半期、1単位）地域での助産師の役割を理解させるため育児支援の事業に参加させ学習指導を行った。

事項	年月日	概　　要
9）大阪キリスト教短期大学幼児教育学部における教育実績	平成24年4月～平成26年3月	大阪キリスト教短期大学幼児教育学部において非常勤講師として保育士養成課程必修科目である「子どもの保健Ⅱ」（保育士専門科目、2年次配当、半期、必修1単位）において子どもの健康管理、疾病予防などの内容の授業を担当し子どもの発達、諸計測、清潔、健康管理等に関する演習を行った。それにより学生の子どもの健康管理や疾病予防、応急処置などを理解させる効果があった。

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　　要
1　資格，免許		
1）看護師免許	昭和62年6月	（第６０８８４３号）
2）助産師免許	平成3年6月	（第９５４９９号）
2　特許等		
特記事項なし		
3　実務の経験を有する者についての特記事項		
1）地域創造～第五号～　おおさか地域創造ファンド事例集　地域支援事業平成23年度採択事業	平成23年8月	大阪中央地域活性化推進協議会（事務局：大阪商工会議所）の、「大阪中央地域活性化プラン」に技術や人材、歴史・伝統など大阪市内の地域資源を活用し、地域内の中小企業などに広く波及効果を与える新しい事業を助成するものとして募集「おおさか地域創造ファンド中央地域支援事業」の応募者４０組から5組が選ばれマタニティガーデンが採択された。このことにより育児支援を中小企業者との連携が可能となり異業種での取り組みを実施。
2）助産院「マタニティガーデン」の開設	平成23年9月～現在に至る	大阪市中央区に出産を扱わない妊娠期から産後1年間の育児サポートを中心とした助産院を開設。大学院の修士論文を基に妊娠中の妊婦のための教室や産後1年間の赤ちゃんを育てる時のコツなどを伝える活動をしている。この活動は毎日放送、毎日新聞、産経新聞、ラジオなどで紹介され評価を得た。
3）就職後の助産師研修会の実施	平成23年9月～現在に至る	マタニティガーデンにおいて就職後のスキルをアップさせ、施設間を超えて学ぶ場所として提供。東洋医学、幼児の発達、メディアリテラシー、産婦人科医師との協働等をテーマにシリーズで学習会を開催した。
4）助産師の職業上の個別相談事業の展開	平成23年9月～現在に至る	マタニティガーデンにおいて援助職者の離職、バーンアウトを防ぐ目的で助産師をサポートするための個別相談事業を実施した。病院での働き方、助産師としての自立、研修を目的にした働き方などのバリエーションをその人の生活にあう形で考えるきっかけとした。
4　その他		
大学運営に関わる委員会活動等の実績		
（白鳳女子短期大学における委員履歴）		
(1)看護師国家試験対策委員	平成20年4月～平成21年3月	国家試験合格に向けた学生指導などを行った。
(2)教務委員	平成20年4月～平成23年3月	期間中カリキュラム改正を行い主な担当者として全てに関わった。
(3)研究紀要編集委員	平成21年4月～平成23年3月	紀要作成すべての業務に関わった。

事項	年月日	概　　要
（奈良学園大学における委員履歴）		
(4)スポーツ振興委員会委員	平成26年4月～ 平成28年3月	学生のクラブ活動などを通し学生の支援を行った。
(5)ハラスメント相談員（至）	平成26年4月～ 平成28年3月	教員間、学生教員間など学内のハラスメントを防止するための相談業務を行った。
(6)社会連携センター委員	平成27年4月～ 現在に至る	地域貢献、企業との連携など学外に向け社会連携に関する業務を行った。
(7)人権教育推進委員	平成27年4月～ 現在に至る	

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
１．著書				
1. 心とからだを育む―子どもの保健Ⅱ―（演習）	共著	平成25年3月	保育出版社〔p24-25〕	保育士養成の必修科目である子どもの保健Ⅱ（演習）の教科書。B5版　本文106頁　編者：高内正子　共著者：梶美保，上山和子，工藤恭子，堀順子，岡いくよ　他 本人担当は2章3節周産期の子どもの健康と母親の健康を執筆。出生直後の母子の健康と病態、胎外への適応の過程と病態などについてまとめ、学習のために必要な課題、教材を提案した。
２．学術論文				
1. 周産期育児支援プログラムの開発研究～妊娠期から乳児期までを視野に入れて～［修士論文］	単著	平成20年3月	大阪人間科学大学	周産期の各時期の不安、関心、興味のある内容を調査し、育児支援の現状を社会的、母親側、行政、歴史などの視点から考察。妊娠期から乳児の育児期間を継続して支援するためのプログラムの提案を行った。 A4判全65頁。
2. 助産師学生の志望動機と目指す助産師像～本学助産師教育における課題～（査読付）	単著	平成21年12月	白鳳女子短期大学紀要第4巻2009〔p15-23〕	助産師学生に、入学するまでのプロセスを振り返ってもらい、志望動機、目指す助産師像などを学習のプロセスとともに調査した。
3. 乳児を育てる母親の育児支援ニーズ～現代の乳児を育てる母の希望する育児支援と不安の現状～（査読付）	単著	平成22年12月	白鳳女子短期大学紀要第5巻2010〔p35-42〕	妊婦のつどいや乳児を育てる母のつどいの調査。現代の母が望む育児支援などを整理し、これからの育児支援に必要な要素を検討した。
4. 「子どもの保健演習」における実践力形成の一考察～感性豊かなケアを育むために～	単著	平成24年12月	大阪キリスト教短期大学紀要第52集2012〔p93-100〕	妊婦のつどいや乳児を育てる母のつどいの調査。現代の母が望む育児支援などを整理し、これからの育児支援に必要な要素を検討した。
5. 周産期育児支援の研究（第1報）妊娠・出産・育児期の切れ目ない支援の実践	単著	平成26年9月	奈良学園大学紀要第1集〔p3-10〕	妊娠期、出産期、授乳期の継続した育児支援実践を調査した。周産期を切れ目なく支えることや同じ立場の人と出会う機会の重要性についてまとめた。
6. 近年の出産動向～出産環境研究の潮流を中心に～	単著	平成27年3月	奈良学園大学紀要第2集〔p27-41〕	現在の周産期の問題がどのような歴史過程で生じ、各分野で調査、研究がなされてきたのか現在への応用可能性の検討を文献検討で試みた。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
7. 乳児の発達について～日常生活の関わりの中から～	単著	平成27年3月	奈良教育大学附属幼稚園研究紀要〔p56-69〕	奈良教育大学附属幼稚園での気になる幼児について、乳幼児期からの関わりがどのように影響するのかについて、「入園前のからだ力」に関する園児保護者の調査と共に資料として執筆。出産前後の女性のサポートを中心に約20年地域活動を行い、近年の母と子の現状を乳児の発達を中心に、気になる点について実践の立場で報告した。
8. 母と子の暮らしからみた出産―妊娠出産はどのように語られてきたか―（査読付）	単著	平成28年3月	KG社会学批評第5号〔p25-37〕	松岡悦子「妊娠と出産の人類学―リプロダクションを問い直す―」を生活者の視点から捉え直した。現代の妊娠、出産、育児期の女性に必要な支援とは何かについて言及。
３．学会発表				
〔国際学会〕				
1. The Roles of Supporters During Perinatal Period ~Practical report of classes for pregnant women and babies（周産期における支援者の役割　～妊婦及び乳児クラスの実践報告～）	―	平成26年9月	The7th International Conference of Health Behavioral Science（London,United,Kingdom）（第7回保健医療行動科学会世界会議）	The aim of this study was to examine the role of supporters during the perinatal period and the necessary elements for parenting support in Japan（本研究の目的は、周産期におけるサポーターの役割と日本における子育て支援に必要な要素を検討することにある。）
〔国内学会〕				
1. 周産期における継続した育児支援	―	平成20年9月	第55回日本小児保健学会（札幌）	これまでの地域活動から周産期を通じての時期特有の相談内容を整理し、これからの支援のあり方について考察し、発表を行った。
2. 子宮収縮薬（分娩誘発・促進剤）使用時のインフォームドコンセントの問題点	―	平成26年11月	第33回医学哲学倫理学会（東京）	妊産婦及び家族の立場で子宮収縮薬使用時にインフォームドコンセントを受ける場合の問題点と必要な支援について検討し報告した。
3. 周産期における切れ目ない育児支援～マタニティガーデンの実践報告～	―	平成27年3月	第5回日本助産学会（東京）	妊婦及び乳児とその母親に、参加体験型学習によるクラスを実施した。参加修了後の利用者アンケートからの分析と今後の支援のあり方を考察し報告した。
4. 妊娠出産育児の連続性～周産期の生と死に向き合う出産介助者のナラティブ～	―	平成27年6月	第30回日本保健医療行動科学会（京都）	80歳を超えた現在も現役で出産介助にあたるひとりの高齢助産師の出産介助の本質を探るための分析を試み報告した。
5. 周産期における開かれた対話―妊産婦および乳児のつどいの実践から―	―	平成28年6月	第31回日本保健医療行動科学会（北海道）	現代社会において周産期にある母と子はどのような問題を抱えるのか、妊産婦がどのように感じているのかを妊産婦および乳児のつどいの実践を通して分析。周産期とはどのような時期であるのか。その問題をどのように越えていけばよいのかを検討し報告した。
6. 誕生をめぐる生命観の変容―高齢助産師の語りから―	―	平成28年9月	2016（平成28）年度日本生活文化史学会（神奈川）	出産の医療化が浸透することにより生じた、人びとの「誕生」をめぐる生命観がどのように変容したのかを、戦前、戦後を生きてきた助産師の語りを通して報告した。
7. 妊産婦の抱える周産期の課題	―	平成28年10月	第89回日本社会学（福岡）	周産期にある人々とそれらをめぐる現状を通して、妊産婦の抱える周産期の課題を明らかにすることを目的に調査し、報告した。
8. 周産期の開かれた対話―ナラティヴ・コミュニケーションの可能性―	―	平成29年3月	第7回日本助産学会（徳島）	妊産婦の抱える不安の根底に潜むものを追求し、母と子の生活にとってさまざまな人との対話がいかに重要な意味を持つのか、また開かれた対話とはどのようなものであるのかについて考察し報告した。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
４．その他				
1　美しい振る舞いでブラッシュアップ「プロフェッショナル助産師のマナー」	―	平成24年1月～12月	メディカ出版,ペリネイタルケア通巻400号,第31巻,1号～通巻413号,第31巻,12号	助産師として基本となる一般マナーから現場で起こりがちなメディカルマナーに至るまでをまとめたもの。助産師にとっての医療者のマナーとは何かを検討した。 共著者：岡いくよ　古賀敦子（本人部分抽出不可能）
2．クローズアップ　母と子、そして家族の支援の場所「マタニティガーデン」をオープンしました	―	平成24年2月	医学書院,助産雑誌第66巻第２号〔p154-159〕	これまでの経験、活動から助産師のできる育児支援、助産師同士のキャリアコミュニケーションとは何かを考え、活動実践を報告としてまとめた。
3．お産はだいじな通過点（特集 育むよろこび）	―	平成24年5月	福音館書店,月刊母の友5月号,708，p19-26	新しいいのちを迎える時、親となるとはどういうことなのかを現代の出産などの状況を通して考え、子どもの各時期に向き合い子育ての奥の深さを考える特集に寄稿。
4．季刊家計経済研究「特集祖父母」巻頭対談	―	平成25年1月	家計経済研究 No97,Winter,p2-11	家計経済研究所の季刊誌の祖父母特集に「今日の育児と祖父母」をテーマに桜美林大学大学院老年学研究科客員教授の直井道子先生と対談し祖父母の置かれている現状や育児支援、育児の現状などについて対談したものをまとめ巻頭ページに特集された。 共著者：直井道子、岡いくよ（本人部分抽出不可能）
5．母の友リレーエッセイ	―	平成25年4月～6月	福音館書店,月刊母の友,719～721，p35（2013,4～6）	福岡伸一、俵万智の次の著者として3か月間の短期連載エッセイ。初めて母となった時の思いと現実とのギャップに悩んでいた時の気持ちをエッセイにまとめた。
6．お母さんのココロとカラダをゆるめる周産期の育児支援 マタニティガーデンにようこそ！（第1回）母乳を直接吸ってもらえずに退院し,おっぱいも硬く授乳が苦痛で,どうしていいのか分からないというお母さんがやってきた	―	平成26年1月	ペリネイタルケア通巻428号第33巻1号〔p82-86〕	妊婦さんやお母さんから普段の関わりで受ける相談の中でよくある相談例を集め助産師向けにアドバイスの方法や母を丁寧に支援するための方法をまとめた。
7．お母さんのココロとカラダをゆるめる周産期の育児支援 マタニティガーデンにようこそ！（第2回）人見知りで,人付き合いの苦手そうな妊婦さんがマタニティクラスにやってきた	―	平成26年2月	ペリネイタルケア通巻430号第33巻2号〔p192-196〕	妊婦さんから聞かれる相談の中で最近になって見られる妊婦さんの傾向を交えどのように支援し、人をつなげていくのかについてまとめた。
8．お母さんのココロとカラダをゆるめる周産期の育児支援 マタニティガーデンにようこそ！（第3回）赤ちゃんに泣かれてへとへとなお母さんがやってきた	―	平成26年3月	ペリネイタルケア通巻431号第33巻3号〔p288-292〕	赤ちゃんがなぜ泣いているのかがわからずに、泣くと不安になりどうしていいのかがわからない母親に助産師として追い詰めることなく、気持ちが軽くなる支援について提案した。
9．お母さんのココロとカラダをゆるめる周産期の育児支援 マタニティガーデンにようこそ！（第4回）「妊娠したけれど,体の変化が分からないのでどうすればよいのか分からない」という妊婦さんがやってきた	―	平成26年4月	ペリネイタルケア通巻432号第33巻4号〔p398-402〕	妊娠中に自分のからだの反応が異常か正常かどうかもわからずに、心配なことが何であるかをうまく表現できないため漠然とした気がかりの中日々の生活を送る妊婦さんに向けてアドバイスするコツについてまとめた。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
10. お母さんのココロとカラダをゆるめる周産期の育児支援 マタニティガーデンにようこそ！（第5回）「母乳,母乳と言われて嫌になりそう」というお母さんがやってきた	—	平成26年5月	ペリネイタルケア通巻433号第33巻5号〔p498-502〕	助産師の指導する母乳指導が精神的負担となり、普段の生活の中で子どもと向き合っていたら、良いとわかっていてもどうしていいかわからずにすべてを投げ出してしまいそうに悩む母親への支援について考えた。
11. お母さんのココロとカラダをゆるめる周産期の育児支援 マタニティガーデンにようこそ！（第6回）二度と子どもは産まないと決めていたのに,妊娠することになったお母さんがやってきた	—	平成26年6月	ペリネイタルケア通巻434号第33巻6号〔p610-614〕	ひとりめの育児の辛さが忘れられずに、二度と出産したくなかったのに妊娠することになった妊婦に対し、対話を通し妊娠期間をかけて支援し、最後には前を向くことのできた事例の実践を報告した。
12. お母さんのココロとカラダをゆるめる周産期の育児支援 マタニティガーデンにようこそ！（第7回）「赤ちゃんを下ろすと泣くのでずっと抱っこしているけど,抱き癖が付くと言われる.腹ばいも嫌がるのでできない」というお母さんがやってきた	—	平成26年7月	ペリネイタルケア通巻436号第33巻7号〔p710-714〕	乳児の扱いになれない母親から聞かれる質問をまとめどのように支援していくのかを順を追って説明し、乳児期の発育を促す関わりについてまとめた。
13. お母さんのココロとカラダをゆるめる周産期の育児支援 マタニティガーデンにようこそ！（第8回）実家に帰って来いと言われるけど,実母との関係に悩む妊婦さんがやってきた	—	平成26年8月	ペリネイタルケア通巻437号第33巻8号〔p841-845〕	親子の葛藤を引きずりながら出産することになった事例に対し、どのようにその気持ちに向き合っていくのかをまとめた。
14. お母さんのココロとカラダをゆるめる周産期の育児支援 マタニティガーデンにようこそ！（第9回）離乳食を食べてくれないことを心配するお母さんがやってきた	—	平成26年9月	ペリネイタルケア通巻438号第33巻9号〔p951-955〕	乳児期の離乳食の進め方でよく聞かれる心配、母乳との関連など生活リズムの見直しの提案と発育を促す関わりなどを含め実際の事例に具体的にアドバイスする方法を提案した。
15. お母さんのココロとカラダをゆるめる周産期の育児支援 マタニティガーデンにようこそ！（第10回）「お産が怖くて仕方がない」というお母さんがやってきた	—	平成26年10月	ペリネイタルケア通巻439号第33巻10号〔p1045-1049〕	お産の恐怖を訴える女性の増加と、その気持ちを受け入れながらどのように出産に向き合っていくのかを成功事例を交えながら紹介。相手の気持ちをうまく引き出しながら支援する方法について紹介した。
16. お母さんのココロとカラダをゆるめる周産期の育児支援 マタニティガーデンにようこそ！（第11回）あまりハイハイしないでつかまり立ちを始めた赤ちゃんが心配なお母さんがやってきた	—	平成26年11月	ペリネイタルケア通巻440号第33巻11号〔p1158-1162〕	発達の心配な母親に対し、他の母親との交流を促しながら心配なことに着目するのではなくできること、今後の遊びの中での関わりなどを交えながら支援の方法を解説した。
17. お母さんのココロとカラダをゆるめる周産期の育児支援 マタニティガーデンにようこそ！（第12回）上の子の対応が心配なお母さんがやってきた	—	平成26年12月	ペリネイタルケア通巻441号第33巻12号〔p1250-1254〕	2人の子どもを育てていくときにはじめによく聞かれる質問についてまとめて解説した。まずは訴えを注意深く聞き、指示命令にならない働きかけを心がける中で母親が自分で解決できるように関わるコツをまとめた。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
18．お母さんのココロとカラダをゆるめる周産期の育児支援 マタニティガーデンにようこそ！（第13回）子どものしつけについて悩むお母さんがやってきた	―	平成27年1月	ペリネイタルケア通巻442号第34巻1号〔p90-94〕	子どもとの関わりの中で、赤ちゃんだと思っていたのにうまく関われない中で、怒った方がいいのか、怒らない方がいいのかどうしていいのか悩む相談に対し、どのように働きかけていくのかのヒントをまとめた。
19．お母さんのココロとカラダをゆるめる周産期の育児支援 マタニティガーデンにようこそ！（第14回）「おっぱいをどうやってやめるの?」というお母さんがやってきた	―	平成27年2月	ペリネイタルケア通巻444号第34巻2号〔p219-223〕	卒乳や断乳と言われる中で、自分の子どもとどのように関わりながら授乳を終了していくのかを、人それぞれの方法を提案するためのコツを紹介した。
20．お母さんのココロとカラダをゆるめる周産期の育児支援 マタニティガーデンにようこそ！（最終回・第15回）「私はちゃんとお母さんになれるのでしょうか?」と心配する妊婦さんがやってきた	―	平成27年3月	ペリネイタルケア通巻445号第34巻3号〔p296-300〕	妊娠がわかり自分が母親になっていくのだと知った時に本当に大丈夫なのか不安になった妊婦さんにその気持ちに寄り添いながら関わりの中で前を向いていけるような支援の方法についてまとめた。
21．お産の「怖い」「痛い」をムリなく克服プロジェクト	―	平成27年3月	ベネッセコーポレーション,たまごクラブ3月号, ｐ38-51	出産を恐怖に感じる妊婦さんに向けて普段からできるメンタル、フィジカルトレーニングを考えまとめたもの。 共著者：岡いくよ、坂本フジエ、早川友香、浦野晴美（本人部分抽出不可能）
22．「ばあばヘルプ」のマナー	―	平成27年10月	ジャパンマシニスト社,ちいさい・おおきい・よわい・つよいNO.108, ｐ76-81	祖父母に育児のサポートを上手に頼るためのマナーについて母親の立場、祖父母の立場からどうしていけばいいのかをまとめ提案した。
23　82歳の現役助産師―開業50年目を迎える助産院―	―	平成29年3月	KG社会学批評第6号〔p69-72〕	関西学院大学社会学研究科・先端研紀要の特集「行く・読む・感じる」記事。自分のフィールドワークとインタビュイーについてまとめた。

教　育　研　究　業　績　書

平成29年 3月31日

氏名　丸上　輝剛

研究分野	研究研究のキーワード
基礎看護学、看護情報学	基礎看護、看護情報、地域、在宅、ICT、電子カルテ、携帯端末、音声入力

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例		
近大姫路大学にて講義	平成20年11月～ 平成22年11月	「看護情報論」15コマのうち、2コマを受け持った。新入学生に対し、看護情報学の概要、ICTが医療にもたらす意義、地域包括ケアシステム構築につながる実際に運用されている千葉県柏市医療・介護多職種連携情報共有システムの紹介を行った。またさらに、自身が構築したシステムデモンストレーション行うことで、講義への関心を高めたことが講義後のアンケートでうかがえた。
関西医療大学　常勤 助教	平成27年4月 ～ 平成28年3月	「講義」 東洋医療の基礎・導入教育 看護過程論 卒業研究 □講義概要 東洋医療の基礎・導入教育 新入生5名の担任となり、東洋医学の基礎、授業ノートのとり方や、レポートの書き方、プレゼンテーションのテクニックなど大学入学直後の１年生の基礎的な学習スキルを導入教育としてグループワーク形式にて教授した。 看護過程論 グループワーク形式の講義15コマのうち15コマで、6グループを担当し、事例に基づいた看護過程の展開について教授した。 卒業研究 4年生の4名を担当し、テーマ、文献検討、研究計画書の作成について指導した。 「講義・演習」 情報科学 フィジカルアセスメント 基礎看護技術論Ⅰ 基礎看護技術論Ⅱ 基礎看護技術論Ⅲ 臨床技術実践論 □講義・演習概要 情報科学 15のうち15コマを担当した。看護情報学の概論および情報リテラシーについて講義を行った。情報リテラシーについては、Microsoft Word/Excel/PowerPointの操作説明を演習形式で行った。とくに、Excelの操作では関数の使い方の演習を行った。 フィジカルアセスメント 15コマのうち15コマの演習で8グループを担当し、全身のアセスメント（ 全身の概観、皮膚等）、頭部～頸部のアセスメント（感覚機能、頸動脈・頸静脈、リンパ節）、胸部のアセスメント（肺、心臓、乳房）、腹部のアセスメント（肝臓、脾臓、胃腸）、 筋・骨関節のアセスメント、神経系のアセスメントについて教授した。 基礎看護技術演習Ⅰ 15コマのうち15コマの演習で8グループを担当し、安全を守る技術、コミュニケーション技術、療養環境を整える技術について教授した。

		基礎看護技術演習Ⅱ 15コマのうち15コマの演習で8グループを担当し、日常生活援助技術について教授した。 基礎看護技術演習Ⅲ 15コマのうち15コマの演習で8グループを担当し、導尿、吸引などの診療補助業務技術について教授した。 臨床技術実践論 15コマのうち15コマの演習で8グループを担当し、臨床で必要とされる看護技術の中でも侵襲的な技術である注射、点滴、採血の技術について教授した。 「実習」 総合看護学実習 基礎看護学実習Ⅰ 基礎看護学実習Ⅱ 領域実習（成人慢性期） □実習概要 総合看護学実習 4年生4名を担当した。グループのテーマは、新人看護師教育であった。院内における新人教育に着目し実習を行う学生に対してテーマに沿った実習が行えるよう指導した。また、実習内容を論文抄録形式でまとめ、ポスター発表を行うための指導も行った。 基礎看護学実習Ⅰ 2クールで4グループを担当した。療養環境を理解するための指導を行った。 基礎看護学実習Ⅱ 2クールで4グループを担当した。看護過程を展開し、患者の全体像を理解するための指導を行った。 領域実習（成人慢性期） 2クールで4グループを担当した。成人慢性期における患者の看護について理解するための指導を行った。
奈良学園大学　常勤　助教	平成28年4月 ～	「講義」 卒業研究Ⅱ □講義概要 卒業研究Ⅱ 統合実習を踏まえテーマし、研究指導を行う。 「講義・演習」 早期体験演習 基礎看護技術演習Ⅰ 基礎看護技術演習Ⅱ 基礎看護技術演習Ⅲ 看護過程演習 □講義・演習概要 早期体験演習 4グループ4病棟を担当している。実習前には病院の組織構造を理解するための演習を分担し、自分の体験や行動を言語化して表現できるよう指導している。また、手洗いの実践では講義と演習を担当し、実習前の準備を整える。 基礎看護技術演習Ⅰ 安全を守る技術Ⅰ、安全安楽を提供する技術-活動と休息-を担当し講義と演習を行なっている。看護技術の本質や修得する過程を理解し、看護を学ぶ者において共通するコミュニケーション技術、感染を予防する技術、環境を調整する技術、バイタルサインを観察する技術など、看護技術に共通する基本的な援助技術に関する知識、技術、態度について教授している。

		基礎看護技術演習Ⅱ 安全を守る技術Ⅱを担当し講義と演習を行っている。人間の健康レベルの低下に伴い、自立した日常生活が困難となった人々に対する日常生活の援助技術（清潔への援助、活動・運動への援助、食生活への援助、排泄の援助など）について教授している。 基礎看護技術演習Ⅲ 酸素化を促す技術を担当し講義と演習を行っている。演習を通して、その実践力を高めるための指導を行っている。 看護過程演習 電子カルテの構築、事例作成、グループワークでの指導を担当している。看護実践に至る科学的な思考、構成要素、看護過程の６つのステップである、情報収集・分析・診断・計画・実施・評価の概念を用いて、事例を通して具体的に教授している。 「実習」 基礎看護学実習Ⅰ 基礎看護学実習Ⅱ □実習概要 基礎看護学実習Ⅰ 4グループ4病棟を担当している。看護の対象となる人々の生活の場としての療養環境を理解できるよう指導を行っている。 基礎看護学実習Ⅱ 2グループ2病棟を担当している。受け持った対象者の看護問題を解決する思考プロセスの展開と看護実践能力を習得できるよう指導を行っている。
高等学校での授業	平成28年10月	明浄学院高等学校にて、看護大学進学を希望する生徒に対して、看護師の仕事や看護師になるために必要なことを講義した。パワーポイントによる講義だけではなく、実際の看護師が働く姿を映像を用いて紹介し、ディスカッションを行った。
奈良学園大学	平成28年12月	衆衛生看護学方法論Ⅰ　地域システム　講義 地域包括ケアシステムに関する講義の後であったため、とくに地域医療連携について、ソーシャルキャピタルを高めるICT活用の概要および実例紹介を新谷教授指導のもと行った。
２　作成した教科書，教材		
なし		
３　教育上の能力に関する大学等の評価		
なし		
４　実務の経験を有する者についての特記事項		
５　その他		

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1　資格，免許		
保健師免許取得	平成17年10月28日	第一三三七四七一号
看護師免許取得	平成17年10月28日	第一三一二六二号
関西医療大学　実習要綱委員	平成27年4月～ 平成28年4月	要綱の改定、作成・印刷
奈良学園大学　学生生活部会委員	平成28年4月～	学生生活支援全般
奈良学園大学　情報センター運営委員	平成28年4月～	学内通信インフラ整備に関する業務
奈良学園大学　卒業研究ワーキンググループ委員	平成28年4月～	卒業研究展開の構築
奈良学園大学　新入生宿泊研修　引率・指導	平成28年4月～	宿泊研修の引率・指導 地域を理解するため、学生と奈良市内を散策し、地域を診る視点を教授した。
奈良学園大学　保護者懇談会	平成28年～	保護者懇談会の企画・運営、親子面談実施
2　特許等		
なし		
3　実務の経験を有する者についての特記事項		
限界集落における高齢者の生活とその支援	平成27年9月	関西医療大学 岩井教授の指導のもと、三重県坂手島での健診に、保健師として参加した。身体測定、前頭葉機能検査、採血、健康相談を行った。
企業における健康管理業務	平成28年10月～	株式会社神戸デジタル・ラボ従業員の健康診断後の指導に関わる。食事、運動、メンタル全般の指導を行い、現在も継続して健康管理に携わっている。
3歳児健診の場で行う健康教育	平成28年12月	沖縄県金城町での健康教育 保健所職員とともに3歳児健診事業に保健師として参加。健診の場において、児と保護者（主に母親）に手洗いの予防的重要性を再確認させること、正しい手洗い知識の確認をすることで、児と家族の冬の感染症予防と拡大防止につなげた。
ソーシャルキャピタル実践のためのマネジメント	平成28年12月	職員50名程度を有する広島県小規模多機能型居宅介護施設”もえぎ”で、総合支援事業において、感情労働者のストレスマネジメント研修を行った。
4　その他		
研究補助金 （科研：挑戦的萌芽研究） がんを患う地域住民に向けたセルフマネジメント支援モデルの実証的研究 研究代表者：北得美佐子　研究分担者：丸上輝剛　宇田賀津　石野レイ子	平成27年4月～ 平成27年3月	4,160千円 3年間のプロジェクトにより、熊取町に住むがん患者のセルフマネジメントモデルの開発を行うことを目的とする。

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
（著書）				
１．医用機器へのICタグの応用例 (<特集>ICタグと医療環境) ※雑誌の特集記事	共著	平成20年4月	情報処理,Volume 48, Issue 4, pp,354-358	ICタグの応用は、これまでの応用事例は主として物流関係に限られており、医療・福祉分野における安全性向上に対して実用化された応用事例はきわめて少ない。ICタグの医療・福祉分野での安全に対する応用可能性と、特に医用機器に対するそれについて概観するとともに医用機器の管理に対するICタグ応用に関してその概要を紹介した。 丸上輝剛，松田淳子，進藤亜紀子，谷昇子，中尾寿成，吉田靖，稲田紘 分担：pp,354-356担当
（学位論文）				
和文				
１．ICタグの応用による医療機器安全管理システムの開発	共著	平成19年11月	医療情報学，Volume 26, Issue 4, pp 247-256	ICタグを使用し、医療機器の保守点検管理やアリバイ管理などを支援するシステムの構築を試みた。本システムでは、医療機関での無線LANの使用など利用環境を考慮し、金属対応可能な13.56MHz帯のタグを使用し、機器の一元管理が可能となる巣ステムを設計した。共同研究を実施している医療機関において小規模システムを構築し、信号読み取りの信頼性なども含めた実証実験を試みた結果、システムの有用性が窺われた。 松田淳子，進藤亜紀子，谷昇子，丸上輝剛,藤丸賢一,川上清和，中尾寿成，宮本正喜，堀尾裕幸，稲田紘 分担：分担：システムプログラミング、システム検証
２．RFIDタグと標準化された電子化マニュアルを用いた医療機器安全管理システムの構築	共著	平成21年3月	医工学治療 , Volume 21, Issue 1, pp 15-22	看護師のヒューマンエラーを軽減することで、患者がさらされる危険を回避するため、RFIDタグなどの情報技術を応用し、医療機器の安全管理を支援し、さらに機器の安全使用に重要な使用マニュアル情報の取得を容易化するシステムの構築を試みた。 情報技術を応用した医療機器に関する安全システムの開発は、これまでバーコードを用いたものは見られるが、RFIDタグを用いたものやマニュアル情報参照機能を有するものはなく、本研究が内外とも初めての試みである。 本システムでは、所在確認と安全管理に関する情報の収集だけにとどまらず、情報発信の機能も付加したマニュアル情報参照システムとを組み合わせ、医療機器の安全使用を目指し、さらなる医療安全を向上させようとした。 松田淳子，進藤亜紀子，丸上輝剛，谷昇子，吉田靖，宮本正喜，堀尾裕幸，稲田紘 分担：システム構築
３．わが国の電子カルテシステムの導入状況に関する調査結果の分析	共著	平成21年9月	医療情報学，Volume 28, Issue 4, pp 225-233	政府は2006年までに、全国の400床以上の病院と全診療所の6割以上に電子カルテシステムを普及させることを目標として掲げた。しかし、電子カルテ導入の現状は、400床以上の大規模病院を中心に進んでいるが、いまだ目標達成には至っていない。地域医療連携を進める上で、電子カルテの導入は必然である。そこで本研究では、電子カルテの導入状況について、大学病院など特定機能病院すべてと全国の病院からランダムに抽出した450施設を対象に、アンケート調査を実施し、導入が進まない原因を探ろうとした。 竹本敬子，進藤亜紀子，谷昇子，松田淳子，丸上輝剛，稲田紘 分担：データ入力、データ分析

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
４．地域住民の内臓脂肪症候群の予防をめざした保健指導支援システムの構築	共著	平成22年3月	総合健診，Volume 37, Issue 2, pp 35-42	本研究では、対象者の生活習慣情報を携帯端末であるPDAを用いて、対象者の生活習慣情報の収集・記録を行うとともに、これを医師など保健指導者のいる医療機関へ送信し、指導者からの指導情報の返送・表示が可能な「保健指導支援システム」を構築し、内臓脂肪症候群予防のためのツールとして役立てようとした。対象者はPDAにより、バイタルサインなどの生体情報のほか運動や食品摂取など生活習慣に関する情報を自分で入力し、インターネットを介して医療機関に設置されたサーバへ送信し、指導者からの指導情報を受信することができる。結果、地域住民のQOL向上に寄与できることが明らかとなった。 谷昇子，丸上輝剛，松田淳子，進藤亜紀子，竹本敬子，岡村智教，稲田紘 分担：システム設計、システムプログラミング、質問紙作成
５．地域で生活する高齢者の災害時非難状況に関する文献検討	共著	平成29年2月	医療福祉情報行動科学誌，Vol.2　No.1 (2017) ,pp,1-6	世界各地で自然災害が増加している。このような状況にありながら近年,わが国の高齢化は加速しており,高齢者人口の割合は世界で最も高い。東日本大震災では死者のうち60歳以上の比率はおよそ6割であった。そこで、2006年から2016年までの文献を検討することで,高齢者の防災の実態を分析し、今後の課題を明らかにすることを目的とした。その結果、現在、国などの関係機関が防災対策に多く取り組んでおり、高齢者の防災意識も高い一方で、実際の防災行動が十分に取れていないといった不合理な結果が得られた。災害が続発する中、早急に対応を検討する必要があることが示唆された。 丸上 輝剛，新谷 奈苗，守本 とも子 分担：文献レビュー
英文				
６．Management of Medical Equipment for Prevention of Accidents - 13.56MHz RFID System	共著	平成19年	World Congress on Medical Physics and Biomedical Engineering 2007 Volume 14 of the series IFMBE Proceedings pp474-476	メンテナンスや点検のために医療機器を管理することは、医療事故防止のために重要かつ不可欠である。すなわち、装置の適切な管理は、安全性だけでなく、患者に対する正確な診断および治療を保証する。そこで今回、小型システムを構築し、実用性の確認実験を行った。その結果、本研究で開発したシステムは、医療機器の安全管理に有用であることが示唆された。今後さらに、RFIDの信号読み取りの安全性と信頼性を検討し、実用的なシステムを構築する必要がある。 Atsuko Matsuda, Shindo Akiko, Marukami Terutaka, Tani Shoko, Fujimaru Kenichi, Nakao Toshinari, Miyamoto Masaki, Horio Hiroyuki, Inada Hiroshi 分担：分担：システムプログラミング
７．Development of a health management support system for patients with diabetes mellitus at home	共著	平成22年6月	Journal of Medical Systems, Volume 34, Issue 3, pp 223-228	地域に住む糖尿病患者の生活の質向上のため、住民が自己管理をを容易にできるよう、携帯端末を用いた健康管理支援システムの開発を試み、有用性を評価した。その結果、ほとんどの被験者は、スマートフォンを操作する感覚で容易に、情報の入力と獲得ができると回答した。 Shoko Tani, Terutaka Marukami, Atsuko Matsuda, Akiko Shindo, Keiko Takemoto, Hiroshi Inada 分担：分担：システム設計、システムプログラミング

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
８．A Basic Study on Application of Voice Recognition Input to an Electronic Nursing Record System -Evaluation of the Function as an Input Interface-	共著	平成24年1月	Journal of Medical Systems, Volume 36, Issue 3, pp 1053-1058	電子看護記録システムに音声入力を応用するため、入力システムの構築と看護分野での音声入力の有用性の検証を行おうとした。このため、看護記録でも特に電子化率の高い患者基礎情報、経過記録（フォーカス記録）についてテンプレート化を試み、音声入力を可能とした。テンプレート化に基づき、独自に作成した標準看護用語のセット登録をすることにより、一部の診療所などで使用されているこれまでの音声入力型電子カルテでは困難であった情報の後処理・後利用の可能性を見出すことができた。登録した用語は入力時に別ウィンドウに一覧表示させ、目視した状態で選択的に入力可能として、音声入力の円滑化をはかると共ともに、表示用語以外は入力できないようにすることによって誤入力が0%となることに成功した。さらに情報の検索においてもこの入力方法を用いることにより、複雑な検索条件下でも容易かつ迅速に結果を得ることができた。今回、急変時や救急医療の現場で用いることを想定した経時記録を、音声入力可するためシステムを構築し、音声入力による画面操作を含め、その有用性を検討した。これらの有用性に関する検証実験の結果では、入力時間および操作時間の短縮と看護師の負担軽減が明らかとなった。 Terutaka Marukami, Shoko Tani, Atsuko Matsuda, Akiko Shindo, Hiroshi Inada 分担：分担：システム設計、システムプログラミング、質問紙作成
（学会発表）				
国際				
１．Construction of a safety management system for drug use by using an RFID tag.	—	平成19年	Stud. Health Technol. Inform.	看護師のヒューマンエラー防止と業務改善のための、RFIDタグを用いた薬剤管理システム開発に関する研究 Shindo A1, Matsuda A, Tani S, Marukami T, Fujimaru K, Yagi Y, Horio H, Inada H. 分担：システムプログラミング
２．Application of an RFID Tag to Medical Equipment Management Support - Construction of an Operation Manual System for Medical Equipment	—	平成19年8月	Medinfo 2007	看護師のヒューマンエラー防止と業務改善のための、RFIDタグを用いた医療機器安全管理システム開発に関する研究 Matsuda Atsuko1,Shindo Akiko, Marukami Terutaka, Tan, Shoko, Miyamoto Masaki, Horio Hiroyuki, Inada Hiroshi 分担：システムプログラミング
３．Construction of a specific health checkup and instruction support system - Focusing on health management support for patients with diabetes mellitus at home -	—	平成20年10月	23rd Biennial Conference of the IHEPA	地域住民の自己健康管理遠隔健康管理システム構築に関する研究 Shoko Tani, Terutaka Marukami, Atsuko Matsuda, Akiko Shido, Keiko Takemoto, Tomonori Okamura, Hiroshi Inada 分担：分担：システム設計、システムプログラミング
４．A Basic Study on application of voice recognition technology to an electronic Nursing record system	—	平成20年8月	Medinfo 2007	看護師の業務改善およびストレス軽減のための音声認識技術の電子看護記録システム構築に関する研究 Terutaka Marukami, Shoko Tani, Atsuko Matsuda, Akiko Shindo, Hiroshi Inada 分担：分担：システム設計、システムプログラミング、質問紙作成

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
国内				
５．電子看護記録の音声認識ソフトウェアによる入力の基礎的検討	―	平成19年4月	日本生体医工学会誌生体医工学，Volume 45	看護師の負担軽減と労働環境改善のための音声認識技術を応用した電子看護記録システム構築に関する研究 丸上輝剛，谷昇子，松田淳子，進藤亜紀子，　稲田紘 分担：システム設計、システムプログラミング、質問紙作成
６．医療機器安使用のためのPDA端末によるマニュアル情報の表示３７．	―	平成19年6月	日本医療情報学会看護学術大会論文集，Volume 8，pp 107-109	看護師のヒューマンエラー防止と業務改善のための、RFIDタグを用いた医療機器安全管理システム開発に関する研究 松田淳子，丸上輝剛，谷昇子，進藤亜紀子，竹本敬子，宮本正喜，　堀尾裕幸，　稲田紘 分担：システムプログラミング
７．わが国の電子カルテ導入状況についての分析　その目的およびメリットの検討	―	平成19年6月	日本医療情報学会看護学術大会論文集，　Volume 8，pp 87-88	地域医療連携システムの構築に向け、医療施設における電子カルテ導入状況を分析した基礎的研究 竹本敬子，谷昇子，松田淳子，丸上輝剛，稲田紘 分担：データ入力、データ分析
８．音声入力による電子看護記録システムの構築に関する基礎的研究 ： 経過記録としてのフォーカス・チャーティングにおける入力方式の検討	―	平成19年7月	看護情報研究会論文集，Volume 8，pp 61-64	看護師の負担軽減と労働環境改善のための音声認識技術を応用した電子看護記録システム構築に関する研究 丸上輝剛，竹本敬子，谷昇子，松田淳子，進藤亜紀子，　稲田紘 分担：システム設計、システムプログラミング、質問紙作成
９．音声入力の看護電子カルテへの応用	―	平成19年8月	日本生体医工学会誌生体医工学，Volume 47	看護師の負担軽減と労働環境改善のための音声認識技術を応用した電子看護記録システム構築に関する研究 丸上輝剛，竹本敬子，谷昇子，松田淳子，進藤亜紀子，　稲田紘 分担：システム設計、システムプログラミング、質問紙作成
１０．糖尿病患者管理支援システムの開発（第2報）	―	平成19年10月	Health　Sciences，Volume 23，Issue 4，　p 278	地域で生活する糖尿病患者に対する遠隔患者支援システムに関する研究 稲田紘，　谷昇子，丸上輝剛，　松田淳子，進藤亜紀子 分担：システムプログラミング
１１．安全管理のための医療機器に関する情報化について	―	平成19年11月	医療情報学連合大会論文集，Volume 27，pp 1032-1033	看護師のヒューマンエラー防止と業務改善のための、RFIDタグを用いた医療機器安全管理システム開発ににむけた基礎的研究 松田淳子，吉田靖，　丸上輝剛，谷昇子，進藤亜紀子，竹本敬子，　八木隆宏，　松本雅大，　宮本正喜，堀尾裕幸，　稲田紘 分担：システムプログラミング

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
１２．わが国の電子カルテシステムの導入に関する調査結果の分析　導入のメリットや問題点などについて	―	平成19年11月	医療情報学連合大会論文集，Volume 27，pp 876-879	地域医療連携システムの構築に向け、医療施設における電子カルテ導入状況を分析した研究 竹本敬子，進藤亜紀子，　谷昇子，松田淳子，丸上輝剛，稲田紘，　医療情報学連合大会論文集 分担：データ入力、データ分析
１３．特定健診・特定保健指導支援システムの検討　糖尿病患者管理支援を中心として	―	平成19年11月	医療情報学連合大会論文集，Volume 27，pp 804-805	特定健診・特定保健指導支援システムの構築に関する研究 谷昇子，丸上輝剛，松田淳子，松本雅大，　八木隆宏，進藤亜紀子，竹本敬子，　稲田紘 分担：システム設計、システムプログラミング
１４．RFIDタグの患者の固体認証や検体管理への応用に関する研究	―	平成19年11月	医療情報学連合大会論文集，　Volume 27，pp 590-591	看護師のヒューマンエラー防止に寄与するRFIDタグを用いた患者、検体取り間違い防止システムの開発に関する研究 松本雅大，　八木隆宏，　谷昇子，松田淳子，　丸上輝剛，　中尾寿成，　武野嘉明，　川上清和，　野々木宏，稲田紘 分担：システムプログラミング
１５．インフォームドコンセントを支援する医療画像情報システムの構築	―	平成19年11月	医療情報学連合大会論文集，Volume 27，pp 407-408	インフォームドコンセント時、患者に病態をビジュアル表示することで患者、看護師、医師の情報共有と患者の病態理解を容易にするための、システム開発に関する研究 八木隆宏，　吉冨紘平，　松本雅大，　大森健太，　谷昇子，丸上輝剛，松田淳子，鍵崎康治，　五十嵐健夫，八尾武憲，　原口亮，　中沢一雄，　稲田紘 分担：システム検証
１６．音声認識技術の電子看護記録への応用に関する基礎研究 - 音声入力の操作性と情報の後利用について	―	平成20年11月	医療情報学連合大会論文集，Volume 28 pp 290-293	看護師の負担軽減と労働環境改善のための音声認識技術を応用した電子看護記録システム構築に関する研究 丸上輝剛，谷昇子，松田淳子，竹本敬子，進藤亜紀子，　石垣恭子，　稲田紘 分担：システム設計、システムプログラミング、質問紙作成
１７．医療安全とME機器管理ICタグを応用した医療機器安全管理システムとマニュアル作成システムの構築	―	平成20年4月	医工学治療，Volume 20，p 127	看護師のヒューマンエラー防止と業務改善のための、RFIDタグを用いた医療機器安全管理システム開発に関する研究 稲田紘，　松田淳子，谷昇子，丸上輝剛，進藤亜紀子，竹本敬子，吉田靖，　中尾寿成 分担：、システムプログラミング
１８．音声認識技術を用いた電子看護記録システムの構築-経過記録に関する音声入力の有用性についての検証-	―	平成20年5月	日本生体医工学会誌生体医工学，Volume 46	看護師の負担軽減と労働環境改善のための音声認識技術を応用した電子看護記録システム構築に関する研究 丸上輝剛，谷昇子，松田淳子，竹本敬子,進藤亜紀子,稲田紘 分担：システム設計、システムプログラミング、質問紙作成

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
１９．音声による電子看護記録シ ステムの構築とそのPC操作に関する研究”	―	平成20年7月	日本医療情報学看護学術大会論文集，Volume 9 pp 149-150	看護師の負担軽減と労働環境改善のための音声認識技術を応用した電子看護記録システム構築に関する研究 丸上輝剛，谷昇子，松田淳子，竹本敬子，進藤亜紀子，　稲田紘 分担：システム設計、システムプログラミング、質問紙作成
２０．音声入力を用いた電子看護記録システムにおける音声入力の試み-経過記録としてのフォーカス・チャーティングにおける入力方式の検討を中心にして-	―	平成20年9月	日本生体医工学シンポジウム	看護師の負担軽減と労働環境改善のための音声認識技術を応用した電子看護記録システム構築に関する研究 丸上輝剛，谷昇子，松田淳子，竹本敬子，進藤亜紀子，　石垣恭子，　稲田紘 分担：システム設計、システムプログラミング、質問紙作成
２１．糖尿病患者管理支援システムの開発（第3報）	―	平成20年9月	Health　Sciences,Volume 24，Issue 4，　p 298	地域で生活する糖尿病患者に対する遠隔患者支援システムに関する研究 稲田紘，　谷昇子，松田淳子，丸上輝剛，進藤亜紀子，竹本敬子 分担：システムプログラミング、
２２．災害・急時支援情報システムの構築	―	平成21年11月	医療情報学連合大会論文集,Volume 29，pp 496-499	広域連携のための災害時支援情報システムに関する研究 陳劼，　谷昇子，　丸上輝剛，　稲本昌也，　西谷陽志，竹本敬子，　早川敦子，　江村政紀，　後藤陽一，　田中清子，　稲田紘，　中尾寿成，　武野嘉明，　川上清和，石崎潤，　稲田一樹，　片山友子，　兼信尚生，　高橋拓也，　山内段，　有馬正弘，　西村治彦，　川向肇 分担：システム設計、システムプログラミング
２３．携帯端末を利用した「電子お薬手帳」システムの開発	―	平成21年11月	医療情報学連合大会論文集，Volume 29，pp 481-48	高齢者などの持参忘れ防止に役立つ電子お薬手帳の開発に関する研究 江村政紀，　谷昇子，　丸上輝剛，　稲本昌也，　西谷陽志，　竹本敬子，　早川敦子，　田中清子，　石崎潤,片山友子，　兼信尚生，　高橋拓也，　山内段，　稲田紘 分担：システム設計
２４．保健指導システムの構築　糖尿病患者管理支援を中心に	―	平成21年11月	医療情報学連合大会論文集，　Volume 28，pp 885-886	地域で生活する糖尿病患者に対する遠隔患者支援システムに関する研究 谷昇子，　丸上輝剛，　松田淳子，　西谷陽志，　稲本昌也，　西川裕明，　江村政紀，　後藤陽一，　田中清子，陳劼，　進藤亜紀子，　竹本敬子，　稲田紘 分担：システム設計、システムプログラミング
２５．院内教育のための資料管理システムの構築	―	平成21年11月	医療情報学連合大会論文集，Volume 28，pp 705-706	地域連携医療システムに関わる医療従事者の、e-learning system構築に関する研究 稲本昌也，　渕脇栄治，　安圖知樹，　佐藤琢磨，　田淵篤嗣，　濱本稔，　前田昌良，　谷昇子，　松田淳子，丸上輝剛，　稲田紘 分担：システム設計

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
２６．災害時救急医療支援システムの開発　取得した患者情報の転送と利用に関するシステム	―	平成21年11月	医療情報学連合大会論文集，Volume 28，pp 644-645	災害時における患者情報の地域での共有をRFIDタグを用いることで容易に行う救急医療システムの開発 西川裕明，　谷昇子，　松田淳子，　丸上輝剛，　西谷陽志，　江村政紀，　後藤陽一，　田中清子，　陳劼，　中尾寿成，　川上清和，　武野嘉明，　稲田紘 分担：システム設計
２７．RFIDタグによる医療機器安全管理システムとマニュアル情報参照システムによる医療機器安全使用への取り組み	―	平成21年11月	医療情報学連合大会論文集，　Volume 28，pp 500-501	看護師のヒューマンエラー防止と業務改善のための、RFIDタグを用いた医療機器安全管理システム開発に関する研究 西川裕明，　谷昇子，　松田淳子，　丸上輝剛，　西谷陽志，　江村政紀，　後藤陽一，　田中清子，　陳劼，　中尾寿成，　川上清和，　武野嘉明，　稲田紘 分担：システムプログラミング
２８．シャント狭窄症とシャント音周波数特性の関係解明に関する研究	―	平成21年11月	医療情報学連合大会論文集，Volume 28，pp 463-464	シャント狭窄時の音周波数解析に関する研究 西谷陽志，　谷昇子，　松田淳子，　丸上輝剛，　稲本昌也，　西川裕明，　江村政紀，　後藤陽一，　田中清子，陳劼，　進藤亜紀子，　稲田紘 分担：データ分析
２９．RFIDタグと標準化電子化マニュアルによる医療機器管理安全管理システムの構築	―	平成21年4月	医工学治療，Volume 21，p 95	看護師のヒューマンエラー防止と業務改善のための、RFIDタグを用いた医療機器安全管理システム開発に関する研究 松田淳子，進藤亜紀子，丸上輝剛，谷昇子，吉田靖，宮本正喜，　堀尾裕幸，　稲田紘 分担：システムプログラミング
３０．実シャント音によるシャント狭窄－周波数帯域に関する解析	―	平成21年4月	医工学治療，Volume 21，p 85	シャント狭窄時の音周波数解析に関する研究 西谷陽志，　谷昇子，　松田淳子，　丸上輝剛，　稲本昌也，　西川裕明，　江村政紀，　後藤陽一，　田中清子，陳劼，　稲田紘 分担：データ分析
３１．特定健診・特定保健指導支援システムの構築　糖尿病患者管理支援を中心に	―	平成21年7月	日本医療情報学会看護学術大会論文集，　Volume 9，pp 111-112	特定健診・特定保健指導支援システムの構築に関する研究 谷昇子，丸上輝剛，松田淳子，竹本敬子，進藤亜紀子，稲田紘 分担：システム設計、システムプログラミング
３２．医療従事者教育のためのシステムの構築　システムの改良と運用方法の検討	―	平成22年11月	医療情報学連合大会論文集,Volume 30，pp 1067-1068	地域連携医療システムに関わる医療従事者の、e-learning system構築に関する研究 稲本昌也，　渕脇栄治，　則村正文，　丸上輝剛，竹本敬子，　早川敦子，　Abdivvali Mortiz，　陳劼，稲田紘 分担：システム設計、システムプログラミング

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
３３．生体の血糖値の変化による浸透圧変化を利用した埋込型インスリン注入システムの研究　システムの新たな作製法と数式モデルに基づく性能評価について	－	平成22年11月	医療情報学連合大会論文集	地域で生活する住民の生活の質向上のための、埋め込み型インスリン注入システム構築に関する研究 稲田一樹，　大島淑恵，　黒住康法，　奈良崎大士，　坂東真衣，　山内段，　竹本敬子，　早川敦子，　稲本昌也，　丸上輝剛，　稲田紘，　長倉俊明，　山田章，　池内真志，　生田幸士 分担：データ分析
３４．病院経営分析に関わる原価計算の分析　診療報酬における画像診断の点数評の分析	－	平成22年11月	医療情報学連合大会論文集，Volume 30，pp 915-1916	病院経営改革による看護師の労働条件向上のための病院経営分析に関する研究 高橋拓也，　丸上輝剛，　稲本昌也，　竹本敬子，　早川敦子，　石崎潤，　稲田一樹，　片山友子，　兼信尚生，　山内段，　大島淑恵，　黒住康法，　奈良崎大士，　坂東真衣，　山岡肇，　松村泰志，　稲田紘 分担：データ分析
３５．地震など災害発生時における透析医療支援のための情報システムの構築	－	平成22年11月	医療情報学連合大会論文集，Volume 30，pp 869-871	人工透析患者が災害時に透析行うことを支援する地連携域システムに関する研究 兼信尚生，　丸上輝剛，　稲本昌也，　竹本敬子，　早川敦子，　高橋拓也，　山内段，　Abdivvali Mortiz，　大島淑恵，　黒住康法，　奈良崎大士，　坂東真衣，　山岡肇，　稲田紘 分担：システム設計
３６．がん検診受診率ががん死亡率などに及ぼす影響の検討	－	平成22年11月	医療情報学連合大会論文集，Volume 30，pp 475-476 11	地域における住民がん検診と死亡率の関係を明らかにした研究 片山友子，　稲本昌也，丸上輝剛，　竹本敬子，　早川敦子，　石崎潤，　稲田一樹，　兼信尚生，　高橋拓也，　山内段，　大島淑恵，　黒住康法，　奈良崎大士，　坂東真衣，　山岡肇，　稲田紘 分担：データ分析
３７．携帯電話を用いた保健・医療・福祉情報管理システムの開発	－	平成22年11月	医療情報学連合大会論文集，Volume 30，pp 328-331	携帯端末を用いた地域医療情報共有システムに関する研究 石崎潤，　丸上輝剛，　竹本敬子，　早川敦子，　稲田一樹，　片山友子，　高橋拓也，　山内段，　大島淑恵，　黒住康法，　奈良崎大士，　稲田紘 分担：システム設計
３９．ヘルスナビ”の開発（その2）　腹痛に関する症状や処置などについての分析	－	平成22年11月	医療情報学連合大会論文集，Volume 30，pp 313-314 11	独居高齢者の健康管理に寄与する遠隔診療補助システム開発に向けた分析に関する研究 竹本敬子，　丸上輝剛，　早川敦子，　稲本昌也，　石崎潤，　稲田一樹，　片山友子，　兼信尚生，　高橋拓也，　山内段，　東ますみ，　笹井浩介，　稲田紘
４０．在宅ケアにおける安全で的確なケア提供のための情報技術を応用したサポート体制の確立 III―看護ケア提供における安全管理と質保証に向けて―訪問看護安全管理システムのためのトリガー項目の妥当性	－	平成23年11月	医療情報学連合大会論文集，Volume 31，pp 758-760	在宅で療養する住民ケアの質向上と安全保障のための訪問看護安全管理システムに関する研究 早川敦子，　丸上輝剛，　稲本昌也，　竹本敬子，　大島淑恵，　黒住康法，　奈良崎大士，　坂東真衣，　山岡肇，　稲田紘 分担：システム設計

教　育　研　究　業　績　書

平成29年3月31日

氏名　金城　夏樹

研究分野	研究内容のキーワード
公衆衛生看護学　在宅看護学	喫煙　職業性ストレス　移行期

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例		
・学内授業	平成28年	授業の補助として、必要な書類の準備、演習の準備等を行った。
・学内実習	平成28年	基礎看護学Ⅰ、基礎看護学Ⅱ、在宅看護学の学生引率、指導を担当した。
2　作成した教科書，教材		
なし		
3　教育上の能力に関する大学等の評価		
なし		
4　実務の経験を有する者についての特記事項		
なし		
5　その他		
なし		

職務上の実績に関する事項

事項	年月日	概要
1　資格，免許		
看護師免許 保健師免許	平成23年 平成23年	(会員番号:第1607671号) (会員番号:第191411号)
2　特許等		
なし		
3　実務の経験を有する者についての特記事項		
	平成23年4月～ 平成28年3月	呼吸器内科、脳外科の病棟看護師として勤務した。脳外科病棟ではリカバリー室で勤務し、重症患者や術後患者を担当していた。
4　その他		
なし		

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
（著書）				
なし				
（学術論文）				
なし				
（学会発表その他）				
「看護学生の禁煙を阻害する要因―Text Mining Studioでの分析」	共著	平成27年6月	第30回　日本保健医療行動科学会学術集会	看護学生の喫煙の現状と禁煙を阻害する要因を明らかにすることを目的に,A大学看護学部看護学科学生40名の喫煙者を対象に,自記式質問紙調査票による意識調査を実施した.その結果,約9割の学生が将来的に禁煙を望んでいるものの,今すぐ禁煙するという意識は低く,全喫煙者が禁煙グッズや禁煙外来について知識はあるが,利用したことはなかった. また,身体的害について認識しているものの, 精神的には肯定的に捉えていた.Text Mining Studio3.2の分析では,費用の面や将来,きっかけがないという意見が抽出された.禁煙に繋がると思う援助については喫煙が困難な状況作り, 禁煙補助の費用面, 周囲の喫煙者に関する意見が得られた.喫煙が困難な施設内環境整備と,学生自身のストレス対処能力を高める支援,具体的な費用を含む禁煙グッズの種類や利用方法についての保健指導が必要であるともに,将来的に看護職として自分自身が患者や対象者,学生などへたばこに関する保健指導をする立場になることをイメージさせる禁煙へのきっかけ作りを行う必要があると示唆された. 金城夏樹、新谷奈苗、立川茂樹、西川まりこ (ポスター発表)
「市町村保健センターの「健康サークル事業」に参加する高齢者の主観的幸福」	共著	平成27年6月	第30回　日本保健医療行動科学会学術集会	PGCモラール主観的幸福感尺度を用い,高齢者の主観的幸福感と関連する生活上の要因を見出し,高齢者が幸福な老いを迎えるための保健指導の一助にすることを目的とし,市町村保健センター事業の一環として老人会が自ら計画・実施している「健康サークル」に参加した高齢者40名を対象に,自記式質問紙による調査を行った.その結果,幸福感の大きさには身体,夜よく眠れるという意識,気分が大きく関連していることが明らかになった.また,睡眠薬の使用頻度が低いほど幸福感が高く,また眠れない人ほど睡眠薬を服用している傾向があることから,睡眠薬を飲まないで眠れる人ほど幸福感が高いということが明らかになった.このことから,高齢者の睡眠が主観的幸福感についてのひとつの指標となることがわかった.そこで,保健指導として,良好な睡眠を促進することにより,高齢者が幸福な老いを迎えるための一助となることが明らかとなった. 新谷奈苗、大濱恵美子、立川茂樹、永岡裕康、<u>金城夏樹</u> (ポスター発表)

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
「在日外国人留学生の健康認識と健康行動および国民健康保険の認識」	共著	平成27年6月	第30回　日本保健医療行動科学会学術集会	在日外国人留学生の健康認識や健康行動,国民健康保険の認識について調査し,在日外国人留学生の公衆衛生および学校保健的支援を考える際の基礎資料とすることを目的とし,4年制大学に籍をおく在日外国人留学生を対象に,自記式質問紙による調査を行った.その結果,大半の外国人留学生はアジア青年期であり,生活習慣の良し悪しにかかわらず,自分自身が健康だと認識している者が圧倒的に多いことが明らかとなった.そこで,模範的な生活習慣や健康についての情報提供や情報収集方法の的確なアドバイスを行う大学内窓口の充実化が必要だと考えられた.また,日本人学生と積極的に交流している在日外国人留学生は国民健康保険の認識ができていた.そこで,学校保健師と行政保健師が情報を共有しながら,在日外国人留学生の支援を行う必要があると示唆された. 立川茂樹、金城夏樹、新谷奈苗、大濱恵美子 (ポスター発表)
「A strategy for understanding of Public Health Nursing」	共著	平成28年1月	The 14th Annual Hawaii International Conference on Education, Hawaii International Conference on Education	We offered "Practice lessons of community exploration" during the 15 times lectures' program of "Introduction to Public Health Nursing" to second year students at the Nursing University to develop their viewpoints of people as community residents.The students extracted categories with viewpoints of people having lives in a community such as "Nature environment","Education", "Institution", "Topography","Public safety","Local culture", and "Communication skills in community" apart from "Gordon's 11-functional-health-patterns" after the experience. SHINTANI Nanae,TATSUKAWA Shigeki, SUZAKI Yoshika,KAJIMURA Ayako,INOUE Chieko,Natsuki KINJO (ポスター発表)
「サーモグラフィーを用いた基礎看護教育に関する調査」	共著	平成28年5月	第33回　日本サーモロジー学会学術集会	看護基礎教育においてサーモグラフィを活用した教育の有無を明らかにするために，日本看護系大学協議会の会員校を対象に基礎看護領域のシラバスの調査を行った。シラバスの中で基礎看護領域科目を対象とし、キーワードはサーモ，サーモグラフィ，皮膚温とした。患者の観察を行う為に必要な基本的な知識および技術を学ぶ基礎看護系の科目において，サーモグラフィを用いた授業計画が公開されているシラバスは見られなかった。サーモグラフィは人や物体の温度変化を可視化するため，視覚情報による教育効果が期待できると考えられるが，本調査の結果，基礎看護教育にサーモグラフィを用いた授業を実施している大学が存在する可能性は低いことが示唆された。しかし，視覚情報による教育効果は様々な分野で確認されている。視覚教材として温度を可視化するサーモグラフィは看護基礎教育において看護技術等の人体への影響を示すことが可能であり，教育効果の高い授業に貢献する授業教材となりうることが期待できる。 金城夏樹、梶村郁子、足日和美、立川茂樹、新谷奈苗 (ポスター発表)

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
「看護分野における体温に関する研究の動向」	共著	平成28年5月	第33回　日本サーモロジー学会学術集会	看護分野におけるサーモグラフィをはじめとする体温に関する研究動向を明らかにすることを目的とした。医学中央雑誌Web版を文献データベースとし，「体温」，「サーモグラフィ」，「温度」，「皮膚温」のいずれかをキーワードとした看護に関する原著論文を検索し，抽出された文献1207件 を対象とした。 看護分野における体温に関する研究は1980年より見られ，2000年頃よりさらに増加し，約40件/年以上は見られており，発表年と正の相関を示していることから関心が高まってきていると考える。また，キーワードに「手術室看護」が多く，感染症をテーマにした研究より体温管理が求められる領域での研究の取り組みが多いことが示唆された。サーモグラフィ」をキーワードとした看護研究の領域は，基礎看護(30件)における基礎看護技術の検証にサーモグラフィを活用した研究が最も多かった。このことから，看護分野においてもサーモグラフィを活用した研究の発展の可能性があると考える。 梶村郁子、立川茂樹、新谷奈苗、金城夏樹、足日和美 (ポスター発表)
「清拭後の「押さえ拭き」効果の検証」	共著	平成28年5月	第33回　日本サーモロジー学会学術集会	テキストに教授されていることから，教員もこれを常とし教えているが果たして押さえ拭きに，体表面温度変化や寒気の感覚としての効果があるのかについて，2名の被験者を対象にサーモグラフィを用いて検討を行った。　押さえ拭き有りの方が「寒気を感じない」において効果があった。体表面温度については,Aは同等でBは押さえ拭き有りの方が高かった。これらのことから寒気を感じる体表面温度には個人差があることがわかった。看護において，患者の安楽を考えると，寒気を感じさせないための押さえ拭きには一定の効果があることがわかった。 立川茂樹、梶村郁子、井上葉子、足日和美、金城夏樹、新谷奈苗 (ポスター発表)
「乳がん患者のワーク・トリートメントバランス支援方略の検討」	共著	平成28年11月	第5回　産業看護学会学術集会	本研究では，1．患者への聞き取りから就労を継続できた/できなかった要因を明らかにしたうえで，2．乳がん患者の治療と就労の両立を支えるために関係領域が課題を明らかにし,これらの結果から乳がん患者の支援について,領域を超えた方略を導くことを目的に,半構造的インタビューの結果から就労を継続できた/できなかった要因を抽出した.そして,医療者・雇用者・その他の社会資源調整者の立場から,治療と就労を両立させるための問題・課題を内容分析により明らかにした.その結果,病院と企業,そして地域で活動する多岐にわたる関係機関は,互いにそれぞれの業務内容を知ることから始め,強い連携を実現したうえで,個々の患者に接することが大切である.そのためには,まず情報交換,さらに人材交流で互いの理解を深め,最終的には相互業務支援といった協力を実現していくことが,乳がん患者の治療と就労の両立を支えることになるのではないかと考えられた. 新谷奈苗、立川茂樹、金城夏樹 (ポスター発表)

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
「海外派遣者の歯科検診と診療について-産業保健的介入の検討-」	共著	平成28年11月	第5回　産業看護学会学術集会	本調査は,海外人事担当者より,彼らが経験した事例や企業の対応方法について質問紙調査を行い,その結果より,海外派遣者の歯科診療や歯科健診への産業保健的介入の必要性について考察することとした.結果より,海外派遣者の歯科診療の補助方法は企業により違うものの,治療の詳細を確認しながら,海外派遣者と海外人事担当者,保険組合で話し合い,健康保険給付分や自己負担分,企業負担分を決めている企業が11社に上っていた.また,日本国内で行われない治療や治療用素材を使用される者が少なくないものの,赴任前や一時帰国中,帰国後に歯科健診を行っている企業はなく,海外人事担当者は歯科診療や歯科健診において産業保健的介入が必要と認識していなかった.そこで,赴任期間中の歯科健診の必要性と,彼らの帰国後の継続治療を見据えた歯科保健対策の検討を,海外人事担当者と産業保健師が連携し,行う必要があると考える. 立川茂樹、新谷奈苗、金城夏樹 (ポスター発表)

教　育　研　究　業　績　書

平成29年3月31日

氏名　瀬山 由美子

研究分野	研究内容のキーワード
看護学	臨地実習　看護学生　達成感

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例		
1)「成人看護学援助論」における実践	平成25年～平成26年3月	四条畷看護専門学校　専任教員として、成人看護学援助論　血液・造血器についての講義、全10回を担当した。講義では実際の病室の患者がイメージできるよう具体的な使用物品などを用いて視覚的に示しながら行った。臨地実習において根拠のある援助が実施できるよう工夫した。
2)「基礎看護技術演習Ⅰ」における実践	平成25年～平成26年3月	四条畷看護専門学校　専任教員として、基礎看護学演習の演習補助を行った。学生のレディネスに合わせてわかりやすい言葉で助言を行った。
3)「基礎看護技術演習Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ」における実践	平成26年～平成28年3月	奈良学園大学　非常勤講師として、基礎看護学演習の演習補助を行った。学生のレディネスに合わせてわかりやすい言葉で助言を行った。
4)「基礎看護技術演習Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ」における実践	平成28年～現在に至る	奈良学園大学　助手として、基礎看護学演習の演習補助を行った。実際の病室の患者の気持ちがくみとり、自分の行った援助が相手にどんな影響を与えるか気づくことができるよう工夫した。
5)「看護過程演習」における実践	平成28年～現在に至る	奈良学園大学　助手として、看護過程演習の演習補助を行った。学生が対象者の看護問題の導き方を自分の言葉で説明し、文章で表現できるような指導を工夫した。
2　作成した教科書，教材		
3　教育上の能力に関する大学等の評価		
4　実務の経験を有する者についての特記事項		
5　その他		
実習指導		
1）基礎・老年・精神　成人・統合実習指導	平成25年～平成26年3月	四条畷看護専門学校　専任教員として、基礎看護学実習・領域実習・統合実習指導を行った。学生が習得した知識が実践に結びつくような指導を工夫した。
2）早期体験演習・基礎看護学実習Ⅰ・基礎看護学実習Ⅱ　実習指導	平成26年～平成28年3月	奈良学園大学　非常勤教員として、基礎看護学実習の指導を行った。学生が対象者に合わせた援助が実施できるよう指導を工夫した。
3）早期体験演習・基礎看護学実習Ⅰ・基礎看護学実習Ⅱ　実習指導	平成28年～現在に至る	奈良学園大学　助手として、基礎看護学実習の指導を行った。看護の実践からより良い援助にはどうすればよいか気づくことができるよう指導を工夫した。

事項	年月日	概　　要
1　資格，免許		
1）看護師免許	平成4年5月12日	第756634号
2）修士（健康科学）	平成28年3月17日	畿央大学大学院修第152号
2　特許等		
3　実務の経験を有する者についての特記事項		
4　その他		

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（著書）				
（学術論文）				
（その他）				

教　育　研　究　業　績　書

平成 29 年 3 月 31 日

氏名　　田中　里奈

研究分野	研究内容のキーワード
基礎看護学	衣服　闘病意欲
成人看護学(急性期)	呼吸練習　換気機能

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概　　要
1　教育方法の実践例 BLS レクチャーの実践および練習のサポート	平成 22 年 4 月 1 日 ～ 平成 24 年 3 月 31 日	TA としてレクチャーを実施し、学生の実践練習を通して技術習得ができるよう補助を行った。
2　作成した教科書, 教材 (1) 特になし		
3　教育上の能力に関する大学等の評価 (1) 理事長賞　授与		青年海外協力隊　マグサイサイ賞代表受賞したことにより大学に貢献したと評価していただいた。
4 実務の経験を有する者についての特記事項 (1) 特になし		
5　その他 (1)　国際交流に関する授業 活動報告講演会	平成 27 年 2 月 13 日 平成 27 年 3 月 21 日	青年海外協力隊での経験を大阪府立千里高校 2 年生対象に国際交流に関する講演を行った。 また、大阪府四条畷市役所　地域協同課からの依頼で地域住民を対象に講演を行った。

職務上の実績に関する事項

事項	年月日	概　　要
1　資格, 免許 (1) 特になし		
2　特許等 (1) 特になし		
3　実務の経験を有する者についての特記事項 特になし		
4　その他 青年海外協力隊　マグサイサイ賞受賞　代表受賞者	平成 28 年 8 月	青年海外協力隊がマグサイサイ賞を受賞した。隊員時代の活動が評価され、代表受賞者として式典に参加し、式典に関わるプログラムにも参加した。

研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項				
著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
（著書） バングラデシュの医療現場の実際と生活習慣～保健教育　Little Dr.制度～	単著	平成 28 年 7 月	新宿医師会会誌 P14-16	青年海外協力隊　感染症対策隊員としての活動を通しての報告である。主に、公衆衛生における課題に対し、バングラデシュ政府と保健教育活動の取り組みについて報告した。
（学術論文） 入院中の衣服の選択理由と衣服が闘病意欲に与える影響要因の考察	共著	平成 28 年 9 月	奈良学園大学紀要第 5 集 P113-121	入院中の患者が衣服を選択する理由を明らかにし、その衣服が闘病意欲に与える影響について考察することを目的とした。対象の特性は、病衣選択者はt検定 5%水準で女性のほうが有意に高い集団であった。衣服と闘病意欲と性別との関係では、男性よりも女性のほうが闘病意欲は高く、病衣と私服と闘病意欲の関係では、病衣のほうが χ^2 乗検定1%水準で有意に低かった。これらのことから、入院中でも、この尊厳を維持できる衣生活を心がけることの重要性が示唆された。
被抑圧者としての看護師の背景と看護管理の考察	共著	平成 28 年 2 月	日本福祉情報行動科学学会 P19－23	ヘルスケアにおける支配/従属関係から生み出された被抑圧者としての看護師の背景を歴史から学び、今後の看護管理のあり方を考察することを目的とした。看護師は自らの具体的実践の中で臨床の知を開拓していかなければならないため。今、必要とされている看護職における看護管理者のリーダーシップは、このような知識労働であることが考察された。
看護学生の感性をくすぐる－共感と自己受容の関連－	共著	平成 29 年 2 月	日本福祉情報行動科学学会 P31－36	看護学生の体験から得た感動を共感としてとらえ、それらの特徴と精神看護の主な要素である自己受容と関連を明らかにした。
（その他） 情報共有を促す活動 国から現場への情報の流れを改善	単著	平成 27 年 8 月	クロスロード　P6－7 独立行政法人国際協力機構青年海外協力隊事務局	青年海外協力隊　感染症対策隊員としての活動を通しての報告である。困難な問題を抱えたとき、どのように解決していったかという事例紹介である。
（学会発表） 特になし				

教　育　研　究　業　績　書

平成　29年　3月　31日

氏名　　田　場　真　理

研究分野	研究内容のキーワード
臨床看護学	血液透析　終末期　ＱＯＬ

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例		
1）「基礎看護技術Ⅱ」における実践	平成25年～平成27年3月	関西学研医療福祉学院　看護教員として、基礎看護技術Ⅱについての講義・演習を担当した。講義内容・演習等については、あらかじめシラバスで示したうえで、講義で得た知識と演習での技術がつながるよう工夫を行った。
2）「小児看護学援助論」における実践	平成26年～平成27年3月	関西学研医療福祉学院　看護教員として、小児看護学援助論についての講義・演習を担当した。講義は、全15回、演習7回の構成とした。　講義は、視覚教材を中心に用いて、小児看護の実際を学生ができる限りイメージできるように勤めた。演習では、適宜グループワークを取り入れながら、領域実習で最低限必要な知識・技術を学生が習得できるよう工夫した。
3）「小児看護学概論」における実践	平成27年～現在に至る	奈良学園大学助手として、小児看護学概論の講義・演習の捕縄を行った。特に演習では、学生の技術の習得具合に応じて助言を行い、学生の学習意欲を高めるよう工夫した。
2　作成した教科書、教材		
3　教育上の能力に関する大学等の評価		
特記事項なし		
4　実務の経験を有する者についての特記事項		
―講演―		
終末期透析についての意識と実態～あなたはどんな風に人生の幕引きをしたいですか～	平成28年7月24日	奈良県腎友会女性部学習会にて左記内容の講演を行った。
5　その他		
―実習指導―		
1）基礎・小児・成人・老年・母性実習指導	平成25年4月～平成27年3月	関西学研医療福祉学院　看護専任教員として、基礎看護学実習・領域実習・統合実習指導に当たった。指導にあたっては、学生の既習の知識と臨床の現場での実践がつながるような指導を工夫した
2）小児看護学領域実習統合実習指導	平成28年～現在に至る	奈良学園大学助手として、小児看護学臨地実習の指導を行った。指導にあたっては、学生の既習の知識と臨床の現場での実践がつながるような指導を工夫した

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1　資格、免許		
1）看護師免許	平成19年4月11日	第1396705号
2　特許等		
特記事項なし		
3　実務の経験を有する者についての特記事項		
―看護師―		
1）田北病院	平成19年4月～ 平成25年3月	
4　その他		

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概要
（学術論文）				
認知症高齢者を介護する娘介護者の体験ー介護生活の中で体験する困難と、介護生活の支えとなるものー	共著	2016年9月	奈良学園大学紀要　第5集	
（その他 ）				
―研究報告書―				
終末期透析についての意識と実態調査報告書	共著	2016年春号	NPO法人奈良県腎友会発行雑誌　ばんび	
外来透析患者の服薬コンプライアンス不良に至る因子の検討	単著	2017年2月	日本医療福祉情報行動科学会	
―国内学会発表―				
2　透析室における患者満足度調査～患者の声から現状の問題点と課題について考える～	共著	平成24年2月	奈良県医師会透析部会	

教　育　研　究　業　績　書

平成29年3月31日

氏名　前田 吉樹

研究分野	研究内容のキーワード
基礎医学　心理生理学　心理物理学　神経科学	疼痛　恐怖条件付け　非侵襲脳計測

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例		
・講義（学内実習）	平成22年 4月	ハーベスト医療専門学校理学療法学科の非常勤講師として、「生理学実習」の科目を担当した.血圧計やスパイロメータ、筋電計などを用いた実験の指導と、実験レポートのまとめかたを指導した.
・講義	平成27年 4月	甲南女子大学助教として、「内部障害学Ⅱ」の講義の一部を担当した.主に内臓疾患、内分泌・代謝疾患の講義を実施、定期試験を作成・実施した.
・講義（学内実習）	平成27年 4月	甲南女子大学助教として、「運動学演習」の一部を担当した.バイオデックスを用いた筋力の測定実習に対してレポートを課し、実験報告書の作成方法を指導した.
・講義補助（学内実習）	平成27年 4月	甲南女子大学助教として、「人体の生理機能演習Ⅱ」の実習を補助した。ウシガエルを用いた動物実験で、機器の使用法や結果の解釈の仕方などを学生に指導した。
・ゼミ活動（1年）	平成27年 4月	甲南女子大学助教として、「基礎ゼミⅠ」を複数の教員で担当した. 勉強の仕方やプレゼンテーションのまとめ方など、学生の基礎スキル向上を目的とした指導をおこなった.
・ゼミ活動（卒業研究）	平成27年 4月	甲南女子大学助教として、「卒業研究」を担当した.配属された学生に対して、研究計画の立て方や、データを解釈し論文にまとめるまでの過程を指導した.
2　作成した教科書，教材		
なし		
3　教育上の能力に関する大学等の評価		
なし		
4　実務の経験を有する者についての特記事項		
（1）勉強会、研修会	平成24年 11月	兵庫県における中播磨・西播磨ブロック合同研修会において、「痛みの研究とリハビリテーション:ヒトの痛みをどう捉え、検証するか」というタイトルで、当ブロックに所属する理学療法士に対して講演をおこなった.
5　その他		
なし		

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1　資格，免許		
（1）理学療法士免許取得	平成17年 4月	（登録番号：第48466）
2　特許等		
なし		
3　実務の経験を有する者についての特記事項		
（1）臨床実習教育と臨床研究指導	平成21年4月～ 平成25年3月	石川病院の理学療法士として、理学療法士養成校からの実習生を受け入れ、臨床実習教育に従事した. 主に神戸大学、吉備国際大学、大阪リハビリテーション学院の実習生を指導した. また、研究面では院内理学療法士の研究・症例発表において指導をおこない、若手スタッフの研究発表の奨励に努めた.
4　その他		

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概要
（著書）				
痛みのケア	共著	平成29年3月	ピラールプレス	全180頁 本人担当部分： 「第7章　痛みの心理と情動」 P48－P57を単著 痛みに深く関わる「心理」として不安・抑うつ，「情動」として社会的痛み，痛みの恐怖について解説。非侵襲的脳機能計測の発達により，目に見えない心を情動として観察し，その働きを推察することが少しずつ可能になってきている。情動から心理への因果関係や，それらのベースとなる共通の神経機構を理解することは，痛みの心理的・情動的側面を分析するうえでの一助となる。 編者：守本とも子 共著者：守本とも子，池辺寧，辻下守弘，前田吉樹，篠原百合子，棚橋千弥子，田中登美，梶村郁子，　立川茂樹，新谷奈苗，小池恵理子，澤田京子，横山美菜，室津史子，高垣麻衣
（学術論文）				
1. 立位リーチ動作反復による 学習の汎化について 三次元動作解析器を用いた検討 （筆頭著者）	共著	平成21年1月	神戸大学大学院医学系研究科保健学専攻 博士前期課程 平成20年度 修士論文	臨床上頻繁に用いられるファンクショナルリーチテストにおいて、リーチ動作練習の反復によって動作の汎化がおこるかどうかを三次元動作解析装置を用いて検証した. 中枢におけるリーチ動作の運動プログラムは、手の前後方向の速度がピークに達したときに終了するとされているが、リーチ動作練習は手のピーク速度がより早期に出現するようにファンクショナルリーチ動作に対して汎化した. （共同著者：**前田吉樹**，安藤啓司） 担当部分：研究計画、データの計測・解析、論文の執筆

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（総説）				
1. 痛みの恐怖条件付け （筆頭著者）	共著	平成26年11月	Monthly Book Medical Rehabilitation No. 177 （11月号）pp25～30 （in press）	痛みの慢性化には、「動かすと痛い」という一種の恐怖条件付けが重要な基礎として機能する.この考え方を支持する臨床研究、基礎研究を紹介しながら、恐怖を中心とした痛みの認知面の変化に基づき、痛みの慢性化の病態とその治療の考え方を概説している. （6頁） （共同著者：**前田吉樹**，柴田政彦）
2. 慢性痛の問題点と今後の取り組み	共著	平成26年12月	理学療法学 12月号 学会特集号 （in press）	疫学、認知行動療法、条件付け、運動療法、脳機能画像研究、バイオフィードバックという幅広いテーマから、リハビリテーションにおける慢性痛の位置づけを詳細に解説した. （共同著者：柴田政彦，山田恵子，**前田吉樹**，安達友紀，西上智彦，寒重之）
（学会発表その他）				
1. 段階的目標設定がリーチ動作時の 静的姿勢制御に及ぼす影響について （筆頭演者） （ポスター発表）	共著	平成19年5月	42回 日本理学療法 学術大会	姿勢制御能力を高める目的でおこなう「リーチ動作練習」において、段階的に目標物を遠くに置いて練習を繰り返すことによって生じる姿勢制御方略の変化を、重心動揺計と体表マーカーを元に算出した関節角度によって評価した.結果、段階的な目標設定による練習は、上肢・体幹の屈伸運動だけでなく回旋方向の運動を用いる傾向が強くなることがわかった. （共同発表者：**前田吉樹**，石本貴徳，北村俊英，小寺正人，末吉勝則，安藤啓司） 担当部分：研究計画、データ測定・解析、抄録執筆
2. ペダリング動作による歩容改善の効果 （ポスター発表）	共著	平成19年5月	42回 日本理学療法 学術大会	脳卒中片麻痺患者に対するペダリング運動が患者の歩容に与える効果を、臨床指標と3次元加速度センサーによって評価した.結果、ペダリング動作後の歩行では歩行率・歩行測度ともに向上し、麻痺側支持期の前後・上下方向への加速度が向上した. （共同発表者：石本貴徳，北村俊英，**前田吉樹**，小寺正人，末吉勝則，日高正巳，今腋節朗，石川誠，安藤啓司） 担当部分：研究計画、データ測定
3. 当院回復期リハビリテーション病棟入棟患者における費用対効果分析について （ポスター発表）	共著	平成19年5月	42回 日本理学療法 学術大会	回復期リハビリテーション病棟に入棟した脳卒中患者におけるリハビリテーションの費用対効果をFIMの変化を基準に調査した.入院費を従属変数として、ステップワイズ法によって入院費に寄与する変数を推定した結果、FIMの変化率が高く、入棟までの日数が短いほど入院費が高くなることを示した. （共同発表者：北村俊英，石本貴徳，**前田吉樹**，小寺正人，末吉勝則，日高正巳，今腋節朗，石川誠） 担当部分：研究計画、データ解析

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
4. 当院回復期リハビリテーション病棟入棟患者における退院時FIMの予後予測について：認知項目も含めた層別化について（ポスター発表）	共著	平成20年5月	43回 日本理学療法学術大会	回復期リハビリテーション病棟に入棟していた脳卒中患者の退院時のFIM合計点数がどのような要因で決定されるのかを予測した.パーティション解析の結果、入棟時の認知項目（記憶・問題解決）が採択された.また、認知面に問題のある患者においてもFIM運動項目の移乗能力・排泄コントロールが高ければ自宅退院できるケースが多く、日々の生活における見守りや指導によってADLの習熟が図れる可能性を示した. （共同発表者：北村俊英，末吉勝則，小寺正人，石本貴徳，**前田吉樹**，赤江由之，日高正巳，寺本洋一，石川斉） 担当部分：データ解析
5.道順イメージングにおける脳賦活部位 fMRIによる検討（口述発表）	共著	平成22年3月	第11回 兵庫県リハビリテーションケア研究大会	右頭頂葉の障害は地誌見当識障害の責任病巣とされているが、実際に道順をイメージしたときに活動するのかは明らかでない.本研究では、健常成人によく知っている場所から別の場所への道順をイメージさせ、その際の脳活動をfMRIを用いて調べた.結果、道順イメージ中は右の頭頂下小葉や頭頂-後頭連合野の活動を示し、道順の想起に右頭頂葉が関与するという仮説を支持した. （共同発表者：間嶋亜由美,三角幸子，馬瀬麗子，徳沢勝也,**前田吉樹**,柳田真希,大城宜哲） 担当部分:データ収集,データ解析
6.動的な痛みと静的な痛みの脳機能画像：二時体性感覚野の機能分布について（筆頭演者）（ポスター発表）	共著	平成22年7月	日本ペインクリニック学会 第44回大会	動く痛みと動かない痛みの脳内処理機構をfMRIを用いて実験的に検証した.トゲのついたローラーで足を刺激したときと、トゲのついたプレートで刺激したときの脳活動を比較すると、同じ痛みの強度でも前者の方が広範な活動を示した.特に、二次体性感覚野はローラー刺激のみ下内側部の活動を認め、当部位の機能分布を反映していると考えられた. （共同発表者：**前田吉樹**，岩倉健夫，大城宜哲，柴田政彦） 担当部分：データ解析，抄録執筆
7.左右逆転めがねとfMRIで幻視を視る（ポスター発表）	共著	平成22年7月	日本ペインクリニック学会 第44回大会	左右の世界が逆転して見える「逆転めがね」を幻視痛患者にかけ、幻視を動かさせたときの脳活動を検証した.幻視を動かしたときに対応する運動野に信号変化がみられ、同側の頭頂野にも強い信号がみられた.後に後根進入部遮断術によって幻視痛が改善したあとは、頭頂野の信号変化は消失していた.頭頂葉が幻視痛の機序に何らかの役割をもつ可能性が示唆された. （共同発表者：大城宜哲,宮内哲，**前田吉樹**，柴田政彦） 担当部分:資料収集
8.局所皮下麻酔と持続的な圧刺激によって誘発される筋の痛みの心理物理学（筆頭演者）（口述発表）	共著	平成23年7月	第33回 日本疼痛学会	機械的な圧刺激で生じる筋の痛みは、皮膚の痛みとの区別が困難である.そこで麻酔薬の皮下注入によって筋だけに圧刺激を与える方法を用いて、与える圧と筋の痛みの強さの関係を心理物理学的手法でモデル化した.結果、皮膚の麻酔の有無に関わらず、圧と痛みの強さの関係は線形回帰できることがわかった. （共同発表者：**前田吉樹**，植松弘進，大城宜哲，柴田政彦） 担当部分：研究計画、データ測定・解析、抄録執筆

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
9.慢性期失語症患者の訓練経過 当院外来失語症患者を対象に （口述発表）	共著	平成24月3月	第13回 兵庫県リハビリテーションケア研究大会	発症から半年以上経過した脳卒中後の失語症患者を対象に、外来言語療法の訓練効果について検討した.SLTAの「聞く」項目と「話す」項目に分けて解析した平均1年程度の通院の結果、いずれの項目も有意に増加し、慢性期における言語訓練の必要性を支持する結果となった. （共同発表者：溝口仁，金山ひとみ,**前田吉樹**） 担当部分：データ解析，抄録執筆
10.当院回復期病棟における摂食嚥下障害患者の動向 （ポスター発表）	共著	平成24年8月	第17・18回 日本摂食・嚥下リハビリテーション学会学術大会	摂食嚥下機能が自宅復帰率に与える影響を検証した.FIMと食形態を独立変数とした名義ロジスティック回帰の結果、食形態は有意な変数として採択されなかった.これは摂食嚥下機能が低いまま自宅退院している患者が少なからず存在することを示唆しており、今後は外来や訪問におけるフォローアップを積極的におこなう必要がある. （共同発表者：前田佳恵，徳沢勝也,**前田吉樹**） 担当部分：データ解析，抄録執筆
11.Conditioning of fear to voluntary movement paired with painful heat stimulus: Experimental verification of fear avoidance model using skin potential response （筆頭演者） （ポスター発表）	共著	平成24年11月	第42回 日本臨床神経生理学会学術大会	運動と痛みの恐怖が結びつく「条件付け」を心理実験の手続きを用いて再現した.手関節の運動をおこなうと痛み刺激が提示されるシステムを構築し、運動に結びつけられた恐怖を皮膚電気活動によって評価した.結果、痛み刺激を伴わない運動でも、痛み刺激がある場合と同程度の皮膚電気活動を認め、運動に痛みの恐怖が条件付けられることを示した. （共同発表者：**前田吉樹**，寒重之，大城宜哲，宮内哲，柴田政彦） 担当部分：研究計画、データ測定・解析、抄録執筆
12. 皮膚電位反応を用いた運動と痛みの恐怖条件付けとその消去の検証 （筆頭演者） （口述発表）	共著	平成25年12月	第6回 日本運動器疼痛学会	恐怖条件付けによって結びついた運動と痛みの恐怖を、条件付けの消去によって軽減できるかを実験的に検証した.消去の手続きによって運動に痛み刺激が伴わないことを学習すると、恐怖を反映して出現する皮膚電気活動が減少することを示した.しかし全体としては最後まで皮膚電気活動が出現し続ける傾向にあり、運動に結びついた痛みの恐怖が容易には取り去ることができないことを示唆した. （共同発表者：**前田吉樹**，寒重之，大城宜哲，宮内哲，圓尾知之，齋藤洋一，柴田政彦） 担当部分：研究計画、データ測定・解析、抄録執筆
13. 教示は運動に伴う痛みの恐怖条件付けの消去に強く影響する （筆頭演者） （口述発表）	共著	平成26年6月	第36回 日本疼痛学会	患者を安心させる教示の有効性が条件付けの消去に基づくものかを検証するために、「運動に結びついた痛みの恐怖」の消去に「動かしても刺激がこない」という教示が影響するかを実験的に検証した.結果、教示と経験による消去をおこなった群は恐怖を反映した皮膚電気活動が即座に消失し、経験だけで消去をおこなった群は最後まで皮膚電気活動の有意な減少がみられなかった. （共同発表者：**前田吉樹**，寒重之，大城宜哲，宮内哲，中江文，Ben Seymour，柏岡秀紀，柴田政彦） 担当部分：研究計画、データ測定・解析、抄録執筆

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
14. Fear Conditioning and Extinction Associating Voluntary Movement with Painful Stimulus: Experimental Verification of Fear Avoidance Model Using Skin Potential Response （筆頭演者） （ポスター発表）	共著	平成26年12月	15th World Congress of International Assicuation for the Study of Pain （Buenos Aires）	運動と痛みの恐怖が結びつくという現象の証明から、その消去、さらには教示が与える影響までと、自身の研究テーマである「運動と痛みの恐怖条件付け」の集大成として発表した. （共同発表者：**前田吉樹**，寒重之，大城宜哲，宮内哲，中江文，Ben Seymour，柏岡秀紀，柴田政彦） 担当部分：研究計画、データ測定・解析、抄録執筆
15. 「プラセボ効果とはどのようなものですか？」 （筆頭著者） （依頼原稿）	共著	平成26年10月	Locomotive Pain Frontier vol. 3 (2) pp42～43	プラセボ効果は、医学研究、とりわけ試薬の研究において本来の治療効果とは異なる「取り去るべき」ものとして捉えられてきた.しかしながら、近年痛みの臨床においてはプラセボ効果も治療の一つとして取り入れようという流れがある.それらプラセボ効果に関する認識の変遷を、具体的な研究報告とともに解説した. （2頁） （分担執筆者：**前田吉樹**,柴田政彦）
16. 運動への恐怖条件づけに関連する心理尺度 （口述発表）	共著	平成27年11月	第8回 日本運動器疼痛学会	運動への恐怖条件づけの獲得、消去における個人差に着目し、各個人の心理特性との関連性を探索的に検討した。消去期におけるSPR振幅値と各心理指標との相関がみられた。本研究の結果は、疼痛の慢性化に性格傾向等の心理要因が関与する可能性を示唆している。 （共同発表者：柾木隆寿,**前田吉樹**，寒重之，柴田政彦） 担当部分：研究計画、データ測定
17. 肩甲下筋テスト時の肩関節周囲筋の筋活動の検討 （口述発表）	共著	平成28年11月	第56回 近畿理学療法学術大会	肩甲下筋のテストであるLift off testとしてBelly press testとBelly off signが挙げられる。これら二つのテストの肩関節周囲筋の筋活動の違いを筋電図を用いて明らかにすることを目的とした。結果、BPはBOに比べ大胸筋、大円筋の働きが抑えられ肩甲下筋、三角筋の働きが大きくなることがわかった。 （共同発表者：吉村 拓実、春名 匡史、立花 孝、土山 耕南、西川 仁史、**前田 吉樹**） 担当部分：研究計画